

マサラ人だけどスー
パーマサラ人ではない
はず

若葉ノ茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケモン世界に転生したのは主人公「サトシ」である兄とただのモブ？な妹。ポケモンがたくさんいる世界の始まりの町で生まれた兄妹とポケモン、そして仲間たちとの物語。でもスーパーマサラ人な兄のせいで原作フラグが叩き折られてる気がするんだけど気のせいじゃないよね？◆不定期更新で話は一話一話短いです。あと時間軸がずれることも多々ありますのでご注意ください。

完結しました。今までありがとうございました！

目次

兄と妹それぞれのお話

プロローグくスーパーマサラ人の兄が

旅に出たく 1

第一話く妹が聞いた兄の話く 5

第二話く兄から見ると妹も全然普通で

はないく 10

第三話く兄のマイブームで新しい技が

できそう?く 14

第四話く妹の日常に楽しみが増えた。

余計なものも一緒だけく 20

第五話くロケット団が兄と結託したく

25

第六話く兄にとつての優先事項く

30

第七話く妹の周りが賑やかになったく

35

第八話く兄がよく分からない目標を立

てたく 39

第九話くベイリーフが可愛すぎるく

44

第十話く未来の兄もやっぱり普通じゃ

ないく 48

第十一話く兄が化学兵器を作り出した

?く 53

第十二話く兄が教えることは非常識く

	第十三話	ある日森の中、卵に出会った	57
	第十四話	妹とヒトカゲとあと……	63
68	第十五話	兄のポケモンもやばかった	
	第十六話	妹と色違いの2匹	76
82	第十七話	兄が音速を目指した	
89	第十八話	兄妹が久々に電話した	
94	第十九話	妹がお昼寝にはまっている	
	第二十話	兄がロケット団率いて襲撃した	106
	第二十一話	時をかけてやってきた	113
	第二十二話	兄が帰ってきたらしい	119
	第二十三話	妹は兄と再会した	127
	第二十四話	兄はいつまでも兄だった	
	第二十五話	妹が女子会した	131

137

第二十六話く兄と蒼海の王子とフラグ

回避？く 143

第二十七話く妹とポケモンレースく

149

第二十八話くホウエン地方のポケモン

は個性的く 157

第二十九話く兄がライバルの感情に気

がついたく 165

第三十話く妹と湖の秘密く 173

第三十一話く兄とポフィンと悪夢再び

く 178

第三十二話く妹はシェフの本気を知つ

たく 183

第三十三話く兄はゴードイの日記の変

化を知ったく 188

第三十四話く兄は原作崩壊の音を聞く

く 195

第三十五話く妹はジュカインがキレた

のを目撃するく 202

第三十六話く兄は様々な真実を知るく

く 206

第三十七話くヒトカゲは泣き、傷つい

たく 214

第三十八話く妹は変わることを覚悟し

たく 223

- 第三十九話く兄はいろいろ改造したく 230
- 第四十話く妹と相棒が忍者を目指しそ
うですく 237
- 第四十一話く兄とシンオウの頂点は似
ているらしいく 245
- 第四十二話く妹が常識からはずれてき
たく 250
- 第四十三話く兄がシンオウの元凶ボツ
コにしたく 259
- 第四十四話く妹は満足したく 268
- 第四十五話く兄は行動を開始したく 278
- 第四十六話く妹は伝説らしい生物と出
会ったく 294
- 第四十七話く兄はいろいろと喧嘩を売
られたく 301
- 第四十八話く妹はときわたりを経験し
たく 306
- 第四十九話く兄は伝説厨に挑んだく 315
- 第五十話くシェイミはよく迷い込むく 322
- 第五十一話く妹とポツポとトキワの森
く 328
- 第五十二話く兄と親子とセレビィく

イツシユ地方く兄妹と仲間たちの旅路く

第五十三話く妹は兄と共に行くことになつたく

第五十四話くギラティナは暇すぎら

しいく

第五十五話く妹は兄の旅に連行された

く

第五十六話くその頃のマサラタウンく

第五十七話く妹は旅を楽しむことにし

た

第五十八話くマナフィは気づかず全

を教えたく

第五十九話く兄は怒り、妹は悲しんだ

く

第六十話く兄はサンヨウジムのために

特訓したく

第六十一話く妹はジム戦を目撃するく

第六十二話く妹はシェフ同士の会話を

聞くく

第六十三話く兄とツタージャは似た部

分があるく

第六十四話く妹とヒトカゲが迷子に

なつたく

第六十五話	く兄は妹とアイリスのバトルを見る	437	かす時もある	477	
第六十六話	くドリユウズの考えとアイリスの考え	443	第七十二話	く兄はジム戦で無双した	
第六十七話	く妹は兄がライバルと会うのを見た	448	第七十三話	く妹たちは卵に感動する	
第六十八話	く妹たちはイシズマイ強化訓練をした	455	第七十四話	く人から見たら	
第六十九話	く妹はある少女に出会う	460	494	第七十五話	く兄と殴りたい奴とポケモンゲット?
第七十話	く妹は過去にあつた話をした	470	第七十六話	く妹は兄が激怒するのを目撃する	
第七十一話	くアルセウスはたまにやら	470	第七十七話	く妹は兄たちが落ちたのを見た	
			523		

第七十八話く兄と特訓の成果と…く

528

第七十九話く妹はいろいろと苦笑した

く
|
第八十話く兄はシェフ達の活躍に協力
したく
|
543

第八十一話く妹はアイリスの変化を知

るく
|
第八十二話く兄とミジュマル危機一髪
|
559

第八十三話く妹はドラゴンバスターに

会うく
|
565

第八十四話く兄はアーケオスと共に特

訓したく

第八十五話く妹は釣りを楽しんだく

580

第八十六話く兄は映画作成に協力した

く
|
第八十七話く兄と英雄ゼクロムく
|
586

593

第八十八話く妹と英雄レシラムく

604

第八十九話く妹は兄たちの再会を見る

く
|
第九十話く妹はドンバトルの大騒動に
苦笑するく
|
633

628

第九十一話	く兄はルカリオの有能さに 気がつく	641	第九十八話	く妹はあるポケモンに出 会った	697
第九十二話	く妹はジム戦前にライモン シテイを楽しんだ	647	第九十九話	く妹とマラカッチミュウジ カル	708
第九十三話	く妹は親子の絆を見た?	654	第百話	Another Story	719
第九十四話	く兄は地下鉄で迷子を捜す	662	ヒナ		
第九十五話	く妹はお祭りでの騒ぎを観 戦した	671	第百一話	く兄はポケモン育て屋を体験 した	728
第九十六話	く妹は修行の成果を見せた	681	第百二話	くマサラタウンは騒々しい	734
第九十七話	く兄は冷静に事態を対処し		第百三話	く妹達はホドモエに着いた	744

第百四話く兄とミロス島と伝説たちく

751

第百五話く妹たちは洞穴へ突入したく

756

第百六話く妹とベースキャンプく

764

第百七話く兄がアララギ父に出会った

770

第百八話く妹はある子供たちに出会った

780

第百九話く妹は兄をよく知る人物に出

788

第百十話くタケシにとっては普通のこ

とく

第百十一話く兄はバトルクラブで出

803

第百十二話く妹達と時間の宝玉く

816

第百十三話く妹はカオスな光景を目撃

831

第百十四話く兄たちは状況を確認する

843

第百十五話く妹達は解決策を知った？

855

第百十六話く妹達は苦笑するく

865

- 第百十七話く妹達はバトル施設で暴走
した?く 875
- 第百十八話く兄たちはバトルをし、解
決策を知るく 885
- 第百十九話く妹達はあつけない最期を
見たく 896
- Ifくもしも○○が登場したらく 911
- 第百二十話く妹は弟子に出会ったく 947
- 第百二十一話く妹は歌姫と遭遇したく 957
- 第百二十二話く兄は再会したく 957
- 第百二十三話く妹は兄たちの再会を目
撃したく 970
- 第百二十四話く兄にとっての黒歴史く 979
- 第百二十五話く妹と平和な1日く 992
- 第百二十六話く妹はアイリスとの絆を
見た?く 1003
- 第百二十七話く兄たちはジュニアカッ
プに出場するく 1019
- 第百二十八話く兄はアイリスの素質を
見たく 1026

第二百二十九話	準決勝にて戦う相手は	1034
第三百十話	イツシユチャンピオンとのバトル	1042
第三百十一話	妹は別れと出会いを見た	1053
第三百十二話	妹は兄以外のジム戦を見た	1062
第三百十三話	兄はメロエツタの真実を知る	1068
第三百十四話	妹と聖剣士	1084
第三百十五話	兄はバトル大会に出場した	1096
第三百十六話	トウカシティにて悩み中	1113
第三百十七話	妹はピチューと特訓した	1119
第三百十八話	兄はイツシユリーグに出場した	1126
第三百十九話	シューテイーは全てに憧れた	1133
第三百四十話	妹はある人物と出会った	1144
第三百四十一話	白の遺跡へ目指す途中	1155
第三百四十二話	妹は未来での変化を予	

- 想したく 1164
 第百四十三話く兄は新しいジムを訪れたく 1172
 第百四十四話く妹達は激突したく 1179
 第百四十五話くマサトとキモリと…… 1190
 第百四十六話く兄は活動を開始したく 1198
 第百四十七話く妹はNと再会するく 1209
 第百四十八話く妹達はカントーフェアを楽しんだく 1231
 第百四十九話くりザードンはいつも通りく 1244
 第百五十話く兄はりザードン達のバトルをするく 1252
 第百五十一話くマサラタウンは混沌となっていたく 1260
 第百五十二話くヒトカゲはりザードンを見習うく 1272
 第百五十三話くプラズマ団との対立く 1279
 第百五十四話く妹はNの真実を聞いたく 1291
 第百五十五話く妹達は遺跡にたどり着く 1291

くく 1303

第一百五十六話く閉じ込められ、Nは語

るく 1314

第一百五十七話く兄は考え、行動したく

1323

第一百五十八話く科学者は何を思う？く

1334

第一百五十九話く変わり、変わる…く

1343

第一百六十話く終わりよければすべて良

しく 1350

第一百六十一話く後日談という名の…く

1363

第一百六十二話くミュウツー覚醒と新た

な友？く 1374

第一百六十三話くデコロラ諸島へく

1393

第一百六十四話くロトム達とオーキド博

士く 1401

第一百六十五話くポケモン相撲とお祭り

く 1410

第一百六十六話く旅の終わりと新たな始

まり？く 1421

あとがきと設定と次回予告 1431

イツシユ地方のクリスマス 1441

カロス地方く兄妹それぞれの旅路く

第百六十七話く妹は平和に過ごしてい

たく

1457

第百六十八話く兄妹は新たな可能性を

知るく

1465

第百六十九話く妹はある状況に困惑す

るく

1471

第百七十話く兄はセレナと出会うく

1483

第百七十一話く兄とセレナの過去話く

1491

第百七十二話くセレナは真剣に考えて

いたく

1513

第百七十三話く妹はルカリオから話を

聞くく

1520

第百七十四話く妹は疎まれているく

1537

第百七十五話く兄はシトロンたちの意

志を聞くく

1549

第百七十六話く妹は旅に出たく

1558

第百七十七話く兄達は事態を対処する

く

1568

第百七十八話く妹はある人物に会うく

第百七十九話く兄は苛立ちを隠さない

く

1594

く

1583

第一百八十話く妹は頼み込むく 1607

第一百八十一話く妹は負けたくないく

1621

第一百八十二話く兄は小さな嫉妬をス

ルーしたく

1636

第一百八十三話く妹達はおつきみやまを

登るく

1648

第一百八十四話く兄達は野宿したく

1664

第一百八十五話く妹はハナダシテイに着

くく

1680

第一百八十六話く妹は水場の怖さを知る

く

1690

第一百八十七話く妹はピチューの才能を

見るく

1701

第一百八十八話く兄は忍者と出会うく

1709

第一百八十九話く妹は出発するく

1722

第一百九十話く兄はいろいろとぶつ壊す

く

1733

第一百九十一話く妹は行き倒れを発見す

るく

1746

第一百九十二話く妹は電気の威力を見る

く

1757

第一百九十三話く妹たちは勝敗を決した

	ゝ		
	第百九十四話	兄はバトルシヤトーを	1768
	知る	ゝ	
	第百九十五話	兄はバトルシヤトーに	1781
	挑む	ゝ	
	第百九十六話	兄はセレナに巻き込ま	1794
	れる	ゝ	
	第百九十七話	妹たちはマサラタウン	1805
	へ帰る	ゝ	
	第百九十八話	妹は合流する	1814
1831	第百九十九話	妹たちは前へ進む	
1842			

	第百話	Another Story	
	Y	サトシ	
	第百一話	兄は釣りで勝負をする	1864
	第百二話	妹は兄たちと電話する	1873
	第百三話	兄はシヨウヨウシテイに	1882
	着く	ゝ	
	第百四話	兄はジム戦に挑む	1891
1903	第百五話	妹は相棒に困惑する	
1916	第百六話	妹はある人間達を見る	

- 2000 第二百十三話く妹はラティアス達と話
 2073
- 1974 第二百十話く妹はある事件を知るく
 2040
- 1986 第二百十二話く兄はバトルするく
 2062
- 1946 第二百九話く妹は話をするく
 2030
- 1966 第二百十一話く兄はコルニ達と出会う
 2052
- 1934 第二百七話く兄は恋の対立を見るく
 2020
- 1925 第二百八話く兄はチャンピオンと激突するく
 2011
- 2040 第二百十六話く兄たちはセキタイタウンに着くく
 2040
- 2062 第二百十九話く兄はメガシンカの根底を知るく
 2073
- 2011 第二百十四話く妹は暴走するのを見るく
 2011
- 2020 第二百十五話く兄はコルニに教えるく
 2020
- 2052 第二百十七話く妹は学校へ行くく
 2052
- 2062 第二百十八話くリザードたちは応援するく
 2062

第二百二十話くセレナたちは話し合う
2085
第二百二十一話く妹は恋愛マスターに
会うく
2095
第二百二十二話く妹は犬猿の仲を知る
2108
第二百二十三話く兄はコルニと戦うく
2122
第二百二十四話く兄は鬼ごっこをする
2132
第二百二十五話く妹はシンジと話すく
2147
第二百二十六話く妹は増えた状況に困
2147

2220
第二百二十七話く兄はムスト山へ着く
2165
第二百二十八話く兄は花を見るく
2174
第二百二十九話く妹はルギアに隠れる
2186
第二百三十話く妹は乱入されてしまう
2195
第二百三十一話く兄は暴走するく
2207
第二百三十二話く兄はスカイバトルを
するく
2220
惑するく
2155

第二百三十三話く妹は強制されるく

2230

第二百三十四話く妹はダブルバトルを

するく

2240

第二百三十五話く兄は再会したく

2252

第二百三十六話く兄は懐かしむく

2263

第二百三十七話く妹達は遊ぶく

2274

第二百三十八話く妹はジョウトへ飛ぶ

く

2285

第二百三十九話く妹は再会？するく

2294

第二百四十話く妹はシルバーに困惑し

たく

2304

第二百四十一話く妹たちはたまごを見

るく

2315

第二百四十二話く妹はたまご騒動に巻

き込まれるく

2325

第二百四十三話く妹達は突撃するく

2335

第二百四十四話く兄とポケモンサマー

キャンプく

2352

第二百四十五話く兄達はサマーキャン

プを楽しむく

2367

ハルカは歩き、出会いながらも進む

2380

第二百四十六話く兄はスタンプラリー

に挑むく

2391

第二百四十七話く兄は決着し、前へ進

むく

2405

第二百四十八話く妹達はシゲルに聞く

く

2419

第二百四十九話く妹は夢を思うく

2428

第二百五十話く兄はシャラシテイに着

くく

2438

第二百五十一話く兄はシャラジムに挑

むく

第二百五十二話く兄は来訪者に苛つく

く

2466

第二百五十三話く兄は「ジムリーダー」

を紹介するく

2484

第二百五十四話く妹は……

第二百五十五話く傷つくモノと傷つい

たモノく

2512

第二百五十六話く兄は冷静に見えてそ

うじゃないく

2527

第二百五十七話く兄達はカントー地方

へ戻るく

2541

第二百五十八話く兄とセレナは似てい

る
く
—
2554

第二百五十九話く進むにはまだ早い

2575

第二百六十話く秘めたる者には鋭き牙

を
く
—
2586

第二百六十一話く終わらない、終わら

せない
く
—
2601

第二百六十二話くようやく始まる

2610

第二百六十三話く兄は……

2623

第二百六十四話く決めたのは自分のた

め
く
—
2637

第二百六十五話くその伝説は受け継が

れた
く
—
2651

最終章くそして、覚醒へ

第二百六十六話く妹にとってのプロ

ローグ
く
—
2667

第二百六十七話く旅は波乱万丈である

く
—
2673

第二百六十八話く揺れ動く

第二百六十九話く手袋の行方

2699

第二百七十話く消えることない輝き

—
2717

第二百七十一話く夢に向かって進むの

は
く
—
2731

第二百七十二話く心を鋼に、身体を燃

やせく

—————

2750

第二百七十三話く予期せぬ力は微笑ん

だく

—————

2769

第二百七十四話く悲しみ傷ついた彼女

たちく

—————

2783

第二百七十五話く旅立ちとお別れく

2806

第二百七十六話く船にて急ぐは問題ば

かりく

—————

2822

第二百七十七話く激怒したのはだあれ

？く

—————

2834

第二百七十八話くすべては奴のせい

す！く

—————

2850

第二百七十九話く気づかない魅力く

2863

第二百八十話くそして事態は急変する

く

—————

2880

第二百八十一話く意志よりも、覚悟を

く

—————

2897

エピローグくマサラ人は帰っていった

く

—————

2909

あとがき

—————

2921

兄と妹それぞれのお話

プロローグ　スーパーマサラ人の兄が旅に出た

私には姉がいた。

でもそれは昔の話、転生したせいで今は姉が兄に生まれ変わっていた。

私は性別は変わらないからよかったけれど、兄にとつては大きな問題らしい。

そしてそのせいで兄はヤケになったのだと私は思う。

「俺、ポケモンマスターになってやる」

「そう？　じゃああしたはちこくしないの？」

「いやする。大体原作どおりにピカチュウ貫いに行く！　待つてるよ未来の相棒!!」

兄がポケモンを貰う前日に言った一言だった。

拳を天高く上に掲げ、覚悟を決めたような表情をしているのは昔からヤケになった時にやる癖だ。

主人公の宿命を背負った兄は私が生まれる前は何度も問題を起こしていた問題児だったらしい。

でも私が生まれ、原作通りの世界じゃないと知ったおかげか

「夢はフラグを叩き折ることだ!!」と兄はトキワの森の中心で叫んで驚いたポツポたちに攻撃されたらしい。

その後すぐさま応戦してポケモンを持たず一人でポツポたちに勝利していたのは主人公だからか、この兄だからか：いや両方か。

まあ私はこの未来でスーパーマサラ人と呼ばれてしまうであろう兄の「サトシ」に心の底から応援するだけでいいだろう。

「ヒナもくるか?」

「いかない。というかこんなかわいいうじよをきけんなたびにつれていこうとしないだよ」

「それ、三歳児がたどたどしい口調で言うセリフじゃない…」
「うるさいばかりに」

兄が明日、旅をする。それすなわち物語の始まり。

そして私はのんびりとその旅を応援し、平和に暮らすのだ。

私の夢？もちろん危険とは無縁なハッピー・ライフかな。

この兄がいる限りそういった平和な生活はできるかどうかかわからないけれどね。

.....

翌日、兄は遅刻をし4番目にポケモンを貰うことができた。

もちろん意図的ではない行動。でも何故かシゲルさんに驚いたような表情をされて馬鹿にしなかったのは今までの兄の行動のせいなのかな。

「いつてらっしやいおにいちゃん」

いつか未来で仲良くなる予定のピカチュウを紐で引っぱり、マサラタウンから旅に出る兄。

もしかしたら兄がこれからの旅でポケモン勝負ではなく自ら勝負を挑むときもあるかもしれないけれど、それは帰ってきてから話を聞いてみよう。

あと、いまは無理かもしれないけれど、いつかピカチュウと仲良くなって帰ってきたら、撫でさせてもらおうと思ったのは私だけの秘密だ。

4 プロローグ～スーパーマサラ人の兄が旅に出た～

『ピカチュウウウウウ!!!』
「相棒…少し話し合おうか？」

(さてこれから昼寝でもしようかな)

第一話　妹が聞いた兄の話

『ミュウ?』

「いやいやいやいやありえないなんでここにミュウがいるの?」

『ミュミュミュ!!』

「……おにいちゃあああああ!!!」

どうもこんにちは妹のヒナです。

兄が旅に出て半年が経ちました。え?早すぎる?だってこの半年平和に暮らしてきただからしょうがないでしょ?

私は今、オーキド博士の研究所の森の中で散歩中。すると目の前にミュウが現れた!という状態だ。

思わず兄を呼ぼうと叫んでしまったけれどそれは仕方ないと思う。

なんで兄を呼んだのかだって?

兄はこの数日間マサラタウンにいるからだ。もちろん仲良くなっていたピカチュウ

と旅で仲間になったフシギダネ達と一緒にだ。でもカントー地方では原作通りに話が進んでいるかと言えばそうではない。

兄は大会で優勝した。それはどうしてか？

そう、リザードンがグレなかったからだ。

リザードンに進化したとき、兄はトレーナーとしていろいろと話し合いをしてグレないようにして解決させたらしい。：らしいというのは兄が自分で話していたことであつて、隣りにいたピカチュウが兄の話を聞きながら苦笑していたのを見たからだ。

ちなみにどんな話し合いをしたのかを兄に聞いたが誤魔化され、リザードンにその話をすると風のようにすぐさま飛び去つてしまうから話し合いだけで済んだのかは今のところ不明だ。

もちろんグレなかったし、トレーナーの兄の言うことは聞くけれど、喧嘩はよくする。しかも技あり物理ありの喧嘩だ。

昨日も兄がリザードンと喧嘩したとき、話し合いではなく拳で挑んでいったのを見てやはり兄はスーパーマサラ人なのだとつくづく思えたのは私だけの秘密だ。

しかもゼニガメが喧嘩を止めようとはせず、むしろ応援していたのをフシギダネがツルのムチで叩き、ピカチュウが兄に怪我がないように慌てた様子で見ているのは面白かった。

そんな兄とリザードンとの喧嘩。

拳や技ありで挑んだのは家族や友達なんかでよく見かける取っ組み合いの喧嘩だと思えばいいのかもしれない。

兄はポケモンに喧嘩を挑むことはあれど、本当にポケモンを傷つけようとはしないのだから。そしてリザードンも兄を本当の意味で傷つけたことは一度だってないのだ。

兄もリザードンも優しいのだから大丈夫だと私もピカチュウたちも知っているし、兄たちもお互いを認めているのだから。

まあその前に目の前にいるミュウを何とかしなければならぬ。

どうする？

↓逃げる

捕まえる

現実逃避する

『ミュウ?』

「……(こ)はげんじつとうひかな?」

『ミュウウ』

私は草むらで寝転がり、ミュウを見ないように心掛けた。

でもミュウは私の目の前にやってきて、楽しそうに笑っている。

人懐こく、逃げないミュウを見て、何か嫌な予感がした。

そしてそれは必ず兄関係なのだという予感は絶対に外れていないはずだ。

「あれ？ミュウじゃねえか！久しぶりだな!!」

「やつぱりおにいちゃんのせいか!!」

『ミュー!!!』

草むらから出てきた兄が旧友を見るかのような表情でミュウを見ていた。そしてミュウはすぐさま私から離れ、兄のもとへ抱きつきに行く。

伝説が兄に懐くというのはさすがだと思うけど…。

『ピカ?』

「…なんでもないよ。ありがとうピカチュウ」

『ピッカッチュウ!』

幼女がしてはいけないため息をついたのを見て、ピカチュウは私の肩へよじ登り、頭を撫でてくれた。

ちよつとピカチュウが重いけれど、でも兄が妹を慰めてくれるような撫で方に少しだけモヤモヤが消えたと感じた。

ピカチュウの方が兄のようだと思えるしすごく癒した。この数日間で私は兄よりも

ピカチュウとよく一緒にいることが増えていた。

何故ミュウがこのオーキド博士の研究所近くに居るのか。

後でその話を聞いたら、ミュウはあのミュウツーと戦ったミュウなのだ教えてくれた。

ちなみにミュウツーやミュウとの戦いで勝利したのは兄の方だったらしい。

石にもならず無傷で生還した兄がもはや人間ではない何かに見える。

ポケモンに挑むのは兄の特権か何かか、もしかしたら兄の身体は鋼以上の何かでできているのではないかと疑ってしまう。

そしてミュウツーは兄を面白い人間だと認め、兄と兄のポケモンだけ記憶を消さなかつたらしい。

ピカチュウはたまに訪れるミュウやコピータちと遊んだり、好戦的なリザードンとミュウツーがバトルするのを見ていたりと楽しくしていると兄から聞いた。

ストレスもなく楽しく旅に出ている兄が少しだけ羨ましいと思えた。

第二話～兄から見ると妹も全然普通ではない～

どうもこんにちは兄のサトシです。

前世では姉だったのに性別が変わってしまった俺ですよ畜生。

そういうえば妹はよく俺のことをスーパーマサラ人だの人じゃないナニかだの言ってくるけれど、それは仕方ないことだと思ってるぜ？

なんせ妹が生まれる前、俺は本当に荒んだ生活をしていたのだから。

問題児でもある俺はよく母やシゲル、オーキド博士に迷惑をかけていた。

でもさ、気がつくところの世界で生まれて、自分がその主人公だと知ったら嫌になるだろ？

これからの人生は作られた物語の中で生きていくしかないのか！って考えた。

だからこのまま消えてしまおうかって思ってたし実行したりもした。でもポケモンや周りの人間がそれを許さなかった。毎回怒られたし、泣かれたりもした。でも、何があっても俺はその態度を改めようとはしなかった。

その頃の俺は本当に嫌な奴だったよ。

でも俺がこの世界で生きて初めて救われたと感じたのは妹が生まれた日。

そしてその妹が喋ったのは前世での俺の名前。

前の世界で生きていた俺の妹を見て、話しあった。その時にようやくこの世界をちゃんと見ることができたと感じたんだ。

：まあ俺の話はここまでにして、次に妹の話をしようか？

妹は自分が普通な人間だとよく言っているけれど、俺はそうは見えない。

母とよくピクニックなどをして遊ぶことが多い妹。だが歩いているだけでハーメルンの笛吹き男のように妹の後ろに野生のポケモンたちを連れて歩いているのを見てやはり普通ではないなと思えた。

普通の人間は森の中散歩をしているだけでポケモンたちに懐かれたりはしないはずだ。

野生に好かれるのは俺も旅をしていくとよくあることだ。でも、他の人は警戒されて最悪攻撃されるのがオチだろう。カスミやタケシにも旅をしている中でよく驚かされていたし、普通ならあり得ないと言われた。

だからこそ、野生のポケモンに好かれている妹もスーパーマサラ人の1人だと思う。

そして一番有り得ないことと言えば、妹がよくポケモンを布団や枕代わりにして寝て

いたことだ。俺もたまにピカチュウたちを布団や枕代わりにして寝ているけど時々ザードンに攻撃されるぞ。なのに妹の場合は攻撃などは全くされない。

むしろ一緒になって寝ているぐらいだ。しかも時間が経つごとにポケモンの数は増えていく。前に妹を中心にできてきた布団や枕（仮）たちをオーキド博士が見て興奮して騒ぎ、起きてしまったポケモンたちに攻撃されていたのは今となっては笑える話になるだろう。

妹の雰囲気ポケモンたちを攻撃させないのか、それとも妹がスーパーマサラ人だからか。…まあ両方だと思うが。

「——なあどう思うよピカチュウ」

『ピイカ?』

「ヒナもポケモンに好かれていて凄いな」

『ピ…ピイカチュウ!』

相棒でもあるピカチュウが俺の頬を撫で、自信満々に頷いてくれた。俺のポケモンたちも妹のヒナを大切にしてくれて、遊んでくれるのは本当にうれしい。リザードンも妹には攻撃をせず、構ってくれるからよかったと思う。

タケシは弟や妹がいるからかよくヒナと遊んでくれるし、カスミもヒナのことを可愛がってくれている。

でもそれは今日でしばらくは見れなくなる。

「…明日、旅に出るぞ」

『ピツカ!!』

数日間、久しぶりにマサラタウンにいたけれど、やっぱり旅をしていた方が楽しいと感じた。

ヒナが少し大きくなった時、強制的に旅に連れて行こうかと思ったのは俺だけの秘密だ。

第三話～兄のマイブームで新しい技ができそう?～

最近、旅に出た兄がよくわからない技をポケモンに教えているようだ。

「今日のすんごいポケットニュース！本日は新しい技を開発したと言われるサトシさんに来ていただいています!!」

「と言いますが、まだ完全に完成したとは言えませんがね」

「ブッフオ!!」

「あらあら…ヒナ、大丈夫?」

「だ、だいじょうぶだよまま…」

テレビで流れてきた兄の名前とその話に思わずお茶を吹き出してしまった。

テレビに映った兄は少し前に旅に出た頃と変わってはいなかった。母も兄がテレビに出ていることで喜んでいる。

「サトシがテレビに映ってるわ！今日は御馳走ね!」

「おにいちゃん…」

今日のご飯が楽しみになったのはいいことだけれども、兄は一体何をしているのだろうか。

というよりもこういう場面原作であつただろうか？ いやないはずだ絶対に。

…これは兄だから起きたフラグか。

【新しい技というのはどうしてできたのでしょうか？何かきっかけなどあつたのですか？】

【そうですね…マイブームでできました】

【……………え？】

【マイブームでできました】

【……………】

テレビに映る兄は一体何を言っているのだろう。意味不明なことを言ったせいで皆が茫然としているのを見るのはつらい。唯一よかったと言えるのは兄の肩にのつているピカチュウが自信満々な表情でにっこりと笑いかけていることだろうか。

【えっと…マイブームというのは？】

【ポケモンと一緒にあって修行することです】

【ほう！では修行というのはバトルをすることですか？具体的にはどのような？】

【たとえばそうですね…ピカチュウ！】

【ピッカア!!】

兄がピカチュウを呼んだ瞬間、周りが惨状になった。

ピカチュウが十万ボルトで兄を攻撃し、兄はそれを避けピカチュウに回し蹴りをしようとしピカチュウがそれを回避し…というように、兄がポケモンとバトルをしているというものすごい光景が広がっていたのだ。

人とポケモンがバトルでできるのはこの兄しかできないことだろう。

もちろんテレビのスタッフは大慌てで止めようとしている。

「うわあ…」

「あらあらサトシっいたら元氣ねえ」

「え、これげんきですましていいのかな?」

私はよく兄のことをスーパーマサラ人だと言っているけれど、母の天然さもスーパーマサラ人に入るのではないだろうかと思う。

テレビでは結局カスミさんが兄とピカチュウのことを止めてくれたようだ。ようやく普通の番組に戻る。

恐る恐る兄に質問するテレビアナウンサーがとても可哀そうに思えてきた。

【そ、それでは…いったいどのような新しい技を作り出したのでしょうか?】

【まあ百聞は一見にしかず…ピカチュウ!電気熱!】

【ピイイカアチュウウウ!!】

ピカチュウの電気で熱が発生し、まるでタイプが火のチャージビームのようだと思えた。

これは綺麗だとテレビスタッフが騒ぎ、私も母もテンションが上がった。

【これはまだ未完成の方です…ですがいつか完成し、他にもあつと驚かせるような技を開発していきたいと考えていますよ】

【素晴らしい意気込みですね！これはやはりポケモンと一緒に修行をしていたおかげですか？】

【まあそれもありますが、必要なのは常識をぶつ壊すことです】

【え？】

（納得できる言葉がありますがとうお兄ちゃん。そうだね。一番常識ぶつ壊してるのつてお兄ちゃんのほうだもんね。）

テレビの前で私は勢いよく頷いてしまった。スーパーマサラ人の兄だから頷ける言葉だと思つた。

でもテレビアナウンサーの人は疑問に思っているらしい。何が常識をぶつ壊すというのだろうかという表情だ。

【つまり、技はこれだけしか覚えられないという概念をなくすことが大事なんですよ。

まだまだポケモンにはたくさんのお発見、分からない謎が多いんですから。つまり、これほどできるんじゃないかと思う好奇心、そしてそれを挑戦する行動力が大切ということですよ」

【な、なるほど！素晴らしいお言葉です！】

確かにそうだろう。今はまだポケモンには分からない謎や発見していないことが多い。イーブイがブラッキーやエーフィに進化するということを発見してはいないのだからこそ言える言葉だ。

【あとはポケモンを大切にしているということですかね】

【ポ、ポケモンを?】

兄はピカチュウを撫で、優しい表情でアナウンサーに向かって言った。

【ポケモンを大切にするというのは当たり前のことです。最近ではポケモンを道具のように扱ったり、自分の方が強いんだという愚か者がいたり：ロケット団のようにしくしく悪さをする奴らがいったりと：まあそういう人々が目立っています】

【は、はあ…】

【ポケモンは俺たちにとって隣人も同然。家族のような存在なので。強制的にやるのではなく、一緒に協力してほしいという気持ちが必要なのですよ】

【ピッカチュウ!!】

「…あ」

なんとなく兄が言いたいことが分かった気がする。兄は釘を刺したのだろう。新しい技ができる道を示すことで起きるポケモンたちの悲劇を起さないように、ポケモンは道具じゃないんだという言葉で示したのだと分かった。

まあいつもロケット団にピカチュウを狙われるのなら、そんな気持ちにもなるよね。

でも釘を刺すくらいならテレビに出ない方がいいのではないのかと疑問に思う。

.....

後日、兄に何故テレビに出たのか聞いたら技の開発中にテレビスタッフに見られて強制的に出ることになってしまったと言っていた。

そしていつの間にか兄の名がスーパーマサラ人と共にカントー地方で有名になっていたのは仕方ないことだろうと私は思った。

第四話く妹の日常に楽しみが増えた。余計なものも一緒だけどく

『ダネダネ』

「ようこそマサラタウンへ…ひさしぶりだねフシギダネ」

『ダネエー！』

兄のフシギダネがオーキド研究所に送られてきた。

それからというものの、フシギダネはオーキド研究所でまとめ役をしつつ、私と遊んでくれることが多くなった。

まとめ役で忙しいというのに、私が散歩しているのを見かけるとよく一緒にいてくれるし、危険から守ってくれる。

フシギダネは私のことをどう思っているのだろう。遊んでくれるし危険から守ってくれるしよく一緒にご飯を食べたりするから家族のように思っているのかな？

そして最近ではポケモン同士の喧嘩で技が私に当たりそうになった時、つるのムチで

叩き落とし、激怒したフシギダネが喧嘩を治めたということがあった。ちなみにそれを見てフシギダネがまるで兄のようだと思えたのは私だけの秘密だ。

まあそんな感じで、私の平和な日常にフシギダネが追加され、これからより楽しくなるだろうと思えたというのに…。

『ダネ…』

「…なんでここにいるの?」

『優れたる操り人の妹がいると聞いてこちらに来た』

「またおにいちゃんか……」

そう、目の前にいる大きなポケモンが平和な日常を崩した原因だった。

目の前にいるのはルギアと呼ばれている伝説のポケモン。

オーキド研究所の森の中で羽を休めているルギアは前に一度兄に助けられたと言っていた。

あの異常気象を起こした事件での話だろう。兄は何をして助けたのかはまだ話を聞いていないけれど、今度会ったら詳しく聞いてみようと思う。絶対にいろいろと暴走し

たに違いないと私は思った。

でも目の前に伝説がいるのはちよつと緊張する。品定めしているような目と大きな身体に押しつぶされそうだ。

フシギダネが私の前に出てルギアから守ろうとしてくれているのを見て緊張が解けて兄を少しだけ恨んだ。

「おにいちゃんならここにはいないよ？」

『知っている。操り人ではなく妹に会いに来たのだからな』

「なんでわたしに？」

『優れたる操り人の妹がこれからのように成長していくのか興味を持った』

(どういうことっ!?)

『ダ、ダネ?!』

『ああそうだ、操り人から妹の話を聞いて興味を持ち、こうして直接見に来たのだ』
フシギダネが困惑したような表情で私を見ている！

これからどうする？

↓助けを呼ぶ

兄を恨む

現実逃避をする

「げ、げんじつとうひ…」

『何を呟いているのかはまだ幼いからわからないが…ふむ。確かにこれから成長したら優れたる操り人のように素晴らしくなっていくだろうな…ミュウツウの言っていた通りだ』

「わたしまだトレーナーになるかどうかわからないよ!!というかミュウツウがいつていたってなに!？」

『ミュウツウとはよく優れたる操り人のことで話をして交流を深めている。…操り人の妹よ、これからどう生きるのかはわからないだろう。成長し、優れたる操り人のような生き方をするか、ほかの素晴らしい生き方を見つめるか。将来が楽しみだ』

(お兄ちゃんなんか話が通じない伝説がいるよ!!!?)

『ダネ…ダネダネ!!』

『ああそうだな。ここにいつまでもいると他の人間に見つかってしまいうだろう…また会おう優れたる操り人の妹よ!』

ルギアは大きな羽を広げて空へ飛び立ち、オーキド研究所から遠ざかっていった。それを見た私は大きいため息をついてもうルギアの姿が見えない空を眺めて呟いた。

「もうにどとこないで…」

『ダネエ?』

「ありがとうフシギダネ」

『ダネフツシ!!』

フシギダネが何かを言っただけでルギアを追い払ってくれたのだろう。

ルギアが行った後、私は座り込んでフシギダネに抱きついた。フシギダネは嫌な顔をせず、つるで私の頭を撫でてくれた。

凄く日常とはかけ離れた一日だったなと他人事のように考えていた。

ただしこの後、毎日のようにルギアだけでなくミュウやミュウツー、セレビィが私に興味を持って遊びに来たせいで他人事にはならなくなったのだけでも。

.....

「おにいちゃんのおかげやろおお!!」

『ダ、ダネエ...』

第五話　くロケット団が兄と結託したく

ロケット団が兄のピカチュウを狙っているというのは知っていた。前に兄がマサラタウンにいる時も襲いかかってきたし、「なんだかんだく」という前世でよく聞いていた口上も聞けて、懐かしいなと思えたけれど…。

そんな兄とロケット団の追いかけてこが何故か終止符を打たれそうだという。

兄がポケモンセンターでテレビ電話をしてくれた。これってテレビ電話って名前でもいいんだよね…？

兄の傍にはピカチュウはおらず、おそらくポケモンセンターで回復してもらっているのだろう。カスミさんたちもいないけれど、どこかで待っているのかな？

とにかく、兄は満足したような表情でロケット団からの被害がなくなりそうだと言ったのを聞いて、私は首を小さく傾けた。

「こんどはなにをやらかしたのにおにいちゃん？」

「やらかした…いや別にただロケット団のアジトに行つていろいろと話し合いただけだつて」

「それぜつたいただのはなしあいじゃないよね!？」

兄はまた何か暴走したようだ。というのも、話し合い（物理）はりザードンの件でもう分かつていることなのだから。ちなみにその話はタケシさんから教えてくれた。そういえば今はタケシさんではなくてケンジさんと一緒に旅しているというのも兄から話で聞いた。いつか直接会つて話をしてみたいと思う。

まあその前に、私はロケット団について少し疑問に思うことがあり、兄に向かつて聞いてみた。

「おにいちゃんどうしてアジトのいばしょがわかったの？」

「…人つて全力出せば知れることも多いんだぜ」

「つまり？」

「細かいことは気にするな」

「すぐくきになるよそのいいかた!？」

気になるような言い方をする兄は口笛を吹いて頑なに言うつもりはないらしい畜生。

「じゃあもうおいかけられたりしないの？」

「一応はな。というよりも悪のロケット団より正義のロケット団の方がかつこいいだ

ろってという話をした」

「せいぎのろけつとだん!!?」

「おう。ロケット団って悪巧みとかしてくるからピカチュウを狙ったんだろ? だったらロケット団としての悪意を根本から変えていけばもう安心安全」

「つまりピカチュウがねらわれないためにこうどうしたの?」

「まあな。ぶっちゃけロケット団がうぎ…いや面倒だったからその原作のフラグを叩き折ったまでだ」

(ああ、うぎかったんだ…)

実に兄らしい行動だと思えた。確かに兄はポケモン優先で行動することが多いからピカチュウが危険な目にあっているのが許せなかったのだろう。

でもそのやり方が素晴らしく斜め上に向かっているような気がする。

何故正義のロケット団にしようと思っただ兄よ。

「それでそのあとはおそいかかってこない?」

「…どうだろうな」

兄が疲れた表情をして私ではなくどこか遠くを見つめていたので、作戦はもしかしたら失敗だったのかもしれない。詳しく聞いてみたら兄が渋々口を開いて教えてくれた。

「あいつらはもうピカチュウを攫おうとはしなくなっただ。でも何故か俺をロケット

団の指導者としてぜひ入ってほしいと攫われることが多くなった」

「え、ピカチュウじゃなくておにいちやんのことを？」

「まあ俺自身の問題だし、どうにかできる問題なんだけだな。カスミやケンジに迷惑をかけているのが気がかりというか…」

「いやおにいちやんじぶんのこともきにしよう!？」

ポケモンとバトルできる兄のことだから何かあれば自分の力で解決していくということは分かっていた。でも毎回兄が攫われるというのは妹の私としては不安になる。

あと、兄は他人に迷惑をかけるという行為が嫌いだ。私が生まれる前は問題児だったらしいからこそそんな感情をもってしまったのかもしれないが。だからこそ兄は自身でせいでカスミさんたちに迷惑をかけるのが嫌なのだ。

そしてロケット団は兄を指導者として入ってほしいというのだ。…まあ正義のロケット団にするという作戦は成功しているらしいし、もう悪いことはしなくなるかもしれないが。でも攫おうとしている時点ではどうなのだろうか…。

よし、何とか兄を元気づけよう。

ロケット団が兄に指導者になってくれというのなら、なるふりをしてあまり関わらないようにすればいいのではないか？そうすればもう兄を攫おうとはしないだろうし、カスミさんたちに迷惑は掛からない。それにロケット団も正義に目覚めて万々歳だ。

私はこの考えを兄に伝えようと口を開いた。

「じゃあおにいちゃんしどうしやになつたら？もうあくどいことしてないしあまりかわらなければだいじょうぶでしょ。そうすればもうカスミさんたちにめいわくとかからないよ？」

「……なるほど」

そう言つて兄は納得したような表情を浮かべ、笑顔になつた。

でも笑顔が少しだけ違つていて、私は嫌な予感がした。

(…あれ？もしかして言つちやいけないフラグだった？)

「ありがとうヒナ！俺、指導者になつて正義のロケット団の黒幕として君臨する!!」

「まつておにいちゃん！そういういみじゃないよ!!!」

だが兄は私の言うことは聞かず、テレビ電話をきつてしまった。

やる気満々の兄に、余計なひと言を言わなければ良かったと思うが、もう遅かつた。

この後、兄がロケット団とどう関わつていくのかはまだ聞いていないし私としては聞きたくないと思つている…。

第六話く兄にとっての優先事項く

どうもこんにちは兄のサトシです。

ロケット団をどうにかしたいからいろいろと話し合いをしたんだけど、いつの間にか俺自身が指導者になっていました。

え？どんな話し合いをしたのかだって？まああれだよ、世の中には知らない方がいいこともあるってことだよ。

でも話し合いの内容はどうでもいいし、ロケット団の指導者になったということもどうでもいい。

まあちよつとだけ暴走したなと思うことはあるのだけれども。一番問題にすべきことと言ったら目の前に広がる光景だろう。

『ニャー…早くこつちに来るのニャー！』

「この落とし穴でジャリボーイを捕獲してサカキ様に献上すれば…」

「幹部昇進支部長就任良いかんじーよ！」

「……………」

ピカチュウを狙ってよく襲いかかってきていた三人組が今度は俺の方を狙ってくるようになった。指導者になって黒幕として君臨すればもう来ないと思っていたのに、あいつらは何かと俺に関わってくる。

正直言つて、うざい。

思わずロケット団に向かってピカチュウの十万ボルトを仕掛けてしまうほどだ。

まあ昔からの仲だし、最初は俺が指導者になることに反対だった三人組だけでも、話をしてみて少し…ほんの少しだけ良い奴だと思えたし、ピカチュウも微妙な表情を浮かべながらニヤースと話していた。

だからもう大丈夫。なにも問題ないと思っていたのに、毎日やってくるロケット団の矛先がピカチュウから俺に変わったただけだった。

しかも攫われた場合ロケット団本部に連れて行かれるから面倒だ。

「あいつらつたら…ちよつとあんたたち！サトシを狙うのはよしなさい!!」

『チヨケチヨケ!』

「そうだ!サトシを連れ去ろうとするな!」

「カスミ…ケンジ…トゲピー…」

『ピカピカチュウ!!!』

「ピカチュウ…」

遠い目をしている俺の前に出てロケット団から守ろうとしてくれる仲間たちを見ると涙が出てくる。

皆に会えて良かったと思うのと同時に、この問題を早く解決しなければとも思う。涙を拭いて俺はカスミたちより前に出た。

「ちよつとサトシ！」

「大丈夫だカスミ。俺がなんとかする」

「何とかって…」

「大丈夫だから！ピカチュウも攻撃しようとするなよ？」

『ピイ…ピカチュ』

俺はロケット団の方を向いて大きく口を開いた。

「いいかロケット団！もうカスミたちに迷惑かけようとするな！！」

「…へ？」

「俺たち、ジャリガールどもには迷惑かけてないけど？」

『どういう意味ニヤ？』

「俺を攫おうとすることそれすなわちカスミたちにも迷惑をかける行為だ！」

「ま、待ちなさい！私たちはサカキ様のことを考えて…」

「お前らにとつてサカキが大事なように、俺にとつてはポケモンたち、仲間たちが大切なんだよ!!」

大きな声で叫び、ロケット団に向かって指を指す俺。何というか、気持ちが上がしていたのだろう。妹がいつも言う言葉に例えると、暴走に近い行動だったと思う。

「大体、正義のロケット団になるなら、悪いことはしない! 慈善活動第一優先だつて教えてたどろ!! だから必要なとき以外俺のもとに来んな! 攫おうとすんな!!」

大きな声で叫んだのが聞いたのだろう。ロケット団は感動したような表情で俺を見つめてきた。ちなみにカスミたちも何故かロケット団と同じような表情をしていた。

『いいこと言うニヤジャリボーイ…』

「そうね。私たちは正義のロケット団になったんですもの」

「悪かったなジャリボーイ! 俺たちやることあるから帰るぜ!」

「おう!!」

これで終わった。もう大丈夫だとカスミたちの方を見てみた。

何故かカスミたちが涙ぐんでいてびっくりしたけれど、埃が入ったからとかなんとか言つてたし気のせいかな?

俺は抱きついてきたピカチュウを優しく撫でて、笑いかけた。

『ピカピカピカチュウ!!』

「もう大丈夫だぞピカチュウ」

『ピツカ!!』

.....

ただしこの後、俺が必要な時というのは毎日やってくるらしく。俺を連れ去ろうとロケット団が襲撃するのは日常茶飯事になってしまった。

この原作のフラグが折れないことに苛立ち、襲撃するロケット団を空高く吹き飛ばすのも日常の一つになったのはいうまでもない。

「うっぜえ……」

『ピカピカチュ……』

第七話　妹の周りが賑やかになつた

こんにちは。妹のヒナです。

ロケット団を正義にしてやるぞ事件からまた半年が経ちました。合計で一年かな。それはとにかく。兄がまたマサラタウンに戻ってきた…けどすぐに旅立ってしまった。

まあ仕方ないとは思うけれど、少しぐらいはのんびりしていてもいいと思う…。ちなみにこの頃にフシギダネが来た。他にも伝説含めて個性豊かなポケモンたちがやってきたため、毎日がとても楽しいと感じている。

「…ケンジさん」

「うん？　どうしたのヒナちゃん」

「あのね。ピジョットがこっちにきてるの」

「なんだって!？」

オーキド研究所には他にもいろんなポケモンが来るのだと私は分かった。例えば兄がいるかもしれないと遊びに来たピジョットやバタフリーの群れ。ただ遊びに来たゼニガメやゴーストなどだ。

そんな突然の来訪者にケンジさんはよく大慌てしている。兄に連絡しようとして躍りになったり、兄がいないと落ち込むポケモンたちを慰め、遊び相手になったりだ。

まあそれはいい。私もみんなと遊んだり、兄に連絡つけようと協力したりと毎日が平和だし楽しいから良い。

でも一番意味が分からないのがこいつだ。

『こいつとはなんだこいつとは』

「だって…なんでここにいるのミュウツー」

『…サトシに会いに来た』

そう、伝説がたまに遊びに来るのはもういつもの日常だから気にしてはいないけど、ミュウツーだけは話が別だ。ミュウツーは少し好戦的で、よく兄と取っ組み合いをしている。そして何故か兄がいなときは私を巻き込む。ただ私に対しては喧嘩を売るのはなく、強制的に兄のように鍛えろと言って技を仕掛けてくるのだけだ。

ミュウツーの隣にピジョットが降りてきたから私はそちらに近づく。

「おにいちゃんならいいよ。あ、それとピジョット、あとであそぼうね」

『ピジョー!!』

『……おいヒナ』

「おいとかいうミュウツーとはあそびませーん」

『…ヒナ』

「もう、しかたないなあ」

ミュウツーが何だか弟か何かのように思えてくる。でも遊びと言っても半分は平穩。半分は危険と隣り合わせだから弟と言っても我儘な弟だ。

ほかの伝説はこんな遊びという名の取っ組み合いはしないというのに。

私はいつも技を掛けられてそれから逃げて…と繰り返してる。たまに私も反撃するけどほとんど効いてないのが現状だ。いつか兄のようにミュウツーに一発決めてやるのが私の夢になりつつある。

もうミュウツーのせいでポケモンの技を躲すのにもなれたし…あれ? 私スーパーマサラ人の仲間入りしてる? いや気のせいだよね。

『ピジョピジョー——ッ!』

『何? ヒナを危険な目にあわせるなだど? 俺はただポケモンには何も指示せず単身で挑んできたサトシのように強くなってほしいだけだ』

「それがおせっかいっていうんだよ」

『うるさい』

ちよつと子供っぽいミュウツーにピジヨットは怒ってくれている。ピジヨットもだけど、兄のポケモンは本当に優しい。私や他の小さなポケモンたちを守り、何かあったらすぐさま駆けつけてくれる。だからみんなのことが大好きだ。

『おいヒナ、俺のことは？』

「ミュウツーはふつう。あとこころよまないでよ」

『……………』

『ピジヨット…』

拗ねたミュウツーを優しく慰めるピジヨットに私はちよつとだけ罪悪感が出る。

…仕方ないから少しだけ遊んであげよう

少しだけね？

第八話　兄がよく分からない目標を立てた

「…へ？ごめんきこえなかった。もういつかいいつて？」

「俺、ポケモンになるわ」

「なんでそうなった!!？」

「こんにちは妹のヒナです。」

久しぶりに兄から電話が来てすぐに駆け付けたのですが、その兄がよく分からないことを言い出していました。カントー地方の旅ではそんなバカなこと言わなかった…ああいやちよつと暴走することあつたけど、まだ人としての常識は少しだけ残っていたはず。ジョウト地方の旅で一体何があつたんだ…。

「なんでポケモンになるの？おにいちゃんあたまだいじょうぶ？」

「お前本当に辛辣…いやポケモンになった方が言葉とか伝わりやすいって考えてだな」

「それかんがえたじてんでほんとうにぼけもんになったらもうかみさまこえてるよ…」
「それもいいかもな」

兄は少しだけ笑って私の言葉に同意していた。もしかしたら兄は本当にポケモンになりたいという意味で言ったのではないかもしれない。ポケモンになれば言葉が伝わりやすいというのはどうということなのだろう…。

「おにいちゃんにかあつたの?」

「…ヨーギラスにあつたんだ」

「あ、なるほど」

ヨーギラスは卵の頃、母親から引き離され人に裏切られ、ひどい目に遭い続けてきたポケモンだというのは原作知識として知っていた。もしかしたらその悲惨な状況に怒り、ヨーギラスを元気づけるためにポケモンになりたいと言ってきたのかもしれない。

でももうちょっと考え方というのがあつたはずなのに、本当にこの兄は少しだけ常識からずれている。

それにもしポケモンになれたとしても、ヨーギラスのためになるのだろうか? 私なら嫌だと思う人、怖い人たちにわざわざ近づいたりしたくはない。兄はそういうことをわからないのだろうか? 少しアドバイスで言ってみようかな。

「でもさ、ヨーギラスにむりやりはよくないよ? きょうせいしてきになかよくなってもつ

「らいだけだもん」

「…そうだな。ミュウに頼んでポケモンにしてもらおうかと思ったけど…無理強いはヨーギラスのためにならないか」

「まっっておにいちゃんミュウにたのんでポケモンになろうとおもったの!!?」

「方法ならいくらでもある」

「おにいちゃんそろそろひととしてのじょうしきをもとう!!」

人としてできないはずの悩みを解決する方法を思いつく時点でスーパーマサラ人すぎる。何で伝説に頼んでポケモンになろうとする。しかもそれ以外の方法もあるとなってはもはや人間じゃないぞ兄よ。

兄はその後、納得したような表情を浮かべて私に向かって言う。

「…ヨーギラスには人の優しさを知ってほしいんだ。でも無理やりは良くないし余計に怖がってしまうかもしれないよな」

「うん。たぶんじかんがかいけつしてくれるんだとおもうよ」

「時間が解決…ね。よしわかった！俺ちよつと密漁団潰してくるよ!!」

「まっってなんでそうなるの!!?」

ヨーギラスではなく密漁団を潰すとはいきなり話が変わって驚いた。おそらく兄が

言う密漁団とはヨーギラスを連れ去った原因のことだろう。あれ、密漁団って捕まっ
てなかったの？というより何故そう物理で解決しようとするんだ。しかもピカチュウを
貰いに行く前日のように覚悟を決めた表情をしている。つまりは暴走状態。

「おにいちゃんヨーギラスにトラウマうえつけないでね？」

「大丈夫だって。俺がそんな失敗するわけないだろ」

「うんそうだねおにいちゃんポケモンについてはかんぺきにやりとげるもんね!!」

兄が旅立つてからというもの、スーパーマサラ人としての噂が流れてきているのは
知っている。そしてシゲルさんがそんな兄に対抗しようとジョウト地方に旅立ったの
も知っている。でもってシゲルさんを巻き込む形でジョウト地方でもスーパーマサラ
人としての噂が流れてしまうのだろう。…なんか兄がすぐポケモンマスターになれそ
うな気がするのには気のせいじゃないはず。

「よしちよつと行っていくる！ピカチュウ!!」

『ピ、ピカピ？』

「ちよ、ちよつとサトシどこ行くの!?!」

「サトシ!?!」

「すぐ帰るから待ってて!!」

「…あーあー」

何だろう。恐ろしく嫌な予感がする。ヨーギラスにトラウマをさせないように完璧に配慮するのは分かってるし、そういう意味では大丈夫なんだろうけど…。

「おにいちゃんがどんどんじょうしきからはずれていくきがする」

ロケット団を変えたり、ポケモンになろうとしたり…兄は一体何になる気なのだろう…もしかしたらポケモンマスターを超えた超人的な何かになるかもしれないと私は思ってしまった。ひよつとしたらこの兄ならば世界征服もできるんじゃないか？

「…とりあえず、せかいせいふくはやめてっていつておかないとね」

世界征服をした兄なんてみたくはないと思う私であった。

第九話くベイリーフが可愛すぎるく

こんにちはは妹のヒナです。最近また兄が帰ってきました。そして私もすこし大きくなり、言葉もたどたどしくなくなりましたよ。

私のことはどうでもいいですが、兄がまたすぐに旅立ってしまったためピジョットやバタフリーとすれ違いになってしまったのが嫌だなと思いました。

「お兄ちゃんつてば…もうちよつとマサラタウンにいてもいいのに…」

『ベイ…』

私の隣で悲しそうに落ち込んでいるポケモンは兄の仲間となったベイリーフ。恋する乙女というのは本当にすごい。兄が旅立ったことを知ったベイリーフは怒り、悲しみ、いろいろとポケモンたちを巻き込んで暴走し最終的にはフシギダネに止められていた。

そんな兄のことが好きすぎるベイリーフと私は最近よく遊んでいます。

「見てベイリーフ！花の種もらったの！」

『ベイベイ!!』

「うん！一緒に花畑に行つて植えよう！」

『ベ—ーイ!!』

ベイリーフはよく花畑にすることが多い。ケンジさんの手伝いもしているし本当に良い子だね。まあ兄に対する情熱が凄いいせいでいろいろと残念なときもあるんだけど…。

「花…ここらへんに植えてみる？」

『ベ—ーイ!!』

花畑についた私たちは手に持つている花の種を植えていくための場所を見つけていた。

オーキド研究所の森の近くにある花畑は私とベイリーフで作つていった場所だ。もちろんフシギダネにも手伝つてもらつたし、セレビイも遊びながらだけど助けてくれた。

最初はベイリーフを元気づけるためにやったことだけれど、今となつては私自身も花をもつと植えて大きな花畑にしたいと思つている。

最初は何もない草むらだけの場所が、ベイリーフが来たころから少しづつ変わり、も

う綺麗な花でいっぱいなの光景がとても好きだ。

ベイリーフはこの花畑を兄に見せたいらしい。兄が帰ってくるのはすごく時間がかかるけれど、その頃にはもっと大きな花畑になっているかもしれないから楽しみだよね。

『ワニワニワーニ！』

「あれ？ワニノコも来てたの？」

『ワニイ!!』

「ブフツ」

ワニノコが花畑の中心で踊っていたから話しかけたのだが、いきなり私に向かって噛みついてきた。まあ頭を噛みつくぐらい兄もやられているし、愛情表現だと分かっているから怒ったり泣いたりはしないんだけど。

…ちよつと痛いかな。

『バイバイバイイ!!!!』

『ワニーイ?』

『バイバイ!!』

「あ、ごめんねベイリーフ。ありがとう」

ベイリーフが私のことを分かってくれたらしい。怒りながらもつるのムチで私に噛

みついているワニノコをとってくれた。ワニノコは元気が良すぎてよく踊っているけど、たまに私や兄のように嘔みつくことも多い。そして今も何で怒られているのかわかっていないみたいだ。まあ傷つけるつもりでやっているわけではないから気にすることもないかな。

「ワニノコも一緒に花植えてみる？」

『ワニワニワーニ！』

『…ベイベイベー』

「大丈夫だよベイリーフ。ワニノコが暴走したら私たちで止めようね」

『ベイ！』

『ワニイ？』

まあそんなこんなで、新しく兄が連れてきたポケモンとも仲良くやっている。

ベイリーフが女の子らしくとても可愛いから癒されるし、私とよく遊んでくれるから大好きだ。もちろんワニノコたちもね。

…そういえば兄はジョウト地方で旅をしていた時はどんな感じだったんだろうか？

あとでカスミさんに聞いてみようかな。

第十話～未来の兄もやっぱり普通じゃない～

「あ、やべ。間違えた」

『…レビィイ』

「どういふこと!？」

こんにちはは妹のヒナです。最近ようやく5歳になりました。兄はハウエン地方で新しい仲間たちと楽しく旅しているようです。

私はいつもの昼寝スポットに行こうかなと散歩していたのに、目の前が光ったと思ったら少し大人になっている兄がいました。あとセレビィとピカチュウも一緒に。

「お兄ちゃんだよね…?」

「おう、ヒナの兄貴のサトシさんですよー」

「あ、うんそういう残念なこと言うのお兄ちゃん以外いないわ」

「お前この頃から辛辣だったんだな…」

『ピツカチュウ…』

『レビィ?』

ピカチュウは兄と同じような表情をしていて、セレビィは首を傾けてどういうことかわからないようだ。というか、ピカチュウ本当に兄に似てきたね。表情とか仕草とか擬人化したら絶対に兄にそっくりになりそうだよ。

でも何でここにいるのだろうか? 目の前にいるのは本当にホウエン地方で旅している兄なのか? それにしては大人になっているような…。

「お兄ちゃんっていつの時代から来たの?」

「ああ、未来からな。セレビィとお手玉して遊んでたら過去に来ちゃった。そうだ俺もうポケモンマスターで婚約者もいるんだぜ」

「…待ってツツコミがおいつかないよ! というより未来の情報教えてもいいの!」

「え、いいと思うぜ? なあピカチュウ」

『ピッカ!!』

「お願いだからピカチュウお兄ちゃんみたいになっちゃだめだよ!」

目の前にいる兄はもう夢が叶ってしかも婚約者もいるらしい。待て何でセレビィとお手玉をして過去に来たんだ。そして重要な未来の情報を話しても特に気にしないのは良くないと思う。本当につっこみどころがありすぎる。未来でこの兄に一体何があつたんだ。ポケモンマスターになるというのはこの兄だからできそうだとは思った

けれども…思ったけれども！

(前世と性別違うから恋人は作らないって宣言してたのにいきなり婚約者ってどういうことなの!?)

「あ、何で婚約者がいるかって疑問に思ってるんだろ？まあそれは未来でのお楽しみにとっとけ」

「いやすごく気になるから！…というよりお兄ちゃん私からかって楽しんでるでしょ絶対」

「え……………いや？」

「嘘だー！」

未来での兄がなんか愉快犯みたいになってた。しかも私をからかっているしなんか常識じゃなくて非常識の塊になったらこうなるのかなって理解したよ。

「あ、そう言えばもしも過去に行ったら未来のヒナから過去のお前に言っただけの伝言頼まれたんだった」

「私から!？」

どうやら未来の私も少々常識が吹っ飛んでるようだ。何故兄に伝言を残したんだ未来の私。もしかして未来の私も未来の兄に会うという出来事があったのではないかなんかややこしい気がするけれども。

未来の兄は爽やかな笑みを浮かべて私に言う。

「《赤髪の男の子には絶対に必要以上関わらないようにすること。じゃないと死にかけてる》だとよ?。」

「赤髪の男の子って誰?!?何があったの未来の私?!?」

『レビィイ』

焦って叫んでいる私を楽しそうに見る兄とセレビィ。ピカチュウは少しだけ同情したような表情を浮かべていて、それが余計に不安になってしまふ。

予想通りのリアクションに満足したのか、兄は私の頭を撫でてから手を振って離れる。

「じゃあ俺もう行くぜ。また未来で会おうな」

『ピィカツチュウ!』

「いやもう来なくていいから!」

『レビィィ!!』

兄とピカチュウ、そしてセレビィが私に向かって手を振り、煌びやかに光って消えていった。

誰もいない森の中、私は座り込み心の底から声を出して叫んだ。

「結局未来の私たちどうなったの?!?」

その後、叫び声に驚いたオニスズメたちが近づいてきて、ポケモンたちに囲まれた私をフシギダネに助けられ危ないことをするなど説教をされ散々な目に遭った。

第十一話　兄が化学兵器を作り出した？

こんにちは、兄のサトシです。

今ホウエン地方で楽しく旅に出ています。

「…なあこれ食べれると思うか？」

『…キヤモ』

『ピイ…カ…』

「だよなあ…」

現在俺たちはきのみで作ったポロック前にいます。ポロックを作ってみたんだけど、なんか色が虹色に輝いていて食べれないような気がする。ポロックから禍々しい雰囲気漂ってきていて、見た目はカラフルなのに気味が悪いというか…。

あ、ちなみに俺の腕につかまっているキモリは旅の途中で仲間になったんだぜ。

「サ、サトシ…それは食べない方がいいかも」

「僕もそう思うよ。というかサトシどうやってその虹色ポロック作り上げたの？」

「うん?…今持っている食べ物全部まぜたらこうなった」

「全部!?!」

ちなみに今一緒にいる仲間はタケシ、ハルカ、マサトだ。俺が作り出した禍々しい虹色ポロツクから少し距離を置いて驚いた表情を浮かべている。

そんなに驚くような話だったか?

「待って待って。もしかしてきのみ以外もか?」

「おう。きのみはもちろん、タウリンやブロムヘキシシ、リゾチウム、キトサン、インドメタシン、マックスアップ、ハートのウロコ、フエンせんべい、あと——」

「よく全部入ってちゃんとしたポロツクになったね!!?」

「いやでも虹色だし失敗作だぞこれ」

「…成功してたらまさに奇跡だったかも」

『キヤモ』

『ピカピカチュウ』

三人はそれぞれ微妙な表情を浮かべている。キモリはポロツクから近づこうとせずただ俺の腕に捕まり、ピカチュウは虹色ポロツクの臭いを嗅いで酸っぱそうな表情を浮かべていた。

確かにこれは失敗作かな。おいしくてポケモンの身体に良さそうなもの全部入れて

しまえば一番おいしくなると思ったんだけど無理だったか。

「よしこれロケット団に贈ろう」

「…え？それ捨てたりしないの？」

「いや食べ物粗末にしたらよくないだろ。だからロケット団に食べてもらおう」

ロケット団に食べてもらおうという俺に対してハルカとマサトは複雑そうな表情になった。おそらくロケット団が今までどんなことをしてきたのか知らないから複雑な表情になってしまふのだろう。

今はだいぶ落ち着いていて、たまに襲撃してくる三人組を俺とピカチュウが吹き飛ばすからロケット団三人組の印象は可哀想な奴らになっていた。

一方タケシやピカチュウは今までの悪さの所行と俺の被害もあつてか納得したような顔になり、器などを見つけてロケット団に贈るように言ってくれる。

キモリも俺の表情を見て、何かあつたのだろうと予測し、反論などはしなかった。

ハルカとマサトは贈り物の準備をする俺に向かって言ってきた。

「い、良いのかな？なんか可哀想な気がするよ？」

「いいんだよ。というかこれ食べたとしてもしぶとく生きてるだろうし…」

前世で見た別名・Gのように吹っ飛ばされてもすぐに向かつてくる精神力と頑丈さは俺以上な気がする。

…あいつらのことスーパーロケット団員とでも呼んだ方がいいかもな。

「…まああいつらなら大丈夫だろ」

俺が旅立ったころからずっと関わってきた腐れ縁だからこそ言える言葉だった。

ちなみにその後、ロケット団がこの虹色ポロツクを食べたかどうかは知る由もない。

第十二話く兄が教えることは非常識く

こんにちはヒナです。最近兄が新しく仲間になったハルカさんにポケモンについて詳しく教えているようです。

…ですが教えていることは何やら普通だけではないみたい。

「…つまり？」

「やりすぎましたすみません」

「何お兄ちゃん。ハルカさんをスーパーミシロ人にしたいの？いろいろと問題ありすぎるよ!」

ハルカさんが兄と同じくいろいろと常識から外れつつあるみたいだ。前に話聞いたときは普通だった気がするんだけど一体何をやったんだこの兄は。

私は小さくため息をついた後、テレビ電話の向こうでのほほんとしている兄に言う。

「ハルカさんに何をやったの？」

「バトルの仕方、ポケモンとの交流の仕方。…あと技の開発なんかを」

「まだ技開発なんてことやってたの!？」

兄が旅をして半年と少しの間に技開発をしていたのは知っていた。テレビで出てきたくらいだしその後は話題がすさまじかったからもう懲りてやってないと思っていたのに…。

なんだろう、すごく嫌な予感がする。

「…ハルカさん、どんなふうになっちゃったの?」

「いやそれがついこの間、ハルカがバトルに挑まれてさ——」

そう、それは旅で起きた出来事だった。

まだまだ新人で何もできないと言っていたから俺はいろいろとポケモンの凄さについて教えていったんだ。

その話に興味を持ったハルカと…あとマサトも学んでいった。もちろんタケシも自分の経験談とか語っていったんだぜ？

それで実践したり、一緒になって修行したりして、ハルカも少しは自信が出てきたみたいで、ついこの間バトルを承諾したんだ。

「行くわよアチャモ！」

『チャモっ!』

アチャモが走り、相手のジグザグマに向かっていく。だが相手は余裕の表情を浮かべていた。

「へっ走って向かっていくことだけがポケモンバトルじゃないぜ? たいあたりだジグザ

グマ!」

『グウ!』

「分かっているわよそれぐらい! アチャモ! 回り込んで炎のとび蹴り!」

『チャモ!!』

「はあ!?!」

『グ、グウウ?!!』

アチャモが炎を纏いながらもとび蹴りをしてジグザグマに強烈なキックをする。

技じゃない技を受けたジグザグマは飛び上がり、宙を舞った。

「よし、そのままひのこ!」

『チャーモ!!』

「ちよつちよつと待て!!」

相手のトレーナーが止めようと叫ぶが、アチャモは止まらずジグザグマにひのこを浴びせてそのままダウンした。

「やったわ！ありがとうアチャモ！」

『チャモチャモ!!』

「おい待て!!」

ジグザグマをボールに戻し、今起きたことを信じられない様子の相手トレーナーがハルカに怒鳴りかける。

「お前、ちゃんとした技を使おうとはしないのか?!炎のとび蹴りって非公式な技を使うな卑怯だろ!!」

「何を言ってるのよ！ポケモンはまだまだ未発見の秘密が多くあるわ！非公式とか公式とかそんなこと言える？それにまだまだ技には可能性が含まれてるってサトシが言ってたわ」

「誰だよサトシって!!」

「だからっ！私はアチャモの可能性を信じてるし、私自身もアチャモと同じくもっともっと頑張れるって分かっているの！」

『チャモー!!!』

「そうよアチャモ！もっと熱く燃え上がって!!!」

『チャモチャモ!!!』

アチャモの周りに火が渦巻き、まるで大きな炎の竜巻のようになる。そしてそれに呼

応ずるかのように、ハルカの声も大きくなり、アチャモの炎も大きくなっていく。まるでキャンプファイヤーのごとく大きく燃え上がり、周りの温度も急上昇していく。

「ヒ…ヒイイ!!!」

相手トレーナーがその異様な様子を見て震えあがり、怒っていたことも忘れて走り去っていく。

それでもハルカとアチャモの勢いは止まらない。

『チャモオ!!!』

「もつともつと熱くなるわよアチャモ!!!」

『チャモチャモツ!!!』

「——つてことがあった」

「修造かつ!!?」

もつと熱くなれよオ!!つてか!!?

ハルカさんがスパーミシロ人になった瞬間じゃないか!!

兄のやらかした所行に頭が痛くなる…。

それに、こんな出来事を起こしたというのに、タケシさんたちは何も言わないのが気がかりだ。

…すごく、ものすごく嫌な予感がしてしまふ。

そしてそれは絶対に当たっているはずだ。

「ちよつと待つてお兄ちゃん…もしかしてハルカさんだけじゃなくタケシさんたちも非常識の仲間入りとかしてないよね？何もやってないよね？」

「……………あ、そろそろ時間だからもう切るな？」

「ちよつ」

兄はそのままテレビ電話の通信を切り、私の目の前は画面の真っ黒しか映らなくなつた。

「……………ミュウツウウウウウ!!!」

私はそのまま勢いよくオーキド博士の森の中に入り、ミュウツウの名を呼んで兄の暴走を止めてもらおうとした。

だがしかし、ミュウツウでは兄の暴走を止めることができませんでした畜生。

第十三話くある日森の中、卵に出会ったく

『ミュツ！』

「…なにこれ？」

『ミューイ!!』

「…ミユウ、この卵私にくれるの？」

『ミュ!!』

こんにちは妹のヒナです。森の中で散歩中にミユウに出会っていきなり大きな卵をプレゼントされました。しかも卵がなんだか暖かくて動いているような気がします。そう言えば気がついたんだけどもう伝説に会うのって私にとって普通になっちゃったね…。

「…え、この卵ってミユウが生んだの？」

『ミユウ』

ミユウは首を横に振って生んでいないという。…じゃあこの卵はいったいなんなの

だろう？

というよりも何でミュウがこの卵を私に持ってきたのだろう。

「この卵のお母さんとお父さんはどうしたの？」

『ミュウ、ミュウ』

「…え？」

ミュウは悲しそうな表情になってまたしても首を横に振っていた。

その表情に私はある考えが浮かんでしまった。

「…もしかして、この卵のお母さんとお父さん…いないの？」

『ミュウ』

ミュウはそのまま頷き、私の顔をじつと見つめてきた。この卵の両親がいないというのは、何か最悪なことでもあったかもしれない。もしかしたら、兄が世話していたヨーギラスのような境遇を持っているかもしれない。でもなぜ私に卵を渡すのだろう…。

「なんで私なの？お兄ちゃんのほうが絶対に卵も幸せになるよ！」

『ミュウ!!ミュウ!!』

ミュウは少し怒ったような表情になって、私と卵を交互に指差してきた。何が何でも私に卵を渡したいらしい。

その表情が、絶対に私に育ててほしいと言っているようで、卵も同じようにカタカタ

と揺れてミュウに同意しているようで…。

「私は、お兄ちゃんみたいにポケモンのことまだよく知らないし、ポケモントレーナーでもないただの子供だよ？」

『ミュツ！ミュ！！』

「…うん。私ね。お兄ちゃんみたいにできるかどうか分からないけど、でも絶対に卵から離れたりしないからね！私が必要なら、出来ることは全部するよ！！」

『ミュウウ！！』

卵にとって私が必要ならば、少しだけでもいいから兄のように生きてみよう。ポケモン優先の兄のように、いづれ生まれてくるこの卵が幸せに生きられるように。

私にできることがあれば精一杯努力していこう。

『ミュージー！！』

「えっ…」

ミュウが大きく叫ぶと、卵が大きく動いていき、一気に光り輝いていく。

目の前が真っ白にしか見えなくらい輝いていた光が少しずつ薄れて消え、気がつく
と腕の中に卵ではなく小さなポケモンがいた。

「う、生まれた…?」

『ミュウ!!』

ミュウが大きく頷いて、生まれたばかりのポケモンの様子をうかがっている。

目がパツチリしていて、とても可愛くてオーキド研究所ではよく見かけるポケモンなだけでど：少しだけ色がおかしい。もしかしたら色違いかもしれない。

だからミュウは私に託したのだろうか？いやただの色違いでミュウが私に託するのが何かおかしいような：まあ考えても仕方ない。

それに生まれたばかりのこのポケモンは私が色違いだということやこれからどうするのかということを考えていても、なにも気にせずただ私につこりと笑いかけてくる。それが何だか兄のピカチュウのように思えてしまった。私も兄とピカチュウのよくな関係を築くことができるようになるかはわからないが、とりあえず今はたつぷりと愛情をこめて育てよう。

「よろしくねヒトカゲ！」

『カゲツ!』

.....

『ミュミュミュ！』

『…ああ渡してきたのか。ちゃんと主人公のサトシに渡してきたんだろうな？』

『ミュ？』

『……………妹？……………まあいいか』

第十四話く妹とヒトカゲとあと…く

こんにちは妹のヒナです。

つい先日私のもとにヒトカゲがやってきました。今はポケモントレーナーになれるので未来の相棒です。

そんなヒトカゲだがちよつとだけ色違いなせいで周りはみんな大騒ぎしていた。

例えばオーキド博士の場合はヒトカゲが色違いだからと少し興奮していた。それに怯えたヒトカゲが私の後ろに隠れ、オーキド博士はそんなヒトカゲにもつと近づいて抱っこしてしまった。

「おお！ヒトカゲの色違いか！ちよつと研究を——」

『カゲエー!!』

「熱ッ!!」

「ダメだよヒトカゲ、ひのこは重傷を負う可能性が高いからね。出来ればひつかくとかにしよう?」

『カゲ…カゲッ!』

「そ、そう言う問題かのオ」

少々の傷を負ったオーキド博士は乾いた笑みを浮かべ、私の頭を撫でてくれた。

ヒトカゲが私に懐いているから、トレーナーとしては戦えないけれど、一緒にいても大丈夫だと言ってくれた。

ケンジさんも色違いのヒトカゲに「観察させていただきます!」と嵐のごとく一気に近づいてきて描いていった。

母は「あら、お友達ができたの?良かったわねえ。よろしくね?ヒトカゲちゃん」と言つてヒトカゲの頭を優しく撫でていた。

兄のポケモンたちもヒトカゲが来たことに喜び、歓迎してくれた。フシギダネと私でヒトカゲを連れてオーキド研究所の周りを案内し、花畑で遊んだ。色違いとか関係なく、ヒトカゲと一緒にいれて本当に嬉しいって思う。

「生まれてきてくれてありがとうね。ヒトカゲ」

『カゲエー!』

まあそんな楽しい毎日に、一つだけ気がかりなことがあるんだけどね…。

「……やっぱり、いる？」

『カ…カゲ』

「うわあ…誰なんだろ」

小さな声でヒトカゲと話し、こっそりと後ろを窺う。最近、私たちの近くに何か気配を感じる事が多いのだ。ヒトカゲもそれを感じていて、怯えて私に抱きついてくるこ
とが増えた。

でも気配は時々感じるだけで怖いとは思うけれども、特に気にしなれば済む話だった。ヒトカゲも私にくっついていれば何の問題もないらしく、もしかしたら兄のポケモンの悪戯か何かかと思っただ。

兄のポケモンだったら、ゴーストの仕業かと思っただけで、それは違っていた。前に一度ゴーストが遊びに来たときも、気配を感じたのだ。でもフシギダネたちは何も言わないし、私とヒトカゲだけが感じていて、すこし気味が悪い。

そしてこの日を境に毎日気配を感じるようになった。私とヒトカゲは、毎日遊んでいても、家で食事をしていても、何かいると分かってしまったのだ。

「…よし」

『カゲ…カゲカゲッ』

「だいじょーぶだよヒトカゲ」

この気配が害をなすものだったらそのままにしていたはだめだ。私はヒトカゲを守ると覚悟を決めているのだから。

このまま気配を無視しては、ヒトカゲのためにもならない状況を、どうにかしなければいけない。

怯え、震えているヒトカゲを優しく撫でてから私は後ろの方を振り向いた。

「そこにいるのは誰なの!？」

『カゲカゲツ!!』

私が気配のいる方へ叫ぶと、ヒトカゲも勇気を振り絞って大きな声を出して前へ出ようとす。そのまま勢いよく気配のする方へ行かないように、私は足元にいるヒトカゲを抱き上げ、気配の方を強く睨む。

「いるのは分かっているのよ! でてきて!!」

『カゲーツ!!』

『————— キューンツ』

「……………え?」

気配のする空間が歪み、目の前に現れたのは大きな赤いポケモンだった。

私は実際に目の前で見たことはなかったポケモン。兄が一度助け、原作フラグを大いに叩き折って救ったポケモンの一匹…。

「なんでここに居るの？ラティアス」

『カゲエ？』

『キュー…』

目の前に居るラティアスは兄が救ったポケモンのだろう。兄は旅で出会ったラティアスだけでなく、原作では死んでしまったラティオスも助けた。

その時何をしたのか知らないが、兄はものすごく疲れた表情で「全力ダツシュって大切だったんだな…」とテレビ電話のむこうで呟いていたのをよく覚えている。

…それで何でそのラティ兄妹の一匹がこっちに居るの？

『キューウ…キューン』

「あ、ごめんね。君の言ってることわからないんだ。あと、さつきは怒鳴ってごめんね」
『カゲ…カゲ？』

ヒトカゲは首を傾げて私とラティアスを交互に見つめる。そういえばさつきまで悪者かもしれないと怒鳴ってたからなんで謝るのか疑問に思っているよね。

でももしかしたら目の前に居るポケモンは兄に会っていないラティアスという可能

性もあるから、一度確認してみようと思う。

「…えつとお兄ちゃんと出会ったラティアスだよね？」

『キュウ！』

「やつぱり。ヒトカゲ、大丈夫だよ。お兄ちゃんの友達の、ラティアスだよ」

『カゲ！カゲカゲ!!』

私の言葉によろやくヒトカゲは悪者ではないと分かったようだ。兄のことは毎日のように話していたし、どんな人かもなく分かっているから安心したのだろう。まだ兄と連絡がついていないけど、いつかついた時はヒトカゲのことをたくさん話していかないかね。

まあその前にラティアスについて聞きたいことがたくさんあるんだけど…。

「ねえ何でラティアスは私たちのことずっと見てたの？」

『キュー！キューン!』

『カゲ…！カゲカゲエ!!』

「え、なに？ どういうこと？」

私はポケモンの言葉をすべて理解できないから、何を言っているのかわからない。

ちよつとした仕草で遊びたいとか、お腹すいたとかは伝わるんだけど…ラティアスが

何を言っているのかは伝わらないかな…。

でもヒトカゲは違うようだ。納得したような表情を浮かべたヒトカゲは私の腕から降り、ラティアスのもとへ近づいた。そしてポケモン同士で話してから、また私の方へ近づく。

「ヒトカゲ、ラティアスは何がいいの？」

『カゲエ!!』

「……………あ、なるほどね」

ヒトカゲが先程まで遊んでいたボールを手に持ち、私に渡してきた。そしてラティアスの方を見て、また私の方を見て笑いかける。

もうそれだけで何が言いたいのか分かった。なるほど、とても簡単なことだ。

「ラティアス、私たちと遊びたいの？」

『キューン!!』

それが正解とでも言う様に、ラティアスは私の近くで飛び回る。

私たちを見て、遊びたかったからいつも近くにいたのだと理解した。まあもしかしたらラティアス自身が伝説だから、遊んでもらえるかどうか心配で気配を消して様子を窺っていただけなのかもしれない。

でも、もう必要のないことだ。私はラティアスにボールを見せて微笑んだ。

「ラテイアス、ヒトカゲ。ボール遊びしよつか？」

『カゲエエ!!』

『キュ——ンツ!!』

そしてその後、毎日のようにラテイアスがオーキド研究所に来るようになり、夕方近くには迎えに来たラテイオスの姿が見えるようになった。

.....

…あ、そういえばあとでフシギダネ達にミュウツウの通訳で聞いてみたんだけど、やっぱり気配は感じていた上でラテイアスだと分かっていたらしく、危害を加えないみたいだから何も言うつもりはなかったんだってさ。

第十五話～兄のポケモンもやばかった～

こんにちは兄のサトシです。最近キモリがジュプトルに進化して、仲間たちも増えて毎日が楽しい旅です。

まあそんな楽しい旅をこの目の前のトレーナーたちが邪魔しているんですけど…

「だからア？お前のジュプトルと俺のゴイキングと交換してくれって言ってるのよ？頭大丈夫？」

「いやお前の頭の方がおかしいだろ」
「んだとオ!?!」

俺の目の前にいるのは、不良もびつくりの立派なリーゼントをした青年とその愉快な下っ端たちだ。俺たちを逃げないようにするためか不良と下っ端で周りを囲み、下品な笑い声を出して脅してきた。

不良どもにジュプトルとちよつとした修行を見られたからこんな面倒なことになっているというのには理解している。ちなみにその交換したいと言っているジュプトルは

ボールの中にいる。先程からずっとボールがガタガタと揺れていて出てきそうだが、そうしたら本当に危険だ。目の前の不良たちがという意味で。

ジユプトル達は：まあなんとというか、手加減というものを知らず、よく暴走をしている。俺やピカチュウもよく吹っ切れたり暴走したりはするけど、周りの被害はちゃんと確認するからそこまで悪くないと思っている。でもジユプトル達はそういう手加減を知らない。ハイガニはもちろんだが、特にジユプトルがやばい。

あれかな、狙った獲物は逃さず切り刻む的な。

まあこの場合出てきても特に問題はないのだが、ハルカとマサトの情緒には良くないからジユプトル達の入ったボールをpushさせて出るのを我慢してもらっている。

そして俺とタケシでハルカとマサトを守り、ピカチュウも手加減をしてこの不良たちを蹴散らそうと電撃の準備をしていた。これで俺の指示をとばせばすぐに終わるはずだった――

「ハッハア。お前もしかしてジユプトルが弱っちいの気にして交換してくれないとかあ？」

「あーそれでかよ」

「ギャハハハ!! 安心しろよ! お前のジュプトルは俺が責任もって育ててやるからよオ?」

——この言葉が無ければ。

「誰が弱いつて?」

「ああ?」

「誰のジュプトルが弱いつて!!!?」

『ジュツ!!』

押さえていたはずのボールから勢いよくジュプトルが飛び出し、不良たちを睨む。俺が手でジュプトルを押さえているからジュプトル自身も俺の意思を聞きとり不良たちを切り刻もうとはしない。でも不良たちは俺とジュプトルの怒気に押され気味のようだ。少し怯えたような表情を浮かべている。

「ちよつとサトシ!」

「サ、サトシ!!」

「いいから…大丈夫だから…なあ?」

「ヒイ!!」

不良たちは俺の顔を見て怯えていた。身体が震え、今にも逃げ出しそうだ。

だが不良の頭でもあるリーゼントはプライドなのかボールからハッサムを出し、バトルを挑んできた。でも俺はそんな普通のバトルなんてやるつもりはないけどな。

「なめんな!!」

『ジュルツ!!』

俺とジュプトルが一緒に飛び出した。ポケモンだけでなく人も一緒に飛び出したことにリーゼントたちは驚き、ハッサムにまともな指示を出そうとしない。そんな彼らに俺はまず目の前にいるハッサムに回し蹴りを食らわし、ジュプトルの方へ飛ばす。そして俺がリーゼントたちの方へ走る間にジュプトルは飛んできたハッサムにリーフブレードで切り刻み戦闘不能にしてリーゼントの目の前へやってきた。

「ヒッヒイイイツツ!!!」

その時間、2秒もかかっていなかった。

リーゼントたちは驚き、恐怖で震えていた。なんせポケモンとトレーナーと一緒に走ってきたと思ったら自分のハッサムは戦闘不能になり、目の前に真顔で立っているのだから。

「……………それで?」

「も、申し訳ありませんでしたアアア!!!」

「それだけで許してやると思ったかゴルア!!!」

『ジュルアツツ!!!』

俺がリーゼントに右ストレートで殴り、その間にジユプトルがリーゼントのリーゼント（髪の毛）を切り刻む。

「うわああああすいませんでしたああああ!!!」

「ほんとうにもうしませんからああああああ!!!」

吹っ飛ばされたリーゼント…いや不良集団の頭に下つ端たちは恐れ戦き、倒れている頭とハツサムを連れて逃げて行った。

「…チツ今度会ったらトラウマ作ってやる」

『ジュツ』

俺の舌打ちと同時にジユプトルも頷き、逃げて行った不良集団たちを睨み続けているた。

「あーやつちやつたな…」

『ピカツチユウ…』

「サトシ…かつこいいー！」

「すごいや…僕もあんな風になってみたい!!」

そして俺とジュプトルの後ろの方ではため息をつく1人と1匹。

そして感嘆の声を上げ、もつと頑張ろうとやる気をだす姉弟がいた。

第十六話～妹と色違いの2匹～

こんにちは妹のヒナです。

ヒトカゲが最近ひのこを宙に飛ばして花火をするやり方を覚ええました。ぶっちゃけフシギダネのおかげです。

それに毎日他のポケモンたちと遊べて、私とも一緒にいて、ヒトカゲも嬉しそうです。それで、今日は兄のポケモンの中であまり交流していないポケモンに突撃してみようかと思っています。

「いた？」

『カゲッ！』

「あ、シー。駄目だよヒトカゲ、大声出したらヨルノズク起きちゃうでしょ？」

『カ…カゲカゲ』

ヒトカゲが自分の手を口に持っていき大声を出さないようにする行動に癒されつつ

も、私は木の上でいつも寝ているであろう兄のヨルノズクを見上げた。

でも見上げてでもヨルノズクがいるかどうかは暗いためわからない。ヒトカゲの炎のおかげで周りが明るいし温かいから大丈夫なだけど…いるのかな？

兄のヨルノズクは寝ることが多く、私たちとはあまり話をする事ができずにいた。それに私たちもラティアスやミュウツーと遊んだり、ベイリーフと花畑を増やしたりと毎日忙しく暮らしていたから仕方ないと思っっている。それに何か危険が察知したらすぐに起きてフシギダネやオーキド博士たちに言う優秀さを持っていて、やっぱり寝ているところを起こして遊ぼうとは言い辛い…。

でもやっぱり話してみたいし、出来ればヒトカゲと一緒に遊んでほしい。

だから今日は私とヒトカゲで夜に家から抜け出し、今日このオーキド研究所の森の中にやってきたのだ。

オーキド研究所は夜になるとほとんどのポケモンをボールに戻し、次の日を迎えることが多いが、夜行性や外にいたいというポケモンは別だったりする。ポケモンたちがボールに戻りたいかどうか希望をちゃんと聞いて、その通りにするのだ。そんなオーキド研究所のやり方に、盗まれるという危険性があると危惧する人もいるらしいが、まあそれは兄と仲良くなりオーキド研究所に来るようになったアンノーンたちがうろついているこの森の中にやってきたら即アウトということだけは言っておく。

アンノーンについてもオーキド博士たちは知っていて、最初に集団で来たときは本当に気絶するぐらい驚いていたけど、兄だから仕方ないかと悟つたらしい。そして夜にパトロールをしているというのも知っていて、安心して夜に出たいというポケモンたちを解放しているのだ。

そして私はアンノーンとたまに遊んだりしていたから、仲が良かったため見かけても挨拶するぐらいだ。ヒトカゲとも仲が良いから今度また遊びたいと思う。

まあその前にヨルノズクに会いに行かないといけないけどね。

「ヨルノズクやーい……ってやつぱり駄目だったかな……」

『カゲエ……』

夜の森の中、私たちは木の上にいるはずのヨルノズクを探して歩いていた。いつも寝ている木の上にはいなかったため、他の場所にいるのではないかと歩いているのだ。

だが見つからない。そして草むらの向こうでガサガサと音がしているのがなんだか怖い。

ヒトカゲもたまに聞こえる草の音、風の音を怖がり、私にびつたりとくっついていて。抱っこした方がいいかもしれないけれど、ヒトカゲをずっと抱っこできる力は私にはないため我慢してもらおう。でもヒトカゲと手はちゃんと繋いで暗い暗い森の中を歩き続ける。

「…やっぱりお昼とか夕方ぐらいの方が良かったのかな」

『カゲツカゲツ』

「…家に帰ろうかヒトカゲ」

『……カゲ』

私とヒトカゲはヨルノズクに会えないことに落ち込みつつ、歩いてきた道に戻つていく。

だが歩いてても歩いてもちゃんとした道に戻ることはできず、しまいには来たことのない大きな大樹がある場所まで来てしまった。大樹があるというのはオーキド博士からよく話で聞いていて、そこは森の奥深くだというのも聞いていた。

「…え、迷った!？」

『カゲカゲ!？』

誰もいない森の中、このままではいけないと思うのに、そこからまた戻つても歩いても家につくことができない…。

アンノーンさえも見当たらなくなっていて、今どこにいるのかわからなくなってしまう。

しまいにはヒトカゲが泣きだし、私ももう泣く一歩手前だ。

「…ごめんねヒトカゲ…こんな無茶させちゃって…」

『…カゲツカゲカゲツ』

ヒトカゲは首を横に振りつつも零れ続ける涙を押さえ、私に抱きついてくる。

私はヒトカゲを抱っこし、涙で歪む視界を押さええた。

『…ホー』

そんな時に聞こえてきた一つの声。

私とヒトカゲは声のする方を見上げる。すると空から降りてきた金色に光るヨルノズクが私たちに咎めるような目でこちらを見ていた。

「ヨ、ヨルノズク…！」

『カゲカゲ!!』

『ホー…』

「…ごめんなさい。でもヨルノズクと遊びたくて…それで…」

『カゲ…』

恐らくヨルノズクは夜の森の中をうろついている私たちに怒っているのだろう。無茶をしたことを謝り、どうして夜にこの森へ来たのかを嗚咽を押さえつつ、喋っていく。するとヨルノズクは私たちに近づき、すり寄ってきた。

『…ホー』

「ヨルノズク？」

ヨルノズクは羽を広げて飛び、私たちについてくるように鳴き声と仕草で教えてくれる。私とヒトカゲはお互いを見た後、すぐにヨルノズクのあとを追う。

長く歩き続けていくと見えてきたのは広場だった。だがいつも行く広場とは違っていた。広場の中心ではなにやら光り輝き、その周りでゴーストやゴースト、ゲンガーといったポケモンから、キレイハナやナゾノクサ、ピッピたちがそれぞれ踊っていた。

「うわあ……！」

『カゲカゲッ!!』

とても幻想的な光景に私たちは驚き、感動した。そしてヨルノズクが飛びながらも私たちに近づいて見つめてくる。もしかしたらこの光景を見せてくれたのは遊びたいと言った私たちのためなのかもしれない。私とヒトカゲは嬉しくなって飛び続けるヨルノズクに抱きついた。

「ありがとうヨルノズク！」

『カゲエ!!』

『ホーホー……』

その後、私たちは広場で一緒に遊んだ。兄のゴーストもいて、私たちを驚かせたりもしたけれど楽しかった。

だがヨルノズクの家内で家に帰ると怒っていた母が出迎えてくれて朝まで説教され

たので今度はちゃんと行ってから外に出ようと思ひ、反省した。

「また一緒に遊ぼうねヨルノズク！」

『カゲツ！』

『…ホー』

第十七話 く兄が音速を目指したく

こんにちは兄のサトシです。

ジュプトルが進化をしてジュカインになりました。え、そういえばジュカインになった時、一時的に技が使えなくなっただけかだつて？まあ確かにそのフラグは折れなかつただけだな…。

でもすぐにジュカインと一緒に話し合いをして技を使えるようになったということだけは言っておく。

何の話し合いか？まあいろいろだいろいろ…

それよりも、最近俺のポケモンたちがよく最速を極めて勝負しているのを見かけるんだ。

だから俺、ちょっと皆と一緒に修行していこうかなと思いました。

「今回の課題はどれだけ速くなれるかです！」

『 っ? 』

俺のポケモンたちがそれぞれ声を出していく。それも皆が一斉に首を傾け、疑問に思っているような表情だ。とりあえず俺は一度手を上げ、皆を静かにさせてから口を開く。

「お前らのスピードは通常より少し速いほうだ。でもこれからはもつと速くなつてもらうと思つてる。それは何故か！つまり敵にどれだけ先制攻撃を与えられるか、攻撃をかわせるかはより速くならないといけないからだ！速くなることにデメリットなどはない！だから俺はよりスピードを出し速くなるための修行をしたいと思う！」

デメリットがないとはどういうことか、つまりポケモンを成長させることに制限がないからだ。カントー地方を旅していた頃は、前世の記憶で成長やレベルに制限があったため、この世界でもあるんだと思つていた。

だが、このポケモン世界では育てていくことでの制限というのはないらしい。例えばレベルでの制限、技の制限、能力の制限等々。

ただしそのかわりどのくらい強くなったのか、今は何レベルなのかというのがはっきりとわからない。分からないため自分たちで確認していかないといけないけれども、それでも制限がないというのはかなり大きな力になる。

今どのくらい成長しているのかが分からない代わりに、能力の制限がないからより速くより強くなることが可能になる。だから俺はバトルでより速くなった方がいいと思っている。

俺の話にヘイガニが一步近づいて話しかけてくる。何か疑問に思い質問したいようだ。

『ヘイヘイヘーイツ?』

「ああ、どのくらい速い方がいいって? そうだな、走るのに本気出したら残像が見える程度っていうのはカッコいいと思わないか?」

『ヘイガツ!』

『ズバズバア!!!』

「だろ? より速くより強く! それが俺のホウエンリーグに向けての目標だ! まだまだお前たちは強くなれる!!」

『ツツ!!!!!!』

それぞれが雄たけびを上げて俺の言葉に頷いてくれた。

そして俺たちの修行は開始された。何故か近くで見えていたハルカとハルカのポケモ

ンも俺と同じように修行をしたいと言っていたけど、まあコンテストでも有効な手だと思っただので一緒にやることになった。

最初に行った修行はお互い技を掛け合って躲していくことや、技を利用して身体を早く移動させたりというやり方などだ。

技を利用するというのは、たとえばジュカインだとでんこうせっかとかソーラービームを掛け合わせて一瞬で移動するようになりたり、ヘイガニだとクラブハンマーで地面をたたき、その反動を利用して速くなったりという感じだ。

ハルカのワカシャモもほのおのうずとでんこうせっかを掛け合わせて瞬時に移動できるとなった。

でもまだまだそれだけだと最速には程遠い。

ポケモン同士の技だけじゃなく、身体も鍛えていかなければいけないと思ったから俺やハルカも一緒になって速さを極めていった。

そのおかげでたびたびバトルすることに速すぎると驚かれたり凄いと聞かれたりするようになった。

俺のポケモンたちはより速く、より強くなったと実感した。

ちなみにピカチュウやジュカインだと修行をした結果、目標であった残像が見える程

度に速くなっていた。そしてハルカのワカシャモも一瞬で移動できるくらい速くなつた。

俺も俺のポケモンたちも、ホウエンリーグ頑張っつていこうぜとやる気満々だ。

…結果といつてはなんだけど…ちよつとやりすぎたかなと思つていたりする。

第十八話く兄妹が久々に電話したく

こんにちはは妹のヒナです。久しぶりに兄から連絡があつたため私はヒトカゲと一緒に走つて電話に出ました。

久々にあつたから暴走していかないかなと思いましたが、兄の様子はあまり変わっていないようですねによりです。

電話の向こうの兄はいつもと変わらない表情をして、ピカチュウと一緒にいた。そして妹の隣にひよつこりと現れたヒトカゲに兄は驚き、笑顔で言う。

「ヒナお前、ヒトカゲもらつたのか！良かったな!!」

「えつとね。オーキド博士にもらつたんじゃないんだ。ミュウからもらつた卵から生まれたの」

「へえ……ミュウにね。3日前に会ったけど元気にしてるかな……つてそのヒトカゲって色違いか？」

「え、3日前にミュウに会ったの!?…まあお兄ちゃんだから仕方ないか。そうだよ色違い。まあ色違いでもそうじゃなくてもヒトカゲはヒトカゲだけどね」

「そうか。ヒナのことよろしくなヒトカゲ」

『カゲカゲッ!』

『ピカピカツチュウ!!』

ヒトカゲが元気に兄に向かって手を振ると、今度は電話の向こうのピカチュウが笑顔で手を振ってくれる。

その様子に私たち兄妹は癒された。

あ、そういえば聞きたいことがあるのを忘れていた。

「お兄ちゃん、最近事件か何か巻き込まれてた?」

「ん?まあいろいろと巻き込まれているけどどうかしたのか?」

兄は首を小さく傾けて聞いてくる。

なるほど、確かに兄はよく事件に巻き込まれているし、どんな事件があったのかも多すぎて覚えきれないぐらいたくさんだろう。だから私に何があったのか、何の事件が原因なのかを聞いてきたのだ。

私はヒトカゲを撫でつつも、小さく口を開いた。

「…最近よくデオキシスやレックウザが遊びに来るんだ」

「ああラルスシテイに遊びに行ったときに会ったな。元気にしてたか？」

「まあね。元氣すぎてよくミュウツーとバトルしてるよ。それでよくフシギダネに怒られてる」

そう、最近また空からホウエン地方の伝説がよく降りてくることがあるのだ。

しかも兄が会って助けた伝説。ちなみにその伝説たちは私とポケモンたちだけにしか姿を見せない。

まあアンノーンは例外なんだけどね…。オーキド博士やケンジさんは伝説が研究所に訪れているということは知らずにいるからちよつと不憫な気もするけど仕方ない。

そして伝説たちはよくオーキド研究所に訪れ、遊んだり話したりバトルをしたりする。

バトルをするのは主にミュウツーだ。ちよつと好戦的なのか、馬鹿なのかはよく分からないけれど、自分以外の伝説を一目見た瞬間に技を放ち喧嘩を売る。

ちなみにコピートのポケモンたちはそんなミュウツーをまるで運動会で頑張っている子供を応援しに来た保護者のように微笑ましく観戦していたりする。

そしてバトルしていると分かったら私とヒトカゲはすぐフシギダネに伝えに行くのだ。デオキシスやレックウザが来る以前はミュウツーが喧嘩を売ってもあまり好戦的でない伝説が多かったため、白熱したバトルにはならずですんでいたのだがデオキシス

達が来てからは違っていた。

：まあミュウはからかかって遊んでいたので別なんだけど。

それでつい最近デオキシスやレックウザが来てしまったせいで、ミュウツーが喧嘩を売ることが増え、本気になった2匹がミュウツーにバトルを挑むという状態になってしまった。

それで前に花畑に被害が出てしまったため、マジギレしたベイリーフにぼっこぼこにされていたこともあったりする。

まあつまり、ミュウツーとのバトルが白熱しすぎるせいで周りの被害が尋常じゃないから、フシギダネに止めてもらっているということだ。

「ああさすがフシギダネだな」

『ピカ!』

「…いや、最近だと喧嘩した瞬間に大きなソーラービームを空に打ってるからね。そのせいでマサラタウンの名物になりかけているからね」

『…カゲ』

そう、伝説たちは自分たちの身はちゃんと隠し、マサラタウンに来ていないように見せるため、フシギダネのソーラービームだけが空に上がるようになってしまったのだ。オーキド博士たちは草と水ポケの喧嘩が白熱しているからなのかと考えているだけだ

し。まさか伝説たちの戦いを止めるためにソーラービームをうっているとは思わないだろう。

私とヒトカゲの微妙な笑みに兄とピカチュウは苦笑していた。

「まあデオキシスやレックウザならともかく、ミュウツーならお前でも止められるだろう？」

「私、お兄ちゃんみたいにしてないから止められるわけないでしょ!」
兄は私のことを何だと思っているんだ。ミュウツーにガチで挑んで勝利している兄と普通の人間である私と比べないでほしいと思う。

ヒトカゲも兄の言葉を信じてしまって私にキラキラした目で期待しているし!

「…ヒトカゲ、本気にしちやダメだよ。私は普通の人間だからね」

『カゲ?カゲカゲッ』

「お前ならできるって言ってるぞ」

「私にはできません。私は普通の人間ですからね」

『ピイカっチュウ』

ヒトカゲもピカチュウも私のことを何だと思っているのだろう…。まったく、私は普通のマサラ人だというのに兄の影響が強すぎて私も同類に見られてしまっているではないか。

そんな不機嫌な私に兄はピカチュウの頭を撫でて言う。

「まあ頑張れ？　ハウエンリーグ終わったら一度そっちに戻るし、俺も協力するから安心しろよ」

「お兄ちゃんの言うことが全然安心できないんだけど!!?」

兄の協力がもしかしたら最悪な状態で終了する可能性がある。

例えば兄と一緒にバトルしたりバトルしたりバトルしたり…。あ、これもう駄目だ。

「できれば穏便に済ませたいからね？　オーキド博士たちは知らないんだからさ。話し合いつつ終わらせようね?」

「おう、話し合いだな」

「話し合い（物理）にしないでよお兄ちゃん!!」

ハウエンリーグが終わった後こっちに帰ってくるのは嬉しいけれど、その後伝説たちはどうなるのかはわからない。まあラティ兄妹にとっては嬉しいと思うけれども…。

兄は楽しそうな表情を浮かべた後、私とヒトカゲに向かって手を振る。

「大丈夫だつて！　じゃあ俺、もう行くから電話切るぜ！」

『ピッカチュウ!!』

『ミュウ!』

「え、うんじゃあね…ってミュウ!!?」

『カゲカゲッ!!』

電話を切る直前、兄とピカチユウの横からミュウの声と姿が見え驚いた。だがすぐに切れてしまったため目の前の画面は真っ暗だ。

「……………と、とりあえずお兄ちゃんはいつものお兄ちゃんだった」

『……………カゲエ』

私とヒトカゲは先ほどの様子を見て考えたことを小さく呟いた。

第十九話　妹がお昼寝にはまってる

こんにちはは妹のヒナです。最近日差しが温かくてよく眠くなってきます。

だから最近ポケモンたちとお昼寝することが多くなりました。

「温かくてお昼寝にちょうどいいね…」

『カゲエ…』

『ガンビイ…』

『ヒノオ…』

『キューン…』

『全くその通りだな…』

あ、何か聞きなれない声が出たと思ったでしょ。今私はヒトカゲと兄のポケモンであるカビゴンとヒノアラシ、そして伝説であるラティアスやルギアと共にオーキド研究所

の少しだけ大きな広場でお昼寝しようとしています。

直接日光が当たらず、日の光が木々に当たってちょうどいい感じに温かいこの場所はよくカビゴンやヒノアラシのお昼寝スポットになっているのです。

私やヒトカゲも一緒に眠ろうとヒノアラシが誘ってくれたので今に至ります。あ、ちなみにラティアスは私やヒトカゲと遊んでいた時に誘われたからついてきてくれて、ルギアは知りません。

広場についていたらルギアがカビゴンと一緒に横になってびっくりしたということだけ言っておく。

「ねえ、ルギアがここで寝てたら人に見つかったりしない？大丈夫なの？」

『ああその点では安心しろ優れたる操り人の妹よ。私を何だと思っている』

「……うん伝説のポケモンだよ。心配とかする必要なかったね」

ラティアスはともかく、ルギアの大きな身体は人に見つかりやすいと思ったんだけど、ずいぶんと自信満々な声を聞いたら安心した。なるほど私の考えたことは杞憂だったか。

『ガンビィ……！』

『ああ騒がしくしてしまったな。そろそろ寝ようか』

「ごめんねカビゴン。おやすみなさい」

『…キューン』

カビゴンが少しだけ不機嫌な表情を浮かべ私たちを見たため、お喋りしすぎたと自覚する。気がつけば私の両隣にいるヒトカゲとヒノアラシがすやすやと眠っていた。私とルギアは顔を見合わせ、眠りにつくため目を閉じた。

木漏れ日と暖かな空気、そしてポケモンたちに囲まれて気持ちよく眠れそうだ――

—————
ドオオオオオオツツツ!!!

『ふんツそれぐらいで俺を倒せると思ったかッ!!』

『ギュルアアアアアアアアアアアツツツ!!!』

『ツツツ—————!!!』

…うんすごく騒がしい。あの3匹本当に煩すぎる。

今の騒音と声は絶対にミュウツ、レックウザ、デオキシスに違いない。どうしよう、この広場の近くでバトルしてるらしくちよつとだけ目を開けると空が赤くなったり黄色くなったりしていた。伝説同士のバトルが白熱しているとよく見える光景が広がっていたのだ。これで世界の崩壊とかなったら本当に笑えない。まあ私としてはそんなことどうでもいい。

せつかくお昼寝をしていたというのに何故起こす。

ようやく眠れそうだといいのになんてことしてくれるんだまったく。

安眠を邪魔したことで私たちは怒り、勢いよく立ち上がりバトルしているのであろう3匹のもとへ向かって走って行った。

「うるさ——い!!!」

『ガンビイイツツ!!!』

『ヒノ…ヒノオオオオオオ!!!』

『キュ——ンツツ!!!』

『カゲエエエエ!!!』

『ああ、これでようやく静かになるだろうな…』

ミュウツたちに何をしたのかは眠すぎたことと怒っていたことであまり覚えてい

ない。ただその後ちゃんと皆で一緒に眠っていたからたぶんバトルを止めたのだと思う。

その後、しばらくの間は3匹はおとなしくしていて静かになったようだった。

だが、懲りないミユウツウが再び喧嘩を売り3匹ともどもフシギダネに吹っ飛ばされていたのは記憶に新しい。

第二十話～兄がロケット団率いて襲撃した～

こんにちは兄のサトシです。最近アクア団やマグマ団によく会います。しかも悪さばかりしていて仲間やピカチュウたちにも被害が出ているため黙っておくことができなくなりました。

「だから協力しろロケット団!!」

「ちよっ!?!」

「何だいきなり!?!」

『ジャリボーイどういう意味なのニャ!!!?』

ホウエン地方のアクア団とマグマ団をどうにかするためロケット団のアジトにやってきました。

え、ロケット団はカントー地方にあるはずなのにどうやってきたのかだって? たまた

ま通りがかったレックウザに乗せてもらって来ましたよ。あとハルカたちはタケシに任せてちよつと留守番してもらってます。まあそんな感じで…。

「早くサカキに会わせろ、ゴラア!!!」

『ピカツチュウツツ!!!』

『ぐええ！お、落ち着くニヤ!!』

「すぐお呼びしてくるから待ってろ!!!」

ニヤースの身体ごと揺らしてサカキに会わせろと言う俺。ぶつちやけブチギレてます。

ピカチュウも俺と同じくキレていて、電撃が部屋の中を飛び交い、たまに人を痺れさせたりしている。

そして少し時間が経った頃、サカキがゆっくりとペルシアンを連れて部屋にやつてきた。

「久しぶりだなサトシ」

「おうそうだな。まあ挨拶はどうでもいいから俺と一緒にホウエン地方へ行くぞ」

爽やかに笑顔で言ったつもりだったが、何故かサカキの隣にいたペルシアンがビビって後ろに隠れ、壁際にいた団員たちが悲鳴を上げていた解せぬ。

サカキは静かに俺の目を見て、何の意図があるのかを問いかけてくる。

「私たちはお前に変えられた。サトシ、お前は悪ではなく正義という意味での生き方を教えた恩人だ」

「…ああそうだな」

まあなんというか、俺がやった方法は取引に近くて、そして洗脳にも近いやり方だった。まずこいつらが目論んでいるのは悪役によく似合う金儲けだったからだ。

ポケモンを金儲けに利用をし、世界征服をたくらむというやり方を俺は全部変えていった。世界征服は普通に金儲けで権力でも作ればいざろと力説をしてやり、そして商売の取引をして、悪いことをさせないようにしていっただけだ。世界にはポケモンが多いのだから、ポケモンを悪事に利用するのではなく、逆にポケモンのためになる金儲けのやり方を考えていってもらうと考えた。

金儲けをしたいというのなら悪さはせずに俺の言うとおりにしろと…まあそんなことを言つてサカキに殴りかかったような気がする。

やり方がちよつと乱暴だったせいもあるが、それでもサカキは俺のやり方を気に入り、悪いことはしないでただ普通に商売をして金儲けするようになった。

商売というのはまあホウエン地方やシンオウ地方にあつてカントー地方にはないポケモンのお菓子や旅で必需品の品物の開発等々…。あと前世であつた乗り物なども考

え、たとえばスケボーや一輪車なども作るようになっていった。そして正義のロケット団としてまるでポケモンレンジャーのように弱いポケモンや困っている人たちを助けていくようになった。

そのおかげか商品はヒットし、正義として助けていったことでより好評価をもらい、金儲けは順調に進んでいるらしい。そしてそれらを考えた俺をサカキやロケット団は全員が恩人だという。ただし実力行使をしたこともあつてたまに怯えられるけれども…。

あとミュウに監視役を頼んでいるため、もしも悪役に戻り、悪さをした場合はすぐさま情報が伝わりいろいろと制裁的にボッコにしてやるつもりだ。

まあそれはどうでもいいか。

サカキは今俺に何をしたいのかを質問しているのだからな。

「ホウエン地方で以前のお前らと同じように悪さをしている奴らがいる」

「…ほう」

俺はホウエン地方で起きている所行について話した。どんな悪さをし、そいつらをどうにかしてやりたいということも。

だがサカキの優先すべきことは金儲け、ロケット団の維持だ。だから他人のことなど

「どうでも良く、まず利益があるのかどうかを聞いてくる。」

「…それで、私たちにどのようなメリットがあるというのかね?」

「あるに決まってるだろ。まずアクア団とマグマ団をどうにかしてしまえばハウエン地方での評価を得られるし商売ができるようになる」

「ロケット団のハウエン進出というわけか。だがカントー地方での現状維持が精一杯だというのにハウエンまで進出する必要はないと思うが?」

「いや、アクア団やマグマ団という人員をそのままハウエン地方で働かせればいい」

「…それは必要のない危険が伴うだけだろう。そのアクア団やマグマ団という危険因子を取り込むということで問題が起きるデメリットが多すぎる。サトシ、お前の考えを実行する意味がない」

「いやそれは絶対にありえない。あいつらはそれぞれ海と陸を生み出していきたくて思ってるから悪さをしているんだ。だから話し合いをきちんとすれば、分かってくれるはずだ。サカキ、お前が俺の言うことを聞いたときのようにな」

そう、ロケット団も以前は悪さ以外のことを考えず、ただひたすら悪役として行動してきたのだ。だから俺が話し合いをして変えていった。変わらないと思っていたロケット団を、正義へと変貌させていったのだ。だから俺はアクア団とマグマ団もロケット団と同じように変わると信じている。サカキも以前のロケット団と今の違いを

思い出したのだろう。少しだけ考えた後、小さく口を開く。

「……………なるほどな。面白い」

サカキは興味深いという表情を浮かべ、俺に微笑んできた。ホウエン進出により、もっと大きく金儲けができると分かったのだろう。その魅力的な取引にサカキは実行したいという考えを持ち、小さく笑みを浮かべている。

…まあデメリット等々についてはアクア団やマグマ団に何か問題があれば俺が直々に向いてやるつもりだから、大丈夫だと思おうし、悪さはさせないけどな。

そしてサカキの笑みを見て、俺は商談成立なのだということを理解し、椅子から立ち上がって叫んだ。

「じゃあ行くこうか！ホウエン地方へ…アクア団とマグマ団を襲撃するぞ!!!」

『ピッカア!!!』

.....

「…それで？」

「結果としてアクア団とマグマ団はロケット団の傘下に入ることになった」
「お兄ちゃんのせいでロケット団の規模がどんどん大きくなってよ!!!?」
「!!!」

第二十一話　時をかけてやってきた

こんにちはは妹のヒナです。よくヒトカゲと一緒にきのみ集めに出かけています。ワニノコやカビゴンに食べられないように持ち帰るのが大変ですがいい運動になります。

『カゲ…?』

「うん?どうしたのヒトカゲ?」

『カゲカゲエ!!』

「うわッ!」

ヒトカゲが何か見つけたらしく、私を引っぱり森の奥へと歩いて行く。でも前を見て何も見当たらないし…もしかしたら音か何か聞こえたのかな?

しばらくすると草木が生い茂り、まるでヨルノズクと遊ぶため夜に迷い込んだ時のような森の奥深くの場所に來たみたいだった。

『ビィー!』

「…あれ、セレビィ?もしかしてヒトカゲが見つけたのってセレビィ?」

『カゲカゲッ』

ヒトカゲがその通りだと頷いたため私はまたセレビィの方を見上げる。セレビィは私の身体よりも上の方にいたため見上げないと見れないからだ。

だが一度目を離れた瞬間セレビィが2匹に増えていた。

『ビィッ!』

『レビィィィ!!』

「どういふことなの!?!」

『カゲッ?!』

何故か2匹に増えたセレビィに私とヒトカゲは驚く。驚いて思わず私とヒトカゲが顔を見合わせ、またセレビィを見ると今度は3匹に増えていた。どうやら気のせいじゃなかったらしい。しかも今度は周りが少しづつ光りだし、1匹、また1匹と数えきれないほどセレビィの群れで私たちの周りに溢れていった。

『レビィィー!』

「…どうしたのセレビィ?もしかして皆で集会かなにかやるの?」

まるで人が集まってお祭りでも開いているか、集会を行って会議しているように見え

思わず聞いてしまった。ヒトカゲも疑問に思っているのか私の手を掴みながらもセレビイを見つめている。だがセレビイは何も言わず、ただ私たちの周りで笑っているだけだった。

『レッビイ!!』

「眩しっ!!」

『カゲツ!!』

セレビイたちが私とヒトカゲの周りで踊っているような仕草をしながら光り輝いていく。集団で私たちの周りを飛びながら光り輝くのに見覚えがあった。そう、まるで未来の兄と出会った時のような光景にもしかしたらときわたりでもしているのではないかと思い、手を掴んでいるヒトカゲを抱き寄せ眩しさから目を瞑った。

そしてしばらくすると眩しさが消え、私とヒトカゲは恐る恐る目を開けてみた。すると目の前に広がったのは大きな青色のポケモンだった。

「ル……ルカリオ?」

『カゲエ?』

ルカリオが目を閉じて立っている姿が私たちの目の前に広がっていた。いつの間にかセレイビイ達がいなくなっていたため、もしかしたらこのルカリオをときわたりで連れて行こうとしたのかもしれないと思った。

そして目の前にいるルカリオも恐る恐る目を開けて周りを確かめ、私とヒトカゲを見た。

『…(ハ)は?』

「喋った!?!」

『カゲカゲツ!?!』

どうやらこの目の前にいるルカリオは喋れるらしい。ああいや、ルギアやミュウツーがやっているテレパシーに似ているからそれかもしれない。でも伝説以外が喋るのは久々に見た気がする。あ、ちなみに最初はあのロケット団のニャースだったけどね。

ルカリオは座り込んでいる私たちの近くにやってきて、ゆっくりと膝をついて言う。

『サトシという者を知っているか?』

「サトシって…私のお兄ちゃんのこと? お兄ちゃんの知り合い?」

『兄!?!: そうか、お前がサトシの妹か。ああ、前に一度助けられたことがある』

「え、お兄ちゃん私のこと喋ったりしてたの!?! どうか助けられたって…」

原作でのルカリオさんですわわかりました。兄からは電話などが来ていても、旅で何

があつたのかはあまり教えてくれない。私がしつこく話を聞いてようやく口を開くという感じだったからだ。でも事件だけは絶対に遭遇するから何かあるとは思つたけどまさかオールドラン城に行つていたとは思わなかつた。

「もしかしてお兄ちゃんに会いにきたの？でもお兄ちゃん今ホウエン地方に旅してていないよ？」

『カゲツ？』

『：いや、大丈夫だ。アーロン様にこちらで少し休んではどうかと言われたからわざわざ会いに行く必要はない：それにこちらにいればいざサトシも帰ってくるだろう？』

「え、どういうこと？」

アーロンという人は確かこの目の前にいるルカリオの師匠だった気がする。けれど何で休んではどうかして話になるんだ？そして何でマサラタウンに来たんだろう？

ちよつとだけ首を傾けていると、ルカリオがフツと笑い、私とヒトカゲの頭を撫でてくれた。

『しばらくの間、ここに世話になるということだ』

「あ、よろしくお願ひします？」

『カゲカゲ…？』

頭を撫でた後、ルカリオが私とヒトカゲに握手を求めてきたから私たちもそれに応じ

る。もしかしたらアーロンさんはルカリオに未来での世界を楽しんでほしいと思ったのかもしれない。アーロンさんが何を考えているのかはわからないし、何故ときわたりをしてきたのかもわからない。

でも世話になるということはしばらくの間私たちと一緒にいられるということだ。

私はヒトカゲとお互いの顔を見た後、一緒にルカリオに笑いかけた。まずはこの目の前にいるルカリオと一緒にやらなければいけないことがある。

「…じゃあるルカリオが来た記念に一緒にきのみパーティーしようよ！皆も誘って盛大に祝おう!!」

『カゲカゲッ!』

『…ああ、ありがとう』

第二十二話く兄が帰ってきたらしいく

こんにちはは妹のヒナです。久しぶりに兄がマサラタウンに帰ってくるようです。え、ホウエンリーグがどうなったかって？兄のことですからからもう想像通りですよハイ。それで久々に兄に会えるからちよつとドキドキしています。

あ、この場合ドキドキというのは嬉しさ半分怖さ半分ですよ。

『…ヒナ、お前はサトシの妹だろう。何故サトシが帰ることに怖がらなければいけない？』

「うるさいミュウツー心読むな」

『……………』

あ、そう言えば少し前に来たルカリオがフシギダネの手伝いをするようになってました。もちろんオーキド博士たちにも挨拶をして、全員が歓迎してくれましたよ。

手伝いといっても、ミュウツーたちのバトルを止めることはもちろん、博士たちのお手伝いを積極的に行っています。…これじゃあ休んでいるのかなとも思うけどね。でもルカリオ自身は毎日満喫しているようです。

あとルカリオがすることは手伝いだけではありません。

ルカリオは母から作られたお菓子を食べて、あまりの美味しさに驚き、料理の才能に目覚めました。

最近ではチョコレートケーキを作ることにはまっています。そして母の手料理を作りたいと弟子入りして、今ではケーキもポケモン用と人間用で分けて作るという細かな力をつけていましたよ。

もはやルカリオシエフと呼んだ方がいいくらいいろいろなお菓子や料理を作り、そして今回兄が帰るということで母とともに豪華な食事を作ろうと張り切っています。

…まあそんなわけで。

「お兄ちゃん帰ってこないかなー?」

『カゲカゲエ?』

『まだ帰っては来ないだろう。予定の時間よりも早すぎる』

「でもそろそろ帰ってきそうな気がするよ…。」というか、ミュウツー今日はおとなしい

ね？いつもならとつくに他のポケモンたちと喧嘩しに行つてフシギダネに説教されてる頃なのに」

『…ふん。今日のところは勘弁してやるさ』

なるほど、もしかしたら兄に会いたくて今日は暴れないのかもしれない。それかもしれない。兄とバトルしたくてしかたないかもしれない…かも？私とヒトカゲはじつとミュウツウを見つめて何を考えているのか視線で問いかける。だがミュウツウは気にせずマサラタウンを見下ろすだけだった。

『…あ、誰か来たみたいだな』

「え!?…つてここからじゃ見えない」

『カゲツ!?カゲカゲ!!』

「ヒトカゲは見えるの?…やっぱりポケモンの視力つて凄いなだね」

今私たちがいる場所は大樹の枝の上。ミュウツウのサイコネシスで上まで登つてくれて、マサラタウンがよく見渡せる場所に來ていたりする。

ヒトカゲが指差した場所に目を凝らしてみると誰かが歩いているのが見えた。でも顔などは見えずやっぱりわからないままだ。

「うーん…ねえだれか分かる?」

『カゲー…カゲエ』

『いや、サトシじゃないことは確かだ。でもオーキド研究所の中に入っていったのは見えたぞ』

「え、じゃあお客さんかな？もしかしたらお兄ちゃんとの知り合いかもしれないし…よしミュウツーちよつとおろして！」

『カゲ！』

『まったく…仕方ないな』

私の頼みを聞いたミュウツーは再びサイコネシスで地面へ降ろしてくれた。

地面にたどり着くと周りは樹海のような木々が立っているため、どちらに行けばいいのかわからなくなる。おろおろしている私たちに不安になったのか、先ほどまで大樹の枝の上にいたミュウツーが地面まで降りてきてくれた。

『…こつちだ』

「あ、うん。ありがとうミュウツー」

『カゲツ！』

『ああ…だが俺は近くまで案内するだけだからな。人の前に姿を現すつもりはない』

「分かった！じゃあお兄ちゃんきたら伝えるね！」

『……そうか』

そして私たちがよく歩いている道まで案内したミュウツーはすぐに森の奥深くまで

戻って行ってしまった。私とヒトカゲは戻っていくミユウツーに手を振ってからオーキド研究所まで走り出した。

チャイムを鳴らしてケンジさんの中にに入れてもらい、部屋に入るとテレビなどで見たことのあるオダマキ博士がそこにいた。初めて見るハウエン地方の博士だから思わず緊張してしまった。

「あれ、君は？」

「こ、こんにちは……」

「サトシの妹のヒナです。ヒナちゃん、サトシならもう家に帰ってる頃だと思うよ」

「え!? お兄ちゃん家に帰ってきてるの!?!」

『カゲエ!?!』

「色違いのヒトカゲ!?!」

さつきまで大樹で見えていた時は気づかなかったけど帰ってきているらしい。もしかしたらオダマキ博士が研究所に見えたから気をとられて家に帰ってたのに気がつかなかったのかな？

そう思っって驚いているとオダマキ博士が私の後ろにいた色違いのヒトカゲに感動し近づいてヒトカゲを抱き上げていた。

『カゲツ…カゲエエ!!』

「うわごめんよ！驚かすつもりはなかったんだ！」

「ああほらヒトカゲ、大丈夫だからね」

『…カゲ?』

「うん。大丈夫だよ」

ヒトカゲは興奮していたオダマキ博士にビックリして泣きだし、ひのこを出して攻撃してしまった。すぐさまオダマキ博士の手から降ろされたヒトカゲだったが、それでも泣いて怯え私の手を掴んでくる。

私はヒトカゲを抱きしめて大丈夫だという意味で背中を優しく叩き落ち着かせる。

その光景を見たオーキド博士たちは感嘆とした声を上げていた。

「さすがヒナじやな…ほれ、サトシのもとに行かなくて良いのか?」

「あ、行きます。ごめんなさい押しかけて！行こうヒトカゲ！」

『カゲカゲツ!!』

私とヒトカゲは一度オーキド博士たちにお辞儀をしてから外に出て森の中に入る。

森の出入り口で私とヒトカゲは大きな声を出して叫んだ。

「すうう…ミユウツウウ!!みんなああ!!!お兄ちゃんが帰ってきたんだってえええ

!!!」

『カゲカアアアゲエエエツツ!!!』
『っつ——』

森の中から様々なポケモンの声がするからたぶん伝わったことだろう。まあミュウツーに伝わればいいかなと思って叫んだだけだし、もしも聞こえていなくても、お兄ちゃんのことだから一度くらいはオーキド研究所に来るだろうから大丈夫だと思う。

そう納得してからヒトカゲと共に家まで一気に走り出した。

『…ヒナ』

「うわつとと！あれルカリオ!?家にいたんじゃなかったの?」

『カゲエ?』

『料理に使う調味料が足りなかったから買って帰る途中だ』

「あ、じゃあ一緒に帰ろう!お兄ちゃんもう帰ってきてるみたいだからさ!」

『そうか、サトシが帰ってきたのか…!』

道の途中でルカリオに会い、私とヒトカゲは急停止して話しかけた。

ルカリオの肩からぶら下げた青色のシヨルダーバックがあるため、おそらくその中に足りないと言っていた調味料があるのだろう。

そして兄が帰ってきているという言葉にルカリオは嬉しそうに笑みを浮かべていた。

私とヒトカゲはお互い笑い合ってそれぞれルカリオの空いている手を掴み、歩き出した。

真ん中はルカリオで左右には私とヒトカゲがいる。それはまるで家族みたいな状態だなど私は考え、笑みを浮かべた。

「お兄ちゃんもう家でのんびりしてるかな？ままと旅のこと話してるかな？」

『さあ…帰ってから確認すればいいだろう』

『カゲカツ！』

「そうだね。早く帰って確認しなきゃね！」

ちよつとだけ気持ちが悪足になりつつも、私たちは家にいるであろう兄のもとへ向かって行った。

第二十三話　妹は兄と再会した

こんにちは妹のヒナです。ただいま家に帰る途中の道です。

一緒に帰っているのはルカリオとヒトカゲ。手をつないで家に向かっているのです。そしてようやく家に到着し、扉の鍵を開けて玄関へ。

「お兄ちゃん帰ってきてるのー!？」

『カゲカア!?!』

玄関でいてもたってもいられずに大きな声を出して問いかける。ルカリオが焦らなくともいいと言ってくれたがやつぱり気になるんだし仕方ないでしょ。

すると部屋からカスミさんが出てきたため私たちはそちらへ向かう。カスミさんは私とヒトカゲ、そしてルカリオを見てにっこりと笑ってくれた。

「あれヒナちゃん！それにヒトカゲにルカリオじゃない！久しぶりね、歓迎会以来よね」

「あ、カスミさんこんにちはお久しぶりです！お兄ちゃん帰ってきてますか！」

「ええちゃんど帰ってきてるわよ？ほらあつちに…」

「うわあ色違いのヒトカゲだ!!…ってルカリオがいる!？」

「え…」

兄ではなく知らない少年の声が聞こえてきたため、カスミさんが出てきた部屋の奥を見る。するとそこにいたのはメガネをかけた私より少し年上の少年が座っていたはずのソファから立ち上がり、驚いたような表情を浮かべてこちらを見ていた。

「えっと、こんにちは初めまして?」

「あ、うん初めまして。僕マサトっていうんだ!ねえそのヒトカゲとルカリオって君のポケモン?あ、でもトレーナーじゃないよね…じゃあサトシのポケモン!？」

マサトという少年はおそらく兄と共に旅をしてきた仲間なのだろう。私たちに近づき興奮した様子で話しかけてくる。だがどうやら今私の後ろにいるポケモンに夢中らしい。まあ色違いのヒトカゲとここらでは見かけないルカリオじゃあ仕方ないかな。しかもルカリオは兄と一度会ったことがあるはずなのだが声を出していないため同じポケモンだとは分かっていないみたいだ。私とその質問に答えようとしたら懐かしい声が聞こえてきた。

「マサト、ヒトカゲはヒナのポケモンだけどルカリオは俺たちと一度ちゃんとあつたこ

とがあるぞ。なあルカリオ？」

『ピカピイカツチュウ!』

『ああ。そうだな、サトシ、ピカチュウ』

「え、わあ!あの時のルカリオ!!!え、でもあのはじまりの樹で消えちゃったって思ってた
…」

『いや、あの後アーロン様のいる時代まで飛ばされ、そしてアーロン様が少しは休んだら
どうかと言われセレビイのときわたりでこちらまできたんだ』

「え、なんだかすごいや…時代往復しちゃったんだ…」

マサトはルカリオがこちらに來た経緯を聞いて驚いているようだ。ルカリオはバツクを部屋の奥にやってきた母に渡して、マサトと兄に挨拶をしてから奥へ行く。おそらく料理を作りに行くのだろう。

そんな1人と1匹をちらりと見つつも、私とヒトカゲは兄に向かって走って突撃した。

「お兄ちゃん!」

『カゲエ!』

「うわつとツ!久しぶりだなヒナ!」

『ピカピイカ!』

いつもテレビ電話などでしかちやんと話ができなかった兄に久々に会えたため、私とヒトカゲは兄に勢いよく抱きついた。そんな私たちに兄は笑いながらも抱きしめ、ピカチュウも私とヒトカゲの頭を撫でて久しぶりだねと挨拶してくれる。

そして兄妹の久々のスキンシップにカスミさんとマサトが笑って近づいてきた。

「久々のご対面ってやつね？」

「サトシ、妹に会えた感想は？」

「そうだな。とりあえずいろいろと話したいことが山ほどあるかな？」

「…驚かせる話じゃなかったら聞いてあげるよ」

『ピッカツチュウ！』

『カゲカゲエ！』

兄の話には興味があるけれども、まずは帰ってきたことへ挨拶しなければならぬだろう。

「お兄ちゃんおかえりなさい！」

「おう、ただいま」

第二十四話く兄はいつまでも兄だったく

こんには兄のサトシです。現在マサラタウンに帰ってきています。一度家に帰ってきてから話をして、そうしたら夜遅くになっていたため、明日オーキド研究所に行くことになりました。カスミとマサトは家に泊まって、次の日の朝からオーキド研究所に行き、オダマキ博士に挨拶しに行くみたいです。え、俺はいかないのかって？…まあ俺たちの今いる場所が分かればすぐ気がつくと思うけどな。

今いる場所はオーキド研究所の森の奥深く。俺の近くにはピカチュウとヒナ、そしてルカリオがいる。

そして目の前にいるのはバトルが白熱しすぎて空が白黒になっている状態。もちろんそこにいたのはミュウツーとレックウザとデオキシスの3匹だ。ミュウツーがお兄ちゃんのこと待ってるよ！と妹に言われたため、先にそちらに向かったのだが、何故かバトルをして盛り上がっていた。いつもならフシギダネが止めているらしいが現在はどこかに行っていていないみたいだ。

『はあ…まったく…』

「いつものことすぎてもうなんとも言えないよね…」

『カゲカゲエ…』

よくこのバトルを見ている妹とヒトカゲ、ルカリオはため息をついて遠い目になっていた。

確かにバトル白熱しすぎて周りに被害出る状況だよなこれ…よし。

「ちよつと行って止めてくる」

「え、お兄ちゃん!？」

妹が驚いたような声を出したが俺は気にせず3匹のもとへダツシユする。ピカチュウはもうその時俺の考えが分かったらしくすぐに肩から降りてくれた。

そして俺はミュウツーとデオキシスがガチで殴り合いしているような状態の場所まで大きくジャンプして近づいた。

『なツサトシ!?!』

『ツツ——!!?!』

「よう久しぶり！そんでもってやめろお前ら!!」

『グハツ!!』

『ツ——!!』

俺はポケモンが繰り出すスカイアッパーのごとくミュウツーとデオキシスに思いつきり殴ってふっ飛ばした。

そしてその様子を見ていたレックウザがびっくりしつつもバトルを中断し、恐る恐る俺に近づいてきたため攻撃しようと思っていたがやめる。だが警告の意味を込めて言うっておかないとな。

「レックウザ…お前もあいつらと戦ったりしないよな？熱中しすぎて周りに被害出すよ
うなことなんてする気はないよな…なあ？」

『ツツ?!…ギャオオオオオオ!!』

レックウザは俺の言葉にビビりすぐに顔を横に振ってもうバトルしない周りに被害
出さないと涙ながらに言うてきた。それを見て俺は満足する。そして後ろを振り向き、
妹たちの方へ近づく。妹たちは呆れたような表情をして俺を見ていた。

「お兄ちゃん…もう人としての何かを失ってる気がするよ!!伝説脅迫しちゃダメだつて
ば!!!」

『カゲエ…』

『ああでも…サトシらしい行動だと思うがな…』

『ピカッチュウ』

「…いやいや俺、普通に人間だからな」

妹とヒトカゲが何故か嘆いていて、ルカリオとピカチュウが俺らしいと頷いている。俺はそれを見て頬をかきつつ、妹の頭を撫でる。すると妹は少しは落ち着いたのか、小さくため息をついてレックウザ達の方を見た。

「ごめんねレックウザにデオキシス…お兄ちゃんがこんなだからさ…」

『ギャオオオ…』

『ツツ……』

『…う…おいヒナ、俺には何か言葉はないのか…』

「おう、ミュウツー。ヒナの言葉ならないけど俺にならあるぜ？」

ヒナのもとへ来たミュウツーの肩を掴み、爽やかな笑みで言ったつもりだったが、何故かミュウツーではなくデオキシスとレックウザが怯え震えてしまったみたいだ。…俺ってそんなに怖い笑顔してるのかな。

そしてそんな俺に対し、ルカリオがため息をついて言ってくる。

『もうやめておけ。それ以上の暴走はヒナの教育に悪い』

「え、ルカリオお前いつからヒナの保護者になったんだ…」

妹のことをちゃんと考えてくれているルカリオには嬉しいと思うけれども、出会った頃と比べてトゲというものがなくなっていてある意味で彼のギャップに驚いた。ピカチュウは俺の肩につかまってどんまい諦めろと慰めてくれるようだ。

「…ルカリオ、私なら大丈夫だよ。これもういつも通りお兄ちゃんが暴走しているだけだからねハハハハハ」

『カゲカゲっ!』

『見ろ！お前が人としてあるまじき行動をとっているせいで幼いヒナが現実逃避しているだろう！すこしは自重しろ!!』

「お、おう…？でも俺これでも通りだけど…？」

妹が遠い目をして笑っているのをヒトカゲとルカリオが抱きしめたり頭を撫でたりして落ち着かせている。そして何故か俺に矛先を向けて怒鳴ってくるため自重って何を？と逆に聞いてしまった。

そんな様子にミュウツーが俺の背を叩き、言う。

『お前の力はもう人間から程遠いということだ。諦めろ』

『ギャオオオオオオ』

『ツツ———』

「どういう意味だよお前ら」

慰めているのかフォローしているのか、それとも貶しているのかよく分からない言葉にもう一度締めようかと思ってしまう。だがここで行動したらおそらくルカリオが怒ってなにか言うため、止めておくことにした。

第二十五話　妹が女子会した

こんにちは妹のヒナです。兄がバトルフロンティアに向けて旅立ちました。

まあ旅立つ間にいろいろと大変でしたよ…。主に伝説や兄のポケモンたちが…。

例えば、ベイリーフと一緒に作り上げた大きな花畑を見せて兄にのしかかりをして、フシギダネ達にそれぞれ再会の挨拶という名の攻撃をされていたり、ラティアスやラティオスに空まで攫われていたりルギアに話しかけられてたり…。おそらくまた兄らしい暴走か何かをしそうな気がします。

『ダネ…ダネダネ?』

「うん、よろしくね。ハルカさんのフシギダネ」

『カゲカゲエ!!』

『ダネダネ』

そしてハルカさんが兄のフシギダネを見てこちらに置いていったフシギダネがいま

す。ハルカさんのフシギダネは女の子らしくて可愛らしいです。あ、そういえばハルカさん新人用のゼニガメに気に入られて無事ゲットしてましたよ。旅立つときに手を振って頑張れと応援してきました。

今日はベイリーフやラティアス、そして私とヒトカゲで花畑まで遊びに来て気分はまるで女子会です。…あ、もしかして女子会と聞いてヒトカゲの性別が気になったりする？そう、ヒトカゲの性別はメスです。よく泣いちゃったりするところがあって女の子らしくて私と一緒に性別なのです。

「今日のお菓子は何だろうな？」

『カゲカゲ！』

『ダネダネエー！』

『ベイバーーー！』

『キューン！』

花畑でちよつとした茶会を開いています。小さなシートの上にお菓子の入っている荷物を置き、その中身を取り出す。お菓子はもちろん母とルカリオ特製のケーキやクッキー。

母とルカリオが頑張つて人とポケモンの両方が食べられるように作つたらしい。取

り出されたケーキとクッキーは見た目だけでも本当に美味しそうだ。ケーキはモモンの実などで味付けされてるらしく、ショートケーキの果物たっぷりな感じがとても美味しそう。そしてクッキーは形がポケモンになってて、いろんな形があります。おそらくルカリオが形を考えたのか、今日一緒に集まったヒトカゲ、フシギダネ、ベイリーフにラティアスのクッキーもちゃんとあつて可愛いです。あ、この人型はたぶん私なのかな？

お菓子を見て私たちは喜びの声を上げ、一緒になつていただきますと言う。

「じゃあ……いっただつきまーす！」

『カゲエ！』

『ダネフシ！』

『ベイリー！』

『キューン！』

『ゼニイ！』

『ミュウ！』

『ヘラクロー！』

『ゴースットウ！』

「ん？なんか他の声も聞こえたような…」

私たち以外のポケモンの声が聞こえたと思い、気のせいかなと思つたが後ろからゼニガメの手がお菓子をとうろとしたのが見えたため気のせいではないと理解する。そしてゼニガメがお菓子をとうろとしたところをベイリーフがつるのムチで阻止して怒る。

『バイバイバイ!!!』

『ゼニガツ?!…』

「うーんでも、ゼニガメ達の間もありそうなくらいたくさんあるし…大丈夫だと思おうよ
ベイリーフ」

『キューン』

『カゲエ』

ベイリーフが怒つたことにゼニガメが大変シヨックだというような表情を浮かべたため、私は慌てて言う。今回作られたお菓子は私たちでも食べられるかわからないほどたくさんあるため、ゼニガメ達が来ても大丈夫だと思ふ。それにラティアスとヒトカゲも賛成なのか一緒になって頷いて、ゼニガメ達が座れるようにしていた。

そういえば何でゼニガメがいるんだらうって思つてたかな。ただいまゼニガメは休暇でオーキド研究所に戻ってきたのです。もちろん兄に会うために戻つてこようとしたのに、兄がすぐ旅立ってしまったため、すれ違いになり悲しんだのは昨日のことです。

た。ああでもバトルフロンティアだしいつか呼ばれると思うよだからどんまいゼニガメ。

『ベーイ…ベイ!』

『ゼーニイ!!!』

『ミュ…! ミュ?』

『…ダネダネツ』

『ゴースット!』

『ミューウ!!』

ミュウがゼニガメだけでなく自分たちも食べていいか聞いてきたので、ハルカさんのフシギダネが優雅に良いよと言ってほほ笑む。それにミュウ達は大喜びで座ろうと—

——
つて

「ちよつとヘラクロス蜜吸つちや駄目だよ?!?」

『ヘラクロット?』

『ダーネエ…ダネフツシイイ!!!』

『ヘラクロオオツツ!!』

ヘラクロスがケーキやクツキーを食べるのではなく、ハルカさんのフシギダネに近づいて背中の蜜を吸い取ろうとしていたので私は慌てて叫んだ。だがハルカさんのフシ

ギダネがそれに気づき兄のフシギダネに教わったソーラービームで一気に吹き飛ばしてしまおう。それを見た私たちは茫然としてしまった。

「…皆、ケーキとクッキー以外は食べないようにね？あと暴走しないように」

『ダネダーネ!!』

『バイバイバイ!!』

『カゲエ!』

『キューン!』

『ゼ、ゼニガツ…』

『ミューウ…』

『ゴース…トウ…』

まあこんな感じで、今日の女子会ならぬお菓子会は男子たちがちよつとだけ怯えながらも食べることができたのだった。…あれ、ミユウって男子でいいのかな？まあいいか。

そしてしばらくすると兄のポケモンがまたやってきて、今度はお菓子戦争にまで突入し、最後には伝説たちのバトルによって木端微塵になり、兄のフシギダネに全員説教を食らうのだった。

第二十六話く兄と蒼海の王子とフラグ回避？く

こんにちは兄のサトシです。バトルフロンティアに向けて旅に出ているんですが、何やらそれどころじゃない様子です。

ロケット団を変えていったため、原作通りの騒動は起きないはずだったのに、今回は何故か偶然卵をみた関わり合いのない知らない悪党が来て卵を盗もうとしたり情報を教えてしまったせいで、ポケモンレンジャーのことにマナフィの卵について必然的に知ることになってしまった。

マナフィについては前世で見た原作の知識なんかで知っていたし、主にロケット団がきっかけで問題が大きくなっていったはずだったから大丈夫だと思っただけだな…。それにやってきた最初の悪党は吹っ飛ばすことができたし。

だが次にやってきたのはアクア団なんかに出てきそうな海賊の恰好をしたやつら。

確か名前は海賊ファントム。

そいつらはしつこく追いかけてきて卵を狙い、その騒動のせいで結果的にハルカの手の中でマナファイが生まれることができた。まあ俺から見るとこれで原作回避はできなくなったも同然だと思うけどな。

ジャッキーさんから一度、水路の方でお別れだと言われたのだが、ハルカ達は納得できず、そしてマナファイのハートスワップによる能力によつて結局はついていくことになった。

だからとりあえず、俺のやるべきことはただ一つ。その海賊ファントムたちのせいでハルカ達に危険な思いをしてしまう可能性があることが俺にとつて危惧するべきことであり、なるべく最悪の形にならないように行動し、海底神殿までの道を行くということだ。

…だけどこいつら以前のロケット団並みに面倒すぎるだろ。一応海底の神殿までは襲いかかつてこなかつたけれども。

神殿について、マナファイによつて案内された奥の部屋。そこに来たのは海賊ファントム。海の王冠を狙ってきたらしいが、その王冠の一部を取ろうとしてマナファイがやめろ

と引つ張り合い、そして取り上げてしまった。

…そのせいで王冠の力が失われ、マナファイは泣き、ハルカ達を危険な目にあわせていくこの目の前の髭を見ていたらイラツとした。

何で自分の欲に駆られて海底神殿の海の王冠を取ろうとしてるんだ。何でマナファイやハルカ達に危険な目にあわせようとしているんだ。この目の前にいるフアントムが…髭がムカつく。そんな気持ちが高まって、思わずやつてしまった。

「おい髭」

「なんツグフォッツ!!!」

「サ、サトシ君!?!」

『マナア…?』

俺は未だに海の王冠である宝石をすべて抜き取ろうとしているフアントムに近づいて殴りかかった。いきなりの行動に避けられなかったフアントムは俺の攻撃を受け一回転して地面に沈む。そしてその様子を見てしまったヒロミさんとマナファイが驚いている。タケシはまた始まったかという悟った表情をしていて、ハルカとマサトはやつてしまえという感じで俺を応援していた。

そしてピカチュウはフアントムに殴りかかったことに対して一瞬驚いていたが、すぐに理解して俺の肩につかまり、電撃をビリビリさせていて攻撃態勢を整えた。

そして肝心のファントムだが：予想よりもタフらしい。

一応俺、はじまりの樹で会ったレジロック達を沈めるくらいの力を出したんだけど凄いな。

俺に近づき怒鳴りかかってくるファントムに対し、俺は冷めた目でそれを見つめていた。

「何をする小僧!!」

「…それは俺が言いたいんだよ。お前こそマナファイの大事なもんを奪おうとしてんじゃねえよ!!」

『ピカピツカア!!』

「グフォツツ!!!」

『ナニヤツテンダナニヤツテンダツ!!!』

俺がファントムに回し蹴りをし、そのダメージで宙に浮いた時に、隣りにいたピカチュウがアイアンテールで攻撃をして一気に地面に沈めてやった。今度は起き上がることができず、ファントムは気絶してしまったらしい。

その結果、聞こえてきたのは王冠が抜かれているために起きた水の轟音、ペラツプの鳴き声であった。

そして足音がしたと思ったらジャツキーさんがこの異様な状況に驚愕しつつも苦笑

をして聞いてきた。

「えっと…何があったの？」

——まあそんなわけで。

俺たちは無事そのまま海の王冠を元に戻すことができ、神殿は無事であった。ただしそれでもあきらめないファントムにマナファイがカイオーガ達を呼んで吹き飛ばしていったのは良いオチだったと思っている。

「私を…忘れないでね、マナファイ」

『…マナ……ハ……ル……カ……好きイ!!』

「マナファイ……」

船の上で俺たちはハルカとマナファイの別れを見守っていた。全部がうまくいって、本当に良かったと思っっているし、もしかしたらまた会えるのではないかとも思っっているから、大丈夫だろう。

「またな……マナファイ」

『…ピ
カ
ツ
チ
ユ
ウ』

第二十七話 く妹とポケモンレースく

こんにちは妹のヒナです。兄が帰ってきたときにハルカさんが教えてくれた、最速で移動できるように修行をしたとの話を聞いて、本日ポケモンだけで盛大なレースすることになったようです。

あ、ですが伝説はレースに参加しないみたいですよ。やっぱり参加しちゃうといろいろと悲惨になる可能性があるため、レースを観戦するようです。

そして私はそのレースの実況者として参加することになってしまいました。もちろんヒトカゲも一緒です。

私とヒトカゲは兄のピジョットに乗って、空からメガホンを使って大きな声で選手を紹介していきます。

「えー第1選手、水使いのダンサーワニノコ！」

『ワニワニワーニィ!!』

「続いて第2選手、蜜が大好きヘラクロス！」

『ヘラクロット!!』

「そして第3選手、走り屋ケンタロス！」

『モオオオ!!』

「次に第4選手、漫才師ゴースト！」

『ゴーストウ!!』

「最後の第5選手、我らのまとめ役フシギダネ！」

『ダネフツシィ!!』

この5匹がレースに参加することになった。

あ、ぶっちゃけフシギダネは日ごろのストレス発散の意味も込めて参加するそうです。

そしてケンタロスは30匹の中から代表を決めて1匹で行います。

「それではレースの説明に入ります！レースはこのオーキド研究所の周りをぐるっと一周すること！でもただ走るだけじゃなく妨害あります！ただし大きな怪我はしないこと！したら失格だからね!!あと障害物なども置いてあるから注意してください！」

『ツツツ!!!!』

選手たちが大きな声で叫ぶ。テンションが上がり、やる気満々のようだ。

ちなみに障害物というのはオーキド研究所にいるポケモンたちの技によつて作り上げられたものだったりする。殺傷能力は低いからたぶん大丈夫だろう。もしも怪我をしたとしても、大樹の上でくつろぎつつも観戦しているミュウに治してもらえばいいだろうし…。

「では第一回オーキド研究所、最速を決めるレースを始めたいと思います！開始の合図はラティオスとラティオスによるりゆうのはどうになります！選手の皆さんはスタートの準備をしてくださいいね！」

『キュ——ン!!』

『クウ——ン!!』

『——ツツ!!!』

選手のそれぞれが大きく鳴き声を上げ、すぐに走れるように準備をする。そしてラティオスとラティオスがスタート地点の上空に移動をして、それぞれがりゆうのはどうを撃つて開始の合図をした。

「さありゆうのはどうを撃ち、レースが始まりました！トップはケンタロス選手!!」

『カゲカゲエ!』

『ピジヨピジヨ——ツト!!』

私は上空からレースの様子を見ながら実況をしていく。風が気持ちよくて実況日和だね。

そしてレースをちゃんと見ると、最初にトップになったのはケンタロスだった。まあよくオーキド研究所の周りを走っているから納得できる。でもこのレース、妨害ありの障害物競走だから走るのが速いだけだと意味がない。

『ワニイ!!』

『モオオオ!!??』

「おつとワニノコ選手ここでケンタロス選手に向かってみずでつぼう!! トップの順位が入れ替わります!」

先程のような感じでワニノコが攻撃をして前を走るケンタロスを妨害することも可能だ。ワニノコがトップになって後ろの選手との距離をどんどんひらいていったため、このまま独走するのではないかと思った時であった。

『ワ、ワニイ!!』

「おつとワニノコ選手、最初の障害物、キャタピーとビードル作成の糸の巣地獄に到着し、苦戦中です! その間に後ろから来た選手がどんどん障害物乗り越えていきます!」

ワニノコが蜘蛛の巣のような状態になっている糸に思いつきり当たってしまい、絡

まって動けない状態になってしまった。そのおかげかわニノコの周りに空いている空間ができたため、後ろからきた他の選手が走っていつてしまう。

「トップはゴースト選手です！」

『ゴオオストウ!!』

ゴーストは走るのではなく浮遊しながらトップになった。もちろん後ろからも選手は来ているため油断はできずにいる。だが、ゴーストは後ろに走っている選手を振り返りながら、目玉を飛び出したリ舌を出したりして笑っていた。

「おっとゴースト選手、ここで挑発しているのでしょうか!? なんと余裕そうです!!」

『へラクツツ…へラクロオ!!!』

『ゴースットオ?!』

挑発をみたへラクロスが怒り、地面に向かってはかいこうせんを撃って反動で飛び上がりゴーストより先へ行く。そのへラクロスのやり方を見たゴーストは驚愕していた。

「おっとへラクロス選手。ここで技を使って飛び上がった!! ですがこのまま無事着地し、一位のまままでいられるのでしょうか! そろそろ次の障害物が待っております—」

『へラクロオオオ!!!』

へラクロスが何とか地面に着地し、また羽ばたいてトップを維持する。その様子に観

客席にいて観戦しているポケモンたちが歓声を上げた。あ、観客席というのはゴール近くにある大樹の大きな枝のこと。あそこならばレースが一望できて見やすいため、落ちないように気を付ければ魅力的な観客席になるのだ。

私とヒトカゲ、ピジヨットもそのレースと観客席の様子にテンションが上がる。

「次の障害物、よく迷いやすいと噂の森でのレースと草ポケモンたちによるあまいかおりのダブル地獄となっておりです！あまいかおりの誘惑に耐え、無事迷いの森から抜け出せることはできるのでしょうか!!」

『カゲエエ!!』

『ピジヨットオットオ!!!』

迷いの森については上空からは見ることができないので、ピジヨットが見えやすいように低空で飛行をし、レースの邪魔にならないところで実況をしていく。

この障害物を抜ければあとは一直線でゴールできる。だからこそ一番の壁となる障害なのだ。

レースを見るとヘラクロスを含めてほとんどの選手たちが迷っているようだった。しかもヘラクロスはあまいかおりに誘惑されてレースどころではなくなっていた。

「おっと次々と迷いの森にて迷う選手が続出！しかもヘラクロス選手あまいかおりに誘

惑されてしまいました！これはどうなる!？」

ヘラクロスがあまいかおりのした方へと突っ走ってしまった。そしてケンタロスやワニノコ、ゴーストも迷っているようでちゃんとしたゴールまでたどり着くことができない。

「あれ…あ、あれはフシギダネ選手です！さすがは我らのまとめ役。迷いの森もあまいかおりの誘惑も難なく突破しゴールまで走っていきます!!」

『ダネダーネエ!!』

まとめ役としてオーキド研究所の周りをちゃんと確認しているフシギダネだからこそこの迷いの森を突破できたのだろう。ちゃんとした道のりを走り、迷いの森から脱出することができた。

「本日のポケモンレース！優勝はフシギダネ選手です!! 皆さん盛大な拍手をお願いします!!!」

『ダネフツシイ!!』

フシギダネがゴールした瞬間、観客席にいたポケモンたちが大騒ぎして喜んでいて。そして迷っていたケンタロス達もその後ちゃんとゴールすることができ、今回は残念であつたが、次は頑張っていきたいとやる気十分な感じだった。

まあこれがきっかけでホウエン地方での兄の仲間がオーキド研究所に加わった時も、飛行タイプでのレースが始まり、伝説も交じったレースもしたり、水ポケモンだけのレースをしたりと、いろいろな種目のレースが開催されるようになった。

第二十八話くホウエン地方のポケモンは個性的く

こんにちは。サトシがバトルフロンティアの旅から戻ってきたと思ったのに、またすぐに旅立っていきました。バトルフロンティアの結果？順調に勝ち進んだと言っておきます。

カントー地方でのサトシの呼び名が《歩く人外魔境》になってますからね。∴結果なんてわかるも同じです。

あ、旅に出たと言いましたが、今度はシンオウ地方らしいです。ヒナはシンオウ地方でのサトシのスーパーマサラ人として数々の伝説を作っていかないようただ願っています。∴まあ無理だと思おうのですが。

『ハイハイハイーイ!!!』

「げ、元氣いいねヘイガニ…」

『カゲカゲエ…』

サトシがシンオウ地方に旅立ったため、ハウエン地方での仲間たちがオーキド研究所に預けられました。そのポケモンたちが結構個性的だったりします。

まずヒナの目の前にいるヘイガニはワニノコのように元氣があります。あ、でもワニノコよりも好戦的なためよく強そうなポケモンのバトルを見るとすぐつつこんでいき、そして伝説などの攻撃に吹っ飛ばされるというオチが毎回つきます。でも怪我はほぼ無傷という…さすがサトシのポケモンだと感心したぐらいです。

『ズバズバア!』

「あ、オオスバメ、きのみ持ってきてくれたの?ありがとう!」

『カゲエ!』

『ヘイヘーイ?』

『…ツツバア』

「あ、じゃあ皆で一緒に食べようか」

『ハイハイ!!』

そして空から降りてきてくれたのはオオスバメでありサトシのポケモンです。なにやら大きなモモンの実を2つ持ってきてくれたので、おそらくヒナとヒトカゲにくれた

のでしよう。オオスバメは根性があって、前にオーキド研究所に大量にやってきたメリープ達の十万ボルトになんなく耐えて追い払ってくれたことがあります。そしてヒナたちにとっても優しく、いろいろと遊んだりこうしてモモンの実をくれたりしています。

とても立派なモモンの実をハイガニが食べたそうな眼でオオスバメに自分の分はあるのか問いかけ、オオスバメを困らせていました。ヒナはそれを見て一緒に食べようとするめまします。そうするとハイガニが大喜びしてくれました。なんだかオオスバメも申し訳なさそうにしていますが、今度また遊んでくれると約束したのでヒナとヒトカゲ、そしてオオスバメはとても楽しそうな表情になりました。ハイガニもなんだか楽しそうです。

そして一緒にモモンの実を食べた後、ハイガニやオオスバメと別れ、ヒナとヒトカゲは森の奥へとやってきました。そこにいたのはコータスでした。何やらコータスが泣いているのですが何かあったのでしょうか？

「どうしたのコータス？」

『コオオ…コオオオオオオ!!!』

「うわッさらに号泣しただど!？」

『カゲカッ!?』

とにかく泣き止んでほしいとヒナとヒトカゲと一緒に慰めます。でも泣く勢いはさらに増すばかり…。このよく泣いているコータスはサトシのポケモンです。結構涙もろい性格で、サトシやヒナと話している時に泣いたり感動したりする光景をよく見えました。ですが今回は何故だか泣き止みません。

どうしようかと悩んでいたら、ヒナたちの後ろからオニゴーリがやってきました。

『オニー』

「オ、オニゴーリ…コータスが泣き止まなくて」

『カゲエ…』

『オニオオニー』

オニゴーリは自分にまかせろと言ってコータスに近寄り、話をしています。オニゴーリもサトシのポケモンで、よくコータスと一緒にいるのを見かけます。そして悪戯をすることもあって、前に遊びにきたゴーストと意気投合していました。

コータスが泣きだしたのを手慣れた様子で落ち着かせています。ヒナはコータスはもしかしたらサトシが旅立ったことに悲しんで泣いていたのかもしれないと考えました。

オニゴーリのおかげでしばらくするとコータスは落ち着いてきたのか、泣き止みこち

らを見てきました。

『コオ…』

「コータス大丈夫？」

『カゲカゲ？』

『コオオオオオオオオオ!!!』

「さらに号泣っ!？」

『カゲッ!?!』

『オニイ…』

結局、ヒナたちが慰めたことに感動したらしく、また泣き出してしまいました。少し時間が経ってしまいましたが、ヒナたちはオニゴリーと共にコータスを慰めていきました。そして笑顔になったコータスとオニゴリーに次は遊ぼうと約束をして別れ、今度は森の奥深くまでやってきました。

「ここらへんかな…?」

『カゲッ』

「おーいジュカイン!!」

『カゲカゲエ!!』

ヒナたちが来た森の奥深く——大樹が立っている場所にはよくジユカインがいて、大きな枝に座つてのんびりしていることが多いです。たまに伝説たちのバトルに参加してソーラービームを派手にうっていたりするのも見かけますが。

ヒナとヒトカゲが大きな声で呼びかけると、大樹の上からジユカインが降りてきました。

『ジユカ…』

「ジユカイン！今日もよろしくお願いします!!」

『カゲカツゲエ!!』

『…ジユツ』

ジユカインはバトルも好きですが、大樹などの世話をすることも好んでやっています。

ですがジユカインはよく一匹でいることが多いのです。俗にいう一匹狼というやつです。

そのため、ヒナとヒトカゲは仲良くなりたいたいという思いからジユカインと共に大樹や周りの木々のお世話をするようになりました。

サトシから一度話を聞くと、ジユカインと出会ったきっかけは彼の生まれ故郷である

巨大樹を世話していたからだそうです。もしかしたらオーキド研究所にあるこの大樹をその生まれ故郷にあつたという巨大樹と重ねているかもしれないですね。

「今日も温かいねジユカイン！」

『カゲッ！』

『…ジユカツ』

ジユカインはヒナとヒトカゲに一言声をかけてから、大樹の世話を続けます。仲良くなりたいたいというきっかけとしての行動だったかもしれないませんが、今ではジユカインとも毎日のように一緒にいることが増えました。

『——めでたしめでたし…つと、こんな感じか…』

「…何やってんのミュウツー？」

『カゲ？』

『ああ、今日のヒナの行動をまとめていた』

「……………」

『……………』

『……………?』

「……………助けてフシギダネエエエエ!! ストーカーがいるよオオオオ!!!」

『カゲカゲエエエ』

『なっ!?!おい待て!?!』

『ダネフツシイ!!!!』

『グフオツツ!!!』

第二十九話く兄がライバルの感情に気がついたく

こんにちは兄のサトシです。最近シンオウ地方にやってきました。一度ピカチュウとはぐれてしまつてエイパムと一緒に探したり、ヒカリに会つて一緒に旅をすることになったり、タケシに会つたり：まあそんな感じで順調に旅は進んでいますよ。

でもこの目の前にいる廃人野郎の意図が分からん。そう、廃人野郎ことシンジはポケモンバトルではより強さを目指し、相手によつて戦略などを変え勝利を手に行っているトレーナーである。

まあポケモンの能力を確認、判断し使えなければ逃がすというやり方、そして使えると分かれれば徹底的に鍛えるという努力は凄いと認めよう。そして相手によつては戦略を変え、弱点を突いた攻撃、自分のポケモンの特性や技を最大限に生かすやり方は俺も感心するところがあると思つている。

ポケモンバトルというのは、最終的には勝つことが目的なのだから。だから俺が負けたとして、「ぬるいな」「使えない奴」と罵倒されても文句は言わない。それは俺がトレー

ナーとして力が及ばなかったということなのだから。

だがそれでポケモンの感情はどうなる？

前に逃がしたヒコザルも徹底的に鍛えるというシンジのやり方によってボロボロに傷ついた。まあそれがきっかけで俺の仲間になったのだけれども……。でもポケモンも生きているのだから、道具や駒だというように扱わずにちゃんと気遣ってやってほしいと思う。たとえ兄のレイジさんがコンプレックスで行ってしまったらしいとしてもだ。

まあそこらへんは原作の知識なんかでは変わっていくらしいし、最終的にはヒコザルとも仲良くなるらしいから、大丈夫だという気持ちもあるにはある。

本当ならヒコザルがまだシンジの手持ちにいる時に変えていった方が良かったはずだったんだよな……。でも俺はシンオウからの知識は薄く、妹に教えてもらわなければわからないことだったためフラグは叩き折れなかった。電話で聞いたときは後悔したぐらいだ。少しでもシンジの気持ちを変えられたならば、ヒコザルは今でも幸せに彼の手持ちとして戦っていたはずなのだから。

だから、俺の仲間になったのなら、やれるべきことはしようと思う。強くなりたいのならば力を貸し、そして最終的にシンジの手持ちに戻りたいというのなら、俺は何も言わず、希望通りにしたいと思っっている。

それぐらいしか俺にはできないのだから当然のことだ。

とりあえず今の目標はシンジの意識変革ということかな。

…でも何だか少しだけ俺に対する敵意というか、ライバル心が強くないか？

ポケモンセンターの中からシンジが外に出ていく後ろ姿を見かけたため、俺はタケシたちにここで待っていてほしいと言ってから走り出し、話しかけた。

「おーいシンジ！ちよつとお話ししようぜ？」

「はあ？何だいきなり。お前と話することなど何も無い」

「いいからいいから…！」

まあそんなわけで。俺はどこかへ行ってしまうシンジを強制的にどこか話せる場所まで連れて行き、広場にあるベンチに座ってもらって話を聞いた。

「…なあシンジ。お前俺のこと嫌いか？」

「嫌いだ」

『…ピイカ…』

即答ありがとうございます。そこまで嫌悪にされていたとは思ってもみなかつたぜ。ピカチュウもちよつと不機嫌な顔をしながらも俺たちの話の邪魔をしようとしなない。

俺は聞きたいことがあったから聞いただけだし、罵倒とか今更だしな？まあこいつの場合は礼儀もなつてるし、トレーナーを意図的に傷つけようとして言っているわけではないから俺も何も言う気はないけれど。

「何で俺のことが嫌いなんだ？お前、俺と最初に出会った時からそんな感情持ってただろ」

「……………」

そう、聞きたいというのはシンジの嫌悪感だ。俺の顔を確認し、名前を聞いた時から一気に邪険になり、凄まじい敵意が滲み出る様になってしまったのだ。俺はそれに疑問になり、直接聞いてみたというわけだ。

だがシンジは何も言わず、どこかへ行こうとするため、俺は彼の腕を掴み逃げないようにした。

「お前がやるバトルは他のトレーナーにはない凄いものだと思ってる。…まあポケモンに對しての感情は少し見逃せないとこがあるんだけどな…でもそれでもシンジ、お前とのバトルは楽しいって思ってるんだぜ？」

「……………そうか」

「だから何で俺のこと嫌いなんだ？名前を聞いた時からだぞ、そんな親の仇をみるような感じになったのは」

「……………」

『ピイカツチュウ』

シンジはその質問に何も答えずにいる。でも俺はこのままにしておくつもりはない

ので、じつと答えを待ち、シンジのことを見つめる。

ピカチュウはそんな俺に呆れつつ、シンジに対してさっさと答えた方がいいよと言ってきた。

しばらくして、シンジが重い口を開いた。

「お前のことはよく知っていた」

「へ？」

「お前はカントー地方、ジョウト地方、そしてホウエン地方のリーグで優勝していただろう。バトルフロンティアでもすべてのブレーンに勝ったというのも調べ、その映像をすべて見た」

「お、おう……？」

確かに俺はやるからには勝つがモットーなため、すべて勝ち進んでいったし優勝とかもした。けれど何でシンジはそんなに俺のこと詳しいのだろうか？ しかも調べたとか言つたよな…映像も見たつてどういうことだ。

シンジは少しずつ話していった。そして話していくごとに感情が高まっていったのか、俺のことを鋭く睨み付けてきた。

「最初はどんな奴だと考えた。旅立った地方でのリーグに優勝して…あのジンダイとの

バトルで勝ったというからチャンピオンのように凄いトレーナーだと思っていたんだ……だが実際に見たらポケモンを優先するぬるい奴だとは思わなかった！何故お前のようにぬるい奴が強い!?そしてすべての勝負に勝つことができるんだ!!」

「あー……」

『ピカピ……』

なるほど。つまりシンジは俺の戦歴が信じられていないということなのだろうか。例えるなら凄い有名人のファンになったのはいいけれど、実際に直接会ったら現実は残念な奴だったと認識して逆に嫌いになったとかそういうことか?そして俺は兄のレイジさんにも似ているらしいから余計にコンプレックスを感じているのか、それとも何でそのぬるさで勝てたとか疑問に思ったりしてるのだろうか……。

ピカチュウが俺のことを憐れんでいる目で見てくる。でもこれ俺にどうしろと?バトルを挑んで勝てばいいのか?でもシンジとバトルしている時も今までも絶対に負けたことないんだけど意味なくないか?

シンジは少し深呼吸をして高ぶった感情を落ち着かせ、静かに俺を睨むようになった。でもその睨んでくる目が本当に親の仇を見ているようですよ。まあ俺を貶しているというわけではないから、怒ったりはしないけどな。

俺は苦笑し、頬をかきつつも口を開いた。

「シンジ」

「……………何だ」

「お前が俺のことをちゃんと見てくれるなら…リーグで待つてろ。俺の凄さつてやつを教えてやるよ」

「……………」

今はまだ、少しだけ旅に出ている仲間たちと強くなつていく途中なのだ。今からバトルしたとしても、いろいろと不完全燃焼でシンジも俺も納得できないだろう。だからリーグで戦う。

まだまだバッチも集まつておらず、何もできていないけれど、シンジと絶対にリーグで戦おうと約束しよう。そしてそこでシンジが期待したバトルを見せてやろう。そう俺は決めた。

シンジも今のままで良くないと考えたのだろう。俺のことをちゃんと見て、そして睨み付けてきた。だがその目には今までのような感情が伴つておらず、ちゃんとライバルとしての敵意だけだと感じた。

「ッ…ふん。お前がそう言うのなら、リーグですべての決着をつけよう。次は絶対に負

けない」

「おう！俺も負けないからな！」

『ピツカツチュウ！』

第三十話　妹と湖の秘密

「こんにちは妹のヒナです。現在ヒトカゲと共にオーキド研究所にある湖に来ています。」

ヒトカゲは水を怖がったりはせず、恐る恐る近づいてなるべく落ちないように気を付けています。私もそんなヒトカゲを気にしつつ、この綺麗な景色を眺めて楽しんでいきます。

「綺麗だねヒトカゲ」

『カゲカゲエ』

オーキド研究所にある湖は水タイプと草タイプのポケモンたちがよく争って喧嘩したりしますが、最近ではフシギダネに止められ、ヘイガニ達がよく乱入してくるため今のところ休戦しているようです。でもこの景色を見ていると水タイプと草タイプが争うのも分かる気がするよ。

「景色もそうだけど、風とかも気持ちいいねー」

『カゲエ』

『マナー』

「……………ん？」

ヒトカゲの他にも声が聞こえたため、私は周りを確認する。周りには他にもポケモンがいて、湖で遊んだりする子が多い。争っているという水タイプや草タイプのポケモンもそうだ。でも今の声は聞いたことないような…。

『マナー・マナー!!』

「ちよつ…何でいるのマナファイ!?」

『カゲ…カゲ?』

何故か湖の真ん中でマナファイが気持ちよく泳いでいるのを発見してしまった。ヒトカゲはマナファイがどんなポケモンなのかわからず興味を持っているようだ。マナファイは私の声に気づいてこちらに近づき、可愛い笑みを浮かべてきた。そして湖から上がリ、私とヒトカゲの隣に座ってきた。

『マナー?』

「ええつと…マナファイって海にいるんじゃないの?何でここにいるの?」

『マナー!』

『カゲカツ!』

マナフィが何か言っているようだけれども、私は兄のようにポケモンの言葉がわかるわけではないので首を傾げる。だがヒトカゲが驚いたような表情を浮かべて湖を見たため、何かあるのではないかと私は湖を見る。

湖をよく確認すると何やら水の中から大きな影が出てきた。この影は何だろう、何かあるのだろうかと確認しようとしたら急にルギアが現れて驚いた。影の正体はルギアだったのだ。

湖にずっといたのだろうか。だとしたらその大きな身体でよく湖にいたことができたなと思った。

ルギアは驚いている私たちを見て小さく呟いた。

『ああ、優れたる操り人の妹か』

「ああ……じゃない!!ルギア一体どっから出てきたの!?!というかこの湖の底にいたの!?!」

『いや、この湖は底というものがない。底は海底水路となっていて、海とつながっている。私はそこから来たのだ』

『マーナ!!』

「海……って。え、ここから海につながっているの!?!」

『カゲカゲエ!?!』

なんとという発見だろう。オーキド研究所の湖は海とつながっていて、ルギアもマナフィもその海底水路から遊びに来たというのだ。

…ああ、どおりで湖からギャラドスやラプラス、メノクラゲやスイクンなど様々な種類のポケモンをよく見かけると思った。

なるほど、湖に住んでいるのではなく、海からこちらに来ていたのか。身体が大きいのによく湖にいるものだと疑問に思っていたことが一瞬解消された瞬間だった。…ああいや、でもスイクンは海底水路から入ってきてるわけじゃないか。

驚いている私とヒトカゲに、マナフィは何故か喜び笑っていた。

『マナマナ…ハルカ…カモ!!』

「あ、もしかしてハルカさんに会ったことあるの?」

『マナ!! マーナア!!』

『自分の親だと言っているぞ、優れたる操り人の妹よ』

「そうなんだ! じゃあ今度ハルカさんが来たときには一緒に会いに行こうね!!!」

『マナア!! カモ! スキイ!』

『カゲカゲ!!』

マナフィは喜んで私とヒトカゲに抱きついた。そんなにも喜んでるのなら早くハルカさんに連絡とらないとね! 私はこの可愛いマナフィの願いを聞き入れたいと思

いヒトカゲと顔を見合わせて、一緒に行動することにした。

「よし電話しよう今すぐ！」

『カゲエ！』

『マナマーナア！！』

『いや、そのハルカとやらが旅立っているのなら、連絡はつきにくいだろうと思うのだが……』

「だいじょーぶだよルギア！私に任せて！！」

『カゲカツ！！』

その後、マナファイが無事ハルカさんに会え、感動の再会を果たした。もちろん私とヒトカゲも涙ながらに感動し、良かったねと心の底から思ったぐらいだ。

そしてそれからというもの、マナファイはたびたびオーキド研究所の湖から遊びに来ることが多くなり、ハルカさんも元気な様子を見に来ることが増えた。そしてしばらく先の話だが、旅から帰った兄にも再会し、お互い喜んでいたのは言うまでもない。

第三十一話く兄とポフィンと悪夢再びく

こんにちは兄のサトシです。本日はポフィンを作ろうということで皆で頑張っております。

ですがタケシに何度もちゃんとレシピ通りに作れと注意されました。それを見たヒカリとポツチャマが怪訝そうな表情で見てきました。

でも俺にだって頑張ればうまいものぐらい作れるはずだ。

「なあピカチュウ?」

『ピイカ…』

「…そんな顔すんなよ。大丈夫だから」

『……ピカ』

ピカチュウは信用ならない表情で俺のこを見してきた。それを見て俺はますますやる気が高まる。そんなにも俺の作るポフィンを期待していないのなら驚かせて

やろう。あ、これ美味しいといわせてやる絶対！

だから俺はとりあえずきのみを何種類かに分けていれることにした。まず最初にクラボの実を大量に入れて辛さが中心のポフィンを作ってみよう。きのみは味ごとに分けられているため、その味をより引き出すために隠し味のふしぎなアメや寒天、せいなるはいをいくつか投入し、ちゃんと気を付けて混ぜていく。

周りを見ると、先ほどまでいたはずのピカチュウがタケシたちの方へ行き、どんなポフィンを作るのか気になっているようだ。あ、でもタケシたちのポフィンは絶対にピカチュウの好きなケチャップを入れないと思うから俺がそれを作ろう。

「…あれ？ポフィンって半透明になるお菓子だっけ…？まあいいか」

まぜている途中でケチャップを入れると一気に半透明になってしまい、俺は首を傾けて疑問に思った。だがまあそういうお菓子もあるだろうと考え、気にしないことにした。

これでクラボの実ケチャップ味のポフィンが完成した。おそらくピリツと辛めな味があって、後からケチャップが効いてくるだろう。見た目は少し赤色の半透明なポフィンという感じだ。

「よし次！次は甘めのモモンの実と…あとは……」

次に作るポフィンは甘い味にしようと思い、モモンの実を入れられるだけ全部入れてみた。甘い味ならばチョコレートとかも入れてみたらどうだろうか考える。チョコレは何にでもあうし美味しいから絶対に大丈夫なはずだ。俺はチョコレートを何枚か入れて、出来るだけ味が均等になるようにまぜていく。あ、チョコレートにはモーモーミルクとかいいかもしれない。あとミックスオレも入れてみよう。あ、でも飲み物だけだと固形化されないだろうからピーピーエイダーやげんきのかたまりも入れておこう。俺はそれらの材料もちゃんと入れて混ぜていく。

…そういうえばポフィンって混ぜるだけのお菓子なんだよな。出来るなら焼いてみたり、オーブンでチンしてみたりしようかな。その方がいろんな感触の味が試せそうだな。それにここにはオーブンも設備されているし使ってもいいみたいだからありがたく使わせていただく。俺は型にこのモモンの実入りチョコレート味のポフィンを入れてオーブンでしばらくの間焼くことにして次のポフィンへと移る。

「次は渋さ…といったらカゴの実かな」

渋いポフィンはカゴの実が一番いいと聞くから入れてみる。次は2種類のきののみにしようかと考え、カゴの実だけでなくウイの実も大量に入れてみた。そして隠し味にホウエン地方でもらったあさせのしおとちからのこなも投入した。そして一気にまぜて

いく。

「…あれなんだかとりみがついているような…でもすぐちゃんとしたポフィンになるよな？」

ちよつとだけ不思議に思いつつも混ぜていき、今度は焼いてみようかなと思い、フライパンに変えて焼き上げる。するとポフィンの色が真っ白に変化し、硬いポフィンになっていった。真っ白いせんべいのように見えるし、これもお菓子みたいになっているからいいのではないだろうかと思う。よしこれで残りのポフィンの出来具合を見るか。

「よし！オープンの中を確かめるか！」

先程まぜたオープンの中のモモンの実入りチョコレート味のポフィンがちゃんと焼きあがったのを見てみることにした。オープンの中を見ると焼きあがっていて、餅のようにつくくらししていた。そしてなんだか色が紫色になっていた。

…あれ、ポフィンってこんなに膨らむものだったっけ？あと色もおかしいような…まあ平気か。

俺はそれらのポフィンを持ってタケシたちの方へと行くことにした。タケシたちはもうポフィンができていて、ピカチュウたちが食べていた。

「ほら見ろ！俺もちゃんとポフィンを作れるぞ!!」

『ピッ…?…?…ピイカチュッ!!』

「ま、…待て待て待て待て待てソレはなんだ!?!色とか形とか可笑しいぞ!!」

『ポチャポチャ!!』

「サ、サトシちゃんと普通にレシピ確認してみたの!?!透明や白色や紫色の…しかも形とかが諸々ポフィンじゃないんだけど!?!」

「え、ちゃんとできてるだろ?大丈夫だって」

「全然だいいじよばないわよ!!!」

「明らかに大丈夫じゃない!!!」

『ピイカツチュウ!!!』

『ポツチャマアア!!!』

結局その後、俺にキッチン禁止令が出され、作られたお菓子はロケット団のもとに行くことになってしまった。…俺としてはよくできたと思っただけだな。

第三十二話　妹はシェフの本気を知った

「こんにちは妹のヒナです。この前電話で兄がやらかしたと聞き、頭が痛くなりました。しかも料理で変なものを作ってしまったというのですから驚きです。」

料理と言えば最近ルカリオが母に負けず劣らず凄くうまくなっています。

「…ルカリオ、今日は何作るの?」

『カゲカゲエ?』

『今日はマカロンとモモンの実のタルトケーキだ。しばらく時間がかかるから外で遊んでいろ』

「はーい!」

『カゲツ!』

まあこんな感じでお菓子により力を入れていて、しかもまだまだ修行が足りないと母

にレシピを教えてもらっていたりする。でももう結構な種類のお菓子を作れるのに他にも作る必要はあるのだろうか？母もそんな教えがいのあるルカリオにやる気満々だし。

そしてつい先日、もう店に出してもいいのではないかとオーキド博士やケンジさんが差し入れの紅茶味のシフォンケーキを食べながら呟いていたのも聞こえてきた。そしてその時に食べたシフォンケーキは本当に美味しかったと覚えている。

しかもお菓子だけでなく料理の方も頑張らなければとやる気満々のようだ。ルカリオよ、お前はそんなに女子力とやらをつけてどこへ行くつもりだ。

ルカリオのお菓子がプロ並みだということにマサラタウンのみんなが驚き、たまにお菓子を作ってほしいだの、料理のレシピを教えたいだのという話が来ることもある。もしかしたらいつか本当にルカリオの店を開いてしまうかもしれないと私やヒトカゲ含めて兄のポケモンたち、伝説たちは密かに考えていたりする。

…そしてそんなお菓子のプロとなったルカリオに嫁に来てくれと殺到するポケモンたちがいた。しかもポケモンたちだけでなく普通のトレーナーまでもが旅に加わってくれと言ってくることも多いのだ。

まあお菓子だけでなく料理の方も次第に上手になりつつあるルカリオなら嫁に欲しい、仲間に欲しいと思ってしまうのは仕方ないと思うけれども。

でも一応嫁に来てくれといったポケモンたちに注意して言っておくならば、ルカリオはオスだ。メスではないのだ。だがしかし、メスにプロポーズされたということはない。ルカリオがオスやメスだという正確な話は聞かず、ただオスのポケモンによく番いになってくれ！や結婚してくれ!!と叫ばれたりするのだ。

だが、プロポーズして襲いかかってくるポケモンたち、トレーナーたちをすべてを蹴散らし、私たちに何事もなかったかのように普通にお菓子を与えてくれるルカリオを見て、さすがアローロンさんの弟子だなと思いました。

「…ねえヒトカゲ。今日はルカリオがどんな感じで料理しているか見てみない？」

『カゲエ…？…カゲツ！』

私はルカリオがどんな感じでお菓子を作っていくのか気になり、そしてできれば何か手伝えれば良いと考えてヒトカゲに提案する。ヒトカゲは少し考えた様子だったがすぐに私の言葉に頷いてくれた。

私たちはキツチンの方に忍び寄りルカリオの作業をじっと見つめる。母はオーキド研究所に行っており、ポケモンたちの様子を見てきているため不在なのだ。だから今

キッチンにはルカリオの独壇場ともいえる。

そしてそこで見たのはとても手慣れた様子で材料を混ぜていくルカリオの後ろ姿。邪魔しないようにこっそり来たというのに、ルカリオはすぐに私たちに気づき、こちらを振り向いた。

…あ、青色のエプロン着ていて、ルカリオに凄く似合います。

『どうしたヒナにヒトカゲ。何か忘れ物でもしたのか?』

「う、ううん違うよ。ルカリオのお菓子作ってる様子見たかっただけなの…もしかして邪魔だったりする?」

『カゲー…?』

私とヒトカゲが邪魔だったかどうか聞くとルカリオは優しそうな笑みを浮かべて大丈夫だと言ってくれた。それどころかもっと近づいてもいいと言われたので、私とヒトカゲはゆっくりとルカリオに近づいていく。

「ルカリオ、これって何のお菓子になるの?」

『抹茶味マカロンの材料だ。…ヒトカゲ、そこにいると危ないから数歩左に寄れ』

『カゲッ』

ルカリオは私とヒトカゲにきちんとどんな料理を作っているのか、どう作っていくのかを教えてくれた。あ、あと私とヒトカゲもちゃんとルカリオのお手伝いもして、一緒にマカロンとタルトを作った。途中で味見したり、差し入れ用のクッキーを焼いたりもしました。そして本日作ったお菓子は本当に美味しくて、手伝ってよかったと心から思えた私とヒトカゲだった。

…本音を言ってしまうのなら、ルカリオのことを第二の母と呼び慕いたいぐらいです。

第三十三話く兄はゴードイの日記の変化を知ったく

こんにちは兄のサトシです。本日はヒカリのコンテスト挑戦のためにアラモスタウンに訪れることになりました。出発する前に妹に電話して何が起きるのか聞いていたため、フラグはすべて叩き折りますよ。もうフラグが成り立つだなんてこと絶対に起こしません。

まあ今回は伝説も出てくるらしいのでどうなるかはわからないんだけどな。

アリスさんに案内してもらった庭園で異変が起きたり、町で派手にダークホールぶちまけたダークライが犯人だとベロベ：じゃないアルベルト男爵が言ったりとまあいろんなことが起きた。俺もダークホールに巻き込まれそうになっただけで咄嗟にかわしたからよかった。アルベルト男爵がベロベルト男爵になったのは面白かったと思うけど。

とりあえず俺は、ダークホールで攻撃したために疑われたダークライを倒そうとしていることを止めないといけないと思ひ、行動した。まず、ダークライがこの町に異変を起す犯人じゃないと言ってアルベルト男爵と対立し、無事論破しました。これでダークライのこれから起きるダメージの負担がより軽減されると思う。

でもやつぱり納得がいかないらしく、退治するまでにはいかないものの、捕まえようと行動するそうです。

：まあそれぐらいなら俺も何も言う気はしない。

というよりも、無理やり何もするなと言うのも町のみんなが不満に思ってしまうし、最悪の場合俺自身が犯人なのではないかと疑われてしまうからだ。あまり話を変えてしまつてはこれから来るであろうパルキアとディアルガに町を吹っ飛ばされる最悪の可能性もあるため、自重しておく。

でもダークライも出てくるタイミングが悪いような気がする。アラモスタウンに変が起きたと思つたらいきなり現れて、ダークホールで攻撃してしまつては疑われるのも当たり前だろう。町の人から見たら、ダークライが犯人だと言っているように見えてしまうのだから。

まあそんなわけで、町を守ろうと行動するダークライには同情しておこうと思う。

・・・・・・・・・・・・・・・・

今、パルキアとディアルガが戦い、このままではアラモスタウンが消えてなくなってしまうと焦っている状況です。あ、ちなみにパルキアのしわざだということも分かり、

ダークライの疑いはなくなったんだけどな。

町を包む次元の壁がなくなっていくせいでやばい状況だとトニオさんが言う。

「オラシオンが何かわかりさえすれば……！」

「オラシオン？」

トニオさんとアリスさんがオラシオンについて話し合っていた。トニオさんはオラシオンというものが分からなかったのだけれども、アリスさんがそれは祖母が教えてくれた草笛の曲だという。——その曲は、まだ異変が起きていない頃にポケモンたちの喧嘩を止めた草笛の曲だった。

「そうだ！ゴーディにはこれから起きる悪夢から予知をして、オラシオンを残していたんだ！」

「……っ！……音盤ね！」

「うん。……オラシオン。大いなる神の怒りを沈める曲——」

トニオさんとアリスさんがアラモスタウンにある塔をみていた。音盤はそこにあって、塔の天辺に行かないと曲を奏することはできない。だからそこまで行かないといけないのだ。だが、トニオさんは話を続けた。

「——悪夢は私にやるべきことを教えようとしていた。未来のために、私はオラシオンを残さなければならぬ。……それ以外にも、日記にはこう書いてあったんだ」

「…え？ゴードイは何を書き記したの？」

「…オラシオンは、神の民が現れない場合に使うべきものを浄化してくれるのを祈るのみ」

…あれ？妹のヒナに聞いたときはこんな話なかったような気がする。神の民って何だ？

俺だけじゃなく、アリスさんたちも首を傾けて疑問に思っていた。神の民とはいったい何なのだろうと。だが、トニオさんもその神の民というのを知らず、結局はオラシオンの曲を鳴らしに行くことになった。

だが気球で一気に行くはずが、パルキアたちの攻撃の波状を受け、トニオさんとアリスさんは危険だと判断し塔から下に降り、飛ばされて塔の途中にある階段に落ちた俺とヒカリで行くことになった。

このままオラシオンを鳴らせばいい、そうすればこの争いは終わるはず。そう思っていたんだ。

だけど…まあ…。

「ダークライツ!!!」

これは、ヒナから聞いた話に起きた出来事。ダークライがパルキアとディアルガの攻

撃を受け、消えていく光景。そしてこれも、オラシオンさえ鳴らせばダークライは助かると聞いていた。だから、大丈夫なんだと思っていたんだけどな…。

「…ああ、これは、駄目だ。やりすぎだお前ら」

『ピカ…』

『ウパウ…』

「サ、サトシ?」

塔の隙間からその光景を見ていた俺は小さく呟いた。その声にピカチュウやエイパムは悟ったような鳴き声をし、ヒカリはどこか恐れているような声を出す。たぶん俺今すっごく怖い顔してるかもしれない。今ならポケモンの技のこわいかおができそうな気がするぐらい。

…でもごめん。俺、止まる気ないんだ。

「ヒカリ、先に行つてオラシオン鳴らしてくれ。ピカチュウ、エイパム、ナエトル…ヒカリのこと頼むな」

「え、ちよつとどこ行くのサトシ!!?」

俺は一度下まで行き、途中であいつらの攻撃でなくなってしまった隙間から一気にジャンプし、近くにいたパルキアにとび蹴りをする。

『ツギルアアアアアアアア!!!』

「うるっせえんだよ。パルキア…あとディアルガもな…!」

『ツツ!!? キュルアアアアアアアア!!!』

俺はパルキアを一気に下まで叩き落とし、その反動でまた飛び上がってディアルガに近づき蹴り落とす。

落とされた衝撃で少しだけ町が消えてしまったけれどもまあ大丈夫。もうこんなことさせる気はないから。

パルキアとディアルガは驚いていただろう。ただの小さな人間が、自身の身体に攻撃し、なおかつ地面へと沈めていたのだから。しかもその人間は拳を鳴らしつつも笑顔でこちらに近づいてくる。その様子は本当に異様だった。

「話し合いでもしようか？」

『ツツ!!?』

『ツツ?!?』

その後、ヒカリが塔の天辺まで行きオラシオンを鳴らす間は平穩に静寂が続き、そして無事アラモスタウンはもとの世界へと帰ることができた。…まあ町を戻し帰っている時、パルキアとディアルガはお互い涙を浮かべていたような気がするが…それは俺の気のせいだろう。

ダークライも助かってすべてが終わったと思っていたのだけでも、何故か俺は神の民として崇められ、コンテストが終わり町から出る間、いろんな意味で歓迎されました。ヒカリにはしばらくの間怖がられました解せぬ。でもすぐにタケシがフオローしてくれたおかげで仲間内に亀裂は生じずですんだと思っっている。

第三十四話く兄は原作崩壊の音を聞くく

こんにちは兄のサトシです。シンオウって結構寒いですよ。あのパルキアとディアルガに会ってからしばらく経ちました。バッチも集まってきた順調な旅ですよ。それにヒカリも俺の暴走にも慣れてくれたようです。

もう恐怖というよりも呆れ等の場合が結構多かったですりしますけど。

…え？自分で暴走って言っちゃうのかって？妹に何度も言われ続けていますから仕方ないですよ。

まあそれで、俺たちはお昼ご飯を食べようとしている途中で突然シエイミに出会い、グラシデアの花畑に連れて行くことになった。そして途中でいきなり鏡からシエイミが連れ去られそうになり、俺とヒカリ、ピカチュウとポッチャマも巻き込まれて反転世

界へ入ることになった。

え、突然すぎるって？いや知るか。

『ミイイ……ここは嫌でしゅ……あいつが来るでしゅ……！』

「シエイミ……」

ここは反転世界だという話をムゲンさんに出口を案内されながら教えてくれる。ムゲンさんがこの世界でギラティナが管理し、棲んでいるということ、重力がところどころで違うという話もしてくれた。そしてその間ヒカリに抱きしめられているシエイミは恐怖に怯え、ずっと震えてはやくここから出たいと叫ぶ。

そしてそろそろ出口につき、この反転世界から出られると置いていた時だった――

『…そんなに急がなくてもいいんじゃないやねえの?』

「…え、誰?」

行く道の途中に現れた金髪の男。年齢はタケシぐらいかと思う。だが反転世界でその男は楽しそうにもっとゆつくりしていけよと言ってくるのはおかしい。…そして妹に話を聞いた時もこんな奴いたか?

なんか前回も今回も原作とは違う部分があるような…?

だが、ムゲンさんは険しい表情をしてその男を見て、そしてリュックからなにか機械を取り出して呟く。

「お前は…ギラティナかッ!」

「はあッ!」

『ピイカッ!』

「え、ギラティナって人間になれるの!」

『ポチャッ!』

『ミイイ…』

何ということだろう。目の前にいる金髪男はギラティナでした。あれ、ポケモンが人になれるのって今まで旅で見えてきた中ではラティアスぐらいだったような…? いや…というか、こんな話だったか?

それに何だかこの目の前にいるギラティナがチャライ。へらへらと笑っている様子がちよつと想像と違う。なんかイラツとするからもうこいつ金髪男（ギラティナ）でいいと思う。

金髪男（ギラティナ）はヒカリ達の方へゆつくりと近づいてくる。もしかしたらシエイミを奪おうとしているのかもしれないと思い、俺とムゲンさんが慌ててヒカリ達から離そうと動く。だがそれよりも金髪男（ギラティナ）がヒカリの片手を掴んで……え？

『一目惚れした。俺と付き合ってくれ』

「はいいい!？」

「おいちよつと待て!!?」

ヒカリが驚いたような声を出し、金髪男（ギラティナ）の方を見る。もちろんポツチャマ達も含めて驚いている。

俺はとっさに金髪男（ギラティナ）からヒカリを離し、守るように前へ出る。

そして俺は金髪男（ギラティナ）に向かって指差して怒鳴る。

「お前ポケモンだろ！何変なこと言ってるんだよ！それにヒカリは嫁にやらんからな!!」

「…い、いやいやサトシ君。父親が娘を嫁に出さないような言い方になってるぞ」

「ムゲンさんは黙っててください!!」

ムゲンさんがよく分からないツツコミをしたため俺は注意してからまた金髪男（ギラティナ）を睨みつける。だが金髪男（ギラティナ）は楽しそうな表情でこちらを見ている。…ちなみに俺の後ろの方で隠れているヒカリ達は茫然とその様子を眺めていた。

『女性なら声をかけるのは当たり前だろ？特に将来、絶対に美人になると分かっている女の子になら…』

「最低だなお前！」

『最低じゃないって。男なら女性に声をかける！そしてできれば付き合う！それ基本だろ』

「んなわけあるかツツ!!」

こいつタケシよりたちが悪い。というよりもこんなのが伝説っていうのを否定したいぐらいだ。

しかも何故だかムゲンさんが金髪男（ギラティナ）の言葉に頷いているような気がして、頭が痛くなってきた。なんでこうなった。

『これが伝説のギラティナでしゅか…』

「伝説って…」

『ポチャ…』

ああ、シエイミとヒカリ、ポツチャマが目の前にいる残念な伝説に遠い目をしていてもはや怯えなどはなく、普通に残念な生き物を見ている目だ。

ピカチュウも何やら複雑そうな表情だ。おそらくオーキド研究所にいる残念な伝説のことを思い出しているのだろう。

だが金髪男（ギラティナ）はそれらの目を気にせずむしろ俺の方をじっと見てなにやら考え始めた。

『うーん…君って絶対女の子の方が魅力的な気がする。なあ性転換って興味ある？——』

「あるわけないだろ!!!」

『ピイカア…』

まあそんな感じで金髪男（ギラティナ）がいろいろとやらかし始め、後からやってきたゼロが襲いかかっても、俺が行動するまでもなかった。だがヒカリに対してしつこかったというのは苛立って次会ったときはあいつの顔面殴ろうと思ってる。

.....

『なあサトシ君』

「…お前もう来るな。俺たちこの反転世界から出るから。…というか何で俺の名前知ってるんだよ」

『知ってるよ。だって君は主人公だろ？』

「……………え？」

「…何それ？」

『ポチャ…？』

『ピカア…？』

第三十五話～妹はジュカインがキレたのを目撃する～

こんにちは妹のヒナです。最近なんだかジュカインの機嫌が悪くなる一方です。

ですが私やヒトカゲが近づくとすぐに不機嫌ではなくなり、普通の表情に戻ります。ですがその表情がまるでストレスをためた人が猫や犬といった動物に癒しを求めているような感じでした。

何かあったのかなと私たちは首を傾げ疑問に思っております。

「…ねえ、ジュカイン何かあったの？」

『カゲカゲ？』

『…ジュツ』

今日も今日とてジュカインはとて不機嫌そうだ。遠くから見ると不機嫌なジュカインを恐れて逃げる他のポケモンがいてとても目立つ。

ヒトカゲが私の手を掴んで引っぱり、ジュカインに聞いてみたらどうかと問いかけるので、私は思い切って彼に近づき話しかけた。

でもジュカインは何も言わず、ただ私やヒトカゲの頭を撫でるだけ。

理由も何も言わず、ただひたすら撫でる様子はとても奇妙だと思った。というよりもすごくストレスを抱えているような感じがしてむしろ不安が増した。

このままでは意味がないので、とりあえず考え事をしている時に近くを通りがかったミュウツーに聞いてみることにした。ミュウツーは毎日のようにオーキド研究所にいるため、何があったのかぐらいは知っていると思っただからだ。

「ジュカインが最近不機嫌なんだけど何があったのか知ってる?」

『…ああ、ジュカインなら最近大樹の近くで草ポケモンと水ポケモンが争っているのが嫌らしい。だから最近機嫌が悪いみたいだ』

「へ!?!なにそれ!?!」

『カゲカツ!?!』

どうやら草ポケモンと水ポケモンがフシギダネの見えないところでたびたび喧嘩するようになり、その近くに大樹があつて流れ弾ならぬ流れ技を受けてしまったことがあつたらしい。そして大樹を世話し続けているジュカインにとって、その事態は望んで

もないことであり、だから最近不機嫌になっていたということだ。

そしてその草ポケモンと水ポケモンたちの争いを注意しても止まらず、逆に悪化しているミュウツーから話で聞いた。

私とヒトカゲはそのまままで放っておいてはいけなとを考え、お互いに顔を見て頷く。

「じゃあ草ポケモンと水ポケモンの争い止めないとだよね！私たちがフシギダネに知らせてくるよ！」

『カゲエ!!』

『いや待て。もうその心配は必要ないだろう…』

「どういうこと？」

『カゲカゲ?』

『あそこを見ろ』

私たちがいるのは大樹より少し離れた場所。そこからミュウツーが指差したところを見ると草ポケモンと水ポケモンの争いが激化している光景が見え、大樹にまで技が当たりそうになっていた。

それを見た私たちは慌ててポケモンたちの争いを止めようとする。

けれどもミュウツーが腕を掴んでその場にいろと言うため、せめて声だけでもかけようと呼ぶ。

「ちよ、ちよつと皆！喧嘩はやめて――」

『ジユカアアアアアアッ!!!』

おそらく堪忍袋の緒が切れたのだろう。

ジユカインは今までで一番大きなソーラービームを撃ち、草ポケモンと水ポケモンがそれぞれ争っている場所に当たり、結果的に喧嘩はおさまった。……だが状況は一変してかなり悲惨な光景が見え、フシギダネが説教しに来るのも時間の問題だと思えた。

その後、しばらくの間はフシギダネよりもジユカインのほうがポケモンたちに恐れられるようになったらしい。

だがジユカインは変わらず、ただひたすら強さを求めて技を鍛え、そして大樹の世話が続いている。

第三十六話～兄は様々な真実を知る～

こんにちは兄のサトシです。今回少し気になることがあったため、ピカチュウたちがポケモンセンターで回復している間にタケシたちに出かけてくると言って鏡の前に来ました。鏡は誰もいない部屋に設置されている大きなもの。身体が余裕ですべて映し出せるとても大きな鏡の前で俺は小さく口を開く。

「…おいギラティナ。そこにいるんだろ」

そう呟くと鏡はいきなり豹変し、大きな影が見えてきた。鏡から竜巻のような風が出てきて、俺を巻き込んでそのまま反転世界へと入ることができた。そして無事地面に着地し、前を見る。

前にいたのはギラティナ。人間の姿ではなく、原作で出てきたポケモンの姿で宙に浮いていた。

だが一度瞬きをすると一瞬で人の姿をとり、俺の目の前へとやってくる。前に見た金髪男になって楽しそうな表情でそいつは笑っていた。

『呼んだ?』

「…呼んだよこの野郎。お前なんで俺のこと主人公って呼んだのか教えろ」

『あらら…いきなりすぎじゃね? もうちよつと話を盛り上げてさー』

「お前と話す時間も惜しいくらいない!」

俺がそう断言するとギラティナは大げさにショックを受けましたという表情になる。落ち込んで座ったため、俺も隣に座り、さつきと話せと急かす。するとギラティナはつまらなそうな表情になった。

『全く仕方ないな。…俺は君と、まあ同類かな?』

「つまり——」

『同じ転生者ってこと! 気がついたらギラティナになってたんだよねー!』

ギラティナの言葉に、俺は驚愕するよりも納得してしまう気持ちのほうが強かった。まあこんな女大好きな変態が原作の方のギラティナって言われたら全国の子供が悲しむだろうからな。

でも少しだけ気になることがある。

「お前が俺たちをこの世界へ転生させたのか?」

『俺たち…？いや、俺は何もしてないよ。たぶん君と同じように生まれ変わったんじゃないかな？』

「なるほどな…」

この世界に生まれたのには何か原因があるのかもしれないと思ったけれど、ギラティナは知らないと言って首を横に振る。それを見て俺は考える。もしかしたら俺や妹、ギラティナのようにまだ転生している人がいるのかもしれないと思ったのだ。…ああでも、人ではなくポケモンの可能性というのも否定できないのだけれども。

そんなふうにいると、ギラティナが俺の顔をじつと見つめて考える様に小さく呻き声をあげ、目を細める。

『なあやつぱり性転換を——』

「しつこい!!!」

なぜそこまで性転換などにこだわるんだろうか。まあ伝説だったら結構何でもありだし、ミュウにも人間からポケモンへ変えるやり方もあると聞いたことあるからこいつが本気を出せばできるんだろう。でもせめて男を女に変えるんじゃないかと、ももとの女性に声を掛けると言いたい。…でも本気で行動したら世の女性たちが哀れになってしまうからやめておく。

だが、ギラティナは悪戯っ子のような表情になって俺に向かって言う。

『…君って、前世女の子だったろ？だったら俺、女性に声かけてるってことになるし。そっちの方がうれしいし！性転換だけでも——』

「せいやツツ!!!」

『危なツ!!サトシ君今本気だったでしょ!!?』

「…チツ」

『舌打ち!?!』

ドヤ顔で俺の前世の性別言い当てたため、そして俺を女性とカウントしたため、ムカつく顔面に向かって殴りかかったというのに躲された畜生。さすがは伝説…と聞いたいが、こいつと同類のパルキアとディアルガは俺の攻撃を避けきれなかったという事実を知っているの、おそらくこいつ自身の強さなのだろうと理解した。

—というよりも何故性別を言い当てられたんだろうか。俺はギラティナに強く睨み付けつつも言う。

「お前本当に転生させた原因じゃないのかよ？何で俺の元性別を言い当てられた？」

『いやあーだって俺、伝説だからね。君から女の子の良い香りがしたから絶対に前世は女の子だと思ってた!』

「気持ち悪いツ!!!」

駄目だこいつ。女の子好きすぎて気持ち悪くなってきた。何だよ香りって意味わか

んねえよ！

.....

『あ、そう言えばヒトカゲの卵をミュウに持たせて贈ったんだけど届いた？』

「…あれもお前のせいだったのか。いや、あれは妹のヒナが受け取ってちゃんと育ててるぞ」

『…え？妹いたの!?…あ、そういえばそんなこと言ってた気がする…え、大丈夫…だよねおそらく』

何か不吉なことを言ってきたので俺はギラティナの胸倉をつかみ、睨み付ける。

「ヒナやヒトカゲの身に何が起きるっていうんだよ。ちゃんとはつきり言え」

『グフオ…ちよ、言う！言うから離して苦しいから!!』

胸倉をつかんだまま思いつき揺らすとギラティナが呻き声を上げて叫ぶ。きつそうな声を上げていたため、俺はすぐに胸倉から手を離れた。

ギラティナは少し深呼吸をして乱れた息を落ち着かせた後に口を開く。

『あの色違いのヒトカゲは多くの人間に求められていたんだ』

「……………」

何を言っているんだろうと思った。でも少し嫌な感じがした。ギラティナはミュウに卵を託し、俺ではなく間違つて妹のヒナに贈られた色違いのヒトカゲの卵。その理由に気がついてしまった。

『…あのヒトカゲはいわばポケモンを売り買いする犯罪者にとつて望まれて、そして求めてきた卵だった。色違いの卵を生み出そうと犯罪者たちはかなり躍起になっていたみたいだね。ヒトカゲの両親は犯罪者たちの欲望の犠牲となつてしまつたんだ』
「それって…」

俺は理解してしまつた。おそらくその色違いを求めた犯罪者たちは卵を大量に生み出して、色違いを求めていったんだろう。色違いではなく普通に生まれたヒトカゲ達はどうかつたのかわからない。けれども妹と共にいるヒトカゲの両親の行方とその哀れな末路を知つてしまつた。だからそのヒトカゲ達も同じように不幸になつてしまつているのではないかと考えた。今までに聞いた話より、酷く不快に思えた。俺は拳を握り、怒りに震える。

そんな様子を見ながらも、ギラティナは話を続ける。

『犯罪者たちの望み通り、色違いの卵は生まれた。でも、そいつらの手に渡る前に俺が奪つた。あの時偶然出会つたりザードン達に…命の灯が消えていくヒトカゲの両親に

必死に頼まれたんだ。俺にこの色違いの子供を幸せにしてくれる場所まで連れて行ってほしいって……。今まで生まれてきた子たちの分も幸せになってほしいって……。だから俺はミュウに頼んで無事にマサラタウンまで行ってもらった。主人公の君になら大丈夫だと。必ず色違いのヒトカゲを幸せにしてくれると——それが、君に託すはずだった卵なんだ』

「待て……それじゃあ……！」

『そうだね。犯罪者たちは消えてしまった卵を……色違いの卵を探している。それに普通のトレーナーたちもその色違いを求めてしまう。……マサラタウンなら平気だと思うけど、妹さんには気をつけるように言っておいた方がいい』

「……………ああ」

『……ごめん。本当なら俺がちやんと様子を見ておく必要があったんだ。言い訳になつてしまうけれど、これから戦いは激化する。今マサラタウンに行く余裕は残っていないから……それで——』

「——いや、大丈夫。教えてくれて、ヒトカゲを救ってくれてありがとう」

俺はギリテイナにお礼を言って、きつく目を閉じる。ギリテイナはただヒトカゲを救いたかったから行動したんだ。そしてそれは間違って妹に贈られてしまったけれど、ヒトカゲは幸せに暮らしているのだからギリテイナに文句を言うつもりはない。

ただ、ギリテイナに言われた言葉を繰り返して考えた。マサラタウンには頼もしい皆がいるし、大丈夫だと思いう気持ち強い。

でも、少しだけ嫌な予感がした。

第三十七話くヒトカゲは泣き、傷ついたく

こんにちはは妹のヒナです。最近ヒトカゲと一緒に温かい日差しに当たりながら気持ちよく散歩することが増えました。今日はこれからオーキド研究所に行く途中なので

「ヒトカゲ！今日は何して遊ぼつか？」

『カゲエ？……カゲカゲ!!』

ヒトカゲが笑いながら私に何かを言ってくれ。その姿がとても可愛らしい。

につこりとご機嫌になりつつも、私たちはオーキド研究所までの道のりをひたすら歩いていく――。

「よお、お嬢ちゃん？」

「…誰ですか」

『カ、カゲ…』

目の前に現れたのは強面のかなり身体が大きな大人の人たち。数えると6人くらいの男の人たちが私たちの行く道を阻む。私は怯えるヒトカゲの手を掴み、大丈夫だと落ち着かせながらも目の前にいる大人たちを睨む。だが大人たちはニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら私たちの周りを囲い、逃げられないようにしていく。

「お嬢ちゃん。そのヒトカゲって色違いだろ？良いもんもってんなア？」

「ゲヒヤヒヤヒヤ！お前みたいなガキにそれはもったいねえよ!!」

「そうそう！俺たちならうまく使いこなせるぜ？」

「……………」

『カゲ…』

なんか言い方、表情、その他もろもろがムカつく。ヒトカゲを使いこなすってなんだ。ヒトカゲは道具じゃないのに。でもこのままここには危ない。私はバトルというものをしたことがないし、怯えているヒトカゲにそんな無理強いはできない。ここから

離れてはやくオーキド研究所に向かわなければ…。

震えて私にしがみつくヒトカゲの手を引っぱり、抱き上げてここから逃げようと動く。

けれどもそれを大人たちが邪魔をする。大人たちはそれぞれオニドリル、ストライク、アーボックなどのポケモンを出してきた。

「おいおい逃げることはないだろう？ ストライク、ガキどもにでんこうせっかだ！」

「っー！」

『カゲツ!!』

ストライクが私たちにでんこうせっかで攻撃してきた。素早い動きで見えづらいが、一応ミュウツーとの鍛えもあつてヒトカゲと共に技を躲すことができた。でもその後にアーボックやオニドリルが襲いかかってきたため、私はヒトカゲを庇って攻撃に当たってしまった。私は攻撃を受けた影響で後ろへ吹っ飛ばされた。

『カゲツカゲエ!!』

「だ、だいじょーぶ…けどはやく逃げて…！」

ヒトカゲが私に抱きつき、傷は大丈夫か、平気かと泣き叫ぶ。私は自身の身体よりもヒトカゲの方が危ないことを分かっていたため、早く逃げろと必死に言う。けれどもヒトカゲは首を横に振り、ここから離れないと泣きながら仕草で示す。それを見た私は二

ヤニヤと近づく大人たちからどうやって逃げようか必死に考える。アーボツクのかみつく攻撃によって足をやられてしまったため、歩けることができるかどうかわからないけれど、それでも必死にヒトカゲを逃がす方法を考える。けれどヒトカゲは大人たちの方に向き、ひのこで威嚇して自分たちの方に来るなど泣きながら叫ぶ。

(…いきなり技を人もろとも当てるってどういう神経してるのあいっらー!)

『カゲエ!!!』

「おおつとやる気か?でも色違いでもお前レベル相当低そうだよなア?」

「ヒヤハハハ!俺たちに勝てるわけねえだろ!」

「そうそう。おとなしく捕まった方がお嬢ちゃんを余計に傷つけなくて済むんだぜ?」

「…っ…ヒトカゲ、耳を貸さないではやく逃げなさい!!」

『カゲカゲエ!!!』

「まあだそんなこと言ってるのか…よ……………」

——— 大人たちが私たちよりも後ろの方を見て動きを止めてしまった。

何かをみて驚愕しているような…そして恐れているような…?

『何をしている貴様ら…!』

「あれ…なんかいいばいいる」

私とヒトカゲが後ろの方を見ると兄のポケモン、伝説のポケモン、あとルカリオがいました。全員の表情が般若みたいになって私たちは大人たちよりも怖いと思ってしまう。私の近くにルカリオとミュウがやってきて、私たちを大人たちから離す。そして同時に他のポケモンたちが一気に大人たちに襲いかかっていた。

…すぐく、悲鳴が聞こえます。

『ミュウ…ミュウ?』

『すぐに治してやるからじつとしていろ!』

「…あ、ありがとうルカリオ、ミュウ」

『カゲエ!』

『ヒトカゲ、もう大丈夫だ』

『ミュウ!』

ルカリオが大人たちの攻撃によって傷ついた私にいやしのはどうで治してくれた。

大人たちが最後まで生きてられるかなとちよつと同情した。

特にフシギダネとミュウツウのキレた声が怖すぎる。口調が変わりすぎてるよミュウツウ。フシギダネも派手にソーラービームを撃っているのがルカリオ達の隙間から見えるから…つてソーラービームつてあれ人に当てていいのか？

そんなことを思っていたら身体に小さな衝撃が当たり、よく見るとその正体は泣きながら震えるヒトカゲだった。

『カゲカゲッ！』

「ごめんねヒトカゲ…」

ヒトカゲがずつと泣きながら私に抱きつき離れずにいる。それを見ていて悲しくなってきた。

あの時ちやんと逃げていられたら、ヒトカゲのことを傷つけずに、泣かせずに済んだのではないかと思つたからだ。傷を治したルカリオが私とヒトカゲの頭を優しく撫でてくれた。その顔からは無事でよかったと心から思っている安堵の表情を浮かべていた。

そしてラティアスもこちらに近づいて私とヒトカゲをまとめて抱きしめてくれた。その瞳にも涙が浮かんでいて、無事でよかったと言っていると分かった。

『…ヒナ、ヒトカゲ。もう無茶はするな』

『ミュウ!!』

『キューン!!』

「…うんごめん…ありがとう」

『カゲエ…!』

.....

「…で、その後は?」

「うん。皆が私とヒトカゲのこと助けてくれたよ。…あ、お兄ちゃんその人たちのこと潰しに行こうとか考えないでよ可哀想だから!」

「一応考えておく」

「考えておかない!」

「…まあそれで、ヒナ。今ミュウツーと話したいんだけどあいついるか?」

「え、うん呼んでみればいると思うよ?…どうしたの一体?」

「…いや、ちよつとやるべきことが見つかったただだよ」

第三十八話　妹は変わることを覚悟した

「こんにちは妹のヒナです。襲われた事件の影響で皆が過保護になりました。

え、大人たちがどうなったのか気になる?…まああれですよ。ポケモンたちにぼっこぼこにされた後、伝説に関する記憶を消してジュンサーさんに引き渡しました。大人たちはボツコにされた影響でポケモン恐怖症になったそうですよ。…やりすぎだと思いますよね私もそう思います。

しかもその後オーキド研究所に泊まれとみんなが言って来たり、家とオーキド研究所を行き来する場合は必ずルカリオが一緒にいないといけなくなりました。…まあ仕方ないと諦めます。

でもこれだけは諦めきれない。

「お願いします私たちを強くしてください!!」

『カゲツ!!』

『…ダネ』

今いる場所は兄のポケモンたち、伝説たちが勢ぞろいしている広場の前。広場ではたまにみんなが集まって模擬バトルをすることがあるため、私たちはその時間を狙って頼みに行くことにした。しかも今日はルカリオも一緒に来ているためちよいどいいと思えた。ルカリオの力もすごく強いからだ。

出来ればその模擬バトルもやってみたいという気持ちで。私とヒトカゲは一緒に土下座をして強くしてくれと一生懸命頼む。

どうして強くなりたいと思ったのか。それはあの事件がきっかけだった。

私はヒトカゲを守ろうとして守りきれそうになかったから。ヒトカゲは私に怪我を負わせてしまい守れなかったから。お互いが強くなりたい、守りたいと願ったから一緒にこうしてみんなに頼みに行くことにしたのだ。

でも皆微妙な表情をして私たちを見ている。ルカリオとフシギダネが同じような表情をしていた。ベイリーフ達も不安そうな表情を浮かべている。

やがてルカリオがこちらに近づいてきて口を開く。

『……ヒナにヒトカゲ。お前たちはまだまだ幼い。強くなるには早すぎる』

『ダネ……ダネフシツ』

『ベイベイッ!』

「……でも、私たちはこのまま守られていたくはないの……ちゃんと強くなりたいの!」

『カゲエ!!』

皆が微妙な表情で私たちを見てくる。おそらく皆、私たちが幼いからまだ強くならなくてもいいというのだろう。トレーナーの適正年齢にも達していないし、まだまだ周りのみんなに守られてもいい子供だと考えているのだ。でも私とヒトカゲはそれで納得しない。

守られるだけでは何も変わらず、また危ない目に遭つてもみんなを待つか逃げるしかないというのにはもう嫌なのだから。

私たちの強気な目にジユカインがこちらに近づいて肩を掴み頷いてくれた。

『ジユツ』

「ジユカイン……!」

『カゲカゲ!』

『ダネダネ!』

『待てジユカイン! ヒナたちに修行をしてもらおうというのか?!』

『俺もいいアイディアだと思おうが?』

『ああ、確かにそうだな』

フシギダネとルカリオがジユカインに対して反論する。だが、ミュウツーとルギアもジユカインの意見に賛成なのか頷いてくれた。他にも兄のポケモンであるヘイガニ、ヘ

ラクロス、ワニノコ、オニゴリーなどどんどん賛成してくれるポケモンが増える。

『ダネー！ダネダネ!!!』

『そうだ、フシギダネの言うとおり、お前たちはヒナたちが危険な目に遭ってもいいと言
うのか!?強くなったと判断して、それでまた襲われたらどうするつもりだ!それにまだ
幼いのでから急に修行などやらなくてもいいだろう!!』

「何もしないでそのままでもいいと思いたくない!ただ襲われて:~:それでみんなの助
けを待っているだけじゃ嫌なの!!それに強くなったとしても自分から危険なところ
に行こうとはしないよ!危険だと判断したらちゃんと逃げる!だからお願いします!私
とヒトカゲと一緒に強くなりたいって心から思ってるから!!!」

『カゲエエ!!!』

『:~:いいじゃないか。あの時のように不快な思いを優れたる操り人の妹にさせるわけに
はいかないだろう。それに私は、2人がこのまま強くなり成長しても心が歪まず、操り
人のように立派に育つと思っている』

『俺は最初からこいつらを鍛えることに賛成だった。どのみちサトシのトラブルメー
カーによって巻き込まれることも多くなるだろうし、強くなることに問題などない』

『…ダネ』

フシギダネが私とヒトカゲにつるを伸ばして頭を軽く叩いた。それはまるで、無茶にするなどというような感じだった。そしてルカリオや反対していた他のポケモンたちもため息をつきつつ、頷いてくれた。

「みんな…よろしくお願ひします!!!」

『カゲカゲエ!!!』

『——— ツツ!!!』

.....

『よしではこれから修行を行おうか』

「お願ひします!」

『カゲエ!』

『まずは何がいいか…』

『ああ、まずは操り人の妹の逃げ足を鍛えるというのはどうだ? 私の三鳥たちを呼んで技ありの追いかけっこでも…』

『…ジユカ』

『なるほど、確かにジユカインの言うとおり技から避けるというのにも必要な力だろうな。ヒトカゲはともかく、人間であるヒナにも一緒に模擬バトルを受けてもらった方がいいと思うが?』

『ハイハイヘーイ!!』

『ワニワニ!!』

『ヘラクロオ!!』

『いや待て。お前たちはただ単にバトルをしたいだけだろう。ならば良い方法がある。ヒナとヒトカゲには跳躍を伸ばすためにまずワニノコのみずでっぽうとヘイガニのバトルこうせんで空から——』

『ダネダネエ?!?!ダネフツシツ!!』

『フシギダネの言うとおり。まず人の弱さや身体の限度というものを知れ!!さっそくヒナとヒトカゲに無茶をさせる気か?!?!?』

『ベイリー?!?!』

『キュ————ンツ?!?!?』

「うう……ど、どんと来い……！」

『カゲ……カゲエ！』

第三十九話～兄はいろいろ改造した～

こんにちは、兄のサトシです。最近シンジやジュンからバトルを挑まれる回数が増えて忙しくなってきました。

バッチの数もそろそろ揃いつつあり、はやくリーグに行きたいと思っています。

…え？前回登場したときになんかやる気になってたって？ああまあそれは後々…今はまだ準備も何もできていないからな。

あと、いろいろと面白そうなことがあるのでやろうと思う。

「デンジさん…ちょっといいですか？」

「…なんだ？」

今回やりたいことというのは、俺とオーバさんとのバトルを見てやる気を出したのは

いいのだが、ロケット団ではない悪党がナギサタワーを乗っ取り占拠したタワーについてだ。

：ロケット団がでなくなつてトラブルが急激に減つたのはいいけど、たまにこういった悪党が出てきて困るんだよな。

その後、俺たちでなんとか悪党を捕まえることはできたが、ナギサタワーが停電を起こしてしまいジムも壊れバトルすることが困難になつたため、デンジさんとのバトルは延期になつてしまつたのだ。

俺はそれならばとデンジさんに話しかける。ジムを直していくのならば、ナギサタワーをちゃんと制御するのならもつといい方法があると考えたのでそれを提案することにしたのだ。

デンジさんの作つたナギサタワーは町の電気の供給源となつている。だからタワーが駄目になつてしまうと一気に停電になり、ゲームのようにいろいろと不備が起きて今回のようにバトルできなくなつたり必要な電気がなくなつてゲームのように町に行けなくなつてしまつたりというのは妹から前に話で聞いていたから、それならばもつとよく改善できると思つた。

ソーラーシステムで電気をつくり、ナギサタワーで制御しているという話をオーバさんから聞いた。ならば、他にも電気を作り出すシステムをつくり、もつと効率よく使え

ないかと思えたのだ。

「デンジさん。ナギサタワーだけでなく、ポケモントレーナーにとってバトルにふさわしい設備、そして二度と停電を起こさないように改善していく良い案があるんですが、ちよつと話に乗りませんか？」

「……いいね。面白そうだ」

「デンジさんはやる気のような。俺は小さく笑みを浮かべて話を続ける。どうせしばらくバトルできないのなら、いろいろと町全体を変えていったらいいと思っっているからいろいろ改善していこう。」

そしてできたのは町とジムのちよつとしたセキュリティシステム。

あの悪党がタワーを占拠するという事件が起きたから二度と起きないように設定したシステムだ。

ナギサシティのなかで何か悪さをしていた場合、もしくははしろうと行動した場合は警備システムが作動し、動き出したロボットが今回新たに作り上げた地下のベルトコンベアに落とし、また町の道路にいた場合は機械的な落とし穴が作動して自動的にベルトコンベアに行くように設定した。

ベルトコンベアがどこに行くのか。それはもちろんナギサのジムだ。だがジムは来

る人の性格ややり方によって難易度が変わる設定にすることにした。変わると言ってもそのトレーナー本人がジム挑戦への道を自分で決めてもらうというものだ。

ジムに挑戦したいというトレーナーも来るだろうから、電気タイプ専用のバトルや、普通のバトル等もできる様に設備を整え、出入り口はちよつとした分かれ道を作る。分かれ道はもちろん様々なバトル場へ直行する道とアスレチック場へ行く道の2つになっっているのだ。

ジムは挑戦者の2つの選択を選んでもらい、バトルに直行するか新たに追加したアスレチック場から挑戦していくか決めてもらう。

アスレチック場は挑戦者とポケモンとのコンビネーションを整え、心を一つにし十分やる気が出る様に小さな仕掛けを用意し、それを突破すればジムに挑めるようになっていく。そしてその挑戦を途中でやめ、すぐバトルがしたいというのならまた分かれ道へ戻り、バトル場への道を進めばいい。

少し面倒だと思いかもしれないが、ポケモンとコミュニケーションを取るには最適であり、デンジさんのポケモンもアスレチック場で鍛えることがあるから作って良かったと言われた。

だが一番の役割はアスレチック場がベルトコンベアから運ばれてきた悪党には無慈悲に捕まえ、反省してもらうためにジユンサーさんが来るまでの間、電気を作る役目を

担ってもらふことだろう。

電気を作る役目というのは、警備システムが作動すればアスレチック場は自動的に悪党用に変えられるということだ。悪党用のアスレチック場は：まあいわゆるピタゴラスイッチのような仕組みになっていると言った方がいいかもしれない。最初に悪党がアスレチック場に入ると鍵がなく扉があかない出入り口ととても高い壁がある部屋へ閉じ込められる。

悪党が逃げようと走れば、ハムスターの回し車のような機械が作動し、走れば走るほど電気がたまっていく。だが、悪党から見たら走っても走っても出口につかないという状態に陥る。それ以外にもロッククライミングのような仕掛け、ドミノ倒しのような仕掛け、コマ回しのように悪党自身が回されたり、機械に追いかけられたりとまあいろいろと作っていった。そしてそれらが悪党に使われ、作動することでちよつとした電気を作ることができて、ソーラーシステムとは異なつた非常電源のような役割になるだろう。

そして、もしも挑戦者がいる途中で悪党が捕まつた場合は悪党はベルトコンベアに檻が作動し、挑戦者とのバトルが終わるまではその中にいるように設定されている。そしてそのまま運良くジュンサーさんが来た場合は外に出されて逮捕されるが、まだ来ない場合はアスレチック場でいろいろと働いてもらうということだ。

まあいわゆる行きはよいよい帰りは怖い?…いや、これ行きも怖いになるな。

悪党にとっては強制的にその地獄のアスレチックを堪能し、挑戦者はポケモンと力をあわせてジムへ進む道を選び、バトルに挑む。そういったナギサシティに改造されていった。

俺はまた時間が経ってから町の変えられていったシステム見て、デンジさんとお互い顔を見て頷き、親指を立てて満足した笑みを浮かべる。

「うまくいきましたね!」

「ああ。けどもつと改良していいシステムにしていくよ」

「はい楽しみにしてます!」

『ピッカツ!』

俺とデンジさんはお互い力強く握手して、またナギサシティに来ることを約束した。その時が楽しみだと思っている。…でも俺たちの後ろにいたヒカリたちが微妙そうな表情を浮かべていたのは何でだ?

後々聞いた話では、町で悪さをした者みな終わるだという噂が流れ、果敢にも挑戦したシンオウ地方で指名手配されている極悪が捕まったり、ジムの挑戦者が皆アスレチックに挑んだりと繁盛するようになったらしい。

でもオーバさんはやりすぎだとデンジさんによく注意しているみたいだ。…これでもまだまだ足りない方だと俺もデンジさんも思っているのにな？

第四十話く妹と相棒が忍者を目指しそうですく

こんにちは、妹のヒナです。今私とヒトカゲは修行中なのです。まだ年齢が二桁になつていないうちからかなりの身体能力を身につけそうで怖い日々を過ごしています。

…これ、兄よりもスーパーマサラ人とか、歩く人外魔境とかいわれたらどうしよう。今までに聞いた話だとジョウト地方での兄は《人の形をした伏魔殿》という通り名になつているらしいですよ。兄が旅することに関わらず、いろいろな噂を聞き、通り名ができてしまつています。

私としては兄のような通り名を作りたくはないです。

でも挫けないように強くなりたい、ヒトカゲを守るために頑張りたいとは思っていますし、スーパーマサラ人になる気で努力しようと考えているのでとりあえずみんなに恐れられないようにしてみます。…できればヒトカゲと共に普通に強くなつて周りに普通だと言われ、普通に生きていければいいと思っています。

でも最初の方は結構みんな私たちに怪我を負わせないようにしていたけれど、何だか最近だと周りがやる気に満ちていて修行が凄まじいです。

え、今？ ヒトカゲと共にかくれんぼをしています。鬼は私とヒトカゲ以外のオーキド研究所にいるポケモン全員だったりします。伝説含めてですが…。

『カゲ…！』

「っ…来た」

ポツポツたちの鳴き声と姿が空から見えてきた。そして遠くの方でピジヨットの声も聞こえてくる。おそらく飛びながら私たちを見つけようとして探しているのだろう。今は森の中で息をひそめて誰も来ないことを祈る私とヒトカゲ。ここらでは強敵のフシギダネやジュカイン、ベイリーフが探しに来ることはないと分かっているため、とにかく気をつけるべきは空にいる飛行タイプだ。とくに飛行タイプであり、兄のヨルノズクがすぐに私たちを見つけないと気がつけないといけない…。

でもヒトカゲは普通に炎がでているため、暗い所に隠れても目立つ。だからわざと明るい場所において、なおかつ姿がその場所と同化し、見えないように日向の方にいるのだ。

まあいわゆる木を隠すなら森の中という作戦かな。つまり火を隠すなら日向の中です。ポツポツが空でぐるつと回ってから行ってしまふのを確認して、私とヒトカゲは息をつく。どうやら見つかつてはいないようだ。

でも後ろの方からガサガサと音がして、私たちはすぐに警戒し、体勢を整えてから見つからないように急いで木の上を登っていく。私とヒトカゲはもうミュウツウのサイコキネシスがなくてもちゃんど木に登れるようになったし、こうして探しに来たポケモンたちから見つからないように静かに登るといふやり方も編み出した。

…一番最初の頃にかくれんぼ修行をしたときは本当に酷かったです。もう瞬殺だった…。

私たちはかくれんぼをやるごとにどのように隠れていくのか、どう走り逃げていけばいいのかを学んでいった。それが今のかくれんぼで誰にも見つからないという成果をだしている。

木の上に隠れ、ヒトカゲはちゃんと火が目立たないように日向の方に尻尾を向けて明るさを周りと同じにする。そして下の方を見ると探してきたであろうワニノコが周りを必死に見渡していた。いきなり上を見上げられて見つかる困るのですぐに身体を引き、大きな枝で下からは見えないうちに工夫をしていく。ヒトカゲは音を聞いて周りを確認していた。後ろの方に何かあるのか時々後ろを振り向いたりして遠くを必死に

見ている。でも私が後ろを見ても何もいないし聞こえないので、おそらくポケモンにか聞こえない範囲のところに鬼、もしくは鬼たちがいるのだろう。

そのため気は抜けないのであるべく音をたてないように、まだ下にいるであろうワニノコに見つからないようにやり過ごす…。

『…ポツポツ!!』

『ワニイワー!!』

「ツ…ヒトカゲ、えんまく!」

『カゲツ!』

木の上で警戒していたら、突然空からポツポツの音が聞こえて見つかったと判断した。しかも木の下にいるワニノコもポツポツの声に気づき私たちがいると分かっていたらしい。このままでは捕まってしまうと考え、私はヒトカゲにえんまくを指示する。えんまくは少し前にヒトカゲが覚えた技だ。

しかもヒトカゲのえんまくは通常のヒトカゲがやるえんまくとは違い、広範囲に使えるようになっていて、というよりも覚えて間もないのに、広範囲にできるようにならな

いといけないぐらい鍛えられたため、ポツポのところからワニノコまでえんまくで見えなくすることができた。もちろん私たちのところも真つ暗だけれど、今の私たちなら問題ない。

『ワニツ!?!』

『ポツポウ!?!』

「よし、飛ぶよヒトカゲ!」

『カゲツ!!』

今の騒ぎで鬼たちが集まる可能性が高いと判断し、私とヒトカゲは木から飛び降りて生い茂っている草に着地する。大きな草がクッションとなり、衝撃は和らげてくれたので怪我はない。

このまま私たちは鬼たちから逃げるため走って移動する。そして岩がごつごつとしていて、草木がほとんどなく地面が多い場所までやってきた。私とヒトカゲは大きな岩に逃げ、隠れる。

その場所は空からは丸見えになってしまったためかなり危険な場所だが、森の中にいるとされた以上はこちらにいた方が安全だと思っただからだ。

ヒトカゲが周りを確認し、私は次にどこに移動し隠れるのか考えつつも息を吐いて気を落ち着かせる。ヒトカゲも緊張しているみたいだけれども、今までのように震えたり

怯えたりはしていない。見つからないように気をつけて警戒するのを怠らないぐらい立派に成長したと私は思っている。

…そろそろ来るかな。

伝説は最初つから私たちを見つけようと行動はしない。しばらくの間は待機して、時間が来たら一度上空に合図をしてから鬼として私たちを探しに行動を開始するのだ。伝説たちが探すと一瞬で終わることが多かったため、すこし時間をおいてから探すことを皆で決めた。まあ伝説の力って常識外が多いからね…。

かくれんぼの修行をするときはそろそろ今ぐらいから合図を打ち上げると私たちは理解していた。そのためあまり体力を使わないように気をつけて移動して、休める時は休むようになった。たぶんこれは旅にも役立つと思うけれども、今のところそういう旅はする気ないし、とにかく力をつけることが先なのだ。

ドオオオオオオオンツ————。

「…合図だ」

『…カゲツ!』

「っ!!」

上空からはかいこうせんが見えてきたので伝説たちの合図だと分かった。その合図から一瞬でミュウがテレポートで近くにやってきたため、私たちはとっさに隠れる。

だがヒトカゲが何かに気づき、後ろを振り向くとフシギダネが私たちを見つけて遠くから走ってきているのをみて慌てて逃げた。

『ダネ!!』

『ミュー!!』

「ちよっ…ヒトカゲもう一度えんまく!」

『カゲツ!!』

フシギダネがつるのムチを使って私たちを捕まえようとしていて、ミュウもフシギダネに気づき私たちを見つけてサイコキネシスを発動しようとしたため、ヒトカゲにえんまくでまた逃げる作戦にでた。

———だが。

『クウ——ン!』

「ラ、ラテイオス……!」

『カゲエ……!』

『ダネダネエ!!』

『ミューウ!!』

ラテイオスに捕まってしまい身動きがとれなくなつたため、かくれんぼは私たちが負けたと理解した。えんまくにやられたフシギダネとミユウもすぐに私たちの後ろに来て勝利したと知る。そして、フシギダネが日の傾きをつるで指してもうすぐ夕方だと言い、今日の修行は終了したと分かつてしまった。

まあこんな感じで私たちの修行は続いています。

「つ、次こそは……!」

『カゲカゲ……!』

第四十一話　兄とシンオウの頂点は似ているらしい

こんにちは兄のサトシです。まだ時期が整っておらず、準備も終わっていないので焦っている毎日を過ごしています。

今日シンオウのチャンピオン、シロナさんに再会しました。なんだか俺と似ている部分があるようでよく気が合います。

そして今は町角のちよつとしたアイス屋さんの近くにある公園でのんびりしています。アイスを奢ると言われたので、ついに行っただんですが、アイスを大量に注文したら待っていてくれとすごく慌てた表情で店員に言われたため、ここで椅子に座つてのんびりしながら話しているのです。

「——そうね。サトシくんの言うとおり、決められた技を使うよりもまったく新しい技を考えた方が面白そうよね」

「ですよね。ポケモンバトルでどう技を決めていくのか、攻撃をかわしていくのかはトレーナーの個性に合わせて違ってくるし…何よりトレーナーの力が備わっていなければポケモンも100%の力を発揮することなど困難ですよ」

「納得できるわ。旅人のトレーナーはほとんどが初心者用のポケモンを貰い、旅をする。その旅の中でトレーナーとの時間や鍛え方によってポケモンの能力や力、技も異なってくるもの…でも最近はテレビやスクールで学んだことを活かさずにまったく同じような戦い方しか見かけなくてつまらないのよね…」

「それじゃあ俺と戦いませんか？俺、ポケモンマスターになるのが夢ですし。今までの経験から学んだバトルの応用やいろんな技を使ってシロナさんに勝ちたいって思ってますから」

『ピカツチュウ！』

「あら、私にバトルを挑むなんてさすがサトシくんね。いいわよじゃあさっそく場所を変えて——」

「ちよつと待ったアアアア!!!」

いきなり大声を出して怒鳴り込んできたのは同じく町で出会ったジュン。あとヒカ

リが悟ったような遠い目をしていて、俺たち何かやったのかと首を傾けて疑問に思った。あ、タケシならシロナさんにメロメロになってグレッグルにどくづきされてました。そして今はジュンの様子に苦笑しながら注文したアイスを取りに向かいます。シロナさんがアイスを大量に頼んでいたから一人で持つて来れるのか…？

「ジュン、どうかしたのか？」

「どうかしたのかじゃねえよ！なんだってんだよ!!何でチャンピオンと親しく話してんの!？」

「サトシくんとはよくバトルの研究でお世話になっているのよ。まあいわゆる師弟関係かしらっ？」

「師弟関係?!…え、師匠がシロナさん？」

「…いや、俺が師匠」

「なんだってんだよ!!？」

ジュンは驚いたような表情でヒカリを見る。でもヒカリは肩をすくめて微妙な表情でシロナさんや俺の言葉に頷いた。

そう、俺とシロナさんは前に一度会ったことがあるのだ。前というのは、カントー地

方での旅をしていて、チャンピオンのワタルさんとバトルしている途中で乱入してきた時だ。

あの時はあれこの女の人って誰？と思っていたが、まさかシンオウチャンピオンだとは思ってもみなかった。

その後ワタルさんから紹介してもらい、俺の新しい技の研究や強さに興味を持ってくれて様々な話をした。何故かその話をしている様子を見て面白がったワタルさんが俺とシロナさんのことを師弟だといってきた。

俺は否定したのだが、シロナさんがそれもいいかもね？といって微笑んできたので、師弟関係となってしまうのだ。

師匠が俺で弟子がシロナさんという普通の人からみたら驚くような関係になったなとシゲルに驚かれ、また新しい技を考えたのかさっそく教えろいや俺と戦えなどと言つてバトルを挑まれたこともあったりする。

まあそれをヒカリに言ったときはジュンと同じように驚かれたんだけどな…。
ジュンは驚きすぎて口がずっと開きっぱなしだ。

それを見ながらタケシがアイスを持ってきてくれたので皆で一緒に食べる。

動きがとまり、アイスを食べる様子がないジュンに比べて、シロナさんとヒカリ、タケシは普通にアイスを食べてのんびりしていた。チョコアイスうまー。

「え、ちよ、シンジもサトシのことよく言ってるし…サトシって一体なんなんだよ!!!??」

「…うんそれ私も聞きたい」

『ポチャツ』

「確かにそれも興味深いけど、サトシくんはミステリアスな方がより魅力的よ?」

「シ、シロナさん!!自分のことはアアアツツ!!!シ、シビレビレ……」

『…ケツ!』

ジュンが叫びだしたと思ったたらかなり賑やかになってきた。ヒカリとポツチャマが俺のことを未確認生物を発見したような目で見るのをやめてほしい、あとシロナさんそれぞれどういう意味ですか。タケシはいつも通りタケシだった。そしてグレッグル、お疲れさま。

「…アイス美味しいな。ピカチュウ」

『ピツカツチュウ!!』

第四十二話く妹が常識からはずれてきたく

「こんにちはは妹のヒナです。夜にヒトカゲと共に反省会を行い、次はどう行動するか考えるのが日課になってます。今日の私たちの目的は皆を驚かせることです。とりあえず昨日の夜にルカリオに手伝ってもらって作り上げた新しい技をみんなに披露したいと思っっています。そしてできれば勝ちたい……！」

「……いいヒトカゲ？私と一緒に頑張ろうね」
『カゲッ！』

今日はヒトカゲと一緒に模擬バトルに参加して鍛える修行をすることになりました。といつても私もトレーナーとしてではなく身体を鍛えるという意味で参加することになっていのですけどね。

『…ホー』

『今日の審判はヨルノズクだ。まず先にヒナとヒトカゲ以外のポケモン同士でバトルをしてみようぞ。ヒナにヒトカゲはそれを見て学べ』

「はいー」

『カゲツ！』

ミュウツーが模擬バトルの説明をしてくれて、ヨルノズクが広場の中心に降りて挨拶する。そして私とヒトカゲはバトルをする範囲より少し離れてしばらくの間は観戦することになった。

本当ならこれから先、兄にバトルを呼ばれる日まで鍛えていくために、そして伝説も強いポケモンと戦いたいという思いからここで模擬バトルをしているというのに、すごく迷惑をかけていると思う。でも私もヒトカゲも強くなりたいと考えているし、みんなもその思いに応えてくれるから頑張りたい。

観戦するのは私とヒトカゲのほかにラティアス、ラテイオス、ミュウ、そしてルギアだ。ルギアはあまり戦いたいとは思っておらず、見学するのが好きらしく、よく私たちの隣に来て観戦している。でもたまに流れ技が来るため前まではそれをはじいてくれたりする本当にありがたかったです。これからはもうちゃんと避けるから大丈夫だよルギア。

『ホーツ!』

『俺から先か』

『ベイベーイ!!』

『ヘラクロオ!!』

『ドンフアーン!!』

ヨルノズクが翼を広げて大きな鳴き声をあげる。すると前に出てきたのはミュウツー、ベイリーフ、ヘラクロス、ドンフアんだ。今回の模擬バトルは4体同士で全員が敵というバトルらしい。このバトルは一度誰かから攻撃を受けたら負けで、最後まで残るポケモンを決めるというルールになっている。ちなみにこの次に私とヒトカゲが参加する。私とヒトカゲをまとめて1つだと考えているため、次は5体でバトルすることになるのだ。

いつ始まるのかという静寂が起き、4匹ともすぐ攻撃できるように態勢を整えて待つ。そしてしばらくしてヨルノズクが翼を広げて飛び、空に上がった瞬間4匹が一斉に技で攻撃し始めた。バトルの開始だ。

『ベイ!!』

『ヘラックロオ!!』

『ドンファン!!』

『ふん。俺に技は当たらん…!』

ベイリーフとヘラクロスがお互いを攻撃し、その攻撃をちゃんと避けていた。そしてミュウツーとドンファンが攻撃し合っていた。

そして4体が全員を見て、隙があるのかどうか確認し先程とは違うポケモンに向かって攻撃する。ミュウツーは宙に浮くことができるのでベイリーフたちはそれぞれ物理で挑もうとはしていない。でもベイリーフたちはそれぞれ自分ができる技を出しあい、そしてバトルすることで力を鍛えていった。

——結局、最後に勝ったのはベイリーフだった。まずドンファンがヘラクロスに勝ち、そしてミュウツーがそのドンファンに攻撃して勝っていった。でもミュウツーが宙に浮いてベイリーフの攻撃を避けようとしたのに、大きくジャンプして力強いずつきで勝ち、バトルは終了した。

『ホーッ!』

「…よし！やるよヒトカゲ！」

『カゲエ!!』

『ハイハイヘーイ!!』

『コオオオオオ!!』

『ダネダネ…』

ヨルノズクが地面に降りてきて、翼を広げて大きく声をあげたので次のバトルを開始する準備に入る。

今度は私たちの出番なため緊張しつつも立ち上がり、広場の中心にやってきた。そして私とヒトカゲ以外だとハイガニ、コータスとフシギダネだ。

でもコータスが何故か感動して号泣してしまったため、私たちは泣き止むまで慰める。すぐに泣き止んでやる気満々になったため、ヨルノズクが試合開始の合図をするまで待つ。

一瞬、けれど私にとってはとても長い静寂の後…。

『ホーツ!』

『ダネフツシツツ!!』

『ハイガツ!!』

『コオオ!!』

「おっと…!」

『カゲッ!』

フシギダネが攻撃してハイガニを広場から場外へ吹っ飛ばす。さすがフシギダネ、そしてまとめ役。一瞬で負けてしまった哀れなハイガニは飛ばされる途中でも地面に落ちた後でもかなり悔しがっていた。

そして私とヒトカゲはコータスのかえんほうしやをジャンプして避ける。まだ攻撃に当たっていないので負けてはいない。そしてこれから皆にお披露目だ…!

「行くよヒトカゲ!」

『カゲエ!!』

『コオオ!!』

『ダ、ダネ?!』

ルカリオと共に考え、ヒトカゲと努力して作り上げた新しい技。兄がポケモンに新しい技を教え創り上げるといふのなら、私はヒトカゲと共に技を創り上げよう。そう考え

て一緒に努力した信頼の証――。

「炎のパンチ……！」

『カゲエエ!!』

『コオオオオオオオオオ!!?!?!?!?』

『ダネ……!』

ヒトカゲが私の肩にのる形でひつつき、コータスに近づく。そして私がコータスに殴りかかる体勢をとり、攻撃しようとする時に、ヒトカゲがひのこを放つ。放った瞬間に私の拳の周りにヒトカゲのひのこが灯り、ポケモンの技でいうほのおのパンチができるようになるということだ。人間版なので私は「炎のパンチ」と呼んでいる。まあそのまま呼んでもほのおのパンチだけど区別がつくと思っただけ……。

もちろん最初の頃はひのこを灯した私の手がよく火傷を負ってしまいヒトカゲを泣

かせてしまうことも多かったが、ルカリオに助けてもらいながらなんとかヒトカゲがひのこのコントロールを覚え、そして手に怪我を負わずに攻撃できるようになった。

——何度も何度も練習してできた私とヒトカゲの力なのだ。

私たちがやったことにコータスは驚いて動けなくなる。そして私の攻撃に当たってしまい負けることになった。でも負けたことに悔しいという表情は浮かんでおらず、逆に私たちの技をみて感動してしまい号泣していた。

そしてフシギダネを含め観戦していた周りは私たちの攻撃を見て驚いていたが、同時に感心もしていた。

(よし一勝！)

『カゲエエ!?』

「うわッ!!!?」

『ダネ、ダネフシッ』

一勝したことに喜びすぎたのか、一瞬でこちらに近づいてきたフシギダネに気づかず、ヒトカゲに注意されて振り向いたところにはもうつるのムチで攻撃されて負けが決定してしまった。…ちなみにつるのムチは頭を撫でるくらいの弱さで叩かれました。全然痛くなかったのが余計に悔しいです。

「ごめんねヒトカゲ…」

『カゲカゲ…』

「一勝はしたし…次は私、頑張るからね！」

『カゲエ!!』

第四十三話 く兄がシンオウの元凶ボツコにしたく

こんにちは兄のサトシです。そろそろ来ると鏡からガラティナに教えられたので頑張ってフラグ折ろうと思います。

そしてやってきたのは、ガラティナがディアルガに攻撃しているシーンでした…。あれ、お前ディアルガに対して怒ってたっけ？

タケシ達はこの時に初めてガラティナのポケモンとしての姿を見たため、こいつが本当のガラティナの正体なのか!?!という驚きの方が強く、ちゃんと伝説だったんだ…とヒカリが密かに呟いていたのを俺は聞いた。

そしてシーナさんの力によってガラティナはディアルガに攻撃するのをやめ、俺たちの前に人の姿になって来た…ってまたかよ!!?

『よおヒカリちゃん久しぶり!!俺と一緒にデートしに行こうぜ!』

「え…いやそれはちよつと…」

「お前どんだけだよ!!? ほらあそこを見ろ! ディアルガが微妙な表情でこつちを見てるぞ!!!」

『ギユルアアア……』

『…ちよつとサトシ君。ディアルガは俺じゃなくなつて君のこと怖がつてるみたいだけど?』

「え、俺!?!」

俺は驚いてディアルガの方を見てしまった。するとギラティナが言ってきたとおり、ディアルガはシーナさんの近くで震え怯えていた。ぶっちゃけトラウマレベルの怯えっぷりです。

そんなディアルガを見てヒカリ達があの時のサトシは怖かつたーと他人事のように、そして懐かしいような口調で言っている。

ギラティナも笑いながら俺に向かって言う。

『反転世界からみてたけどあの暴走は凄かつたよね! 反転世界を汚したディアルガとパ

ルキアは許せなかったんだけど…」

『ギュルルアアア…!!』

『ああもう怒ってないよ。ディアルガも怒ってないんでしょ？なら話はこれで終わりにしようー!』

「お前が先にした話だろうが!」

『ギユ…!』

「え、いやディアルガに向けていった言葉じゃないから…そんなに怖がらなくてもいいぜ?」

怖がらないように微笑んでみたんだけど、逆にもっと怯えられてしまった。先程ようやく止まったディアルガの震えが止まらない。もう震えすぎてその振動で地面揺れてんじやねえのって思えるくらいです。そんなに俺のこと怖いのか…。

俺はディアルガの怯えっぷりを見てちよつと悲しくなった。

そして、騒いでいる俺たちにおそろおそろ近づいてきたのはシーナさんとケビンさんだった。だがその顔は最初、ギラティナたちが暴れていた時は真剣な顔をしていたというのにいろいろと騒いでいる俺たちを見て微妙そうな表情を浮かべてしまっていた。

「…えっと…わ、私はシーナ。この遺跡の守り人です」

「…お、同じくケビン…です」

名前を言った2人に俺たちもちゃんと自己紹介をする。するとギラティナがシーナさんたちの方へ苦笑しながら近づき、口を開いた。

『さつきは怒ってごめん。…俺のことは分かる?』

「…はい、ギラティナが人の姿になるというのは昔からの言い伝えで残っていますのでわかります。それに、ギラティナ。あなたはただ誤解をしていただけですから…分かってくれてありがとうございます」

『どういたしまして!とここでこの出会いを祝して一緒にどこかへ——』

「お前もうそれやめろ!!!」

『ピイツカ…』

——まあそんなわけで。その後タケシがシーナさん見て暴走したり、ギラティナもまた一緒になってナンパしたり…。そしてまた竜巻が起きてディアルガと何か人の姿のギラティナが巻き込まれ、それをパルキアが助けたのはいいのだが、俺を見た瞬間怯え逃げるように去っていったのは気に食わなかったといっておく。

あと、ディアルガとギラティナももう何も無い、これで大丈夫だと判断して自分たちの空間に帰っていきました。俺たちは微妙な表情を浮かべているシーナさんたちに案

内されて遺跡の下にある部屋に連れて行ってくれた。

——昔、雷の魔獣と魔獣使いがこの町の運命を変えた。

時空儀の前でシーナさんとケビンさんは、昔の言い伝えや、デイアルガたちが起こした事件の現地を見に行っていたことや、アルセウスが目覚めるといふ話を詳しく話してくれた。

そしてアルセウスが来ていろいろと怒りながら裁きを下していった。もちろんシーナさんは命の宝玉をもって謝りに行ったが、それは偽物だと言われてさらに怒ったり、デイアルガたちが来て止めようとしたけれど人に味方するのか!?!とまたまたさらに怒ったり…とまあ結構すごいことになっていた。

俺としてはギラティナや妹から話を聞いていたし、アルセウスは全然悪くないと思っ
ているから今はあまり行動したくない。

アルセウスではなく元凶を潰せばいいのなら、過去に行つてからやればいいと思っ
——行動した。

「グフオ……な、何だ貴様!!?」

「え!？」

「サトシ!!ちよつと何やってるの!？」

「何って元凶を制裁してるだけだけど？」

「どういふこと!？」

ディアルガに過去の時代へ連れて行ってもらってから俺はすぐに動いた。

騒動に気づいてやってきたギシンに殴りかかり、ドータクンを使ってきたのでそいつも倒してもう一度ギシンの胸倉をつかみ思いつきり顔を殴ろうとする俺に対して、タケシたちが止めようとしてきた。

何故そいつを殴ろうとするのか、何でいきなり暴走するのかと説明を求められたので、俺はまずギシンを一撃で気絶させてから口を開く。

俺はギラティナに説明されたと小さな嘘をついて、こいつが悪いんだと説明をした。

…前世の記憶があつて、他の転生者たちにこれから起きるであろう話を聞いたから、そのフラグを叩き折るために元凶に対していきなり殴りかかったとは言えないから仕方ない。

その間にもギシンの部下たちやポケモンたちが襲いかかったりしていたけど、ピカチュウが全部まとめて電撃でビリビリにしてくれた。さすが俺の相棒。

『命の宝玉…確かに返してもらった』

「はい。未来の子供たちのおかげで…サトシ君のおかげでちゃんと返すことができて良かった…！」

『サトシ…とは…？』

というわけで、俺たちは元凶をフルボッコにして部下の人たちにちゃんと事情を話し、無事にダモスさんを救うことができた。そして、自由になったダモスさんの手によって、約束の日にちゃんと命の宝玉を渡せた。

ダモスさんが俺のことを恩人だといってきたけど、それは過去に飛ばしてくれたディアルガに言った方がいいということを伝え、未来に帰ることができた。

未来に帰ってきたらディアルガたちがボロボロになっっていて、アルセウスの勢いが止

まらなかつたけれど、すぐに過去を変えた時間まで修正され、怒りが静まってくれた。

『サトシ…お前たちの世界は素晴らしいところだ』

「…ああ、そうだな」

俺はアルセウスに面白い人間として興味を持たれ、恩人ということがダモスさんを通じて知られてしまい礼を言われた。

でもそれは俺のおかげじゃない、過去に飛ばしてきてくれたディアルガ、知識を与えてくれたギラティナと妹のおかげだ。ディアルガのことはもちろん、アルセウスにしか言えないけれど、未来で起きた知識についてはギラティナと妹のおかげだということも密かに伝えた。なぜ未来のことを知っているかについても話した。俺たちが転生したことや原作がありその話をだいたい壊しながら旅しているということも。

だが話をしていくうちに、アルセウスはこの世界に異物——つまり転生者がいるということを知っていたみたいだ。でもどうして異物がこの世界に紛れ込んだのか、その原因は偶然起きた現象だと言ってきた。

ということは、俺たちは死んでからこの世界で生まれたのは本当に偶然で、元凶がいてなにかしらの意図があつて転生させたということではないのだ。それを聞いて少し

安心した。俺たちを転生させたやつがいたら潰してやろうかと思ったけど、原因は偶然ならまあ仕方ないと諦められるからだ。

あと、異物といっても俺たちを排除するつもりはないらしい。まあ1人…というか1匹は世界を支える伝説のポケモン、ギラティナだからな。

その後アルセウスは自分の空間へと帰り、ディアルガたちもそれぞれの空間へ戻っていった。

『ありがとうサトシ。お前のことは忘れない…』

「…礼を言うのは俺の方だよ。アルセウス、ありがとう」

これで、すべてが元通りだ。

第四十四話　妹は満足した

こんにちは妹のヒナです。そろそろ修行が終わりそうです。え、全然強くなってないんじゃないかだって？

皆は一撃で敵を倒す力ではなく、逃げる力や隙を作り、すぐに敵から離れる力をつけてもらおうとしていたので、まだまだ子供な私たちにはこのぐらいで十分だということです。幼い子供に無理はさせられないと言う。

でもしばらく経てばまた修行を再開し、身体にあわせて鍛えていくみたいだ。

そして今回の修行に合格をすることが条件となる。それが、不意打ちに対応できるかどうか。もしも大人たちやポケモンたちに襲われたらちゃんと逃げる力は残っているのかという修行をしたらもう大丈夫だと認められる。

なので私とヒトカゲは頑張って修行を終わらせ、皆に安心してもらいたいと思っています。ます。

「……………」

『…………カゲッ!』

オーキド研究所の森でただ普通に歩いている私たち。ちなみに散歩ではない。ポケモンたちが遠くにいたり近くにいたりして気配が読みづらいこの森の中で突然来る攻撃に反応し、逃げるか攻撃するかを判断していくというもの。そして無事に森から外にでられたら今回の修行は終了としてもらえる。

ヒトカゲが何かに気づき、私は警戒してヒトカゲが向いている方向を見る。だがその方向からは何も起きずに突然後ろからみずでっぼうが来たため、私とヒトカゲはすぐに反応し避ける。

だがすぐに横からはっばカッターが飛んできたため、私たちは身体の姿勢を低くした。

「ヒトカゲ、えんまく!」

『カゲエ!』

ヒトカゲがえんまくを使い、周りを見えなくしていく。すると周りからいろんな鳴き声が聞こえてきた。私とヒトカゲはそのまま走り、その場から離れた。一応これで先程

攻撃してきたポケモンたちから離れることができた。距離をちやんと考え、走っていた速度を緩め、立ち止まる。そして周りを見渡して警戒していく。私から見ると周りはポケモンたちがこちらをうかがっているようにしか分からないため、ちやんとわかるヒトカゲに聞いてみた。ヒトカゲも周りの様子を確認し、何か問題がないかどうか気を付けているようだ。

「…平気？」

『……カーゲエ』

しばらくするとヒトカゲは頷き、今は平気だと教えてくれた。けれどいつかは必ず攻撃しに来るため警戒は怠れない。私たちは少し休憩してからまた歩き出す。歩いていてもここは森の中…しかも迷いの森とポケモンたちからいわれている所だから、どこに行けば外に出られるのかは分からない。けれどいつかは出られるはずだと私たちは歩き出す。…もしも今日森の中で迷っているまま夕方になったらルカリオが迎えに来て修行は中断され、また明日やることになる。昨日もそんな感じで修行を行い、そして中断したのでよく分かってる。でもそろそろここから外へ出て修行を終わらせたいという気持ちもあるため、私とヒトカゲは一生懸命歩いて行った。

『…ジユ』

『カ、カゲ!!?』

「うわあ…!!?」

ジユカインが私たちの方に姿を現し、タネマシガンで攻撃してきた。さすがはジユカイン、全然見えなかったし分からなかった。私たちは驚いてしまい転びながら、そしてヒトカゲはひのこでなんとかしのぎながらも逃げる。

『ジユカア!』

「やばいやばい…ヒトカゲ!ダブルひのことえんまく!!」

『カゲエエエツツ!!』

ジユカインがこちらに向かってきたため、私は慌ててヒトカゲにひのことえんまくを同時に放つてもらおう。

これは私の兄が考えて教えてくれたやり方であり、同時に2つの技ができるということでも便利な攻撃の方法なのだ。でも兄はそれに自分から新しい技を取り入れ、いろいろと恐ろしい技を創り上げようとしている。

教えてもらうのと同時に兄が前にでんじはと10万ボルト、でんこうせっかを混ぜた疑似ボルテツカーらしき攻撃方法をピカチュウに教え、その疑似ボルテツカーに当たったら10万ボルトとでんこうせっかの威力と共に必ず《まひ》してしまうという恐ろ

しいことができるということも知った。だがこれは序の口であり、その疑似ボルテッカーに新しく編み出した技である電気熱を取り入れてしまったのだ。

まあつまり、簡単に言うのなら、疑似ボルテッカーをしているピカチュウの周りに燃え盛る炎が発生するため、攻撃のタイプが「でんき」と「ほのお」になるということである。ピカチュウが走りながら電気と炎を身に纏う姿はかなり恐ろしいだろう。しかも結構な威力があるからある意味一撃必殺の技だと兄は満足げな表情で言っていた。

他にも応用ができてとてもやりやすいと言われたが、私とヒトカゲはこのひのことえんまくの同時攻撃は使えるようになるのに苦労したということ覚えていいる。

ヒトカゲがひのこの入り混じったえんまくを使って攻撃する。だがジュカインはそれを軽々と避けて余裕そうだ。だが避けたことによつて私たちとの距離が広がったためすぐに走りだしてこの場から離れる。

「逃げるよヒトカゲっ!!」

『カゲエ!!』

『……ジュ』

ジュカインは追つてはこなかった。スピードの速いジュカインが走れば必ず私たちに追いつけるのだが、疑問に思うのはとりあえず後でにしておこう。ジュカインの姿が

見えなくなると同時に安堵してまた周りを見ていく。

そしてゆつくりと歩き出して出口を目指す。

すると森の少し遠くから光が見えてきた。外に出れると分かって私とヒトカゲはお互いに顔を見て、そして走りだす。ここから出れたら修行が終わる――。

『…ヒナ、ヒトカゲ』

「っ……ミュウツ―」

『カゲ……』

ミュウツ―がいきなり私たちの前に現れてはどうだんでわたしたちに攻撃してきた。とっさだったので避けきれず、ヒトカゲがひのこで応戦し、私たちとミュウツ―の間でそれらの攻撃が爆発した。

ミュウツ―は今度はサイコキネシスで私たちを宙に浮かせ、そのまま森の出入り口から離れようとする――。

「ヒトカゲ！ ダブルひのこえんまく!!」

『カゲ……カゲエエ!!』

ヒトカゲのひのことえんまくの攻撃を避けた。だがそのおかげで視界が真っ黒になり、サイコキネシスで宙に浮いていた私たちは地面に降りることができた。

あとは、出入り口に立ち塞いでいるミュウツーをどうにかしないといけない。

「いくよ…ヒトカゲ！」

『カゲッ！』

えんまくが薄れ、視界が少しずつ見えてきた。そして見つけたミュウツーの姿。私はヒトカゲに肩にのってもらい、ミュウツーに向かって近づいていく。そしてミュウツーの前で炎のパンチを繰り出そうとする――。

『ふん…そんなの効くわけがないだろう！』

「分かってるよそれぐらい…！」

『カゲッ！』

『何ッ!?!』

ミュウツーが炎のパンチを受けとめようとしたため、私はそれを避け、ミュウツーの

横を通り抜ける。ミュウツーとわざわざ戦うことはないし、伝説に勝てる自信もない。というよりも、自らの力量を知り、戦えるかどうかを見極めるというのも修行のひとつだから、私たちは逃げの一手にでたというわけだ。そしてミュウツーに近づけば必ず捕まえようとするだろうから、ここは出入り口を通るためにわざと近づいて攻撃すると見せかけて、小さな隙をつくっていただけだ。

そして私たちはミュウツーから走って離れ、森の出入り口へ辿り着いた。

「着いた!!」

『カゲツ!!』

私たちが森の外に出たことを喜んでいると、森の方から大きな音が聞こえてきたため、ヒトカゲと警戒してすぐに後ろを振り向く。だがそこにいたのは兄のポケモン、伝説たち、そして私たちの修行に協力してくれたオーキド研究所のポケモンたちだ。

『ダネダネ……!』

フシギダネがこちらに近づき、満面の笑みを浮かべてくれた。そして私たちにつるを

伸ばして頭を撫でてくれる。その後ろにいるポケモンたちも皆が喜び、笑ってくれた。私とヒトカゲはそれを見てお互いに顔を見合わせ、一緒にフシギダネを抱きしめ、皆のもとへ走り出す。

「みんな、ありがとう!!!」

『カゲカゲエ!!!』

.....

「おいガキ、そのヒトカゲ色違いだろ？お前にはもったいないねえよ俺によこせ!!」

「ヒトカゲえんまく!!」

『カゲツ!!』

「ブファア…何しやがるこのガキ！ウツボット！こいつらに向かって…っていない!?逃げやがったなガキども！」

『おい貴様。今ヒナとヒトカゲに何をやろうとしていた…!!』

「なっ?!? —— ヒギャアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!」

まあこんな感じで、私たちは主に悪い大人たちにつかまることがありません。

あと逃げていくと時々そこから悲鳴が聞こえてくるのですけどなにかあったのかなと気にしちゃいます。でももう心配かけたくないので私もヒトカゲもその場所へ戻ろうとはしません。

本当に、毎日が平和に暮らせています。

「今日はオーキド研究所へ行ってたくさん散歩しようね!!」

『カゲツ!!』

第四十五話～兄は行動を開始した～

こんにちは兄のサトシです。今回ちょっと旅を中断し、タケシたちには留守番を頼みピカチュウやシンオウで仲間になったポケモンたちと一緒に目的の場所へやってきました。

———そう、鏡の前です。

『ピイカ?』

「後でちゃんと説明するよピカチュウ」

『ピカッ!』

ピカチュウが分かったと頷いてくれたので俺はとりあえず鏡の前であいつの名前を呼ぶ。すると鏡が豹変し、反転世界へと入ることができた。

『…久しぶり、サトシ君』

「いやこの前会ったばかりだろ」

俺は人型になったギラティナの言葉にツツコミながらも、モンスターボールに入っているポケモンたちを出す。ポケモンたちは皆が疑問を浮かべている表情だ

『ピカピ…?』

『———っ?』

「皆…俺はこれからある犯罪者たちを倒しに行かなくちゃいけない。妹と一緒にいるヒトカゲの両親と、その兄弟姉妹たちを不幸にした奴らを倒し、捕えていきたいんだ…もしかしたらそいつらと戦う時怖いこともあるかもしれない。…それでも俺と一緒に戦ってくれるか?」

『ピツカツチュウ!!』

『ウキヤツ!』

『ドダア!』

『ムツクホー!』

『ブイブイ!』

『カフ…!』

「ありがとうみんな」

これからやることは、ヒトカゲの両親や兄弟と姉妹たちを不幸にした犯罪者のアジトを潰すこと。

シンオウでギリティナに聞いた時から絶対にアジトやその犯罪者たちを潰してひっ捕らえてやるということを決めていたのだ。本当だつたらすぐに向かいたいところだが、アルセウスがそろそろ目覚めるということを聞いて、いまシンオウから離れたら駄目だと説得されたために時期を待つていたのだ。その間に犯罪者たちが何をしているのか、アジトは何処なのかをギリティナに聞いてすぐにミュウツーたちに協力をしてもらった。ミュウツーたちはすぐにその話を聞いてアジトを潰そうと行動しようとしたのだが、俺がそれを止め、そして予想以上に規模が大きいくらいということや感情だけで動けばすぐ逃げられると判断してくれたので戦う準備をして時期が来るまで待つていくれたのだ。

あと、これから行くアジトで被害者となっているヒトカゲ達を解放した後、安全に棲んでもらう場所を確保してもらうためにも動いてもらった。まあすぐに、はじまりの樹に棲んでいるミュウが保護したポケモンたちを棲まわせてもいいし、歓迎するといつてくれたので、はじまりの樹がヒトカゲ達の保護する場所になった。そしてヒトカゲ達がゆつくりと棲めるように伝説たちに頼んで主にミュウがリーダーとなって住居開拓をしてもらった。そういつた準備のおかげで保護したらすぐに住めるし快適に暮らせる

ようになったのだ。

俺はすべてをみんなに詳しく話して伝え、一緒に戦ってほしいと頼む。すると力強く皆が頷き、俺に向かって協力するといってくれた。それに俺は微笑み、礼を言った。それを見ていたギラティナが小さく拍手しながら上を見上げて口を開く。

『…ある意味これは青春なのかな？まあそれは良いとして、そろそろ来るみたいだぜ？』
そう言った瞬間ギラティナはポケモンの姿に戻って宙に浮き、いくつもある鏡の前へやってきてその中の1つの鏡の空間を開ける。

するとやってきたのは俺の頼みごとを聞いてくれた伝説のポケモンたち、そして今までに旅してきた中で仲間になった俺のポケモンたちだ。伝説でいるのはミュウ2匹、ミュウツー、ルギア、ファイヤー、フリーザー、サンダー、セレビィ、レックウザ、デオキシス、カイオーガ、グラードン、レジスチル、レジアイス、レジロックという旅で出会ったポケモンたちだ。シンオウ以外の伝説たちは俺から直接話を聞き、そしてその人間たちの所行に怒ってくれた。そして俺に力を貸してくれて今この場に集まってくれたのだ。だが全員が集まってしまうとマサラタウンにいる妹とヒトカゲが危ないた

め、ラテイオスとラティアス、マナフィとルカリオとフシギダネはマサラタウンに残ると言ってくれた。

その残ると言った俺の仲間のフシギダネが皆と一緒に反転世界へやってきた。

『サトシ、いよいよあの人間どもを葬れるのか…!』

「ミュウツー、殺しはすんなよ。あいつらのやつてることを再起不能にして捕まえるだけだからな」

『…分かってる』

『ダネ…ダネフツシ…!』

「久しぶりだなフシギダネ。ヒナたちは元気にしてるか?」

『ピツカ?』

『ダネダネ!!』

フシギダネがこちらに近づいてにつこりと笑ってくれた。どうやら俺に会って、妹とヒトカゲは十分元気にやつてることを伝えたくて来たらしい。フシギダネと色々話をして、妹たちのことを頼んでマサラタウンに帰っていった。

『ダネダアネ!!』

「ああ、頼んだぞフシギダネ!!」

『ピイツカツチュウ!!!』

『ベイベイベイ!!!』

「さて——」

フシギダネがギラティナのあけた空間でマサラタウンに帰っていき、俺とピカチュウ、ベイリーフ、他の皆がその姿を見送った。

そして俺は伝説と仲間たちがいる方へ向く。そしてポケモンの姿のままのギラティナを見てから頷き、行動を開始する。

「行こうか。あいつらを叩き潰しに」

『————ツツ!!!』

ポケモンたちは雄たけびを上げてやる気を出し、ギラティナはアジトがあると云った空間を開けて突撃した。

ルギア、ファイヤー、サンダー、フリーザー、レックウザ、グラードン、カイオーガ、ギラティナ、カビゴンなどの身体が大きくて狭い建物で移動するのに向いていないポケモンはアジトの外から襲撃し、犯罪者たちを逃げられないようにする。：ギラティナは人間の姿にもなれるが、それだとポケモンの技が使えないと言うので外の方を担当にしてもらったのだ。

そしてアジトの中を行ける俺たちは、建物の内から囚われているであろうヒトカゲ達を見つけて保護し、そして犯罪者である悪者たちをすべて倒して捕まえる。部屋がたくさんあるらしいため、それぞれが部屋を調べていき、各々で対応する。そしてシンオウで出会った仲間たちには一応、キングラーとオコリザルとバタフリー、ベイリーフとヨルノズクとゼニガメの2つのチームに数体分かれてそれぞれ行ってもらおうことにした。少し不満そうな表情を浮かべているブイゼルもいたが、そこは安全を考慮して納得してもらおう。突然の内容だったし、もしものことを考えてやるのであって決して決してお前らが弱いとかそういう理由でチームで行動してもらおうわけじゃないからな。

あと、ミュウには移動役をやってもらおう。保護したヒトカゲたちを外の攻撃も何も来ない場所までレポートで移動させ、そこでもう一匹のミュウがポケモンの傷などを癒してもらおう。その場所の近くをルギアにいてもらってより安全を確保し、何とか全てのポケモンたちを保護しようという作戦だ。：本当だったらミュウツもその役目を

やってほしいのだが、おそらくアジトにつけば派手に暴れていくと思うのでやめてもらつた。とりあえずミュウは大忙しになると思うが、そこは頑張ってもらおう。俺たちも頑張るし。

まあこのように大雑把な作戦だが、皆が一人もとり逃がさずに捕まえてやるという気持ちでいくため大丈夫だと思つている。それに俺の仲間たちも伝説たちも頼もしくて心強いのでから安心できるしな。

「……リザードン」

『グオオウ!!!』

俺は殺る気十分なりザードンに近づいてその背に乗る。そしてリザードンは翼を広げて力強く空を飛んで、仲間たちや伝説たちが向かつたであろう開いた空間へ入つていった——。

いきなり来た俺たちに犯罪者である人間たちは恐れ、恐怖に震えただろう。なんせ空間がねじ曲がりそこから伝説のポケモンや強そうなポケモン。進化はしていないがレベルが強く、倒せないポケモンがそろって攻撃してきたのだから。普通だったらありえない事実には悪夢ではないのかと叫ぶ者までいる。

だが、俺たちはアジトの中を見てまたさらに怒りが込み上げてきた。俺が乗っているリザードンも、肩にいるピカチュウも怒りで人を殺めてしまいそうなのぐらいの酷い光景。

ヒトカゲだけじゃない、色違いを生み出そうとしていたのは他のポケモンでもやっていたらしい。そしてそれ以外にも研究しているような光景が見られた。建物の中の様々な部屋に研究施設が置かれていて、その中には多くの卵がカプセルに入れられており、檻の中に入れられたポケモンたちの姿も見えた。ポケモンたちの中の多くが傷つき、虫の息というぐらいに弱っている姿も見られた。それに檻の中には生まれたばかりのポケモンもちらほら見えている。部屋ごとにポケモンのタイプが分けられ、そしてすべてのポケモン、卵たちが被害を受けていたのだ。

「屑どもが……！」

『ピカピッカアツツ!!!』
『グオオオオオオオオ!!!』

ピカチュウが10万ボルトをほうでんのように盛大に攻撃し、リザードンがかえんほうしやで周りの機械を燃やしていく。もちろん卵や檻の中にいるポケモンたちに怪我をさせないよう気をつけて暴れていく。

他にもいろんな場所で大きな悲鳴がたくさん聞こえてきた。そして逃げ惑う犯罪者たちの姿も見える。今回一緒に襲撃した俺のポケモンたち、伝説たちもこの光景に怒り、凄まじい攻撃をしているのだろう。…俺もこれは許せない。

リザードンから飛び降りて、弱って震えているポケモンたちの檻の前に近づく。檻の中にいるポケモンたちは俺が誰なのか、怖いことをするのはないのかと恐怖に怯え、震えていた。俺は檻を壊して、中にいるポケモンたちに優しくもう大丈夫だと言つて近くにいたミュウに頼んで外へ連れ出してもらおう。

震えているポケモンたちを見えます怒りが込み上げてきた。こんな酷いことをしたあいつらが許せないし、許すつもりもない。全員まとめて潰す。建物ごと潰してやる。

リザードンは俺の後ろで攻撃してきた敵のポケモンたちにかえんほうしやで倒して

いる。そしてピカチュウはカプセルから卵を優しく取り出して、ミュウを呼んでテレポートで外まで移動してもらっていた。

「…リザードン、ピカチュウ」

『…ピカ』

『…グオオ』

俺の呼び声に反応して、次に何を言うのか聞く。その間にもいろいろと敵ポケモンが来るため技を出して攻撃しながらだが。

「被害に遭ったポケモンと卵を外に連れ出して…もう敵しかいないと分かったら…全部潰すぞ」

『ピッカツチュウ!!!』

『グオオオオオオオ!!!』

俺の行っている言葉を理解したのだろう。人や生き物は殺すつもりはないが、このまま捕まえて終わらせるつもりもない。この場所をすべて破壊し、建物を潰す。そしてポケモンたちに酷いことをしてきた奴らにはもう二度とこんなことができないように、悪さをしたくないと思えるぐらいのトラウマを植え付けてやる。

∴ああ、ポケモン恐怖症？そんなの生ぬるい。もつともつと嫌な目にあわせる。後悔させてやる。

ポケモンたち、卵たちの分まで苦しめばいいんだ。

「行くぞ!!」

『ツツ!!!』

.....

こんにちはは妹のヒナです。今日は朝から母とルカリオが作ったサンドイツチをヒトカゲと一緒に食べています。もうサンドイツチがとても美味しくて私もヒトカゲもご機嫌です。

食べている場所ではテレビの報道ニュースが流れています。朝はよく昨日あったニュースや有名人の話などが流れるため、私たちはテレビを見ながらサンドイツチを食べます。

オレンのみのサンドイツチうまー。

「今日のポケットワールドニュース。昨日、○○という町のはずれにてポケモンを違法に取り扱っていた研究所が見つかり、逮捕されました。話に聞いた内容によりますと昨日、○○町のはずれにて大きな騒音が聞こえ、原因を調べるために警察が向かったところ、研究所があった建物がすべて倒壊し、外には研究員の人々が気絶し倒れていたそうです。研究所にいた人は幸い全員無事でした。ですが研究所にて違法行為の証拠を発見し、さらに研究員全員が罪を自白し、ポケモンたちは逃げたという話を告げました。逮捕された人々は自ら「早く刑務所へ行きたい…！殺される潰される燃やされる切られる噛みつかれる電撃が怖い怖い何もかもが怖い、許してくれごめんなさいごめんなさい

「ごめんなさいごめんなさい」と何度も震え眩いている様子が見られました」

「いやー怖いですねエ」

「ええ、警察によれば犯人たちのいる研究所で大きな災害の後が見られ、その災害によるショックで精神がおかしくなってしまうのではないかと指摘しております」

「いやー恐ろしいですねエ」

「そうですね。さて次のニュースですが――」

「…へーそんなことあったんだ」

『カゲエ…』

テレビで少しよく分からない。だけど怖そうなニュースが流れてきた。犯人どうしたんだろう。なんかすつごく怖がつてるし…建物も壊されてるみたいだし…もしかして誰かに襲われたりしたのかな？

それとも悪いことしてる人を捕まえるために誰かが行ったとか？…まあそんなわけないよね。

警察も災害のせいでおかしくなったって言ってるし、建物も研究員たちもその被害に遭ったんだらうきつと。

『…ヒナにヒトカゲ。テレビを見ないで食べる。オーキド研究所へ行くんだろう?』

「あ、そうだった!」

『カゲツ!』

ルカリオがテレビに夢中になっていいる私たちに近づいて言う。ルカリオはもうご飯を食べて後片付けなどをしているからはやく食べて母たちの手伝いをしてからオーキド研究所に行かないと!

「ヒトカゲ、早く食べよう!」

『カゲカゲツ!』

今日も一日、平和に過ごしていこうつと!そういえば兄からそろそろリーグに行くつて連絡が来たけど、ポケモンたちの様子とか見るよね。じゃあベイリーフにいろいろと相談しないとな…。

私はヒトカゲと共にサンドイッチを食べながら、今日やることを考えていた。

『…………お前たちはまだ、何も知らなくていいんだ』

第四十六話　妹は伝説らしい生物と出会った

こんにちは妹のヒナです。今日はオーキド研究所の湖でのんびりしていようと思っ
たんですけど…。何かいきなり出てきました。

『ギュルアアアアア…』

「ギ、ギラティナ!？」

『カゲ?』

湖から空間が捻じ曲がり、なんだろうと思つて警戒していたら、ギラティナが勢いよ
く現れてびつくりしました。何でこつちに来たのギラティナ…もしかして兄に助けら
れたからお礼を言いたいとかそういうのなの？

ヒトカゲは目の前にいるポケモンが何なのか分かっていないらしい。首を傾けて私

に誰なのか聞いてきたので、兄の知り合いだと言っておいた。
 ギラティナは私たちをじっと見てこちらへ近づいてきた。

『ギュルル…』

「ど、どうしたのギラティナ…お兄ちゃんに何か用なの？」

『カゲカゲエ？』

『いや別に、サトシ君に用はないけど。君たちにはあるかな』

「喋ったアアア?!?!?!人間になつてるううう?!?!?!」

『カ…カゲカゲ?!?!』

!!!?!?!

ギラティナって喋れるの?!あれ人間になれるの?!そんな話原作とかであつたっけ!
 ヒトカゲはポケモンが喋ることにも人間になることにも驚いていない。逆に何で私
 が驚いているのか疑問に思っているようだ。確かにポケモンが人の言葉を喋るのは
 ミュウツーやルギアなどで何度も見てきた光景だから、喋れる生き物もいるというの
 分かっているしギラティナもそういう生き物だと思つたのだろう。そして人間になる
 というのも、ラティアスが人の姿をしたことがあるために以下省略…。

でも私は本当に驚いた。ギラティナが人の姿をしたということと話をしたということに。もしかしたら兄もこの光景を見て驚いたのかもしれない。

『君がああの時のヒトカゲか…』

『カゲツ？』

「…え、ヒトカゲを知ってるの？でもヒトカゲは知らないって…」

ギラティナが懐かしいという表情でヒトカゲの頭を撫でた。その撫で方はとても優しく、まるで一度会っているような感じがした。

でもヒトカゲはギラティナの顔を見て首を傾けている。私も一応考える。ヒトカゲがギラティナに会ったというのならそれは何処でだろうと…。卵の時に出会った後、私とヒトカゲはずっと一緒にいた。離れたことはないってぐらいつつとそばに居るのだ。だからギラティナがヒトカゲに会ったというのなら、それはおそらく私と出会う前の卵の時で…？

ギラティナは首を横に振って苦笑していた。そして小さく口を開く。

『そうだろうね。君には覚えてもらおうつもりはなかったから…でも良かった。元気に、幸せに暮らせているようで…本当に良かった』

『……………?』

「あの…ヒトカゲと何処で会ったんですか?」

ギラティナが勝手に頷いて納得し、満足している。…ヒトカゲと何処で会ったのだろう。それに少しだけ引つ掛かった。私が必ずヒトカゲを幸せにして、一緒にいようと決めていたけれど、なんでギラティナはヒトカゲのことを気にかけているのだろう。そして幸せに暮らしていると分かって安心しているのだろう。

それを質問してみたのだが、ギラティナはまた苦笑して私たちに向かって言う。

『卵の時の…過去の話だ。君たちが幸せに暮らしているのなら、知らなくていいことだよ』

「どういうことですかそれ…?」

『カゲカゲ…?』

『気にしないで…そうだね、赤ん坊のころに会ったお兄さんと再会したという感じかな』

『……………』

まったくもって意味が分からない。しかもちゃんとした説明をしてくれないし、誤魔化された感がすごい。それで何なのその例え…。お兄さんって自分で言っちゃやうんだ…。私とヒトカゲは微妙な表情を浮かべて人間姿のギラティナをじっと見つめる。

だがギラティナは何も言わずにただヒトカゲと…そして私の頭を撫でた。

『君たちに会えて本当に良かったよ』

「…はあ、そうですか」

『…カゲエ』

なんだかよく分からないけれど、まあ後で兄に聞いてみたら何かわかるかもしれないから気にしない方がいいのかなと無理やり納得した。

.....

『うーんそれにしても君…』

「な、なんですか？」

『カゲ？』

ギラティナが考える様に呻き声を上げて私の方をじっと見つめる。それに微妙に警戒しながらもヒトカゲと共に聞いてみる。

『成長したら絶対に可愛い系になりそうだよね！ヒナちゃんっていう名前だっけ。サトシ君が女の子になったらそのまま成長する姿になるのかな結構楽しみ！』

『……………』

「……………」

『あれ、なんでそんなに引いてるの？』

「へ、変態だあああああああ！！！！ヒトカゲえんまくううう！！！！」

『カゲエエエ！！！！』

『ブハ…！ちよっ何!？』

「フシギダネエエエエ変態がいるよおおおおお！！！！」

『カゲエエエエエ！！！！』

『え、ちよつと待って誤解だって!!』

『ダネダネダネフツシイイイ
!!!!!!
』

『痛ったあああツ
!!!!!!
』

第四十七話く兄はいろいろと喧嘩を売られたく

こんには兄のサトシです。今日ようやくリーグ前につくことができました。周りを見ると強そうなトレーナーがいてバトルするのが楽しみです。

でもちよつと待て何でその対戦相手の全員に睨まなければならない。

何故かリーグで登録していると、サトシだと名前を叫ばれ、カントージョウトホウエンなどでの戦歴を言われ、喧嘩を売られました。しかも結構興奮気味に言われた。：俺ってそんなに有名人なのか？

俺と同じように強い相手と戦うのが好きな奴らが多いのか、それとも強敵に出会って負けたくないという気持ちが行動に出たのかはわからない。でも受付の最中も歩いている時も絶対に俺の名を呼ばれては喧嘩を売られるわ挑発されるわお前みたいなのが強いわけないだろうと言われるわ…まあ散々な目に遭った。あ、でも最後の方で俺を貶したトレーナーは怒ったピカチュウの電撃を食らってました。でも同情する気はまっ

たくない。

「君がサトシくんか…」

「…今度は何？」

『ピカ…』

俺とピカチュウが歩いている時にまた声をかけられた。ちなみにヒカリとタケシには先に行っているように伝えたので一緒ではない。受付の様子を見て、俺と一緒に行動しない方がいいと思いきや頼んだからだ。

おそらくいろんなトレーナーに声をかけられて喧嘩を売られるので、迷惑をかけると思ったから離れてもらった。ヒカリ達は不満そうな表情を浮かべていたけど、でも仕方ないから諦めてほしいと無理やり納得させた。

そして今、目の前で自信満々な表情を浮かべているこいつはいったい何なんだ。俺をじろじろと見て、強いかどうか判断しているような上から目線の行動に何故かイラッとした。でもこの目の前の少年は話しかけてからずっと何も言わずにいる。俺とピカ

チュウは不機嫌そうな表情を浮かべてここから去ろうと決め、歩き始める。

だが少年が腕を掴み、待ってくれと言ってきたため仕方なく立ち止まることにした。でもそろそろ何か言った方がいいと思うぞ。

理由？電撃をビリビリさせながら威嚇しそうなピカチュウの機嫌が急降下しているからな。ちなみに俺もそろそろキレそうです。今度悪口か何か言われたら顔面思いつきり殴ってやろうかとも思ってしまうぐらいに。

「…すまない。だが、僕を倒せるぐらいの強さを持っていると他のトレーナーから話を聞いてね。バトルをするのが本当に楽しみだよ」

「はあ…誰ですか？」

『ピイカ…』

「そういえば自己紹介はまだだったね、すまない。僕はタクト。ダークライたちと共にこのシンオウリーグに出場するポケモントレーナーだ」

そう自己紹介をされ、握手を求められたのでとりあえず応じた。あと、俺も自分の名前を名乗り、よろしくと言っておく。だがそのタクトという少年は知っているよと微笑んだ。その丁寧な物腰に良い印象を覚えた俺とピカチュウは少しだけ機嫌を上げる。

…それにしてもタクトという少年の名前を何処かで聞いたことがあるような気がする

る。ああ、そういうば妹が言っていたな。タクトという少年は伝説を使ってくるトレーナーなんだということ。

なるほど、俺はカントーから旅に出て出場したリーグはすべて優勝しているから、相手がどんな強さを持っているのか、ダークライや他の伝説を倒せるか興味を持って話しかけたのだろう。

ピカチュウもタクトが何も危害を加えず、ただ単純にバトルを楽しみたいという言葉に好戦的な目をしてじつと彼を見つめた。

俺もピカチュウもこのリーグでバトルをして勝つことが目的だ。でもバトルをするのは好きだからこういった喧嘩を売られると全部リーグのバトルで買いたくなってしまうのが常だと思っている。…まあとりあえず良い印象になったタクトとの戦いもしみにしておこう。今回のリーグもいろいろと楽しめそうだ。

あ、でも一番の楽しみと言ったらシンジとのバトルに決まっているからな。

「よろしくな、タクト」

『ピッカッチュウ!』

「ああ、こちらこそよろしく。サトシ君」

第四十八話～妹はときわたりを経験した～

こんにちは妹のヒナです。今日普通にヒトカゲと共に修行で覚えた技や鍛えたことを復習しようと森の中でいろいろとやっていたのですが、いきなりセレビイのときわたりに巻き込まれました。え、なんとときわたりに巻き込まれたのかって？いや知らないよ。気がついたら周りが眩しいくらい光ってて、そしてオーキド研究所の森の中ではなく、よく分からない土地にいたんですから。

しかも私たちの後ろの方でやっちゃった…！というような表情を浮かべているセレビイと共に。

「…(ハ)ン(ダ)？」

『カゲエ…』

『レ、レビイ…』

セレビイは本当に申し訳ない表情を浮かべて、私たちに謝ってきた。その様子からときわたりをした時に私たちが近くにいることに気がつかず、間違えて巻き込んでしまったということが分かった。

でもここは本当に何処だろう……。ちゃんと整備されている道路に立っている私たちは周りを見渡してみる。周りは多くの木々がたくさんあって、人もポケモンも見当たらない。しかも大きな木々のせいか何だか薄暗い。まるでオーキド研究所にある迷いの森の中みたいに薄暗くて……。しかも気味が悪いのだ。ヒトカゲの尻尾の炎が周りを明るく照らしているため、なんとか状況が確認できた。

『レビレッビイ……!』

「え、もしかしてまだときわたりできないの!？」

『カゲツ!』

セレビイがまた謝ってきて、私の頭の上に乗ってきた。その様子を見てときわたりによる力を使ったから、しばらくの間は休まないと元の世界に戻れないということが分かった。

でもここでのんびりしたくはない。もしもこの森の中で強いポケモンがいたらやば

いからだ。

「ねえセレビィ。他の場所に行ってもときわたりは使える？」

『レビィ!』

セレビィが頷いたため、私とヒトカゲは顔を見合わせて頷き、この森から離れることにした。

出来れば安全だと分かる場所に着けばいいと願いながらも…。だが歩き始めた瞬間後ろの方から足音と草をかき分ける音が聞こえてきたため、私たちは後ろを振り向きながら警戒する。道路の方を歩いていないということは、もしかしたら人ではなくてポケモンかもしれない。そう思っ振りに向くと――

「誰だお前は。何故子供がここにいる」

「……わあ」

『カゲ……?』

『レビィ?』

どうもこんにちは、シルバーさん。ゲームの世界の方のシルバーさんに会いましたよ。あ、でも名前を言っていないのでシルバー（仮）さんかな。というよりもポケスペの方のシルバー（仮）さんかもしれない。…でも私ポケスペの方は知らないんだよね。まあよくわからないけどその赤い髪がすごく似合っている少年です。…つてことはここはゲームの世界？ポケスペの世界？私たち世界を超えてやってきちゃったの？

そう考えていると、シルバー（仮）さんが私たちの方へ近づき、話しかけてきた。

「…親はどうした。こんな危険な森の中に置いて行ったのか？」

「う…あの私たちちよつと迷ってて…両親は関係ないんです…」

『…カゲツ』

『…レビィィ』

やはり森の中は危険なポケモンでいっぱいらしい。そしてシルバー（仮）さんは私たちが両親に置いて行かれたと誤解したみたいだ。私たちを置いて行ったであろう両親に怒り、表情を怖くしている。でもこの場合両親は関係ないため私は必死にただ迷子になったと説明しておいた。

私の言葉を聞いて怒った表情ではなくなり、頷いてくれた。そして私の足元にいるヒトカゲと頭の上に乗っているセレビィをみて目を細めていた。

「…色違いのヒトカゲに、伝説のポケモンのセレビィか。珍しいな」

「お、驚かないんだ…」

『カゲッ』

『セレビィ』

「ああ、知り合いに色違いのリザードンを相棒にしている、伝説に懐かれる凄まじいトレーナーがいるからな」

「へーそんな人いるんですね！」

『カゲエ…！』

『セレビィ！』

どういふ人なんだろう。私の兄のような人かなと想像してしまった。ゲームの世界

だったかもしれない。したらレッドさんとか？誰なんだろうと少しだけ興味をもっているとそのシルバー（仮）さんが私たちに微笑んできた。

「俺はシルバー。お前の名前は？」

「あ、私はヒナです！こっちはヒトカゲでこっちはセレビィ！」

『カゲッ！』

『レビィィ!!』

やっぱり名前はシルバーさんでした。もう（仮）はなくてもいいよね。そう思っていたらシルバーさんが私を見て驚いたような表情を浮かべていた。

「ヒナ…ヒナだと…？」

あれ、なんだかシルバーさんの様子がおかしい。まるで私のことを知っているような

反応をしている感じがする。どういふことなんだろう。そう疑問に思つて口を開こうとした。だが――。

『レツビイイイイ!!』

「うわあッ!」

『カゲエ!!』

「くっ…!」

気がつくくと、私たちはオーキド研究所の森の中に立っていました。セレビイが一刻も早く元の時代に戻してあげなければと思つていたらしく、力を取り戻したと同時にときわたりをしたらしい。そしてシルバーさんが巻き込まれないように気を付けて力を使つたとも言つていた。あ、これはミュウツウの通訳でわかつたことです。もう危ない目に遭うな、セレビイもときわたりをするときには気をつけろと説教されましたけど…。

でもシルバーさんの反応なんだっただろう…それだけが凄く気になる。…でももうときわたりしたいとは思わないし、もう会わないよね。そう考えて納得し、シルバーさんに会った時の疑問は忘れることにした。

とにかくこれから修行したときの復習しないと！

.....

「——ああヒナ。お前、幼い頃にときわたりを経験していたのか。小さな子供のお

「前に会った……って何でそこで五体投地をして叫んでいるんだ……？」

第四十九話く兄は伝説厨に挑んだく

こんにちは兄のサトシです。今何をやっているのかって？それは普通にシンオウリーグですよ。

リーグでいろんな人に喧嘩を売られたので、全部買ってやりました。結果？もちろん今準決勝に進んでいるのですから圧勝ですよ。

今回は準決勝で前にいろいろと喧嘩を売ってきたタクトとのバトルをすることになりました。

まあその前に、前回のシンジとのバトルを終えて俺たち上機嫌でテンションが上がったままなんだけどな。前回、すごく白熱したバトルができたし、シンジとゴウカザルが和解して本当に良かった。

そして今日、俺は伝説をよく使ってくるといふタクトと戦う。

「全力を尽くして、良いバトルをしよう。サトシ君」

「…ああ、お互いに」

バトル開始前に、タクトが言ってきたため、俺は小さく笑みを浮かべながらそれに頷く。そしてバトルが開始された。最初にモンスターボールを投げたのはタクトだ。

「ふん…」

『フウウ…』

「ダークライか…なら俺はこいつだ。ヘラクロス、君に決めた！」

『ヘラックロオ!!』

ダークライはあくタイプでむしタイプとはいい勝負ができる。それにダークライ戦に向けていろいろと考えてきた作戦もあるしな。

俺がヘラクロスを出してきたことが想像通りだったのか、タクトは好戦的に…そして自信満々な表情で俺とヘラクロスを睨み付けてきた。タクトのいつもとは違う雰囲気を感じ取ったのかダークライもやる気を見せている。

でもこつちも負けてはいない。

「先行は、サトシ選手。それでは、始め！」

「ヘラクロス、はかいこうせん！」

『ヘラクロオオオ!!』

「ダークライ、れいとうビーム」

『フウウムウ!!』

まずは相打ち、でもここからが勝負。相打ちによつて大きな煙が周りを見えなくする。その間に俺はヘラクロスに指示をするために口を開く。

「ヘラクロス。多重かげぶんしん！」

『ヘラックロオオオ!!』

「なにっ!?!」

『フウウツ!?!』

【おおっ!?!サトシ選手ここでヘラクロスにかげぶんしんを指示したー!ダークライはどう出るか!】

かげぶんしん？ただのかげぶんしんと思ってもらったら困る。

普通のかげぶんしんとは違う特殊な技。俺が考えた多重かげぶんしんとは、かげぶんしんとみがわりとビルドアップを重ねた技。そしてかげぶんしんとビルドアップを一気に三回行ったような効果を出す技だったりする。みがわりはポケモンの身体の周りが見えない壁となつて効果を発揮するようになっていくらしく、みがわりという技を使つても、すぐには分からないと驚かれることもよくあつた。そしてかげぶんしんという言葉でタクトも周りの人間もみがわりが使われていないと思つていよう。その考えもあつたりする。

ぶつちやけこの多重かげぶんしんは、マサラタウンにいる間に皆でいろいろと技を考へて鍛えてもらつていた中の一つ。他にもリザードンの岩をも溶かすマグマの業火、フシギダネの疑似ハートプラント、ジユカインの一撃必殺リーフレードなどなどたくさん考へている。

俺としてはヘラクロスにかげぶんしんとみがわりの効果さえあればいいんだけどな。ダークライつてとくこうが高いからぼうぎよ上げる必要ないし。まあこうげきを高めるといふ意味では効果はあるか。でも俺のヘラクロスはもともとこうげきの力がかなり高くなつていふからもう積んでるような状態だし心配はしてない。まあ積むのにデメリットはなしと考へておこう。

「ふっ…なるほど、かげぶんしんでダークライにダークホールを撃たせない気か…。それだけだと意味がない！ダークライ！ダークホールだ！」

『フウウウ!!』

「おっとオ!!ダークライがダークホールをしたあ!!しかも連発!!かげぶんしんによって複数いるヘラクロスすべてに当たりましたアアア!!これはサトシ選手きつい状況だぞオ!!」

「…っ!?!何だと!?!」

『フウウツ!?!』

きつい?そんなわけないだろ。みがわり状態のヘラクロスには眠るといふ状態変化の効果はないのだから。そのダークホールは無意味だ。普通に元気よく立っているヘラクロスにタクトたちはかげぶんしんが消えないことと、眠らないことに驚いていた。もちろんこれもちよつとした作戦のひとつだったりする。バトル中に驚いて動揺し、指しを出せなかったら意味がないのだから。

俺はヘラクロスに向かって大きく叫ぶ。

「ヘラクロス！メガホーン!!」

『ヘラクロオオオオ!!!』

『フウウウツツ!!?』

「なツ!!?ダークライ!!!」

かげぶんしんと本体すべてのヘラクロスがダークライに向かってメガホーンで攻撃する。ダークライもタクトも先ほどの動揺から冷静さを失い、ちゃんと躲すことも攻撃することもできずにヘラクロスのメガホーンを正面から受けてしまった。

大きな地響きと周りが見えないくらいの煙があたりを包み込む。そしてしばらくしてようやく見えてきたのがダークライが倒れ、ヘラクロスが大きな鳴き声を上げて勝利を手にしていた場面だった。

「ダ、ダークライ戦闘不能ウウウウ!!!サトシ選手ダークライに対してまさかの勝利!!!一体どうやってダークライのダークホールという技を躲せたんだああ!!これは凄い戦いになってきた!!!」

司会者の大きな声と共に、観戦者もテンションも上がっていく。もちろん俺とヘラクロスも。

タクトはしばらくの間絶句していたが、ダークライをボールに戻し、俺に向かって話しかけてくる。

「…さすがはサトシ君。すべてのリーグに優勝しただけのことはある…でも、バトルは始まったばかりだ！そして僕は負けるつもりはない!!」

「ああ、俺だって負けるつもりはないぜ!!」

『ヘラクロス!』

『ピツカッチュウ!』

タクトは負けたくない、負けるつもりはないと大声で叫び、高ぶる感情のままラティオスをボールから出す。そして俺もタクトの声に笑みを浮かべて言った。

まだまだこれから、バトルは始まったばかりなのだから。

第五十話～シエイミはよく迷い込む～

こんにちははギラティナです。あれ、もしかして俺じゃなくなつてサトシ君やヒナちゃんだと思つちやつた？

残念俺でした！

まあ怒らないで俺の話でも聞いてくれない？

俺つてさ、よく反転世界から世界を見て過ごすことが多くて、結構暇なんだよな…。それにムゲンつて人が研究していた時は何してるんだろー？つて見ることも多くてひまつぶしに良かったんだけどさ。今ではほとんど来ないし、暇すぎてサトシ君のストーリーになりそう…。

…え、外には出ないのかって？いやいや出れるわけないでしょー。ほら、俺って神様のな存在だし？伝説のポケモンだからあまり人に見られたらいけないんだよね。あと、この世界を管理しないとイケないから無理無理。

…まあ必要な時とかには出るけど――。

『――つてことでたまには何か面白い話でもないの？シエイミ』

『…何でガラティナのひまつぶしに付き合わないといけないんでしゅか？ミーは外に出たいんでしゅー！』

『駄目、良いじゃんかあどうせまた反転世界に迷い込むんだろ。俺と仲良くお話ししようぜー！』

『変態には近づいたらいけないってサトシに言われてるんでしゅ!!!』

『へ、変態つて…そりゃねえサトシ君…でもシエイミは俺と仲良しだよね？仲良くしてるよね？そうじゃないと俺すっごく悲しい！』

『……はあ…まったく、仕方ないでしゅね。ミーに感謝するでしゅー！』

ショックを受けたような表情をするガラティナ。そしてシエイミに優しく抱きつき、

泣き喚く。だがその仕草は少しだけ嘘っぽい。

その残念な様子にシエイミはため息をつけてギラティナに渋々頷いて同意した。するとギラティナはすぐ笑顔になってシエイミをギュツと抱きしめる。抱きしめられたシエイミは苦しさからさっさと離れるでしゅ！と叫んでなんとかギラティナから離れることができた。

そしてシエイミはまた抱きしめられないように数歩だけ離れて話を聞く。

『へへ！それで？シエイミはいったいどんな面白い話してくれるの？』

『そうでしゅねー…ミーが花運びをしている時に出会った綺麗なポケモンたちの話してもしてやるでしゅ』

『へー綺麗なポケモンね！…もしかしてメスだったりする？綺麗な女性！』

『ギラティナ…そのメス好きがお前の伝説の威厳を損なわせているんでしゅよ…』

『俺はこういう性格なんですー！それでそれで？続きはどういう話？』

シエイミはギラティナにため息をついて話を続ける。こういう言葉の交わしあいはどう度も行ってきたからだ。

何度も反転世界を行き来したからこそ、友達と気軽に話をしているような関係になっていった。

そしてギラティナが反転世界に棲み、伝説のポケモンと言われている生き物だとしても、シエイミにとつてはただの残念な生き物であり、何度もこちらに来ているため、気軽に話ができる間柄でもあったりするのだ。

『確か名前は…ゾロアークとゾロアって言ってたでしゅ。親子みたいだったでしゅよ』
『っ！…へえ！ゾロアークね…』

『…ギラティナ、どうしたんでしゅか？』

『いや別に。そっかあ親子かーじゃあ付き合ったりはできないなあ麗しの女性と…』

『まだ狙ってたんでしゅか…』

シエイミはギラティナがゾロアークとゾロアの名前を聞いて驚いたような反応を示していたが、すぐに誤魔化されてしまう。シエイミはそれに疑問に思いながらも、ギラティナがまた残念なことを言ったのでツツコミをいれた。

『それで？そのゾロアークとゾロアがどうかしたの？』

『イリユージュンの力を見せてもらったんでしゅ！ミーにも変身して凄かったんでしゅよー』

『へえ。そりゃあ興味深い話だな！』

『ミーに感謝するでしゅ！』

『そうだな。シエイミにはすつごく感謝してますよー』

『…全然気持ちが悪くもってないでしゅねギラティナ』

シエイミは自信満々の表情でギラティナに向かって言う。それにギラティナも笑みを浮かべながらシエイミの頭を撫でる。シエイミはそれに微妙な表情を浮かべていたが、ギラティナの撫でる手を振り払おうとはしない。

『じゃあ今、ゾロアークとゾロアつてシンオウ地方にいるのか?というか、どこで会ったの?』

『イツシユ地方で会ったんでしゅよ!シンオウにくるとい話聞いてないでしゅ!』

『え、君イツシユまで花運びに行ったの!』

『ミーは凄いでしゅ!!』

『そりゃあ凄いでしゅ!頑張ったんだな。おつかれさん』

『…もうこれで話は終わりでしゅよ!そろそろミーを帰すでしゅ!!』

『え、もうちよつとだけ話しよう!』

シエイミがまた自信満々な表情を浮かべてギラティナに言う。今度はギラティナの方も驚きの表情を浮かべてイツシユまで大変だったろ？と労りの言葉を言っていた。

その後、話は終わったとシエイミは言うのだが、ギラティナは嫌そうな表情を浮かべて話し相手を抱きしめ、もうちよつと話ししようと我儘を言う。抱きしめられたことによつてシエイミは暴れるのだが、ギラティナは一向に気にせず抱き続ける。そして小さく呟いた。

『……そっか、もうそこまで物語は進んでいるんだね』

第五十一話　妹とポツポとトキワの森

「こんにちはは妹のヒナです。今日遊びに来たのはトキワの森です。兄のピジヨットがオニドリルとの争いをしばらくの間休戦することになったらしく、トキワの森が平和らしいので遊びに来ました。」

「でもピジヨットに会いに行こうとしたら何だか一匹のポツポが前を通してくれません。どうということなの。」

『ポツポーウ!!』

「え、あの…ピジヨットに会いに来ただけど…」

『カゲカゲ!!』

ポツポが私たちの前にでて威嚇をしているため、ピジヨットに会いに行くことができずにいる。しかもそのポツポかなり目つきが鋭くて怖い。ヒトカゲも強気で文句を言ったりしているけど、やっぱり目が鋭いポツポのことが怖いようで私の手を握って離れようとはしない。

でも縄張りを荒らしに来たわけではないし、私はトキワの森にいるポツポたちとはよく遊んだりもするから、今更警戒されることはないし今より前はずっとそうだった。トキワの森のポツポには攻撃されることはないはずだ。…というより、この目の前で威嚇しているポツポはトキワの森で見たことないような気がする。もしかしたら違う所からきたポツポなのかもしれない。

『ポツポー!!!』

「うわっ!？」

『カゲっ!？』

ポツポがかげおこしで私たちに攻撃してきたため、とっさにそれを避ける。でもポツポはそれを見てすぐに違う技に切り替えてきた…! 私たちはそのポツポの行動に応戦することにして、ヒトカゲに向かって指示をする。

「ヒトカゲ、ひのこー!」

『カゲッ!!』

『ポッ!?!:ポツポウ!!!』

「え、さらに怒ってる!?!」

『カゲカゲ!?!』

ポツポがこちらに向かつてつばさでうつつ攻撃に出たため、その真正面からヒトカゲのひのこを放った。ポツポはひのこに直撃してつばさでうつつことはできなかつたが、何故かさらに怒った様子で私たちに睨み付けてきた。

その眼光が鋭すぎて怖い。まるで怒った時の兄のようだ。：いや、兄の方が怖いか。ヒトカゲはポツポに睨み付けられたことで萎縮してしまい、怯えながらもポツポに迎え撃とうとする。でもこのままではいけない。ヒトカゲはもともと怖がりだし、今バトルをしても意味がないと思っっているからだ。そのため私はえんまくでポツポから逃げようと思ひヒトカゲに言おうと口を開く。だが――。

『ピジヨピジヨ——ツト!!!』

『ポツポー!?!』

「あ、ピジヨツト!」

『カゲツ!』

ピジヨツトがこちらに近づいてきて。ポツポの攻撃から私たちを守るように前に降りてきてくれた。そして大きな翼を広げてポツポに向かつて鳴き声を上げる。だがポツポはそれを聞こうともせずまたピジヨツト含めて私たちに攻撃しようとしてきた。

『ポツポウ!!!』

『…ピジョット!!』

ピジョットは仕方ないという表情でポツポの戦意を削ぐために攻撃する態勢をとった。そしてポツポとピジョットがお互いかぜおこしをして攻撃する。——でもピジョットの方が力強いため、ポツポが飛ばされ、後ろの方の木にぶつかって気絶してしまった。

『……ポ』

『ピジョット…』

「ピジョット！ポツポ、大丈夫？怪我とか平気かな？」

『カゲツ？』

『ピジョー！』

ピジョットが木にぶつかって落ちていくポツポを背にのせてこちらに降りてきた。そのため私は急いでピジョットの背中からポツポを降ろし、リュックからオレンのみを取り出して食べてもらう。そして少し体力を回復したのか、ポツポが目を覚まして私た

ちを見た：…というより睨み付けてきた。それを見たヒトカゲが悲鳴を上げて私の背の後ろに隠れる。だがそんなポツポの様子にピジヨットが注意したため、すぐに鋭さはなくなり、おとなしくなった。

『ピジヨット!!!』

『……ポツポ』

「大丈夫？もういきなり攻撃してきちゃだめだよ？」

『カゲカゲ』

『ポー…』

ポツポは何か私たちの言葉に頷いてくれた。そして後で聞いた話だが、ポツポは1匹で旅をしているらしい。しかもかなりのバトル好き。強いポケモンと戦いながらいろんな地方へ行くのが夢で、それを実現するためにカントー地方で1匹で行動して旅していると話して聞いた。まるで兄…いやジユカインのような性格のポツポだと思っ

しまった。でもちゃんと夢があつてそのために旅をしているのは凄いと思う。まだまだ旅をし始めたばかりらしいが、しばらくの間はマサラタウンにいたいと言つてきた。ピジヨットはこの言葉を聞き入れ、ポツポの気が済むまで群れに迎え入れるそうだ。

まあマサラタウンは様々なポケモンが暮らしていて、バトル好きは大歓迎だからポツポにとつては楽園のような環境だろう。しかも他の地方のポケモンもいるし伝説もいるからなおさらだ。

まあとにかく、無事でよかつた。

『ポツポー!!』

「よろしくね、ポツポ」

『カゲカゲ!!』

『ピジヨット!!』

第五十二話～兄と親子とセレビィ～

こんにちは兄のサトシです。今回俺たちはポケモン・バツカーズのワールドカップを見にクラウンシティに行くことになりました。…え、リーグですか？そりやあもう優勝しましたよ。かなり楽しいバトルでした。

それで本当だったら旅を終えてマサラタウンに帰るはずだったんですけど、ヒカリが最後にポケモン・バツカーズを見に行こうよ！と誘ってくれたので急遽予定を変更していくことになったんです。

だが、クラウンシティに行く途中で迷ってしまい、そこでゾロアに会った。クラウンシティにはマアがいて、そこに行かなければいけないと言ってきたので、俺たちと同じ町だからと一緒に行くことになった。そしてマアが悪者に連れ去られているということが分かり、俺たちは必然的にゾロアに手を貸すことになった。

でもついでにみたら何故か大騒ぎになっていて、スイクン達がゾロアークのせいで暴れ

ているというニュースが流れていて……。しかもゾロアはゾロアークがそのマアだといつてきて……。あれ、これどこかで見たことあるような気がしてきた。

『マア……』

「……だいじょーぶよゾロア！ 私たち協力するし……サトシがいれば百人力だからね！ そうでしょサトシ！」

『ポチャポチャ！』

「……え？ あ、おう。そうだな」

『ピッカツチュ!!』

ヒカリは自信満々な表情でゾロアと俺に向かって言ってきた。なので俺も大丈夫だと言っておく……。でもそれにしてもこのデジャブは一体なんだろうか。今はクルトさんの案内で地下を通ってクラウンシティに向かっているんだけど、その歩いている途中も俺は考えながら必死に思い出そうとする。

クラウンシティについては妹に話していないのでどんな内容なのか分からない。まさか原作なわけないよな……？ 普通にもうシンオウでの旅はほとんど終わったはずだぞ？

でもゾロアを見たような気がするからもしかしたらもしかするかも…？もしも原作の話だった場合は妹に聞いておけばよかったという後悔がでてくる。もしもシンジとゴウカザルの時のようなことになったらどうする。もうそんな悲劇は起こさないと覚悟した。だから全力で何とかしていくけれど、もしも俺が通常とは…いや、原作とは間違った行動をしてしまったらどうすればいい…。それでさらに悪い方向へ行ってしまうたら俺は…。

『ピカピ？』

「あ、悪いピカチュウ。ちよつと考え事してただけだよ」

『ピカ!!』

「なあに？もしかしてどうやってコーダイを倒すのか考えてたの？」

『ポチャア？』

「サトシだったら考えそうだな。でも考え事して歩いてると足滑らせるかもしれないから気をつけろよ」

「ははは…分かった」

ヒカリもタケシも随分な言いようだ。まあ旅してきたときからずっといろいろと暴

れてきたから仕方ないだろう。そう納得しておく。それに今必死に考えることじゃない。思い出せないのなら、無理に思い出すこともないだろう。俺はただ敵を倒せばそれでいい。敵さえ倒してしまえばもう解決も同然なのだから。だからゾロアが言っていた悪者のコーダイを何とかしてしまおう。そう決心してから考えるのをやめ、ちゃんと前を向いて歩く。ゾロアはただ必死にゾロアークが無事であるように願っていた。

そしてようやくついたクラウンシティで見えてきた光景。クルトさんの話だと、このクラウンシティはセレビィがやってくると言われている自然と人が共存したとても豊かな町だということ。だが、20年前にクラウンシティの植物はすべて枯れ果ててしまったということやその原因は分からず、人とポケモンの力でようやく元に戻っていったということが分かった。…その話はとても良い話であり、植物が戻って良かったと思っただけでもその話には何か引つかかる。何か、重要なことがあったような…思い出したいのに思い出せないのもどかしさに苛立ってしまう。俺は首を振ってこの感情を捨て、町の様子を見るために歩いた。

するとそこから分かってきたこと。エンテイやスイクンが壊したと思っていたものが実は壊されておらず、何もかも無事な町の様子だったことだ。でも人々は避難していったため、町は音もせず静寂だ。ゾロアがマアの臭いがすると行って走りだしたた

め、俺たちもその後を追う。

曲がり角を曲がって姿が見えなくなってしまうため、俺はスピードを上げてゾロアが行ったであろう道を走る。そして見えてきたのはグラエナとモジヤンボがゾロアに襲いかかっている姿。そして次にグラエナが俺の後ろから来たクルトさんに襲いかかってきたため、俺は拳を使って未だにクルトさんに襲いかかるグラエナを追い払おうと動く――。

「待つて待つてサトシ!!何か様子がおかしいよ!!」

「っ!!…クルトさん?」

「ははは久しぶりだなあグラエナ!元気にしてたかあ?」

『グオオオウ!!!』

「…ああ、知り合いか」

『…ピィカ』

俺はヒカリの声を聞いてすぐに動きを止め、クルトさんの様子を見る。するとグラエナが嬉しそうにクルトさんにじやれついているため、大丈夫だと理解して握りしめていた拳をひらいて身体の力を抜いた。ピカチュウも俺の肩にのって良かったと安心して

いるようだ。それによく見るとゾロアは眠らされているだけみたいだし、怪我がなくて本当に良かった。

その後、俺たちのもとにやってきたのはクルトさんの祖父たち。グラエナとモジャンボが仲間だと言っていて、町の物を壊したために敵かもしれないと眠らせたのだと言う。それについては悪かったと言っていたし、ゾロアも町の物を壊してしまったのならお相子だと思うから俺は何も文句は言うつもりはない。そしてねむりが効きすぎてゾロアは熟睡していた。

クルトさんの祖父：ジョーさんたちに案内されて来た家で俺たちは町で起きた疑問について話し合うことにした。まあ町で壊されていたはずのものが壊れていないのだから疑問に思うし、何かあるのではないかと思ってしまうのも無理はない。クルトさんはこれがゾロアークのイリユージョンだと推理した。もちろん俺たちもその考えに納得できる。これでコーダイを倒せばいいという方針が俺の中で決定した。

でも一つだけ分からないことがある。コーダイは町の中で何をしているのかだ。クラウンシテイの中で、ゾロアークのイリユージョンで化かし、町の人を追い出してその後はどうするつもりなのだろう。それだけだとコーダイの名声落ちぶれるだけではないだろうか…。

でもその考えはすぐに答えが出た。

「え!? セレビィが帰ってきてきてるだつて?! …本当なんですか?」

「うん。私とモジヤンボがこの目で見たのよ」

『モジヤン!』

「セレビィ…が…」

コーダイは、セレビィを捕まえにこの町で悪さをしているのか…?

でもそう結論付けるのはまだ早い。俺の中でなにかが引つかかっているからだ。セレビィを捕まえるという考えは間違っているという何かが…。

.....

その後、ゾロアが目を覚ましてマアが呼んでいると叫び、外に出てポケモンたちに囲まれてしまったらしい。らしいというのは、ゾロアが柵の中に入ってしまったて行けなくなり、ピカチュウとポツチャマがその後を追って行ったからだ。でも俺たちが見たときはセレビィがやってきて仲裁し、何とか喧嘩が収まっていた時だった。そしてセレビィ

がゾロア達のマア探しを手伝ってくれることになり、俺たちは柵の外からその後を追った。

だが追おうとした瞬間――。

「コーダイ……！」

「君たちが誰なのかは私は知らない。だが、私の邪魔をするということだけは知っているのだ。――私には未来が見える」

コーダイの仲間であるポケモンたちが俺たちの行く手を阻み、妨害する。俺はとっさにハッサムに殴りかかろうと動いたが、コーダイが使った機械の檻によって阻まれてしまう。そしてコーダイは自信満々に言ってきた俺たちを閉じ込める檻の隙間をすべて閉じていった。そして檻が揺れて動いて行っただけで、おそらく移動しているのだろう。俺たちが邪魔しないようにどこか別の場所へと。

「……どうするの!?!このままだと……?!」

「ああわかってる!大丈夫だヒカリ。ピカチュウとポツチャマがついてる……」

「タケシ……うん。そうよね」

「でも、このままここに居るわけにはいかないな…」

「クルトさん…」

「……………」

俺は必死に考えていた。この後の話を…その未来で起きる原作の話を。未来が見えるという言葉に少しだけ分かったような気がしたからだ。でもすぐにそのことが分からなくなる。何か…セレビィに関する何かがあつたはずなのだ。

「…サトシ？」

「え、あ…ヒカリ、どうかしたか？」

「…ううん。何でもない」

ヒカリが俺の様子をうかがってきたので、俺は俯いていた顔を上げて言う。だがヒカリはしばらく考えるような様子をして、俺に向かって首を横に振り、苦笑した。

檻がしばらくしてから揺れなくなり、代わりに周りからものすごい音が聞こえてきた。おそらくもう移動し終わったのだろう。俺たちはどうやって脱出しようかその方法を考える。まずこの檻の壁を壊そうと動く、防衛システムが作動して電撃で攻撃されてしまう。俺はその電撃ぐらいなら耐えられるし、問題なく壊せる。だから檻から脱出

することは本当だったら簡単なのだ。でも檻の中にはヒカリ達がいる。ヒカリ達は電撃に耐えれないし傷を負ってしまう可能性が十分高い。だから俺は動くことはできない。

「…ゾロア……セレビィ」

今はただ、無事を祈っているだけしかない。この選択が間違っていないと必死に納得して、動かないでただ時が来るのを待つだけだ。

.....

どのくらい時間が経ったのかは分からない。檻の中では何も知ることができないからだ。このままこうして動かないでいいのだろうかと思ひ、そろそろ皆が怪我をしない方法でも考えてやってみようかと思つた瞬間誰かがやってきた。やってきたのは女性だった。そしてその人はコーダイの秘書だと言ひ、挨拶をしてきたが、クルトさんが何やら親しげに話をしていて…実は仲間だったということが分かつた。そしてその秘書…リオカさんの助けによつて俺たちは外に出ることができて、ようやく動き出すことが

可能になった。そして行く途中で分かったコーダイの目的。コーダイはセレビィがと
きわたりで使用したときに現れる時の波紋というものから力をもらって未来を見るこ
とができるようになったということ、そしてまた未来の力を手にするために、クラウン
シティで動いているということ。

そうして向かった先に待っていたのは、いろいろと見逃せない光景だった。ゾロア達
が傷つき、ピカチュウとポツチャマがハッサムによつて吹っ飛ばされているところ。

「ピカチュウ!!」

「ポツチャマっ！トゲキッツスお願い!!」

トゲキッツスのおかげでピカチュウとポツチャマは助かり、俺たちはコーダイと対面し
た。…リオカさんは申し訳なさそうな表情を浮かべていたけど仕方ないだろう。

その後俺たちは無事セレビィとゾロアを連れて昼間、話し合いの場所となった家まで
向かう。そこでセレビィとゾロアの怪我を治し、これからセレビィを時の波紋まで連れ
て行くこうということになった。

…その後、トラックで追いかけてきたコーダイ達を止めるためにヒカリとタケシが動

いてくれたり、ドーミラーの協力とゾロアが囿になってくれたおかげでコーダイを出しぬいてセレビィを時の波紋まで行かせたり、ゾロアークのイリユージョンによってコーダイに時の波紋を奪い取ったという幻影を見せたりといろいろあった。今の俺たちはコーダイのムウマージのサイコネシスで宙に浮いている状態です。でも少しだけ皆傷ついてしまったけれど…コーダイの野望が叶うことはなくなっただけ、ゾロアも無事にゾロアークに会えて…良かった…？あれ、ゾロアが身体をふらつかせながらも今ようやくゾロアークに近づこうとしていて――。

「ああ、なんだ。そういうことか…ピカチュウ、ムウマージに10万ボルト！」

『ピ、ピッカ!!』

『ムウ!?!』

——ようやく思い出せた。この後何が起きるのか。そのことも全部、思い出すことができた。

幻影だと分かったコーダイが怒り、ふらつくゾロアとゾロアークに向かって機械で攻撃しようとする…のを俺は止めようとピカチュウに指示をして身体を自由に動かせる

ようにする。そして俺は全力で走り、今まさに攻撃しようとしているコーダイに向かつてとび蹴りをして吹っ飛ばした。とび蹴りされたコーダイはもうゾロアにも、ゾロアークにも手を出すことはないだろう。…というよりも、俺がそうはさせない。

「ぐっ!!? 貴様 ああ!!!」

「…もう終わりにしようぜ、コーダイ」

これでようやく、ハッピーエンドだろう。

『…サトシ。礼をいうんだぞ。ありがとうなんだぞ!』

『グオオ』

「どういたしまして。俺もピカチュウも…いつかお前たちの故郷に遊びに行くからな！」

『ピツカツチュウ!!』

イツシユ地方く兄妹と仲間たちの旅路く

第五十三話く妹は兄と共に行くことになったく

こ、こんにちは：妹のヒナです。兄が帰ってきました。そして巻き込まれました…。今回私がいるのはマサラタウンではありません。イツシユ地方です…。

イツシユ地方に母と兄、オーキド博士が遊びに行くと思つていたんですが、何故か私もその旅行に巻き込まれました。もちろん原因は兄のせいですはい…。

あと、私たち以外にも、ヒトカゲとルカリオがついて来てくれました。すつごく心強いです。オーキド博士なんてアロハシヤツみたいなパイシヤツを着て、かなり旅行を楽しもうとしているし…。事件とか起きてても大丈夫かな…？

まあ口ケツト団はもう悪さをすることはないしそこらへんは大丈夫だし…何とかなるよね…。

イツシュ地方では見たことないポケモンがたくさんいた。兄はシンオウからの記憶がないので、シンオウでもそうだが、イツシュのポケモンはとも新鮮だと言って笑っていた。でもこの後どうなるのか知っている私としてはどうにもこうにも……。

まず最初に、飛行艇から着いたときに起きたトラブル。伝説がピカチュウに電撃で攻撃し、その先のバトルでいろいろと問題が起きるはずのフラグだったんだけど……。まあ兄ですから。

ピカチュウとルカリオが先に異変に気づき、やってきた雷雲に……普通に攻撃して追い払ってました。

「ピカチュウ！かみなり！」

『ピイイツカカ!!!』

『ふんっ!!』

『ツツツ?!?!?!』

雷雲の中心にいらるであろう伝説に向かってかみなりとはどうだんを食らわせてました。そして雷雲はすぐさま私たちのもとから去っていきました。……何もすることなく。

私が何も原作のことを教えてないのにごく普通にフラグを叩き折ってましたよ。さすがスーパーマサラ人。

「何だったんだ今の？」

『ピイカ？』

『…ただの雷雲とは違っていたな』

「……あーあー」

『カゲツ？』

そしてその後、アララギ博士が迎えに来て、皆で一緒に研究所まで行くことになった。…その時に色違いのヒトカゲと喋れるルカリオに興味をもっていたりしたけど、時間がないからと車まで行きながらいろいろと話をしていた。

とめてある車まで行く途中でも車に乗っていく途中でもイツシユにしかない新しいポケモンに主に兄とピカチュウが大興奮。もちろん私とヒトカゲもテンションが上がる。

あ、あとルカリオもこういった旅行は初めてなのか、見た目は冷静を装っているが、すごく楽しそうなのが私たちには分かった。

アララギ博士は車を運転しながら私たちに質問してきたので、それに答える。

「どうサトシ君、ヒナちゃん。始めて見るポケモンばかりでしょう？」

「はい！」

『ピッカッチュウ！』

「本当に!!」

『カゲカゲエ！』

研究所についた後、オーキド博士とアララギ博士はいろんな話をして盛り上がり。私たちは待つている間、窓からイツシユ地方のポケモンを見ていた。見ているだけでもかなり楽しいのだけれど、もっと近づいてみたい、どんなポケモンなのか知りたいと兄は呟いていた。

そして急に1人の研究員がやってきて、今日旅立つ新人トレーナーに最初のポケモンを渡す時間だと言ってきたため、私たちは窓から視線を移し、博士たちに近づいて話を聞いた。

「最初のポケモンってどんなポケモンなんですか？」

「あら、気になる？じゃあ一緒に見ていきましようか！」

「え、本当ですか!？」

『ピカ!？』

「えっと…た、楽しそうだね…でも私はここで待ってるよ…」

『カゲツ!?カゲカゲエ!!』

『ヒトカゲも行きたいと言ってるぞヒナ。俺たちも行くぞ』

「そうだけヒナ!こういうのは楽しまないと損つてもんだ!!!」

「ちよっ!?ルカリオにお兄ちゃん?!」

…というわけで、その新人トレーナーと最初のポケモンたちを見に行くことになった。すごく嫌な予感がするんだけど大丈夫なのかな。いや大丈夫じゃないよね全然。

新人トレーナーはカメラを構えて研究所を撮りまくっている様子が遠くから見えた。その新人トレーナーの名前はシューティーというらしい。兄がこれから旅立つシューティーに微笑みながら言う。兄はこれから旅をするトレーナーに先輩として頑張れと言いたいから話しかけただけだ。そしてできればこの後シューティーがポケモンを貰ったらバトルでもしようと言うのだろう。

ごく普通に、楽しげに——まあそれで平穩に終わらないのがトラブルの基本です。

「俺、サトシ！後ろにいるのは俺の妹のヒナ！俺たちカントー地方のマサラタウンから来たんだ！よろしくなシューティー——」

「…カントー地方……ハッ！」

「ん？何がおかしいんだ？」

「いや、ずいぶんと田舎から来たんだなと思つてさ」

「……………」

「…うわあ」

『…カゲエ』

『ピイカ』

『ほう、あいつ随分と度胸があるじゃないか』

親しげに話しかけたというのに、シューティーはただ蔑み、田舎だと侮辱した。その

言葉に兄は楽しげな表情から一変して無表情になってシユーティーを見る。私とヒトカゲとピカチュウは侮辱したことを怒る前に、兄を怒らせたシユーティーにこれから起きるであろう暴走に憐れみ、同情した。そしてルカリオはシユーティーの度胸と言葉に感心していた。

…でもこれ度胸って言うよりも、藪をつついて蛇を出すとかそういう感じな気がする。

だが、シユーティーはそんな兄の様子に気がついていないらしい。むしろ兄の後ろにいる私たちに気づき、そしてピカチュウたちに驚いていた。シユーティーはカメラを取り出してピカチュウたちを撮りまくる。

「これは…！」

「…あ、あの…何やってるんですか？」

「君…妹だと言っていたね。これだから田舎者は困るよ」

「そ、そうですか…」

「はあ？」

『カゲ…』

『ピカ…』

『……………』

うんこれで私以外の皆がシューティーの言葉にキレた。完璧にブチ切れました。

皆、過保護すぎるよ本当に…。兄なんてシューティーの言った言葉に怒りすぎて声とか変わってるからね。ヒトカゲも苛ついてるみたいだし…これ本当に大丈夫なのかな…。

でもシューティーもアララギ博士も、周りにいるイツシュ地方の人は皆、兄たちの様子に気づいていない。もしかしてイツシュ地方の人間って天然だったりする？

そしてシューティーは興奮したように話を続けた。

「いいかい？イツシュ地方にピカチュウとヒトカゲ、ルカリオがいる。しかもヒトカゲは色違いだ…これは事件だよ！」

「えっと…ピカチュウたちは私たちと一緒にカントー地方から来たから…事件っていう

ほどじゃないと思いますよ」

「…なんだ、田舎者のポケモンか」

「ほう…?」

『ピイカ?』

『…カゲエ』

『……………』

この言葉がいけなかった…もう本当にご愁傷様です。

というよりもルカリオが何も喋らずただ無言でシューティーを睨み付けているのが凄く怖い。兄たちは普通に言葉は言っているから大丈夫…ではないよね。

まあこれから挫折するかもしれないけど頑張ってシューティー。

無言で立っている兄たちを無視して、話は進み、シューティーは無事にツタージャを手に入れることができた。

そしてポケモン図鑑とモンスターボールを手にして旅立とうとする———のを

兄が止めてきた。

「バトルしようぜシューテーター」

「バトル…君、強いのか？」

「ああもちろん。シューテーターにはいろいろと言いたいことが山ほどあるしな？」

『ピイカ…！』

『カゲ!!』

『……………』

「…ほどほどにね」

兄たちのバトルを見に行きたくはないと心の底から思っているんだけど、ヒトカゲが凄く行きたそうにしているから仕方なくついて行くことになった。

…結果はまあ、想像通りです。

第五十四話 くギリティナは暇すぎるらしいく

やつほーこんにちは、ギリティナです！

え、俺に会いたくない？サトシ君やヒナちゃんを出せ？そんな悲しいこと言うなよー

！

現在俺は普通に反転世界を管理しながら外の様子を見ていたりする。え、覗きは犯罪だって？いやいやいや俺一応伝説だからね？そういう意味で覗いたりはしないよ！…うん。

まあそれで、今までの俺はアルセウスが目覚めるかもしれないために必死に反転世界で汚れていったものを取り除き、シンオウを中心とした活動しかできなかったけど、これからは違う。ずっとは無理なんだけど、普通にシンオウの外に出ることもできるし、何が起きているのか外の様子を見ることもできる。

さて、ひまつぶしにサトシ君は今どこにいるのか探してみようと思って世界の外を覗いてみる。シンオウ地方にはもういないらしいからマサラタウンを見たけどいいない……ああイツシユ地方にいた。そうかももうそんな時期か。

『ありや、サトシ君たら……ヒナちゃん連れて旅立ってるし……どんまいヒナちゃん』

ヒナちゃんがすごく嫌そうな表情でサトシ君と一緒にイツシユ地方を歩いている。おそらくこれから出会うとても個性的な人たちとの関わりが嫌なんだろうなあ。俺もイツシユ地方にはあまり行きたいと思わないし……というより俺が外に出ていいことなんて一つもないはずだ。まず絶対に捕まえてくるだろうからね……まあ人になればそういう騒ぎはないんだけどさ。

『あれヒカリちゃん？……っ!? アリアドスに捕まってる!……あ、でも何とかなるか』

ふとシンオウ地方を覗いて見るとヒカリちゃんともう一人の女の子、そしてポケモンたちがアリアドスに捕まっている様子を見て俺は焦った。でもこの話は確か原作でもあったはずだと思いついて安堵した。だって今まさにヒノアラシが進化してアリアドスをふんかで追い払っているからね。

…そういうえばヒカリちゃんってホウエン地方に旅立つんだっけ。

『…面白そうだし、少しぐらいなら外に出てもいいかな?』

この反転世界はアルセウスが目覚めそうなころとは違い、たまに発生する汚れたものを排除するだけでおさまってきているし、ずっと外に出るのは無理だけれども、定期的はこの反転世界に戻ってくるという意味ではいいかもしれない。それに反転世界に何かが来たらすぐにわかるし、もしもシェイミが来たら今度はそのまま俺と一緒に来てもらおう。よし決めた!

『ヒカリちゃんについて行こう!』

.....

船に乗っているヒカリはポケモンたちと共に新たにホウエン地方に向けて旅に出ることを決めた。そして見送ってくれた町のみんなとお別れをして、町にいるみんなの姿が見えなくなったのを確認してから前を向く。

「さあ、頑張っていこう！」

『ポチャ!!』

『そうだねヒカリちゃん！頑張れ！』

「えっ!?何でいるの!?!」

『ポチャ!?!』

ヒカリちゃんがギラティナのいる方を見て叫ぶ。ギラティナは人の姿をとって船に乗っていたからだ。しかも楽しそうに。

ヒカリは驚いた表情でギラティナに何故ここにいるのか質問する。だが、ギラティナは楽しそうにただ笑い、そしてヒカリの手を掴んで言う。

『俺もヒカリちゃんの旅について行くよ!!というより一緒に連れてって!』

「ええええええ!!」

『ポチャアアアア!!』

——こうして、ヒカリのホウエン地方への旅路に、新たな同行者が加わるこ
とになった。

第五十五話く妹は兄の旅に連行されたく

こんにちは妹のヒナです。…もう帰りたいです。

今いる場所？まだアララギ博士の研究所ですよ。でも何故か私も兄の旅に同行することになってしまいました。オーキド博士も母もイツシユ地方でいろいろと学んで、楽しんできてと応援してます。でも私としては凄く帰りたい…おもにシューティーと兄のバトル等々の様子を見てたらさ…。

「バトルをしてくれて…本当にありがとうございました!!サトシ先輩!!!」

「おう。もう人に嫌がるようなことは言うんじゃないぞ」

「はい！もちろんですよサトシ先輩!!!」

「あと無断で写真を撮るな。ちゃんと頼んでから撮るように」

「わかりました!!」

「さっそくやつちやつてるし……」

まあこんな感じでシューティーの態度を変えてしまいました。え、どうやったのかわかっていますか？まあまず兄の圧倒的なバトルでシューティーを負けさせてから心をほっこぼこに叩き折って、その後いろいろと……すいません言いたくないです。

しかもまたしつこくやつてきた雷雲に向かって攻撃して追い払ってるし……。でもそれのおかげでアララギ博士たちが私たちに雷雲の中にいるポケモンの正体を教えてくれました。そして何度も来たために、兄が次会って攻撃してきたときは容赦なく潰すと宣言しました……ごめんねゼロム。

「お兄ちゃん……私帰りたい」

「何言ってるんだよ。旅はまだ始まったばかりだぞ」

『ピツカツチュ!』

『カゲ!』

『そうだな、ヒナ。いつまでも泣き言を言っているようでは今までの修行が無駄だった

と判断するぞ』

「む、無駄じゃないもん」

ようやく旅に出ることになったんだけど、本当に行くのが嫌です…この先どんなことになるのか、兄がどう暴走するのか見るのがつらい。

あ、今誰が旅に同行しているのか気になる？まず兄とピカチュウ。そして私とヒトカゲとルカリオです。

ルカリオは私とヒトカゲが旅に同行するということを知らないとすぐさま俺も行こうと言ってきました。オーキド博士も母もそれに賛成です。まあルカリオの料理美味しいし、兄を止めてくれるだろうから私は構わないかな。…兄を本当に止めてくれるのか不安だけどね。

まあそれで、私たちはサンヨウシティのサンヨウジムに向けて歩いてるんですけど…草むらに何やら動いている生き物を発見し、さっそく兄がポケモン図鑑を取り出して調べてます。

「…キバゴ？にしては色が違うような…というよりなんか大きくないか？」

『ピイカツチュ？』

『カゲエ？』

「…お兄ちゃん違うよ。普通に人が草むらにいただけだよ」

『そうだな。ヒナの言うとおり。波動で見てみたら人とポケモンが一緒にいると分かったぞ。おそらく凶鑑はポケモンを感じしたんだろうな』

「ああなるほど…」

兄が草むらの中にいる人に話しかけようと動く。草むらの中で何をしているのか気になっていなのだろう。

その人…いや少女はキバゴのためにきのみをとって食べさせているということが分かった。

「え?!ピカチュウ?それにルカリオにヒトカゲ!!?すっごい可愛い!!!」

『ピ、ピイカ!?!』

『カゲツ!?!』

「…あーあー」

『……………』

少女は近くにいたピカチュウを抱きしめて思いつきり撫でまくる。私はヒトカゲを抱きしめて兄とルカリオの後ろに隠れていたためその被害に遭わなくてすんだ。ヒトカゲとルカリオは撫でまくられて嫌そうなピカチュウを見て同情する。ルカリオはな

るべく騒がれないように喋らずにいるようだ。怒っているわけではないので誤解しないようにね？

そして何故ピカチュウたちがいるのか少女が私たちに聞いてきたため、兄が自己紹介をする。

「俺たち、カントー地方のマサラタウンからこつちに来たんだ。俺はサトシ！それで後ろにいるのがヒナで…ルカリオ達のこととは知ってるよな…俺たち、イツシユリーグを指して旅をしているんだ。よろしくな！」

「…よ、よろしくお願ひします」

「そうなんだ！私はアイリス。よろしくね！」

握手しようと動くアイリスだったが、きつく抱きしめられているピカチュウが限界になり、10万ボルトで攻撃した。そしてそのままアイリスは倒れ、その隙にピカチュウが逃げて兄の肩にのる。

気絶したアイリスにルカリオがいやしのはどうをして回復させ、私たちは目を覚ました彼女と話をすることになった。その間もずっとピカチュウが不機嫌な表情で座っていたということだけは言っておく。

「——あ、そういうえば昨日、カノコタウンにすっごい雷雲が何度か来てたよね？知ってる？」

「ああ、まあな。あの雷雲にはゼクロムがいたんだってアララギ博士が言ってたぜ」

「ゼクロム!?! 伝説と呼ばれしポケモンゼクロムだったの!!? ねえねえ詳しくお話し聞かせて!!!」

「…これって長くなりそう?」

『カゲエ』

アイリスが興奮して兄の話を聞こうとする。だが兄はアイリスの後ろにいたシキジカに夢中になってしまい、すぐにその後を追いかける。…え、私? もちろん兄とピカチュウの後を追ってますよ。ルカリオがヒトカゲと私を背負いながらだから、私たちは走っていないんですけど。そしてアイリスもその後を追いかける。

辿り着いた先には、兄が草むらの陰から追いかけていたポケモンを見て、凶鑑で確かめている様子だった。凶鑑はシキジカについての説明がされている。それを聞きながら兄は興奮したようにそのシキジカの群れを見た。

「シキジカっていうのかあのポケモン…!」

『ピイカツチュウ!!』

「お兄ちゃん捕まえるの?」

『カゲエ?』

「いや、まず飛行タイプを捕まえたいからシキジカを捕まえようとは思ってない。どんなポケモンか確かめに来たただだからな!」

「君って子供ねえ?ポケモントレーナーなら普通は捕まえるでしょ?」

『キバキバ?』

「…何言ってるのお前」

『ピイカ…』

『…ヒナ、ヒトカゲ。ここは危険だからもう少し離れるぞ』

「喋った!!!」

『キババ!!!』

『ッ!』

「…うわーいカオスだ」

『…カゲッ』

アイリスが私たちの後に追いつき、話しかけてくる。でも少しトゲがあるその言葉に

兄の機嫌が急降下していく。

ルカリオがその様子を見てやばいと判断し私たちに注意したのだろう。でも喋ってしまったために驚いたアイリスに飛びつかれている。ルカリオは興奮するアイリスから逃げようとするが、すぐに追いかけてられて大変そうだ。

その騒ぎによつてシキジカが逃げてしまった。騒いでいる所の近くには不機嫌な兄とピカチュウがいて……うん何これ。

「ヒトカゲ……私、マサラタウンに帰りたい」

『カゲ……カゲカゲエ』

ヒトカゲが私の手を掴んで頑張れと応援してくれた。ありがとうヒトカゲ。でもこのカオスどうやって止めようかな……。兄なんて喋るルカリオに興奮しているアイリスに近づいて何かやらかしそうだし。

「……………はあ」

『……………カゲエ』

第五十六話くその頃のマサラタウンく

こんにちははミュウツー……って俺が何故このような挨拶をしなければならない。

それよりも、マサラタウンではサトシが旅立ったことに悲しみ、そしてヒナがその旅に同行したことでさらに皆が号泣している状況を何とかしてくれないか？

……できないだと……そうか。

『おいフシギダネ。この状況を何とかしろ』

『ダネ……ダネダネ』

『何、いつかは収まるからそのままにしておけだど？だが……』

『ダアネ！』

『そうか、分かった』

フシギダネは号泣している仲間たちを放つて見回りに行くこととして歩き始めた。俺もここにいては意味がないと判断し、森の中から出ようと動く――。

『ベイベイベイベイベイ!!!』

『つ!!ミューミューウ!!』!!!

『…ジユカ』

『ウキヤツ!?』

『ムツクホー!!』

『ベイベイ!!』

『ワニワニ!!』

『キューン…』

『…おい待て貴様ら何をするつもりだ』

ベイリーフを筆頭に悲しんでいたはずのポケモンたちが騒ぎ出した。ベイリーフがサトシ達に今すぐ会いに行く方法を探そう!と話をして興奮したように叫んでいる。その言葉にミュウ達が興味を持って話をする。

ベイリーフはサトシやヒナに会えないのなら会えるようにすればいいと言い。ミュ

ウがじゃあギラティナでも呼んでどうかしてもらおう？と言ってしまったために、余計に暴走している。

俺はその様子を見てすぐに空から下に降りて話を聞く。

『ミュウミュウ！』

『…やめろ。お前のやることは世界を動かす方法だ…何かあつては世界が終わるぞ』

『ミュウ…』

『ベーイ…』

ミュウの話ではやはりギラティナに協力してもらつてこのマサラタウンとサトシの間を行き来できるようにしてみようという突拍子もない考えだった。だがそんな突拍子もないことができるのが伝説のポケモンだ。そしてあのギラティナならば笑いながら良いよ！と言うのかも知れない。だがそれではサトシ達の旅に何かあつたらどうするつもりだ。それにその方法でもしも世界に何か異変が起きてしまったらどうするつもりだといつて注意し、やめさせた。

だがミュウもベイリーフも——他のポケモンたちも諦めきれないらしい。まとめ役であるフシギダネがどこかへ行つてしまったため、この話が収まる様子がない。

…俺もサトシやヒナに会いたいから少し考えてみようと思ひ、いまだにアイディアを出しあつているポケモンの集団の近くへ行く。

『ワニイ!!!』

『ヘラクロオ!!!』

『ブイブイ!!!』

『ズツバアア!!!』

『…いっておくが、やりすぎだと判断したらフシギダネを呼びに行くからな。それだけは肝に銘じておけ』

諦めきれないと叫ぶこいつらを止める気は俺にはない。というよりそれでサトシとヒナに会えたらいいという気持ちも強いからむしろ賛成だ。会いに行つて話をして、そしてできればバトルをして帰る。ああ、上出来だろう。

とにかく、サトシ達の旅の邪魔をしないこと、世界の崩壊がなければそれでいい。

『ミューウ!!!』

『ベイリー!!!』

『ツ!!!』

ミュウとベイリーフがリーダーとなって話は進み、どうやってイツシユ地方まで行く

のか考える。

そしてそんな騒がしい集団に、オーキド研究所にサトシがいると知っているアルセウスがサトシ達に会いに来ようと近づくまであと――。

第五十七話く妹は旅を楽しむことにしたく

こんには妹のヒナです。もうマサラタウンに戻るのを諦めました。というよりヤケになりました。もうどうにでもなれ。

え、今ですか？アイリスさんに世の中の常識と礼儀等々を教え込んでますよ。かなり洗脳的に…。

ルカリオとヒトカゲは私と一緒に晩御飯の準備をします。きのみが沢山ある木を発見したので今日はきのみを中心として作った晩御飯になりそう。でも絶対に美味しいよねだってルカリオが作るんだもん。

そして私たちが作っている間に兄とアイリス、キバゴが座って、見た感じ講座的なものを行っています。…たぶん改心したシューティーがこれ見たら僕もやりたい！とか言っただけな気がする。

「へーなるほど…知らなかった…」

「まあ普通はそうだろうな。でも旅をしていくごとに分かってくからな。それに言葉で言うのは人によっては傷つけることもあるんだから、気をつけるよ」

『ピイカツチュウ!』

「…うんわかった。これから気をつける」

『…キバキバ』

「平和に解決したってことでいいのかな？」

『カゲカゲ?』

『…うるさくなければそれでいい。それよりもできたぞ』

ルカリオが鍋からお皿におかずを移動させて、簡易テーブルまで持つていく。すごく良い匂いで美味しそうだ。ルカリオに頼まれたので、私とヒトカゲはご飯ができたことを兄たちに伝えるために近づいていく。

「お兄ちゃん。アイリスさん。ご飯出来たよ」

「お、本当か? ルカリオの飯って久々だなあ!」

『ピツカ!!』

「え、私とキバゴも食べていいの?」

『キバキ?』

「ああ、食べていいんだよ。どうせここから先サンヨウシテイまで一緒に行くんだろ? もう夜遅いし俺たちと食べようぜ?」

「そうですよ。それにルカリオの作る料理は本当に美味しいんですから。一緒に食べましょう!」

「…ありがとう」

『…キバキバ』

アイリスとキバゴは昼間のこともあって少し気まずそうだったが、私たちは人を蔑むような言い方をしなければ何も言う気はない。それに兄の説教その他諸々を受けたアイリスにこれ以上何かを言うつもりもないし、やりすぎも良くないと分かっているからもうこれで昼間の話はおしまいにしようだ。私とヒトカゲは微笑みながらまだ気まずそうに動こうとしないアイリスの背中を押ししてご飯ができている簡易テーブルまで一緒に行く。

「うわあ美味そう!!ルカリオお前絶対に嫁に向いてる!!!」

『おいサトシ。お前もそれを言うのか』

「…確かに」

『ヒナ、お前だけおかわりはなしにするぞ』

「ごめんなさい!!!」

「……あ、あのルカリオ……さつきはごめん!」

『……キバキバ!』

『……いや、お前たちが悪いと思っていて、反省しているのならそれでいい。それよりもやく食べないと全部サトシが食べてしまうぞ』

「え、早!? もうおかわりしてるの!!?」

『キババツ!』

「お兄ちゃん喉つまらせても知らないよ?」

「これぐらいで喉はつまらせないぞ俺は! それよりルカリオ、おかわり!!」

『分かったから少し待て。おいキバゴ、お前の分はピカチュウたちのところにあるからそっちに行つて食べていろ』

「あ、ありがとうルカリオ!」

『キバキバ!!』

……まあこんな感じで平和な夜を過ごしました。終始ルカリオがおかんだつたということだけは言っておきたいかな。

そして次の日、研究所から私たちの後をつけてきたミジュマルが兄のポケモンになりたいと言つて来たり、でもいきなりそのミジュマルが消えて、ルカリオの波動の力で後を追つたら砂風呂があつてそこでメグロコたちに襲われたり、襲われた原因が間欠泉に気づいたメグロコたちが野生のポケモンを避難させようとした行動だったり：まあいろいろありました。サングラスのかけたメグロコが結構可愛かったです。その後を考えると微妙な気持ちになるけどね…。

そしてこれらの問題を兄がフラグともども吹き飛ばし、無事に終わらせたのは言うまでもありません。

それとその日の夕方、アルセウスらしきポケモンを上空で見たような気がするんだけど：たぶん気のせいだよねきつと：兄がその方角に向かって走り、しばらく帰ってこなかったのもそのせいじゃないよねたぶん。

第五十八話くマナファイは気づかず全てを教えたく

こんにちは、ハルカです。…なんだかこういうのって恥ずかしいかも。

今日はマサラタウンでマナファイに会うためにやってきました。オーキド研究所に行くのは本当に久々でちよつと緊張します。

「こんにちは！ヒナちゃんいますか？」

「久しぶり。今ヒナちゃんはサトシと一緒にイツシユ地方に行っていないんだ」

「え?!イツシユ地方に!!?」

「そうじゃよ。サトシの旅について行つたぞ。おかげでサトシのポケモンたちから大ブーイングがきとつたわ」

「そうなんですか…」

ケンジとオーキド博士が言う言葉に驚いてしまった。

何故ならヒナちゃんはサトシと一緒に旅をしようとは思ってなく、このマサラタウンでのんびり過ごしていたいとよく言っていたから。しかもイツシユ地方って…遠すぎるかも。まあサトシだし仕方ないかな？

「あの…オーキド研究所の森の中に行ってもいいですか？知り合いがいて会いに行きたいので」

「おお、構わんぞ！そうじゃ、近くにフシギダネがおるから案内に頼んでおこう」

「ありがとうございます!!」

サトシのフシギダネが研究所の近くにいたため、私はすぐに近づいて挨拶をする。そして森の中にある湖に行きたいと説明し、そこまで案内してくれることになった。

『ダネダネ!』

「ありがとうフシギダネ。…でも、この森の中も久しぶりかも!」

『ダネダネ…』

私とフシギダネは森の中、湖までの静かな道を歩き続ける。途中で森の中から大きな音が聞こえてきたりしたんだけど、フシギダネが一瞬怖そうな表情を浮かべてその音の方角を見ただけですぐにまた歩き出す。そしてついた先に待っていたのは湖の水で遊

んでいるマナフィ。でも私とフシギダネに気づいていないみたい。マナフィのもとに行く前にフシギダネに一度言っておかないとね。

「フシギダネ。ここまで送ってくれてありがとう！」

『ダネフツシ！』

「…フシギダネはさっきの音の方角が気になるんでしょう？行ってきた方がいいかも。私たちは大丈夫だから！」

『…ダーネ』

フシギダネは私に一度挨拶をしてから走っていく。おそらくオーキド博士やケンジが言っていた草ポケモンと水ポケモンの争いを止めに行くのだろう。私はその後ろ姿を見送った後、すぐにマナフィのもとへ急ぐ。

「久しぶりねマナフィ!!」

『マナア…ハルカ!!』

マナフィは私に気づいてにっこりと笑みを向けてきてくれた。私も微笑み、マナフィを抱き上げる。

そしてマナフィは私が抱き上げたことに喜び、もっと抱きしめてという仕草を示してくれた。本当に可愛い。

『カモ！マナマナア!!』

「え、どうしたのマナフィ…?」

『マナ!』

マナフィが私に抱きしめられながら、ある場所を指差してきた。その場所に行きたい
みたいだけどもそこは先ほど大きな音が聞こえてきた方角で…。

「あの場所が気になるのマナフィ?でもあつちは今フシギダネが向かっていていろいろ
と危ないかも…」

『マナマナ!!ハルカ!』

「…もうしようがないなあ。でも危険だつてわかつたらすぐにまたここに戻ってくるか
らね?」

『マナ!!』

マナフィが凄く行きたいという表情で私に言うのだから、仕方ない。私はマナフィを
抱きしめたまま示した方角へ歩いて行った。

.....

「…え、何これ!?!」

『マナア!!』

辿り着いた場所に待っていたのはいろいろと伝説のポケモンたちとサトシのポケモンたち。そしてその全員に説教をしているらしいフシギダネの姿だ。でも異様なのはそれだけじゃない。ポケモンたちの奥に見える何か。空間が捻じ曲がり、渦巻いている光景。その空間が捻じ曲がっている所に近づいたら巻き込まれてもうこの場所に二度と帰ってこないようなそんな異様なモノがあった。

驚いている私と喜ぶマナファイに気づき、ルギアと呼ばれているポケモンとミュウツーと呼ばれているポケモンが私たちに近づいてきた。…こういう伝説のポケモンに会うのって久々かも。今まではサトシと一緒に旅してきて見たことあったもの。

『…マナファイ。何故その人間をここへ連れてきた』

『マナマナア!!!』

『ダネ?!ダネダネ!!!』

『…なるほど、優れたる操り人に会うためにはマナファイの母親である彼女にも協力してもらえば何かいいことがあるかも…か』

え、私のこと？…って優れたる操り人って誰なんだろう。もしかしてサトシのことかな。うんたぶんそうなのだろう。

というよりも、ポケモンが喋るのってもう普通なのかな。ポケモンで喋るのはニャースやルカリオで見たことあるし、伝説もいるからポケモンでも喋ることができるのも少なくないかも？

『…おい、その女』

「え？私のこと？」

少しだけ考え事をしていたら、何やら神々しいポケモンが私に近づいて呼びかける。…後で聞いたたらそのポケモンはアルセウスって言って世界を創造したポケモンなんだって。そういうポケモンとサトシが知り合いつて本当にすごい！

『私たちはサトシに会いにある計画をたててそれを実行しようとした…だがそれはフシギダネに止められ、いまだに成功していない。女よ、サトシと会える方法。サトシと話せる方法…お前なら何か考えられるか？』

「も、もしかして…その方法ってあの空間のこと?…えっと、それなら、電話をしたらどう? 会えるってわけじゃないけど…電話ならサトシと話せるし、もしかしたらポケモンを転送…はイッシユだから遠すぎるし…先に電話してその後を考えてみてもいいかも?」

『
——
つつつ??
!!!!?』

こうして、私は皆からサトシに連絡することができて、皆サトシ達と話をする事ができた。そしてその電話の際、サトシが私に伝説の話は皆に言わないでくれとお願いされた。もちろんサトシの頼みなら絶対なもの。私は言わないって誓ったわ。

でもポケモンたちは電話しただけで納得しようとは思っていないらしい。電話で話せてよかったと思っっているみたいだけど、やっぱり直接会いに行きたいという気持ちが強みたい。

アルセウスなんて直接イッシユまでサトシに会いに行つたぐらいなのだから。

そしてそのせいで余計に場は収まらず、たびたび私がマナフィに会いに来ると相談するようになったりなかったり…。

でも、今思うと…ポケモンたちは伝説も手持ちの仲間たちも随分とサトシとヒナちゃん
んのが好きよね。さすがサトシ！そしてヒナちゃん！

私も頑張らないと!!

第五十九話　く兄は怒り、妹は悲しんだく

こんにちは兄のサトシです。俺たちは今、サンヨウジムに向かって歩いていきます。

そしてようやく到着したのはサンヨウシティではなく、カラクサタウン。ジムはまだまだ先だけれど、ここにも何か新しいポケモンがいそうでわくわくします。あ、それに俺、ミジュマルだけじゃなくマメパトも捕まえて旅をする仲間が増えたんだぜ！

そしてカラクサタウンに到着した俺たちは、アイリスが嬉しそうな表情で俺たちに向かって言う。

「カラクサタウンにはね。ポケモンバトルクラブがあるのよ！ねえ皆。一緒にいかない？」

「ポケモンバトルクラブ!？」

『ピツカア!?!』

『ほう、面白そうだな』

ポケモンバトルクラブ：バトルというからには、おそらく戦うことができるのだろう。俺とピカチュウ、ルカリオはその言葉に興味をもった。そしてアイリスの案内で俺たちはそのポケモンバトルクラブがあるという建物へ向かって歩く。

「…ポケモンバトルクラブ…ねえ？」

『カゲエ?』

歩いている間、妹が何やら悲しげな表情を浮かべて呟いた。妹に何かあったのか聞かすぐに誤魔化されたため、俺は首を傾けて疑問に思った。もしかしたらこの町で何かあるのかもしれない。バトルも楽しみだが、気を引き締めていつてみよう。

.....

ポケモンバトルクラブでイツシユ地方にはいないピカチュウに興味を持ったトレーナーが対戦を申し込んできたためバトルをすることになった。でも開始時にミジユマルが勝手に出てきてバトルにやる気になったと思ったら、対戦相手のフタチマルを見て戦意を喪失し、ピカチュウの背を押してかわつてもらつてた…。

まあ一応バトルの相手を見るまではやる気はあつたみたいだし、ミジユマルはいろいろと育てがいがあると判断してボールに戻す。

「ははは…まあ仕方ないか」

「そうですね。ミジユマルやる気になつてたのになあ」

『カゲカゲエ』

『キバキバア』

『……………なあヒナ』

「バトルしたいならお兄ちゃんに頼んでね？私は何もやらないから」

『……………』

「え、えつと…ルカリオ？もしも私でいいなら、バトル一緒にする？」

『……………いや、大丈夫だ。すまない』

「うんこつちこそごめんねいきなり。でも何かあつたら私に遠慮なく言つてね？」

「すいませんアイリスさん」

「いいのよ。こっちもいろいろと助けてもらってるし…教えてもらってるからね」

何だか外野が煩いけど、俺はとにかくバトルを楽しもう。そう決めてフタチマルとトレーナーを見つめて試合開始の合図を待つ。

合図とともにピカチュウに指示をだし、バトルを楽しもう——としたら何やら建物から警報が鳴り響き、俺たちはそれに驚く。そして倉庫にまた現れたという謎のポケモンという話に俺たちは興味をもった。

「え、謎のポケモン…?」

「面白そう! ねえサトシ、皆…その謎のポケモンに会いに行ってみない?」

『ああ、だがもしもその謎のポケモンが危険だとしたら…』

「そうなたらすぐに戦うか逃げればいいって! 行こうぜ皆!」

「……………」

『カゲ?』

「…あ、うん。何でもないよヒトカゲ。一緒に行こう」

『カゲエ!』

俺はアイリスの意見に賛成して行こうという。ルカリオがヒナとヒトカゲの身を案

じ、危なかつたらどうすると止めてきたが、その時は俺たちがなんとかするから大丈夫だと説得して行くことになった。…でもその途中で妹がまた悲しそうな表情を浮かべていてすごく気になった。もしかしたら倉庫に何かいるかもしれないと俺は走るスピードを早めていく。

.....

結局、倉庫には何もいなかったため、俺たちは監視カメラでその謎のポケモンの正体を確かめることになった。でも影しか映っておらず、結局は分からないまま…とにかく、探してみればわかるよな。

そう思って探して見つけた謎のポケモンの正体はポカブだった。

でもポカブの様子がおかしく、口を縄でぐるぐるに巻かれ、そのせいで思う様に食べ物食べれずにやせ細って弱っている姿だった。皆がその姿に驚き、そして怒る。ポカブに縄を巻いたのは誰だと怒りながらも、その縄を解き落ち着かせる。そしてルカリオが作ったポケモンフーズをポカブに食べさせる。ポカブは相当お腹が空いていたのだろう。勢いよくポケモンフーズを食べている。そんなポカブの背を優しく撫でながら

ルカリオは言う。

『カブ…！ポカア!!』

『ゆっくり落ち着いて食べるんだ…そうだ。水が欲しくなったらここにあるからな』

『ピカピカ!!』

『キバキバ!!』

『カゲカゲ!!』

『カブウ!!』

「ポカブ、ちゃんと食べてね…それにしても酷い、酷すぎるわ!」

「ああ…誰だこんなことやった奴は…!」

「……………たぶん、ポカブの元トレーナーだと思うよ」

「…え? ヒナちゃん何か知ってるの!？」

「……………どういうことだ？」

「…わ、私の考えだからはっきりは知らないんだけどね。でも初心者用のポケモンがここにいるのっておかしいでしょ?」

「確かにそうね…」

「ヒナ……」

妹はとても悲しそうな表情でポカブたちに近づき、いまだに食べているポカブを優しく撫でる。…その様子から、やはりこれは原作の話なのだろうと分かった。少しだけ嫌な予感がするが、おそらく気のせいではないのだろう。

その証拠にその後、お腹いっぱいになって眠ってしまったポカブを抱いたままバトルマナージャーの人たちのもとへ行ったら、そのポカブに見覚えがあると言って、以前ポケモンバトルクラブに来たトレーナーが捨てていったと教えてくれた。その言葉に俺たちは怒りに震えた。

だが話しているうちに目が覚めたのだろう。ポカブが目を開けて俺たちを見てきて驚いていた。

『…ポ!?!ポカ…?』

「あ、ポカブ起こしちゃったか?ごめんな…」

『ピカピカチュウ…』

『…ポカア!カブウ!!』

「あら、どうしたのかしら。その子なんだかサトシに何か言いたみたいね」

『キババ?』

『ポカア!!!』

「…もしかしたら、お兄ちゃんの仲間になりたいっていつてるかもしれないね。そうでしょうポカブ?」

『カゲカゲ?』

『カブウ!』

ポカブが頷いて、俺を見つめてくれた。それを見て俺は空のモンスターボールを取り出してから、もう一度ポカブに問いかける。

「ポカブ、俺の仲間になってくれるか?」

『カブウ!!』

その鳴き声と共に、ポカブは元気よく空のモンスターボールに当たってボールの中に入ってしまった。

ポカブを捨てたというトレーナに怒りを覚えながらも、仲間が増えたという嬉しさがあつたと思える1日だった。

(よし、ポカブを捨てたトレーナーに会ったら速攻で叩き潰すか)

第六十話～兄はサンヨウジムのために特訓した～

こんにちは兄のサトシです。今日はサンヨウシティにようやく到着し、ジム戦に挑みたいと思います。その前にミジュマル達の特訓をしないといけないので、一度町の外に出て、少し大きな広場でルカリオに頼みバトルの相手になってもらってます。まず最初の特訓はミジュマル。

俺たちがバトルする間、遠くの方ではルカリオの作ったクッキーを食べながらバトルを観戦するピカチュウとポカブとマメパトとヒナとヒトカゲとアイリスとキバゴがいたりする。

とにかくミジュマルはバトルをしたいというやる気はあるから、その後に怖気づかない精神と力を鍛えていく特訓をする。でもやりすぎは逆にバトル嫌いになる可能性が

あるから程々にゆつくりとやっていく。まずはジムのために逃げないということの強さを鍛えていこう。

『ミ、ミジュ……!』

『…怖いか。だが恐れるな!俺に向かって攻撃して来い!』

「ミジュマル。大丈夫だ、俺を信じてくれ」

『ミジュ!!』

ミジュマルは最初の特訓時、強いルカリオが目の前にいることに怖気づき、俺の後ろに隠れてしまうことが多かった。

なので最初は技をルカリオに当てるといふ特訓をしていくことで怖がらないようにしていき、がむしやらにはなくちやんと相手を見て技を当てるように練習していく。

そして最初の方はあまりうまくいかなかったが、ミジュマルがルカリオをしつかりと見て技を当てようとしてきたため、少しずつではあるが恐怖心がなくなり、逃げようとはしなくなってきたと分かってきた。

その後、慣れてきたときから模擬バトルを初めた。模擬バトルはマサラタウンでよくポケモンたちが行っているバトルだし、ルカリオも参加することが多い。

そのため、まずしばらくの間模擬バトルに慣れているルカリオはただ避けるだけにし

てもらい、ミジユマルが攻撃をしていくというハンデにする。

ミジユマルはそのバトルのハンデを嫌がっていたため一度だけ対等に戦ったのだが、バトルが始まったと同時にルカリオのはどうだんを見て怖気づくということが多かった。その後ハンデありで戦うことにも嫌がらないしむしろそうしてほしいという感じだったので。ハンデありで、ゆつくりとその強敵に挑む恐怖心というのを緩和していくことに専念した。そうすればジムで模擬バトルのように恐怖心もなく逃げようとすることもなく戦うことができるはずだと思っっているからだ。

「…ミジユマルの動きが良くなってきたわね。これならジム戦も楽勝なんじゃない？」
『キバキバ？』

「そうですね。ミジユマルがすっかりとルカリオを見て戦うようになってきてますから。…でも楽勝に行けますかね？バトルというのは最後まで何が起きるか分からないものだとお兄ちゃんがよく言ってますし」

『カゲカゲエ』

『ピツカツチュ』

『カブウ』

『ポー』

「なるほど。確かにヒナちゃんの言うとおりのね。バトルは何が起きるか分からない…

うんそうよね」

『キババ…』

「あ、え…でもミジユマルもお兄ちゃんもちゃんど全力を出して戦うはずですから絶対に勝ちますよ！」

『カゲ!!』

『ピツカ!!』

『ポカア!!』

『ポオー!!』

「…全力で戦って勝つに決まってるだろ。なあミジユマル？」

『ミツジユマ!!』

後ろで話し声が聞こえてきてその話について反応してしまった。ミジユマルもルカリオも模擬バトルをしながら聞こえてきたようで俺の言葉に反応する。ミジユマルはやる気がまた出てきたようだが、ルカリオは苦笑しながら油断していると負けるぞ?と行ってミジユマルを小さめのはどうだんで攻撃して場外へ吹っ飛ばした。

だがミジユマルはその後木にぶつかっても倒れず、むしろルカリオにもっと本気出し

てきても大丈夫だと挑発をしていた。ルカリオはその挑発にのらず、ただ普通に満足そうに笑っていた。

『ミジュ！ミジュミージュ!!』

『…ああ、最初の方と比べてだいぶ良くなってきたな』

『ミジュ?』

「だろ?なあミジュマル。最初は俺の後ろに隠れてルカリオと戦いたくなかったのに、今はルカリオに向かって行こうとしてるんだぜ。凄く成長してるってことなんだよ」

『ミ、ミジュ…!』

ミジュマルはその言葉を聞いて満面の笑みで俺に向かって突撃し、嬉しさのあまり抱っこをしてほしいと言ってきたのでそれに応じる。本当に最初と比べて強くなってきたるし、頑張ってるよなミジュマルは。

そしてミジュマルを抱っこしつつ、ルカリオに近づいて感謝の意味で握手をする。ルカリオも俺のいいことが分かったらしく、微笑みながら俺と握手をしてくれた。

「ありがとうな、ルカリオ」

『ミツジュ!!』

『そうか、満足してくれたならよかった。だがサトシにミジュマル。ジム戦は勝てる自

信はあるか？」

「そりゃあもちろん！まず目標は一撃で勝つことだ！頑張ろうぜミジュマル！！」
『ミツジユウ！！』

ミジュマルが笑顔で俺の言葉に応じてくれた。精神的にも強くなったし、バトルをすることが楽しいと言っているような感じだから良かった。

次はマメパトとポカブの特訓かな。

明日はいよいよジム戦なんだ。まず絶対に勝つてやる。

第六十一話　妹はジム戦を目撃する

こんにちは妹のヒナです。今日兄がジム戦をします。ジムの場所がどこにあるのかわからないけど、アイリスが案内してくれるみたいなので安心です。でもジム戦の前にはちよつと市場へ行って買い物をして朝ごはんを食べてから行くことになりました。ですが市場で：私たちのポケモンを見て興奮する変人：じゃなくてデントに会いました。

キバゴを最初に見てアイリスに良く似合うポケモンだと褒めていたのですが、次にピカチュウとヒトカゲとルカリオを見てイッシユでは見ない珍しいポケモンたちに興奮気味のようなです。ルカリオはともかく、確かにピカチュウやヒトカゲはカントー地方でよく見るポケモンだからここでは珍しいよね：でも凄い語りっぷりです。いろいろと話しているのですがぶつちやけ私たち全員聞き流しています。

というより凄く怖いので私もヒトカゲも話しまくっているデントから離れ、兄の後ろ

に隠れています。ルカリオも気持ち引き気味です。

「marvelous!! イッシュ地方で見ないポケモンに会えるなんて思わなかったよ!!!」

『ピ、ピカチュウ…』

『カゲエ…』

『……………』

「お、おう…えつと、俺たちカントー地方から来ました…俺はサトシ。それでこっちが妹のヒナです」

「よろしくお願いします…」

「私はアイリスよ……」

『キババ…』

「そうだったのか！僕はデント。ポケモンソムリエをしているんだ!!」

そこで兄がポケモンソムリエとは何か私に視線で疑問を訴えてきたため私はデントの方を見て聞いてみればいいとこちらも視線で伝える。そして兄が実際にデントに聞くとポケモンソムリエについて教えてくれた。そして次に兄とピカチュウの相性について詳しく見てもらえると行ってきた。それに兄が喜んでデントにお願いしめすと

う。なんだか話が長くなりそうだ。

けれどこんなことしてる時間ってあるのかな…？朝ごはんもまだ食べてないし。ルカリオも何も言っただけはこないがこのままでいいとは思ってないようだ。私の背を軽く叩いて兄に言っただけでくれと頼まれたため、口を開く。

「…お兄ちゃん。ジム戦はいいの？」

「あ、やべ…忘れてた…」

『ピッカ…』

兄が失敗したというような表情をしているとデントが私たちの話に興味持ってきたようだ。まあそうだよ、デントって確かジムリーダーだから気になるよね。あ、でも兄はそのことを知らない。そして私も教える気はない。

私はこの旅の中では兄に原作の物語について聞かれたら話すと決めていたため、兄が何も言っただけなら私はできるだけ言うつもりはない。それに本当に原作の知識が必要なき以外には言わなくても平気だと判断しているので、もしも兄に聞かれたとしても必要でなかったら言わない。

私が原作のことを言っただけでもそのまま兄は話の通りに進んでいくことが多いため大丈夫だと思っただけから。それにスーパーマサラ人の兄だからこそ安心していいという点もあったりする。そうじゃないと私は安心して旅に同行することなんてな

いだろう。∴それに旅をしていてしばらくの間に分かったことなんだけど、つらいことや危ないことはほとんど兄が吹き飛ばしているからもう不安はないと思う。何かあったら兄にお任せすればいいや。

まあそんなことを考えているうちに、デントが兄に向かって質問をしてきた。

「君、サンヨウジムに挑戦するのかい？」

「はい！ですが、俺たちまだ朝ご飯を調達する途中でして∴」

「まだご飯食べてないから、早く買ってジムに向かいますよー！」

「そうだなアイリス。じゃあデントさん。俺たちここで失礼します——」

「ちよつと待ちたまえ！ご飯ならサンヨウジムで食べていけばいいと思うよ!!」

「∴はい？」

デントがジムまで案内する途中でジムは食事も楽しめるということ、そこで朝ごはんを食べていき、ジム戦をすればいいということと言ってきた。私たちはお互い顔を見合わせてデントの誘いにのることにした。

.....

そういうわけでは来ました。サンヨウジム。でもさすがはイツシユ地方…いやここはサンヨウジムだよねっていうところかな？

かなり高級そうなジムの雰囲気だ。これってテーブルマナーとか必要かな…ちよつと心配だけど大丈夫だよね…？原作では普通にソーダとかお手軽なランチとか楽しめるって言ってたし…うん平気だよね。

とりあえず私たちはデントからどんな料理が出てくるのか聞いて、デント達のお勧めの料理を食べることになった。

そして出てきた料理は味も見た目も凄いいし美味しい。私たちは美味しい料理に夢中になった。もちろん人だけではなく、ポケモン用の料理もあったからピカチュウたちも美味しく食べている。

ルカリオはこれを見ても作れないのか考えているようだし、もしもデントが旅の仲間になったら、これから楽しめそうだよねいろいろと。ルカリオの料理はおふくろの味でデントの料理はお店で出てくる味って感じかな？

そして兄はジム戦が待ち遠しいのか急いで食べている。でも周りの雰囲気を感じ取り、なるべく目立たないようにマナーに気を付けて少しだけ急いで食べているという感じだ。

そして食べ終わり、兄はデザートが来る前に立ち上がって、近くにいるデントに向かって言う。

「これでお腹いっぱいになったし…ジムに挑戦させてください!!!」

『ピカピッカ!!!』

大きな声で言う兄にジムでご飯を食べている女性が全員反応した。そして明かりが消え、デント達がお店の奥にある暖炉の方まで歩いていく。そして聞こえてくるのは軽やかな音楽と共にデント達がジム挑戦者に向かって言う声。デント達の方に明かりがつき、彼らの言葉に女性たちのテンションは上がっていく。私とアイリス、そして席についているポケモンたちが呆気にとられながら先程運ばれてきたデザートを食べる。

私は音楽と共に演技をしているようなジムリーダーのデントたちに感嘆とした声をあげた。

「…まるでエンターテインメントだなあ。さすがイツシユ地方」

『カゲカゲエ』

「あれ？カントー地方のジムってこんな感じじゃないの？」

『キババ？』

『いや、サトシから聞いた話だが、ジムは大体バトルル中心に行くことが多いそうだ』
「うんそうだね…でもハナダジムはこのサンヨウジムと雰囲気は似てるかな?…ジム戦の時は普通だけどね」

『ああ、ハナダジムの水中シヨーか…』

『カゲエ…』

私とヒトカゲ、そしてルカリオが遠い目をしてハナダジムにいるであろう4姉妹を思いう出す。確かルカリオもハナダジムの水中シヨーに出されたことがあつたつけ…あの時は大変だった。

そんな私たちに対して、アイリスとキバゴは水中シヨーという話に興味をもつたようだ。キラキラと輝く目で私たちに言う。

「水中シヨー?!何それ見てみたい!!」

『キバ!!』

「あ、じゃあカントー地方に来るときはハナダシティに行ってみたらどうですか?毎日じゃないけどたまにシヨーやってますし、毎回テーマが変わってシヨー自体も違ってくるんで面白いですよ!」

「そうね。絶対にカントー地方に行ったらハナダシティに行くわ!ね、キバゴ!!」

『キバキバ!!』

私たちはデザートに出てきたケーキを食べながらのんびりと話していく。その間にも兄がジムリーダーの話の聞き、そして暖炉が大きく動きバトル場が開くのを待つ。

丁度デザートを食べ終わつた時にバトル場への道ができたため、私たちは観戦するために席を立ち、兄の様子を見ていく。

私たちとは違い、ジムリーダーたちに夢中になっている女性たちは全員チアリーダーの恰好をして出てきて驚いた。どこで着替えたんだろう…。

まあそんな疑問は置いておいて、兄は3人のジムリーダーに挑むと宣言していた。兄のその言葉に呆れたように私たちは言う。

「三人とか…さすがサトシね」

『キバキバ』

「もう、お兄ちゃんつてば…」

『カゲカゲ』

『…だがサトシのことだ。3人のジムリーダーに挑むとしても特訓で鍛えたのだからすぐ終わりそうだな』

ルカロオの予想通り、バトルは原作通りのポケモンで挑んでいったが、皆一撃で倒すことがあってバトルはすぐに終わってしまい、無事兄が勝っていた。…しかもテイスティング・タイムもやる時間もなくなっけなく終わってしまったのだった。

その後、兄の強さに興味をもったデントが私たちと旅をしたいと言ってきて、そして今までついてくる形だったアイリスもそれなら私も!!となり、皆で一緒に旅をすることになった。

「よろしくお願いします。デントさん」

「デントでいいよ。それに敬語もいらなからね」

「そっか!よろしくデント!!」

『ピッカ!!』

「これからよろしくね!」

『カゲ!!』

「よろしくデント!…あ、そうだ。私もずつと言いたかったことなんだけど…ヒナちやん。これからは私のこと呼び捨てでいいし敬語もいらなからね!」

『キババ!!』

「え、良いんですか!?!」

「いいのよ！」

「わかった！…これからよろしくね。皆!!」

『カゲカゲエ!!』

『デント、アイリス。これからはよろしく頼む』

「っ!!? ル、ルカリオが喋ったあああ!!?」

『ッ!?!』
!!!!?!」

まあいろいろとトラブルもあったけど、全部解決したし、皆で仲良く旅に出ることができたから良かったかな。

第六十二話く妹はシェフ同士の会話を聞くく

こんにちはは妹のヒナです。サンヨウシティを出て次のジムがあるシツポウシティまで歩いていきます。でもお腹空いてきた…。兄も私と同じ気持ちなのか、お腹を手で押さえて言う。

「…なあそろそろ飯にしないか？お腹空いた」

『ピイカ…』

「私も…お腹空いて歩く力がない…」

『カゲエ…』

『…そうだな、ここでご飯にするか』

というわけでルカリオがご飯を作ってくれることになりました。アイリスがきのみを集め、私と兄で簡易テーブルなどを準備し、ルカリオが持ってきてくれたきのみと自分が持っている材料で作っていきます。

作っている様子を見ていたデントが興味深そうにルカリオに話しかけた。

「なるほど。きのみを鍋に入れて他のスパイスを投入し、シチューにしていくんだね。僕にも何か手伝えることはないかい？僕も料理はできるよ」

『本当か？ならこのきのみを使って料理を作ってもらってもいいだろうか。主食が足りないんだ』

「お安い御用さー！」

という感じで、2人のシェフが話し合いながら、どんなレシピを使うのか質問しながら料理を作っていました。すごく良い匂いがしていて、早く作ってほしいという気持ちが出てきそうです。そしてしばらくしてようやく完成した料理を皆で食べることに。

…あれだよ、2人のシェフが協力して作った料理って2つの美味しさを同時に味わえるってことだよ。…まあ要するに、ものすごく美味しすぎておかわりが止まらない

です。食べる勢いがもう皆止まらずにいる。その様子を見てルカリオとデントは困った表情をしながらも私たちに向かって言う。

『焦って食べるな。喉につまるぞ』

「だって美味しいんだもん！ルカリオとデントの料理!!!」

『カゲエ!!!』

「ふおごふあい!!!」

「私もおかわり!!!」

「サ、サトシにアイリス落ち着いて食べなよ。おかわりならたくさんあるから」

シェフ達は私たちの様子に苦笑して見ている。兄なんて口の中に食べ物を入れたままおかわり!!!と喋っているせいでちゃんとした言葉になっただけだし、おかわりをしてもらうまで食べてしまうからデントとルカリオは追加でもう少し料理を作ってくれた。うん、どれも美味しい。お腹がいっぱいになっても別腹で食べられるぐらいの美味しさ。ポケモンたちもシェフ達がそれぞれ話しかけてブレンドし、作ったフーズを美味しく食べている。そしてシェフ達は私たちを見てから、お互いの顔を見合わせ、微笑

んで口を開く。

「ルカリオ、君の作る料理は本当に素晴らしいよ！聞きたいことがたくさんあるんだけどいいかい？」

『ああ、俺もデントにイッシュ地方の料理について教えてもらいたいことがたくさんある』

ルカリオはデントの料理を、デントはルカリオの料理を気に入り、お互いのレシピを話し合ったり、もつと美味しい料理の研究についての話をしたりと結構大盛り上がりだった。これで料理の上達ができると喜んでみるみたいだけど、なんだろう…私たちの舌が肥えそうで少しだけ怖い。

でもってルカリオに言いたい、マサラタウンに帰ったらお店を開いてほしいと。これもう行列ができるぐらい美味しいからね。ルカリオの料理がデントの料理を知ることによつてもつと上達していくことに私たちは凄くうれしいけど、これ以上嫁スキル上げてどうするんだろうとも思う…。まあ美味しいならいいか。

そしてその後、私たちはお腹いっぱいになるまでシェフ達の作った料理を食べ、幸せな気持ちになりながら再びシッポウシテイに向けて歩き出した。その間でもデントと

ルカリオは料理のレシピについて話し合っていて、私たちはそんな彼らを呆れたような表情で見ているということだけは言っておこう。

第六十三話 く兄とツタージャは似た部分があるく

こんにちは兄のサトシです。最近ツタージャに会って仲間にすることができました。

『タジャ…』

「よろしくなツタージャ」

『タジャ!』

『ピカピカ!!』

ツタージャは性別がメスで、バトルが強いポケモンだ。でも俺の仲間たちの中でバトル好きによく見られる暴走などはせず、冷静沈着でちゃんと考えてから行動するため少しだけジュカインみたいだと思ってしまった。…まあジュカインもバトル好きでたまに暴走してる時もあるんだけどな。

そしてそんなツタージャは俺の妹によく懐いていると思う。それにヒトカゲとも凄

く仲が良い。

例えばこんな風に――

「ツタージャ、これって食べれる？」

『カゲエ？』

『…タジャ』

「そつか…食べれると思っただけだな…」

『カゲカゲエ…』

『…タージャ！』

「うん！もつといろいろ探していこうね!!」

『カゲ！』

『タジャ！』

今は俺たちでできのみ集めに出かけている。そして妹は黄色いきのみを見つけて食べれるかツタージャに聞いたけれど、彼女はそれに首を横に振ってまだ成熟していなくて食べれないと答えた。

それを見た妹とヒトカゲはその答えに残念そうに俯く。ツタージャは落ち込んでいる妹とヒトカゲを元気づけるように頭を撫でてもつと探そうと言い、妹達もそれに賛成

した。

「ツタージャ、ついて来てくれてありがとうね!!」

『カゲツ!!』

『タジャ!!!』

とても楽しそうにきのみを探しに行く妹とヒトカゲを俺とピカチュウは後ろから見守りながら見ている。そして楽しい姿だけでなく、危険がないかどうか状況をきちんと見て判断しているツタージャの姿も見えた。

それを見ていて、ツタージャが俺の仲間でよかつたと思う。ツタージャはいつだって妹の味方であり、同じ性別ということもあつて気が合つていてまるで姉妹のようだ。

「…サトシ、ヒナちゃんとヒトカゲ達がどうかした?」

「ああいや、なんでもない…ただツタージャが来る前と後のことを考えていただけだよ」

『ピカチュ?』

『ああ…なるほど。ツタージャが仲間になつてからはよくヒナたちの面倒を見てくれるからな』

「確かにそうよね。ヒナちゃんやヒトカゲとよく一緒にいるツタージャはまるで2人のお姉さんみたいだわ」

『ピッカチュ!』

「…仲間になってくれて本当に良かった」

俺たちは向こうできのみ集めをしている3人の姿を見ながらほのぼのと話し合う。必死にきのみを集めている妹やヒトカゲと違ってツタージャは危険を回避しながらどこのきのみを採った方がいいのか教えている。これを見て心底安心したものだ。

ツタージャと出会う前、旅をしている時の妹はたまに疲れたようにため息をついていることがあつて、やっぱりマサラタウンに帰した方がいいのではないかと後悔する時がある。

ルカリオもそんな妹に気にかけていて、ピカチュウとルカリオと俺で妹やヒトカゲについて会議をしたりもして、マサラタウンの家に帰した方がいいのか話し合ったりもしていた。

だが、ツタージャが来てからは妹が本当に楽しそうに笑っていて、疲れたようなため息もなくなり一緒に旅をして良かったと思える。

そして妹と同じようにたまに疲れたような表情をしていたヒトカゲもツタージャを姉のように見て楽しげに一緒に行動をしている。それを見ると心が和むしこのまま旅をしていて良かったと思えたものだ。

妹たちのことを気にかけるのは主にルカリオや俺、そしてピカチュウがよくしていることだが、俺たちだけでは頼れない部分というのも多い。だから妹たちのことをよく面

倒を見てくれるツタージヤがありがたいと思う。

：まあそれだけで俺はツタージヤを仲間にしたというわけではないんだけどな。ポケモンバトルもそうだし、これからのイッシュリーグでも優勝するために頑張っていくと決めているし、ツタージヤも俺の気持ちに応えようとバトルでもかなり頑張っているのだから。

まだまだ出会って間もないけれど、ツタージヤとはすぐに仲良くなれそうだな。

「なあピカチュウ」

『ピカピ?』

「俺とツタージヤってちよつと似てる所があるよな?」

『ピ：ピカ!!』

「だよな。もちろんピカチュウも!」

『ピッカツチュウ!!』

俺たちの似ている点、それは妹とヒトカゲを大事に思っていること、ポケモンバトル

が好きなこと。俺の仲間たちの皆が持っている共通点だ。

第六十四話　妹とヒトカゲが迷子になつた

「こんにちは妹のヒナです…。ここどこなんでしょうか…。」

「お兄ちゃん…どこお…」

『カゲエ…』

ちよつとした散歩のつもりだった。兄たちが修行のためにポケモンバトルをしているから、きのみ集めと散歩を兼ねてちよつとだけ歩いただけなのに、気がつくと兄たちのバトルによる騒音は聞こえず、森の中に私とヒトカゲが迷っている状況になっていた。

今まで修行していたからこういう森の中に2人であるという状況は慣れている。最

初は迷子になったらその場を動くなどよく聞かされていたから動かなかったのだが、いきなり来たシキジカの大群に襲われ、走ってしまい余計に森の奥深くまで来てしまったと感じた。

そしてそこからまた戻ろうと警戒しながら森の中を歩いていて、またいきなり来たミネズミたちからの攻撃を受けてすぐに体勢を整えヒトカゲのえんまくで逃げてきたのだ。そのため今この場所が兄たちから離れたところなのか、近くにいるのかすら分からなくなってしまうた。

ここがマサラタウンの森だったら私たちは迷ったとしても余裕で歩いていられる。なぜなら森の中のポケモンたちとは何度も遊んだり修行したりした仲なのだから。

でもここはマサラタウンの森とは違う、まったく知らない森だ。そして兄たちと離れてしまい、もう二度と会えないかもしれないという不安が出てきて、すごく涙がでそうになる。でもここで泣いてしまったら今までしてきた修行の意味はない。ヒトカゲも泣きそうな表情だけど、私の手をずっと掴んで涙を堪え我慢しているのだから。

「…ヒトカゲ、とりあえず右にいつてみよう……」

『……カゲ』

恐らく兄たちも探していると思うから兄たちの声や音がするまで歩き続けていようと思いき歩き始めた。だが歩き続けてもずっと木しかない静寂な森の中。ポケモンがこちらの様子をうかがっているのは気配で分かるのだが、兄たちに会えるような感じは全然しない。それがまた余計に不安に駆られる。

「ヒトカゲ。大丈夫だからね。絶対に大丈夫……」

『カゲ……カゲ!』

ヒトカゲと自身に対して力強く励ましの言葉を言う私だけど、心の中では不安しかない。それにヒトカゲも気づいているのか、私をしつかりと見て、大丈夫だよと声をかけてくれた。

私はヒトカゲの声に頷き、とにかく森の中を歩き続ける——。

『エルー』

『フーン!』

「…え?」

『…カゲ?』

不安になつて歩いている中、後ろから何やらポケモンたちの声が聞こえてきたので襲われるのではないかと警戒してすぐに振り向いたら、エルフーンの集団がいて驚いてしまった。しかもそのエルフーンたちは私たちに攻撃しようとは思っていないのかただ微笑んで私たちの近くに集まってきている。

…あれ、ここつてエルフーンの森じゃないよね。数が凄く多いんだけど、しかも皆が私たちのことを近くに來てからじつと見て首を傾けているし。

私は思い切つてエルフーンたちに声をかけた。

「…ねえ、君たちは私たちに何の用?」

『カゲカゲ?』

『エルフー!』

何の用か聞いてみたけど、エルフーンたちはただにつこりと笑って私たちの方を見るだけだ。それでは何も意味はないと思っていたのだが、急に私たちに近づいてきた集団の中の一歩大きなエルフーンがモモンの実を2つ渡してくれた。もしかしたらこの大きなエルフーンは群れのリーダーなのかもしれない。モモンの実を食べてほしいという仕草をしてきたので、私とヒトカゲはお互いに顔を見合わせてからエルフーンたちに微笑んだ。

「モモンの実をくれて、ありがとう!」

『カゲ!』

『エルー!!』

私たちの言葉を聞いたエルフーンたちは凄く喜んでるようだ。につこりと笑ってくるりと一回転して喜びのあまり踊っているように見えた。もしかしたら私たちを励ましてくれてるのかな? そう思いながら美味しそうなモモンの実を食べた。 : うん凄

く美味しい。

『エルエルー!』

「え、そつちに何かがあるの?」

『カゲ?』

エルフーンが私たちを引っぱって森の向こうに行こうと言ってきたので私はどうしてなのか言う。だがエルフーンはただこつちに来いとしか言わないので私たちは疑問に思いながらエルフーンたちと一緒に歩き出す。

エルフーンは私たちの前と後ろにいて、時折こちらを見て笑っていた。それはまるで私たちを気にかけているようで、そしてちよつとだけ歩く速度を遅くすると後ろにいるエルフーンたちが心配そうにこちらを見て、前にいるエルフーンたちに声をかけてモモンの実を取り出し渡してきてくれた。まるで食べて元気を出せと言っているかのよう

に。
何でそんなに私たちを気にかけてくれるのだろう。凄く疑問に思つてエルフーンたちに行つてみたのだけれども、その問いに何も答えず、ただ楽しそうにしているだけ。

私たちはそのエルフーンたちの行動に疑問に思いながらも前へと歩き続ける。

「…あれってモモンの実？というよりきのみの森？」

『カゲ!!』

『エルフー!!』

歩き続けてしばらくすると広場のように大きく広がっている場所があつて、エルフーンたちがそこへ案内してくれた。そしてふと周りの木を見てみると、その木々すべてのきのみがあつて、まるできのみの森だと思つてしまふぐらい凄い光景だった。

そして驚いた私たちにまたエルフーンたちが悪戯を成功させた時のような表情で楽しげに踊る。私はそのエルフーンたちに話しかけた。

「…もしかして、ここに連れてきてくれたの？ 私たちにきのみを食べてもらいたかつたの？」

『カゲ?』

『エル—!!!』

エルフーンたちは私たちに向かつてその通りだと力強く言ってくれた。おそらく元気がない私たちがモモンのみを食べたから元気になったと思つて、このきみの森のような場所まで案内してくれたのだろう。

エルフーンたちの親切がとても嬉しいのだけれど、私たちは森の中で迷子になつている身なのだ。このまま兄たちと合流できなかつたら駄目だ。だからエルフーンたちに言わなければならない。

「ごめんね、私たちが迷子なんだ。お兄ちゃんたちと会えなくなつたままこつちに来ちゃつたから凄く心配してると思うの……だからここにいけないよ」

『カゲエ……』

『エル……』

エルフーンたちが私たちの言葉を聞いて落ち込んでしまった。その様子に罪悪感が出るが、このままここにいても仕方がないため私たちはありがとうとお礼を言つてエルフーンたちから離れる。でもエルフーンたちはそれで納得しないようだ。私たちにま

た近づいてきて大きな声で言う。

『エル…エル—!』

「え、もしかしてお兄ちゃんたちに会えるまで一緒にいてくれるの?」

『カゲ!?!』

『エルフー!!!』

「…ありがとう!」

『カゲカゲ!』

エルフーンたちが私とヒトカゲと一緒に来てくれた。何でそんなにエルフーンたちが私たちのことを気にかけてくれるのかもわからないし、親切にしてくれるのかもわからない。でも話したりしているうちに少しずつ仲良くなっていたように感じる。まるでマサラタウンにいるポケモンたちのように思えた。

兄たちと合流できたのはそれからしばらく歩き続けてからなんだけど、エルフーンた

ちがいてくれたから全然不安はなかった。私たちが不安になったり落ち込んだりしたときにすぐに慰めてくれてきのみを持ってきてくれて元氣出せと励ましてくれたから大丈夫だったのだ。本当にエルフーンたちには感謝している。

……。――まあ、合流できた後は兄たちにもものすごく叱られたんだけどね

「ありがとうねエルフーン!!!」

『カゲエエ!!!』

『エルフーン!!!』

第六十五話く兄は妹とアイリスのバトルを見るく

こんにちは兄のサトシです。前に妹のヒナが迷子になって凄く心配しましたが、エルフーンの群れと友達になって帰ってきたので驚きました。友達を作るのは良いんですが、今後俺たちを心配させるような行動をしないということ、迷子になるような行動をしない、俺たちから離れる時は誰かにちゃんと伝えてからと喋っておきましたよ。妹とヒトカゲは俺たちの説教を聞いてちゃんと反省したみたいで安心しました。

…そういえば妹とヒトカゲが迷子になった後、シツポウシテイではない違う町へ辿り着いて、そこでダルマツカ達が食べ物盗んだり、時計塔にいるダルマツカ達とヒビダルマが危なくなったり、鐘をちゃんと元に戻したりといろいろと大変でした。ですが、俺たちやヒビダルマの力で鐘をちゃんと元に戻したので何とか乗り越えました。その後町を出てまたシツポウシテイへ向けて旅を続けています。

今日はアイリスがキバゴのバトルの練習をしたいと言っていたので、デントとヤナツ

プがほとんど力を使わずキバゴの相手をしたり、俺とピカチュウも手加減して相手をしたりとバトルに慣らしていきます。でも俺たちだと本当にバトルしているような緊張感もなく、まだまだまだ幼いキバゴを成長させるために少しでも本気で戦っていった方がいいとのアドバイスもあり…。

——そして始まったのが妹とのバトルだ。

「よろしくねヒナちゃん！」

『キバキバ!!』

「うん。こつちもよろしくねアイリス!!」

『カゲカゲエ!!』

妹とヒトカゲはトレーナーとのバトルは初めてでやったことがない初心者。なのでキバゴとのバトルはちよいどいいのではないかととなり、やることになったのだ。

ヒトカゲもキバゴもやる気満々。そして妹たちも同じように負けないという気持ちで相手を見ている。審判はデントだから俺とピカチュウ、ルカリオはゆつくりと観戦をしている。…さて、どんな試合になるんだろうな。

「ではこれより、ヒナVSアイリスのポケモンバトルを始めます!! 先行はアイリスから

「ではスタート!!」

「よし行くわよキバゴ! ひっかく!」

『キバキバ!!!』

「躲してひのこよ!」

『カゲツ!!!』

キバゴが鋭い爪でひっかく攻撃をしてきたが、ヒトカゲがそれをすぐに躲してひのこで攻撃する。だがそのひのこはキバゴに当たる前にすぐに躲されてしまった。

「キバゴ、大丈夫?」

『キバキ!!!』

「ヒトカゲ、緊張しなくて大丈夫だよ。修行の時を思い出してやろう!」

『カゲエ!!!』

躲されて攻撃に入る前に、妹とアイリスがそれぞれキバゴとヒトカゲに声をかける。…まあその方がバトルのやる気も高まるし、キバゴ達の体調もちゃんと確認できていいと思う。そして声をかけた後また攻撃に移る。だがキバゴとヒトカゲはそれぞれひっかくとひのこで交互に攻撃し、躲すという同じような動作を繰り返している。…まあヒ

トカゲはえんまくも使えるみたいだけど、あれは強い相手から逃げるために鍛えたらしいからかなり広範囲にしよう出来て、まだ相手を攻撃するために使ったことはないらしい。だから妹とヒトカゲはえんまくは使わずにひのこだけで頑張っている。キバゴもヒトカゲのように何故かずっとひっかくという攻撃しかしない。同じような攻撃と動作を見ていて、俺は少し苦笑してしまった。

「……これどう思うよルカリオ」

『…そうだな。バトルというよりは修行の1つと考えた方がいいだろう。というより、最初からヒトカゲ達に対してサトシのような激しいバトルを期待しているわけではない。……だがじきにヒトカゲ達もバトルの応用を身につけていくだろうな』

「だよなあ……まあヒトカゲとキバゴはバトル慣れしてないから仕方ないか……」

『ピイカ……』

隣にいてバトルを見ているルカリオが冷静に解釈したため、俺とピカチュウはその言葉に頷く。ポケモンバトルとしてはあまりにも同じ技や行動ばかりで盛り上がりに欠けるが、まあバトル初心者の妹とヒトカゲ、そしてキバゴなのだから仕方ない。……あれ、そういうばアイリスってバトルには慣れてるのか？

少し疑問に思ったが、それはすぐに吹っ飛んで行ってしまった：主にキバゴのりゅうのくしやみ：ではなくてりゅうのいかりが暴発してしまったからだ。妹とヒトカゲはルカリオがすぐに走って行って爆発から庇ったから怪我はないようで良かった。：まあアイリスたちはキバゴの爆発に巻き込まれて黒焦げになっていたんだけどな。

——だが、その後キバゴとピカチュウがいなくなったと思っただけで急に現れたペンドラの頭にキバゴがいてピカチュウが追いかけていたり、ヒトカゲのひのこに当たったペンドラがキレて妹たちの方へ行って攻撃してきてしまい逆にルカリオがキレたり、アイリスがキバゴを助けようとモンスターボールから出したドリユウズが無視して動かず結局自分でキバゴを助けに行くことになってしまったり……。まあいろいろあったな。でもそのペンドラについては蹴飛ばされたドリユウズが怒って攻撃して何とか問題は解決した。

そしてペンドラ騒動のせいで妹たちのバトルは結局なかったことになってしまい、今度またバトルの再戦を約束してシッポウシテイへと歩くことになった。

…でもその前に、アイリスが出したドリユウズのことを気になる。何故あいつはアイリスの言うことを聞かないんだろう。前に俺が旅をしていた時に見た俺のリザードンやヒカリのマンムーのようだ。…少し気になるから後でアイリスに話を聞いてみようか。それが駄目なら妹に聞いてみよう。

第六十六話くドリユウズの考えとアイリスの考えく

こんにちは兄のサトシです。ペンドラ騒動の後、すぐにドリユウズについてアイリスに聞いてみました。するとアイリスから昔の話を聞かせてくれて、いろいろと知ることができました。

アイリスが話す内容を、俺を含めた皆で真剣に聞く。ふと妹の方を見てみたが、苦笑しているような微妙な表情を浮かべていて、もしかしたらこれは原作で話に聞いていたかもしれないと思った。でも今はアイリスの話だ。話はアイリスが今よりも幼い頃に起きた出来事だった。

ドリユウズとアイリスが出会ってからのこと、バトルに連勝していたこと、…そして初めての敗北のこと。

「……………ドリユウズは負け知らずだった。だから修行の旅に出てからも、何度も

「何度も励ましたわ…でも、なかなかうまくいかなくて…」

「…それは」

アイリスの話を聞いて少しだけ分かったような気がする。周りを見ていても、負け知らずなだけではないだろうという意見は一致しているようだった。これは、アイリスとドリユウズの考えがすれ違って起きた出来事なのだと言われたい。…でも、これについては俺たちで解決する問題ではないということも分かった。

「それだけじゃないんじゃないかな？」

「…え？ どういうことなのデント…？」

『アイリス。ドリユウズはペンドラーとのバトルでは最初は戦いを放棄してはいたが、その後ちゃんと戦っていただろう。どういう意味なのか分かるか？』

「……ドリユウズは、戦うことにシヨックじゃない…？」

「そうだアイリス。そのバトルをした時のことを思い出してみろよ。ドリユウズはお前に何か伝えようとしたんじゃないのか？」

「ドリユウズは…ドリユウズは…そうだわあの時…」

何か思い当たることがあるのだろう。アイリスはドリユウズの入っているモンスタールールを取り出して見つめて考え込んでいる。俺たちの話の後考え込んでいるアイリスに妹が話しかけた。

「アイリス。ポケモンっていうのはね、ちゃんと自分の気持ちを相手に分かりやすく伝えようとしているんだよ。だからドリュウズもアイリスに何か言いたいことがあるんじゃないかな?…アイリス、ドリュウズの気持ちをちゃんと分かれば大丈夫だよ絶対」

「…うん。分かった!ありがとう皆!!」

アイリスが考え込んでいたせいで俯いていた顔を上げ、俺たちに礼を言っただけで走っていく。しばらくドリュウズと2人つきりで話があったからとキバゴのことを俺たちに頼んでしまった。…ああ、これはしばらく帰ってこないかもしれないな。もう姿が見えないアイリスに俺たちは苦笑しながらも少しだけ良かったと思えた。この後の結果がどうなるか分からないけれど、でもおそらくもう大丈夫だ。

だが妹とヒトカゲは違うらしい。アイリスが離れていった場所をずっと眺めて不安そうだ。

「…大丈夫かなアイリス」

『カゲエ…』

「ヒナ、ヒトカゲ。心配することはないって」

「お兄ちゃん、それ予測でしょ…」

「いや違う、俺の勘」

「勘も予測と一緒にだからね!!」

『ヒナ、サトシの言うことにいちいち反応していたらキリがない』

「…うん、ルカリオのそのスルー力が私には欲しいかな」

「酷いなお前ら…」

『カゲエ…』

『ピイカツチュ…』

『キバキバ…』

「ははは…」

——— 結局その後、アイリスとドリユウズが話をして擦れ違いだったお互いの考えを認めた。そしてドリユウズがきあいだまという技を習得し、アイリスとの仲もまた元に戻っていき、リベンジしに来たペンドラーに襲われるというトラブルもあつたが、それはなおさらドリユウズとの仲を元通りにする出来事に過ぎなかったとい

えるだろう。

「一件落着だな？」

「…お兄ちゃんが言うともた事件が起きそうな気がするけどね」

「それを言うなって…とにかく、ドリユウズと仲が元通りに戻って良かった」

第六十七話～妹は兄がライバルと会うのを見た～

こんにちは妹のヒナです。今はシッポウシティのポケモンジムを目指しているんですけど、途中で到着したカレントタウンにポケモンバトルクラブがあるということを知って兄とピカチュウがそのバトルクラブまで走って行ってしまいました。私たちは先へ行ってしまった兄とピカチュウを追いかけて走っています。：あ、でも私とヒトカゲはルカリオに背負われたまま兄を追いかけていますけどね。

そして着いた先で待っていたのは驚愕している表情を浮かべている兄とピカチュウの姿。

驚愕しているのはバトルを申し込んだりする機械の前なので、もしかして画面に何か兄たちが驚くようなことがあるのではと思えました。それで私たちは何があつたんだろうと見てみたら画面に対戦相手を募集しているシューティーの写真がありました。

…ああ、そう言えばこんな話原作で会ったような気がしてきた。

シューティーがこの町にいと知った兄たちは少しだけ微妙な表情。でもおそらくそれはシューティーの性格が変えたけれど、今はもしかしたら元に戻っているのではと思っているようです。でも私は兄のやった所行を見ているから、その点については大丈夫だと思うけど…。

そしてシューティーについてはジムに挑戦してきたことからデントは知っていて、アイリスは会ったことがないため知らない。でもこれからバトルをするからその時にわかるだろうと思う。

それで、今はカレントタウンのバトルハウスを管理しているドン・ジョージさんからシューティーにライブキャスターで連絡をしている途中だ。

…で、でもちよつと嫌な予感がするんだけどね。

「やあシューティー君。君にポケモンバトルの申し込みがあつたぞー！」

「久しぶりだなシューティー」

「サトシ先輩じゃないですか!!!お久しぶりです!!!」

「サトシ先輩？」

『キバキバ？』

「ああもう…：やっぱりこうなった…：」

私は微妙な表情で兄とシューティーの会話とその会話に驚くアイリスたちを見てた
め息をつく。

うん知ってた。そうだよね、最初に出会った時にいろいろとやらかしてたもんね。：
ああこれももう原作崩壊確定だ。

シューティーは兄がライブキャスターに出たことや、これからのバトル相手だという話を聞いて目を輝かせすぐにこちらに走ってやってきた。

そして90℃の角度でお辞儀をして兄に会えたことに凄く喜んでる。もはや別人の域です…。でもピカチュウやルカリオ、ヒトカゲは満足そうな笑みを浮かべていて、兄も同じような表情だ。私はそれを見て遠い目をしてしまった。

「サトシ先輩!!ポケモンバトルの申し込みと聞いたのですがもしかして…!」

「ああ、シューティー。俺とバトルしようぜ！」

「か、感激です!!ありがとうございます!!!」

しかもシューティーは兄がバトルに申し込んでくれたことに喜びすぎて気絶してしまいそうだし…。デントとアイリスもそんなシューティーの性格に微妙そうな表情を浮かべている。おそらく兄の前以外では普通の性格なのかなと思った。そしてシューティーを全く知らないアイリスがデントに話しかける。

「えっと…ね、ねえ彼がシューティーなの？」

「そ、そうだよ…ははは…でもサトシに対してこうなるとは知らなかったな…」

『まあ以前はこうではなかったがな…』

「うん基本的にお兄ちゃんのせいだから気にしないであげてね」

『そうだな。…だがサトシが奴に施した人格再形成についてはもっとやってもいいと思っただがな…』

「何言ってるのルカリオ!?お兄ちゃんが言うようなこといつてる!!?」

『カゲ?』

『……………』

「ルカリオ、無言は肯定の証だからね！お願いだからお兄ちゃんみたいに暴走しないで！！」

『……善処する』

「それ遠回しに断ってるから！！あとヒトカゲもそんな分からないような表情しないで常識外になっちゃだめ！！」

『カゲ？…カゲエ！！』

「ちよつと待ってどうということ！！？」

アイリスとデントが私たちに何があつたのか興味を持ち聞きに来る。私たちがシューティーについて騒ぎながら話しているというのに、当の本人は兄に夢中で話しかけている。まるで後輩が憧れすぎてフアンの域になっている先輩に話しかけているようだ。

「で、ではどんなバトルをしますか！！？フルバトルですか！？6対6のバトルをしましょうサトシ先輩！！」

「…悪いなシューティー。俺いま5体しかないんだ」

「なら5体でバトルをしましょう！僕、サトシ先輩とバトルがしたいんです！お願いしますバトルしてください!!」

「(こらこらシューティー君！土下座してまで頼むことかい!?サトシ君の方からバトルを申し込んでいるんだからそんなことしなくても平気だよ…だろ？サトシ君」

「ええそうですね…ほら土下座しなくてもいいから、バトルしようぜシューティー」

「はい…はい!!お願いします!!」

デントとアイリスにシューティーのことについて説明し終わり、ふと兄たちの方を見てみると、いろいろと凄い光景が見えた。

土下座したシューティーが兄とバトルをしたいと懇願している様子から、兄がバトルを承諾したことに感激し号泣している様子…本当にこの人シューティーなの？

—————その後、ちゃんとシューティーと兄がバトルをすることに
なったんだけど、兄が普通に圧勝してました。そしてプルリルの特性を初めて知って驚

いた兄でしたが、すぐに反撃して勝っていききましたよ。まあ兄だから当たり前だよ。ね…。

そしてバトルをしている間でもその後でもシューティーが喜びすぎて気絶しそうになっただけのこともある。

「バトルしてくれてありがとう。シユーター」

『ピツカ!』

「いえ！それはこちらの台詞です!! 本当にありがとうございますサトシ先輩!!!」

「…ま、まあいいか」

第六十八話く妹たちはイシズマイ強化訓練をしたく

こんにちは妹のヒナです。シツポウシティまでの道のりがかなり遠く、まだまだ歩き続けています。そして今日はお昼を食べている途中でイシズマイに会いました。でもイシズマイが作ったばかりの家を3匹のイシズマイ達にとられてしまい、落ち込んでいます。

落ち込んでいるイシズマイを励まそうとしたんですが、逆に怖がられてしまつて攻撃してきました。大きな石がヤナツプに当たりそうになつたんですが、ルカリオがとつさに助けて何とかになりました。そして落ち着いたイシズマイと話をして、手間をかけて作った家を取り返したいとのことで私たちも協力して3匹のイシズマイ達を探します。

でも夕方になつても見つからないし……どっかに行つちやつたのかな……というかこれ原作だよね。大丈夫だよね。ちよつと最初の方変えちやつてるけどさ……。

『マイ……』

「大丈夫だよイシズマイ。ほら、明日になつたらまた探しに行こう。イシズマイもおい

で、一緒にご飯を食べよう」

『ナーツプ!!』

『…マイ!』

デントとヤナップが落ち込んでいるイシズマイを励ましてご飯にしようと言ってくれた。それを見てイシズマイが笑顔になりデントに近づく。…ああ、これなら大丈夫かな。普通に手持ちフラグかな。

そう思っていたんだけど、やっぱり兄はやらかした。

「なあイシズマイ。これから特訓しないか?」

『マイ?』

「何を言ってるんだいサトシ?その前に家を奪ったイシズマイ達を探さないといけないんじゃないか?」

「いや、それならいい考えがある」

「激しく嫌な予感がするよ…」

『カゲエ…』

兄が言っていたいい考えとは、3つのお皿に入ったポケモンフーズでイシズマイ達をおびき寄せるといふもの。確かにそういうのは原作で見たことあるし、それによって数の差で力負けていたイシズマイに協力して3匹のイシズマイ達をバラバラに分けて1対

1で戦うことができたという記憶があるからそれでいいのだと思う。

…問題なのはそこからだ。

「イシズマイはあいつらと戦いたい。そして俺たちがそのバトルの手助けをしてほしくないんだろ？」

『マイ！』

「なら、そのバトルに勝つために俺たちと一緒に特訓しよう！」

「ちよつとサトシ？特訓って何をする気なのよ？」

『キバキ？』

「特訓は特訓だよ…ルカリオ！ちよつと手伝ってもらえるか！」

『別に構わないが…？』

兄がルカリオを呼んでイシズマイと軽くバトルをすることになった。しかもそれだけではない。3匹が同時に襲ってくると考えてピカチュウやヤナップもそのバトルに参加する。そして本気のバトルというよりはスピード等を鍛えるために様々な攻撃を躲したり、隙をついて攻撃したりという特訓だ。

技は明日のこともあるって怪我をしない程度の方で行っている。今までにやった特訓ではないが、それに似たような形で行っている。技を躲して隙をつく、そして攻撃する。

「いいかイシズマイ。3匹を相手にするならすべてを見るんだぞ！そして接近戦ができると判断したら一瞬でやるんだ！」

『ピツカツチュウ！』

『マイ!!』

イシズマイも本気で特訓に挑んでいるし、兄たちもそれに協力しているんだけど……これでいいのかなのかかなり迷う。

何よりもイシズマイは1対1なら確か勝てたはずなのだ。だけれども兄は3匹同時に戦うための方法を教えて特訓している。デント達もそれに領いて納得し、特訓に参加している。……よし決めた。これでもしもイシズマイが3匹同時に相手をして負けたら原作でやったことを提案しよう。そうすればまあ大丈夫かなと思う。

「いぞイシズマイ！そのまま真横にジャンプだ!!」

『ピツカツチュウ!!』

『マイ!!』

「頑張れイシズマイ！大丈夫！ピリリとスパイシーが漂ってるよ!!」

『ナーツプ!!』

『マイマァーイ!!!』

「……………本当に大丈夫なのかな」

『カゲ…』

「大丈夫よ。だってサトシが考えたことだもんね」

『キバキバ!』

——翌日、兄たちと特訓し、3匹同時でも余裕で攻撃を躲せて反撃することができて家を取り戻せることができました。やっぱり兄がやることは本当に原作崩壊でした。

そしてその後、デントの手持ちになりたいと言ったイシズマイが見事に仲間になってまた旅が賑やかになったと感じた私とヒトカゲであった。

第六十九話　妹はある少女に出会う

こんにちはは妹のヒナです。まだまだシッポウシテイまでの道のりは遠いです。ですが途中でヤブクロンと子供たちを説得したり、卵をもらったりしていたので、目的地に着くまでの旅路もいいものだと思います。

途中でサングラスかけているメグロコにも出会いましたが、以前のロケット団並みに吹っ飛ばされるのを見て同情してしまいましたよ。

あと、まだ卵は生まれていないのだけれど、いつか生まれてくる時が楽しみです。

そして今日、いつものように歩いていたら、ある少女に出会いました。だけど何だかせつかちそうな感じですよ。例えばであつた時も――。

「どいてどいてどいてえ!!!」

「え……うわああ!!」

少女が走って私たちに向かってきて、ぶつかりそうになった。でも私とヒトカゲはルカリオに抱えられて、兄とピカチュウ、アイリスはとつきにジャンプして避けていた。でもデントは少女のとっしんにも似た走りに避けきれずぶつかってしまい近くにあった川に落ちてしまった。

そして今、デントの服を乾かすために私たちはたき火をしている最中だ。ちなみに少女はぶつかったことをずっと謝り続けている。

「ご、ごめんなさいー！ごめんなさい…本当にごめんなさい!!!」

「い、いや…もういいから…」

デントは苦笑して少女にもう謝らなくていいと言う。その声に少女が申し訳ないような表情でまたもう一度謝罪をした。…というか、少女というより、ベルだよね。よく覚えてるからわかる。この後どうなるのかも知ってるし…どうしようかな。

何者なのかアイリスが聞いたらベルがアララギ博士に連絡をして、兄に見せた。そして分かったことは、兄のバッチケースを渡すのを忘れてしまったということ、ベルの自己紹介、ベルがバッチケースを持ってきてくれたことである。

ちなみにアララギ博士の話がまだ終わっていないのに電話を切ってしまったこ

とや、デントの服が濁くぐらいの時間をかけていてもバックの中に入っているはずのバッチケースが見つからないベルに私やヒトカゲが微妙そうな表情を浮かべていたのは言うまでもない。

兄やピカチュウは自分のバッチケースのことだから微妙そうな表情というよりも苦笑をしてどう対応していいか悩んでいる顔だ。まあベルがわざわざ持ってきてくれたと思つたら忘れてきたっていうのは怒つたほうがいいのかどうか迷うよね。

そしてようやくバッチケースが出てきたと思つたらそれは埃に汚れていて新品のようには見えない。ベルの持つてるバックの中つてどうなってるのか少しだけ気になつてしまった。

「はいこれ、アララギ博士から頼まれてるバッチケースだよ!」

「サンキュ……これでよし」と

兄は少し汚れているバッチケースを受け取り、その中に最初のバッチを入れる。それを見たベルが興味深そうにバッチケースの中を見ていて、私にも見せてと頼んできた。それを兄は了承し、バッチが入っているバッチケースを渡そうとする。

でもその後すぐにチラーミイが出てきてバッチケースを奪い取りに来ると分かっていたから、私はルカリオに頼んでおこうとしたんだ……けど……。

『チラッ!!』

「ああバツチケースが!？」

「おいゴラ待て!!人の奪い取ってんじゃねえぞ!!」

『ピツカ!!』

『チラアッ!?!』

「あーあー…」

『カゲエ』

『ああ、いつも通りだな』

兄とピカチュウがそれぞれバツチケースを奪い取ったチラーミーに一瞬で近づいて攻撃をしていた。兄は普通に回し蹴り、そしてピカチュウはその回し蹴りで宙に浮いたチラーミーにアイアンテールでバツチを取り返しつつ地面に叩きつける。

一瞬で終わってしまった出来事にベルを含むアイリスとキバゴ、デントは茫然としていて、それ以外の私たちは遠い目をしてその光景を見ていた。

——その後、チラーミイは皆の前でバッチケースの汚れをふき取り、謝罪をしていた。みんなもバッチケースを奪い取ったのは汚れを綺麗にしたいということだと分かって納得していた。まあこれでもう安心だと思ったんだけど、ベルがやらかしました…はい。

「可愛い——!! 決めた! 私チラーミイをゲットしちやおうつと!!」

『チラーア…?』

「え…? ちよっおい!!」

『ピイカツ!』

「何言ってるのいきなり!」

『キバキ!』

「ははは…ずいぶんとマイペースな子だね…」

チラーミイの可愛さに惚れたベルがさっそくポケモンバトルを仕掛けてチャオブーを出してきた。そしてチラーミイはバトルだと分かりすぐにチャオブーを警戒しながらも体勢を整える。当然私たちはその行動に驚きながらポケモンバトルを見ていた。ルカリオなんて可愛いからゲットするトレーナーもいるのか…と呟いているし、アイリスとデントはポケモンバトルを見ながらも呆れたような表情をしている。

わたしやヒトカゲ、ルカリオはとにかくこの騒動が終わるのを待つことに決め、少し

離れた場所で座ってポケモンバトルを眺めている。

でもチラーミーが速いのでチャオブーの攻撃が当たっていないのは凄いなと思う。確か兄のピカチュウも本気を出せば残像が見える程度の速さだということは知っているから、ポケモンバトルで素早さというのはかなり必要だということも分かっているけれど……これでベルのゲットって出来るのかな？

「これってうまくいくと思う？」

『カゲ……カゲカゲ？』

『……さて、あのベルという女次第だろうな』

ルカリオはベルがチラーミーをゲットしようがしまいが興味はないみたいだ。でも私とヒトカゲは気になるのでじつくりとその様子を見る。その間にもバトルはチラーミーのくすぐるによって不利に動き、チャオブーが倒されてしまった。そしてゲットしたいと諦めきれないベルは強引な手段に出る。それは何なのか。

——兄に頼み込むという愚策をしたのだ。

「ねえサトシ君！私バッチケース持ってきてあげたでしょ!?その借りをチラーミーを捕まえるために協力することで返してほしいの！」

「…無茶苦茶だなそれ」

『ピッカ…』

「無茶苦茶は言っていないでしょ!?!ほら早く私に借りを返して!」

「……………」

『……………』

当然兄とピカチュウは自分勝手なベルの言い分に不機嫌になる。

どうして無茶苦茶だと兄が言うのか。それは、バッチケースを持ってきてくれたのはアララギ博士が忘れてしまったというあちら側の失敗であり、兄がベルに借りを作ってしまった行為ではないからだ。そしてわざわざバッチケースを持ってきたベルについては兄たちは感謝しているようだが、ベルの我儘を聞くようなことではないと考えているはずだ。

デントとアイリスが不機嫌な兄たちのことを察知し、このまま近くにはヤバいと思ったのか、私たちの方へと静かにやってくる。そして私の隣にいたルカリオが兄やピカチュウの雰囲気を感じ取って無意識に身を引いているのが分かった。…これもうベル大丈夫じゃないよねチラーミーゲットフラグ叩き折れちゃったよね。

そう思っていたのに、何故か兄とピカチュウはベルに何も言わずただチラーミーの

ゲットに協力していた。

「…ピカチュウ」

『…ピカ』

『チラーア!!?』

ピカチュウのボルテッカーによってチラーミーがその一撃で倒れそうになっている。そしてその様子を見たベルがバツクの中からボールを取り出そうとするけれど、なかなか出てこなくて、その間にチラーミーが復活し逃げようとする。

「ああ待って…あつたわ!」

『チ、チラー!』

埃だらけのボールを見てチラーミーがすぐにベルの肩に飛び乗りボールを綺麗にしていく、そしてその拍子に捕まえることができあつけなく終わってしまった。…あ、でもまだ終わってないみたいだ。

「よしやったわ!チラーミーゲットよ!さすが私ね!」

「…そうかそうか良かったなベル」

「ええー！ありがとうございますト…シ君？」

ようやく兄の様子がおかしいことに気づいたベルだったけど、もう遅すぎる。ベルは兄の怒りがかかってしまったのだからもう逃げられない。

ベルは兄とピカチュウの異変を感じ取り、その様子に恐れているようだ。そして私たちの方を見て助けてと視線をよこす。

…けど、まあ自業自得ということで私たちはベルに同情するだけして、兄から助けようとは思ってはいないけどね。ここで助けようとしたら兄が余計に怒るし。

そして兄とピカチュウは見るものすべてが怖がるような笑顔を浮かべながら、ベルに近づいて言う。

「ちよつと話したいことがあるからそこに座れ？あ、正座以外は却下だから」

『ピツカツチュ』

「え…？」

——それからどうなったかって?…まああれです。もう自分の我儘やマイペースで人を巻き込むような行為はしなくなると言っておきます…。

第七十話～妹は過去にあった話をした～

どうもこんにちは兄のサトシです。まだまだシツポウシティまで道のりが遠くて焦っている毎日です。でも後少して町につくらしいのでジム戦を頑張ろうとやる気分です。

でも歩いている途中でアイリスがハナダジムについて妹に聞いていて、俺とピカチュウは何だろうと思いつながら2人を見る。

「——じゃあハナダジムの水中シヨーには水タイプのポケモンがたくさん出るのね！」

『キバキバ!!』

「うん。それに他のポケモンたちもシヨーに出て盛り上げたりもしてるよ」

『カゲ!』

どうやらハナダジムの水中ショーについて話しているようだ。カントー地方のことだからか、デントも興味を持って妹に話しかけている。というか他のポケモンと言えは

…。

「なあルカリオ、確かお前も水中ショーに出たことあったよな?」

『ピカア?』

『ツ!?何故サトシがそれを知っている!!?』

「ああ、カスミから聞いた」

そう俺が言うのとルカリオは少し落ち込んでいるような表情を浮かべてカスミの名前を呟く。デントやアイリスがカスミとは誰なのか聞いてきたので俺は説明をする。カスミがハナダジムのジムリーダーだと知ってデント達は驚いたようだ。カントー地方に行ったら会ってみたいと話しているようだから、もしもその時俺がいたら紹介しようと思った。

「…でも俺、その水中ショーでルカリオが出たことは知ってるけど、何をやったのかは知らないんだよな…なあヒナ、何があったのか知ってるか?」

「うえ!?いやその……」

妹は焦ったような表情でルカリオを何度も見ている。そんなに言いたくない内容なのか…余計に気になる。

そしてルカリオはもう諦めたように妹に話してもいいと言ってきた。

「え、いいの話しちゃって？」

『カゲ？』

『ああ…どうせ今言わなかったとしてもサトシならカスミにすべてを聞くだろうからな…』

「そっか分かった。じゃあ話すね」

——これは兄がまだマサラタウンに帰ってきてなくて、シンオウ地方で旅をしていた頃。そして私たちがハナダシティに遊びに行ったときに起きた話。

「ルカリオ、あなたシヨウの主役にならない？」

『…いきなり何を言っているんだ』

「ごめんねルカリオ。サクラ姉さんが決めたことだから諦めて？」

カスミさんとサクラさんが私たちと一緒に遊びに来たルカリオに向かってシヨウに出てほしいと頼み込んできた。

あ、ちなみにこの時は私、ヒトカゲ、ケンジさん、ルカリオがハナダジムに来てる。そしてショーで何をするのか、主役とは何か私は気になったので聞いてみた。するとサクラさんが嬉しそうな表情で答えてくれた。

「今回のショーのテーマはね。禁断の恋なのよお」

「き、禁断の…恋？」

『カゲ？』

「そうよお！ポケモンと人間の禁断の恋。それを邪魔する周りのポケモンたちと人間たち。でも2人の愛は止まらない、止められない！そして2人は愛の逃避行へと旅に出る…そんなショーをやりたいって思っているの！」

なんだろう、サクラさんの説明しているストーリーが全部前世で読んだことのある口ミオとジュリエットのお話のように聞こえてきたんだけど。

そして説明を聞いていたルカリオが逃げようとしてカスミさんに止められているのにちよつと同情してしまった。ルカリオって禁断の恋とかそういうショーに出るような性格じゃないもんね。でも私たちだとこの姉妹を止められなさそうだよごめんねルカリオ…。

「え、じゃあルカリオはその男性役の方を演じるってことですか？」

「違うわよケンジ君。ルカリオには女性役の方を演じてほしいのよお！そっちの方がよ

りシヨールが面白くなるじゃない？」

サクラさんのその言葉を聞いたルカリオの勢いが強くなった。この場にいたくない、帰りたいというのが言わなくても分かってしまう。というか、性別変えてシヨールの主役をやってもらわなくてもいいんじゃないのかな…と思っただけど、サクラさんがちよつとした変わった面白さも大切よねといつてもう変えるつもりはないらしい。

そして帰ろうとするルカリオをハナダジムの姉妹が止めようとする。

『帰る、いや帰らせろ！』

「ダメよ。マサラタウンに帰ったとしてもサクラ姉さんに連れ戻されるだけだし、もう諦めなさい」

『ふざけるな。そんなくだらないことをするぐらいならマサラタウンで嫁になってくれと言われていた方がマシだ!!』

「…いや、ぶつちやけどつちもどつちだと思ふよルカリオ」

『…カゲカゲ』

そしてハナダ姉妹から逃げようとしたルカリオだったけど、すべて逃げ道をふさがれ断れきれなくなってしまう結局当日に綺麗な服を着て女性役でシヨールに出ていた。テレパシーで役を演じていたのだが、お客には人の声をかぶせてやっていると言っておい

たらしく、そこらへんは驚かれる心配はなかったみたいだ。

ぶつちやけこの時のルカリオがヤケになって演じていたから、本当に綺麗だったし凄かったと思う。

でも後日、シヨーに出ていたルカリオの綺麗な姿を見たポケモンたちやトレーナーたちがマサラタウンに押し寄せてきているいろいろと大問題になったのはちよつとした余談話になるかな。

…まあルカリオにとっては黒歴史になる話だよね。

「———ということがあったの……ごめんねルカリオ、あの時止められなくて」

『カゲカゲ……』

『……いや、もう済んだ話だ』

「それは大変だったな……」

『ピイカツチュ……』

「え、ええ……本当にお疲れ様よね……」

『キバキバ……』

「何とも言えないフレーバーを漂わせてるね…はは…」

俺たちは妹の話を聞いて気の毒そうな視線をルカリオに向けている。ルカリオもその視線に気づいてはいるのだが、反応しては余計に心の傷が大きくなるから無視しているみたいだ。まああれだよな…サクラさんに捕まったのが運の尽きということだな。

『もう俺はあの姉妹に今後一切関わるつもりはない!』

「ありや…断言しちまったな」

『ピツカツチュ…』

第七十一話くアルセウスはたまにやらかす時もあるく

何も無い空間、ただそこに浮かぶのは神々しいポケモン一体のみの空間。空間に入ることが出来る生き物は限られていて、その一体以外は絶対に誰も入ることのできない場所。

そんな空間にいるのはアルセウスだけだ。

『……サトシ』

アルセウスはただ思い出していた。あの時助けてくれた少年を、この世界の異物であるはずの人間の姿を。

だが、アルセウスは考えながら空間に漂っているだけで何も行動しようとはしない。ただあの時の出来事を思い出し、嬉しさという感情を心に秘めているだけである。

『また、会えるだろうか…』

アルセウスはただそう願っていた。サトシに会いたいという気持ちが強いやうの
に、伝説であり世界の創造神としてはそれを許せない立場にすることで揺らいでいた。
…過去に起きたあの出来事も、人を信用し力を譲ったことよって起きた過ちだったと
いうことも分かっているし、サトシによつて助けられたけれども、もう二度とあのよう
な出来事を起こすつもりはないとアルセウスは考えていたのだ。

…だが、このままこの何も無い空間で過ごし、サトシが生きている時間を無駄にした
くはないという気持ちも強かった。

『サトシ…会いに行こう…』

アルセウスは決心した。サトシに会いに行くと言う決断をしたのだ。その決断はア
ルセウスにとつて大切な選択であり、また起きてしまうかもしれない過ちをサトシに会
いたいという選択によつて起きないようにしようと思つた瞬間でもあった。

マサラタウンに着いたときはアルセウスはサトシがいないということ、その妹のヒナ
という少女もいないということを知つて落胆した。だが、まだやるべきことは残つてい
る。マサラタウンではポケモンたちがサトシとヒナに会いたいといつてどう行動する

べきか考えている最中のようだ。アルセウスはその会話を無視してサトシに会いに行こうと行動を開始した。

ミュウツーが何やら行動をしているアルセウスを見て話しかける。

『おい、一体何をやる気だ』

『決まっているだろう、空間を捻じ曲げてサトシに会いに行く』

『それをやって世界を崩壊させはしないだろうな…？』

『平気だ。何も問題はない』

イツシユ地方というのはここからとても遠い。アルセウスはある程度時間をかければすぐに行ける距離なのだが、今すぐにサトシに会いたいためにここから空間を捻じ曲げ、イツシユ地方へ繋げていけばいいと思っていたが、その考えはすぐに潰されてしまう。

サトシのポケモンであるフシギダネがここでの空間を捻じ曲げる等の力を禁止にしたのだ。アルセウスならばその言い分を無視して勝手に空間を繋げてもいいのだが、フシギダネを無視するということはサトシのことを無視する行動だと言われてしまい思考が停止してしまった。もしもサトシに嫌われるようなことが起きたらどうする。それはアルセウスにとつて避けなければならないこと。だからアルセウスは強固な手段には出れなかった。

そしてまた次に来たハルカという少女に電話でサトシと話してみたらと提案されたのだが、電話があるのはオーキド研究所の中であり、いつ博士たちが来るか分からないため伝説は入れられないとなってしまう、それにアルセウスほどの身体の大きいポケモンは建物に入れないとなってしまうため、そこでもまた少し落ち込んでしまった。

だがアルセウスはすぐにまた考えた。もうこのままサトシに会いに行けばいいと。

そして来たイツシユ地方でようやく会えたサトシの姿が上空から見えた。

それより少し後ろの方で光っている雷雲が見えたが、アルセウスが邪魔だと遠くへやってしまった。すべてはサトシと会って話したいがためやった行動なのだ。

そしてようやくサトシがアルセウスのことを見て、走って近づいてくる。

アルセウスはサトシのもとへ降りてきて話しかけた。

『…久しいな、サトシ』

「そうだなアルセウス。何か用か？」

『ピツカ？』

『…いや、ただ会いたいと思っただけ。こちらへ来たのだが…邪魔であつたか？』

「そんなことないけど…でもイツシユ地方に来てもいいのか？」

『ああ、良い。サトシと会えるのなら構わないことだ』

「……………そうか」

『…ピイカ』

サトシとピカチュウは少しだけ微妙な表情をしていたのだが、肝心のアルセウスはそれに気づいていない。ただ夢中になってサトシに話しかけている。元気にやっているか、旅は順調かなどを聞いて嬉しそうにしている。その様子は伝説と呼ばれ、創造神と崇められるアルセウスとは思えないぐらい、ただ世界のどこにでもいるようなポケモンにしか見えなかったとサトシは後にピカチュウに語っていた。

第七十二話～兄はジム戦で無双した～

こんにちは、兄のサトシです。シツポウシティに到着してようやく今日ジム戦です。その前にシツポウジムである博物館が原因不明の事態になって閉館していたり、その原因であるデスマスが現れたり、デントがマスクに乗っ取られてしまったりと大変でしたが全部無事に解決しました。

…え、何をやったのかって？全部物理技で強制的に解決していましたが何か問題でも？

あとそれにジムリーダーのアロエさんがデスマスがどうして博物館で暴れているのか教えてくれて謝罪してました。それを見てデスマスも怒るのをやめて、無事マスクを取り返し帰っていきましたよ。そしていよいよジム戦です。

でも来た場所は本棚が多くある書庫。そしてアロエさんはここから行けるのは調査

や研究のために本を閲覧する人かジムの挑戦者だけだという。でもそれとバトルと一体どんな関係があるのだろうか…これは何かあるな。

「ポケモンバトルにだって知識は大事。どうだい？これなんておすすめだよ」

「はあ…」

『『ピイカ…』』

何故いきなり本を読めと言うのかわからない。それとジムの挑戦者と一体何の関係があるのかさえもよく分からない。でもアロエさんは俺とのバトルを了承してここへ連れてきたんだから何かあるはずだと考え込む。

そもそも、この場所に来ること自体おかしいのだ。サンヨウジムではジム以外に食事もできるようになっていてまるでお店のようだった。でもジムに挑戦したいと言ったらすぐにバトル場へ案内してくれた。そして次はシツポウシティでの博物館。でも今回は挑戦してきたというのにバトルの前に本を読めと言うアロエさん。

デント達の時は直球にバトルがしたいと言えばすぐに応じてくれたのに今回は違う。…もしかして俺を試しているのか？

少しだけアロエさんから話を聞いてみようと思い、俺は口を開く。

「…アロエさん。本を読めと勧めるんですよね。そしてそれは挑戦者だから読んでもらいたいということ。本を読んだ後ジムリーダーとしてバトルをしてくれるということ

「ですよね？」

「そうだよ。チャレンジャーだからこそ、この本を勧めているのさ。もちろんこの本だけじゃない、他の本を読んでもらっても構わないよ…でもその後にはちゃんとバトルをやるつもりさ」

アロエさんの言葉と表情にその意図を理解した俺は頷き、おすすめだと言った本を手に取ろうと動く。

すると本棚が動き、地下へと続く階段が出てきたのを見てデントたちは驚く。だが妹は驚いていないため、この行動で正解なのだと分かった。

俺の行動と満足そうな笑みに驚いているアロエさんは俺がただの正直者じゃないと分かって面白そうな表情を浮かべていた。

「…正直者。でも面白い坊やだ」

「そりやあどうも。…バトル受けてくれますよね？」

「もちろんさ！」

「…え？ちよつと…どういことなの？」

『キバキ？』

「ぼ、僕にも何がなんだか…」

『……………なるほどな』

「…まあ普通はそうだよね」

『カゲエ…?』

アイリスたちがどうして本棚が動いたのか、何故こんなことをしたのか聞いてきたため、俺は説明する。アロエさんが俺を試したということ。正直に本をとって読むのか、それとも違う本を読むのかを見てそれからバトルでどんな行動をするのか予測をしているのではないかということ。ルカリオは俺の行動を見て分かったようだけれど、まだ分からないアイリスたちは俺の説明のおかげで納得し、頷いた。

そして俺がそれらを話したら、アロエさんが口笛を吹いて感心してくれた。どうやら俺の予想があっていたらしい。

そしてやってきたのが地下につながるバトル場。そこでアロエさんが2体のポケモンを出してこれからバトルに使うポケモンを見せてくれた。2体のポケモンはヨーテリーとミルホッグだ。ヨーテリーは人懐っこく、ミルホッグは力強そうな雰囲気を漂わせている。そしてアロエさんは言ってくれた、これから俺も2体のポケモンを選んでバトルしてもらおうと。そしてその言葉にデントが何やら興奮したように話しているけれど、今まで旅してきた中でタケシもこんな感じで暴走したときもあったから気にしな

いでおく。人が変わって暴走する内容が変わっているだけで結局いつものことだからな。

そして俺は考える、これからどんなバトルになるのだろうか。

アロエさんがこのバトル場まで案内してくれる間に感じているある勘。もしかしたら、今までとは違うバトルができそうで少し楽しくなってきた。

「…俺はこいつらで決めます…あ、デント、ルカリオ！ピカチュウのこと頼むな！」

『ピツカ！』

「分かったよサトシ！」

『了解した』

ピカチュウがデント達のいる方へ走って行ってくれたので、俺はそのままトレーナーが立つ場所まで歩いてから、アロエさんに向かって言う。アロエさんは俺のことを待ち、楽しそうな表情を浮かべていた。

「…それじゃあお願いします！俺とのバトルを受けてください！」

「ああいいだろう。受けて立つよ！ヨーテリー!!」

『キャン!』

「こつちも行くぞ…ポカブ、君に決めた!!」

『カブウ!!』

人懐っこそうなヨーテリーの雰囲気が変わり、バトルで見せる強暴な迫力になった。俺はそれを見てわくわくしながらポカブをボールから出す。

そこからはかなり面白いバトルを展開していった。アロエさんは攻撃技ではなくほえるやくろいまなぎなどの効果がある技を使用して動いてきた。ほえるのせいでポカブが交代され、ミジュマルに変わってしまったけれどそれでも今まで修行してきたミジュマルなので急に交代されても動揺せずむしろやる気が十分あるようだ。そしてその後すぐにミルホッグに交代したアロエさんからくろいまなぎという技を受けてもミジュマルは全然平気そうだ。むしろ倒してやるぞと意気込んでいる。それを見て俺は笑みを浮かべてアロエさんに向かって言う。

「これからが勝負ですよアロエさん！俺たちの戦いを見せてあげます！」
『ミツジュ!!!』

「そりやあ楽しみだね！じゃあ私もそろそろ本気を出していこうか！」
『ミツルホー!!!』

——その後、俺たちは余裕で2体とも倒すことができ
アロエさんに勝利した。まあ当然の結果だよな。

第七十三話　妹たちは卵に感動する

こんにちは妹のヒナです。前回シツポウシティで1度も負けることなく兄が勝利を収めていたのを見て、これもある意味原作崩壊だなどしみじみ思っていました。さすがスーパーマサラ人。そしてそんな余裕の勝利にアロエさんは何も言わずにただ笑ってバッチを渡してきましたよ。そしてまた戦える時があれば再戦してくださいとお願いされました。まあ兄のことですからその再戦もいつかは受けるのでしょうね。

そしてこれから次のジム戦に向けてヒウンシティへ目指しているのですが…。

卵がそろそろ孵りそうで私たちは一度休憩もかねて生まれてくるのを待ちます。

『カゲエ!』

「ヒトカゲ嬉しいの? そういえばヒトカゲは卵見るの初めてだよ?」

『カゲカゲエ!!』

「そうなんだ！私のキバゴと一緒にね！ね、キバゴ！」

『キバキ!!』

「生まれたらお前らはお兄ちゃんでお姉ちゃんだな！」

『ピツカツチュ!!』

『ああサトシの言うとおり、この卵にとってお前たちが姉や兄のような存在になるだろうな』

『カゲ!?!』

『キバ!?!』

ヒトカゲとキバゴは嬉しそうにジャンプをして卵が早く生まれてこないか待っている。途中でキバゴが卵にぶつかりそうになって危なかったけどそれはルカリオが何とか助けてくれたから無事だ。でも光り輝き少しずつ動いてきているからもうすぐ生まれてくるだろう。：ヒトカゲが生まれてくる時もこんな感じだったかなと少し前のことなのに懐かしく思えてきました。

「お!?生まれるぞ!!」

『ピツカ!!』

兄が卵の様子を見て言う。ピカチュウも卵をじつと見て生まれておいでと声をかける。そして私たちも生まれてくる様子をじつと見つめて待つ。…これは原作で知っていることだけれど、でもやっぱり実際に見るととても感動する。無事に生まれてきてと願ってしまふ。

——そして生まれてきたのがズルツクと呼ばれているポケモンだ。

『ズック?』

「生まれた!!このポケモンは…?」

「サトシ、このポケモンはズルツグだよ」

「ズルツグか!よろしくな!!」

『ズックウ!!』

兄がズルツグに向かって図鑑を取り出してから名前や種族を見てから挨拶をする。するとズルツグは兄をちゃんと親だと分かっているのかにつこりと笑顔でそれに応える。

とても元気で可愛いポケモンだと思ったけれどやっぱり原作だった。ズルツグは挨拶

撈ってきたピカチュウに向かっていきなりにらみつけるをしてその後ずつきで攻撃してきた。でも生まれてきたばかりだからか、あまりスピードは速くなく、ピカチュウは余裕で躲すことができた。

けれどその後にはキバゴやルカリオ、そしてヒトカゲたちを狙って攻撃してきたし、兄がボールから仲間であるミジユマルたちを出してきて紹介しようとしたのだがすぐに喧嘩を売ってきたのでいろいろと大騒ぎになってしまった。

どんな大騒ぎかというと、まずミジユマルは普通にズルッグの喧嘩を買おうとして、それをポカブとマメパトが抑えている。ッタージャはにらみつけるをしてきたズルッグを無視していたのだが、ずつきをしてきたので華麗にツルのむちでやめなさいと言って止めてきているさすが姉御。

それにしてもすごいと思う。生まれてきたばかりなのに喧嘩を売るのが止まらない。近くにいるポケモンたちを皆まとめずつきしようとしてきている。結構大騒ぎになっているのだが…。

…でもやつぱりそれを抑えるのが兄の役目らしい。

「ズルッグ。ちよつと落ち着け？」

『ズックウ…』

暴れるズルッグを抑え、あの誰もが怖がり固まる笑顔を向けて静かにさせたのだ。ず

つきをしまくって喧嘩を売っていたズルツグだが、そんな兄の笑顔と声に驚きおとなしくなる。そして次に兄は優しくズルツグにバトルの仕方や特訓の仕方を教えている。どうやらズルツグが皆にずつきをしたりにらみつけるをしてきたため、その性格とバトル好きを理解したらしい。そして兄はズルツグの頭を撫でながら、仲間になつてくれるのかどうかを聞いてきた。

「ズルツグ、お前はこれから強くなる。だってバトルがしたいって思っただけにずつきしてきたんだろ？」

『ズック!!』

「じゃあ、俺の仲間にならないか？まだ生まれてきたばかりで力が弱いかもしれないけれど、これから強くなるための力を俺たちと一緒に頑張っつけていこうぜ！」

『ズルツグウ!!!』

———こうして、私たちに新しい仲間が増えた。そして私やヒトカゲ、キバゴにとってはズルツグは弟分のような感じになり、時々喧嘩を売られるけどよく遊びそしてよく修行をする良い仲間であると思っっている。

第七十四話く人から見たら…く

こんにちははケンジです…ってこれ言にくいな…。まあいいか。

今日はいつも通りオーキド研究所にいるポケモンたちの健康をチェックしながらも、ご飯を与えたり、問題がないかどうか見たり、オーキド博士の研究を手伝ったりしていますよ。

「ベイリーフ、ここまでで充分だよ。ありがとう」

『ベイ！』

『ダネダネ！』

「あ、フシギダネ。今日もご苦労さん」

『ダネ！』

ポケモンフーズを配り終え、ベイリーフにオーキド研究所の建物の近くまで手伝ってもらい、食器などを片づけていたらフシギダネに出会った。フシギダネはいつも通り周りを見回りしているようだ。

だが挨拶をした瞬間、いきなり轟音が迷いの森の中から響いてきたため、笑顔だったフシギダネが一気に豹変しその地響き等がする場所まで走っていつてしまった。

「行つてらっしやいフシギダネ…また草ポケモンと水ポケモンが争つてるのか…」

ケンジは小さく呟きながら轟音と地響きが今でも起きている迷いの森の方を眺める。そしてすぐにフシギダネの強力なソーラービームが上空に放たれたのを見て、ああ今日もいつも通りだと思える。いつもの平和な時間、そして平穏なトラブルなだけだ。

「ああいけない。そろそろ見回りをする時間だな…」

ケンジはフシギダネのようによく森の方に行つてポケモンに問題がないかどうか確かめることが多い。マサラタウンにヒナちゃんがいた頃はよく森の方へ遊びに行つて

いたから、その時になにかポケモンたちに問題が起きてもすぐに彼女が気づいてくれて助かっていただけ、今では自分たちでやらないといけない。

だがそれはヒナちゃんが森の中に散歩に行くとしても、本来ならケンジがやるべき仕事だったのだ。だがヒナちゃんが率先して手伝いたいと言ってくれたからオーキド博士と相談して決めて、遊びのつもりでちょっとした見回りなどもやってもらった。

本当にヒナちゃんは良い子だと食器を片づけ森の方へ歩き出すケンジはしみじみとそう思った。

見回りでは軽く森の方を散歩しながら何かポケモンたちに異変がないかどうか見渡して調べたりする。たまにポケモンがこのオーキド研究所の森の中に迷い込んだりするため、ちゃんとトキワの森まで案内したり、ここに残りたいときはオーキド博士に言つて歓迎する。

でも今日は迷いの森の方が騒がしいようでこちらではあまりにも静かだ。

「あれ、ドダイトス？」

『ドツダア』

『コラッ！』

『コラッタ!!』

「ああ、コラッタの世話をしていたのかい？お疲れ様」

『ドダア!』

歩いていると大きな身体のドダイトスがコラッタ達に背中の実を分けて食べさせているのが見えてケンジはその微笑ましい様子に笑みを浮かべる。

ドダイトスはよく周りのポケモンたちの喧嘩を優しく止めて、宥める役目を持っている。厳しく叱り、時には怒鳴り込むフシギダネとは逆で優しい兄貴分のようなだとポケモンたちは思っているようだ。他にもベイリーフはちよつとおちよちよいだけど姉のようにポケモンたちと接しているし、ジュカインはほとんどを1匹で過ごしているけれど、たまにポケモンたちが困っていたら無言でそれを助ける優しさを持っている。…こうして考えてみるとサトシのくさタイプのポケモンは周りのポケモンたちに優しい子ばかりだ。

サトシのポケモンはタイプごとに性格も違っていて、例えばひこうタイプは周りをよく見て判断し、冷静に問題を解決したり探し物を見つけたりする子が多くいるし、ほのおタイプはマイペースにバトルしたりのんびりしたりと自分たちのペースで過ごす子が多い。…水タイプはそうだな、トラブルメーカーがいたり、くさタイプのように周り

の面倒をみたりする子で2つに分かれる。ほとんどがトラブルメーカーばかりだけれど…。

ベトベトンはいつも通りオーキド博士にくつついたりするし、ケンタロスは走るのが好きで…本当にサトシのポケモンは個性で溢れているとケンジは思っている。

ドダイトスたちと別れたケンジはまた森の中を散歩する。空から見るとポップの群れが飛んでいるため、もしかしたら近くにピジヨットが来ているのかもしれないと考える。…そういえばヒナちゃんがいる間はピジヨットやゴーストといったサトシと別離したポケモンたちが多く来るようになっていたけど今は違うなあと疑問に思う。ヒナちゃんがサトシと一緒に旅をしてからは見かけなくなっただけだ。やはりサトシの妹であるヒナちゃんのことを可愛がっていたいからマサラタウンに遊びに来たのかなと思いつつ歩き続ける。

すると、本日2度目のソーラービームが放たれたのが確認できた。

「ありや…もしかしてまだ喧嘩を止められていないのかなあ…」

ケンジはそのソーラービームを見ながらも呟いた。

最初見たときは驚いたものだが、今ではフシギダネが喧嘩を牽制するためにソーラービームを放つのは日常茶飯事であり、マサラタウンの名物となりかけている。

マサラタウンの住人はこのフシギダネが放つソーラービームを見て、これに関わるお土産か何かでも作ってみようかとオーキド博士に相談していたらしい。

そして最近、出来上がったのがソーラー饅頭というフシギダネがソーラービームを放った瞬間の絵がある饅頭だったりする。ヒナちゃんたちがイツシユ地方に行つてからできたお土産品だからきつと帰つてきたら驚くんだろうなあと饅頭を食べながらケンジたちはそう思ったこともあったりする。

「ああ、平和だなあ……」

ケンジは未だ途切れないフシギダネのソーラービームを見ながら呟いた。

大きな問題が起きればすぐにポケモンたちがケンジたちを呼びに来るため、このソーラービームはフシギダネでも喧嘩を止められるという証でもあるのだ。

それに毎日が喧嘩などが絶えないけれど、泥棒が来るという大きな問題は起きてはい

ないため、この研究所およびマサラタウンは本当に何も起こらず平和なものだとケンジは毎日のように感じている。

何も知らないからこそ、毎日が平和だと感じているのだ。

第七十五話　く兄と殴りたい奴とポケモンゲット？く

こんにちは兄のサトシです。今ヤグルマの森にて、クルミルというポケモンを追って走っている途中です。ですがなかなかあいつ速いですゲットしたいぐらいに。

「お、お兄ちゃんストップストップ!!!」

『カゲエエ!!』

「サトシ！森の奥に行ったら危険よ!!」

『キバキバ!』

「そうだよサトシ！ここは自然の森なんだから、途中ではぐれたら大変なことになる！」

『とにかく止まれ!!!』

「…わかった」

『…ピイカ』

皆に説得され、これ以上の後追いは危険と判断して走るのをやめる。デントは全力で走ったせいで息が少し乱れていたが、他のみんなは大丈夫みたいだ。とりあえず周りを見渡して先ほど来た道を戻ろうと提案した。

だがどこに行けばいいのか、どこに先ほど来た道があるのかわからなくなってきた。まったため、ひとまず座って休憩することにする。すると妹が何やら首を傾けながらルカリオに聞いてきた。

「…ねえルカリオ、ここから波動で出口まで案内って出来る?」

『カゲ?』

『できることはできるが…』

「はどうって何?」

『キバキ?』

「聞いたことがあるよ。確かルカリオははどうポケモンとして説明されてきていたから…そのはどうかい?」

『ああそうだな、波動というのはい——』

ルカリオがアイリスやデントに波動についての説明をし始める。…そういえばルカリオに波動の能力を使うことができるというのをすっかり忘れていた。いつもオカン

のように周りに気をつかい、美味しい料理を作ってくれたり、妹やヒトカゲの面倒を人一倍：いやポケ一倍見ているルカリオだったから第三のオカンとして見てたぜ…。あ、第一は母で、第二はタケシな。

…あ、そうか。なら波動でさつき逃げたクルミル見つけることもできるよな。

「なあるルカリオ、クルミルって今近くにいるか？」

『…いや、少し遠いな。だが出口近くにはいるみたいだ』

「よし！出口に近いならそこまで案内してくれるか！そしてクルミルをゲットする!!」

『ピッカチュユ!!』

「…まだ諦めてなかったんだ」

『カゲエ…』

ルカリオが波動を使って森の中を確かめてくれた。そして先程俺たちに攻撃してきたクルミルがこれから向かう森の出口近くにいるということが分かり、俺はルカリオにそこまで案内してくれと頼む。俺の頼みにルカリオはもちろん、アイリスやデントも仕方ないという表情を浮かべていて、妹やピカチュウは呆れたような顔でこちらを見る。

でもあの時出会ったクルミルを捕まえないという気持ちは強いし、出口近くならアイリスたちにもあまり迷惑をかけないで済むと思うから大丈夫だと判断する。

。そして休憩を終わらせ、ルカリオが波動を使つて俺たちを案内してくれた――

「うわあ!!?」

『キバキ!!?』

「ど、どうしたの!?!」

『カゲ!?!』

「あ、あれ見てあれ!!」

『キバキバ!!』

『……ああ、あれは気にするな。ただの人間だ』

アイリスとキバゴが何かに気づき上を見上げて驚いて叫んでいた。俺たちも上を見上げると何やら布か何かに包まれている大きな塊が木の上にはぶら下がっているのが見えた。ポケモンかと思つたがルカリオがそちらに波動で調べるとただの人間だと分かつて拍子抜けした。だがそれだけじゃない、布に包まれている人間はこちらに気づき降りてきたのだ。

「あ、あんなところで何をしてたんですか……?」

「あ、あなたが虫ポケモンの使い手として有名なアーティさんだったんですか!」

俺たちは一斉にその衝撃の事実には驚き、デントが本当かどうか聞いてくる。え、本当にこの変人がジムリーダーなのか!?でも後ろにいる妹の様子を窺うと微妙な表情で俺を見て頷いてくれたから本当のことだと知る。しかも決めポーズでジムリーダーだと言われると少し腹が立つ。しかもどこから出したのか薔薇を取り出して口に銜え、芸術的な使い手だけどねん!と行ってキメ顔されるのもイラツとくる。

でもここで何かやらかしてしまうとジムに挑戦できなくなってしまうかもしれないと考えて我慢し、自己紹介をする。

だが俺たちの自己紹介を聞いて若き青春だ!と叫び何か描こうとしたらしいが、スランプらしくて取り出したスケッチブックを投げ捨てて頭を抱えている。そしてアイリスが疑問に思ったことを話すと途端に目を輝かせて説明してくる。…というか早く行きたいんだけど、たぶんこの話長くなるんだろうなと思ってしまう。ルカリオやデント、妹達も微妙な表情で肩をすくめており、諦めろと言っていると分かって落胆した。クルミルがヒウンシテイの出入り口から動いていなければいいんだけど…。

『…!?おいサトシ!クルミルが近くにいますぞ!』

「何だって…!?」

『ピカピカ!』

「ル、ルカリオが喋った!? これは何という芸術的な
 ツ!?!」
 !!!!?!???

『クツルウ!!!』

ルカリオが波動で俺にクルミルが近くにいるということを教えてくれて、俺は周りを見渡す。そして頭上から攻撃してくるクルミルを避け、笑みを浮かべる。こちらから来るというのはとても都合がいい。…でもすぐにルカリオが喋ったことに興奮しているアーティの肩に慣れたように飛び乗ったため、もしかしたら彼のポケモンなのではないかと疑問に思いバトルは断念する。とにかく、ルカリオを追いかけまわしているアーティさんを落ち着かせて肩にのっけているクルミルが手持ちなのか話を聞かないとな。

.....

いろいろと話を聞いて、俺たちはこの森の中でキャンプをすることになってしまった。それは何故か、アーティさんの手持ちではないと分かった野生のクルミルと交流を深めていくこととアーティさんがルカリオから何か芸術を生み出せるのではないかと

この森に留まってほしいと頼まれたからだ。ルカリオにとつては嫌そうな表情を浮かべていたが、アーティさんがジムリーダーである以上はやくヒウンシティに戻ってバトルを受けてほしいため了承することにした。

そしてデントとルカリオが食事の準備をしている中でアーティさんがルカリオを気にしながらもクルミルとの交流の仕方を教えてくれた。ルカリオに引っ付いて食事の手伝いをしている妹とヒトカゲはその場に残るらしい。ルカリオはなるべくアーティをこちらに近づけさせるなど雰囲気だけで俺たちに言っているようで俺やアイリス、デント、妹やヒトカゲたちはそれに苦笑していた。

そしてクルミルとの交流が始まった。まず挨拶をしようとしたら何故か俺にだけ敵意を示した。そしてずつきを繰り返してきたが俺はそれをすぐに避けて立ち上がる。するとすぐにクルミルは悔しそうな表情で俺を見上げ、鳴き声を上げる。その声にアーティさんは微妙そうな表情でまあ挨拶にはなったかな?と言ってきた。でも俺としてはもしかしたら仲間になってくれるかもしれないクルミルと仲良くした方がいいと思うので少し残念。でもこれから仲良くできればいいかなと思う。

そして草を食べていたり昼寝をしたりするクルミルを追いかける俺たち。きのみを食べている最中にコロモリに襲われるというトラブルもあったが、俺が後ろからもう一匹飛び出してクルミルに攻撃をしかけたためにすぐにクルミルを助け、ピカチュウがそ

の際に2匹に10まんボルトで追い払ってくれたため何とか無事に終わった。

そのあとクルミルからお礼としてリンゴを貰ったため、少しは仲良くなれたかなと思えた。

そして夕方、ルカリオやデントが作ってくれた夕食を食べる。

「美味しいこれ凄く美味しいよ!!」

「よ、喜んでくれたようで嬉しいです…」

「ルカリオ、君も作っただよね!! いったいどこでその力を磨いたんだい!!?」

『……………マサラタウンで教わったんだ』

「マサラタウン!? その町のどこで!!?」

『……………』

デントに美味しいと言って笑顔になったアーティさんがその後ずっとルカリオに質問をしている様子が見れた。ルカリオは嫌そうな表情できのみがトッピングされたサラダを持ってきてくれて、少しづつアーティさんの質問に答えていく。そうしないと解放されないのは先ほど戻ってきたときに理解したからだろう。ずっと質問を繰り返して答えてもらおうと必死だったからな。俺たちはその様子に苦笑をしながら夕食を食

べる。…ああ、美味しい。

そして木の大きな枝の上で寝袋に入って寝る。クルミルと一緒に寝るか誘ったのだが、クルミルは顔をこちらに向けず俺の誘いを断った。だがクルミルはすぐに俺の寝袋に入り込んで寝ようとしているので先程の誘いを断った行動から少しツンデレな性格なのかなと思ってしまった。

———その次の日、クルミルがお腹を壊したミネズミのために連れ去られてしまう事件が発生してしまった。ミネズミはアーティさんのおかげで何とか助かったが、クルミルの姿が見えず、ルカリオの波動で探すことになった。

その後シキジカの首に糸でしがみつくとクルミルを発見し、俺に糸を張ってこちらに来てもらおうとしたり、風で谷底に落ちそうになったクルミルを助けようと俺も下に落ちたり、アーティさんのハハコモリに助けってもらったりといろいろとあった。

でもそのおかげでクルミルは俺に懐いてくれたようだし、仲間に加わってくれたのは良かったことだと思う。

でも七体目のためボールが開かず、いったん森の近くにあるポケモンセンターでアララギ博士に手持ちのポケモンを預かってもらい、クルミルを出して挨拶をする。そしてそれを見たアーティさんが何か閃いたのかすぐに走ってヒウンシティに向かって行く

てしまった。そして最後に俺にジムで待っていると言ってくれたからおそらくすぐにジムに挑戦できるだろうと思う。何はともあれ、ヤグルマの森でのやるべきことは終わったし、次はヒウンシティへ直行だな。

「よし、ジム戦に向けて頑張ろうぜお前ら！」

『ピッカ!!』

『クツリウ!!』

第七十六話～妹は兄が激怒するのを目撃する～

こんにちは妹のヒナです…。今日はヒウンシティに向けて歩いてるんですけど、途中で見かけた新しいフレンドリィショップの中を歩いている最中です…。何だかすつごく嫌な予感がします。主に原作のことですから…。

アイリスは私たちから離れてジュエルショップに行つて見ていて、私は兄たちと共に歩いている最中です。

ふと兄が行列ができている店を発見して首を傾けた。

「何だあれ？」

『ピイカ？』

「あああれはポケモンソムリエが相性診断している所だよ」

「へえ……」

『ピカ……』

『ほう、デント以外にもポケモンソムリエはいたのか』

『そりゃあね、ポケモンソムリエってというのは——』

デントがポケモンソムリエの説明をしていて、私以外の皆がその話に夢中になっている。話を聞いた兄が面白そうだとそのポケモンソムリエに最近捕まえたクルミルを見てもらおうと並び始めた。そしてデントとルカリオがフーズなどの食事の材料を見に行ってしまったため、私とヒトカゲは兄と一緒に並ぶことになってしまった。ルカリオと一緒にいると言ったのだが、兄が私の腕を引っぱり一緒にどんなことするのか見てもらおうぜと言われ、ヒトカゲも興味津々で一緒に行こうと言ってきたので離れることができなかったんだけど……これってヤバイよね……。

「お客さんお客さん。こっちにも良いソムリエールがいるよ？」

「え？」

『ピカ？』

『カゲ？』

「あーあー……」

並ぶことなくすぐに見てもらえるということで兄が閉められているカーテンの中に

入って行ってしまい、私とヒトカゲも一緒に行くことになった。でもすぐにそのソムリエールがピカチュウやヒトカゲに興味を持って近づき、興奮したように自己紹介をしつつ話をする。

「あらピカチュウに…色違いのヒトカゲ!? 珍しいわね…うーん…芳醇な香りが漂ってくるわあ。香りも珍しいわねえ」

「え、えつとピカチュウとの相性は見てもらわなくても大丈夫ですよ…それにヒトカゲも妹の未来の相棒ですし…」

『ピイカ…』

「そ、そうなんです…」

『カゲカゲ…』

「ふーん…」

そのソムリエール…ではなくカベルネはピカチュウとヒトカゲの相性を診断するごとに残念そうだ。そして兄がボールからクルミルを取り出して相性を確認してくる…けれど。

「それで…どうなんですか?」

「あなたとそのクルミルの 組み合わせ `marriage` は…最悪よ!!!」

「はあ!?!」

『ピカ!?』

『クツルウ!?』

「ヒ、ヒトカゲ…ちよつと離れようね」

『カゲ…』

さて始まったカベルネのテイスティングタイム。兄たちがクルミルとの相性は最悪だと言われて驚き叫ぶのを聞いて、この後起きる騒動を察知し私とヒトカゲは兄たちより後ろに下がる。

そしてクルミルは怒ってカベルネにいとをはくで攻撃し、次に他のポケモンは?と不機嫌そうな兄が聞いてポケモンを出していく。でも次々にダメ出しをされていき、そして攻撃されることに兄とピカチュウの機嫌はどんどん急降下していくのが分かって私とヒトカゲは苦笑した。

「もう!あなたのポケモンはどれも舌が痺れちゃうって感じ!!」

「……………」

『……………』

「え、でもピカチュウはさつき珍しいって褒めたのは……」

『カゲ?』

「ああ、あれ?珍しいから良いってもんじゃないわ。写真で見るより可愛くないし……そ

れにあなたのヒトカゲも相性ダメダメね。未来の相棒？色違いが珍しいからそう決めたんじゃないの？」

「違います!!というか私たちの相性はばっちりですよ!!!」

『カゲカゲ!!』

「ハッ。あらあなたソムリエールでもないくせになに生意気なこと言ってるの？私が言ってるんだからあなたとヒトカゲの相性は全然駄目よ！」

「……………ピカチュウ」

『……………ピツカ!』

少し気になったことを言ったらいきなり失礼なことを言ってきたため私とヒトカゲは怒鳴って叫ぶ。それにハッと嘲るように笑ってきたため、私はもう一度怒鳴ろうとする…けど兄がピカチュウに10まんボルトで攻撃を指示し、カベルネに攻撃した。その姿に先程まで込み上げてきた怒りが収まり、兄の顔を見上げる。

「お、お兄ちゃん？」

『…カゲ?』

私とヒトカゲは怒りが萎み、一気に恐怖心が込み上げてきた。それはどうしてか。兄とピカチュウの表情がいつもの怒りと違っていて凄く恐ろしくなっているからだ。例

えで言うなら鬼神とか不動明王とかそういう恐ろしい雰囲気を漂わせている感じがする。

私はすぐにヒトカゲに抱きつき、ヒトカゲも私に抱きしめ返してくれた。でもこれはヤバイ…完璧に兄たちを激怒させてしまった。ただ怒っているんじゃない、激怒です。しかもなんだか怒りすぎて物凄い怒りのオーラが見えるような…。

カベルネはピカチュウの10まんボルトから復活し、すぐに兄たちに向かって怒鳴っていく。でもそれは火に油を注ぐ行為だと思うんだよね…。

「な、何すんのよ!! 酷い、酷すぎるわ! これはもうポケモン総取っ替えしかないわね!!」

「……………」

『……………』

「いやそういう問題じゃなくなってるよ…」

『カゲカゲ…』

「サトシにヒナちゃん、こんなところにいた…のね?」

「戻って見たらいなかったから心配…した…よ?」

『……………?』

「あああああ!!!あなたは!!!」

デントとアイリス、ルカリオが閉まっていたカーテンを開けて中に入ってくる。でも兄の様子がおかしいことに気づいたらしく、少々微妙な表情で私に何があったのか視線で問いかけてきた。私はヒトカゲに抱きついたまま首を何度も横に振って今はやばいと必死に示す。

…けれどカベルネがデントの顔を見て以前ジムに来た時の悔しさのリベンジなどをしに来た等々の説明をして、バトルを申し込んできた。デントは兄の様子を窺って大丈夫かどうか見る。けれどカベルネが無理矢理バトル場までデントを引っ張り、外へ出して強制的にバトルをしようとするみたいだ。

でも兄とピカチュウは立ち止まったまま動かず、何も言ってこない。その様子に強制的にバトル場へ連れて行かれたデント以外の私たちが外へ出るのをやめて様子を窺う。

「サ、サトシ?ピカチュウ?」

『キバキバ…?』

「お、お兄ちゃん…」

『カゲ…』

『……………いつたい何があったんだ』

「いや実は……」

私が今まで起きたこと、何で兄が怒っているのかを説明した。するとアイリスとキバゴは怒った表情を浮かべて叫んでいる。けれど何故かルカリオも兄と同じ様子になってしまった。もしかして私とヒトカゲが言われたこと説明しない方が良かったのかな……。

「何よそれ！そんなの怒って当然よ！相性最悪とか普通言う!?サトシもヒナちゃんもポケモンとの相性は最高に決まってるのに!!」

『キバキバ!!!』

「う、うんそうだよね。おかしいよね……」

『カゲカゲ!!』

『……………』

『……………』

「……………とにかく、デントたちのところまで行くぞ」

兄がようやく喋って歩き出したんだけど、その声もかなり怒っているようです。凄く低音で喋っていて、兄が歩き出したことにピカチュウとルカリオも動くんだけど……こ

「れってもしかしてカベルネ終了のお知らせ？」

「な、なんだか私たちが怒らなくてもいい感じね？」

『キバキ…』

「そ、そうだね…」

『カゲエ…』

.....

そしてバトル場までやってきたんだけどもう戦いはデントが勝利していたらしい。悔しそうなカベルネの表情と彼女にちゃんとアドバイスをしているデントの姿が見える。

「何よ、何よ何よ!!もう、次こそはあなたに勝ってやるんだから!」

「うん。楽しみにしているよ」

「その余裕の表情がムカつく!!!」

カベルネが地団駄を踏んでデントに向かって怒鳴っている。でもデントは怒ること

なくむしろ優しい笑みで時間をかけていてもいいから頑張れと言っているのが見えた。
：うん、カベルネ頑張れ。でもこれからいろいろと悲惨なことになるから本当に頑張
れ。

「絶対にリベンジしてやるんだからね!!」

「おっと。まだ行くなよ?」

「ちよつといきなり何すんのよ!!!」

走っていかうとしたカベルネの腕を兄が掴み、逃げないようにする。だがカベルネは
まだ兄の異変が分かっていないらしい。兄を怒鳴り睨んでいる。

だが兄は気にすることなくただ笑顔でカベルネに向かって言う。

「…正座と土下座のどつちがいい? もちろん逃げようとしたらポケモン恐怖症以上のト
ラウマ植えつけるからな」

『ピイカツチュ』

『……………』

…はい。

え、その後どうなったかかって？まあご察しの通りです

第七十七話　妹は兄たちが落ちたのを見た

「こんにちは妹のヒナです。突然ですが兄とピカチュウが落とし穴に落ちていきました。」

「お兄ちゃん!？」

『カゲ!？』

「サトシ!？」

『キバキバ!？』

今日はズルツグとキバゴがバトルの練習をしている最中だった。けどその途中で何か兄とピカチュウの地面が揺れ、突然穴ができて落ちてしまった。それに私たちは驚き、落とし穴を覗き込む…だがすぐにその穴は塞がってしまったため、兄とピカチュウが大丈夫かどうかが不安になる。…あ、でもあの兄とピカチュウなら平気…かな？

でも他のポケモンたちのボールは全て置いて来てしまっているため、今兄と一緒にいるポケモンはピカチュウだけだ。…大丈夫なのかな？ 私たちは慌てながらどうするか話し合う。

「ど、どうしよう!？」

「あなをほるで追いかけてよう！ 出番だヤナップ！」

『ヤナップ!!』

「じゃあ私も！ ドリユウズ出ておいで！」

『ドリユウ!!』

ヤナップとドリユウズにひとまずあなをほるで追いかけてもらうことになった。これで兄とピカチュウがどこまで落ちていったのかすぐにわかるだろう。それにしてもこの光景…どこかで見たような…。あ、そうか原作か。私はちよつと嫌な予感がして先程までデントとルカリオが食事の準備をしていた場所を見る。するとそこにいたのは何やらデントの持ち物を持ち去ろうとしてくるコアルヒーの姿。

『アヒィ』

「ちよつ泥棒!!」

「熱ツ!!? ね、ねつとう!？」

『ミツジュウ!?!』

『アヒイイ』

『おい待てそれを持ち去るな!!!』

「あ、待ってルカリオ!!」

『カゲ!!』

『キバキバ!!』

『ミジユウ!!』

『ズツリユウ!!!』

「あ、ちよつと待って!!ド、ドリユウズそっちはお願いしてもいい!？」

『ドリユウ!!』

「お願いね!!ドリユウズ!!!」

コアルヒーがねつとうという技でミジユマルとアイリスに攻撃してきた。そしてそのままデントの持ち物を持って逃げようとしたためルカリオ達が追いかける。私は先に走り去ってしまったルカリオの後を追いかけて走るんだけど、さすがルカリオ速い。。。

そして湖のような場所まで走っていくと、ルカリオが立ち止まり、波動で調べだした。ミジユマル達もその様子を見て立ち止まり、周りを窺う。私たちはようやく追いついて

ポケモンたちの近くで立ち止まった。そして先に行かないこと、兄を探しに行こうということをアイリスが言う。でも戻ろうとしたら上からヤナップとドリユウズ、そしてデントがやってきて私たちの方に兄とピカチュウが落ちていったということを話してくれた。

「…じゃあサトシがここを通ったのは間違いないってことね？」

『ミジユミジユ…』

『……こつちだ』

「え、ルカリオ。それってお兄ちゃんの方？それともコアルヒーの方？」

『カゲ？』

『その両方だ…』

ルカリオが波動で兄とコアルヒーたちが一緒にいるということを説明してくれて、その場所まで急いで向かう。けれど向かった先には何やらピカチュウが新しい技のエレキボールでコアルヒー達を吹っ飛ばしている光景だった。兄はエレキボールという技を初めて見たようでピカチュウの新しい技に嬉しさ半分と疑問半分の表情だ。

「今の技は…？」

『ピカ？』

「今のはエレキボールっていう技だよ」

デントがちゃんと技の説明をしてくれて兄がその言葉に頷き、ピカチュウを褒めている。…まあとにかく、いろいろと問題があつたみたいだけど、エレキボールができるようになったし、持ち物もちゃんと取り返せたから良かったかな？

——でもコアルヒー達がまた私たちに攻撃を仕掛けに来ただけだけど、ピカチュウの10まんボルトであっけなく退散し、その後すぐにあのサングラスをかけたメグロコとバトルすることになった。どうやらメグロコのアナをほるによって兄たちが落とし穴に落ちてしまったらしい。そしてメグロコはピカチュウとバトルがしたくて追いかけてきたらしい。…兄の手持ちにいずれなるかもしれないし……私は何も言わないでおこう。

そしてメグロコがワルビルに進化したりピカチュウの攻撃で空へ吹っ飛ばされたりとあつたけど、まあカベルネの件に比べたらマシだということだけは言っておく。

第七十八話～兄と特訓の成果と…～

こんにちは兄のサトシです。ヒウンシティに行く途中でゴチルゼルと不思議な体験をしました。ですがそのトラブルも無事解決して、ようやくヒウンシティに到着しましたよ。そしていつも通り町はずれで俺のポケモンたちを鍛えていくため、まずはルカリオとマメパトでバトルをして特訓をすることになりました。何故特訓をするのかは、ジム戦に向けて頑張っていこうと思っっているからですよ。

ルカリオには技を避けたりちゃんと攻撃して来たりと模擬バトルのような感じでお願している。もちろんルカリオはマメパトに比べて強いので、一方的な攻撃にならないように調整しながらのバトルになっではいるんだけど。でもこれも良い特訓になると俺たちは思っている。攻撃に関しては手加減してもらっているのだが、それ以外は全て全力を出してやってもらっている。なので避けられたり攻撃した技を逆にはどうだ

んで返したりとされることよってマメパトがどうやって動いていったらいいのか、どうすればルカリオに技が当たるのかを考えて行動してくれるようになる。俺もちゃんと指示を出してどこに動けばいいのか言うため、最初と比べていい感じになってきているはずだ。

…もちろんこの模擬バトルのやり方はマメパト以外にもみんなにやってもらうけどな。

「行くぞマメパト！かぜおこし!!」

『ポォー!!』

『まだまだ弱い!』

ヒウンジムは虫タイプの使い手であるアーティさんとバトルするからひこうタイプのマメパトをまず鍛えることから始めた。でも他にもポカブやクルミルなどといった出したいポケモンがいるからマメパトを出すかどうかで少し悩んでいる。もしもこの特訓での成果を俺がマメパトをジムで出さないとという結果で終わってしまうのもなんだか残念な気がするからだ。でもこのヒウンジムで挑戦できなくても、ちゃんと鍛える

ことによつて後に活躍してもらうつもりだから結果オーライだということも思つていたりする。それにマメパトだけじゃなくてミジュマルやツタージヤも特訓で鍛えていくつもりだしな。

「マメパト！もう一度かぜおこし！今度は回転しながらだ!!」

『ポオーウ!!』

『…ほう、回転したことによつて竜巻のようなかぜおこしを発生させているのか』

ルカリオが感心したようにマメパトのかぜおこし竜巻バージョンを見ている。これは俺がかぜおこしをアレンジしようと考えてマメパトにやり方を教え、練習してもらつたオリジナルの技だ。これは何回か練習が必要だったけれど、すぐにマメパトが修得し、ちゃんと物凄い威力のある技として使えるため、これから攻撃技として重宝しそうだと俺やマメパトは思つていたりする。

そしてルカリオが迫つてきた攻撃を避け、はどうだんを飛ばしてきたため、俺はマメパトに避けるかと指示をする。そしてマメパトは速いスピードでやってくるはどうだんを難なく避けることができた。…それを見て、少しずつだけど、マメパトの動きが今までより良くなつていると分かつてきた。

「よしマメパト!!!この調子で頑張ろうぜ!」

『ポオオオオオ!!!』

俺が激励を飛ばしてマメパトと共に頑張ろうと言う。そしてマメパトは大きく飛び上がった俺の声に応えてくれて…身体が輝きだして…え？

「…あれは!?」

『ピイカ!?』

『ハトオオオ!!!』

『進化したのか…!』

マメパトが進化したことに俺は驚き思わず凶鑑を取り出して確認してしまった。…なるほど、ハトーボーっていいのか。俺は一度特訓を中断し、肩に乗ってきたハトーボーの頭を撫でて、進化してくれてありがとうと礼を言う。ルカリオも同じく良かったと言って頷いてくれた。俺たちの言葉にハトーボーは嬉しそうだ。俺も凄く嬉しい。

そして特訓を遠くから見ていた妹達が喜んで叫んでいるのが聞こえてきた。

「うわあハトーボーになったんだ!進化したんだ!」

『カゲカゲ!!』

「おめでどうサトシ！ハトーボー！」

『キバキ！』

「これはもう素晴らしいことだね！おめでどうハトーボー！」

「あああああ!!サトシ先輩」

!!!!!????

「…あれ、シューティー？」

皆にハトーボーの進化について祝福されていたらいきなりシューティーの叫び声が聞こえてきて俺は後ろを振り返った。するとそこには満面の笑みで俺のもとへと走り出しているシューティーの姿が見え、俺たちは苦笑してしまった。そして俺の目の前に来て90度の角度で綺麗なお辞儀をして挨拶をするシューティーの姿：出会った頃の性格が酷すぎて俺がちよつと矯正したんだけどやりすぎたか？でもこの性格だったら他の人を貶さないで済むと思うんだけどな…やりすぎか。

俺は近づいてきたシューティーに向かって口を開く。

「シューティー、お前もこのヒウンシティに来てたんだな」

「もちろんジムに挑戦するために来ました!! サトシ先輩はもうヒウンジムに挑戦しましたか!?!」

「いやまだだ…シューティーは?」

「はい! ヒウンジムに挑戦して無事にバッチを貰うことができました!!…はっ!?! すいません僕としたことがサトシ先輩より先にジムに挑戦してしまうなど…ああ僕の馬鹿野郎!!!」

「き、気にすんなよシューティー…」

「いえ、そんな!? 申し訳ありませんサトシ先輩!!!」

綺麗な土下座をして俺に謝ってきたシューティーに引きつった笑みを浮かべながらも早く立てと促しつつ、シューティーの手を掴み立ち上がらせた。するとシューティーは何を勘違いしたのか、優しいですねサトシ先輩…本当に憧れます!!と余計に感動し号泣してしまった。涙で水たまりができてしまいそうなぐらい号泣している姿に俺は少し引いてしまう。…お前はどこぞのコータスかとツツコんでやりたい気分になってきた。

「うわぁ前にも思ったけどシューティーの性格が物凄く崩壊してる…」

『カゲカゲ…』

「さ、最初の頃はどんな性格だったんだろ…」

『キバキバ…』

「も、物凄いテイストを感じるよ…」

『……………いや、これで充分だろ』

『ピイカア…』

『ハットオ…』

俺とシューティーの後ろの方に集まった皆が苦笑しながらも話しあっている声が聞こえてきた。ピカチュウにハトーボーお前らまでそっちに行くのかよ。それにルカリオ、お前つて俺以上に厳しかったんだな。俺ちよつとやりすぎたと思って反省しているんだけど…。

…あ、そうだ良いことを思いついた。

「なあシューティー、俺とバトルしないか？」

「え!? サトシ先輩とですか?!?!?」

俺の言葉に驚きすぎて涙が止まったらしい。シューティーが豆鉄砲を食らったような表情で俺を見てきた。俺はそんなシューティーに説明をした。ルカリオと今まで修

行をしてきたということ、特訓が終わったらジム戦に挑戦するということ、シユーターにもその特訓に付き合っただけということ。――。

そしてその俺の言葉を聞いて最初は疑問の表情だったのが、しだいに理解してきたように笑みを浮かべて何度も頷いてくる。

「はいもちろんです!!むしろ僕からお願いするところですよ!よろしくお願いしますサトシ先輩!!!」

「おう!こつちこそよろしくなシユーター!」

「はい!!」

――え、特訓の成果?それはちゃんとヒウンジムのバツチゲツトできたことで察してくれませんかね。

第七十九話く妹はいろいろと苦笑したく

こんにちは妹のヒナです。無事ヒウンシティのジムバッチを手に入れた兄と共に町から出て次のジムのライモンシティまで目指していきます。でも途中でベルに会って一緒にお昼を食べることになりました…えっと…うんベルの様子がちよつとおかしくなってるけど気にしちや駄目だよね。

「わざわざ私の分まで美味しい料理を作ってくれて本当にありがとう…何だか申し訳ないわ……」

「いや気にしなくて大丈夫だよ。それに美味しく食べてもらうことこそシェフの冥利に尽きるっていうからね？」

『デントの言うとおりだ。気にするな』

「でもご馳走になつていられるばかりなのもちよつと…なにかお礼として手伝えることつてないかしら？」

…まあこんな感じでお嬢様みたいな振る舞いをするようになってました。箱入り娘じゃなく本当にお嬢様みたいだよベル…これ絶対に兄のせいだよねそうだよね。

私たち…というより、兄とピカチュウ以外の皆は久々に会ったベルの豹変に驚き引きつっている。でももうこんな感じで性格が変わっているのに慣れてきたようだ…主にシューティーのせいだね。

そしてアイリスが持つてきた林檎を見てベルが目を輝かせた。

「まあ美味しそうな林檎」

「で、でしょう？これは極上のデザートよ」

「ええ、本当に美味しそうです。まさに極上のデザートですわ。…貰つてもよろしいのですか？」

「も、もちろんよ…」

「ありがとうございます！」

アイリスが微妙そうな表情でベルに林檎を渡している姿が見えて私は思わず苦笑してしまった。なんか性格だけじゃなくって口調も変わつてないかなこれ…でも兄とピ

カチユウは何だか満足そうな表情だ。前に会ったシューティーについてはちよつとやりすぎたかなという表情を浮かべていたような気がするんだけど……ま、まあいいか……人に迷惑はかけていないし……。

「ほらキバゴ。美味しい林檎だよ！」

『キバキ……キバ!?!』

「あ、危ないわよキバゴ!!」

キバゴがアイリスに渡された林檎を落としてしまい、コロコロと転がっていく林檎を追って走っていく。それを見た私たちは後を追いかけて……そして新しいポケモンの姿を見る。そのポケモン……いやエモンガはキバゴの落とした林檎を持って私たちを見ている。そして兄やピカチユウは見たことのないポケモンに目を輝かせ図鑑を取り出して確認する。

『エモ?』

「なんだこのポケモン……?」

『ピイカ?』

「あら、そちらにいるポケモンはエモンガですよ」

兄が確認すると同時にベルが静かに近づいてきて説明してくれた。それもエモンガに抱きついたりゲットしようとせずに…これ本当に大丈夫なのかな…。もう原作崩壊は確定だよね絶対…。

愛らしい表情を浮かべながら林檎をキバゴに返したエモンガがアイリスからお礼を貰って嬉しそうに林檎を食べていく。その可愛い様子に勝手に出てきた兄のミジュマルがメロメロを受けたような表情をしてエモンガに抱きつこうとする。エモンガはミジュマルを避け、すぐにどこかへ行こうとする…けど、キバゴがその後ろ姿を見て追いかけて行ったため、私たちも後を追いかけることになってしまった。

「キバゴ?どうしたの!？」

『キバキバ!!』

「…え、キバゴも自分でお礼をしたいの!?!…分かったわ。ねえ皆!悪いんだけど私たちが先にエモンガを追いかけて行ってくる!」

「分かった…気をつけろよ!」

『ピカチュ!!』

「すぐに追いかけるからね!!いろいろと気を付けてね!!」

『カゲ!!』

アイリスが木に登って走って行ってしまおう。木をつたつて素早く移動しているためアイリスたちが行ってしまった。それを見た私たちも早く追いつこうと走るけど、いつの間にかはぐれてしまったみたいだ。先程まで見えていたアイリスたちの姿が見えない。…あ、もしかしてこのまま原作方向へいくのかなと思った。ベルの暴走はなくなっただけど、思わぬところで軌道修正されているみたいだ。

「…なあヒナ、あいつら大丈夫かな」

『…ピカピ?』

「うん…でも急いだ方がいいかもしれない…」

『カゲ?』

『ピイカ?』

「どうしてだい?」

「え、ええつと…」

「その意見に賛成ですわ。この先の森は深く、多くの強いポケモンたちがいると有名ですから」

「何だつて!?!」

『……………こつちだ』

兄が原作の意味で大丈夫かどうか聞いてきたため、確かアイリスたちはこの後ココロ

モリに襲われていたはずだから急いだ方がいいかもしれないと言っておく。そして何故急いだ方がいいのかと他のみんなが疑問に思ってしまった、どう言い訳をすればいいのか考えていたらベルが森について説明してくれたため難を逃れる。

私やベルの話によって本当に急いだ方がいいと分かり、ルカリオが波動でアイリスたちの居場所を教えてくれて、私たちはその先へと走り出した――。

その後、ココロモリに襲われているアイリスたちを発見し私は安堵した。どうしてかという、これはもう原作通りにアイリスの手持ちフラグだということ、兄がすぐにココロモリたちを吹っ飛ばしてくれるはずだということだからだ。

もちろん私の予想通りに事は進み、兄がりんしょうしまくっているココロモリたちに向かつて突撃し、ピカチュウと一緒に吹っ飛ばしていったことやアイリスとキバゴを気に入ったエモンガが仲間になりたいと言って来たことなどが起きた。

ちよつとだけ原作とは違うけれど、でもまあ大筋はあつてるし、あまり気にしない方がいいかなと思ってしまった。

そしてアイリスは嬉しそうにエモンガを捕まえたボールを手に持って叫ぶ。

「エモンガゲットでどどんがどーん！」

『キバキバア!!』

「良かったですね！おめでとうございます！」

「……………あはは」

『…カゲ』

——アイリスがエモンガをゲットしたことは良いとして、ベルの性格とか口調とかどうにかならないものかなあ…。

第八十話く兄はシェフ達の活躍に協力したく

こんにちは兄のサトシです。今日は近くでやっていたイツシユ地方のポケモン祭りに楽しんでます。

やっている場所はヒウンシティのはずれにある、イツシユ地方の地図に書かれていない凄く小さな町のお祭りらしい。面白そうだと俺たちはその祭りを見にやってきた。もちろんベルも一緒に。ベルは妹とヒトカゲ、アイリスと一緒に屋台を見ていくくらい、俺たちから離れて行ってしまった。

残った俺たちもいろいろと見ていくことにする。

食べ物や屋台やポケモンの品を安く売っている屋台が多く並んでおり、美味しそうな匂いや面白そうな品々に目移りしてしまう。そして大きな広場ではポカブ達のひのこによる技で大きな花火を上げ、ハハコモリの舞いを見ることができてとても楽しいと思

えた。他にも見たことのないポケモンたちがいて、いろいろと見れて気分は最高だ。

———それにこれからやるイベントも楽しめそうだしな。

【さあさあやってきましたまいりました!!イッシユで料理対決!!】

広場の中心で大きなスポットライトが司会者らしき人に照らされる。司会者の言葉と共に広場にいる観客は皆が大きな歓声をあげテンションを上げていくのが分かり、俺とピカチュウはその近くへやってきた。ルカリオ達は今ポケモンフーズの屋台が並ぶ店で品物を夢中になって見ているためこのイベントに気づいていないらしい。俺とピカチュウは広場で何をするのかじつと見ながら待つ。そしてその後司会者が広場についての間にか設置されたキッチンのような機械がいくつもある場所を指差して大きな声で叫ぶ。

【この料理対決!飛び入り参加もできるイベントだあ!!もちろん1人での作業も、ポケモンと共に作ることも許されている自由なルール付き!!優勝賞品の豪華なきのみセツトができるぞ!!あのハハコモリ達の舞いが終わるその瞬間まで!応募受付待っているよお!!】

優勝賞品と受付のスタッフがいる場所が明るく照らされ、観客たちは盛り上がり、料理に自身のある人とポケモンたちがその受付まで行く姿が見えた。優勝賞品のきのみセツトはとても豪華そうだな。様々な種類が山のように多くあって、ポケモンたちが喜びそうだなと思った。

「へえ…面白そうだな…」

『ピカピカ』

「サトシ、何が面白そうなんだい？」

『…サトシ、お前一体何を考えている』

「いや、あのイベントにデントとルカリオの共同料理で参加するのって面白そうだなって思ったんだよ」

『ピカッ！』

料理対決に飛び入り参加ができるというのなら、デントとルカリオで共に作るということもイベントのルールでは違反されていないみたいだしやってみたら面白そうだと思う。料理なら絶対にデントとルカリオ以上の美味さを出す人はいない…いやイッツシユ地方の人間では絶対に出せないはずだ。そう言ったらデントとピカチュウは興味

を持ったような表情で司会者が示す受付の場所を見る。でもルカリオは嫌そうな表情だ。

『断る。俺は騒がれるのは嫌いだ』

そう言つてルカリオが俺たちから離れ、妹たちの方へ行こうとする。でもデントとピカチュウがやる気出てきたみたいだし、あの美味しい料理をこのイベントで披露するのもいいんじゃないかと思うから何としてもルカリオに参加してもらおうと決意する。……まあイベントで披露してもらいたいのは、俺の仲間たちの料理は美味いんだぞという自慢をしたいという本音もあつたりするんだけど……でも豪華そうな優勝賞品も出るみたいだし、いいよな。

俺は歩き出そうとするルカリオの腕を掴んで阻止し、何とか参加してもらおうと口を開く。

「ほらルカリオ。ここでヒナのもとへ向かつてでも無駄だぜ」

『……何故』

「あれを見ろよ?」

『……………』

俺が指差した場所に妹たちの姿が見えるのでルカリオが察したような表情を浮かべた。：そう、今見えている妹たちは司会者の話と優勝賞品に目を輝かせていて、出来ればルカリオとデントに協力して優勝してもらおう、いや参加すれば絶対に優勝できるから参加してもらおう！と意気込んでいる姿が見える。優勝賞品のきのみセツトの中にはキバゴやヒトカゲの好きなきのみが多くあるみたいだから余計にやる気が出ているようだ。妹もアイリスもポケモンのことは大好きだから普段ルカリオが嫌がることはしないんだけど今回は仕方ないよな。

妹達の様子を見てルカリオがため息をついて俺を睨んでくる。でも俺はそんなのちつとも怖くはない。それにはたまにはルカリオも楽しんだ方がいいと思っっている。旅の途中でもマサラタウンでもよく周りを警戒することを忘れず、修行なども怠らないらしいルカリオが凄いと思うけれど、休んでもらうためにアロンさんからこの時代へやってきたんだからもうちよつと楽しめばいい。

それに料理している時や俺たちがその料理を食べている時なんて凄く嬉しそうな雰囲気や漂わせていて、楽しそうな表情を浮かべているから、このイベントに参加するのは凄く良いことだと思っただけだ。だから俺は参加してもらおうと行動した。ただそれだけだ。

『……………』

「ルカリオ、もう諦めよう。サトシ達は本気みたいだよ」

『ピカチュウ』

まだ諦めきれしていないルカリオにデントとピカチュウが諭すように言ってくる。それにもうだれもルカリオを助けてくれる仲間はいないと分かり、諦めてくれたようだ。長いため息をついて、頷いてくれた。参加してくれると分かって俺たちは笑顔になり、ルカリオに向かって口を開く。

「ありがとうルカリオ！」

『ピツカ!!』

「よし、じゃあまずは優勝目指して頑張ろうかルカリオ！」

『…ああ。まずどんな料理を作るのか決めるぞ』

……………

その後、料理対決は無事デントとルカリオが優勝した。そしてあまりの美味しさに絶賛し、感動する人々で溢れ、町から出て行こうとするのを引き留める人々やポケモンたちのせいで旅立つのに少し遅れたことは……まあ仕方ないと思っておいておく。無理やり参加させたのは俺の方だしな。文句は言わない。

でもルカリオもデントも最後まで楽しんで料理を作っていたから参加させて良かったということだけは言っておこう。

第八十一話　妹はアイリスの変化を知る

こんにちはは妹のヒナです。ただいまアイリスが新しくゲットしたエモンガでバトルをしようとしている途中です。…でもエモンガはやる気なさそうな表情を浮かべているみたい？

「チラーミィ、くすぐるです！」

『ラミィ！』

『エ、エモ!!?』

「なんの！エモンガめざめるパワーよ!!」

『エモエモ…エモ!!』

「……………あれ？」

『ドリユ?』

「エモンガが消えてしまいましたね？」

『ラミイ？』

「ありやりや…」

『カゲエ…』

「これってエモンガの…なんて技だっけ？」

『ピイカ？』

「ボルトチェンジって技だね…」

一応アイリスの言うことはちゃんと聞いているし、最初の方もメモロメロなどでベルのチャオブーに大ダメージを与えていたから良いと思う。けれどチラーミイに変えた後、めざめるパワーを使ったはずが何故かボルトチェンジという攻撃をしてしまい…まあ問題が起きた。

ボルトチェンジはトレーナーの他のポケモンを交換し、モンスターボールに戻る方法。エモンガがそのボルトチェンジを行ったせいでボールからドリユウズが出てきてしまい、一度バトルを中断することになった。

今のバトルはエモンガで戦うことが条件なので、そのエモンガがボルトチェンジをして交代してしまうと戦う意味がなくなるからだ。首を傾けているドリユウズをボール

に戻し、アイリスがボルトチェンジをしちや駄目だということを軽く説教しながら言うのだが、エモンガは可愛らしい表情で涙を浮かべ、反省しているということをアイリスに伝える。アイリスはその態度に理解したと分かったのか、もう一度バトルをし直すということになった。

——でも何だか微妙な展開…。

「チラーミイ戦闘不能！よつてこの勝負、ヤナップの勝ち！…つてなんだか変なテイストだな…」

「あはは…」

『カゲカゲ…』

「こういう技のやり方もあるんだな…」

『ピイカ…』

『興味はあるが…』

「ボルトチェンジしちや駄目つて言ったでしょエモンガ…」

『エモエモ』

エモンガがチラーミイのハイパーボイスを避けるためにまたもやボルトチェンジという技をしてしまい、その結果：何故かアイリスのポケモンではなく、デントのポケモンであるヤナップがボールから出てくるという事態になってしまった。突然出されたヤナップは何が起きているのか理解できずにチラーミイのハイパーボイスに当たってしまう。そして理不尽な攻撃に怒ったヤナップがソーラービームをしてチラーミイを戦闘不能にするという光景が広がっていた。

デントが微妙そうな表情で今のバトルの結果を叫んでいる。そしてアイリスがエモンガに向かってボルトチェンジはしちや駄目でしょ！と喋って説教している。けれどもエモンガは耐えた様子を見せない。むしろまた先程のような表情を浮かべてアイリスの怒りを鎮めようとしているのが分かった。

私とヒトカゲ、兄とピカチュウ、デントとルカリオは苦笑しながらアイリスたちの方を見る。

アイリスはため息をついているけれど、でもバトルは楽しいものだから頑張っている。うとエモンガを励ましていた。そしてベルも一緒になって励まし、バトルは面白いし楽しいものですよ？とエモンガに言っている。でもエモンガはやっぱり楽しくなさそう……というか、バトルしたくなさそうだ。

そしてベルが先程メロメロになってバトルができなくなったチャオブーをボールから出し、エモンガと対峙する。だがエモンガがバトルをする気は全くないようで、アイリスがめざめるパワーと指示をしても、勝手にボルトチェンジを出してしまい、今度は兄のツタージャと入れかわってしまった。：しかも次はエモンガがいなくなってしまうという事態になってるし。

「どこなのエモンガ!?エモンガ!!」

「消えてしまうほどバトルが好きじゃなかったのか…?」

「大変だわ。皆で探しましょう!!」

「そうだな…ツタージャ、ヒナとヒトカゲのこと頼むな!」

『タジャ!』

「え、ちよつと待つてお兄ちゃん!私とヒトカゲも一緒に行くよ!」

『カゲカゲ!!』

「いや、ヒナたちは念のためにここで待つてろ!もしかしたらエモンガがこちらに戻ってくるかもしれないだろ?」

「サトシの言うとおりでよ。ヒナちゃんにヒトカゲはここで待つていてほしいんだ!」

『いや、その必要はないな』

エモンガは原作では近くの木で寝ていたはずなのに、なぜだか大事になってしまい私は慌てて兄に叫ぶ。でも兄は探している間にエモンガが戻ってくるかもしれないからといってここで待っていると言いつつ、デントも兄の言葉に頷いた。私とヒトカゲは顔を見合わせて仕方ないと諦め領こうとしたのだが、ルカリオがいつの間にか波動で探し当てていて、ちよつと遠くの…でも私たちから見える木の枝で寝ているエモンガの姿が見えてほつとした。

ルカリオの示した場所にアイリスが向かい、降りてきてと叫ぶのだが、エモンガは嫌そうな様子でまた眠りにつく。

「エモンガ…いつまで降りてこないつもり？」

『エーモ』

「はあ…仕方ない。ツタージャ、頼む」

『タジャァー!』

兄がツタージャに頼んでつるのムチでエモンガを木の枝から降ろし、アイリスの傍に落とす。そしてアイリスがボルトチエンジをしない、逃げないと言い説教をしても、エモンガはまた泣き落としをししようとして可愛い表情をつくり説教から逃げようとする。

「…エモンガに説教つて効かなそうだね」

『…カゲエ』

「いいえ、そうはいかないわ…ねえエモンガ?」

『エ、エモ?』

アイリスがエモンガに視線を合わせてしゃがみこみ…まるで兄がよくキレた時にするような笑みを浮かべてエモンガをじっと見つめ、話しかける。私はその表情、その言葉に既視感を覚えた。とっさに兄の方を向くが、兄も驚いたような表情を浮かべている。もちろん他のみんなもだ。アイリスの雰囲気は兄にじわじわと似てきているようだと感じた。

——— なんだか凄く嫌な予感がする。

エモンガも私と同じような嫌な予感がするのか逃げようとしてくるのだけれど、アイリスに捕まれ逃げられなくなる。そしてアイリスはにつこりと兄のように誰もが恐怖し、寒気が漂いそうな笑みを浮かべてエモンガに向かって言う。

「ちよつとお話しましようか？」

——— この後エモンガはちゃんとアイリスの指示も話も聞くようになってた。……まあつまり、エモンガはアイリスに従順になった。

アイリスの性格はあまり変わってないと思ってたのにやっぱり違っていた。主に兄の怒り方に似てきたという方向で。

（……）
（これってお兄ちゃんのせいだよ絶対になんかそうだよ……皆のキャラ崩壊が激しすぎるよ）

第八十二話く兄とミジユマル危機一髪く

こんにちは兄のサトシです。旅の途中でヒトモシたちやランプラーに霊界まで連れてかれそうになったり、クリムガンとバトルしたりと色々なことがありました。もちろん霊界に連れて行こうとしたヒトモシ達やランプラーはちゃんとぶっ飛ばしましたよ。それにアイリスもクリムガンと新米トレーナーのエミーにいろいろとドラゴンタイプの戦い方を教えたりとしていて、イツシユ地方の旅は結構充実しています。

…まあだけど、今回はそうはいかなそうだけどな。

ケニヤンというかなり熱血そうなトレーナーと出会い、バトルをすることになった俺は相手が出てきたシママというポケモンを見て図鑑でタイプなどを知り、ピカチュウ

を出そうと思ったけど、ミジュマルがボールから出てきて、電気タイプと戦いたいと俺に頼んできた。ピカチュウはそれを見て苦笑し、俺に向かって頷いたため、ミジュマルに交代し、バトルしてもらうことになった。

アクアジェットでちゃんとシママを狙い、攻撃するのも出来ているし、このままジェルブレードで攻撃すれば終わると思っていたんだけど、シママのにどげりのせいでホタチがどこかへ行ってしまう、ミジュマルがその後を追いかけてしまったためバトルを中断してもらうことになった。

ホタチ探しを続けるんだけど、全然見つからずバチュルに遭遇したりイアのみを代わりにしたり、イシズマイに岩でホタチに似せたものを作ってもらったりといろいろと問題が起きてしまったため息をついた。

「…ねえルカリオ、ホタチって波動で見つけたりできる?」

「…いや、物を探すために波動を使ったことはないから分からないが…やってみるか…」

『ミジュ!!?』

『だが探しに行くが期待はするな。見つからない可能性も十分あるからな』

『ミツジュ……』

「そう落ち込むなってミジユマル…絶対に見つかるからな。…とりあえずホタチない状態での特訓でもするか？」

『ピカピカ？』

『…ミジユマ』

妹がルカリオにホタチを波動で探せるか疑問に思ったらしく、聞いてみた。だがルカリオが首を傾け、しばらく考えていたようだったが、探してみると言っただが、探してみても見つからなかった。とりあえず、ホタチが飛ばされたであろう場所をよく探してみただけで見つからないから、ルカリオに任せるしかないと思えば、俺はミジユマルの方を向いて話しかける。

ミジユマルはホタチに頼った攻撃をよくしていたから、ホタチのない状態でも十分バトルができる様にしておいた方がいいと前から思っていたし、明日のバトルまでにホタチが見つからないければそのまま戦うことになってしまふのだから何もしいよりはマシだと考えて言う。

ミジユマルは凄く落ち込みつつ俺の言葉に頷いた。それを見て俺とピカチュウは苦笑しながらもミジユマルを励まし、特訓を開始する。

攻撃は最大の防御とデントが言っていた言葉を信じて、まずはシママのニトロチャー

ジに追いつけるようにスピードを上げていこうかと考える。

速いほうがバトルで有利というのはハウエン地方からの俺の考え方だからよく特訓に速さを鍛えていくことをしていた。そしてバトルでもそれが活かされ、躲したり攻撃したりということが速いために有利に働いてくれるのだ。でも今まではその速さを鍛えるのは少しだけだった。

だから、今回はミジュマルの特訓で速さを重点に鍛えていく。

つまり、アクアジェットでスピードを出して素早く移動したり、身体を鍛えて速さを鍛えたりといろいろ特訓をしていった――。

「ミジュマル！もう一度アクアジェットだ!!」

『ミツジュマ!!』

「なめんな！シママ、ニトロチャージ!!」

『シマア!!』

…その結果としてはまあ、ケニヤンのシママを無事に倒すことができたし、ミジュマル自身も成長できたと思えた。ケニヤンとは熱いバトルができたし、また会えたら再戦してくれとお願いされたためいいライバルになれるのではないかと俺は思ってたケニヤ

ンと握手をし、その場を別れた。

ミジュマルはシママに勝利したことに嬉しそうだったが、やはりホタチがない状態が嫌らしく悲しそうな表情を浮かべている。俺とピカチュウはその様子にホタチがちやんと見つければいいと願う。ルカリオ達が探しに行つたけれど、もうホタチが見つかったのかわからない。

…もしも見つからなければ俺たちも探しに行こうと決心する。

「…これであとはホタチが戻ってくればいいんだけどなあ」

『…ピカア』

『……………ミツジュ』

「だいじょーぶ！ホタチならちゃんと戻ってくるよ!!」

『カゲ!!』

「…どういふことだよヒナ？」

『ピカピカ?』

『ミツジュウ?』

「ほら見て！」

『カゲ！』

妹とヒトカゲが楽しそうな笑みを浮かべて森の方角を指差した。そしてそこから見えてきたのはホタチを持ったルカリオとキバゴ、アイリスとデントの姿。ルカリオはともかく、キバゴたちもホタチ探しに協力していたらしい。それに妹やヒトカゲもホタチが飛んで行った方角からどこら辺の近くにあるのかを予想してルカリオに伝えたり探したりしていたらしい。そしてようやく、昨日探していない場所を重点的に探したおかげですぐに見つかったと言ってくれた。

俺たちが特訓している間に探してきたなんて思わなかったけど、本当に良かった。俺もピカチュウも、そしてミジュマルも探してきた妹達には本当に感謝してる。

「良かったなミジュマル!!!」

『ピカピカ!!!』

『ミツジユウ!!!』

第八十三話　妹はドラゴンバスターに会う

こんにちはは妹のヒナです。少し前にタマゲタケの毒にやられてしまいいろいろ大変でしたが、兄とミジユマル、デントとルカリオのおかげで何とか助かりました。それに兄とデントはそれぞれポケモンもゲットしたようでちよつといいこともあつたみたいです。

——でも

「あんたがアイリスだね？探したよ。あたしはドラゴンバスターのラングレー！」

うん。どうなつちやうんだろ。なんだか凄く嫌な予感がするよ。主にエモンガの件で見たアイリスのことについて……。アイリスがキレると兄にそっくりになるみたいだからなんだか怖いな……。

ドラゴンバスターという言葉に疑問を感じた兄たちが首を傾けつつラングレーに話しかける。

「ド、ドラゴンバスター？」

「何なのよそれ？」

「あたしドラゴンタイプポケモンを倒すのが趣味なの…特に、竜の里出身のね！」

「倒すのが趣味って…」

『カゲエ…』

私はついラングレーの言葉に眩いてしまった。ヒトカゲも私と同じように微妙な表情で頷いているからおそらく同じようにその趣味の悪さについて考えているはずだ。でもその呟き声を聞いたからか、いきなり睨んできたため、私とヒトカゲは慌ててルカリオの背に隠れる。ルカリオは静かに私たちを背に隠し庇ってくれたからちよつと安心する。

デント達が何故ドラゴンバスターになったのか、そしてその趣味について疑問に思い聞いてみた。するとラングレーは昔童の里でぼこぼこに負けてしまったということやその恨みを晴らすためにドラゴンバスターになったということを話してくれた。その

理由に私たちは微妙そうな表情になる。

「怖いのなら、逃げてもいいのよ？」

「…分かった。その勝負受けて立つわ！」

——まあそういうわけで。旅は一時中断しアイリスがラングレーとバトルをすることになってしまった。アイリスの手持ちのドラゴンタイプはキバゴのみのため、キバゴにやる気があるかどうか聞いている。キバゴはちゃんとやる気満々で、バトルの中心へと走っていく。そしてラングレーの出したポケモンはツンベアーというこおりタイプのポケモンだ。ちよつと前までだったならアイリスもキバゴも嫌そうな表情を浮かべて見ていたはずだろう。だが前に再会したシューティーが出したバニプッチを見て苦手なタイプだと言って嫌そうな表情を浮かべた時、兄が苦手なら克服した方がいいんじゃないかねえか？と言ってシューティーに協力してもらいちよつとした特訓をしたことがあるため、実はあまり苦手じゃなくなっているということもあつたりする。…さすがスーパーマサラ人、アイリスだけがこおりタイプを克服させるというのならわかるが、キバゴの苦手なこおりタイプを克服させるといふのは普通はあり得ないことなのに本当にやってしまったから恐ろしいと思う。

でも…このまま原作通りの展開になるのかな…。あ、でもドリユウズとはもう仲直り

しているから原作とは違う感じになっちゃうか…。

「ねえちよつと、もつと強そうなの出してほしいんだけど…強くて大きいドラゴンを倒してこそ、ドラゴンバスターって感じじゃない？」

『ルイツテイン！』

「…キバゴ、ひっかく！」

『キバキバ!!』

「ツンベアー、きりさく！」

『ツルベツアー!!』

そうして始まったポケモンバトル。でもラングレーはキバゴが弱そうだと罵倒し、つまらなそうな表情をツンベアーと共に浮かべている。それを見たアイリスが無表情のままバトルを開始させ、キバゴに攻撃の指示を出す。

そしてキバゴのりゆうのいかりとツンベアーのれいとうビームが炸裂する。だがキバゴ自身の力がまだまだ未熟なためか、ツンベアーのれいとうビームに押し負けてしまい、戦闘不能になってしまった。倒れたキバゴを心配してアイリスが走ってキバゴを抱きしめるが、ラングレーはそれを見てため息をついていた。

「もう終わり？ 楽勝すぎてつまんなーい。ねえ次のドラゴンタイプを出してよ」

「いないわ…私の手持ちのドラゴンタイプはキバゴだけよ」

『キ…キバキ』

「え？マジで!?本当にドラゴンマスターを目指しているわけ？」

「……………あなたには関係のないことよ」

「はあ？…なーんだ。竜の里出身ってこの程度か。がっかりね！」

その言葉に兄が反応し、ラングレーに対して何か言おうとするのだが、それを何故かルカリオが止める。兄はアイリスを貶し、傷つけるラングレーの言葉に反応しただけだ。兄は止めたルカリオを苛立ったように見て止めるなど言うが、ルカリオはアイリスの方を見ると言ってきた。そのため、私も兄もアイリスの方に視線を移す。

……………やっぱり見ない方が良かったと後悔してしまった。

「…ドラゴンタイプじゃないけど、ツンベアーに負けないポケモンならいるわよ」

「へえ？でもドラゴンタイプじゃなきや興味ないなあ」

「あら、怖いんだ？怖いなら逃げてもいいけど？」

アイリスがラングレーを挑発し、もう一度バトルをしようと言ってくる。ラングレーはアイリスの挑発にのり、バトルを受けた。そしてアイリスが出したのはやる気十分のドリユウズ。ラングレーはそのままツンベアーでバトルする。…言葉だけだったらこれで原作通りの展開に似ているからよかったと思えるんだけど…アイリスの表情を見てみたら微妙だ。なんせアイリスはラングレーの言葉を聞いてどんどん表情が消えていき、今は無表情なのだから。

ドリユウズはそんなアイリスの気持ちに気づいたらしい。いつもよりもやる気に満ちていて、絶対に勝つという感じで声を出している。

そして始まったバトルもドリユウズのきあいだまによって勝つことができた。…引き分けにもならず。

「ツンベアー戦闘不能！よってこの勝負、ドリユウズの勝ち！」

「クッ…ふん。ドラゴンタイプじゃなきゃ負けても痛くも痒くもないわ！」

そう言ってツンベアーをボールに戻してラングレーは私たちから離れようとするんだけど、それを引き留めたのがアイリスだ。アイリスがラングレーの腕を掴んでいるた

め、離れさせようとはしない。無表情で俯きながらラングレーを止めようとしているアイリスに恐怖を覚えた私とヒトカゲはお互いに抱きついてこれから起きることを見届ける。

肝心のラングレーは嫌そうな表情でアイリスを睨み叫んでいる。だがアイリスは俯いた顔を上げ、無表情から一変して笑みを浮かべてラングレーを見る。

「ちよつと！なにすんのよ!!」

「さつきの話についての説教よ。とりあえず、正座しなきや許さないからね?」

——うん。もう兄のせいですね。完璧にキャラ崩壊確定です。
え、ラングレーがどうなったかって? 兄の所行とエモンガの件で察してください…。

第八十四話～兄はアーケオスと共に特訓した～

こんにちは兄のサトシです。この前ダンゴロを捕まえることができ気分は絶好調です。そして今日、アララギ博士と再会し、何やら化石からポケモンを復元させるそうです。

でも復元させるのにマコモさんも協力して、何やら豪勢なコンピューターで復元させている。そしてムシャーナの夢のエネルギーの力を借りて化石を復元させる。…アーケンっていうポケモンらしいんだけど、一体どんなポケモンなのか、早く見てみたいぜ。

「システムは安定…すべて正常値よ…そして…内部に生命反応!!」

「復元が成功したのね!」

『キバキ!!』

「あ、ちよつと待って！」

アララギ博士がカメラを取り出し、これから復元されたポケモンのアーケンについての資料すべてを撮っていく準備をする。そしてマコモさんが機械を開けて…中から出てきたのは資料で見たアーケンだ。

『アーケエエ!!!』

「資料で見た通りの姿…成功だ!!」

『ピイカ!!』

「まさにワンダフルなテイストだね!!」

「凄いねキバゴ！」

『キバキバ!!』

『……ん?どうしたヒナ』

「いやちよつと嫌な予感が…ヒトカゲ、一緒にルカリオの後ろに隠れてよう」

『カゲ?』

化石が復元され、今まさに古代のポケモンが目の前にいるというのに、何故か妹は微妙そうな表情でヒトカゲを抱き上げてルカリオの後ろに隠れている。もしかしたらなにかあるのかもしれないと思い、俺はゆつくりとこちらを見てくるアーケンを警戒する。

——するとアーケンは近くにいたマコモさんとアララギ博士を攻撃し、そして次に俺たちを狙ってきた。俺とピカチュウ、アイリスとキバゴはとっさに躲したおかげで攻撃を受けず、ルカリオは後ろに妹とヒトカゲがいたため攻撃を受け流してダメージを防ぎ、そして妹たちに攻撃がいかないように庇っていた。：デントは急に襲いかかってきたアーケンの攻撃に当たってしまったけれども。

その後アーケンは暴れ疲れたのか眠りについてしまった。俺たちはその様子に苦笑してしまう。

「げ、元気いいんだな…」

『ピイカ…』

「いや元気いいですませていいのかなあ…」

『カゲカゲ…』

.....

その後、眠りについたアーケンのために小さなベットのようなものを作ってそこに眠らせた。デントとルカリオが共同で作ったポケモンフーズを持ってきてくれたが、いまだにアーケンは眠りから覚めない。その間にとアララギ博士たちは研究を開始するためデータ収集をしていた。

俺たちはアーケンの傍を離れず、目が覚めるのを待ち続けていた。…だが、妹とヒトカゲがルカリオの傍から離れず、アーケンを少し警戒しているようだから何かあるのではと思いいきを締め締める。

——そしてようやく目覚めたアーケンだったが、いきなりハイパーボイスにも似た大声をされ、暴れていく。妹が警戒していたのはこれかと理解し、アーケンが窓に向かって逃げようとしているため落ち着かせようとする。だがその後結局アーケンはデントに攻撃したりフーズを食べたが口に合わず吐き出して余計に興奮し窓から逃げてしまった。でも飛ぶことができないためか遠くに行こうとはせず、近くにあって木に生えている実を食べている…けれどすぐに吐き出してしまったためおそらく今の時代の食べ物は口に合わないのではないかと思った。

…まあ食事の問題に関してはいろいろと工夫していけば大丈夫だろうから心配はないだろう。でも、アーケンに挨拶してきたムンナを見て飛びたいと思ったのか、羽を飛ばたき何度も飛ばぼうとしてくる姿に俺は協力したいと思えた。…俺たちの勝手で眠り

から目覚めさせてしまったのだからアーケンが飛びたいのなら協力したい。

「よしアーケン！お手本だ。出てこいハトボー!!」

『ハットオオオ!!』

ハトボーが飛び方をちゃんと教えていき、アーケンがその真似をして飛ばうとする。でも全然飛び上がらず、何度も何度も挑戦していく。

過去と現代のポケモンが一緒になって飛び立とうと練習し、教えている姿に博士たちは嬉しそうだ。そして飛べるということでアイリスがあるボールを取り出してきた。

「行くわよエモンガ！飛び方を教えてあげて！」

『エモ!!』

エモンガはまるで軍人が挨拶するかのようなポーズをとり、すぐにアーケンのもとへ向かって行き飛び方の練習に付き合っている。…エモンガに関してはアイリスがやったことだから俺は関係ないと思っているけど……まあ仕方ないよな。

そしてアーケンはハトボーやエモンガの教えによって次第に飛べるようになり、時折アーケンが嬉しさのあまり大声を上げるようになってきた。

「頑張れアーケン！もう少しだ!!」

『ピイカツチュ!!!』

『アアアアツツ!!!』

アーケンが大声を上げたとともに空中を浮遊する時間が長くなっていく。この調子なら飛べるのももうすぐだろう…。

「み、皆！大変よ!!!」

「へ…？うわっ」

『ピツカ!?!』

「うわあ…」

『カゲカゲ…』

『アアアアアツツ!!!』

マコモさんが何やら大騒ぎしながらこちらに走ってやって来たため、俺たちは研究所の方に振り向く…すると何故か研究所が大きな木に浸食されているような状態になっていて驚いてしまった。だが一番驚くのはアーケンが叫んだ瞬間に木に実が生っていくことだろう。

枝がのび、花が咲き…そして実が生る。これは一体何なんだ…？

「こんな植物の実なんて見たことがないわ……！」

『アアア!!』

「え、おいアーケン!？」

アーケンがその大きな木によじ登り、生えている木の实を食べる。しかも美味しそうに。そして木の実がなくなるとまた大声を出して植物に生やさせる。アーケンの声に反応するこの木はもしかして……アーケンの生きている時代の木なのか？

博士たちも俺の考えに頷き、おそらく古代の木であって、アーケンの声に反応するのと一緒に化石になっていたからではと予想を話してくれた。そしてアーケンは木の实を食べて元気が出てきたのか一気に進化してアーケオスになっていた。

「アーケオス!？」

『ピィカ!?!』

身体が大きく、羽ばたきもより強くなったアーケオスに俺たちは圧倒された。そしてアーケオスに進化したおかげか、今まで練習してきたおかげか……いや、両方だろう。アーケオスは飛び上がり、空を飛べるようになったのだ。

『アアアアアク!!』

『アアアアアクツ!!』

『アアアアック!!!』

「つてはい!?!アーケオスの集団?」

『ピカピカ?』

「古代のポケモンなのに…現代でも生きているつてことなの?」

『キバキバ…』

「アーケオスのことを迎えに来たんだろね…たぶんだけど」

『カゲ!』

『なるほどな…アーケオスは絶滅せず、どこかで生きていた…そしてこのアーケオスの声を聞いて迎えに来たということか』

「何にしても…アーケオスにとっては良かったことだろうね!うーん実に良いテイストだ!」

結果的に、アーケオスは仲間たちと共に飛んで行ってしまった。そしてアララギ博士たちはアーケオスが食べていた木の実についてこれから調べていくらしい。…俺たちはいつも通り旅の再開だ。

第八十五話く妹は釣りを楽しんだく

こんにちは妹のヒナです。まだまだライモンシティに到着しませんがこれから先で楽しいことが起きそうな予感がします。

楽しいことというのは、先ほど久しぶりにベルにまた会うことができ、これから釣りをすることになりました。

「釣りを行ったことがありませんので…これから楽しみですわ!」

「私も釣りつてしたことないから楽しみ! ヒトカゲも一緒にやろうね!」

『カゲカゲ!!』

「イツツ・フィッシング・タイム!!!」

「お、おう……？」

『ピイカ……』

デントが釣りソムリエとして意気込んでいるらしく釣りについての説明を話ながらもすぐくやる気に満ちているようだ。いやちよつとやる気に満ち溢れすぎな気がするけど……兄もピカチュウも微妙そうな表情だ。私たちは苦笑しながらも釣りをする場所まで向かって行く。

申し込み窓口の方へ行くと、かなり人が多くいて参加者が大勢いるようだ。……あれ？ そういえばこれって原作でもあったよね。というか、原作ではロケット団が偽って釣り大会を開いていたはずだけど今回は違う人が行っているようだ。……まあ平和ならどうでもいいか。何かあったとしても兄が助けてくれるだろうし。

釣り大会ではより大きなポケモンを釣り上げてゲットすることが必須みたいだ。そして優勝賞品はすごいつりざおの最新型らしい。……すごいつりざおに最新型とか存在してたんだとちよつとだけ驚いてしまった。

そしてそれぞれ釣竿を決めに行くのだけれども、デントが釣りソムリエとしてより良

い釣竿を選びたいらしく、私たちが選ばうとした釣竿にかなり駄目だしを食らってしまつた。そのことに兄が少し不機嫌になるのだが、より釣りやすくより良い釣竿をデントがわざわざ選んでくれているという事実には言えないらしい。上機嫌でいろんな説明をしながら釣竿を決めていくデントに私たちは苦笑した。：まあマイ釣竿を持つているくらいだし：ちよつと面倒だけでもあいいか。

そして選んだ釣竿を持つて指定された場所まで向かう。ヒトカゲは道に水たまりがあるため少し嫌そうな表情になつて、その水たまりを避けようとして歩いてゐるため、私がヒトカゲを抱き上げて歩こうとしたのだけれど：何故かルカリオに私ごと抱き上げられてしまい、そのまま指定の場所まで向かうことになつてしまつた。ルカリオはデントが選んだ釣竿を持つて上機嫌で歩いてゐる。

「あ、ありがとうルカリオ：」

『カゲカゲ：』

『いや、気にするな』

—— 辿り着いた会場では、もう参加者たちがそれぞれ釣りをしていた。私とヒトカゲはルカリオに降ろしてもらってから、意気込んで向かう。

そして釣りをを行うことになったんだけど…デントが専門的な言葉を喋りながらも説明してくれて、初心者にやりやすい方法を積極的に教えてくれるんだけども…ちよつと専門的すぎて分からない部分があるような…。

しかも釣竿にポケモンが食いついて早く釣り上げないといけないと私たちが焦つて言うのに、デントはそれでもいろいろと説明しながらポケモン…バスラオを釣り上げていく。まさにテイスティングタイムの時のようだ。

「釣り…時にはワルツを踊るようにそしてしなやかに…ここだ!!」

「デ、デント語を誰か教えてほしいんだけど…」

『カゲエ…』

『デント語…まさにその通りだな…だが実際に釣れたから腕はあるようだ…面白い』

ルカリオはデントが出したヤナップとバスラオのバトルに興味を持ったような表情で見ている。私は兄の方を見てどうするか視線で問いかけるのだけれど、兄は肩をすく

めて諦めろと言っているため正直に待つことになった。

でもバトルの様子はかなり面白い展開になってきているようだ。水のフィールドでのバトルだからかバスラオが有利なときも多々あったのだけれど、デントはちゃんとヤナップに指示をして無事ゲットをしていた。

その様子を見たアイリスたちは余計にやる気になり、釣りを始めていく。：私も一応釣りはするのだけれど、バトルどうしようかと思っただけだ。ヒトカゲにとつて水のフィールドはかなり厳しいし：それにポケモンもまだ持つてはいけない年齢だし。：でも大会に参加しているルカリオもポケモンバトル&ゲットをする必要があるからあまり意味はないのかな？まあ釣り上げたら考えようと思う。とりあえずバトルになったらヒトカゲと相談して、その後必要なら兄かルカリオに任せてみようかな。：捕まえたポケモンは大会後に返さないといけないみたいだしゲットの方法もいまだによく分からないし。：

「とにかく頑張ろうヒトカゲ！」

『カゲ！』

——その後、バスラオが一匹かかったのだけれど慌てているうちに逃がしてしまつたみたいで残念。

兄は普通にバスラオと戦って捕まえており、ルカリオも自分で釣り上げたバスラオとバトルをし、無事専用のボールで捕まえることができた。ベルが釣り上げたプルリルが暴れるというアクシデントもあつたりしたけどね。

結果？優勝はデントのバスラオでした。そして最新型のすごいつりざおにデントは大喜びしていて、私たちもそんな彼に祝福したのは言うまでもない。

第八十六話～兄は映画作成に協力した～

こんにちは兄のサトシです。映画の宣伝をしているのを見ていたら突然ゾロアに出会いました。野生ではなくルークという少年のゾロアだったんだけどな……。でも、そのゾロアのイリュージョンを見るとシンオウ地方で出会ったゾロアとゾロアークを思い出す。あいつら元気にしてるかな…。

映画を製作しているらしいルークは主演女優のゾロアが急に怒って逃げたと言ったため、俺たちは協力してその後を追いかける。そして辿り着いた古い映画館でゾロアはお姫様の幻影を見せた状態で立っていた。先程ルークから話を聞いて、そして怒りの原因を知る。デントがちゃんと推理をして、そしてその推理にゾロアも勢いよく頷いたために分かったことだ。

「なるほど…つまりゾロアは女の子だからお姫様の役が好きだということなのか…」

『ピイカ…』

「ごめんな…ゾロア」

『クウン！』

——まあそういうわけで。ゾロアにすべての出演をさせていたのが問題ということになり、俺たちも協力して映画を作っていくことになった。もちろん妹やヒトカゲ、ルカリオにもその役目があったりする。

何日もかけて作り上げたストーリーと衣装や大道具などに俺たちは歓声を上げて喜んだ。…でもまだ終わったわけではない、始まったばかりだ。これから俺たちの映画を作っていくのだから。

俺は勇者、妹とルカリオはその仲間たち。アイリスは伝説のドラゴンマスター。そしてデントは悪者の海賊となった。妹とルカリオは俺やピカチュウを助け、道を切り開く意味で物語で活躍していくらしい。アイリスが少し疑問に思い、デントに向かって声を

かけた。

「…デントが悪役なの？」

「ははは…分かってないね。冒険では、悪役がポイントなんだよ！つまり——」

デントは冒険の物語ではヒーローやヒロインを引き立てるために必要な存在だという話をかなりいろいろ話してくれた。声をかけたアイリスは微妙そうな表情でそれを聞いており、俺たちは苦笑した。まあタケシのあれと似たようなものだし気にしない気にしない…。

「じゃあ、ロケ地に移動しよう!!」

『ツルツゴオ!!』

ルークとゴルグが荷物を持ちながら話しかけたため、俺たちも慌てて持つていくものを手に取り、ルークの後を追いかける。ルークは早く撮影がしたいのか、少しだけ早足になっていたけど、俺たちはすぐに追いつくことができた。そして最初のロケ地として選んだのは公園にある船のような遊び場。船を使って海賊だというアピールにもなるため良いと思ったみたいだ。こうして、撮影が開始された。

「やめろ、海賊デント!! ユリア姫を返すんだ!!」

「そ、そそそうだ…かか返しなさい」

「カーツト! 緊張しすぎだよヒナちゃん。リラックスリラックス!」

「うう…ごめんなさい」

『カゲカゲ!』

『慌てるな、落ち着いて台詞を言えば大丈夫だ』

「ヒナちゃん。演じることに命をかけるヒロインを熱く描いた名作。《デスマスの仮面》を見ていないのかい?」

「え? いや見てないけど…」

「ならば見た方がいい!! 皆を感動させる演技は、その役になりきれないといけない! 決して役になりきれればあ緊張なんてするわけがないんだからっ!!!」

「わ、分かった…」

「…デント……デスマスの仮面って映画を見る時間なんてないと思うぜ…」

『ピイカ…』

「ハハハ……まあ要するに、思いつきりやれっことだろうね」

「思いつきり…わかった」

『カゲ』

デントが張り切って緊張している妹に話しかけ、演技のコツについて教えている。これってあれだよな、映画ソムリエとして張り切っていると云った方がいいんだよな…。

俺たちはその言葉と大げさな動作に苦笑しかなかった。

そして再開された撮影では、何とか妹がちゃんと台詞を言つてそのシーンを撮れた。デントは完璧に悪役として演技していてもとても凄まじい。そして他の撮影でも皆が緊張せずに撮ることができた。

途中でキバゴの戦闘シーンでいろいろとトラブルもあつたけれど、まあ難なく撮影されたと思う。

そして映画は成功し、観客たちも皆が大盛況していたと思う。

.....

その後、ドンバトルという大会がライモンシティの近くにあるライモンタウンで開かれるということ、ルークもそのバトル大会に出るといことが分かり、俺たちもそのバトルに向けてまずライモンタウンに向かうことになった。

だが――。

「そうだ！サトシ、ライモンタウンのドンバトルに出る前にアイントオークという町に行ったらどうかかな？」

「アイントオーク？」

『ピイカ？』

「え、でもドンバトルはすぐ始まるんじゃないの？」

『キバキバ？』

「いや、ドンバトルはまだまだ先なんだ。今から行つたとしても開かれていないはずだよ？俺はこれから撮影に必要な作業をやるから一緒に行けないけど、アイントオークでもバトル大会らしきものが開かれるみたいだし、ライモンタウンの近くだからその大会の後に来れば間に合うよ」

「…なるほどな。面白そうだ！よし行こうぜ、アイントオークへ!!」

『ピカピッカ!!』

俺たちはライモンタウンではなく、まず先にルークが説明してくれた、アイントオークへ行くことになった。アイントオークのバトル大会の後、ライモンタウンでのドンバトルと大会が多くあることに本当に楽しみだ。早く行こうと急かしつつ、目的地へと向かう。

「……………ここでこの話になっちゃうんだ」

『カゲ?』

「…なんでもないよヒトカゲ。行こう」

『カゲカ!!』

第八十七話　く兄と英雄ゼクロムく

こんにちは兄のサトシです。アイントオークに行くために歩いている途中です。遠くですが町が見えてきたのでそろそろだと思えます。バトルが早くしたいです。

『——シジイッ!!!』

「…ん？おいあれって」

『ピカピカ…?』

何やらポケモンの鳴き声をしたような気がして周りを見渡す。そして見つけたのは崖から落ちそうになっているシキジカと、落ちそうになったシキジカを助けようとしている仲間のシキジカ。

「どうしてあんなところにいるの？このままだと…！」

『キバキ!!』

「これは何とかしないとだね!!」

「私、行ってくる!!」

『カゲカゲ!!』

『いや待てヒナにヒトカゲ。お前たちだと危険だ、ここは俺が行こう——』

「いや俺が行くよ！ルカリオは皆のことを頼んだぜ！」

『ピツカツチュ!!』

「ちよっ!?!サトシ!!」

『キバ!!』

この崖ならば俺でも行けるはずだと思い、走ってシキジカたちまで行く。そしてギリギリのところまでシキジカが落ちそうになったが、何とか助けることができた。

「へ？うわっ!?!」

『ピイカ!?』

『シキイイ!!』

「お兄ちゃん!!」

『カゲカゲ!!』

「危ないサトシ!」

「ダメだアイリス!!」

片足の岩場が崩れ、落ちそうになったところを何とか頑張つて踏ん張るが、足元の岩場がすべて崩れてしまい落ちそうになる。…でもその時に何か力が流れ込んできたよな?とつさにジャンプしてもいつもとは大幅に高く飛び上がってしまい、崖の向こう側にある洞窟まで飛ぶことができた。…何だったんだ今のは。

妹たちの方を見ると、デントが必死に皆を止めようとしているのが見えた。おそらく俺たちが落ちそうになっていたので助けようと動き、それに気づいたデントが皆まで落ちたらどうする!?!と考えて止めていたのだろう。

そして俺たちが無事なことに気づき、安堵のため息をついた。

『ツおい怪我は!?!』

「だ、大丈夫…俺たちはこっちから行くよ」

『ピカ…』

「分かったわ…気を付けてよサトシ！」

『キバキバ!!』

「危ない目に遭ったら逃げるんだよ！」

「分かっている！後で会おうぜ!!」

『ピカ!』

俺はそのまま洞窟の中へと入り、出入り口を探す。シキジカも俺たちの後ろを歩き、出入り口まで一緒にいるようだ。

この洞窟には風が来ているからおそらく出口となる場所があるはずなんだけど…暗くておまけに分かれ道が多くあつて探すのに大変そうだ。

『ティニー!』

「へ…?…」

何かポケモンの鳴き声かと思ったら、この洞窟の出入り口までの道が突然頭の中で流れ込んできた。今ならばどこに行けばいいのか、どの道を通れば出られるのかわかる…どういうことだ？

周りを見ても何も無い…それに音も何も聞こえない。
『ピカピ?』

「あ…ああピカチュウ…：なんでも無い。行こう」
『ピカ』

ピカチュウが立ち止まって周りを気にする俺を心配し、肩に乗って大丈夫か聞いてきた。俺は周りを警戒するのをやめてピカチュウに微笑み、頭を撫でる。

とにかく、危害を加えるわけではないようだから気にしないで出口まで歩こうと思
い、行動を開始した。

.....

出口に出ると、そこは何やら屋内の中のようなようだった。ベランダのような場所に出ると、かなり高いところまで歩いて来たらしく、絶景だ。ピカチュウとシキジカが喜んだような声を出す。そしてふと遠くを見ると、走ってきている妹たちの姿が見えて、俺は手を振ってここにいと叫んだ。

俺たちの無事な姿にようやく安心したのか、微笑みながら走ってこちらまでやってき

た。

——合流した俺たちは、シキジカたちと別れてからデントにこの城についての話を聞いた。

大地の剣と呼ばれているということや遠くの谷の方から空を飛んできてこの場所に突き刺さったということ…かなり詳しく教えてくれて俺たちは興味を持ってデントの話を聞く。そして果樹園の話に移り、下の方に見えている美味しそうなきのみを見ててなんだかお腹が空いてきたと感^じじてしまった。

『…サトシ、これを食べろ』

「マカロン!!?!?!ルカリオ、食べてもいいのか!?!」

『ピイカ!?!』

『ああ、そのために作ったからな』

「もちろん、僕とルカリオで作り上げたお菓子は絶品だよ!」

「大丈夫!知ってるわよ。私とキバゴにもちようだい!」

『キバキバ!』

「あ、私とヒトカゲにも!!」

『カゲカゲ!!』

ルカリオが手に持っている箱の中にマカロンがたくさん入っていて、俺たちは目を輝

かせてそのお菓子に飛びつく。ルカリオとデントは苦笑しながらもマカロンをくれた。
…ああ、やっぱり美味しい。

そしてマカロンを食べながら城の中に入り、大会の受付会場まで向かって行く。

「…つてあれ？」

「どうしたのサトシ？」

『キバキ？』

「……いや、なんでもない」

「そう……？」

『キバア……？』

手に持っていたはずのマカロンが消えてしまい、俺は周りを警戒する。でもこんな奇妙なことは先ほど洞窟でも起きたからもしかしたらさっきのポケモンが俺たちの後を追っているのかと思っってしまった。

俺はルカリオの近くまで行き、話しかける。

「なあルカリオ……ここに何か身体を消して俺たちの後を追っている奴っているか？」

『………気にするな。あれは危害を加えようとするポケモンじゃない』

「ということは、やっぱりポケモンの仕事ってことか……」

『ああ。だが敵意というものを感じない…ただの悪戯だろうな』

「なるほどな。分かったありがとう」

『いや、何かあればまた伝える』

「おう」

ルカリオはもうとつくに何かがいることに気づいていたらしい。でも危害を加えないでただついて来ているというだけらしいから気にしないで行こうと思う。これで危害を加えたり仲間たちを傷つけたりしたらいろいろと制裁すればいいしな。

その後、花火の音が聞こえてそろそろ大会が始まるのだということを知り、慌てて走っている途中でドレットさんに会い、バトルの受付までの近道を案内してくれた。

そしてようやくバトルが始まる――。

…やっぱり様子がおかしいような気がする。ポカブのかえんほうしゃのようなひのこやズルツグの強靱なずつきをバトルをしている最中で起きていくことに俺は首を傾けた。もちろんバトルに勝利したポカブやズルツグを褒めるのだけれど、でも急にそんないつも以上よりも力強い技が出るだなんて…そういえば、俺もあの崖の時に大きくジャンプできたからもしかして後を追っているポケモンがやらかしたのか？俺はそう疑問に思い、ルカリオの方を見る。ルカリオは俺の言いたいことが分かったらしく、小

さく頷いてくれた。

やはりずっと俺たちの後を追っているポケモンがいるようだ。いったい何なのだろうと思っていたら、カリータという少女が教えてくれた。力を与えてくれたのはビクティニと呼ばれているポケモンだということ…。

これで色々と納得ができた。なるほど、ビクティニなら絶対にできることだと思い、俺はビクティニに向かって声をかける。するとビクティニが声を出してくれた。そしてマカロンを出してビクティニにあげようとすると姿を現してくれた。

…でもビクティニはここから外に出られないということが分かった。なにやら結界のようなものがあつてビクティニが外にでた俺たちのもとまで行けず、悲しい顔をして離れて行ってしまった。俺たちはその後を追いかけるために、ビクティニがいるであろう場所を探し回った…そしてビクティニがいる場所でちゃんと謝って仲直りをしたからよかったと思う。

…でもなんでビクティニだけがいけないのだろうか…あの結界は一体何なんだ？

「なあヒナ…さっきのつて一体…」

「…すぐにわかることだよ。昔々のお話だからね」

「昔々のお話…？」

妹に聞いてみたんだが、苦笑をされて後ですぐにわかると言われてしまった。でも昔々って一体何なんだろう。そう思っていたが、村長が本を取り出して昔の言い伝えを教えてくれた。そしてビクティニがこの場所に取り残されているわけを知ることもできた。

「ビクティニ…」

『ピイカ…』

.....

———まあそれから、いろいろあった。護りの柱が突然動きだし、城に集まってきたり、ドレットさんが大地の民のためにいろいろと動いていたということ。俺たちは知ってしまった。

大地の民のためにやるということはわかる。そして城をもとの場所に戻し、故郷を復活させようとする気持ちもわかる。けれどそれでビクティニを犠牲にするのは話が違うだろう…！

それに知ってしまった。ビクティニの過去に起きた出来事を。この城を動かしては

いけないという真実を…。

だから、止めないといけない。

「行こう、ゼクロム…」

——全部を、終わらせに。

第八十八話　妹と英雄レシラム

こんにちはは妹のヒナです。アイントオークに向かって歩いてる途中です。ですが途中で兄が崖にいるシキジカを助けようとしたり、近くで隠れていたビクティニの力を借りて何とか遠くの方にある洞窟に着地できたみたいです。こちら辺は原作と一緒にのかな？

でもどうしようか悩む。これを兄に伝えた方がいいのかわからない。

でもちゃんとビクティニは無事に生きているし、騒動を止められるのは原作で見たことがあったから、何もなくても大丈夫だと思う…でもこの後起きるであろう悲劇を私はどう見ていけばいい？どう行動すればいい？

私も兄のようにポケモンを救うための行動をしていけばいいのだろうか…その方がビクティニを救えるだろうか……？

「どうしたのヒナちゃん？」

『キバキバ？』

『カゲ？』

「え、あ…うん…：…なんでもない」

「もしかしてサトシのことが心配かい？」

「うんまあそんなところかな…」

『カゲエ…』

『安心しろ。あのサトシなら無事に合流できるはずだ』

「うんそうだねルカリオ。お兄ちゃんなら大丈夫だよね」

『カゲ！』

兄と合流するために急いで向かう途中、皆に心配されてしまった。考えすぎちゃったかと思いちよつと反省する。ビクティニは大丈夫。兄がなんとかしてくれるはずだとそう考えて、ただ走り続けた――。

「おーい！お前ら！俺たちはここにいますぞ！」

『ピカピイカ!!!』

「人が心配してたのに……」

「まあなんにしても、よかったじゃない」

『キバア』

『城の洞窟だったのか……』

「あはは……お兄ちゃんつてば……」

『カゲカゲエ……』

兄が私たちよりも高いところからこちらを見て手を振り、早く来いと言ってくる。私たちは無事に洞窟から出られたこと、兄が無事だったことに安堵した。

その後、シキジカと別れてからデントの話聞いてこの城の昔の言い伝えを知る。まあまだその言い伝えにはいろいろと真実が隠されているんだけどね……でも言わなくても大丈夫か。

そしてお腹が空いたと言ったらルカリオがマカロンを取り出してくれた。デントと一緒に作ったらしく凄く美味しい。

「ありがとうルカリオにデント！」

『カゲカゲ!!』

「どういたしまして！」

『…急いで食べるな。喉に詰まるぞ』

「はーい！」

『カゲ！』

ルカリオはいつもの通りお母さんだ。そして私たちはその後城の中を通過して大会への道を探す。兄はマカロンを食べながら歩いているみたいだ。そして確信した、ピクティニが近くにいるということ。だって兄の手にしていたマカロンを持ってしまったのだから。兄は手に持っていたマカロンがないことに気づき、首を傾けている。

「…ってあれ？」

「どうしたのサトシ？」

『キバキ？』

「……いや、なんでもない」

「そう……？」

『キバア……？』

「……………」

アイリスとキバゴは兄の声に反応して何かあったのかと聞く。けれど兄が何でもな
いと言つて微笑み、誤魔化してまた歩き始めた。でも周りに何かいるのではないかと警
戒しているようだ。でもビクティニは姿を消すから見えないので警戒しても意味がな
いと思う。それに敵意とかなないから大丈夫だし。

兄は念のためにルカリオに聞くことにしたらしい。ルカリオは波動を使えるから身
体を消してるポケモンがいたとしてもすぐにわかる。でもルカリオはポケモンがいる
ということは分かっていたみたいだが、敵意などがないと感じとり、放つておくこと
にしてみた。兄もそれに領いて前を見て歩き出す。：おそらくビクティニが私たち
に危害を加えたら行動すればいいか思つてるのかなとちよつと苦笑してしまった。

その後ドレットさんに会い、大会までの近道を教えてくれた。そして見えてきたのが
今まさに果樹園の収穫祭を行っている光景。私たちが走つていくと、近くを通つていく
大きなゴルーフの姿が見えてきてテンションが上がった。あんなに大きいゴルーフは
始めて見たからだ。そしてそのゴルーフがいるお店は何だろうと思ひ、私たちはその店
まで走つて向かう。すると店にはビクティニのいろんな品物を売っていた。

そしてお店を開いているジャンタさんからビクティニのこと、城を守つてくれている
ということを教えてくれた。

「これーつくください!」

『キバ!』

「あ、私もーつくください!」

『カゲツ!』

「はいよ!あなたたちにも、ビクティニのパワーがつきますように……!」

ビクティニの小さなキーホルダーを買い、私は自分の持つているリュックにつけてみた。ヒトカゲがそれを見て喜んでるし、買ってよかった。このビクティニのキーホルダーはパワーなどはつかないけれど、おそらくここでしか買えないものだと思ったから記念に買ったのだ。

…え、お金? お金は兄から貰ったおこづかいで買いました。この旅の中時々贅沢をしたいから兄にバトルで出た賞金をちよつとだけでもらつて買ってます。兄も私にお金を渡すのは嫌ではないようで、何も言わずに渡してくれます。でもいつか兄にもらつたお金はちゃんと返すからね!

「ヒトカゲ、どうかね?」

『カゲカゲ!!』

——その後、大会の受付まで行ってバトルの申し込みをする。…すると私を見た大会の係りの人がにつこりと笑って口を開く。

「君は出ないのかい？」

「うえ!?わ、私はまだトレーナーじゃないから…」

『カゲカゲ…』

「そうかい…じゃあトレーナーになったら、またこの収穫祭で申し込んでね」

「わ、分かりました…!」

『カゲ!!』

「じゃあその時は俺たちもまた一緒に行こうぜ!」

『ピカチュ!』

「あ、私も私も!!」

『キバ!』

『俺も一緒に行こう。お前たちだけだとヒナとヒトカゲが危険だ』

「…君たち、僕のことを忘れないでくれよ?もちろん僕も一緒さ!!」

「あはは…」

『カゲカゲ…』

私の年齢でもトレナーはいるらしく、係りの人も私とヒトカゲを見て申し込まないのか聞いてきたけど、私はバトルできないから首を横に振って断った。するとトレナーになれる年齢になったらこの収穫祭に来てよと誘われてその時が来るのをちよつと楽しみにまつてしまった。

そうしたら兄たちがその時は一緒に行こうと言ってきたため苦笑する。私がトレナーになった時、イツシユ地方に行く時はまた同じような旅になっちゃうのかなと想像してしまった。

.....

その後、まあいろいろありました。バトルしている最中に兄のポカブとズルツグがビクティニの力を借りて強くなり勝利していたこと、兄がそれを疑問に思つて首を傾けていることやカーリータさんが兄たちにそのビクティニが実際に本物が近くにいるということ。そして兄がビクティニを呼び、マカロンで姿を見せてくれた。

「お前が力を貸してくれたのか？」

『ティニー！』

「そうだったのか…ありがとうビクティニー！」

『ティニーティニー!!』

兄は助けてくれたビクティニーに礼を言つてマカロンをもつと食べろと勧めている。それにビクティニーは喜び、くるつと一回転して兄に頬擦りをしている。

そしてその後外に出ようとしてしまったんだけど、私が止める前にもうビクティニーは結界に阻まれ悲しみでどこかへ飛んで行つてしまった。

「ビクティニーに会つて謝らないと…！」

『ピイカツチュー!』

兄は自分がやってしまったことを悔やみ、ビクティニーが行きそうな場所を聞いてから走つて行く。私たちもその後を追つて走り、そして見えてきたのは笑顔のビクティニーと遊んでいる兄とピカチュウの姿。もう仲直りしたのかと驚いてしまったけど、まあ兄だからできることかと納得した。

その時にあの結界は一体何だったのか聞かれたけど…でもそれはあとで分かる話だと言つておいた。でもちやんと言つた方が良かったかな。この言い伝えに隠された本当の真実を…。

——その後、モーモントさんからこの城に伝わる昔の話を聞いた。そして城の護りの柱のせいでビクティニがここから外に出れないということ、レシラムとゼクロムのことを知った。

そして兄はビクティニに海を見せたいと考えているようだった。ビクティニも海が見たいらしく、兄の言葉に喜んでいた。

.....

——その後、まあいろいろありました。いきなり護りの柱が宙に浮いてしまえば、ビクティニがそれを恐れて城の中心まで行ってしまったこと、城が浮かび、故郷へ戻るために行こうとしていること。

そして兄はビクティニを犠牲に城を動かそうとしているドレットさんのことを怒っているようだ。

私もその気持ちはわかる。この後起きる真実がもしも嘘だったら、このままドレットさんは故郷へと戻ろうとしていたはずなのだから。そしてビクティニを犠牲にしても

かまわないという気持ちで行こうとしていたはずだった。

龍脈が暴走しなければ、レシラムもドレットさんの従うがまま、ビクティニを犠牲に動いていただろう。だからそれに怒り止めようとする兄の気持ちはよく分かる。

でも今回は少しだけ違う。ドレットさんは故郷のみんなのために行って、欲のために動いているわけではない。だから兄も怒ってはいるけれど、激怒してドレットさんを敵として見て行動しているわけではない。ただ止めようとしているだけだ。だからゼクロムが力を貸してくれた。

「ゼクロム……！」

『カゲツ!?!』

「サトシ！」

「ゼクロムに会えたのね!!」

『キバキ!!』

私たちはモーモントさんのヘリコプターに乗せてもらって空からその様子を見ていた。ゼクロムにのってレシラムを止めようとしている兄の姿を。そしてゼクロムに驚くドレットさんの姿を。

私たちはレシラムがゼクロムの攻撃を受けて地上に落ちた様子を見てから、城へと向

かう。そしてドレットはようやく気づいてくれた。みんなの話を聞いて、そしてゼクロムとレシラムの攻撃のおかげで雲が消え、地上を見たことによつて間違いに気づいてくれた。兄はその事実にため息をついて怒りを鎮める。私はリュックからオレンのみをだしてビクティニに食べてもらう。この後もしものことがあつたらいけないから、オレンのみでできるだけ回復してほしいからだ。

「ビクティニ、食べれる？」

『カゲ！』

「ほらビクティニ。オレンのみ食べれば元気が出るぞ」

『ピッカ！』

『ティ…ティニ』

そしてビクティニがオレンのみを食べている間に、ドレットさんにゼクロムとレシラムが大地の怒りを鎮めるのだということ、この城の剣を使えということを教えてくれた行動することになった。

「そうか…！大地の剣で、もう一度龍脈を抑え込むんだ！…レシラム、ゼクロム。力を貸してくれ!!」

ゼクロム達が力を貸して城を戻そうと行動しているのだけれど、ビクティニの力を

失った城はどんどん急降下していき、龍脈の近くまで落ちていく。そして力が城を襲い、ビクティニの結界となつている護りの剣がどんどん近づいてきて暴走していることが分かった。でもビクティニは結界のせい以外に出られない。このままではいけないと兄とピカチュウ、ドレツトさんが残ると言ってきた。

モーモントさんの操縦するヘリコプターに乗りながらも無事かどうか祈る…できればこのまま原作のようにもどに戻ってほしいと思ひながら、何もかも平和に戻ってほしいと思ひながらも――。

『それがお前の真実か？』

「…え？うわっ!？」

『カゲ?!?!?』

「ヒナちゃん!!!ヒトカゲ!!!」

『クツ…ヒナ!!ヒトカゲ!!!』

「あ、駄目だルカリオ!!君まで落ちたら?!?!?」

『だがッ!!!』

突風が吹き荒れ、ヘリコプターに襲いかかる。そして私とヒトカゲはその風のせいでもヘリコプターから落ちていく。私は落ちながらもヒトカゲを掴んで離さず、抱きしめて目を閉じる。ヒトカゲも私のことを抱きしめてこの後起きるであろう衝撃に震えていく。このまま落ちていくのか…私とヒトカゲは何もできずに、何も助けられずに…。

『——お前も、英雄としての器があるようだ…』

「痛ッ!?!…あれ、レシラム?」

『カゲ!?!』

落ちていく私たちをレシラムが助けてくれた。背中に私たちを乗せて空を飛んでいる。周りを見ているとヘリコプターに乗っているルカリオとデント、サザンドラに乗っているアイリスがこちらを見て無事な様子に安堵していた。そしてレシラムが背に乗っている私を見て話しかけてきた。

『お前のやるべきことは、真実とは何だ?』

「私の、やるべきこと…」

『カゲ…?』

おそらくレシラムは私を試しているのだろう。私の知っている真実を感じとり、そしてその真実にどう突き進むのか聞きたいのだろう。私は考えるまでもなく、決心した。このまま何もしないというのも嫌だ。ビクティニを、兄を何とか助けていきたいと…!

「城に戻りたい！お兄ちゃんたちを助けないと!!」

『カゲカゲ!!』

「ヒトカゲも協力してくれるの？」

『カゲ!!』

「ありがとう!!…レシラム、私たちを城まで戻して!!」

『…いいだろう。お前の真実、確かに受け取った』

レシラムが城まで飛んで私たちを降ろしてくれた。城にはドレットさんの姿がなく、護りの剣が暴走し少しずつ範囲が狭まっているのが分かった。

そして、兄とピカチュウが私とヒトカゲに気づき、怒ったような表情になってこちらに近づく。

「何でここに来た!!危ないだろうが…早く戻れ!!」

『ピカピカツチュ!!!』

「嫌！私は…私たちはビクティニを助けたいの！このままじっとしてられないよ!!」

『カゲカゲ!』

「……どういふことだ」

兄は私の言葉で原作の知識について考えたのだろう。ビクティニがもしかしたらこのまま消えてしまうのではないかと誤解してしまい、眉間に皺を寄せて私に問いかけてきた。私はとっさに首を横に振って兄に原作は大丈夫だということを教える。でもそのせいでだったら戻れ！と言われてしまった。でも私は戻りたくない。

「このまま……ここにいても皆が傷つくだけ……だったら私は私のやるべきことをするだけよー」

『カゲ!!』

「ヒナ、ヒトカゲ……分かった。でももしもお前たちが怪我をするようなことになったらすぐにゼクロム達に頼んで地上に戻すからな」

『ピカ!』

兄とピカチュウは仕方ないといった表情で私たちを見た。私とヒトカゲはお互いになつこりと笑って気を引き締める。この後護りの剣が暴走し、私たちを閉じ込めてしまふはず。その前にビクティニを元気にしなければならぬ。

「ビクティニ。ほらきのみだよ！元氣出して……大丈夫だからね！」

『カゲ!』

「ビクティニ、元氣出せよ…俺たちがなんとかしてやるからな!」

『ピツカツチュ!!』

『ティニ…』

ビクティニは少しずつだけでも元氣を取り戻し、私たちに向かって笑みを浮かべるぐら
いに回復してきたようだ。これなら大丈夫かな――。

「うわっ!?!」

『カゲツ!?!』

「ヒナ、ヒトカゲ!!」

『ピカチュ!?!』

護りの劍が狭まり、私たちに向かって近づいてきた。私とヒトカゲは微妙に兄たちか
ら遠かったためか、護りの劍に押され、潰されそうになる。とつさに兄が助けてくれた
からよかったけど、危なかった…。

「大丈夫かヒナ！ヒトカゲ！」

『ピカピカ!?!』

「だ、だいじょーぶ…」

『カゲエ…』

ちよつとだけ空元気で私とヒトカゲが笑うのだけれど、兄とピカチュウはそれに険しい表情で見つめていた。でも怪我もなく無事だと分かり私たちを抱きしめてくれた。かなり強く抱きしめられてちよつと苦しい。でもピカチュウも私たちの頭を強く撫でてくれて、兄に抱きしめられて少し安心した。

「いいか。もう俺たちから離れるなよ！」

『ピカツチュ!!』

「うん…分かってる。でもこのままだとどんどん宇宙まで行っちゃうよ…ヒトカゲ！ひこので周りを温かくして！」

『カゲツ!!!』

寒くなつていく周りに私たちの身体が凍つていくのを感じ、ヒトカゲにひのこで温かくしてもらおう。そしてビクティニを励まして何とかしてもらわないといけない。さすがの兄でもこの状況はどうにもできないはずだから…ビクティニに何とか頑張ってもらわないと…！

「ビクティニ！お願い…あなたの力が必要なのに！」

『カゲ…』

「ビクティニ…俺たちにできることは何でもやる…一緒に海まで行くつて約束しただろ？だから絶対にここから抜け出そう！」

『ピツカツチュ!!』

『ティニ…ティニー…!!!』

ビクティニが私たちの声を聞いて、力が出てきたようだ。ビクティニの身体が炎で溢れ、私たちの周りを飛んでから結界に向かって突撃する。

私と兄はお互いに顔を見てから頷き、口を開く。

「ピカチュウ、10まんボルト!!」

「ヒトカゲ、ひのこ!!」

『ピツカツチュウウウウ!!!』

『カゲカゲエエエエ!!!』

『ティーンイイイイ!!!』

.....

——その後、私たちは何とか護りの剣を吹き飛ばすことに成功して、ビクティニも原作とは違って姿を見せたまま私たちの周りを飛び回っている。そして城を元に戻すため、ドレットさんたちが城に降りてきて行動を開始した。もちろんレシラムとゼクロムも一緒に協力して城をもとに戻していく。

ビクティニも協力して一緒になって城を戻してくれて、無事に暴走していた龍脈が静まり、何とか元通りに戻ってくれた。よかったよかった…。

『ティニ!!』

「ビクティニ、約束通り海に着いたぜ！」

『ピカツチュー!』

『ティニ!!!』

兄たちが海を見て感激しているビクティニと遊んでいる。デントがマカロンを取り出して、ルカリオが皆に配っている。そしてピカチュウやキバゴ、ヒトカゲが自分の持っていたマカロンをビクティニに与えて食べてもらっているのが見えた。私はそれらの光景を見ながらも、ため息をつく。

…私が事前に言っていれば、こんな悲劇は起きなかったんだということを。最初に言っておけばこんなことにはならなかったし、ビクティニも傷つくことなんてなかったはずだと思う。あとからどんな後悔の気持ちが高まっていくのを感じた。

「ヒナ。あまり気にするなよ」

「…え？」

「お前、今凄く後悔してるんだろ？俺の妹なんだからわかるよ」

「…そんなにわかりやすい？」

「ああ、先に原作の話をした方がよかつたって思ってるんだろ？でも、ヒナは俺たちを助けようとして動いてくれた。ビクティニを元気にしようときのみをくれた…それだけで十分だと思っただけだ？」

「でもお兄ちゃん。私が原作の知識を早く言っておけば、ビクティニは傷つくこともなかったかもしれないのに…」

「知識を喋っただけで、自分の望み通りになるとは限らないだろ？大切なのはヒナがどう行動して、どう助けていくかだよ」

「どう、行動して…どう助けていくか…」

「やらない後悔より、やる後悔だ。俺はいつもそうやって行動してるからな。ヒナ、まだまあ前は幼いんだから、お前ができることだけでいいから…今は後悔せずに突き進め」

「…分かった。ありがとうお兄ちゃん！」

やらない後悔よりやる後悔…つまり兄は私に原作の知識を話すよりもどう行動していくのかを考えると言いたいのだろう。そして無茶をせず自分でできることだけをやってくれと言いたいのだということが分かって、私は兄に向かって微笑んだ。

「よし皆！一緒にあそこまで競走するよー!!」

『ティニ!』

『カゲカゲ!!』

『ピツカツチュ!!』

『キバキバ!!』

「…これで、一件落着だな」

第八十九話　妹は兄たちの再会を見る

こんにちは妹のヒナです。兄がゾロアとゾロアークに出会いました…え？突然すぎるって？私にもわかりませんよ。ライモンタウンに向かうため森の中を歩いていたら急にゾロアが飛び出てきて兄の顔に飛びついたのでから。それを見た私たちが慌てていると、次にゾロアークがやってきて兄に近づいていくのが分かった。

——あれ、もしかしてこのゾロアとゾロアークってまさか…。

「久しぶりだなゾロアにゾロアーク！元気にしてたか!？」

『ピカピカ!!』

『久しぶりなんだぞサトシ!』

『グアアアウ!』

「ええええ喋った!?!…つてまあルカリオも喋るし驚くようなことじゃない…よね?」

『…俺に聞くな』

「ははは…サトシ、知り合いかい?」

『お前たち誰だ?サトシ!ヒカリとタケシがいないぞ?』

「ああ、ヒカリもタケシもそれぞれ自分の夢に向かって旅に出たよ…紹介するぜゾロアにゾロアーク…俺の妹と仲間たちを!」

はいこれで確定です。シンオウ地方の映画だったゾロアとゾロアークでした。つてこのイツシュ地方が故郷だったの!?

アイリスは一緒にいるルカリオが喋っているのに慣れていたため、これは驚くようなことなのか分からなくなっているようだ。それにキバゴも首を傾けて疑問に思っているみたいだし。ルカリオはどう言おうか迷い、結局は聞くなと言つて説明するのをやめた。まあ兄と一緒にいる時点で常識とか何か吹っ飛んでいくからね…仕方ないね。

でもなんでここにいるのだろうか?ここが故郷なのだろうか?でも映画で見たときゾロアークが見せてくれた幻影とは違うような…?

のかを話してくれた。

その後、お互いに自己紹介をして、どうしてここで出会った

まだ故郷にたどり着いていないことや、途中で兄の声がして走ってきたということや、そして何故かゾロアがイリユージョンで私に化けていて、ヒトカゲやキバゴを驚かせたりもしていた。でも尻尾が見えちやつてるし：まあいいか。

ヒトカゲが私に化けているゾロアの尻尾を掴んで変身を解いていたし、その後ヒトカゲに化けて追いかけてっことを始めている。まあ楽しそうでいいんじゃないかな？ 兄は話を聞いて納得したような表情を浮かべていた。

「じゃあまだ遠いんだ？」

『そうだぞ！おいらたちの故郷はまだまだ先だぞ！』

『カゲエ…』

『ピイカツチュ…』

『グオオウ』

「おう！俺たちまだイツシュ地方を旅しているから、近くまで来たらお前たちの故郷に遊びに行くよ！」

『ピツカツチュ！』

「あ、私たちも行っている？」

『キバキバ？』

『遊びに行ったら何か料理をご馳走しよう』

「ルカリオの作る料理って美味いんだぜ！」

『ピイカ！』

「お兄ちゃんにピカチュウ……」

『カゲエ……』

『グオオ！』

『おいらもママも大歓迎だぞ!!』

「うーん……ゾロアとゾロアークの故郷に行けるなんて……なんてグツトテイストなんだ

!!」

「ははは……でもその時が楽しみだね！ 私たち絶対に遊びに行くからね！」

『カゲ!!』

——— 兄にとってはちょっとした再会だったけれど、また絶対に遊びに行くと言って約束した。このまま一緒に故郷まで歩いて行ってもいいのだけれど、ドンバトルという大会をライモンタウンで行うということやルークと約束していることから、一緒

に行けないといって残念そうだった。でも私たちはゾロア達と別れ、また会うと約束してそのまま旅立った。

こんなちよつとした出会いも良いものだよね。

「お兄ちゃん、絶対にゾロア達の故郷まで行こうね！」

『カゲ！』

「そうだな！その時が楽しみだ!!」

『ピツカツチュ!!』

第九十話　妹はドンバトルの大騒動に苦笑する

こんにちは妹のヒナです。ついにライモンタウンへやってきましたよ。そして無事にルークに再会することができて、一緒にドンバトルの受付会場まで向かいます――

「よし、ジム戦前の腕試しだ…頑張ろうぜピカチュウ！」

『ピッカッチュウ!!』

「…あら？サトシ君に皆さん。お久しぶりですね」

兄が何やらドンバトルにやる気十分な声を上げている時に、いきなり後ろから聞いたことある声が聞こえてきて後ろを振り向いた。するとにこやかな笑みでこちらに近づいてくるベルの姿があった。…あ、そういえばドンバトルって全員集まっていたような気がする

る…だ、大丈夫かな？主に兄の所行のせいで…あ、でもアイリスのやったこともあったか。

私たちはベルに近づいて口を開いた。

「久しぶりだなベル！」

『ピカピカ！』

「ベル、ライモントウンに何しに来たの？」

『カゲ？』

「私はドンバトルに出場するためにこのライモントウンに来たのですわ…ですが、申込みまで間に合うかどうか心が心配で…」

「それなら大丈夫だよ！僕たちもそのドンバトルに向かう途中だからね！」

「ベルも一緒に行きましょうよ！」

『キバキ！』

「まあ本当？ありがとう皆さん！あ、あなたに会うのは初めてよね。私はベルと言います。よろしくね」

「よ、よろしく。俺はルーク」

『グアウ…』

ベルが爽やかに私たちと一緒に行くこと、ルークとの自己紹介をするということをやっていた。けれど本当にキヤラ違うよね。何というか兄に突進しないというのもそうなんだけど、天然じゃなくなったというか…自分勝手じゃなくなったというか…。「ねえルカリオ…これからどうなると思う?」

『カゲ?』

『…さあな。まあ騒がしくなることは確かそうだ』

——ルカリオの言うとおり、かなり騒がしくなりそうな予感がしてきた。

ドンバトルの大会に申し込むために参加用紙を書いていた途中でカベルネに会ったんだけど…うん。

「ひ、久しぶり…サトシ…」

「あれ?カベルネじゃないか。久しぶりだな!」

『ピイカツチュ!!』

「う、う…うん…そうね…」

カベルネの性格が臆病になってました…ものすごい怯えようです。でも兄に挨拶しないと説教されると思っているのか、かなり勇気を出して挨拶していると分かり、兄と

ルカリオを除いた私たちは苦笑した。性格が変わりすぎている…あ、いやこれは兄限定での話か。兄に挨拶した後、デントの方を見てキツと表情を変えていたからおそらくそうだろう。

「久しぶりね、デント。今度こそリベンジよ！…あ、勘違いしないでよね。私は腕試しにこのバトルに挑戦するんだから…あなたを倒すために挑戦するんじゃないのよ…分かった？」

「え、分かったけど…ははは」

「な、何笑ってんのよ！」

「…カベルネ」

『…ピイカ』

「ヒッ！…ご、ごめんなさい！！」

「いや僕は怒ってないよ…サトシも、あまり威圧しちや駄目だ」

「…了解」

カベルネがデントにのみツンデレになってました…どういうことなの？あ、でも私たちにはアイリスみたい普通に普通に接してくれているし、勝手にテイステイングタイムとかはやらないからかなり性格はよくなってるのかなと思った。そしてデントに突っ掛

かっている姿を見て兄が低い声でカベルネの名を呼び、それに怯えた悲鳴を上げたカベルネが反射でごめんなさい!と謝罪をする。随分と兄に対して恐怖感があるようだ。まあ仕方ないか…あんな目に遭ったんじやね…。でもルカリオが満足そうな表情しているのはちよつと…ルカリオも凄く兄に影響されてると分かってしまつて私とヒトカゲは遠い目をしてしまった。

そして次にやつて来たケニヤンとゼブライカに兄が輝いた目で参加するのかどうか聞いていて、そしてシママが進化したということも教えてくれた。兄たちが盛り上がっている中でアイリスの方もいろいろと騒がしくなってきたようだ…。

「あら、アイリス…何やつてるのこんなところで」

「久しぶりねラングレー。あなたもこの大会に出るの?」

『キバキ?』

「ええ…ドラゴンタイプが大会に出るって聞いてね…でもまさかアイリスが来るとなる…と…」

「ん?何?」

『キバキ?』

「べ、別に何も無い!わ、私があなを怖がるわけないでしょッ」

「ふーん?」

『キバキ?』

「う…ごめんなさい」

こつちもツンデレ…なのかな?ちよつと怖がつているみたいだけれど、アイリスを貶そうとする言葉を言わず、むしろこの大会にアイリスが出ると聞いて恐れているような感じ。しかもちゃんと謝ってるし…やっぱりキャラ崩壊激しいなと思ってしまった。しかも兄がやらかしたというわけじゃなくアイリスがやらかしたから何とも言えないなあ…まあまだこれぐらいならマシな方かな?だつて人に迷惑をかけてないみたいだし。

「ああああサトシ先輩!!!!!!」

「あれ?シューティーじゃねえか!久しぶりだな!!」

「お久しぶりですサトシ先輩!!はっ!ももももしかして…サトシ先輩もこの大会に出場するんですか!!?」

「お、おう出場するぜ。シューティーもか？」

「は、はい…感激です！サトシ先輩と同じ大会に出れるだなんて!!ああ…」

「つておいシューティー!?!」

『ピカピカ!?!』

「うわあ…凄い状況」

『カゲカゲ…』

『大会前の相応しい光景じゃないか』

「え…どう見ても酷い光景しか見えないよ…」

『カゲカゲ…』

こつちもこつちでかなり騒がしくなっていた。シューティーが兄に気づき、そのまま走って挨拶しにやっつて来たのだ。そして兄が大会に出るということを聞いて感激のあまり気絶してしまった。それに慌てた兄がピカチュウのでんきショツクでシューティーを目覚めさせようとしている光景が広がっている。…これでドンバトルって本当に大丈夫なのか凄く心配だ。

しかもその光景を見たケニヤンとルークが引いたような表情をしているし…。

——その後、兄がいろんな騒動を全部吹っ飛ばして見事に勝ち抜き、優勝していた。さすがスーパーママサラ人だと思ってしまった。

第九十一話く兄はルカリオの有能さに気がつくく

こんにちは兄のサトシです。ドンバトルでいろいろと騒がしかったのですが全部ぶっ飛ばして優勝しましたよ。ルークたちとは別れて、これからライモンシティを目指している途中です。そして今、デントとルカリオの作ったサンドイッチを食べてのんびりと休憩をしています。

『キ、キバキ!?!』

「どうしたのキバゴ!…キバゴ!?!」

『ルツグウ!』

「あれってズルズキン!?!」

「ちよつと待つてキバゴを何処に連れて行く気よ!!」

いきなりキバゴを連れ去ろうとしたズルズキンに俺たちはその後を追いかける。そして着いた小屋で閉じこもり何かを叫んでいるのが聞こえてきた。それに反応したのはルカリオとピカチュウ、ヒトカゲだが、俺たちには分からずそのまま小屋に入り込もうとする――。

『待て。このまま入るとキバゴが危険だ』

「ルカリオ!?!でもこのままじゃキバゴが…!」

『ピカピ!ピカツチュウ!!』

「…ピカチュウ。近づいたら危険ってことか?」

『ピカピカチュウ!』

『カゲカゲ!』

「ヒトカゲ…でもこのままだと危ないよ」

ピカチュウとヒトカゲが俺たちを止め、ルカリオがズルズキンの言っている言葉を聞きとって俺たちに教えてくれた…お前通訳もできるのか。ああそうかルカリオってポケモンだもんな。ズルズキンの言葉が分かって当たり前か。

『俺が行こう…隙についてズルズキンを気絶させ、キバゴを奪還する』

「な、なら私も行くわ!」

「いや待って!アイリスが行ったとしてもおそらく警戒されるだけだ。もしかしたらキ

バゴが余計に危なくなる…サトシ、ズルツグを出せるかい？」

「え…おう。出せるけど」

「ズルズキンはズルツグの進化形だ…もしかしたら隙を作れるかもしれない…」

「なるほどな！よしズルツグ出てこい！」

『ズツグウ!!』

『よし、念のためにサトシは上から様子を見ていてくれ。そして何かあれば強行…ヒナとヒトカゲは来るな』

「わ、分かった…」

『カゲエ…』

俺がズルツグを出して隙を作るようにと説明する。そしてズルツグはやる気十分のようだ。ルカリオが俺たちを見て頷き、何かあったらの対策を言う。その時に妹達が何やら協力したいというような表情を浮かべていたが、ルカリオがそれを断り、むしろ動くなど言われていた。それに妹達が落ち込んでいたが、まあこの場合は仕方ないだろうな。それにもしも何か失敗してしまったらキバゴの身に危険が迫る可能性もあるのだから何もするなというルカリオの意見が正しいと思う。

——そして始まったキバゴ奪還作戦は、ズルツグが隙をついてルカリ

オのはどうだんで吹っ飛ばし、キバゴを無事に救うことができた。

そしていきなりバトルを申し込まれたのだけれども…ルカリオの一撃を受けて倒れてしまい、今度は号泣している。…怒ったり泣いたり…こいつ何がやりたいんだ？。

『ズッグウ…ルーズウ!!!』

「な、何言ってるのよ一体…」

『キバキ…』

「イツツ・取り調べ・タイム!!!」

『どうやら自分の住処をとられてしまったようだ』

「つてルカリオ…僕の話聞いてくれよ…」

デントが暴走するかと思いきや、ルカリオが話を遮ってズルズキンの言っていることを教えてくれた。それに俺たちは苦笑しながらも納得した。キバゴを攫ったのも、住処を取り戻すための協力をしてもらったためだということ。でもまあやりすぎだと思うけどな…ちゃんと話してくれたら俺たちも協力するのに…。

アイリスは渋々ズルズキンの頼みを聞き、ルカリオが頷く。ズルツグもズルズキンのために協力したいようだ。それらを見てズルズキンがまた号泣し始めたのだが、このままここにいる必要はないと思つたらしく、妹がズルズキンに手を差し伸べて早く行こうと叫ぶ。

そして向かった先にいたのはバルジーナと呼ばれているポケモンだ。そしてこちらに近づいてきたためにバルジーナが威嚇し、ズルズキンを吹っ飛ばしてしまふ。それを見たズルツグがバルジーナに向かって攻撃し、新しく覚えたとびひざげりが炸裂して何とか倒すことができた。

……。そして次はバルジーナが号泣している……デジャブすぎんだろ

「次は何？」

『キバキバ？』

『どうやら群れから追い出され、ここにたどり着いたらしいぞ』

バルジーナは食べ物を勝手に食べたために群れから追い出されたらしい。食べ物の恨みは恐ろしいって言うけど……まあいいか。俺たちはバルジーナを群れに戻すために

動くことに決めた。そしてちゃんと食べ物を持って謝り、バルジーナを群れに戻すことができて良かったと思う。

「さて行くか…ライモンシテイへ！」
『ピツカツチュ!!』

第九十二話　妹はジム戦前にライモンシティを楽しんだ

)

こんにちは妹のヒナです。今日ついにライモンシティに到着しました。その途中でいろいろと騒動がありましたけど、兄とルカリオが全部解決させていたので問題はな
いです。

「ライモンシティと言えばジムだろ！よし行くぞ！」

『ピツカツチュ!!』

「サトシ…その前にポケモンセンターへ行きましょう…キバゴがへとへとよ…」

『キバキ…』

「あ、私も。ヒトカゲが疲れてるみたいだからまず回復しないとね」

『カゲエ…』

私たちが来た道では全然ポケモンセンターはなく、ここまで来るのにかなり険しい道だった。だからヒトカゲもキバゴも体力を回復させるぐらい疲れていて、早く行った方がいいと思うからそう兄に告げる。兄もまずはポケモンたちをちゃんと休めることだと思つたらしく、私たちの言葉に頷いてくれた。

「よおーし！僕がポケモンセンターまで案内するよ!! さあこつちだああ!!!」

「え…なんであいつあんなに張り切つてんの？」

『ピイカ?』

「妙にテンション高いわね…どうしたのかしら？」

『キバキバ?』

「ははは…」

『カゲエ?』

『どうしたヒナ?』

「いや、たぶんデントのいつものあれが出たんじやないかなって思つて…」

『……カゲ』

『…あなるほど、あれか』

もう《あれ》で通じるデントの〇〇タイム。そしておそらく今からテンションも急

上昇で上がっていくのだろうと思うと私たちはため息をついて呆れてしまう。そして急かすデントに苦笑し、私たちは歩き始めた――。

そしてその後、何故かポケモンセンターではなく地下鉄へ到着した：つてあれ？これってどっかで見たことあるような気がする。：ああ、ロケット団がいろいろと行動する話か。でもここではロケット団は暗躍してないだろうし、大丈夫だろうと思いなながらも皆と一緒に地下鉄の中へと入っていく。

地下鉄に来たのは、このライモンシティという町には地下鉄が多く存在しており、縦横無尽に走っているということ、ここからポケモンセンターまで早く行けるということらしい。

地下鉄に入っていくとかなり大きな駅みたいだ。そして目の前に地下鉄の車両が展示されていて、デントのテンションがマッハで急上昇している。これは止まらないだろうと思ひ、苦笑した。デントは展示されている車両をたくさんカメラで写真を撮っており、嬉しそうだ。

そして始まったデントのあれ。ここではメトロソムリエとしてテンションが上がっているらしい…。

「イツツ・サブウェイ・タイム!!!」

「始まつちやつた…」

『カゲエ…』

「ま、まあ聞いてみようぜ…」

『ピカツチュ…』

「もういつものことよね…気にしない気にしない…」

『キバキバ…』

『…デントのソムリエというのは一体いくつあるんだ?』

「ルカリオ…それは気にしたら駄目だよ…絶対に多いと思うから」

『カゲカゲ』

「君たち!聞いているのかい!？」

「聞いてまーす!」

『ピツカツチュ!』

「ちゃんと聞いてます!」

『キバキバ!』

「聞いてます!!」

『カゲカゲ!!』

『ああ、ちゃんと聞いている』

「ならよおし!じゃあ次にこの車両のシングルトレインについての話なんだけど――」

……うん、長い。それに話が専門的すぎて何を言っているのかさっぱり分からない。そして無駄にテンションが高い。私は兄の顔を見てどうするのか視線で問いかけるのだけれど、兄は苦笑しながらデントにそろそろ行こうぜ?と言ってくれた。でもデントの話は止まらない……。まだまだこれからが本番さ!と言われて、このままだと半日ぐらいはここにいなそうな気がしたから、私とアイリス、ヒトカゲとルカリオが兄を見てどうにかしろと視線で言う。

私としては兄ならばどうにかできると思ったから見ただけなんだけど……おそらく皆も同じような考えなのかなと一瞬思ってしまった。

そして兄が強行突破でデントを引きずってポケモンセンターに行ける車両に乗り込む。そしてデントが目を輝かせて運転席を見ている。確かに運転席から見える外の光景はとても面白いかもしれないけれど、でも窓に顔を引っ付けてまで見るものかなあ……

私は兄とルカリオの間に座り、ヒトカゲを抱きしめながらも苦笑してしまった。アイリスはそんなデントの行動がとても恥ずかしいらしい。まあその近くに座っている子供がデントを指差しておかしいと言って笑っているのだから当たり前か。でもデントを止めようとしたのに勢いは止まらず、むしろ路線についての説明をし始めた。それに興味を持ったのがルカリオ：ってルカリオ……デントみたいになつたら駄目だよ。でもちよつとだけルカリオの○○タイムって叫んでいる光景を見てみたいような気もしてきた。面白そうな気がする。

.....

その後、ようやくポケモンセンターにつくことができた。地下鉄に出る間もデントが暴走してまだここにいたいと言ってきたため、兄が強行手段に出てきて仕方なく諦めたというオチがあつたりするけどね。…え、強硬手段って何やったのかって？つまり…

「おいデント、ポケモンセンターに行くかピカチュウの電撃浴びるかどっちか選べ？」
『ピツカツチュ？』

「……わかった、行くよ。ごめん」

…ということがありました。まあつまり、兄の脅迫です…はい。でもデントが元のテ
ンションに戻ったため、ようやくポケモンセンターで休めることができる。ヒトカゲも
嬉しそうな様子だ。

「…よし、飯を食べたらすぐにジム戦…そしてバツチゲットだ!!」
『ピツカツチュ!!』

「ハハハ…まあお兄ちゃんだし大丈夫か……」
『カゲカゲ…』

第九十三話　妹は親子の絆を見た?

「こんにちは妹のヒナです。今回ようやく兄のジム戦です。ですが扉が開いておらず
どうやら留守のようです。…そういえば何かショーでもやっていたような…。」

「あら、サトシ君…それに皆さん。お久しぶりです」

「ベル! 久しぶり!」

『カゲ!』

「ベル、お前もこのジムに挑戦しにきたのか?」

『ピイカ?』

「はい。ですが今日はこのジムのジムリーダー、カミツレさんのファッションショーが
行われているようで…今からショーを見に行くんです」

「え!? ファッションショー!!?」

『キバキ!!』

「皆さんも一緒にどうですか?」

…というわけで、ベルと一緒にカミツレさんのファッションショーを見に行くことになりました。ファッションショーはかなり綺麗で、そしてさまざまな音楽に合わせて優雅に歩く姿が素敵だと思えた。カミツレさんが登場した瞬間、周りにいた観客が歓声を上げているのも納得できるぐらい凄いと思えた。

「凄いねヒトカゲ!」

『カゲ!』

「———あら?…まあ!…くらくらしちゃう!」

「…え?」

『ピイカ?』

カミツレさんは電気タイプ専門のジムだから、兄のピカチュウに反応するのは仕方ないと思う。けれどまさかファッションショーの途中でこちらに近づいてピカチュウを見るとは思わなかった。でもそのおかげで私たちがジムに挑戦してきたということ、そして自己紹介ができたからよかったと思う…でもこっちに向かってカメラとか向けな

いでほしいなどは思っちゃったけどね。こんなところで目立ちたくはないからさ…。

「あなたたちチャレンジャーなのね?分かったわ、ショーが終わったらジムで会いましょう!」

「はい!」

『ピイカ!』

「よろしくお願いします!」

「……あ、そうだ」

『カゲ?』

「ううんヒトカゲ何でもないよ…ただちよつと思い出ただけだよ」

『カゲカゲ…?』

「うん…これから騒がしくなりそうだなって…」

『カゲ!』

そういうえばこの後、ベルの父親が登場して帰らせようとする話があった気がする。…でもそれはベルがおつちよこちよいで何かトラブルに巻き込まれたらいけないという父親心から出た考えだったりする。…でもってベルのジム戦での勝敗によって決まるんだけど、負けちゃって…その後《サトシ》がその父親にバトルを申し込むと条件とし

て負けたらマサラタウンに帰るといふもの：でも今回はどうなんだろ？

ベルの性格そのものがかかなり変わっているし、この条件だと兄がいろいろと暴走するよな気がする。：まあ大丈夫なのかな？

.....

ただいまジムの前にある乗り物を見て引きつった表情を浮かべている真つ最中です。私はジェットコースターがあまり好きじゃないというか。乗り物として見ちゃうと微妙に拒否反応が出るというか。ああいや、木登りとかマサラタウンでよくやっていて、修行で木登り以外でも様々な運動を行うことが多かったから、揺れを気にせずできるぐらいだし三半規管なんかは鍛えられてるから大丈夫なだけと。：

確か原作ではかなり揺れていて、一回転したりすることもあったはずだ。そういうジェットコースターに乗るのは少し遠慮したい。：というか原作では4人乗りだったはずなのに何で6人乗りになってるの：4人乗りだったら私とルカリオ、ヒトカゲは遠慮できたはずなのに……。

「ジエ、ジェットコースター……」

『カゲ?』

『どうしたヒナ。乗らないのか?』

「ヒナちゃん? どうしたの?」

『キバキ?』

「あのさ…私だけ乗らないっていう選択肢は…?」

「え…もしかして苦手なのかい?」

皆が乗り込んでいるというのに、私だけ乗らずに苦い表情を浮かべているため、驚いているようだ。そしてヒトカゲも私の隣に立つて大丈夫かどうか心配そうな表情を浮かべている。……うん、大丈夫…大丈夫なんだけどね。

でも、いつの間にか兄が私たちの隣に立ち、私を抱き上げてからジェットコースターに乗るルカリオの隣に座らせた。そしてヒトカゲを私の膝の上のせてから言う。

「目を閉じて何も考えるな。ジェットコースターだつて思い込むな」

「りよ、了解…」

『カゲカゲ…』

『…きつかつたら言え、いやしのはどうぐらいなら行えるからな』

兄は私がジェットコースターを苦手だということは分かっているから、目を閉じていろとアドバイスをして乗り込んでしまった。確かにジェットコースターだと考えなければ、木登りで落ちたときの衝撃みたいなものだと思えば大丈夫かもしれないと必死に納得し、私の膝に乗って心配そうに見つめているヒトカゲを抱きしめる。そしてルカリオも隣にいる私を心配そうに見つめ、何かあればいやしのはどうで助けると言ってくれたけど…もうそれって被害受けるの確実な気がしてきた…もういいや。

「グラグラするウウウウ!!」

『カゲカゲエエエエ!!』

——死んだ…死にました。かなりグラグラ揺れていて、これがジェットコースターの揺れだと感じると気持ち悪くなってしまふ…。ぶっちゃけもう乗りたくない…。

ヒトカゲもジェットコースターの揺れがきつかったのかノックダウン気味だ…。その様子を見たルカリオが私たちを抱き上げてバトル場まで連れて行ってくれたけど、周りを見る余裕はないです。

「うう…」

『カ…ゲエ…』

『おい平気か?しつかりしろ』

「無理…」

『カゲ…』

ルカリオのいやしのはどうと水を飲んでちよつと気分が良くなった。ジェットコースター乗らないのって最高。けれどいつの間にかポケモンセンターまで来ていたようだ。兄が微妙そうな表情で私たちを見ていて、サイコソーダーを私とヒトカゲにくれた。ありがたくいただくことにする。…そして周りを見てみると、ベルが父親にこやかに手を振って別れている様子が見れた…ってあれ?

「ベルどうしたの?」

『カゲ?』

「ああ、ジム戦に勝ったからベルを連れ帰ろうとしたベルの父親を説得して帰っても
らってる所だ」

『ピイカ…』

「……あー」

『カゲ…』

なるほど、原作崩壊ですね。ベルの性格や戦い方が少し変わったからこうなったのだ
ろうか?でもまさか兄と戦う前にベルが勝って父親を説得するとは思わなかった:
まあでも兄がバトルを挑んでベルの父親に勝敗として余計な条件を付けるという未来
じゃなくなつてよかつたのかなと思つた。兄が暴走しなくて良かった。

——え?兄のジム戦?ああ普通に勝つてバッチをゲットしてましたよ。

第九十四話～兄は地下鉄で迷子を捜す～

こんにちは兄のサトシです。ライモンジムに勝ってバッチを貰い、これからライモンシティでいろいろと見て回ろうかと思っております。でもデントがちよつと煩い。

「このスタンプラリーは3日間ですよやく集まると言われている超難関なのさ…でも！僕はそれを1日…いや4時まで集めきってみせる!! イッツ・サブウェイ・タイム!!!」

「ははっ…えつと…悪いデント。俺たちこれからライモンシティの見物するって決めてるからさ…」

『ピイカツチュ…』

「ごめんねデント…でもスタン普拉リー頑張って！」

『キバキバ！』

「そ、そんなあ…」

デントがスタン普拉リーをすべてコンプリートさせて、サブウェイマスターとバトルをするという夢のために頑張るらしいが、俺たちはもう前から決めていた約束だったから、スタン普拉リーはできないといって謝った。デントは残念そうな表情を浮かべていて、それを見た妹が何故か考えるような表情を浮かべており、ヒトカゲと何やら話し合ってお互いに頷いてから俺たちに声をかけた。

「ねえお兄ちゃん。私はデントと一緒にスタン普拉リーに行くよ」

『カゲカゲ！』

「え、ヒナちゃん…私たちと一緒にライモンシティの見物に行かないの？」

『キバキ？』

「うん…スタン普拉リーも面白そうだし…やりたいこともあるしね！」

『カゲ！』

『なら俺も一緒に行こう』

「…ルカリオも一緒に行くなら安心か…いいぞヒナ。ただしはぐれたりしないように

な？」

『ピイカツチュ？』

「分かった！」

『カゲ！』

「いいねえ!! 僕の気持ちを分かってくれる同士よ! さあ一緒にスタンプを集めに行こう!!」

「う、うん…」

『カゲカゲ…』

デントのテンションの上がりように俺は一瞬妹達を説得して見物に戻そうかと思っ
てしまった。だがルカリオもついているし、妹がスタンプラリーで何かしたいというの
なら存分に楽しんでいけばいいと思い、頷いた。…まああれだ、デントが面倒だったら
スルーすればいいからなと小さくアドバイスしてから、電車に乗り込み妹達から離れて
行った。

.....

そして俺たちはビックススタジアム前という駅で降り、リトルコートやビックススタジアムで楽しみ、そしてポケモンミュージカルを楽しんだ。途中でミジュマルがボールから出てきて、ミュージカルに出ているポケモンの近くに行きたいと言ってきて、それを宥めているときなりサイコキネシスでステージに立たされ、ショーに出ることになったりもしたけど楽しいと思えた。

…でも、その後の遊園地で迷子のキバゴを発見してからは別だ。どうやらこのキバゴはトレーナーとはぐれてしまったらしい。アイリスがそのトレーナーを探そうと言い、俺もそれに賛成した。

「よし、まずは遊園地から探すか！」

『ピイカッチュ!!』

「ええ、絶対にどこかにいるはずよ！」

『キバキバ!!』

『キ…キバア…』

キバゴを探しているトレーナーがいるはずだと思い、迷子センターなどで聞いて回ったのだが、いないと言われてしまいキバゴがはぐれたという駅のホームまで戻ってきた。でもそこでもトレーナーはいない…と思ったならキバゴが突然電車に乗り込んだた

め、俺たちはもしかしたらトレーナーがいるかもしれないと考えてその電車に乗る。

「キヤア！」

「あ、大丈夫ですか!？」

『ピイカツ!？』

「仕方ないわね……エモンガ、先に様子を見てきて！」

『エーモオ!!』

電車が動き出したことによつて転んでしまった女性を起こし、助ける。アイリスがそれを見て前の車両にいるトレーナーを追いかけたキバゴが気になるけどこちらも大丈夫か気になつていゝらしく、エモンガをボールから出してキバゴが大丈夫かどうか見てきてくれと指示をする。するとエモンガはやる気に満ちた表情を浮かべてアイリスに返事をしてから前の車両へ飛んで行つてしまった。

「荷物はこれですよね?！」

『ピカピカ』

「ええ……ありがとう坊やたち」

「いいえ、お怪我がなくてよかったです！」

『キバキバ!』

「……よし、行くぞ」

「えええ！」

『ピツカ！』

『キバキー！』

落としてしまった荷物を持って女性に返し、怪我がないことを確認してから別れ、前の車両へと急いで向かう。するとエモンガが何故か糸でぐるぐるに巻かれたキバゴを抱えてこちらに近づいてきたため、先ほど追いかけたトレーナーは違っていたということが分かった。

『キバア……』

「だ、大丈夫よ！絶対にあなたのトレーナーに会わせてあげるからね！」

『キバ！』

「そうだぜ！お前のトレーナーも絶対に探しているだろうし、大丈夫だって!!」

『ピイカツチュ!!』

『キバ……キバア！』

迷子のキバゴはとても悲しそうな表情を浮かべていたのだけれど、俺たちが何とか励ましてまた探しに向かう。アイリスが途中で見かけたスタンプラリーにキバゴの手形と観覧車の絵を描いて壁に貼り、もしかしたらキバゴのトレーナーが見てくれるかもと言って行動していた。

そしてもう一度観覧車がある遊園地まで向かったのだけれど、ずっと待っていてもキバゴのトレーナーは来ないし、迷子センターにもう一度聞きに行ってもキバゴを探しているトレーナーはいないと言われてしまった。

「…このままじゃ埒が明かないな」

『ピイカ…』

「…あの、サトシ君とアイリスさんですね？」

「……はい？」

「誰…ですか？」

いきなり知らない人に名前を呼ばれ、俺たちは首を傾けたが、何故か急いでライモン中央駅に行ってくれと言われ、電車に乗っていくことになった。そして電車に降りて周りを見るがなにもいない…。

『キ…キバキバア!!!』

「あ…キバゴちゃん!!ごめんなさい…もう絶対に離さないからね…!」

『キバキバア…』

いきなりキバゴが俺たちから離れ、走り出した…と思ったらある女の子に抱きつき…そして抱きしめられていた。おそらくあの女の子がキバゴのトレーナーなのだと思

かって安堵した。これでよかったのだろう…でもどうして俺たちのことを知ったのだろうか？何故遊園地で声をかけられたのだろうか？

「お兄ちゃん！」

『カゲ！』

「あれ、ヒナにヒトカゲにデントにルカリオ？…つてあれ？ノボリさんとクダリさんも？…どうしてここに？」

『ピッカツチュ？』

スタン普拉リーに向かった妹達に加えて、地下鉄に乗っていた時に偶然出会ったノボリさんとクダリさんに再会した。そして彼らは微笑みながらも、キバゴを探すのにサブウェイマスターも協力したということ、そしてその途中でキバゴと一緒にいる俺たちの映像を見たということ、遊園地にいるならばライモン中央駅まで向かってくれればすぐに会えるから行動したということが分かった。なるほどと納得した…けどそういえば…。

「…なあデント、サブウェイスタン普拉リーはどうしたんだ？」

『ピカア？』

「……………あああああ!!!残りの一つのキバゴスタンプがまだだったアアア!!!」

「アハハ…はいデント。これあげるよ」

『カゲ！』

「え…？ヒナちゃんこれってスタンプラリーの！それに全部のスタンプがうまつてる！！」

「うん。さつきキバゴ探している時にちよつとね…私はバトルできないし、デントが持っていた方がいいと思うんだ」

『カゲ！』

「え…でも……」

『デント…ヒナがこう言っているんだ。遠慮などするな』

「…分かった。ありがとうヒナちゃん！！」

——まあこうして、デントがスタンプラリーを済ませ、バトルすることを認められ、そして何故か俺も含めてダブルバトルをすることになってしまった。ちよつとだけ散々だったけど、でもまあ一日楽しめたからよかったと思えた。

第九十五話く妹はお祭りでの騒ぎを観戦したく

こんにちは妹のヒナです。これからホドモエシティに向けて歩いて歩いている途中です。：けれど途中でお祭りのように騒いでいるパフォーمانストリートを見に行くことになりました。：けどちよつとだけ嫌な予感がします。主に原作方面で。

お祭りには様々なイベント、様々な屋台が並んでいても面白そうだと感じた。ミュージシャンやダンサーが自慢のパフォーマンスをする場所として有名だからこんなにも凄いのかと納得できるほどだ。まるでサーカスのような人たちが華麗に演技をしていながら、横では漫才のようにポケモンと一緒になってポケとツッコみをしている所もある。全部見て回りたいけど、まわりきれるかどうか分からないぐらいたくさんある。

ヒトカゲも一回転しながら周りの様子を見て、楽しんでるし、兄たちも屋台を見て

何から食べようか迷っているようだ。私としてはヒビダルマたこ焼きを食べてみたいなと思う。あれ一口で食べきれないほど大きいサイズだから一人でじゃなくて、ヒトカゲと一緒に食べようつと――。

「…あれ？ シューティー？」

『ピイカ？』

「サ、サササトシ先輩」

!!!???

「…ん？」

『カゲエ？』

兄の近くが騒がしく、私とヒトカゲは何があったのか振り向いて見る。すると兄と一緒にいるのは何やら涙目を浮かべているシューティーだ。ああそういうえばシューティーも原作でいたなと思った。ちよつと原作崩壊する可能性あるけど…まあいいか。そして遠くの方を見るとアデクさんというイツシユチャンピオンがジュンサーさんのバイクに乗って何やら話しかけているのが分かった。私はそれを見てため息をつき

ながらも、兄のもとへ行く。

兄はシューティーに何でここにいるのか質問する。するとシューティーは感激しながらもこの場所で人を待っていたということ、その人はアデクさんというイツシュチャンピオンだということを教えてくれた。それを聞いた兄たちが驚き、そして疑問に思っ
たらしい。

「…え、でも神出鬼没で、何時何処にいるのかわからないアデクさんがここにいて分かるだなんて凄いわね！」

『キバキ！』

「ああいや、僕はアデクさんがこの近くにいるという噂を頼りにきただけだから…」

「…じゃあいるかどうか確実には分からないってことか」

『ピイカツチュ…』

「…ですが！今日この場所でサトシ先輩に会えた!!それだけでも僕は感激です!!もう満足していますよ!!!」

「そ、そうか…」

『ピツカア…』

うんシューティーが満足ならそれでいいんじゃないかなと思う。アデクさんを尊敬

し、何故か兄も尊敬しているシューティーにとつてはどちらも大切みたいだからね。でもこのままだと話が終わりそうな予感がするから私は兄の腕を引っぱってから苦笑しつつ話しかける。

「どうしたヒナ？」

『ピカチュウ？』

「お兄ちゃん、あっち見て」

『…カゲ？』

「あれって…アデクさん!？」

「ええ!？」

私が指差したことによつて皆がアデクさんに気づくことができた。そして私たちはそのアデクさんの近くへ走つて向かう。アデクさんはいまだにジュンサーさんに話しかけていて、これから食事でもどうか?といっているようだ。でもすぐにそれをきつく断られてしまい、バイクから降ろされそのまま去ってしまった。アデクさんは残念そうにそれを見て、そして私たちが近づいたことでこちらに気づき振り向いた。

「おお! 君か! 久しぶりだなあ!」

「小さい頃に一度会っただけですけど、僕のことを覚えていてくれたんですね!？」

「おう！もちろん覚えてるぞ！…確か名前は………シュータロウだったな？」
「…いえ、シューティーです」

名前を間違えられてしまい苦笑するシューティーと私たち。アデクさんは豪快な笑い声をあげて久しぶりだな懐かしいなど言っている。そしてシューティーはバトルをしませんか？といつてアデクさんを超えるチャンピオンになりたいということを伝えている。そして兄もそれなら俺もシューティーの後でいいから戦わせてくれ！と言っていたのだけれど……。

「そんな!?さ、先にサトシ先輩からどうぞ！僕はその次で構いませんから!!」

「何言ってるんだよシューティー。お前、アデクさんを超えたいんだろ？だったら俺より先にやらなきや駄目だつて」

「いえ…ですけど……」

「ハツハツハ!!面白い！順番を決められないのなら、2人いっぺんにかかってこい！」

「うええ!!……ぼ、ぼぼ僕がサトシ先輩と一緒に…た、戦うつて………はうッ!!」
「ちよッ!!おいシューティー!!」

『ピイカツチュ!!』

「…ん?どうしたんだシュータロウ?何で気絶しておる?」

「ハハハハハ…」

『カゲエ…』

うわーい…カオス到来です。シューティーが兄と一緒に戦うことになってしまい、いろいろと感情が爆発して白目向いて倒れてしまいました。その様子に兄とピカチュウ、アデクさん以外の私たちは苦笑し、微妙そうな表情を浮かべ、アデクさんは首を傾けてどうしたんだとよく分からなそうな表情を浮かべている。兄は白目になって倒れているシューティーを起こすためにピカチュウに軽くでんきシヨツクをやってもらう様に指示している。なんか凄いいことになってるけどこれってどうなるんだろ…。

だが、この後ダブルバトルではなくなり、目が覚めたシューティーが土下座しながらお願いしますサトシ先輩からバトルしてください!!!と頼まれ、頬をかきながらもそれに頷いた兄がアデクさんと戦うことになった。

…でもバッフロンと出した後何も指示を出さず、兄も微妙そうな表情を浮かべてピカチュウに10まんボルトを指示していた。

「ピ、ピカチュウ…10まんボルト」

『ピツカア!!』

『バルウウウ!!?』

だが、バッフロンは何とか耐えていて、物凄い耐久力だと分かって驚いた。でもその後もアデクさんは指示を出さず、兄はピカチュウの方を見て口を閉ざし、そしてルカリオと私の方を見て問いかけてきた。

——原作ではここでアデクさんが居眠りをしているためにバトルが中断されたということがあったりするため、今まさに寝ているのではないかと思いつながら、私はルカリオの方を見た。ルカリオは頷いて兄に言う。

『サトシ…寝ているぞ』

「え…ええええ!!寝ているってアデクさん寝てるの!？」

『キバキバ!』

「も、物凄いテイストだね…」

「アデクさん…!？」

「……というかよくこんな状況で寝てられるよね」

『カゲエ…』

「はあ…なあどうするピカチュウ?」

『ピイカ…』

『ブオオオオウウ!!!』

結局、アデクさんを起こしたのはバツフロンの方で、アデクさんは笑いながら昨日から歩いていて疲れてしまいつい寝てしまったと言ってきたため私たちは苦笑する。そしてバトルが再開されたのだけれども、バツフロンが怒ってアデクさんに攻撃し、このバトルは中止となってしまった。もちろんシューティーとのバトルも。

それにシューティーが悲しそうな表情を浮かべて口を開く。

「アデクさん…言ってみましたよね?…どんどんバトルすれば、どんどん強くなれる。そしてたらチャンピオンにもなれると。ですが…僕はサトシ先輩から教わったんです。チャンピオンを目指すことは強さを求めるだけじゃない、基本だけじゃなく…もつともつと大切なこともあるんだってことを…アデクさんの教えを背くようなことを言っているかもしれない…けど僕はアデクさんと言っていたことと、サトシ先輩から教わったことを両方を信じてポケモントレーナーとして証明していきたいんです!ですから…バトルしてください!!!」

「シューティー…」

『カゲカゲ…』

シューティーの心を知ったような気がした。私たちはただシューティーの人に迷惑をかけるような言葉や行動を改めるために兄に矯正されたと思っていた…のに、シューティーは兄から学んでいたのだ。トレーナーとして大切なことを。強さだけじゃないということ、基本だけがすべてではないということ…だからそれを全部まとめてアデクさんにぶつきたいのだろう。自分で学んできたこと、兄から学んできたこと…そしてアデクさんから学んだことすべてをバトルでぶつけて、成長してきたということを知ってほしいのだろうかと思った。

兄もそんなシューティーの言葉に真面目そうな表情を浮かべている。おそらくシューティーの夢を知ったことと、兄が彼の世界の見かた、常識を変えてしまったことについて考えているのだろう。でもこれはいいことだと私は思う。ポケモンというのは、強さだけではないのだから…他にもまだまだ知らないことがたくさんあるのだからシューティーは兄によっていい成長をしたのではないかと思えた。

でもアデクさんは首を横に振って、そしてシューティーの頭を撫でた。

「昔、何を言ったのか詳しくは覚えとらん…だが、シュータロウ。お前のそのやり方は正しいと思っておるぞ。バトルは強さや基本だけじゃないということも、チャンピオンに

とって必要なことだ。それを証明したいという気持ちもわかる」

「じゃあ……」

「だが、バトルはやらん。わしもバツフロンも腹が減っておるからな。一緒に飯でも食いに行かないか？ シュータロウ」

「……………僕の名前はシューティーです……………いえ、僕はこれから予定があるので…それじゃあアデクさん、サトシ先輩…それから皆さん。僕は行きますね」

「……………おう。じゃあなシューティー！」

『…ピカア!!』

シューティーはそのまま走って行ってしまった。おそらくこの後ご飯を食べに行つたとしてもバトルは受けてもらえないと分かったからだろう。私たちに挨拶をしてから去っていくシューティーがちよつとだけかっこよく見えてしまった。

——まあその後もいろいろと騒動があつて大変だったんだけどね…。

第九十六話く妹は修行の成果を見せたく

こんにちは妹のヒナです。なんというか、チャンピオンのアデクさんがあの後食事を
して帰っていききました。夢について話をしたのですが、ポケモンマスターになったら何
をしたのかアデクさんが兄に聞いた時、兄はその時に考えますと答えていました：何
だか嫌な予感がするけど大丈夫なのかな…。まあその後夢についての話をしてから普
通に帰っていききましたよ。

それで私は今、ヒトカゲとアイリスとキバゴと共にパフォーマンストリートで買い物
をしている最中です。兄とピカチュウは主にバトル方面での必需品があるとのこと
気になって見に行き、デントやルカリオは旅でよく使う携帯調理器具の最新版が販売さ
れていると噂を聞き、急いで見に行きましたよ。そのため、残った私たちがパフォーマ

ンスを見物したり、アクセサリーなどを見ていたりといろいろと楽しく遊んでいます。

———そうしたら何だかゲームなんかで見たことのある集団がやってきました……………。

「我々はプラズマ団！ポケモンを解放するため、自由にするためにお前たちのポケモンを没収する！」

「プラズマー!!」

「いいか！無駄な抵抗はするんじゃないぞ!!」

(うわ…こんな話原作にあったっけ?)

「ちよつとポケモンを没収するって何よそれ!？」

『キバキバ!』

「と、とりあえずお兄ちゃんたちの所へ逃げた方がいいかもしれないね…」

『カゲ…!』

プラズマ団と名乗る白い服などを着た目立つ集団がいきなりパワーマンズストリートに表れ、私たちのポケモンを解放するという名目で奪おうとしてきた。私は兄の

所へ行こうと言い、行動するのだけれど、プラズマ団がこちらに近づいてキバゴやヒトカゲを奪おうとやってくる。私たちはお互いに顔を見合わせて頷き、プラズマ団と対峙した。

「私とヒトカゲは一緒にいる相棒なの！絶対に離れないんだから!!」

『カゲ!!』

「私も同意見よ！ね、キバゴ！」

『キバキ!!』

「…ふん。そちらがそのつもりなら私たちは強硬手段に出ようか…行けミネズミ!!」

「いくらなんでも集団で相手するとなると分が悪いだろう？俺たちも行くぞミネズミ!!」

『ズミツ!!』

『ズツミイ!!』

「さっさとポケモンを解放して戻るわよコロモリ!!」

『モリツ!』

「ヒトカゲ、ダブルひのこ&えんまく！」

『カゲ!!』

「ぐツ!? 貴様らアアア!!」

「よし今のうちよ!! 逃げましょう!!」

『キバキバ!!』

ヒトカゲの修行で鍛えた同時ひのことえんまくをやったおかげで広範囲に煙幕が広がり、ひのこでダメージを与えることができた。アイリスが、私とヒトカゲに逃げようと言ってきたため、私たちは走りだし兄たちのもとへと急ぐ…。

だが――。

「待て!! 逃がさないぞ!!!」

「えツ!?!」

『カゲ!?!』

「ヒナちゃんにヒトカゲ!?!?」

『キバキバ!!!?』

アイリスの後ろを走っていた私たちにミネズミがこちらにきて攻撃してきたため、私とヒトカゲは立ち止まり、警戒する。プラズマ団が出たであろうマメパトがかぜおこしを行ったことでえんまくが消え、私たちの姿が丸見えになってしまう。アイリスがとっさに立ち止まり、こちらに向かつて走ってきているんだけど、プラズマ団の方が私たちに近く、また攻撃の指示を出してくる…!

「行くよヒトカゲ!!」

『カゲツ!!』

『ズミツ!?!』

「何?! 人間がポケモンの技を使うだと…?!」

ミネズミがこちらに攻撃しにやって来たため、私はヒトカゲを背中に背負い、修行でよく練習していた炎のパンチを食らわす。だがミネズミとプラズマ団は驚いたようだったが、またすぐに我に返ってこちらにやって来たため私たちはもう一度えんまくを

指示しアイリスたちのもとへ逃げようと考え行動しようとした――。

「ちよつと待ちなさい！…ねえあなたたち、今何をしようとしたの？」

『キバキバ…！』

「……あ、これもう何もしなくても大丈夫かな？」

『カゲカゲ……』

……アイリスが兄がブチ切れた時によく行っている似たような笑みを浮かべていて、プラズマ団に向かっているのを見て私とヒトカゲは遠い目をしてそれを見つめていた。プラズマ団はアイリスの異変に気がつかず、ポケモンで戦おうとしているのだが、アイリスはキバゴだけじゃなく、ドリユウズやエモンガをボールから出して全力で挑むつもりらしい。…まあポケモン恐怖症とかそういうのにならないように祈るのみかなと私とヒトカゲはこの後の悲劇を予想して同情した。

何だかもうアイリスが最恐に近くなってきているような気がするんだけど絶対に気

うと考えて歩き出した。そしてアイリスたちが戦っている光景が見える椅子に座り、空を見上げてため息をつく。

「……………いつになったら終わるのかな」

『……………カゲカゲエ』

——もちろん、この騒動は長く続いてしまったが、アイリスたちの活躍により被害はなかったと言える。みんなのポケモンを解放されなくて、奪われなくて良かったよかったと私とヒトカゲは安堵していた。…でもプラズマ団が騒動の最中、そしてその後どうなったかは言うつもりはないです…ハイ…。

第九十七話く兄は冷静に事態を対処したく

こんにちは兄のサトシです。今日はパフォーマンスストリートで買い物をしている最中です。バトルにとでも大切な必需品コーナーがあると聞いてやって来たんですが、ボールや進化の石、ジュエルなどが置いてあつて俺にはあまり関係のないものかなと考え、ピカチュウと一緒に周りの店を見ていきます。ですがボールは今持っているモンスターボールだけで足りるし、進化の石やジュエルもあまり必要ありません。ジュエルについては俺自身使いこなせるか分からないため、買おうという気にはなりませんでした。そして他にも治療品コーナーに置いてあつたきずぐすり一式なども俺は一応必要な量はどう買つてありますので買う意味はありません。ですので、ここで買うものはあまりないなとわかり落胆しました。

「ピカチュウ、ヒナたちのもとへ行くか？」

『ピツカ!』

ピカチュウがあまり面白いものや興味あるものがないと分かり、ちよつとだけつまらなそうにしていたため、俺は妹達と合流しようかと提案する。ピカチュウは当然その意見に賛成し、俺に向かって手を伸ばして頬を触る。俺はピカチュウの頭を撫でてから歩きだし、妹達がいると思われる場所まで向かった――。

…でも何だこいつら？

「おとなしくしろ！我々はプラズマ団！ポケモンを解放し自由にするのが目的だ!!」

「プラズママー!!」

「いいか？抵抗すればこちらも相応の対応をさせてもらうからな!!おとなしくポケモンを渡せ!!!」

「…あ、以前のロケット団みたいなものか」

『…………ピカカ』

プラズマ団とかいう微妙な服を着た連中がこちらにやってきて、ポケモンを解放するという意味の分からないことを言ってきたため、カントー地方でよく襲いかかってきたロケット団を思い出し、懐かしんだ。ホウエン地方でもシンオウ地方でもそういうよく分からない悪の団がいるみたいだから、イツシュ地方でもいるんじゃないかと思つていたら予想は当たっていたわけだ。

俺はピカチュウと共にそのプラズマ団を見ながらもそう思つた。

そしてプラズマ団は俺たちに気づき、イツシュ地方では珍しいピカチュウを見て先に奪おうと考えたらしい…しかも集団でポケモンを出して脅迫しながらそのピカチュウと手持ちのボールを出せと言ってくる…でも俺はそう言うの大っ嫌いなんだよな…。

「ほらどうした!!早くそのピカチュウと他のボールを出して解放しろ!!でない痛い目に遭うぞ!!」

『ズツミイ!!!』

『モリイ!!!』

「……………なあ、こういう時は振り返り討ちした方がいいんだよな?」

『ピッカー!』

「何ッ!？」

俺たちに襲いかかってきた集団に向かって走り出し、ピカチュウの10まんボルトで動けなくなったところで俺がプラズマ団の人間たちに向かってとび蹴りをし、そして回し蹴りで再起不能にしていくな。

それにおどろいたプラズマ団は仲間を呼んで俺たちを抑え込もうとしているみたいだったが、もう遅い。俺の動きを封じようとしても無駄だ。………というか、俺以外にもルカリオがこの事態を対処しているはずだから、俺がやらなくてもすぐ騒動は収まると思うんだけどな。

「…あ、良いこと思いついた…なあプラズマ団? ポケモンはポケモン同士、トレーナーはトレーナー同士で戦わないか?」

『ピカツチュ?』

「はあ? 何を寝ぼけたことを言っているんだ!! そんなことを言つて俺たちを惑わしても無駄だ! 行けミネズミ!」

『ズミ！……ズツミイイイイイ
!!!???』

『サトシ…ヒナとヒトカゲはどこにいるか知らないか?』

「ようルカリオ…いや、ヒナたちの居場所なら今からこいつらを倒してから探そうと思っただから知らないぜ?」

『ピカピカ…』

『そうか、ならそいつらは任せる。俺はヒナたちを探しに向かう…』

「おう…そつちも頼んだ!!!」

『ピイカツチュ!!!』

ルカリオが俺たちに襲いかかろうとしてきたミネズミを倒してから妹達の居場所を聞いてきたため、俺は知らないと言っただけ首を横に振る。プラズマ団はその隙にルカリオを含めて俺たちに攻撃しようとしてきたけれど、俺たちはそれを余裕で避けながらも話し続ける。そしてルカリオが俺にこの場を任せて、妹達を探しに行くようだ。

——あ、デントがいらないと思つてたら、プラズマ団の被害に遭わないように普通の人間やポケモンたちを避難させているのが見えた。かなり迅速に行つているみたいだから、ちよつと暴れても問題なさそうだ。…まあルカリオが動いている時点で周りの被害が出たとしても仕方ないか。

プラズマ団はいつまでたつても攻撃が当たらず、余裕で避け続けている俺たちに怒つたらしい。集団でミネズミを出して攻撃してきたため、俺はピカチュウに10まんボルトを指示して、そして俺も俺で行動を開始した。

「ポケモンを解放するとか言いながら奪いに来たんだから、これは正当防衛であつて、お前らの責任でそうなったただけだからな？」

『ピカピカ』

「だから貴様…何を言つて……………ツツ

!!!!!????」

ピカチュウに攻撃を指示してポケモン同士での戦いを任せつつ、俺はプラズマ団のトレーナーたちに向かつて走り出した。ポケモンで俺を止めようとしたのだけれど、ピカチュウがそれを防いで俺の走りを邪魔するやつはいない。

いたのは少し気になったけどな。

第九十八話　妹はあるポケモンに出会った

こんにちは妹のヒナです。現在私とヒトカゲ、ルカリオで森の中を散歩中です。といっても、今日はもうポケモンセンターにつき、これから夜になって歩くのは少々危険だと言われたため、ポケモンセンターから少し離れた場所での散歩ですけどね。兄たちはそれぞれバトルを行なっている様子です。私とヒトカゲはすぐに帰るとみんなに伝えてから歩き始めたんですけど、ルカリオが心配だから一緒に行くと言い、こうしてルカリオも含めて散歩しているのです。ちよつとルカリオが私たちに対して心配性な気もするけどまあいいか…。

「……………ん？あれは？」

『…カゲ？』

『……何故イツシユ地方にいるんだ…』

私たちがふとあるポケモンの姿を見て疑問に思った。そのポケモンはイツシユ地方にはいないはずのポケモンであり、ましてここでみると珍しいけれど、主にジヨウト見られ、カントーでもたまに発見されているポケモンだ…。

とても可愛らしいそのポケモンは顔を俯かせて悲しそうな表情を浮かべている。私たちはその様子を見てお互い顔を見合わせてから頷き、そのポケモンに近づいていく。

だが、そのポケモンが近づくと私たちに警戒したような様子になったため、私は焦って手を上げながら大丈夫だと言う。

「大丈夫だよ！ 私たちはあなたを傷つけようとは思ってないからね！」

『カゲカゲ!!』

『ああ、何があつたのか聞かせてくれないか?』

『ピチュ…』

そのポケモン……つまり、ピチュューは私たちにまた悲しそうな表情を向けて、話してくれた。ルカリオの通訳で分かったこと……それはとても悲しい事実だった。

「……え、捨てられた？」

『……カゲエ？』

『ピチュ……ピチュピチュ……』

『僕の方が弱くて……それでももういらなくなって言われたんだ……と言っている』

「何よそれ……そんなのピチュューは悪くないのに!!」

『カゲカゲ!!!』

『ピチュピチュ……ピチュウ……』

『でも僕は進化したくないんだ……だから僕が進化せずに弱いままだから捨てられちゃったんだと思う……』と言っているが、それはお前のせいではないだろう。自分が望

んでそう決めたのならトレーナーもその意志を聞くべきだ」

「そうだよ！ルカリオの言うとおり！進化しないことが弱いことなんてないよ！」

『カゲカゲ!!』

ピチューの力が弱いから捨てられたなんてそんなのトレーナーの自分勝手な我儘でやったことではないか。しかもわざわざイツシユ地方で捨てるだなんて何をやってい
るんだと思つた。カントーやジョウトに戻してやりたいけれど、ピチューはもうこのま
までいいと諦めているらしい。よっぽどトレーナーに酷いことを言われたから、いま自
分に起きている悲劇をすべて受け入れて、そして諦めているのだと知つた。

私とヒトカゲはお互いに強気な目で見てから頷き、決心した。弱いからという理由で
捨てたトレーナーに怒りを覚えるけれど、それについてはまた後でしよう…。まずは
ピチューを助けないといけない。

「ピチュー…あのね。ピチューは弱くないよ。まだまだ強くなっていく途中なんだよ
！」

『…ピチュー?』

「ポケモンに最初っから強いポケモンなんていないよ！みんなが鍛えていつて強くなっ
ていったんだ！だから大丈夫!!」

『ピチュウ…ピチュウ…』

『でも僕は進化したくないから…だから絶対に弱いままだよ…といっているようだが。
お前にマサラタウンのフシギダネに会わせてからその言葉を聞いてみたいものだな』

『ピチュウ?』

『カゲ！カゲカゲ!!』

「そうだよ！ルカリオとヒトカゲの言うとおり、フシギダネは私のお兄ちゃんのポケモ
ンでね。みんなのまとめ役なんだよ！でも進化はしないでずっとフシギダネのまま強
くなつていったんだ！だからピチュウも絶対に強くなれるよ！」

『……ピチュウ?』

ピチュウはおそらく自分に自信がないのだろう。弱いからと捨てられたこと、進化し

たかないと自分で望んでいるからずつと弱いと思っっていることのせいで…。

…でも私は…：私たちはそうは思わない。だつてマサラタウンには進化しなくても強いポケモンがいるんだもの。それにみんな最初から強かったわけじゃない。兄のりザードンだつて弱いからという理由で捨てられたけれど、今となつては兄のとても強いポケモンとなつていているぐらいだ。だからピチューも強くなれる、進化しなくても大丈夫だという意味を込めて力強く頷いた。そして私の隣にいるルカリオやヒトカゲも同じように頷いてくれた。ヒトカゲは私と一緒にまだ強くなつていく途中だから、ピチューの気持ちがかかるのだろう。ルカリオは今までの経験してきたことも含めて考え、頷いているように見えた。

何故進化したくないのかはわからない、けれどピチューは自分で望んでいけば絶対に強くなれるんだと私は心の底から思っているから、それをすべて伝えるために口を開く。

「大丈夫だよ。私もヒトカゲも、まだまだ強いとは言えないし、もつともつと鍛えていかないといけないけれど…：いつかは強くなる日が来るつて思っているからね！だから、ピチューも諦めなければ絶対に強くなれるよ！」

『……ピチュ!!!』

「ピチュー。元気出た？これからも頑張れる？」

『カゲカゲ？』

『ピイツチュ!!!』

ピチューが私の言葉を理解し、力強く頷いてくれた。おそらく自信を取り戻してくれたのだろう。私はそれを見て笑顔を浮かべてピチューを見る。

ピチューに必要ならカントー地方やジョウト地方に送ろうかと言ったのだが、ピチューは首を横に振って大丈夫だと言ってきた。それに私たちは頷き、頑張れと声援を送る。

『ヒナ、ヒトカゲ……そろそろ時間だ……』

「……分かった。……ピチュー、私たちそろそろお兄ちゃんたちのもとへ帰らないといけ

「ないの……だからここでさよならするけど……またいつか会おうね！」

『カゲカゲ!!』

『……ピチュ』

.....

その後、私たちは急いで兄たちのもとへ帰ってきて先程あったことを説明した。そうしたら兄が険しい表情でピチュを捨てたトレーナー潰すと言ってきたからそのトレーナーにはご愁傷様とだけ言っておこうと思った。でも同情をする気はない。イツシユ地方で強くなるとピチュが言っていたようだったから、そのままさよならをして

きたけど大丈夫なのかなとちよつと心配になった。でももうピチューはやる気があつて、そしてこれから強くなると意気込んでいるようだからきつと大丈夫だと納得する。

「私たちが強くなるころには、ピチューも強くなってるんじゃないかな？」

『カゲカゲ！』

「…いや、それはどうかかな？」

デントがいきなり面白そうな表情をして言ってきたため、私とヒトカゲは首を傾げる。でもその後私とヒトカゲ以外の皆が納得したように私たちの後ろを見てきたため、ますます疑問に思ってしまう。そして私たちに向かって後ろを振り向けと言ってきたため、私たちは後ろを振り向いた。

「……………ピチュー？」

『…カゲ？』

『ピッチュ!!』

「…ヒナ、お前の仲間になりたいみたいだぜ？」

「…え？」

『…カゲ？』

『ピッチュウ!!』

ピチューが私に向かって大きく飛び上がり、肩に飛び乗ってきた。その様子から一緒に行きたいということ、私の仲間になりたいということは分かった…でも……。

「でも、私はトレーナーじゃないんだよ？それでも良いの？ちゃんとしたバトルだってまだまだできないんだよ？」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ!!!』

ピチューは私とヒトカゲに向かつて強く言ってきた。その言葉に、そしてその雰囲気には決めた。兄にいいのかどうか見たのだけれど、賛成しているみたいだ。そしてデントやアイリス、ルカリオも微笑んで頷いている。その後、ヒトカゲを見ると、一目で私と同じ気持ちなのが分かった：だから私は口を開く。

「ありがとうピチューー！これからよろしくね!!」

『カゲカゲ!!』

『ピッチュ!!!』

——それは、私とヒトカゲのほかにピチューが加わり、賑やかな旅の友として、そして未来のポケモントレーナーとして私の仲間になった瞬間だった。

第九十九話　妹とマラカッチミュージカル

こんにちは妹のヒナです。最近ピチューが新たに仲間に加わり、かなり賑やかになってきました。ピチューはかなりお調子者みたいです。兄のミジュマルと仲が良くいろいろと話したり、遊んだりしていることが多いです。ピチューもミジュマルも似た者同士ってことなのかな？

そして今日訪れたある町でマラカッチ達と練習しているトレーナーを見つけました。何をやっているのだろうと聞いたら、どうやらパフォーマンス大会のオーディションがこれから行われるようで、参加するための練習中なようです。ですがなかなかうまくいかないみたい？

そして私たちはそれを見て、夢に向かって頑張るトビオさんとマラカッチ達を応援するため練習を手伝うことになりました。

「じゃあ俺たち、何から手伝えばいい？」

『ピイカ？』

「そうだね…まずダンスにはリズム感が大切なんだ。だから皆にはトリオ・ザ・マラカッチが練習するための正確なリズムを刻んでほしいな」

「リズムか…ってミジユマル？やりたいのか？」

『ミツジユウ！』

兄がリズムに良いポケモンは誰か悩んでいた時にボールから勢いよく出てきたミジユマルがやると言って決めたようだ。そしてデントはヤナップ、アイリスはキバゴでリズムをとるらしい。ルカリオはそういうリズムに関してはやらないらしく、断っていた。ルカリオは他の手伝いをするみたい…そして私は。

『ピチュピチュ!!』

「え、ピチューがやりたいの？」

『カゲ？』

『ピッチュー!』

胸を叩いて僕に任せろと言っているようだ。そのやる気に私は頷き、ピッチューに任せることにした。ピッチューはくるくると一回転しながら拍手をして音をだし、リズムに乗ってダンスしているようだ。そして時折電撃を放ってその音もちやんとリズムに組み込んでいる。電撃がキラキラと光ってその中心で踊るピッチューがとても綺麗だ。

兄たちはその様子を見てすごいじゃないか! と言って褒めてくれた。私ももちろん凄と思うから、ピッチューに向かって言う。

「ピッチュー凄いな! 綺麗だよ!」

『ピッチュー!!』

「あ…もしかしてパフォーマンスとか好きなの?」

『ピッチュー?…ピッチュー!!』

『パフォーマンスが何なのか知らないけど…でも踊ったりするのは好きだよと言っているよ!』

「なるほどね。私もそういうの好きだよ!…将来そういうのを夢にするのも面白そう!…まあ後で考えるとして…じゃあ私たちも踊ろっか!」

『カゲ!』

『ピッチュ!!』

アイリスがキバゴのリズムに合わせてダンスしているのを見て、ミジュマル達がそれぞれリズムを刻みながら踊っているため、私たちもピッチュの踊りに合わせて一回転したり、技を放って煌びやかに見せたりとしてみた。そしてかなり息が合っていると分かり、私はピッチュとヒトカゲの頭を撫でた。ピッチュもヒトカゲも喜んでいようであった。気分はまるでポケモンミュージカルのステージで踊る主役たちかな。

…パフオーマンスをポケモンで見せあうというのはホウエン地方やシンオウ地方でポケモンコーディネーターとしてよく行われてきている。そしてこのイツシュ地方でもライモンシティのポケモンミュージカルがあるぐらいポケモンでバトル以外の技の見せ方というのはある。でも私はポケモントレーナーになるのか、コーディネーターなどになるのかはまだ決めていない…でもこれから決めていけばいいと思う。まだまだ夢を決める時間はあるのだから気長に行こうと思った。

——その後、リズムを刻む役としてピチューはタンバリンを叩いていくことになった。そしてマラカッチ達の正確なリズムを刻むという役に皆がなり、練習としてやることになった。…でも。

『キバキバ!』

『ミジュ!?!…ミジュミツジュ!!!』

『ヤナープ!?!…ナツプウウ!!』

『ピイカツチュ!!ピカピカ!!』

『ピチュ!?!…ピツチュピツチュウウウ!!』

『ミツジュウウウ!!!?!!』

「ちよつと喧嘩はよしなさい!!」

「そうだぞお前ら! 喧嘩はやめろ!!!」

「こらピチュー! 電撃は駄目でしょ!?!」

『カゲエ!!』

「ははは…なんというバットテイスト…どうやらみんなのリズムが合わないようだね」

デントが苦笑するのも仕方ないと思える。キバゴの持っていた片方の楽器が手からすっぽ抜けてミジユマルの頭に落ち、ヤナップがやったと誤解して怒ってしまった。そしてまたキバゴの持っていた残りの楽器がピカチュウとヤナップに当たってしまった、ピチューを巻き込んで喧嘩してしまい、驚いたピチューが間違えてミジユマルにでんきショックを放つてしまうという状況になってしまった。

私たちは急いでみんなの喧嘩の仲裁をして、他の手伝いはないのか聞いてみた。

そうしたらマラカッチ達のリズムをもっと合わせるために兄とトリプルバトルをすることになったり、ジャンプを練習するためにエモンガに教えてもらったりといろいろなやっつていった。

…でも高いところが苦手なマラカッチが叱られ、泣きながら走って森の方へ行つてしまったため後を追いかけることになった。兄とルカリオはマラカッチを探すことになり、他の私たちはステージの方を任せられることになった。

『どこに行つたんだよ…』

『よし、俺はこっち探してくる！アイリスたちはステージの方を頼んだ！』

『ピツカア！』

「分かったわ!」

『キバキ!』

でもマラカッチはおらず、しかもショーが始まってしまい、このままだとオーデイションが終わってしまおうと私たちは焦ってしまおう。でも、確か原作ではここでアイリスとキバゴが時間をかせいでくれたため、何とか間に合ったはずだと考え、アイリスを見る。でも何故かピチューがやる気な表情を浮かべて私にステージに上がるように言ってきた。

『ピッチュ!!』

「…え、やりたいの?」

『カゲ?』

『ピチュピッチュ!!!』

「…分かった!!」

『カゲ!!』

「…ヒナちゃん？」

『キバ？』

「一体どうしたんだい？」

「私たちがオーディションに出て時間をかせぐよ!!」

『カゲ!』

『ピチュー!』

「ええええええええええ!!」

『キバキ?!』

デント達は驚いていたけど、ピチューがやる気満々でステージへ上がって行つたし、私とヒトカゲもお互いの顔を見て頷き、ピチューの後に続いてステージへと上がる。オーディションが開始されたんだけど、私たちは緊張せずいつも通りに…先程リズムを刻むときにやっていたダンスを披露した。

「ピチューー!そこで回転!」

『ピッチユウ!!』

『カゲカゲ!!』

「いいよヒトカゲそのまま踊って!!ピチューはそのまま上空にでんきショック!」

『ピッチユウウウ!!』

『カゲカゲエ!!』

「オーかなり綺麗ですねえ!ヒトカゲの尻尾の炎とピチューのでんきショックが煌びやかに舞っています!」

「いいよ!そのまま頑張れ!」

『ピッチユウ!』

『カゲエ!!』

ピチューとヒトカゲが必死に…けれども少しだけ楽しそうに踊り、技を放つのに私は笑顔になって応えていく。そしてもうこれ以上は無理だつて時にようやく兄たちが戻ってきた。

「おーい!! サトシ!! こっちこっち!!!」

「サトシ、トビオ早く早く!!」

『キバキバ!』

「悪い! 遅れた!」

「ごめん皆!!」

『カツチイ!!』

「……あ、間に合ったみたいだね」

『…カゲ』

『…ピツチュ』

まさか私たちがアイリスとキバゴの代わりにオーデイションに出ることになるとは思わなかった。けれど間に合ってよかったし、トビオとマラカツチ達のパフォーマンスもうまくいって虹ができたようだし、本当に良かったと思う。

私たちもオーデイションに出て楽しかったからもう一度やってみたいなとこっそり練習するようにもなったけどね。

「…今度またパフォーマンスやってみる？」

『カゲ！』

『ピツチュ!!』

第百話 Another Story ヒナ

——これは、イツシュ地方を旅しているサトシ達から少しだけ未来の……そしてヒナがトレーナーになって少し時間が経った頃の物語。

「やって来たよホウエン地方!!」

『ピッチュ!!』

兄のサトシに似た黒髪を肩まで伸ばしているヒナは、サトシがかつてホウエン地方で旅をしていた時に愛用していた帽子をかぶり、意気揚々と船から降りて叫んでいる。帽子はサトシが旅をしていた時から年月が経っているため、かなり古くなっていた。

ヒナが叫んだことでピチューも一緒になって大声で叫んでいるため、周りの人々から見るとヒナとピチューの叫び声はかなり目立っていた。

ヒナがカントーから出発した船に乗ってやって来たのはホウエン地方。ヒナはこのホウエン地方でこれから旅をするようだ。ヒナは大きく背伸びをしてからピチューに向かつて、そしてボールに入っているポケモンたちに向かつて口を開く。

「これからホウエン地方でいっぱい楽しもうね！バトルもコンテストも！」
『ピッチュウ!!』

ピチューが力強く頷くとともに、ボールがカタカタと揺れていく。返事してくれたことにヒナは嬉しそうに微笑み、そして走り出した。ホウエン地方に行ったらオダマキ博士に会いに行けと兄であるサトシに言われていたからだ。

トレーナーとして成長したヒナはホウエン地方ではポケモンコンテストにも出場しようと思気込んでいるようだ。ヒナは楽しそうな表情になりながらピチューを肩に乗せてホウエン地方のオダマキ博士のもとへ走って行く。

途中で様々なポケモンを見歩きながらも、ピチューと話し、笑いながら目指していく。

そしてようやく着いた建物の中に入り、口を開いた。

「こんにちは！オダマキ博士いますか？」

『ピチュー？』

「…あれ、君はヒナ？…久しぶりだね、僕のこと覚えてる？」

「…君は…確かマサト君？」

『ピッチュウ？』

眼鏡をかけて、椅子に優雅に座っている少年がヒナを見て小さく微笑んでいた。成長したマサトはヒナよりも少し年上なため、その表情はトレーナーとしてとても余裕があるように見える。

ヒナは嬉しそうな様子でマサトに近づき、挨拶をする。ピチューは知らないようで首を傾げていたため、ヒナはマサトに紹介する。

「ピチュー、ホウエン地方のポケモントレーナーのマサトだよ」

「よろしく」

『ピッチユー!』

マサトがにっこりとピッチユーに向かって挨拶をしたため、ピッチユーも手を上げて挨拶をする。そして今は何をやっているのか、ホウエン地方で旅をしているのかヒナが聞こうと口を開いた瞬間にドアが開き、オダマキ博士が入ってきた。

「やあやあヒナちゃん! 久しぶり! 懐かしいなあもうトレーナーなんだ…」

「お久しぶりでオダマキ博士!」

『ピッチユウ!!』

「もしかしてこれからホウエン地方を旅するのかい?」

「はい! カントー地方やジョウト地方を旅してきましたので、これからはホウエン地方も旅しようと思ってるんです!」

『ピッチユー!』

「…なるほど。かつてのサトシ君のように様々な地方で旅をするんだね。じゃあこれやろう! ポケモン図鑑だ!」

「良いんですか?…ありがとうございます!」

『ピッチユー!』

オダマキ博士からハウエン地方のポケモン図鑑を貰い、ヒナは喜びながらそれを受け取る。そしてバックの中に図鑑を入れ、オダマキ博士に礼を言う。

「これからはどう旅をするんだい？」

「ジム戦はもちろんやります…けど、ハウエン地方に来たんですから、コンテストにも出場しようかと思ってるんです！ピチューはそういうの大好きですから！」

『ピッチュ！』

「じゃあやることはいっぱいあるんだね！頑張って旅をするんだよ！」

「はい！ありがとうございます！」

『ピッチュピッチュ!!』

ヒナとピチューは激励を飛ばしてくれたオダマキ博士に礼を言ってからまた、意気揚々と研究所から出て歩き出す。ヒナが最初に向かうのは近くで行っているジムだ。まずは挑戦することらしい…でもそれを止めたのは先程まで話していたマサトだった……。

「ねえちよつと待って」

「…へ、マサト?どうしたの?」

『ピチュウ?』

マサトが研究所から走ってヒナたちの方へとやって来た。そして好戦的な笑みを浮かべながらも言う。

「僕とポケモンバトルをしない?」

「ポケモンバトル…?」

『ピチュ?』

「そう。ポケモンバトル…それも最初のパートナーポケモンで戦おうよ。君もピチュー以外のポケモンは持ってきているんでしょ?」

「……………いいわ。売られたバトルは買うのが礼儀だもんね…ピチューはバトル見て今後のコンテストの参考にしてね!」

『ピッチュ!!』

そうして、ヒナとピチューはマサトに連れられて、バトル場へとやって来た。オダマ

キ博士が先程出て行ったはずのヒナとマサトがバトル場にいるのに気づき、自ら審判をしてくれるためありがたく礼をいって受け入れる。

そしてお互いボールを取り出して、そして相棒の名を呼んで叫んだ。

「出番だよ、リザードン!!」

『グオオオオオオツツ!!!!!!』

「出てこい、サーナイト!!!」

『サーナアア!!!』

『ピチュピツチュウウウウ!!!』

お互いがボールから出したのは最初にパートナーとなったポケモンだ。ヒナのリザードンは進化をしたことで身体が黒くなり、とても力強い炎を吐き出して威嚇している。サーナイトを睨み付けていて、今にも威力のあるかえんほうしゃを放ちそうな雰囲気漂っている。

そしてマサトのサーナイトはとても優雅に一礼をして、そしてリザードンに鋭く睨み付け、どう倒していこうかと考えているような強者の雰囲気を漂わせている。

ヒナとマサトにとって、お互いとても頼れるパートナーであって相棒のリザードンとサーナイトがそれぞれ対峙をし、好戦的な目で睨みつつもオダマキ博士からのバトル開始の合図を待つ。

ピチューはその間も自分の仲間であるヒナとリザードンを応援して頑張れと言って叫んでいた。

そしてオダマキ博士がそれぞれリザードンとサーナイトを見てから手を上げて合図をする。

「ではこれより、リザードン対サーナイトのバトルを開始する。始め!!」

「よし、先手必勝!行くよりザードン!!」

『グオオオオオツツ!!!』

かりだ。

ヒナの物語は、ホウエン地方の旅路はまだまだ始まったばかりだ。

第一百話～兄はポケモン育て屋を体験した～

こんにちは兄のサトシです。先程ジム戦に向けてバトルをしていたんですけど、何故かモノズたちが飛び出してきて驚きました。しかもそのモノズ達はポケモンの育て屋に預けられているポケモンたちらしいです。

慌ててモノズ達が預けられている人のポケモンだということ、攻撃してしまい申し訳ないと俺たちに謝ってきたボビーという人に俺たちは苦笑した。育て屋だという彼は言い方や行動がちよっとだけデントのテイステイングタイムに似ているような気がしなくもないと思っただからだ。

『モガアアア!!!』

『モツノオオオオオオ!!!』

「げ、元気いいねモノズ達…」

『カゲエ…』

『ピツチュウ…』

「こら、俺のズボンを引っばるな」

『ピカ』

「あ、ごめんなさい…」

『カゲ』

『ピチュ』

モノズ達が元気に大きな岩を砕いている様子を見て妹達が俺の後ろに隠れ、呟いていた。おそらくモノズ達の攻撃の餌食になりたくないのだろう…。育て屋のポビーさんはドラゴンタイプを育てるのは初めてで不安そうな様子を見たアイリスが竜の里出身者としてドラゴンタイプを育てる手助けをしようと行ってきた。俺たちもできることがあつたら手伝つていこうと考えてポビーさんに言うのだけでも…まさかモノズ達だけじゃなくて他のポケモンたちの世話も任せられるとは思つてもみなかった…。

「…なんか体のいい雑用係になっちゃったな」

『ピイカツチュ…』

「まあそうかもしれないけど…私はたくさんのポケモンたちに触れ合えるし、どんなご飯が好きなのか知れて楽しいよ？」

『カゲカゲ!!』

『ピチュ!!』

妹達は楽しそうにシキジカたちに飯を与えており、マメパトたちと触れ合ったり遊んだりしていた。俺は気を取り直して、これもいい経験になると考えポケモンたちに飯を与えていく。時折モノズが俺に向かってずつきをしようとしてくるのだけれど、俺が避けたらすぐに悔しそうにしている、かなり好戦的なんだなと思えた。

デントとルカリオはポケモンたちの食べている飯を見て、どういふ特徴があるのか、どのタイプがどのような食べ物を好むのか話し合い、時々ボビーさんに聞いているのが見えた。

…そしてアイリスは、もう一体いた人見知りのモノズに一生懸命話しかけていた。夜になつても傍を離れず、ご飯を食べてくれるように願ひ、そして心を開いてくれるようになつたと行動していた。俺たちはそんなアイリスの分まで働いていた。

「…モノズがご飯を食べてくれた！」

『キバキ!』

『モ、モノオ……』

モノズがアイリスに心を開き、飯を食べてくれたのは預けられた約束の最終日の前日。アイリスのおかげでようやく俺たちの前にも姿を見せてくれたモノズの体調を確認して、そして真剣に健康をチェックしていく。そんなボビーさんの様子にルカリオが真剣に見つめていて、そして時々質問をしながら話を聞いている姿に、もしかしたらあいつはタケシのようになるのかなと思ってしまった。…そういえばタケシ……ポケモンドクターを目指して頑張っているらしいけど、元気にしてるかな。

「…なあピカチュウ…モノズのトレーナー遅いな……」

『ピイカ……』

人見知りだったモノズのトレーナーが約束の日に来ない。他のモノズ達はちゃんとトレーナーに返されていったのだが、この人見知りのモノズのトレーナーは全然来なかった…。アイリスが寂しそうなモノズを励まし、大丈夫だと慰める。

「モノズ、絶対にトレーナーはやってくるからね…大丈夫よ」

『キバキー！』

『モ、モノオ……』

アイリスが励ましたとしても、モノズは寂しそうな表情が変わらず、俺たちはどうすればいいのか悩む。

…だが、そんな俺たちの前に現れたのが、モノズのトレーナーだった。

「モノズ！ようやく会えた!!!」

『モノオオオオ!!!』

モノズがとても悲しそうに鳴き、出入り口を見つめて待つ。そうしてようやくやって来たトレーナーにアイリスは怒ろうとしたのだが、何だか様子がおかしいことに気づき、慌ててポビーさんと呼んで来た。

——話を聞くと、どうやらこの先にある電気石の洞穴でポケモンを追いかけて迷ってしまったらしい。それで約束の日に遅れてしまったと説明され、謝罪された。それにポビーさんは無事でよかったと言い、モノズも嬉しそうにしていた。そしてポールに戻る直前、アイリスに向かって一鳴きし、返っていった…。

アイリスは寂しそうにしていたけれど、でもドラゴンマスターとしてもっと頑張っていこうとやる気を出したようだ。ボビーさんにまたポケモンに飯を配ってほしいと頼まれたとき、アイリスは元氣よく向かい、手伝っていたから氣合が入り直したのではないかと思う。

「…まあ、アイリスもモノズも……これで良かったんだよな」

『ピツカツチュ…』

第一百二話～マサラタウンは騒々しい～

マサラタウンにはよくポケモンたちが集まってくる。人から見たら伝説と呼ばれているポケモン、とてもレベルが強いと一目でわかるポケモンと様々だ。アルセウスという神と呼ばれているポケモンも一度マサラタウンで計画をたてたこともあったが、今はこちらに来ていない。兄たちが帰ってきたらマサラタウンに来ることは確かだろうが……。そしてアルセウス含めてポケモンたちはマサラタウンの住人には知られていないのだ。

彼らは皆、騒がしくされること、そして問題が起きることを何よりも嫌うからだ。平穏を誰よりも好んでいる彼らは全員が共通してある目的のために動いていた。

そのある目的とは――。

「……ねえ、これで本当にサトシ達が帰ってくるの？」

『マナア？』

『当たり前ニヤ!!ニヤーの言うことに不可能はないのニヤ!』

「……そう言いながらも旅に出ている頃はあまり役に立ってなかったような気がするかも」

『マナア……』

『ジユ……』

『ズツバアア……』

『ハイハイ……』

『コオオオオオ!!』

『そんなわけないニヤ!ニヤーは天才なのニヤ!!!』

ハルカ達の声を聞いたニヤースが怒って怒鳴る声が迷いの森に響き渡った。

—— 迷いの森の奥深くに様々なポケモンたちが集まって静かに話し合い、そして目的のために動いていた。その目的とは、サトシとヒナがマサラタウンに帰ってくるといふこと。本当なら最初の頃はサトシ達に会えるというだけで十分だったのだが、なぜか話が逸れまくり、いつの間にか早く帰って来いと言うことが目的となっていた。

だが、サトシ達の目的であるイツシユリーグまでは帰ってこないというのは十分理解している。でもほんの少しでもいいから会いたい、会って話がしたいと言うのは全員が考えていること、望んでいることなのだ。ボールを交換して会えるというのなら即座にやってもらっているだろう。でもイツシユ地方までは遠く、ポケモンを送るのはかなり困難だと言われてしまった。しかもイツシユ地方までボールを送れるようになるのはもう少し先だと言う…。そんなに我慢できないからこそ、本日も皆が集まってサトシ達に早く会えるように話し合い、計画をたてているのだった。

ただしその中には、よく説教をしてくるフシギダネの姿は見えない。

今回はどうやらロケット団のニヤースも一緒に参加しているらしい。どうやらサトシ達に会うために誰でもいいから助けてもらおうとして強制的に連れてこられたみた

いだ。ニヤースは両手に何やら細長い棒状のような機械のものを持って自信満々の表情を浮かべている。

ハルカはもちろんホウエン地方で一緒に旅をしていたジユカイン達がみんな苦笑してニヤースを見ている。：コータスは何故か号泣してニヤースの話を聞いていたみたいだったが、いつものように皆に慰められていた。

『ただ、エネルギーがまだ足りないのニヤ：』

『エネルギーだと？：おい貴様、まさか何もできないという気か』

『そんなわけないニヤ！ニヤーはちゃんとやってるのニヤ!!』

「ほら、ニヤースもミュウツーも落ち着いて：エネルギーってどんなエネルギーなのよ？」

『バイバイ!』

ミュウツーは以前ロケット団に対していろいろと思うことがあるのか、ロケット団に所属しているニヤースにはかなり冷たく接している。そんなミュウツーに落ち着くように言うハルカは、少し疑問に思いつながらニヤースに聞いた。エネルギーとはどんなものなのかを。ベイリーフも気になるらしく、ニヤースに近づきながら聞いてきた。ニヤースは手に持っている機械を見せて言ってきた。

『この中に炎のエネルギーが必要なのニャ』

「炎？ だったら私の出番ね！ バシヤーモお願い！」

『バツシヤアア!!』

『ニャアアアツ!? 危ないニャ！ ニャーを殺す気かニャ!?』

『バシヤ？』

「え、違うの？」

『そんなに強い炎はいらないニャ!! もっと小さくていいのニャ!!!』

ハルカがバシヤーモをボールから出してオーバーヒートでニャースの持つ機械に向かって放つ。だがニャースが慌ててその凄まじい炎から逃げ、ハルカ達に向かって怒鳴ってきた。

ハルカとバシヤーモは首を傾けてどういふことか聞いたたら、ニャースが小さな炎で十分だといってきた。そのためバシヤーモが小さな炎をだして機械にいれる。すると機械が動き出してキラキラと先端が光りだした。

『バイバイ!』

「綺麗! …でもこの機械ってどんな効果があるの？」

『バシヤア!』

『マナア!』

『ワニイ!』

『ピジヨオットオオ!!!』

『これはピカチュウがこの機械に近づきたいと思つてしミャウマシーン…略して《ピカチュウおびき出してジャリボーイ達も帰らせよう機械》だニャ!!!』

「……………なんか長すぎるかも」

『…マナ』

『…ジュール』

『…バシヤ』

『長すぎるな、おまけにそれではイッシュ地方から帰るかどうか効果が分からないだろうが』

『ニヤにを言ってるのニャ!!この機械を電話しているジャリボーイとピカチュウに向ければたちまちピカチュウが帰りたと言ってくるニャ!そして絶対マサラタウンに帰ってくるのニャ!!このスイッチを押せばたちまち……………何ニャ?』

ニヤースが不満そうな周りのポケモンたちとハルカに向かって怒鳴ってきた。この機械は絶対に成功すると言つてスイッチを押したのだ。

そしてスイッチを押した瞬間、何か黄色い集団がニヤースに向かって走って向かってきたため皆がニヤースから離れて何が起きたのか見た。

「…え？ピカチュウの群れ？」

『ベイ!?!』

『ハイハイ!?!』

『ギャオオオオオオオオオオオオ』

!!!???

!!!???

『ツツ——』

『な、何なのニヤおみゃーら!?!』

『ピツカアアア』

!!!!!!

ピカチュウの群れが一斉にニヤースに向かって10まんボルトをして攻撃したのだ。ニヤースは群れの10まんボルトに当たって悲鳴を上げている。そしてその技を受けて機械が壊れた瞬間、ピカチュウたちは森の奥深くへと帰って行った。

「……あなるほどね。ニヤースの作った機械は《ピカチュウの技当たりまくりマシン》ってところかも」

『マナ…カモオ!』

『バツシヤ!』

『所詮貴様は無能だったということだな』

『そ、そんニヤア…ガクツ…』

ニヤースは10まんボルトのせいで黒焦げになりつつも、ハルカ達の声を聞いて思いつき落ち込み、そして気絶してしまった。

それを見たハルカは苦笑しながらもオポンのみをニヤースに食べさせて、そしてミュウツーたちに向かって口を開く。

「それでどうするの?もうこの作戦も失敗みたいよ?」

『マナ?』

『バツシヤアモ』

『……ベィ……』

『…ふむ…何かいい手はないのか……』

『ダネ……ダネダネエエエ』

ミュウツーたちがどうするべきか考えていた時に、急にフシギダネの声が聞こえてきて、皆が焦ってしまった。もしもフシギダネがこちらにきたら何かたくらんでいるということが分かってしまい、いろいろと精神的に辛い説教が待っている。しかも長い長い説教だ。

ルギアが羽を大きく広げて叫ぶ。

『仕方がない……皆の者、解散!!!』

『!!!!!!』

木の葉を散らすように皆がそれぞれフシギダネから逃げていく。もちろんハルカも一緒になって逃げる。前に一緒に話し合った時、巻き込まれてフシギダネの説教を食らったことがあるからだ。フシギダネの説教は通常とは違い、時々ソーラービームを放

ちながら言ってくるため、いつこちらに向けて撃つのかという恐怖心との戦いと説教による精神攻撃とで……まあいろいろと辛い目に遭う。

——そんなフシギダネの説教を食らったかどうかは、まあ悲鳴と上空に上がるソーラービームとその他諸々で検討つければわかる話だろうと思う。

マサラタウンは、本日も騒々しい一日のようだ。

第百三話く妹達はホドモエに着いたく

こんにちは妹のヒナです。私たちはようやくホドモエシティにたどり着きました。着いた時にジムは何処にあるのか聞いて探していたんですが、いつの間にか兄の目の前にジムリーダーがいて、今はジム戦出来ないと言っていました。兄はそれに少し不満そうだったが、待っている間にピカチュウたちと対策をしようと考えていた。：まあ原作でもそうだったし仕方ないよね……。それでその後、アギルダーというポケモンとチャールズという人にも会った。

そしてホドモエマーケットという場所に案内してもらったり、泥棒を捕まえようと兄たちが追いかけたのだけれど、その途中で《快傑ア☆ギルダー》というヒーローが出てきたり、《フリージ男》という怪人がでたりとまあ騒がしい初日を過ごしました。ちよつとだけ特撮ヒーローの番組みたいだと思っちゃったりもしたけどね。

そしてその後、今日は兄たちがポケモンを鍛えようと技を繰り返し出している最中です。

「…お兄ちゃん気合十分だね」

『カゲ!』

『ピッチュ!』

「ヤーコンさんからいつジム戦オーケーの連絡が来るか分からないからね」

『サトシなら勝ちそうだが、念には念を入れての修行だな』

「そうね。サトシなら絶対に勝つと思うけど…やっぱり技の特訓をしていないときにジムの連絡が来るといけないもの。いつものジム戦前の修行は必要よね」

『キバキ』

「…でもこれはちよつと違うような気がする」

『カゲ?』

『ピッチュ?』

『どういふことだ?』

「…いやだって、お兄ちゃんたち普通に技繰り返し出してないよね。合体技とか作ってるし……」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『……まあ、サトシらしいと言えばらしいがな…』

そう、兄はピカチュウたちに対して技を強める練習だけじゃなく、例えばピカチュウとミジユマルの技を合わせて繰り出したりポカブとツタージャの合わせ技をしたりと何だかジム戦には関係ないこともやってるような気がする。しかもかなり強い。ピカチュウの10まんボルトとミジユマルのみずでつぽうでかなり痺れそうのみずでつぽうになったり、ポカブのかえんほうしやとツタージャのリーフストームで強力な技になったり…まあこれ絶対にジム戦では使わないよねと思える合体技の練習をしていた。しかも今度はミジユマル、ポカブ、ツタージャのトリプル合体技を練習し、披露してくれたんだけど…あれかな、前世で兄がよくやってたスマブラのポケモントレーナーの最後の切りふだでよく使ってた《さんみいったい》のような感じになっていた。とても強力そうだけど、それどこで使う気なんだろう…しかもそれ絶対にジム戦で使えない技だと思う。…まあ兄なら何とかジム戦でも勝てそうだから大丈夫だと思っただけでも…それでも何やってるんだとツツコミを入れたくなった。

途中でヒトカゲやピチュー、ルカリオも気づいてくれて、苦笑した。まあ兄らしい行動だと諦めれば何とかかなるかなと私はため息をついてその修行を見ている。

「——見つけたぞ、デント！」

「え？…ポッド!?!」

兄の修行を見ている最中に、ポッドが何故かポケモンセンターにいて、デントに話しかけていた。そしてポケモンバトルをデントに申込み、修行の成果を見せろと言ってきた。

「えーそれでは。使用ポケモンは一体ずつで勝負を始める。バトル開始！」

兄が審判をして、ポッドとデントの勝負を始めたんだけど、バオツプとヤナップという相性としてはバオツプの方が有利な戦いでデントが華麗に勝利を収めた。それは、デント達のジム戦でのバトルスタイルという勝ち方だった。

そしてポッドがバオツプをボールに戻そうとしたのだけれど、バオツプは不満があるような表情でボールから戻らず、ポッドに怒鳴っていく。でもポッドはバオツプが悪いと言つて喧嘩している。

それを見て、私たちは喧嘩を止めようと行動し、デントがポッドに対して、バオツプにばかり悪いというわけじゃないよと言つてポッドが悪いと言うのだけれど、ポッドはそれを聞かず、バオツプがそのままどこかへ行つてしまい、ポッドもバオツプを追いか

けずにどこかへ行ってしまった。

「…デント、放っておいていいの?」

『キバキ?』

「ポッドの性格から見ると、今追いかけるのは逆効果だよ。コーンに事情を聞きに行こう」

『ヤナアツプ』

コーンに事情を聞きに電話したのだけれど、そこで分かったのはポッドが家出をしたということ、連続で挑戦者にあっさり負けてしまったこととバトルスタイルの完全否定に傷つき怒ってしまったことだということが分かった。

そしてドーナツ屋でやけ食いしているポッドを慰めて後でデントがテイステイニングをするということで収まり、次にバオツプがいる木々では、きのみをやけ食いしている光景が見えてきて、まるでポッドと似たような行動をしているなど兄が小さく呟いた。そしてポッドが謝るのだが、それでもまだ怒っていて、代わりにヤナツプが怒りをおさめるために木に登って話をする。それもデントとポッドがしていたやり取りに見える。とアイリスや兄が話していて、私たちは苦笑した。それでもまだ怒りはあるのか、バオツプは拗ねた表情でヤナツプの言葉を遮っていた。それに反応したポッドが木に上

り、ちゃんと謝って、ほのおタイプのジムを開きたいんだと言う夢について語っていた。……ゲームでは2年後の話で、デント達のジムは閉まり、ジムリーダーを辞めてサンヨウレストランを経営しているだけだったのだけれど、この世界ではどうなるんだろうと少し気になった。…ポッドの夢もあるんだし、おそらくは辞めないだろうと思う。

つまり、3人そろって一人前というゲームのような話ではなくなるだろう、そしてポッドたちもちゃんと一人で戦える、ジムリーダーを辞めようとは思わないだろうと私は密かに考えた。

そして始まったテイスティングタイムでは、いつものように少し煩いデントではなく、冷静にゆっくりとポッドとバオツプの相性を確かめていく。

そしてやはり相性はいいということになり、次に技を見ていくのだけれど、技はほのおタイプだけしかないため、他の技を教えて行こうということになった。

「攻撃こそ最大の防御！技を防御技に変えるということもできるかもしれないけど、ポッドとバオツプの性格を考えれば、水タイプに効くソーラービームが一番いいんじゃないかなって思うんだ！」

「ソーラービームか！よしがんばろうぜバオツプ!!」

『バオバオツプ!!』

———そうして始まったバオツプとの修行。ソーラービームを操るようになるという修行は、バオツプが無事に修得できた。いろいろとあったけど、まあ何とかなって良かったかなと思う。

第四百四話く兄とミロス島と伝説たちく

こんにちは兄のサトシです。ようやくヤーコンさんが帰ってきて、ジム戦ができると思つたのに、ふっかつそうがないから無理だと言われてしまいました。まあ忙しそうなジムリーダーだと思い、ふっかつそうさえ持ってきたらジム戦を受けると言われたので、ふっかつそうが手に入るミロス島まで行きました。

「ふっかつそうねえ…採れるといつてもそんなじよそこらに生えているわけじゃないのよ」

「え…?じゃあどこでなら採れるんですか?」

「そうさね。あの山を越えた向こうの山のでっぺんに生えているよ」

「あそこか…ありがとうございます!」

『ピッカ!』

「あ、ちよつと待ちな。あの山にはユウトっていう青年がいるから、彼に聞いてみたらいい」

「わかりました！」

『ピイカツチュ!!』

ミロス島の住人に聞いた通り、俺たちは山を越え、そしてもう一つの山の頂上まで行くことになった。そしてその途中であつた、ユウトさんに話を聞いて、ふっかつそうを貰おうとしたんだが…。

「俺たち、ふっかつそうを探しにきたんですけど…」

『ピカ』

「そう…か…もう日が暮れる。俺の小屋へ案内するよ」

ユウトさんの小屋に行くと、ドレディアと呼ばれているポケモンが寝ていたり、草ポケモンたちが倒れ、元気がなくなつたということ話を話してくれた。

そして、肝心のふっかつそうが枯れているということ、島の土地がやせてきていると、この島は伝説のミロス島と呼ばれている。伝説は三休いて、トルネロスとボルトロスとランドロスと呼ばれているポケモンたちだ。島の土地がやせてきたから雨を降らしてもらおうとユウトさんが言っていて、だから、その伝説の三

体の内のランドロスに頼んで雨を降らしてもらおうと明日行動を開始するらしい。俺たちも当然手伝うことにした。

そして翌日、ランドロスを呼ぶための準備を整えて始まった儀式。するとランドロスが来て、ユウトさんの話を聞いてくれた。このまま土地にふっかつそうを生やしてくれると思った————ら何故か石碑の楔を壊して……どうということなのか分からないうちにいつの間にかトルネロスとボルトロスも来て、この島を豊かにするために技をかけあつてそしてふっかつそうが生えてきた。

「……そうか！この島が豊かだったのはランドロスだけじゃない……トルネロスやボルトロスもいたからできたことだったんだ！」

「……あれ？でも何でそれで石碑を壊しちゃうのよ？」

『キバキ？』

「……たぶん。ランドロスがこの島を守ろうとして、トルネロス達に頼んで……それで手伝ってくれたのかな……？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

「ああ、きつとそうだ」

『ピカチュウ!』

雨や風、そして雷によつて土地に肥料を与え、豊かに戻るように技を使つて島にふつかつそうを生やしてくれた。そして一面ふつかつそうが生えているという光景が見えてきた。島が元気を取り戻したことにランドロスたちが帰つて行つた。

———ドレディアたちも元気を取り戻したし、良かったと思える日だった。

「…ああそつか。ロケット団が暗躍してないからランドロスたちの騒動はなかったことになつたんだ……」

『カゲエ?』

『ピチュウ?』

「…うん。何でもないよヒトカゲ、ピチュウ」

何か、妹が言っていたような気がしたけどまあいいか。ユウトさんからお礼としてもらったふっかつそうで、ようやくジム戦を挑むことが可能になる。これでようやくジム戦でバッチをゲットだけだな。

第一百五話～妹たちは洞穴へ突入した～

こんにちは妹のヒナです。兄のジム戦はちゃんと行い、そして見事にバッチを貰うことができましたよ。今までジム戦出来なかったのは何でだったのかって言うくらいあっさりと終わりました。ふっかつそうを渡すとき、もしもまた何か課題を出されたらおそらく兄がキレていたと思いますから無事バトルできて良かったです。そしていい結果としてはダンゴロが進化したことだと思えます。ダンゴロが進化してガントルになったことに兄も皆も大喜びですよ。

そして次の町へ向かって歩いて行く途中にある電気石の洞穴に、これから突入するところですよ。

「うわあ！綺麗だし凄いしビリビリする！」

『カゲカゲ！』

『ピツチュウウウ!!』

『ピカピカチュウ!!』

『…ピチューとピカチュウにとってこの石はでんきタイプに効くみたいだな』

「へえ…！確かにでんきタイプに効きそうな岩だな。ピカチュウ気持ちいいか？」

『ピツカア！』

「うーん…なんとというエレクトリックなテイストなんだろう！ここにいるとでんきタイプの気持ちが変わえそうだよ！」

『キ…キバキ…』

「キバゴ、怖くないよ。ちよつとだけビリツとするだけだからね？」

『キバア…』

洞窟に突入したらとても綺麗で光っている石が数多くあつてとても綺麗だと思えた。時々岩が電気を帯びて宙に浮かんでいて、それにピチューとピカチュウが勢いよく飛び込んで電気を浴びている…とても気持ちよさそうでした。私たちは笑顔になった。

…ってあれ？そういえばここでバチユルやデンチュラたちが電気を求めて襲いかかってきてたような気がする…ああそっか、それはロケツト団がいろいろと問題を起こしてたから起きたことだから、兄がやらかした今となってはもう起きないことかな。でもそうなるツイズマイが進化しなくなるけど大丈夫なのかな…いや、たぶん大丈夫だと信じておこう。

「あら？サトシ君に皆さん。お久しぶりですね」

「久しぶりだなベル!!」

『ピカピツカア!』

「ベル！元気にしてた？」

『キバキバ?』

「ええ、何も悪いことは起きてませんよ」

「グツトテイストってことだね。ベルも次の町に向かうのかい？」

「いいえ、次の町に向かう前にアララギ博士に一度会いに行く途中なんです」

「アララギ博士に？」

『カゲエ?』

『ピチュウ…?』

ベルが洞窟の入り口から入って来たらしく、私たちの後ろから声をかけてきた。そしてこの先にアララギ博士がいるということ、会いに行く途中だということが分かった。おそらくアララギ博士とポケモンを交換させて通信進化でもするのだろう。ベルがその進化を見て感激し、元の性格に戻らないことを祈るのみだと思う。

——そして洞窟の奥までやって来た私たちは、アララギ博士に会えた……というわけもなく、何故かデンチュラ達に襲われた。ピカチュウやピチューは電気を奪われるということとはなかったんだけど、おそらく電気石の洞穴から出て行けということなんだと思う……けれどこのままでいるわけにはいかない。私たちはこの洞穴の先へと歩きたいのだから。

とにかく喧嘩を売られたならばということでは私たちはバトルをすることになった。

「ヒトカゲ、ひのこー！ピチュー、スピードスターー！」

『カゲカゲ！』

『ピッピッ！』

「ピカチュウ、アイアンテール!!」

『ピツカア!!』

「へえ凄いい！良かったねデント、イワパレス！」

『カゲカゲ!』

『ピツチュウ!!』

兄がポケモン図鑑を取り出してイワパレスの説明を見る。その間もデントがイワパレスに抱きついていて。私たちはデント達に近づいて進化したことを祝福した。ベルもイワパレスに進化したことに喜び、拍手している。私もこれは凄いいと思うし良かった。ロケット団が暗躍していないせいでイシズマイの進化がなくなったということになったらどうしようかと悩んでしまったから、こういう変化だったらもう大丈夫だと知れたしね。…まあ私たちを電気石の洞穴から追い出そうとしたデンチュウ達にはちよつとだけ同情するけど。でも私たちに危害を加えようとした時点で主に兄たちが許さないだろうから、喧嘩を売ったのが悪いということでは私にも言わずただ心の中で同情するだけで普通に攻撃してしまっただけだね…。

とにかく、このまま電気石の洞穴を抜け出して、アララギ博士たちがいるという場所まで向かうことになった。そこでベルとアララギ博士でカブルモとチョコボマキの通信進化を見ることになる。通信進化に関しては見るのがなかったからちよつとだけ楽

しみだと思えた。…なんにせよ、もうすぐ出口だ。

「よし、どこまで行くか競走しよう!!」

『カゲエ!!』

『ピツチュウ!!』

「おいお前ら!先に行くか迷子になるぞ!」

『ピツカア!!』

「大丈夫だつて!もう出口が見えてるもん!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピ!』

『ちゃんと前を向いて走れ。怪我をするぞ!』

「大丈夫だよルカリオ!怪我はしないからね!よし行くよ!!」

『カゲエエ!』

『ピチュウウ!!』

私たちは出口を目指して走り出した。そしてそんなはしやぐ私たちに苦笑しながらも追いかけてきた兄たちに私は後ろを向いて笑いかけ、そしてまた走り出す。前を見ればもう洞窟の出入り口であろう光が見えるから迷子になる心配はない。それに周りが

キラキラビリビリとしていてまるで星空の中を走っているようだと思いながらも、私たちはアララギ博士に会うために皆で競争をして走って行った。

もちろんアララギ博士に会うこともできて、迷子にもならずちよつとした問題は…起きちやっただけど、でも大丈夫だったし良かったと思えた。またこの洞窟に行ったら電気石の欠片だけでも記念にもらいたいなと思っちゃっただけどね……。

第百六話　妹とベースキャンプ

こんにちはは妹のヒナです。ベースキャンプに来てこれから通信進化をするための準備をしています。バトルをしてみたら、チヨボマキが人見知りしてしまってまもるを連続でしたりと護りに徹していてちよっとバトルになってないことに兄たちは微妙そうな表情を浮かべている。そして次にアララギ博士がカブルモで技を決めようとしたら、いきなり電気が乱れてコンピュータが使えなくなり、バトルが中止になった。

…まあこれは仕方ないと思う。電気石の洞穴にいるギギギアルのせいで電気が乱れてしまったのだから。

「……あらら……これじゃあ交換はできないわねえ」

「……そ……うなんですか」

「じゃあ、原因を見つげに行こうぜ！何かわかるかもしれない！」
『ピカア！』

交換ができなくて悲しそうなベルを見て、兄たちがアララギ博士に原因を探しに行こうと言ってきた。もちろんアララギ博士もそのつもりでいるらしい。ベルはすぐに表情を明るくして、私も行きます！と言ってきた。そして私たちは電気石の洞穴に入り、原因を探すことになった。

「ギアル…へえ始めて見たな」

『ピツカツチュ』

ギアルが電気石の洞穴にたくさんいて、兄はそれを見ながらポケモン図鑑を開く。そしてその奥へ行き、ギギアルがいるであろう場所まで行った。…おそらく原作ではギギアルが襲ってきたような気がするから、私はヒトカゲとピチューを連れてルカリオの後ろに隠れる。それを見た兄がギギアルを警戒しているのだけど、でも騒動はすぐにアララギ博士のおかげで何とかかなると思うからとにかく待つしかない。

「……………」

『カゲ?』

『ピチュ?』

『どうしたヒナ』

「いや、ちよつと嫌な予感がするだけ。ピチュ、私たちから離れちゃ駄目だよ」

『ピチュ?…ピツチュ!』

『カゲ…』

『嫌な予感か…ヒナの予感によく当たるから注意しないとな』

ルカリオはいつも私の嫌な予感を感じとり、後ろに隠れてきたことを覚えているのだろう。そしてヒトカゲもこの旅の中でそれを学び、私が嫌な予感がすると言ったらすぐに私の腕を掴んで隠れてくれた。

まあ原作の話だから覚えてるとは言えないし、嫌な予感がすると言つてよく言い訳していただけなんだけどね。そして起きたのがギギギアルの暴走。チャージした電気を打ち出していることに兄がピカチュウの10まんボルトで食い止める。ルカリオは警戒して、こちらに流れてきた攻撃をはどうだんで受け止めていた。

そしてアララギ博士によってようやくギギギアルの暴走は止まり、挟まっている万年

筆をとってあげた。これでアララギ博士とベルとの交換が可能になった――

アララギ博士のカブルモと、ベルのチョコボマキを交換することになった。ベルはチョコボマキの貝を撫でて、優しい表情で話す。

「じゃあねチョコボマキ…立派に進化して、アララギ博士に可愛がってもらうんですよ？」
『チョコッキ…』

「今までありがとう…戻って、チョコボマキ」

『チョコッキョッキ！』

チョコボマキは交換されるため、ベルとお別れすることになるのだけれども、でもアララギ博士の所にいるし、いつでも会えるということと、絶対に可愛がってもらえると分かっているからこそ、ベルもチョコボマキもお互い爽やかにお別れを言うことができた。

そして始まった通信交換。ボールの中にいるうちは進化するかどうか分からないけど、ベルやアララギ博士がちゃんと確かめるためにそれぞれの交換したボールから出さ

れた瞬間にすぐ進化が始まり、ベルが貰ったカブルモがシュバルゴに、アララギ博士が貰ったチヨボマキがアギルダーに進化することができた。

「よろしくお願いしますね。シュバルゴ」

『……………シュツバア』

「…あれ？」

「ん？どうかしたか？」

「…う、ううん…別に何も無いよ」

私が首を傾けたことに兄が疑問に思つて聞いてきたんだけど、私は気のせいだよと言つて首を横に振つて兄の質問に答えなかった。私が首を傾けたのには理由がある。ベルとシュバルゴは最初は呼吸が合つておらず、攻撃されたり指示を聞かずに勝手に攻撃したりと結構いろいろやつてたと思う。だけど、私たちの目の前で起きている光景は原作とは違つていた。

ベルがシュバルゴの頭らしき部分を撫でて笑みを浮かべ、シュバルゴは少しそつぽを向いたのだけでも、ベルを攻撃したり、睨み付けたりせずにいる。

アイリスがすぐに仲良くなってよかったねと言っているのだけれど……やっぱりこれもベルの性格矯正のせいかなと心の底で思ってしまった。……まあ問題がないなら良い方かと納得しておくことにする。

そして始まったのがダブルバトルだ。兄とデント対アララギ博士とベルのバトル。兄とデントはそれぞれ進化したポケモンを出し、アララギ博士とベルは通信交換で進化したアギルダーとシユバルゴを出している。

通信進化したポケモンたちの強さを確かめるために行ったものなんだけど、まあ兄たちが普通に勝ってしまったので何とも言えない結果になって私たちは微妙そうな表情を浮かべてしまった。

でもアララギ博士とベルはお互いのポケモンの強さと性格、そしてどうやって戦うのかについてよく分かったようで満足そうだ。

まあ、バトルの結果はどうあれこれで良かったのかなと思えた。

第一百七話～兄がアララギ父に出会った～

こんにちは兄のサトシです。早速ですがアララギ博士の父親が倒れてしまい物凄く大事になってきてます。

「…なんだ、腹が減ってただけだったのか」

『ピイカツチュ』

『ああそうだな。サトシに勝るいい食べっぷりだ』

「まあお腹空いてたらお兄ちゃんみたいにいっぱい食べるよね」

『カゲカゲ』

『ピツチュウ』

「どういう意味だよお前ら」

アララギ博士の父親が電気石の洞穴から突然現れて、そしていきなり倒れたものだから何かあったのではないかと皆が大慌てで治療室へ運び込んだ。けれどただ単に腹が減っていたということを知り、皆が安堵したし、苦笑もした。そしてデントとルカリオが作ったサンドイッチを無我夢中で食べていて、よっぽど腹が減っていたんだということを知る。ただし妹やルカリオ達が俺と似たような食べっぷりだと言ったのは解せぬ。ピカチュウも納得しているように首を縦に振って頷いているし…。

そしてその後、アララギ博士からその父親についての話を教えてくれた。父親は伝説と呼ばれるポケモンを研究している研究者なのだということを知ったアイリスはゼクロムやレシラムも研究しているのかどうか質問する。するとアララギ博士がそれに頷いて答えてくれた。なるほど、確かにゼクロムやレシラムも伝説だったなと俺は納得した。随分あっさりとした出会いだったから普通のポケモンだと思ってたからな。

「ところでパパ…こんなところで何をしてたのよ」

「おお！実はな…英雄伝説にまつわる遺跡が発見されたんだよ…今度のは凄いで！英雄とゼクロムが交信していた場所かもしれんのだ!!」

「英雄と…ゼクロムが…？」

『ピカピカ?』

「ああそうだ。…で、その遺跡に来る途中、洞窟の中を迷ってしまつてね。デエツハハハハハ!!」

「笑い事じゃないわよ…」

そしてアララギ博士はギギギアルにはさまつていた万年筆を取り出して父親に見せる。父親はその万年筆を落としたということを見せてくれて、それでその万年筆のおかげでアララギ博士の父親がここにいるのかもしれないということが分かったということ、ギギギアルに挟まつていたんだから気をつけろということを使う。

そしてその後アララギ博士の父親はもう行かなければならないと言つてきたため、俺たちはお互いの顔を見て頷き、アララギ博士に向かって口を開く。…その時に妹が苦笑していたような気がするけどきつと気のせいだと思つておく。

「あの!アララギ博士…つて同じだったな…あの、俺たちも一緒に英雄伝説にまつわる遺跡に行つてもいいですか!!?」

『ピカピカツチュ!!?』

「お願いします!」

『キバキ!』

「是非とも、お願いします!!」

「……………駄目!……………」

「ええっ!?!」

『ピツカア?!』

「ははは…まあそうか。…無茶を言っつてすみませんでした!」

「……………だという理由はない」

「…へ?」

『…ピカ?』

「どういうこと?だという理由はないって…?」

『キバキ?』

「駄目…だという理由はない…?」

「あー…まあいいか……………」

『カゲエ…………』

『ピチュウ…………』

『……………なるほどな。だがすぐにわかることか…』

そしてすぐにわかったこと、アララギ博士が自分の父親はいつも考え事をしていて、言葉を途中で止めちやう癖があるということを教えてくれた。そして駄目ではなく、一緒に行ってもいいと言うことを知り、俺たちは喜んで、そしてアララギ博士の父親に向かってありがとうございます！と礼をした。

アララギ博士の父親は喜んでいる俺たちに向かってにつこりと笑みを浮かべていた。

———
そうして向かった英雄伝説のある遺跡。俺たちは電気石の洞穴を抜け、森を歩き、崖を超えてまた森の中を歩き続けた。そして夜になったため一度森の中で野宿をすることになった。

そしてアララギ博士の父親に英雄伝説の遺跡について教えてくれた。ここから行くところには、英雄がポケモンと心をつなぐ時、ゼクロムが英雄に力を貸すであろうということ、その力を貸し、交信する場所こそこれから行く英雄伝説にまつわる遺跡というわけだ。

そして翌日、また歩き出して遺跡へ向かい、ようやく着いた入口に俺たちは興味津々な顔でそれらを見る。石がつまれていて、古そうな遺跡なのだろうと思つた。

そして中に入って歩き出すと、周りの壁は全て古代文字で書かれていて、ただの一本

道が続いているだけだった。そしてすぐに行き止まりの壁にたどり着いた…のだけれど、目の前の壁には古代文字で暗号が書かれているということ、フシデの石像があることが分かった。そして妹がルカリオの近くにいて、ちよつとだけ焦ったような表情を浮かべているのが気になった。

「おいどうしたんだヒナ？」

『ピイカ？』

「あああやばいような気がする…デント。お願いだからアララギ博士の言うことはちゃんと聞いてね！最後まで！」

『カゲ？』

『ピチュ？』

「へ…僕？う、うん分かった…」

「あ、ルカリオ…何かあったらよろしくお願いします…」

『…よく分からないが…承知した』

おそらく妹はこの先を原作で知っているのだろう。そしてデントがアララギ博士の言葉通りにやろうとして、言葉が途中で止まってしまったせいで左に向けると言うのが駄目だと言うのも知らずにやってしまった。そして壁が下に向かって落ちていき、目の

前に大きな岩がある状況に俺たちは慌ててしまった。

「やばい！逃げろ!!」

『ピツカア!!』

『っ！行くぞ!!』

「うわっ！…いつもありがとうルカリオ…!」

『カゲカゲ!』

『ピツチュ!』

『礼なら後だ!!』

ルカリオが妹達を背負い、走り出した。俺たちも走り出して、転がってくる大岩から逃げていく。そしてこのままじゃいけないと分かってデントがヤナップをボールから出してあなをほるで俺たちはその穴に隠れることができた。そしてアララギ博士の父親は爽やかに笑っていて、俺たちは苦笑してしまった。

そして大岩が転がったおかげで先程行き止まりだった場所から次の道まで行けるようになっていて、俺たちはその先へ歩き始めた。

——そしてやって来たのが崖に吊り橋が2本ある場所。

アララギ博士が古代文字の暗号を解説しながら言うため、俺たちはその声を最後まで聞こうと耳を傾けた。そして右の橋は駄目だと言うことがわかり、これで左の橋に向か

えばいいと分かって俺とデントは歩こうとしたんだけど…。

「どうしたヒナ？ 何で止めるんだ？」

「お、お兄ちゃん…ちよつと待って本当に待って！…もうちよつと博士の話を聞こう！」

「ヒナちゃん…？」

「左の橋を渡る…のもしいかん!!」

「ええ!? 危ない…サトシにデント！ 渡つちや駄目だつて!!」

「お、おう分かった！…サンキューなヒナ」

『ピカ!』

「ありがとうヒナちゃん…おかげで助かったよ」

「え…アハハ…ちよつと嫌な予感がしたただだから気にしないで…」

『カゲカゲ!』

『ピチュウ!』

『いや、それでも助かったんだ。礼を素直に受け取れ』

「う、うん…分かった」

妹が原作を覚えていてくれて本当に良かったと思った。橋を渡ってしまったら何かあったのかもしれないと少し冷や汗が出てきた。そして俺たちは博士の言葉を最後まで聞いた方がいいなということも分かった。

別の道があるということを知り、探していた俺たちにルカリオとキバゴがその道を見つけてくれた。

そして来た道でも同じように3つの洞窟があつて、それぞれにポケモンの絵が描かれているのが分かった。

妹が俺の腕を掴んで何か言いたげな顔で左の道であるゴビットの絵の洞窟の方を指差したため、俺がこつちから行こう！と言ったのだけれど、アララギ博士がまずはこつちから見てみようと言つて左の道のダルマツカの絵の洞窟から歩き始めたため、俺たちは後を追つて行くことになつてしまった。妹にはルカリオに頼んで何とか危険がないことを祈つた：まあダルマツカもワルビルも罨の道だったのだけれども……。

それらは全部、デントのマツギョとアイリスのドリユウズのおかげで何とか助かった。

途中で道にミイラの棺のようなよく分からないものが置いてあつて、これもトラップなのではと皆が警戒しながら歩いていく。：途中でルカリオが立ち止まつて波動で調べ、はどうだんで攻撃しようとしてきたのだけれど、アララギ博士がむやみに何かを動かしてはならん！と言つてしまったせいでルカリオは攻撃を止めて、ただじつと睨み付けてから妹達の方に近づいて何かあつた時にすぐ行動できるようにしていた。それを

見て、俺たちは何かあるのではと警戒心を強める。

そして歩きだし、壁を強く押してようやくたどり着いた最終地点。そこには何やら輝かしい岩が立っていて、中心にはダークストーンと呼ばれている石が埋め込まれているのを発見した。だが、これ以上は何か死に直結する罠があってもおかしくないと言つてそろそろ戻ろうと言うため、俺たちは来た道に戻ることにした。

——まあ、その途中でシンボラーやデスカーンに襲われて、俺たちは皆でバトルしてなんとか抜け出すことができたんだけどな。帰ろうとしたら空からシンボラーが降りてきて攻撃したり、途中に会ったミイラのような棺からデスカーンが出てきて攻撃したりと散々な目にあつた。原因はアララギ博士の父が持ち出した黄金のダークストーンだということが分かつて苦笑し、ちよつとだけアララギ博士の父親に怒りを覚えたけどな。

まあ何とかダークストーンを元の場所に戻し、シンボラー達の怒りを鎮めて出口までたどり着いたから皆怪我がなくて本当に良かったと思う。

第一百八話～妹はある子供たちに出会った～

こんにちは妹のヒナです。突然ですが何故か地面からワルビルが飛び出してきて、ピカチュウに襲いかかってきました。私とヒトカゲ、ピチューはとっさにルカリオの背に隠れて様子を窺います。

……あ、これ原作のあれだ。ワルビル仲間フラグの話だったはずだと思い出した。

「あ！お前前にピカチュウに喧嘩売ってきたワルビルか!？」

『ピカピカ!?!』

『ワビ!!ワビワビ!!』

『サングラスとピカチュウに対する挑発…確かに前に見たワルビルと同一人物だろうな』

「い、い、いまで追ってきたってこと!？」

『キバキ!?』

「う、うーん…なんという執念深いテスト…凄まじいね」

『ワビイイイイイ
!!!!!!』

『カ、カゲ…』

「大丈夫だよヒトカゲ…私が守るからね」

『カゲ…!』

『ピチュウ…ピツチュ!!』

「ピチュウは怖くないの?…でも前に出たら巻き込まれるから私の後ろに隠れてね」

『ピツチュ…:…』

「よし、バトルしようぜワルビル!ピカチュウと戦いたいんだろ?」

『ピツカ!!』

『ワビイイイイイイ
!!!!!!』

—————まあそういうわけで始まったワルビルとピカチュウの戦いなんだけど…エレキボールとストーンエッジの攻撃で爆発し、ピカチュウとワルビルが衝撃でど

ここに飛んで行ってしまった。私たちは飛んで行ったピカチュウを見て慌ててしまう。……ワルビルについては、前にもあったことだしおそらく大丈夫だと思うからとにかくピカチュウを探しに行かないといけない。

「ピカチュウ!?!」

「大変よ……早く探しに行かないと!?!」

『キバキバ!!』

『少し待て……こっちだ!!』

そしてルカリオが波動でピカチュウを探して、私たちに案内してくれたんだけど……その途中でワルビルに会った。ワルビルもピカチュウを探しているということ話を話してくれて、私たちと一緒に行くことになった。

そしてようやく見つけたのが私より少し年上の男の子がピカチュウと一緒に座って何やら話しかけている光景だった。話しかけている内容はピカチュウの技について、どんな技が使えるのかを聞いていて、それを兄が近づきながら全部答えてくれた。ようや

く兄たちと再会できたことにピカチュウは喜び、兄に抱きつく。
その様子を見ていた男の子が恐る恐る兄たちに話しかけていた。

「あの…僕はニックです…あの、えっと……そのピカチュウ貸してください!!!」
「…え？」

『ピイカ？』

「…これは長くなりそうだね」

『カゲエ…』

『ピッチュウ…』

ニックという男の子はどうしてピカチュウが必要なかを教えてくれた。友達にバトルごっこをして勝ちたいということ、ピカチュウとバトルをしたいということを教えてくれた。私たちはそれを聞いて、ニックにバトルの仕方を教え、ピカチュウとバトルの練習をすることになった。そしてそのバトルの相手として本当は私とヒトカゲが相手しようということになったんだけど、何故かワルビルが相手をしたと言ってきたため、兄とワルビルが相手になることになった。

途中でワルビルのサングラスが取れたりワルビルが本気になりすぎて途中で兄がポカブに交換したりということもあつただけど、ニックとピカチュウのバトルはうまくいってこれならそのグレンたちに勝てるのではと兄たちが言ってきた。ピカチュウの技を覚えたということ、どうやってポケモンバトルをするのかコツを掴めてきたからこそ、デントはソムリエとして熟成していけばグットテイストになれると言ったり、アイリスも領いたり、もちろん私も大丈夫だよと言ったりと言うことがあつた。私たちの言葉聞いたニックはそれに喜び、そしてこれからやるバトルに気合十分なようだ。

「あああああ!!! やつと見つけたぞニック!!……って何だこいつらは？」
「グレン!？」

「俺たちはニックの友達さ。…それで、俺がピカチュウのトレーナーのサトシだ」
『ピカピッカ!』

「ふーん…それで？ポケモンバトルはやらないのかよ？」
「やるよ!!もちろん!!!」

——というわけで、そのグレンたちがバトルごっこを行っていたと思われる場所まで案内され、ニックとピカチュウがパートナーとして戦うことになった。行く途中で私のヒトカゲやピチューを見て興奮し、お前のポケモンか!? ずりい!! と言われたり、ルカリオがかっこよくていろいろと叫ばれたりしました。ルカリオはその間も一言も声を出さずに無視していたりしてたしヒトカゲとピチューも騒がしいのが嫌なの私の後ろに隠れてたりしたんだけどね…。

相手が出てきたポケモンがペンドラーとガマゲロゲというとても強そうなポケモンだ。そしてグレンが二体とも使うと言ってきたため、ニックが慌ててしまった。

「え…ダブルバトル…で、でも僕は…」

『ワビイイイ!!!』

「ワルビル?」

『キババ!?!』

「そうか! ピカチュウとタッグを組むつもりだな!!」

『ピイカツチュ?』

『ワビワビイイッ!!!』

「まさにやる気十分って感じだね…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

——まあその後、グレンたちが指示を出す間に争ったりしていたおかげでニツクがちゃんと指示を出して勝つことができた。グレンがそれに逆ギレしてニツクを殴ろうとしたのを兄が止めたり、ニツクたちが仲直りして何とか問題は解決出来たり…そしてワルビルとピカチュウとの戦いでピカチュウが無事に勝つことができた。ワルビルがそのシヨックでどこかへ行こうとするのを兄が止め、一緒に旅に行こうぜと誘ったおかげでワルビルをゲットできることができた。

「結果はともあれ…ワルビルゲットで良い感じ?」

『カゲカゲ?』

『ピッチュウ?』

『…その言い方はやめろヒナ。何だか癪に障る』

『りようかい』

「ル、ルカリオが喋ったあああああああ
!!!?!!!!」

!!!?!!!!

「ポケモンが喋るだなんて始めて見たよ!!!」

「凄いや!!ルカリオが喋るだなんて…ねえもつと喋ってよ!!!」

『ツ?!』

…ま、まあトラブルはあつたにせよ、これで良かったんじゃないかな？

第百九話～妹は兄をよく知る人物に出会った～

「こ、こんにちは…妹のヒナです。何だか原作とは違ったよく知らない人物が兄に喧嘩を売っていて恐ろしい事態になってます……」。

「お前がカントー地方、オレンジ諸島、ジヨウト地方、ホウエン地方、シンオウ地方とリーグ等で優勝した凄腕トレーナー？…ハッ！笑わせるなよ!!!」

「……………はあ？」

『……………ピイカ？』

「…え？何なのあの人。死にに来たの？」

『キバキバア…』

「ははは…危なそうだから僕たちは離れて見てようか」

「そうだねデント…これ絶対にヤバイよね…お兄ちゃんもうキレ気味だもん…」

『カゲカゲ…』

『ピチュウ…』

『…その間に何か作って待っていていよう。どうせもうすぐ昼食だ』

「あ、僕も一緒にやるよ…」

まあというわけで私たちは凄く離れてこれから起きる悲惨なことを予測してみます。ルカリオとデントはそろそろ昼食だからと言って食器や食材などを出して作り始めるし…皆フリーダムだね…。

アイリスが私たちを守ろうとしてくれているのか、私たちの近くに來て一緒に座って見てくれている。そして何故かキバゴだけじゃなくドリユウズやエモンガもボールから出して警戒態勢を整えている。

ルカリオやデントもそれぞれこちらに攻撃が飛び火しないように物凄く離れた場所で料理をしていて、何かあつたらすぐ対応できるようにしてあった。

そしてそれらに気づかない哀れなトレーナーは兄とピカチュウを指差して叫んだ。

「どんな大会に出ても優勝するという凄腕トレーナーがイツシユにいと聞いて來て見

れば…何だその弱そうなピカチュウは？それにお前も全然強そうには見えないなあ…ハッ！全然駄目なトレーナーじゃねえか！」

「……………」

「……………」

「…ねえヒナちゃん。どう思う？」

『キバキ？』

「うーん…カベルネの時ぐらいいは怒りそうな気がするかな…でも今のでピカチュウの10まんポルトは確実に変わったね」

『カゲカゲ…』

『ピチュウ…』

私たちは遠くから兄たちの様子を見て苦笑しつつ、話し合った。この後起きる被害の状況について、兄がどのくらい怒っているのかなど、まるで実況者のようにアイリスやキバゴ、ヒトカゲやピチュウと一緒に話していく。でも絶対に兄たちには近づかない。デント達の方からとても良い匂いがきて、お腹が空いてきたんだけど、兄たちの騒動が終わるまではご飯はまだ食べられないかなと考えた。

兄たちの異変を知らないトレーナーはゴルグをボールから出して、自慢してきた。「どうだ？俺のゴルグの方が強そうだろう？お前のピカチュウなんて目にも当てられないぐらいだぜ！優勝なんてどうせデタラメなんだろ？なんでこのイツシユ地方にはお前が凄腕トレーナーとして有名でないか、噂が流れてないのわかるか？お前が実際に弱くて何もできない駄目なトレーナーだからだよ！カントー地方からシンオウ地方までいろんな噂が流れてたけどそれって嘘なんだろ？それにポケモンも調べたけど全部弱そうで俺のポケモン一撃で倒せそうだぜ！」

『ゴビツ！』

「……………」

『……………』

「うわ…お兄ちゃんとピカチュウの周りが急降下で寒気がしそうぐらい冷たくなって
る…」

『カゲツ…』

『ピチュツ…』

「サトシが旅していた他の地方で優勝したっていうのは聞いたことあるけど噂は知らないわ…ねえヒナちゃん、噂って一体何なの？」

『キバア？』

「えっと、お兄ちゃんが色々旅していた時に起きたトラブルを解決させていたらいつの間にか噂になって、それで通り名も出来たりしちやっただ…」

「通り名？」

『キバ？』

「…えっとね…カントー地方では《歩く人外魔境》、オレンジ諸島では《問題児の巣窟》、ジョウト地方で《人の形をした伏魔殿》、それでホウエン地方では《カントーが生んだ最終兵器》、シンオウ地方は《人の皮を被ったポケモン》…まあこんな感じかな…」

「へえなるほどね…じゃあイツシユ地方で最近聞くサトシの通り名も似たようなものだったんだ」

『キバア…』

「え？イツシユ地方の通り名？」

「ええ、たしかサトシの通り名で《トラブル・ブレイカー》って言われているのを聞いた

「ことがあるわよ」

『キバキ』

「私知らなかった…」

『カゲ…』

『ピチュウ…』

「ま、まあ知らなくても仕方ないことよ。ヒナちゃんずつとサトシカルカリオの近くにいたでしょ？だから近くにいる時はそういう話をする人はいないのよ…」

まさか兄がこのイツシユ地方でも通り名を作ってしまったとは思わなかった…。しかも何その通り名《トラブル・ブレイカー》って…何か微妙なネーミングセンスというか何でその通り名ができたのか聞きたいぐらい疑問が出てくるんだけど。…本当に、いったいどこでそんな通り名ができたんだろう…。私はそういうのに気をつけてたんだけど…あ、でも遅いか…最初にこのイツシユ地方に来た時、そしてシューティーを見て暴走した兄たちを止められなかった時点でもう宿命のようなものかなと思った。

それに今まさにまた何か騒動起こしそうだしね…。

「何だよお前。ずっと何も言わないで…ハツハア！もしかして俺に凶星を言われたから無言なわけ？やっぱり弱いんだお前のポケモンも、お前自身も!!」

『ゴビツ!』

「…：言いたいことは それ だけ か？」

『ピイカツチュ?』

「ああ?」

『ゴビ?』

「はいお兄ちゃんの暴走まであと数秒を切りましたー…」

『カゲカゲ…』

『ピチュウ…』

「ああもう…ヒナちゃん、デント達のいる方へ戻りましょう。ここからはカベルネと同

『キバキバ』

「はは…でもこの昼食ができる頃には終わってそうだね」

『…捕まるようなことさえなければ俺はどっちでも構わない』

———
というわけで、まあいろいろとあつたけど良い1日だと思いました。

第百十話くタケシにとつては普通のことく

ここに、カントー地方のニビシティにはサトシと一緒にシンオウ地方までよく旅に同行していたタケシがいる。タケシはただいまポケモンドクターとして修行の真つ最中であったりするのだ。

「よし、今日の治療はここまで……よく頑張ったな」

『コラ……コラツタ!』

「よくできましたねタケシ君」

「はい!不肖このタケシ、ジョーイさんの教えに背くことなど一つもツ!?!…シ…シビレ
ビレ…!!」

『……………ケツ!』

タケシはいつも通り、ジョーイさんにポケモンドクターとしてのポケモンの正しい治療方法を教わり、そしていつも通りジョーイさんにアタックして、グレッグルによつて碎け散っていた。

そのタケシの行動にジョーイは苦笑して見ていたが、そろそろ次の患者が運ばれてくるためタケシに起きてもらい、準備をしていく。

——— そんな、いつも通りの彼らに、ある一つの連絡が届いた。

「大変です！森の中で…エンテイが怪我をして暴れていて!!」

「エンテイ!?確か、ジョウト地方の伝説と呼ばれているポケモンでは…!」

『ラキツ!』

「すぐに行きます!!」

「待ってタケシ君。 私たちも行くわ!」

『ラツキイ!!』

そして森の中にたどり着き、見た光景はかなり悲惨なものだった。木々が燃え、森の中に住む草ポケモンたちが隠れて怯え、遠くにはエンテイが暴れている光景がタケシたちから見えていた。

「これは……」

『ラキ……』

「お、お願ひします……何とかエンテイの怒りを鎮めてくださいジョーイさん！」

「ええ、何とかやってみます……けど……！」

普通の人間、ポケモンたちはこの様子に怯え、恐怖で震えていた。エンテイを助けようと駆けつけたジョーイ、ジュンサーも同じようにエンテイの強さを見て圧倒していた。あの怒りをどうやって鎮めればいいのか……どうやって怪我を治せばいいのか……。でもプロとしてそれを考えているというのに、やはり良い案は浮かばず、どうすれば解決するのかわからないままだった……。

———そんな時に、タケシが行動を開始した。

「行くぞ、グレッグル」

『……ング……』

「え？……タケシ君……!!」

ボールから出したグレッグルと共に、エンテイに近づいて行ったのだ。しかも恐れることなく。

そしてタケシに向かって炎を吐き、攻撃しようとしてくるのをグレッグルが止め、怒りを鎮めようとタケシがにこやかに笑みを浮かべて言う。

「痛いだろう？すぐに治してやるからな！」

『……………グウオオ』

「え!?怒りが鎮まった…!!」

『ラキィ!!』

「彼、凄いわ!どうやって抑えたのよ…!」

皆が驚くのは無理のないことだ。エンティはとても強くて近づくだけで攻撃してきそうな様子だったというのに、グレッグルが余裕でその攻撃を防ぎ、そしてタケシの一言でエンティの怒りが鎮まり落ち着いていったのだから。

でもタケシにとってはそんな行動は普通だった。いつものようにポケモンを助け、いつものように治療をしているだけなのだ。

「…いつか、タケシ君がポケモンドクターになったら…絶対に立派なポケモンドクターになるわね…」

ジョーイは思った。今日の前で見ている行動、そして伝説にも平等に接して治療するタケシの強さを。まだ分からないけれど、いつか立派なポケモンドクターになる日は必ず来るだろうとジョーイは確信したのだ。

タケシはサトシのようにいつも通りポケモンに接したまでのことだが、周りの人間はそうは思っていない。

「よし、頑張ったなエンテイー！」

『……………ング』

『グオオオオオ!!』

タケシはこの後いつも通り治療をして、ポケモンドクターとして立派に成長するために学んでいくだろう。

何があっても、どんなポケモンが来たとしても…。

「おねいさぁーん！自分と一緒にお茶でも…グハア！シビレビレエエ!!!」

『……………ケツ!』

……いつものように大人のお姉さん相手に暴走したとしても。タケシの平和で平
凡な日々は毎日のように続いていく。

第百十一話　く兄はバトルクラブで出会ったく

こんにちは兄のサトシです。フキヨセジムのバッチをゲットし、ドンナマイトで勝利したりといろいろやってました。ぶっちゃけあまり面白いことがなかったので割愛しようかなと…ああ、でもズルツグがきあいだまを覚えたのは良かったと思ってますよ。

そして今俺たちは、ネジ山を越えて、ドンジョージのバトルクラブで泊まることになった。そこであつたのは…ダブルバトルをしている光景でとても強そうなバトルをして凄いなと思っただけだな…。

その後泊まる部屋に向かおうとしていたら、先ほどダブルバトルをしていた少年たち

が見えてきたんだけど、それはただ会話しているような光景ではなかった。勝利したトレーナーが負けたトレーナーのポケモンを奪おうとしている光景で：俺たちはそれを見て止めようと動いた。

「お前の持つてるポケモン全部見せろ」

「ちよつと：ねえ君！まさかバトルで勝ったからってポケモンを取り上げようとしてるんじゃないでしょうね？」

『キバキバ!?!』

「：おい。どうなんだ？」

『ピイカツチュ?』

「何だお前ら：関係ない奴は黙ってろ！」

「：……………あれって」

『近づくな。巻き込まれるぞ』

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

俺たちが真剣な表情で先程のダブルバトルで勝ったトレーナーに詰め寄る。勝ったトレーナー……つまり、スワマはドン・ジョージが近づいてきたのを見て、ここで喧嘩をしていることがばれたらまずいと思ったのか舌打ちをしてそのままどこかへ行こうと歩き出した。

スワマとドン・ジョージの姿が見えなくなったのを見て、俺たちは負けた方のトレーナーに話しかけた。トレーナーは無理やりバトルをされたということ、スワマは強いポケモンを手に入れるためなら何だってやるといふことを知って俺たちは険しい表情でそれを聞いた。強いポケモンだからと無理やりバトルをして、負けたらポケモンを見せろと言つて強奪のようになってしまう態度が気に食わない……。でも、関わらなければ大丈夫だと負けたトレーナーは言つて、そのまま町から出て行つてしまった。

俺たちはそれを見て、仕方ないと肩をすくめて夕食を食べるためにまず部屋に入つてから荷物を置こうと歩き始める。またスワマが何かしたら俺が止めればいかと考えるながらも、歩き続ける――。

「ほら、美味しい夕食だよ！」

『ゆつくり食べろ』

夕食を食べるための食堂でスワマを見かけたが、俺たちは彼を無視して夕食を食べ始める。ポケモンたちをボールから出して、デント達が作り上げたポケモンフーズを食べさせる。だが、その途中でポカブがスワマの存在に気がついて、スワマに笑顔で近づいて……？

「どうしたんだポカブ？」

『カブウ!!』

ポカブがスワマに近づいて、足に抱きつこうとしている。まるで懐かしい人物に会ったような反応……まるで、知っている人物に久々にあったような……自分のトレーナーにようやく出会えたような、そんな反応だ。

アイリスが突然スワマに近寄り、口を開いた。

「あの、失礼ですけど……以前カラクサタウンのバトルクラブでポカブを捨てたことってありますか？」

「……何だよキミは……ふーんこいつあの時に捨てたポカブか……拾われて良かったじゃない

か」

「やっぱり……！サトシ！カラクサタウンでポカブを捨てたトレーナーだよ!!」

「……どういうことだ」

『ピイカ』

俺たちはスワマに近づき、ポカブをどうして捨てたのかを問い詰める。だがスワマは嘲るような表情でポカブの首元を掴み、俺に投げしてきた。その時に言う言葉、そして態度が俺の心に突き刺さる。……こいつ潰してもいいかな。

「だってこいつ……才能ないんだもん！」

『カブツ!?!』

「お前……ふざけてんのか……！」

『ピカピツカ!!』

「ちよつとそこに正座しなさいよ……！」

『キバキバ!!』

「待った君たち!! イッツ・ジャツチメント・ターイムだ!!!」

「はあ?」

「始まつちやつた…いや、お兄ちゃんとアイリスの暴走が止まつただけ良しとするかな…」

『カゲエ…』

『ピチュ…』

『だがこのままだとまたすぐにやらかすぞ』

デントが喧嘩はよくないと言って俺たちを止め、いつもの○○タイムで何故スワマが置いていったのか、何故紐で縛って行ってしまったのか教えてくれた。だがそれは全て自分勝手な話だった。ポカブの才能がないから自由に暮らすために置いていったというのは…以前のシンジもポケモンの能力値を見て、それでポケモンを逃がしたり捕まえたりとやっていたからそれは分かる。ヒコザルの件についても、最終的には自分の過ちを認めて謝り、仲直りすることができたから良かったことだ。

けれども、ポケモンの気持ちはどうなるんだ…。シンジは捕まえてすぐに能力値を見

てから逃がすかどうか決めていた。逃がされたポケモンはまだシンジのことをよく知らず、何の感情もなく行ってしまった。ヒコザル：いや、ゴウカザルのことも最終的には謝っていた。：けれど、ポカブとスワマの場合は違う。

ずっと一緒にいたというのに、才能がないからという身勝手な理由でポカブを捨てて行った：しかもポカブはスワマと一緒にいたいぐらいに懐いているというのに：ついてこられたら困るという理由で縄で縛ってだ：！

これはちよつと許せないよな。

——だが、その時にドン・ジョージさんが翌日にバトルをして決めたらどうかという話になったため、ここで解散することになった。ダブルバトルで相手は先ほど勝負で勝っていたクイタランとエンブオー。俺はもちろんポカブとツタージャだ。ツタージャはポカブのことを心配して、そして自分も以前トレーナーを見限り捨てたことがあったからこそ自らも勝負に出たいと言ってきたのだ。

スワマから離れて、そしてポカブと一緒にいろいろと話すために外に出る。ここからは俺たちだけでいいと言ってアイリスたちには離れてもらった。それで今いるのは俺とピカチュウ、ポカブとツタージャだけだ。本当ならこのまま明日の特訓をしたいとこ

ろだけれども…ポカブの気持ちを考えると少し無駄かもしれないと思い、話し合うことにした。

「ポカブ…お前もしかしてスワマのことまだ気にしてるのか？」

『…ポカア……』

『ピカピカチュウ？』

『ポカブウ……』

ポカブはおそらくスワマともっと一緒にいたかったのだろう。あの時捨てられたことにまだ踏ん切りがついておらず、スワマと一緒にいたい、まだスワマのポケモンでいたかったと思っているのかもしれない…。でも俺はそのままの気持ちでいたら駄目だと思う。ポカブの気持ちを分かっているうえで縄を縛って捨てたトレーナーを俺は許せない…もちろんピカチュウやツタージャも一緒だ。だからこそ、今のその心残りを振り切って、明日スワマとバトルしてほしいと思う。

「ポカブ…お前はそのままでもいいのか？」

『カブ？』

「才能がないって言われて、それで捨てられて…そのまま言われっぱなしでいいのかよ？」

『タジャ!!タジャタジャ!!』

『ピツカツチュ!!!』

『………カブウ』

『タジャア!!!』

『カブツ!?』

ポカブがうじうじとしているのが見てられないと言ってツタージャがポカブにつるで平手打ちをして叩く。ポカブは驚いてツタージャの方を見るが、俺はそれを止めようとはしない。ツタージャの言いたい気持ちが強くなるからだ。

『タジャ! タジャタジャア!!!』

『カブ…カブウ!!』

「よし、その調子だポカブ!!! 明日、思いっきりスワマに見返してやろうぜ!」

『ポカア!!』

『タジャ!!』

『ピツカア!!』

———まあ、そんなわけで。俺たちは翌日、バトルを挑んで勝負をすることになった。そしてその時に分かったスワマの所行。ポカブがまだ心残りがあつ

てバトルができずにいる光景を嘲り笑い、以前別れた時に悲しそうな表情を演技して別れたということを楽しそうに言って説明した。それを聞いたポカブがシヨックを浮かべるが、ツター ज्याと俺たちの言葉で我に返り、絶対に勝負に勝ちたいという気持ちでバトルに挑んでくれた。そしてスワマに対する感情から吹っ切れたおかげか、進化をすることができて、チャオブーになって強い炎で倒すことができた。

「良かったなチャオブー！よく頑張ったな!!」

『タ ज्या!!』

『チャオ!!』

「…戻れ、エンブオーにクイタラン……ふん」

勝負が終わり、喜んでいる俺たちに近づいてきたスワマは、チャオブーに向かって口を開く。

その間も俺たちは険しい表情を浮かべてスワマを見ていた。俺は抱き上げているツター ज्याを地面に優しく降ろし、スワマが謝罪をするのなら許すがそれ以外なら…という考えでスワマがという言葉を一言も逃さず聞こうと視線をスワマに向ける。

だが、スワマはやはり変わらなかったみたいだ。

「…何か言いたいことでもあるのか？」

『タジャ…』

「いや、素直に俺の負けを認めるよ…すまなかつたな、あの時お前を才能がないと判断したのは俺の間違いだったようだ。なあどうだ？お前がそんなに俺のことを忘れていないのなら戻ってきてもいいんだぞ？そんな冴えないトレーナーよりも、俺と一緒にまたやり直そうぜ！」

「……………ほう？」

『…タジャア』

…つまり、こいつはチャオブーの強さを認めたというのはいけけれど、また強いという理由でチャオブーを利用するということなんだと分かった。つまりは、またあの時の繰り返しをしようとしているわけだ。

……。
シンジはそんなことを言わない。すべてを認め、ゴウカザルに謝ったというのに

『チャオブウウウ!!!』

「うわッ!…くそ!!」 覚えてろよ!!」

「待て」

チャオブーはそんな何も変わらないスワマに向かって炎を飛ばし、怒っている。俺は逃げようとするスワマの腕を掴んで笑顔で言う。

こいつの性根を叩き直さないといけないみたいだということだけ分かれば十分だ。

「ちよつと話し合おうぜ？」

『ピツカア!!!』

『タジャタジャ!!!』

『チャオブウ!!!』

——その結果？ああ、スワマがチャオブーに土下座で謝り、泣きながら何度も謝罪してくれたからもう何も言わずに解放したぜ。

第一百十二話　妹達と時間の宝玉

「…え？ディアルガの通り道？」

『カゲカゲ？』

『ピチュウ？』

「そうだよ！これから向かう町ではディアルガが通る場所として有名なさ！」

「へえ…何か面白そうだな…もしかしたらディアルガに会えるってことか」

『ピカピカ！』

　こんにちはは妹のヒナです。これから向かう町にはディアルガがいる場所として有名な所ですよ。でもこんな話原作であつたかなあ……。というか、ここはイツシユ地方

だと言うのに、何でディアルガの話になるんだらうと疑問に思ってしまった…。

町はとても広く、ヒウンシティ程ではないけど、大きくて行きたい場所が様々あるところだと思えた。しかもバトル施設やショッピング市場、交換施設と豊富に取り揃えてある。まるで大きな町バージョンのジョインアベニューのような感じだと私は思えた。そして私たちはいろんな店を見て回って、町の中心まで歩いていくと、大きなディアルガの像が立っているのが見えてきた。ディアルガの像がとても大きく、宝石が入っているかのように煌びやかに太陽の光で輝いていた。その左右にはゼクロムとレシラムの像が立っている。そしてディアルガの像の後ろには何やら大きな時計が時間を刻んでいて、中心には大きくて丸い…まるで綺麗な水色の宝石が入れ込まれていた。

私たちはそれを見て感嘆の息を漏らす。

「へえ…やっぱディアルガが有名な町だから像があるのか…」

『ピイカ…』

「綺麗…私も会ってみたいわディアルガに…!」

『キバキバ!!』

「うーん…なんていうファンタスティックなテイストで溢れているんだ…!!僕はこれを見れてとても嬉しいよ!!」

「……実物はたまにマサラタウンにやってくるんだけどね……」

『カゲカゲ…』

『ああ確かに、イツシユ地方へ来る前にマサラタウンで何度か会っていたな…』

『ピチュウ？』

「ピチュウ…旅が終わってマサラタウンにいればわかるからね…いろいろとカオスだけど…」

『カゲ…』

『ピツチュウ！』

『確かにそうだな…夢と現実は何いものか……』

「ああそうだね…フシギダネに説教されてる伝説たちなんて普通は見たくないもんね…」

私たちは兄たちから離れた場所でひそひそと話していた。マサラタウンに伝説がいると言う話はあまりできないことだし、マサラタウンが伝説でいっぱいだと知られてしまったらいろいろと問題が起きるから話せない。…まあ今日の前にいるアイリスとデントなら話してもいいかもしれないけど、それは伝説たちと兄の話し合いによって決め

られることだ。：前にハルカさんがマナフィの案内で知ってしまった時も驚いていた
 ようだけど絶対に話さないと約束してもらったからマサラタウンは平和なんだけど、本
 当だったら誰にも知られてほしくない内容みたいだから私はむやみに話をしようとは
 思わない。騒がれたくない、問題を起こしたくないという理由で今もマサラタウンは平
 和なのだから……うん。平和だよな？いろいろとフシギダネのおかげで成り立ってる
 ような気がするけどまあ平和だろう。：とにかく決めるのは伝説たちや兄のことだか
 ら、私たちは関わらずに行こうと思う。

「ああああああああ??
 !!!!サ、サササトシ先輩!!!!」

「あれシューティー！久しぶりだな！ドンナマイト以来か？」

『ピカピカ！』

「はいお久しぶりですサトシ先輩!!それに皆さんもお久しぶりです!!」

「久しぶり、シューティー！」

『キバキバ！』

「はは……相変わらずパワフルなテイストだね、シューティー……」

「久しぶりねシューティー！」

『カゲカゲ！』

『ピッチユウ!!』

『久しぶりだな』

私たちの遠くから叫び声が聞こえて、何だろうと振り向いたらシューティーがいた。シューティーは嬉しそうな表情で兄に声をかけて：そして私たちに挨拶をする。：もしかしてドンナマイトの時のようにシューティー以外にも全員が集まっているのではないかと思ってしまう。でもこの場所からは見えていないし、大丈夫かなとルカリオにこっそり聞いてみようかと口を開く…。

「ね、ねえルカリオ…もしかしてシューティー以外にもいたりする？」

『…ああそうだな。近くにはいないようだが、この町にはいるみたいだ』

「ぜ、全員？」

『ああ、全員』

ルカリオが波動でいるかどうか調べてくれたようで、私はちよつとだけ嫌な予感がし

た。原作ではこんな話聞いたことないし、そもそもディアルガがこのイツシュ地方を通るだなんて話も聞いたことがない…だから、何も問題は起きないのではないかと思っただけ…もしかしたらもしかするから、ちよつとだけ警戒はしておこうと心に決める。その間にも兄たちの話しはかなり盛り上がり上がっているようだ。

「シューティー！後で俺たちバトル施設に向かうけど…その時一緒にバトルしようぜ！」

『ピツカア！』

「はい!!ぜひサトシ先輩と勝負させてください!!全力でサトシ先輩に挑みますから!!!」

「おう!楽しみにしてるぜ!」

『ピツカツチュ!!』

「い、いいいえ!こちらこそ本当にありがとうございます!!!」

「……だから土下座はやりすぎだつて…」

『ピイカ…』

まあちよつとシューティーが暴走してるところもあるみたいだけど、いつも通りだ。そして私たちはシューティーと別れて、今日泊まるポケモンセンターに行くことになった。ちよつとだけ離れた場所にあるこのポケモンセンターで受け付けを済ませ、さあ遊びまくるぞと意気込んだ時だった――。

「へ!?!泥棒?!?」

「そうよ!!時計塔にある《時間の宝玉》を盗まれたの!!!早く捕まえて戻さないと大変なことになるわ!!!」

「ねえ私たちも探しに行きましょう!!」

『キバキ!!』

「そうだね!手伝えることはやった方がいい!!」

「よし行くぞ!!」

『ピツカア!!』

「ルカリオ!どこにいるのかわかる!」

『カゲカゲ!』

『ピッチユウ!』

『…いや、…どんな人物が盗んでいったのかわからない今、人が多いこの町全体を探すと
なると…』

「とにかく手当たり次第探しまくるしかないだろ!」

『ピッカア!!』

ジュンサーさんが町全体に警報を発して、何があつたのか教えてくれた。町の中心にある時計塔に埋め込まれている水色の宝石：つまり、《時間の宝玉》が盗まれたということ、その宝玉を早く元に戻さないと何やら大変なことになるらしいということだ。私たちはまず泥棒が隠れそうな場所を探し回る。その時に出会ったシューティーたちにも事情を説明して皆で手分けして探していき：そして私とヒトカゲ、ピチューと兄とピカチュウ、ルカリオとデントとアイリスとキバゴが見つけたのは、泥棒が宝玉を持って逃げようとしている場面だ。

…まあとにかく、兄たちに会ってしまった泥棒に同情するしかないと思って遠い目で合掌してしまった。これも運の尽きだから頑張れ泥棒…。

「…見つけたわ!!」

『キバキバ!!』

「良かった…よしジュンサーさんに伝えに行こうぜ!」

『ピツカツチュ!』

「……………あれ?ちよつと待つてサトシ…何だかその宝玉、光つてないか?」

「え?…うわつ?!」

デントが指摘して、私たちが恐る恐る近づいて見つめた瞬間、その宝玉は瞬く間に光り始め、町全体を覆うほどの輝きを増していった。まるで太陽の近くに立っているような輝き…光り過ぎて真っ白で何も見えないぐらゐの輝きが私たちに襲いかかった。私とヒトカゲ、ピチューはルカリオに抱きしめられながら、兄たちもそれぞれ警戒してお互いピカチュウやキバゴを守りながら…デントは泥棒が逃げないように縄を掴んでい

ながらも待つていた。目を開いておられず、私たちはそれぞれ目を閉じてその光が収まるのを待つ。

…なんだか私はこの時、ときわたりに巻き込まれた時の…そしてルカリオがマサラタウンに来た時のあの輝きに似ていると感じてしまった。

そして輝きが収まった瞬間、私たちはようやく目を開けることができた。目を開けて周りを見ると何も変わらない町の様子が見えてくる。縄で縛られ、倒れている泥棒もあるし…何も変わっていないのかなと思った。

「何も…変わってない?」

『カゲカゲ?』

『ピチュウ?』

『…いや…これは…』

「どうかしたかルカリオ?」

『ピツカ?』

「ちよつと待つて、その前にこの泥棒をどうにかするのが先よ…まずは町の中心の広場

に行ってみましょう」

『キバキバ』

「そうだね。あと、宝玉を戻さないといけないだろうし…広場に行ってみよう」

私たちは泥棒を引きずりながらも歩きだし、そして広場の近くにいたジュンサーさんに泥棒を引き渡す。そして宝玉を戻そうと…したのだけれど…。

「あれ!?時間の宝玉が………ある!?!」

『キバキバ!?!』

「どういふことだ!?!なんで宝玉が…!」

『ピツカア!?!』

「これは…ちよつと調べてくるわね…協力を感謝するわ!……でもここからは私たちに任せて戻りなさい」

「わ、わかりました…ありがとうございますジュンサーさん…」

ジュンサーさんがアイリスが取り戻した時間の宝玉を手を持ち、バイクに乗っているいと調べに行ってしまった。私たちはお互いに顔を見合わせて…そして時計塔にある時間の宝玉を見つめる。本当ならジュンサーさんの手にあるものこそ先程盗まれた時間の宝玉なのになんでなんだろう…。

「これってどういうことなんだろう…：そういえばルカリオ、なにか言おうとしてなかったっけ？」

『カゲカゲ？』

『ピチュ？』

「…ルカリオ、何かわかったのか？」

『ピツカア？』

『…すぐにわかることだ』

そう言って、ある方向を指差して教えてくれた。私たちがその方向を見ると、ありえない人物たちが私たちを見ていて…？

「ええええええええええ
お…俺!？」

『ピイカ!』

!!!!???

「な、ななな何で私たちがいるの!？」

『キバキバ!』

「これは一体どうということなんだい!？」

「…え？」

『…ピカ?』

「…どうということなの？」

『キバキ?』

「何というミステリアスなテスト…僕たちが目の前にいるだなんて…」

「…えええええ!？」

『カゲカゲ…』

『ピツチュ?』

『…どうやら、町全体の人物が増えているようだな…それもお前たち含めて』

——目の前にいるのは、兄たちに似た人物。そして：偽物なんかじゃなくて本物だと分かった。でもドツベルゲンガーのような彼らは私たちを見て驚いている。ただし、目の前にいる彼らは私やヒトカゲ、ピチユーやルカリオが傍にいない。その様子に、何故なのだろうか：私ははつきりと直感した。

私の直感は、間違いなく目の前にいる兄たちが：《サトシ達》が原作の存在だと分かってしまったのだ。

第百十三話　妹はカオスな光景を目撃する

こ、こんにちは妹のヒナです…。なんだかすっごい光景が目の前に広がってたりしちゃいます……。これって普通ならあり得ない光景だよね…。

「へえ…ここにいるルカリオってホウエン地方にいたあのルカリオなのか…それに俺に妹なんているのかそっちの俺!!」

『ピカピカ!!』

「あ、あまああな…じゃあお前は一人っ子か…頑張れよ」

『ピツカア…』

「ヒトカゲやピチュー、ルカリオなんて始めて見たわ!! いいなあそっちの私!!」

『キバキバ!!』

「まあね…でもいろんな場所を旅していけばいずれ会えるわ。だから羨ましがらずに旅を続けなさい」

『キバキ』

「んーなんというミステリアス漂うテイストなんだろう!! まさか僕自身に会えるだなんてね!!」

「僕もそう思っていたよ!! とところでソムリエとして聞きたいことがあるんだけどちょっといいかい!」

「もちろんだよ!!!」

「誰が誰だかわかんなくなってきたちゃった…」

『カゲカゲエ…』

『ピチュウ…』

『同一人物だからなおさらだな…』

同じ格好に同じ顔、そして同じ声というドッペルゲンガ―もびつくりな光景に私たち

は遠い目でそれを見つめていた。兄たちとは違う…原作の《サトシたち》は私たちのことを見て興奮し、何でどうしてと説明を求められた。私たちは時間の宝玉を泥棒が盗んでいったということ、それを取り返したこと。そして時間の宝玉がいきなり光り出して…そして気がついたらこうなっていたということ話を話していった。デントが考えて、おそらくパラレルワールドに町ごと入り込んでしまったのかもしれないねと言っていて、私はその推理に頷いてしまった。私たちは…パラレルワールド…つまり原作の世界に迷い込んでしまったのだろう。

そしてどうやって元に戻ればいいのか、どうすればいいのかわからないまま、原作のサトシ達とは違うところを話していく。

でも、このままここで話し合ってもよくないだろうと思う。周りでは自分自身がいると言うことに騒いでいて、どうしてだという疑問の声がこちらから聞こえてくるのだから。解決するためにも行動した方が良いとは思うんだけど…兄たちが原作のサトシ達のテンションの上がりっぷりにちよつとだけ引きながら答えていて、これはしばらく収まらないなとルカリオと一緒に見ていた。…あ、でもデントは原作のデントと一緒に…盛り上がっているみたいだね。

「…これ、このままでもいいと思う？」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『…他の場所にいたとしても何も解決はしないと思うがな』

ルカリオが私たちにそう答えて、離れた場所で兄たちを見守った。確かにルカリオの言っていることは分かる。このままここにおいても何も解決はしないけれど、他の場所にしたとしても同じ結果だろうと思う。ジュンサーさんが調べると言った今、解決できるのは彼女にかかっているのだから…。

そんなことをしていたら、原作のサトシがある人物を見て手を振って大きく叫んだ。

「おーいシューティー!! 見ろよ凄いで!!」

『ピツカア!!』

「シューティー…?」

『ピカア…?』

「……………」

「面白いだろシューティー! 俺たちがパラレルワールドから来たんだってさ!!」

『ピツカツチュ!!』

「…この町の騒ぎだからそう言う話はもう聞いているよ…パラレルワールドから来たということもね…でも、君は何も変わらないみたいだ」

「…どういう意味だ」

『…ピツカ』

「おい落ち着けてそっちの俺!…そうだ。なあシューティー後でバトルしようぜ!」

『ピイカ!』

「嫌だね…何で君のような田舎者とバトルなんか…」

「……………」

『……………』

原作のシューティーは兄とピカチュウの地雷を見事に踏みまくっているみたいだ。見事に無表情になっていく様子に離れた場所から見守っている私たちはともかく、兄た

ちの近くにいたアイリスやデントが：原作のアイリスたちの腕をつかんで危険範囲から離れようと動く。当然その様子に何なのか分かっていない原作のアイリスたちは首を傾けてどうしたと聞いているけど、私たちの世界のアイリスたちはとにかく危ないから離れた方が良いというだけにしておいたようだ。

：けれど、そんな危険な雰囲気は原作のサトシが朗らかに笑みを浮かべてシューティーに言ったおかげで霧散する。

「俺たちは強いぜシューティー！な、ピカチュウ！！」

『ピツカア！！』

「……………まあ、いいか」

『……………ピカ』

「あ、大丈夫みたいね」

『キバキバ』

「だからどうしたのよ一体!？」

『キバ?』

「気にしないでいいわ。どうせすぐにまた起きることでしょうから」

『キバキバ…』

「どういう意味よ?…はあ、説明しないなんて、こつちの私は随分と子供ねエ…」

『キバキバ』

「……まあ、いいわ」

『……キバ』

「だからどういうこと何だい?」

「すぐにわかることさ。とにかく巻き込まれたら危ないということだけ伝えておくよ」

「………?」

それぞれが説明をして、何とかなっているみたいだ。この状況なら大丈夫かなと私たちは兄たちのもとへと行き、やって来たシューティーに頭を下げて挨拶をする。

「…こんにちは、シユーターさん」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

『……………』

「これは?!…まさか、色違いのヒトカゲ?!それにピチュールカリオも!!!?」

とたんにカメラでヒトカゲを中心にピチュールカリオを撮っていくシユーターに私は来る場面を間違えたかなと思ってしまった。私とヒトカゲ、ピチュールカリオはシユーターのカメラを嫌がる素振りを見せず、むしろ近くにいた兄たちを怖がっている。兄はもちろん、ピカチュウやルカリオもかなり機嫌が悪くなっていてこれはヤバいと思った。もちろんそんな様子に気づかない原作の人たちはただシユーターのカメラを撮る様子を苦笑しながら見つめていた。

「…あの、もういいですか?」

『…カゲ』

『…ピチュ』

「何を言っているんだい君は!?!色違いなんて希少価値をもういいですかで済ませるだなんて!?!」

「いやでもシューティー…嫌がつてるみたいだからもう撮るのは止めてやれよ」

『ピイカツチュ!』

「これだから希少価値の分からない田舎者は…邪魔だからどけ!」

「おいシューティー!」

『ピカピカ!!』

「……オーケー。話し合った方がよさそうだ…」

『……ピツカ』

『……………』

このままだとやばい…主に兄たちの様子がやばい…。このままじゃいけないと私たちはアイリスたちの方へと見るけど、あっちもあっちで先程起きた行動について問い詰

められていて気づいていないみたいだ。原作のサトシはシューティーの田舎者発言に怒っているみたいだけど、こっちの兄の怒りっぷりは凄まじいから大丈夫なのかなと心配になってしまった。…というか原作のサトシってかなり天使みたいだね…さっきまではシューティーに怒らないのに今は私たちが迷惑していると分かると止めようと怒ってくれてるし…ああもうだれかどうにかしてこの状況を変えてほしい。兄とピカチュウ、ルカリオがゆつくりとシューティーに近づいていて、悲劇まであと数秒だとカウントされる。…もう駄目だ。

———そう思った…時だった。

「あああああ!!?…サ、サトシ先輩がもう一人いる
!!!?????」

「サトシ先輩？」

『ピカピカ？』

「…この状況は望んでいなかったよ…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

私たちの世界のシューティーが来たことによつて、そしてそのシューティーの発言に原作世界の人物が声をそろえて疑問に思つてしまったことによつて…この場がもつとカオスになるだなんて思いもしなかつた。私たちはため息をついて、騒動が収まるのを待った。

でもしばらくの間、私たちの周りが騒がしいということ、カオスな状況は言うまでもないだろうと思う…。

第百十四話く兄たちは状況を確認する？く

こんにちは兄のサトシです。…ちよつとイラツとくるシユーティーに会ったんですけど、今度は俺たちの世界のシユーティーに会って驚いた様子で騒ぎ始めたから、俺はやろうとしていたことを止めたため息をつく。騒いでいる間にルカリオが何か考えたのか、妹達を少し遠くに移動させ守るように背に隠している。…まあこれは仕方ないだろう。またこの異世界のシユーティーになにかやられたらヤバいからな…。

というか、異世界のシユーティーというよりも、おそらくこの目の前にいる俺たちは原作世界の人物たちなのだろうと直感している。何というか、妹達を知らず、ルカリオがマサラタウンから来ていないと言う世界は原作なのではないかと思つたからだ。まるで最初の頃に会つたシユーティーやアイリス、デントだと思えるぐらい懐かしいと感

じる部分があつたというのも要因になっていたりする。…まあそれはともかく。

俺は遠くの方にいるもう一人のシューティーに手を上げて挨拶する。それを見た俺たちの世界のシューティーは反応しものすごい勢いで走って俺に近づき、90度の角度で挨拶をする。

「ようシューティー。さつきは手伝ってくれてありがとうな」

『ピカ』

「いえ！サトシ先輩の頼みならばどんなことでもやります!!」

「な、え、どういうことだよ一体?!シューティーの性格が全然違う!」

『ピカツチュ!?!』

「こつちの僕はもしかしてパラレルワールドの…クツ、何でサトシなんかを先輩として敬っているんだ!!」

原作の俺…まあつまりサトシ達は俺とシューティーを見て驚いたような表情を浮かべている。もちろんさつきまで争っていたらしい原作のアイリスたちもシューティー

の異変を見て驚いた様子で俺たちの方に近づいていく。…というか原作のシューティーかなり性格酷くないか？なんだよサトシなんかって…こっちの世界のシューティーも、もしも俺が最初やらかしてなかったならそうなっていたのかなとふと考えてしまった。…いやそれだと余計に俺暴走するなとも思う。ちよつと後でシューティーに関していろいろとやろうと心の底で決意しながらも、俺たちは話を聞く。やはり原作世界のアイリスたちの反応と、俺たちの世界のアイリスたちの反応とは全く違っていた。

「ど、どうということなのよ!? 何でこっちのシューティーはサトシを先輩って呼んでいるのよ!!!」

『キ、キバキバ!!!』

「さすがパラレルワールドってことだけはあるみたいだね…うーんファンタステイック…」

「…まあサトシだからとしか言えないわよね」

『キバキバ』

「こればかりは僕たちも説明しにくいかな…」

俺の世界のアイリスたちが苦笑しながらその様子を見守る…というか、お前ら俺にばっかり押し付けられないでちゃんと説明しろよ。まあ説明しにくいとは思うけどさ。どうして性格が変わってしまったのか、そして何故俺のことをサトシ先輩と呼ぶのか…まあ原因はぶつちやければ俺のせいだろう。

最初に出会った時、いろいろと準備をして、基本しか語らなかつたシューティーの心をバツキバキに叩き折り、負かしたことがある。そして意気消沈なシューティーに他の地方から来たトレーナーに対する礼儀や、強さについての話を叩き込んでいった。そのおかげでシューティーの心境に変化が起こり、ポケモントレーナーとして必要な強さだけではないということを知ることができた。実は俺はそういう意味で説教等をやらかしたわけではない。あの時妹達に言った言葉、そしてその嘲るような暴言を許せなかつただけなのだ。

だけど、シューティーの態度を改めるためにやったことだったけど、結果的には良かったと思つた。ポケモントレーナーは強さだけではないと俺も感じているから…本当に良かった。

そしてアデクさんと出会つた時に俺は気づいた。あの時、シューティーは悩んでいた

のだ。アデクさんに幼い頃言われた言葉を信じて強さだけでポケモントレーナーとしてバトルに勝ち続けようとしていた。それ以外の弱さはいらないと排他的になっていた。でも俺たちと出会ってその考えは改められ、ポケモントレーナーとして必要な強さを学んでいったのだろうと思う。俺たちと出会って…そして旅をして——ポケモントレーナーとしての本当の強さを知った。だから、俺たちの世界のシューティーは強いと…俺はそう思っている。シューティーもいろいろと悩んで、迷って…そしてアデクさんと話した時に目標を決めたようだと感じた。感じたと思ったのはドンナマイトで再会した時。自分に必要な強さ…そしてポケモンを大切にする優しさを持って他の地方関わらずに皆と平等に接しようとしてくれていると分かったのだ。そんなシューティーを…《後輩》を俺はとても強いポケモントレーナーになるのかもしれないと思っているし、そうなるように学んでもらう部分は教えたりもしている。…まあ土下座とかやりすぎなところもあつたりするけどな……。

そう思いながらも、俺はシューティーと会話を続ける。もちろん大量の疑問を頭に浮かべながら騒いでいる原作世界の俺たちを無視して…。

「あ、そうだ！サトシ先輩!!後でバトルをしてくれるという約束…よろしくお願いしますね!!僕、ずっと待ってますから!!」

「おう…まあとにかくこの状況をどうにかしたらバトルしような
『ピカピカ』」

「え、この状況?…:…:な、先輩だけじゃなくて僕もいる
!!!??」

「遅い!!こつちの僕は鈍感か!!?」

「へえバトルする約束してるのか!そつちのシューティーも俺とバトルしようぜ!!」
『ピカピカ!!』

「え…サトシそういう問題じゃないでしょ!!子供ね…」

『キバキバ』

「はは…パラレルワールドだからこそ、性格も違うってことかな…」

「え、ちよつと待って…気づいてなかったの?」

『キバキバ!!』

「ははは…」

「カオスすぎるでしょ…」

『カゲエ…』

『ピチュ…』

『……………』

何だかこっちの俺たちと原作世界の俺たちとは全然違うみたいだなと印象に残った。シューティーも俺たちと関わってきたことでいろいろと性格が変わっているというのとは分かっているし、アイリスたちも変わってきたのは知っている。でもこんなふうに比べてわかるのは面白いと思う。それに原作の俺…まあつまり、サトシもかなり天然というか、バトルが好きということが分かったというか…まあいいか。俺はため息をつきながらも、シューティー達に話しかける。

「とにかく、原因を突き止めねえとな…さつき調べに行つたジユンサーさんに聞きに行こう…つて何だ？」

『ピイカ？』

「え？」

『ピカ？』

何か声が聞こえたと思い、俺とピカチュウは後ろを振り向く。するとポケモンのおとしん並みの勢いで走っているベルがいた。…というか、あつちのベルも原作世界のベルだと思った。最初に出会った頃もあんな感じだったよなと懐かしんでしまった。…でも懐かしむ暇もないみたいだ。

「どいてどいてどいてどいてええええ!!!」

「うわああ!!!」

『ピイカア!?!』

「おっと…大丈夫かシューティー?」

『ピカツチュ?』

「サ、サトシ先輩が僕を助けてくれた!!…グハア!!」

「おいシューティー!?!」

『ピカ!?!』

ベルが原作世界のサトシと俺を押し近づくにあつた池に突き落とそうとしたため、俺はそれを避ける。でも原作世界の俺と肩に乗っていたピカチュウは避けることができず、そのままぶつかつてしまい池に落ちてしまった。助けられたらよかつたんだけど、俺と少し離れていたからとつきに行動できず無理だった悪いな。

俺の世界のシューティーがベルの衝撃で転びそうになつたため腕を掴んで助ける。そして助けた俺に感激してしまい白目向いて気絶してしまつた。：原作世界のシューティーはすこし離れていたから助かつたみたいだ。でも俺の世界のシューティーを見て愕然としている。ま、まあ白目向いて気絶する自分の姿は見たくないよな…。

「あれ？サトシ君たちが2人ずついる？…というかそつちのシューティー君どうしたの？」

「ははは…さらなるカオス来た…」

『カゲエ…』

『ピツチュウ…』

『……………』

「うわぁ可愛い!!ねえ君、その子たちと私のポケモンと交換して!!!」

「え!?嫌です!!!」

『カゲ!!』

『ピチュ!!』

『おい、ヒナたちに近づくな』

「ポ、ポケモンが喋ったアア!!!?」

「えええルカリオって喋るの!?!」

『キバキバ!?!』

「始めて見たよ!!イツツミラクル!!」

「何!?!もつと僕にも見せろ!!」

『ツ…だから近づくなお前ら!!はどうだん打つぞ!!!』

「…ああ、そういえば俺たちが出会ったルカリオも喋ってたなあピカチュウ」

『…ピイカツチュ』

「それでいいのかそつちの世界の俺……」

『ピカピカ…』

「あ、ありがとうお兄ちゃん」

『カゲ』

『ピチュ』

「ああ。というよりも、もうあいつらに近づくなよ…」

『ピカピカツチュ…』

「うん、分かってる…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

原作世界の俺たちってかなりフリーダムだと思いつつも、妹とヒトカゲ、ピチューをあいつらから離して俺の背に隠す。というよりも、水浸しの原作世界の俺をどうにか乾かさないといけないんじゃないのかと思考の片隅で考えながらも、このままじゃ何も解決しないと思う。ルカリオがそろそろキレて本当にはどうだん放ちそうで危ないし…。

ベルの妹達に対する交換発言は後で話し合うとして、はやくジュンサーさんに会いに行き、この状況を何とかしなければとため息をつきながらも行動を開始した――

第百十五話く妹達は解決策を知った？く

こんにちは妹のヒナです。ようやく騒ぎが収まって原作世界のサトシの服も乾き、ジュンサーさんのもとへ行くこうということになり、現在歩き始めてます。……ですが何故だか私たちの世界のシューティーと原作世界のシューティーが歩きながらお互い睨み合って怒鳴り合い、争っています……どうということなの。

「だから言っているだろう!!サトシ先輩はとてすごい御人なのだ!!!」
「それがくだらないと言っているんだ!!何故サトシなんかを先輩と呼び、敬うのか僕にはとても理解できないね!!」

「…サトシ《なんか》だと…上等だ。バトルで決着をつけようかそっちの世界の僕!!も

ちろん勝つのはサトシ先輩を心底尊敬しているこの僕だ!!」

「なにを言っているんだ!この僕こそ勝つに決まっているだろう!!」

「おい落ち着けてシューティーにシューティー!」

『ピイカ…』

「もう…本当に子供ね…」

『キバア…』

「お互いの性格が合わずに自分自身同士で争い合う…うーん…パラレルワールドの映画でよく見られそうなシーンだ」

「何かよく分からない…けど私、そっちのルカリオ達と交換したいなあ…うう…」

「ベル、まだそんなこと言ってるの?あなたも本当に子供ねえ」

『キバキバ…』

「…もう、どっちがどっちなんだか…お兄ちゃん止めなくていいの?」

『カゲ?』

『ピチュ?』

「いや、もう放っておこうぜ……とにかく原因さえ分かれば元に戻るんだから……」
『ピカピカ……』

「そうねサトシの言う通りよ……ジュンサーさんは何処にいるのかしら？」
『キバキ』

「たぶんポケモンセンターかな？あそこは他のポケモンセンターと違って大きくて町の情報網として便利だと聞いたことがあるよ」

『そうだな……波動でもそちらに近いようだ』

「よしじゃあそっちに行こう」

『ピカツチュ』

———というわけで私たちはそのままポケモンセンターへ向かうことになった。途中でダブルシューティーがバトルしに行くと言ってバトル施設に向かつてしまい、原作世界のベルも交換施設へと向かって行ったため、私たちはそれを見送りながらも到着した。……そういえばダブルシューティーと別れる直前、私たちの世界のシューティーは律儀に挨拶をしてから向かったため、原作世界のサトシはともかく、アイリスたちに引かれていたみたいだけどね……。

そうして到着したポケモンセンターにはジュンサーさんの姿…と、ベルの姿がいた。さつき交換施設に向かったのが原作のベルなら、こっちのベルは私たちの世界のベルで間違いないだろう…:というか、なんだかこっちの世界とあっちの世界言いすぎて…混乱してきた…。

そしてベルがお嬢様のような雰囲気漂う仕草でこちらに挨拶してきたことに原作世界のサトシ達は驚いているようだ。

「あら?先程ぶりですわ皆さん…:どうかしたんですか?」

「えええ!?べ、ベルの性格が激変してる!!?」

『ピカア!?!』

「こっちのベルもシューティーと同じく違うってこと!?!」

『キバキバ!?!』

「な、何だかもう見慣れた光景だけど驚いちやうね…:」

「ようベル!さつきは泥棒探し手伝ってくれてありがとうな!」

『ピツカア!!』

「いえ、私にできることでしたらお手伝いはしますわ」

「ありがとうベル！」

『キバキバ!!』

「ははは……さっきのベルと比べてしまうよ……懐かしいテイストだね……」

「あの、比べるというのは……?というよりも、何故サトシ君たちが増えているのでしょうか?ヒナちゃんたちは違うみたいですけど……?」

「あ、えつと……実はね——」

私がベルにすべてを説明している間、原作のサトシ達は、兄たちと一緒にジュンサーさんのもとへと向かって行った。いろいろと聞きたいような表情を浮かべていたけど、兄が話さないのなら私たちは話さないのも何も言うつもりはない。……というよりも、兄が暴走してこうなっただなんて言えないよね。

私の世界のアイリスたちと密かに話し合って決めたことなので、何か聞きたければ兄に聞けと視線で言ったからまあ大丈夫だろう。原作世界のアイリスたちは言いたくない

いと言うことが分かったのか何も言わない。でも原作世界のサトシは普通に兄にどういふことなのか聞いてるんだけどね。それに兄は暴走した結果あんなただけだよ。言っていたけどそれって説明になってないような……まあいいか。

「なるほど…それではこの町に異世界の私もいるということなのですね」

「うんそういうことになるかな…」

『カゲ』

『ピチュ』

「ですが…ヒナちゃんたちの姿が見えないようですが…いったいどちらにいますのう？」

「ああいや、私たちは…居ないことになってるといふか……なんといふか」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

「え？もしかして異世界のサトシ君には妹はいらっしゃらないのですか？」

「う、うんそうなってるみたい」

「そう…でも、私たちの世界では生まれてきてくれたのですから、そのことに祝福しなければなりませんね…生まれてきてくれてありがとうヒナちゃん」

「…ベル…こちらこそ出会ってくれて、ありがとう」

『カゲカゲ!!』

『ピチュピツチュ!!』

「もちろんヒトカゲとピチューとも出会えて凄くうれしいよ！」

『カゲカゲエ!!』

『ピツチュ!!』

「ふふ…」

ベルとの説明が終わり、ちよつとだけほのぼのとした雰囲気私たちは笑い合った。ベルが私に生まれてきてくれてありがとうと言ってくれたのがかなり嬉しかった。原作世界は違うけれど、兄たちのいる世界に生まれて私も嬉しい良かったよ。

…そう思った時、ジュンサーさんたちの方から驚愕しているような叫び声が聞こえてきた。

「ええええええ???
!!!!!!!」

「…何かあったのかな?」

『カゲ?』

『ピチュ?』

「行ってみましようか」

私たちが兄たちの方に近づくと、ジュンサーさんが悲しそうな表情で何かを言っているのが聞こえてきた。

「…まだ詳しくは分からないけれど…私たちの宝玉とそちらの世界の宝玉をどうにかして力を重ねないとうまく元の世界に戻れないみたいなのよ」

「じゃあ…じゃあ俺たちはこのままってことなのか?」

『ピカピカ?』

「…でも、力を重ねれば元に戻るんだよな?」

『ピイカ?』

「ええ、でもどうやってやるのか方法が分からないのよ…」

「…どうやるのかわからないかもしれないけど…何とかやってみなきゃわからないだろ

!!やってみようぜ!!!」

『ピツカア!!』

「だから、どうやるのかわからないから困ってるんですよ!! サトシだったら子供ねえ…」

『キバキ…』

「…でも、こっちの俺の言うとおりに、何もやらないのも分からないままだ」

『ピイカ…』

「う…それはそうだけど…何よサトシのくせに…」

『キバ…』

「…はいはいそう言わないのこっちの私。サトシ達のやることに私たちも手伝いましょう」

『キバキバ!』

「分からないということに挑戦する…これは…」

「…僕たちの出番というわけだね!!」

「どうしたのルカリオ?…何があつたの?」

『ああヒナ…いや、もとに戻す方法が見つかったんだが、宝玉同士の力を重ね合わせないといけないらしいんだ』

「まあ、それは大変ですわね…」

「重ねる…力をうまく同じ時間に使わせるってこと?」

『カゲ?』

『ピチュ?』

『それが分かれば苦労はしない…』

ということ、時間の宝玉でどうにかして力を重ね合わせないといけないらしい…ダブルデントがちよつとだけ煩くなってきたらただけ、まあ兄がどうにかして止めるだろうと思いつくだけでも考える。どうやって元に戻すのか…その方法を考えなければいけないと焦りながらも…。

第百十六話く妹達は苦笑するく

こんにちは妹のヒナです。ベルが他にも何か方法が見つかるかもしれないですわと言つてジュンサーさんの手伝いに行つたため、私たちは時計塔の広場にあるもう一つの宝玉を見に行くことになった。どうやら原作世界のサトシ達はまだ見ていないようで、どんな形をしているのだろうかといういろいろと期待しているようだ。

その前にデント達がイツツ・サーチ・タイム!!と言つて煩くて兄がやらかしたんだけどね…まあこんな感じで…。

「おいデント共、それ以上煩くするならこっちもいろいろと考えがあるぞ」
『ピイカ』

「…あ、ああごめんサトシ…凄く反省してるからその握られてる拳をといてくれないかな？」

「…どうかしたのかい異世界の僕？」

「ほらパラレルワールドの僕も謝らないと…こっちのサトシを怒らせたなら駄目だ…！」

「…えつと…ごめん…？」

「…俺を怒らせたなら駄目ってどういうことなんだ？」

『ピイカ？』

「サトシったら子供ね…サトシじゃなくて、あっちのサトシのこと…つてもう何だかややくこしいわねー！」

『キバキバ!!』

「はは…とにかく、サトシ…さん?…気にしなくても大丈夫ですよ」

『カゲ』

『ピチュ』

「そうか…? あ、俺のことは呼び捨てで構わないぜ。というかそっちの世界では妹なんだから…だから向こうにいる俺と同じような接し方してくれないか？」

「…え、いいの？」

「ああ、俺も妹ができたみたいで嬉しいからな！」

「…うん分かった！……サトシお兄ちゃん！」

「良かったわねヒナちゃん。もう1人お兄ちゃんができて」

『キバキバ』

『まあこつちのサトシは問題を起こさないみたいだから…良かったな』

「うん！」

『カゲ…カゲカゲ！』

『ピチュウ!!!』

「ヒトカゲやピチュー達もサトシお兄ちゃんと一緒にいいって！」

「良いぜ！よろしくなヒナにヒトカゲにピチュー!!」

『ピツカア！』

——というわけで、兄がデント達を止めている間に、私たちがほのぼのと話し合っていました。原作のサトシのことを私はサトシお兄ちゃんと呼ぶことにした。その方が呼び分けしやすしい…でも兄がたまに反応するから呼び分けはできてないかなとちよつとだけ思っていたり…まあいいか。

そして広場について、時計塔にあるもう一つの水色に輝いている《時間の宝玉》を見る。原作のサトシ達はその綺麗な輝きに感嘆の息を漏らし、一方で私たちは真剣にどうすべきか考える。

まあこんな感じで…。

「凄いなピカチュウ…あれが時間の宝玉なんだ…！」

『ピッカア!!』

「なんて綺麗なの…それにゼクロムとレシラムの像もあつてとても幻想的ねキバゴ!!」

『キバキバア!!』

「うーん…なんてグレイトなテイスト…こんなにも素晴らしいのは見たことないよー」

という様に原作世界のサトシ達が綺麗な像と宝玉に目を輝かせている一方で、私たちは真剣に悩み、考えている。…もしかしたら私たちが見てない方だったとしたら原作世界のサトシ達のように感嘆の息を漏らしていたかもしれないと思いつつ、考えて話し合う。

「…重ねるか…宝玉を物理的に重ねてみたいけどそれだと壊れる危険もあるしな…」

『ピイカ…』

「それよりも力を使わせるんだから…あの宝玉も時計塔から取り出してみたらどうかしら？最初にごうなつたのつて光り出してからでしょ？」

『キバ？』

『確かに…光り出してから町に異変が起きたのは確かだ…力を使わせるとしたらあの光りが原因だろうな』

「じゃあ、アイリスの言う様に時間の宝玉を取り出してみる？」

『カゲ？』

『ピチュウ？』

「…いや、今やつても何が起きるのかわからないから危険だよ。やるなら2つの宝玉をそろえてからでないといけないね」

「…さつきジュンサーさんの所に行った時に宝玉借りてくれば良かったな」

『ピカ』

「いやお兄ちゃん…大切な宝玉を普通に借りてもいいとは思えないよ…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

話し合っても分からない解決方法…どうすればいいんだろうと思っていて、原作世界

のサトシ達も私たちが考えていることに気づき一緒に話しあおうと近づいた時だった。

「あら？久しぶりじゃないアイリス!!」

「なっ!?! ラングレー…」

『キバキバ…』

「…ん？ラングレー？」

『キバ？』

「って何であんた達2人もいるのよ!?! 分裂したの!?!」

「…うわあ…新たなカオスが来た…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『騒がしいのは懲り懲りだ…』

ラングレーがアイリスに気づいてこちらに近づいてきたので、話し合いは中止することになった。…というか、あのラングレーはおそらく原作世界のラングレーだと思う。兄たちを見たら領いてくれたし間違いないだろう。アイリスのことを怖がってないから絶対にそうだと思う。

原作世界のアイリスはラングレーを見て嫌そうな表情を浮かべていて、私たちの世界のアイリスはただ首を傾けていただけだ。…凄く懐かしいけど…大丈夫かな。主に兄ではなくアイリスの暴走が…。

そしてラングレーに何があったのか説明した。途中で私たちを見て、そしてヒトカゲを勝手にドラゴンタイプだと勘違いしてバトルしようとしてきたけど何とか私たちの世界のアイリスと兄が止めてくれて誤解を解いてくれたから良かった。でもそんなドラゴンタイプに執着するラングレーを見てヒトカゲは怖がって私の背に隠れてしまった。…まあ仕方ないと思うかな。でも後でヒトカゲに何か美味しいものでも買ってあげようと思いつながら苦笑した。ごめんね怖がらせて…。

「ふーんなるほどね…異世界の私たちがこの町にいるってこと?」

「おう、そういうことだぜ」

『ピカ』

「な、何よラングレー…何考えてるのよ」

『キバキバ…』

「ははは…ほら落ち着いてアイリス…」

「じゃあ、この私と異世界の私でバトルしたら、どちらが優れているのかすぐにわかるってことでしょ？早く探して私自身を見つけないとね!!私自身だったらバトル施設でドラゴンタイプを見つけてバトルしてるはずよ…あ、アイリスあんた達も一緒に来るのよー」

「え…どういうことよ!？」

『キバキバ!!』

「なんでそうなるのよ…」

『キバア…』

「どっちのアイリスもドラゴンマスター目指しているんですよ？なら私に潔く倒されて夢を散らせてあげようかと思っただまですよ!!」

「上等！私があなたに負けるわけないでしょ!!」

『キバー!』

「……………いいわよ、バトルしても」

『……………キバ』

これもう反応を見たらすぐにわかるよね…。私たちの世界のアイリスが兄に似たように不機嫌な表情でラングレーを見て、そしてバトルを受けようとしている。…トラウマにならないと良いけれどこれから起きるかもしれない悲劇に同情してしまう。原作世界のサトシ達は私たちに向かってバトル施設に向かうラングレーたちについて行こうぜと言ってきたため、私たちはお互いの顔を見てから、肩をすくめて歩き始めた。ここにいってもなんの解決策も思いつかないし、どうやって宝玉の力を重ね合わせるのかもわからない今、何か奮闘しても意味がないと思うからだ。根本的な解決策を探さないといけない…何か、力を重ねるのに必要な方法を探さないと。でもジュンサーさんたちが探している今、私たちにできることはあまりないため、ラングレーたちのバトルを見るしかないだろうと思う。まあ原作世界に迷い込んでしまったんだし…ちよつとぐら

い楽しんでもいいかな…楽しめるかどうかはわからないけどね。

歩いている間にもラングレーが原作世界のアイリスと喧嘩をしていて、睨み合ったり怒鳴り合ったりしている。その隣には無表情で歩いている私たちの世界のアイリスもいたりする。…原作のサトシ達含めて…私たちはそれを見ながら苦笑して、ただ無言でバトル施設に向かうため歩いて行つた。

（あ、そういえばバトル施設でシューティー達が争つたような……まあ大丈夫かな？）

第百十七話く妹達はバトル施設で暴走した？く

「こんにちは妹のヒナです…。もう誰でもいいからこの騒ぎを止めてください…。バトル施設に行ったらシューティーたちがお互いジャローダでバトルしていて、凄まじいことになってます。バトルも言い合いも…。」

「ふん…なかなかやるな…でも僕がサトシ先輩を尊敬していることに対して負けるつもりはない!!!」

「僕がサトシを尊敬しているということ自体有り得ないと何度言ったらわかるんだそっちの世界の僕は!!!」

「サトシ先輩を馬鹿にしていること自体が奇跡だと思っっているからだよ。本当に…君の性根を変えてサトシ先輩が偉大だと叩き込まないといけないと思うんだよ異世界の僕…僕が感じているサトシ先輩への尊敬の念を…強さだけじゃないと教えてくれた数え

きれない感謝の言葉と感情。そしてポケモンたちを信じている心の強さを……サトシ先輩を嘲り、格下だと考えている異世界の僕の考えを叩きのめさないと気が済まない……サトシ先輩は僕にとつて大切な先輩で……大好きな恩師で……そしてポケモントレーナーとしての大切なことを教えてくれたんだ!!強さだけがすべてではないと教えてくれた大切な大切な先輩なんだ!!!———それなのに……《キミ》がどうしてサトシ先輩を馬鹿にする!!?サトシ先輩というとても偉大なお人を……何でそう格下に扱おうとすることができんだ!!!僕はそれが許せない!!!」

「だからサトシなんかを敬うこと自体が意味わからないと言っているんだ!!!」

「サトシ先輩をサトシ《なんか》と言うな!!!」

「話を聞けそつちの世界の僕!!!」

「……これは……感動すればいいのか呆ればいいのか……それとも俺に対する尊敬への感情が強すぎて照ればいいのか……なあどつちだと思おう?」

『……………ピカ……』

「ああ、だよなあ……」

「お兄ちゃん、勝手にピカチュウと話し合つて決めつけちゃ駄目だよ……」

『カゲ…』

『ピチュ…』

「凄いなシューティー同士のバトル…！俺も早くバトルがしてえ!!」

『ピイカ!!』

「こつちのサトシお兄ちゃんは天然すぎる…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

「うーん…お互いがお互いの違う部分を言い合い、争い合う…まるで映画のようだ…」

「ああ、僕たちの気持ちはぴったりと分かりあってるみたいだね。パラレルワールドの僕

!!」

「そりやあもちろん分かるよ!!このグレイトでファンタスティックな光景を…もう見れるかどうかも分からない…そんな奇跡の光景だね異世界の僕!!」

「………こつちでもデントが煩いし…」

『カゲ…』

『ピチュ…』

『もう放っておけ』

私たちは現在バトル施設の観戦席で座って観戦しています。シューティー同士のパトルはかなり白熱していて兄が私たちの世界のシューティーを応援しながらも苦笑しています。まあ直球であんなに好意を示されたら苦笑するか照れるしかないよね…。そしてその隣のバトル場ではラングレーがアイリスたちとダブルバトルをしています。もちろんドラゴンバスターとしてアイリスたちにキバゴで挑めと無茶を言うてからパトルをしているんですけどね。でもこっちは私たちの世界のアイリスの方が強いみたい…。

「キバゴ頑張って!!ひっかくよ!!」

『キ…キバ…!!』

「そんなんで勝てるんでも思ってるのアイリスの子供!ツンベアー、きりさく!」

『ベアアアア!!』

『キバア!?!』

「キバゴ!頑張って!!」

「…キバゴ、ツンベアーにりゆうのはどう」

『キバ!』

『ベアア!?』

「ツンベアア、何キバゴごときの攻撃に驚いてるの！早く倒しちやいなさい!!」

『ベ、ベアアア!!』

「誰がキバゴごときよ!!」

『キバキ!!』

「…いい、キバゴ。挑発にのつたら駄目よ。接近戦になったら避けて、遠くから顔を狙つてりゆうのはどうよ。サトシ達とのバトルを思い出して戦うわよ…そしてこっちのキバゴのフオローもね」

『キバキバ!』

「ちよつと!!接近戦もした方が良いに決まってるでしょそっちの世界の私!…まったく、無理に避けて戦おうとするなんて…子供ねえ…!」

『キバキバ……』

「……ポケモンバトルは自分たちのペースで戦うことがなによりでしょ。それにこれはダブルバトル…私たちが戦うわけじゃないの。あなたと一緒にバトルをして、ラングレーに勝つために言ってるのよ」

『…キバ』

「あら…そっちの世界のアイリスの子供は随分と弱気なのね!そんなんでドラゴンマスタ―目指せると思ってるの!」

「そうよ!…ラングレーに同意するのは嫌だけど…接近戦も遠距離戦もできてこそドラゴンマスタ―でしょ!?!何をやってるのよ!!」

『キバキバ!』

「そう…いいのね?本気で接近戦ありで戦って…全力で蹴散らしてもいいのね…?」
『キバキバ…?』

私たちの世界のアイリスが本気で戦おうとしてるのが分かって、苦笑してしまった。もう私たちの世界のアイリスは兄に負けず劣らず凄まじいし、キバゴもピカチュウやルカリオ達とバトルをして鍛えられてきているから接近戦も遠距離戦もできたりする。ぶっちゃけもう進化してもいいぐらいには成長しているのだ。だから原作世界のラングレーとアイリスの言う言葉は、ある意味地雷でしかない。

キバゴが接近戦をしても、おそらくは勝てるだろう。でもそれはシングルバトルでできることだ。ダブルバトルなんだから原作世界のアイリスと一緒にラングレーと戦うのだから、ワンマンバトルはよくないと考えて遠距離を選んでいた…それだけなのだ。

でもそれを分かっていない原作世界のラングレーとアイリスは私たちの世界のアイリスに暴言を吐き、地雷を踏みまくった。…まあこれはもうご愁傷様としか言えないだろう。たとえ一撃でラングレーのポケモンを倒したとしても、その後原作のアイリスとバトルして叩きのめしたとしても…文句を言えないと思う。それに何だか説教してるみたいだけど…まあ態度が改められるだけだから気にしなくてもいいか…。

そんな凄い光景になっても、原作世界のサトシは変わらず、早くバトルしたいな！と言つて、兄に後でバトルしようぜ！と頼んでいる…。

原作世界のサトシ達も本当にいろいろと個性が強いなあと思つてしまった。私たちの世界もかなり個性が強いけど、やっぱり原作と比べるとすさまじさはあちらの方が上な気がする…おもにサトシお兄ちゃんとか…。

「サトシお兄ちゃん、あれ見ても何も思わないの？」

「ん？アイリスたちのバトルか…？アイリスがラングレーに勝つて…それでアイリス同士でバトルしてるだけだろ？」

『ピイカ？』

「……………それだけで済ますんだね…」

『カゲエ…』

『ピチュ…』

「ああ、もちろん後で俺たちもバトルはするぜ！なあそつちの世界の俺!!」

『ピツカ!』

「ん?…ああ、まあな」

『ピカ』

「…お兄ちゃんはこの世界でもお兄ちゃんだった…ああでもサトシお兄ちゃんは優しいお兄ちゃんかな」

「おい聞こえてるぞヒナ」

「痛い痛いお兄ちゃん頬引つばらないで！ごめんなさい!!」

『もうやめてやれサトシ…ヒナの意見に同意できるのだからな』

「それフォローになってねえよルカリオ」

「…どういうことだ?新しいバトル戦法?」

『ピイカ?』

『ピツカチュウ…』

『カゲカゲ…』

『ピチュウ…』

『訂正する。サトシは何処までいってもバトル馬鹿だ』

「…オーケー後で覚えてろルカリオ」

「……？」

「ああもう…カオス…」

原作のサトシは何を言っているのかわからず、ただバトルに夢中なようだ。まあポケモンマスターを本気で目指していて、ポケモンたちのことを第一に考えているサトシなら仕方ないと思う。でももうちょっと周りを見た方が良いでしょうね…主にシューティーやアイリスの暴走とか暴走とか暴走とか……。

兄と原作のサトシの性格は違いすぎるのはともかく、アイリスやシューティーも兄に影響が出過ぎて凄まじいことになってるのが今日このバトルを見ていて改めて分かった気がするけどね。性格が違いすぎて原作側の皆が啞然とすることも多いし…。まあ、この騒動が終われば何とかなるかとも思った。原因さえ解決すればちゃんと元に戻るんだからそれまでの辛抱だ。

——もちろん、その後私たちの世界のシューティーやアイリスがバトルに
ちゃんと勝っていたりする。まあ仕方ないよね……はあ…。

第百十八話く兄たちはバトルをし、解決策を知るく

こんにちは兄のサトシです。シューティーとアイリスが原作世界の自分自身と…あとラングレーに対して一緒になって正座させ説教しています。でもバトル場では邪魔だと判断したのか、ゆつくりと話し合える場所へ移動していくみたいです。おそらくこのバトル施設の外で説教でもするのだろうかと思った。

歩き出していく様子を見た原作世界の俺は首を傾けて何で怒ってるんだろうと思っているみたいだ。デント（俺たちの世界）とデント（原作の世界）は苦笑して見ている。そして妹達は遠い目でそれを見つめている。もう悟ったような表情だ。

…ちよつとだけ、俺の隣にいる原作世界の俺に謝りたくなった。もしもこれでシューティーとアイリスとラングレーの性格が変わったらごめんな…。でもたぶん態度が変

わるだけで悪化することは…おそらくなくなるだろうから安心して大丈夫だぜ…たぶん……。

まあそういう問題は後でにするか。あいつらを止めようという気は俺たちにはないし、止めたとしても俺たちの世界のシューティーやアイリスが不満に思ってしまうからな。それに俺が止めようとして余計に悪化する事態は避けたいし。

俺はため息をついてから誰もいなくなったバトル場を見て、そして隣にいる原作世界の俺たちに話しかける。

「…さて、アイリスたちも外に行ったみたいだし…どうする？」

『ピイカ?』

「もちろんバトルするしかないだろ! やろうぜパラレルワールドの俺!!」

『ピツカ!!』

原作世界の俺はバトルしようと言って張り切っているみたいだ。そのやる気に俺は笑みを浮かべて頷く。やっぱり原作世界の俺もバトル大好きで好戦的なんだと思えた。ちよつとだけ共感するぐらいには…。そして俺たちはバトル場へと歩き始め、異世界で

の自分自身と勝負しようと行動し始めた時だった――。

「…あら？バトル施設にいたのねあんた達…その様子だと町で起きてる騒動は本当だったようね…」

「ラ、ラングレー?!?…ってまさか君はパラレルワールドのラングレーかい!?!」

「ラングレー!!?!…あ、そっちの世界のラングレーも性格が違うのか…!」

『ピイカ…!』

「ようラングレー!アイリスなら外に行つて異世界のお前に説教してるぜ」

『ピツカア!』

「そ、そう…なら良かったわ…もうあのトラウマ思い出したくないもの…!」

「ああ…悪い…それとラングレー、さっきは泥棒探し手伝つてくれてありがとな」

『ピカピカチュツ』

「ははは…ラングレーにとってアイリスはバットテイストだから仕方ないかな。悪かつ

たね…」

「…アイリスの名前を出さないでちょうだい」

「ごめんねラングレー…それとさつきはありがとう」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

『すまないな…』

「いいのよ。私がしたいと思ったことだし…泥棒ももしかしたらドラゴンタイプのポケモンを持っているかもしれないと思ったから行動したまでだし…」

すこし顔をそっぽ向けていうラングレーに、原作世界の俺たちは本当に驚愕しているようだ。でも最初のシューティー騒動に比べたら慣れた感じで俺たちの世界のラングレーに話しかけている。こちらのラングレーもドラゴンタイプに執着しているけれど、剣呑な雰囲気を出さず優しく接している態度に驚きながらも仲良くできそうだと原作世界の俺たちが嬉しそうに言っていた。…これももう原作世界の俺とバトルするどころじゃないよな？でもさつきバトルしようかと言ったばかりで戦いたい。とにかくラングレーと話を終わらせてから原作の俺ともう一度バトルしようかと言うか…。

「そういえばラングレー…どうしてバトル施設に来たんだ？」
『ピイカ？』

「ああ、暇だったし…ドラゴンタイプと戦いたいからこっちに来たのよ。でも今それどころじゃないみたいだからシヨツピングにでも行つてくるわ…アイリスと会いたくないし…」

「戦う…そうだバトル!!」

『ピカピカ!!』

「今思い出したのか…」

『ピイカ…』

ラングレーは町で起きている騒動を見ながらそう答えた。そして後ろを振り向き、私たちに挨拶をしてからシヨツピングへ向けて歩き出していく。

まあバトル場で戦おうとするトレーナーもいないし、町から出たらどうなるか分からないから待機しているしかないしで町の人間と巻き込まれた旅人たちは不安なんだろう。それもバトルできないほどに…。いつもとに戻るのか、これは悪夢なんじゃないかと騒いでいる人もいれば、違う世界の自分自身に対しての暴言を言ったり争ったりと問題が起きているらしい。でも中には俺たちのように普通に仲良く会話したりしている

人たちもいるようだ。

：まあ先程までシューティー達やアイリスたちも争ってたからわかることだけだな。そう考えると、俺たちはかなりマシな方かもしれない。たとえ目の前に自分自身がいたとしても仲良く話をして、そしてこれからバトルしようと明るく言う原作世界の俺に苦笑してしまうぐらい：平和だと思えた。カオスなのはもう確実だけだな。

そして原作世界の俺がまた俺にバトルを申し込もうと笑顔になって顔をこちらに向けるのだけれど、すぐに近くにやって来たジュンサーさんのせいで阻止されてしまった。

「——あ、サトシ君たち！こんなところにいたのね!!」

「ジュンサーさん？」

『ピイカ?』

「どうかしたんですか？」

「ようやく見つけたのよ!!この事件を解決できる方法を!!」

俺自身とのバトルなのだから、最後まで楽しみたい。だから時間があるという言葉がとても嬉しいと感じたのだ。ここで妹が何か察したのか呆れたような表情で俺を見つめてきた。原作世界の俺は首を傾けて何を考えているのか不思議そうに見つめている。

「どうしたんだそつちの世界の俺？」

『ピイカ？』

「…ああ、お兄ちゃんのことだからバトルしたいとかなんじやないかな？」

『カゲ？』

『ピチュユ？』

『バトル!?!』

『ピツカ!?!』

「ちよつとだけ時間もらえますかジュンサーさん」

「ええ、そのぐらいの時間は取れるし大丈夫よ。…でも終わったらポケモンセンターに来て頂戴ね。私はもうちよつと調べてからポケモンセンターに行くわ」

「わかりました。俺の我儘聞いてくれてありがとうございます」

俺はバトル施設から出て行こうとするジュンサーさんに礼をしてから、妙にわくわくとした表情でこちらを見ている原作世界の俺に向かって口を開く。

「…どうせこの原因が解決出来たら元に戻るんだし…今のうちにバトルしようぜ!」

『ピイカツチュ!!』

「おう!売られたバトルは買うのが礼儀!やろうぜバトル!!!」

『ピツカア!!!』

——結果はどうなったか?もちろん俺が勝ちました。知識の差、戦略の差で最後はいろいろとバトルのコツを教えながら戦った。原作の世界の俺はどうにも根性とやる気で相性を考えず、ポケモンにとつての最大限の力を引き出すための知識を知らずに戦うことがあるようだから、もうちよつとちゃんと考えてバトルの指示を出せばもつともつと強いトレーナーになるのではないかと考えたからだ。だから分からないういポケモンがいたら調べるといふこと、やる気だけじゃなくそのポケモンがどんなバトルをしたのか見ていくこと、そして特攻するだけじゃなくて事前に戦略だけでも立ててみたらどうかと教えていった。まあどうにも原作の世界のサトシは考えるより行動

するタイプの人間らしいから、俺の言うことを何一つ分かってないみたいだと思った。修行などでポケモンに合ったやり方、バトルスタイルを考えているみたいだけど、それはバトルで敗北してからわかるみたいだった。そのバトルでどう勝っていくのか逆境を乗り越えて戦うことが多いらしい。まあ俺も暴走するときは考えるより感じてから行動するから考えずに行動するという意味では理解はできるけど…でもやっぱりポケモンマスターを目指すのなら、一つのバトルスタイルだけじゃなくてもつと色々と考えてバトルできるということを知ってほしい。負けるのではなく勝ちたいのなら、バトルの仕方、戦略は無限にあるのだということを知ってほしい。だから時間のある限り俺は教えようと思いい口を開く。

「だから、バトルするのに必要なのはやる気だけじゃダメなんだって…」

『ピイカ…』

「分かってる…でも俺たちに合うバトルスタイルなんだよ。急には変えられないんだ…」

『ピツカ!!』

「まあわかる…自分にあつたバトルスタイルじゃないとやりにくいもんな…でももうちょっと考えてバトルすることも覚えとけよ。知識の差によって勝敗が決まることも

あるんだからな。ゆっくりでいいから少しづつ自分に合った戦略を改善してもっと強くなるために俺の話を聞いてほしいんだ」

「そうか…分かった！」

『ピカ…ピカピカ！』

「よし、じゃあ教えるからもうちょつとこつち来い」

「ああ！ありがとう！」

『ピカピカ！』

『ピツカツチュ!!』

バトルでは俺の方が勝ったけど、でも戦っている間はとても楽しかった。正々堂々としたバトルであつて、ちゃんとポケモンのことを気遣いながらバトルするやり方が好感できたと思つている。さすが原作世界の主人公だと感心したぐらいだ。だからもつともつと強くなって夢を目指して頑張れと応援した。異世界の俺自身の言葉と教えに、不満など何も感じずただ笑顔でありがとうと言つたサトシに…俺の方こそありがとうと礼を言つた。原作世界の俺とは本当に仲良くできそうだとバトルを通じて分かつたし、会えて本当に良かったと思えた。

第百十九話～妹達はあつけない最期を見た～

こんには妹のヒナです。現在ポケモンセンターに来ています。ですが外に出た時にアイリスやシューティー達がおらず、何をやってるんだろうとちよつとだけ冷や汗をかいたり、近くを探したんだけどいなくて…もう仕方なくポケモンセンターに向かったりしました。

…というか、本当にダブルアイリスとダブルシューティーとラングレーどこに行ったんだろう…。これこのまま原因解決しても、原作世界が微妙にカオスになりそうで怖いと私は思った…。ま、まあその時は原作世界のサトシ達にどうか解決してもらおう…私に言えるのはそれだけです…はい。

そして私たちはポケモンセンターでしばらく待ち。私たちに気づいて近づいてきたジュンサーさんがとても古そうな本を取り出して説明してくれた。昔々、私たちと同じ

ように町で異変が起きた時に解決していった方法を…普通の人間だったら無理そうな話を――。

「この本は昔この町で起きた現象を解決したやり方が載っているんだけど…ディアルガを呼び出して時間の宝玉の力を重ね、元に戻せるということしか書かれてないのよ…問題はディアルガをどうやって呼ばないといけないことかなのよね……」

「ええ!?ディアルガを呼び出さないと無理ってことかよ!?」

『ピィカ?!』

「どうやってディアルガを呼ぶのかは書かれていないんですか!?」

「…いいえ。何も書かれていないわ」

「な、なんというバツトテイスト…!!」

原作世界のサトシ達とジュンサーさんが絶望的な表情で話していく中、兄たちは楽観的な表情で大丈夫だという様に言った。…言っておくけど、私とヒトカゲ、ピチューはその時原作世界のサトシ達と同じようにどうすればいいんだろうと絶望的な表情を浮かべていたのだ。けれどふと私たちが兄の顔を見ると、その不安が消し飛んでしまった

ただだ。もちろん私たちの世界のデントやルカリオも同じく…。

「……そうか？」

『ピイカ？』

「あれ、もしかしてサトシだったら呼び出せるのかい？」

「まあな。メガホンあればできる」

『ピカ』

「ああうん…お兄ちゃんだったらできそうな気がするよ…」

『カゲエ…』

『ピチュ？』

『カゲカゲ』

『ピッチュ…』

『こちらのサトシを常人として扱ってはいけないだろうと言うのが俺たちの世界の鉄則だからな…』

「おいゴラルカリオお前俺に喧嘩売ってるのか？」

『売ってはいないだろう。俺は事実を言っているだけだ』

「うんそうだね。ルカリオのいうとおりだよ…」

「……解せぬ」

「解せぬじゃない！」

『カゲ…』

『ピチュ…』

私たちが呑気に話している内容に、ジャンサーさんを含めて驚愕した様子でこちらを見ていた。まるでそんな簡単にディアルガを呼べないだろうと信じられないような、そんな様子が…。でも兄ならそれは絶対に可能なんです。不可能を可能にできるのが兄のやり方なんです…。まあ見ていればわかることだから放っておいてもいいか。何か言いたいような表情を浮かべているけど、それは全部兄に言っつてやっつて私は視線でそう言っつておいた。

あ、でもサトシお兄ちゃんとピカチュウはきよんとした表情でこちらを見て、話しかけてきた。

「そつちの俺はディアルガを呼び出せるのか？ 凄いな!!」

『ピイカ!!』

「おう…でもお前もやればできることだと思っぜ？」

『ピカピカ』

「へえ…じゃあシンオウ地方のディアルガにまた会えるかもしれないのか…会ってみたいなピカチュウ！」

『ピツカ!』

「…ちよつと待つてサトシ!?ディアルガに会ったことがあるのかい!？」

「え、あるけど?」

「何!?!く、詳しく教えてくれないか?!?!?!?」

「お、おう…?」

『ピイカツチュ?』

「それでいいの…お兄ちゃんたち…本当にそれでいいの!？」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

「サトシは何処までいつてもサトシみたいだね…ははは…」

『どつちもどつちだな…』

「…あーもう…というか、向こうの世界のデントが鼻息荒くサトシお兄ちゃんに問い詰

めてるの止めなくてもいいのかな…」

「ああなったら僕も異世界の僕も絶対に止まらないからね…諦めよう」

『放っておけ』

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

そして原作世界のデントの暴走を止めて、ジュンサーさんにメガホンを借り、もう一つの宝玉を持って広場へと向かう。町は皆が騒がしく、もう一人の自分と言い争ったり、仲良く会話をしていたりと様々だ。…まあそれももうすぐで解決できることだから見納めだろうけど。でも会えて良かったと思ってるから泣いたりはしないよ絶対に…。兄たちも原作世界のサトシ達もちよっただけ悲しそうな表情を浮かべているけど、でもそれを口に出して言ったりはしない。だから私たちも我慢して何も言わない。

広場の中心で、兄がメガホンをジュンサーさんから借りて口元に持っていき、私たちより前を一步だけ歩く。

私たちは原作世界のサトシ達も含めて後ろで待機している。そして一瞬だけ静寂になった後…。

「あーあーマイクテス、マイクテス：俺の言葉を聞いてると想定してディアルガに告ぐ。さっさと世界を元の状態に戻さないとお前に死んだ方が良かったかもしれないぐらいのトラウマ植えつけて、アルセウスに聞いた昔話の中からディアルガとパルキアがやらかした黒歴史になるような恥ずかしい真実をシンオウの神話に刻み込んでやるけどいいか——」

『ギュルアアアアアアアアアアアア』

!!!!!!!?????

「本当にきちやった…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

「これが伝説…」

『黒歴史とは何だ…?』

「ルカリオ……聞いちや駄目っばいよ……」
『……………』

兄の脅迫に近い言葉に慌てたように出てきたディアルガに私とヒトカゲとピチューとデントとルカリオが呆れたような表情を浮かべてしまった。というかアルセウスに聞いたディアルガとパルキアの黒歴史って何!?!死んだ方が良かったって思えるトラウマ植えつけるってえげつないこと言わないでよ!!と思わず叫びたくなるぐらい兄の言葉は酷かった……。ディアルガには本当に同情します……。というか今目の前にいるのって私たちの世界のディアルガだよね絶対……。

あとパルキアが兄の話で巻き込まれてることに同情しちゃうけど……突然ディアルガが出てきてしまうほどの知られたくない黒歴史となってる真実って一体何だろうと興味湧いてしまった。……というか兄よ、何でそんなにアルセウスと仲が良いんだろうか。ああ、類は友を呼ぶって言葉を聞いたことがあるけど……それなのかなと一瞬思ってしまった。でもディアルガがずっと首を横に振ってやるやるやります言っちゃ駄目言わないでくださいお願いしますからああ!!という感じで兄に向かつて焦ったように叫んでいる光景を見て興味を持つのと同時に可哀想に思えてきた。

そして原作世界のデントとジュンサーさんが呆気にとられたような表情で突然現れたディアルガを見て、原作世界のサトシは輝かしい笑顔でディアルガに手を振って出てきてくれてありがとな！と言っていた。やっぱり主人公は主人公だよね：伝説にも動じてないんだから。私たちが原作世界のサトシはともかく、他の人たちにとって突然伝説が現れたことに驚き、パニックになってしまったためそれを防ぐために動かなければいけなくなってしまうた。

———そしてパニックが落ち着いてきた頃。：やってきてしまったお別れの時間。私たちはそれぞれ握手をしてまた会えるかどうか分からない原作世界のサトシ達に《またね》を言う。また会えるかどうか分からないけれど、もしも会えるならその時はまたよろしくと約束をしながらも：私たちはお別れを言っていく。

「：じゃあな異世界の俺。会えてうれしかったよ」

『ピッカ！』

「ああ、俺も会えて良かったぜ：またバトルしような!!!」

『ピカピカ!!』

「もちろん。その時はお前らももつと強くなってるよ!!!」

『ピカピカツチュウ!』

「当たり前だろ!俺たちはもつともつと強くなって…そしてポケモンマスターになるんだ!」

『ピツカア!!!』

「ああ、同じ夢を持つもの同士…頑張ろうぜ」

『《サトシ》もな…またな』

「またな…《サトシ》」

『ピカピカ!』

『ピカピツカ!』

「グズ…またいつか会おうベストフレンドよ!!君と会えたことを僕は絶対に忘れたりしないよ!!」

「ああ僕もさ…でもまた会えたらその時は語り合おう異世界の僕…ベストウィッシュユ良い旅を!!!」

「さよなら……ううん違う。…またね、サトシお兄ちゃんにデント」

『カゲ!』

『ピチュウ!』

『またなサトシ…それにデントも…』

「ああ、またな。今度会えたらその時はもっと遊んだり話したりしような!」

『ピカ!』

「またねヒナちゃんたち…ううん…ベストウィツシユ良い旅を!!」

『ギユアアアアアアアアアア!!』

!!!

ディアルガの大きな声に共鳴して、《時間の宝玉》が輝きだしていく。2つの宝玉が重なり、輝きが強くなっていく。

そして真つ白に光って町全体を覆い尽くすほどの輝きで見えなくなった頃に…私は誰かに頭を撫でられたような…兄に似た声でまた会おうという声を聞いたような…そんな気がした。

——そして目を開くとすべてが元通りに戻っていた。目の前にいた原作世界のサトシ達がいなくなり、ディアルガもいなくなっていた。そして2つあった宝玉が1つに戻っていて、これで問題は全部解決したのだと分かった。けれど…少しだけ寂しい

と思えた…。

「……………」

『…カゲ』

『ピチュ…ピツチュ!!!』

「うん…そうだね。また、会えるよね…!」

『カゲカゲ!!』

『ピチュピチュ!!』

ヒトカゲとピチューに励まされてだけどもまた会えるような気がした。原作世界のサトシお兄ちゃんたちにもまた、カオスに巻き込まれながらもただけども賑やかで煩い状況になりながらも笑顔で再会できそうだと思えた。

兄の方を見ると同じように考えていたのだろうか、私の頭を撫でて笑みを浮かべていた。私も同じように笑みを浮かべて兄を見つめる。そしてそんな私たちに事件は解決したと言う様にジュンサーさんがため息をついて帰っていき、デントやルカリオも私たちにアイリスを探しに行くよと言ってくれた。

私たちはそれに頷き、そして歩き始めた…。

.....

「ああもう!!あつちの世界の私とラングレーがいなくなった!!!」

『キバキバ!!!』

「異世界の僕がいけないだと…まだ話している途中だというのに!!!」

「アイリスにシューティー…何やってるんだ？」

『ピイカ?』

「サトシ先輩!!!!」

「サトシ!!!!」

『キババ!』

探し始めてからポケモン交換施設の近くでようやく見つけたアイリスとシューティー…なんだけど…。何だか様子がおかしい。

私たちがどうしたのか聞いたら、まだ説教の途中だと言うのに急に周りが光り出して見えなくなつたと思つたら異世界の自分たちが消えたというのだ。私たちは苦笑しながらももう問題は解決したから異世界の彼らは元の世界に戻つたんだよと説明する。でも説明したらとても悔しそうな表情を浮かべていて、私たちはそれにも苦笑してしまつた……というより、ちよつとだけ引いてしまつた。

「ああもう……暴言とか二度と言えないぐらいもつとトラウマ植えつけとけばよかつたわ……!!」

『キバキ……!』

「畜生……畜生……! サトシ先輩に対しての偉大さを教えてようやく理解し始めたというのに! ああでもサトシ先輩たちのおかげで問題を解決したんですよ……いいえ文句はないです。ですが……畜生……!」

「うわあ……うわあ……」

『カゲエ……』

『ピチュウ……』

「ははは……」

『……………』

「おい俺をそんな目で見んな。俺のせいじゃねえだろこうなったのは!!」
『ピイカツチユ…』

———
「まあそんなわけで、私たちの旅はいつも通り続いていくみたいで
す…。」

I f くもしも○○が登場したらく

——もしもトゲチツクが登場したら——

それは、泥棒がサトシ達に捕まって時間の宝玉を取り戻せて安堵していた時だった。ヒナとヒトカゲ、ピチユーはルカリオの後ろに隠れつつ事件が解決して良かったとため息をついた時——。

「うわッ!？」

時間の宝玉が強く輝き始めてしまったのだ。何故宝玉が輝き出したのかはわからな
い。時計塔から宝玉を取り出しては危険だとジュンサーさんが言っていたからこれは
そのせいかと、サトシ達はそれぞれ警戒しながらその光が途絶えるのを待つ。

「……おさまった？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

『ああ、どうやらそのようだな……』

「でも今の何だったのかしら……」

『キバキ……』

「不思議な光だったね……」

「……光るだけだったなら良かったけどな」

『ピカピ？』

「どうしたのお兄ちゃん？」

サトシがある方向を見て疲れたようなため息をつく、ヒナたちはそんなサトシにどう
したのか話しかけてみると、サトシはその見ていた方向を指差して教えてきた。そこに

いたのは…

『チョツチョツク!』

「トゲ…チョツク?」

『カゲ?』

『ピチュ?』

『サトシの知り合いか?』

「多分な。お前カスミのトゲチョツクだろ?」

『チョツクチョツク!!』

『ピツカ!』

トゲチョツクは嬉しそうにサトシとピカチュウの周りを飛んで鳴いている。サトシは懐かしそうにトゲチョツクに話しかけ、ピカチュウはトゲチョツクに会えて嬉しそうに抱きしめていた。

「カスミっていう人は?もしかしてトゲチョツクのトレーナーかい?」

「え、でも周りに人なんていないわよ?いるのは私たちか倒れてる泥棒くらい…」

『キバ?』

「ああ、カスミはハナダジムのジムリーダーで、トゲチョツクの元トレーナーなんだ。トゲチョツクは色々と理由があつてカスミのもとを離れたんだ。だからここに居るのはおか

「しいと思うんだけど…」

『ピイカ…?』

「そうなんだ…どうしてここにいるのトゲチック?」

『カゲ?』

『ピチュ?』

『チョチックチック!!』

『目の前が光つたと思つたらここにいた…と言っているが』

「え、じゃあ分からないの!？」

『カゲ!?!』

『ピチュ!?!』

「それは大変ね…!ここはイツシユ地方だし、トゲチックっていうポケモンはあなた以外にいないから捕まると危ないわ…」

『キバ!』

「うーんこれは…どうにかしないといけないね」

「いや、大丈夫だろ…」

『ピカピッカ!』

「え、どうということ?」

サトシとピカチュウは何でもないという様な表情でトゲチックを見て答えた。トゲチック含めたヒナたちは首を傾けてサトシとピカチュウを見つめる。サトシは頬をかきながらも言う。

「こつちに来たんなら、ちゃんと帰る道もあるってことだよ」

『ピッカツチュ！』

「いやそれ全然解決してないし…」

『チヨツチック！』

ヒナたちが呆れたような表情で言う。でも来ることができたのなら帰ることだってできるはずという根拠のないサトシの話しに、何故かできるのではないかと納得してしまふヒナたちであった。

(その前にカスミに連絡でも入れるか…)

——もしも事件解決後の原作組の世界（シューティーラングレーアイリス）——

事件が解決した後、サトシ達は元の世界に戻ることができた。サトシの妹だと言った

ヒナもないし、ヒトカゲやピチュー、ルカリオがない世界だ。サトシ達は少し悲しそうな表情を浮かべて時計塔を見つめていた。時計塔には時間の宝玉が1つだけ埋め込まれていて、もう二度と光らないような…そんな気がした。

でももう仕方のないこと、会えるかどうかさえ奇跡だった出来事だったと今になってサトシ達は考えた。

「サトシ…アイリスを探しに行こう」

『ピカピ?』

「…ああ、そうだな!」

声には出さず、またなどと言ってその場を離れるサトシ。そしてそんな彼を見たデントとピカチュウもサトシの後を追って歩き始める。アイリスはあの兄妹がいる世界のアイリスに連れて行かれたため、どこにいるのかわからないけれど、でも町にいるはずだと思つて探していった――。

——そして見つけたのがポケモン交換施設の近くで座り込んでいるアイリスたちの姿。でもその姿は異様だ。ぶつぶつぶつと眩いていて、見る人が見れば何か危ない人間たちが集まって座っている光景に見えてしまう。顔を俯せて地面に膝をつき、蹲つてしまっている者（アイリス）両手で顔を覆つて体育座りをして小さくなつて

いる者（ラングレー）、そして土下座をしているような状態にいる者（シューティー）などがいて、サトシ達は引き攣った表情でそれを見ていた。何があつたのか聞きたいけれど聞きづらい雰囲気を漂わせている3人がそれぞれ落ち込んでいるようなのだ。

サトシは意を決して近くにいたシューティーに話しかける。

「お、おいシューティー……大丈夫か？」

「……………あ、サトシ……………サトシ……………先輩」

「シューティー!？」

『ピイカ!？』

「これは重傷だね……」

シューティーが先輩とサトシに向かって言うことにサトシ達は驚愕してしまった。よく見るとシューティーの目が虚ろだ。…あ、だがサトシが周りをよく見てみると、シューティーだけじゃなくアイリスやラングレーも虚ろな目でぶつぶつと小さな声で呟いていた。その姿は知り合いだと思われたくないほど哀れで異様だった。

「サトシ先輩は偉大で素晴らしくて僕の先輩…先輩ではは…ははははは」

「ごめんなさいごめんなさいもう馬鹿なことは言わないしドラゴンタイプも馬鹿にした
りしないから怒らないでごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「子供だなんて言わない…子供って言ったら駄目…子供じゃない子供じゃない子供子供
……」

「おいお前らしつかりしろオオオオオオオ
『ピイカアアアア
!!!??』」

!!!???

「と、とりあえずジヨイさん呼んできた方が良いかな…」

デントがジヨイを呼んだことによって彼らの精神的ダメージは回復し、何とか立ち直ることができたのだけれども、それでもやはりトラウマは残ってしまったらしい。シューティーもたまたまサトシのことを先輩と呼んでしまうことがあって、そのたびにアリスが怯え、サトシ達は苦笑してしまったりする結果となった…。

——もしも原作世界のベルが兄妹世界のベルに遭遇したら——

兄妹世界のベルはたまたま偶然その姿を見つけてしまった。兄妹世界のサトシ達のために何か問題を解決できるようなことがあればいいと思って、資料を探したり様々な施設へいき何か変わってしまったことはないか確かめたりと行動していたのだ。そんな時に出会ったのが、もう一人のベルだった。

「うわぁ私だ!!ねえあなたもポケモンを交換しに来たの!?!」

「……………何を言っているのです?」

兄妹世界のベルは訝しげな表情で原作世界のベルを見つめていた。交換するというのは、手持ちとお別れをするということに等しい行為だというのは、サトシ達から学んでいたからだ。

アララギ博士と交換したのもまたいつでも会えるということ、研究に協力してほしいと頼まれたこと、そしてチョコボマキも交換を望んでいたということから成り立ったのだ。でもこの目の前にいる原作世界のベルは交換すること自体を楽しんでいる様に見える。ポケモンたちとお別れをしてもいいのだろうかと兄妹世界のベルは思った。

「ねえねえ…聞いているの?」

「聞いてます…そちらの世界の私はもう交換してしまわれたのですか？」

「ううん！でも可愛いポケモンと交換できたらするつもりだよ!!」

「それは…自分のポケモンたちにも交換してほしいと聞いてみたのですか？」

「聞いてないけど？」

「……………そう」

兄妹世界のベルはその事実にとっても悲しいと思ってしまった。この目の前にいる原作世界のベルはポケモン交換をすることに何も苦じやないと思っっているらしい。そして可愛いポケモンがいたらすぐに交換しようと思っっているらしい。そんなことをしてしまつたらもう二度と自分のポケモンたちと会えないかもしれないというのに…ポケモンたちの気持ちを考えずに交換してしまう行為はある意味裏切りに等しいというのに…。

原作世界のベルをこのままにしておけないと考えた兄妹世界のベルは、自分の考えやポケモンたちの交換について話そうと決意した。交換はメリットもあればデメリットもあるということ。そして手持ちのポケモンたちに会えるかどうか分からないということを中心に刻みつけなければならぬことを。兄妹世界のベルが原作世界のベルに向かつて指差して叫んだ。

「そこに正座しなさいそちらの世界の私！」

「…え？どうしたの？」

「あなたに交換することの恐ろしさを教えてあげます!!」

———その後、兄妹世界のベルは町が宝玉で光り輝くまでずっと話し続けた。原作世界のベルが正座しすぎて足が痛いと言句を言っている、逃げようとしても…兄妹世界のベルは逃がさずに説教をした。

その途中で宝玉が輝いてしまい交換についてすべてを言うことはできなかつたけれども…でももう樂觀的に考えてポケモン交換をしようとは言わなくなるだろうとベルは満足そうな表情を浮かべ、協力すると言ったサトシ達を探して歩き始めた。

「…またどこかでの別世界の私に会える気がしますわ…その時にまた交換すると言っていたらちゃんと考えて交換しなさいと説教しなければ…」

そう自分に言い聞かせて、そしてサトシ達を探し始めるベルであった。

——もしも未来の妹が登場してしまったら——

「…あはは」

「どちらさまですか!？」

泥棒を倒し、取り戻した時間の宝玉が光り輝いたと思ったらサトシと同じぐらいの年齢の女の子が目の前に立っていて、ヒナは驚き叫んだ。だがヒナだけじゃない、サトシ達もその姿、連れているポケモンに驚き固まっていた。

「初めまして…になるのかな。過去の私」

『ピチュ!』

「え、ええええええええ!!!?!？」

『ピチュウウ!?!』

「へえ…やっぱり見覚えがあると思ったら未来のヒナが来たってことか…」

『ピイカツチュ…』

「あの時間の宝玉には未来の人間をこちらに呼び寄せる力があるみたいだね…!うーん

フアンタステイック!!」

『未来のヒナ…か…』

「とうかヒナちゃん…凄く驚いているわよ…」

『キバキバ…』

過去のヒナは目の前にいる少し成長した自分を見て驚いて口を開き固まっていた。ピチューは未来から来たピチューと挨拶をして、そしてヒトカゲやピカチュウと一緒に遊んでいるみたいだ。未来のヒナは苦笑して頬をかき、過去の自分の頭を優しく撫でて落ち着くように促していく。

「初めましてになるな未来から来たヒナ…そっちはうまくやってるか?」

「まあね…お兄ちゃんが暴走しない限りはうまくやってるよ」

「…ああ…お兄ちゃんは未来でもやっぱりお兄ちゃんなんだ…暴走しているんだ…」

「もう諦めなさい…お兄ちゃんはお兄ちゃんよ…」

「……………はあ」

「おいそのダブルヒナ。ため息つくんじゃない」

過去のヒナが未来の自分と兄であるサトシの会話を聞いて小さく呟き、そして未来の自分と一緒にため息をついた。サトシの暴走を止めようと頑張ったり、たまに放置した

りしていたけれどもみたいでもその問題は解決していないのはちよつと嫌だと思ふ過去のヒナであった。でもため息をついたことでサトシが不機嫌そうな表情で過去と未来のヒナたちに向かつて言う言葉に、ほのぼのとしたようなちよつとだけ同情するような光景を見ていたルカリオ達が微笑ましそうな表情で見っていた。

『ヒナ…お前ヒトカゲはどうした？』

『カゲ？』

「そういえばそうだ…ねえ未来の私。ヒトカゲはどうしたの？もしかしてさっきの光の影響で置いて行ってしまったんじゃない？」

「ああ大丈夫。大丈夫よ…ほらここにいるから」

「会わせて！」

『カゲカゲ！』

未来のヒナが取り出したのは1つのボールだった。そのボールはとても古そうな状態で…でもきちんと磨かれているボールだ。

過去のヒナ達は会いたいと言って未来のヒナにボールからヒトカゲを出してもらうように頼む。その頼みに苦笑した未来のヒナはまあ大丈夫かと呟いてからボールを投げてその中に入っているポケモンを出す。

でも、そこにいたのはヒトカゲじゃなくて――。

「黒い…リザードン!!」

『カゲカゲエ!!!』

『ピチュウウ!!!』

『グオオオオ!!』

全身が黒のリザードンが出てきたことに過去のヒナは喜び、ヒトカゲやピチュウと一緒に抱きつきに行く。抱きつかれたリザードンは嫌そうな表情を浮かべず、むしろ懐かしいといった表情でヒナたちと一緒に笑っている。その様子を見た未来のピチュウも乱入し、リザードンが過去のヒナたちと戯れている中、サトシ達が未来のヒナに近づいて話しかけていた。

「進化したんだな…リザードンに」

「うんそうだよ。私はもうトレーナーだからね」

『そうか。もうそんな時期なのか』

「ルカリオ…なんだか旅立つ子供を見送るお母さんみたいよ?」

『キバキバ』

『誰がお母さんだ!!!』

「まあまあ落ち着いて…じゃあ未来のヒナちゃんはもうバトルできる立派なトレーナーなんだ」

「そうだよ…それでお兄ちゃんにちよつとだけ頼みがあるんだ」

「頼み？」

『ピイカ?』

サトシは首を傾けて未来のヒナを見る。時間の宝玉のせいでこうなってしまった事故だけけど、頼みとはいったいなんだろうと思っていた。

そして未来のヒナはサトシに強気な目でにっこりと笑って叫ぶ。

「ポケモンバトルをしよう!過去の世界のお兄ちゃんに勝てるかどうか分からないけれど…でもトレーナー同士会ったらバトルしなくちゃでしょ?」

「……………いいぜ。売られた喧嘩は買わなくっちゃやな!よし勝負だヒナ!!」

「あれ…何か盛り上がってるねあっち?」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

『グオオオ』

『ピツチュ』

過去のヒナ達は何だか盛り上がっている未来のヒナたちに近づいて話を聞いた。そしてバトルをするということに興味を持って未来のヒナに頑張れと応援していく。リザードンと未来のピチューがスタンバイし、サトシ達も準備を始める。

こうして、未来のヒナとのバトルが今、始まろうとしている。――。(続かない)

――もしも原点にして頂点と出会ったら――

「……………」

「……………」

「ど、どういう状況なの…?」

『カゲカゲ?』

『ピチュ?』

現在サトシは宝玉が光り輝いたことで目の前にいる少年を見つめてずっと黙っている状況だ。その異様な光景にヒナたちが話しかけ辛そうに見ていて、何時になつたら話すのだろうと考えているようだ。少年はサトシがカントー地方を旅していた頃の服を着て、帽子をかぶっている。そしてサトシと少年の肩にはお互いピカチュウを乗せてただ見つめ合っている状況だ。

(あれっってお兄ちゃんじゃない…としたら原作の方のアニメ…? いやでも違うような……まさかゲームの…!)

ヒナはふと考えてしまった。宝玉が光り輝いたせいで現れたこのサトシに似た少年がもしかしたらゲームでのレッドではないかと思ってしまったのだ。でも無口でピカチュウを連れていて、無表情というのはゲーム世界のレッドだからできることなの? というよりも本当に原点にして頂点のあの方なの? とヒナは自分で考えたことに半信半疑だ。その間もサトシと少年は何も話さずお互い見つめ合っている。

「…、これ止めなくてもいいのかしら…?」

『キバキ?』

「いやアイリス…むやみにサトシたちの邪魔をしたらいけない…もしかしたらサトシ達はお互いの力量を見ているのかもしれないからだよ…!」

『だが、このままだと夕暮れになるぞ』

「お、お兄ちゃん…?」

『カゲカゲ…?』

『ピチュピチュ…?』

「……………」

「……………」

サトシと少年が話さないことに時間の無駄だとヒナたちが話し始め、そして意を決してヒナがサトシに話しかけた。だがサトシは何も言わず、ただ見つめている。

———そしてすぐにサトシと少年が目を見開き、同じタイミングで握手をした。ただし無言で。

「え、どういうことなの?」

「何か通じたってことかしら？」

「トレーナーとしての力量を感じ、そして共鳴し合い同志として握手をする……うーん素晴らしい光景だね！」

「デントだけだよそういうの……」

『カゲカゲ……』

『ピチュピチュ……』

その後少年がバトルをしようと無言で合図をし、サトシがそれを受け入れるまでずっと握手したまま見つめ合っていたのは言うまでもない。

——もしもラティアスが登場したら——

泥棒を捕まえ、宝玉を取り戻したと思ったたらいきなり輝きだし、何かあるのではと警戒していた。そして光りが収まり、ようやく目を開けて見てみると、光景はある一点を

除いて変わってはいなかった。サトシ達は輝く前の場所で立っているし、泥棒も倒れてしまっている状況。でもただ一つだけ、変わっていた所があった。

「……………え？」

『キュ——ン!!!』

「ラティアスじゃねえか！どうかしたのか？」

『ピィカツチュ？』

『キュ——ン!!』

ラティアスがヒナとヒトカゲの周りを飛んでいると思ったら、サトシが話しかけたためそちらに近づいて嬉しそうにサトシに頬擦りをする。ヒナはおそらくこの目の前にいるラティアスがマサラタウンでよく遊んでいたラティアスなのだろうと分かった。でも何でここにいるのかが疑問だ。そう思い話しかけようとしたときに、アイリスが興奮したように話しかけてきた。

「ラティアス…ラティアスって始めて見たわ!!」

『キバキバ!!!』

「どうかしたのかいアイリス？」

「デント…私はドラゴンマスターになるっていう夢を持つてるのは知ってるでしょ？ラティアスはドラゴンタイプでめったに人に姿を見せないポケモンなのよ…だから夢のようだよ！」

『キバア!!』

『キューン?』

アイリスがラティアスに迷惑をかけない距離まで近づき、挨拶をしている。その姿に首を傾けたラティアスだったが、すぐにサトシ達の仲間だということを知り、友好的に接してきた。アイリスは笑顔で近づいてきてくれたラティアスの頭を撫でてありがとうと礼を言っている。その姿にサトシ達は癒され、笑みを浮かべて眺めている。

「…でも何でここにいるんだろう?」

『カゲエ?』

『ああ、確かにそうだな…』

ヒナとヒトカゲ、ルカリオはどうしてこのイツシュ地方にラティアスがいるのか疑問

に思った。マサラタウンにいると思っていたのに何故ということ、光り輝いた宝玉のせいで来てしまったのではないかとということが思い浮かぶ。ラティアスがヒナたちの眩きを聞いてアイリスから離れ、ヒナに近づいて抱きついてきた。

『キュウ！キュウ——ン!!』

『ああ、なるほどな…』

「ラティアス、なんて言ってるんだ？」

『ピイカ?』

『ラティアスは、宝玉のせいでもここに来てしまったけれど、サトシに会えたことや妹分のヒナに会えてとても嬉しいと言っている』

「そっか！ありがとうラティアス!!私も嬉しいよ!!」

「俺もラティアスに会えて嬉しいぜ！」

『キュー——ン!!!』

ラティアスはヒナの頭を撫でてサトシに向かって笑いかける。ラティアスはサトシに救われたことと、マサラタウンに行つてからヒナと遊ぶようになったことで2人がとても好きになったのだ。もちろんピカチュウやヒトカゲも一緒だけれど、サトシやヒナ

の方が一番好きだとラティアスは思っている。そしてラティアスが抱きしめている幼くて小さなヒナのことを実の妹のように可愛がり、親友のように遊ぶことがイツシユ地方を旅してしまったことでできなくなってしまったことを嘆いていたけれど、宝玉のおかげで会えることができたから嬉しいのだ。

兄妹とそのポケモンたち、そしてルカリオがほのぼのと戯れている間に、デントとアイルิสとキバゴが凄く聞きたそうな表情でサトシに話しかけた。

「ね、ねえ…前にラティアスにあったことあるの？どんな出会いなのか話を聞かせて!!」
『キバ?』

「ラティアスがヒナちゃんのことを妹分だといった話も聞いてみたいな!!」

「お、おう…」

『ピイカ…』

サトシとピカチュウが困惑しつつもアイルิสとデントの質問に答え、出会いについて説明していく…その間もヒナたちは笑い合っていた。

「マサラタウンに帰ったらまた遊ぼうね!!」

『カゲカゲ!!』

『キュ——ン!!!』

『ピチュユ…』

「もちろんピチュユもだよ！」

『カゲ！』

『キュー!!』

『ピツチュユ!!!』

——もしもオーキド博士（少年時代）が登場したら——

「あれ…サトシ？」

「ユキナリ!!？」

『ピイカ!?!』

泥棒を倒し、宝玉を取り戻したと思ったらいきなり宝玉が光りだし、気がつけば目の前にユキナリという少年が立っていた。

ユキナリがいたことにサトシとピカチユウは驚き、ヒナはサトシが言った名前に驚いている。それ以外のアイリスたちは誰なんだろうと首を傾けていた。

「サトシ…誰なの？」

『キバキバ？』

「知り合いかい？」

「ああ、ユキナリって言って…俺たちは40年前からときわたりしてきたユキナリに出会ったんだ」

『ピイカ』

「どういうこと!？」

「ときわたりって何があったんだい!？」

「あつと…実はな——」

サトシはユキナリと話をしながら説明をした。ハテノの森でユキナリがセレビイのときわたりに巻き込まれて40年前の時代からときわたりしてきたということ。そしてセレビイと事件を解決して、ときわたりで元の時代に戻ったということ話をしてくれ

た。それに納得したアイリス達はなるほど頷く。そしてユキナリに挨拶をしていく。ユキナリはキバゴやルカリオを見て興味津々でスケッチブックに描いていた。

「始めて見たよ…名前は何なんているの?」

「こつちがキバゴで、こつちがルカリオだ」

「そつか…よろしく」

『キバキバ!』

『…ああ、よろしく頼む』

「喋った!」

ユキナリはルカリオが喋ったことに驚いていて、そんな反応になれたサトシ達は苦笑してルカリオは喋れるよということを説明する。それにも興味津々なユキナリにヒナは笑みを浮かべた。

(ポケモンに興味津々なのはさすがオーキド博士…つてとこかな)

『カゲエ?』

『ピチュ?』

「ううん、なんでもないよ…」

ヒナが何も喋らずただ笑みを浮かべていることにヒトカゲとピチューがどうかしたのか疑問に思つて声をかけた。でもヒナは首を横に振つて何でもないといい、談笑しているユキナリ達のもとへと近づいた。

「僕、またときわたりをしたのかな…?」

「たぶん…ディアルガの仕業だろうな」

『ピイカ…』

「ディアルガつて一体…?」

「ディアルガはセレビイと同じように時を越えられるんだよ。でも安心しろよ。絶対に元の時代に戻すからな！」

『ピツカ!!』

「……ありがとう、サトシ」

「………とりあえず解決策が物理にならないことを祈つところかな」

『カゲエ…』

『ピチュー…』

『無理だろうな…』

サトシとユキナリが再び再会し、笑い合って絶対に元の時代に帰そうと約束している。だがヒナたちはディアルガが可哀想な目に遭うのではないかと予想して遠い目を
してしまった。

そしておそらく、ヒナたちの予想は外れてはいないだろう。

「ごめんねディアルガ…でもこうなっちゃったら止まらなそうだよ…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『こうなった原因であるディアルガの自業自得だろうな…放っておけ』

「そしてルカリオはいつも通りだ…」

『カゲカゲエ…』

『ピツチュウ…』

——もしも伝説が全員集合したら——

「こんな時どう表現したらいいんだろう…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『無視しろ。他人のふりをすれば問題ない』

「それって大丈夫じゃないからねルカリオ結局は放置してるからね！」

ヒナたちが引き攣ったような表情で周りを見て会話をしている。それには理由があった。泥棒を倒したと思ったら宝玉が輝きだし、気がついたら普通の人間なら気絶してしまいそうな状況が出来上がっていたからだ。輝きが消えたと思って目を開けると、ヒナたちの周りを取り囲むように伝説たちが現れていた状況に誰も叫ばなかったのが幸運かもしれない。叫んだことよって人々が何だろうと来てしまおうし、そのせいでパニックになってしまうこと間違いなしの状況だからだ。

そしてデントやアイリスもこの状況に驚き、ヒナとルカリオの近くで伝説たちを見て

いた。めったに人に姿を見せないとされている伝説が多く集まっている状況に喜べばいいのか怖がればいいのか分からず、とりあえず見ているという感じだろう。

ヒナたちが遠い目でその状況を眺めていた、その時だった――。

『ヒナちゃん久しぶり!!!』

「うひよわッ!!!?」

『カゲ!?!』

『ピチュ!?!』

『ヒナちゃんて本当に小さくて可愛いなあ!!!』

「ちよつとオオオオ!!!?」

『ヒナから離れるこの変質者!!!』

『おつと危ない危ない!』

ヒナに後ろから抱きついたのは以前マサラタウンに現れたギラティナの人バージョ

ンだ。笑いながらヒナの頭を撫でて抱きつくギラティナにヒナは鳥肌が立ち、そしてヒトカゲとピチューもヒナが抱きつかれたことに驚き：ルカリオはヒナに抱きつくなど言ってギラティナに攻撃を仕掛ける。だがギラティナは笑いながらルカリオの攻撃を避け、ヒナたちから離れる。それにヒナはほっと一息ついてからルカリオの後ろに行きギラティナから隠れた。

その間も誰なのかアイリスやデントが聞きたそうにしているけれど、でもこれ答えられる状況じゃないから無理だとヒナが首を横に振る。

「え、待って…全員勢ぞろいなのもそうだけど何でギラティナもいるの!？」

『俺も伝説だからね!!』

『お前を伝説と呼べるものか!!』

『えー酷いなあ…まあいつか!じゃあ俺行くね!』

「え?どうということ?何か用があつて来たんじゃないの?」

ギラティナが怒るルカリオや戸惑うヒナたちに向かつて爽やかに手を振って行こうとしたため、ヒナがどうしてきたのか、何でもう行くのかを言う。するとギラティナが少し遠くの方でアルセウスとミュウツーに話しかけられているサトシを見てから苦笑して言う。

『俺たちはさつき光りに引き寄せられてきただけだからね。それにそろそろ逃げないと怖いからさ』

「…え？」

『じゃあね!!また会おうヒナちゃん!!』

『二度と来るな!!』

「……行っちゃった」

『…カゲ』

『…ピチュ』

ルカリオが反転世界へ戻って行くギリティナを見て怒りながら叫ぶ、先ほどヒナにやられた行動でキレているのだろう。

でもその前に気になった言葉があるとヒナは思った。逃げないと怖いとはいったい何なのだろうと…。ふとギリティナが先ほど見たサトシ達の方を見ると…酷い状況になっていた。

「アルセウス。こうなった原因って何だ？」

『ああ、その石の力が源となって私たちはこちらへ引き寄せられた…』

「石の力…この時間の宝玉のせいってことか？」

『そういうことになるな』

「……………じゃあこれ全部ディアルガがやったことでもいいんだよな？」

『ツツ!!??ギュルアアアアアアアア!!』

「うるせえぞゴラ!! 人気のない場所で良かったけど…もしも何かあったらどうするつもりだったんだ!!」

『サトシ、それは…』

「ミュウツウは黙ってる!!…というより、さっさと自分の居るべき場所に戻れ!」

『ピイカ…』

サトシは心配しているのだろう。伝説たちがこの場所に集まってしまったという状況に人々が気づき大騒ぎになってしまったらどうするつもりかと。そしてもしも伝説たちがその騒ぎで捕まってしまったらどうするつもりなのかと…でもサトシの怒りはそれだけじゃなかった。むしろ伝説たちが集合したことに怒り、自分のいるべき場所に帰れと考えているようだ。

「さっさと帰らないとどうなるか…分かってるだろうな?」

『皆の者、解散するぞ!!!』

「あ、でもディアルガお前は残れ」

『ギュルア?!!!?』

「残れ?!!!」

『ツツ!!!』

サトシがにつこりと笑みを浮かべて握っている拳を見せ、帰らないとフルボッコ☆という感じで言っている雰囲気はルギアが大声で伝説たちに向かって叫ぶ。そして伝説たちが散り散りになって行く中、アルセウスとディアルガはその場に残っていた。アルセウスはサトシの怒りに恐怖心はなく、むしろもつとサトシと喋りたいからという気持ちでその場に残り、そしてディアルガは震えながらサトシに言われたとおり動かなかつた。でもおそらくは帰りたいのだろう…ディアルガは涙目になって震え、怯えていた。その姿にヒナたちは同情するが、止める気はない。むしろ止めようとしたら酷くなりそうなのがするからだ。

だがサトシはそのまま暴走せず、アルセウスの方を見て困ったような表情を浮かべた。

「アルセウス…悪いけど帰ってくれないか？」

『…何故だ？』

「ここにいたら絶対に人に騒がれる。お前が危ない目に遭ったら俺が悲しいんだ…」

『……分かった…だが、またいざれ会おう』

「ああ、その時を楽しみにしてるぜアルセウス」

アルセウスは渋々帰っていき、残りはそろそろ恐怖で気絶するんではないかと言える。ダイアルガのみとなった。アルセウスに助けてほしいという表情で見ただけで、アルセウスはそれに気づかず、帰って行ってしまった。

「さて…じゃあいろいろと話を聞こうか？」

『ツツ!!!』

— その後起きた悲劇については想像におまかせしておこう。

第二百二十話く妹は弟子に出会ったく

こんにちは妹のヒナです。この間タチワキジムのジム戦で兄が8個目のジムバッチをゲットしてました。…速いですよね…でももうこれが日常というかなんというか…。

ですが、イツシユリーグが開かれるのが三か月先とのことで、それまでもっと強くなるために修行をするということになりました。イツシユ地方からだとマサラタウンにいるフシギダネ達を連れてくるのはかなり難しいため、今回のリーグはイツシユ地方で捕まえたポケモンで戦うと決めました。イツシユ地方のどこで修行をするのか考えている兄たちだったんですけど、デントが指を鳴らして笑顔で言う。

「君たち…修行を何処でやるのかは…この町の名物でもあるツンベアーアイスを食べながら決めたらどうだい!？」

「ツンベアーアイス…いいわねそれ！」

『キバキバ！』

「よし、じゃあツンベアーアイス食べに向かうぞ！」

『ピイカツチュ!!』

「もう…お兄ちゃんたち呑気なんだから…」

『カゲ』

『ピツチュピツチュ!!!』

「ピチュユーもアイス楽しみなんだね…」

『ピチュウ!!』

『ここで考えても仕方ないだろう…行くぞ』

「はーい」

『カゲエ』

『ピチュウ!』

というわけで私たちはツンベアーアイスを食べるために歩き始めた。途中で来た人が多く集まっている広場のような場所でデントが《プリンセスポケモンの休日》という映画のロケに使われたということや、その映画でツンベアーアイスを食べるという有名な話になっているということに興味しながら話していて、私たちはそれを興味深く聞

きながら歩く。この場所で映画のようにツンベアーアイスを食べるのが夢だったんだよ!とデントが言っていたんだけど、張り紙が貼ってあって、ここでツンベアーアイスを食べるの禁止と書かれてあり、デントの小さな夢は散ってしまった。それに落ち込んだデントをルカリオが慰めつつ、私たちは苦笑しながらもツンベアーアイスを売っている店へと向かう。

…あれ?というかつンベアーアイス食べる話って原作で見たような…まあ後で何か事件でも起きればわかることかな。

.....

「あれ?シロナさん?」

「サトシ君?久しぶりね!」

「はい、お久しぶりです」

『ピツカ!』

「…え?サトシ、シロナさんと知り合いなの!」

『キバキバ!』

「あのシンオウチャンピオンで有名なシロナさんと知り合い…って凄いや!! ファンタステック!!」

「まあいろいろあつてな」

「そうなの…私とサトシ君は師弟関係なのよ」

「ちよ…ちよつと待って! お、お兄ちゃんどういうことなの…? シロナさんと師弟関係って何?!」

「そのままの意味だぞ」

「意味が分からないから!!!」

「…カゲ?」

「…ピチュ?」

「シンオウ地方で一番強いトレーナーが彼女ということだ」

「ピカピカツチュ」

「カゲカゲ!!!」

「ピチュウ!!」

シロナさんと師弟関係っていう話初めて聞いた…いつの間にそんな関係になつていたといふかなんでシロナさんとそんなに仲が良いの!? ヒトカゲとピチュウはシロナさ

んが誰なのか分からず首を傾けていたんだけど私には説明する気力がない…もう意味が分からなすぎる…。ルカリオとピカチュウがヒトカゲ達に説明してくれたから良かったけど…兄はシンオウ地方で一体何をやらかしたんだろう…。

そしてシロナさんはそんな驚いている私に向かって興味深そうな表情を浮かべ、兄に視線を移す。

「お兄ちゃんつてことは、もしかしてサトシ君の妹さん？」

「はい。妹のヒナです。それでこっちが——」

「デ、デントです！よろしくお願ひします!!!」

「わ、私はアイリスといいます!!それでこっちがキバゴ！」

『キバキバ!!』

「…よ、よろしくお願ひします」

『カゲ!』

『ピツチュ!』

「ふふ…よろしくね。私はシロナ。サトシ君の一番弟子よ」

「いちば…一番弟子!!?」

『カゲ!?!』

『ピチュウ?!』

「へ!?! どういうことなの!?! シロナさんがサトシの師匠じゃないの!?!」

『キバキ!?!』

「いや俺が何故か師匠になってるけど…」

『ピツカ』

「よ、よく分からない驚きのテイストだね…!」

「そんなに驚くようなことか?」

「驚くに決まってるでしょ!?! 何なのお兄ちゃんシンオウチャンピオンの師匠って…お兄ちゃんが将来どんな風になっていくのか心配になってきた…」

「俺は将来ポケモンマスターになるけど?」

「そういう意味じゃない!?!」

『ヒナ。もしサトシがポケモンになってしまったとしてもそれを信じ、対応するぐらいの心構えでないとこれから先やっていけないぞ』

「ルカリオ…それももう諦めてるってことだよな? もうこのままツツコミ放置するってことだよな? 諦めちゃ駄目だよお兄ちゃんをこのままにしておけないよ!?!」

『諦める。もう手遅れだ』

「そんな…」

「おいお前らしい加減にしろよ」

『…ピイカ…』

「ふいふい…」

シロナさんは私たちのポケとツツコミに爽やかに微笑みながら見ていた。というかさすがシンオウチャンピオン…大物です…私たちの会話を聞いているのも、ルカリオが喋っているということも動じておらず、ただ面白そうに笑っているだけだ。デントもアイリスもルカリオと同じように兄に対して少しだけ諦めているようでもう私しかない状況にため息をついてしまう…。本当に兄がこれからどうなっていくのか不安で仕方がない。普通の人間のような生活できるのか…それが心配なんです。…もう無理なのかな。というかシロナさんとの師弟関係について話を聞くと、なんとカントー地方を旅している時にすでに会っていたらしい。その時点でいろいろと原作崩壊していたのかと私は確信してしまった。ああもう無理だ、諦めよう…。

——そして何故シロナさんがこのイツシュ地方に来たのか、これからどこに行くのかを教えてください。その先はポケモンワールドトーナメントジュニアカップというとても名前が長い大会にエキシビジョンマッチを頼まれたという。そしてその大会は誰でも参加することが可能だということや、大会優勝者にはアデクさんと戦えると

いうことを教えてくれた。これを聞いたらやる気が出てくる兄がいたりする…この先の修行場所は決定したも同じだね。

「よし。俺その大会にでます！」

『ピカ！』

「あ、私も出ます!!」

『キバキバ!!』

「面白そうだし。僕も出てみるよ！」

「あはは…まあ頑張って」

『カゲ』

『ピチュ』

『修行にはなりそうだが……』

「ルカリオ、バトル出たいんだったらお兄ちゃんに頼んでみたら？」

『…いや、やめておこう』

ルカリオもその大会でバトルしてみたいという表情を浮かべていたんだけど、悩んだ末に出るのをやめるみたいだ。兄も兄のポケモンも大会に出たいというやる気はある

と思うけど、ルカリオにもちよつとぐらい出て楽しんでもらっても大丈夫だと思うんだけどと苦笑してしまった。前もドン・ジョージのバトル施設でよくバトルしたような表情を浮かべていて、でも全部我慢していたから、大会の一回戦ぐらいは兄と一緒に出てもいいような気がする。

ルカリオに、兄と一緒に大会でバトルに出たとしても兄と兄のポケモンは文句は言わないよそこまで心が狭くないよと言いたいけど……まあそれは兄次第だと思うから私は何も言わない。ミジュマルのこともあるしちよつとだけ不機嫌になるかもしれないけど、ずっと旅してきた仲間なんだから少しぐらい我儘言ったとしても許されると思うんだけどな……と思った。まあ私が兄に頼んだとしてもおそらく兄は直接自分で頼みに来いと言うだろうから、そのまましておこう。ルカリオと兄たちの気持ち次第だろうか。

———とにかく、私たちの次に目指す場所が見つかった。

「よし、イツシユリーグに向けて腕試しだ！」

『ピカピカ!!』

「……でもその前に」

「…何ですか?」

『カゲ?』

『ピチュ?』

「……………ツンベアーアイスよ!!」

シロナさんが真剣そうな表情を浮かべてきたため、私たちは何だろうと思っ
て聞いてみる。するとシロナさんは後ろにあるツンベアーアイスのお店に振り向き、
笑顔でアイスを頼んでいく。その光景に私たちは苦笑してしまった。まあシロナ
さんはアイス好きとして有名だから仕方ないか。

第二百二十一話　妹は歌姫と遭遇した

こんにちは妹のヒナです。今からポケモンワールドトーナメントジュニアカップに出場するためにシロナさんの車に乗せてもらいそのまま行くことになった。兄と師弟関係だということや、出会った経緯についてなど聞きたいことはたくさんあるけど……まあ今は後でしておこう……。今は空港に着くのを待つのみかな……と思っていたんだけど……。

『ピカピカ!!!』

「危ない!!」

「……な、なに?」

『カゲ?』

『ピチュウ?』

ピカチュウの鳴き声で前方にポケモンが車の直線状にいることに気づき、シロナさんが慌てて急ブレーキをかけて停止させる。そして車から降りて見つけたのは…原作で見たことがある、メロエツタだった。そういえば前にメロエツタが出てきて、それで兄に助けてもらってたような気がする…：：：そうだ、この光景も原作で見たことがあったと私は思い出した。でもその前に何やら怪我をして倒れているメロエツタを治してあげないといけない。シロナさんの指示で白い布の上にメロエツタをおき、怪我の治療をする。そしてルカリオが念のためにといやしのはどうで回復させていくのだけど、メロエツタは苦しそうな表情を浮かべている。

「これは…体力が弱ってるわね。誰かオレンのみを探してきてくれないかしら?」
「オレンのみですね!私が行きます!」

『キバキ』

「僕も一緒に行きます!」

『俺も一緒に行こう…!』

「頼むわね…サトシ君たちは私を手伝って」

「わかりました!」

『ピカピカ!』

「はい！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

——というわけで、メロエッタの怪我を治し、様子を見て大丈夫かどうかを確かめていく。シロナさんがメロエッタの頭を触り、どうも熱があるようで険しい表情を浮かべている。

「少し熱があるわね…氷枕を作った方がいいわね…サトシ君。ちよつと来てもらえるかしら」

「はい」

「あ、私はここに残ります！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「ピカチュウもここに残ってメロエッタのことを頼んだぞ」

『ピッカ！』

氷枕を作るために兄とシロナさんが一緒に森にある川へと向かうみたいだ。でもそ

れだとメロエツタを川まで連れてはいけなかったため、私はここに残ってメロエツタの看病をすると言った。私の言葉にヒトカゲやピチュウも頷いてくれて、そして兄も念のためにと考えてピカチュウをここに置いていくみたいだ。私たちは顔が赤く染まり、熱でうなされてるメロエツタに布をかけ、早く兄たちに戻ってきてと思いつつ周囲を警戒しつつ看病をする。看病をするといつてもあまりやることなく、ただメロエツタの体調に異変が起きないかどうかを見守っているだけしかない。

(…あれ? そういえばメロエツタに怪我を負わせたのってロケット団じゃなかったっけ? ここでロケット団は悪さしていないのに……?)

ふと思いつ出した原作の知識。メロエツタを捕まえようと怪我を負わせたのはロケット団だったはずだけど、兄の行動でもうそんな悪さはしていないはずなのだ。だからおかしいとおもう…でも前にロケット団がしていた悪さを他の悪党が代わりにやっていたということもあったから、もしかしたらそれかもしれないと考える。…まあとにかく、何も悪いことが起きなければいいと願うだけだろう。

『…ピカピ?』

「あ、お兄ちゃんにシロナさん…!」

『カゲ!』

『ピチュウ!』

砕いてある氷を持ってきた兄たちによって、氷枕をつくり、そして水と氷で冷やしたものをタオルを濡らし、メロエツタの顔を優しく拭いていく。するとメロエツタが微笑ったため、私たちはこれで大丈夫かもしれないと安堵しつつ、看病を続行する。

「これでもう大丈夫。あとはオレンのみがあれば……あら電話？もしもし——」

シロナさんからかけられてきた電話は、タチワキシテイにツンベアーが出たとのことで、早く戻ってきてほしいと電話がかかってきたようだ。私たちはお互いに顔を見合わせてから頷き、シロナさんにメロエツタのことは大丈夫ですよ！と言う。それを聞いたシロナさんが苦笑しながらタチワキシテイに戻ると言って謝ってきた。けれどここままでしてもらったんだから謝る必要はないと思いつつも、車に乗って町に戻って行くシロナさんを見送る。

「なるべく急いで戻ってくるから！」

「わかりました！」

『ピイカ！』

「メロエツタのことは任せてくださいいね！」

『カゲカゲエ！』

『ピチュピチュウ!!』

そしてそれから、アイリスたちがオレンのみを持ってくるまで必死に看病をしていたんだけど、途中でミジュマルがボールから飛び出してきて、メロエツタを見て惚れたり、氷枕の氷が解けてしまったから兄とピカチュウが私たちにここを任せて氷を集めに行ったりした。ミジュマルはその間もメロエツタに惚れ惚れとした表情で見つめている。その様子に私とヒトカゲ、ピチューは苦笑してしまった。

「ミ、ミジュマル…メロエツタは怪我をして熱も出てるから邪魔しちゃ駄目だよ」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

『ミイツジユウ…!』

『エーモオ!』

「あれ、エモンガ？」

『カゲ?』

『ピチュ?』

エモンガがオレンのみがついている枝を銜えてこちらに向かつて飛んできている。私たちはそれを見て笑顔で手を振って迎える……んだけど、風が急に出てきたせいでうまく飛ばず、エモンガはミジユマルとぶつかってしまった、2体ともダウンして気絶してしまった。

「あはは……ま、まあ大丈夫だよね……」

『カゲ……』

『ピチュ……』

『……ロメエ………』

「あ、メロエツタ、動いちや駄目だよ。元気になるオレンのみを食べて、ゆっくり休んでね」

『カゲ！』

『ピチュ！』

『メロオ……？』

「大丈夫だよ！私たちはメロエツタに元気になってほしいから……何も心配はいらないよ」

『カゲカゲ!!』

『ピチュピッチュ!!』

『……ロメ……』

先程の騒動でメロエツタが一度起き上がり、私たちから離れようとしてきたため、私はそれを阻止しようと動き、メロエツタの身体を優しく抱きしめる。メロエツタは驚いたような表情を浮かべて逃げようとしたんだけど、私たちがそれを必死に説得して、そしてエモンガが運んできたオレンのみをメロエツタに食べさせた。メロエツタはオレンのみを食べて少し元気になったのか、私たちの頼みに笑顔で頷き、顔を赤くしつつも先程の布の上に寝てくれた。それに私は安堵して、ヒトカゲ達に微笑む。ヒトカゲ達もこれであろうやく安心だと思って私に笑みを浮かべて見てくれた。

「ようやく見つけたぜメロエツタ!!!」

「…はい？」

『カゲ?』

『ピチュ?』

ようやく寝てくれたメロエツタに私たちが見守っている中でいきなり現れたのが悪そうな人相をしたいかにも悪者ですと言っているような集団。私たちはその集団のトップと思わしき身体が大きな人が叫んだ言葉を聞いて警戒する。今のメロエツタにはきついかもしれないが、何かあつたらすぐに兄の行った方角へ向かえばいいだろうと思いつながらもその集団を見つめる。

私とメロエツタを庇うようにヒトカゲとピチューが前に出てきたんだけど、集団はそれに笑ってきた。

「何だあそんな弱そうなポケモン出してよお？ああ、でもそのポケモンはイツシユ地方じゃ珍しいよな…じゃあメロエツタごと貰うとしますか！」

「行くぞお前ら!!」

「相手はガキ一入だ、やっちまえ!!」

「ヒトカゲ、ダブルひのこえんまく！ピチュー、ダブルでんきショックでんじは!!」

『カゲ!!』

『ピチュー!!』

「うお!?何だと!!?」

「おいガキはどこ行きやがった!!!」

「このえんまくどうにかしろ!!」

「よし、今のうちに…あ、でもミジュマルとエモンガが…」

『カゲ!』

『ピチュ!』

「…うん。ヒトカゲ、ピチューーお願い!」

『カゲカゲエ!!』

『ピチュピッチュ!!!』

私には重いけど、でも今頑張つて逃げないといけないからピチューとヒトカゲにミジュマルを持ってもらい、私はメロエツタを布ごと優しく抱きしめてからエモンガを抱いて走り出す。でもえんまくを消した集団が追ってきてこれはピンチかもしれないと焦りながらも兄のもとへと急ぐ。

『…ロメエ…?』

「あ、ごめんねメロエツタ…起こしちゃったね…でもちよつとだけこのまま我慢して…!」

『カゲ…ツ!』

『ピチュウウウウ!』

「はははは無駄に決まってるさっさと止まれガキイイ!!!」

ヒトカゲとピチューが頑張ってミジユマルを運びながら走っていて、かなり限界そう
だ…でもこのままいけば絶対に兄に会えるはずだと信じて私はヒトカゲ達に頑張れと
言いながら走る。メロエツタが騒音に気づいて起きてしまったことに罪悪感を感じな
がらも…早く逃げないと焦り続ける…。

「止まれガキ!!」

「さっさと止まらなと殺すぞ!!!」

「ポケモンたちを置いていけええ!!!」

「……………おい、誰の妹にちよつかい出してんだお前ら」

『……………ピイカツチュ』

走っていたら兄とピカチュウに遭遇し、そのまま通り過ぎてしまった。でも兄とピカ

チュウの額に青筋が浮かんでいたため、ああこれはあの集団もう終わったなと思いつながら走るのを止める。ヒトカゲとピチューがミジュマルを抱えていたために疲れて横向きに倒れてしまったんだけど、私も緊張と疲れで座り込む。そんな私たちを心配そうに見つめるメロエツタと…駆けつけてきたアイリスとデントとルカリオ。…つてルカリオがそのまま走るのを止めずに兄たちの方向に走って行ったんだけど…まあいいか。

「大丈夫ヒナちゃん!?!」

『キバキバ?!』

「大丈夫かい?」

「うんだいじょーぶ」

『…カゲ』

『…ピチュ』

『メロオ…』

「心配してくれてありがとうメロエツタ」

『ロメ!』

兄たちの方角から悲鳴が聞こえてきたけど、気にせずにアイリスたちやメロエツタと微笑み合う。ちよつとだけトラブルがあつたけど、メロエツタが元気になつて良かった。

第二百二十二話く兄は再会したく

こんにちは兄のサトシです。これから大会に出るためイーストイツシユのサザナミタウンに飛行艇で向かっているところです。…ツンベアーの件が終わって戻ってきたシロナさんと一緒に。

「あれ？ねえお兄ちゃんあれ何!？」

『カゲ?』

『ピチュウ?』

「赤い…光…ポケモンかもしれないな！降りたら見てみようぜ！」

『ピイカ!』

妹が飛行艇の中から海の近くで赤い光を見つけて何だろうとヒトカゲ達と一緒に楽しそうにしている。確かにここらへんにはイツシユ地方以外のポケモンもいるように面白いのだろう。例えば飛行艇の中から見えたのはホエルオーやキャモメなど、ホウエン地方で見たことのあるポケモンだ。先程見た赤い光もイツシユ地方以外で見たことのあるポケモンかもしれないから楽しみだ。もうすぐ着くだろうからすぐに確かめられるだろう。

——そうしてやって来たサザナミタウン。俺たちは飛行艇に到着してから走り出し、先ほどの赤い光の場所まで向かって行く。そして見えたのはヒトデマンが海で泳いでいる姿だ。

「ヒトデマンもここにいるのか…!」

『ピツカ!』

「あ、あつちにプルリルもいるよ!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!!』

「この町は、イツシユ地方のリゾート地として有名なのよ」

シロナさんが説明してくれたのは、このサザナミタウンがイツシユ地方のリゾートと

して知られているということ、本来ならバトル大会などではなく、休暇などで優雅に過ごす所として有名ならしい。でも俺たちの目的はバトル大会……つまりジュニアカップに出場するということだ。

「よし、まずはジュニアカップ優勝だ！」

『ピイカ!!』

「あ、来たわね」

シロナさんの執事だという人が迎えに来てくれたらしい。このサザナミタウンに滞在中は執事が世話をしてくれるとのことだ。そして車で向かうらしく、俺たちはその車に案内された。

車は高級車らしく、新品のようにとても綺麗な真っ白の車だ。シロナさんがその車に乗って行くと言ってきたため俺たちは乗ろうとする……。

『ピイカ?』

『カゲ?』

『ピチュ?』

『キバ?』

『……………』

「ん？どうかしたか？」

『ピイカ…』

「どうしたのヒトカゲにピチュウー？」

『カゲ…カゲカゲ？』

『ピツチュ……？』

「キバゴ…何か見つけたの？」

『キバキ！…キバキバ？』

「何か見つけたような気がするけど、分からないという表情だね。…ルカリオ、君は何か見つけたのかい？」

『…ああ、だがあまり気にすることはない』

「どういふことだ？」

『ピイカ？』

『敵意などが感じられないから…』

「敵意がないってことは…ただの通りすがりのポケモンでもいたのかな…？」

『カゲエ…？』

『ピチュ…？』

「何かあったらその時に考えて、今は気にせず行きましょう」

「…そうですね」

『…ピイカツチュ』

何か見つけたみたいだけれど、ルカリオが大丈夫だと言ったため、俺たちは気にせず
にそのまま車に乗ることになった。車の中はとても広く、全員が乗ってもまだ余裕があ
るぐらいとても広い。そして車の中でサザナミタウンは過ごしやすい環境で、観光客が
多くいたりツアーなどがあつたりとかなり面白そうな町だとシロナさんやデントが説
明してくれた。そしてその間にもコラツタが車の外から見えたりしていて、俺の見てい
ないポケモンもまだいそうな気がしてこれからがとても楽しみだと思えた。そして執
事も、車を運転しながらこれから行く別荘について話してくれた。

「これから向かうシロナ様の別荘にも、多くのポケモンに出会えますよ」

「え、本当ですか！楽しみだなピカチュウ！」

『ピカピイカ!!』

『カゲカゲ!』

『ピチュピツチュ!!』

「ピトカゲとピチューも嬉しいんだね！私も早く見てみたいなあ」

「ふふ…すぐ着くわよ」

『ロメツタ!!!』

「え…」

『ピカ?』

「メロエツタ…!?!」

『カゲカゲ!?!』

『ピチュピチュ?!』

「着いてきちゃったの!?!」

『キバキ?!』

「何という驚きのテイストなんだい!?!」

車の中から突然メロエツタが姿をあらわし妹の膝に座っている状況に俺たちは驚いてしまった。姿を消せるということもそうだが、俺たちについて来てしまったというのに驚いた。飛行艇に乗る前、あの悪党どもを叩きのめした後、元気になったメロエツタがそのまま笑顔で飛んで行ってしまったから、それでお別れだと思っただけ…まさかついて来ているとは…。ああ、もしかして車に乗る前にルカリオが言っただけ…はこれだったのかと俺たちは納得した。そしてシロナさんが考えながら妹の膝に座ってい

るメロエツタを見て、言う。

「もしかして…ヒナちゃんのこと気にいったのかしら？」

「そ、そうなの？」

『カゲカゲ？』

『ピチュピチュ？』

『ロメロメ!!!』

「へえそうなのか！良かったなヒナ！」

『ピツカツチュ！』

「きつとあの時助けてもらったからついてきたのね」

『キバキバ』

「姿を消して飛行艇に乗ってまでついてきたということか…うーんポケモンの絆を感じるよーファンタスティック!!」

「そっか…ありがとうメロエツタ」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!!』

『ロメツタ!』

妹のことを気に入つて、ついて来てくれたというメロエツタに俺たちは笑顔でその光景を見ている。妹がメロエツタの頭を撫でて、そしてメロエツタはそんな妹に笑いかけながら隣にいるヒトカゲとピチューに挨拶をしているという癒される光景だ。ルカリオも笑みを浮かべて良かったなと言っているぐらいだし：メロエツタが妹を気に入ってくれて良かったと思つた。

「……本当ならお兄ちゃんのこと気に入るのはずだったんだけど……なあ……」

『ロメ?』

「どうかしたかヒナ?」

「ううん。何でもないよ気にしないで……私のこと気に入ってくれてありがとうねメロエツタ」

『ロメツタ!』

妹が何か言ってきたような気がするが、まあおそらく独り言かもしれないと俺は気にしないことにした。……とにかく、もうすぐシロナさんの別荘に着く。どんなポケモンが

いるのか楽しみだ。

第二百二十三話く妹は兄たちの再会を目撃したく

こんにちは妹のヒナです。兄のことを気にいるはずのメロエツタが何故か私に懐いていてちよつとだけ戸惑ってます。ですが膝の上で笑顔で私に挨拶してくれたメロエツタを見るとそういう気持ちもなくなって、嬉しいと思えたからまあいいかと思ってる…かな。

そしてそろそろシロナさんの別荘に到着するのですけど…そういえば原作ではそこでヒカリさんと再会したような気がする。…まあもうすぐ着くことだし、その時に考えてみようと思う。

「見えてきましたよ…あれがシロナ様の別荘でございます」

執事さんが言ってくれたため、私たちは前の景色を見てその別荘を確かめる。別荘は遠くからでもかなりいい場所にある所だと思えた。海に近い場所に建物があつて、さすがシロナさんがよく訪れるリゾート地の別荘だと思えた。メロエツタも楽しそうにヒトカゲ達と一緒にはいしゃいでいて、私たちも楽しくなってきた。

.....

やつて来たシロナさんの別荘は普通の家よりも大きく、そして豪華そうだ。シロナさんの別荘に私たちはしばらくここに滞在するらしい。私から見ると滞在中は別荘ではなくまるでホテルに滞在しているような感覚になつていられるかもしれないと思えた。それに別荘の中はどうなつているのかが楽しみになつてきた。主にポケモンたちについて。ヒトカゲ達も別荘を見た瞬間に楽しそうに声を上げている。別荘には野生のポケモンたちがいるみたいだから仲良くなれたらいいなと思つた。

「別荘にいるポケモンってどんなのだろうね！」

『カゲ！』

『ピッチュ！』

「こちらでございます」

『…ロメ』

「あれ？メロエツタが消えた？」

『ピイカ…？』

『…いや、姿が消えただけでこの近くにはいるようだ』

「メロエツタはおそらく恥ずかしがり屋さんかもね。この別荘が安全だと分かればまた姿を見せてくれるでしょうからまずは中に入りましょう」

「…そうですね。じゃあ中に入りましょうか」

『キバキ』

「じゃあ行こうぜ。お邪魔します！」

『ピカピカ！』

「お邪魔します！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「先に行かないのサトシ！」

『キバキ…』

「はは…まあこんなに立派な別荘を見たら無理はないよ」

『…ヒナ、荷物は持つからサトシのもとへ先に行け』

「あ、ごめんねルカリオ…待つてお兄ちゃん！」

『カゲカゲ！』

『ピツチュ！』

シロナさんたちに言われて、私たちはメロエツタを気にしつつも別荘の中へ入って行く。兄が海の見える場所を見つけたらしく、ピカチュウと一緒に先に行ってしまい、私たちもその部屋に行きたいと思っていたのだが、ルカリオが荷物を持って先に行つて大丈夫と言ってくれたため、礼を言つてからすぐに兄のもとへ向かう。そして兄が入つた部屋に行つてみたら…ヒカリさんが兄と再会していた。

「久しぶりねサトシ！」

『ポチャ！』

「おう！久しぶりだなヒカリ!!」

『ピイカ！』

『サトシ、久しぶりでしゅ！』

「…つてあれ、シエイミ!?お前何でここにいるんだ？」

『ピカピカ?!』

「あー…」

『ポチャ…』

「…あの喋っているポケモンって何かしら？」

『キバキ?』

『見たことないポケモンだな…』

「あれは…：確か感謝ポケモンのシエイミと呼ばれていると聞いたことがあるよ」

「ええそうよ。デント君の言うとおりあのポケモンはシエイミっていうのよ」

「…待って…何でシエイミがヒカリさんと一緒にいるの!？」

『カゲカゲ？』

『ピチュピチュ？』

「私と会ったときはもう一緒にいたけれど…メロエツタと同じ感じなんじゃないかしら？」

ヒカリさんが苦笑している中、私たちは驚いてシエイミを見ていた。特に私は何でという気持ちが強かった。あのシエイミは確かシンオウ地方で兄たちと出会ったポケモンだろう。喋り方や兄に久しぶりといった言葉からそう考えた。でもどうしてこのイツシユ地方にいるのが分からない。ヒカリさんについてきた…のかな？

ヒカリさんはポツチャマとお互い顔を見合わせてから私たちに説明するために口を開いた。

「シエイミは私たちについてきたんじゃないの」

『ポチャ』

「え？どういうことだ？」

『ピイカ？』

『ヒカリの言う通りでしゅ！ミーはあいつに連れてこられたんでしゅよ！』

「だから、あいつって誰だよ…？」

『ピイカツチュ?』

「えつとね……ここにはいないんだけど……ティナが連れてきちゃったの」

『ポチャア……』

「ティナ……?」

『ピイカ?』

「……なんだろう、凄く嫌な予感がする」

『カゲエ……』

『ピチュ……』

『ティナ……だと……?』

「へ?どうしたのルカリオ……何か知ってるの?」

『カゲカゲ?』

『ピチュピチュ?』

『…………いや、アーロン様からその名を聞いたことがあるような気がしたが……時間が
違いすぎるからおそらくは気のせいだろう』

「そう……?」

『カゲ……?』

『ピチュウ…?』

ヒカリさんが言ったティナという人は私たちは知らない。私はヒカリさんが言った原作ではない事実に少しだけ嫌な予感がしていた。ルカリオが何か聞いたことがあるような名前だったらしいけど…でもおそらくヒカリさんが話すティナという人と関係がないとは思ってから気にしないでおく。

とにかく、ヒカリさんが言ってきたことは原作じゃないことだろう。原作じゃないことは大抵が兄に影響されて起きた事実だったりするから…例えば言うならアイリスの暴走やシューティーの暴走だったりする…。だからティナという人物についてもおそらくは兄に影響されて起きた話なのではないかと…思っていた…。

兄がティナとは誰なのか分からず首を傾けて質問している。

「なあヒカリ…ティナって誰だ？」

『ピイカ?』

「ほら、サトシもあつたことあるでしょ?あの反転世界でポケモンから人間になつた—

「ちよつと待て…ティナってもしかしてギラティナか!？」

『ピツカツチュ?!』

「ああ…あの変態のこと…」

『カゲエ…』

『ピチュ？』

「ピチュ…会ったら絶対にダメな人…じゃなくてポケモンだからね？絶対に会ったらだめだよ？」

『カゲカゲ』

『ピチュ…ピツチュ！』

『ギラティナか…そういえば前に一度マサラタウンに来ていたらしいな…俺はまだ会ってはいないが…』

「ルカリオが会っちゃったら絶対にはどうだんで攻撃しそうなタイプだよ」

『………ああなるほど。そういうタイプのポケモンか』

「え…ギラティナってあの伝説のポケモン!？」

『キバキバ!』

「何という驚きのテイストだろう！じゃあそのシエイミはギラティナの仲間ってことかい!？」

『ミーはギラティナの仲間じゃないでしゅ!!』

「え…そうなんだ…」

「…どういふことか気になるわ…ヒカリちゃん。ちよつと聞かせてくれないかしら？」

「あ、はい」

『ポツチャ…』

シロナさんが興味深そうな目でヒカリさんを見て、絶対に話すまで逃がさないというような表情で聞かせて？と言ってきた。それにヒカリさんは引き攣ったような表情を浮かべながらも話し始める――。

ヒカリさんが教えてくれたことはかなり原作から外れた内容だったみたいだ。ギラティナは前にホウエン地方を旅する時に一緒に連れて行ってくれと頼み、そのままホウエン地方を旅していたということ。そして旅をしていてしばらくしたら反転世界を綺麗にしないといけないから一度戻らないといけないと言って帰っていき、少し時間が経つと今度はシェイミを連れてやって来たということなどを話してくれた。ティナという呼び方はギラティナが名前を省略した方がいろいろ都合がいいでしょ？といつて呼ばせた結果らしい。…あと時々問題などが起きたらしいけれど、すぐにギラティナのおかげで解決できたこともあったり、逆にギラティナがいたせいで起きた問題なども

あつたりしたらしい。ハウエン地方を旅していた間はかなり大変だったらしく、遠い目をして話してくれた。

「はは…大変だったんだなヒカリ…」

『ピイカ…』

『伝説と共に行動するというのはかなり疲労がたまりそうだな…』

「確かに大変そう…あ、じゃあ今はギラティナはここにいないんだね」

『カゲ?』

『ピチュ?』

「ええ、反転世界にずっといかなかったからしばらく戻らないといけないって言って帰って行つたわ」

『ポツチャ』

『ミーは犠牲になつたんでしゅよ…』

「た、大変だったのね…」

『キバキ』

「何というか…凄まじいエピソードだね…」

「でもずいぶん興味深い話ね…大昔にギラティナがいたという記録はほとんど残っていないのに…今はヒカリちゃんと一緒に旅をして、そして反転世界に戻っている…しばらく

くしたらまたこちらに戻ってくるのかしら？」

「はい、おそらくは…」

『ポチャポチャ…』

今別荘にギラティナがいないということも分かり、シロナさんや執事さん以外の私たちは苦笑してしまった。でもヒカリさんは私を見ていきなり肩を掴み、決心したような表情で口を開いて言ったため驚いてしまった。

「ヒナちゃん！」

「は、はい!？」

「ヒナちゃんは絶対にティナの餌食にはしないからね！あの馬鹿に何かされたら私に言うのよ!!ポツチャマのハイドロポンプで吹っ飛ばしてあげるから!!」

『ポチャポチャ!!』

『ミーにも任せるでしゅ!』

「わ、わかりました…」

「あ、それなら俺も…何かあったら言うんだぞ」

『ピツカ』

『ヒナ、大切なのは声を大きくして叫ぶことだ…声が聞こえたらすぐに向かうから安心しろ』

「ぜ、全然安心できないよ…主に平穩な意味で…」

『カゲエ…』

『ピチユウ…』

出来ることならギラティナが私たちや兄たちと一緒にいる時に戻ってこないことを祈ろう。何かあつたら困るから…。でもシロナさんはできることならギラティナに会って話を聞きたいらしくちよつとだけ残念そうな表情を浮かべていたりする。私としては会いたくないけどね…。

——その後、メロエツタがヒカリさんたちに姿を現して挨拶したり、デントとヒカリさんがバトルしたりといろいろと騒がしいことになったのは言うまでもない。

第二百二十四話く兄にとっての黒歴史く

「え？サトシの幼少期時代？」

「そう。あのサトシが子供の頃はかなり暴れてたって本当かい？」

シゲルがマサラタウンに一時休暇として帰ってきている頃、ケンジが前にオーキド博士が言っていた言葉を思い出してサトシの幼馴染であるシゲルに聞いていた。

ケンジにとってサトシは一般的なトレーナーからは常軌を逸しているトレーナーである。と認識している。旅をしている間に出会ったポケモンや伝説、そして悪党に対する反応もそうだが、何かあった際の行動力は凄まじい。一目で強いと分かるポケモン相手

にも恐怖心などを見せず、むしろ敵だと分かればすぐに台風のごとくぶっ飛ばす。時にはピカチュウの電撃で…ポケモンの技で…そしてサトシ自身の拳で戦う。

少しの間に旅に同行してケンジはそれがよく分かったから、幼馴染であるシゲルにとつてはサトシのことを人外か何かだと思っっているのかもしれないとケンジはちよつとだけ考えてしまった。

だからこそ、ケンジは聞きたくなつたのだ。

サトシが子供の頃にかなりいろいろとやんちゃをしていたという時期のことを――

「…そうだね…話をしてもいいかな…」

『ブラッキー』

シゲルは足元にいるブラッキーを撫でながら苦笑しつつも、ケンジの質問に答えてくれた。そして始まった話はまだサトシとシゲルがポケモンを持ってない頃……。

サトシの妹であるヒナがまだ、生まれていない頃の話をしてくれた。

.....

「サトシ…君ねえ…ポケモンを持たない人間が森の中に入るなどおじいさまに言われた
だろ!!!」

「……………」

サトシが草むらの奥の…トキワの森へ直進しようとしていたのをシゲルが見つけたため、シゲルは行くなど言って怒鳴る。だがサトシは無表情でシゲルのことを一度だけ見てからすぐにまた森に向かって歩き出そうとする。そのためシゲルはサトシの腕を掴み、これ以上行くなと言ってサトシの行く手を遮る。

「って僕の話の聞いているのかい…サトシ!!!」

「……………離せ」

「ッ…」

サトシはただ自分の腕を掴んでいるシゲルの手が気に食わないらしい。シゲルに向

かつて強い敵意の持った目で睨みつけてきたのだ。幼いシゲルはそれが堪えたのか思わず息を止め、掴んでいた腕を離してしまふ。そのせいで自由になつてしまつたサトシは森の中へと入つて行つてしまつた…。

「……………サトシ」

幼いシゲルはただサトシと一緒に遊びたいと思つていただけだ。他の子供たちとは違ふその態度。オーキド博士の孫だからという理由で接してこない…：…というよりほとんど無関心で何も言つてこないサトシに興味を持ち、一緒に遊んでみたいと思つていたからこそ、よくトキワの森に入つて行こうとするサトシに注意をして、森の中に入るなど言つていた。親切心から…：そして仲良くなりたいたいからこそ言つた言葉だつた。だがサトシはそれが余計らしく、むしろ辛辣さが増していった。最初は無表情でそれを見て、シゲルの言葉を無視して森の中に入つて行つてしまつただけなのに、だんだんと苛つきが増してきて、今では出会つただけで睨み付けられたりするようになってしまつた。その鋭い目つきにシゲルは何回も泣いてしまつたことがあるぐらい怖い思いをした。

でも、それでも幼いシゲルにとつては最初にサトシに興味を持つてしまつたきつかけのせいでサトシのことを諦めきれなかつた。サトシに何回も森の中に入るなど言つて

いるのにその言葉に耳を貸さず、大人たちの説教にも堪えず…そしてサトシの母であるハナコさんが息子のことを心配して泣かせてしまったというのに森の中に入るのを止めず、大人たちや大人たちのポケモンが連れて帰らないといつまでたってもマサラタウンに戻ってこないサトシだとしても…それでもシゲルは諦めきれなかった。

「……………」

シゲルはオーキド博士や大人たちがよく注意していた約束を破るといふ決意をした。いつもならここでサトシが森の中に入って行つたと大人たちに知らせて、サトシを連れ戻しに大人たちが森の中に行くのを見送るのがいつもの日常だけれど、今回は違っていた。サトシがどうして森の中に入るのかは分からない。

森の中に入るだけじゃない…前にキャンプに参加した時もサトシが楽しそうに遊んでいる皆から離れてどこかへ行ってしまった時があった。その時はキャンプの最初っからいなくなってしまう…そのままサラタウンに帰ってこないのではないかと心配したことがあった。だがその時は遠くからキャンプに参加しに来た女の子も一緒にいなくなっていて、結局は最終日に見つかったらしく大人たちに連れられて2人が…サトシが帰ってきて安心したという記憶が残っている。

…あの時のような辛い気持ちはもう二度とたくはないと思っ
ているシゲルだからこそ、サトシの後を追いかけるとい
う決心をして走り出した。

——そして見つけたのは幼いサトシの後ろ姿。ただひたす
ら前を見て歩いている姿に…トキワの森の奥へ行くの
だろうか。とシゲルは思いつつも、サトシに話しかけた。

「サトシ!!」

「帰れ…ガキが森の中に入って来んな…」

「ガキって…君も子供だろう?」

「うるせえお前には分からないことだ」

「…?」

サトシと話しているということにシゲルは嬉し
そうに口を開きつつも、サトシの言葉に疑問を感じて
しまった。まるで自分は子供じゃないと言いた
いようなそんな感じがすると思っただからだ。

何のことだろうとサトシに話しかけようとした…
その時だった。

とでいいんだよな…なあ？」

『ツツ!!?』

「サ、サトシ…」

「……………はあ」

オニドリルは目の前にいる小さくて幼いサトシを恐れて飛び去ってしまった。その姿を見てサトシはため息をついて…シゲルに視線を向ける。シゲルはサトシと目が合ったことに少しだけオニドリルのように怒られるのではないかと考え…恐怖していた。

でもサトシは、本当に疲れたようなため息をしてから、シゲルの頭に手を置いて乱暴に撫でてきた。その行動にシゲルは驚き、目を見開く。サトシはすぐに頭を撫でるのをやめ、そしてシゲルの腕を掴んでマサラタウンの方向へ歩き始める。腕を引っぱられたシゲルはそのまま歩きだしたけれど、何故トキワの森に入ったというのにマサラタウンに戻ろうとするのか疑問で頭がいつぱいになってしまった。今までのサトシの反応だったら、シゲルのことを置いてどこかへ行ってしまうというのに…何故自分を連れ

てマサラタウンに戻るのだろうということ、そして先程頭を撫でてきたのはなんでだろうと考え…口を開いた。

「サトシ…どうしてマサラタウンに帰ろうとしているんだい？…今までの君だったら、そんなこと——」

「うるせえ黙れ。俺がやりたいからやってるだけだ」

「……サトシ」

シゲルは少しだけ笑みを浮かべて、サトシに引っぱられるがままマサラタウンへと歩いている。サトシはシゲルのことを放ってはおけなくて、帰ろうとしてくれているのだろう。いつもならそのままどこかへ行ってしまうというのに…大人たちの制止を振り切ってどこかへ行ってしまうというのにはシゲルを連れてマサラタウンへ帰ろうとしているのだ。シゲルは考えていた。サトシは冷血無表情な人外だとよく言われてきっていたみたいだけれど、こんな形でサトシの優しさに触れ、人間らしい一面を知ることができたから良かった…嬉しいと思えたのだ。

その後、マサラタウンに帰ると大人たちが心配していて、サトシ達に説教していたこ

ともあつたけれど、幼いサトシはそれを無視し、そして幼いシゲルは大人たちの説教をちやんと聞きながらも今までにあつたことを思い出して、そして反省していたということがあつた――。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「――ということさ」

『ブラア…』

「な、なんか子供の頃のサトシもいつも通りだったんだね…ちよつとだけ辛辣なだけで…しかもオニドリルにポケモンなしで勝っちゃうだなんて…」

「サトシのやることにいちいちツツコんでいたら身が持たないからね…適度なスルーも大切だよ」

「ああうんそうだね…さすがサトシの幼馴染…」

ケンジはシゲルの言う昔の話を聞いて苦笑していたけれど、でももうサトシだからという言葉で納得できるといふことと、シゲルがスルーも大切という言葉を言ったおかげで引き攣った笑みだけで済んだと言える。

本日も、マサラタウンは平和だ。

第二百二十五話　妹と平和な1日

こんにちは妹のヒナです。シロナさんの別荘で大会に向けてポケモン強化合宿のよ
うな状態で毎日をご過ごしています。まあ、私にとってはバトルに出るといふこともな
く、旅に出てから久々にのんびりとした毎日を送っていますけどね。

「ルカリオ…これぐらい？」

『カゲエ？』

『いや、もう少しかき混ぜた方が良いな…俺がやろうか？』

「ううん大丈夫！私がやるよ！」

『そうか…ヒトカゲもあまりきのみを投入するなよ』

『カゲ！』

『ロメエ？』

「あ、メロエツタ：それぐらいでいいんじゃないかな？…よし。どうルカリオ？」

『ちようどいいな。メロエツタ、そこにあるバターをとってくれ』

『ロメツタ！』

「次何したらいいー？」

『カゲエ？』

『ロメエ？』

『ちよつと待っている』

私たちは現在シロナさんの別荘のキッチンにいます。ルカリオが旅ではあまり作れない本格的なお菓子を作ろうとしていて、私たちもそれを手伝えたらいいと思って行動しました。メロエツタはルカリオがどんな料理を作るのか興味をもって、私と同じようにルカリオのことを手伝っています。

これから作るのは人間用のシュークリームとアップルパイ。そしてポケモン用のモンの実シフォンケーキと様々な味のポフィンです。兄たちが大会に向けて特訓している間に作っておくというから凄い。たくさん作っているのにルカリオの手際が良く

て私たちがかえって邪魔しているんじゃないかと思ってしまうぐらいだ。

でもルカリオはむしろ手伝ってくれて感謝していると微笑みながらも言ってくれたから大丈夫：かな？まあ駄目だと言われたらすぐにキッチンから離れようとは思ってるけどね。

『ミイ：美味しそうな匂いでしゅ：！』

『ピッチユウ!!』

「あれ：シエイミにピチュウ：外で遊んでたんじゃなかったの？」

『カゲ?』

『ピチュピーチュウ!』

『ミイはお腹がすいたんでしゅ：何かくれ!』

『少し待て。まだ冷めていないからつまみ食いするな!』

「あはは：」

『カゲエ：』

『ロメツタ：』

シエイミとピチュウが一緒になって焼きたてのポフィンを食べてしまっていて、ルカリオが少しだけ怒ってシエイミとピチュウに説教している。でもシエイミもピチュウもお腹が空いたらしくルカリオは最後に仕方ないため息をついていた。

そんなシェイミたちに私とヒトカゲ、メロエツタは苦笑しつつも先ほどルカリオに言われたパイ用の生地を伸ばす作業を続行する。

『ピチュ…』

「あ、駄目だよピチュ。それは後でケーキ用に使うきのみだからね」

『カゲカゲ』

『ピイツチュ…ピチュピチュ!!!』

『ミーもお腹空いたでしゅ…何かくれえ!!!』

「こらこら…」

『もう少しだけ待てといっているだろう。我慢して待て!』

『待てないでしゅよ!早く作るでしゅ!!!』

『ピツチュ!!』

『ロメロメ…ロメツタ…♪♪♪—————』

メロエツタがお腹が空いて苛立っているピチュとシェイミのために歌を歌ってく

れた。その歌はとても心地よくシエイミやピチューの苛立った気持ち癒されるような：そしてお腹が空いたという感情が消えていくようなそんな感覚かもしれない私は思った。私もメロエッタの歌に癒された。そして歌を聞いている間にルカリオが物凄いい勢いで先程までシエイミとピチューが食べようとしていたポフィンやきのみを遠ざけていたのはちよつとだけ苦笑してしまっただけだね…。

『ロメッタ!』

「ありがとうねメロエッタ!」

『カゲカゲ!』

『メロオ!』

『ミイ……仕方ないでしゅね…もうちよつとだけ待つてやるでしゅ。ミーに感謝するでしゅ!!』

『ピチュウ…ピチュピツチュ!』

「はは…うん分かった」

『カゲカゲ』

『はあ…まったく。ポフィンが冷めたらすぐに言うからその間で遊んでいろ』

ルカリオがため息をついて疲れたような表情でシェイミとピチューを外に出して、そしてまたお菓子作りを開始した。私たちもできることをやっていく。たまにまたお腹が空いたとシェイミとピチューが襲撃してくる時もあったりしたけれど、その時は激怒したルカリオに説教されてつまみ食いはしない方が良くと学んだらしい。ちゃんと出来上がったといわれるまで待ち、そして兄たちが来るまで勝手に食べようとはしなかった。

———そしてできたお菓子は本当に美味しかったといえる。たまにはこういう日もあってもいいよね？

第二百二十六話　妹はアイリスとの絆を見た？

「こんにちはは妹のヒナです。突然ですけれど、現在停電中です。」

「暴れ者のカイリユー…ね…」

『カゲカゲ…』

『ピチュ』

カイリユーが変電所を襲って、いろいろと被害が出ているとジユンサーさんが言ってきました。それで別荘にいらっしゃると思つてシロナさんに助けを借りようとしたらいいんですけど、シロナさんは現在大会の準備をするために外出していません。それで早急に対応ができなくなつたと残念そうだったがジユンサーさんはそのまま変電所に戻つて行つた。

：私としては、ああようやくカイリユーが来たかと思っっているぐらいだ。アイリスの手持ちになるであろうカイリユーだけれども…でも暴れん坊な性格のせいでアイリスの手持ちになっても問題が起きたということが原作であったから、これから大丈夫なのかなとちよつとだけ不安になる。：主にアイリスの暴走についてですけど。

前にエモンガの件のような感じになるかなと思うけれど…どうなんだろう…。まあその時に考えて行動すればいいかなと思ってます。とりあえず何かカイリユーについて暴走したらその時に助けるか同情するかのどちらかにしておこう…。まあなんとかなるよね。

カイリユーが今までどんな行動をして暴れてきたのかを執事さんが教えてくれて、私たちはそれを聞いている。

アイリスはカイリユーが暴れ者だということで変電所を襲ったという理由に疑問を持っていてみたいだ。単にドラゴンタイプだからという理由ではなくちゃんとはつきりとした考えをもって話す所は兄に影響を受けてしまったからだと思う。アイリスは執事さんの言ったことに首を傾けてから考え、そして口を開いた。

「ちよつと待つて。それっておかしいわ…。暴れ者といつても強いポケモンと戦いたい

からカイリニューが行動して…それで今まで被害が出たんでしょ？ だったら変電所を襲った原因は何？…サトシ、どう思う？ なんだかおかしいと思わない？」

『キバキバ？』

「ああ…確かにおかしいな。もしかしたら変電所に強いポケモンがいるという可能性もあるけど…それだったら変電所じゃなくてそのポケモンに襲いかかったから被害が出たってジュンサーさんが言うはずだよな…」

『ピイカ…』

「…そうだね…何かが変だ…他に何か理由でもあるのかもしれないね」

「変電所に行けば理由がわかるかもしれない…強いポケモンがいるか、それとも別の理由か…とにかく行きましょう！ 行つて原因を確かめた方が早いわ！」

『ポチャポチャ!!』

———というわけで、私たちはその変電所に向けて走り出した。と言つてもどこにその変電所があるのかわからないためルカリオが先程のジュンサーさんの波動を調べて案内している状態なんだけど。…ルカリオの案内によつて、そのまま行つた先ではジュンサーさんや警備員さんたちがダクトの方を見て調べ、どうしようか考えている途中のようだ。私たちはそこまで行き、そしてアイリスがそのダクトへ入つて確認してみると言う。

「…私、アイリスと言います。私がカイリユールと話をして外へ連れ出します!」

『キバキバ!』

「落ち着けよアイリス!…あの、この変電所にはカイリユールが戦いたいって思える強いポケモンっているんですか?」

『ピイカ?』

「い、いいえ…ここに居るのはコイルだけよ…それにあなたの希望はかなえられません!…あなたたちの身に危険を伴うようなことはできないわ!」

「大丈夫ですよ!…ここに居るアイリスは竜の里出身で…ドラゴンタイプと話ができますから!…ね、アイリス」

『ポチャ!』

「はい!大丈夫ですから…お願いします!カイリユールと話をさせてください!!…暴れるという以外にも何か…他にも理由があるかもしれないですから!」

『キバキ!!』

「…仕方ないわね。いいでしょう、お願いするわ!」

ジュンサーさんがアイリスたちの話を聞いてくれて、ダクトから中に入らせてくれ

た。…でも私とヒトカゲ、ピチュューとルカリオとデントはここで留守番になるみたいだ。私たちはまだバトルができないし、カイリユーがもしも本当に変電所を襲っていたとしたら危険だと言われ、ここで待機しろと兄に言われてしまった。あと、デントは身長的にダクトに入れずに仕方なくここで待機して、そしてルカリオは私たちを守るという意味でここに残っているらしい。でも私はちよつとだけ不安だった。…まあ確かに私たちには力もないし、やれることも少ないけれど…でも何だか大丈夫なのか心配になつてくる。

「私も一緒に行く！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

『駄目だ。もしカイリユーに攻撃されたらどうする？このままここで待っている』

「そうだよヒナちゃん。僕たちは僕たちのやれるべきことをやるのみだよ」

「……分かった」

『……カゲ』

『……ピチュ』

『バアウウウウウウ』

『!!!!!!』

「何だ!？」

「カイリユーの声よ……!」

「お兄ちゃん……お願いだから暴走はしないでね……!!」

『カゲカゲ……!』

『ピチュピチュ……!』

『……………』

『……♪♪♪』

「……あれは……メロエッタの歌……」

「メロエッタ……」

カイリユーの叫び声とメロエッタの歌声が変電所の中から聞こえてきて、私は祈るように待ち続けた。兄の暴走さえなければ普通にアイリスのゲットフラグが立って無事に終わるはずだと信じて……そして何も起きないと願って待ち続けた。

「ジュンサーさん!」

『ピイカ!』

「あ、帰って来たみたいだね!」

「…でもアイリスたちがいないみたい」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『…アイリスたちは中にいるようだな』

私たちはジュンサーさんや警備員さんたちにカイリユーについて話をする兄たちに近づいた。兄たちの説明だとカイリユーは怪我をして動けないということ、怪我のせいで一度暴れてしまって道がふさがったということと話した。でもジュンサーさんたちはそれを聞いて険しい表情で暴れ者のカイリユーの怪我を治すことはできないということ、強いポケモンを持つ有力トレーナーたちを集めて無理やり突入するということを話した。

それを聞いた私たちは微妙そうな表情を浮かべていて、何かできることはないかと考える。…兄がその後アイリスに話をするために一度変電所の中へ戻って行ったため、もしかしたら原作通りに終わるのではないかと思えた。兄が戻ってきて、カイリユーについて何も分からなければ私が話をしようと決意をして、変電所にいる兄を待つことにす

る。

でも私が話さなくても大丈夫なようだ。アイリスから真実を聞くことができ、どうしてこの変電所で暴れたのかが分かった。

「カイリユーは森のママパトを庇って…サザンドラの攻撃を受け傷ついた…その痛みに耐えかねて墜落したのが偶然にもこの変電所だった…ということかい?」

「ああ」

『ピツカ』

「なるほどね…いつも暴れてきたから、皆がカイリユーが変電所に襲いかかってきたと誤解した…」

『なんだかただの自業自得でしゅね…』

『ポチャア…』

「でも、ママパトを庇ったっていう証拠さえ見つければ何とかなるんじゃない?」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「ああ、そうだな…早く見つけてカイリユーを保護しようぜ!」

『ピツカ!』

私たちは何か証拠となるものがあるかどうか、まずはカイリユーが攻撃を受けたという場所まで向かうことになった。そこで見つけたのは激しい攻撃の後。…そしてある一つのカメラ。

「これさえあれば…カイリユーが助かる！」

『ピカピカ！』

「早くこのカメラの持ち主に交渉して録画を見せてもらおう！カイリユーが映っているかどうかを調べて…それでジュンサーさんの所へ向かうんだ！」

カメラからはちゃんとカイリユーがマメパトを庇っている映像が映っていて、無罪だということがはっきりと分かった。そのためカイリユーは無事怪我を治すことができる、そしてジュンサーさんたちに捕まることもなくすぐに解放されるらしい。

——でも、カイリユーはそのまま飛び去ることもなく、その時にカイリユーを庇って守ろうとしたアイリスのことを気に入り、手持ちになりたいと言ってきた。

「ありがとうねカイリユー…これからよろしくね！」

『キババ!!』

『バオオオオオオオオオオ
』

!!!!!!!

「何はともあれ…一件落着…かな？」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『ロメツタ!』

第二百二十七話く兄たちはジュニアカップに出場するく

こんには兄のサトシです。ジュニアカップが始まり、皆がやる気に満ちているみたいです。いい席をとろうとしてトレーナーたちが走っていたり、バトルのやる気に満ちていたりとても楽しそうな雰囲気だ。さすがジュニアカップだと思う。自由参加だからどんなトレーナーが参加しているのか…またはバトルができるのか期待できる。ヒカリ達もジュニアカップに参加すると言っていたから、もしも対戦することになったとしたらそれも面白くなりそうだと感じた。

「頑張ろうぜピカチュウ！」

『ピツカア!』

「……あ、ねえお兄ちゃん……あそこにいるのって……」

「ん? 何だ?」

『ピイカ?』

『カゲ?』

『ピチュ?』

「どうしたのヒナちゃん……ってあれってアデクさんとシロナさんじゃない?」

『キバキバ!!』

「へえ……あの人がイツシユ地方のチャンピオンアデクさんのね……!」

『ポチャ……!』

『……なんだかギラティナみたいな人間でしゅね……』

「あー……確かにちよつとだけ似てるかも……?」

『カゲエ……』

『ピチュ……』

妹が見つけたのはアデクさんとシロナさんが話し合っている光景だ。でもチャンピオンがいると言われて騒がれないようにという意味でなのかは分からないが、ジュニア

カップの建物の草むらの方に2人はいる。妹が発見して言わなければ分からないところで話し合っていたのだ。

アデクさんはシロナさんに一緒に食事でも食べに行かないかと誘っているらしい。でもシロナさんはそれを断っているというのに、アデクさんがかなり積極的に誘おうとしている。それをみて俺たちはちよつとだけ苦笑しながらもアデクさんたちに近づく。だが話しかけようとしたらある人物が俺の声を遮って大きな声で叫んできた――

その人物……シューティーは90度の角度でお辞儀をして、俺に向かって大きな声で挨拶してくる。

「お久しぶりですサトシ先輩!!!」

「お、お久しぶりだなシューティー……」

『ピイカ……』

「はい……もしかしてサトシ先輩もこのジュニアカップに出場するのですか!？」

「まあな。シューティーも出場するのか?なら俺たちが戦うことになるかもしれないな――
!その時はよろしく頼むぜ!」

『ピツカッチュ!!』

「い、いえ!!こちらこそよろしく願います!!」

シューティーは俺たちに向かって大きな声で話しかけてきたため、俺もアデクさん達ではなくシューティーに笑顔で話しかける。シューティーもこのジュニアカップに出場するらしく、久々にバトルができると知ってちよつとだけこの大会の楽しみが増えたと思えた。シューティーもますます強くなってきたいて、チャンピオンのアデクさんと戦って強くなるために必死で頑張っているみたいだから、対戦したら全力で挑みたいと思う。

そして俺たちが騒いでいることに気づいたアデクさんとシロナさんがこちらに近づいて話しかけてきた。シューティーがアデクさんに気づいて表情を硬くする。おそらく前にアデクさんと会った時のことがあったて微妙な心境なのだろう。だがアデクさんは出会った時のことを覚えていないようだった。

「おお……えつと……誰だっけ？」

「シユーターです」

「そうそうシユータータロウだったな！」

「いえ、シユーターです。…あの、アデクさん…それにサトシ先輩も…僕は絶対に2人と戦うまで負けはしません。絶対に勝つて…そしてサトシ先輩と戦い…全力で挑みます！そしてサトシ先輩とバトルしてもしも勝てたなら…その時はアデクさん……よろしくおねがいします！」

「…シユーター、もしもじゃ駄目だ。もしもじゃなくて全力で勝つてみせますって意気込まないと駄目だぜ！」

『ピツカア！』

「サトシ先輩……はい。全力でサトシ先輩に挑んで、勝つてみせます！そして優勝して…アデクさんと戦って僕の実力を見せます!!」

「おお、その意気だぞシユーター!!」

「シユーターです！…サトシ先輩、僕はこれからジュニアカップの登録に向かいますね…それではまた…！」

「ああ、またなシユーター！」

『ピツカア！』

シューティーは最初は少しだけ不安そうな表情だったが、俺が全力で挑めというこ
と、勝つ気で来いと言ったため今度は強気な目で俺やアデクさんを見て、そしてジュニ
アカップ大会が開かれる建物へと向かって行った。最後の方ではシューティーもかな
り好戦的な表情でいたため、これでジュニアカップで対戦したとしても大丈夫だろうと
思った。俺はそんなシューティーに挨拶をしてから、アデクさんに話しかけた…けれ
ど。

「あの、アデクさん——」

「じゃあねサトシ君たち、また会場だね」

「あ、はい」

『ピイカ』

「おお?!?待ってくれ!晩飯は!?!」

「……おい」

『……ピイカ』

「ははは……」

『カゲエ……』

『ピチュウ……』

『ギラティナよりもしつこい男でしゅね……』

『ロメエ……』

アデクさんはそのままジュニアカップ大会の建物に入って行くシロナさんを追いかけて行つてしまい、話しかけることができなかつた。よほどシロナさんと一緒にご飯を食べに行きたかつたのだろう。まあ仕方ないと俺はため息をついて妹達を見てから言う。

「じゃあ、受付に行こうか！」

『ピッカー！』

皆はその言葉に頷き、意気揚々とジュニアカップ大会の受付へと歩き始めた。……どんなトレーナーやポケモンたちが待ち受けているのかとても楽しみでやる気がでる……絶対に優勝して、それでアデクさんとバトルしようと思は心に決めた。――

ちよつとだけ、シユーターのことが気になるけれど……それは後で妹に相談しようかなと思つている。

第一百二十八話～兄はアイリスの素質を見た～

こんにちは兄のサトシです。そろそろジュニアカップ開幕で皆がやる気に満ちています。もちろん俺も。

そして大会にはシューティーだけじゃなく他にもラングレーやカベルネも参加するようであるバトルになるか楽しみです。俺は知らないトレーナーと戦い、ワルビルで戦って勝つことができて…無事にワルビアルに進化しました。喜べる出来事です。

そして他にもヒカリやデントも勝ち上がっていった。最初のバトルでカベルネはシューティーと戦って…シューティーが勝つことができた。

あ、ちなみに妹とヒトカゲ、ピチュー、メロエッタ、シエイミ、ルカリオは観客席で

見ています。俺たちは普通にバトルフィールドの近くでバトルを観戦していて、呼ばれたらすぐに行けるようにしている所にいます。

そして次に行われたトーナメント一回戦のラストはアイリスとラングレーのバトル。ラングレーはちよつとだけ引き攣った表情を浮かべているけれど、ちゃんとアイリスと向き合って勝負を始めようとしている。そしてラングレーがボールから出したツンベアーに対して、アイリスは少し前にゲットすることができたカイリユード勝負をするこ
とにしたみたいだ。

「よろしくねラングレー！」

「え、ええ…よろしく」

【さてさてやってきました第一回戦のラストバトル!!まずラングレー選手が出したのはツンベアーだああ!!】

「ツンベアー…ね…よし。行くわよカイリユード!!」

『バオオオオオ!!』

「カイリユード…ドラゴンタイプってわけね…望むところよ…!」

『ベツアアア!!』

カイリユードをボールから出したアイリスに、ラングレーはドラゴンバスターとしてや

る気が出たらしい。アイリスと対面してトラウマが出て少し震えていたというのに、今は笑みを浮かべてツンベアーと一緒に勝つという意気込みでいるようだ。

「これはこおりタイプのツンベアーが有利かもしれないね……」

「ああ、でもアイリスなら大丈夫だろ？ 不利なタイプだとしても逆転勝ちできるさ」
『ピツカ！』

「……それもそうだね。アイリスなら必ず勝つき！」

「ええ、絶対にそうよ！……それにカイリューとの初バトルなんだから、頑張れアイリス！」

『ポツチャ！！』

「アイリスとの勝負……負けてられないわよツンベアー……めざめるパワー！」

『ツツベアアアアア！！！！』

「来るわよカイリュー！空を飛んで避けなさい！……カイリュー？」

『……………』

「おおつと!?これはどうしたことか!!カイリューはアイリス選手のいうことを聞かず、

めざめるパワーを避けようとしなない!!!」

「これは…」

『ピイカ…』

「え、どうして避けないのよ!?!」

『ポチャ!?!』

「な、何が起きたんだろうね一体?」

『バオオオオオオ!!』

「何!?!」

『ベツアアア!?!』

——カイルリューは技を避けず、むしろラングレーのツンベアーが放つためざめるパワーを正面から弾いてしまっていた。…ということは、ツンベアーよりも相当レベルが高いということだろう。そしてアイリスの言うことを聞かないと言うことはトレーナーとしての指示を聞く気はないと言う意志だ。どうしてなのかは…もしかしたらレベルが高すぎることで、本来の性格ゆえの問題かもしれない…ああでも…いや、これはアイリスの問題だろう。俺が関わることはあまりない。本当にやばいと思っ

たらアイリスに直接言おうと思ってるけれど、今のアイリスならば大丈夫だろう。

アイリスは目を閉じてカイリユーに何も指示を出さず、カイリユーはまたもやツンベアーのれいとうビームを受けて凍ってしまった。それに対してもアイリスは何も言わない。目を閉じてトレーナーとしてバトルの指示を出していないアイリスにラングレーが苛立ったような表情で拳を握りしめ、怒鳴ってきた。

「ちよつとーアイリス!! あんたはそんな奴じゃないでしょ!?! ドラゴンマスターとして夢を持つてるあんたが…私が認めたとても強いドラゴンマスター候補がカイリユーの指示を放棄してんじゃないわよ!!! あんたそれでもあのアイリスなの!?! 私を倒したアイリスならもつとちゃんとしなさいよ!!!」

「ええ…分かってるわラングレー…十分にね。…カイリユー、あなたの気持ちがよく分かったわ。強いポケモンに正面から挑みたいという気持ちも…勝負して勝ちたいという気持ちも伝わってきた。でもただ凍っているだけでいいの?…ただ技を受けて…それで無意味にダメージを食らうだけでいいの?…もしも勝ちたいと望むのなら、強いポケモンと戦いたいと望むのなら私の言うことを聞きなさい! そのまま技を受けて負けたくないならね!———じゃないといろいろとお話することになるわよ?」

『バオオオオオオオオオオ!!!』

カイリユーは身体の周りにある氷を砕き、アイリスの声に反応して大声で叫ぶ。

アイリスの異様な雰囲気を感じ取ったのか、それともアイリスの開いた眼差しに冷たい何かを感じ取ったのかは分からない。けれどアイリスの方を見て、ちよつとだけ仕方ないというような態度をとり、ツンベアーに向き合った。

その表情とアイリスの声にラングレーは恐怖とトラウマで圧倒されつつも、苦笑してため息をついてからツンベアーに指示を出す。

「ツンベアー、ふぶき！」

『ベツアアアアアアアア!!!』

「行くわよカイリユー…かみなりパンチ！」

『バオオオオオオオオオオ!!!』

【おおつとアイリス選手のカイリユーがツンベアーのふぶきをものともせずそのままかみなりパンチを決めましたアアア!!!アイリス選手の勝利となります!!】

「よし…よく頑張ったわね。カイリユ―」

『……バオオ』

「戻ってツンベアー。……ふん！アイリス。今度はちゃんと最初から指示を聞くように教育しときなさいよ!!」

「ええ分かかってるわ…ありがとうラングレー」

「……………そう」

カイリユ―はアイリスに一度だけ視線を向けてから、すぐにそっぽを向いて小さく声を出す。それを聞いたアイリスは苦笑しつつもありがとうと礼を言っていた。

そんな彼女たちにラングレーは不機嫌そうな表情で向かって指を指してからすぐに外へ出て行ってしまった。でもアイリスはその態度に怒らず、ただ苦笑してその後ろ姿を見送っているだけだった。

俺たちはその様子を見てただ苦笑していた。

「これから前途多難だね…」

「ああ…でもあのカイリユーなら大丈夫だろ？」

『ピイカ？』

「どうしてそう思うのよ？」

『ポチャア？』

「あのアイリスとカイリユーは…ちよつとだけ似ているような気がするからな」

『……ピツカ』

「なるほどね…でもまあこれから不安がいつぱいあるかもしれないけど…最終的には何とかなりそうよね」

『ポチャポチャ！』

「そうだね！アイリスとカイリユーならきつと大丈夫さ！」

まあカイリユーが指示を聞かないというトラブルもあつたけど…でもまあ無事に勝ち進めたみたいだから良かったなと思えた第一試合だった。

第一百二十九話く準決勝にて戦う相手はく

こんにちは妹のヒナです。先程まで兄が私だけ建物の外に連れ出し、ピカチュウたちを置いて何か聞きたいことがあるみたいでした。このジュニアカップでの原作の優勝者とアデクさんと戦う相手が誰なのか知りたいと言われたため、シューティーだと伝えました。すると兄はちよつとだけ考えてから領き、そのままジュニアカップの第一試合に行こうとしていて…なんだか悩んでいるようで心配になった私は兄の腕を引っぱってから言った。

「お兄ちゃん…もしかして原作通りの展開にしようとしているの？シューティーにアデクさんと戦ってほしいって…思ってるの？」

「……まあ確かに…ヒナが原作の知識を言うまではどうしようか悩んでたぜ…」

「でもそれは……！」

「ああわかつてる。たとえ原作通りの展開じゃないとしても、俺は全力を出して戦う。シューティーがアデクさんと戦いたいと願っていても……バトルは全力を出すのが礼儀だからな」

「……うん。そうだね……」

兄はシューティーがアデクさんと戦いたいと思っっていると分かっていたみたいだ。でもシューティーは決勝戦で……もしかしたら兄に負けるかもしれないと思う……。いや、努力を怠らない兄と、その兄から学んで行ったシューティーのバトルは最後までどうなるかはまだ分からないけれど、……でもいつもの兄ならば勝ってしまうだろうと思っただ。兄はシューティーの願いをかなえたいと思っただのかもしれない。でもそれはシューティーにとっては嫌な考えだろう。同情でわざと力を抜かれて負けられるのはトレーナーとして礼儀を欠く行為だと言われるかもしれない。だから兄は悩んで、そして決勝戦で挑むことになるかもしれないシューティーと全力で挑むと決めたようだ。私はちよつとだけ安心した。

——まあ準決勝でその気持ちは揺らいでしまったんだけどね……。

【さあ準決勝の試合が始まりました!! 準決勝、アイリス選手はカイリユウ。サトシ選手はルカリオを出しました!】

「どうということなの!？」

『カゲカゲ!?!』

『ピチュ!?!』

『ミイイ…ルカリオがさつきサトシにバトルに出してくれて頼んでいたでしゅよ』

「だ、だから観客席にいなかったんだね…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『ロメツタ…』

兄がいつの間にか隣にいたルカリオをバトルフィールドへ行かせ…何故か試合が開始されてしまった。…そういえばルカリオはジュニアカップに出てみたいと興味をもっていたというのには前に見たことがある。ドンナマイトでも…その前のバトルでもたびたび戦ったような表情を浮かべていたけれど…まさか兄のポケモンとして参加することになるとは思わなかった。

…でもまあいつもいろいろと苦労をかけてしまっているし…世話になってるしで兄もルカリオの頼みを聞いたのかもしれない。兄のポケモンであるピカチュウたちはもしかしたらその試合に出たいと不満に思っているかもしれないけれど、旅をし続けていてルカリオと共に行動していたことでルカリオの性格を知っているし、前からバトルに出ていたかったというルカリオの気持ちも分かっていたのにも気づいていた。…だから大丈夫だろう。ルカリオが一度兄のポケモンとして試合に出たぐらいでピカチュウたちの絆はそう簡単に切れないし、ちゃんと理由も分かっているから納得していると思う。…というか、兄は自分の手持ちのポケモン第一だからピカチュウたちが本当に嫌なことはしないし、お互いが納得してから試合に出るはずだからちゃんと解決してからルカリオと一緒にバトルに挑んでいるはずだと思う。

…まあ兄だから大丈夫だよな。

「ルカリオ…：そっかさっきのあれってルカリオの…：良いわ。いくわよカイリユー！」
『バオオオオオオオオ!!』

「ルカリオ、お前が試合に出たいという気持ちに応えて俺はこの準決勝に挑む。だから全力でカイリユーに勝つぞ!!」

『…ああ』

「頑張つて!! えつと…お兄ちゃんにアイリス!! 両方とも負けちゃ駄目だよ!!」

『カゲカゲエ!!』

『ピチュピチュ!!!』

『ミイ…それじゃあ引き分けになつちやうでしゅよ! サトシかアイリスのどつちかが勝たないと意味がないでしゅ!!』

「分かつてるけど…でも両方とも負けてほしくないような…うーん…とにかくどつちも頑張れ!!」

『カゲ!!カゲカゲエ!!!』

『ピツチュウ!!ピチュピツチュ!!!』

『仕方ないでしゅね…じゃあミーはサトシのことを応援してやるでしゅ! だからヒナはアイリスを応援するでしゅよ!!!』

「うう…分かった…アイリス頑張れえ!!!」

『カゲカゲ?』

『ピチュピチュ?』

『お前たちもでしゅか…ヒトカゲはサトシでピチュウはアイリスを応援するでしゅ!!』

『カゲ!カゲカゲエ!!!』

『ピチュ！ピチュピッチュ!!!』
『ロメエ…』

試合はかなり激化していた。技が放たれたら避け、隙をついて攻撃したと思ったら避けられて攻撃され——と何度もそういう行動が続き…そして最後にルカリオがカイリユーのかえんほうしやを避けて後ろへ回り込む。

「後ろよカイリユー!!」

『バウ!?!』

「今だ！ルカリオ、はどうだん!!!」

『——ツ!!!』

『バウウウウ!!!』

『カイリユー!?!』

【おおつとカイリユーがルカリオのはどうだんに直撃イイ!!そのままカイリユーがダウ
ンしたア!?!?!!カイリユー戦闘不能によってサトシ選手が勝利となります!!!よってこの試
合、サトシ選手が決勝へと進むことができます!!!】

「負けちゃったか…ごめんねカイリユ…ありがとう」

『……………バウウ』

「よし。サンキューなルカリオ！」

『…いや、俺の方こそ試合に出たいと言う我儘を聞いてくれてありがとう』

「そんなことないさ。いつもいつも旅で迷惑かけてるし…オカンの頼みぐらい聞くし…これぐらいなら大丈夫だって！な、ピカチュウ」

『ピカピッカ！』

『そうか……ん？待て、サトシ…今俺に向かってオカンと言わなかったか？』

「え、……気のせいじゃねえの？」

『ピ、ピイカ…』

『……………次に言ったら晩飯のおかわりはお前だけなしにするぞ』

「…おう、次は言わない」

『…ピツカア』

何だかバトルフィールドが騒がしいみたいだけれど…でも兄はルカリオと一緒にバトルで勝つことができた。この後の決勝でちよつとだけ心配になるけれど…でもまあ

あの兄ならば…そしてあのシューティーならば大丈夫かという気持ちもあるから平気なのだろう…きつと。

とにかく私たちは後でルカリオに会ったらすぐにお疲れ様と言わないといけないと思う。そう考えて決心し、決勝戦を見る前にルカリオに会いに行こうと立ち上がった――

第三百十話～イツシユチャンピオンとのバトル～

決勝戦で勝ちあがって優勝したのはチャオブーで戦ったサトシだ。シューティーは悔しそうな表情で…でも清々しい表情で次は…イツシユリーグでは負けません！と言つてサトシに向かつて笑みを浮かべており、サトシもその言葉に頷いて笑つてシューティーと握手をして決勝戦を終わらせていた。

そして始まったのは優勝したトレーナーがイツシユチャンピオンとバトルをするこ
と。サトシは好戦的な表情を浮かべてバトルフィールドへ歩き始め、アデクと向き合
う。

「…頑張れ、お兄ちゃん」

『…カゲ』

『ピツチュ』

『…大丈夫でしゆ。サトシなら…絶対に勝つでしゆよ!』

『ああ…サトシなら絶対に勝つ』

『ロメロメ!!』

「うん…そうだね!」

『カゲカゲ…!』

『ピツチュ!』

ヒナたちは観客席でサトシのことを応援していた。イツシユチャンピオンに勝てるかどうかはまだ分からないけれど、勝つてほしいと願い、そして大声で応援する。もちろん観客席にいるヒナたちだけでなく、参加者がいるべき場所でヒカリ達もサトシのことを応援していた。もちろん決勝戦で負けてしまったシユーターも大きな声を出して応援している。

そんな盛り上がっている中、バトルフィールドでは今まさに、開始の合図が出されそうになっていた。

「チャンピオン・アデクが出したのはバッフロンです。対してサトシ選手はピカチュウを出しました！」

「サントロウはピカチュウで来るか……」

『バルル……』

「……俺の名前はサトシです。……アデクさん、全力で挑ませていただきますよ!!ピカチュウ、10まんボルト！」

『ピツカア!!』

「バッフロン……そのままつつこめ！」

『バルルウ!!!』

「おおっとバッフロンがピカチュウの10まんボルトを平然と受けている！これは凄いで!!流石チャンピオンだ!!」

バッフロンがピカチュウの10まんボルトを振り払い、その電撃の強さに闘争心が掻き立てられたのか足元を何度も蹴り、叫んでいる。

その声を聞いたアデクは感心したようにサトシとピカチュウを見る。

「ほう、かなり強い電撃のようだな。バツフロンが興奮しておるわ……!」
『バルルウ!!!』

「いえ……まだまだこれからですよ!ピカチュウ、《雷の舞い》!!」
『ピカピツカ!!』

「何……?」

『バルウ!?!』

「これは一体どんな技なのでしょう!?!サトシ選手がピカチュウに指示した技によってピカチュウが複数現れ、そして上空に雨雲が出現しました!?!」

「イツシユリーグで使えると思って今まで修行していた技の1つです!」
『ピツカ!』

サトシとピカチュウがシロナの別荘で修行していた時に編み出した技。あまごいとかげぶんしんを使って次にバツフロンに攻撃する際の一点集中型である。あまごいとかみなりの命中を上げるため、そしてかげぶんしんはあまごいをしている間に攻撃され

ないための予防策である。

これでもしまごいを避けるために相手のポケモンがにほんばれなどを発動されてしまったら次にかげぶんしんを使用したままエレキボール&でんこうせっか&炎のボルトッカーで：命名《雷撃ボルトッカー》で攻撃していこうという方法を編み出している。：ちなみに炎のボルトッカーはサトシとピカチュウが作り上げたタイプが電気と炎の新しい技であつたりする。

サトシはその後、アデクがどのような行動をするのかを見て待っていた。どんな攻撃をされても油断せずに次に移るためである。もしも今攻撃をしようとしたならば、反撃してきたバツフロンにピカチュウの攻撃リズムを狂わされ、すぐに負けてしまう可能性もある。バトルが最後まで油断できないのがこのポケモンバトルの楽しめる１つだと言えるだろう。

それにサトシが今相手しているのはこのイッシュ地方のチャンピオンだ。たとえどんな性格の：ちよつとだけ残念な性格のチャンピオンだとしても油断はせずにいつもの力を出して戦おうとサトシとピカチュウは決心していた。だからこそ今こうして次の攻撃を待っているのだ。しまごいを消されたら次の攻撃に移り、もしもそのままならば一点集中型の攻撃をするだけだと考えながら…。

そう考えていたサトシに対して、雨雲が出現しピカチュウが複数現れたことに驚いて

いたアデクであったが、サトシが絶対に勝ってやるといふやる気と向上心、そしてその強い好戦的な鋭い目に思わず笑ってしまっていた。爆笑するアデクであったが、強者の雰囲気や漂わせていて、サトシとピカチュウはこれからアデクが何をするのかを警戒する。

「ハツハツハ!! 面白いなサンタロウ!! …いや、サトシか! 決められた技を使うのではなく、自ら技を開発するとはなあ!! ——こりやあ全力で戦った方がよさそうだな」

『バツフオオオオオオオ!!!』

「…来るぞピカチュウ」

『…ピカ』

【バツフロンがアフロブレイクを決めようと動き始めたアア!!! だがサトシ選手は避けようという指示を出さない!! むしろ避けずに立ち向かう気のようにだ!!!】

「…バツフロン!」

『バフオオオオ!!!』

「…今だピカチュウ! 電気砲!!!」

『ピツカアアアアアア!!!』

『バツフオオオオオオオオオオ!!!???』

ピカチュウの技、^{レールガン}電気砲はその名の通り、かみなりと10まんボルトとエレキボールを混ぜ合わせ、ボルテッカーの勢いで放つ雷のはかいこうせんのようなものである。かげぶんしんを解いたピカチュウはそのまま一気に電気技である^{レールガン}電気砲を放った。この技は一撃必殺のような大技のため避けようとすれば避けられる命中力がかなり低いのが難点な技なのだけれど、それは先ほど行ったあまごいによって発生した雨雲のおかげでかみなりの命中効果を活かしたため、ピカチュウの攻撃を避けようとしたバツフロンに必中し、技を受けてしまう。

……ちなみにその攻撃技を名づけたのはデントであり、その名前で某小説を思い出してしまった兄妹が苦笑していたという秘話があったりする。

そんなピカチュウの攻撃にあったバッフロンは吹っ飛んでいってしまった、凄まじいダメージを受けたような衝撃がアデクや審判のもとまで来たと感じたみたいだ。会場は一瞬静かになり…そして凄まじい歓声が聞こえてきた。盛り上がるジュニアカップの観戦者たちにピカチュウとサトシは苦笑する。苦笑したのはチャンピオンの意図が分かったからだ。アデクはサトシの指示するピカチュウの攻撃を受ける気であったのだろうということ、その対策を考えていたことがサトシとピカチュウには分かった。

だが周りは分かっているらしい、むしろチャンピオンが不利なのかと盛り上がっている。

「……な、なんということでしょう!! バッフロンがピカチュウの凄まじい雷のはかいこうせんのような攻撃にあい吹っ飛ばされましたアア!! これはバッフロン不利なのかああ!」

「…いや、そんなことはないですよアデクさん?…《みがわり》でピカチュウの攻撃を防いでいましたよね?」

『ピカピッカ』

「はっは! いやあバレたか!! そうだなあここで負けてしまつてはチャンピオンと自信を

もって言えなくなるからな!!」

『バッフオオオオオオ!!!!』

【おつとバッフロンは無傷だあああ!!これは面白いことになって来たぞ!?そろそろ時間もやばいけれど大丈夫かああ!?!】

時間というのは、チャンピオンと戦える時間ということだ。本当だったらタイムリミットをつけて勝負することはなかったのだが、シューティーとサトシのバトルが思った以上に長引いてしまったために、予定を大幅に変えてチャンピオンとのバトルを時間付きで挑めるというルールになってしまったのだ。

そしてそろそろ時間もない状態。次の攻撃ですべてが決まると言うことだろうとアデクとサトシは考えていた。

「ああ、そういうえばタイムリミットがあつたなあ…いやいや、もうちつと楽しみたいんだがなあ」

『バッフオオ!』

「楽しむ時間はここまでということでしょうね!…次で最後です。行くぞピカチュウ

「！」

『ピツカ！』

「バッフロン、アフロブレイク！！」

『ブルルオオオオオオオオオオ！！！！！！』

！！！！！！

「ピカチュウ、ボルテッカー！！」

『ピカピツカアアアアアアアアアアアア！！！！！！』

！！！！！！

地面を揺らすほどの地響きと衝撃が会場内に伝わっていく。時間がゼロになり、この攻撃でどちらが勝っているのかで勝負が決まることとなった。だが土煙でどちらが勝っているのかが分からず、静寂だけしかない状態。

だが、しばらくすると土煙がなくなり——立っていたポケモンはバッフロンとピカチュウの両者となった。

時間がないということから、この勝負は引き分けということになり、審判がそう叫ぶ。

「何ということだあああ！！！！サトシ選手とイツシユチャンピオン・アデクのバトルは引き分

けとなつてしまつた!! いやあ凄い戦いだつた!! できれば時間なんて関係なく試合を見ていたかつた!!
!!!」

「面白い…またバトルできる日を期待しておるぞ…サトシ」

『バルルウウ』

「はい、こちらこそ…全力で挑んでいただきありがとうございます!」

『ピツカ!!』

サトシとアデクが握手をして、ジュニアカップは盛り上がったまま閉幕した。

そしてこれが————後のイッシュリーグでサトシがイッシュ地方の有力なトレーナー達から注目され、有名になった一つの要因となる出来事となつたバトルでもあつた。

第三百三十一話　妹は別れと出会いを見た

「こんにちは妹のヒナです。…なんとというか凄い状況になってます……。

「サトシだっけ!? なあさっきの技何だったんだよ教える!!」

「なあなあチャンピオンと戦ったお前! お前強いなア俺と一緒に勝負しないか!」

「そのピカチュウ一体どんな鍛え方であんなに強くなったんだよ俺によこせ!!」

「ねえその…サトシ!! チャンピオンと引き分けになるなんてありえないわ! ズルか何かしたんでしょ!!」

「ピカチュウだっけそのポケモン!? ぜひ俺のポケモンと交換してくれよ!!」

「よく見るとそのピカチュウ弱そうだな。ああさっきの試合はまぐれだったのか!!」

「お前みたいな弱そうなトレーナーがチャンピオンのアデクさんと引き分けになるわけないだろう!! 一体どんな脅しをして引き分けにまでしたんだ!!?」

「……………」

「……………」

「うわあ……もうこれやばいんじゃないのかな……」

『カゲエ……』

『ピチュウ……』

『ロメツタ……』

『ポケモンセンターのジョーイに伝えた方がいいな……重傷者が多数出ると……』

『ミイ……あいつらもう終わったでしゅね。サトシに喧嘩売るなんていい度胸でしゅ!』

「うーん……もうちよつと離れた方がよさそうね……」

『キバキバ……』

「シンオウリーグでも見た光景ね……ポツチャマ、もうちよつと後ろに下がるわよ」

『ポツチャ……』

「ははは……デンジャラスなテイストがしそうだよ……つてあれ? シューティー君どうした

んだい？」

「…ああいえ、こちらにいた方がサトシ先輩と話ができそうな気がして。もしかして迷惑でしたか？」

「いやそんなことないよ！…でも…うんここにいた方が良いかもしれないね。お兄ちゃんとピカチュウそろそろ本気でキレそうだから」

『…カゲカゲ』

『…ピチュピツチュ』

ジュニアカップでチャンピオンと戦った兄が引き分けで閉幕し、建物から出る時とても大変でした。…イツシュ地方のチャンピオンと時間制限で引き分けた実力もそうなんだけれど、技を新しく作り上げるやり方に興味を持ったトレーナーたちに囲まれていたのだ。…まあほとんどがピカチュウを弱そうだなと貶したり交換したいと言ったりする人が多かったんだけれど…。チャンピオンと戦った実力や新しい技の使用に力のあるトレーナーは兄の実力を見て戦いたいと言ったり、まだまだ新米なトレーナーは兄がチャンピオンと引き分けになるということが気に食わないとばかりに貶し、怒ったりと様々だ。まあつまりトレーナー自身の実力や経験によって兄の力がどのくらい凄いのか分かっているか分かっていないかにはつきりと反応が異なっていてちよつとだけ

面白いと思えた。…でも兄とピカチユウはその反応が嫌らしい。最初は普通に困惑していたのに次第に無表情になっていくからわかる。

もちろんトレーナー達の中にはシューティーもいた。シューティーは兄に技を新しく作り上げるコツというのを聞きたいと思って突撃しているようだった。でも兄の寒気がしそうな無表情を見たときとたんに離れようと動いて、私たちの近くまで来て待つことにしようだ。…うんその方が正しい気がする。

兄はトレーナーたちに囲まれていろいろと言われ、学ばせろと叫ぶ人たちに苛立ち、今にもキレそうな雰囲気だ。

…あ、ピカチユウが10まんボルトで周りを威嚇してる…その間に兄が無表情から一変して笑顔で何か話してるみたいで、周りのトレーナーたちが怖がって遠ざかって行った。その表情には怯えがあって、一体兄に何を言われたのかは分からないけれど…トレーナーたちがピカチユウの電撃などで怪我なくて良かったと思っただ方がいいかな…。とにかく不機嫌そうな兄たちにジュニアカップの優勝を祝わないとね。

「お疲れお兄ちゃん…優勝おめでとう」

『カゲカゲ!』

『ピチュピッチュ！』

「…おう」

『…ピツカ』

.....

「サトシ先輩…僕、もつともつと強くなります！サトシ先輩のように…アデクさんのように…だから先輩…今度のイツシユリーグで…その…」

「分かってるよシユーター。またイツシユリーグでバトルしような！…あ、でも強くなるにしても焦ったら駄目だからな。お前だけが強くなりたいと望むんじゃない。シユーターのジャローダたちと一緒に強くなりたいと望んで行動するんだ」

『ピカピカ！』

「はい…！ありがとうございますサトシ先輩！！またイツシユリーグで会いましょう！」

「おう！またなシユーター！！」

「よ、お仲間！仲良くしようや!!」

『バウウ!!』

突然前から走ってきたのはリオルを連れたトレーナーで：名前はコテツ。コテツもリオルも親指を上げて私たちに挨拶をしている。

リオルは私たちの後ろにいるルカリオに同族がいたと喜んでいるようで近づいて挨拶していて、コテツはピカチュウやヒトカゲ、ピチュー：：そしてルカリオとシェイミ、ポツチャマを見て珍しいポケモンだなと大喜びしているみたいだ。：：なんとというか、コテツもリオルも似たような性格なのかなと思ってしまった。そしてジュニアカップに参加しようとしていたみたいなんだけど、もうその大会は終わつたし、先ほどポケモン図鑑を開こうとしてどこかのテレビのリモコンを取り出して私たちが苦笑した。随分とせっかちそうな性格なんだなと思ってしまったからだ。そしてまたやってしまったといつて嘆いていたみたいだけれど、すぐに機嫌を取り戻し、今ならまだアデクさんに会えるのではないかと考え、サインをもらいに行こうと大会が行われていた建物に走って行ってしまった。それはまるで台風か竜巻のような騒がしさだったと思う。

「何だったんだあいつ…」

『ピイカツチュ…』

「あ、嵐みたいな人ね…」

『キバキバ…』

『何だか関わり合いになりたくない人間でしゅね…』

『だが、リオルを見ている限りでは…悪い人間ではないみたいだ』

「リオルととても相性のいいテイストみたいだからね！でもまたどこかで会いそうだよ

…」

「うん…たぶんまた会うだろうね…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

『ロメツタ』

シューティー達と別れ、しんみりとした空気だったというのに、それを壊したコテツ

トリオルに私たちは苦笑して、そしてまた会うだろうと考えていた。

まあすぐに会いそうな気はしているけどね…主にヒカリさん達と別れた後に…。

ジュニアアカップが終わったけれど、まだまだ何かが起きそうな旅が続きそうだ。

第百三十二話　妹は兄以外のジム戦を見た

「じゃあねサトシ！またどこかで会いましょう！」

『ポチャポチャマアア!!!』

『ルカリオ！また会ったらポフィン作るでしゅよ!!!』

「おう！じゃあなヒカリ！」

『ピカピカア!!』

『ミジュミツジュウウ!!!』

『シエイミ…お前はまたそれか…また会うことがあつたらな。その時に作ってやる』

「ははは……じゃあまたねヒカリさん！ミクリカップ頑張つてね！」

『カゲカゲ!』

こんにちは妹のヒナです。ヒカリさんとポッチャマ、そしてシェイミがジョウト地方で開かれるミクリカップに行くため、飛行艇に乗って私たちと別れることになりました。兄はヒカリさんとバトルせずそのまま一日を過ごし、飛行艇まで見送った。

：その間にも反転世界からギラティナがヒカリさん達のもとへ現れなかったけど：まあ何も問題が起きなかつたから良かったと考えておいた方がいいかなと思つてます。もしかしたらジョウト地方に行ったヒカリさん達の後を追つてギラティナが行くかもしれないけどその時は頑張れヒカリさん。

：そしてその後私たちはジョウト地方でイツシユリーグが開かれると勘違いしていたコテツが飛行艇に乗り込もうとして私たちと再会し、まだイツシユリーグは開かれていないということや、開催地はまだ決まつてないということを説明した。そういう所もせっかちそうだなと思う：もしかしたらシンオウ地方にいるというジュンに似ているかもしれない：。そしてコテツはまたも勘違いしてバッチを7個しか集めておらず、慌てて8個めのバッチを手に入れるためにジム戦に挑むように、今までの行動からちゃんとジムバッチをゲットできるか心配になった兄たちが一緒に行くことになりました。：まあここもちよつとだけ違ふところもあつたけど原作通りの展開だなあと私は思いながら見ていたけどね。

——結果を言うと、兄たちの心配は的中していた。

コテツにすぐ目を離すとどこかへ行こうとしていて、それに気づいたルカリオがどこかへ行こうとするコテツとリオルを止めて兄たちのもとへ戻すという作業が何回かあったからだ。もちろんコテツを止めようとしたのはルカリオだけじゃなく兄やアイリス、デントだったりする。私も気づいて兄やルカリオにすぐに伝えて止めてもらった。……けれどこれで大丈夫なのかなとちよつとだけ思ってしまった。原作だと確かコテツと《サトシ》はアイリスたちから離れて迷子になってしまった。そしてそこでセイガイハジムのジムリーダーと出会うんだけれど……まあ、兄たちなら平気……かな。何かあったらその時に考えよう。

.....

結果としては普通にセイガイハシテイに到着し、普通にジム戦に挑むことができるみたいです。兄たちはコテツが無事ジム戦に挑むことができるかと安心し、観戦することになった。……でもコテツはそこでもまたやらかしてしまっていた。リオルを出そうとしたのだろうけれど、当のリオルは私たちの近くで立っていて、バトルできる位置にはい

ない。それにバトルフィールドはもう行けないようになってしまっていて、このままだとヤバいと焦るコテツに私たちも焦ってしまう。けれど何とか最初にナットレイを出して、10まんボルトでブルンゲルに勝つことができたけれど、その時に特性であるのろわれボディを受けてしまい、切り札だった10まんボルトができなくなってしまう。次にマントインで倒されてしまう。

原作では大丈夫だったけれど…と心配している私と、絶対にジムバッチゲットしてほしいと願う兄たちの応援を聞いて頷くコテツがよく考えて出したポケモンがダイケンキだった。

「へえダイケンキか…よしミジユマル出てこい！」

『ミツジユウ！』

「一緒にダイケンキの戦いを見て応援しようぜ。イツシユリーグでももしかしたら戦うことになるかもしれないからな！」

『ピイカ！』

『ミジユミツジユ！！』

「頑張るなさいよコテツ！バッチゲットしてイツシユリーグに進むためにも！」

『キバキバ！』

「頑張れ！！」

『カゲカゲエ!』

『ピチュピチュ!』

『ロメツタ!』

『…ウオウ…』

『大丈夫だ。お前の主を信じていろ』

『バウウ!!』

——皆が皆、いろんな声援を送って…そしてダイケンキが海のフィールドを利用して素早く動き、マンタインを倒すことができて、無事にバッチをゲットすることができた。

その後別れることになったのだけれど、コテツはまたイツシユリーグで会おうと言って兄と約束していた。せっかちそうな性格がちよつとだけ心配だけれど、でもコテツなら無事にイツシユリーグに行けるだろうと思う。

イツシユリーグはまだ開かれていないし、開催地も決定してはいないけれど、いろいろと大変なことになりそうだなと思った。

第三百十三話～兄はメロエッタの真実を知る～

こんにちは兄のサトシです。現在セイガイハシティから帰ってきて、シロナさんの別荘でイッシュリーグに向けての修行を行っています。俺はミジュマルで戦い、デントはヤナップで勝負をしている所です。

「ミジュマル、サイクロンアクアジェット!!」

『ミツジュウ!!』

「なかなかよくなってきてるね！ヤナップ、あなをほる！」

『ヤナアツプ!!』

サイクロンアクアジェットとはミジュマルと一緒に作り上げたハイドロポンプとアクアジェットを混ぜた技になる。いわゆるハイドロポンプ並みの水をまとってアクアジェットするということだ。ハイドロポンプの勢いとアクアジェットの素早さを足して大きな水流となつてミジュマルがヤナツプに攻撃しようとしてきたのだけれど、ヤナツプがあなをほるをしたために躲されてしまった。：命中度を上げるのが今後の課題になりそうだと俺は思った。

ミジュマルはそのまま技を解き、地面の振動に集中し、ヤナツプが来るのを待つ。そしてヤナツプが来たと分かりすぐにジャンプして躲す。

「よしミジュマル！次はれいとうシエルブレードだ!!」

『ミジュミジュ!!』

『ヤナアアア!!?』

「ああヤナツプ!!大丈夫かい!？」

『ヤナア…プウウ……』

「…あーヤナツプ戦闘不能、よつてこのバトル、ミジュマルの勝利!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『メロオー!』

ミジュマルが次に繰り出したのは新しく覚えた技の一つであるれいとうビームとシエルブレードを混ぜた技である。シエルブレードがそのまま凍った状態で繰り出した技だと思えばいいだろう。…ちなみにこの技を受けたポケモンはこおり状態にすることもあったりする。みずタイプのミジュマルが苦手なくさタイプに対する対策として考えたやり方だ。

ミジュマルのれいとうシエルブレードを受けたヤナップは倒れ、デントに大丈夫かどうか聞かれたのだけれど、すぐに気絶してしまい、審判をしていた妹が俺とミジュマルの勝ちだと言う。

デントは苦笑して、ヤナップにオレンのみを食べさせ、ありがとうと言ってボールに戻している。俺はミジュマルに近づいて頑張ったと言って褒めていた。

『ミジュミジュ!』

「よしよしよく頑張ったなミジュマル。…次はサイクロンアクアジェットの命中率を上げるやり方を考えないとな…」

『ミジュミジュ…!』

『ピイカツチュ…!』

『ロメ！ロメツタ!!…♪♪♪』

「メロエツタ…?」

『ミジュ?』

『ピイカ?』

メロエツタが歌いだしたと思ったら身体が光りだし、進化の時のように輝きだす。そして歌が終わわり、光りが消えたと思ったらメロエツタの身体が変わっていた。…これは前に聞いたフォルムチェンジというものなのだろうと俺たちは分かり凄いと笑って笑みを浮かべた。

そしてメロエツタはミジュマルの前に立ってミジュマルと俺に向かって手を伸ばして言う。

『ロメツタ!!』

「え、何?どうしたのかしら?」

『キバキバ?』

『…サトシ、メロエツタはミジュマルと戦いたいと言っているぞ』

『ミ、ミジュ!?』

「ああなるほど…さつき僕たちが戦ったのを見て我慢ができなくなったのかな？」

『ロメ！』

「…どうするの兄ちゃん？」

『カゲカゲ？』

『ピチュピチュ？』

「いや…そりゃあもちろん受けるに決まってるけど…おーいミジュマル、メロエッタと勝負しても大丈夫か？」

『ミジュミツジュウウウウ!!!』

『ロメエ？』

「ちよつと待ってくれメロエッタ…ミジュマル、バトルしたくないって気持ちは分かっていたから。ピカチュウの所に行つてバトルを観戦するか？それともボールに戻るか？」

『ミジュミジュ!!』

ミジュマルが俺の後ろに隠れて戦おうと言うメロエッタから拒絶した。…ミジュマルはメロエッタに惚れてるみたいだから好きな子を傷つけないという気持ちはわかるけれど…できれば公式戦でこうならないようにしとかなないといけないなと思いつつながら俺は苦笑しつつもミジュマルにこれからメロエッタとバトルするから学ぶために

も観戦するかボールに戻るかどうか聞く。するとミジユマルは一度メロエツタの顔を見て、俺が取り出したミジユマルのボールに戻って行ってしまった。：よつぽどメロエツタがバトルするところが見たくないんだなと俺たちは苦笑してしまった。まあ純情でバトルで傷つくのを見たくないと言うミジユマルに文句は言わないけれど：後でイツシユリーグでバトルする際にメロエツタの時のようにバトルを放棄されないように考えないといけないよな：と思う。

まあミジユマルの件については後で考えるところとして、今はメロエツタとのバトルに集中しようとするはワルビアルをボールから出してバトルを開始することにした。

「えっと：：それではメロエツタ対ワルビアルのバトルを始めます！バトル開始!!」

『カゲカゲ!!』

『ピチュピチュ!!』

『ロツメエエエエエエエエ!!』

『ワルビ!?!』

!!!!!!!

バトルが開始されたと同時にメロエツタがハイパーボイスで攻撃してきた。もろにハイパーボイスを食らってしまったワルビアルだったが、すぐに体勢を立て直してメロ

エッタを睨み付ける。メロエッタもそんなワルビアルの目に怖気づくことなく、好戦的な笑みを浮かべて技を放って来いと挑発してきた。

俺はそのメロエッタの行動に笑みを浮かべて、挑発にのることにする。まだワルビアルの新しい技を完璧に仕上げていないためメロエッタが怪我をする可能性を考えて、ここはいつものストーンエッジいこうと叫ぶ。

「今度はお前の番だ！ワルビアル、ストーンエッジ!!」

『ワルビ!!』

『ロメロメ！ロメッタ!!』

「へえ凄いい！インファイトでストーンエッジの岩をブロックしてるだなんて！」

『ほう…インファイトにあんな使い方があったとはな…』

「さすがねメロエッタ!!」

『キバキバ!!』

メロエッタがストーンエッジをインファイトで難なく受け止めたことに俺とワルビアルは面白いと笑みを浮かべた。今までメロエッタの強さはどのくらいあるのかわか

「やれゴルグーグ！ラスターカノンだ!!」

『ゴオオオオオオオオ!!!』

「おい待てて!!…チツ。ピカチュウ、ワルビアル《護りの壁》準備!!」

『ピツカ!』

『ワルビ!』

『ロメ…ロメッタ!!!』

「待ってお兄ちゃん!!大丈夫だから!!!」

護りの壁というのはピカチュウの何度も放つかみなりと10まんボルト、ワルビアルのストーンエッジによる壁である。だがただの壁ではなくポケモンの技にあるみきりやまもるのようなものだ。簡単に言ってしまうえば、カウンターシールドの強化版となる。

…だがピカチュウとワルビアルが技を放とうとした瞬間にメロエッタがゴルグーグの前に出てきて両手を広げて大丈夫だと言う。そして妹もこの先の展開が分かっているのか俺たちに大きな声で大丈夫だと言ったため、俺はピカチュウとワルビアルに技を放

つのを止めるように言つて…ゴルーグと男を見た。

男は困惑したような表情でメロエツタを見ていて、どういふことなのか聞きたそう
だ。だがこつちもどうして攻撃しようとしてきたのかを聞きたい。

デントが肩をすくめて苦笑しつつも口を開いた。

「と、とりあえず…穏便に話し合ひましょう」

「…ああ、いいだろう」

『…ゴオオオグ』

.....

「すまなかつた!!どうか無礼を許してほしい!!!」

「いや…誤解だつたと分かつたなら別に…」

『ピイカツチュ…』

俺たちが話し合つた結果、メロエツタはイッシユ地方のとある森の奥に男…いやラ
リーさん達と隠れ住んでいて、そこで俺たちが前に会つた悪党たちに捕まっていたらし

い。そして一度悪党たちから逃げ出し、俺たちと会ったということみたいだ。

『ロメロメ!』

「迎えが来たみたいで良かったねメロエッタ!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『ロメッタ!』

「随分と君に…ヒナちゃんに懐いているんだね」

「えつとまあ何故かそうなんです…はは」

『ロメ? ロメッタ!!』

「うん…ありがとうメロエッタ」

『ロメッタ!』

妹がメロエッタの頭を撫でながら微笑む。そして俺たちはその光景に笑みを浮かべながらもラリーさんに話を聞く。あの悪党たちにもっと痛めつけてやればよかったと思いつつも、これでもうメロエッタを襲うやつらはいなくなつたから大丈夫だろうと思いつつも、もしもまた悪党がくる可能性を考えて聞いてみた。もしも悪党がまた来ると言うのなら今度は再起不能にしてやらなきゃいけないと考え、口を開く。

「じゃあ悪党はもう叩きのめしたから…大丈夫ということなんですよね？また来るとい
うことはありませんか？」

『ピイカ？』

「いや大丈夫だ。君たちのおかげだよ…本当にありがとう!!」

「そうですか…良かった」

『ピカピッカ!』

メロエツタはもう大丈夫なようだ。俺たちは安堵して笑みを浮かべ、妹に抱きつくメ
ロエツタを見つめる。それでも森の奥に帰ったとしても脅威はないということだか
ら安心だ。

——そしてその後俺たちは外に出てラリーさんたちがゴルーグに乗って森の
奥へ帰ると言ってきたため、お別れを言う。メロエツタと別れると分かったのか、ミ
ジユマルがボールから出てきて号泣しながらメロエツタに向かって叫んでいる。それ
を見たピカチュウがミジユマルの背を叩いている。

「…ん？ミジユマル…？」

『ミジユウウ…ミツジユウウウウウウウ!!!
!!!』

『ピカピイカ…』

「みんな…本当にありがとう。これでやっと静かな生活に戻れるよ！」
『ロメツタ…』

「うん…さようならメロエツタ…また、絶対に会おうね!!」

『カゲエ…!』

『ピチュウ…!』

『今度は悪党どもに捕まったりするなよ』

「さようならメロエツタ。元気でね！」

『キバキバ!』

「気をつけて帰るんだよメロエツタ…」

「メロエツタ…元気でな。また会おう！」

『ピカピツカ!!』

『ミジュ…ミジュミジュウウ!!』

『……ロメ!ロメツタ!!』

——メロエツタは守り人であるラリーさんによって自分の帰るべき所へ帰って行った。ミジュマルや妹やヒトカゲ、ピチューは落ち込み、メロエツタとの別れを悲しんでいたけれど…でもまた会える気がするから…大丈夫だ。絶対に。

.....

「…ええ？ローシャン…ですか？」

『ピイカ？』

「ええそうよ。ローシャンという町で大きなポケモンバトル大会が開かれるそうなのよ…イツシユリーグに出場するならサトシ君も参加してみたらどうかしら？」

別荘に帰ってきたシロナさんからローシャンと言われる町で行われるポケモンバトル大会のチラシを貰い、自由参加だからジュニアカップのようにイツシユリーグ開催ま

でに鍛える意味で参加したらどうかと言ってきた。別荘で鍛えるのもよくやってたし、ずつとここにいるつもりはなかったからシロナさんの言う大会に参加しようと思った。決心した。

「もちろん参加しますよ！…よし次の大会も頑張ろうなピカチュウ！」

『ピカピッカ！』

「あ、自由参加なら私も参加するわ！」

『キバキ！キバキバ!!』

「…キバゴもバトルに出たいの？一緒に大会出て頑張らしましょうね！」

『キバキバ!!』

「うーんローシャンに行くといったら電車だね！その途中にある風の駅で有名な駅弁があるんだよ!!」

『詳しいなデント…』

「僕は駅弁ソムリエでもあるからね!!」

「ははは…そっか…次はケルディオの話になるのね…」

『カゲ?』

『ピチュ?』

「ううん何でもないよ……じゃあ次はローションに向けて出発だね！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

俺たちは今まで別荘でお世話になったシロナさん達に礼を言って、旅立つことにした。向かう先はローション：ポケモンバトル大会だ。イツシユリーグ優勝目指して頑張るか……。

「次の大会も楽しめたらいいなピカチュウ！」

『ピカピッカ！』

第百三十四話　妹と聖剣士

こんにちは妹のヒナです。ただいまオーシャンに向けて電車に乗っています。そのオーシャンではバトル大会が開かれるらしいんですけれど…まだまだその町へ行くのは遠いようです。兄たちのポケモンたちは電車で遊んだり寛いだりとボールから出てのんびりしています。

そんな中、デントが買ってきた駅弁情報の載っている本のページを開き、これから行くオーシャンの途中にある駅で名物になっている駅弁の情報を皆で確認します。

「これだよ！風の駅名物タルマツカ弁当!!」

「美味そうだな!!」

『ピツカツチュ!!』

『ミジユウ!!』

『ズツグウ!!』

『…タジャ』

「へえ…風鈴にもなるのね…」

『キバキバ…』

『エツモ!』

『サンドウイツチのようなものか…面白そうだな』

「冷凍オレンのみもあるんだね!早く着かないかなあ…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

冷凍オレンのみってなんだか冷凍蜜柑みたいな感じかなと思つてしまった。でも似たようなものだろう。風の駅に着くまでの間、私たちは電車から見える風景を見てその途中でポケモンたちを発見したり、ヒトカゲ達は兄のピカチュウたちと一緒に電車の中を探検しに行ったりとそれぞれが楽しんでいます。

そろそろ風の駅に着くようで、私たちは電車の乗車口へ急いで向かう。

「停車時間は3分しかない……ここは、駅弁ソムリエの僕の指示に従ってください！」

「了解！」

「任せたわよ！」

「よし……頑張ろう……！」

デントの指示でダルマツカ弁当を売っているお店に走って行った。ダルマツカ弁当を20個と冷凍オレンのみ4袋、そして水とお茶を4本ずつ購入した。兄がほとんどのダルマツカ弁当を持ち、私もいくつかの弁当をもっていく。でも途中で電車が発車しそうになり慌てて走り出したんだけれども、転んでしまっただけで持っていたダルマツカ弁当を落としてしまいそうになった……。

「うわっ!？」

『カゲ……!』

『ピツチュウ!』

『平気かヒナ……怪我はないな?』

「あ、うん大丈夫……ありがとう皆」

『カゲカゲ!』

『ピチュピツチュ!』

『いや、無事でなによりだ』

「おいヒナたち早く乗れ電車が発車するぞ!!」

ヒトカゲとピチュユーが私の落としたそうになった弁当をキャッチしてくれて、ルカリオが地面にぶつかりそうになった私の腕を掴んで防いでくれた。それに私は礼を言うのだけれど、兄が急いで戻れと言ったため、私たちは走ろうとしたのだけれど——
ルカリオに私たちと弁当ごと抱き上げられそのまま急いで走って行ったため間に合った。…なんというか、ルカリオって力持ちだね。

「ありがとうルカリオ!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『…気にするな』

「…ちよつと待って…サトシ、ズルツグはどうしたのよ?」

『キバキ!』

「あれズルツグ!」

『ピイカア!』

『ズツグウウウ!!!』

アイリスが冷凍オレンのみと弁当を自分たちの席に戻って置き、座って周りを見た時にズルツグがないことに気づいた。兄もそれに慌てて窓を見ると発車している電車の外から走って追おうとしているズルツグを見て慌ててしまった。そして兄たちが車両の後ろにある場所まで行こうと走り出す。

「お兄ちゃん!?!」

『カゲエ!?!』

『ピチュ!?!』

「お前たちはそこで待機して待っていてくれ!」

『ピツカ!』

「お弁当とかよろしくね!」

『キバキバ!』

「ルカリオ、ヒナちゃんたちのこと頼んだよ!!」

——その後、座ってお弁当や冷凍オレンのみをしまいながら私たちは待っていた。でも待つているだけで兄たちが戻る様子はない。ズルツグを無事に電車に乗せたならすぐに来そうなんだけど…。そういえば確か原作だとここでケルディオに

『カゲツ!?!』

『ピチュウ!?!』

『窓から離れろ!!』

天井から物凄い音と冷気が伝わり、窓が一瞬で凍っていったのだ。そしてポケモンのような大きな鳴き声が天井から響いていく。窓が凍ったことや天井の異変に驚いた私だったけれど、確かキュレムが来た時に列車が凍ったような気がするということを思い出した。ああ、キュレムが来たということはケルディオに会ったのだろう。だからまだ兄たちは帰ってこないのだろう…。

「だ、大丈夫かな…お兄ちゃんたち…」

『カゲカゲ…』

『ピチュ…』

『サトシなら平気だ。待っていればすぐに来る』

「うん…そうだね」

『カゲ』

『ピツチュ』

そして待つていたら、兄たちが急いで私たちの席まで戻ってきた：傷ついたケルデオも連れてだけれど…。

ケルデオを見た瞬間驚いたヒトカゲ達だったけれど、ルカリオが冷静に怪我の様子を確かめながら、重症だと思える部分にいやしのはどうで治していく。その間にも私たちは兄たちから何があったのかを聞いた。ケルデオが電車の屋根部分で倒れていたということや怪我をしてかなり混乱していた様子、そしてキュレムが来ると怯えていたということや本当にキュレムが来て襲ってきたということ話を話してくれた。

その後、私たちはオーシャンに到着し、すぐにポケモンセンターへ急いで向かう。ポケモンセンターのジョーイさんにはケルデオが傷ついていることに驚いていたが、すぐに重症患者だと急いで処置をするため動いてくれた。

角が折れた部分は最近だと分かり、ケルデオの名前とキュレムの居場所：そして聖剣士たちのことをジョーイさんは教えてくれた。ケルデオが聖剣士の後継者となるポケモンだということも……。

そして元気になったケルデオと私たちはポケモンセンターから外へ出てオーシャンの大きな広場へ向かいケルデオはキュレムに対して何があったのかを細かく話してくれた。聖剣士となるにはキュレムと戦わなければいけないということ、聖剣士にな

りたくてケルディオ自身で勝負に挑んだということ…戦いの途中で怖くなり逃げ出してしまったということやケルディオを助けようとした聖劍士たちがキュレムに凍らされてしまったということ。

「……それでお前はもうどうしたいんだ？」

『え…』

「そのままキュレムを恐れて逃げ続けるのか？」

『そんなわけない…！僕は…僕は聖劍士になるんだ!!』

「ならこれからどうするつもりなんだ？」

『僕は今から…聖劍士たちを助けに行く!!』

「…そこなくっちゃな!!」

『ピイカツチュ!!』

「うわ…なんか嫌な予感がする」

『カゲエ…』

『ピチュ…』

『サトシのあの笑顔を見たらそう思うのも無理はないな…』

「サトシのあの表情…たぶんケルデイオをキュレムに勝てるぐらい強くするんでしょ？私も協力するわ！」

『キバキバ！』

「ははは…とりあえずまずはダルマツカ弁当でも食べてからにしようか」

兄が悪戯を思いついたような表情を浮かべてケルデイオの頭を撫でたのを見て私とヒトカゲ、ピチューは思わずカリオの後ろに隠れてしまった。兄が何かをやらかすだろうという嫌な予感がしたからだ。ヒトカゲ達もそう感じたのだろう…私の手を掴んだり、肩に乗ってきたりとしてちよつとだけ怖がっている。…まあやかすのはよく物理での解決策が多いから怖いのは分かる…主にシューティー達の件でね。

そしてデントが言った通りまずはダルマツカ弁当を食べることになったんだけど…味は美味しいんだけど兄がこれから暴走するとなると美味しく感じられないのが残念に思えてしまった…。とにかくこれから犠牲になるであろうキュレムに同情だけはしておこうと思う。

そして始まったのは兄とピカチュウ指導による強さの強化…。その途中でケルデイオは自分の聖剣士としての本当の意味を…逃げようとしないう強さと今までの聖剣士た

ちとの生活を思い出し、兄の協力のもと強くなろうと必死に覚悟を決めていた。そして兄はそれを見抜いてもっと覚悟を決めろと言っているいろとやらかしてましたよ…詳しくは言いたくないですけどね…。

その時途中でキュレムが襲って来たりフリージオ達が追って来たりといろいろと危ない目にもあつたけれど、それは邪魔すんなどばかりに兄とピカチュウが吹っ飛ばしてました…。ちなみにアイリスも笑顔でカイリユウを出してかえんほうしやでフリージオ達を蹴散らしたりも…。もう原作崩壊確定だよね…いや仕方ないか…。

結果？まあ…凍らされていた聖剣士たちが思わず驚いて自ら氷を砕いてしまうというほど強くなったケルディオが覚悟の姿にフォルムチェンジして戦い、キュレムが哀れになる結果になりました。

あ、でもケルディオ自身の覚悟を決めたこと、立派な聖剣士になったとコバルオン達に言われていたからまあ良い結果になったのかなとは思った…。

ちなみにその時兄とピカチュウは満足そうな表情を浮かべ、それ以外の私たち…いや、アイリスとキバゴ以外の私たちは苦笑していたりする。

第三百三十五話～兄はバトル大会に出場した～

こんにちは兄のサトシです。俺たちは今ケルディオ達と別れてからオーシャンに戻ってバトル大会に出場します。

今回はシューティー達はおらず、俺たちだけで出場するちよつとした小さな大会らしい。しかも年齢制限がなくポケモンを持っている人ならトレーナーじゃなくても参加できるらしく、妹ぐらいの小さな子も参加していた。トレーナー未満の子供たちは決勝まではお互いトレーナー未満同士で戦い、そして決勝戦でトレーナーと戦うらしい。あの意味トレーナー未満の子供たちにとって、将来トレーナーとして戦うために必要なことを勉強できる良い大会だと思えた。

それを見て俺たちは妹に大会に参加したらどうかと勧めた。

「なあヒナ一緒に参加しようぜ！」

『ピカピカ！』

「嫌だったら参加しなくてもいいけどね。でも将来トレーナーになるなら良い勉強になるわよー。」

『キバキバ！』

「そうだね。せっかくの機会なんだし：ヒナちゃんも一緒に参加したらどうだい？」
『修行の成果も出せるだろうしな：気楽に参加してみたらどうだい？』

「うーん：ヒトカゲとピチューは参加したい？」

『カゲ！カゲカゲ!!』

『ピチュピツチュ!!』

『参加したいと言っているぞ』

「分かった。私も参加する!!」

『カゲカゲエ!』

『ピチュピツチュ!』

「その意気だ！ 頑張つて優勝目指そうぜ！」

『ピカピツカ！』

「いや…たぶんお兄ちゃんが参加する時点で優勝はもう決まってるようなものだと思うけどね…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

「そんなことないぞ。バトルは常にどう勝敗が決まるのかわからないんだからな！」

『ピカピツカ！』

——まあそんなわけで、俺たちは参加することになった。ああでもルカリオは観戦席で見ることになっていて、どこから購入してきたか分からないがカメラを取り出し、後で試合映像をマサラタウンに送ると言ってきた。その表情はとても楽しそうで良い映像を撮ろうと観客席へすぐに移動して…：：：そういう行動が本当にオカンというか保護者というか…ああいやもういいか。

あとトレーナー未満の子供たちは大会の出場条件として2体のポケモンが全員参加することが決まっているらしく、妹はヒトカゲとピチューで参加する。

これは、まだトレーナーになっていない幼い子供たちがトレーナーたちと戦うハンデとして2体全員で戦うことができるという特別ルールのようなものになる。それに対

して俺たちトレーナーは3体の中から1体を選んで戦うということになった。

：まあこれぐらいなら妹にとつても大丈夫だろう。妹もポケモンバトルに関してはマサラタウンで修行して鍛えたみたいだし。

そして始まったポケモンバトル大会：オーシャンカップが開かれた。

オーシャンカップではまずバトルの前にルール렛トで対戦相手のどちらかが最初にポケモンを出すことになっているらしい。ジュニアカップではなかったルールに俺は笑みを浮かべてバトルを待つ。

最初にデントはこの町に住むトレーナーと戦って勝ち、次は俺たちのバトルが始まった。

【さあやってきましたよオーシャンカップ!!第一試合はサトシ選手VSアイリス選手となります!!】

「よろしくなアイリス!正々堂々と勝負だ!」

「ええ、こちらこそよろしく!絶対に勝ってやるわ!」

【さてルーレットが回され…止まった先はアイリス選手です！まず先にアイリス選手からポケモンを出してもらいます!!】

ルーレットはアイリスの写真を指しており、まず先行としてアイリスがポケモンを出すことになった。アイリスはもう誰を出すのか決まっているらしく、笑みを浮かべて口を開いた。

「行くわよキバゴ！あなたの力を見せてあげなさい！」

『キバキバ!!』

「キバゴか。じゃあこっちは…ズルツグ！君に決めた!!」

『ズツグウウ!!』

【キバゴ対ズルツグの勝負となりました！さて勝敗を決めるのはどっちかああ!?!】

「行くわよキバゴ！りゆうのいかり!!」

『キツバアアア!!!』

「ズルツグ、きあいだま!!」

『ズツグウウウ!!!』

キバゴのりゆうのいかりとズルツグのきあいだまが激突し爆発した。その爆発の余波にキバゴとズルツグが巻き込まれそうになるが耐えて次の指示を待っていたため俺たちはお互い口を開いて声を出す。

「キバゴ、《竜のげきりん》!!」

『キバキツバア!!』

「ズルツグ、《気合いのずつき》だ!!」

『ズツグウウウウ!!』

アイリスは旅をしている最中に俺が新しい合体技を作っているのを見て、自分でも俺かできないのかキバゴと鍛えながら行ったりゆうのいかり十げきりんの合体技だ。さすがにまだ新しい技を開発することはできないようだが、りゆうのいかりにげきりんを上乗せして攻撃するやり方はかなりダメージを食らう。対して俺もズルツグの気合いのずつきというきあいだまを放った後にそのきあいだまに向かってずつきをする新しい攻撃方法を指示する。

お互いの技がぶつかり合い、凄まじい土煙の後見えてきたのは……。

【おっと!?!倒れているのはキバゴだああ!!サトシ選手が次に進むことができます!!】

「…ありがとうキバゴ。お疲れ様」

『キバア…』

「よくやったズルツグ。ありがとうな！」

『ズツグウ！』

「…また負けちゃった…でももつと強くなるために私、頑張るからね！」

「ああ、その時はまたバトルしてくれよ！」

「もちろん!!」

俺たちはお互い笑みを浮かべて握手をし、第一試合を終わらせることができた。その後妹と妹ぐらいの幼い子供がバトルをすることになったんだけど…勝敗はもう決まっていたみたいだ。

【次はヒナ選手VSミーコ選手です！ルーレットが周り…ミーコ選手から先行になりました!!】

「よ、よし…いくわよオタマロ!!」

『マアロ…』

「オタマロ…なら私はピチューお願い!!」

『ピツチュウ!!』

【さて始まりましたピチュー対オタマロの戦い!どうなるのでしょうか!!】

「えつと…どうするんだっけ…あ、そうだオタマロ、あわ!!」

『マロ……!』

「ピチュージャンプして避けて!そのままでんきショック!!」

『ピッチュ!!』

『マアロオオオ!!?』

「おおっとオタマロが一撃でやられてしまったアア?!ヒナ選手まるでバトルに慣れたトレーナーのように強いですね!!さて次にミーコ選手の2体目のポケモンがでます!!」

——— まあ結果としては妹が勝利した。相手の出したポケモンはオタマロとマメパトというでんきタイプに弱いポケモンばかりが出てしまったため妹はピチューだけで2タテしてしまった。そして負けてしまったミーコという子は泣きながら妹と握手をしていて、妹の方はそんなミーコを見て苦笑しつつも慰めているという出来事があつたりする。

∴第二試合も俺たちは無事に勝ち上がることができた。もちろん妹もデントも無事に勝ち上がることができた。

そして次に行われた第三試合。俺とデントの戦いになる。

「さてさて次に行われたのはサトシ選手とデント選手によるバトルです!!ルーセットが

周り…サトシ選手が先行となりました！」

「俺か…ツタージャ、君に決めた！」

『タジャ！』

「ツタージャ…ピリリとビターなテイストになりそうだね…行くよマイビンテージ、ヤナップ！」

『ヤナアアアツプ!!』

「ツタージャ対ヤナップの草対決となりました!!さて勝敗を決するのはどちらか!？」

「サトシ相手に長期戦はまずいからね…先手必勝だよヤナップ!ソーラービーム!!」

『ナアツプ!!』

「ツタージャ、《リーフの舞い》！」

『タアジャ!!』

『ヤナア!?!』

「ああヤナップ!?!」

ヤナップに仕掛けたのはリーフの舞いという新しい技である。まあ簡単に行ってしまふのならリーフストームで凄まじい風を起こしてポケモンの技で言うたつまきのよ

うな効果を生み出しながらもメモメロを発動させヤナップをまともに動かせないようにする効果を発揮する。

そのおかげでヤナップはまずメモメロの効果でツタージャの攻撃からまともに動けなくなり、その後起きた技リーフストームのタイプがくさとひこうの強化版にやられ吹っ飛ばされてしまう…。もちろんそんな強い技に耐えられるわけもなく…。

「ヤナップ戦闘不能となり勝者はツタージャだああ!!!サトシ選手が決勝まで進出することができません!!!」

「お疲れ様ヤナップ…本当にありがとう」

『ナアツプ…』

「ありがとう。よくやったよツタージャ!」

『タジャ!』

「さすがサトシだね…でも僕もポケモンソムリエとして負けてられない…今度は絶対に勝ってみせるよ!!」

「おう!望むところだ!またバトルしようぜデント!」

こうして俺とデントはお互い握手をして第三試合を終わらせることができた。…次

に進むのは決勝戦。ちなみに妹の方はトレーナー未満のもう一つのハンデとして試合を2回しか行わず戦って勝った方が決勝に進めるということになるため――

――次に戦うのは俺と妹ということだ。

【さてさて始まりました決勝戦!!サトシ選手VSヒナ選手のバトルになります!!聞いたところによりますとサトシ選手とヒナ選手は兄妹らしく…とても熱いバトルが繰り広げられそうで私大変興奮しております!!】

実況者が勝手に興奮しながらも、俺たちは向き合い睨み合った。トレーナーと幼いトレーナー未満の子が勝負する場合は先にトレーナーの方がポケモンを出す決まりらしく、ルーレットは回らないようだ。もちろん俺は妹と戦うのならと決めていたポケモンを出すことにする。

「いくぞピカチュウ!君に決めた!!」

『ピカピッカ!!』

「うわピカチュウ。お兄ちゃんいきなり鬼畜すぎるよ…よし、ピチューお願い!」

『ピッチユウ!!』

「まず始まりましたのはピカチュウ対ピチューの戦いです!!電気対決となりますね!!」

「ピカチュウ、10まんボルト!」

『ピツカアア!!』

「ピチュー、ダブルでんきショックでんじはよ!!」

『ピツチュウウウ!!』

ピカチュウの10まんボルトに対抗するためなのか、妹はピチューに合体技であるでんきショックとでんじはを指示する。ピチューの攻撃は通常のピカチュウの10まんボルトに負けず劣らず凄まじい。だが俺のピカチュウの方が圧倒的にレベルも経験も上だ。

ピチューの放った技を10まんボルトで押し返し、ピカチュウの電撃に当たってしま
う。

『ピチュウウウ!!?』

「ピチュー頑張って!!」

『ピチュユ…ピイツチュユ…!』

「ごめんなヒナにピチュユ…でもバトルは全力で決めるものだ。ピカチュウ、でんこうせっか」

『ピカ…ピツカア!!』

『ピツチュユ!?…ピチュユ…ウウ…』

「ピチュユ!!…ごめんねピチュユ。ありがとう…」

ピチュユが一度ピカチュウの電撃に耐えて立ち上がったのだが、身体がふらつきあと一撃で倒れてしまうぐらいのダメージを負っていた。おそらくピカチュウが対戦相手が妹のピチュユであり、弟分だと認識していたから無意識に手加減をしていたのだろう。

だがポケモンバトルは全力で戦うのが礼儀だ。だからこそピカチュウにでんこうせっかを指示して止めを刺す。ピカチュウはちよつとだけピチュユを倒すことに罪悪感を抱いていたようだが、俺の全力を出してバトルに勝利するという気持ち伝わったのかすぐに全力のでんこうせっかを決めてピチュユを倒す。ピチュユはでんこうせっかを受けて気絶し、妹はバトルをして負けてしまったことの謝罪と礼を言ってピチュユ

を抱きしめる。そして次に妹はヒトカゲを出してきた。

「ポケモンバトルは全力を出すもの…確かにその通りです!! 今度はピカチュウとヒトカゲとの勝負! 面白いことになってきましたよ!!」

ちよつとだけ実況者がうざいと感じながらも俺は妹の方を見る。妹はヒトカゲを見て頷き、ヒトカゲも妹を見て頷いていた。この様子はマサラタウンで修行をしてきた時に鍛えあった絆なのだろうと俺とピカチュウはそう思った。妹とヒトカゲは良いパートナーになりそうだと思いつつもバトルを続行する。

「ピカチュウ、エレキボール!!」

『ピカチュツピイ!!』

「ヒトカゲ…今よ、ダブル《猛火の炎》!!」

『カゲエエエ!!!』

「へえ…新しい技か…!」

『ピッカー！』

猛火の炎と呼んだヒトカゲの技は、まるでかえんほうしゃのような凄まじい炎を吐き出しピカチュウの放ったエレキボールと激突し爆発する。

恐らく猛火の炎とはひのこを大きくした技なのだ。俺は直感した。おそらく旅の途中でルカリオと一緒に鍛えた技なのだろうけれど……さすが俺の妹だと感心したぐらいだ。まるでひのこがかえんほうしゃのように凄まじく、威力のある技だと感じた。

でもそのぐらいで俺のピカチュウを倒せるわけではない。俺はピカチュウを見て、ピカチュウも俺を見て頷いた。

「ピカチュウ、ボルテッカー！」

『ピカピッカ!!』

「ヒトカゲジャンプして避けて!!」

『カゲ!!…カゲ?!』

「無理だ。ピカチュウのボルテッカーは避けられないぜ……!」

『ピッカア!!』

「ヒトカゲ!!…ごめん。よくやってくれたわ……ありがとう!」
『カゲエ…』

【決勝戦を勝ち抜いたのはサトシ選手です!!!いやあ面白い戦いでした!!皆さんこの兄妹に拍手喝さいを!!】

ヒトカゲがジャンプをしてピカチュウのボルテッカーを避けようと動いたが、ピカチュウはそのぐらいの動きならすぐに対応できる。ヒトカゲは避けた先に来たピカチュウの技を受けてしまい倒された。妹は本当に悔しそうな表情を浮かべながらも…俺と戦うのが楽しかったという表情でこちらを見ていた。その表情はもうトレーナーとして立派に成長しそうだ俺とピカチュウは思えた。

「ヒトカゲ、ピチュー…本当にありがとう!」

『カゲカゲ…!』

『ピチュピチュ…!』

「ヒナ、お前と戦えて本当に良かったよ」

「うん。お兄ちゃんと戦うの怖かったけど…でも楽しかったよ。ありがとう!」

俺と妹は握手をして、そして無事に大会は閉幕した。イツシユリーグ前に行った試合だったけれども…楽しかったしもう一度やりたいとも思える試合だった。

第百三十六話くトウカシテイにて悩み中く

ここはホウエン地方のトウカシテイ。この町に住むのは現在まだトレーナーになっていないマサトだ。マサトは現在自室にてベットに転がりながらも悩んでいた。

オダマキ博士が今日マサトと仲良くなつてもらうであろうポケモンを連れてくるからだ。しかも3体のうちの1体を選ぶことになる。だがまだマサトはポケモントレーナーとしての年齢に達してはいない。

ただ、サトシ達とホウエン地方やカントー地方を旅してきた経験を評価され、オダマキ博士に1体のポケモンの世話を任せただけなのだ。任せられたといつてもそのポケモンをどう育てるのかちゃんと毎日どんな食事をしているのか、どんな遊びをしているのか、ポケモンの様子はどうかなどのレポートを書かされ、毎回提出してくるこ

とが条件となっていた。もしもそのレポートを怠ればマサトは選んだ1体のポケモンを没収され、トレーナーになった頃にポケモンを選ぶことになってしまうのだ。

そしてオダマキ博士から任せられた1体のポケモンは将来マサトがトレーナーになる時にパートナーとなるべきポケモンだとオダマキ博士が言ってきたため、ある意味バトル等はできないがトレーナーとしてポケモンを貰えるというようなものだ。マサトは感じていた。

———ちなみにハルカはその頃マサラタウンに行つてマナファイたちと戯れていたりする。

「うーん…どうしようかなあ…アチャモはお姉ちゃんが持つて僕も一緒にはしたくないし…ミズゴロウはタケシが…キモリはサトシが持つてたよね…ああ悩むなあ!!」

マサトはベットで頭を抱えて寝転ぶ。旅をしてきた中で見た3体は選びづらいからだ。姉であるハルカが選んだアチャモは姉弟同じポケモンを選んだと言われたくないという反抗心から選びづらく、ミズゴロウはタケシのポケモンとして見てきて…穏やかそうな性格でマサトがトレーナーになった時に相性がいいのかは分からず選びづらい…キモリはサトシのポケモンで強いと思えたのだが、それで選ぶキモリが強いのかどう

かは何とも…と悩んでいた。

でもそろそろ決めないとオダマキ博士が家に来てしまうと悩んでいたし焦ってもいい。でもいまだに決まらず…ついにはオダマキ博士がマサトの家に来てしまったのだ。そのことに余計に焦るマサト。

「うわああ来ちゃった!!」

「やあマサト君! 決まったかい?」

「こんにちはオダマキ博士…いえまだ決まってない…です…」

「そうかそうか!…大いに悩んでいるからね! ああ自分のパートナーとなるポケモンを見た方が良いかもしれないな!」

「え、いいの!?! 願います!!」

マサトは選びづらいという理由から落ちていたテンションが上がり、興奮したようにオダマキ博士に詰め寄る。オダマキ博士は笑顔でポケモンをボールから3体出して見せてくれた。マサトは出てきた3体のポケモンたちをじっくりと観察してどのような性格なのか確かめる。トレーナーとなった時にもらえる3体はマサトから見るとそれぞれ性格は違ってみえた。

アチャモは活発そうで元気そうだ。だが元気すぎてミズゴロウに喧嘩を売っている。

対してミズゴロウは怯え、マサトの部屋にある本棚に隠れようとしていた。そしてキモリは――

「あれ、お前つて枝を銜えて……まるでサトシのジユカインみたいだね」

『……キヤモ』

「ああそのキモリは前にハウエンリーグのテレビを見た時に映ったサトシ君のジユカインに惚れちゃったらしくてね。このキモリはメスなんだけどサトシ君のジユカインの真似をしたがるんだよ」

「へえ……」

キモリは一度マサトの顔を見てからそっぽを向き、銜えている枝をびよこびよここと下に動かしていた。ちよつとだけオダマキ博士から言われた言葉に照れているらしい。その行動はまるでサトシのジユカインの……キモリだったころの行動に似ていて……本当にサトシのジユカインのことが好きなんだということがマサトには伝わった。マサトはその様子を見て決心した。サトシと一緒に旅をしてきて、サトシの凄さをよく知ることができた。そして憧れてもいた。いつかはこんな凄いトレーナーになりたいと思つたぐらいだ。キモリもそう思っているのならサトシに憧れているマサトとよく似あうパートナーとなれるだろうと直感した。そしてその直感は外れていないだろうとマサ

トは不思議とそう思っていた。

マサトは笑みを浮かべてキモリを抱き上げた。キモリは急に抱き上げられたことに驚いたみたいだったが、すぐに抱き上げられた腕に捕まり、マサトの顔を見上げる。でも嫌がる様子は見えない。そしてマサトはそんなキモリに嬉しそうな表情を浮かべながらも、オダマキ博士に向かって口を開く。

「オダマキ博士！僕はこのキモリにします！大事に育てて…あ、あとレポートなどもちゃんと提出しますね!!」

『……キヤモキヤモ』

「うんうん。そうなると思ったよ！キモリのこと大事にしてやってね！」

「はい！ありがとうございます博士!!」

『キヤモ…』

——これは、マサトとキモリが出会った物語の始まりであり、ホウエン地

方の旅よりも前の物語の始まりとなった瞬間だった。

「これからよろしくキモリ!!」
『…キヤモ』

第三百三十七話く妹はピチューと特訓したく

こんにちは妹のヒナです。現在イッシュリーグの開催地が決定し、その場所へと向かっている途中なんですが…その休憩中に兄とピカチュウと私とピチューで修行をすることになりました。どうしてかというところ…

「いいかヒナ。お前はヒトカゲとの連携はとれてるけどピチューとはまだうまくいってない…だから俺とピカチュウと一緒に修行するぞ」

…という言葉を休憩中に兄に突然言われ、その後またいろいろあつてピチューが納得したような表情を浮かべて修行にやる気を出したためにやることになったというわけです。

いろいろあつたといつても、ピチューにでんきショックだけではなく10まんボルトを覚えてもらおうと兄が考えていたみたいで、ピカチュウの10まんボルトを見ながら

特訓をするということになりました。どうしていきなり兄がやる気を出したのかという、前にやったオーシャンカップでの戦いでピチュー達とのバトルが様になっていたことや、今から少しづつ鍛えて行けばもつと良くなると言ってきたからだ。

でもそれだけでは私たちは納得しない。特にピチューはトレーナーとしてのバトルよりもコンテストなどのパフォーマンスが好きらしいからバトルで強くなるのはどうにもやる気がでなかった。10まんボルトもトレーナーになった頃にいつかは覚えるのではないかと思っていたからだ。

『ピチュー…』

「ほらお兄ちゃん。ピチューもあまりやりたくないって言ってるし。それに私まだトレーナーじゃないから今からもつと強くなるつもりはないよ？そりやあ修行はしてるけど何かあった時のためだし。あまり焦らなくてもいいだろうし……」

『カゲカゲ…』

「いや、逆に考えればトレーナーになるまでにちよつとぐらい強くなつても構わないだろ？まあ覚えて損はないと思うぜ。それとピチュー、今なら前にコンテストでやったピカチュウの電気火花を教えるけどそれでもやる気はないのか？」

『ピカピカ？』

『ピイツチュ!?!ピチュピチュ!!』

「お兄ちゃん…」

『カゲエ…』

絶対に兄は何かたくらんでいると思つてしまった。オーシャンカップでバトルした後、兄はヒトカゲに猛火の炎のやり方についてルカリオから聞いたたり、ルカリオと共に私たちの技の向上を目指して考えたり、ピチュと修行をしている最中に観察しているいろとアドバイスを言つたりしてきたことがあつたからだ。

今まではまだトレーナーじゃないから必要最低限の言葉以外のアドバイスは言つてこなかつたというのに今ではよく言うようになってゐる…それがなんというか、怖い。

そりやあオーシャンカップでバトルをするのは楽しかつたけれど、それは勝つためのバトルではなく楽しむためのバトルをしていたからだ。兄と対戦となつた時点で私たちの負けは確定したも同然だと分かつていたからこそ、決勝戦ではバトルに勝つというために戦うのではなく、楽しむために戦うと決めていた。だからちよつとだけこれから起きるかもしれない未来が怖い――

いつか兄と全力で《勝つ》ためのバトルをしなければいけないという未来が起きそうで怖いだけなのだ。

そしてその予感もしかしたら外れていないかもしれない…。

そんな考えを持っている私に気づいていないのか、兄はピチューが放つでんきシヨックを見てピカチュウと一緒にでんきの状態を確認していた。私は引き攣った表情を浮かべながらも兄たちへ近づく。

「ふむ…ピチューの電気量に問題はないか…ならば後はレベルと、技の調整だな」

『ピカピカツチュ』

「そうだなピカチュウ。あれやるか」

『ピツカ!』

「えつと…お兄ちゃんにピカチュウ…すつごく聞きたくないんだけど…あれって何？」

『ピチュウ?』

「ピチューの逐電量を増やす」

『ピカ』

「ちよつと待つてそれ強引すぎない!？」

『カゲ!？』

『ピツチュ!？』

「平気だつてちよつとピカチュウの電気を与えるだけだ。怪我も苦痛もないぜ」

『ピカピカ!』

「な、何か信じられない…」

『ピチュウ…』

『カゲカゲ…』

そう言いながらも始まったのはピチューとピカチュウが互いに手を繋ぎ、ピカチュウが軽く電気を流している光景だ。ピチューは電気が流れてきたことに最初は驚いていたが、特に苦痛などはなく問題はないと分かった。むしろ電気マッサージのように気持ちよさそうだ。

でも私とヒトカゲは少しだけ心配だった。兄は私たちに危険なことはさせはしないし巻き込まれたらすぐに助けてくれる。でも、たまに私たちとは関係ないことで無茶をしたり暴走してやらかしたりすることがあるから今回は大丈夫なのか心配なのだ。…まあでもピカチュウが大丈夫だと言ってくれたなら大丈夫かもしれないけれど……。

そしてピカチュウの電気をピチューに流し、ピチューはちよつとだけ放電状態になっていたけれどすぐに落ち着き元気よくジャンプしてきた。ピカチュウに電気を貰って身体の調子がよさそうだ。それを見た兄が満足そうな様子で言う。

「よしこれなら問題ないな！今からでんきショックを10まんボルトに変える練習でもしてみるか！」

『ピカピッカ!!』

「まあやってみるけど…でも怪我とかは絶対にしちや駄目だよ？無茶だけはしないでね？」

『カゲカゲ…』

『ピイツチュ!!』

結果ですか？ピチューの技に兄のピカチュウ直伝の1

0まんボルトを覚えたということと、電気花火というパフォーマンスにも似た遊びを覚え、ヒトカゲのひのこを宙に放つて花火にするのと同じようによく遊ぶようになってしまったりする。

私はピチユーが満足そうなら問題は無いんだけど、また兄が何か私たちに修行という名のレベルアップをしてくるのではないかと戦慄していたりする。私としては少しでもいいから平穩が欲しいです……。

第三百三十八話～兄はイッシュリーグに出場した～

こんにちは兄のサトシです。現在イッシュリーグの開催地でもあるヒガキシティに到着し、これからエントリーに向かう所です。

イッシュリーグに向かう間にアイリスの故郷でもある竜の里に招かれたり、アイリスがソウリユウジムで戦ったり：イーブイたちとポケモンレスキューをするバージルさんに出会ったりといろいろとありました。

ですが問題なくイッシュリーグに向かうことができましたと思っていますよ。

「ついに来たな…イッシュリーグ！」

『ピッカ!!』

俺とピカチュウはイツシユリーグ開催地のヒガキシティにて大きな声で叫んだ。

ヒガキシティではイツシユリーグが開かれるからか周りがお祭りのように盛り上がっており、人の出入りも多い。そして強そうなポケモントレーナー達も多いと思えた。

俺とピカチュウは周りを見てテンションが上がった。それを見た俺とピカチュウ以外のみんなは微笑ましそうに：または呆れたような表情で早く大会の申請に向かおうと言ってきたため、その言葉に頷き歩き始める。そんな俺たちに向かつて誰かが話しかけてきたため俺たちは足を止め、声のしてきた方へ振り向く。

「あら？サトシ君たちじゃないですか。お久しぶりですわ！」

「ベル！久しぶりだなあ！」

『ピイカツチュ！』

「ベルもバツチ8個集めたのね？」

『キバキバ？』

「ええ。最初は間に合わないと思って諦めておりましたけれど、何とか大会までにバツチを集められましたよ」

「そっか！良かったねベル！」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「よおサトシ達にベルじゃないか! 元気だったか?」

「おうもちろん元気だったぜ。ケニヤンは?」

『ピイカ?』

「俺はもちろん超元気だ!」

「リーグ前だからね。人もポケモンも両方元気でない!」

『…いや、サトシはともかくケニヤンのあの様子なら大丈夫だろ』

「ルカリオお前…後でたあつぷりと話をしようか…?」

『ピイカツチュ…』

「もうお兄ちゃんたら…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

「ははは…ほらそろそろエントリーにでも向かおう…」

「待て! あれなんだ!」

「あれは…バージルさん?」

『ピイカ!』

「バージルさんもイツシユリーグに挑戦するのね!!」

『キバキバ!』

「皆さんの知り合いですか?」

「ベル、うんそうなんだ。バージルさんはね——」

——まあその後、ポケモンレンジャーのバージルさんが空からこちらに來たり、一緒にリーグの申請をすることになった。皆、やる気十分のようだからからのリーグ戦が本当に楽しみだと思える。

そう……テンションが上がっていたというのに……。

「おい……あれってサトシじゃないか?」

「あああのアデクさんと引き分けになったっていうトレーナーか!」

「あれが最恐のトレーナーなのか……?」

「何だか弱そうに見えるけど……」

「シツ!!お前死ぬぞ?!」

「おいあつちの小さい……黒髪の幼女を見ろ……サトシに似てるぜ。きつと妹だ……」

「あれが慈しみの女神……小さくて可愛いな……!」

「おい死にたいのかよ！サトシに殺されるぞ……！」

「でも守つてやりたいってのは分かるな……幼くて危ない扉を開きそうだ……！」

「ピツ……こつち見てきたぞ逃げろ……！」

なにやらぼそぼそと聞こえてくる声とその言葉に少しだけ苛立ち話をしている方を睨み付ける。特に妹を可愛いとか言う奴らの言葉には納得できるが、危ない扉を開きそうだといった奴の顔を覚えて後でいろいろとリーグで潰してやると決める。

ピカチュウやルカリオも奴らの言葉を聞いて不機嫌になり、無表情になっていた。そして俺たちの様子を知らずのは声が聞こえていたアイリスとデントとベルのみ。ケニヤンやバージルさんは普通にポケモンリーグのエントリーについて考え、これからどんなバトルになるのか楽しくなってきたりしているのか聞こえてないようだ。そして妹は肩に乗ってきたピチュウに耳をふさがれて声が聞こえなかった様子。そして何があったのかピチュウに聞こえなかった妹だったがヒトカゲがうまく誤魔化していた。……まあ妹が奴らの声を聞いてたらおそらくイッシュリーグを観戦しようとは思わなかっただろう。とにかくグツジョブヒトカゲとピチュウ。

そしてアイリス達が早く行きましようと言って歩く速度を速め、リーグの建物の中へ入っていく。

ちなみにもその間にも喋る声は聞こえてこなかったが。こちらを見る視線は変わらず続き、俺たちのテンションは下がっていった。

.....

「サトシ先輩!!」

「あ、ようシューティーー!」

『ピツカア!!』

「はい!お久しぶりです!!」

シューティーがこちらに話しかけてくれたおかげで少しだけテンションが上がった。シューティーとのバトルは本当に楽しみだからだ。シューティーはジュニアカップからかなり強くなってきたということや合体技の修行をしたということ、そして手持ちのポケモンとのコンビネーションがうまくいっているという話をしてくれて、イッシリリーグでバトルをすることが楽しいと心から思っているような表情で俺に話してくれた。俺もそれに笑顔で頷き、口を開く。

「お前とのバトル、楽しみにしてるからな!頑張って勝ち上がれよ!!」

『ピカピカチュウ!』

「はいもちろんです!!サトシ先輩とのバトル、楽しみにしていますからね!!!」

そう言ってシューテイーは走って建物の中へ入って行ってしまった。俺たちはそれを見て笑みを浮かべながらシューテイーに続くように建物の中へと入っていった――

第三百二十九話くシユーツェーは全てに憧れたく

シユーツェーはこの日をどれだけ待ちわびたのかわからない。どれだけの時間、この日のために修行してきたのかさえわからない。それほどまでにシユーツェーは歓喜していた。予選の第一試合からサトシとバトルできるといふ幸運に、そしてサトシと出会ったことの幸せに。

——あの時、あの瞬間にサトシと出会ったことが運命というのなら、シユーツェーはその運命の神に激しく感謝したことだろう。だがその前にシユーツェーはサトシと出会った頃の酷過ぎる自分に向かって全力で罵りながらぶん殴っているかもしれないと考えてもいた。

(サトシ先輩……あなたと出会ったことが僕にとっての幸せです……)

まだ試合は開始してはいないが、サトシの肩に乗っているピカチュウの強さ、レベルの高さを感じ取れる。ジュニアカップで見せたサトシとアデクの高レベルな戦いから、シューティーは己の弱さを知ることができた。以前は戦うことで強くなり、チャンピオンであるアデクを越えられると信じていたけれど、サトシと出会ってからは違っていた。今までは己のすべてだと思えた常識をことごとく壊していくとても強いトレーナーに：そしてポケモンを第一に信じ、その強さを最大限まで引き出す才能にシューティーは憧れてしまった。そして、そんなトレーナーに自分もなりたいと心から思えた。でもジュニアカップで見たのは強さだけではない、ポケモンとの信頼感とサトシしかできないと思える発想。おそらくはチャンピオン以上の強いトレーナーになるであろうと：シューティーは直感していた。だが、憧れだけですべてを真似できるとは思っていない。

自分にはなれない強さをサトシは全て持っている。羨望の眼差しを向けたこともあるぐらい憧れているけれど、自分には到底超えることのできない先輩であって師匠だと心の底から感じているし、サトシに学んだことすべてに感謝しているのも事実だ。そんなサトシと戦って勝てる自信はシューティーにはなかった。

だがそんな憧れのサトシとバトルできるということ、そして今までの修行の成果をサトシに向けて勝ってみせるといふ決意もあった。

だ。全てはサトシと戦い、勝つために……今こうしてこのバトルフィールドに立っているの

「よろしくお願いします……サトシ先輩！」

「ああ、よろしくなシューティー！」

サトシは好戦的な笑みを浮かべてシューティーを見ていた。その視線を向けられていることでさえもシューティーは気絶してしまいそうなほど幸せだと感じていた。サトシ以上の強いトレーナーなど見たことがない。チャンピオンと《楽しみながら》戦って引き分けになるほどの実力……。自分だったらおそらく必死になって戦ったか、勝つことしか考えずあまり楽しめなかったかもしれないと思える戦いを見せてくれたサトシとバトルをする。

「行きます……ジャローダ!!」

『ロオオオダアアア!!』

「ジャローダか。ピカチュウ、君に決めた!!」

『ピカピッカ!!』

ジャローダとピカチュウはお互い睨み合い、バトル開始の合図を待つ。イツシュリグの初めの一步となる戦いだとシューティーは興奮していた。心臓の音が激しく脈打つのを感ずる。風や観客たちの声がゆっくりと聞こえてくる。時間が：バトル開始の合図が10分、1時間：いや、1年という長い時間に感じてしまう。

だが、合図は目の前に迫っていた。

「これより、シューティーVSサトシの試合を開始する！始め!!」

その瞬間、激しい爆発音がフィールド内に響き渡る。もちろん音だけでなく実際に爆発もしていた。ピカチュウの10まんボルトとジャローダのソーラービームが試合開始と同時に炸裂したからだ。だがこの時ピカチュウの10まんボルトの方がジャローダのソーラービームよりも強いとシューティーは感じていた。すぐに次の技に移ってくれたために電撃は免れたが、もしかしたらあの10まんボルトで一撃で倒れるという事態もありえたかもしれないと冷や汗をかいた。

（ああ、本当にサトシ先輩は強い…！）

サトシと戦うことに再び幸せをかみしめるシューティーだったが、ジャローダに指示しなくてはと気を引き締める。そしてジャローダに向かって口を開いた。…もちろんサトシの方も笑みを浮かべながらも口を開く。

「ジャローダ、ドラゴンテール！」

『ロオダアアアア!!!』

「ピカチュウ、アイアンテール！」

『ピツカア!!!』

『ジャロオ!?!』

「ジャローダ!!しっかりしてくれ！」

『ジャロ…ジャロオオオオ!!!』

ジャローダのドラゴンテールとピカチュウのアイアンテールが炸裂し、両者の身体に当たる。だがピカチュウは大した反応を見せず、ジャローダの方が吹っ飛ばされてしまった。そのピカチュウの一撃がとても凄まじい。

シューティーは心の底からジャローダに向かって倒れなくてくれと言う。今倒れてしまったら負けを認めることになるからだ。まだサトシに何も見せていない…自分の覚悟した強さとポケモンとの…ジャローダとの信頼を何も見せずに終わらせたくはないと必死に叫ぶ。その声にジャローダは聞こえたのか、ふらつく身体を何とか必死に起き上がらせて大きな声でシューティーに向かって叫んでいる。その声はまるでシューティーと一緒にサトシとピカチュウに今までの修行の成果を見せてやろうという声に聞こえてきた。

シューティーは笑みを浮かべてジャローダに頷き、言う。

「ジャローダ…《エナジーテール》!!」

『ジャロオオオオ!!』

「避けるピカチュウ。…新しい合体技か!流石だなシューティー!」

『ピッカ!』

「いえ…サトシ先輩に褒められるような…そんなことはないですよ…」

『ロオダアアア!!』

エナジーテールとはエナジーボールとドラゴンテールの合体技である。エナジーボールをつくり、ドラゴンテールの勢いで放つ技。簡単に行ってしまえばエナジーボールの剛速球バージョンと言えるだろう。だがピカチュウはそれを難なく避けることが

できた。まるでゆっくりな速度のエネルギーボールを躲しているような軽やかな動きにシユーターは下唇を噛み、悔しそうな表情を浮かべる。今まで鍛えてきた合体技でさえもピカチュウは脅威に感じていないと分かってしまったから。まだまだ自らの強さが足りてないということが分かってしまったからこそ悔しかったのだ。

(まだまだ先輩には届かない…先輩の強さが遠く感じる…)

「…シユーター!!バトルは最後まで何が起きるのかわからないだろ!!」

『ピカピカ!!』

『ロオダアアア!!!』

「…:そう:です!サトシ先輩、ありがとうございます!また1つ学ぶことができました!!」

「おう、その意気だぞシユーター!」

「はい!!」

サトシに勝つことはできないかもしれないと思ってしまった。ピカチュウを倒せる

のか自信を失ってしまった。長い時間をかけて鍛えていった合体技を難なく避けられてしまった。ピカチュウのレベルの高さに：サトシの強さに挫折し、諦めてしまいそうになった。バトルを途中で放棄はしないけれど、その圧倒的な強さに勝てるのかと疑問を感じ、諦めるという選択肢が頭の隅に浮かび上がってしまったのだ。

だがそんな愚かな考えをサトシは分かってしまったのだろう。シューティーに向かって怒っているような口調で叫んでいた。そしてその言葉にピカチュウもジャロウダも一緒になって頷き、バトルを再開しようと言ってくる。シューティーは首を横に振り、先ほどの考えを捨ててサトシを見た。諦めるという選択を捨て、全力でサトシに挑むと決めたのだ。たとえそれが負けるようなことにつながったとしても、シューティーは後悔しないだろうと感じながらも…。

技と技の激突、電撃と爆発音がバトルフィールドに続いていた。でもその間にもジャロウダは疲弊し、今にも倒れそうになっている。それに比べてピカチュウは元氣よくまだまだ戦えるという表情だ。

(次の技で最後…か…)

シューティーは次の攻撃ですべてが決まると分かった。サトシとの至福の戦いがこれで決着がつくと分かってしまったのだ。でもシューティーは笑みを浮かべていた。サトシとピカチュウを見つめて、指差しながらも次の指示を出す。

「ジャローダ…ソーラービーム!!!」

『ジャアアロオオオオオオオ!!!』

「…ピカチュウ、エレキボール！」

『ピカピツカアアア!!!』

ソーラービームとエレキボールがぶつかり…周りが爆発した。今まで以上の破裂音と爆発音がバトルフィールドに響き渡る。土煙が舞い、ジャローダとピカチュウの姿を隠してしまう…。

———
そしてようやく見えてきたのはジャローダが倒れている姿。

【ジャローダ戦闘不能。よって勝者、サトシ！】

「…お疲れさまジャローダ。本当にありがとう！」

『ジャロオ…!』

清々しい表情でシューティーはジャローダに声をかけた。ジャローダは悔しそうな表情を浮かべていたが、どこか満足げだとシューティーは思った。予選を敗退し、この瞬間からシューティーにとってイツシユリーグは意味をなさなくなってしまったが…それでもサトシと戦えたことに…サトシと出会えた奇跡が嬉しかった。

この戦いは、次への一歩につながると…次への強さになると感じてサトシに話しかけていた。これからの決意と約束をするために…。

「ありがとうございます、サトシ先輩…：僕はもつともつと強くなります…：そしていずれアデクさんとバトルをして勝ちます!…：ですから、その時になったら…：サトシ先輩ともう一度バトルをお願いしますですか!？」

「当たり前だろ!またバトルしようぜシューティー…：今日は本当に楽しかったよ!!」
『ピカピカ!!』

「はい…!本当に、ありがとうございます!」

シューテイーは嬉しそうに笑みを浮かべて、サトシと握手をした。サトシとまた会える日を願い、強くなると心に誓いつつも…今この瞬間を記憶に刻みつけようと涙で歪む視界を必死に堪えてサトシに笑みを浮かべながらもしつかりと前を見ていた――

。

第一百四十話く妹はある人物と出会ったく

こんにちは妹のヒナです。イツシユリーグは兄がすべてのトレーナーに勝って優勝してました…。さすがスーパーマサラ人：いやそろそろスーパーマサラ人以上になつてゝるよゝな気がします。

そういえば兄があるトレーナーを徹底的に叩きのめした戦いがあつたんですけど何があつたんでしようね…？もしかしたらそのトレーナーが兄に喧嘩でも売つたのかなと首を傾けながら観戦席で見えました。まあそのトレーナーも負けた瞬間に号泣しながら兄に向かつて土下座してゐたため喧嘩を売つたという予測は確信に変わりましたか…。

そして今回の旅の報告にアララギ博士に会いに行くことになりました。カノコタウ
ンの研究所にアララギ博士がいるとのことで、私たちはそこへ向かっていたんですけれ
ど…。

「どうしようどうしようどうしよう…!!」

「あれって…?」

『ピイカ?』

「何か悩んでるみたいだね…」

「とにかく聞いてみましよう!」

『キバキバ!』

橋の近くで座り込み、困っている女の子を発見して私たちは何かあったのか話を聞く
ことにする。話を聞いてみるとその女の子は凄く心配性な性格で、目の前にある橋が崩
れるのではないかと心配して、石橋を叩くということわざを試してしまい、その試した
結果橋が叩いた場所から崩れるのではないかといういろいろと想像力豊かなことを言っ
て悩んでいたらしい。ルカリオは何をくだらないという表情を浮かべて呆れており、皆も
大丈夫なのに何で渡らないんだろうと苦笑している。

「大丈夫だって。俺たちがこの橋を渡って安全を確認するから、その後には渡ればいいだ
ろ?」

『ピカピカ!』

「う、うん…」

女の子はあり得ない可能性を信じて顔を青ざめている。私たちが橋を渡って大丈夫だという証明をしたのだけれど、それにももしもの可能性を考えて渡れなくなっていた。むしろその想像力が凄いと私たちは思ってしまった。

「ほら、大丈夫だろう?」

『ピカピカア!』

「セーフテイなテストだろう!」

「何も問題はないから渡ってきて大丈夫よ!」

『キバキバ!』

「そうですよー!この橋は頑丈だし大丈夫ですよ!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「う…で、でも…今のがこの橋の限界ギリギリとかだったらどうしようって思ったなら!…うわああ!!」

しまいには泣き崩れてしまった女の子に私たちは呆れたような表情を浮かべた。兄は頬をかいて困ったように苦笑をし、アイリスとデントは微妙そうな表情を浮かべている。

「ああ…まつたく…」

『ピカチュ…』

「慎重すぎるテイストだね…」

「ある意味感心するわ…」

『キバア…』

『……………ハア…仕方ないな』

「あれ？ルカリオ戻るの？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

「俺も行くよ…ルカリオだけだと余計に何か怖がられそうだ…」

『ピイカツチュ…』

———というわけで、兄とピカチュウとルカリオが一緒になって女の子の所へ戻り、一緒に橋を渡ってきました。

ルカリオが喋ると余計に困惑してしまう可能性があったため兄が喋って応援しながら歩いて渡った。その間も想像豊かな恐怖を語ってくれて何度か足踏みして止まってしまうこともあったけれど無事に橋を渡ることができて良かったと思う。…というか、何かこの場面見たことあるような…原作で見たっけ…？

「あ、あの…ありがとうございます!!」

「いや気にすんなよ!」

『ピカピカ!』

「慎重なものいいことかもしれないけど…たまにはチャレンジすることをお勧めするよ!」

「そうね。何事もまず最初にやらないと進まないわよ」

『キバキバ!』

「は、はい! 本当にありがとうございます!」

「次は気をつけてくださいいねー!」

『カゲカゲエ!』

『ピチュピチュウ!』

私たちは女の子と別れ、アララギ博士の研究所へと向かう。…そして到着した私たちはアララギ博士に挨拶をして、その次に電話でオーキド博士に挨拶をする。

「おおサトシにヒナ！久しぶりじゃのう！」

「お久しぶりです博士！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピツチュ？』

「おお！ピチュージャやないか…そうか。イツシユ地方でヒナと出会ったんじゃない。ピチューの様子は幸せそうじゃ！よかったのう！」

『ピチュピチュ！』

「はい！」

『カゲ！』

「博士、今回のイツシユリーグ…見てましたか？」

「見ておったぞ！イツシユリーグも優勝じゃな！おめでとうサトシ!!」

「はい。ありがとうございます!!」

『ピカピカ!!』

「あ、マサラタウンにいる皆って元気になっていますか？」

『カゲカゲ？』

『ピチュピチュ?』

「ああ元氣じやとも!…おおぶツ!」

『ベエトオオ!!』

「べ、ベトベトン…」

『カゲエ…』

『ピチュ!?』

『カゲカゲ』

『ピチュウ…』

「こ、これ…よさんかベトベトツツブツ!」

『ベエトオオオ!』

「ははは…ともかく、元氣そうだな…」

『ピカピカチュ…』

ベトベトンがそのまま博士の身体にのしかかったせいで電話が切れ、私たちはその光景に苦笑してしまった。ベトベトンが博士に懐いているのはいつも通りだけれど…まあいいか…。

その後私たちは旅をどうするのか考えていた。イツシユリーグが終わったから兄の旅はこれで終了でマサラタウンに戻るか…それとも旅を続行してイツシユ地方を回る

かどちらか。アイリス達はまだやることが残っているから旅をしたいし兄たちと一緒に旅を続けたいと言っていて、兄はそれでいいけれどこれからどこに行こうか悩んでいた。そんな話し合いをしていた間にまたあの女の子がやって来た。

「す、すいませーん…居ないのかな…ああどうしようどうしよう!!私が出るのが遅れたせいでこの研究所は無人になっていたのかな…それともここは前から誰もいないのかしら…ああもうこれからどうすれば…!!」

「あれお前…」

『ピイカ…』

「あ、さっきの人たち!!」

話を聞いてみると、どうやらこの女の子…もといノノミさんは初心者トレーナーでアララギ博士にポケモンを貰いに来たらしい。だからあの橋の時にうろついていたのかなと私とヒトカゲ、ピチューはそう思っただけで首を傾げていた。

そんな中、ノノミさんはまた初心者ポケモンを選ぶのにも苦労していて、ツタージャを選んで寝ている間に進化してジャローダになって巻きつかれたらどうしようとか、ミジュマルを選んでいたら寝ている間にみずでっぽうで部屋中が水浸しになってしまったらどうしようとか考えていたようだった。その声と悩みに私たちはまた苦笑し

てしまう。何というかここまで慎重かつ想像力が豊かだとこの先旅でやっていけるのかなと心配してしまうほどだ。

ポケモンについてはデントがポケモンソムリエとしてノノミさんの相性がピッタリそうなポカブが良いとお勧めされたこともあつて選り、そのポケモン以外にもポケモン図鑑やモンスターボールなどを貰っていた。その様子はシューティーが旅をし始めた時とデジャブになるなど懐かしむ。でもあの時は兄たちが暴走していたからそれどころじゃなかったけれど…。

「そうだ…なあノノミ！せっかくポケモン貰ったんだし、俺とバトルしないか？」

『ピカピカ！』

「え、ええ!?でもわたし…私まだ初心者だし…ポカブも私に懐いてくれるかどうかわからないし…ああ指示を聞かなかつたらどうしよう…それで逃げ出されてしまったら私…!」

「いやいやそんなこと有り得ないって…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

「じゃあダブルバトルはどうだ?そのまま旅に出るんだつたらある程度は慣れた方が良いぜ?そんなに慎重すぎるといつまでたつてもバトルできないし前に進めないぞ」

『ピツカ』

「前に…うんわかった。私やってみるよ!!」

「よしその意気だ!…アイリスにデント。手伝ってくれるか?」

『ピイカ?』

「もう、最初っからそのつもりだったんでしょ?もちろん私たちも手伝うに決まってるじゃない!ね、キバゴ」

『キバキバ!』

「そうだね。ここは先輩トレーナーとして僕たちと一緒にバトルのことを知っていかうか!」

「はい、お願いします!!」

——まあ兄はおそらくこのノノミさんが初心者だからということも
のすごく慎重すぎる性格だと考えて心配し、ある程度は妥協も必要だと教えようとして
いるのだろう。そしてできるなら旅で迷いすぎないようにポカブとバトルをして大胆
になつてもらおうと考えたのだろう…。うん、まあ兄の影響うけてしまったノノミさん
はこれから大胆に旅をしていくと決めたらしく、兄たちにお礼を言つて歩いて行つた。
…ちよつとだけ常識から外れないことを祈るのみ…だけれども…まあ慎重すぎる性格

よりマシだよね？

第四百四十一話く白の遺跡へ目指す途中……

こんにちは兄のサトシです。

アララギ博士の父がレシラムに関する遺跡を見つけたとかで面白そうだと俺たちはそこへ向かうことになった。旅をするのなら目的ある旅の方が面白そうだからだ。そしてそこへ向かうために船に乗っている。その途中で、船から見えた景色はとても面白いものばかりだと俺たちは周りを見ながらテンションが上がる。その景色には廃墟のような場所も見えたりした。デントが調べた結果、その廃墟のような場所はラボの跡地となっていて、何かの研究施設だったらしいということが分かった。何の研究をしているのかは気になるけれど、もう跡地となっているから行ったとしても何も意味がないと

考えてその好奇心を捨てて白の遺跡についての話し合いを始める。

俺たちはレシラムと直接会ったことがあるけれど、白の歴史とは関係があるかどうかだ。あのレシラムは封印されていたらしいから関係はないのではないかという意見（ルカリオとデント）と白の遺跡でアララギ博士の父もちゃんとレシラムに関する何かがあると云っていたのだから必ずレシラムと関係があるという意見（アイリスと俺）とそもそも封印とレシラムについては別個体として見た方が良くないかという意見（妹）で分かれた。その話し合いをしても何も結果は出ず、やはり白の遺跡に行つて直接確認した方がわかるだろうと話し合いが終了した時にタイミングよく船が次の町に到着した。その町には俺たちは降りることないため、次に向けて出発する間は待つことになった。

「…ん？あれって…」

『カゲ？』

『ピチュ？』

「どうしたヒナ？」

『ピカピカ？』

「あれ…あの人僕たちのこと見てるね…誰かの知り合いかい？」

「私じゃないわよ？」

『キバキバ』

「俺も違うぜ」

『ピツカツチュ』

『…ヒナ、お前の知り合いではないよな?』

「うん…違うよルカリオ。知り合いじゃないよ…」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

「じゃあ気のせい…ってあれ? いなくなってる……」

船の外で妹が何かに気づいたため、俺とピカチュウが何があつたのか話を聞く。そして外を見たデントが帽子をかぶつた緑髪の青年を見つけ、こちらを見ていることに気づいたため誰かの知り合いか俺たちに聞く。けれど誰も俺たちを見ている青年とは知り合いじゃないため俺たちを見つめていたのは気のせいということになった。…でもあいつ、俺たちを見ていたというより、俺たちのポケモンを見ていたような気がする…まあいいか。

「あ、そうだ！船の中にバトル場があるのよ！一緒にバトルしましょう！」

『キバキバ!』

「お、いいなそれ！バトルしようぜ！」

『ピッカチュウ！』

アイリスが船にあるバトルできる場所を見つけたらしく、暇つぶしに一緒にバトルでもしないかと誘ってきたため俺たちはその誘いにのることにする。そして向かった先では…先程船の外で見かけた青年が立っていた。

「あの人って…」

『ピカピカ？』

「やあ…可愛いね君のピカチュウ」

『ピッカア！』

「ありがとうございます。あの…何でさつき俺たちのこと見てたんですか？」

「トモダチの声が聞こえたんだよ…」

「友達？」

『ピイカ？』

「ポケモンのことを、僕はそう呼んでいるんだ…」

そしてその青年…名前はNさんというらしい。Nさんに話を聞くとピカチュウが俺のことを大好きだという心の声が聞こえてきたということ、そのピカチュウの心の声の

強さに興味をもつて来たと言ってきた。

ちよつとだけ理解できないような気がするけれど、世の中にはいろんな人がいるし、もしかしたらNさんもポケモンの声を本当に聞いたのかもしれないと頷く。それにNさんはポケモンのことをよく見て、よく知っているようだ。俺のピカチュウを見る目がとても優しく、撫でる手もピカチュウは嫌がらずむしろ気に入っているようだと感じる。その様子からNさんはポケモンのことを第一に考える優しい人なんだと思えた。

「それでサトシ君たちはどこへ向かっているんだい？」

「俺たち、レシラムにまつわる伝説の場所を目指しているんです」

『ピッカー！』

「ッ?!」

そしてNさんはいきなり驚いたような表情をして、目を閉じて何かを考えているような：思い出しているような感じになった。俺たちはお互い顔を見合わせて何があったのかNさんに聞いてみたけれど、伝説だから1度見たら幸運だよねとはぐらかされてしまった。あの反応からおそらくNさんは見たことがあるのかもしれない：もしくは何か伝説と関わったことがあるかもしれないと感じた。まあ、それは俺の推測にすぎないから直接Nさんに言える質問ではないけれど…。

その後、デントがふと思いついたかのような表情で俺に話しかけてきた。

「そういえばサトシも、ゼクロムに直接会ったことがあるよね？あの時以外にも…」

「あああれか…でもあれってほとんど直接会ったとはいえないんだよね…」

『ピイカ…』

「ああうんそうだね…あれってほとんど会ったとはいえないよね…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

「どういうことかな。その時のこと、詳しく聞かせてくれないかい？」

「わかりました…？」

『ピカア…？』

「待った待った！…ほら、立ち話もあれだし、ここはひとつ…イツツ・カフェ・ターイムと行こうじゃないか！」

「また始まったし…」

『キバキバ…』

『……………』

恐らくデントはあの封印されたゼクロムではなく、イツシュ地方に最初に遭遇したゼクロムの方を言っているのだろう。だがあの時はあいつが攻撃してきそうな雰囲気

漂わせていたからすぐにピカチュウとルカリオの攻撃で追い払ったため何事もなく去って行った。だから直接会ったとはいえないと俺とピカチュウと妹とヒトカゲとピチュー。でもNさんは直接会ったかどうかはともかく、ゼクロムと遭遇したということに驚き、詳しく話を聞きたいと言ってきた。だがかなり長話になりそうだと感じたデントによつていったん話は中断しちよつとしたレストランに行つてそれぞれ飲み物を頼み、椅子に座つて話をする事になった。…というか、ずつと思つてただけど、ルカリオ：Nさんがいるから喋れないんだよな…まあ仕方ないか…。

.....

——俺が話した話はNさんにとつてかなり興味深い話だったらしい。そしてゼクロムの英雄伝説についてNさんはレシラムの英雄伝説を話してくれた。やはりNさんはレシラムやゼクロムについての話に詳しい：何か興味をもつて調べていたのかデントは聞いたら、この世にポケモンはいるのか。どうしてこの場所に生まれていくのかという哲学にも似た話を長々と早口で話していた。でもその感情がこもった話を聞いて、おそらくかなり熱心に調べているのだなと俺たちは感じた。だが、我に

返ったNさんはやってしまったという表情を浮かべて俺たちに向かって苦笑していた。

「そうだ。サトシ君の夢を聞かせてくれないかな？」

「はい。俺の夢はポケモンマスターになることです」

『ピツカ!』

「ポケ……モン……マスター……僕は、トモダチ……いやポケモンにバトルさせることは好きじゃないな……」

「どういうこと？」

「……え、あのどうしたんですか？Nさんもポケモントレーナーですよね……？」

「Nさん？」

『ピイカ?!』

「いや、忘れてくれ……熱くなるとつい喋りすぎてしまうのが僕の悪い癖なんだ……じゃあ風に当たってくるよ」

「はあ……」

『ピカピカ……』

Nさんはちよつとだけ残念そうな表情で俺たちから離れてレストランから外に出て行ってしまった。その言葉に、その表情に俺とピカチュウは何か妙な引つ掛かりがある

ような気がしたけれど、おそらくポケモンが傷つくのが嫌でバトルは好きじゃないと言ったのかもしれないと思った。でもまだ短い間の交流だったけれど、Nさんはポケモンが第一だということ…そして何かを隠しているということが分かってしまった。隠し事とはレシラムについてのこと。レシラムについて詳しく知っていて、何かを隠している俺たちはそう考えたのだ。

何を隠しているのかはわからないけれど、でもレシラムの話聞いた時から何か様子がおかしいと感じたこの直感はずっと外れていないはずだと思う。ピカチュウの方を見ると、何か考えているのかピカチュウも俺の顔を見て頷いていた。そして予感があった。…もしかしたらNさんとはまた会うことになるかもしれないという予感が――

第一百四十二話く妹は未来での変化を予想したく

こんにちは妹のヒナです…。何というかNさんが来たと思ったんですけど…このままの状態が良いのか少しだけ不安になりました。ロケット団がいない状況だと、トラブルも少ないし何も問題は起こらないけれど…その結果Nさんが凄いとすることも、ちゃんとポケモンと心が通じているということも伝わらずただそのまま別れてしまうのではないかと不安になったからだ。原作崩壊もやりすぎてしまうと何か変化が起きてしまうということ…もしかしたら最終的に物凄く悪い方向に進んでしまうのではないかと思ってしまうのだ。

「はあ…どうしようかな…」

『カゲカゲ?』

『ピチュピチュ?』

「ちよつとね。これからの未来が不安で不安で…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

——— 現在、兄とルカリオとアイリスでトリプルバトル的な試合を開始しています。そして審判はデントで私たちはその試合を遠くから観戦しているという状況です。トリプルバトルについては…兄の出したピカチュウとルカリオがお互い攻撃し合ったり、その攻撃をしている隙にアイリスがエモンガでほうでんしよう突撃したり…いわゆるみつどもえの状況です。

その様子は高レベルなバトルのようで見ているとても楽しいと思えるけれど…でもこの平和な時間こそ私にとって恐れていることであり、このまま次の町についてNさんは兄たちにさよならも何も言わずに離れて行ってしまわないかと思っただの。

出来れば原作通りの展開になつてほしいと思う。何もかも皆が無事に事件を終わらせたいと願う。でも最近だと私も細かな内容まで思い出せずに…Nさんとどんな

感じて知り合ったのかさえ、直接会ってからでないと思いつけなくなってしまったのだ。何かきつかけさえあれば思い出せるときもあるけれど、そのきつかけのせいで最悪なことになってしまったらどうしようと思ってしまう。兄ならすべて叩き潰して無事に事件解決させてくれるかもしれないけれど…もしもという不安が私にはある…。

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「…ありがとうヒトカゲにピチュー」

『カゲ！』

『ピツチュ！』

「随分と懐いているんだね…」

悩んでいる私にヒトカゲとピチューが私を抱きしめるような行動をして、そして力強く言う。ヒトカゲ達の言った言葉は分からないけれど…でも私に活を入れてくれたように私は笑みを浮かべて抱きついていているヒトカゲとピチューを思いつきギョツと抱きしめて礼を言う。ヒトカゲとピチューは照れた表情を浮かべていたけれど、すぐに返事をして私に向かって笑みを浮かべてくれた。

——そして、そんな私たちに近づいてきたのは悩みの原因であったNさんだ。

「Nさん…」

「君たちとはまだよく話をしていなかったと思って…隣りいいかい？」

「はい。大丈夫ですよ」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

私に何か話をしたいと言って近づいてきたため、私たちはお互い顔を見合わせてからNさんに笑みを浮かべて了承する。何を話したいのかはわからないけれど、きつとポケモンについてなのだろうと思った。

兄たちも近くにいるし、もしも何かが起きたらすぐに大声で叫べば大丈夫かと思ったからというのもあったりする。

「君のポケモンは君のことが大好きみたいだね…」

「それは、心の声ですか…？」

『カゲ？』

『ピチュウ？』

「ああそうだね。サトシ君のピカチュウと同じ声が聞こえてきたよ…それに、君はまだ幼いというのに…何故ポケモンと絆を強めることができたのか興味を持った」

「絆…ですか…でも私はヒトカゲとピチュウのことを大事な仲間だつて思つてますし…家族だという気持ちも強いですから…もしかしたらそのせいではないかと…」

『カゲカゲ!』

『ピチュピツチュ!』

兄と似たように私とヒトカゲ、ピチュウも絆が強いと言つて興味をもつていたらしい。Nさんは近くにいたヒトカゲの頭を撫でながらも、何か考えるような表情をして、私に問いかけてきた。

「君たちは…ゼクロムとレシラムに会ったことがあるのかい?」

「へ?えつと、それはお兄ちゃんが言つていたイツシユ地方での最初の——」

「いや、その話じゃない。デント君が《あの時》と少しだけ言つていたけれど…キミたちは何か隠していると…ゼクロムとレシラムに会ったような印象を強く受けたんだ。だから話してくれないか?」

「えつとそれは…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

恐らくNさんは私たちがアイントオークで封印されていたゼクロムとレシラムに会ったことを聞きたいのだろうと思う。でもそれは原作とは関係ない：映画の話なのだ。ゼクロムもあの時イツシユ地方で最初に出会ったゼクロムとはいえないだろうし：おそらく話したとしても意味のないことだ。それに話してしまったら何か原作を変える可能性だつて出てくると私は危惧していた。

アイントオークで封印されていたゼクロムとレシラムに会ったという話をしてしまったら、おそらくNさんは興味をもってその町へ行くだろう。そしてその時間と距離は原作を変えてしまう原因になりかねないと思う。そんな危険なことは私にはできないと躊躇していた。

でも私と言えないということに気づいたのか、Nさんは真剣そうな表情を一変させ、優しそうな笑みを浮かべる。

「すまない。こんな質問…困る内容だったね…。今のは聞かなかったことにしてくれ」

「あ、はい…あのNさん…本当にごめんなさい」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

「いや、君たちが真剣に僕のことを考えて喋るかどうか悩んでいてくれたというのは理解できたよ…会ったという内容さえわかれば僕は満足だ」

「そう…ですか…」

Nさんの表情から何を考えているのかわからない…。もしかするとレシラムについて考えているのかもしれないと思いつながら私たちはNさんが喋るのを待つ。Nさんが喋らない間、その静寂な雰囲気は兄たちが遠くでバトルしている騒音でかき消されてしまったけれど、でも何か静けさが伝わってきた。

「うん…そうだね。君たちにはまた、会えるかもしれない…もちろん、サトシ君たちにも」

「そうだったらいいですね」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「ああ、きつとなるよ…ゼクロムに会えたならきつと…」

そう言つてNさんは私たちから離れて行つてしまった。私たちはNさんに手を振つてまた会おうと叫ぶ。Nさんも前を歩きながら後ろにいる私たちに向かつて手を振つてくれたから私たちの言葉を忘れることはないと思つた。

原作とは違うお別れだけでも…何か良いことが起きればいいと私は思えた——

第一百四十三話～兄は新しいジムを訪れた～

こんにちは兄のサトシです。ヒオウギシティに新しいジムができたのアララギ博士から話があったため、そのジムでバトルをしてみようという話になり、まずはそちらへ向かうことになりました。ジムが新しくできたというのは初めてで、どんなバトルができるのか楽しみです。

…そう思っていたんだけど。

「え、マップに載ってない!？」

『ピイカ!？』

「そうなんだ…ジムの情報がどこにも表示されてなくてね…」

「まさか…新しすぎてまだ情報が更新されてないのかなのかしら…」

『キバキバ…?』

『マップに載ってないのなら人に聞いてみればいだろう。その方が早く分かる』

「ああ確かに。ほら、あっちにいる人ならわかりそうだよ!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「じゃあ聞いてみるか…すいませーん!!」

——というわけで、聞いてみた結果ようやく場所が分かり、そのヒオウギジムへ向かった。だがヒオウギジムは普通のジムではなく、学校が開かれていたジムだったのだ…。

まあ、ジム以外にも並行していろいろとやっているのはこのイツシュ地方を見てきて分かったことだ。例えば言うのならデントのジムにあるサンヨウレストランやアロエの開いている博物館などである。けれど、まさか学校を開いていて、その上ジムも行っているとは思わなかったな…。

そして学校を案内してくれたのは新しいジムリーダーとなったチエレンという青年。チエレンさんはまだジムは開設したばかりで設備が整っておらず、ちゃんとしたバトルはできないと言われてしまった。アララギ博士が言った時はもう新しくできていると

言っていて、すぐにバトルに挑戦できると思ったんだけれどまさかまだジムができてもないとは思わなかった…まあエキシビジョンマッチとしてのバトルならできると言われたため、ジム戦ではなくちよつとしたバトルとして行うことになったのだけれども…。

——それとチエレンさんは俺のことをよく知っていたらしい。

「君、サトシ君だよな？いろいろとうわさは聞いているよ。イツシユリーグ優勝おめでとう」

「ありがとうございます！」

『ピカピカ！』

「…あ、あの…うわさって一体なんですか？」

『カゲカゲ？』

『ピチュピチュ？』

「ああ、彼がポケモンマスターに一番近い男という話を聞いたことがあってね。そしてサトシ君が行った様々なバトルの成果を聞いたよ。…シンオウ地方のデンジという人を知っているかな？」

「知ってますよ。あのジムでバトルもしましたし…」

『ピツカチュ』

「ちよつと待つて…ポケモンマスターに一番近い男つて何!？」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!?!』

「ああサトシならありえそうね…」

『キバキバ』

「うーん…納得出来るテイストだよ!」

「えええ…みんな頷いてるし…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『もう諦めろヒナ』

「諦めきれない…と言いたいけどお兄ちゃんだから有り得るつて納得しちゃう…」

『カゲ…』

『ピツチュ…』

「そういう噂が流れているんだ…それにしても…そうか、ジムの資格を取った後、デンジさんから話を聞いたんだ。ジムをより面白くしてくれたということやポケモンたちとの交流やバトルの熱さを教えてくれたということだね」

「お兄ちゃん何やってるの!？」

『カゲカゲ!?!』

『ピチュピチュ!?!』

「何っていつも通りの行動だぜ」

『ピツカ』

『そのいつも通りの行動が俺たちにとっては常識外れだと何故分からないんだ…』

「僕も同じように挑戦者もジムリーダーも楽しめるジム戦をしていきたいと思っているんだ…サトシ君。何かアイディアはないだろうか——」

「ちよつと待つてください！サトシに聞いたらいろいろと悪化しますよ！」

「おいデントお前どういう意味だよそれ」

「い、いやそれは…ははは」

「笑ってごまかすな」

「…?..」

妹達の言う言葉に俺とピカチュウは首を傾けて疑問に思う。そんなにやりすぎた覚えはないんだけど何故常識はずれだと言われなきやいけないんだと考えたぐらいだ。でもチェレンさんが言った言葉が本当なら、デンジさんは今もあのジムの機能を活用して楽しんでいるみたいだ。熱いバトルができて本当に良かったと思う。

そしてチェレンさんもデンジさんのようなジムをするにはどうしたらいいのか聞いてきたのだけれど、デントがそれはやめた方が良くと説得したため、俺がちよつとだけ不機嫌な表情でどうしてなのか質問する。だがデントは何を言えばいいのかわからないのか笑って誤魔化したため、またテンションが下がる。そんな俺たちにチェレンさんはただ首を傾けてどういう意味なのか分かっていない様子だった。

.....

まあそんなわけで、俺たちは学校の設備を見ることになった。ポケモンたちと触れ合える場所や調べられる図書館、そしてポケモンのことを学んでいく教室などがある。その充実した資料にデントは感嘆の声を上げてここで勉強してみたかったと言い、妹達は「ポケモンのすべて」と書かれている本をヒトカゲ達と興味津々な様子で一緒に見ている。アイリスはそういう勉強よりも外で活動する方が良いらしい。俺もどつちかというと外で活動する方が楽しいため勉強よりもそつちの方が良いと思ってしまった。でも知識を得るという意味ではチェレンさんの学校はとも良いだろう。

その案内している間にもチェレンさんからいろいろとジムについて質問され、俺は答えていった。ジムについてというのはデンジさんとジムの改造をしていた時のこと

を聞かれ、どんなことをしたのか、その改造の後に起きた影響やどうしてそれらを作ろうと思ったのかについて聞かれた。かなり熱心に聞かれたからもしかしたらこのジムにも何か改造をするのかもしれないと思ってしまった。でもそれはチェレンさんの意志だから俺のせいではないはず…。

そして始まったのはチェレンさんとのエキシビジョンマッチ。チェレンさんの生徒たちである子供たちもバトルを見るためにやってきて、それぞれが頑張れと応援している。その様子に俺とピカチュウはイツシユリーグでの戦いを思い出していた。

チェレンさんが出したのはハーデリア。かなり懐いていて強そうだ。

「さあサトシ君…始めようか！」

『バウウ』

「はい、よろしくお願いします！いくぞミジュマル、君に決めた！」

『ミツジュウ!!』

バトルの結果は言うまでもないが…チェレンさんは立派なジムリーダーになるためにこれから頑張ろうと決意したようだ。子供たちもチェレンさんのジムバツチを必ずゲットすると意気込んでいるから、とてもいいジムになりそうだと思えた。

第四百四十四話　妹達は激突した

こんにちは妹のヒナです。突然ですが私たちモロバレルにいきなり襲われて驚いています。：これって原作であつたようななかつたような：いや絶対にあつたはずだよね：なんだかデジヤブがあるもの：。だからたぶん原作の話だ。でも私はそのことをほとんど思い出せない：。

「ピカチュウ、10まんボルト！」

『ピカピッカ!!』

『モロオオオオオオオ!!』

!!!!???

モロバレルたちが攻撃してきたため兄が仕方なく10まんボルトで何とか攻撃を止

めてもらったのだけれど、いきなりモロバレルたちは気絶してしまいポケモンセンターへ連れて行くことになった。

そのポケモンセンターで見た様子はかなり酷かった。山のポケモンたちがみんな町にやってきて人を襲うということ、それが突然起きてしまい仕方なく対処したのだけれどいきなり気絶してここに連れてこられたということ…。

そして、山に誰かが侵入したような様子があったと言つて、廃墟となっている天文台が怪しいということになり私たちはそこへ行くことになった。

でも山に入り歩いている途中だけれど、山の様子は変わつてはいない。ポケモンたちは暴れる様子もなく静かにのんびりと暮らしていて楽しそうだ。まさに平和で静かな光景が私たちに広がっていた。

「山の様子を見たら全然大丈夫そうだけどね…」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

「うんそうだね…ずいぶんとのかだ…」

「でも油断はできないわ。何が起きるのかまだわからないんだから」

『キバキバ!』

『そうだな。実際にポケモンたちは暴れ、人々が襲われているのだから何かあるはずだ』
「まあそうだよな。でもここら辺はともかく、天文台へ行けばはつきりとわかると思うんだけどなあ…」

『ピカピカ…』

「おや、君たちも山の頂上に行くのかい？」

「はい。これから天文台に行きます！」

「それは…やめた方が良くもしいないな」

「え…？」

その途中で会った山登りをしている人に話しかけられたため、私たちは笑顔で天文台へ行くと言う。だがその人は微妙そうな表情を浮かべて私たちにやめた方が良くも言ってきた。私たちは何故天文台へ行かない方が良くもいのかわからず首を傾げる。兄なんでもしかしてポケモンたちを暴走させた元凶かもしれないと警戒しているようだ。…でもこの人もどこかで見たような気がする。名前じゃなくて何か…此の先でも何か起きたような気が…。

そんな時だった——。

『ピイカアアア!!!』

『キバキバアア!!!』

『カゲエ…カゲカゲエエ!!』

『ピチュウウウウ!!!』

『クツ……………』

「な、ピカチュウ!？」

「どうしたのキバゴ? 苦しいの!？」

「ヒトカゲにピチューー!？」

「ルカリオ…どうしたんだい?」

突然、ポケモンたちがおかしくなっていくたのだ。ピカチュウたちの様子が一変して、私たちに強暴的な目で襲いかかってこようとしてきたのだ。

ピカチュウたちの目が真っ赤に染まり、私たちを睨みつける。ルカリオが苦しそうな様子でそれを耐えようとしているけれど目が真っ赤に染まっていつてるのがわかる。とても苦しうだけけれど、近づこうとしたらルカリオに離れろと怒鳴られてしまった。ルカリオがピカチュウたちのように暴走するかもしれないとその《何か》を耐えよう

と必死に……苦しそうにもがいていた。

そして山のポケモンたちも私たちに向かって襲ってきた。何が起きたのか……何で私たちが襲うのかわからず私はヒトカゲとピチューを抱きしめようと動いた。いつも、ずっと一緒にいた相棒のようなヒトカゲに、ちよつとだけお調子者だけれど私たちのムードメーカーでもあるピチューの豹変が信じられなかったからだ。

「ヒトカゲ……ピチュー……？」

『カゲカゲエエエ!!!』

『ピチューピッチュウウウウ!!!』

「危ないヒナ!!」

「うわツ?!」

『ピツガアアアア!!!』

『カゲエエエ!!!』

『ピッチュウウウ!!!』

『キバキバアアア!!!』

「これはいかん!!」

ピカチュウのエレキボール、ヒトカゲのひのこ、ピチューの10まんボルトが私に襲いかかろうとしてきたのだけれど、兄がそれを庇い私を抱きしめてそのまま避ける。そして先程山のぼりをしていた人が何か機械を取り出してポケモンたちの目の前でそれを発動する。

電気のような何かのシールドがポケモンたちや私たちの周りに展開され、ポケモンたちがおとなしくなった。山にいたポケモンたちは何があつたのか首を傾けながら私たちから離れていき、ピカチュウたちも先ほど暴走したのを覚えていないのか首を傾けている。

私はただ、正気に戻ったヒトカゲとピチューを抱きしめて良かったと心の底から思った。ヒトカゲ達は何が起きたのか分かっておらず、ただ私に抱きしめられるだけだった。

「良かった…本当に良かった…!」

『カゲ…?』

『ピチュウ…?』

「ピカチュウ、調子は大丈夫か？」

『ピイカ?』

「キバゴも無事みたいね…本当に良かったわ！」

『キバキバ?』

「おうルカリオ、そっちは大丈夫か？」

『ああ、だが疲れた…。なんだったんだ今のは…』

「何かポケモンたちに対する悪いものが流れていたような気がするね…」

「それは私が説明しよう！久しぶりだねサトシ君!!」

「え…誰？」

『ピイカ?』

———山登りをしていた人は実はハンサムさんだった。そういえばイツシユ地方のプラズマ団と直接対決する時にいたような気がすると思ひ出した。ハンサムさんはプラズマ団が天文台で活動していることポケモンたちを意のままに操る機械を發明

していることを教えてくれた。プラズマ団といえば、前に真っ白い服を着たプラズマ団が来たという記憶がある。その時は原作通りのトラブルを引き起こしたとは思ってなかったんだけど…今回はそうなのかな…。最近本当に原作の知識が思い出せなくなってきたから焦る。何かノートに書いておけばよかったのかなと今になって後悔した。

そして天文台に行くことになった時、私たちはハンサムさんと協力してプラズマ団を捕まえることになった。兄の様々な戦歴などを見て大丈夫だと判断したらしいけれど…本当に大丈夫なのかと心配しつつ、私たちは歩き出した。

「あ、そうだ…いいヒトカゲにピチュー…これからももしかしたらまた同じようなことが起きるかもしれないから気をつけてね」

『カゲ！』

『ピッチュー！』

・・・・・・・・・・・・・・・・

その後、プラズマ団と出会い、私たちに攻撃をしてきた。アクロマといういかにもマッドサイエンティストのような人も現れてこれは実験だと言い、操られているデンチュラ達で私たちを攻撃しようとして来たり、またピカチュウの力の強さを見たアクロマがピカチュウを操ろうと動いたりしてきた。だが兄がそれにブチギレしてその機械に向かつて突撃し、伝説を気絶させてしまういつものとび蹴りで機械のアンテナとなっていた部分をへし折ることに成功した。そんな兄の想定外の行動にプラズマ団とアクロマが驚愕していた。

だがピカチュウの洗脳を阻止することには成功したが、まだデンチュラ達の様子は変わっていない。私はアクロマの使っているパソコンのような機械が元凶だと気づいた。

「な…そんな予想外が…!!」

「これでもうポケモンたちは操れないだらろ!!」

『ピカ…ピカピッカア!!』

「待ってお兄ちゃん!あの機械怪しいよ!!」

『あれかッ!!!』

「チッ!おいいったん撤収だ!!」

「はっ!!」

「また会いましょう少年たち…その時はまたピカチュウに会えることを願っていますよ…」

「待てプラズマ団!!!…クツ退避するぞ!!!」

ルカリオのはどうだんで機械を破壊し、デンチュラ達の様子が元に戻った。これで一安心だと思っただけだが、プラズマ団が逃げ出したため追おうとしたら何かが作動しこの場所を破壊するシステムが起動したと表示されたため私たちは我に返ったデンチュラ達を連れて外へ逃げることになった。

そして外に出て避難した空には、逃げていくプラズマ団の飛行機が見えていた。兄とピカチュウはそれを睨み付けてなにかを考えている様子だった。

「プラズマ団…か…」

『ピイカ…』

「また来るのかしら…」

『キバキバ…』

「プラズマ団が活動しているのなら、また会いそうな気がするね…」

『その時はできれば穏便に解決していききたいものだ…』

「ど、どうなんだろう…すぐに解決出来たらいいな…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

旅でのトラブルはまだまだ長く続きそうだ…。

第百四十五話くマサトとキモリと……く

「ねえキモリ…僕の言うことを聞いてよ…」

『キヤアモ』

「ほら、あの木に向かってはたくだってば！」

『……キヤモ』

「だからただ立ってるだけじゃないっていつてるのに…」

——マサト達の今いる場所は森の入り口近く。

マサトは現在キモリと仲良くなるうと必死に交流を続けていた。オダマキ博士からポケモンを貰った時は本当に喜んだものだ。キモリはあのサトシのジユカインの真似をして枝を口に銜えてクールを気取っているからますます気に入らなくなり、選んだのだから。だがキモリはマサトと仲良くなるうとはしない。…いや、仲良くなるうとしないという

より、マサトのある指示を聞かないだけなのだ。

問題を起こしたりはしないのだが、キモリと技の練習をするためにマサトが技を指示するのを無視しているだけなのだ。その行動こそマサトに頭を抱える原因となっていた。普段はマサトの後ろを歩き、本当にやらないといけないことはちゃんとやる良い子なのだが、いざ技の練習となると何もせずただマサトにそっぽを向き立っているだけ。どうしてなのか原因も分からずマサトは悩んでいた。

「どうしてキモリは僕の言うことを聞かないんだろう……キミは僕と仲良くなりたくないの?」

『キヤモキヤモ』

「……首を横に振ってるのは否定の仕草だよ」

『キヤモ』

「……じゃあ何で仲良くなりたいたいのに技の練習はしたくないの?」
『……………』

キモリはマサトの言葉に何も言わず、後ろを向いた。その態度は言いたくないということだと分かり、マサトは苦笑した。仲良くなりたいたいというのはキモリの意思表示から伝わったからそれについては問題ない。ただキモリは技をしないだけが問題だと分

かったから少しだけマサトは安心したようだった。

（サトシも言つてたからね…ポケモンが何かやりたくないことは強制的にやつちや駄目だつて…）

マサトはキモリを見ながらもサトシと旅をしてきたときに言われた言葉を思い出していた。ポケモンがやりたくないことは何か原因があるもので、それを人が強制すると余計に悪化するからやめた方が良くということ。そして見たことがあった。あるトレーナーが出したポケモンが嫌そうな表情でトレーナーの指示を聞いてバトルをしている光景を。そしてやりたくないと抵抗したポケモンにトレーナーが怒った様子でポケモンを叩いて強制的にやらせていた場面を……。だが、その時のトレーナーはキレたサトシにボコられ、ポケモンに無理強いをするなど説教されていたから何とか解決した。

今目の前にいるキモリも似たような感じなのだろう。技を出したくないというその様子は何か悩んでいるのかとマサトは首を傾けつつも、後ろを向いて銜えた枝をひよこひよこ上下に動かしているキモリに問いかける。

「君は…サトシのジユカインのようになりたいと言つていたよね？ だけどバトルはやり

たくないし技も出したくない……それはジユカインのようになりたいということじゃない気がするんだ」

『キヤモ……』

「でも君は技を出したくない……どうしてなのか教えてくれないかな？ 僕、キモリの力になりたいんだ！」

『……………』

キモリはマサトの方を向き、何か喋ろうかどうかと悩んでいた……だが意を決して口を開き話そうとした、瞬間だった――。

『バウウウウウ!!!』

「うわッ?! ポチエナの集団だ!!」

『キヤモ!!』

森の中からポチエナ達がマサト達に向かって襲いかかってきたのだ。おそらくポチエナたちはキモリを手持ちに持つトレーナーだと勘違いをして襲ってきたのだろう。だがマサトはまだトレーナーにもなっていないただの子供だ。キモリと仲良くなろうとしているただの子供なのだ。

それにキモリは技を使おうとしないため、ポチエナ達に攻撃することは不可能だとマサトは一瞬で考え、冷や汗をかいた。

「逃げようキモリ！」

『キヤモ！』

『ガウウ！！』

『バウバウウ！！！！』

「うわ…後ろにもいる!？」

『キヤ、キヤモ…』

ポチエナ達の中の何匹かが逃げようとしたマサト達の前に出てきて…周りを取り囲んだ。それを見たマサトはキモリを抱きしめてしゃがみ、キモリを守ろうとする。

『キヤモ!？』

「大丈夫だよキモリ！君は絶対に僕が守るからね!!」

『バウウウウウ!!』

『キヤモオオオ!!!』

キモリを庇っているためポチエナ達はマサトを標的にして襲いかかってきた。鋭い

牙がマサトの身体に突き刺さろうとしてくる。その光景を見たキモリは目を見開いてやめたと叫ぶ。自らを選んだトレーナーと仲良くしたいという気持ちと、技を放ちたくないという気持ちを考えて、マサトを選んだ瞬間だった――。

『キヤモキヤモ!!』

『バウウ!!?』

『ガウウウ!!??』

「これは…り!り!り!のいぶき?!」

マサトが見た技はキモリが普通覚えるはずのない技だった。強烈な技が放たれたせいでポチエナ達は怯え、逃げていく。それを見たキモリは鼻で笑い、怯えるならかかってくるんじゃないわよと逃げていく。ポチエナの後ろ姿を見ながら考えていたりする。

…そして恐る恐るマサトの方を向いてみた。キモリはある事実恐れていたからだ。だがマサトはしばらくの間無言で立っていたが、すぐに優しい笑みを浮かべてキモリの頭を撫でた。

「キモリ、ありがとう…僕のために技を使ってくれたんだよね。はたくを使わず…りゆうのいぶきで倒してくれた。本当にありがとう!」

『……………キヤアモ』

キモリは照れながらもマサトの顔をしっかりと見た。いつものようにそっぽを向かず、真正面からじつと顔を見て少しだけ笑みを浮かべていたのだ。それに気づいたマサトはその事実を口に出さず、ただ笑ってありがとうと言ってキモリを抱きしめた。

そしてキモリは技を放つのを躊躇することはなくなった。キモリの技は通常とは違っていて、はたくを覚えておらずりゅうのいぶきを覚えていたのだった。

マサトはポケモン図鑑などを持っておらず、通常のキモリが放つ技しか覚えていないと考えていたからこそそのすれ違いだったからだ。

そしてその後キモリは小さく鳴き声をあげてマサトに伝えていた。∴技が違っていたから、普通のキモリじゃないからと捨てられるのではと思っていたらしいということ、サトシのジユカインのような技を覚えていきたいということ、マサトにその言葉が通じないと分かっているにもかかわらず口に出して伝えていたのだ。だがマサトにその言葉が通じずとも、キモリの悩みを吹っ飛ばしジユカインのようになりたいという願いを叶えようと言うだろうとキモリはそう考えていた。

マサトはりゅうのいぶきを見てもただ笑っているのだから、もう大丈夫だとキモリは

安心した。マサトの方もキモリの技は凄いと思い、目の前にいるキモリとパートナーになることの幸せを感じていた。

——マサトとキモリの仲は良くなり、後の相棒としての一步となった瞬間だった。

第一百四十六話～兄は活動を開始した～

「じゃあ俺ちよつと行つてくるな！」

『ピツカ！』

「へ？どこに…？」

『カゲカゲ？』

『ピチュピチュ？』

「私たちも一緒じゃ駄目なの？」

『キバキ？』

「ああちよつとカントーに行つてすぐ戻つてくるから先に白の遺跡の方に向かつてくれ」

『ピカチュ』

「ちよつちよつと待ってくれ！サトシ君今カントーに戻ると言わなかったかい!？」

「言ったけど？」

「いや、イツシユからカントーまでどのくらいの距離があると思ってるのお兄ちゃん!？」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!…ピチュ?』

「ピチュ…あのね。ものすごく遠いんだよここからだと…」

『カゲカゲ』

『ピチュ!?!』

『…デントにヒナたち。サトシがアレなのはいつものことだろう…』

「ああうんそうだね……」

「ルカリオの言うことに否定できない…」

『カゲエ…』

『ピツチュウ…』

「お前から…そろそろキレルぞ」

『ピカピカ』

「まあサトシなら大丈夫よね。何かあったら私たちに連絡してね！この先のポケモンセ

ンターで待つてるからー！」

『キバキバ！』

「…おう。じゃあまたな！」

『ピツカ！』

———こんにちは、兄のサトシです。現在カントー地方に戻ろうと思いい妹達と
いったん別れて歩いています。俺とピカチュウはカントー地方のある場所に向かうか
らです。

今いる場所は山の頂上。現在の時刻はおそらく深夜。山の頂上からだとも
綺麗だ。今日は満月らしく夜空がとても明るい。ピカチュウも星空を眺めてとても
綺麗だとはしゃいでいた。ポケモンたちがほとんど寝静まっている頃に俺たちはその
頂上にある大きな木の上に上り、大きな声で叫んだ。

「おーいレックウザ!!いるなら出てこいよ!!」

『ピカピカアア!!!』

『ギャオオオオオオオオオオオツツ
!!!!!!!』

レックウザの名を大きな声で呼び、しばらく待っていると星空の一部が輝き、そこからレックウザが舞い降りてきた。大きな叫び声を上げながらこちらに降りてくるレックウザに俺とピカチュウは笑みを浮かべる。レックウザが様々な地方の空で飛んでいるため、無事に呼べてよかったと思えたからだ。もしも大きな声を出してもいなかった場合はレックウザではなくミュウを呼ぼうと思っていた。ミュウは神出鬼没で来ない時などないぐらい俺たちの近くにいることが多い。だからミュウの名を呼んでレポートで送ってもらおうと思っていたけれど、今回はレックウザが近くに飛んでいたから助かった。

俺とピカチュウは目の前にいるレックウザに向かって口を開いて言う。

「わざわざ悪いなレックウザ。ちよつとだけカント―地方に飛んでもらっても構わないか？」

『ピイカ?』

『ギユアアアアアアッ!!!』

大きな声で叫んでいるレックウザは俺の頼みに頷いてくれたのだろう。レックウザが頭を下げて俺たちを乗せやすくしてくれる。俺とピカチュウはお互いに顔を見合わ

んと別れる前に密かに教えてもらったためにこちらにわざわざやって来た。…まあ情報は何もなかったとしてもプラズマ団をぶっ潰すことを優先すればいいかと決意した。プラズマ団が俺たちの旅を邪魔して、平穏を消そうとするのなら叩き潰すまでだ。

…それにしても、以前のロケット団なら絶対に国際警察などと関わり合いにならないかっただろうが…ずいぶんと変わったものだ俺たちは考えていた。少しづつだが、ロケット団の方針も変わってきていて、世間に対して良くなってきているなら本当に良かった。何かあつたらすぐに動くつもりだけどな。

———まあ、それは良いとして。

「……………」

「あーっと…君、どうしてここにいるんだ？」

『ピイカ？』

「……………」

目の前にいる赤毛の子供がいることに俺とピカチュウは困惑し、どう対応していけばいいのか困っていた。子供の方はニドランのぬいぐるみをギュツと抱きしめて俺たち

を睨んでいた。妹と同じぐらいの年齢だというのに鋭い眼光だと感心する。見た目は真つ赤な髪を肩ぐらいまで伸ばし、女の子のような顔をしているのだけれど、その目の鋭さのおかげで男の子だとすぐにわかった。

まだ早朝の時間だからサカキが来るのはもうちよつとしてからだろう。だがこの子供は俺たちが待つていてくれと言われた場所にいた。どうしてなのかはわからないし、この子供が理由を言わないため、俺とピカチュウは苦笑しながら話しかけた。このままこの子供と何も話さないよりはマシだと思ったからだ。

「あー……じゃあ君の名前は？俺はサトシって言うんだ！それでこっちが相棒のピカチュウー！」

『ピッカ！』

「……………シルバー」

「そっか、シルバーか！よろしくな！」

『ピカピカ！』

シルバーという子供はピカチュウを興味津々な様子で睨みつけ：いや、見つめていた。眼光が鋭いから睨みつけているように見えたけれど、ただ妹と同じような感じでポケモンに興味があつて見つめていただけだと理解する。ピカチュウに目配せしてシルバーの近くに行つてもらい、ピカチュウはそのまま笑顔で挨拶をした。でもシルバーはニドランのぬいぐるみをギュッと抱きしめてどうすればいいのか俺に視線で問いかけてきた。そのため俺は笑顔でピカチュウ抱き上げてからシルバーに向かつて近づけていく。シルバーはそんな俺たちに困惑しているようだった。触つてみたいけれど大丈夫なのか分からないという：妹が以前していたような表情を浮かべていた。

「ほら、大丈夫だぜ。ピカチュウは攻撃したりしないよ」

『ピカツチュ！』

「…撫でてもいい？」

「ああ大丈夫だ！」

『ピカピカ！』

「…っ！」

シルバーはピカチュウの頭をそつと撫でて笑顔になった。そしてもつと撫でようと

ニドランのぬいぐるみを近くにあって椅子に置いて両手でピカチュウを撫で始める。ピカチュウはその優しい撫で方に笑顔で鳴き、もつとやってくれと言う。そのピカチュウの声伝わったのかシルバーは先ほどの眼光の鋭さが消え、普通の小さな男の子のようにピカチュウを撫でたり抱きしめたりするようになった。でもピカチュウはそれを嫌だと思わず、妹と接している時のようにシルバーの頭を撫でてありがとうと礼を言う。その微笑ましい様子に少しだけ気分が癒された。

シルバーの方は満足したのか抱き上げたピカチュウを俺に渡してくる。俺はピカチュウを肩に乗せてから口を開いた。

「ピカチュウを触った感想は？」

『ピカ？』

「嬉しい…です!!」

「そっか。それは良かった！」

『ピカピカ!』

「サトシ」

「サカキ…久しぶりだな」

『ピカツチュ…』

シルバーと盛り上がっていた時にやって来たのはサカキだ。サカキはペルシアンを連れて部屋に入り、そしてシルバーを見た。

シルバーは慌てたようにサカキにお辞儀をしてから、椅子に置いていたニドランのぬいぐるみをつかみ、俺たちに笑顔で手を振って部屋の外に出て行く。俺たちも笑みを浮かべながら部屋の外に出て行くシルバーに手を振って、そしてふと疑問に思ったことを首を傾けてサカキに問いかけた。

「あの子…シルバーはどうしてここにいるんだ？」

『ピカピカツチュ？』

「あれは私の息子だ。どうやら世話になったようだね」

「は？息子!!？」

『ピツカツチュ!!？』

サカキに息子がいたとは思わなかった…サカキってなんだか独身のような感じがし

たというか…いやこれは失礼か。ああでもあの眼光の鋭さは確かに父親似だと俺とピカチュウは納得できた。まあ今のロケット団ならシルバーも楽しく暮らせるだろうし、安心かなと思う。それにサカキがシルバーを見た時の表情が親の愛情があるように見えたから大丈夫だろう。それにもしも妹と会えたら良い友達になれそうだ。

「それでサトシ…：…今回きた目的は？」

「ああそれなんだけどな——」

俺たちは話し合った。プラズマ団のこと、新しい情報と…：そしてプラズマ団の目的について様々なことを話しあい対処する方法を考え、どうプラズマ団を潰していくのかを考え始めた——。

第四百四十七話　妹はNと再会する

こんにちは妹のヒナです。兄がカントー地方に戻ると言ったため、私たちはこの先にあるポケモンセンターへ向かって歩いていきます。その場所で待ち合わせをしているため、もしかしたらもう来ているのではないかと急いで向かっているのです。途中でサンギ牧場のデンリユウにかみなりパンチを教えたため、余計な時間が過ぎてしまい、兄たちがポケモンセンターで待っていると不安になった。まあもしかしたら来ない可能性もあるけどとにかく急がないとね…。

「このすぐ近くにポケモンセンターがあるよ！」

「もうすぐね！…サトシもう来ているかしら…！」

『キバキバ…』

『行ってみればわかることだ。それにもしかしたら俺たちの方が早く着いたかもしれない…』

「お兄ちゃんカントーまで行っちゃったからね…まあ遅くなることもあり得るよね…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

私たちは苦笑し、兄が来ているかどうか話しながら歩いていく。豊かな木々がとても綺麗な森で…兄が来たら外でのんびりしたいと思っていた…時だった。

「——うっ！」

『……ウオオウ』

「ちよっえ、Nさん!?!」

草木から抜け出すように…倒れ込むようにして現れたのは怪我をしたNさんとウオーグルだった。Nさんが苦しそうな表情をしながらウオーグルを早く治療してほしいと言ったため、私たちは急いでNさんとウオーグルを連れてポケモンセンターへ行

く。ポケモンセンターの中に入ると、怪我をしていることに気づいたジョーイさんがすぐにウォーグルの治療を開始してくれて私たちはその様子を眺める。私とヒトカゲ、ピチューはポケモンセンターの周りを見て、兄がいないことに気づいた。…まだ来ていないようだ。

…その後、ジョーイさんがウォーグルの怪我はまだ飛べる状態じゃないけれどすぐに良くなると言ってくれた。そしてその後Nさんの怪我の治療をしてからウォーグルを安全な場所まで運ぶ。

大丈夫だということに私たちはホッとして、Nさんは寝た状態のウォーグルを撫でて良かったと安心していた。

ジョーイさんとタブンネは他のポケモンたちの様子を見るために私たちに挨拶をしてから部屋の外に出て行った。部屋に残った私たちとNさんはそのままウォーグルの様子を見て、ウォーグルが寝るのを待つ。寝たら部屋を出て用意された宿舎である自分たちの部屋へ行くためだ。ウォーグルを撫でていたNさんが周りを見てから私たちに聞いてきた。

「サトシ君はどうしたんだい？ いないみたいだけれど…」

「あ、えっとサトシはちよつと用事で離れていて…」

「このポケモンセンターで待ち合わせをしているんです」

『キバキバ』

「た、たぶんすぐに戻ってくるから気にしないでくださいね…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

『……………』

私たちは兄がいないというNさんの言葉に何といえばいいのか迷いながら話した。兄がこちらに来ると分かったNさんはそれで納得したらしい、すぐにウオーグルに視線を移し、また優しく撫で始めたからだ。その様子に私たちは苦笑しながらため息をつく。…まさか兄がカントー地方に用事があつてそちらに行つてるだなんて言えないよね。

……………

その後、私たちはウオーグルが寝たのを確認してから静かに部屋を出て自分たちの用意されている部屋に入る。ジョーイさんに頼んで、兄が来ることを想定して4つのベッ

トが用意された大きな部屋にもらった。ルカリオがいるから4つではなく5つのベットが必要だと思うかもしれないが私たちと一緒に寝るから大丈夫。

…何故かという、ルカリオは最初マサラタウンに来た時、自分は大丈夫だと言って座りながら眠ってしまったため、それを心配した母と私でベットで寝ると言い、私が小さいため一緒に寝ることで寝ることになったことがある。そのため4つのうち1つのベットでは私とルカリオとヒトカゲとピチューで寝ることになっているのだ。大人が1人しか寝れない通常サイズのベットでも私たちなら皆で寝ることができるためそうになったのだ。…あ、あとヒトカゲの炎の尻尾対策にほのおタイプのポケモンと一緒に寝る時に使われる防火用の毛布で寝るから安心してほしい。尻尾の炎は大丈夫だし燃え移ることもないから安心だ。…まあヒトカゲも火傷しないように頑張って調節することを覚えようとしているみたいなんだけどね…。

「それにしても…サトシ大丈夫かしら…」

『キバキバ…』

「近くにプラズマ団がいる可能性があるからね…サトシなら逆に振り返りにするかもしれないけれど…心配だね」

「でも、きつと大丈夫…お兄ちゃんだから…絶対に大丈夫！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ!』

『ああ、サトシなら心配はないだろう』

「…そうだね」

「ええ…そうね。サトシは大丈夫!」

『キバキ!』

兄がまだこちらに来ていないことに不安になった私たちが心配して話し合っていた。プラズマ団と兄が会ってしまったらどうしようという不安。兄とピカチュウたちは大丈夫なのだろうかという心配があったからだ。でもいつもの兄なら絶対にプラズマ団に過剰防衛でいろいろとやらかすに違いないから大丈夫だという安心もあった。

朝になっても来なかったらカントー地方のオーキド博士に連絡してまだ帰ってないか聞いてみないと…あ、でも兄がオーキド研究所に戻るといってないから無駄かもしれない…まあその時に考えよう…。

———そう思っていた時に、停電が起きた。

「何!?!」

『キバキ!?!』

『停電か…?』

「いやおかしい。外は明りがついている…このポケモンセンターだけみたいだね」

「でも何でここだけ…」

『カゲカゲ?』

『ピチュピチュ?』

「すまない…ちよつといいかい?」

『ウオオウ…』

「Nさん?」

「ウオーグル…どうしてここに?」

Nさんの話を聞くと、このポケモンセンターにウオーグルを狙ってプラズマ団が仕掛けてきたということ、停電も奴らの仕業だということが分かった。そしてNさんは自分が囿になるからその間にウオーグルを安全な場所まで逃がしてほしいということ、その協力をお願いしたいということと言ってきた。でもそれはポケモンを持つていないであろうNさんが危ないということになるから私たちは反対だ。

「そんなお願い…駄目です! Nさんもしもプラズマ団に捕まっちゃったら…!」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！！』

『ウオオオオオ！！』

「君たち…それにトモダチ…心配してくれているのか。大丈夫だよ、僕は絶対に捕まらない」

『それは本当に保証できることか？お前が捕まらないという絶対的な信用などないに等しいと思うが…』

「トモダチ…キミは人の言葉を喋れるのか…！」

「いや、喋っているというよりテレパシーなんだけどね…でもルカリオの言うとおり、本当に大丈夫なんですか？できれば他にも誰かと一緒にいた方が安全なんじゃない」

「……いや、大丈夫だよ。僕は絶対に捕まらない。とにかく、この子を安全な場所まで逃がしてやってくれ」

「………わかりました。ですがNさん…絶対に怪我だけはしないでくださいね！」

「ウオーグルを安全な場所まで逃がしたら、すぐにNさんのもとまで駆けつけますから！」

『キバキ！』

「ああ…頼んだよ」

そうして、Nさんは自らを囿になってポケモンセンターの外に出て行き、私たちはルカリオの波動を頼りにウォーグルを安全な場所まで連れて行くことになった。安全な場所というのは。この近くにある保護区域の森に行くということだ。そこまで行けば安心だから大丈夫なんだけど、ウォーグルは何度も後ろを振り返ってとても心配そうな表情を浮かべている。ヒトカゲ達もその様子を見て、Nさんのことを心配していた。私もそうだ…あの時に言ったNさんの言葉は信用できない…。怪我をしてしまうのではないか、捕まってしまうのではないかという意味で信用できないのだ。不安が心の中をぐるぐると回りながらも、私たちは保護区までの道を歩いて行った。

「頑張つて…もう少しよ…」

『キバキ!』

「ここから先に進めば保護区域の森がある…だからプラスマ団が来ることもないよ!」

『プラスマ団はこの近くにいないみたいだね…』

「じゃあもう大丈夫なんだよね…安心して保護区域に行きなさい。ウォーグル…」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

『ウオオオオオオオツツ!!!!』

「なツ!? ちよつとウオーグル!?」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ?!』

ウオーグルが先程来た道に戻ろうとしてきたため私たちはウオーグルの行く道をふさぎ、止めようとする。でもウオーグルは先ほど来た道を見て悲しそうに鳴いていた。まるで、その先にいるNさんのことを心配しているような表情で…。

「…ねえ、サトシなら。サトシだったらこの時どうする?」

『キバキ?』

「サトシだったら…そうだね。まず先に元凶であるプラズマ団を倒しに行きそうかな…」

「お兄ちゃんだったらそれぐらいやりそうだね…」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

「でしよう？ねえ私たちは…私たちは何もやらなくていいの？あのままNさんを危険な目にあわせて…それでウォーグルは安心できるの？」

「それは……」

『アイリスの意見に賛成だな。ウォーグルもこのまま保護区域にはいかないだろう。まず先にプラズマ団を倒す方が安全だ』

「でも…本当にうまくいくのかな？」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

「大丈夫よ。私たちなら絶対に倒せるわ！」

『キバキバ！』

「危険だと分かればNさん連れて逃げればいい…このまま彼を囿にする方が危ないからね」

「…うん。そうだね…戻ろう！」

『カゲエ！』

『ピッチュウ！』

『ウオオオオオオオオオオ
!!!!!!』

『なら案内しよう……こっちだ！』

私は心配していた。アイリスの言うプラズマ団を先に倒すというのは兄がいるからできることなのではないかと思っただけだ。アイリスもかなり兄に似てきてはいるけれど、それでもまだ兄のような圧倒的な強さはない。このまま行って大丈夫なのかだけ心配していた。でもこのままここにいるのも仕方ないという気持ちも強い。だから私たちはNさんのもとへ：プラズマ団のもとへと戻ることにした。元凶を倒し、Nさんを救出することが優先だからだ。ルカリオの波動で案内されながら、私たちは走り出した。

.....

——着いた先に待っていたのは、ちよつとした惨状だった。

Nさんが傷つき、ポケモンを出しているプラズマ団たちが対峙している状況。ウォーグルが攻撃されそうなNさんを庇って前に出たため、私たちはそれよりも前に出て怪我をしているNさんとウォーグルを庇う。そしてプラズマ団とバトルをすることになった。Nさんは以前ポケモンバトルが嫌いだと言っていたけれど、この状況だとバトルを

しなければ危ないため仕方ないと思いつながら私にはヒトカゲとピチューを守りながら、ウォーグルたちの壁になる。バトルをしているのは主にデントとアイリスだからだ。ルカリオも危険だと判断したらすぐに敵にはどうだんで攻撃しているため問題はない。デントのヤナップとアイリスのドリユウズ、そしてルカリオが優勢になり、プラズマ団に勝ったと思った…でもプラズマ団はまだ諦めていなかった。

「どう？これでもう戦えるポケモンは残っていないでしょ!？」

『ドリユウウウ!!』

「僕たちの勝ちだ！これ以上の争いは無駄だよ！」

『ヤナアアツプ!!』

『……………』

「クツ…畜生！このまま諦めてたまるかよ!!!」

「仕方ない…おい出てこい!!」

「待って…駄目!!」

『カゲカゲ!!』

『ピッチユウ!!』

「ヒナちゃん…!」

『ウオオ!?!』

『ヒナツ!!』

「ヒナちゃんたち!!」

「危ない避けて!!」

プラズマ団がいきなりミルホッグを出して先制攻撃をしてアイリスのドリユウズやデントのヤナツプを攻撃せず…私たちの後ろにいたNさんとウォーグルを攻撃しようと動いてきた。私とヒトカゲとピチユウはそれに気づき、すぐに後ろに駆け出してNさんとウォーグルを守ろうとミルホッグの前に出た。そのままミルホッグが庇った私たちごと噛みつくようとしてくる――。

「何やってんだおいゴラ」

『ピイカツチュ』

『ミルホオオオツ
!!!??』

「え…お兄ちゃん!!」

『カゲカゲ!!』

『ピチュピチュ!!』

今にも襲いかかってきそうなミルホツグがいきなり吹っ飛び、近くにあった木に叩きつけられる。何があったのか周りを見ると、兄とピカチュウが青筋を立てた顔でこちらを見ていて驚いた。…主に兄とピカチュウの近くで怯え震えているポケモンを見た瞬間に……。

「待って!!?何でレックウザがいるの!!?」

『カゲカゲ!!』

『…ピチュ?』

「何でって…カントー地方からイツシユ地方まで往復で乗せてもらったんだよ」

『ピカピカ』

「どういう状況!?なんでそうなったの!？」

『カゲエ!!』

『……ピチュウ?』

『聞くな…頼むから聞くな…!』

『ピツチュ…?』

ピチュウがずっと兄の後ろにいるレックウザを見て首を傾けてあれは何とルカリオや私たちに聞いてきた。でも今は答えられる状況じゃない。レックウザに乗せてもらったってどういうことなの…イツシユ地方の近くにレックウザがいたの?凄く聞きたいことがたくさんあるけれどそれは周りも一緒らしい。

——兄が来たらカオスになった瞬間でもあった。

レックウザと対面したことのある私やルカリオ、ヒトカゲはこの状況に遠い目をして現実逃避をし、ピチュウはどういうことなのか聞きたそうにして…そしてアイリスやデントは伝説に驚いていたけれど兄だからと納得し、他の人やポケモンたちは驚きまくっていた。そしてプラズマ団は突然現れた伝説に恐怖し青ざめていた…まあ仕方ないよね……。

「おいゴラ今ヒナたちに攻撃を指示したのは何処のどいつだ…ぶっ潰すぞ？」
『ピツカア？』

『ツツ——！』

「ちよつと待って…何でお兄ちゃんの言葉でレックウザが怯えてるの…？」

『カゲエ…』

『マサラタウンであつた出来事を思い出せヒナ…』

「……ああ」

プラズマ団の表情が青を通り越して真っ白になり、怯えているのと同時に、兄たちの後ろにいたレックウザもその言葉と声色に余計怯え震えていた。何でだろうと思つたけれど、ルカリオが言つたことでマサラタウンでのカオスを思い出し、また遠い目をしてしまった…ああもういつものことか…。

「く、くそ…逃げるぞ!!」

「ヒイイ来るな!!!」

「待てツ!!」

『ピツカア!!』

「……………あーつと…ま、まあプラスマ団が逃げて良かったね!」

『カ、カゲカゲ!』

『ピツチュ…?』

「そ、そうだね!良かったよかった!」

「そうね…とにかく後で話を聞くとして…まずはウオーグルを保護区域まで連れて行き
ましよう!」

『キバキバ!』

『あ、ああ…そうだな…それが良い』

「…………トモダチ…キミはサトシ君のことをどう思っているんだい?」

『…………ギユアアア!!』

「そうか…とても強く、恐ろしい力を持っているが、大切な恩人…か」

逃げたプラスマ団を追う兄とピカチュウが行ったため、取り残された私たちは周りに漂う微妙な雰囲気ながら苦笑しながら慌ててウオーグルを保護区域まで運ぼうと言っ

た。だがNさんが近くにいたレックウザに近づいて話しかけ、そしてレックウザはそのまま私たちを見てから空高く飛んでいき去って行った。Nさんはレックウザに会えたことと、話しかけた時に聞こえてきた声に満足したような表情を浮かべて、私たちの近くにやってきてウオーグルを連れていくことになった。

そしてウオーグルは保護区域の近くまで空を飛び、無事に逃がすことに成功した。私たちはそれを見て安心し、微笑んでポケモンセンターへ戻ることにする。

.....

「お兄ちゃん……すつごく聞きたくないけどその満足そうな笑みは何?」

『カゲカゲ?』

『ピチュピチュ?』

「ん? ああ、プラズマ団に話し合いしてジュンサーさんの所に連れて行ったからな」

『ピカピカ』

「それって絶対に平穏な話し合いですまなかつたよね!？」

『カゲカゲ……』

『ピチュ?』

『ピチュー…後でちゃんと教える。お前もマサラタウンに行くのなら覚悟した方が良いでしょう……』

『ピ、ピチュー…』

兄とピカチュウがポケモンセンターに帰ってきた。でもその表情は何かをやり遂げたような満足げな表情で私は凄く嫌な予感がした。これは絶対に話し合いだけじゃなかったと思いなながらも被害に遭ったプラズマ団に同情した。レックウザが怯えるぐらいの激怒した兄に敵意を持たれたから仕方ないけど…本当にごめんなさい…。

そしてそんな兄に私たちが苦笑している間、Nさんは兄に近づいて話しかけていた。
「サトシ君は…あのトモダチのことをどう思っているんだ？」

「あのトモダチって…ああ、レックウザのことですか？あいつは前に仲良くなった友達ですよ」

『ピッカ！』

「そうか…なるほど…サトシ君。キミは本当に何もかも僕と違うわけではないようだ」

「はい…？」

『ピイカ…？』

Nさんが何かに納得したようで兄とピカチュウが首を傾けてどういう意味なのだろうと考えている。私たちもNさんの言う意味が分からずにいたのだけれど、Nさんが気

にしないでと言い頬をかいたため詳しく聞かないことにする。そしてNさんがまた口を開いた。

「頼みがあるんだけど…サトシ君たちとしばらく一緒にいても構わないかい？」

「え!?それって一緒に旅をするってことですか？」

『ピイカ?!』

「ああ、駄目かな？」

「いやそんなことないですよ！」

『キバキバ!』

「そうですよ!むしろ旅仲間が増えて賑やかなテイストになりそうだ!」

「……そうだね!よろしくお願いしますNさん!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピツチュ!』

『一緒に旅をしたいと望むのなら歓迎する』

「そうか、ありがとう!」

——まあそんなわけで、Nさんが私たちと旅を同行することになった。この先ちよつとだけ不安があるけれど…でもまあプラズマ団の下っ端を倒したあの兄がいる

なら大丈夫かなと安心していたりもする。

第四百四十八話く妹達はカントーフエアを楽しんだく

こんにちは妹のヒナです。現在私たちはカントーフエアをやっているお祭りに来ています。その前に湾岸救助隊という人たちにあったり、ミルホッグが活躍したりというところもありましたが、私たちはあれからプラスマ団に会うことなく普通に旅していますよ。平和はやっぱり最高ですね。

「あ、あれ見て！ほらヒトカゲだよ！」

『カゲカゲ!!』

『ピツチュウ!!』

「あつちはフシギダネにゼニガメもいる！凄いな!!」

『ピツカア!』

「あ、ねえあれは何?」

『キバキ?』

『あれはポツポだ。イツシユ地方でのマメパトと同じような存在だな』

「なるほど…カントーとイツシユのトモダチ達は地方によつてはこうも変わるものなんだね…!」

「うーん何ともフレイバーな香りが漂ってくるようだ!!」

カントーフェアということでマサラタウンから来た私たちから見ると懐かしい光景が広がり、実際にこの場にいるカントーのポケモンたちは少ないみたいだけれど、いろんなお店が並んでいて、その中にはカントー地方でしか食べられないような食べ物もいっぱいある。そしてカントーのポケモンに似たぬいぐるみも売っていたりして私たちはそれに喜びテンションが上がった。

「あ、あれ見て! ヒトカゲとピチュウのキーホルダー…! おじさんこれください!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピツチュ!』

「あいよ! …へえカントーのポケモンかい? お嬢ちゃんカントーから来たの?」

「はい! 今イツシユ地方を旅しているんです!」

「Nさん…あれ見てください」

『カゲ!』

『ピチュ!』

「へえああいうポケモン始めて見た…ねえあのポケモンもカントー地方にしかないのかな?」

『キバキ?』

「うーん…コイキングというそうだよ…何ともゴージャスなテイストがしそうだね」

「へえコイキングっていうのね…つてサトシ?」

『キバキ?』

「あれ…Nさん?」

『カゲ?』

『ピッチュ?』

「……………」

「……………」

「……………」

「見てよ見てよお客さん!ここだけの話、このコイキングは金の卵を産むという特別な

「いろいろな店を見ていた時にコイキングを水槽に入れて何やら商売をしている人を発見した。アイリスたちはそのポケモンを始めて見たようで興味津々で水槽を見ていた。そしてNさんが何やら考えているような仕草をして、無表情でその水槽の中にいるコイキングを見つめる。そして兄とピカチュウはその水槽のポケモンを売ろうとしている人をじつと見ていた。」

そして兄とピカチュウ、Nさんはそのお店に近づく。Nさんは無表情で、兄とピカチュウは笑顔で近づく様子に私たちは嫌な予感がした。

「おおお客さん…ヒイ!!」

「久しぶりだなお前…まだこんなことやってたのか…」

『ピツカア…』

「トモダチが悲しんでると言うのに…売ろうとするなんて許せない…!」

「す、すいませんでしたあああああ
!!!!!!」

「うわあ…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『………ああ、いつものことだ』

『ははは…』

「さすがサトシね…！」

『キバキバ！』

兄とピカチュウを見たお店の人はすぐに青ざめた表情を浮かべていて、過去になにかやられたのかなと思った。そしてNさんはコイキングを見て自由にしてやれと怒っている。その兄たちとNさんの鬼気迫る様子に怖がったお店の人はいきなり土下座をしてからすぐに立ち上がり逃げて行った。コイキングの入っている水槽をもって…。あれ重くないのかな…。

だが逃げた事実を許さないのが兄とピカチュウとNさんだ。兄が尋常じゃない早さで走り、逃げたお店の人に追いついて水槽を奪い取り回し蹴りをする。そして蹴られた人はそのまま吹っ飛び、Nさんの寒気がする雰囲気漂う場所まで戻っていく。ジュンサーさんが到着するまでの間、コイキングをもって逃げようとしたお店の人は正座させられいろいろとトラウマになるようなことをされました。兄とピカチュウとNさんに…。

.....

「あれって…オーキド博士!？」

『ピツカア!?!』

——その後、後の処理をジュンサーさんに任せて、私たちはまたカントーフェアを楽しむことにした。ちよつとしたトラブルもあつたけれどすぐにまたいつものテンションに戻つていったからこういつた状況に慣れたものだど密かに苦笑したりもしたけどね…。

そして歩いているとオーキド博士の声が聞こえてきて私と兄は走る。そして見つけたのはオーキド博士がテレビの前で話している様子。どうやらカントー地方のマサラタウンからテレビ電話のようにイツシュ地方のカントーフェアに来た皆に向かつて話しているようだ。その内容はカントーで初心者が貰うポケモンの説明。カントー地方にいるポケモンのことを簡単に説明している。それを聞いていたNさんが兄に向かつて話しかけてきた。

「サトシ君はどのポケモンを選んだんだい？」

「俺はこのピカチュウを貰いました！」

『ピッカ!』

「え、あの三体の中から選んだんじゃないのかい!？」

「まあいろいろと事情がありまして…ははは」

『ピイカツチュ?』

「はは…確かにそうだね…」

『カゲエ?』

『ピチュウ?』

兄がピカチュウを選んだのは原作通りの展開にするためにわざと遅刻してきたからだ。まあそれについては言えることもなく、私と兄は首を傾けているピカチュウたちに誤魔化して苦笑した。

そしてヒトカゲが実際にステージ登場し、観客たちに声援を貰ってひのこを出したり踊ったりしていた。私の足元にいたヒトカゲはその様子を見て目を輝かせている。

「ほらヒトカゲ…凄いね！」

『カゲエ!』

『ピツチュ!』

『カゲカゲエエエ!!!ッ?!』

「え、ちよつ!?大丈夫ですか!」

『ピイカ!』

踊っていたヒトカゲが目を回して倒れ、ステージの方に置いてある照明などを倒して下敷きになってしまった。その様子を見た私たちが驚いてステージに近づき大丈夫か聞く。だが下敷きになったヒトカゲは燃え盛る尻尾の炎を見せただけで立ち上がろうとせず、すぐにポケモンセンタ―に連れて行くことになったようだ。私たちも心配になりそちらへ行くことになった。

.....

—————ステージでいろいろと披露していたヒトカゲはあまり重症ではなく、ちよつとした怪我ですんだようだ。どうやら怪我をしたヒトカゲは私のヒトカゲと違ってやんちゃやお調子者のようだ…。まあすぐに治るみたいだから良かったかな。

「でも…カントーフェアかあ…」

『ピイカ…』

「どうしたのお兄ちゃん?」

『カゲエ?』

『ピチュウ?』

兄が懐かしそうな表情を浮かべて何かを思い出しているようだ。私たちはその様子に疑問に思いつつも声をかける。すると兄はピカチュウの頭を撫でながらも話してくれた。

「いや、ヒナのヒトカゲもそうだけど…ヒトカゲを見てるとちよつと懐かしくなつてな」
『ピイカ…』

「ああ、もしかしてリザードンのこと思い出してたの?」

『カゲエ?』

『ピツチュ?』

「そっか…ヒトカゲもピチュウも見たことないよね…リザードンはお兄ちゃんのポケモンなんだ」

『カゲエ!』

『ピツチュウ!』

「リザードンって…確かヒトカゲの最終進化形だよな?」

「え、どういうこと? サトシの最初のポケモンってピカチュウでしょ?」

『キバキ?』

「ああ、でもヒトカゲはカントー地方を旅している途中で出会ったんだ——」

そこから、兄はリザードンと出会った話。ヒトカゲの頃は素直だったけれどリザードンになった時からやんちゃし始めたこと、そして喧嘩をよくするようになったけれどそのうちお互いを認める様になり、今は強さを求めてリザフィックバレーで修行していることを話してくれた。私はその間も随分前にマサラタウンでリザードンと出会った時を思い出す。兄とよく喧嘩をしていたけれど、私にはそんな危険なことをしないし、抱きついて嫌がらない頼れる兄のような存在だという印象が強いと思っていた。そういえばあの時以来会ってないなと思う……。私のヒトカゲがうまれて、修行し、イツシユ地方を旅しようとする間も一度もマサラタウンに来ていない……。懐かしいとさえ思ってきた。

「へえ……そんなことがあったのね……！」

『キバア!』

「いろんな仲間がいて……いろんな旅があった……うーん素晴らしいテイストだね!」

『カントー地方を旅しているサトシの話は初めて聞いたが、リザードンか……』

「君とリザードンとの絆と思いが伝わりそうだよ」

「そうかな…でも、懐かしいな…」

『ピイカ…』

本当に懐かしそうな表情をする兄に、私たちは顔を見合わせてどうしようかと悩む。懐かしいならリザードンと会ってやればいいんだけれど、兄は絶対にリザフィックバレーからリザードンをわざわざイツシユ地方まで呼び寄せるのは大変だと思ったのだろう。

…でも、Nさんが爽やかな表情で言ってくれた。

「君が望んでいるなら、きつとリザードンも望んでいるはずだよ…会いたいとね」

「…まあ、会いたいけど…でもここからオーキド研究所までの通信は不可能だろうし…リザードンにも迷惑がかかるからな」

『ピイカ…』

「いや、オーキド研究所からのポケモンを通信するのは大丈夫だと思うよ。ここは設備が整っていてカントーまでのポケモンの通信が可能だからね！」

『ああそれなら可能だ。オーキド研究所が無理なら、リザフィックバレーにリザードンを送ってもらえばいいだろうしな』

「…ねえサトシ。聞いてみたらどうかしら？リザードンが来てもいいかどうか…会ってみるだけでもいいんじゃない？」

『キバキ!』

「そうだよお兄ちゃん! 会いたいわって思うなら…仲間なんだから…会ってみたらどうか
な?」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「…ああ、そうだな!」

『…ピツカ!』

兄は決心したらしい。まずはリザードンと会えるかどうか話をしてから、その後
イツシュ地方に来てでも大丈夫かどうかリザードン自身の意志を聞くと、電話へ向
かって行った。でも…あのリザードンなら絶対に兄に会いたいというはずだ。もしか
したら久々に会えるかもしれない再会に、私たちは笑顔でその時を待った――

第一百四十九話～リザードンはいつも通り～

リザードンはサトシに呼ばれたことに歓喜していた。久々に会えるだけじゃない。イツシユ地方という見たことがないポケモンが多いという場所にいるサトシと一緒にバトルができるかもしれないという予感がしていたからだ。サトシと旅している間は必ず強者とバトルできることが多い。ポケモンリーグでのバトルやある悪党とのバトル：そして、バトルフロンティアでの強者とのバトル。いつもサトシの近くには強者の存在がいた。だからこそ、呼ばれたときは即答ですぐに行くと言った。バトルしたいというだけじゃない、サトシに会いたいという感情もあつたからだ。

もちろんサトシはその答えに笑顔ですぐさま対応した。オーキド研究所に行きポイントを交換するということ、交換するポケモンはリザードンと同じひこうタイ

プで、進化してかなり強くなったと感じているケンホロウに決めていた。ケンホロウならもうサトシのもので強くなるうとするよりは、オーキド研究所に行き今まで旅してきた中で仲間となったひこうタイプのポケモンたちと修行し、鍛えた方が良いだろうと考えた結果だった。もちろんその言葉にケンホロウも納得し、オーキド研究所でもっと強くなるかと決意していたりする。

——そんな準備をサトシがしていた中、リザードンは空を飛んでマサラタウンへ向かっていた。マサラタウンのオーキド研究所でボール交換をしてもらえば、すぐにサトシに会えると理解し、急いでいた。途中でポツポたちの群れを連れながら飛んでいるトキワの森に棲むピジョットに見つかり、何でマサラタウンに帰ってきてるのか聞かれたため、喜んでいた衝動でついサトシが自分のことを呼んでいるということを言ってしまった。そのため、マサラタウンでオーキド博士にボールに入れられる前に物凄く抗議がサトシの手持ちたちから殺到し、自分を連れていけとオーキド博士に技を放つポケモンまでいるぐらいにはカオスになってしまった。もちろんそれらを抑えたのはリザードンと…フシギダネだった。

抗議などを一切気にせず、攻撃してきたポケモンたちを吹っ飛ばし、そのままオーキド博士にボールに入れられて無傷でサトシのもとへ行ったりリザードンはさすが最強と言うべきだろう。そしてオーキド研究所のフシギダネもオーキド博士に攻撃をするど

いう事態を対処するべくリザードンの攻撃については止めなかったが、オーキド博士に余計な怪我をしないように動いていた。ついでに言っておくと伝説たちはその状況を放置していた。オーキド博士がいる状況で人の前に姿を見せる気はない伝説が大半なため、サトシに会いたいという気持ちは強くあれど、何もしないと選択をしたのだ。：まあそれはその後、サトシに会ったというレックウザのことを知ったミュウツーたちが激怒して世界が終わりかねない事態に発展したということもあったが、フシギダネの働きによってすべての伝説たちに説教をして鎮静化させたということもあった。

そして、凄まじいカオスっぷりからその光景を見ていたケンジは後日談としてカスミやタケシに遠い目をしながら語っていた。ついでにその時技を放たれ、リザードンとキレたサトシのポケモン達（フシギダネと伝説以外）の戦争のようなカオスに巻き込まれたオーキド博士もスーパーマサラ人のように凄まじかったというオチもあったりする。

———そんな事件があったとしても、マサラタウンはいつも通り平和だ。

「久しぶりだな…リザードン…」

『ピカッチュ…』

『グオオオオオオオオ!!!』

ボールから出て最初に感じたのは安心感だった。久々に見たサトシは変わらなかつた。いや少し遅しくなつたみたいだとリザードンは安心していた。

そしてサトシも、リザードンを見てより強くなつたと感じて笑みを浮かべていた。モンスターボールから出した瞬間に感じた強者の雰囲気。何もかもを燃やしてしまいそうなマグマのような炎の高い温度。そして普通のリザードンよりも凄まじく力強くなつた身体。何もかもが以前と違つて強くなつていた。

サトシはリザードンの近くへ行き、リザードンの身体を小さく叩いた。その叩き方は今まで旅をしてきたときやバトルに呼ばれたときたまにやるサトシの小さな癖だ。リザードンはそんな癖を見せてくれたサトシが懐かしいと感じ、サトシに向かつて久々の愛情のこもつた炎を浴びせようとしたのだが、サトシはそれを素早く避けたために笑みを浮かべた。自分の炎を食らわない所も、自分と同じように強く生きている所も本当に変わらない。いや、それよりももっと強くなつたのではないかとお互いがお互いそう思っていた。

「うわあ！久しぶりだねリザードン！」

『グオオ！』

『ピチュピイチュ！』

『カゲカゲ…！』

「リザードン、紹介するね。私のヒトカゲとピチューだよ！」

『グオオオオ！』

「これがリザードン…始めて見るよ！」

「歴戦の勇士登場といったところだね…！」

『ああ…まさにサトシの最強のポケモン…というわけか！』

「よしみんなに紹介しないと！皆でてこい！！」

「あ、私も！出てきて！！」

「じゃあ僕も！」

リザードンを見たサトシ以外の周りの反応はそれぞれ違っていた。アイリスはドラゴンタイプに似たりザードンを見て目を輝かせ、そしてデントとルカリオとNは強そうなりザードンに感嘆の息を漏らす。ヒナは久々に会ったりザードンに久しぶりと近づいてリザードンの腹に抱きつき、リザードンもヒナの頭を撫でて笑みを浮かべて久しぶりだなと挨拶する。そして恐る恐る近づいてきたヒトカゲ達に紹介し、その勢いでサト

シやアイリス、デントがそれぞれボールから自分のポケモンを出して紹介する。

それぞれがリザードンを見て強そうだと感想を言ったり、よろしくなと挨拶したりする光景に、サトシ達にはこやかにそれを見ていた。

——だが、1体だけその平穏な挨拶を壊してしまうポケモンがいた。

『バウウウウ!!!』

『グオオオオオ!!!』

まさに似たもの同士。強い者だからこそ感じ取れるものだった。強いものと戦いたいと思っているカイリユーがリザードンに喧嘩を売り、リザードンはその喧嘩を買う。似たもの同士だからこそ、お互いの心がすぐさまわかり、戦おうとする状況に一変してしまったのだ。もちろんその雰囲気を感じ取った他のポケモンたちは巻き込まれたら危ないと少しだけリザードン達から離れていく。そしてヒナとヒトカゲとピチューもルカリオによって避難させられていた。

カイリユーはリザードンを一目見た時からとても強いポケモンだと分かってしまった。リザードンの方はというと、戦いがいがあるかどうかわからないけれど、喧嘩を売

られたらそれを買うのがサトシから学んだことだった。リザードンがまだヒトカゲの頃から、サトシはよく喧嘩を売られそれらすべてを何倍かにして買っていったことがある。そんな家族の性格マスターに似てしまったリザードンだからこそカイリユートの喧嘩を笑顔で買い、バトルをしようと考え、行動した結果だった。

サトシ達はいきなり豹変し、リザードンとカイリユートがお互い睨み合う光景に驚いたような表情を浮かべていたが、すぐにそれに納得した。カイリユートについては旅をしてきて理解した性格と強さを求める願いから。そしてリザードンはサトシとヒナから見て、今までと変わらずバトルしたいんだなと苦笑し、アイリス達から見たらサトシから聞いた通りのバトルが好きだという意志と感情の表れだと納得した。

「よし、じゃあやろうぜバトル！リザードンもカイリユートも戦いたいって思ってるんだからさー！」

『グオオオオオオ!!!』

「そうね…戦いたいって思ってるなら…全力でバトルしましょう!!」
『バオオオウウウ!!!』

そして始まったバトル。お互いの強靱な力を知るため、全力で挑もうとするカイ
リユーとどんな強さなのか試そうとするリザードンのバトルが始まった――。

第百五十話～兄はりザードン達のバトルをする～

こんにちは兄のサトシです。カイリユーが出会ったばかりの俺のりザードンとバトルをしたいと叫んできて、りザードンもカイリユーとバトルをしたいと言ってきたので、アイリスと顔を見合わせてお互いが納得できるバトルをしようということになりました。

「ではりザードン対カイリユーの試合を始める…試合開始！」

試合が開始されたとともに激突したのはお互いが放つ凄まじい炎。かえんほうしやが放たれたのだ。もちろん俺やアイリスは指示をしていない。りザードンとカイリユーのちよつとした挨拶のようなものと分かっていいるから、俺は指示をしないまま

かえんほうしゃをお互いが放つても焦ることはなかった。だがアイリスとカイリユーは焦っていたようだ。リザードンの放つ勢いのあるかえんほうしゃの威力に驚き、強いということを感じていた。カイリユーのかえんほうしゃがリザードンのかえんほうしゃに巻き込まれ、そのまま大きな炎の渦となってカイリユーに襲いかかっている…。それをカイリユーはとっさに飛んで避けてリザードンを睨みつけた。自分よりも強い敵だという認識をもって、冷や汗をかきながらも…。

俺たちはそれぞれかえんほうしゃの猛烈な攻撃が終わったのを見計らってすぐに指示を出すため口を開く。

「リザードンこっちも飛んで、つばさでうつー！」

『グオオオオオ!!!』

「カイリユー回り込んでかみなりパンチよ!!」

『バウウウウ!!!』

リザードンとカイリユーの攻撃によって激しい風と雷が空に飛び交う。リザードンは自分の苦手なでんきタイプの技を受けたというのにそれを全然気にもせず軽く受け止めてしまった。それにカイリユーとアイリスが驚き、カイリユーはそのままリザードンの技から避けようとしたのだけれど避けられずそのまま地面に激突してしまう。

「カイリユー!?!」

『…バウウ…バウウウウウ!!!』

「さすがはカイリユー。リザードンの技を受けても倒れないとはな…でもリザードン…お前全力出して戦えよ」

『…グオオウ』

でも、カイリユーはもう満身創痍で倒れそうになっていた。つばさでうつという攻撃しか当たっていないというのに、その強烈な強さに吹っ飛ばされ、地面に激突した衝撃で体力が限界ギリギリになっているのだ。

そして俺は笑みを浮かべてリザードンを見た。技の一つ一つを見ても分かる。リザードンの方がカイリユーよりもレベルが強いということを…すべてが鍛えられている強者の強さだということを。本当に強くなったと思う…けれどカイリユーと全力で挑めよと思ってしまった。リザードンは無意識に手加減してしまったのだ。でもそれはバトルにおいて相手のポケモンに対する無礼に値する行為だ。リザードンはバトルをもっと長引かせたいのだろう。面白そうなバトルだと分かれば手加減をしてわざと長引かせてしまうというのはバトルフロンティアで見た光景だ。その時は俺がキレて本気でやれと言ったからすぐに終わったけれど…まだその癪治っていないのかと思う。後でいろいろと話し合いでもするか…?

アイリスはその様子にただ拳を握りしめ悔しそうな表情を浮かべていた。カイリユーもそうだ。リザードンとの力の差がありすぎて倒せないという現実を受け入れ…それでも、負けるかもしれないと分かっているにも全力で挑もうとする。

「クツ…カイリユー…あなたの力はそれだけじゃないはずよ！ドラゴンダイブ!!」

『バオウウウウウウ!!!!』

カイリユーは全力でドラゴンダイブを発動し、リザードンに向かって攻撃をしていく。それはまさにカイリユーのすべてがこのドラゴンダイブに力を込めているように見えた。でもリザードンはそれでは倒せない。俺はリザードンの方を見て、リザードンも俺の方を見て頷いた。

そして起こるのは凄まじい衝撃と砂煙。だがリザードンは倒れない。むしろカイリユーのドラゴンダイブを正面から受け止めたというのに、ダメージなどまったくなくという状況にアイリスとカイリユーは驚愕する。カイリユーとリザードンとの強さの差がありすぎて技が効かない。そんな事実を目を見開いて驚き、そして悔しそうな様子を浮かべていた。でもそれが、リザードンが強さを求め、鍛えていった結果だから俺は何も言わない。カイリユーも鍛えていけばリザードンのように強くなれるだろうから

心配もしてない。すべてはアイリスとカイリユウの選択で決まることだ。

「そんな…!」

『バウウウ!?』

「アイリス…それだけじゃ俺のリザードンは倒せないぜ?」

『グオオオオオ!!』

「―――バトルはそこまで!!…リザードンもカイリユウもお互いの力を知って満足している。これ以上のバトルは必要ないだろう」

Nさんがカイリユウとリザードンの間へ歩いて両手を広げてバトルを中止するように言い、お互いが力の強さを知って満足していると言っていた。リザードンはバトルができて良かったという表情を浮かべているからきつとそうなのだろう。まあカイリユウはそれでもなおリザードンのことを見ていて、おそらくまたリザードンとバトルをしたいと言ってくるかもしれないなど思ってしまった。

そんな俺たちに、妹達が近づいてきた。

「バトル凄かったよ!」

『ピチュピツチュ!!』

「ああーいいね！豊潤で豊かな香りがしそうだ！」

『……カゲ!!』

「ヒトカゲ？」

『ピチュウ?』

「ヒトカゲ……どうしたんだい？」

『……なるほどな』

『カゲ!!カゲカゲエ!』

『…グオオオ!!』

ヒトカゲが妹よりも前に出てきて、リザードンに向かって叫ぶ。リザードンがその声を聞いて何かを考えるような表情をしてヒトカゲに向かって言う。その様子はまるで、自分もリザードンのように強くなれるのかと聞いているように感じた。ルカリオに聞いたらその通りだと頷いたため、ヒトカゲはリザードンのように強くなりたいと分かっ

た。そしてリザードンはヒトカゲの問いに強さは自分で選択して行動するものだと
言っているらしい。その言葉を聞いたヒトカゲは覚悟を決めたような表情を浮かべて
妹を見る。妹がそんな強気な表情を浮かべているヒトカゲを抱きしめて、口を開いた。

「大丈夫だよヒトカゲ、私たちも一緒に強くなるから…頑張ろうね！」

『ピチュピチュ！』

『カゲカ!!』

『ヒトカゲは自分の目標を見つけたということか…』

「明確な目標は強靱な強さをもつ力となるということだね！うーん何という素晴らしい
テキストだろうー！」

「ヒトカゲもそうだけど…こっちも負けてられないみたいだね」

「サトシ…私たちはもつともつと強くなるわ…だからまたバトルしてくれる？」

『バウウウウ!!!』

「何言ってるんだよ当たり前前だろ！その時はまたバトルしようぜ！な、リザードン！」

『グオオオオオ!!!』

まあバトルをしたりリザードンが旅に加わったりといろいろと面白いことになりそうだと思った一日だった。：リザードンにも後でプラズマ団についての話をしないといけないから：まあそれは後で皆が寝静まってからにするか……。

第一百五十一話くマサラタウンは混沌となつていたく

マサラタウンはいつも通り平和で、時折騒音がして…そしてソーラービームが空高く上がっていた。普通の旅人や外から来たトレーナーはその騒音と極太ソーラービームに驚いてしまうだろうが、マサラタウンではいつものことだと慣れてしまっていた。

そしてその外から来たトレーナーとして例外が一人、マサラタウンのオーキド研究所へと訪れていた。よく伝説と呼ばれているポケモンのマナフィに会いに行くためにマサラタウンを訪れるハルカだ。ハルカはサトシの影響と、マサラタウンの日常からちよつとした騒音に慣れ、極太ソーラービームが空に上がっても気にしない。

だがそんな彼女でも、オーキド研究所に入った時から見えた光景に驚いた。オーキド博士の顔には何かに攻撃されたような傷跡がいくつも残っていたからだ。しかもその

傷は顔だけじゃない…切り傷、打撲、火傷と重症と言つてもいいぐらい酷かった。だがオーキド博士は怪我を気にせず笑顔でハルカを迎え入れたため、野生のポケモンに襲われたのかという疑問が浮かんできた。

「こ、こんにちは…あの、大丈夫ですか？」

「お…おお…大丈夫じゃ…」

「何か凄く大丈夫そうに見えないかも…」

「あ、ハルカ。いらっしやい」

「ケンジ、こんにちは！」

「わざわざマサラタウンに来てすまないが…今は森に行かない方が良いでしょう」

「え?! どうしてですか？」

「実は——」

ケンジが語ってくれたのは、サトシのリザードンがこちらに来た時から起きた騒ぎだった。どこから知つたのかわからないが、リザードンがサトシに呼ばれているということ、イツシユ地方でそのまま旅をするということがサトシの手持ちたちに伝わりリザードンVSフシギダネ以外のサトシの手持ちたちという戦争になってしまった。悪

化した状況を普段なら鎮静化するはずのフシギダネは止めるつもりがなくむしろオーキド博士に八つ当たりで攻撃しようとしてくるワニノコやベイリーフ、ハイガニの対処をしていただけだった。そしてその酷さとカオスを聞いたハルカは考えるような表情を浮かべてからオーキド博士とケンジの顔を見る。

「原因については分かったわ…でも私なら平気だから行つて来ます!」

「ええ!?!いや無理だよ危険だから森の中に入ったら今は駄目だ!」

「大丈夫かも!私はバシャーモ達もついでるし…それにサトシのポケモンならいきなり攻撃することもないでしょ?」

「それは…そうだけど…」

「まあ良いじやろう。ハルカは研究所の森を知り尽くしておる…ただし、危険か何かあつたら言うんじやぞ!」

「はい!!」

そうして、ハルカはオーキド博士たちに見送られながらも森の中に入つて行つた。マナフィに会うこともそうだが、いまだんな状況なのか気になっているということもあるからだ。

森の中はいつもと同じでもとても静かだ。時折ポケモンたちの声が聞こえてきて、草木

から見える日の光がとても心地よいと感じながらいつもの道をただひたすら歩き続けた。サトシ達のポケモンやマナファイに会うために――。

.....

『だから離すニャー！ニャーは行かなくちゃいけないのニャー!!』

『ベイベーイ!!!』

『コオオオオオオオ!!!』

『ハイハイヘーイ!!』

『マナア！ハルカ!』

「マナファイ！久しぶりね！…何かあったの?」

『……マナ』

『…ダネダネ』

『ホオオオ』

「あら？始めて見る子ね…こんにちは！私ハルカ！サトシとハウエン地方を旅していた

イことがあるの!」

『ホオオオオ！』

「サトシのポケモンよね。名前は…ううんその前にこの状況を教えてくれないかな？」

『マナマナ…』

『ホオオ…』

ハルカが見た光景は、ニャースが大勢のサトシの手持ちたちに取り押さえられ、何かを訴えている様子だ。何故ニャースが取り押さえられているのか、そして何故フシギダネはサトシの手持ちたちからニャースを助けようとしないうとハルカは首を傾けて疑問に思った。サトシの手持ちであるケンホロウに会って自己紹介をしたが、その前にこの悲惨な状況を説明してほしいと苦笑しながら言う。だがそれはハルカ達より後ろにいたルギアが教えてくれた。

『そこにいるニャースは…これから優れたる操り人のもとへ行く。だから彼らはそのことに怒り、ニャースに連れて行けと頼んでいるのだ。私も同じ気持ちだからわかるが…』

『これが頼んでいる状況に見えるのかニャ!?! どう見ても脅してるニャ!!!…つて痛いニャ尻尾はひっかくニャ!?!』

『ベエエイ!!!』

『カフ!!!』

「…え、ニヤース…サトシの所へ行くの?」

『マナマナ』

『ダネエ…』

『ああ、なんでもロケット団からの指令でイツシユ地方にいる優れたる操り人のもとへ行くことになったらしいが…何かあったのかと私たちは心配なのだ…』

『…まあ、サトシなら何かあったとしても無傷で生還しそうだが…ヒナのことを心配だな…』

「そうね…ルギアやミュウツウの言うとおり、もしかしたらかつてのマグマ団やアクア団のように悪い奴らが襲ってきているかもしれないもの…」

ハルカはホウエン地方で旅をしていた頃の出来事を思い出していた。ホウエン地方では時折アクア団やマグマ団がハルカ達に襲いかかったり、悪さをしていたということ…。それらをすべて解決させたのがサトシだった。

サトシが何をしたのはその時旅に同行していたハルカ達は知らない。だが一時期ハルカ達から別れて行動していた時に《何か》をやって…そしてその後、戻ってきたサトシに何かがあったのか聞いてみたが首を横に振って何もないと誤魔化され、後にマグマ

団とアクア団がサトシの前にやってきて土下座したという光景があった。その時に気づいたのだ。サトシがすべてを終わらせていたということをして、そしてマサラタウンで交流するようになったニヤースから話を聞いた。ロケット団と交渉して一緒になってアクア団とマグマ団の悪さをすべて止めさせてしまったという所行を、だから今回もそういう感じなのではないか、もしかしたら悪い連中がサトシ達に襲いかかってきているのではないかと思っただのだ。

だからこそ、ハルカは決心してベイリーフにのしかかられ、ワニノコに噛みつかれているニヤースに近づいて話しかけた。

「ねえニヤース…それって私も行くことはできない？」

『ニヤ?!何を言ってるニヤ?!』

「サトシがロケット団と手を組んで悪い連中を倒しに行くと言うのなら…私も一緒にサトシの手伝いをしたいのよ!バシヤーマ達と一緒に手伝うわ!」

『———— ツッ!!』

ハルカの言葉に良い提案だと周りにいるポケモンたちが鳴き、ニヤースを睨みつける。一斉に睨みつけられたニヤースは悲鳴を上げて縮こまり、そんなニヤことできない

ニヤ!と叫んでいる。だがハルカとフシギダネ以外のポケモンたちは全員もう決意していたようだった。

フシギダネはイツシユ地方に行きそうな状況に異議を唱え、叫ぶ。

『ダネエ!?ダネダネ!!!』

『…それは』

「…え?フシギダネは何ていつてるの?」

『フシギダネは《お前たちはイツシユ地方に行つて何をする気だ!?もしも悪い奴らが活動してなかったらサトシの迷惑になるだろう!!!》と言つている…』

「そうね…それは分かるわ…」

『キューン…』

『マナア…』

『ダネダネ!』

「でも…サトシがロケット団にイツシユ地方に来て…サトシに会いに行くという指令は通常おかしいことだと思うのよ…。何かあったのは間違いないわ…だから私はイツシユ地方に行く。何かないだなんてこと有り得ないもの!…それにフシギダネ。もしも行くのなら私の方からオーキド博士たち…サトシに頼むわ。迷惑になるようなこと

はしない…だからイツシユ地方に行かせて!!サトシの手伝いをさせてほしいの!!!」

『ツツツ!!!』

ハルカが頭を下げたのと同時に、サトシのポケモンたちも頭を下げた。フシギダネにお願いする。フシギダネがいうことは正論だと思う。だが、それでもサトシが何か困っていたら助けたいと思うのは皆同じだ。以前なら会いに行くだけでは迷惑になるからマサラタウンにいたが…：今回はロケット団が動いたことから、イツシユ地方で何か起きたのだと分かってしまった。だから…助けたいから会いに行きたいという気持ちが抑えきれなくなった。

フシギダネも先ほどニヤースを取り押さえられた時に止めないという行動を選択していたからわかるだろうとハルカは思っていた。たとえフシギダネがオーキド研究所のまとめ役だとしても、サトシの手持ちであり、仲間なのだから助けたいという気持ちは一緒だと分かっていたからだ。そんなフシギダネなら私たちの気持ちも分かってくるだろうとハルカは信じていた。信じて頭を下げているのだ。

その間、伝説たちは傍観していた。自分たちが行くのならハルカ達が行くと決心してからだと考えていたからだ。伝説だからむやみに姿を現そうとは考えていない。いきなり姿を見せてしまったら周りが大騒ぎになってしまうからだ。そしてサトシに迷惑

をかけるかもしれないということ、サトシを怒らせてしまうかもしれないという事実があつたために行けないでいた。

そのため、サトシが困っているのなら助けたいという気持ち、そして迷惑になるかもしれないからイッシュ地方に行けないという気持ちと平等に考えて——周りの状況によつて判断すると決めていた。

……ちなみにこの時ラティアスはサトシの手持ちたちと一緒に頭を下げていた。サトシ達に会いたいという気持ちが強くと、もしも困っていたら助けたいと願っていたからだ。だから伝説たちのように傍観はせず、頭を下げてフシギダネに頼んでいた。そしてその様子を見た兄のラティオスは困つたような表情をしながらもそのままにさせていた。ラティオスもサトシ達に会うという気持ちは変わらないからだ。

そして、一瞬の静寂の後……フシギダネはため息をついてハルカ達を見る。その瞳は、仕方ないという諦めと、サトシを助けたいという強い願いが込められていた。

『……ダネ』

「良かった!! ありがとうフシギダネ!!」

『———— ツツ!!』

周りが歓声に沸き、まず何を準備したらいいのかと話し合っている。もしもバトルになるのならきのみなどを準備した方が良くとそれぞれが話し合って決めていた。もう行くという選択以外になさそうだ。

そして、それを見たミュウツーたちは笑みを浮かべて頷く。

『さて、俺たちも行くか…』

『そうだな…優れたる操り人とその妹に何かあつては危険というもの。私たちも助力を尽くそう!』

『——ツツ!!』

伝説たちもイツシユ地方に行くこと決めた様子を見てこちらも行くという選択をしたようだ。伝説たちがそれぞれ雄たけびを上げてやる気を出している。

そんな中、ある一体のポケモンは困り果て叫んでいた。

『何考えてるニャ!!?!?!おみゃーらが行ったらいツシユ地方が消えてしまうのニャ!!』

——
まだまだマサラタウンでの騒動は続きそうだ。

第一百五十二話くヒトカゲはりザードンを見習うく

「…いいヒトカゲ。そのままひのこよー！」

『カゲエ!!』

『ピチュピチュ!!』

こんにちは、妹のヒナです。現在私たちはホドモエシティに行く旅の途中で休憩をしています。その間にヒトカゲが技の練習をしたいと言ってきたため、休憩の間に特訓することになりました。どうやらヒトカゲは前にやったカイリユートリザードンの戦いを見て自分もあれぐらい強くなりたいと決意したみたいです。私はヒトカゲがそれを望むのなら、私もできることはやっていきたいと覚悟を決め、修行をもっと頑張つて

やり、炎の勢いを強めていきたいと考えて行動してます。そしてピチューはその様子を見て、応援しています。がんばれと言いなから電気を時々飛ばして綺麗な光を私たちに見せてくれた。その様子はまるでコンテストのような。パフォーマンスを無意識にやっているようだと感じた。：ピチューのコンテストのパフォーマンスについても、もつと修行をして頑張つていかないといけないと思う。まだトレーナーじゃないけれど、これからやるべきことがいっぱいだと考えた。

兄たちはその私たちの特訓を見ている。たまにアドバイスなどを出してくれるが、それ以外に何もしようとはしなかった。でも休憩を始める前に、皆がそれぞれポケモンを出していたため、特訓を観戦するのは兄やルカリオだけじゃなくリザードンもいた。アリス達はこの後すぐにお昼にするため準備をしているので、ルカリオも料理器具を出しながらだけれど、ちゃんと私たちの様子を見ていた。

私たちはそれに気づきながらもヒトカゲの指示を出すため口を開く。

「ヒトカゲ…ひのこを回転させて疑似ほのおのうず！」

『カゲ！』

『…グオオオ』

「あれ…リザードン？」

リザードンが特訓をしている私たちに近づいてきて、私とヒトカゲに何かを言おうとしてきた。ヒトカゲはリザードンの言葉を理解し、真剣な表情で私を見ている。そしてリザードンのその様子は何か兄たちがアドバイスをする時のような表情に似ていたと感じた。そしてそれを見た兄も近づいて話しかけてくる。

「リザードンはお前たちにかえんほうしゃの仕方を教えたいんだと」

「え…いいの!？」

『カゲ!!』

『グオオオオオ!!』

リザードンが大きな叫び声をあげて私たちの質問に頷く。ヒトカゲは真剣な表情をしているが、その声を聞いた時から目を輝かせてリザードンを見ていた。リザードンのような凄まじいかえんほうしゃができる様になりたいと思っっているヒトカゲだから、リザードンの教えをすべて忘れないようにしたいため真剣な表情で一言も聞き漏らしたくないのだろうと思えた。もちろん私も同じように真剣にリザードンと兄たちの話を

聞くことにする。

ヒトカゲが強くなりたいたいと望むのなら、私もやれることは全てやりたいと思っ
ているから例え兄たちの言葉が過酷になろうとも耐え、行動しようと思っ
ている。

兄はりザードンの方を見てから、何か考えてから思い出すような仕草をし
つつ言っ
た。

「前にオーシャンカップで見せてくれたダブル《猛火の炎》をやってみてく
れないか
？」

「分かった！行くよヒトカゲ、ダブル《猛火の炎》!!」

『カゲエエエエ!!』

猛火の炎はひのこをより大きく、より勢いを増した鍛えた技の1つ。でもり
ザードン
やカイリユーのかえんほうしやより威力は小さく、まだまだ特訓をして炎の
勢いを増し
ていかなければと思っていた。りザードンと兄がその様子を見て、お互い
の顔を見合
わせてから言う。私たちにかえんほうしやという技を習得してもらうた
めにもつと凄ま
じい炎を覚えてもらおうと説明をする。

「炎の威力はひのこよりも上だが、まだまだかえんほうしやには届いていないな…リザードン、手本を見せて教えてやってくれ！」

『グオオオオオ!!!』

リザードンが私たちの近くでかえんほうしやを放つ。リザードンの凄まじい威力と熱気が伝わり、ヒトカゲの目の輝きは増していく。こんな強い技を覚えられることになつたらなんて素敵だろうと思つているのだろう。私もリザードンが教えてくれるのなら本当にありがたい。それに、リザードンはヒトカゲの進化形だから、ある意味後輩のような感じなのではないかと思つた。

「いいか、リザードンがやったように、炎を腹の中に込めてそしてすべてを吐き出すようにして放つんだ」

『グオオオ!』

「よし分かつた…できるヒトカゲ？」

『カゲ…カゲカゲエエ!!』

ヒトカゲはお腹に力を入れて炎をため込むような仕草をして、そして炎を放つ。猛火の炎よりも力強くなっているけれど、リザードンやカイリユーのかえんほうしやには

劣っていた。でも威力は増しているからかえんほうしやに近づけていっているのではないか
と思ひ、喜ぶ。このままでいけば、かえんほうしやを習得できるのではないかと思つた
からだ。

兄とリザードンもいい感じだと笑つてくれた。その表情に私とヒトカゲは喜び、笑み
を浮かべる。

「よし！この調子でかえんほうしやを覚えてもらおうぞ！」

『グオオオオオオ!!!』

「はい。お願いします!!」

『カゲエエエエ!!!』

「——おっと！その前にお昼だよ！」

『修行はその後で行え』

いよいよ本格的にかえんほうしやを覚えようという時に、デントとルカリオがこちら
に近づいて修行を中止するように言う。私たちがデント達の指差す方向を見るととて
も美味しそうな料理が並んでいて、アイリスとNさんと、アイリスのポケモンたちとデ

ントのポケモンたち…そして観戦していた兄のポケモンたちが自分の食べる場所に座って私たちを待っていた。その様子にもうお昼なのかと私たちは気づく。

そして料理が並び、皆が待っている姿を見た私たちは上がっていたテンションを下げ、仕方ないという表情でデント達の言うことに従う。まあまだトレーナーじゃないから急ぐほどのことじゃないけど、でもこれからのことを考えるとかえんほうしやを覚えるのはいいことだよねと思う。

とにかく、これからの修行も頑張っていけないといけないかな…。

第百五十三話くプラズマ団との対立く

こんにちは兄のサトシです。そろそろホドモエシティに到着し、Nさんとはお別れします。Nさんがホドモエシティから行くところがあるらしく、その町までは旅に同行するということでしたから少しさみしいですが仕方ないと諦め、ホドモエシティで少し豪華な食事をしてから別れようということになりました。

まあ目の前の光景を見てその食事はできるかどうかわからなくなっただけだな。

「…ん？何だ？」

『ピイカ？』

「何かあったみたいだね…」

ホドモエシティへ続く橋でジュンサーさんが通行禁止だと言って止まれと俺たちに

指示をした。何かあったのか話を聞くと、町の中でオノノクスが暴れているため、町を封鎖中だということ、暴れているのは原因不明で…まだ何も対処できていないということが分かった。

アイリスが考えるような表情をして、ジュンサーさんに言う。

「そんなこと…オノノクスは普段はおとなしくて優しいポケモンです。ですからいきなり暴れるだなんてこと有り得ません！」

『キバキバ！』

「ええそれは分かっているわ。でもまだ何の原因も分からずにいるのよ…悪いけど、あなたたちをこの先へ行かせるわけにはいかない」

町の中へ通すわけにはいかないとジュンサーさんが言ってきたため、俺たちはお互いに顔を見合わせてから違う方の橋へと向かう。違う橋の方に行く時にジュンサーさんがそつちも通行止めで町からは入れないわよと叫んできたのだけれど、きつとどこかに町の方へ行ける道があるはずだと探す。

だが、どの橋も封鎖されていて行けそうにない。こうなったらリザードンに頼んで空を飛んで連れてってもらおうかと思っていた時にルカリオが何かを見つけたようだった。

『サトシ…あれで行けないだろうか？』

「船か！あれなら見つからずに行けそうだな！」

『ピカピカ!』

「でも、ジュンサーさんがこの近くにいるから隠れながら近づかないといけないね…」
「それなら私に任せて!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピッチュ!』

「大丈夫なのヒナちゃん…?」

『キバキ?』

「うん大丈夫! 私たちが先に行くから…みんなもその後ろから来て!」

『カゲエ!』

『ピッチュ!』

「時間がない…とにかくやってみよう!」

ルカリオが川の方で見つけたのは小さな船。あの船に乗ればなんとか町の方へ行けるはずだと俺たちはジュンサーさんたちに見つからないように隠れながら船に近づく。妹達は隠れるのに慣れているのかすぐに船の方に来て俺たちにジュンサーさんが見えないのか確認してから来てもらうための合図を出したため楽に船に近づけた。

そして船に乗り込んだ俺たちはすぐに町へ向かうため川を渡る。

.....

——そして町の中へ入っていったらそこはほとんど町としての機能を失っていた。オノノクスが暴れた惨状が町のいたるところで残っていて、俺たちは焦る。オノノクスさえ止めれば大丈夫だと思っていたんだけど、この調子だとかなり大変そうだなと思ったからだ。でもまだ何でオノノクスが暴れているのかはわからない……とにかく急いで向かわなければと思った瞬間、ハンサムさんが突然現れて俺たちは走るのを止めて立ち止まった。

「ハンサムさん!?!」

『ピイカ!?!』

「サトシ君!?!何で君たちがここにいる!!?!」

「えつと……実は——」

ハンサムさんにオノノクスが放っておけないということを話して、何でここにいるの

かを聞く。ハンサムさんはどうやらオノノクスのことを聞いてすぐにホドモエシテイに向かったということ、俺たちと同じように何かあるのではないかと気になってきたという話を話してくれた。そしてNさんのことを見たため、デントが紹介をしてそしてハンサムさんのことを紹介する。その時にNさんが嫌そうな表情を浮かべていたけれど……まあ気のせいだよなどと考えるようにしておく。

その後俺たちがオノノクスを見つけるために歩いていると、すぐに騒音が聞こえその場へ向かう。そして見つけたのはオノノクスが暴れている光景だ。

「オノノクスー！やめろー！」

『ピィカ!!』

「待つてサトシー！ここは私が……オノノクスお願いだから暴れるのはやめて……どうしたの？何で暴れているの？」

『キバキー！』

『オノオオオオオオ!!!』

「ッー！」

『キバツ!?!』

アイリスがオノノクスに近づいて話を聞こうとしたのだけれど、オノノクスはただ暴

れてアイリスに攻撃をしようとした。アイリスはとっさにジャンプして避けて何とか攻撃を受けずに済んだ。アイリスの声が聞こえていないように感じた。その間にNさんは拳を握りしめて驚いたような…焦ったような表情を浮かべて呟いた。

「そんな…トモダチの声が聞こえない…どうしてだ。どうしてなんだオノノクス…！」
「どうやら特殊な電波が流れているようだな…！」

Nさんはポケモンの声が聞こえないことに驚いていたようだ。何も聞こえないことに焦り、何故暴れているのか疑問に思う…。だけど、それはハンサムさんがある機械を取り出して答えてくれた。特殊な電波が流れてきていて、オノノクスが暴れているというのを。

そのことに俺たちは怒り、理解した。これらの惨状はプラズマ団がオノノクスを操って暴れさせているということ…オノノクスは何も悪くないということ…。

だがその後、アイリスが怒ってカイリユーをボールから出して何とかオノノクスの動きを封じようとしてほしいというビームを出しているのだが通じず、オノノクスの仕掛けてきた攻撃を避ける。俺もピカチュウで何とかオノノクスを止めたいのだけれど、それだと余計にダメージが出てしまうから無理だと迷う。オノノクスは暴れているせいで体

力がなくなり…弱っているとハンサムさんが言ってきたからだ。何とか止めたいと…仕方なくオノノクスを倒して止める方向で考えていた時だった。

『バウウ?!』

「カイリユー?どうしたの…カイリユー!？」

『キバキバ!!』

『バウウ…バオオオオオオオオオ』

!!!!!!!

「プラズマ団…!」

『ピイカ…!』

カイリユーがオノノクスと同じように暴れだしていったのだ。暴れだした原因はおそらくどこかにいるプラズマ団のせいだろうと分かる。カイリユーが町を凍らせ、破壊し…オノノクスも同じように攻撃していた。俺とピカチュウはカイリユーとオノノクスが暴れている原因のプラズマ団を探そうと周りを見る。カイリユーがいきなり暴れだしたということは何処か近くにいますかと思っただけだ。だがあいつらはすぐに俺たちの近くにへりでやって来た。

「お久しぶりですね…少年」

「お前は…あの時天文台にいた…!」

『ピカピカ!』

「ふん…Nよ。ゲーチス様が探しておられるぞ!」

「もう僕に構うな」

俺たちがアクロマのことに気づき、睨んでいた間にNさんがプラズマ団に話しかけられていた。まるでNさんがプラズマ団にいたというような言葉に俺たちは疑問に思ったが、Nさんは本当に嫌そうな表情を浮かべてプラズマ団を睨み、敵意をもってカイリユートとオノノクスを止めろと叫ぶ。だがアクロマはそれを鼻で笑い、これは素晴らしい力だと言つて説明をしてきた。ポケモンの力を限界まで引き出し、すべてを操るということを。それを聞いたNさんも俺たちも怒り、アクロマを睨む…。だがプラズマ団は操られているカイリユートとオノノクスに指示をとばして俺たちを襲おうとしてきた。

———だから、これは仕方ないことだ。

「やれお前たち!」

『バウオオオオオオオ!!!』

『オノオオオオオオ!!!』

「…出てこいリザードン！リザードン…オノノクスを止めてくれ。ピカチュウはプラズマ団が余計なことをしないように頼む…俺はカイリユード」

『グオオオオオオ!!!』

『ピツカアアア!!!』

「フツ無駄なことですよ！カイリユードもオノノクスも止まらない！…：…何ッ!？」

俺は飛んでいるカイリユードに向かって思いっきりジャンプをしてカイリユードの翼を掴み、頭を動かないようにしてからカイリユードに乗っている俺と一緒に地面に落とす。…というよりも地面に叩き落とす。

カイリユードに余計なダメージがいかないように地面に落とした後、すぐに動かないようにカイリユードの片腕と翼を掴んで倒れた状態を維持する。これなら暴れても問題はない。

そしてリザードンもオノノクスにのしかかりをしたような状態にして暴れさせないように押さえている。ピカチュウはプラズマ団を睨みつけて監視し、何かあったら電撃

を飛ばして阻止するためこれで安全だ。これで後は操られているこいつらをどうにかしないといけない……。とにかく操っている機械か何かを壊さないといけないよな……。

「そんな…予想外だ。少年…いやサトシ君だったな…飛んでいるカイリユーを地面に叩きつけて動けなくするとは…面白い…!!」

「そんなことを言ってる場合かアクロマ!このままでは…!」

「おーいサトシ君!もう大丈夫だ!!」

「お兄ちゃん!操られていた機械を壊したよ!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『カイリユー達はもう暴れないから安心しろ!』

「そうか…良かった!」

『グオオオ!!』

「良かった…ありがとうサトシにみんな!……戻ってカイリユー!ごめんね…ありがとう」

『キバキ』

「ありがとうリザードン!戻れ!」

『グオオ!』

俺たちがカイリユーとオノノクスを止めている間にハンサムさんや妹達がヘリの中を調べていたのか、何か大きな破壊音がしたと思ったら俺の下で暴れていたカイリユーがいきなりおとなしくなり、そして妹達の声でもう大丈夫だと分かって安心した。アイリスも本当に良かったと安心してカイリユーに抱きついて謝ってからボールに戻した。俺もオノノクスが大丈夫だと知って、リザードンをボールに戻し、これでもう大丈夫だと思っていた…時だった。

「クツこうなったらNだけでも!!」

『ニャアオ!!!』

「危ないNさん!」

プラズマ団の1人が放ったレパルダスのシャドーボールがNさんに直撃して、Nさんは建物に激突し気絶してしまった。俺たちはそれを見て怒り、Nさんを守るように庇う。

プラズマ団が襲いかかり、俺たちがそれを振り返り討ちにするために攻撃を指示しよう

した時にいきなり霧が出てきて周りが真っ白になる。

「い、一体何が起こって…!？」

『霧…じゃないな…これは幻覚に近い…』

「ポケモンの仕業ってこと!？」

『キバキ!?!』

「あ、Nさん!?!」

後ろにいたはずのNさんが宙に浮きどこかに行こうとする。宙に浮いたのはおそらくポケモンのサイコネシスだろうと分かり、俺たちはNさんの後を追う。そして見つけたのはNさんを心配そうに見る女性2人とポケモンたちの姿だった――。

第百五十四話く妹はNの真実を聞いたく

こんにちは妹のヒナです。現在霧の中を歩いていきます。Nさんが連れられてどこかに行こうとしているため私たちもそのあとを追い、歩いているのです。

というよりも…この光景はどこかで見たような気がする…おそらく原作知識で見た光景なのだろう。でも何があつたのかさえ思いつかないし、Nさんを連れてくる2人の女性についても分からない。…でも危険だという感情はないから大丈夫…かもしれない。とにかく警戒はしないと駄目だと思いつつ歩いている。兄とピカチュウとルカリオも警戒しながら歩いているし、アイリスやデントも彼女たちが危ない人でNさんに危害を加えると分かったらすぐに助けようと考えているみたいだ。とにかくこの場

所は何処なのだろうと思いながら私たちは歩いて行った。

——そして着いた先に待っていたのは、大きな泉だった。でも底は浅く、歩いても大丈夫なぐらいの水深みたいだと分かった。そこにNさんを静かに降ろしていく。Nさんは泉の水に浸かり、このまま大丈夫なのかと心配したときにそれは起こった。

「これは…!」

『ピイカ!』

「一体何が起こってるの…!」

『キバキ!』

「Nさんの怪我が…治ってる!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

泉の水が光り、Nさんの怪我が治っていく。その様子を見て私たちは驚いた。Nさんの近くに行つて大丈夫なのか見たいのだけれど、サーナイトが私たちを睨み、近づけさ

せないようにしているため無理やりは駄目だとその場に立ち止まる。そしてNさんが目覚め、怪我が治り大丈夫だと分かって私たちは安心した。でも女の人たちは私たちのことを睨んで、口を開いた。

「あなたたちは、招かれざる客です！」

「すぐに、ここから立ち去ってください！」

「え…？」

女の人たちが私たちを連れてきたというわけじゃなく、連れてきてしまったということを考えていたと知った。Nさんに危害を加えていないし、逆に怪我を治してくれたためこのまま帰ることはできないけれど敵だと認識して攻撃もできないと兄たちはそう考え悩んでいた。でもその前にゴチルゼルが動いて私たちをサイコキネシスで宙に浮かせ、そのままどこかへ連れて行こうとする。でも私たちは納得できなかった。Nさんは大丈夫なのか…そしてNさんは何でプラズマ団に襲われてしまったのか…女の人たちは一体誰なのか知りたくて、でもゴチルゼルを攻撃できずどうすればいいのかと悩む。

「待ってくれ！彼らなら大丈夫だ…」

「…でも」

「サトシ君たちは、ポケモンと強い絆を持っている…それは彼らに聞いてみればいい」

Nさんが止めてくれたため、私たちは地面に降ろされ品定めするかのような目で私たちを見る。そしてNさんが言う《彼ら》という言葉を理解したピカチュウやキバゴ、ヒトカゲやピチューが大丈夫だと私たちにすり寄ってきたり抱きついてきたりする。そしてルカリオも大丈夫だという意味を込めて頷いた。

それを見た彼女たちはNさんの言葉を信じたらしい。少しだけ警戒されているけれど、でもこのままどこかへ連れて行かれるという心配はなくなった。そして私たちは話を聞いた。この場所が何処なのか…そしてNさんとプラズマ団の関係や…彼女たちは誰なのかについて…

.....

この場所は隠れ家のような役割を持っているらしい。外から人間たちが来ない楽園のような場所。そしてこの周りにいるポケモンたちは人間によって傷つき、心を病んでしまっていた。Nさんたちが近づいても笑顔でいるのだけれど、私たちが近づくと恐れたような表情で逃げていく。その態度に…そして心の傷に私たちはショックを受けた。兄も拳を握り、そんなポケモンたちを傷つけた人間に怒りを覚えていたらしい。でも…

人間はそんな人ばかりじゃないと説明したけれど、Nさんともかく、彼女たちはそれを信じようとしなない。私たちを警戒し、ポケモンたちに近づけさせないようにしていた。

そしてプラズマ団について聞いたのだけれど、最初はNさんたちは話すべきか悩んでいたと分かり、あまり検索しない方が良いと思い私たちは口を閉ざしたのだけれど、Nさんが意を決して話してくれた――。

「Nさんは…プラズマ団にいた…か…」

『ピィカ…』

「でもプラズマ団が悪いつてわけじゃない…ポケモンを傷つける人間が悪いつて話なのよね…」

『キバキ…』

「彼らの心は人間に敵意を抱いている…そんなテイストがしたよ…」

『人はそれぞれポケモンに対する対応が違っていいからな…傷ついたポケモンが人間を嫌うのも…仕方ないことだ』

「それはそうだけど…」

『キバキ…』

「……………」

『カゲエ…』

『ピチュ…』

私たちは今隠れ家の外にある泉の近くで座り、Nさん達から離れて話し合いをしています。Nさん達から聞いた話に少しだけ疑問を抱き…そしてちよつとした怒りがあつたからだ。

プラズマ団にポケモンと心を通じる力を利用して、物心つく頃から屋敷に閉じ込められ、育てられたということ、そしてある儀式をしようとした時、レシラムが現れてその儀式を邪魔したこと…そしてその後、プラズマ団から逃げて、この隠れ家にたどり着いたということ…でもそれだけじゃない、彼女たちはプラズマ団だけじゃなく人間たちにも怒りがあつた。ポケモンを傷つけ、利用するトレーナーに敵意を抱いていたのだ。そしてポケモンと人間は別々に別れて暮らすべきだという理想を持っていた。

そのことに私たちは疑問を思った。ポケモンを傷つけるトレーナーがいることに対して怒りはあるけれどそれは仕方ないことだと思う。世界中の人間すべてが良いだなんてことありえないのだから。人間はそれぞれ違った考え方を持っていて…だからポケモンと真の絆を持っているトレーナーがいれば、強制的に戦わせる偽りの絆を持つト

レーナーもいる。だから彼女たちの言う理想に私たちは領けないのだ。ポケモンと別れて暮らすということは…それはヒトカゲとピチュューと…みんなと離れるという意味を持つ。だからそんなことできない。

でも、彼女たちに納得できるような言葉が思い浮かばず、そのまま私たちは外に出て話し合いをすることになったのだ。

「…でも、そんなのおかしいよな…ポケモンと別れて暮らすだなんて…俺にはできない！」

『ピカピカ！』

「ええ、私もキバゴ達と別れたくないもの！…でもどうしたらいいのかしら…」

『キバキバ！』

「諦めたらいけない…もつとポケモンたちと仲良くなりたいうてことを伝えないと！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

『ああ、人とポケモンが助け合い…協力するのが本来の絆だからな…』

「うんうんそれこそ真の絆といえるものだよ！…それにはお互いの理解も必要だろうね」

私たちは決めて、彼女たちに伝える努力をしようと決意する。ポケモンと人間が別々

に暮らすということに納得はできないから、私たちにできることはただひたすら伝えることだけだ。ポケモンが大好きだということを…そしてポケモンと一緒に暮らしていきたいということ…！

『シジ…？』

『ポ…』

「あ、シキジカたち…大丈夫だよ、こつちへおいで！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピッチュ！』

「マメパトたちもいるな…俺たちはお前たちを傷つけたりしないよ。大丈夫だ」

『ピツカ！』

マメパトたちとシキジカたちがそれぞれ恐る恐る私たちに近づいてきて、手や足にすり寄ってくる。人に傷つけられ、心が病んでしまったとしても、私たちに近づいてきたということは人間のことを深く敵意を持っているわけじゃないということだろう。ただ怖いだけ…また傷つくのを恐れているだけなのだ。でも私たちが何もしない人間だと分かると笑顔で遊ぼうと言って来たり、すり寄ってきたりする。私たちはお互い顔を

見合わせて笑顔になり、シキジカたちと遊ぼうとする。

—— そんな時に大きな爆発音が聞こえて、奴らはやって来た。

「Nよ！こんなところにいたか……だがもう逃げられないぞ！」

「クッ！」

爆発音に何があつたのか私たちは走り出す。すると隠れ家にいたはずのNさん達も出てきて辺りを警戒する。私たちのことをまだ警戒しているのかサーナイトがNさんに近づけさせないようにしていたため、ちよつとだけ悲しいと思いつつもどこに爆発の原因があるのかを探す。そして見つけたのはプラズマ団だった。

プラズマ団はNさんを連れ出そうとしていた。でも私たちがそれを許すはずもない。

「Nさん達は先に逃げてください！」

『ピツカア！』

「え、でもそれは……」

「大丈夫ですよNさん！私たちは奴らに倒されるほど弱くないですから！」

『キバキ！』

「さあ早く今のうちに!!」

「あ、シキジカやマメパトたちも早く逃げて!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『後は任せろ!』

「分かった…頼んだよ!」

———Nさんたちが逃げた後の惨状については何も言うつもりはない。そして同情するつもりもない。

.....

「ふふふ…はっはっは!!!」

とあるプラズマ団の基地で男は笑っていた。男…いや、アクロマはある機械を起動させながら狂ったような笑みを浮かべて楽しそうにしている。アクロマ以外のプラズマ

団の人間はいない。彼一人だけ、この部屋に立っていた。

「面白い…面白い!!ポケモンの力を超えた、良質な存在!!」

アクロマは興味を覚えた出来事を思い出し、興奮していた。ポケモンの力を借りずにピカチュウを操ろうとする機械を壊す破壊力、そして力が限界まで引き出され暴れていたカイリニューを素手で叩き落とし、動きを止めたあの人間離れした力を欲していたのだ。そしてアクロマは考えたことを口に出して叫ぶ。その声はとても興奮し、息を荒くしていた。それほどまでに、《彼》を欲していたのだ。

「少年を…サトシ君を操ることができたらどんな素晴らしい結果になるだろうか…!」

アクロマは興味を持った。人やポケモンよりも優れた力を持つ少年に…サトシを操れることで何が起きるのか結果を知りたいと思えたのだ。そして彼は自分の興味と欲した欲望に忠実に行動し始めた。サトシを操れる機械を作るために…。

アクロマの笑みや瞳には通常の人とは違う、どこか狂っているような印象を与える表

情をしていた。でもそれを指摘する人間は、ここにはいない…。

「待っていてくださいね……実験対象——サトシ君！」

第百五十五話く妹達は遺跡にたどり着くく

こんにちは妹のヒナです。あの後Nさん達と別れてから少しだけ時間が経ちました。Nさんのことを考えるといろいろと思うことはありますが、遺跡の近くのリュウラセンの塔に着き、そろそろ遺跡にたどり着くため、思考を変えて何かがあるのか楽しむことにします。

「…ん？あれって車？」

『カゲカゲ？』

『ピチュピチュ？』

「おうユーたちかい？アララギ博士の知り合いって？」

「あ、まあそうですねけどアララギ博士と言っても親子どちらとも知り合いです…」

『ピカピカ…』

「えつと…どつちのアララギ博士のことでしょうか？」

『キバキ？』

「おうその通り！どつちもアララギ博士で、ややこしいんだよね。僕はパパの方の助手で、ニツクつて言うんだ。城の遺跡で博士がお待ちかねだよ！」

車から出てきたのは、アララギ博士（父）の助手らしい。私たちを迎えてくれて、白の遺跡へ一緒に向かうために、車に乗せてくれた。

そして車の中で遺跡の情報を聞くと、世紀の大発見をしたかもしれないということも教えてくれた。だが詳しく話を聞いても教えてくれず、見てのお楽しみだよと言われるため遺跡で期待しながらも早く着かないのかなと待つ。

そしてようやく着いた場所は古そうな大岩に苔がこびりついている場所。そこから先は歩いて向かうと言われたため私たちは車から降りることになった。

そして周りを見ながらアララギ博士のもとへ私たちは急ぐ。世紀の大発見ということとはもう何か見つかったということ、何があるのかわからないけれど、早く見たいという気持ち及早足になってアララギ博士のもとへ急ごうとしてしまう。私たちの行動と表情に笑っていたニツクさんだったが、慌てずにすぐに会えるよと言って何処へ行けば会えるのか教えてくれた。私たちはその場所へと向かって行く。

「見て！ドツコラーにローブシンもいるよ！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

『ヒナたち…それ以上近づいたら邪魔になるぞ』

「はあい」

『カゲエ』

『ピチュウ』

「へえポケモンたちも一緒に活動してて…この光景をNさんも見てくれたらな…」

『ピイカ…』

そして歩いていく途中で、ドツコラーやローブシンたちが人と一緒に遺跡を発掘しようとして頑張っている姿が見えてきた。そしてゴルーフも大きな岩をどけようとしている姿が見えて、ヒトカゲ達は大はしやぎしている。私たちは邪魔にならないようにして歩きながら、その光景を見た。

——そしてやって来たのは洞窟の中。

洞窟というよりも、洞窟で作られた岩の廊下と言える場所だと私たちは思った。そしてその廊下は長く続き、空気が湿っているような感じもした。ところどころに火が灯つ

ていて、何とか光源があるとと言えるけれど、もしもこの火が消えてしまったら洞窟は真つ暗になって何も見えない状態になるだろうと私は思う。それほどまでに長い洞窟だった。

そして、ニツクさんが言うには、まだこの白の遺跡は全て確認していないのだという。それほど大きくて古いとててもすごい遺跡なのだと分かった。

それぐらい長い道を私たちはただひたすら歩き続けた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ようやく着いた先にアララギ博士の父が待つていた。アララギ博士の父はいきなり私たちにそれ以上中に入ってはいけないと言ったけれど、そうでもないとも言ったため、相変わらず考えながら声を出してしまうのだと苦笑した。そして世紀の大発見とは何なのか聞いてみると、アララギ博士の父の後ろにある壁画……つまり、古代文字で書かれた扉を見せてくれた。あの中にレシラムにまつわる重大な何かが眠っているということが分かった。つまりあの中に世紀の大発見となるものがあるに違いないということだ。

そして博士はそれが開くかどうかは分からないけれど、とりあえずやってみればわか

ることだと言って笑顔で行動し始めた。扉となる古代文字で書かれているものはパズルのように一文字すべてが動かすことができる。そして一つだけ空間が開いており、その場所に古代文字を動かし、そしてまた動かすとやっていく。アララギ博士の父がすべての古代文字を動かしていくと、開いていた空間の奥から古代文字が出てきて、扉が完成し光り輝きだした。ルカリオがとつきに私たちを庇ってくれるぐらい、光りはとても強く：まるであの時間の宝玉の時みたいに真っ白に輝き周りが見えなくなるほど光っていた。そしてようやく光が消えたと思つたら、古代文字の壁画が消え、奥に進める様になつていた。アララギ博士がやった方法で良かったんだと分かり、そして奥に進めることができて私たちは喜んだ。レシラムにまつわるものとはいつたい何なのだろうと思いつながら歩き始める。

「()は……?」

『ピイカ?』

「階段みたいね…しかもかなり長い…」

『キバキバ…』

「()も大昔に作られたつてことだよね…うーんイツツミラクル!」

『…何かを護り、人やポケモンたちを遠ざけていたということか…』

「そう考えると凄いな…大昔の人がさっきの仕掛けも考えたつてぐらいのものがあつ

てことだもん」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「さてさて…そのレシラムに関する何かは一体どんなものなのか…早く行って見てみようではないか!」

階段を下りながら私たちは話し始める。先程の壁面のパズルも、誰も入れさせないような迷路のような道も何もかもこの奥に隠されているものが大切だからだと思えたからだ。何かあるのか…おそらくレシラムについての何かだとは思うけれど…ちよつとだけ楽しみでもある。原作知識がなくなつて怖いと思つたこともあつたけれど、何も知らないでこうやって楽しめるのもいいかなと思つたからだ。とにかくこの奥に何かあるのは絶対だろうとアララギ博士の父が期待し、私たちも楽しみに思いながらも歩き続ける。

——そして階段を下りた先にあつたのは白くて丸い石。いや、ライトストーンだつた。

まだ確実にライトストーンとは言えないけれど、でも可能性は高いかもしれない…ま

だアララギ博士が確認していないけれど、おそらく本物なのだと、直感した。もしかしたらここも原作でやってた話かもしれないけれど、あまり覚えてないから何とも言えない……まあ後で分かることかな……？

そしてアララギ博士の父がこれを持ち出して確認してみようと言ってライトストーンのような石を掴み、手に持った。すると大きな炎が発生し私たちから遠ざかり、天高く上り、雲よりも高く昇って行った。

「な、なんだったの今の……」

『カゲカゲ……？』

『ピチュピツチュ？』

「石から……いや、ライトストーンのようなものから発生したね……！」

「やっぱりあれは本物なのかしら……？」

『キバキ？』

『いや、まだ断定づけるものじゃない……詳しくは調べてみないと分からないだろうな……』
「……とにかく、外に出ようぜ？」

『ピツカ！』

炎を発生させたライトストーンみたいなものを手に取ったアララギ博士の父は怪我

がなく、大丈夫そうだ。そして兄と同じように外に出ようと言ってきたため、私たちもその言葉に従い、外へ出る。ライトストーンのような石はニツクさんが持つてきた専用の箱に入れられて、持ち出すことに成功した。

そして外に出てアララギ博士が簡単に調べてみると、これはライトストーンの可能性が高いと言つてきた。だからおそらくライトストーンなんだろう…なんだか嫌な予感がするけど…大丈夫だよね…？

・・・・・・・・・・・・・・・・

「…え？Nさん…？」

『ピッカ？』

突然、Nさんが現れて、ライトストーンを奪つて行つた。ライトストーンは僕が預かるよと言つて、走つて行つたのだ。兄がNさんを追いかけたため、私たちもその後を追いかける。ルカリオ達も追いかけてきたんだけど、走つていたアララギ博士の父が転んで岩に大きくぶつかったため、大丈夫かと足を止めている。それを確認しながらも、私とヒトカゲとピチュー…そしてその前にNさんを追いかける兄とピカチュウの姿が

あった。

けれど…。

「うわっ!?!」

『カゲカゲ!?!』

『ピツチュウ!?!』

「ヒナツ!!」

『ピツカ!!』

「ヒナちゃん!?!…」

私が走っていた地面がいきなり沈み、身体が半分埋まってしまった。それを走っていた兄が引き返して助けようとしたけれど、その地面さえ崩れ、その下にある大きな穴に落ちそうになる。Nさんが躊躇したような表情を浮かべていたけれど、このままではいけないと思ったのかすぐに私たちの方へ行き、引っぱり上げようとする…。

「くッ!」

「ダメですよNさんまで落ちる…!」

『ピツカア!』

「そうですよ！ 私たちなら大丈夫だから…！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピツピチュ！』

「いや…見捨てるなんてこと僕にはできない!!」

地面を何とか掴み必死に私たちを抱き上げて落ちないようにしている兄の手を掴み、引っぱろうとしているNさんだけれど、そのNさんの地面も崩れてしまい…

「うわッ！」

「ッ！」

『ピ!?!』

「ちよっ何で…!!?」

『カゲエエ!!!』

『ピツピチュウ!!!』

私たちは下の薄暗い穴に落ちていく。そして、そのまま落下中に意

識が薄れ気絶してしまった…。

第一百五十六話く閉じ込められ、Nは語るく

…こんにちは、妹のヒナです。現在私たちは出入り口のない穴の中に座っています。ライトストーンが光り輝いているためパニックにならずに済み、良かったと一安心しています。

最初は落下中に意識を失っていたんですが、兄が助けてくれたおかげで怪我一つなく、起きた時には心配して泣いていたヒトカゲとピチューにきつく抱きしめられた。…心配かけてごめんね。

「出入り口がなくて…それでさつき落ちてきた穴も塞いでる…じゃあどうやって外に出たらいいの…?」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

「大丈夫だ。外にはアイリスたちもいるし…心配すんなよ」

『ピツカ!』

「ああ、そうだね…」

外にいるみんなに任せて私たちはそれぞれ座り込み、救助が来るのを待つことになった。兄は座る前に近くにあつた壁を調べていて、周りを見渡していたからもしかしたらここから出る方法を考えているのかなと思つた。けれど外の救助を待つことにしたらしい。私とヒトカゲとピチュウと…そしてNさんの近くに座り、待ちながら話していくことになった。

話すといつても、Nさんが疑問に思つたことを独り言のように呟いていた。私たちと別れてからずっと考えていたことを、Nさんと一緒にいた女性…ヘレナさんとバーベナさんが何で人間を否定するのかを…そして私たちが望むポケモンたちとの絆を…。

「僕は不思議だと思つた…。ヘレナとバーベナが人間を否定し、ポケモンと人間が別離した世界を望む一方で、君たちのようにポケモンと人間が絆を結び、信頼し合っている関係を築く…世界を見てきたときもそうだったよ。ポケモンを家族のように思う者。共に仕事で汗を流す者…あるいは、ポケモンを捨ててしまう者…人の考えることは本当に様々だと感じた」

「それは…やつぱり見てきた世界が違うからじゃないですか？」

『ピイカ？』

「見てきた世界が…違う…？」

「そうですね…お兄ちゃんの言う様に、人はそれぞれ違う考えを持っています。それはつまり、見てきている光景が違って見えているのと同じようなことだと思いませんか？」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

Nさんの疑問は世界中で起きている人間とポケモンとの関係、そしてその考え方だった。ヘレナさんとバーベナさんが人間を否定しているということは、私たちの関係を否定しているということ。私たちにとってポケモンと人間がそれぞれ離れて暮らすというのにはあり得ない世界だと思っっているから、やつぱり見てきたもの、考え方の違いによって変わるものなのだろうと思う。それぞれの人間がいて、様々な関係を持っているからいろんな絆があるのだと私は信じている。兄や私たちのようにポケモンを家族だと思ふ者たちがいて、そしてジュンサーさんやジョーイさんたちのようにポケモンと仕事を共にしていく者もいる…つまり、考え方の違いとは世界の見え方の違いだと思う。世界がポケモンたちを傷つけ、悪意が蠢くと信じている者は、すべての人間がポケモンたちを傷つけていると錯覚する。逆に人間というポケモンたちは皆幸せだと思ふ者は、

町で見かける人とポケモンの姿を見てああ皆が幸せなんだと誤解する。…まあつまり、自分たちの考え方、見えている光景の感じ方によって違ってくるということだと思う。だからヘレナさんとバーベナさんも、私たちとは違った見え方をして、考えているのだろう。それこそ、ポケモンと人間がそれぞれ分かれて暮らしていくと言う世界を望んでいるように…。

Nさんは考えるような表情をしてから、兄に向かって言う。

「サトシ君はレックウザに強き者として恐れられ、そして恩人として感謝の念を抱いていた。でも、他の人間だったらそうはいかないだろう…キミだからこそ、そう感じているポケモンたちが大勢いるはずなんだ。他の人間だったら捕まえて研究材料にしたいと望む者、捕まえて自慢したいと考える者がいるかもしれない…」

「それは…どうなんでしよう？俺の他にも、例えばアイリスとかデントとか…もしかしたらほかにも大勢…レックウザを見たとしても俺と同じように友達になりたいと思うかもしれないよ。俺だけじゃない、ヒナだってそうだしな？」

『ピイカー！』

「まあ一応そうなんだけどね…でもお兄ちゃんの言うとおり、レックウザを見たとしても、私たち以外の人間全員が捕まえたり、研究材料にしたいと望みませんよ。それこそ…ヒカリさんとか、ハルカさんとか…伝説と仲が良いですからね」

『カゲカゲ!』

『ピッチュウ!』

「ヒカリ……と……ハルカとは一体誰なんだい……?」

「俺が他の地方を旅していた時に同行していた仲間ですよ。ヒカリは……シンオウ地方で伝説と呼ばれるグラティナやシェイミに好かれていて、仲間として一緒に旅したいと望まれてついて行ってますし……それにハルカも、マナファイという伝説のポケモンから母親として見られて……でも海で生きるマナファイのために幸せを祈って別れたんです」

『ピイカ』

「まあそれでも、ハルカさんは無事にマナファイと会えましたよ? マナファイもその時再会を喜んでいましたし……レックウザだけじゃない……伝説のポケモンだからと邪な気持ちで捕まえようとする人はいるかもしれませんが、それは全員じゃないです。私たちやヒカリさん達のように……いろんな人がいて、そしていろんな関係を持っているんですよ!」

『カゲカゲ!』

『ピッチュウ!』

「……君たちは何で、ポケモンと仲良くなりたいたいと望んで一緒にいる? トモダチ……とは違った感じがするけれど……」

Nさんが伝説を捕まえようとする人間はいるかもしれないけれど、それは全員じゃないという言葉に納得し、少しだけ笑みを浮かべていたけれど、すぐに気を引き締めて口を開いた。そして私たちにポケモンとどう望んで一緒にいるのか、そしてその関係を聞いてきた。私と兄と…そしてピカチュウたちと一緒に顔を見合わせてからその質問に答えた。

「俺たちはポケモンと仲良くなりたい…もつともつと知って理解したいと望んでいるんです！」

『ピイカ！』

「お兄ちゃんの言うとおりです！…それに私たちの関係は友達のような大切な家族のような関係ですよ。切っても切れない絆なんです！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「そうか…キミたちのような人間がいるということが…とても嬉しいよ…！」

Nさんは笑って私たちを見てくれた。その笑みは、私たちとの関係を受け入れてくれたと感じて、私たちも笑顔でNさんを見つめた。ヘレナさんやバーベナさんもNさんのように、ポケモンと人間との絆を信じてほしい、分かってくれたいと望みながらも――

.....

———Nさんと話し合った後。何か、大きな音が聞こえてきたのを感じて、私たちは立ち上がった。

「何だ……？」

『ピイカ……？』

「大きな音……爆発音かな？」

『カゲエ……？』

『ピチュウ……？』

「ツ……トモダチの声が……悲鳴が聞こえている……！」

Nさんが悲痛な表情を浮かべて天井を見上げた。でも見えているのは土と壁と岩だけの光景。外に出ようと思っても出られるか分からない状況。外で何が起きているのか私たちは気になった。Nさんが外でポケモンたちの悲鳴が聞こえているということだ。何か問題が起きたということだ。

「外で何か起きてるってことなの……!？」

『カゲカゲ!』

『ピチュピツチュ!』

「もしかしたら…プラズマ団かもしれない…!」

Nさんはプラズマ団がこちらに襲いかかってくるかもしれないと言ってきた。もしそうなら外にいるアイリスたちが危ないということ、プラズマ団が何かやろうとしていることがわかる。でもこのまま外に出られないとなったらどうすればいいのだろうか…。

「外からの救助はもう期待できないし…このままここにいるしかないの?」

『カゲ…』

『ピチュ…』

「いや、そんなわけないだろ?」

『ピカピカ?』

兄が自信満々な表情でボールを次々と投げて手持ちのみんなをボールから出す。そしてここから脱出するために穴を掘るぞと叫んできた。

凄く無茶な気もするけれど…でもそれができちゃうのが兄なんだよねと思い、苦笑してしまった。そしてその間も、Nさんは驚いたような表情を浮かべていたけれど、すぐに真剣な表情で兄たちを手伝おうとして行動していた。私たちもその手伝いをしない

といけないと思い、ヒトカゲ達と一緒に兄たちに近づいた――。

第百五十七話く兄は考え、行動したく

こんにちは兄のサトシです。閉じ込められた地下からようやく抜け出し、外に出ることに成功したんですが、そこで待っていたのはプラズマ団の集団と捕まっていたアイリスたちの姿でした。

Nさんと妹達が穴からなんとか抜け出したため、俺は妹達を後ろに庇い、目の前にいる操られている敵の集団を見た。

「っておいおいルカリオ……お前何操られてるんだよ……!」

『ピカピツカ!』

「ルカリオ……」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『……………』

目の前にいるのは、白の遺跡に到着したときに見たポケモンたち。人と一緒に活動し、遺跡を発掘しようとしていたポケモンたちが今は操られ目が真っ赤に染まっている。…そしてルカリオもその中にいた。ルカリオの目は真っ赤に染まり、俺たちを敵として認識し、戦おうとしていた。

…お前俺たちが地下に閉じ込められていた間に何やってんだよと苦笑する。まあルカリオもポケモンだし仕方ないとは思うけど…でも後で修行不足だとか言っただけ落ち込まないよな?とも思ってしまった。アーロンさんから休暇としてこっちに来たと言っていたけれど、その休暇返上して修行三昧になったりしそうだ…まあそれは後で考えるか。

「さて…全員正当防衛として怪我するかもしれないけど…まあそれについては文句は言わせないということ…やるか?」

『ツ——
!!!』

俺の手持ちのポケモンたちは皆やる気を上げ、大声で叫ぶ。リザードンなんて早々にかえんほうしやをルカリオに飛ばしているぐらいだ。…でもルカリオはさすがというべきか、それとも操られているせいで能力が向上しているせいかな…まあどつちもだと思いが…すぐにリザードンのかえんほうしやを避け、そしてはどうだんを放ってきたのだでもそれはリザードンのドラゴンテールによって消滅したため何とかなっただけだな。

「リザードンにチャオプー！かえんほうしやバージョン炎の渦!!!」

『グオオオオオオ!!!』

『チャオオオオオ!!!』

『……………』

「ワルビアル後ろ!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『ワルビ?!ワルツビア!!!』

リザードンとチャオブーのかえんほうしやがゴルグ達に命中し吹っ飛んでいく。でも操られているルカリオはそれをすぐに避けて反撃に出たため、ワルビアルが妹達の声を聞いてとっさにあなをほるで攻撃を避けて技を放とうとする。でもルカリオは波動でそれがすべて分かつているのか、すぐに避けていく…。

「一番の最難関はルカリオか…？避けまくるのうまいからな…」

『ピカピカ！ピカッチュウ！』

『タジャ！』

「…よし、ピカチュウ、エレキボール！ツタージャ、エレキボールを巻き込んでリーフス

トーム!!」

『ピッカアアア!!』

『タジャアアア!!』

『ミツジュウ!!』

「よしミジュマル！ハイドロポンプ&アクアジェット!!」

『ミジュマアアアア!!』

ピカチュウのエレキボールを巻き込んだリーフストームが電気を帯びたリーフストームへ代わり、ローブシンたちを巻き込んでいく。吹っ飛んだローブシンたちを見

て、警戒しているドツコラーたちにミジュマルの攻撃が当たり、倒すことに成功する。そして倒れたローブシンたちも、グループ達も起き上がることができず戦闘不能と言った状況だ。とにかく、ルカリオさえ何とかすればいい。

この状況なら何とか勝てるはずだ――。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「いい……良いですよサトシ君……!!」

その頃、アクロマは崖の上でサトシ達の戦いを見て興奮していた。能力を上げ、操っているポケモンたちをも凌駕する力を引き出し、なおかつ彼らに指示を与えているこの光景を一種の実験として見ていた。操っていたルカリオは最初は抵抗し、操るのができないとされていたが、洗脳の力を上げたために抵抗ができなくなりこうしてサトシと戦っている姿を見ることができた。ローブシンたちではできないその姿を、見ることができたのだ。

「ああ……本当に……良い!!」

「…アクロマ?」

近くにいたプラズマ団が冷や汗をかき、寒気がしそうな雰囲気を感じ取ったぐらい、アクロマの心はサトシに夢中になっていた。実験体サトシを操りたいという気持ちが高まり、レシラムと同様に興味をそそられる生命体だと感じていたのだ。

そしてアクロマは、プラズマ団の計画にはなかった機械を作動させ、実行に移そうとする。

「…つサトシ!!早くポケモンをモンスターボールに移して!!操られてしまうわよ!!」

「いいいえ…そつちじゃないですよ…興味があるのはね…」

アイリスが機械を作動させようとするアクロマに気づき、注意しようと叫ぶが、アクロマの目はポケモンに移ってはいない。サトシだけを見て、動いていた。

サトシ達は、崖の下でモンスターボールに戻すよりも先に機械の方を潰してしまおうと考えて探していた。操られ攻撃しようとしてくるルカリオを避けながら、技を防ぎながらになってしまいがアクロマの作り上げた機械を壊そうと辺りを見回していた。

そして、ようやく妹であるヒナがそれに気づいた時、もう遅かった。機械は作動し、サトシに狙いをつけ、避けられてもすぐに追尾するように設定された機械を発射する。

「待った!狙いはサトシ君だ!!」

「え、なんだって!？」

「サトシ…サトシ!？」

「お兄ちゃん危ない!!!」

———そして起こった事態。サトシは自分の後ろの…崖の上に機械があると
いうことに気づかず、その声に一瞬行動を停止してしまった。その間にも発射された恐
るべき機械がサトシの首元を狙ってくる…。

ヒナがサトシを狙っている機械に気づいて走り出し、サトシに抱きついて機械を躲そ
うと動く。そしてサトシに向かって走って抱きつこうとした反動でヒナとサトシは一
緒に倒れて転がり…ピカチュウたちと離れた場所で止まった。その出来事は…一瞬の
沈黙が周りに流れたぐらい、驚愕に染まっていた。アクロマの行動にも、サトシが避け
られなかったという事実にも…そしてヒナが動いたということにも…。

「…ああ。想定外の出来事ですが…まあ良いでしょう。最初の実験としてはね…」

アクロマは残念そうな表情で機械を見て、そして倒れている兄妹を見た。兄妹であるサトシとヒナは両者とも倒れている。でもすぐに2人は起きた。

兄であるサトシが起きて周りを確認し、ヒナを見つける。そして倒れていたヒナがゆっくりと起き上がった。

「……………」

「……………ヒナ？」

ヒナの首には首輪のような機械が取り付けられていて、開かれた目は赤く染まり無表情のままサトシたちを見つめていた。その光景に周りのすべてが驚いていた。アクロマのやった無責任な行動にプラズマ団が…そして妹の激変にサトシ達が驚き、目を見開く。

サトシが状況をすぐに理解し、崖の上にいるアクロマ達を睨んだ。そしてピカチュウたちに向かって攻撃を指示しようとする。それは全て機械を壊せばヒナが助かると

思ったからだ。それに機械さえ壊せばヒナだけでなく、ルカリオ達も助けられるとそう信じて口を開いた。

だが、アクロマはそれを想定していたのだろう。サトシが口を開く前に無駄だと笑って、ヒナの方を指差す。

「機械を壊そうとしても無駄ですよ。《あれ》はこの装置とはつながっていませんし、あの首輪を外さなければ意味がありません。…それに私の指示はちゃんと聞きますからね?——例えばルカリオの攻撃を受けて死ぬと言う言葉にも……」

「お前……!」

『ピイカ!』

『カゲカゲ……』

『ピツチュウ……』

サトシがアクロマの言う声に怒ったような表情を浮かべ、睨みつける。その怒気は凄まじく、近くにいたNや遠くにいたプラズマ団とアイリス達が息をのんで彼を見つめるほどだ。それほどまでにサトシは怒っていた。何もできなかった事実にも、そしてヒナに

襲いかかった機械に……。自分がターゲットにされたにもかかわらず油断をして避けられなかったという不甲斐なさにも、ヒナを助けられないというこの言葉にも……。すべてを怒り、拳を握りしめてアクロマを睨んでいた。だがアクロマはそんなサトシの怒りなど気にせずため息をついて独り言を言う。

「私としてはサトシ君を実験台にしたかったんですが……。まあ良いでしょう……」

狂ったような笑みを浮かべるアクロマは、自分が始めた実験を開始した。サトシを操りたいと思っていた欲望は、ヒナを操る前座として思考を変える。ヒナを操ったことで起きたバグを解消し、サトシを完璧に操れるようにしようと考えていたからだ。そしてサトシにとつて……。周りにとつて非常に不愉快だと思われる実験を、アクロマは笑顔を浮かべながら始めていった。

「さあ行きなさい。私の可愛い実験動物^{お人形}」

その声に反応したのは、目を真っ赤に染め上げ、操られているルカリオの近くに立ったヒナの姿。その姿はまさしく心がなく、無表情なまま人に操られるだけの人形の姿。でも、サトシにとつてその姿は苦しい光景に映った。何もかも変わってしまった自分の妹に、サトシはどう解決すればいいのか困り、悔しそうな表情を浮かべて、拳を握り叫びたい衝動を抑える。

操られたヒナは、アクロマの言葉を聞き小さく口を開いた。

「…了解しましたアクロマ様。敵対象を確認、殲滅します」

第一百五十八話　科学者は何を思う?

「アクロマ貴様!勝手な真似をするなどゲーチス様に言われていただろう!!」

「いえ、私が聞いたのは、Mr.ゲーチスの邪魔をするなどという言葉ですが?それに《あれ》を操ったところで邪魔になるところかむしろいい人質となる:それに実験も出来て一石二鳥ですよ」

プラズマ団にヒナを操り、勝手にいろいろと機械を作動させ行っているアクロマに怒って叫んでいたが、アクロマは冷静に言う。自分の実験は邪魔どころかむしろ貢献しているのだということ。そしてその言葉に否定できなかったプラズマ団はうめき声をあげてアクロマを睨むだけに抑えた:。

———今はまだ、ゲーチスは来ていない。

「クツ…ピカチュウ、10まんボルト!!」

『ピカピカ…ピカツチュウ!!』

「……………ルカリオ、はどうだん」

『……………』

ピカチュウの10まんボルトは妹であるヒナが操られたというサトシの動揺を感じ取り、自身も同じように動揺したからかいつもより威力は低い技を放つ。それを操られ能力が向上したルカリオのはどうだんによって防がれてしまった。ヒナは操られただけじゃないらしい。冷静にバトルを見て考え、どう指示すればいいのかというトレーナーとしての能力の力が伸ばされていた。そしてサトシは目の前の光景に動揺し、手持ちのポケモンたちも攻撃しようと思えずにいつもより調子の悪い技を放つて何とかバトルの形にしていた。リザードンがいつまでも調子出ないサトシにキレてサトシに向かつて炎を放つ。サトシはそれを避けきれず、受けてしまった。だが、サトシは火傷などを負わず、むしろ炎を放つたりリザードンの激励に冷静さを取り戻したかのように見えた。

『グオオオオオオオオ!!!』

「リザードン…そうだな。このままじゃいけないよな…リザードン、ドラゴンテール!!」
「おやおやこれはいけませんね…さあ《防ぎなさい》」

「…はい。アクロマ様」

『……………』

『ツツ?!』

「生まれリザードン!!!……………アクロマ…!」

リザードンの素早いドラゴンテールがルカリオに当たりそうになった瞬間だった。アクロマがこのままルカリオを戦闘不能になるかもしれないという事態を見て、小さく笑みを浮かべて言ったのだ。そしてヒナはその指示に従い、動いた。ルカリオの前に向かって、動いた。

それを見て驚愕したりザードンがドラゴンテールを放つのを止めてすぐに後ろに下がる。そうして見えた光景は、気分が悪くなるような光景だった。

ヒナが両手を広げてルカリオの前に立ち、リザードンのドラゴンテールを受けようとしていたのだ。

——アクロマがやったことは、サトシにとってバトルとは言えないこと…。

妹を使った明らかな牽制だった。人質として操っているんだぞという、牽制だった。

このままルカリオを攻撃しようとしても、ヒナがそれを防ごうとして受けに行く可能性が高い。サトシのポケモンたちはレベルが強く、手加減をしてもポケモンにとっては大丈夫かもしれないが、人間にとつて怪我以上の危険性が高いと考えていた。

このままではいけないというのに、技の指示を出すのを躊躇させてしまう光景が広がっていたのだ。

「さあ見せてくださいいよサトシ君！君の答えを！実験動物を犠牲に止めるか、そのまま敗北を選ぶのか…どちらかをね!!」

アクロマはただ単純に気になっていた。操られているルカリオや他のポケモンたちに対して戦闘不能になってしまうような攻撃はすぐにヒナの身体によって防ごうと指示をしていて、まともな攻撃をできなくしたことによるサトシの選択に気になっていたのだ。もちろん、普通の操られている人間だったら攻撃されそうなポケモンの間に入つて庇うという行動はできないだろう。だが修行をし、素早く動けるようになったヒナだからこそ…そして操られたことによつて能力と指示の向上ができたヒナだからこそできたこと。ヒトカゲ達と強くなり、守ろうとした力が…皮肉なことに今ここで彼らを殲

滅しようと思わなかった。でも、サトシは負けを認めない。このままの状態でもいいとは思わないからだ。だから、ヒナを動かさないという形でルカリオを攻撃することにしました。

「ミジユマル、アクアジェットでルカリオに回り込め、ツタージャはヒナがルカリオに近づかないようにつるで援護！リザードン、かえんほうしゃ！」

『ミツジユウウウ!!』

『タジャ!』

『グオオオオオ!!』

「……ルカリオ、一歩右二歩後ろ……そのままジャンプしてはどうだん」

『……………』

「…ハッ！流石俺の妹と言ったところか…？まったく嫌になるな…本当に…」

『ピイカ…』

『ミジユ…』

『タジャ…』

『グオオ…』

『カゲ…』

『ピチュウ…』

ヒナで攻撃を防がれないように、ツター ज्याの援護でルカリオを攻撃しようとする指示を飛ばしたけれど、ヒナは的確な指示によってかえんほうしゃとアクアジェットを避け、その余波を受けないようにはどうだんで防いだ。普通のバトルだったらその指示に感心している所だが、今は違う。この状態を維持してはいけないと思うのだから。

サトシは拳を握りしめて考える。このままではいけないということ。でも直接倒しに行こうとしても…ヒナの首輪を壊そうと動いたとしても、アクロマがそれを想定して何かヒナに致命傷を負わせようとしてくるかもしれないと考え、反撃に移れないのだ。ピカチュウたちも同じように考えていた。サトシと同じようにルカリオ達の攻撃を防ぐことしか、やるべきことではないと感じていたのだ。そしてアクロマが後ろからあの機械で自分たちを操ろうと狙ってくるという可能性にも十分警戒しながら、動いていた。その消耗は激しく、ある意味チャンピオン戦の時よりもキツイと思える戦いになっていた。ヒナが人質のような役目でサトシ達に立ちほだかり、ルカリオを指示して攻撃してくるその行為が、何もかも苦しいと思えた。それを見ていたヒトカゲとピチュウは涙を浮かべ、悲しんでいた。この目の前の光景を、兄であるサトシと同じように苦しみ、見たくないという考えとその光景による絶望が突き刺さった。

——このままだと駄目だとそう考え、どう突破するのか考えていた時だった。

「やめるんだ!!」

Nの心からの叫び声に周りが一瞬停止した。それぐらい大きな声でアクロマ達…いや、プラズマ団に向かって叫んだ心の声だった。Nが自分の手に持っているのはライトストーンの入っている箱。それをアクロマ達に見せる様にして、口を大きく開いて叫ぶ。

「このライトストーンがどうなってもいいのか!？」

「N…?!何をするつもりだ?!」

捕えられていたハンサムがNの行動に驚愕し、叫ぶ。ライトストーンはプラズマ団の目的の物であるけれど、それと同時に他の人間にとっても重要なものだと考えられていた。だからこそ、Nのすることはプラズマ団を止める行為だとしても、ほかの人間にとっても害となる行為だと考え、叫んだのだ。でも、Nはそんなことどうでもよかった。ヒナたちを解放することができたらと…悲しむサトシ達やヒトカゲ達を見ていられなくなつて飛び出したのだ。

「お前たちが欲しいのは…僕とこのライトストーンのはずだ！ヒナちゃんたちのコントロールをやめれば…これを渡す！だがそうでなければ…！」

「チツ…いかがいたします？アンジーさま…！」

「我々の目的はライトストーンのみだ」

「分かった！取引に応じよう！さあ、ライトストーンをもってこつちへ来るんだ！」

「Nさん…！」

「大丈夫だよ、サトシ君。巻き込んでしまつて本当にすまない…！」

プラズマ団の人たちが話し合い、Nの声を聞いて答える。Nの言うとおりコントロールをやめようという答えを。その間、アクロマは何も言わず、ただその話し合いと取引を聞いて見ているだけだった。

そしてNはその通りにライトストーンをもつて近づいていく。サトシはNのことを気にかけ、捕まる必要はないと考えたが、ヒナたちがコントロールされている以上取引をしないといけないということも感じていた。Nはサトシを見て、罪悪感を抱いているような表情を浮かべていたが、すぐにプラズマ団に向き合い、近づく。サトシ達はNを見て、そしてヒナたちを見ていた。でもNが近づいてライトストーンを渡しても、Nが捕えられたとしても何も変わらなかつた。それに気づいた時、プラズマ団はライトス

トーンをもって、そしてNを捕えている状況だった。

Nは取引を破ったことに対して怒り、プラズマ団に向かって大声で叫ぶ。

「話が違うじゃないか!」

「いえ、確かに取引はしましたよ?それに応じてルカリオ達の支配は解きました。ですが首輪からのコントロールを止める方法は首輪を取り外すほかにない:それは最初にも言いましたが話を聞いていましたか?」

「クッ!!」

アクロマが馬鹿にしたような表情でNのことを蔑み、笑う。Nはポケモンたちはコントロールの支配から解かれたというのに、ヒナを解放できなかつたことを悔やみ、そして自分の行動によってサトシ達を劣勢にしまったことに深く後悔した。でももう遅いことだった。サトシも、Nのことを守れず、そのまま見過ごしてしまったことに後悔していた。

「:ゲーチス様の到着だ」

——何もかも、サトシ達にとって良くないことが起きた後に、プラズマ団のリーダーが到着してしまった。

第百五十九話く変わり、変わる……

ヘリコプターが近づき、降りてきたのはプラズマ団のリーダーであるゲーチス。ゲーチスはNから奪い取ったライトストーンを手に取り、ある祭壇へ向かってそして祈りをささげた。祈りによってライトストーンが光り輝き、このままレシラムが復活するかと思えた時に、霧が深く発生していった。そして霧が発生したために何も見えない状況の中、Nを捕えている鉄の縄を壊す攻撃がアイリスたちには見えた。

「これは……？」

「ヘレナさんとバーベナさんが来ているんだわ!!」

「誰だいそれは……？」

「えっとNさんの知り合いと言いますか何と言いますか……」

「まあそれは後でにしましょう…キバゴ、ちよつとお願いしてもいい？」

『キバキ！』

アララギ博士の父親がヘレナとバーベナについてデントから話を聞いていた間、アイリスが髪の中に隠していたキバゴに鉄の縄を壊してほしいとお願いし、キバゴはその通りにする。

そしてサトシはその霧が発生している間に動いていないヒナのもとへ走り、首輪を壊そうとする。だがヒナは近づいても首輪を取り外そうと目の前でサトシが動いたとしても何の反応を見せず、ただ小さく口を開いたただけだった。

「これさえ壊せば…！」

「……ルカリオ」

『……………』

「クツ…」

ヒナが感情のない声でルカリオを呼び、その声にルカリオは応じた。解放されていたと思つたルカリオはコントロールから逃れられていなかった。

そしてそのルカリオがヒナの声を聞き、無表情で再びサトシに攻撃してきたのだ。しかもその時サトシはヒナの首輪を壊そうとして近づいていたため、サトシがどうだん

を避けてしまったらヒナにも被害が及ぶと考え、首輪を壊す前にヒナを抱きしめてはどうだんを避けようとジャンプする。でも大きく飛び上がったことよってヒナが動いてしまい、サトシのもとを離れ再びルカリオに近づく。ヒナたちを解放するチャンスを失ってしまったのだ。

そして霧が晴れた時、他にも悲惨なことが起きていた…。

霧が発生している間にサトシ達やアイリス達が行動をしていた時、起きたことはまだほかにもあった。Nがヘレナとバーベナを説得し、一緒に戦おうというのだが、ヘレナとバーベナはそれに応じようとせず、Nを逃がそうとする。

そしてその時、霧を消そうとアクロマが動き、ヘレナとバーベナの近くにいて霧を生かしていたゴチルゼルとサーナイトがプラズマ団のアクロマの機械によつて操られてしまったのだ。霧を発生させていたポケモンのゴチルゼルとサーナイトが操られてしまったため霧が晴れてしまい、ヘレナとバーベナは驚愕した表情を浮かべていた。そして味方だったはずのサーナイトとゴチルゼルがヘレナとバーベナに攻撃をしてしまった。それにNが叫び、彼女たちに近づこうとする。でもその前に操られているポケモンたちが動き、Nを取り囲んだ。ヘレナとバーベナも吹っ飛んで行ってしまった先でプラズマ団に囲まれ、逃げられなくなってしまう。

——そしてその間にゲーチスが、祈りをささげ無事にレシラムを復活させてしまった。レシラムはNに何かを伝えようとしていたが、ゲーチス達がそれを遮り、機械によってレシラムをコントロールし…プラズマ団の支配下におかれてしまったのだ。レシラムが操られた光景を見たNは叫び、近づこうとする。でもそれをプラズマ団が許すはずもない…。

「レシラム…そんな…駄目だ!」

「ふん。無駄なことを…レシラムよ!まずはその邪魔者達を焼き払え!!」

『キュアアアアアアアアアア』

「グアアツ!!!」

!!!

「N!」

「大丈夫ですか…N!」

レシラムの炎を受けたNはヘナとバーベナの近くまで吹っ飛び、倒れてしまう。絶することはなかったみたいだが、その威力は絶大だ。怪我をしてうめき声を上げるNを心配そうに近づき、レシラムから遠ざける。

そしてコントロールされたレシラムが次に攻撃対象として見たのは、サトシ達の方だった。サトシ達に向かってまたもクロスフレイムを放ったため、サトシは口を開いて

指示しそれを防ごうとする。

「リザードン、チャオブーかえんほうしゃ！ ツタージャ、リーフストーム！ …ワルビアルにミジユマル、アイリスたちの方へ行つてくれ！」

『グオオオオオオ!!』

『チャオオオオ!!』

『タアジャアア!!』

『ワルビ!』

『ミツジュウ!』

ワルビアルが穴を掘って行ったため、その穴にミジユマルが入って、アイリスたちの方へ向かう。サトシはとにかくこれ以上の悪化を防ごうとしていたのだ。Nたちの方は自分の後ろの方向にいるためサトシが防げば何とか無事に済むだろうが、アイリスたちからは離れているため問題が起きたら大変だと考え、ワルビアル達に向かってもら

う。ピカチュウはヒナたちの方を見て、何か行動したらすぐに対応できるようにしてもらってるため安心だ。…いや、これは安心とは言えない状況だろう。レシラムが復活し、プラズマ団に操られてしまったのだから。

通常時のサトシだったら、レシラムが復活しても、操られてしまったとしても問題はなかった。すぐにボコればいいのだから。でもこの場合はそれができなかった。…妹であるヒナとルカリオ達がコントロールされ、人質となってしまうているのだから。

そして、サトシは周りで起きている事態に舌打ちをして目を閉じる。

（ヒナを助ける方法と、プラズマ団をどうにかすることを…どちらかを選べ…いや、どっちも選べる方法を考えるんだ！）

ヒナを選んだ場合、プラズマ団が周りに対しての被害を増やし、そしていずれアイリスたちに危険が及ぶだろう。それはできないと考えを捨てる。でも逆にプラズマ団の方をどうにかしようとした場合、コントロールされているヒナがサトシの放つ攻撃をプラズマ団から防ぐために…自分から受けに行くのだろうと考える。幼くて弱いヒナが攻撃を受けた場合、どうなるのかサトシには想像がつかなかった…というよりも、想像したくない考えであった。だからこそ、ヒナたちとプラズマ団の両方を解決する方法を

考えていたのだ。

ゲーチスとプラズマ団はそのサトシの考えを嘲笑うかのようにレシラムを見てから叫ぶ。そしてサトシ達を倒そうを動いた。サトシ達は警戒し、攻撃してきたらすぐに防ぐようにしていたが、ヒナが反撃の邪魔をするためまともに動けないでいた。

「ふん…レシラムの攻撃を止めるとはさすがと言っておこう。だがこちらにはまだほかにもプラズマ団はいる！援軍が来るまで…いつまで耐えられるか楽しみだ…！」

「それはどうかな!？」

——だが、ゲーチスの声を遮る何者かの声が、遺跡内に響き渡った。

第一百六十話く終わりよければすべて良しく

「それはどうかな!？」

「何だ!?! いったい何者なんだ!!」

聞き覚えのない声が遺跡内に響き渡ったことでプラズマ団の1人が周りを見渡しながらから叫ぶ。そしてその声が聞こえてきた方向から大きな爆発音を響かせ、プラズマ団の出したポケモンを吹っ飛ばしながら《彼等》はやって来た。

「なんだかんだと聞かれたら」

「答えてあげるが世の情け」

「世界の破壊を防ぐため」

「世界の平和を守るため」

「愛と真実の悪を貫く——」

「——もう悪のロケット団じゃないでしょ？」

「何よ邪魔すんじゃないわよジャリガール!!!」

「そうだそうだ！久々の口上だつてのに…!!」

『おみやーら今争つてる場合じゃないのニヤ!!!』

「…遅え…まつたく…」

サトシは笑みを浮かべて彼らを見た。でもその中にいるはずのない少女とポケモンたちが混じっていることに気づき、目を見開く。彼等は自分から進んでこの場に来たのだ。彼等…つまり、ハルカとサトシの手持ちたちはサトシを見て笑みを浮かべた。

そして予想していなかった再会に驚いた様子を見せたサトシに、ポケモンたちは近づいてきた。

『…ダネ』

「久しぶりだなフシギダネ…それにみんなも…心配してこつちに来ちゃったのか…」

『ツツ』

!!!!

フシギダネがサトシに近づき、サトシに話しかける。心配そうな表情で、大丈夫なのかと聞いてみると分かったサトシは小さく笑みを浮かべてありがとうと礼を言ったため、フシギダネ以外の手持ちポケモンであるベイリーフ達がサトシに近づき、再会の挨拶をしていく。たまに自分を置いてくんじゃねえよ馬鹿野郎!とばかりに技を放つポケモンもいたようだが、サトシはその技を躲すことなくあえて受け止め、またありがとうと礼を言っていた。

「…サトシ君」

Nはレシラムに吹っ飛ばされた時にできた怪我を抑えながらも、サトシ達の様子を見て笑みを浮かべていた。人間とポケモンたちとの絆の強さが、今目の前でサトシ達が再

会を喜び合っているのが本来の理想なのではないかと思ったからだ。

アクロマは興味深げにその光景を見て、そして小さく呟く。

「なるほど面白い…喋るニャースに強そうなポケモンたち…実に操りがいがありそうだな…！」

「…気をつけろよお前ら。あいつが狙ってる機械はポケモンたちを操るから絶対にあの機械に狙われるな…いや、その前にやらなくちゃいけないこともあるけどな…」

「……………」

「……………」

『ダネダネ…?』

「…ヒナちゃん?」

フシギダネとハルカが目を赤くし、無表情でこちらを見ているヒナとルカリオに驚愕していた。そして操られているのだと知り、アクロマ達を敵と認識し早く元に戻さなければとサトシの手持ちたち全員が警戒し、ハルカは自分の手持ちを出して戦闘開始の準備

備をする。

ヒナたちを止めて、アクロマ達を潰す。それがサトシ達の共通する考えであった。

「無駄ですよ…あの首輪を外そうと近づくのなら自滅するように設定してありますからね…！」

「そりゃあ説明どうも…でももう、負けるつもりはねえんだよ！」

『ピカピカアア!!!』

「ルカリオ…ッ」

『カゲエエエエ!!!』

『ピツチュウウウウ!!!』

サトシたちが何とかしてヒナに近づこうとしたその時、ヒトカゲとピチューが動き出した。ヒトカゲとピチューはそれぞれ泣きながらもヒナに抱きついて動きを止めている。振り払おうと動こうとするヒナだったが、ヒトカゲとピチューの声を聞いてその行動が止まり、何も指示を出さなくなっていた。

それを好機と感じたサトシはすぐさまピカチュウに向かって指示を出す。

「そうだよな…ヒナ。お前がヒトカゲやピチューに攻撃なんてできないよな…ピカチュウ、首輪に向かってアイアンテール!!」

『ピツカアアアア!!!』
『ベイー!』

「そんな…ポケモンの声を聞いて、支配を拒絶したというんですか…!」

ピカチュウがヒナのつけられていた首輪をアイアンテールで叩き壊した。目の色が通常に戻ったヒナはそのまま気を失い、地面に倒れそうになってしまう。そのヒナを優しくつるで掴み、心配そうに見つめるのはサトシのベイリーフだ。ヒトカゲとピチュウも恐る恐る近づいて、気絶しベイリーフのつるによって怪我をすることのなかったヒナに抱きつき、泣き叫んだ。その声は、本当に無事でよかったと安心してゐる声だ。

そして兄はそんなヒナたちに近づき、眠っているヒナの頭を優しく撫でてから前に向かって歩き始める。

前にいるのはプラズマ団と操られているレシラムだ。ロケット団の3人組も、ハンサムもサトシの横に立ち、ハルカは気絶しているヒナと彼女の傍にいるヒトカゲとピチュウとベイリーフの近くに立って守るために周りを警戒しながら襲いかかってくる敵を叩き潰し倒していく。

だが、ゲーチスがそれを見て大きな声で笑った。アクロマも無駄なことを…と考える

ため息をついているぐらいだ。

「ハッハッハ！倒したとしてどうなる？お前たちが現在味方になっっているポケモンたちがDr. アクロマの機械によってすべて無駄に終わるんだぞ!!」

「だから…」

「それは…」

『どうかニャ?』

「な、システムダウン…!!?」

アクロマが機械を動かそうとしたが、ロケット団のムサシが持っていた機械のスイッチを押されたとたんそのコントロール装置は動かなくなり、システムがシャットダウンされてしまう。そしてそのせいで操られていたポケモンたちが次々と気絶し倒れていった。…その中には、ルカリオの姿もいた。ルカリオはキバゴとミジュマルとワルビアルの活躍によって鉄の縄を壊し、解放されたアイリスたちによって無事に保護することに成功する。その様子を見たサトシ達はホッと安心して、そしてプラズマ団を見た。

プラズマ団は何故機械が作動しないのか驚き、疑問に思っているような表情を浮かべている。

その様子を見たロケット団が笑顔でプラズマ団に向かって指差しながら叫ぶ。

「お前たちの機械は全て壊させてもらった!」

「ちなみに援軍を呼んでも無駄よ? 私たちの仲間がすべてのプラズマ団のアジトを抑え、捕えているはずだから!」

『おみやーらが抵抗しても無駄なのニヤ!!』

「さすがだな…」

『ピカピカ』

「いやあそれほどでもあったりしちゃうわよ!」

「まあジャリボーイがここで目立ってもらったおかげで入れたただけだな…」

『ニヤー達の苦労はあまりしなかったのニヤ…』

「ちよつとその話は言わないって決めたでしょ!?!」

「ははは…」

『ピイカ…』

「クツ…ロケット団と言いましたか…なるほど…私の作品を…ですが、レシラムに対す

る装置はそれとは異なります。あの操られていた人間のように自体を壊さないと無理な代物……！」

アクロマは悔しそうな表情を浮かべていたが、すぐに勝ち誇ったような表情でゲーチスを見て、そしてレシラムを見ている。レシラムの首元には、ヒナが操られていた時につけられていた首輪がしてあったのだ。ゲーチスはプラスマ団が壊滅状態だということを知り、激昂しレシラムに向かって攻撃を指示する。伝説のポケモンであるレシラムならば、サトシ達など一瞬で消してしまえるだろうと自信があったから、焦ることはなかった。

……だが、その攻撃は無駄に終わった。炎を撃ち消す大きな力がそこに集まっていたからだ。

「なっ……これは……!!?!」

「伝説と呼ばれしポケモンがこんなにくささん!」

「よう、お前たちも来たのか」

『ピカピカ』

まった。それぐらい、恐ろしい光景だったのだ。

Nはというと、伝説たちがサトシに力を貸し、ヒナが傷ついたことに心痛め怒りに震えている心を感じ取って、あの兄妹だからだと納得し、笑みを浮かべていた。こんな恐ろしい光景を見たとしてもポケモンと人間の理想がそこにあつたんだと感じてしまつたからだ。もちろんヘレナとバーベナはこの光景を見て、恐怖心が半分と人間が好かれ絆ができたからこの光景ができたのか？と感じ取つた心を見て考えた疑問が半分らしい。でもプラズマ団たちのような醜態は見せず、落ち着いた様子でそれを見ていた。

… ついでに言っておくとデントとアイリスとミジユマルとワルビアルは伝説たちを見て興奮するアララギ博士の父親を止めるために頑張つていた。煩いし気絶させちゃおうかなとアイリスが呟きそれを有言実行するのはそう時間はかからないはずだ。

そして、プラズマ団のゲーチスはそれを見て伝説たちがサトシに味方をし、プラズマ団に敵意を抱いていることにサトシに興味を抱いたことが半分と…あ、これ死んだ？と思つたことが半分である。逃げようとしないう度胸にあつぱれと言つておいた方が良くもされない。そしてヒナを傷つけ伝説達やサトシ達を怒らせた元凶であるアクロマはますますサトシのことに興味を持ち、興奮したような表情ですべてを見ていた。

まあつまり、いつも通りだったのだろう…。マッドサイエンティストとしては…。

「てめえら…覚悟はいいな？」

『ツツ——
!!!!!!』

プラズマ団の行動と野望は、サトシ達の青筋浮かばせながら激怒している彼らのおかげであつという間に終了したことは言うまでもない——。

.....

「ああ、いい…良いですよサトシ君!!」

アクロマはボロボロになりながらも生還していた。もちろんゲーチスや他のプラズ

マ団も生存し、あれだけ伝説たちやサトシ達が暴れたというカオスだったのに死者は出ていないのだった。だが全員が捕まり、車に乗せられる間も震えていた。後に、ボロボロになりながらも逃げているというのに、伝説たちが…サトシ達が襲ってくる光景がトラウマになって悪夢を見てしまう者が続出するほど酷く怯えていた。そしてゲーチスは青ざめた様子で泡を吹き、気絶したところを車に乗せられていた。

つまり、楽しそうに鼻歌を歌い、今までの光景を何度も思い出しては興奮するのはアクロマだけだったのだ。それは研究対象としての興味であり、これからの目標となる人物だと…ターゲットにされた瞬間だった。

「…そうだ。サトシ君のクローンを作りましょう！そうすればより優れた研究データが出るはずです…ああ、楽しみですなぁ…！」

アクロマは、捕まった時も車に乗せられて移動する間も——まったく懲りていなかった。

まあこれからどうなるかはサトシ次第だろう…。

第百六十一話く後日談という名の……

「これが、伝説たちの……サトシ君たちの絆だったんだね……」

Nは先日起きた光景を思い出し、考えていた。Nたちはあの白の遺跡に戻り、少しだけ崩壊している部分を見てからここで何があったのかを思い出していたのだ。もちろんそれはNだけじゃない、ヘレナとバーベナも一緒に考えていた。でもヘレナとバーベナはNとは違った感情を持っていた。それは疑問だった。何故人間のことを心配し、強い絆で結ばれていたのだろうかという疑問……外の世界に出ていない彼女たちだからこそ、見えてしまった世界なのだと。

Nは彼女たちを見てから言う。

「僕は世界をもっともつと知りたいたいと思うんだ。人間とポケモンの絆を…サトシ君たちのような強い絆を…。もちろんヘレナやバーベナにも伝えたい…だから一緒に外に出よう！」

「外に出るって言うても…何処へ？」

「ええ、何も知らないというのに…」

ヘレナとバーベナは不安そうな表情でNを見ていた。でもNはその不安を吹き飛ばすように小さく笑みを浮かべて自信満々な表情で言う。

「この世界を旅するんだ。ポケモンと人間の様々な関係を見て、そして一緒に学ぼう！…そしていつか、マサラタウンに行こう。サトシ君たちの絆を…そしてヒナちゃんたちの絆を確かめていきたい」

「……Nがそう、望むのなら」

「ええ、一緒について行きます」

「ありがとう！」

Nは嬉しそうにヘレナとバーベナを見る。そんなNの幼い頃に浮かべていた久々の笑顔を見たヘレナとバーベナも最初は驚いたような表情をしていたが、すぐに笑顔が浮かべてこれからの旅を少しだけ期待する。何があるのかわからないけれど、でも私たち

なら絶対に大丈夫という安心感もあった。

Nはヘレナとバーベナを見た後、何処かの森の方角を見て、そして呟いた。

「サトシ君たちにお別れをいわないとね……」

まさにNが見たその森の方角に、サトシ達はいたのだった。

.....

「マサラタウンに帰れ」

『ピイカ』

「嫌！」

『カゲ……』

『ピツチュウ……』

こんにちは……妹のヒナです。気を失っている間に何やら凄まじいことになっていたようです。ですが事件が起きたのは前日……つまり操られていたみたいですが、その後一日眠っていたみたいなんです。そしてポケモンセンターには兄たちがおらず、アイリス

とデントに聞いてやって来たのは森の中。森の中には伝説達やマサラタウンにいるはずの兄のポケモンたち。そしてハルカさんだった。アイリスとデントはポケモンセンターで待っていると言われたため、何かあるのかなと思ったら、いきなり兄からマサラタウンに帰れと言われてしまった。もちろんそれは嫌だから私は拒否する。でもヒトカゲやピチューは微妙そうな表情を浮かべていて…私が寝ている間に何があつたのだろうかと思うてしまった。

『ヒナ…サトシの言うことは素直に聞け。お前が旅をして危険な目に遭つたということ…そしてこれ以上の危険が起きる前にマサラタウンで暮らせと言うその心を…』

「ミュウツウの言うことは分かるよ。お兄ちゃんの言いたいことも…でも私はまだイツシユ地方と一緒に旅したい！…ううん違う。お兄ちゃんと一緒にマサラタウンに帰りたいの！」

「ヒナ…」

『ピイカ…』

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

この白の遺跡を見たら、兄はその後マサラタウンに帰ると言っていた。だから私はこ

のまま帰るより、一緒に帰りたいたいと望んでいるのだ。危険だからとこのまま帰ってしまつたら、この先私が成長したとしても何もやっていけないような気がする。危険だからと一度逃げてしまつたら、その先も一緒だと思つたからだ。だから私は、先にマサラタウンに帰れと言う言葉を拒否した。

『ダネダネ！』

『ベイベ—イ!!』

「フシギダネ…ベイリーフも…でも私は絶対にお兄ちゃんと一緒に帰るの！そう決めたのよ！修行の時もそうだった…私は大丈夫だから…だから私は先にマサラタウンに帰らないからね！」

フシギダネやベイリーフも私に近づいて早く帰ろうと言ってきた。人の言葉に変えて教えてもらわなくても分かる。フシギダネやベイリーフだけじゃない…皆が私のことを心配しているのだと分かっている。でもこのお願いは聞けない。私は絶対に兄と一緒に旅をしながら帰ると決めたのだから。

でも兄たちは難しそうな表情をしていた。私の真剣な声を聞いて望み通りまだここに残つてもいいと思つてしまうけれど、でもそれは危ないのではないか。また《あのようなこと》になつたらどうするのだと考えている。

ハルカさんは何か思うことがあったのか、近づいてきて私や兄たちに向かって言ってきた。

「サトシ。ヒナちゃんがこんなに望んでいるのならその通りにしたらどうかかな？」

『それは…』

『その言葉は、つまり優れたる操り人の妹を旅を続行してもよいということか？』

『ワニワニ？』

『ハイハイ？』

「そういうことよ。私もマサトが…弟がいるからわかるの。でもこのままマサラタウンに帰っちゃったらヒナちゃんのためにならないと思うのよ。だからヒナちゃんの望みどおりにしてあげて…！」

「……………」

兄はハルカさんの言葉を聞いていても黙ったまま、何かを考えているようだった。その表情はまるで過保護な娘を独り立ちさせようか迷っている父親のようにも見えてしまつて…でも私はそんな兄たちに絶対に納得してもらいたいと思つて、ハルカさんのことを見てから口を開く。

「私はね…もつと大きくなつたらいつか旅に出ると思うの…。でも昨日のように危険だ

からということでもサラタウンに帰っちゃったら、もう二度と旅に出れないような…そんな気がするんだ。だから私はこのままお兄ちゃんたちと旅を続行したい！私は、もつともつと世界を見たいの！…ヒトカゲ達はどうかな？私と一緒に旅をしてもいい？」

『カゲ…カゲエ!!』

『ピッチユウ!!』

「ありがとう…ヒトカゲにピチュー」

『カゲカゲ!』

『ピチューピッチュー!』

ヒトカゲとピチューが私の言葉に頷き、兄たちを見て一緒に旅をしたいと言ってくれた。その言葉を聞いた兄のポケモンたちは少しだけ動揺し、心が揺らいだみたいだった。このまま私をサラタウンに帰すのはいいかもかもしれないけれど、それでもそれは成長にはつながらない。…過保護に平和な暮らしをするだけなら、それこそヘレナさんやバーベナさんと同じような状況になる。私はこのまま閉じた世界で一生過ごすつもりはない。このままサラタウンに帰って、平和に暮らすつもりはない。危険があるかもしれないけれど、それを乗り越えて強くなりたいと望んでいるからだ。

兄は私の目をじっと見つめて、口を開いた。

「お前を守ると俺は誓った。…でもあの時油断して、ヒナを守りきれなかった…もしかしたら…いや、絶対にもうそんなことは起こさないけれど、でもお前が危険な目に遭う可能性だつてあることに、俺は怖いと思う…それでもヒナは俺と一緒に旅をしたいのか？」

『ピカピカ…?』

「うん！旅をしたい。私は…ううん、私たちはもつともつと強くなりたい!!」

『カゲエエ!!』

『ピツチュウウ!!』

「…そうか」

『ピイカ…』

『待てサトシ…!良いのか。ヒナをマサラタウンに帰さなくても…?』

「ああ、良いんだミュウツ…ヒナが旅をしたいと望むなら、俺はその通りにしたい。それにもうあんな危険な目には絶対に合わせないさ」

『…優れたる操り人がそういうのなら…私たちはその通りにしよう。だが何かあれば私たちも力を貸す』

「おう。ありがとうナルギア…」

『ピカピカ…』

『ダネ…』

「大丈夫だよフシギダネ。俺たちは…ヒナを無事にマサラタウンに連れて帰る。その時は頼むぜまとめ役」

『ピツカ!』

『ダネ…ダネダネ!』

『ツツ

!!!』

「何はともあれ、これで解決かも…?」

『ハルカ、カモカモ?』

「ええそうよマナフィ。もう大丈夫よ」

『マナア!』

兄たちが納得してくれて良かったと思う。マサラタウンに強制送還だなんてことになつたら嫌だもの。でも、兄は私が危険な目に遭つたことで考え直したらしい。もう油断はしないということと、これからは絶対に私たちを守るということを…。まあやらかさなければ私は何も文句は言わないんだけどね…。でもこれからは絶対に事件に巻き込まれないように気をつけなさいと思ひ、気を引き締めた。

これから兄たちと一緒にマサラタウンに帰ることになるから、皆とは一時のお別れか

など思いながらも…。

.....

「…そういえば、ルカリオ…どうしたの？」

『カゲカゲ？』

『ピチュピチュ？』

ルカリオが私たちよりも少しだけ遠くの方で座り込み、落ち込んでいる様子が見れた。ルカリオの周りに何か暗すぎる雰囲気漂っていて、うかつに近寄れないような感じがした。私たちが森の中に来たときはもうルカリオは座り込み落ち込んでいたからちよつとだけ気になっていたのだ。森の中に入ってすぐ兄に帰れと言われたから今まで指摘できなかったけど、今もずっとその状態を維持しているルカリオのことが気になり、恐る恐る兄たちに聞いて見た。すると兄は苦笑して教えてくれた。

「ああ、操られてしまったことに落ち込んでるんだよ…あっちにいるレシラムもな」

『ピイカ』

「レシラム…!? うわ本当だ落ち込んでる!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『……………』

『……………キユウウウウ』

——その後、Nさんがお別れを言いに来る間に私たちはルカリオやレシラムを必死に慰めていたことは言うまでもない。…まあ私も操られていたし、これから頑張ればいいから大丈夫だよルカリオにレシラム。

第一百六十二話～ミュウツー覚醒と新たな友?～

こんにちは妹のヒナです。あの後Nさん達と別れ、アイリスとデントにお礼を言っ
て無事旅を続行することができました。ハルカさんは兄のポケモンたちをモンスター
ボールにに入れて、そのままマサラタウンに帰るそうです。どうやらオーキド博士に無茶
を言ったらしく、早く帰らないといけないと慌てていました。そしてミュウツーたちも
そんなハルカさんに先に行くぞと言っマサラタウンに戻っていききました。もちろん
ハルカさんにも：マサラタウンに帰る皆にもお礼を言いましたよ。本当に迷惑をかけ
たと思っていますから…。でもこれからは絶対に問題を起こさないようにしようとい
う決意もあります。

「…頑張つてトラブルに巻き込まれないようにしないとね…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

——私たちは現在、カノコタウンにあるアララギ研究所に戻る途中です。いや、カノコタウンに行く前にちよつと寄り道をしながら戻る途中なのです。ハルカさん達は先にマサラタウンに帰って行つたけど、私たちは先にアララギ博士に会つてからのんびりとマサラタウンへ行く船の旅を楽しみながらマサラタウンに帰ろうということになったからです。もちろんアイリスたちも一緒に行くことになった。でもその前に途中でイツシユ地方にしかない面白い町が近くにあるから行つて見ようということになった。

…でもその間にもう油断しないと心に誓つたルカリオが私たちの近くを離れないで真剣そうな表情でまるで護衛のように周りを警戒しながら歩いていて、ちよつとだけ苦笑してしまつたけどね。

「ルカリオ…もうちよつと楽しんで大丈夫だよ？ プラズマ団はもう全員捕まつたし…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

『そういう油断がいけないんだ…プラズマ団が捕まったら大丈夫という保証はどこにもないだろう…!』

「えええ…まあ、私たちも気をつけるからさ…」

『カゲエ…』

『ピチュ…』

「そうそう。それにルカリオ、そうやってずっと警戒していると疲れるぜ?何かあったと察知したときに警戒すればいいさ。…それにヒナたちに何かしようとしたら事前にぶっ潰せばいいだろうし…」

『ピツカ』

「お兄ちゃんまで…ああもう…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピツチュ…』

「ははは…とにかく、そろそろ町に到着するだろうし、気分を変えて行こうよ」

「そうね。サトシもルカリオも、ヒナちゃんたちを守るのは当然のことだから警戒しすぎて先に倒れちゃわないように気をつけるのよ?」

『キバキー!』

皆が私たちのことを心配してくれるのは嬉しいんだけど…それでもやつぱり過保護すぎかなと思つてしまった。まあ仕方ないか。記憶がないけれど、皆にとつて悲しいと思えることがあつたのだから…。とにかく、これからは気をつけて行かないとね…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

私たちがやつて来たのはニュートークシティという町。ここではポケモンヒルズという名のポケモン居住施設があると聞いたため、見てみようということになりやつて来たのだ。大都会の真ん中に大きな森が存在している場所。空気が澄んでいて、ポケモンが棲みやすそうな場所に、そのポケモンヒルズがあるという話をオーキド博士から気分転換に行つて見たらどうじゃ?と言われてやつて来た。

そして見つけたのは森の中にある大きな建物。一面がガラスで覆われているとても綺麗な所だ。その建物で待つていたエリックさんという人がポケモンヒルズを案内してくれるらしく、ちよつとだけ楽しみにしながら中へと入っていく。

「うーんそれにしても…このポケモンヒルズの一般公開前に来られるだなんて…ラッキーですね!」

「そうね！オーキド博士に感謝しなくっちゃ！」

『キバキ！』

「オーキド博士も今回起きた事件のこと分かってたみたいだからな…気分転換って言うてたけど、後でちゃんと礼を言っところうぜ」

『ピツカ！』

「そうだね！後で電話して…お礼言わないとね！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピツチュ！』

『博士の好意を無駄にするな。あと気をつけていくように』

「分かっています！もう…ルカリオってば…私は大丈夫だよ！」

『カゲエ…』

『ピツチュウ…』

「ほらヒトカゲとピチュも…私は絶対に大丈夫だからね！」

『カゲ…カゲカゲ！』

『ピツチュウ…！』

建物の中に入る間に話した言葉に皆が笑顔になる。まあ私は苦笑もまじっているん

だけど、でもポケモンが棲んでいる場所だから、どんなポケモンたちがいるのか楽しみだ。イツシユ地方以外のポケモンもいるらしく、どんなポケモンなのかという意味ではとても期待していたりする。

それに入り口近くにも大きな滝があつて……これは絶対に一般公開をすると大勢のお客さんで賑わうだろうから、先に来れてゆつくりできて良かったという気持ちも強かつた。本当にオーキド博士には感謝しないとね。

そしてやつて来た場所はとても居心地豊かな自然の空間。木々があつて、空気が澄み……そして川には水ポケモンたちでいっぱいいた。もちろん木々の方にもポケモンたちはいる。私たちは自分たちの歩ける場所……つまり橋の上を渡つてポケモンたちを観察しながら歩いていた。

川にはウパーたちがいて、そして空にはアメモースたちがいる。ヒトカゲとピチューはその様子に感激し、喜んでいる。でもいつもならピチューはすぐに私たちから離れてそのポケモンたちの方向へ行つちやうというのに……今回は私の肩にずっといて、見るだけしかしてない……そんなにプラズマ団と戦っていた時、私が気絶していた時が怖かったのかなと思いつつもピチューの頭を撫でる。

『ピチュ?』

「ううん何でもないよピチュー…ありがとうね」

『ピツチュ!』

『カゲ!カゲカゲ!』

「もちろんヒトカゲも!ありがとう!」

『カゲカ!』

『ピツチュ!』

ヒトカゲが足元で私も撫でてと言ってきたため、私は笑顔でその頭を撫でる。そしてピチューが私の頭にギユツと抱きつき、ヒトカゲも私に抱きついたため私はお返しにまた強く抱きしめる。その間、兄たちは私たちの様子を邪魔せず笑みを浮かべながら待っていてくれた。

.....

その後、兄たちがそれぞれポケモンを出して遊ぶことになりました。広場があるとエリックさんが言ってくれたため、私たちがそこまで走って行った先にはとても広大な場所があった。ポケモンたちがそれぞれ森の中で安心しきった表情でくつろいでいて、そして兄たちのポケモンもそれぞれポケモンたちと遊んでいた。ヒトカゲは私の手を掴んで、ピチューは肩に乗って私の頬を撫でて一緒に行くと言ってきたため、私も笑顔で領いて一緒に行く。周りにいるポケモンたちはイッシュ地方だけじゃなく、カントー地方やジョウト地方、そしてホウエン地方やシンオウ地方のポケモンたちがたくさんいたのだ。でもみんな凄く楽しそうでした。私たちもとても楽しくなった。ヒトカゲ達と散歩のような気分で歩いていく。

そして見つけたのは、イシズマイがイワパレス達に尊敬されて一緒に行進して森の中を歩いている姿に私たちはそっちへ行って一緒に歩く。

「あ、あれってヤミラミか？」

『ピイカ……？』

『ヤツミイ……』

「怯えなくても大丈夫だぜ！一緒に遊ぼう！」

『ピカピカ！』

『ヤミヤミ……!』

ヤミラミが兄に心を開いて一緒に遊んでいる。その姿を見ながら、私たちはリザードンに近づいて背中に乗せてもらい、噴水の中心まで行かせてくれた。噴水にはマサラタウンにはないような大きな花がたくさん植えられていて、とても綺麗だと思えた。

「綺麗だね……」

『カゲエ……』

『ピチュ……』

「おーいヒナたち! そろそろ外に行くぞ!」

『ピカピカ!』

「分かった! ……リザードン、またよろしくね!」

『カゲカ!』

『ピチュピチュ!』

『グオオオ!』

——ポケモンヒルズの外には、世界中にある花が植えられている植物館のような場所らしい。世界中の花が植えられているから、一年中咲いていて、かなり綺麗

みたいなのだ。噴水で見た花よりも綺麗なのかなとちよつと期待しながらも、私たちはその場所へ向かう。

「あれ…ヤミラミ?」

『カゲカゲ?』

『ピチュ?』

『ヤ…ヤミイ…』

「ああ、ついてきちゃったんだ…な、ヤミラミ?」

『ピイカ?』

『ヤミ…ヤミイ!』

ヤミラミが兄の近くで楽しそうにはしゃいでいて、懐いちゃったのかと分かり笑顔になった。もしかしたら兄の手持ちになるかもしれないと思えるぐらい懐いているなど思いながらも歩いていく。

そして途中で見つけたのは迷路。ヒトカゲ達が遊んでみたいと言ってきたため、私たちはそつちへ向かうことになった。でも危ないからと兄たちもついて来て、一緒に出入り口を探す。

「うーんと…こつち!」

『カゲ!』

『ピチュー!』

『ヤミ…ヤミイ!!』

『ヤミラミはこつちじゃないと言ってるぞ』

『じゃあこつちか…行くぞヒナたち!』

『ピツカア!』

ヤミラミが案内してくれたため、ある意味迷路を探検するという状況じゃなくなっただけど、でも結構楽しめたからいいかなと思う。そして迷路の先には大きな泉があり、そこにも花がたくさん咲いていた。

『カ、カゲカゲ?』

『ピチュウ…?』

『ピイカ…?』

『あれは…?』

『どうしたの皆…ってあれってポケモン?』

『ん…?あれがポケモン?』

私たちは何か機械のような姿をした生き物を見つけた。でもマツギヨのように平たく、何も言わずにいるためポケモンとは思えない…。兄がそのポケモンらしき生き物のようなものに飛び乗って生きてるのか確かめる。するといきなり兄ごと宙に浮き、泉の

中心を飛び回っていた。

「うお!? やつぱりポケモンか!」

『ピカピ!?!』

「ちよつとお兄ちゃん!?!」

『カゲカゲ!?!』

『ピチュピチュ!?!』

『ああ、さすがサトシだな…振り落とされずにいるのは…』

「いやルカリオ…これそういう問題じゃない気がするよ…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『ヤミイ…』

兄が機械のようなポケモンに乗ってまるでサーフィンのように楽しんでいる姿に苦笑する。ピカチュウも兄たちが近づいたらすぐに飛び乗って肩で笑顔になって楽しんでいる…まあいいか。たぶんイツシユ地方にいるポケモンなのかなと思ったから。

.....

——その後、いろいろとありました。兄がサーフィンのように楽しんでたポケモンの名前がゲノセクトだと分かり、人の言葉を喋ったり、故郷に帰りたいたと望んでいたと思つたら赤いゲノセクトが来て、私たちに攻撃して来たり：あ、でも私に余波が当たりそうになつたらすぐにルカリオがそれを防いでくれたから何とかなつたし、ピカチュウの10まんボルトで全部を防ぎ切れたからよかつたけれど：その後、先ほど一緒に遊んでいたはずのゲノセクトが私たちに攻撃をしようとしてきて、それを兄がピカチュウに指示して防ごうとした時にミュウツーが来てそれを止めてくれて：。というかあのミュウツーって絶対マサラタウンに戻つて行つたミュウツーじゃないよね凄く紳士的な感じだし、女の人みたいな声だつたし：うん絶対に違うミュウツーだ：。

ミュウツーは身体が変化してミュウのように少しだけ小さくなり、強い力でゲノセクト達の攻撃を防いでくれた。そしてサイコネシスで私たちを地下に運び、怪我はありませんか?とポケモンたちに問いかけていた。私たちを助けようとしたんじゃない、ポケモンたちを守るため：このミュウツーは人間のことが、嫌いなようだった。そしてゲノセクトのことを教えてくれた。3億年前に絶滅したというポケモンだということも：。

『私は、人間が許せません。私をつくりだし…そしてポケモンたちを危険な目にあわせるあなたたち人間が憎い…』

そう言つて去つて行つたミュウツーに、まるで最初の頃に出会つたヘレナさんやバーベナさんのようだと思えた。彼女たちも人間のことを嫌い、不信感しか抱いていなかったのだから…。

でも、いつかは人間のことも許してくれる…世界中の人間が悪いとは思わないはずだとそう願つて、去つて行つたミュウツーのことを見ていた。

「お兄ちゃん…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

「ああ、ちよつと連絡入れた方が良くかもしれないな…」

『ピカピカ』

そして兄はゲノセクト達の攻撃についても考えていたが、ミュウツーについても考えていたみたいだ。ミュウツーが作られたというのはロケット団の作業だと分かっている

たけれど、まさか他にもいたなんて思った。もしかしたら兄はロケット団のアジトに行つて、ミュウツーを他にも生み出していないのか聞いてくるのかもしれない…。それぐらい、衝撃的だった。

.....

その後? まあ…はい。

ゲノセクト達が自分の家らしき物を作ろうとしてポケモンヒルズにいるポケモンたちを皆追い出してしまいました。そしてその時電気供給の機械を止めてしまい。問題が起こつて何とかゲノセクト達に分かつてもらおうとあの女の人のようなミュウツーも来て止めようとしてくれました。そして泉で遊んでいたゲノセクトが倒れ、このままじやいけないと思つた時…。

「ゲノセクト…!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『…帰りたい…ただ、帰りたいだけなのに…』

「……うん。分かるよ…でもこれは駄目だよ。みんなが一緒に共存しているのに攻撃したらそれは怒るもん」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ…』

『ギギ…怒る?』

「そう、怒つちやう。だって自分たちの家を壊されたようなものだからね…だから、最初からね。皆に頼まないとだめだよ。そうすれば、絶対に分かってもらえる…」

『カゲ!』

『ピッチュ!』

『まあそうだな。困っているポケモンたちがいたら手助けするのが当たり前だ。だから頼めばいい』

『頼む…頼む…でも、もう止まらない…』

「ああそれは大丈夫。お兄ちゃんがブチギレてるから絶対に止まるよ」

『カゲエ…』

『ピッチュウ…』

『ヒナの言うとおりで。すぐに終わる』

『…故郷に帰る。でもまた会おう』

「うん！また会おうね…絶対に！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

『その時は何か御馳走する』

『…ごちそう…分かった…』

「また会おうねゲノセクト！」

『キバキ！』

「ベストウイツシユ！良い旅を!!」

「…またな、ゲノセクトたち」

『ピツカア…』

——そしてその後、無事に人とポケモンのことを理解できたゲノセクト達が暴走を止めて、故郷を目指して旅立っていった。でもまあ、その時に私たちと遊んだゲノセクト以外が兄のことをちよつとだけ怖がっていたのは仕方ないかなと思う。

『…では私はこれで——』

「ミュウツー！ちよつといいか？…マサラタウンにお前と同じミュウツーがいるんだ」

『ピカピカ』

『っ!?…それは、人間によって作られたということですね…』

「まあそうなんだけどな。出会ったときはかなりゴチャゴチャ言ってたぐらいだし…でもあいつはもう…人間のことに嫌ってないよ。もしも会いたいと望むなら、カント―地方のマサラタウンに来てくれ」

『ピツカツチュ!』

『……わかりました。ではその時に…また』

「じゃあねミュウツー! また会おうね!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「またな!」

『ピツカア!!』

ミュウツーが来たと知ったら…マサラタウンにいるミュウツーはなんて思うのだろうと想像しながらも、私たちは別れた。

…そろそろ、アララギ博士の研究所に行かないとね。

第百六十三話くデコロラ諸島へく

こんにちは兄のサトシです。事件に続きまた事件とちよつとだけイラツとしています。でもまあ妹達が無事なら何の問題もありません…。

俺たちはようやくカノコタウンのアララギ研究所へ戻つてくることができました。戻つて来た時はもう夜だったので一日泊まることになり、その後船でマサラタウンへ帰ろうということになったのだ。アイリスとデントはカント―地方まで一緒に行つて、そこで旅をするという…。マサラタウンには寄らずにそのままカント―地方で旅をするから、また会うことがあればその時は一緒に旅であつた話を聞こうと思つた。

「デコロラ汽船？」

『カゲエ？』

『ピチュウ…？』

「ええそうよ。デコロラ諸島を経由してカントー地方へ行く船なのよ」

「へえ…デコロラ諸島か…行ったことないから何がいるのか楽しみだなピカチュウ！」

『ピツカア！』

「カントー地方にいるポケモンも、イツシユ地方にいるポケモンも…中には珍しいポケモンだっているわよ！」

『なるほどな…そうなるとカントー地方やイツシユ地方以外のポケモンもいそうだ…』

「デコロラ諸島…早く行きたいなあ！」

『キバキ！』

「うーん…何ともアドベンチャーなテイストが漂ってくるね…！」

アララギ博士の車に乗って俺たちはその船へと向かう。船はデコロラ汽船以外にもさまざまな船があつて、それぞれ他の地方へ向かうらしい。俺たちの乗るデコロラ汽船はとても大きくてかなり豪華そうな感じがする。あの大きさならもしかしたらバトル施設もあるかもしれないと思ひ、テンションが上がった。

「はいこれ！デコロラ汽船の乗船券よ！」

「ありがとうございますアララギ博士！」

『ピイカ！』

「送ってくれて…それにチケットも用意してくれて本当にありがとうございます！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

そしてアララギ博士がチケットを買ってきてくれて、俺たちに手を振り別れの挨拶をして車に乗って研究所へ戻って行った。俺たちも手を振って別れ、すぐに船に乗り込む。船は豪華客船のように設備が豊富で、船の中にはポケモンセンタ―のようなところもあり、そして想像していた通りバトル施設もあって…船に乗っている間はかなり楽しいと思うだと思えた。

「ねえねえお兄ちゃん！お土産見ていい!？」

『カゲカゲ！』

『ピツチュウ！』

「お土産?…でもまだ船が出発したばかりで気が早くないか？」

『ピイカ?』

「でも船長さんに話を聞いたら途中で島に上陸する場合次の船に乗ってもらうんだって！その船にも他のお土産がたくさんあつて選べないぐらい豊富なので有名そうよ！それに全部船でしか手に入らないって！」

『キバキ!』

「ふふん！ここはお土産ソムリエの僕の出番ということだね!!」

『…デント、その前に土産を見るのかどうかだと思ふが…?』

「いやいやルカリオここはお土産を見るに限るよ！船のお土産の品は買えきれないほど豊富で有名！そして次の船に乗ったら他にもお土産の品がたくさんある！これはもうこの船に乗った以上見るしかないよね！」

「…じゃあ行くか?」

『ピイカ?』

「行く！早く行こう！」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「あ、待ってヒナちゃん。走ったら危険よ！」

『キバキ!』

船の案内地図を見て、妹達のはしやぎながら俺たちに向かつてお土産の品を見たいと言ってきたため、ちよつと気が早すぎると苦笑する。でもアイリスがこのデコロラ汽船についての案内用の紙を見て、お土産の品は他の船に乗ったら手に入らないかもしれないとテンションを上げながら言ってきた。デントがそれに反応してお土産ソムリエとして暴走し、ルカリオがツツコミを入れたり…まあいろいろあつたけれど、俺たちはその場所へ向かうことになった。

—— お土産を売っている店の途中には様々な遊び場やレストランが並んでいて、すべて見て回りたいたいと思った。遊び場にはポケモンたちと一緒に遊べるスペースがあり、例えばポケモン用のポフィンやポロックのお菓子を作るという体験コーナーがあったり、滑り台や砂場、そして船の中だというのに自然がたくさんある広場まであった。…これ絶対に船のチケットに金かかっているよな…後でまたアララギ博士にお礼言わないと…。

「ポロックやポフィン体験コーナーか…後でやってみようかな?」

『ピカ!!?ピカピカ!!』

『サトシ、ピカチュウが絶対にやるなど言っているみたいだが…お前一体何をやらかしたんだ?』

「え…いやまあ自己流でお菓子作っただけけど…?」

「ああそういえばお兄ちゃんの作る料理ってかなり凄まじかったよね…悪い方向で…ピカチュウ、もしかしてポロックかポフィンって色とか見た目とか凄くおかしくなかった？」

『ピイカ…』

『その通りだと言っているが…何を作ったんだ一体…』

「わ、私も気になるけど…聞いちゃいけないような気がするわ…」

『キバキ…』

「サトシの作る料理は凄まじい…見てみたいけど一種の芸術になりそうで見たくないという不安もあるね…」

「お前ら…」

ポロックやポフィンを見て作ってみようかなと思ったただけだというのに酷い言われ様だと思った。まああの時作ったものはまずいようだったから仕方ないかため息を吐いて諦める…。

それにまだ旅に出てない頃、まだまともに立つことができない幼い妹が俺たちを見ながら母と一緒に料理した時があった。最初に料理をしていた時は普通だったというのに、最後の方では母も妹もかなり慌てていて、その後キッチン使用禁止令が出されたことがあったなと思い出した。…でも俺、そんなにひどいもの作った覚えな…ま

あまずいのは確かだから仕方ないか…。

ポフィンやポロックについての会話をしながらも、俺たちはお土産を売っている店にやってきました。その店で売っているのは船の形をしたキーホルダーやぬいぐるみ…そして海で取れたという木の实があった。他にも進化の石や船にしかないという海の風がたつぷり詰まった干しオレンのみや干しモモンのみがあったり、デコロラ諸島について詳しく書かれている本が売っていたり…様々な品が豊富に売っていた。

「えええ…これって枕？しかも特大。…船に枕も売ってるんだね…。」

『カゲエ…』

『ピツチュウ…』

「見ろよ！こつちにはきのみジャムがたくさんあるぜ！しかもパンで食べてもいい試食付き!!」

『ピツカツチュウ!』

「こつちは宝石ね…綺麗!」

『キバキ!』

「うーん…これは良いね。調味料が豊富だ!しかも海にいてこそあるという品ばかりだよ!!なんてフアンタステイックなテイストだろう!!」

『こつちは海の上で作れるという調理道具か…便利なようだが、海の上で使うかどうか

は分からないな…』

皆がそれぞれ見て回り、ある時はアイリスがキバゴと一緒にお面をつけて妹達を脅かしたり、びっくり箱にデントが驚いたり…いろいろと楽しめてそれだけで一日を過ごせるぐらいだ。一応妹達はデコロラ船のキーホルダーを買い、ルカリオは限定品である海の上で作れるという調理道具を買い、アイリスはドラゴンジュエルで作られたという御守りを買っていて…そしてデントはデコロラ諸島が詳しく書かれているという本を買っていた。

俺はというと、ピカチュウが欲しいとねだっていた海の味がするという限定品のケチャップを買っただけだった。まあお土産は上陸した後の船でもあるだろうし、急いで買わなくても大丈夫かと思っている。

とにかく、この船での旅はとても楽しめそうだと思えた。

第百六十四話く口トム達とオーキド博士く

こんにちは妹のヒナです。デコロラ諸島の旅は順調で…もう旅というよりは観光に近いかなと思ってます。例えばミツハニーがたくさんいるハニー島で甘いお菓子をたくさん食べることができたり、次に乗った船でちよつとした寶石泥棒がいてデントが偵のようになって真犯人を見つけたり、ミジュマルやフタチマルで大会が開かれる島でバトルしてミジュマルとお別れしそうになったり…まあいろいろとトラブルはありますが順調にカントー地方に帰ってきていると言っておきます。

そして今日、オーキド博士が次の島で待っているという話を聞いて、何があったんだ

ろうと疑問に思いながら次の島に行き、船を降りてオーキド博士と会いました。

「久しぶりじゃのうサトシにヒナ！元氣そうで何よりじゃ！」

「はい！久しぶりですオーキド博士！」

『ピツカ！』

「こんにちは！…ポケモンヒルズの件本当にありがとうございました！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「なんのなんの！…おお、ヒナの新しい仲間とはこのピチューじゃな？どれどれ…」

『ピチュ!?ピツチュウウ!!!』

「グホオオオ…げ、元氣そうな電氣じゃな…」

「ははは…」

『ピイカ…』

「オーキド博士…」

『カゲエ…』

『ピチュ?』

オーキド博士はいつも通りポケモンについて興味をもっていて、そしてスーパーマサラ人に負けず劣らずの頑丈な身体をしていた。そしてその後、アイリスとデントを紹介

し、この島に来た話をゆつくりと聞くためにポケモンセンターに向かつて歩き始めた。その間にオーキド博士はマサラタウンにハルカ達が届つてきたこと、帰つてくる前は草ポケモンと水ポケモンがまた争いだして、フシギダネがマサラタウンに戻つてきた途端にすぐに喧嘩している所まで行き、盛大にソーラービームをしたということを話してくれた。…まあいつも通りかなとちよつとだけ思った。でも一番驚いたのはそのソーラービームがマサラタウンの観光客にとつての一大イベントみたいになつてたりすることかな。フシギダネのソーラービームを見ると御利益が出るといふ噂もあるとオーキド博士から聞かされ…フシギダネがいつかストレスで倒れないか心配になつてきた…。

.....

そしてやつて来たポケモンセンターでオーキド博士が話してくれた。オーキド博士がこちらに来た理由はロトムを研究するために来たということ。出来ればゲットしたいということを教えてくれた。話によると、この島の電気はロトムにとつても美味しく、たまに停電がするということがあるらしい。それでも島の住民たちはロトム達に怒らず、むしろランチタイムという名物になつていゝらしい。島の電気が美味しくこ

の島に居つき、そして活動を開始するとともに電気を食べちゃうことが島でよく起きるようになり、それが名物となり、ロトムのランチタイムとして有名になったそうだ。：ある意味喧嘩を牽制するためによくソーラービームを放つフシギダネのような感じかなと思っただ。

「電気ね…じゃあピチューの電気とかも食べちゃうのかな？」

『ピチュ!?!』

『カゲカゲ…?』

「その可能性も否定できんよ…もちろん、ピチューだけじゃなくピカチュウの電気もロトムにとって食事となる可能性もあることじゃろう」

「へえそりゃあ凄い…」

『ピイカ…』

「電気かあ…一体どんなデリシャスな味を感じているのだろうねロトム達は…!」

『この島に居つくぐらいなのだから、おそらくは美味しいと思っただろうな…』

「まあどっちにしてもロトムに会うの楽しみね!」

『キバキバ!』

—— 私たちがやって来たのは、ロトム遊び場。ここは島の住民たちが様々な家電を持っていつてしまったり驚かしてしまいうロトムに手を焼いたため、ちよつとした広場にロトム達の遊び場を作りあげたらしい。でもこのロトムの遊び場はまるでどこかの秘密基地のようであちよつとだけテンションが上がつてしまった。周りにあるのは冷蔵庫や洗濯機、そして掃除機やオーブンと様々な家電がたくさんある。しかもサイズも異なつていゝるものがあるようであ、島の住民たちはロトム達を嫌悪してないといふことがわかる光景だと思つた。

『ピ…? ピカピカ?』

「どうしたピカチュウ? 何か感じたのか?」

『ピツチュ?』

「ピチュウ? 何か見つけたの?」

『…あそこを見ろ』

ピカチュウとピチュウが電気を放電して何かを感じ取つたらしい、ヒトカゲが周りを見ていて、私もロトムを見つげようと探すけどいらない。ルカリオがある方向を指差してロトムの居場所を教えてくれたため、私たちはそちらを見た。

ルカリオの指差す方向には電線で何かが光つていゝるのが見える。でも光つていゝるだけでロトムがいゝるのかどうかかわからず、しかも1つだけじゃなく3つも光りが増えて

「うん…！行くよピチューにヒトカゲ！」

『ピチューピチュー！』

『カゲカ！』

ピカチュウの電気袋である部分を刺激して挑発し、ピカチュウはその喧嘩を買って10まんボルトを出す。だがロトムは口を大きく開いてその10まんボルトを食べてしまった。しかもかなり美味しいのかもつとくれと催促している。そして電撃を放ったピチューが狙われそうになり、私はピチューを抱きしめてヒトカゲと共にルカリオの後ろに隠れた。ピチューが私たちやルカリオによって隠れたことにロトム達は怒ったみたいだったけれど、ルカリオが睨んだことで萎縮し、すぐにターゲットをピカチュウに変えたようだ。

「よし今じゃ！行けモンスターボール！」

「捕まるか…？」

『ピイカ…？』

『ロトトトトトトトトツツ！！！！』

「うーん惜しいのうー！」

オーキド博士が1体のロトムに向かってモンスターボールを放ったのだけれど、すぐに解放されてしかもお返しとばかりにロトムの電撃を受けることになった。電撃で痺

れたオーキド博士は倒れるかと思っただ髪がアフロのような状態になって笑っているだけだ。

「ええええええ…!!」

『カゲカゲ…!?!』

『ピツチュウ…!?!』

『なるほど…つまり彼もマサラ人の一人ということか』

「待ってルカリオ、マサラ人だからって私たち全員がお兄ちゃんやオーキド博士のように超人じゃないからね!」

「え、そうなの？」

『キバキ?!』

「そうだったんだ…じゃあ普通のマサラ人もいるってことなのかい？」

「ちよつと待って何かマサラ人に対する誤解を招いてる!」

『カゲカゲ!?!』

『ピチュピチュ!?!』

「おいお前ら…」

『ピイカ…』

「さあロトム達よ。是非ともわしの研究所にきてくれんかのう？」

『ロ、ロト…』

オーキド博士の電撃に倒れず笑っているタフな身体に驚いた。けれどその超人的な身体にマサラ人だからと納得したのはルカリオで、それを否定したら何故かアイリスやデントに驚かれてしまった…。

これ絶対にお兄ちゃんが色々暴走したからマサラ人に対する誤解ができてるんだよね…？

そしてオーキド博士はいつも通りロトムに対して話しかけ、ちよつとだけロトム達は怖がっているようだった。

——でもその後、ロトム達が何とかオーキド博士のことを信じて、1体が研究所に協力するということになった。まあいろいろあったけど、何とかなつて良かったと思う。

第百六十五話くポケモン相撲とお祭りく

こんにちは兄のサトシです。次の島のミノリ島には木の実が豊富にあるとのこと、面白そうだから上陸してみようということになりました。そしてちょうど良く、俺たちが島に到着したときは豊作祭が行われているらしいです。きのみで作った料理やお菓
子もあるらしく、どんなお祭りなのかとこれから楽しみます。

「到着したね！…あれ、モモンのみがついてる木だ！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「うーん…様々な木々に実っているきのみ…まさに《実りの島》ということだね！素晴

らしいテイストだよ！」

「美味しそうなきのみの香りがするね、キバゴ！」

『キバキー！』

『きのみが豊富にある実りの島ということは、その島でしかない調理の仕方もあるかもしれないな……』

「よし行くぞー！」

『ピッカアー！』

皆がそれぞれテンションを上げて島へ上陸していく。周りの木々にはきのみがたくさん実っていて、熟成して美味しそうだというのがよく分かった。デントやルカリオがそれぞれきのみを見てこれはこんな料理が作れるだのこれは他にもお菓子に使えるだのという話し合いをしている。まあ勉強熱心なのはいいけど、これ以上俺たちの舌を肥えさせてどうすると笑みを浮かべた。妹達も話を聞いて苦笑しているらしい。そしてピカチュウは周りにあるきのみを見て食べれそうなのをとってきて妹達に渡していた。きのみは木々に実っているものは食べてもいいらしく、ピカチュウがそれを聞いて妹とヒトカゲ、そしてピチュウの分をとってきていた。でも俺たちが歩きながらきのみを食べていてもまだまだ木々にはたくさん実っていた。

「……ん？何だあのポケモン……？図鑑にデータなしって書かれてるぞ」

『…ピカ?』

「データなしってことは…他の地方のポケモンかしら?それとも新種?」

『キバキ?』

「何にしても、かなり怯えているようだね…」

『性格なのだろうな…サトシ、そうじろじろと見ていると余計に怯えるぞ』

「うるせえ」

『ピツカア…』

「ほらほら大丈夫だよ!このきのみあげるね…美味しいよ?」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『エレ…』

妹達から貰ったきのみを食べて少しだけ怯えがなくなつたようだ。きのみが美味しいと言つて妹の周りを走り、そして笑顔を見せてくれるポケモンに俺たちも笑みを浮かべた。…それにしてもこのポケモンは一体何なんだろうな…??

.....

——その後、そのポケモンのトレーナーがこちらに来て、仲良くしてくれてありがとうと言ってくれた。トレーナー……つまり、彼女の名前はパンジーというらしい。そしてパンジーさんのポケモンはカロス地方のポケモンで、先ほど妹達と仲良くなったのがエリキテル。パンジーさんが連れているオドシシやメブキジカのようなポケモンはゴーゴートというらしい。カロス地方には行ったことがないから興味を持った。

「……へえ。パンジーさんってルポライターなんですか」

『ピイカ』

「ええそうよ。ポケモンの雑誌に記事を書いたり、時々写真も撮ったり……それにしてもあなたたちのポケモンって随分個性的ね！」

「へ、個性的?」

『カゲカゲ?』

『ピチュ?』

「ええ、普通のポケモンじゃあ見れないような表情をしてるわ!」

「そうなの?…キバゴも個性的ってことかしら?」

『キバキ?』

「そうね!まるで家族や兄弟のようだわ……あ、そうだ。ねえサトシ君たち、これからお祭

りの中心地でポケモン相撲のイベントがあるんだけど一緒にいかない？」

「ポケモン相撲…ですか？」

『ピカ？』

パンジーさんはポケモン相撲の始まりについて教えてくれた。ポケモンたちはこの島にある実り豊かなきのみをめぐって戦いを始めたらしい。そして最後の残りをリングマとツンベアーが戦って…でも結局は両方とも倒れそうになり、その戦いを見ていた1人の少年がきのみを分け合って仲良く食べようという習慣ができたらしい。そしてそのきっかけを忘れないように、祭りが開催される頃には、その両者が争ったことを忘れないために、ポケモン相撲を行うとのことらしい。そのポケモン相撲は自由参加で、しかも商品が出るらしいからちよつとだけやる気が出てきた。

「よし俺参加する！」

『ピカピカ！』

「面白そうね！私も参加するわ！」

『キバ！』

「楽しむことはぜひ挑戦する方が良いからね！僕も参加するよ！」

『ピイツチュ！ピチュピチュ!!』

「え!?!ピチューも参加したいの!?!…で、でも結構大きなポケモンがたくさんいるよ？」

『カゲカゲ…』

『やめておけ…技の使用はないらしいが、重量級では不利だ』

『ピチュ…』

「それもあると思うけど…ポケモンの参加はトレーナーじゃないといけない決まりらしいのよ…」

「そっか…じゃあ私はできないね…ごめんねピチュ…」

『カゲカゲ…』

『ピチュ…ピイツチュ…』

ピチュが俺たちの参加を見て面白そうだと妹の肩に乗って自分もやりたいと叫んでいる。でもやはりまだピチュには早いだろうということ、そしてパンジーさんがトレーナーじゃないと参加はできないということ、そして妹はまだ年齢がトレーナーの適正年齢に達していないため参加は断念したらしい。申し訳なさそうな表情の妹とヒトカゲにピチュは最初落ち込んでいたが、すぐに気を取り直して大丈夫と笑顔で言っていた。まあ、妹がトレーナーになった時にまたこの豊作祭に参加すればいいだろうし、大丈夫だろう。

.....

お祭りの場所までやってきたら、かなり人で賑わっていた。様々なお面や装飾品が売られ、きのみで作られたケーキやきのみの実を絞って、ジュースにしてできた飲み物。きのみと温かいモーモーミルクを混ぜて作ったきのみカフェラテ。そして辛いきのみで作った赤いケーキという異色なものまである。でも辛党が絶賛しているのかかなり売っていたりする。他にもきのみを器にして作ったきのみグラタン。そしてパイ生地です。で練り上げて作られたきのみパイがあつたりとかなり種類が豊富にあつた。

「美味そうだな……つとと、その前に参加受付！」

『ピカピカ!!』

「参加受付ならこつちよ！」

『レッキィ……!』

「ありがとうございますパンジーさん! ほらサトシ、こつちよ!」

『キバキ!』

「おう!」

『ピツカ!』

俺はチャオブー、デントはヤナップ、アイリスはカイリユードで参加することになった。パンジーさんはその大会を撮影し、ルポライターとして後で記事にしていくそうだ。笑顔で俺たちのことを撮影していて、他にもお祭りで参加している様子や、周りの景色を撮っている。俺たちはパンジーさんの邪魔にならないように歩き、大会受付を申し込んだ。

だが、大会はまだ始まらず、しばらく時間があると受付の人が言っていたため、その間に時間をつぶすことになった。どこに行こうか迷っていたらパンジーさんが笑顔である方向を指差して教えてくれた。

「迷ってるようね？じゃあこの島の名物のきのみパイを食べてみない？このきのみパイは生地が他では食べれないぐらい美味しくて味もきのみが絶妙なのよ！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「ええ。ほら、あそこに見える屋台が出しているきのみパイは美味しいって評判なの。時間もあつし、一緒に食べましょう！」

屋台の方を見てみると、かなり人がたくさん並んでいて、それぐらい美味しいのだと分かった。きのみとパイの甘い香りが漂ってきているし、ポケモン相撲大会の前に食べよ

うと皆で並ぶことになった。

…だが。

「おい邪魔だぞお前！」

「…それはこっちの台詞だ。何俺たちより先に注文してんだよ！」

『ピカピツカ！』

「ハア？そんなの知るかよ。早いもん勝ちだぜ？」

「……ふざけてんのかおい」

『……ピイカ』

「ちよつちよつと待った！サトシここは抑えて！大会前に問題を起こす気なのかい！」

「そうだよお兄ちゃん！せっかくのお祭りなんだから喧嘩しちや駄目だよ！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「そう言うこつた！じゃ、あばよ！」

「ちよつと待ちなさい！あなた先に割り込んできた癖に謝りもしないわけ?!」

『キバキ!!』

「ほらアイリスも落ち着いてよ!!」

『カゲエ!』

『ピチュウ!』

「……………チツ」

『…ピイカツチュ』

マナーを守らず列に割り込んできた男は、普通にきのみパイを買っていた。俺とアイリスがそのことに対して文句を言うのだが、男はそれがどうしたと鼻で笑ってきたため、とりあえず説教かと思つた時に妹達に止められてしまい、そして男もそのままどこかに行つてしまったためできなくなつた。俺は舌打ちをしてアイリスは男が去つて行つたところを睨んでいて、そして妹達は苦笑してきのみパイを買おうと言つて来た。

…きのみパイは美味いけれど、いろいろとテンションが下がるなと思つてしまった。でも気を取り直して祭りを楽しむか…。

……………

—————ポケモン相撲大会はかなり白熱していた。アイリスとデントもいろいろと頑張っていたけれどいつものバトルとはちがうルールに翻弄されてしまいすぐに負けてしまつていた。

そして俺とチャオブーは決勝戦まで勝ち上がり、やって来たのはきのみパイで争ったあの男だった。

「ふん！チャオブーなんかで俺のゴルークを倒せるものか！」

『ゴオオウ!!』

「んだとゴラア……！」

『チャオオオオオ!!』

結果としてはキレた俺とチャオブーが勝った。でも途中で男は俺たちのことを認め、ちゃんと割り込んできたことを謝って来たから許して、相撲を楽しむことにした。いろいろとトラブルはあったけれど、それでも良い祭りだと思った。

「悪かったな……割り込んできて……それにお前のチャオブーを悪く言つて……」

「……悪いと思つてるならもういいよ。ほら、副賞のきのみ、一緒に食べようぜ？」

『ピツカア!』

『チャオチャオ!』

優勝記念としてもらったのはきあいのほちまきと大量のきのみ。食べきれないと思えるきのみを皆で分け合い、食べて行つた様子を、パンジーさんはまるで昔の相撲大会が始まったきつかけのようね……と語っていた。

第百六十六話く旅の終わりと新たな始まり？く

こんにちは妹のヒナです。パンジーさんが私たちと一緒にオーキド研究所で話を聞いて記事にしたいとのことでカントー地方まで一緒に行くことになりました。その途中のデコロラ諸島ではいろいろとトラブルがあったり、迷子になったりと大変でしたが無事にカントー地方に到着することができて良かったと思つてます。ルカリオも話して大丈夫だと分かつて、パンジーさんと打ち解けてたしね。

クチバシテイに船が到着し、降りた私たちは一度ご飯を食べようということになり、皆でちよつとしたレストランに行きました。でもテラスでの食事だったため、外にいるカントー地方のポケモンたちにアイリスとデントのテンションが上がリ、早く自分の行

きたい町に出発したいと言ってきた。

「私はイブキさんに会うってカントー地方に行く時に決めてたのよ!だからこれから行くわ!」

『キバキ!』

「え、早すぎない!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「そうか?旅は決めたらすぐに出発するものだろ?」

『ピイカ?』

「お兄ちゃんの場合も早すぎるからね!!」

『カゲエ!!』

『ピッチュ!…ピチュ?』

『…いつものサトシの所行だ。気にするな』

『ピッチュ…』

アイリスが早く出発したいと兄が旅立つときによく見る表情を浮かべていて、これは止められないと思った。それにデントも同じようにホウエン地方のハギ老人が主催するポケモン釣り大会のボロのつりざおカップが開かれるから早く行かないと間に合わ

ないらしい…。アイリスもデントも、私たちに少しだけ寂しそうな表情をしているけれど、もう決めたという決意が感じられた。だから、私は何も言わない。止めるつもりはない。

「…うん、そうだね。アイリスもデントも…行きたいと思う道は突き進まないとね!!」

『カゲ…カゲカゲ!』

『ピツチュウ!』

「そうだな…でも、アイリスとデントはそのままお別れってわけじゃないだろ?」

『ピイカ?』

「ええ!自分のやりたいたいことが終わったら、ちゃんとマサラタウンに行つてヒナちゃんたちに会いに行くわ!」

『キバキ!』

「サトシは…もしかしたら旅に出ているかもしれないけれど、でもいつかまた会えるよ!」

「…うん。約束だよ!」

「約束だね!」

「約束よ!」

『キバキ!』

「うんうん。旅の仲間との感動のお別れのシーン…っていうことね」

『レッキイ!』

兄とピカチュウはもうアイリスたちが別れるということをちよつとだけ分かっていたような感じがして、そして私たちのことを慰めつつまた会えると言ってくれた。だから約束をしようと言って、アイリスたちをちゃんと見た。またマサラタウンにきて…きつと会うということ…!

——そして私たちはアイリスとデントを見送るため、ヤマブキシテイの路線であるリニアに乗って行くところまで私たちはさよならを言っただけで別れた。

「じゃあねサトシにヒナちゃん…また会おうね!」

『キバキバ!』

「ベストウィツシユ…良い旅を! ヒナちゃんは、あまり危険な目に遭わないように気をつけるんだよ?」

「うん分かってる…ありがとう! また絶対に、会おうね!!」

『カゲエ!!』

『ピツチュウ!!』

「またな! また会えたときは、バトルしようぜ!」

『ピッカア!』

『近くに着たら連絡しろ。何かご馳走でも作ってやるからな』

笑顔で、私たちはアイリスとデントを見送り、そのままニアが走り去っていくのを眺めていた。イツシュ地方に来てから、いろんなことがあったけど、本当に良い仲間だと思っていた。また会えたら、その時はマサラタウンを案内しないといけないなと思いつつも、私とヒトカゲとピチューはちよつとだけ泣いてしまった。

兄がちよつとだけ乱暴に頭を撫でるその手が、慰めてくれていると分かかって笑みを浮かべながらも、もうリニアが見えない先の方を見て今までの旅を思い出していた。

.....

———そして現在私たちはマサラタウンに到着した。…まあオーキド博士がパンジーさんのポケモンにテンションが上がっていると攻撃されていたり、兄が帰ってきたことにフシギダネが皆を呼んでいろいろとカオスになったりしました。いつものことだよな。

……そして、兄もまた、カロス地方に旅に出たいと言ってきた。

「カロス地方にはまだ俺の知らないポケモンがたくさんいるんだ……だから俺はカロス地方で旅をして、それでカロスリーグに出る!」

『ピツカア!!』

「……お兄ちゃんのことだから、絶対カロスに旅立つってことは分かってたけどね」

『カゲカゲ……』

『ピツチュウ……』

『カロスカ……旅に出るのならいろいろと準備をしておかないといけないな』

「うんそうだね。イツシュ地方から帰って来た状態で行くのはちよつと無理があるよね

……

『カゲカゲ……』

『ピチュピチュ……』

兄の服や帽子は旅をしてきてかなり無茶したこともあったため、ぼろぼろになってきている。ポケモンの攻撃を避けて、直接リアルファイトをした時もあったからまあ仕方ないとは思うけれどね……。

その後、パンジーさんがオーキド博士の取材をしている間に、ルカリオは私たちの家に行き、帰ってきたということや明日兄がすぐにカロス地方に旅に出るということを伝

えに行ってしまった。私はというと兄とピカチュウとヒトカゲ達と一緒にフシギダネ達といろいろと話しているのです。…と言っても、今は兄たちの会話が終わるまでぼんやりと見ているだけです。

イツシユ地方で一度集合した時に会ったけれど、あの時はすぐに帰ってしまったからのんびりと話をすることもなかったし、こうやって遊ぶこともなかっただろう…それにたぶん森の奥にはミュウツーたちもいるのかなと思いつながら、また後で会いに行こうと考えた。その前に兄がカロス地方で旅立っている間にマサラタウンで独自に考えた修行をしてみらおうとフシギダネ達と一緒に技の強化特訓や新しい技の練習。そして特訓で有効な、トレーナーのいない状態でバトルをする方法…つまり特殊バトルのルール説明をし始めている。…まだフシギダネ達を強くする気なのかなと私とヒトカゲは苦笑してしまった。ピチューはというと、周りをキョロキョロと見ていて、マサラタウンの森の中が気になるらしい。でも後でそっちにも行くから大丈夫だよとピチューに伝えながらも、平和なひと時を楽しんだ。

.....

その後、パンジーさんから、記念に皆で写真撮影をしましょうと言うことになったんだけど、そこで喧嘩が始まってしまいました。

『ミジユミツジユ!』

『バイバーイ!!!』

『ミ、ミツジユ!!!』

「ほらミジユマルとベイリーフ落ち着いてよ!お兄ちゃんも考え事しないで喧嘩の仲裁してー!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「いや考えたんだけど…とりあえずケンタロス達は後ろな?」

『モオオオオオオオ!!!?』

「文句言うなよ。後でケンタロス達を中心に撮るようになるからさ…。お前たち全員が入りきるかどうかわからないんだから…とりあえずケンタロス達以外は俺の中心がイッシュ地方、それ以外は適当に」

『バイ?!』

『ミツジユウ!!!』

『ピイカツチュ…』

「イツシュ地方から帰ってきたんだから最初はミジユマル達を中心だろ。…大丈夫だつてベイリーフ、その次撮影したら地方ごと撮るからさ」

『ベ—イ…ベ—イ—！』

「お兄ちゃん…ちゃんと喧嘩の仲裁するなら早く言つてよ。ミジユマルとベイリーフの喧嘩が悪化して周りが泥だらけになつてるのに……」

『カゲエ…』

『ピツチュウ…』

「まあなんにせよ。無事に解決できたんだから良いじゃねえか」

『ピカピカ！』

「まあね…」

『カゲエ…』

『ピツチュウ…』

写真撮影では、私たちは入ろうとはせず見ていたんだけど、フシギダネのつるで腕を引っばられ、兄たちがこつちに来て一緒に撮ろうぜと言ってくれたため、私たちはお互い顔を見合わせて笑顔で一緒に撮影をすることになった。

…でもその後、地方ごとに撮影する順番を決めるということで、先ほど兄が話していた特殊ルールで仁義なきバトルをすることになったのは言うまでもない。

.....

「行ってらっしゃいお兄ちゃん」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「…おう。行ってきます」

『ピツカ!』

兄が今日、カロス地方へ旅立った。とりあえず兄があまり暴走しないことを祈っておこうと思う。

あとがきと設定と次回予告

あとがき

こんにちは！ここまで読んでくださり本当にありがとうございます!!投稿を初めて約2カ月：かなり早い投稿をしてこの日にイッシユ地方まで旅を終わらせることができた感慨深いです：！私結構飽き性なんですよね：。でも来年からはかなり忙しくなるので絶対に今年中にイッシユ地方までを終わらせてやりたいと思っていて：それで頑張つてここまで投稿できて良かったです。とりあえずこれからはゆつくりと投稿していこうと思つてます。ですが本編だけじゃなく過去編と未来編も書いていきます。あ、でも本編のカロス地方編はできればサトシがリーグに出場するまでは投稿するのをしばらくやめようかなと思つていたり：（いや今のペースで書いていたらすぐに追いついちゃいますからね：）私としてはこの物語は、本編は現代編で、ギラティナの話は過去編、そしてヒナの話は未来編と決めていきます。そこまで書けるのかわかりま

せんし、来年から忙しくなるため投稿も遅くなっていきますから続きを読みたいという方には申し訳ないですが、投稿不定期となります…ですが必ず投稿していきたいと思っ
ていますのでよろしくお願いします！あと、下の方には兄たちの設定と次に書きたいと
思う話を次回予告風（ポケモンの次回予告とは異なるよ！）に書いていきます。
…では、最後になりますが…この2カ月間本当にありがとうございました！！

設定

サトシ（兄）

見た目は原作と同じ。瞳の方は原作でのイツシユ地方編からの瞳の色で生まれた時
からそうなつてると考えておいてください。

年齢は12歳。永遠の10歳じゃなくて12歳。（イツシユ地方編が終わってカロス
地方を旅する時は13歳）

相棒はピカチュウ。ポケモンを育成することの才能があるのか、手持ちは皆かなり強
く育っている。そして各地方のリーグ優勝者常連。いろんな地方を旅しているため、旅
した後の様々な地方にはサトシの数々の所行が伝説となって語り継がれている。そし
て通り名として恐れられていたりもする。そしていろんな意味で凄まじい毎日を送っ

ている。

周りからはポケモンマスターに一番近い少年と言われているようだが、あまりにも幼いためまだ成長段階があると考えポケモンマスターへの道は遠い。ただし成長していくとともにポケモンマスターへの道は近づいていたりする。

身体能力は伝説を拳で倒せるほど。だが、手持ちであるリザードンとの喧嘩ではよく引き分けになったりする。ピカチュウとは唯一無二の相棒。手持ちも家族のようなものだと認識している。そしてそんなポケモンたちに強さを教え、技の強化を行った元凶であったりする。(手持ちたちもサトシのことを相棒、友人、恩人、後の恋人となりたい人、主人：まあいろいろと考えてはいるが最終的には家族として認識している)

ロケット団の指導者にして影の支配者。いろいろと契約を結んでいるためあまり口ケツト団の仕事に手を出したりはしないが、たまに暇な時に突撃していろいろと開発したりポケモンたちについての仕事を持ってきたりする必殺仕事人。シンオウ地方のギンガ団もロケット団の傘下にいれようかと考えたりもしたが、ギラティナの行動によつてすべては無駄に終わる。ロケット団との契約としてちよつとした儲けで得た金を手にしたりしてもいる。ただしそれは全て使わず貯金してあるためそろそろ金持ちになりそう…？

チャンピオンのシロナとは師弟関係を結んでいて、たまに修行という一環でポケモン

の技の調整、発明をしたりする。そのためチャンピオンの中でシロナだけが一番強い最強のトレーナーだと恐れられたりしていることもある。ガブリアスが凄まじいためシロナと戦った時は負けを覚悟した方が良いかもしれない。

弱点は妹。妹が人質にとられたり、何か怪我をしてしまったら動揺していつものバトルができなくなる。でも妹が無事に救出されたらすぐに鬼神のような雰囲気漂う強者となるためある意味妹を人質にとったりするのは諸刃の剣と同じである。

ヒナ（妹）

見た目は兄を女の子のようにした幼い幼女。瞳の色も兄と同じ。黒髪は幼女の時は腰まで伸びている。（ファイヤレッド、リーフグリーンのゲームの主人公がそのまま幼くなった感じをイメージ。ただしその顔は兄にどこか似ている感じで）身長はマサトより小さい。何もかも小さい可愛らしい幼女である。

年齢は5歳。（イツシユ地方編が終わってカロス地方が始まるときは6歳）

相棒はヒトカゲ。ヒナの方は兄のサトシと違って平穏を望み、自ら問題を起こさないようにしようと考えている。ただしトラブルはよく起きる。ヒトカゲが色違いだからといって差別はしない。そのことをよく分かっているヒトカゲはヒナのが大好き。後に仲間となったピチューともヒトカゲと平等に接している。そしてヒトカゲとピ

チユーは家族だと認識している。ヒトカゲとピチユーもヒナのことを家族と認識していて、大好きな人と考えている。もちろんヒナたちは兄の手持ちであるピカチュウたちも家族だと認識している。

身体能力は修行をしたせいもあって、忍者のように素早く軽く動ける。回避能力は抜群。ただし攻撃力は皆無。かくれんぼなどでは無双する。(兄のポケモンたちや伝説たちとの修行ではその無双はできていなかったりする)

人間版「炎のパンチ」を編み出したりといろいろとスーパーマサラ人としての道を歩み始めているがそれに気づいていない。最近ではピチユーによる技の開発(兄の所行)もあって、ピチユーの技強化と人間版「雷パンチ」をできる様に考えてルカリオと共に修行している。

ポケモンに愛されているがそれに気づいていない。仲良くなるのはいいことだと思っただけだが、その野生のポケモンがヒナに対する愛情に気づいてはいない。周りの人間も同じようなものだど勘違いしている。

夢はまだ決めていない。ポケモントレーナーになるかポケモンコーディネーターになるかはまだ考え中である。ただしピチユーはコンテストが好きでよくパフォーマンスをしたりするため、コーディネーターになろうかと思っただけだ。でも兄がそれを許すかどうかは分からない。

ヒトカゲとピチューと現在強くなるため修行中だけど、まだ一般的なトレーナーレベルでしかない。でも幼いというのにさすが兄（サトシ）の妹だ。前世の記憶は覚えていて、かなり賢いのだけれど、精神年齢が幼くなっていったるため、いつかは身体と同じぐらいになるはず。でも賢いのは変わらない。バトルにおいて的確な指示をする才能を秘めている…？

次回予告

ここは、始まりの町と呼ばれているマサラタウン。そんなマサラタウンに兄と妹が帰ってきた。でも兄はカロス地方に旅立ち、妹はマサラタウンでのんびりと暮らす。兄は旅に出て様々なポケモンたちと出会い、そしてメガシンカというポケモンの新たな力を知る。妹はマサラタウンでヒトカゲやピチューと共にとても平和な日々を過ごしていた。いつも通りの日々だと、感じていたのだ――。

「何でお兄ちゃんのポケモンたちがみんな未進化前に戻ってるのおおおお!!!??」

『カゲカゲエエ!?』

『ピチュピツチュウウウ!?』

…やっぱり平和な日々はやってこないかもしれない。妹達はマサラタウンで起きた事件を解決するために奮闘していた。

そして兄も兄で問題に直面していた。

「ねえ、サトシ…覚えてる?…私と一生添い遂げるって約束を…!」

「え、いや…ヒトチガイジャンイデスカ?」

『ピイカ…』

昔やらかしてしまった兄とセレナの約束?

「……ルカリオ…本当に帰っちゃうの?」

『カゲエ…?』

『ピチュ…?』

『ああ、もう自分の居場所に帰らないといけないんだ…アーロン様のもとへ』

妹達がルカリオとお別れ？

そしてなんとまさかの――。

「はっ!?!ヒナが家出した!?!」

『ピイカ!?!』

『ああ、どうにも反抗期らしい…』

「いや冷静に言うなよ!!」

『ピツカツチュ!!』

妹がマサラタウンから外に出ちやった!?!

「アクロマアアアてめえふざけてんじゃねえぞゴラア!!!」

『ピツカア!!!』

「私はふざけてなどいませんよサトシ君？」

しかも兄の旅にアクロマ登場？

「…そう、バッチ3個集めることが条件ね…良いわよ…受けて立つわ!」

『カゲエ!』

『ピツチュウ!』

「だから俺は結婚しないって言ってんだろ!!」

『ピツカアア!!』

妹の決意とは…そして兄の困惑とは…？

次回作 カロス地方く兄妹それぞれの旅路へく

お楽しみに!!

イツシユ地方のクリスマス

それは、兄妹達がまだマサラタウンに帰っていない頃。イツシユ地方でリーグが終わり、Nと出会う前のことだった――。

「メリークリスマス！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「まだクリスマスじゃねえだろ？」

『ピイカツチュ…』

「いやクリスマスと言っても…今日はクリスマスイブ…フツ。僕のクリスマスソムリエ

としての出番だね！」

「クリスマスソムリエって…あまり必要なさそうね」

『キバキ…』

『だが、今日から忙しくなることは確かだろうな…』

こんにちはは妹のヒナです。今日はクリスマスイブになります！周りは全て鮮やかなイルミネーションがポケモンの姿をしていて、とても綺麗です。部屋の窓から見えるのは大きなツリーとその周りにある飾り。イルミネーションはイッシュ地方の初心者用でもあるミジユマルとツタージャとポカブがいて、そしてさまざまなイッシュ地方のポケモンたちがツリーの周りを並んでいるような光景にヒトカゲ達が綺麗だと大はしゃぎしています。しかも明日は雪が降るとのことです…もしかしたらホワイトクリスマスになるかもしれないとちよつとテンションが上がってます。でも兄とピカチュウは何だかやる気がなさそう…？

「お兄ちゃん達どうしたの？何かやる気ないみたいだけど…」

『カゲエ？』

『ピッチュ？』

「…いや、気にすんなよ。ほらヒナたちはルカリオの手伝いをするって言うてたのにここにいてもいいのかわ？」

『ピカピカ？』

「はっそうだった…！行こうヒトカゲにピチューー！」

『カゲ！』

『ピッチュウー！』

何だか兄たちに誤魔化されたような気がしたけれど、でもルカリオの手伝いをすると言ったのは事実だから慌ててキッチンに向かう。

今私たちがいる建物は、ポケモンセンターの一室。キッチン付きの大きな部屋を借りることができたからルカリオとデントが喜んでクリスマススイブのデイナーを作っているのだ。明日用のケーキなども用意すると言っていたからすごく楽しみ。美味しいのは確かだからね。

「ルカリオにデント…て、手伝いに来たよ…」

『カ、カゲカ…』

『ピッチュウ…』

——キッチンに入るとそこは戦場だった。

ルカリオがオーブンを設定しながらボールに入っている材料をかき混ぜていて、デントは鍋の中をかき混ぜながらフライパンで焼いている食べ物を裏返す。忙しく動いているルカリオ達の邪魔をしているんじゃないかなと思いつながら、入ってもいいのか躊躇してしまった。でもルカリオがすぐに私たちに気づいたようで。笑みを浮かべながらちようど良かったと言つてバツクを渡してきた。

「これは？」

『カゲエ？』

『ピッチュ？』

『材料が足りないから買ってきてくれないか？もちろんお前たちだけで行くな。サトシかアイリスを連れて外へ出るんだぞ』

「ん、分かった……！」

『カゲカゲ！』

『ピッチュピッチュ！』

ルカリオが真剣そうな表情で言つたために私たちも自然と緊張し、真剣そうな表情で頷く。それに満足したのかルカリオはすぐに戦場に戻つていき料理を作っていく。

私たちは顔を見合わせて邪魔にならないようにキッチンから出てアイリスと兄を探す。兄はいつの間にか部屋から外に出ているようで、残っているのはアイリスだけだつ

た。

「あら？どうしたのヒナちゃん」

『キバキ？』

「ルカリオに頼まれて足りない食べ物を買ってくるんだけど…私たちが外に出るなって言われたから、アイリスたちも来てくれるかな？」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

「ええ、もちろんよー！」

『キババ!!』

アイリスとキバゴは笑顔で私たちの頼みを聞いてくれて、外に出てデパートに行き材料を買うために歩き出した。

外はイルミネーションのおかげで明るく、人やポケモンたちが楽しそうにしている。…もちろん恋人らしき姿も見えたけれど、どのカップルも幸せそうで私も自然と笑顔になった。皆が平和に幸せだとやっぱり嬉しいものだよね。

「あ、あれってキバゴのイルミネーションだよね！ほらあれ!!」

『カゲエ!!』

『ピッチユウ!!』

「あ、本当ね! ほら見てキバゴ!」

『キバキバ!!』

「あ、あつちはヤナツプだ!」

『カゲカゲ!』

『ピッチユ!』

「たくさんいて綺麗ね…!」

『キバア!』

知っているポケモンや兄たちの手持ちのポケモンがイルミネーションになっているとすぐにアイリスと一緒に見て回り、でもあまり遠回りをしているとルカリオ達に怒られると分かってデパートに向かいながら見て歩く。そしてデパートに到着し、必要なものをメモしてある紙を見ながら買っていく。その後また帰り道にイルミネーションを見ながら、ヒトカゲ達ははしやぎながら歩いていく。寒くなってきたから兄が買ってくれたマフラーのおかげで首元が温かい。もちろんコートも着てるから寒いだなんて感じないだけだね…。

そう思っていると、隣りで歩いていたアイリスが私を見て口を開いた。

「…そういえば、ヒナちゃんの欲しいものって決まってる？」
『キバア？』

「欲しいもの…もちろん平穏かな…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

「ふふ…確かに私たちの旅ってトラブルばかりよね…！」

『キバキバ…！』

欲しいものと聞かれたために、つい今までの惨状を思い出して平穏だと言ってしまった。でもアイリスとキバゴは今までの旅を懐かしいと思いつながりながら問題起きてばかりだったなあと呟いている。まあもちろんそれって兄のせいもあるんだけどね…：たまにアイリスたちの暴走もあるけど…：兄がやらかしてしまったり暴走したり…：本当にいろいろあつたなと思う。

「…でも、やっぱり今も楽しいから…：みんなの幸せを願っておく！」

『カゲ…カゲカゲ!!』

『ピチュウ!』

「ヒトカゲとピチュウも私と一緒に？」

『カゲエエ!!』

『ピッチユウウ!!』

「あ、良いわね…私たちも一緒よ!」

『キバキバ!』

ヒトカゲとピチューが私に近づいて抱きついてきたから、私も一緒になって抱きつく。そしてアイリスとキバゴが笑みを浮かべて抱きついて団子みたいになってる私たちに向かって手を広げて抱きつき、皆で笑い合った。久々に平穏な一日を迎えたし、とりあえず皆が悲しまないような問題解決をしていこうと思う…まずは兄の暴走を止めることかな…うん。まあできないだろうけどさ…。

——そして、帰ってきたらかなり部屋が凄いいことになっていた。テーブルには料理が並んでいても美味しそうな香りがしている。そしてもう忙しくないのかデントが部屋の装飾をしていて、何時の間に設置したのか小さなツリーが電飾によつて淡い光を煌めかせている。そのツリーに興味深げに見つめているのは帰ってきて真つ先に近づいたヒトカゲとピチューとキバゴだ。もちろん私も綺麗だと思いがら近づく。

アイリスはその間に買っていた食べ物をルカリオに渡していた。

「綺麗…これデントが用意したの？」

『カゲカゲ？』

『ピチュウ？』

『キババ？』

「フフン！その通りだよ！クリスマスと言ったらツリーは确实。そしてそのツリーを輝かせるために必要な電飾も完璧な位置に設置し、星もこのツリーに合う大きさを用意したよ…まさにグレイトなテイストだね！」

「そ、そうなんだ…」

『カゲエ…』

『ピツチュウ…』

『キバキバ…』

「何時の間にツリーなんて用意したのよ…」

「それは君たちが買い物に行った後、少し手が空いたタイミングで予約したツリーが届いた時よ！」

「よ、予約なんてしてたんだ…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

「まさにデントらしいと言えるわね…」

『キバア…』

私たちはデントの興奮した様子にちよつとだけ引き気味になりながらも、ツリーが綺麗だと感動する。窓から見える大きなツリーと、部屋の中にある小さなツリーが合わさって色鮮やかに光る色に…マサラタウンにいる皆にも見せたかったなと思つてしまった。でもこの感動を帰つた時にお土産話として話して、マサラタウンでクリスマスを迎えた時に同じようなことをしようと思つた。綺麗なんだから皆で分かち合わないといけないよね！

『出来上がったぞ』

「待つてました！イッツ・クリスマス・タイム！」

「いや待ちなさい…今日はクリスマススイブなんだから落ち着きなさいよ」

『キバア…』

「あはは…つてそういえばお兄ちゃんはどしたの？」

『カゲエ？』

『ピチュ？』

『ああ、サトシなら確か電話があるとジョーイから連絡があつて部屋から出て行つたが…』

私たちは何があつたんだろうと思ひながら外を出て兄を探しに行く。すぐに食べられるように設置してある料理が冷めないうちに食べたいから、兄を連れ戻してクリスマスイブを楽しまないとねと思ひながらも…。

．．．．．

そしてやって来たのは、電話前の兄の姿。でも何だか兄とピカチュウが凄く苛ついた様子で話しているような…？

「だから…帰れないって言ってるだろ!!! 何度言えば気が済むんだ!!!」

『ピカピカチュ!!!』

「お、お兄ちゃん…ってちよつと待つて電話前にいるのって誰？」

『カゲエ？』

『ピチュウ?』

電話で兄が話している相手を見ると、何やらトレーナーらしき集団がカメラに映ろうと中心に集まりながらも嘆き悲しんでいる様子が見えた。私たちは顔を見合わせながらその様子を見る。

「お願いしますサトシ様…あなたがジムリーダーになつてもらわないと困るんですよ…上司が…!」

「サトシ様あ!私のこと踏んでください…!」

「むしろ今罵倒してくださいサトシ様!!!」

「チャンピオンになつてくれないとヤバいんです…もう僕の胃がやばくてやばくて…!」

「サトシ様!私にゴミを見るような目をしてください!!いやむしろそのまま放置もいい…!」

「…:…:はあ…:切るぞ」

『ピツカア』

切るぞと言われ、待つてくれという悲鳴が聞こえてきたような気がするけれど、その前に兄とピカチュウがため息をついてちよつとだけ不機嫌そうにもう何も映っていない電話を睨みつけていた。

私たちはそれに苦笑しながら兄たちに近づいて話しかける。兄とピカチュウは私たちに気がついたけれど、誰なのか問いかける前にすぐに部屋に戻ろうと言つて歩き出してしまったため電話の相手が誰なのか分からず……結局歩いて部屋に戻りながら聞いてみた。すると兄とピカチュウはまた嫌そうな表情を浮かべて、質問に答えてくれた。

「ねえお兄ちゃん……あの電話の相手つて誰なの？」

『カゲエ?』

『ピチュウ?』

「ああ、いつもバトルしてくれつて頼むトレーナー達だよ」

『ピカピカ…』

「バトルつて言つたかい？サトシだったらすぐにそのバトルを受けると思つたよ」

「そういえばそうね？サトシつて売られた喧嘩は買う主義でしょ？それなのにバトル受けないつて…」

『キバア…?』

「あいつらの居場所と…あといろいろと問題ありすぎるからな…」

『ピカピカ…』

「居場所？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

「まずカントー地方オレンジ諸島ジョウト地方ホウエン地方シンオウ地方…まあつまり…今まで旅してきた中で出会ったトレーナー達が集合してバトルしてくれてたまに催促するんだよ」

『ピカア…』

『それなら…サトシだったら喜んでやると思うが？』

今まで旅をしてきた中で出会ったトレーナー達に再戦のバトルを挑まれるというのは面白いと兄が言っていたから、私たちは首を傾けて疑問に思った。兄だったらやると思ったのに…何で受けないんだろう？

でも兄とピカチュウが長い時間息をついた後、すぐに話してくれた。

「そりゃあバトルの再戦だけだったら喜んで受けたけどな…最近だとチャンピオンたち

の刺客もやってきて、チャンピオンになれたのジムリーダーになってくれたのうるさくてな…しかも普通のトレーナー達も踏んでくれたの罵倒してくれだの気持ち悪くなってきたからあまり引き受けたくないんだ…」

『ピイカ…』

「あ、そういえばさつきも踏んでくださいって言葉が聞こえたような…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

『……おいサトシ…ヒナの教育に良くない発言を言うのは止める!!』

「ルカリオ…文句言うなら俺じゃなくて発言したあいつらに言ってくれないか?」

『ピイカツチュ?』

「はは…何だか大変そうなテイストだね…」

「まあこれから頑張りなさいよサトシ…」

『キバキバ…』

……なんだか微妙な雰囲気になってしまったけれど、部屋に着いたらその空気は消し飛んでしまった。湯気が立ち込め美味しそうな香りがする料理の数々と大きなケーキ…そして部屋に置かれているツリーを見て笑顔になり、兄とピカチュウも気分を変えてク

クリスマスを楽しむことにしたようだ。

とにかく、明日も楽しまないとね…！

「メリークリスマス!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピツチュ!』

カロス地方く兄妹それぞれの旅路く

第百六十七話く妹は平和に過ごしていたく

こんにちは妹のヒナです。イツシユ地方での旅が終わり、私たちは今マサラタウンでのんびりと過ごしています。イツシユ地方ではほとんどが騒動でしかなかったと思い、平和な日々を堪能しているのです。

「あれ？」

『カゲエ？』

『……ピチュユ？』

迷いの森に入って奥にある大樹へ向かって歩いていたら時いつもとは違う違和感に

気づいた。私だけじゃなくヒトカゲもそれに気づいたようで、私の手を引っぱって頷いた。ピチューはイツシュ地方で出会ったから私たちが何で首を傾けているのか分からないという意味で疑問を浮かべていたらしい。

今私たちがいるのは迷いの森の奥だ。つまり木々がとても多く、日差しがあまり来ない暗い場所：だというのに私たちが見つけた先では明るくなっていたのだ。その光はポケモンの技とは思えない大きな輝きだった。まるで太陽から照らされる木漏れ日のように：いや実際はそれ以上に明るくなっていたのだ。しかもその先で何やら騒音が聞こえてきているのも分かった。もしかしたら兄のポケモンたちが何か騒動でも起こしているのかなと思っただけで、それにしても音が大きい。爆発したような物凄い轟音も聞こえてきて：大丈夫なのかと不安になった。

私たちが見ているその先は大樹がある場所とは違って：普通に木々が生えているだけだったはずなのに何で明るいんだろうと思ひ、行って見ることにした。ピチューにもこの先は前は明るくなかったということ、イツシュ地方を旅立つ前と違っていたということの説明してから歩き出す。

「何だろう：：凄く嫌な予感がする：」

『カゲエ：』

『ピチュウ…』

.....

——着いた先で待っていたのは迷いの森での木々…ではなく、立派なバトル場やトレーニング施設、リゾート地かと思える綺麗な浜辺だった。

「どういふことなの!？」

『カゲカゲ!？』

『ピッチュ!!』

ピチュウが目を輝かせ楽しそうに浜辺に走って行く姿を見つめながらも、迷いの森の変化に驚いてしまった私たちは叫んだ。その叫び声に反応したのはバトル場でそれぞれ兄のポケモンたちがグループを組んでバトルをしていたジュカイン達と、トレーニング施設かと思えるぐらい自然の木々や地面などを使って修行をしているゴウカザル達。浜辺では何故か遊びに来ていたラプラス達やブイゼルとなにやら話し合っているフカマル達がいいた。ピチュウもその中に入って何を話しているのか聞いている。

ちなみに兄のポケモン達だけじゃなく伝説たちもいたりする。

『ヒナ、何をそんなに驚いているんだ』

「いや驚くからね！ここ何!?! イツシユ地方に旅立つ前はこんな感じじゃなかったはずだよー！」

『カゲ！』

『ああここか。サトシがイツシユ地方を旅立つ前にポケモンたちの修行の場として考え設計し、そして俺たちで作り上げたトレーニングフィールドだ』

「お兄ちゃん…」

『カゲエ…』

兄がいつもどおりやらかしていたらしい…というか、木々があつた場所に砂や湖の水によつてリゾートのような綺麗な浜辺のようになっていた場所を作つたということに一番驚いた。バトル場は兄がイツシユ地方を旅する以前からずっと修行する時にちやんとした場所がマサラタウンにもあると良いよなと呟いていたことがあつたのを覚えていたからそのせいだと思う。公式にバトルする時のでこぼこがない整地された綺麗な地面、地面が抉れてへこんだ部分はおそらくバトルフィールドの範囲になっているの

だろう。今は集団バトルをしているみたいだけど、ちゃんとルールがあつてトレーナーがいるようなしつかりしたバトルのようになっていた。これは兄が考えて、ルールなども教えていったんだろうと思う。

トレーニング施設になつている場所も同じ考えだ。トレーニング施設ではサンドバツクのような形をした大きな石が並べられていて、ゴウカザルが技を使わず素手で破壊している。オオツバメやヘイガニなんてとつしんのような勢いで突つ込んで石にヒビを入れて壊していた。サンドバツク岩だけじゃなく毘のように飛び交うとがった岩を避けまくるグライオンがいた。他にもいろいろと何かやったのかおとし穴があつたりはかいこうせんが放たれたかのような地面に焼跡が残つていたり。まあとにかく、ミュウツーたちが作り上げたとは思えないほど凄いいことになつていたのだ。

でもやっぱり一番驚いたのは浜辺である。：いや、浜辺のような場所だと言つた方がいい。砂や海のような光景があつたとしても周りは木々に覆われていて、湖の一部分を使つたと分かつてしまうからだ。ミュウツーに聞いて見ると砂はホウエン地方まで行つて集め、そして海のような場所はやはり湖を広げていき。そして波打つようにしたという。どうやって波打つようにしてやつたんだと言いたいけどそれを聞くとなんがか頭が痛くなりそうな気がしたから止めておいた。

でも兄が浜辺を作ろうと言つたのはなんでだろうと思つた。今浜辺のような場所で

はラプラス達がなみのりを発動させてブイゼルがサーフィンのようにラプラスのなみのりで泳いでいる。それをフカマルやズルツグ、そしてピチューが見つめていた。

ミュウツーがバトル場に戻らず私たちの近くにいたため、質問するためにラプラス達に向かって指差してから話しかけた。

「あれ何やってるの?」

『カゲ?』

『ああ。なみのりの技を教えている最中だ』

「ちよつと待ってそれおかしい!」

『カゲエ……』

なみのりはみずタイプポケモンが覚えるはずの技だ。：いや、みずタイプだけじゃなく他にも覚えるポケモンもいる。それに兄のピカチュウも確かなみのりらしきことをしていたような気がした。でもそれこそサーフィンのようにボードに乗ってなみのりをしていただけだ。けれど今見えているフカマル達はボードなどは持っていない。

…そして通常はなみのりが覚えられるはずもない。それだというのにフカマルやズルッグが覚えようとしていることに驚いた。…しかもフカマルやズルッグだけじゃなくマグマラシもじつとラプラス達の方を見て、話を聞いているようだし…ピチューもね。

『通常ありえないと言えるタイプであるポケモンが技を放つことができるようになったらバトルが面白くなると優れたる操り人が言っていたぞ…』

『ああ、あとヒナ達がイツシユ地方を旅している間にワニノコ達が地面を利用してがんせきほうという技を習得していた』

「もうタイプとか超越しすぎでしょ…お兄ちゃんの馬鹿…」

『…カゲカゲ』

私とヒトカゲはため息をついて浜辺のような場所を見る。波にのろうと泳いでいるピチューが見えて…ああこれはなみのり習得しそうだたと喜んでいいのか分からない微妙な心境になりながらも苦笑した。

いつか兄のポケモンたちがすべてのタイプの技を習得し、弱点はないという状況に

なっただらうしようと嫌な考えが思い浮かんでしまった。

——後に兄に話を聞いたら、オーキド博士にトレーニングフィールドを作っているのか話し合いをしてから決めたいらしい。なんというか…兄らしい行動だなと諦めを
通り越して納得してしまったものだ。

第百六十八話く兄妹は新たな可能性を知るく

「ヒナ！メガシンカって知ってるか!？」

「え、なにそれ…?」

こんにちはは妹のヒナです。兄がなにやら楽しそうな表情で私に電話してきました。カロス地方について一度電話をくれたことがあったけど、その時は普通だったのに今はどうしても楽しそうです。なんだか新しい玩具を見つけた子供のような笑顔を浮かべていて…しかも目はキラキラと輝いていて、こんな兄を私は初めて見たと思いました。ですがおそらくトレーナーとして兄よりも強者と出会った時もこんな表情をするのかもしれないと思えるような…とても嬉しくて楽しいという感情が現れているようです。

あ、ちなみにヒトカゲとピチューは兄のポケモンたちと一緒に人間という健康診断に

行っていて私だけ留守番です。いつも一緒にいるヒトカゲ達がいなのが本当に久しぶりで…寂しいと感じている時に兄から電話がありました。

というか、メガシンカって何…？

「メガシンカってもしかしてカロス地方の新しいポケモンの名前？」

「いや違うぜ！メガシンカはポケモンたちのもう一段階新しい進化なんだ！」

「へ…え!？」

兄の言った言葉に私は驚いた。そんな話聞いたことないし知らない。…いや、私もうポケモンの原作を思い出せなくなっているから忘れてただけでもしかしたら知っているたことかもしれない。ポケモンのもう一段階の進化があるということは…もしかしたらほかにもまだ進化するかもしれないポケモンがいるということ…兄のピカチュウたちも進化するかもしれないということだろう。…あれ、それって兄がもっと強くなるってことだよな。

「お兄ちゃん…もしかしてピカチュウがメガシンカしたの？」

「いやまだメガシンカについての話を聞いただけなんだ。…というよりメガシンカは普

通の進化とは違って一定時間のみの進化になっていて、また元に戻るらしいし普通に修行していてメガシンカはしないらしい……！」

「そ、そうなんだ……」

兄がとても楽しそうな表情で言う声に、私はこの先の未来で起きるであろう可能性を悟った。おそらく兄はメガシンカを習得してみたいと思っているのだろう。今もかなり強いというのに、ピカチュウたちがメガシンカしてさらに強くなってバトルをするというのはある意味無双しているのと同じだと思う。だから私としてはこれ以上強くなるなくてもいいような気もするけれど……前に見たトレーニングフィールドでのポケモン達の修行の光景を見るとそれは言えない。兄たちがやっていることはバトルで勝つため、さらに強くなるため。私たちもそういった修行はしてきたし、これからはきつとするだろうから兄たちを止めるということとはできない。

それに兄たちも強くなるということに諦めず楽しんで修行しているからなおさら言えることはないだろう。

とにかく、兄のこの表情を見て、私はこれからの可能性について話してみた。

「……じゃあカロス地方での旅の目的はカロスリーグ優勝とメガシンカすること？」

「まあなー…でもメガシンカについてはまだ分からない部分があるからまず先にカロスリーグ優勝だな」

「そっか。カロスリーグ優勝…お兄ちゃんならできそうな気がするけど一応応援しとくよ」

「おう、期待しとけよヒナ！…つとあと紹介する仲間がいるんだった」

「…仲間？」

兄が取り出したモンスターボールから出てきたのは水色のカエルのようなポケモン。でもカエルといつてもとても可愛らしいと思える姿をしていた。そのポケモンは私は見たことない姿をしていた。おそらくカロス地方にいるポケモンなのだろう。そのカエルのようなポケモンが目を閉じている風にみえる瞳がちゃんと私を見て、そして笑みを浮かべて声を出す。その声は私に挨拶をしているかのようで、私も自然と笑みを浮かべた。

「ヒナ、こいつはカロス地方で出会った新しい仲間のケロマツだ！ケロマツ、こっちは俺の妹のヒナなんだ」

『ケロー！』

「よろしくねケロマツ！」

兄の水タイプのポケモンだと半分が暴走癖のあるトラブルメーカーで、半分はしっかりしている性格だと認識している。でもこのケロマツはかなりしつかりしてそうだからトラブルなどは引き起こさないかなと思えた。それに兄の仲間になったということはバトルが好きだという可能性が高い。カロス地方での旅が終わって、マサラタウンに帰ってくる時はもつと遅しく成長しているのだろう。しかも兄の話だとケロマツはカロス地方の御三家の1体だという。他にもどんなポケモンがいるのか気になったけど、それは自分で旅してみた時に見てみればいいかと考える。

とにかく、兄のカロス地方での旅はかなり楽しそうだし、新しい発見にいつか兄のポケモン達のメガシンカが見れる日も近いかなと思った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「……あれ、そういえばピカチュウは？」

「ああピカチユウならユリーカにブラッシングされてるぜ」

『ケロオ』

「ゆりーか…？」

「カロス地方の新しい旅仲間なんだ。お前と同じぐらいの年齢だし…今度紹介するよ」

『ケロ』

「うん分かった。楽しみにしてるね」

第百六十九話　妹はある状況に困惑する

「へ…ヒトカゲが2体…？」

『ピチュウ？』

『カゲ…？』

『……………』

　　こんにちはは妹のヒナです。今日はヒトカゲやピチュウと一緒に森の中を散歩していきます。この後ピチュウがなみのりの練習を試みたくらいにトレニングフィールドに行く予定なのですが、その途中であるヒトカゲに出会いました。しかもそのヒトカゲは私のヒトカゲよりも一回り大きくて通常の色をしていた。それにしても…なんだか

兄が不機嫌になっていてる時のような表情をしていてどこかで見たことあるような感じがする。

まるで兄がヒトカゲになったかのような表情に、私と私の足元にいるヒトカゲとピチューは顔を見合わせて首を傾けた。

「えつと……どうしたのきみ？」

『カゲカゲ？』

『ピチュー……？』

『……カゲエ』

不機嫌そうなヒトカゲはただ小さくため息をついてから言う。その声はまるでついでこいとも言うかのようなだ。歩いていくヒトカゲが一度私たちの方を向いてからまた一鳴きして、私たちが近づくの待つ。よく分からないけれど、ついて行った方がいいかなと思えたので行くことになった。

.....

「ちよつと待つて…何これ!」

『カゲカゲ!』

『ピチュウ!?!』

不機嫌そうなヒトカゲについて行つた先は後で行こうと思つていたトレーニングフィールドだった。そこには兄たちのポケモン達がいた。ただし伝説はいなくて、フシギダネ達が周りに揃っている状況に啞然とした。フシギダネなどはともかく、いろいろと姿が変化しているポケモンもいて私たちはそれに驚いてしまったんだけど…。

「何でお兄ちゃんのポケモンたちがみんな未進化前に戻つてるのおおお!!?!」

『カゲカゲエエ!』

『ピチュピツチュウウウ!』

フシギダネ達未進化のポケモンも私たちと同じように困惑していた。そして進化していたはずのポケモンたちがそれぞれ自分の進化前の姿を確認して驚いていた。イッシュ地方で一緒に旅をしていたチャオプー等の進化したポケモン達もまるで兄と出会った頃の姿に…：出会う前に進化していたガマガル達…：いやオタマ口達はある意味初

めて見た姿に驚愕する。

「あれ？じゃあついて来いって言ったヒトカゲってまさか……………」

「…………君つてもしかしてお兄ちゃんのリザードン？」

『カ、カゲ？』

『ピチュ…………？』

『…………カゲエ』

不機嫌そうなヒトカゲが小さく頷いたことによつて確信した。というよりも兄と同じような表情をしている時点で気づかなければならなかったのかもしれない。兄とリザードンはよく喧嘩をするし似ている部分もあった。もちろん兄といつも一緒にいるピカチュウも似ているのだけれど…………でも離れた場所で強さを求めて修行をするリザードンは兄に似ているなとずっとそう感じてきたんだから不機嫌そうなヒトカゲと出会った時に分かれればよかった…………まあリザードンだと分かった時点で何もすることがないと思うけれど…………でもまさか進化したポケモンたちが未進化に戻るだなんてことあるだなんて…………。

「ミュウツーたちは何処にいるの？話聞いて見たらもしかしたらわかるかもしれない！」

『カゲ…！』

『ピッチュ！』

『ダネダネ！…ダネ』

フシギダネが森の中を探そうとする私たちを止めて、首を横に振った。その仕草はミュウツーたちにはここにはいないということであって…じゃあどうすればいいんだろうと思った。オーキド博士達に言ったとしてもちゃんと元に戻るのか分からないし…聞いて見た方がいいのかどうか迷う。でもとにかく兄にだけは伝えた方がいいかもしれないと考えた。

「と、とにかく…お兄ちゃんに話をしないとだよね…！」

『カゲ！』

『ピッチュ！』

『カゲ…！』

『ウツキャ…！』

『キャモ！』

兄のリザードンとゴウカザルとジユカイン：今は進化前のヒトカゲとヒコザルとキモリが私達の前に立ちはだかり兄に知らせるのを阻止しようとしてきた。自分たちで起きたトラブルは自分たちで解決したいと言っているのかもしれないと私たちはお互いに見合わせてからフシギダネを見る。フシギダネはとても微妙そうな表情でその通りにしてやれと小さく鳴き声を上げる。それに私たちは頷いて兄に連絡するのは止めたんだけど、やっぱりカオスな気がする。ヘイガニがスバメの身体を見て何故かたいあたりらしきことをしており、ユキワラシがそれに巻き込まれて喧嘩になった。そのためナエトルとチコリータが喧嘩を止めようとして最終的にはフシギダネのソーラービームで止めていた。ちなみにポツポとクラブはテンションが上がって暴れているゴースを止めようと必死に頑張っていて、そろそろフシギダネに吹っ飛ばされそうだと思うた。

これどう收拾つけようかと思っていた時に、その声は聞こえてきた。

『……ヒナ』

「あ、良かったミュウツーに聞きたいことがツツ!!!」

『カゲカゲ!?!』

『ピツチュ!?!』

後ろを振り返って見た先にいたのはミュウツーだけじゃなく伝説たちがいた。伝説たちはいつもマサラタウンに来ているミュウ、ミュウツー、セレビィ、ルギア、ラティアス、ラティオス、レックウザ、デオキシス…そしてめつたに出来ないけどたまに遊びに来るアグノム、ユクシー、エムリット、ファイヤー、サンダー、フリーザー、スイクン、エンテイ、ライコウ、カイオーガ、グラードン…まあつまり、いろんな地方で見ることのできる様々な伝説がいたのだ。でもその伝説のポケモンたちの姿がいつもとは違っていた。

「何で手乗りサイズぐらいに小さくなってんの!!?」

『カゲエ!?!』

『ピツチュピチュ!?!』

『…気づいたらこうなってたんだ』

ミュウなどの小さなポケモンまでもが手に乗れるぐらいのサイズまで小さくなって

いた。まるで小さな人形のような姿に、これも兄のポケモンたちが進化前の姿になってしまったのと同じ状況なのかと驚く。とにかく何とかしなければとリザードン達：じゃなくて兄のヒトカゲ達には悪いけど兄に言った方がいいと行動する。

『ダネエエダネフツシイイイ!!!!』

「え、ちよつと待って…!？」

『カゲ!!?』

『ピチュ!!?』

兄たちのポケモンの喧嘩などがエスカレートし、悪化していたらしい。兄のヒトカゲやヒコザル、キモリも交じってバトルのように激しく争っている。それを穏便に止めようとしていたフシギダネがいつまでたっても収まらない喧嘩にブチギレて喧嘩している方向に：いや私たちの方向にソーラービームが放たれようとしてそこから逃げるために走り出そうとする。でも足が何故か重くて動けない…!：

「ちよつと待ってフシギダネ…!!!」

『カゲカゲ!!』

『ピチュ!!』

『ダネダネダネエエエ!!!』

.....

「危ない!!?...あれ?」

『カゲエ!』

『ピッチュ!』

大きく叫んでフシギダネのソーラービームに直撃してしまったかと思いきや、いつの間にか大樹の傍にいた。フシギダネ達はいなくて...あの小さくなった伝説たちも、喧嘩していた兄のポケモンたちもない...いや、私は眠っていて、夢を見ていたみたいだった...

「あれ...君は...」

『フオオオオオ...』

私のことを心配しているらしいヒトカゲとピチューの後ろから様子を窺うポケモン……ダークライがいた。ダークライについては兄からシンオウ地方の旅で話を聞いている。やりすぎたディアルガとパルキアの喧嘩を止める原因となったポケモンということ、とても優しいポケモンということ……そしてシンオウリーグでは違うダークライが出てきて面白いバトルができたということ話を話してくれた。だから良く覚えているけど……まさかマサラタウンに来ているとは思わなかった。

「もしかしてあれってダークライの悪夢……？」

『カゲ……』

『ピチューピ……』

『フウウ………』

「そっか……夢で良かった……本当にありがとうダークライ!!」

『ツ……!!?』

ダークライは自分のせいで悪夢を見たというのに何で感謝されたんだと驚いていた。でも私としてはあれが本当に夢でよかったと思ったのだから仕方ない。あれは酷すぎ

た：進化前に退化してしまった兄のヒトカゲ達も、手乗りサイズに小さくなってしまった伝説たちにもどう対処すればいいのかわからないからこれが夢でよかったと思った。

：ちなみにその時、普通サイズなルギアが通りかかっている、本当に夢だったんだと知って安堵したぐらいだ。

「とりあえず正夢になりませんように…かな…あ、そういえばダークライはどうしてマサラタウンに来たの？」

『カゲ？』

『ピチュピチュ？』

『フウウウ…サトシに会いに来た』

「お兄ちゃんに？」

『カゲエ？』

『ピチュピチュ？』

ダークライが小さな手紙を見せてくれた。その手紙はアラモスタウンにいるアリスとトニオという人たちから兄に向けられた手紙で…どうやら兄によって助けられたこ

とに対する感謝の気持ちと、今どうなっているかの話が書かれているらしいとダークライから聞いた。ダークライには兄はいまカロス地方に行っているからマサラタウンに帰って来た時に渡すかカロス地方までなんとか頑張って送るかするけどどうするか聞いた自分が持つていくと言つてそのまま別れた。

ちなみにその後夢についてヒトカゲ達に話したら心底夢でよかったと安心しており、そして手紙が無事に届いてダークライも元氣そうだったと兄から電話が来た時に悪夢について話したらまた一から育て直しも面白そうだよなと言つていた…：なんとというか、いつも通りの反応で心底安心したものだ。

そしてダークライはその後何度かマサラタウンに遊びに来るようになったのは言うまでもない。

第百七十話　く兄はセレナと出会うく

こんにちは兄のサトシです。カロス地方に来て初めてジム戦をし、ジムリーダーであるピオラさんに勝つことができました。その時にある少女に出会ったのですが、何だか様子がおかしいです。

「あの…サトシ…！」

「サトシの知り合いですか？」

「いや…えつと悪い…誰？」

『ピイカ…？』

今いる場所はポケモンセンター。ピカチュウと新しくゲットしたヤヤコマをバトルの後だからということとでジョーイさんに体力を回復してもらうために預かってもらっていた。でもその後無事に回復したピカチュウたちをジョーイさんから返してもらった時に、ジム戦を見学していた少女がポケモンセンターに走ってやって来て、頬を赤く染めて俺を見て名前を呼ぶ。その声にシトロロンが反応し、知り合いかどうか俺に聞いてきた。でも俺は全然記憶にないため一度考えてから首を横に振る。その答えに少女は少しだけ悲しそうな表情を浮かべていたが、すぐに笑みを浮かべて俺に近づいてから口を開いた。

「サトシは覚えてないかもしれないけど…私は覚えてるよ！あの時出会ったことを…ポケモンサマーキャンプのことを…」

「ポケモンサマーキャンプ？…え、ちょっと待ってくれ、それってもしかして小さい頃の話か？」

「ええそうよ！思い出してくれた？」

「どうしたのサトシ？何かすっごく眉間に皺寄ってる！」

『デネデネ！』

「ユリーカ！…でも、どうしたんですかサトシ？」

『ピカピ？』

ユリーカに指摘されるのは仕方ないと思う。それぐらい俺にとって昔の話はされたくないのだから…。まあつまり…何というか、子供の頃の話は俺にとって思い出したくない黒歴史のようなものだ。

妹が生まれていない頃の俺はかなり荒れていて問題児だった。まあ荒れているというよりマサラタウンの外に出て行こうとすることが多く、喧嘩を売られたらそれが人間であろうとポケモンであろうと数倍返しにしていたぐらいなんだけどな…いや、これは荒れていると言われても仕方ないか。

…今となってはたまに懐かしいと思えることもあったし、子供だったから仕方ないと受け入れていた時もあった。でもそれは自分自身で思い出す範囲でのことだ。いまだにシゲルから聞かされる話にも耳を塞いでそれよりポケモンバトルしようぜと話を逸らすこともあったりするというのは、この目の前にいる少女は俺が記憶していない昔に出会い、いろいろと知っているという…だからこそ聞きたくないような…聞かないと目の前の少女のことを思い出せないような微妙な心境になった。

そして少女…いや、セレナはそんな俺の表情ににこやかに笑みを浮かべて言う。

「ポケモンサマーキャンプで私たちは迷子になったの。その時にある約束したんだけど…ねえ、サトシ…覚えてる?…私と一生添い遂げるって約束を…!」

「え、いや……ヒトチガイジヤナイデスカ?」

『ピイカ…』

「サ、サトシ…」

「ええお嫁さん!?…凄い!お兄ちゃんもサトシを見習わないと!!」

「ユリーカ!小さな親切、大きなお世話だよ!」

「はぁーい…」

「ちよつと待て!俺は別にそういう約束した覚えは…覚えてないから知らねえけどでも女の子と付き合うとか絶対にしないしましてやお嫁さんとか添い遂げるとか俺が約束するわけないだろ!!」

セレナの爆弾発言にシトロロンが顔を赤くしていて、ユリーカはシトロロンのお嫁さんと

なる少女を見つげようと気合を入れていてピカチュウは首を傾けて困惑していた：そして俺はそんな兄妹とピカチュウを視界の隅で見つつ、大きな声で叫ぶ。

俺はそういう約束はたとえ覚えていなくてもするつもりはないと考えていたからだ。だいたい俺は前世では女だったし：そういう恋愛などといったことには興味ない。異性と付き合うという気も全くありえないと心の底から考えているからだ。でもセレナはそんな俺に対して悲しそうな表情も、ショックを受けたという様子もなくただ笑みを浮かべて頷いていた。

「知ってるよ。サトシが女の子と付き合う気がないってこと。サトシの秘密も：あの時全部、サトシが教えてくれたから…」

「あの時って……」

何だか嫌な予感がしてきた俺は必死に思い出そうとする。そんな冷や汗をかく俺に近づくセレナは俺の手を優しく握りしめ、ポケットからハンカチを取り出して言う。

「あの時、私が怪我をした時にサトシが助けてくれたの。：サトシだって傷だらけに

なっているのに私のことを心配してくれた…その時に借りたハンカチなの」

「ハンカチ…待て…ちよつと待ってくれ…セレナつてもしかして麦わら帽子をかぶったあの…」

「そう！あの時一緒に森の中を歩いて…そして約束したの！」

「いやでも俺は……つて約束してないからな！俺は記憶にないし…！」

「そんなことない！お願い…思い出して。私たちがあの時一緒にいて、話したことを…。サトシ、私はあなたのことを出会った時からずっとずっと……」

「……………」

「サトシ、ここは思い出すべきですよ」

「うんそうだよ！じゃないとセレナが可哀想！」

『デネ!!』

『ピツカ…』

「分かつてる…けどなあ…」

ハンカチを見て、俺は昔あつた出来事を思い出した。でも俺は…あの時泣いていたセレナにかなり酷い対応をしたような記憶があるんだけど何でセレナは俺に対してこん

なにも好意的なんだと疑問に思った。そして約束したという記憶はないと思う。でもセレナはそんなことないと言って少しだけ目を潤ませてこちらをじつと見ていた。必死に思い出してくれと泣きそうな表情になりながらも言うセレナにシトロンやユリールカ、そしてピカチュウが思い出せとセレナに同情するため、俺も何とか必死に思い出す。でも俺は絶対に添い遂げるだなんていう約束はしないはずだ：だから思い出そうとしても約束なんてしていないという、そんな安心感があった。約束なんて絶対にしていないという、過去の自分に対してそう言いきれぬ信頼感があった。

「サトシ…」

頬を赤く染めて、瞳を潤ませ：そして上目遣いになって思い出してほしいという祈るような声で俺の名前を言うセレナに：何で俺なんだという疑問と、俺なんかよりも他の男を好きになれば幸せになれるのにと、微妙な感情があった。とにかく約束はないということについて思い出さなければと俺はセレナと出会ったあのポケモンサマーキャンプの記憶をたどる。

——
そして思い出すのはあの麦わら帽子の女の子だった。

第百七十一話く兄とセレナの過去話く

サトシが幼い頃。そして妹が生まれていない頃の話。

その頃のサトシはマサラタウンの住人にとつて問題児として認識されていた。幼児の頃から町の外に勝手に出ようとして、どこかへ行く放浪癖のある変な子供であり、マサラタウンの住人である大人たちや子供たち、そして母であるハナコに対しても冷たく接していることから、本当に普通の子供なのかと言われ恐れられていた時期もあった。もちろんそんな騒動はオーキド博士の手腕によつて解決したのだけれど、でもそれでもサトシの母や、周りにいる人間達への傷は癒されず、そしてサトシも妹が生まれるまでは何もかもすべてを拒絶していた。

そんな頃に出会ったのが、セレナだった――。

「サ、サトシ！今日こそ一緒に遊んでもらうからな！」

「知るか。一人で勝手に遊んでろよ」

「サトシ……！」

シゲルから一緒に遊ぼうと言われてサトシは不機嫌そうな表情で舌打ちをしてから森の中へ入っていく。シゲルは少しだけ涙目になってサトシの後ろ姿を見ていた。サトシ達が参加したポケモンサマーキャンプはオーキド博士が主催で行われた。トレーナーでない子供たちとのポケモンの交流、そして旅における野宿の仕方などを教える意味も込められていたのだ。サトシはそのキャンプに参加するつもりはなかったのだが、母からの無言の圧力とシゲル達による強制連行によって参加させられてしまい、現在不機嫌な表情でそのポケモンサマーキャンプから逃げようとしていたのだった。

森に入ったサトシはただひたすら歩いていった。ポケモンたちがサトシのを見て、そして逃げるか様子を窺うか……サトシを知るポケモンたちは普段人間には攻撃しないがいつもサトシのせいで痛い目に遭ってきたために攻撃するかどちらかを選択してく

る。サトシは逃げたり様子を探ってきたりするポケモンは放っておいて、攻撃してくる奴は全て2倍返しにしていた。いつも通り、サトシは森から遠く離れた外へ出ようとしていたのだ。

そんな時にある声が聞こえてきた。

「うっう…ママあ…!!」

「……子供か」

「…だ、誰？」

「チツ…」

サトシは麦わら帽子をかぶった少女を見て、面倒そうな表情を浮かべて舌打ちをした。その音に少女は驚き、そして怯える。サトシは少女から見ると恐ろしい表情をしている子供であり、いじめっ子のように攻撃してくるかもしれないという恐怖心があったのだ。でもサトシはそんな泣いている少女を一瞥し、サトシが歩いていた後ろの方向を指差してからだだどうでもいいという声色で言う。

「…あっち行けばキャンプ場だからまっすぐ歩け」

「…え？」

サトシが言った言葉に少女は泣きはらした目を見開いて小さく呟く。でもサトシはそんな少女などもう気にしていないようでそのまま先へ進んでしまった。どこかへ行くこうとするサトシに少女は怖いというよりも気になったのか立ち上がってから走って行く。

「ねえ待って…どこへいくの…!？」

「俺に構うな…ッ！」

近づいてきた少女に苛ついたサトシはキャンプ場へ戻れと言おうとした。だが後ろを振り向いたら少女が足を挫いて近くにあった崖のような場所に落ちそうになっている光景が見えてきたのだ。いくら冷たく接していたとしてもこれはヤバいだろうと感じサトシは思わず少女を助けようと動いた。崖に落ちていく少女をサトシが走って飛び上がり、恐怖心で目を瞑る少女を抱きしめて身体を捻りサトシ自身が地面に激突する形で落ちた。

少女を助けようとした結果、落下したときの衝撃から幼いサトシの身体は傷つく。で

も小さな痛みや血が流れる感触もサトシは気にせず、恐怖心から少女はサトシに強くしがみついていた。だがサトシはそれが煩わしくなり近くに落ちていた麦わら帽子を拾ってから少女に握らせて無理矢理離れ、崖の上を見上げた。崖は断崖絶壁のようになっており、登りきることはできるだろうと分かった。だがこの少女を置いていくことはサトシにはできなかった。どんなに冷たく接触したとしても少女はまだ幼く、こういったトラブルに慣れていないと分かっていたからだ。そしてここから置いていくと命を落とす可能性もあった。最初に出会った場所ならばポケモンたちは人に慣れていて攻撃することはめつたにないだろう。だがここは崖の下の森の奥深く。ポケモンたちは人に慣れているかどうかさえ分からず、攻撃してくる奴らもいるとサトシは分かっていたからだ。そんなことを考えていたサトシに、少女はただ泣きながら麦わら帽子をかぶってから近づき、手を掴んだ。

「…怪我してる…わ、私のせいで…ごめんなさい！」

「気にすんな…それよりも行くぞ」

「え…どこ…どう？」

「キャンプ場」

サトシの身体は服が擦り切れて汚れていた。腕は落下したときにできたのか、それともその途中で崖にぶつかった時にできたのかパツクリと割れ、大きな切り傷ができていた。そして背中では少女は服を着ているせいで気づかないが地面に激突したせいでできた大きな青あざが痛む。骨を折るといふ重症にはならなかったが、そんな傷だらけになった理由が自分のせいだと気づいた少女は泣いて謝った。でもサトシはそんなことどうでもいいという態度で首を横に振り、崖に沿って歩いていくぞと言う。少女はサトシの傷を気にしていたが、サトシが歩き出したせいで慌てて後を追う。そしてサトシの後ろを歩き始めた。

歩いている場所は森林のせいで日差しがこないとても暗い場所。ちゃんとした道もないため草をかき分けて進む。その静寂な空気に少女は耐えられなくなり、前を歩くサトシに向かって話しかける。

「ねえ……わ、私はセレナって言うの……君の名前は……？」

「……………」

少女……いや、セレナと名乗り、そしてサトシの名前を聞こうとするが、サトシは何も答えない。そんな冷たい態度をとるサトシにセレナは俯いたまま黙り込み、ただ歩いて

いく。

「痛っ…私もう歩けない…!」

「…はあ」

だがその途中でセレナは足を怪我していたこと、そして崖に落ちる途中で挫いた部分
が痛みだし、泣きながら座り込む。サトシはため息をついてセレナを見て立ち止まる。
そして周りを確認し、セレナに近づいて手を伸ばした。

「な、なに…?」

「お前がそうしてると余計に時間がかかるんだよ」

サトシはただそう冷たい口調で言い、セレナの腕を引っぱって自身の背中に背負う。
視界が一気に変わり、サトシの背中に背負われたことに気づいたセレナは驚いて降りよ
うと暴れる。でもサトシがセレナに向かって暴れるな!と怒鳴ったためすぐにおとな
しくなった。そしてサトシは自分の背中の痛みを無視したまま歩き続け、森の先にある
小さな川でセレナを降ろした。セレナは地面に座る形で降ろされたことに驚き、サトシ
に近づこうと立ち上がる。だが足が痛み、すぐにまた座り込んだ。セレナはただ自分の

せいでこうなったこと、サトシが傷ついても泣き言を言わずにいるというのに自分の足が痛んだことに泣いて歩けないと情けないことを言ったことに沈んだ気持ちになった。サトシはそんなセレナを気にせず川に向かって歩き、そしてポケットにあるハンカチを取り出して川の水で濡らす。ただ水に濡らしただけで絞らず、泣き続けているセレナにサトシが水に濡れたハンカチをセレナの足に当てた。

「冷たい!?!」

「応急処置だから泣き言言うな」

「うう……」

土や泥で汚れた足をハンカチに染み込んだ水で洗い流し、そしてまたサトシが川に向かって歩く。先に自分の怪我して血を流している部分を洗い流した。そしてセレナに使ったハンカチを綺麗に洗い、今度は絞って冷たくなっているハンカチを持って近づく。座ってただサトシの行動を見ているセレナの怪我している足に結ぶ。その対応にセレナは驚き、目に涙を浮かべていたがサトシに怒られたくないと泣き言は言わなかった。でも涙はぼろぼろと零れ落ちる。サトシはそれをただ無言で見つめていた。

「これでもう痛くないだろ」

「……う……痛い……!」

「…捻挫にはなつてないし、ただのすり傷だ。最後まで諦めずに立て」

立とうとしたのだが、足を痛がりまた座り込むセレナを見たサトシはため息をつきながらも立ち上がって手を伸ばす。セレナはサトシの手を恐る恐る掴む。サトシは掴まれたセレナの手を引っぱり、立ち上がらせる。その勢いは強く、サトシがセレナを抱きしめる状態になってしまったがすぐに離れてそして空を見上げた。森林は川の部分にまで草花が及んでいたが、日の光はちゃんと見えていた。そしてその日差しがもうすぐ夕焼けに近づいているということも分かり、このままだと野宿になるだろうとサトシは理解した。そのためまたサトシは歩き始める。セレナはサトシに礼を言おうとしたが先に歩いて行ってしまったために慌てて後を追いかけて行く。

夕暮れになり、そして日が沈んだ後によりやく見つけたかなり大きな洞窟へ歩みを進める。

「へ、ここに入るの…?」

「もう夜だしキャンプまで遠いから仕方ないだろ」

「…う…怖い…!」

「はあ…ほら入るぞ」

「うん……」

セレナがサトシの手を握り、離れないでと小さく呟く。その言葉にサトシは面倒だのため息をつきながらも握られている手を無理やり離すことはなかった。洞窟の中に入り、朝が来るのを待つ。サトシは座った後洞窟の入り口と奥の方に異常がないか注意深く見つめていた。注意深く見ているのはポケモンたちに攻撃されないようにするためだ。そんなサトシの隣に座ったセレナが暗くなつた周りに怯え、恐怖で泣き出す。

「う……ママ……」

「……お前…………」

『ラッタアアアアツツ!!!』

隣りで震えて泣きだしたセレナにサトシは何かを言おうと口を開くが、洞窟の奥から現れたラッタ達のせいで遮られた。ラッタ達はサトシとセレナに牙をむこうと歯を力チカチ鳴らして近づこうとする。よく見るとラッタ達だけじゃなくコラッタの集団もいた。先頭にいる大きなラッタがこの集団のボスか何かだろうと考え、サトシは立ち上

がる。セレナは急に現れたラッタ達にも怯え余計に泣いてしまっていた。そしてセレナは立ち上がりサトシの腕を掴んで逃げようと叫んだ。

「……ここにいたら危ないよ……逃げようよ!!」

「逃げたら追われるぞ。それよりもやるべきことがあるから邪魔すんな。怖いならお前はそのまま座って目を閉じとけ」

「そ、そんなことできない……!」

「いいからおとなしくしてろ!!!」

『ラッタアアアアアアッ!!!』

「チツ……!」

「きやあ!!」

サトシの腕を掴んだセレナの手を離すためにサトシは諭すように言う。だがセレナは泣きながら首を横に振ってサトシの腕を抱きしめるように強く掴んで離さない。そんなセレナにサトシは怒鳴る。サトシはこのままだとセレナが攻撃に巻き込まれると

いうこと、そしてラッタ達が動き出すことを分かっていたから焦っていたのだ。

ラッタ達は興奮したように叫びながらサトシ達に向かって突進してくる。サトシは仕方ないとばかりに後ろで震えて腕を掴むセレナを一度無理矢理離してから抱え込むように抱きしめて飛び上がる。飛び上がったサトシ達にラッタ達は驚いていたがまた着地したところを狙って襲ってきた。セレナを抱えたままため避けきれないと感じたサトシはまた空中で回転し、ラッタ達の攻撃をもろに背中で受けた。その衝撃は強く、セレナは目を見開いてその瞬間を見ていた。

そして吹っ飛ばされたことよってこの後起きる怪我の可能性を理解したサトシはセレナに怪我がないように彼女の頭を抱えたまま転がり、壁に激突する。その衝撃で背中の痛みが鋭く身体中に駆け巡ったためサトシは舌打ちをして泣いているセレナを引きはがしてラッタ達を鋭く睨みつけた。

ラッタ達に向かって歩き出すサトシをセレナはただ座りこんで泣いていた。サトシの後ろにいて座り込むセレナは全てを理解していた。サトシの背が血で赤く汚れた原因は：自分を庇ったからできた傷だと分かったのだ。

セレナはただラッタ達への恐怖心と、サトシが庇ったという事実泣いてその光景を見ていた。

「集団で襲いかかってくる根性は気に入らねえな…覚悟しろよ鼠野郎!!」

『ツ…!?!』

サトシが一番大きなラッタに向かって強く殴り、吹き飛んでいく。そして強い一撃を受けたラッタが気絶し、その様子を見た他のラッタ達やコラッタ達がサトシが只者じゃないことに気づいて怯え、逃げていく。気絶したラッタもすぐに起き上がってサトシに對する恐怖で逃げて行った。

その様子を見たサトシはため息をついてセレナが座っている方を見るために振り向く。だが振り向いた瞬間彼女のふんわりとした髪が目の前に広がっていた。サトシはセレナに抱きつかれたということ、そして彼女にラッタ達によって負った怪我はないことに気づく。

「う…ぐ…ごめん…なさい…ごめんなさい!」

「…気にすんな。お前のせいじゃない」

ただ小さくため息をついて、泣くなという意味でセレナの頭を撫でる。だが抱きつか

れているためセレナの顔は見えないけれど、彼女の身体の震えは止まったということ、そして謝罪の言葉が聞こえなくなっただことにサトシは心の底で安堵した。小さな少女であるセレナに心の傷をつけるつもりはなかったからこそ、ラッタ達による襲撃がきつかけでトラウマを作るかもしれないという可能性はもうないだろうと思っただからだ。そしてサトシはすぐに抱きついているセレナを引きはがし、離れた場所に落ちている麦わら帽子を拾って彼女の頭に被らせてから座らせる。そして自分も座り込み身体中の痛みを無視してまた周りを見る。

セレナはサトシを心配そうな表情で見つめ、まだ何か言いたいことがあったのか、口を開く。

「い、痛くない…?」

「平気だ」

「…ごめんなさい」

「だから謝るな。お前のせいじゃねえだろ」

「私…自分のハンカチ今持ってなくて…だから…その…」

「気にすんな」

「……あの…名前は…」

「……サトシ」

「っ……さとし……サトシ……」

サトシの名前が聞きたいセレナは一度言おうとしたがすぐに口を閉ざし顔を俯かせる。自分のせいでこうなったことに今更名前は聞けないだろうと思ったからだ。でもサトシはそんなセレナを見て、仕方ないと考えてから口を開いて自身の名前を言う。そしてセレナはその名を聞いて何度もその名前を繰り返して言う。少しだけ煩わしいと感じるが、サトシは怒鳴ろうとはしなかった。それは身体中が痛いのを我慢しているせいか、それとも今日は散々な目に遭ったからかは分からない。でもセレナが泣いて余計に煩くしているよりはいいかとそう納得させ、洞窟の外を見た。洞窟の外は暗く、月明かりだけしか光はない。ポケモンたちの声が洞窟の外から聞こえ、また静寂になる。その鳴き声から洞窟の外にもポケモンがいるということ、洞窟にいた方が安全だということとを理解する。季節が夏だから寒く感じないが、それでも居心地は良いとは言えなかった。でも外で寝るよりはマシだろう。

そう考えていた時に、セレナがまた口を開いて言う。

「ね、ねえ……サトシは何処へ行くこうとしたの？」

「……自分のいるべき場所」

「いるべき？…それってどこなの？」

「さあ…どこだろうな……」

「…？」

サトシは自嘲気味に笑い、セレナから問われた言葉を考える。いつもいつもマサラタウンから外に向かうのに理由はなかった。ただ自分の居場所はここじゃないと感じていたからいつも逃げ出していた。「サトシ」にはなりたくないと思っけていても周りはそうだとやうなことに…そして自分のことを知らない周りの人間たちに…そしてポケモンたちにすべて消えてしまえばいいと願った。すべてが消えて…そして夢だと思ひ込みたい。自分のいるべき世界へと戻りたいとそう願っていた。でもマサラタウンにいらそれは叶わない。サトシとして生きていかなければならないという事実を受け入れる必要があつたからだ。だから逃げていた。どこに行くのかわからず、ただひたすら迷子のように前だけを向いて歩いていく。前には何も見えず、…ゴールは何処にあるのか分からなくても、ただひたすら歩き続けた。歩き続ける先に答えはあるのだろうかトシはふと考へた。見たくない真実に…ただひたすら目を背けていた。

そんな時に、セレナはサトシの表情を見て…サトシの手を握り言う。

「な、何があつたのか教えて！…サトシは何処に行きたいのか…私も一緒に探すよ！」

「はは…無理に決まつてるだろ」

「……何で？」

セレナと一緒に探そうと言つてきたのだけれど…どこに行きたいと言つた答えは見つからず、背けていた真実を言う。何で無理なのかセレナはまた質問してきたため、サトシは自嘲的な笑みを浮かべてから口を開く。すべては、この現状を叩き壊してしまいたいと思つたからだつた。普通だつたら言わないであろう「それ」を、サトシは口に出して言う。

「………なあ、お前は…転生つて信じるか？」

「てん…せい…？」

サトシが言う話は、通常ありえないであろう真実だ。どうせ信じてもらえないだろうと言う考えがあつたから…そして自分自身このまま世界を見ず、ただひたすら生きてい

ることに限界を感じたからこそセレナを利用してすべてを吐き出すように言う。ある意味、魔が差したのだ。信じなくてもいい、ただ人に喋りたい。自分自身の感情をすべて吐き出してしまいたいという思いがあつたからこそ話し始めた。だが、そのサトシの話をセレナは真剣に聞いていた。サトシの話を遮ることなく…手を握りしめたまま話を聞いていたのだ。

そして妹についての話をし終えた時に、セレナが小さく呟く。

「妹がいるの…?」

「…いやいいい……」
「……」にはいいない」

サトシはその時、信じてもらえないだろうと考えていたというのに予想を裏切つてちゃんと聞いていてくれたこと、そして信じてくれたことに少しでもまだ心の底にぽっかりと穴が開いているかのような感じはたと感じるけれど、それでもまだ心の底にぽっかりと穴が開いているかのような感じはしていた。サトシは自分自身の居場所がどこにもないと感じていたからだ。

セレナはそんなサトシの顔を見て、決意したようにまた口を開いた。

「…サトシの行きたい場所が見つからないなら…居るべき場所がないなら…私が一生あ

あなたの…サトシの居場所になる！」

「…そうか」

幼いセレナは固く誓い、サトシに向かつてそう叫んだ。サトシはセレナの言葉に小さく頷いて、そして明日キャンプ場に向かうから寝ろと言う。サトシの傍にすることに安心しきったセレナはその言葉に頷いてサトシに寄りかかったまま目を閉じた。

サトシはそんな眠ってしまったセレナの言った言葉を信じず、成長すればすぐに忘れてしまうだろうと考えていた。幼いセレナだからこそ、そんな決意をしても無駄だろう…忘れてしまうだろうとサトシは考えていたからこそ、頷いて話を終わらせたのだ。サトシはまた自嘲気味に笑みを浮かべながらも…太陽が昇るのを待つ。

——そしてようやく朝になり、サトシ達はキャンプ場へと無事に戻っていくことができた。怪我をしているサトシは大人たちによって移動させられ、怒られながら治療された。そしてセレナはというとカロス地方へ戻るために大人たちによってサトシから引き離され…そのまま2人は言葉を交わすことなく別れることになったのだ。た。

.....

「…つてことがあったの」

「いやだからそれ約束したって言わねえだろ!!」

完璧に思い出したサトシはセレナがシトロロンたちに向かって話す言葉に反論した。セレナが説明する話は転生者という部分はあえて話していなかった。サトシがその話をすることを嫌がるだろうという考えで言わなかったただだけがある意味正解だろう。

そしてカロス地方に来た時、他の地方で有名だというサトシがニュースとしてテレビに映っていたのを見て、会いに行こうと決心して家を飛び出したということも話してくれた。

セレナの説明にでてきた居場所がないという部分は勝手にシトロロンたちによつて歪曲され、シトロロンはキャンプ場であった話を聞いてよく無事…いや怪我はしていたみたいです。ですがキャンプ場に戻ることができましたねと安堵しており、ユリーカはサトシがま

るでお姫様を悪から救う王子様みたい！と言つて頬を染め目をキラキラ輝かせていた。ピカチュウはただ微妙そうな表情でサトシを見ていて…そしてデデンネはそんな話にサトシに分が悪いから諦めろとばかりに小さく鳴き声を上げる。

セレナはサトシが反論しようとも、誓つた言葉を取り消すようなことはしない。ただ真剣な目で頬を赤く染めサトシの手を握り、口を開く。

「私はサトシの傍にいたい。ずっとずっと…あの時から…サトシ、大好きよ…」

「いやちよつと待て…それとこれとは話が別だつていうか幸せになるなら俺以外の男を好きになれよお前エエ!!」

「幸せになるならサトシの傍しかありえないわ!!」

「サトシ…もう諦めましょう」

「そうだよサトシ！責任もつてセレナと添い遂げなきゃ！」

『ピイカ…』

『デネデネ…』

「俺に味方はいねえのかよ畜生ツツ!!!」

——こうして、サトシ達に新たな旅仲間であるセレナが加わったのだった。

第七十二話くセレナは真剣に考えていたく

——これはまだ、セレナがフォッコをパートナーとして博士に貰った後であり、サトシ達に会う前の話。

「フォッコ…あのね。私はこれから強くなりたいって思ってるの」
『フォッコ?』

フォッコをパートナーとして貰い、サトシが向かったという町へと向かっていたセレナ。

フォッコとポケモンセンターで一日を過ごしたセレナは、フォッコをボールから出し

てから話しかけた。それはパートナーとして一緒に過ごすであろうフォッコのこれからの目的でもあった。

(サトシは…本当に凄い…)

家を飛び出した原因でもあるサトシがニュースに流れていた時、とても嬉しかったと感じていた。やっと会えるとそう歓喜に震えていたのだ。でもそれと同時に知ったのはサトシがトレーナーとして遠い世界で活躍しているという事実。セレナ自身とは違つてちゃんと夢に向かって活躍していたという輝かしいサトシが映し出されていたのだった。

セレナはいつか会えるとサトシを探そうとしなかった。サトシにまた会えると言う根拠のない自信があつて…自分の夢を見つけ、そしてサトシに相応しいと言えるようになった時、もしもそれでもサトシに会えることがなければ自分で旅に出て探そうと考えていた。そして家にいる時、サイホーンレーサーとして頑張れと母に言われ、セレナは昔サトシと交わした約束を考えて諦めようとはしなかった。あの時に出会った衝撃と、そして頼もしい背中にセレナはそんなサトシに相応しくなりたいと努力を怠ることはしなかった。サイホーンレーサーとして出場したこともあつたし、大会で優勝したこと

もあつた。

だが、何度も何度も練習をしてきたけれど…大会に出場していたことはあつたけれど、自分の心にはレーサーとしてやっていきたいという燃えるような感情はなかった。レーサーとしてより、他のことをしてみたいと思つていた。例えばホウエン地方特集でテレビ番組として映つたポケモンコーデイネーター。華やかでとても綺麗だと感じ、セレナも同じようにポケモンと一緒にそのコンテストに出場したらどうなるんだろうと想像したこともあつた。でも、それでもまだ強烈な印象はなく、必ずなりたいという夢からは遠かつた。だからこそ、セレナは焦つていたのだ。テレビに映つたサトシのように、自分にも何かやってみたいと思える目標を持つて旅をしていきたいと言う感情が強くあつたからこそ、家を飛び出した。

サトシは凄いとセレナは感じていた。自分の夢に向かつてトレナーとして旅を続けていくということ、そして数々のリーグで優勝し様々な地方のチャンピオンにならないかと言われていることをニュースによつて知つたのだから。…だからこそセレナはこのままでいいとは思つていなかった。旅を通じてより強くなつていき…そしてフォッコと共にやりたいと思える夢を見つけようと考えた。夢はまだ何なのか分からないけれど、今はとにかくサトシの隣に立てるように強くなつていこうと考えたのだ。強くなることはフォッコを鍛えるということではない。セレナ自身、フォッコと共に一

緒に強くなつていこうと考えていたのだった。

「フオツコ…私はね。まだ夢も何も見つけてはいない…でも…それでも強くなりたい
て思つてる」

『……………』

「強くなりたいって言つても、バトルで強くなりたいんじゃない…やりたいことを見つ
けて、そしてその夢に向かつて頑張つていきたいの…フオツコ…まだ目的も何も決まっ
ていないけれど、それでも一緒にいてくれる？」

『フオコ!!』

フオツコはセレナの声に大きく頷いて、頼もしい表情で鳴き声を上げた。それはつま
り、セレナの目的と一緒に達成しようという意志でもあり、パートナーとしての最初の
絆でもあった。

そんなフオツコにセレナは嬉しく笑みを浮かべてありがとうと言ってフオツコを抱
きしめる。フオツコは抱きしめられたセレナに笑顔でまた鳴き声を上げた。

「サトシに…早く会いたいな…」

『フオツコオ?』

「サトシはね…私にとって憧れで大好きな人で…それで一生傍にいたいと思える人なんだ」

あれから何年も時が過ぎていて、サトシは幼い頃と違って、なにもかも変わっているかもしれないという不安はあった。でも…それでも一生傍にいたいという気持ちにはないとセレナは感じていた。あのとき出会った衝撃は…そしてサトシに対して感じるこの燃え上がるような強い思いは他の人に向けられるようなものではないということが分かっていったからだ。

それは、最初サトシに出会ったときは初恋のように甘酸っぱいものだったのかもしれない。本当だったら消えてしまうほどの小さな感情だったのかもしれない…いやそれはきつとありえないことだろうとセレナは自問自答した。もしも言葉でサトシに向ける感情を示すことはできないと考えているからだ。この気持ちは揺るぎないとセレナは胸を押さえて考える。

…一度会っただけで永遠にこの感情を向けることは無理かもしれないという考えはあったが…その気持ちは徐々にセレナの中で変化していき、テレビでサトシを見た瞬間にまた燃え上がるような形で浮上した。つまりはより強い感情で浮上しただけなの

だ。

心が破裂しそうなほど激しい感情がテレビでサトシを見て身体中に駆け巡った。脳内でただひたすら会いたいという気持ち、言葉が繰り返される。その感情は、目的も何もないというのにフォッコを巻き込んで家を飛び出し旅に出てしまったぐらい衝撃的だったのだ。セレナは夢に向かってという目的はなく、ただサトシに会いたいために旅に出たことを後悔はしていない。旅というのはいつか目的ができるだろうという考えもあつたし、夢を探すという形で昇華していたからあまり気にしていないのだ。それよりもサトシに会いたい、会って話したい、傍にいたいという感情の方が強かった。その感情は大好きだけでは止まらない：一生傍にいたいという思い：そして他の人はもう愛せないと断言できるぐらいの激しいものとなっていた。

「フォッコ：私は絶対に頑張るからね」

『フォッコ？』

「ふふ：フォッコも楽しみにしていてね。絶対に後悔しない旅にするから」

『フォッコ！』

「この気持ちは絶対に嘘じゃない：サトシがああ時からどんなに変わっていたとして

も、私は絶対に約束を守るわ」

フォッコの頭を撫で、そして目を瞑つて幼い頃に会つたサトシを思い浮かべる。覚えていたのか覚えていないのかは分からない……もしかしたら覚えていないのかもしいけれど、それでも自分が誓つた思いは決して破るつもりはなかつたのだ。

——例えサトシに冷たく拒絶されたとしても、自分勝手だと言われたとしても……そして彼がセレナ自身に向かつて大嫌いだと言つて怒鳴られたとしても……この激しい感情を捨てて生きていくつもりは微塵もなかつた。

恋は盲目というのはセレナ自身に当てはまる言葉だろう。サトシに恋をしたことによつて周りをよく見ず盲目になつてしまったのかもしれないのだから。

でも……それでもサトシの傍にいて……サトシに相応しい女性になろうという気持ちは強く、セレナはトレーナーとしてサトシの隣に立てるように、より強くなろうと決心した。

第一百七十三話く妹はルカリオから話を聞くく

『レッビィイ!』

『………そうか。もう時間か』

.....

こんにちはは妹のヒナです。最近ピチューがよくトレーニングフィールドを利用して
いることがあって、私たちもいろいろとバトルやコンテストの練習をするようになりま

した。といつてもバトルだと相手が伝説か兄のポケモンになってしましますから瞬殺されますけどね…。まあそれでも攻撃はまだまだ微妙ですが避けるのはうまくなりませんでしたよ。

そして現在、トレーニングフィールドにて整地されたバトル場はある特訓をしているために使えない。

『フオオオ……行くぞ……!』

『ブイブイ!!』

『ジュルアア!!』

『マアグ!!』

現在トレーニングフィールドにあるバトル場ではマサラタウンに遊びに来ていたダークライによるダークホールの突破法を考え、修行するために使用されていたのだ。

躲して攻撃してしまえばダークホールの対処は可能だが、もしも躲すことができずそのまま眠らされてしまうことを考えてやってるみたいだった。ダークホールの流れ弾

が飛んでくる時もあつたりするけど、それも修行だということのみながそれぞれ躲したりわざと当たつたりしていた。まあそのため先程直撃して眠らされたヘイガニが気合いとやる気で起き上がることに成功していたりする。

そして私たちはピチューによるなみのりとヒトカゲによるかえんほうしやをバトル場で観戦しながらも練習していた。

ピチューは泳ぐのがうまくなつていたけれどなみのりをするにはラプラス達によって引き起こされた波でないと技とは言えない。そのためピチューは自らなみのりを発動させようと悪戦苦闘していた。私も自ら両手を使って小さな波を引き起こし、ピチューの尻尾で波を起こすことはできないかとアドバイスをしたり、一緒にラプラスのなみのりを見たりして研究している。

そして一方のヒトカゲはかえんほうしやがまだにうまくいかず、猛火の炎としての炎が放たれるだけだった。ヒトカゲの進化形である兄のリザードンがいろいろなと練習をしてもらえるのならないのだけれど、リザードンはもうリザフィックバレーに帰って修行しているため師匠として適切なアドバイスは聞けない。そのためコータス等の炎タイプである兄のポケモンたちにかえんほうしやを実際に見せてもらったり、火の勢いを強くするための練習をしたりしていた。

———
そんな時だった。

「あれ？ルカリオ、どうしたの？」

『ヒナ……バトルをしてくれるか？』

「……へ？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

ルカリオは真剣そうな表情で私たちに近づき、話しかけてきた。いつものルカリオなら修行の練習相手になってもらったり、お菓子を作ってくれたりするはずなのに……今日は何故かそういった話はせず、ただバトルをしようといってきたのだ。

私たちは首を傾けて何があつたのか話を聞く。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「え!? ルカリオ…本当に帰っちゃうの?」

『カゲエ…?』

『ピチュ…?』

『ああ、もう自分の居場所に帰らないといけないんだ…アーロン様のもとへ』

私たちが聞いた話は、いずれ来るだろうと思っていた悲しい事実だった。セレビイが【時が来た】と言ってきたということ、もうマサラタウンにいることはできず、過去の世界に帰らなければいけないと言う。

その話は私たちだけじゃなく兄のポケモン達、そして伝説たちも聞いていた。彼らはルカリオに様々な意味でお世話になったことがあったから、別れを悲しんでいる。私たちも同じように悲しかった。寂しいと言う気持ちが強く、まだここにいてほしいと願ってしまふ。でもそれはルカリオにとってはできないことだと言うのも分かっていた。だから…だからこそルカリオの頼みであるバトルを私たちは了承した。でも、ただ普通のバトルはしたいとは思わなかった。ルカリオに何時も修行の相手をしてくれたからこそ、どれくらい強くなったのかを知ってもらいたいからこそ…私も一緒にバトルをすると言う。

私たちがバトルを了承したことにルカリオは笑みを浮かべて頷いていた。

.....

『ホー!』

『ダネダネ!』

「審判はヨルノズクとフシギダネね…分かった…バトルは私も一緒にやるよ!」

『カゲカゲ!!』

『ピチュピチュ!!』

『ああ、どこからでもかかって来い…!』

『ダネフツシイイ!!!』

「ヒトカゲ、ダブルひのこ!ピチュー10まんボルト!!」

『カゲエエ!!!』

『ピッチュウウウ!!!』

フシギダネの小さなソーラービームを合図にルカリオが動く。始めからはどうだんを放つルカリオに私はまずヒトカゲのダブルひのことピチューの10まんボルトで防いだ。ルカリオのはどうだんは手加減しているのか強烈な威力はなく、ヒトカゲとピチューの攻撃で爆発していた。

そして私たちは一緒になって走り出し、ルカリオに近づく。ルカリオは笑みを浮かべて楽しいという表情になりながらも私たちが特攻するのを見ている。そして私が指示をするのと同時に体勢を整えて反撃してきた。

「危なツ！ピチュー回転して10まんボルトでヒトカゲを庇って！」

『ピッチュウウウ!!!』

『カゲ…!』

ルカリオの攻撃がヒトカゲに当たりそうになったためピチューに向かって回転式10まんボルトをしてもらう。回転しながらの10まんボルトはある意味電気の壁のよ

うな役割を持っており、兄が防衛技として使っていたカウンタースョックのような効果があった。そしてコンテストのようなアピールが好きなピチューだからこそ、ピチューを中心とした回転式10まんボルトは花火のように煌びやかに輝いていた。でもピチューの技を見たルカリオはすぐに攻撃を接近戦に変えてきたため、反撃されると危ないためまず私は行動を制限してもらおうと考えて指示をする。

「ヒトカゲえんまくで隠して！…いくよピチュー！」

『カゲ！』

『ピッチュー！』

『ふん…煙幕をしたところで見えないということはない！』

ルカリオがヒトカゲのえんまくによって視界が黒く染まる。だが、ルカリオには波動があるため視界が見えなくなつたとしても意味はなかった。波動を使ってこちらにやつてくると分かり、私とピチューはお互いの顔を見て頷いた。その表情はやる気に満ちていて、これからすることはルカリオと一緒にやつて来た修行の成果を見せる時でもあったからだ。ヒトカゲは私たちの後ろに下がり、何かあればすぐに攻撃できるように

していた。

「いくよ…雷パンチ!!」

『ピツチュウ!!』

『ほう…』

ピチュウの電撃が腕を通って放電状態になっていく。まるでアイリスのカイリユーが放ったかみなりパンチのように私の拳に集まる強烈な電撃を、ルカリオにぶつけようと動いた。だがルカリオは避けることなくあえて右手で受け止めてきた。…そして雷パンチをもともせず、ただ私たちを見て満足そうに笑っていた。

ちなみに私たちの雷パンチをみてフシギダネ達はヒトカゲとの炎のパンチがあった時のことを思い出して懐かしんでいたり、もっと技を改良することもできるなど呟いたりする。でも見るものが皆、私たちのことを見て笑みを浮かべていた。

『成長したな…お前達…!』

「当たり前でしょ…でもまだまだルカリオから学んだことたくさんあるんだからね!そ

れ全部見せないとルカリオとバトルしてる意味がないよ！」

『カゲエ！』

『ピチュウ！』

そしてその後、しばらくの間はバトルを続けていたのだけれど…それらは全てルカリオに躲されたりあえて受け止められたりしてダメーajにはなっていないかったりする。…でも、それでもルカリオとバトルができて私たちは十分満足した。…もちろんルカリオも良かったと言って、もっと修行に励めと言っていたのだった。

.....

『レビィィィ』

『ああわかつている…』

「さようならルカリオ…向こうでも頑張つてね！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

『ツツ』
!!!

セレビイ達が集まった場所で、ルカリオを見送るために私たちは集まる。母たちには話してないため良いのかと聞いたんだけど、時間がないということ…そして騒がれたくないからと言っていた。まあルカリオはマサラタウンではかなり有名なシェフみたいになってたし…お別れという事実を伝えてしまうと、ここにいてくれと泣き叫ぶ人々がたくさんいるだろうなどは考えたから納得した。

そして私たちはセレビイがルカリオの周りに集まり、光り輝いていく光景を見て手を振ってさよならと叫んでいた。視界が涙で歪み、すごく悲しいと思うけれど…元気にルカリオがアーンロンさんと一緒に居られるなら良かったという気持ちも強く、ただ何も言わずに手を振っていた。兄のポケモンのイツシユ組や私のヒトカゲとピチューは号泣していて今にもルカリオに抱きついて別れを止めようとしている。他にもヘイガニやコータス…他にも兄のポケモンたちの一部が号泣していて…本当に悲しいと思えた。ミュウツーたちは何も言わず、ただ見守っていた。

そしてセレビイ達が集まった時に発生した光りが消え、セレビイ達のと きわたりが始まった。輝きが強くなりルカリオの周りに集まっていく。これでもうお別れなんだと

感じて、私たちは見送るために眩しいからと目を閉じずただひたすら光りの中心にいるルカリオを見ていたのだ――。

「……………え？」

『カゲ…？』

『ピチュ…？』

『…なツ…アーン様!?!』

「やあ久しぶり。ルカリオ」

光り輝いていたセレビイ達は一気にいなくなった。ルカリオがもうときわたりをしていないだろうと思っていたらいて…もう一人青いマントと帽子が特徴の人間がルカリオの近くに現れていた。

ルカリオは自分がときわたりで過去の世界に戻らなかつたことに驚き、そして隣にいたアーンさんに驚く。もちろん私たちもその状況に驚いた。

だがミュウ達がアーロンに近づいて話しかけているのを見て、フシギダネ達はどういうことなのか話し合っていた。

『ミュウ!』

『ミュウ!!』

「ああ、元氣そうだねミュウ達…君はあの時辺境の村で会った以来かな?」

『ミュウ!』

「はじまりの樹に棲んでるミュウについては知ってるけど…ミュウツと争つたミュウとも知り合いなんだ…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

『ダネダネ…ダネフシ…』

『ホー…』

『あなるほど、セレビイはただ【時が来た】と言っただけでルカリオはそれに勘違いしたということか』

『ベイリー…』

『キューン…』

『ど、どどどということですかアーロン様あ!!』

「どうということも何も…過去の世界では私は生きているという事実はない。やるべきことをやったら未来に来るつもりだったんだよルカリオ」

『そ、それはつまり…!』

「ああ、私たちはもう過去の世界には帰らないということだ。死ぬはずの運命を変えてしまった今、未来をさらに歪めてしまう原因である私たちはこの時代で生きていくことこそ最適だろう」

「あ、じゃあこの時代にいるってことなんですね!」

『カゲ!』

『ピチュ!』

アーロンさんに話しかけた私たちはルカリオもアーロンさんもこの時代にずっといるということ、過去の世界には帰らないということに笑みを浮かべた。過去の世界に帰ろうとしたルカリオには申し訳ないけれど、お別れしなくていいんだという事実が嬉しく感じてしまう。

そしてアーロンは私たちを見て笑みを浮かべていた。

「そうだね。この時代で生きていくことになるよ…君たちには迷惑をかけてしまうかもしれないけれど」

「いやそんなことないですよ！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

アーロンが私たちの頭を撫でて、ルカリオを見て言った。

「ああでも…これからある友に会いに行きたいと思っているんだ。…ルカリオ、もしもよければついて来てくれないか？」

『ハッ！アーロン様がそう望んでおられるのならついて行きます！』

「そうか…ありがとう…！」

『いえ、アーロン様に…この未来の世界についてお教えしたいことがたくさんありますから！』

「楽しみにしているよ」

『はい！』

「え…友？でもこの時代はもう数百年経ってますよ？」

「ああ、知っているよ…私の友は長生きでね。まあ最初に会ったときは顔面に強い衝撃を与えてやりたいとは思うけれど…」

「が、顔面…？」

アーンロンさんは笑顔で拳を握っていた手を見せて私に向かって言う。顔面に衝撃を与えてやるということはつまり、顔面に向かっておもいきり殴ってやりたいということなのだろう。というより、長生きしているとはどういう意味なのだろうか。もしかしたらポケモン…？いやでもそれにしては寿命が長すぎるような…。なんだか嫌な予感がしてきたし気にしない方が良いのだろう。うんそうしよう。

誰なんだろうと言う疑問が未だに感じながらも…とにかく、マサラタウンで歓迎しなければと思った。

「アーンロンさん！旅はもう少しだけ待ってくださいませんか!?これから歓迎パーティを開きたいので！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「いいのかい？…ありがとう」

アーンさんと旅をするというルカリオとちよつとだけ別れることになるかもしれないけれど、もう二度と会えないという意味ではないから寂しいという感情はあつても私たちは笑顔でいられた。

第百七十四話　妹は疎まれている

こんにちは妹のヒナです。アロンさんが来て皆でいろいろとお菓子や料理などを作って歓迎しました。オーキド博士なんかは過去の世界から来たという話を聞いてどんなことがあったのか詳しく聞いていたり、どんなポケモンと出会ったのかなどを質問していたりしましたが……。まあ次の日にはアロンさんは普通にルカリオを連れて旅立ちましたよ。ルカリオ達とは一時のお別れになっちゃいますがまたマサラタウンに帰ってくると言ってくれたので安心して見送りました。とにかく顔面に衝撃を受けるという友人には同情しますが……。まあ久々の再会を楽しんで祈りながら私たちは今日もマサラタウンで平和に過ごしています。

「おいヒナ!!」

「オーキド博士の鼻眞者!!」

「…無視すんな!!」

「…また君たち?」

『カゲエ?』

『ピチュ?』

マサラタウンに住むいじめっ子みたいな三人組が私たちの歩む道を阻むかのように立ちはだかった。3人はそれぞれ体格や性格が違うのにこのマサラタウンでは問題児たちとして有名だ。…まあ、以前の兄よりはマシだと大人たちは懐かしそうに言っているみたいだね。

その3人組は私と同じ年齢だけどそのうち1人は身体が大きく、頬に傷跡がある3人組のリーダーのような子供。そしてもう1人はメガネを掛けていて見た目知的に見えるんだけどかなりプライドが高くそして口調が悪い。あと見た目と同じように頭が良い。もう1人はよく帽子をかぶっていて、身体が小さくて細い。でもその性格は悪戯が大好きでよくポケモン達や近所の人たちを驚かせたりしている。

そんな特徴的な三人組が私にいつものようにからかってきたのだ。

私はマサラタウンで有名な兄であるサトシの妹ということで様々な意味で注目されている。それは問題児であった兄のように似てしまうのか、それとも普通の子か否かという意味でだ。比較されることも多くあるけど、あの兄の妹だから仕方ないかと微妙な心境になりながら諦めていたりする。

でも私と同年代の子供たちの多くはよく遊んでくれていて、女の子の多くはトキワの森の近くで友達になったというコラツタやポツポを連れてきたりする。そんな女の子たちと私達は仲が良く友達として修行しているとき以外は遊ぶことが多い。私と一緒にいるヒトカゲやピチューもコラツタやポツポと遊ぶことがあつて充実しているのだけれど、この3人組だけは何故か私のことを疎み、いつもこうしてからかってくる。

まあからかってくると言うより、私がヒトカゲのいない頃にいつも彼等を見捨てた。り正論言つて逆に泣いて退散したりするんだけど…。ヒトカゲと一緒にいる時はあまり会うことがなかった。それに修行とか兄のポケモンたちと遊んだりとかしてほとんど研究所に行つていた。私に話しかけようとするのを見つけてすぐにその場から離れることもあつたし…あの頃泣き虫だったヒトカゲに何か傷つくようなことを言われるのは嫌だと思つていたからこそその反応だった。

だからだろう…そんな彼らと会うのは本当に久しぶりだと感じていた。前はイツシユ地方に行つていて会うこともなかったし…それにその後も修行をしようとオーキ

ド博士の研究所に入り浸っていたから会う機会はなかったと思う。本当は会いたくないのだけれど、私たちの逃げ道を塞ぐように邪魔する。

3人組の内のリーダーの子が言う。

「おいお前いい加減にしろよ!」

「…えつと、何が?」

『カゲ?』

『……ピチュウ』

「いい加減に君のそのポケモンたちをどうにかしたらどうかってことだよ」

「お前色違いのヒトカゲばかりかイツシユ地方に行つてピチュー連れて帰るなんてトレーナーじゃねえのにふざけんなよ!!」

「私が連れ帰つたんじゃなくて、ピチューの意志を聞いて一緒に来てくれたんだよ? それに私はトレーナーとしてじゃなく家族として一緒にいるの。君たちだつてよくトキワの森にいるニドラン達と遊んでるでしょ?」

『ピチュピチュ!』

『カゲ!』

なるほどと思った。つまり彼らは私と一緒にいるヒトカゲやピチューのことが気に食わないのだろう。トレーナーじゃないというのにまるでトレーナーのようにずっとポケモン達と一緒にいることが腹立たしくなつて…そしてイツシユ地方から帰つてきたと思つたら今度はピチューを連れてきたことに余計苛立ち、文句を言つてきた。

でも私は確かに将来トレーナーとしてヒトカゲやピチューと旅立とうとは思つているけど、それはマサラタウンの子供たちだったら当たり前なことだと思う。ポケモンとよく遊んで、そして絆を結んで将来一緒に旅立とうと約束している子供たちはたくさんいるのだから…。私たちと一緒に遊ぶ友達だつてポツポヤコラツタと一緒にトレーナーになった時に仲間として旅に出ようと約束している子もいたりする。…それにこの3人組もニドランなどと一緒に仲良く遊んでいるというのにこれは無茶苦茶な言い分だと思つた。それにオーキド研究所に入れるという意味でも同じだ。

私以外にもオーキド博士にポケモンを預かつている家族の妹や弟、娘や息子ならちゃんとオーキド博士との約束を守れば入ることができる。まれにポケモンに悪戯したり傷つけたりする子供たちもいたみたいだが、彼らはオーキド博士たちに説教され、ポケモンたちからもちゃんと制裁されたために二度とそういう約束を破るようなことはない。だから私が特別ということはないのだ。…まあこの3人組は家族の中にオーキ

ド研究所にポケモンを預かってもらうとういうことはないため余計に私に敵対心を向けているのだろうけど。

そして私の言った言葉に3人組は言葉を詰まらせ、なんて文句を言えばいいのか迷っているようだった。

「うぐ…正論…」

「シユウジが言い返せないだと…コウちゃんどうする?」

「弱音はいてんじゃねえぞヒビキにシユウジ!こうなったらバトルしてもらおうか!」
「バトルって…いつも一緒にいるニドラン達はどうしたのよ?」

『カゲエ?』

『ピチュ?』

「ふん…ただのバトルじゃねえ。ニドラン達とバトルしても意味がねえからな!俺たちは父ちゃんのポケモンで勝負を挑む。しかもジムバッチを獲得できるぐらいの強いポケモンだぞ!」

「え、コウちゃん…それって狡くねえか?」

「いや、いいんじゃないのかな?イツシユ地方を旅してきた君なら当然こんな勝負、簡単に挑むだろう?」

「え、何で君たちとわざわざ勝負挑まないといけないのよ…」

「なんだよ怖気づいてんのか!!」

3人組の内のリーダーが私に勝負を挑むと言ってきた。しかもいつも一緒にいるニドラン達ではなく、家族が連れていた強いポケモンで挑むと言うのだ。なんというか、そういった勝負はフェアじゃないと思うから私たちは呆れた表情でそれを見た。でもメガネをかけた子…つまりシユウジが私たちに挑発するようにいつてきた。

「ニドラン達は友達で勝負するようなポケモンじゃない。でもヒナのヒトカゲ達はサトシさんと旅をして…勝負に慣れているんだろう? なら君の方が断然有利じゃないか。だからこうしよう。ジムバッチを君も…最低3つ持ってきてそれからバトルする。こつちとフェアで勝負すると言うのならそれぐらいはやってもらわないとね」

「いやその前に私、勝負受けるつもりないんだけど…というかジムバッチって…」
『カゲカゲ…』

『ピチュ…』

「はっ。弱いから負けるのが嫌なのか? そのヒトカゲ達が負けるって思ってるから俺たちとの勝負に挑むつもりはないんだろ! 俺たちの使うポケモンに瞬殺されるのが嫌でその条件受けたくないのかよ!!」

「ちよつと…ヒトカゲ達は弱くなんかないわ！」

『カゲ！』

『ピチュ！』

「ジムに挑戦できないんじゃないに決まってるじゃねえか！」

「だからちよつと待ってよ…ジムに挑戦ってまだトレーナーじゃないのに無理に決まってるでしょ!?ジム戦よりもバトルしたいのなら今すぐしましろう！」

『カゲカ！』

『ピツチュウ！』

「何を言ってるの?フェアな勝負するって言ってるんだからジム戦しなきゃ意味がないのは分かってるよね?というか、僕たちの勝負はジム戦することも入っているんだよ?」

「そうだけ!俺たちが使うポケモンはジム戦も経験してきた猛者だ!…まさかジム戦出れないって言うんじゃないだろうな?」

「まあできないって言うんならお前のヒトカゲもピチュも弱いってことだよな!」

「そんなわけないでしょ!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

三人組が言っている内容は、かなり無茶苦茶だった。弱いと言う言葉を撤回したためにバトルはするするという私の言葉を鼻で笑い、ジム戦しなきゃやらねえよと言う。ここは無視してそのまま通り過ぎるのが一番適切かもしれないけれど、彼らが言っている言葉はヒトカゲ達を傷つける言葉だ。それにここで退いてしまつたら三人組はまた何かを言ってくるだろう：ヒトカゲ達を傷つける言葉を……。今までのように逃げていくのも一つの手段かもしれない。でもそれをやつてしまうとヒトカゲ達が弱いと認めたよ。うなものだった。彼らの条件がトレーナーじゃない私にとつて無理な内容だとしても、ヒトカゲ達を弱いと嘲笑う彼らを許してはおけない：だから私はここで退くことはできなかつた。ジム戦が無理だと言うのに、彼らはそれはできるだろう？と嘲笑う。それはヒトカゲ達を罵倒し、傷つけるのと同じことだと私は感じていた。

それにシユウジは負けるだろうということが確実だと考えて無茶を言ってきたのだ。ジムに挑んで3つのバッチを持って来れるぐらい強くなつてからバトルだと言う無茶ぶりに聞いていられないからこそ呆れて、無視していこうと思つたけれど、彼らは私のヒトカゲとピチューを弱いと決め込んで嘲笑つた。それが私にとつて地雷だった。

普通だつたら私は兄のように苛立つて吹っ飛ばすことなできないけれど、：そんな無茶ぶりを聞くつもりだなんてないけれど：それでもヒトカゲ達に悪口を言うのは嫌だつたのだ。ヒトカゲ達は弱くない。私と一緒に頑張っているのに彼らは何も

知らずに弱いんだろと言う。

だから、私は決心した。

「サトシさんの妹ならこれぐらい楽勝だよな？できないって言うんなら弱いって認めるようなものだよ？」

「……………どうすんだよ？弱いって認めるか、それとも勝負を受けるか？」

「……………そうね」

『……………』

『……………』

ある意味、彼らの思惑通りになってしまったのだろう。でもそれでも良い、今までのからかってきた分も、ヒトカゲ達を嘲笑った分もすべて2倍返しにして見返してやろうと思った。本当だったらそのまま今ここでバトルしてもいいんだけど、それだと3人組は何かまた文句を言ってくるだろう…先程のように。それに無理やりバトルをしたとしても、ジムバッチをとってきてないだとか何かズルをしたんだらうとか言ってくる可能性も高い。

……………私たちがちゃんとジムバッチを受け取れるぐらいの強さを、そしてヒトカゲ達と

の絆を見せて文句を言えないようにしたいと思った。だからこそ、バッチを3つ取って来いと言う意味の分からない無茶ぶりにも、バトルをするという言葉にも頷いたのだ。

ヒトカゲ達は私の顔を見て、決意したように三人組を睨みつける。

三人組は私たちの表情からその条件を受けることが分かっていたらしい。満足げな表情で口を開く。

「なら、やるんだよな？」

「…ええそうね、バッチ3個集めることが条件なら…良いわよ…受けて立つわ！」

『カゲエ！』

『ピッチユウ！』

「ふん。あとになって逃げだすだなんてことすんじゃねえぞ！」

「ちゃんとジムバッチがあるかどうか確認してやるからな！」

「ああそれと、ヒトカゲとピチュー以外の…サトシさんのポケモンたちを使うのは駄目だからね」

「あら、そつちも私たちとバトルするんだからちゃんと指示を聞くポケモンで挑みなさいよね!!」

『カゲカゲ！』

『ピチューピチュー!』

∴後悔はしていない。ヒトカゲとピチューには巻き込んでしまったけれど、それでもこれだけは譲れなかった。弱いと言う言葉は絶対に撤回してもらおう。そしてヒトカゲとピチューに謝ってもらおう。それを目標に私たちは家に向かって行った。これからの条件を達成するために何をすればいいのか、いろいろと考えながらも∴ヒトカゲ達と走って行った。

第百七十五話く兄はシトロンの意志を聞くく

「そういえばセレナが前に言ってたけど…サトシって有名人なの？」

『デネ？』

「テレビに出てたって話を聞いた時ですね…僕たちはそのニュースを見ていませんが」

「サトシが旅してきた地方でのリーグ成績やポケモンの新しい技の研究ってニュースで騒がれてたぐらい有名なのよ…さすがサトシよね!!」

「うわあ凄い!!」

「それは凄いです!!」

「…ああそんなこともあったな」

『…ピイカ』

こんにちは兄のサトシです。最初にセレナと出会ってからちよつとだけ時間が経ちました。セレナとの騒動についてはほとんど恋愛などと言った話はしないようにしている状態です。というより、俺からその話をし始めるのは嫌だし、セレナが何か言つたとしてもすぐに話題を変えるようにしてきたということからあまり問題なく、ただの【普通な仲間】として見れるようになった。もしもここでセレナがかなり積極的だった場合仲間としてやっていけないから追い出していたか一人旅に戻っていたかのどっちかだろうと考えながらも、ユリーカ達の話に頷いた。

俺たちは現在またミアレシテイに到着したんですが、その途中でユリーカが思い出したかのように俺たちに質問してきました。テレビに出たというより、空港でいきなりカメラがやってきてニュースとして撮られたというだけなだけだ。その時はいろいろと質問されて、まあ適当に話してすぐに解散してもらったんだけど、まさかここまですごい質問されていろいろと騒がれるとは思わなかった。名前を出したら「ああ、あのテレビの…！」と言われることもあつたし、おそらくこれからもそうだろう。…まあそうなたたとしても俺たちの旅は変わらないと思うけどな。

ユリーカが目を輝かせてどういう旅をしてきたのか聞いてきたので歩きながら話してみた。カントー地方からイツシユ地方までの旅と、ポケモンたちのことを。

「凄い!! 私もサトシのポケモン見てみたい!」

「カントー地方にきたら皆と会わせてやるぜ?」

『ピッカ!』

「うん。絶対だからね!」

「なるほど…カントー地方からイツシユ地方までのリーグに挑戦して、このカロス地方に…それならあのバトルでの強さも納得できます!」

シトロンが笑顔で頷いたのは、最初に出会った時にバトルしたことを思い出したからだろう。あの時俺たちはプリズムタワーにあるミアレジムに挑もうとしていた。でも中に入ろうとしたら俺をニュースで見たのか近くにいたトレーナー達から名前を呼ばれ、最初にこのジムを挑まない方がいいとアドバイスされたことがあった。

アドバイスされたとしてもせっかくなミアレジムに來たんだという感じでプリズムタワーでピカチュウとどうしようか悩んでいた時にシトロンたちにどうしたんですか?と聞かれ出会ったのだ。そしてカントー地方から來たことやこれからミアレジムに挑もうか悩んでいたことを話すと焦ってやめた方がいいと説明され、そしてせっかくな來たんですから僕とバトルしませんか?と誘われて戦うことになった。そのことが

きっかけでシトロンたちと旅をすることになり……そしてバトルしていた時に乱入してきたケロマツとも出会ったり、研究所でメガシンカについて知ったりしたけどな。

イツシユ地方の話をするときは妹とも同行したことを話した。そうしたらセレナたちが様々な反応をしてきた。

「サトシ、妹が生まれたのね?…良かった」

「妹って私と同じくらい年齢なんだよね!」

「まあな…今度紹介するよ」

『ピイカツチュ』

セレナが昔話したことを思い出したのか安堵したように笑顔でいて、ユリーカは会いたいという表情を浮かべている。ある意味想像していた通りだった。でもシトロンだけは違っていた。シトロンもユリーカと同じようにどんな子なのか聞いてくると思ったのだけれど…シトロンは少し考えるかのような表情で俺たちが歩いている間も見えていたプリズムタワーをじっと見つめ、やがて決心したかのように口を開いた。

「サトシ…お願いがあります。僕に力を貸してくれないでしょうか」

「どうかしたのか？」

『ピツカツチュ？』

「何かあったのシトロン…？」

「え!?!お兄ちゃん言っちゃうの!!?」

「このままサトシがミアレジムに挑むというのなら…現状を維持するつもりは僕にはないよ」

「そう…うん。このままにしておけないよね」

『デネ?』

「現状?…何か問題でもあるのか？」

『ピカピカ?』

「シトロン…それって私にも協力できることかしら?」

「はい。セレナにも協力してほしいことです…ミアレジムのことなんですが――

――

首を横に振ってユリーカにこのままはいけないと諭すように言うシトロン。ユリーカも覚悟を決めたのか分かったと頷いていた。そして俺たちは何があったのか…？ということなのか話を聞くために口を開く。その声にシトロンは真剣な表情で話してくれた。

ミアレジムはシトロンがジムリーダーだということ、そして今ミアレジムはシトロンの作ったロボットにのつとられているということが分かった。音声コードが分からなければバトルができないということや、ロボット…つまり、シトロイドが使うポケモンはもともとシトロンのポケモンであり、とても強くてホルビーだけでは勝てるかどうかさえ分からないということだった。

時間があれば俺がジムバッチ四つとってからミアレジムの中に入り、そのままシトロイドを止めるっていう手もあるけれど、最初にミアレジムに来た時の様子を考えるともう時間はないも同然だろうと感じた。そしてシトロンに対しても、このままでいいとは思えなかった。

だからこそ、俺はシトロンたちを見て口を開く。

「それで、シトロンはどうしたいんだ？」

「え、どうしたいって…」

「俺が…俺自身がミアレジムに乗り込んで止めるっていう手段もできる。けどそれはシトロン自身がシトロイドに勝ったと言えるか？」

「……………」

「シトロン。お前が…ミアレジムのジムリーダーであるお前がやるべきことは何だ？」

「僕は…勝ちたいです！ジムリーダーとして…トレーナーとして、シトロイドをこのまま放っておきたくはない！」

シトロンの声は、心からの叫びだと分かった。ミアレジムをこのまま放っておいたらいずれトレーナー達は挑戦するのをやめてしまうだろう。そしてシトロンがジムリーダーとして築き上げてきた大切なものがシトロイドによってすべて泡となって消えてしまうのも時間の問題だと感じた。電気タイプを扱うジムリーダーとして、そして自身を成長させる大切な場所として…このまま捨ててしまおうとはシトロンは考えていなかったのだ。

俺がすべて行動して終わらせることもできるけれど、それはシトロンのためにならないということも分かっていた。シトロンのジムなのだから…シトロン自身の問題だと感じていたのだ。もちろん協力するところはするけれど、バトルはシトロン自身がやつ

て…そして勝ってもらおう。もしもすべて俺がやってしまったらシトロンはジムリーダーとしてやっていけないだろう。だからこそ俺は全てをやるつもりはない。シトロンがシトロイドとバトルすることこそ、シトロンのジムリーダーとしての決意であり、覚悟でもあるのだから。

セレナたちも俺の言葉に…そしてシトロンの叫びに納得したのか、真剣な表情で俺たちに向かって頷いてくれた。ミアレジムに乗り込んで…そしてシトロイドにバトルして勝つという計画をたてるために、プリズムタワーへ向かおうと歩を進める――。

「おおシトロンにユリーカじゃないか！」

『リュウウ』

「へッ!? パパ!?!」

「それにデンリュウも!!?」

「さっそく出鼻挫かれたな…」

『ピイカ…』

「そうね…でも、シトロンたちは大丈夫よ」

「…なら、良いんだけどな」

『ピカピカ』

「大丈夫よ！……サトシがいるんだから。絶対に大丈夫」

「……………」

『…ピイカツチュ』

「うるせえピカチュウ放つとけ」

「ふふふ…」

セレナは俺の顔を見て自信満々な笑みで俺がいるから大丈夫だと言う。その表情が最初に出会った時のことを思い出して無意識に一歩だけ身を引いてセレナから視線を逸らす。ピカチュウが呆れるような声を出したために俺は小さく文句を言う。でもそれもすべて聞こえてきたのかセレナが小さく笑って、シトロンたちを待っていた。

その後、セレナの言った通りすべてが無事に解決したと言っておこう。

第一百七十六話　妹は旅に出た

「——えっと、旅に出ます…探さないでください…つと。よし行くよヒトカゲ、ピチュー」

『カゲ…!』

『ピツチュ…!』

　　こんにちは妹のヒナです。あの三人組の言った約束を守るためにこれから母には内緒で旅に出ようと思つてます。とりあえず何も言わずに出て行くと心配してしまうと
　　考え、書置きをしてこつそり家を出ていく。バリヤードにも見つからなかつたし…ルカリ
　　才達は旅に出ているから家にいないし…良かったと思ひながらも扉を開けて外へ出

た。

私自身の背負っているリュックには衣服と食料と野宿用のキャンピングセット…そしてヒトカゲ達のモンスターボールと兄がカントー地方で旅していた時に使うことのない古いたウンマップが入っていた。

…このまま旅をした場合、帰ったら怒られるのは必須だからそれは覚悟していろいろ考える。私たちは見つからないように周りを警戒しながらマサラタウンの外に出て、人に会わないように気をつけてトキワの森へ向かう。

.....

『ポッポーウ!』

「あ、あの時のポッポ!？」

『カゲ!?!』

『ピチュ!?!』

鋭い目をしたポツポが私たちに向かって飛んで降りてきた。そのポツポはイツシユ地方を旅する前に見つけたポツポで：今はピジョット達の群れにいるはずだと思いで出していた。

トキワの森に入ったら絶対にポケモンたちに見つかるだろうとは思っていたけれど：まさか最初にあのポツポに見つかるとは思わなかった。

ポツポは私たちに向かってどこに行くんだと言っているようだった。いつもは背負っていない重たそうなりユツクの方を見てそして首を傾けて鳴いている。

だから私はヒトカゲ達を見てから：ポツポに向かって言った。

「ポツポ。あのね：私達、行きたいところがあつてマサラタウンから外に行くんだ：：：ピジョットはオーキド研究所？」

『ポツポー！』

「あ、違うんだ：じゃあピジョット呼んできてくれないかな？あ、でも無理だったら私たちが捜すから大丈夫だよ！」

『カゲ！』

『ピチュ！』

『ポ…ポ…ポッポ…ウ!!』

ポッポは無理なら自分たちで探すよと言う私たちに向かってピジヨットを呼んでくる!と叫んでいるようだった。私たちにここにいるようにと言っているようで、ヒトカゲとピチュウが私の手を掴んで大丈夫だよと笑顔になった。そのため私は緊張しながらもピジヨットを待つ。

これからやることはおそらく兄のポケモン達も…伝説達にも怒られることだろうか。今のうちにやるべきことはやっておこうと考えていたのだ。旅をしている間に連れ戻される可能性を考えて…それをなくすための手段としてピジヨットに会うつもりだった。だからこそ、ピジヨットに頼むことがとても重要だったのだ。

——やがて、トキワの森に風が流れ、大きな突風が起きる。そして現れたのがポッポたちやピジョンたちを連れたピジヨットだった。兄のピジヨットは私たちを見てわざわざ会いに来てくれたのか?と嬉しそうな表情をして…でも真剣な表情をしている私たちを見て何があっただという意味で首を傾げていた。だから私はリュックからある手紙を出してピジヨットに見せる。

『ピジヨ?』

「これを皆に…フシギダネ達やミュウ達に見せてほしいの。あと、私は絶対に帰ってくるから大丈夫だって伝えておいて!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『ツ!?ピジヨピジョーツト!!?』

「大丈夫だよピジヨツト! 私たちはお兄ちゃんのようにやりたいことがあって…でもそれが終わったらすぐに帰ってくるだけだからね! だから連れ戻したりしないで!!」

『カゲ!』

『ピチュ!』

『……ピジヨ』

ピジヨツトはマサラタウンの外に出ようとする私たちを止めようと動いた。旅に出

るのは危険だと、たまに暴走するけれどいつも周りに優しい兄のポケモンだからこそ大きな鳴き声を上げてマサラタウンに戻れと言ってきたのだ。

でもそれは分かっている。ピジョット達はあのヒトカゲが襲われたときのことから過保護になつているから絶対に危険な目に遭わせようとは思はないというのは…。

でも私たちの決意した表情に：絶対に旅に出るんだと言う決心を感じ取ったピジョットは仕方ないという表情を浮かべ、そして私の手にある手紙をくちばしに挟んで飛んで行った。ピジョットが飛んだことにポツポやピジョンたちも一緒に飛んでいく。最初に会った鋭い目のポツポは心配そうな表情を浮かべていたけれど、大丈夫だという意味で頷いたらポツポも納得したのかピジョットの後を追う様に飛んで行った。

「……これで大丈夫……だよ、たぶん」

『…カゲエ』

『……ピツチュ』

私たちは不安だったけれど、でももうやってしまったことだから後悔はしないとトキワの森の中を走った。

.....

「ピチュー…できる?」

『カゲエ?』

『ピ、ピツチュ…』

私たちは現在、森の中でジム戦に向けてピチュー達と技の特訓をしていた。これから行くところはニビジムだ。マサラタウンから近いトキワジムは今は確かキクコさんがジムリーダーになっていたから絶対に無理だと分かっている。だからこそニビジムを目標そうと思っていたのだ。

トキワジムじゃなくても…私はまだトレーナーじゃないから普通のジムに挑戦しようとしてもおそらく門前払いにあうだろうと考えている。でもニビジムとハナダジムとは交流があるから何とかジム戦してもらおうと…まず兄と交流があるジムに頼みに行こうと思ったのだ。

タケシさんやカスミさんとは兄に紹介してもらったことがあるし、よく話したりして

いた：まあニビジムにはタケシさんじゃなくてジロウさんがジムリーダーなんだけど：でも何とか頼み込んでジム戦をすると決心しているのだ。だからジロウさんに土下座でもなんでもしてジム戦をしてもらおうと考えている。絶対に3つのジムバツチをとる：だからそのためなら門前払いにあつたとしても何度も頼み込もう。：でもニビジムは岩タイプを専門としたジムだから：ヒトカゲとピチューで挑むのは最難関だと考えていた。

だからこそ、ピチューにある技を覚えてもらおうとしていたのだ。

「アイアンテール：お兄ちゃんのピカチュウがやっていた技をよく思い出して尻尾に力を入れてみて？」

『ピチュー：ピッチュウウウ!!』

ピチューが尻尾に力を何度も入れてアイアンテールにしようと頑張っている。でもいくら力を入れてもアイアンテールのような硬さにはならない。ピチューは力みすぎで逆に疲れてしまったようだった。何としてもアイアンテールを覚えてほしいと言う考えがあつたんだけど、このままやって大丈夫なのかと心配になる。でも兄はいつも諦めずに何度も挑戦してきたのだから私たちも諦めずに挑戦しなければと真剣な表情で

ピチューを見て言う。

「ピチュー…お兄ちゃんがよく言ってるように最後まで諦めちゃ駄目だからね！できないじゃなくてできるって思ってるやろう！」

『ピチュー…ピツチュウウ！』

『カゲカゲ！』

「ヒトカゲは…あのね。ジロウさんはもしかしたらハガネールを出してくる可能性が高いと思うの。ピチューにはいわタイプのポケモンが出てきたときにアイアンテールを覚えて頑張ってもらって…ヒトカゲはハガネールが出てきた場合にほのおの技を使ってもらってもいいかな？」

『ピツチュウ！』

『カゲ！』

「かえんほうしやは…できる時にやってみてとにかくダブルひのこ…いや猛火の炎ですべてを燃やし尽くそう！」

『カゲ…カゲカゲ！』

ジロウさんのポケモンは前に見たことがあった。マサラタウンから旅に出る前に兄

に向かってバトルしてくれと頼みこんで、イシツブテとハガネールを出してきたのを覚えていた。その時に兄はピカチュウのイアンテールで2体とも倒してしまつたということがあつた。イアンテールはハガネールにほとんどダメージがないと言うのにさすがサトシだと苦笑しながらタケシさんが言つていたことも覚えていた。ジロウさんは負けたというのに満足げな表情でありがとうございました！ジムリーダーとしてもつともつと強くなります!!と言つていたから他のポケモンもいるかもしれない…でもピチューとヒトカゲでニビジムに挑むともう決めていたから、後には引けないだろうと思う。とにかくヒトカゲもピチューも頑張っているのだから、私も頑張らないとね。

第一百七十七話く兄達は事態を対処するく

『ダネー！ダネフツシ!!』

『ピジヨピジヨット!!』

『落ち着け…だが、この手紙は…』

ここはマサラタウン。いつもなら賑やかに修行をしていたり喧嘩をしてフシギダネのソーラービームが空にうち上がったりとかなり凄まじいのだが、今は話をしているだけでかなり静かだった。ピジヨットから届いた手紙は周りにいたポケモンたちを騒然とさせた。そしてピジヨットに何故止めなかったと叫ぶポケモンがいたり、喧嘩になったりと大騒ぎになる。ピジヨットは止めなかったことはあの表情を直接見ていたら止

めようと思っても止められないだろ！と叫んでいて、じゃあ俺が止めに行くところあるポケモンはマサラタウンから外へ行こうと飛び出し、あるポケモンはその飛び出そうとしたポケモンを捕まえて取り押さえ…とにかく皆が不安と心配そうな表情を浮かべてある一枚の手紙を見ていたのだ。

手紙は一枚の封筒の中に二枚の手紙があった。そのうち一枚がマサラタウンにいるであろうポケモンたちに向けられていた。

ミュウツーは苛立ちを込めた表情でその手紙をもう一度読む。

『《旅に出ます。でもすぐに帰ってくるから心配しないでね！トラブルとかもちやんと避けるし…連れ戻そうとしないように！連れ戻そうとしたら二度と口きかないから!!大丈夫だよやるべきことを終えたら帰ってくるからね!!》……か』

『バイバイ…』

『キューン……』

周りにいる皆が心配していた。ヒナはまだ幼く、そしてトレーナーとして旅に出るにはまだ早いからだ。それに色違いのヒトカゲの一件があつてからは、過保護に皆が見守っていた。ヒナたちが傷つくの恐れているからだ。そのためマサラタウンでは毎

回ヒナの見送りや：遠くから見守ったりとしていたのだが、イツシユ地方から旅を終えた後、ヒナは「マサラタウンにいる間は自分で何とかするから大丈夫だよ！」と言って兄のポケモン達や伝説たちの行動を止めさせた。ルカリオがいた時もイツシユ地方でのヒナの成長を見ていたから大丈夫だと言っていたため、ヒナとルカリオの言葉を信じて：何かあればすぐにヒナの所へ行くことはできるが、基本的にはあまり関与しようとはしていないかった。

それはつまり、マサラタウンのオーキド研究所に来るのがほとんどだったということ、今日もいつものように来ると信じて疑わなかったからこそ何もしなかったのだ。：だがいつまで待っていても来ないことにミュウツーたちが探そうとして行動を開始し、ヒナたちが見つからず：家にいるんじゃないかと心配して突撃しようかと話し合っていた時に手紙を持ったピジヨット達がやって来た。

ピジヨットはポツポやピジョンたちを引き連れてやってきて、そしてある手紙を見せてくれたのだ。その手紙こそヒナから書かれたものであり、これからやろうとしていることが書かれていたのだ。

その手紙を読んだポケモンたちはイツシユ地方で旅をしていたことでマサラタウンの外へ出るのを躊躇わなくなってしまうと悲観し、このままでは良くないと連れ戻した方がいいという意見が圧倒的に多かった。でもヒナが何かやろうとしているという

こと、それは旅に出てしまうほど重要な何かなのではないかと連れ戻さずに見守った方がいいと言う意見もあった。

それに手紙に書いてある連れ戻したら口きかないという言葉にもすぐに行動に移せないでいる原因の一つとなっていた。ヒナに嫌われることは全てのポケモンが避けたことだからだ。

『クツ…イツシユ地方に行った経験で旅をすることに慣れたか…！』

『ジユツ…』

『ワニワニ!!』

『ブイブイ!!』

『何?この手紙は優れたる操り人のもとに届けなくてもいいのか…か。ああそうだったな』

『ダネ…ダネフシ!』

手紙は二枚あったのだが、そのうち一枚はポケモン達に向けられた手紙で、もう一枚

は兄であるサトシへ向けた手紙だった。だからこそ、ワニノコとブイゼルはこの手紙をサトシに届けた方がいいと言うのだ。このまま危険な目に遭うよりいつそ口をきかないということになったとしても連れ戻すかとほとんどヤケになっていたミュウツィはヒナを連れ戻すために行動しようとしていたのだが、手紙のことがあって、そしてフシギダネから『サトシからも意見を聞こう…連れ戻した方がいいなら連れ戻すぞ!』という言葉もあり、仕方なくミュウツィはサトシがいるカロス地方へと行くことになったのだ。

.....

「は?…ヒナが家出…!!?」

『ピイカア!!』

「ああそうじゃ…家にこのような手紙があつてな…」

「どうしたらいいのかサトシ達のママさんと話していたんだ」

サトシがマサラタウンにいるオーキド研究所に電話した時、事態はかなり酷いことになっていた。

サトシ達の母であるハナコは昔サトシが何度も家出しようとしていた時のことを思い出してこのままじゃいけないわという焦った感情と、やるべきことをやったらすぐに帰るから連れ戻さないで！という手紙に書いてあった文字に娘のことを信用したほうがいいのかという感情があつた。でも不安だということと心配は強く、マサラタウンにいるんじゃないかと探し回っていたり、ジュンサーさんに話しておくために行動を開始していたりした。

そしてオーキド研究所ではオーキド博士が電話でサトシが出たことにより手紙の話と家出したと言うことを話す。オーキド博士たちは旅に出ます探さないでくださいという手紙の内容がまるで家出のように感じてしまったためにそう話していたのだ。そしてサトシとピカチュウはこの事態に焦り、何かあつたら困るとオーキド博士からの電話を少し話した後電話を切つて、セレナたちの方へと走った。

セレナたちはサトシが電話をするということから邪魔しない方がいいと遠くの方で待っていたのだが、帰ってきたサトシとピカチュウの表情を見て、何かあつたのではないかとそれぞれ顔を見合わせて声をかける。

「どうしたのサトシ…?」

「何かあったんですか?」

「サトシ…すつごく怖い顔してるよ…どうしたの?」

『デネデネ?』

「ヒナが…妹が家出したみたいなんだ」

『ピイカ…』

「え、家出!？」

「それは大変です!」

「何かあったのかな…」

『デネ…』

セレナたちはサトシを心配そうな表情で見つめ、そして家出したと言う言葉に何かあったのではないかと考える。サトシは旅をしている間によく妹の話をしてきたから、だからこそ家出したという事実には驚いたのだ。サトシの表情を見て、このままではいけないだろうとサトシが口を開くのをセレナたちは真剣に見つめていた。

「俺、カントー地方に帰る…それでヒナに何があったのか聞いてくるよ」
『ピカピカ!』

「…サトシ、私たちも一緒に行くわ! サトシが困っていることがあったら私も一緒に解決していききたいの! ……それに将来私の義妹になるのだから。ううんそうじゃなくても…ヒナちゃんに何があったのかちゃんと聞いて、私たちで解決しましょう! …」

「そうですね! 僕たちはサトシと一緒に旅をすると決めていますからね! カロス地方じゃなくても、サトシと一緒に旅をしたい…いいえ、力を貸したいんです!」

「私も! ヒナちゃんに何があったのか聞きたいし…それにサトシに協力したい!」
『デネネ!!』

「お前ら…」

『ピイカ…』

セレナが小声で何か言っていたけどそこらへんは無視しておく。というより今は緊急事態だし、あまり気にしていると気分が悪くなるから無視した方が良くサトシは決断した。

でもそれよりもセレナたちがサトシやピカチュウを心配して一緒にカントー地方へ

行くという決意をしていたことにサトシとピカチュウは驚く。まだどんな子供なのかサトシが話している内容しか知らず、推測でしか判断できないというのにセレナたちはヒナのことを心配し、そしてサトシに力を貸そうとしている。

だからこそサトシは迷惑をかけないようにカロス地方にいるべきか迷い：でもセレナたちに手や肩を掴まれ、真剣な表情で力強く領いたためその意志の強さを知り：サトシとピカチュウは笑みを浮かべて力強く領いた。

「よし分かった…カント―地方に行こう！」

『ピツカア！』

「うん！」

「そうこなくっちゃ！」

『デネー！』

「それなら早く行きましょう！カント―地方へ行くために飛行艇のチケットが必要ですからね！」

『待て…サトシ！』

「ミュウツー…?」

『ピイカ…?』

「ポ、ポケモン…!?!」

「喋りましたよ!?!…見たことないポケモンですね…」

「うわあ凄い!見てデデンネ!」

『デネデネ!!』

『ふん…見世物になる気はない…サトシ、ヒナからの手紙だ』

「手紙…!」

『ピツカ!』

サトシは何故ここにミュウツーがいるということと、セレナたちに見つかるつもりはなかったのに大丈夫なのかという疑問があった。だがミュウツーが持っている手紙を見てその疑問は吹っ飛び、すぐに手紙を読み始める。

セレナたちも見たことのないポケモンが人の言葉を喋ったことに驚き興味をもって見たようだったが、ヒナからの手紙という言葉にすぐに意識がサトシの方へと向き…手

紙を読むサトシを見つめる。

「なるほどな……」

『ピイカ…』

「え…サトシ、何が書いてあったの？」

「納得しているようですが…ヒナちゃんは大丈夫なんですか？」

「私も読みたい！」

『デネデネ！』

「ああいいぜ…ほら」

『ピイカ！』

「えつと…《お兄ちゃんへ。私はある子たちと勝負をする約束をしました。その条件でマサラタウンを出なければなりません。でも安心して旅を続けてね！私とヒトカゲ、ピチューは絶対にその条件を満たしてマサラタウンに帰って…そしてトレーナーとして勝負するから！お兄ちゃんはカロス地方で私たちの勝負の結果を楽しみに待っていてください。あと絶対に心配だからってカントー地方に帰ってこないでね。それやったら大嫌いになるから。お兄ちゃんはちゃんとカロス地方のジムバッチをゲットして、そ

してリーグに挑むために頑張つて！お兄ちゃんの旅を私たちのせいで中途半端に中断させるつもりはないからね。だからカロス地方での旅を続けてください。ヒナとヒトカゲとピチュウより」…そのある子たちと勝負をするためにマサラタウンから出たということでしょうか？…」

「ああ。そうだろうな…」

『ピツカツチュ…』

サトシとピカチュウはカントー地方にいるヒナのことを考えた。ヒナは最初旅をする気はないと言っていたというのに、イツシュ地方で旅の楽しさを学んで…そしてトラブルなどの大変さを学んだ。

だからこそ本当だったらマサラタウンに連れ戻そうと言う感情の方が強いけれど、この手紙に書かれている意志の強さからそれはできないだろうと悟った。もしも強制的に連れ戻したとしてもまたマサラタウンから外に出ようとするとするだろう。【トレーナー】として勝負を挑もうとするだろう。それならばトラブルが起きないように影から見守っていた方が安全だ。何をしようとしているのかは知らないけれど…その勝負を受けたと言う子たちが気になるけれど…それでもヒナ達は勝負を受けようと必死に行動しているのだ。だからこそサトシとピカチュウはヒナ達の考えを尊重した。

そしてそれはセレナたちもサトシの表情と手紙から感じ取ったのか、不安そうにしていたけれど、何も言わずに黙っていた。

そしてサトシがミュウツーに向かって声をかける。

「なあミュウツー、ヒナを連れ戻そうとしなくてもいい」

『ピイカ』

『なっ…そのままにしろと言うわけか!?!』

「いや、放っておくつもりはねえよ。あいつはまだトレーナーになれる年齢じゃないし幼いんだから…だからこそミュウツーたちにはヒナたちを見守っていてほしいんだ」

『それは…問題が起きれば俺たちが解決してもいいと言うことか?』

「なるべくヒナたちに旅での大変さを知ってもらいたいけど…本当に危ないと分かったら頼んだ。とにかくヒナ達はこのまま様子を見よう…あとマサラタウンに帰ったら説教だとヒナ達の勝負が終わった時にでも伝えてくれ」

『ピカピカチュ』

『…分かった。フシギダネ達にもそう伝えよう』

そう言って、ミュウツーは不本意そうな表情を浮かべてカントー地方へ帰っていった。このままヒナたちを見守り、何かあれば助けてくれるだろうとサトシは信じてセレナたちの方へと振り向く。セレナたちはそれで大丈夫なのか、あのポケモンは一体何なのかと聞きたい様子だったけれど、サトシの表情を見て口を閉ざす。サトシも心配だからだ。マサラタウンにいるヒナたちのことを…旅をして無事に帰ってくるのか悩んで、そして出した答えだった。

だからこそ、セレナたちは何も言わない。サトシが悩んで決断したことに口を出すつもりはないということ、心配しているのが分かっているからだ。

「さあ行こうか…ヒナの手紙に書かれてるようにカロス地方を旅していこう!」

『ピカピカ!』

「…サトシがそれを望むなら、私は何処までもついて行くわ!」

「そう…ですね。サトシが大丈夫だと感じているのなら、僕たちは僕たちの旅をしましょー!」

「うん。ヒナちゃんにはいつか話してみたいけど…それはヒナちゃんの勝負が終わってからだね…!」

『デネー!』

皆がそれぞれ納得し、心の底で不安を感じながらもカロス地方での旅を再開することになった。何かあるのか：大丈夫なのかという気持ちは強くあれど、ヒナの手紙やその意志を信じて、サトシ達は前へと歩み続けた。

第百七十八話く妹はある人物に会うく

「よし…ちよつとだけピチュウの尻尾が変わってきたね…!」

『カゲカゲ!!』

『ピツチュウ!』

こんにちは妹のヒナです。現在ニビシテイの近くにある森にいます。この日から何日目かの野宿になります。

イツシユ地方で旅をしてきたからどうやってキャンプをすればいいのかも分かるし、時間はかかるけれど苦痛になっているとは思っていない。…まあ母やルカリオの料理が恋しいとは思っているけどね。

そして今日、そろそろ日が暮れてきたため、野宿をするためにヒトカゲに私たちが集

めた薪となる木の枝や枯れた草を今日寝る場所の近くに置き、ひのこで火をつけてもらう。

そしてその後、私はリュックから食べ物を用意した。食べ物はルカリオ達と旅をしてきたようなものではなく、栄養バーのような小さなものを食べるしかない。栄養バーはシヨップで安く売っている旅人に必需品の食料だ。バッグにかさばる心配はないし日持ちもいい、そして栄養満点！旅のお供に!!とは町のシヨップで見たキャッチフレーズである。でもまあ栄養バーは不味いというより普通…よりも微妙な味だし、普通の料理が食べたいと思ってしまう。でもこれは旅をし始めたから仕方ないと思う感情だ。だからその感情を押し込めてただひたすら栄養バーを食べていた。…でもマサラタウに帰ったらまず母から料理を習おうと思っていたりするけれど。

でも栄養バーだけじゃないからあまり嫌だと思っていない。それは、ピチュー達や近くにいたポケモン達が協力してきのみを集めてくれたため、私は栄養バー以外にもモンのみなどを食べれたからだ。

私は栄養バーときのみを食べ、ヒトカゲやピチューにはそれぞれ専用のポケモンフーズを食べてもらった。きのみ集めに協力してくれたポケモン達にもポケモンフーズを渡してあげがとうと札を言っておいた。優しいポケモンたちは私たちに手を振ってからすぐに離れていって…攻撃してくるポケモンじゃなくて良かったと思えた。

そして一度リュックの中身を調べてからこの後どうするべきか考える。そろそろリュックに入れてきた食料がなくなりそうだから、もしもニビシティに着く前に食べ物がなくなったらきのみで過ごすそうと覚悟をした。ポケモンフーズがなくなつたとしてもヒトカゲとピチューはきのみで十分だと笑っていたし、一緒に苦難を乗り越えようと思ふ。

食べた後は、ピチューがまたアイアンテールの練習をし始めたため私たちも一緒になつて頑張つた。

「うーん…ピチューもうちょっと頑張つて！もつと力をいれて…鋼になるように！」
『カゲカゲ！』

『ピチュウウウ…ピツチュウウ!!』

「そう、その調子！」

『カゲ！』

『ピチュウウウ!!』

ピチューの尻尾は鋼になると言うより電気でビリビリと光っているように感じた。でもそれだけ力を入れていと言うことだから否定をすることはない。アイアンテールじゃなくても何か攻撃できる方法があるかもしれないし私はそう思った。でも、ピチューの尻尾がまるで光り輝く星のような気がして、普通だったらコンテストのアピール技のようで綺麗だと思うけれど、完璧なアイアンテールにならないことに私たちは少し残念だと思いながらも他の攻撃方法として使えるかもしれないと言うことと、もつと頑張ってみようと言ってピチューを励ます。

ピチューはなかなかアイアンテールができないことに焦っていて、兄のピカチュウがやっていた時のことを何とか思い出そうとしていた。一生懸命思い出すために頭を使ったためきのみをたくさん食べてお腹いっぱいになっていたけれど、なかなかうまくいかずにいる…。

だからこそ私はアイアンテールだけじゃなくて他にも対策方法を考えた方がいいだろうと思う。いろいろとやるべきことは考えているんだけど、それで勝機があるのかどうかは…まだ分からない。ある意味当たって砕けろという感じになってしまいかもしれない。砕けるつもりは一切ないんだけどね。

——そしてそんな時に、人間の足音が聞こえてきた。

「あれ…ヒナちゃんじゃないか!？」

「…あ、タケシさん!？」

『カゲ!？』

『ピツチュウ!!』

足音が聞こえてきて誰なんだろうと思った。攻撃してくるトレーナーならバトルの練習相手として迎え撃とうと思ったけれど、やって来たのは兄と一緒に旅をしていたタケシさんだった。タケシさんは私たちがここににいることに驚き…そして周りに他の人やポケモンがいないことに驚いている。

私たちはタケシさんに会ったと言う事実には焦ってしまった。本当だったら見つかるつもりもなく、森の中で修行をしてからニビジムに向かおうと考えていたというのに…まさかこんなところでタケシさんに会うとは思ってもいかなかったのだから。ニビジムと深く関係のあるタケシさんだからこそ、この場から逃げると言うこともできずただ何

と言いつをすればいいのか必死に考えていた。このまま納得のいく言い訳が言えなければ、マサラタウンに連れ戻されると言う可能性もあった…だからこそどう言い訳すればいいのか悩み冷や汗が出る。

タケシさんはただ戸惑いながらも私たちに向かって言った。

「ヒナちゃん。何でここに…」

「う…いやあの…」

『カゲエ…』

『ピツチュ……』

「ああ…いやそれよりも、この森にいるより俺の家に来た方がいい。それだけじゃお腹が空くだろう?」

「え!?! えつと…良いんですか?」

『カゲ!?!』

『ピチュ!?!』

「当然だ。もしもここでヒナちゃん達を放っておいたらサトシに殴られてしまうからな」

「ははは…それじゃあお願いします!」

『カゲカゲ!』
『ピチュピチュ!』

タケシさんは私たちが持っていたり地面に転がっているきのみや栄養バーを見て、それではお腹が空くと考えたらしい。ちようどニビジムには修行をしてから行こうと思っていたけれどタケシさんの好意によつて夕食をごちそうされることになつてしまった。

この後どうすればいいのだろうかと思死に考えながらも、ニビジムの近くにある家に行くとジロウさんや他の妹や弟たちが驚きながらも歓迎してくれて……ヒトカゲやピチュと遊ぼうとしている子たちでいっぱいだった。そしてタケシさんのウソツキーなどもいて……とても賑やかで私たちに好意的なタケシさんの家族に、後で無茶な頼みごとをしなければいけない私たちとしてはちよつとだけ微妙な心境になつてしまった。

タケシさんの料理はとても美味しいと言うのに、これは私たちが勝手にマサラタウンから出たことで起きたんだと思うとちよつとだけ美味しいと感じれなくなる……。……でもちよつぱり美味しい。

ピチュは……きをみの食べ過ぎでお腹がいっぱいだったけれど、タケシさんたちの好意を無駄にするつもりはないと頑張つて食べていた。

…でもタケシさんがそれに気づいてピチューの食べ物を少なくしてくれていて…本当に、周りに迷惑をかけていると感じたのだ。兄たちのポケモンも、伝説達にも心配をかけているだろうとマサラタウンでの出来事をつい先程起きたような感じで思い出す。

——でもこれが終わるまでは投げ出すつもりはないのだから最後まで頑張らないと。

.....

「……ああ、お前だったのか。ミュウツーにミュウ」

『ふん…久しいな。あの時以来か…』

『ミュウウ!』

ニビシテイにてヒナたちがやって来たことを兄であるサトシやマサラタウンにいるみんなに今から連絡するかどうか迷っていたタケシのもとにやって来たのは寝静まった頃。ヒナたちは何やら考え事をしていたようだったが、もう夜も遅いと言うことは明日することになった。そして妹達と一緒に部屋で寝ることになり、今はタケシ以外の家族が皆寝ているという状況だった。ちなみにタケシの両親は現在何度目かの旅行中である。

この後連絡するべきなのかを迷い：ひとまず外の空気を吸ってから考えようと外に出て散歩していた時にミュウツとミュウがタケシの目の前にいきなりやって来たのだった。タケシはそんな伝説たちに驚くことなく、むしろ納得していた。

ミュウツは素っ気ない態度をしており、ミュウは久しぶりだねと手を上げて挨拶をしている。タケシは驚くよりも先にミュウツたちがヒナたちの様子を見にやって来たのだろうと悟ったのだ。マサラタウンに伝説達がいるという状況を知らないタケシだったが、いまこの場にミュウツとミュウがいることがおかしいと感じず、ただサトシだったらできるだろうと考えていた。妹が大切なサトシだからこそ、伝説であつたとしても協力できるポケモンがいるなら：迷惑にならなければ何でも頼むということなのだろうとタケシは考える。

そしてミュウツたちがいきなり現れたのはヒナたちが家にいるという状況だから

こそわざわざ目の前に来たのだろうと分かった。

だがタケシは伝説であるミュウツーやミュウを見たとしても騒ぐことはない。ただ久々に再会した友人と会った時のように爽やかに話しかけているだけなのだ。それは、サトシと一緒に旅をしてきたことによつて伝説などを見慣れてしまったからだろう。サトシだからできるという妙な信頼感があるからこそできる長年の旅の仲間ゆえの心境だった。

その間にもミュウツーやミュウはヒナたちが寝ているであろうタケシの家を見て心配そうに見つめ、そしてタケシを見た。

『ヒナ達に怪我などはないか？』

『ミュウ？』

「ああ怪我も病気もしていない健康体だ。…何か目的があつてこつちに来たみたいなんだがミュウツーたちは知ってるか？」

『…その目的は私たちは知らない』

『……ミュウ』

「そうか…でも事情は知らないがヒナちゃんの傍にはいるつもりなんだろう？サトシから連絡があつたよ。影から保護者が見守つていふと言ふことを…だから俺からもヒナ

ちゃんの目的が何なのか聞いてみよう！」

『ああ…そうしてもらうと助かる』

『ミュウ…』

「いや…ヒナちゃん達を見てると…放っておけないのは分かるさ」

タケシはサトシから連絡があったのをミュウツーたちに教えていた。サトシからの連絡はヒナがそっちに来ているかもしれないということ、旅に出た理由についてそれとなく聞いてみてくれということ、面倒をみてほしいということ…そしてヒナたちの近くに過保護な保護者がいるから何かあったら聞いてくれと言っていた。まさかタケシの想像していた保護者が人間ではなく伝説のミュウツーたちとは想像つかなかったが…サトシならあり得ることかと納得していたのも長い間旅してきた経験からだろう。

とにかく、明日になったらヒナ達から話を聞くということ伝え、タケシはマサラタウンに連絡をしようとはしなかった。目的が分かればサトシ達にすべて伝えるということ…できることなら自分たちも協力するということを考えながらも…。

第一百七十九話～兄は苛立ちを隠さない～

「…へえ」

『…ピイカ』

「そのツンとした表情もかつこいいわサトシ…！」

「セレナ…いえですがこれはサトシでなくても苛立ちますよ！」

「そうだよ！コフキムシたちを捕まえて…ビビヨンにしてから売るだなんて許せない！
ポケモンは商品じゃないのよ！」

『デネデネ!!』

「こんにちはは兄のサトシです。ちょっと今苛立ってます。」

だがそれは後にしよう：俺たちはしばらく前、ミアレシティにいた時にシトロンはハリマロンと気があったのか一緒に旅に連れてけという願いを叶え、そしてセレナがサイホーンレースの選手だったという事で飛び入り参加ができるレースに俺たちも参加することになりいろいろと教えてくれたりした。まあ他にもトラブルはたくさん起きていたけどそれらについてはまだ問題ないと言っておく。

：妹に聞してもタケシから連絡があつて詳しい事情を知ったことで妹達は大丈夫だと分かつたし安心しているからな。タケシから連絡があつた時にこれから妹達はニビシティを出発すると言つていたから、トラブルが起きたり連絡がつかなくなったりするのは心配だが：やるべきことはやつたし大丈夫だろうと考えておく。

そしてそんな旅の途中で出会つたのはコフキムシだった。コフキムシはある人間に捕まつていて：偶然逃げ出すことができたんだけどポケモンセンターに連れて行かなければならないほど弱つていて：そしてその後やって来たジュンサーさんから話を聞くことができた。：とうかジュンサーさんも俺のことを知っていて驚いたんだけど：俺つてそんなに有名なのか：。まだそこまで有名になるつもりはなかったんだけどな。

「あら？そのコフキムシ…なんだか落ち着きがないわね？」

「え…」

『ピイカ？』

『フッフッフ…フウウウ!!』

「これは…進化ですね！」

「わあ！私目の前で進化見たの初めて!!」

『デネデネ!』

コフキムシがコフリーライに進化したことに周りにいる皆が驚き、そして喜んでいた。ポケモンが進化することが誰であれ嬉しいものだよなと思いつつも、コフリーライが元気でこちらを見ている表情に笑みを浮かべる。

そしてユリーカが進化について知りたいと言ったものだから、進化には一定の条件、つまりレベルで姿形が変わるといふこと、そして石や場所によつて変わるポケモンもいるといふことを教え、その後進化を拒むポケモンがいるといふことも教えていった。

「進化を…拒むの？強くなれるのに？」

『デネ？』

「それは興味深い話ですネ…」

「サトシは…そんな状況を見たことがあったの？」

「ああ、例えば俺のピカチュウもライチュウに進化するのを拒んでるし…他にもマサラタウンには進化したくないってポケモンはいるぜ？…ヒナのピチュウも進化を拒んでるしな。だからこそ、ポケモンすべてが進化したいって思っていないこと、必ずしも進化させていいというわけじゃない。ポケモンの意志を優先して…進化したくなければその通りにしてやらないといけないんだぜ」

「そうなんだ…分かった！」

「僕たちはポケモンと一緒に助け合って生きていきますからね…ポケモンの意思を尊重するのは大切なこと…勉強になりました！」

「うん！サトシの言ってること…本当に凄いつて思うし、私もポケモンの意志をちゃんと聞いて、進化したいのかどうか一緒に考えていくね！」

「おう」

『ピッカ！』

シトロンやユリーカは初めて聞いたという表情を浮かべていて…これからはちゃん

とポケモンの話も聞くようにしようと思いを決意したらしい。セレナは俺に向かつて頬を赤くしながらもしつかりと頷いてポケモンの進化にも一緒に考えていこうと決めたらしい。とりあえずトレーナーとして…これからセレナたちがポケモンを無理やり進化させようとは思えないだろうと少しだけ安堵した。トレーナーとポケモンは助け合って生きていかなくちやいけなからな…仲間となったセレナたちがトレーナーだけの都合でポケモンを振り回すだなんてことをしてほしくはないと思っていたからこそ、良かったと感じた。

.....

「あれ…これは…？」

「どうしたシトロン…つてこれって機械…か？」

『ピイカ？』

シトロンがコフーライに何かをついているのを発見して、それを取る。そしてシトロンがちやんと確認したところ、電波を確認するチップ…つまり、発信機だということが

分かった。

そしてこれはポケモンバイヤーであるあの悪党がポケモンを逃がさないようにつけていたという証拠になっていて……とりあえず近くにいるのならぶつ飛ばすと窓から外の景色を見る。

まあ外の景色は同じだけれど、何かあればすぐにわかるようにしておいた方がいいとピカチュウを見る。俺はピカチュウに何か激しい音などが聞こえたらすぐに対応するように頼んでおいた。ピカチュウも力強く頷いており、ポケモンセンターに来た場合はすぐに捕まえることができるだろうと考えていたぐらいだ。

コフーライは自分の仲間が捕まっていることに心配そうな表情を浮かべていた。ポケモンバイヤーを今ここで捕まえたとしてもコフーライ達を逃がさなければ意味がないと考える。たとえ戦意喪失するぐらいフルボッコにしても……ちゃんとそのアジトの場所を教えるかどうかは分からない。……いや、恐怖で言ってしまう可能性の方が高いと思うけれど、念には念を入れておこうと感じた。アジトを見つけてフルボッコにしようという考えで行こうと思った時にセレナが思いついたという表情で口を開く。

「そうだわ……匣を回収させて、そのチップが発信する電波をつけていけば……奴のアジトを突き止めることができるんじゃない？」

「なるほど……では僕の出番というわけですね!!」

シトロンがなにやらコフーライのついていた発信機をたどる装置を発明したらしいけれど……それって大丈夫なのかとちよつとだけ心配になった。いつも最後の最後には発明した機械が爆発することが多いため……いやでもまあ何とかなるかと俺とピカチュウは顔を見合わせて苦笑した。

そしてその後、コフーライに進化したと言うことでポケモンバイヤーが罨ではないかと考える恐れがあることについての話になり……セレナが言ったように罨の話になった。捕まえたコフキムシがコフーライに進化したと他のポケモンがコフーライに変装しても、ばれることはなくただ進化したと考えるだけだろうと言うことで罨の可能性については無問題だと分かったけれど、罨を誰がやればいいのかということ、またコフーライに罨をやらせるのはできないということ、皆が悩む。

「どうしよう……コフーライには罨でまた危険な目に遭わせるのはできないし……」

『ピカピカ!ピカッチュウ!!』

「……ピカチュウ。やってくれるのか?」

『ピカピ！ピカツチュウ!!』

「大丈夫なのピカチュウ？」

「危険な目に遭う可能性もあるのですから…それでも平気ですか？」

『ピツカア!』

「ピカチュウがやりたいって言うんなら俺は止めないぜ…アジトに着いたら暴れてもいいしむしろフルボッコにしてほしいぐらいだ」

『ピカピカ!ピツカツチュウ!!』

「頼んだぜピカチュウ」

『ピツカ!』

「あ、なら私がピカチュウを立派なコフーライにしてあげるわ!!」

「よ、変装の天才!」

『デネデネ!』

「ふふ!私に任せなさい!」

ピカチュウがやる気を出したようでコフーライに変わって自分が囷になると言ってきた。シトロンやセレナ、ユリーカが大丈夫なのかと心配していたけれど、ピカチュウ

の殺る気に満ちた表情に大丈夫なのだろうと悟ったのだろう。…ジュンサーさんが引いた表情をするぐらいには気合いに満ちていた。セレナたちは俺たちと旅をして慣れたのかちよつとだけ暴れたとしても動じない。だから、ジュンサーさんのような反応が少しだけ懐かしいと思えた。…まあいいか。

とにかく、俺はピカチュウを止めるつもりはないし、むしろピカチュウがアジトに行つて、即電撃で倒してしまえば大丈夫だという気持ちがあつた。俺の相棒で信頼できるピカチュウならやり遂げてくれるだろう。

セレナがやつてくれたことは白い布をコフーライの模様などに似せて…そしてピカチュウに被らせるといふやり方だつた。白い布や黒い布…他にもいろいろと布を出して重ね合わせて針で糸を通したり、目となる部分にはピカチュウがちゃんと見えやすいように穴をあけていたりした。手伝つた方がいいのか話しかけたら大丈夫すぐに終わるよと言ふ返事が来て…あつという間にコフーライの布を被つたピカチュウという状態になつた。

「よし。これならいけるな…！」

「ええ、我ながらうまくいったわ！」

「あとはあの檻の場所まで戻る必要がありますね…探してなければいいんですが…」

「大丈夫だよ！絶対にもうまくいくからね！」

『デネデネ！』

『ピッカチュウ！』

『フイウウウ！』

その後、檻に変装したピカチュウを入れて、俺たちは近くにあつた草むらに隠れる。でも後ろから来る可能性を想定して草が多く茂っている場所で隠れていた。そしてしばらくしたらポケモンバイヤーであるダズがやってきて、檻ごと回収していった。

——その後はまあいつも通り発信機を追っていたのだがシトロンの機械が壊れて爆発してしまい、途中で見失ってしまったり、ヤヤコマに頼んで空からアジトを見つけてもらったりした。

そしてようやく見つけたアジトでは、かなり凄まじいことになっていたようだった。

「見つけた……！」

「……ってあれ？気を失ってるみたいね？」

「ピカチュウがやったんでしょか？」

「でもこれで解決したんだよね……!」

『デネ?』

「ピカチュウ、平気か?」

『ピカピ!ピカピカ!』

ピカチュウはコフーライの変装を解いていて…そして近くにはポケモンバイヤーのダズやポケモンのホルードが気を失っていた。おそらくピカチュウがやったんだろうけど…さすが俺の相棒だと思えるぐらい周りが凄まじい惨状になっていた。

アイアンテールで攻撃したのか…地面が抉れており、まるでじわれのような状態になっている。そしてピカチュウの電撃によって焼けた跡が残り…そして木々が何かの衝撃で折れた状態になっていた。でもシトロンやユリーカ、セレナはそんな光景よりもコフキムシやコフーライ達が無事なことに喜んでいたりする。

「…良かったなコフーライ」

『ピカピカ!』

『フーフウウウ……ビョオオオオ!!』

「コフーライがビビョンに進化した…?」

「見てください…こつちもです!!」

「凄い凄い！」

『デネデネ！』

檻から出され、解放された集団のコフキムシ達やコフーライが一斉に進化を始めて…
そして最終的には全員がビビヨンになった。様々な模様をした綺麗なビビヨンはその
まま空へと飛びあがり…このまま自分たちの居場所へ帰っていくのだろうと分かった
のだった。

「じゃあなビビヨン…」

『ピツカツチュ！』

「また会えたら会いましょう！」

「ポケモンバイヤーに見つからないように気をつけてくださいよ！」

「またねビビヨン達！」

『デネデネ！』

「……この状況は一体何?!」

『ライボウ?!』

「あ、やべえ忘れてた……」

『ピイカ……』

ビビヨン達飛び去っている状況と、気絶しているポケモンバイヤーがいる光景に、遅れてやって来たジュンサーさんが叫んだのは仕方ないことだと俺たちは苦笑した。

第百八十話　妹は頼み込む

こんにちは妹のヒナです。

これからタケシさん達に頼むことは怒られるか冗談だと思われるか……そのどちらかだと思いつながらも気合を入れて私はヒトカゲ達と一緒に頭を下げた。

ここで言い訳をしたらジム戦ができるのかどうかわからない……昨日、タケシさんに親切にもらった分嘘はつけないと……良い言い訳が思いつかず、無駄に何かを言わない方がいいと思っているからこそ、私たちは言い訳をせず、直球で頼み込んだのだ。

「お願いしますー！ジム戦させてくださいー！」

『カゲエー！』

『ピッチユウー！』

「ヒナちゃん……？」

「……ヒナちゃん。君は今何を言っているのか分かってるのか？」

「分かってる……分かってて私たちはここまでやって来たの!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「……………」

頭を下げる私たちにタケシさん達は困惑していた。まあ当たり前だと思う。私のような年齢が幼くてまだトレーナーにもなれない子供がこうやってニビシティまでやってきて無茶なことを言っているのだから。

トレーナーになつてからジム戦すればいいという声には今じやないと駄目なんだと首を横に振つて否定し、何があつたのかと聞かれたら口を閉ざした。これは私達の問題であつて……おそらく私たちのバトルについて話をしてしまったらタケシさんからマサラタウンにいる皆に……そして兄に話されてしまうだろうからだ。ここで言い訳をしてしまったらそれは嘘になってしまうかもしれないということも考えていた。だからこ

そ私は口を閉ざす。兄たちに知られないように：兄たちに知られるということはつまり私たちの力で解決することができなくなるのと同じことだった。だからこそ私たちは何も喋らず、ただひたすらジム戦をしてくださいとそう言い、頭を下げ続けた。やがて、仕方がないという表情でタケシさんが私たちに優しい声で話しかけた。

「ヒナちゃん…ジムバッチが必要ということと理由を喋りたくないのは分かった。けれどそれだけだと俺たちは…ジロウはバトルを受けるつもりはないよ…ちゃんと話してもらわないと俺たちは何もできないんだ」

「……………でも私たちは自分でやらないといけないから…お兄ちゃん達が聞いたら絶対に解決しそうだから…」

『カゲエ…………』

『ピチュウ…………』

「…分かった。サトシ達にはヒナちゃん達の行動を邪魔しないように言っておこう…だから話してごらん？何があったのかを…」

「……………分かりました」

『……カゲ』

『……ピチュ』

タケシさんの声は優しく…まるで説教する母や兄のように私に問いかけてきているようだった。確かに迷惑をかけ過ぎたという感情はあるし、罪悪感もある。マサラタウンでは私たちがいないことで絶対に酷い状況になっているんだろ…という考えがあるぐらいだ。私たちのことを心配しているポケモン達、人間たちがいると言うのも分かっていた。

…怒られるのは覚悟の上で行動してきたけれど、今ここで何も話さなければタケシさんたちはジム戦を受けてくれないだろう。このままマサラタウンに連れ戻される可能性があるだろう。そう感じたからこそ私たちはお互いに顔を見合わせて考える…。

タケシさんは兄たちに邪魔をしないように言ってくれると話してくれたし…それを信じてみようと考え私は重い口を開いた。

.....

「…そうか。その子供たちにジムバッチを3つ集めてこいと…」

「……………マサラタウンに連れ戻されたとしても…たとえジム戦が受けられないとしても、私たちは絶対に3つのバッチを集めます。タケシさん達には本当に迷惑をかけています…けれど私たちはこれだけは譲れない…!」

『カゲエ!』

『ピッチユウ!!』

「…いや、だがそれは無茶というものだ!」

「でも…!」

『カゲカゲ!』

『ピチュ!』

「…いいよ。ジム戦受けても」

「ジロウ…!?!」

私たちの言葉と行動にタケシさんたちは苦笑していた。おそらく兄のぶっ飛んだ行動と似ていると思ったのだろう。兄の暴走に近い行動だと思っているのだろう。

普通なら3つのバッチを集めろと言った時点でその勝負は止めているはずだ。それなのに私たちはその勝負を受けようとしている。ジムバッチを3つ集めろという条件も：相手はジムリーダーに勝ったことがある強いポケモンで挑むと言う不公平な勝負にも：何も言わずにその約束を守ろうとして行動していることにタケシさん達は驚き、呆れている。

でも私たちは止めるつもりはない。あの三人組がヒトカゲやピチューを弱いと嘲笑ったことに対する認識を改めてもらうために：ジムバッチを3つ集めることができるといふ条件をすべてできてこそあいつらに心の底から謝ってもらえると思っっているからだ。いつもだっただらこのようなトラブルがあったとしても、兄たちが：兄のポケモン達や伝説達が私たちを守ろうとするだろう。でも今回だけは許せなかった。ヒトカゲやピチューは弱くないという認識をすべて撤回してもらおう：そのために私たちは二ジムにやって来たのだ。

でもタケシさんたちは微妙そうな表情を浮かべていて：もしかしたらこのままジム戦を受けてくれないのかもしれない。そうなったら他のジムに行かなければと思う。もしも連れ戻そうとしたらすぐに逃げようという考えも出てきた。それぐらいタケシさんは微妙そうな表情をしていたのだ。タケシさんは兄と一緒に旅をしてきて：そして私達も話をしたことがあったしかなり良い人だからこのような無茶を言ったとして

も私たちの言葉に納得し、仕方がないと言って挑戦できると思った。タケシさんと知り合いだからということ、兄の暴走をすべて見てきたタケシさんだからこそその行動だった。でも駄目ならば他のジムへ行こう…なんとしても3つのジムバッチをゲットしなければいけないのだから。…そう思っていたら、ジロウさんが私たちに近づいてジム戦を了承してくれた。その表情は力強く、ジムリーダーとしてのやる気に満ちていたのだ。

そしてジロウさんの言葉にタケシさんが驚いていて…ジロウさんがタケシさんに向かって口を開いた。

「ヒナちゃんのトレーナーとしてバッチを集めて戦うという覚悟と度胸を認めただけだよ。でもこれだけは約束してほしい…トレーナーになった時にまたバトルしてもらおうということを」

「ジロウさん…もちろんです！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「…はあ。仕方がないな…じゃあジム戦の審判は俺がしよう！」

「いいんですか…ありがとうございます！」

『カゲエー！』

『ピッチュ！』

ジロウさんの言葉を聞いて、タケシさんも仕方がないと納得したらしい。小さくため息をついていたけれど、タケシさんがジム戦をしてもいいということ…そして審判をするということも言ってくれた。だから私たちはその言葉に喜び、また深く頭を下げる。ジロウさんやタケシさんの手が私たちの下げた頭を撫でていく。頭を下げているために表情は見えないのだけれど、おそらく苦笑していたのではないかと思った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「では、使用ポケモンは2体。ではジムリーダーと挑戦者、2対2の試合を開始する……
試合開始！」

「行くぞイシツブテ！」

『ラッシャイ!!』

「よし…行くよピチューー!」

『ピツチュウ!』

「…でんきタイプは無力だというのにピチューできた…ね。ピチューとヒトカゲしかないとしても、やっぱりサトシさんに似てるのかな?」

ジロウさんがイシツブテに対してピチューを出してきたことに面白そうな表情を浮かべている。でもまあピチュー以外だとしてもいわタイプに弱いヒトカゲがいて…あの意味ジロウさんとの戦いはやばい状況だと思っただけだね…でもそれはジロウさんは知っていることだ。私たちのポケモンも…その苦手なタイプのことも…。そして私たちはそれを知っていたとしても、何としてもジムバッチを貰うためにやって来たんだ…!

「ピチュー…まずは回り込んで…10まんボルト!」

『ピツチュウ!』

「速い!? ……でもイシツブテには電気技は効かないよ!」

『ラツシヤアア!!』

イシツブテにはピチューの10まんボルトは効かない。それは知っている。でもジロウさんはピチューのスピードが想像以上に早いということに驚いていたらしい。ピチューの10まんボルトを跳ね除けたイシツブテを見て：私は指示をするために口を開く。

「…できるピチュー?」

『ピチュ…ピツチュウウウ!!!』

「…イシツブテ、ころがる!」

『ラツシヤイイイ!!!』

「ピチューいったん回避に動いて!大きく右にジャンプ!」

『ピチュ!』

ピチューがまだ未完成なアイアンテールを何とかイシツブテに向けて発動させようとするがうまくいかない：それをみたジロウさんは何も反応せずイシツブテに攻撃を

指示する。凄まじい勢いと力強い威力のあるイシツブテのころがるにアイアンテールをしようとするピチューがその攻撃を受けそうになったが、すぐに私の声に反応して右にジャンプした。

私はピチューがアイアンテールを覚えていないということが致命的なのだと感じていた。ピチューは電気技が主であり…スピードは兄のピカチュウに比べると遅いが、一般的なピチューよりも速い。それこそ普通のピチューがでんこうせっかするぐらいの速さで反応することができたことに…これは私たちが修行をしてきた成果なのだと感じていた。ピチューの努力が速さとなって表れたのだ。

だからとにかくまだ発動できないアイアンテール以外にも電気技で攻撃していく。アイアンテールができなくっても…兄のピカチュウも電気技でイシツブテを倒したと聞いたからこそ、無理だと思っけていても諦めるつもりはなかった。

「ピチュー…回転式10まんボルトよ!」

『ピッチュウ!!』

「アイアンテールができなくっても、電気技でダメージを押し通すのよピチュー!」

『ピッチュウウウ!!』

「ツ…さすがはサトシさんの妹…でもそれじゃあ倒せない！イシツブテ、もう一度こころがるだ！」

『ラツシャイイイイ!!!』

「やばい…ピチュー後ろに下がってそのまま左にジャンプ！」

『ピチュー…ピチュー!?!』

「おっと、それは無理だよ…！」

『ラツシャイ!』

「ピチュー…!?!?」

『ピツチュウウ!?!』

ピチューの回転式10まんボルトはほうでんのように周りに影響が及ぶ技である。10まんボルトが効かないとしてもある程度のしびれは出てきている…はずだと考えながら…とにかくダメージを増やしていくために攻撃の手を休めない。

でもジロウさんはただ感心しているだけで、焦ったような表情は浮かべていなかった。

ピチューがまた避けようとしたのを予測したのか、イシツブテがジャンプして避けたピチューを追って、空中で大きな衝撃と共にピチューがイシツブテの攻撃に当たってしまった。その衝撃は強く、地面にピチューが叩きつけられるほどだった。叩きつけられた衝撃で土煙が舞い、イシツブテ達が隠れてしまう。

そして大きな砂煙の後、見えてきたのは、イシツブテとピチューの試合の結果だった。タケシさんがその様子を見て口を開く。

「…ピチュー戦闘不能！イシツブテの勝ち！」

「…ピチュー…頑張ったね。本当にありがとう！」

『ピツチュウ…』

「しばらく後ろで休んで…本当にありがとうねピチュー」

『ピツチュウ…！』

「絶対に負けるつもりはない…行くよヒトカゲ！」

『カゲエエエ!!』

ピチューが倒れてしまった今、私はヒトカゲで戦うしかない。

でも、ピチューが負けたからと諦めるつもりはないし、頑張ったピチューの分まで戦うと余計にやる気が出てきたぐらいだ。ヒトカゲも頑張ったねとピチューの頭を撫でてから、私の声に気合十分の咆哮を上げた。イシツブテにも：次に来るであろうポケモンにも絶対に負けないと、私とヒトカゲはやる気に満ちていた。

第百八十一話　妹は負けたくない

——砂煙がジムの室内に舞っている。ピチューとイシツブテの戦いが終わったからだ。電気技は効かず、圧倒的にイシツブテが有利だった。この後のヒトカゲでも同じようなものだろう。ヒトカゲはひのことえんまくしか技を覚えていないのだから……。

挑戦者とジムリーダーとのバトルは、ジロウが勝つのだろうと……タケシの家族が観戦席から見ている……全員がそう思っていた。

「行くよ、ヒトカゲ！」

『カゲエエエ!!!』

「ヒトカゲ：イシツブテには有利じゃないポケモンだね」

『ラツシャイ！』

「私たちはそういうの気にしない：お兄ちゃんだって不利なポケモンでも戦って：余裕で勝ってきたんだもん：だから私たちは絶対に負ける気はない！」

『カゲカゲエー！』

ヒトカゲが強く咆哮を上げる。その声はまるでやる気に満ちている強い鳴き声でもあった。イシツブテがそのヒトカゲのやる気に満ちた声にまた声を上げ、ヒトカゲを倒すためにジロウを見て指示を待つ。ヒナはジロウが口を開くのをじっと見つめていた。

ヒナはピチューが倒されたときに見たある反撃方法を考えていたのだ。ピチューにはできなかった指示：たまごから生まれた時からずっと一緒にいるヒトカゲだからこそできるであろう指示であって：ある意味無謀ともいえるだろう考えだった。でもヒトカゲは一度ヒナの方向を見てから力強く領き、大丈夫だという意志を示す。その様子にヒナも笑みを浮かべて領いた。

そしてジロウはそれをすべて見ていた。ジロウはただ思い出していたのだ。まだジムリーダーじゃなかった頃に見たサトシとタケシの勝負を：あの時、弱点でもあるはず

の岩タイプを相手にピカチュウだけで戦った電撃を…力強い一撃を思い出していた。ヒナとヒトカゲの強い絆が…まるでサトシとピカチュウのようだと感じていたのだ。

ジロウもまた笑みを浮かべて懐かしいという感情になりながらも口を開く。

「…：イシツブテ、ころがる！」

『ラツシヤイイイ!!』

「…：ヒトカゲ大きくジャンプしてから回転して！」

『カゲカゲ!』

「何をやってるんだ?それだけじゃあまたイシツブテにやられるだけだよ!」

『ラツシヤアアア!!』

「分かっている…ころがるはジャンプしても避けられなかったっていうのはね…でもこれはどう?ヒトカゲ、向かって来たイシツブテを尻尾で叩きつけて!」

『カゲエエエ!!』

「何…!?!」

『ラツシヤアアアアツツ?!』

ジャンプした後回転していたヒトカゲに迫ったイシツブテ。でもヒナはその様子に

焦ることなく指示をする。回転していたために強い勢いのまま尻尾がイシツブテに向かつて強打された。強打したイシツブテはそのまま地面へと激突し、ピチューが倒れた時のような状況が広がった。ただし予想していたこととは真逆で、あっけなく終わってしまったイシツブテの戦いに周りにいる皆がその様子を見て驚愕している。

ヒナはただ反撃をすることだけを考えていたのだ。イシツブテは転がっていき強い威力のある攻撃をしようとしたけれど避けたヒトカゲを追うためにジャンプをした。そのため勢いは多少弱まり、空中の高い場所にジャンプしていたヒトカゲにぶつかろうとしていた時はほとんど威力はない状態だった。それでもジムリーダーのポケモンだからこそ通常のポケモンより強い威力はあったけれど、ヒトカゲにとっては兄のポケモンたちによる強いあいあたりよりマシだと感じていたのだ。ピチューの時は避けるのに必死であり大きくジャンプすることができず、低空で避けていた。つまり、ジャンプ力はあまりなかったのだ。だからこそ強い威力のまま直撃してしまい戦闘不能になったのだろうか。ヒナは考えている。

ヒトカゲは、ピチューとは違って長い間に修行をしてきたからこそ、かくれんぼやおにごっこという伝説達や兄のポケモン達との死闘のような修行をしてきたからこそその力は強く、スピードも倍以上あった。だからヒトカゲは回転してさらに威力を強めたまま、やって来たイシツブテを回転した反動で叩き落とし、カウンターのよう

面へと激突させることができた。

土煙がまたバトル場に舞う。そして見えてきたのはイシツブテが倒れているという状況だった。

「っ…イシツブテ戦闘不能！ヒトカゲの勝ち！」

「ありがとうヒトカゲ！」

『カゲカゲ！』

「…ただのたたきつけるというポケモンの技ではなく、状況を判断して行った力…か…」
「ジロウ」

「分かっている。タケシ兄ちゃんの言うとおりだ…幼いからと油断していたよ。これから
は挑戦者として、ちゃんと本気出して戦おう…ハガネール!!」

『イワアアアアア!!』

状況を判断して反撃してきたヒナとヒトカゲにジロウは幼いからという認識を止め
たようだった。たとえサトシの妹だとしてもまだまだ幼いヒナにトレーナーとしての
力はないと考えていたのだ。でもその考えは違っていた。ただポケモンの技で攻撃し
てくるのではなく、身体を使った攻撃をしてきた。ポケモンの技でなくてもバトルはで

きるといふサトシの行動と似たように、予想外なやり方で勝利を手にしたのだ。だからこそジロウは本気で戦おうと考えていた。そしてその考えからボールに出したハガネールもジロウの感情を感じ取ってやる気を出した鳴き声を上げる。大きな身体の本ガネールはヒトカゲと比べてとても迫力があつた。ハガネールは火に弱いタイプだ。だがジロウはただひたすらハガネールで全力を出して戦いたいと考えていた。岩タイプに弱いピチューやヒトカゲで全力で向かつて来たからこそ：ジロウも同じように戦いたいと思つたのだつた。

タケシはそれを見て少しだけ苦笑していた。普通だつたらここで火に強く、頑丈なポケモンをジロウが出していただろうと考えていたからだ。でも予想とは違つてジロウはハガネールを出してきた。それはヒナたちのバトルを見たからこそ：ある意味彼女たちのバトルスタイルに影響が出て火に弱くても戦ってもらいたいと感じたのだろうと思つていた。

そしてそんな迫力のあるハガネールにヒトカゲは怯えることなく睨みつけ、攻撃してきたらすぐに避けようと体勢を整えていた。

そしてタケシの試合開始の合図を両者とも待つ。どう戦うのか、どう勝利していかと考えながらも。

「…ではこれより、ヒトカゲ対ハガネールの試合を開始する…試合開始!」

「ハガネール、りゆうのいぶき!」

『イワアアア!!』

「ヒトカゲ、ダブルひのこ!」

『カゲエエエ!!!』

ハガネールのりゆうのいぶきとヒトカゲのひのこが試合開始とともに衝突する。ひのこの威力はかえんほうしゃよりも劣るが強く、りゆうのいぶきとなんとか拮抗していた。そしてハガネールとヒトカゲの放った技は衝突したことによって爆発し、大きな黒い煙を巻き起こす。爆発によって大きな風も起きたが、ヒトカゲとヒナはただ前を見てハガネールの攻撃に当たらないように注意していた。

「ハガネール、アイアンテール!」

『イワアアア!!』

「じつと見て…左に避けてからもう一度ひのこ!」

『カゲエエ!』

『イワアアア!?!』

「大丈夫かハガネール!…よしヒトカゲに向かってしめつける!」

『イワアアアアア!!!』

「避けてヒトカゲ！」

『カゲエ…!?!』

「ヒトカゲ…!!」

迫力のあるハガネールがヒトカゲに勢いよくやってきて、力強いアイアンテールが放たれる。その威力はまるでポケモンの攻撃にある【じしん】のように地面を揺らすほどの力強い威力のあるものだった。そしてそんな普通のポケモンから見たらすぐに逃げそうなハガネールの迫力を恐れず、ヒトカゲはじつと前だけを見てヒナの指示を聞き、ハガネールの攻撃を左にジャンプして避けた。そしてジャンプしたままハガネールに向かつてひのこを放つ。

ひのこに直撃したハガネールは大きく身体を反らせて叫び声をあげた。鋼タイプなハガネールだからこそヒトカゲのひのこは効果抜群だったのだ。でも倒れることなくヒトカゲを睨みつけ、ジロウの指示に従って尻尾を巻きつけてつよくしめつけた。避けようとしたヒトカゲだったが、アイアンテールを避けてジャンプしていたために空中で避けられることなく、そのままヒトカゲはハガネールに締めつけられた。

苦しそうな声を上げるヒトカゲに、ヒナはただ拳を握りしめ、前を向いて大きな声で叫んだ。

「っ…頑張ってヒトカゲ！もう一度ハガネールに向かつて《猛火の炎》!!！」

『カゲ……カゲエエエエ!!』

『イワアアアアアア!!』

「ハガネールッ!…しめつけるを解除して離れろ!もう一度りゅうのいぶき!!」

『ツツ!!』

「逃がしちゃ駄目よヒトカゲ!もう一度ひのこ!」

『カゲエエエエ!!』

しめつけられたままのヒトカゲが、ハガネールの顔に向かって力強い大きな炎を放つ。締め付けていたために直撃したハガネールは悲鳴を上げていた。ジロウはその声を聞いてすぐにヒトカゲから離れ、りゅうのいぶきで攻撃するように言うが、逃げようとするハガネールを追ったヒトカゲはヒナの指示を聞いてひのこを放った。その大きな炎によってハガネールはまた悲鳴を上げ…そしてその大きな身体が地面に倒れ込んだ。攻撃することなく、あっけなく倒れてしまったのだ。いや、あっけないと感じているのはバトルが終わったからこそだろう。実際にはヒトカゲの方も大きなダメージを負っていた。ハガネールと同じく…ハガネールの強い威力のある技を受けてしまったからこそ倒れそうになっていたのだ。

でもそれを踏ん張り、何度も直撃した炎の攻撃だったからこそ…ハガネールにとって

弱点だった炎だからこそできた勝利だと、ヒナは感じていた。

「…ハガネール戦闘不能。ヒトカゲの勝利！よって勝者、挑戦者ヒナ！」

「やった…やった!!ヒトカゲやったよ！」

『カゲエ！』

『…ピッチュ』

「ピチュューもほら頑張った！ありがとうヒトカゲにピチュュー！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「…ヒナちゃん。よく頑張ったね…勝者の証であるグレーバッチだ」

「ありがとうございますジロウさん！」

『カゲ！』

『ピチュ！』

「あ、えつとこんな時は…グレーバッチ、ゲットだぜ？」

『カゲカゲ!』

『ピチュピツチュ!』

すぐに負けてしまったために落ち込んでいたピチューだったが、ヒナとヒトカゲの励ましによつて元氣を取り戻し、すぐに勝利したことを喜ぶ。そしてジロウがハガネールをボールに戻し、バツチを持ってヒナに渡してきた。その証であるグレーバツチは、あの意味ジムリーダーに勝った印であり、ヒトカゲとヒナ…そしてピチューの絆の強さの証明にもなった。

ヒナは兄が旅してきたとき、よくジムリーダーに勝利してバツチを貰っていた時に言うセリフを思い出してそれを声に出して言う。そしてその言葉にヒトカゲとピチュウも兄のピカチュウのように一緒になつて声を出して喜び合つた。その様子を微笑ましそうに見ていたタケシたちであつたが、タケシが一度真剣そうな表情をしてからヒナに近づく。

「ヒナちゃん…君はこれからどうするんだ?」

「え…えつと。これからカスミさんのいるハナダジムに行こうと思つてます」

『カゲ!』

『ピチュ!』

「そうか…なら俺もハナダシテイまで一緒に行こう！」

「え…でもタケシさんは確かポケモンドクターを目指しているはずですよ？忙しいはずなのに…私たちの旅に同行しなくても…」

「大丈夫！これから俺の行く場所もハナダシテイだ…それにヒナちゃん達をそのまま放っておくだなんてことできないからな」

「タケシ兄ちゃん料理は美味いから。一緒に旅してもらった方が安心だよ」

「タケシさん…ジロウさん…ありがとうございます！」

タケシはヒナたちと一緒に旅をするということを決心したようだった。タケシは頷いてくれたことに安心していた。タケシがハナダシテイに用があるということをお口にヒナ達と一緒に旅ができる。その事実にはタケシを含めて皆が安心したのだ。

それは、ヒナ達だけで旅をするということが心配だったから…そして森の中で出会った時に見た栄養バーと時のみだけという食事の内容が酷かったからこそだろう…。たとえサトシが伝説たちに見守っておいてくれという話をしていても、幼いヒナたちを放っておくことはタケシたちにはできなかったのだ。

ジロウもタケシたちの様子を見て、心配になつて一緒に行こうかと思っていたが、二ビジムのジムリーダーとしてやらなければいけない仕事があるため旅に同行することはできないという考えもあつた。少しだけ残念に感じていたが、タケシがいるなら大丈

夫だろうと言う安心感もあったのだった。

「…ああそうだ。サトシに連絡しなくちゃだな」

小さな声で言った言葉は喜んでいるヒナ達には届かない。サトシに言わなければいけないのは、子供たちとの勝負の条件と、ニビジムのジムに勝利したということ。そしてこれから一緒にハナダシティに行くということだった。

おそらくサトシはジムリーダーに勝利したことに喜んでいいのか子供たちとの理不尽な勝負に怒っていいのか微妙そうな表情を浮かべるだろうとタケシは長年一緒に旅をしてきたからこそ分かる予測をして、小さく笑みを浮かべたのだった。

.....

「…あ、そうだ。ヒナちゃん！これあげるわ！」

「はい！」

「えっとこれって…帽子？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

タケシの妹達が出発しようとしていたヒナたちを連れて部屋に戻って、ある帽子をヒナに渡した。その帽子は赤い模様が特徴の白い帽子だった。その帽子を渡した妹であるヨモコ達が発みを浮かべてヒナに向かって口を開く。

「旅をするならサトシさんみたいに帽子をかぶったらどうかなって思ったの。それにこれ絶対にヒナちゃんに似合いそうだし…旅の饞別としてもらって行って!!」

「そんな…悪いですよ…!」

『カゲ…』

『ピチュピチュ!』

「大丈夫よ。この帽子誰も使ったことないし…ヒナちゃんに似合うと思うから使ってほしいの!」

「そ…う…ですか？」

「そうよ!」

「ばぶう!」

「私たちはヒナちゃんにあげたいって思ってるの！だから遠慮しないでもらって!!」

ヨモコ達はニビジムで圧倒的強さを見せたサトシさんのように戦おうとするヒナにつけてほしいと心底思っていたのだ。それはバッチを手にしたことを祝うためでもあり、あと2つのジムに勝ってほしいという願いを込めて渡したかったのだ。ヒナは貰えないと言うのだけれど、ヨモコ達は無理やり頭にかぶらせて似合うから貰ってと言っただけで済ませないようにした。

ヒナは少し戸惑っていたけれど、そのヨモコ達の好意に笑顔で頷き、ありがとうと笑みを浮かべたのだった。

第一百八十二話～兄は小さな嫉妬をスルーした～

こんにちは兄のサトシです。タケシからコフーライの時より前に連絡があり、妹がジム戦をしたということやこれからハナダジムに行くということ…そして何があったのかを話してくれました。正直言つて早くカントー地方に戻つてそのガキ…子供たちいろいろな世の中の怖さを教えてやりたいと思いましたが自制止し、ヒナのやりたいとおりにさせてやろうと思いました。

そして今、カロス地方を旅している俺たちは、2個めのバッチをゲットするためにシヨウヨウシテイへ目指している途中になる。

森の中を歩いていた時に、ある女性からバトルの申し出があつて俺たちはそれを受けようと笑みを浮かべた。

「目と目が合ったらポケモンバトル…それがトレーナーのルールよ！」

「ええ…分かってますよ！」

その目の前にいる女性の言葉にセレナが首を傾けて疑問に感じているらしい。トレーナー同士で目と目があったらポケモンバトルになるのだろうかと言いたいのだろう。それについてはシトロロンが説明しているため、俺はバトルに集中することにした。

「出てらっしゃい…ニンフィア！」

「…へえ。始めて見るポケモンだな…！」

『ピイカー！』

そのポケモンはおそらくカロス地方でのポケモンなのだろう。何だかエーフィに似ているような気がして…図鑑を取り出してその説明を見る。やはりイーブイの進化形らしい。…もしかしたらカロス地方でしか進化できないのか…それともカロス地方の独特な育て方によって進化しやすいのか…少しだけ興味を持った。まあそれについてはシゲル等の誰かが研究することだろうし…とりあえず今度シゲルに電話してイーブイの進化形の特徴についての話をしてみようかと思う。シゲルなら興味持った研究は徹底的にやるだろうし…。

そしてシトロロンがそのニンフィアを見て、カロス地方で発見されたフェアリータイプにもなると説明してくれたため、俺はやる気が高まる。

「新しい地方での新しいポケモン…か。やる気が高まるってもんだ！ケロマツ、君に決めた！」

『ケロケロ！』

「あ、試合をする前にちよつといいかしら？」

「なんですか？」

シトロンが試合の審判を引き受けてくれて、このままバトルになるかと思っていた。だが女性…いや、プルミエさんは俺たちを見て手を上げて試合開始する前に口を開いて言う。

「一っだけ約束してほしいの。私がこのバトルに勝ったら、付き合ってもらおうよ！」

「……はあ。まあ良いですけど…でも俺たちは負けませんよ…！」

「ヘツ付き合う!? いいのサトシ!!? …いやでも負けたらなんだし…サトシが負けることないもの…」

プルミエさんの言う付き合ってもらおうとは、おそらく場所などのことを言っているのだろう。…というかセレナの反応を見て呆れてしまった。俺みたいな子供にプルミエ

さんがいきなり恋愛的な意味で付き合うとかありえないことなのだから。どこかに一緒に来てもらおうわよと言った方が的確なんだが…一番重要な言葉が抜けていてセレナが俺たちの後ろの方で思いつきり動揺している。まあそれについてはあまり気にしないでおう。

「ではこれより、ケロマツ対ニンフィアのバトルを開始させてもらいます…試合開始！」

「先手必勝！ケロマツ、あわ！」

『ケロオオオ！』

「ニンフィア、ようせいのかぜよ！」

『フィア！』

『ケロ…！』

「ケロマツ後ろに向かってあわだ！」

『ケロ…ケロオオオ！』

ニンフィアのようせいのかぜによつて強い突風が巻き起こり、ケロマツが吹き飛ばされてしまう。その勢いは強く後ろにあつた木にぶつかりそうになつていたが、俺がすぐに指示をしたことによつて気づき、身体を捻つてあわで勢いを殺して衝突するのを防いだ。

だがニンファイアの攻撃はまだまだ続く。そのためケロマツと俺はニンファイアの動きを注視して攻撃を防いだ。

「ニンファイア、ムーンフォース！」

『ファイアア!!』

「ケロマツ、大きくジャンプして躲せ！」

『ケロオ!』

ケロマツがニンファイアの攻撃を避けるために動く。そして避けたことによつて木に生つていたきのみが落ちてきた。そのきのみをケロマツが独断でニンファイアに向かって蹴りあげる。そしてそれらをニンファイアがすべて避けたために隙ができたと判断し、俺は大きく口を開けて叫ぶ。

「ケロマツ、はどうだん型みずのはどう！」

『ケロオオオ!!』

「嘘っ!？」

『ファイアア!?!』

ニンファイアははどうだんのように大きくて強い威力をもったみずのはどうに直撃してしまった。このみずのはどうはケロマツと共に修行して身につけたやり方だ。とりあえずイツシユ地方で何度も見たはどうだんのようにして…いつかは爆発できるぐら

いの威力になればいいかなと思っっている。

ニンフィアは足を震えさせ、今にも戦闘不能になりそうな様子だった。プルミエさんが冷や汗をかき、最後の手段だと叫ぶ。

「こうなったら…ニンフィア、メロメロ！」

『フィア！』

「おっとそれはやばいか…ケロマツ、あわで全部弾き飛ばせ！」

『ケロオ！』

メロメロによるハートのような模様をした技が放たれる。メロメロについてはやはり直撃してメロメロ状態になってしまうと負けてしまう危険性があるため、大量のあわですべて弾き飛ばした。そしてそのメロメロとあわが衝突する衝撃によってニンフィアも吹き飛ばされる。

「ニンフィア！」

『フィ…フィア……』

「ニンフィア戦闘不能…ケロマツの勝ち！」

「よしやったなケロマツ！」

『ケロケロ！』

ケロマツが俺の肩に乗ってきたため、俺はそのケロマツに向かって手を上げてハイ

タッチする。そしてニンフィアはシトロンによつて回復され、プルミエさん達と一緒に俺たちの近くにやつて来た。

「強いねサトシ君」

『フィアア』

「いやそんなことないです…それよりも、もしも負けたら【どこに】付き合ってもらおうとしてたんですか？」

「実はね——」

「へ?!どこに…?!」

「セレナどうしたの？」

『デネデネ?』

「う、ううんなんでもない…」

「そう…?」

プルミエさんの話を聞いてなるほど思つてしまった。プルミエさんは幼稚園の先生で、生徒たちにポケモンと触れ合つてほしいそうなのだ。そして俺たちが連れているポケモンを見て、是非とも来てほしいと思つたらしい。そしてバトルして負けたら付き合おうと約束してもらつたということだった。

俺たちは顔を見合わせてそういうことなら行きますよと笑顔で了承した。ケロマツ

はニンフィアにありがとうと言う鳴き声を上げて頬をリボンのような部分で撫でられていた。それにケロマツが照れているのに微笑ましく思いながらも、俺たちは幼稚園へと向かった。

ちなみにその話をきいたセレナが胸を押さえて安堵していたようだった。…俺誰とも恋愛の意味で付き合うつもりはねえってセレナに何度言ったらわかるんだか……。

.....

「プルミエ先生エ！このポケモンは何ていうの？」

「あ、このポケモンはね……」

「ハリマロンの毛つとげとげしてるのかな……？」

「実際に触ってみたらわかるよ！あ、でも優しく触ってあげてくださいね」

『リイマ！』

幼稚園はかなり大騒ぎとなっていた。ピカチュウやケロマツ以外にもシトロンたちが出したポケモンを見て興味津々に見たり撫でたり……まあポケモンに触れ合うという状況になっていたのだ。もちろんピカチュウたちは子供たちに怪我を負わせようとせず、

ちゃんと大人しくしている。

「…ねえサトシ。やっぱり恋愛はしたくない？」

「……………」

「前世の記憶があるから駄目なの？ 私は…私は、サトシの隣に立ちたいから…好きじゃなくても一緒に居たい…！」

「……セレナ」

セレナが俺の近くに来て戸惑いながらも口を開いて言う。その声はどこかいつもとは違って悲しそうだと感じた。おそらく先程のバトルの一件で何かを感じたのだろうと思った。でも俺はセレナの問いに答えられるわけではない。俺の隣に立つというのは、ピカチュウたちでいいのだから。セレナはセレナの道を歩んでほしいとそう願っている。恋愛じゃなくても俺の隣に立ちたいと言うのは無理なことだ。俺はそういうのはいらない。ただピカチュウたちと一緒に居られればそれでいい。

それにセレナは俺と添い遂げたいとかよく分からないことを言っただけ仲間になったけれど、ほとんどそういう意味で俺と関わりとうとはしなかった。シトロンやユリーカとも仲が良くなり、フォッコとバトルできる機会があれば積極的にバトルをしようとしてい

た。ジムに挑戦する気はないみたいだけれど、旅を通して夢を見つければよいと真剣に考えていたのだ。だからこそ、一人で生きていくと言う力はあるのだ。前へ進むという力が。セレナの心に俺のことさえいなければいいと思う。俺はセレナの声に応える気はないのだから。一生傍にすることはできないのだから。

だから俺は口を開いて言う。

「…俺は、自分の夢を目指して旅をしている。セレナ、お前のことは旅仲間として…友達として良い奴だと思ってるよ。でも無理やり俺の隣に立たなくていい。一生傍にいない方がいい。セレナはセレナの道を歩んでほしいんだ」

「そんな…私は、自分でちゃんと考えて…そしてサトシと一緒に居たいって思ってるのに」

「それは昔の話だろ？昔の衝撃が忘れられなくて、他のことを考えられなくなってるんだ。いつかは忘れること…自分のことは自分で決めて生きていかないと駄目だ」

「できない…私はもうサトシ以外を見られない…私の世界には…サトシしかいないの…!!忘れることなんて絶対にできない…だから、傍にいさせて…嫌いに…ならないで!」

「だからそれは——」

「じゃあー…勝負しよう」

セレナは俺に向かって真剣そうな表情で見てきた。その目には燃え上がるような炎が見えた気がして、一瞬だけ言葉が詰まり、セレナから目を逸らす。でもセレナはそんな俺が嫌なのかいきなり両手で俺の頬を触って無理やりこちらに視線を合わせてきた。いつもなら無理やりということはしないし、強引な方法を使わないセレナにとつて珍しいと思えるやり方だと感じた。

「私は絶対に、カロス地方の旅が終わるまでに私がサトシの隣に立つてもいいと思えるようになる！…でもなれなかったら、サトシのことを諦めるわ…だからその勝負、受けてほしいのー！」

「……………ああ、分かった。お前が負けたら、俺のことは全部忘れろよ」

「うん！ありがとうサトシ…大好きよ！」

「はいはい…ほら向こうでフォッコが呼んでるからさっさと離れろ」

「…分かってる。絶対に負ける気はないからね。サトシ！」

セレナは、賭けをしてこれからのことを決めようとしていた。つまり、セレナとの勝

負を受ければ俺のことを諦めるといいたいのだろう。カロス地方の旅が終わったとしても、俺は自信を持ってセレナに俺のことを諦めてくれと言えると思っっている。だからこそ、勝負を受けた。諦めさせるために。でもセレナはそうじゃなかったのだろう…安心したように笑みを浮かべて、ありがとうサトシ…私絶対に頑張るからね！といって名残惜しそうな表情を浮かべながらもフォッコ達のいる所へと走って行った。セレナの手に触れられた熱が残る頬をかきながらため息をついて空を見上げた。

「負ける気はねえよ、絶対に」

———その後、ポケモンが苦手という少年がいて、その子にポケモンの良さを知ってもらうために皆で奮闘したのは言うまでもないだろう。

第一百八十三話く妹達はおつきみやまを登るく

こんにちは妹のヒナです。無事にニビシティから出発し、タケシさんと共におつきみやまにいます。その間に何度か野宿したのですが、久しぶりに栄養バー以外の料理を食べたと感じました。：というか栄養バーって料理じやないよねタケシさんの料理の方が【料理】って言うるよねとよく分からない複雑な感情を心の中で感じながらも、何度かタケシさんの作る料理を食べておかわりした。ルカリオの料理も美味しいけれど、タケシさんの料理もまた違った意味で美味しいと感じた。ハナダシティまでの間の旅だけれど、またいつかタケシさんにお礼を言わなければと思う。

そして私たちは何度目かの野宿をし終えた後の清々しい朝を迎えながら歩いていった。

——— そういえばおつきみやまで歩いていてる私達の目標はハナダシティのジムなんです…：… なんだか様子がおかしいような…：

『ピイ…！』

『ピツピイ…！』

「ど、どうしたのキミたち？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

「何かあったみたいだな…：

ピイやピツピが私たちの目の前にやってきて、何やら急いでどこかへ来てほしいと服を引っ張り私達より前に歩いていこうとする。普通ピイやピツピは人間たちの目の前に現れることはないけれど…：… ああ、何度もこのおつきみやまに来ていたタケシさんが一緒だから警戒することなく姿を見せたのかなと思つた。でもそれよりもピイやピツピ達の慌てた様子が気になり、私たちはお互いに顔を見合わせて、ピイたちに案内されながら走りだした。

.....

「…これは?!」

「何で…酷い…!」

『カゲ…!』

『ピツチュ…!』

『ピ…イ…』

『ピツ…ピイ…』

「ツ…すぐに手当てを開始しよう…ヒナちゃん達も手伝ってくれ!」

「あ…はい!」

『カゲ!』

『ピツチュ!』

私たちはピイとピツピの後を追って走り出し：そして見えてきたのはピイやピツピ：そしてピクシーたちが傷だらけになって倒れている光景だった。その光景は酷く悲惨で：思わず目を覆うぐらいの酷い傷だらけなポケモンたちが倒れているという状況だった。

タケシさんが急いでピイとピツピ、ピクシーたちの怪我を治そうとしていて：私たちも急いでタケシさんの手伝いを始めた。水が必要だと分かると先程案内してくれた怪我をしていないピイたちに案内してもらって水をとってきたり、オレンのみが大量に必要なだと分かるとウソツキーたちを出したタケシさんに一緒に探してきてくれないかと頼まれ、オレンのみを収穫しに行くことになってたくさん採って戻ったりした。

そうしていくうちに夜になったのだけれど、ピイやピツピやピクシーたちはまだ元気を取り戻していなかった。でも十分眠って朝になればすぐに良くなるとタケシさんが言ってくれたため、これで大丈夫だと私たちは安堵した。

「でもどうしてピイたちが怪我をしたんだろう…？」

『カゲ？』

『ピチュウ…？』

「おそらくポケモンにやられたんだろうな。ピイたちの怪我はどれもポケモンの技に

よってできたものだ」

「それって……」

『……………カゲエ』

『……………ピチュ』

嫌な予感がした。パイたちはポケモンの技に当たって怪我を負ったということと、その重傷者が大勢いたことに驚いたからだ。ポケモンと言っても……ここまで酷く暴れるのはおつきみやまにはいないと感じていたのだろう。タケシさんが険しい表情で考え事をしていて……私たちも何があつたんだろうと考えていた。

……………

『パイ……!』

『ピツパイ!』

『ピツクシイ!』

「あ、良かった……!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「怪我は回復していて体力も問題はなし…っと。これで大丈夫だろうな!」

ピィやピツピ、そしてピクシーたちは朝の日差しとともに身体を跳ねさせて元気よく私たちに挨拶してくれた。その様子を見て私たちは笑みを浮かべ、良かったと安堵する。タケシさんが栄養満点の朝食を作り、ピィたちの分も作ってくれたために騒がしいけれど微笑ましい食事になるだろうと…そう思っていた。

『ガルウウウア!!!』

「え…バンギラス?!」

『カゲ!?!』

『ピチュ?』

「何でこんなところに…いやそれよりもバンギラスの首に何かついてる…!」

『ピ…ピィ…』

『…ピツピィ…』

おつきみやまでは絶対に見かけないはずのバンギラスが現れ、私たちは驚いた。タケシさんはバンギラスがいたことに驚いたが、それよりも首元に何かが巻き付いているのを見つけてそれに険しい表情を浮かべている。そしてグレッグルを出して指示を出そうとする。私たちはピイやピツピ、ピクシーたちを後ろに隠してヒトカゲとピチューに攻撃の余波をすべて防ぐようにしてもらおう。

「グレッグル！あの首元に向かってかわらわり！」

『ケヒヒッ！』

『ガルウウウウアアアア
!!!!!!』

「うわっ…ヒトカゲ、ひのこ！ピチューは10まんボルトで防いで！」

『カゲカゲ！』

『ピツチュウ！』

『ピイ…！』

『ピツピイ！』

『ピイクシ…!』

グレッグルが首元を狙ってバンギラスに近づくが、バンギラスが暴れ：いきなりグレッグルに向かつてはかいこうせんを放つ。それを避けたグレッグルだったが、はかいこうせんは周りを巻き込んだの破壊力をもっていた。バンギラスの放つはかいこうせんがグレッグルが躲したことよって、私たちに向かってきたためにヒトカゲとピチューに攻撃を指示する。それを聞いたピイやピツピ、ピクシーたちが一緒になって攻撃してくれたことよって、はかいこうせんを防ぐことができた。だがまだバンギラスは暴れている。

またそれを防ごうとグレッグルに指示を出そうとしたタケシさんだったが、その横から大きな炎がやってきたためにすぐに躲す。

「誰だ…!」

『…ケツ』

「え、炎…つてことはまたポケモン…?」

『カゲ?』

『ピチュー?』

『ピイ…』

『ピッピイ…』

『ピイクシイ…』

「…ハッ！悪いがお前らには要はねえんだよ！さっさとそのピイたちをよこせ…！」

『ガルウウアアアア！』

『グルウウアアアア！！！！』

「人間…!?…あれ、ヘルガーの首元にもバンギラスと同じものがある…！」

「お前だったのか！バンギラスやヘルガーを無理やり操っているのは…！」

「何だ…ばれてんのか…じゃあお前らも潰しとかなくちやだな！」

『ガルウウアアアアアア！！』

『グルウウアアアアア！！』

そして見たのは、悪巧みをしようとしている…とても悪い笑みを浮かばせていた人間だった。タケシさんが険しい表情でその人間に向かって怒鳴り、私たちもその人間に攻撃を仕掛けられてもすぐに防げるように体勢を整える。だが、人間…悪党はまずタケシさんを狙って攻撃してきた。グレッグがそれに反応してどくづきで防ごうと動く。

そしてタケシさんが取り出したボールを投げてすぐに指示を出そうと口を開いた。

「出てきてくれウソツキー……グレッグル、もう一度首元を狙えるか!? ウソツキーもグレッグルの援護だ!」

『ケヒヒ!』

『ウソツキー!』

『ガルウウアアア…!?』

『グルウウアアア…!?』

バンギラスとヘルガーの首元を狙うためにグレッグルとウソツキーが近づく。バンギラスがまたはかいこうせんとヘルガーのかえんほうしやでグレッグル達を狙ってきしたが、ウソツキーのアームハンマーですべて叩き落とし、グレッグルがかわらわりで首元の装置を叩き壊す。その強い衝撃により支配から解放されたバンギラスとヘルガーが気絶し、戦闘不能にすることができた。私たちは何とか操った装置を壊したことに安堵し、悪党を睨みつける。

だが、それを見た悪党は大きく笑った。

「何を笑ってるんだ…!」

「ハハハ!! バンギラスやヘルガー以外のポケモンを操ってないと言う根拠はあったか
!」

「何…!?!」

「ちよ…: ピイたちの後ろからポケモン…!?!」

『ピイ!?!』

『ピツピイ!?!』

『ピイクシイ…!?!』

「危ない…!」

『カゲ!』

『ピチュウ!』

「ヒナちゃん!?!」

ピイやピツピ、そしてピクシーの後ろの地面からサンドパンが姿を現したために私たちは驚愕する。その首にはやはりバンギラスたちと同じようなものがあり、操られているのだと分かった。だがピイたちに向かつてきりさくをしようとしてきたために私たちは急いでピイたちの方へと向かい、ヒトカゲとピチュウの技でその攻撃を防ごうとした。だがその攻撃はしなくても良かったみたいだ。

大きなはどうだんがサンドパンに襲いかかり、その衝撃で首元にあつた装置が壊れた。はどうだんということはもしかしてルカリオ達^{ルカリオ}が来ているのかと思つたのだけれど、周りを見てもおらず、波動でここまで来たのかなと焦つたのに違つているようで……じゃあ何ではどうだんがいきなり来たのだろうと疑問に思つた。だがそうしているうちにタケシさんたちは悪党を捕まえようとしていた。

「クツ……ちくしょう！ 覚えてろよ!!」

「待て！」

『ケツ……!』

『ウソツキイ……!』

——結局、その悪党は山でも使えるというバイクに乗つて逃げていつてしまい……タケシさん達は悪党を逃がしたことに心底悔しがつていた。だがすぐに私たちの方へとやってきて、怪我はないのか確認してくる。

「怪我はないか!?!」

「う、うん……大丈夫」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

「そうか、良かった。…そういうえげさっきのはどうだんは一体…」

「うんそれ…私たちも気になってたの…」

『カゲ…』

『ピチュ…』

『…私が攻撃しました』

「ミュウツー!?!…にしては声が違うような…」

「あ、もしかしてイツシユ地方で会ったミュウツー!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『その通りです…お久しぶりですね』

「…ヒナちゃん…知っているのか?」

「うん。えっと…実はね——」

タケシさんに紹介したミュウツーについてイツシユ地方の何処であつたのか説明し、マサラタウンに来てほしいと兄たちと話していたことも言う。その話を聞いたタケシ

さんは納得し、ミュウツーに向かって笑みを浮かべた。

「じゃあミュウツーは、マサラタウンに向かっていく途中だったということか？」

『…ええ、そのつもりでしたが…すこし予定を変えようかと思ってます』

「どういうこと？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

『あなたたちについて行きます。特に危なっかしいあなたを見ていると放つてはおけま

せんからね』

「へ…いいの!？」

『カゲカ!？』

『ピチュ!？』

「それはありがたい！俺はハナダシティまでしか一緒にいることはできないからな…だからミュウツーがついて来てくれると助かるよ！」

『…いえ、勘違いしないでほしい…ただあの同族を見ていると少々その人間に興味を持つのは当然というだけですよ』

「ああ…なるほどな」

「えっとどういうこと？」

『カゲエ？』

『ピチュ？』

ミュウツーはちらりと後ろの方を見てから私たちに向かつて言う。その言葉が分かっているのはタケシさんだけらしく…私たちはどういふことなのかと首を傾けた。だがそれを説明する気はないのかタケシさんが誤魔化すように笑みを浮かべて言う。

「いや気にしなくてもいいよヒナちゃん。…そうだ、幸いバンギラスたちの攻撃は俺たちの朝食に当たらなかつたし…バンギラスたちの怪我を見てからミュウツーも一緒に食事でもしないか？」

『私が…？…まあいいでしょう。バンギラスたちの様子も気になりますから』
「よし決まりだ！じゃあヒナちゃん達も一緒に手当てを手伝ってくれるか？」

「了解です！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

『ピイ…！』

『ピツピイ！』

『ピイクシイ!』

「ピイたちも手伝ってくれるのか…ありがとう!」

「ありがとうねピイたち!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

———こうして、イツシユ地方にいたミュウツーが一緒に旅に同行することになった。

これから何が起きるのか分からないし…バッチも手に入るかどうか分からないけれど…でも絶対に頑張っていこう。

…でもあの悪党を捕まえることができなかつたのが残念だと…またピイたちに対して襲つて来るかもしれないと心配になつたけれど、タケシさん達がその後大丈夫だつて言ってくれたから気にしなくてもいいのかな…。

第百八十四話～兄達は野宿した～

こんにちは兄のサトシです。シヨウヨウシティに向かって歩いていますがなかなかたどり着きません。

そして歩いているうちに夕方になり、ポケモンセンターも見えてこないため、俺たちはここで野宿をすることになった。カロス地方でシトロンたちと野宿するのは初めてで、トラブルが起きなければいいと思うが…まあ無理か…。

「そろそろ日が暮れますし…ここらへんで野宿にしませんか？」

「ああそうだな。川も近くにあるし…この場所にテントでも張るか！」

『ピッカー！』

「あ、じゃあ私は机と椅子の準備するね！ユリーカも手伝ってくれる？」
「うん任せて！」

『デネデネ！』

野宿についてはセレナたちが張り切って準備を進めていった。テントはシトロロンが持っているものを借りて、寝袋はいつも使っているものを出しシトロロンとユリーカが持っていたテントに入れてもらうことになった。

…そして食事についてはシトロロンが作ることになった。いつもポケモンセンターの食事しかしてないから料理ができるのか不安になったが、シトロロンは料理については自信があるようで笑みを浮かべていた。

そしてポケモンたちを出してポケモンフーズをそれぞれのタイプごとに出していく。ピカチュウとボールから出たケロマツ、そしてデデンネやホルビーと一緒にきのみを集めてくれた。それに礼を言っただけでシトロロンに料理の材料として使ってもらうことにする。

ポケモンセンターの料理は美味しいけれど、…さて、カロス地方のシトロロンが作る料理はどうかだと楽しみになった。

.....

「お、美味しいな！」

「そうね！凄いわシトロロン！お店にも出せそう！」

「いえいえ…料理は発明を作るのと同じで設計図から書くようにレシピを見て作りましたから！」

「お兄ちゃんの料理大好き！」

ポケモンたちがそれぞれ特性フーズを食べている頃、俺たちもシトロロンの作った料理を食べていく。料理の味はやはり美味しく、旅でまた美味しい料理が作れるやつが仲間になって良かったと心から思えたぐらいだ。

そして食べ終わった後、セレナが昨日ポケモンセンターで作ったというマカロンをデザートにしようと言ってきた。シトロロンが温かい紅茶を作って俺たちに分け、さあ食べようとなった時に中身は空っぽで…ハリマロンが隠れてすべて食べていることに気づいた。

「ああああ最後のマカロンがああ!!!」

「…あーあー…マカロン食べたかったな」

「ほらシトロロンもユリーカも気にしない気にしない！またポケモンセンターに着いたらちゃんと作るからね？」

「本当！ありがとうセレナ！」

「セレナの言うとおりで。シトロロンも気にすんなよ？」

「うう…はい……」

ハリマロンがお腹いっぱいになってすべて食べてしまったことにシトロロンは落ち込んでいた。…まあポケモンのやったことは全てトレーナーの責任になるからシトロロンもこれではいけないと思っただろう。でも最初に出会った時からハリマロンは食べることに執着しているみたいだし、マカロロンが好物のような感じみたいだから仕方ないと思う。ポケモンは全て性格が違うのだからハリマロンのように食べることが好きないポケモンもたくさんいる…まあでも勝手に食べてしまうという事情についてはシトロロンのトレーナーとしてのハリマロン育成に力を入れるべき問題だろう。それに俺たちの食べ物ならともかく、まったく知らない人から奪った食べ物を食べると言うことになったら俺もハリマロンの育成に手を貸すつもりではある。知らない人の食べ物を勝手に食べている時点でそれは犯罪に近いことになってしまふということと問題が大きくなるからだ。まあでもシトロロンはミアレシティのジムリーダーだし…俺が何か言わ

なくてもちゃんとやっていくと思っただからこそ今の時点で手を貸すつもりはなかった。

「…あ、そうだ！サトシ、ポケモンバトルをしませんか？」

「ポケモンバトル…まあ良いけど？」

シトロンがハリマロンの食べ過ぎて大きくなつたお腹を見て軽く運動した方がいいと言うこと、トレーナーとしての言うことを聞いて、食べ過ぎたからこうなつたんだぞと分らせるためにバトルしたいらしい。

まあそれならいかとケロマツを見た。ケロマツはお腹が膨らんでいるハリマロンとバトルするということが分かったのか、少しだけ苦笑しながらも頷いてくれた。ただしハリマロンはシトロンの言葉に嫌そうに表情を歪め、仕方がないかと重そうな身体をゆっくりと立ち上がらせた。

「…ええつと…ではハリマロン対ケロマツのバトルを開始する。バトル開始！」

「…よしケロマツ、あわだ！」

『ケロケロ！』

「躲せ！」

『リイ…リイマアアア!!?』

「…あれ？ハリマロン…いつもと違つて素早さがない？」

「食べ過ぎて動きが鈍くなつてるんだよ…見てあのお腹」

『デネエ…』

『ピイカ…』

ケロマツによるあわ攻撃は通常の速さであつたらハリマロンは躲せるはずだった。でもハリマロンは動こうとしたが全然動けず、そのままあわに直撃してしまう。ケロマツがそんなハリマロンを見て呆れた表情でため息をついた。普通のバトルだったらその素早さは致命的だろうと考えているらしい…まあ食べ過ぎる大食漢はマサラタウンにいる俺のポケモンにもいるから大丈夫だろう。…でもあいつ食べるのとは真逆で物凄く素早いんだよな…泳げるし…。その問題についてはシトロンによるハリマロンの育成にかかつていることだろうと思つた。

そしてシトロンが頑張れと応援しながらもハリマロンにたいあたりの攻撃を指示する。でもたいあたりしようど動くスピードは遅く、普通にケロマツが避けそうなのだ

が、あえて避けずに直前まで待つていた。そしてすぐにジャンプして俺の方を見る。このバトルを早く終わらせたいと言う感情が表情に表れていたからだ。俺は苦笑しつつも口を開いてケロマツに向かって指示をした。

「…ケロマツ、はたく！」

『ケロ！』

「避けてください！」

『リ…リイマアア!!!』

「えと…ハリマロン戦闘不能。よって勝者ケロマツ！」

「とりあえずお疲れケロマツ」

『ケロケロ…』

「うわあ…」

『デネエ…』

『ピイカ…』

「…うう…ジムリーダーとしてこの負け方は面目もありませんね」

『リ、リイマア…』

ハリマロンを回復させるためにオレンのみを食べさせた。シトロンはオレンのみを食べさせるよりもまず先にきずぐすりを使おうとしたんだが、ハリマロンがそれを拒否したために仕方なくきのみを使用した。でもこのままだと本当に肥えると思うんだが……シトロンはハリマロンに対して甘いと俺たちは苦笑する。

そしてユリーカがそんなシトロンの前にやってきて、今ならデデンネで勝てる！と張り切っているようだった。デデンネはたまにピカチュウに電気技を教えてもらったりしていたが、特にバトルに関する修行などはしてはいない。だからユリーカと合わせてまだまだ初心者もいいところなんだが……これで負けたらハリマロン凄く落ち込むんじゃないかとピカチュウたちを見る。ピカチュウたちは俺の隣でくつろぎながらもハリマロンたちのバトルを観戦していた。

「……これどうなると思う？」

『ピカピカ……』

『ケロオ……』

『ヤッコオ……』

「ああやっぱりそう思うか……」

『リイマアアア…!!』

「あつと…ハリマロン戦闘不能、よつて勝者デデンネ」

「ああこうなつたか…」

『ピイカツチュ…』

『ケロケロ…』

『ヤッコオ…』

デデンネのでんきショックを直撃してしまったハリマロンはそのまま起き上がるこ
とができず目を回してしまふ。これを見てシトロンがため息をつき、ユリーカとデデン
ネは勝利したことに喜び合っていた。

その後、シトロンがハリマロンのためのダイエット用の機械を作ると言つて徹夜する
らしく、先に寝ていてくれと俺たちに向かつて叫んでいた。嫌そうなハリマロンはとも
かく、シトロンはものすごくやる気があるようだ。俺たちは仕方がないとケロマツたち
をボールに戻し、テントへ向かった。

「あ…サトシ」

「ん？どうしたセレナ」

「あの…おやすみなさい」

「…おう、おやすみ」

セレナがユリーカと一緒に寝るテントに行こうとしたが俺の近くにやってきて挨拶をする。いつも言っている言葉だったが、セレナはどこかいつもとは違って…その声には俺は少しだけ戸惑うがすぐに口を開いておやすみという。するとセレナは満足したのかすぐにユリーカが眠るために準備しているであろうテントの中へ入っていった。

『ピカピ？』

「ああいや、なんでもない」

ピカチュウはもう寝るために俺用の寝袋をテントの中で出して待っていてくれたようだ。その行動にありがたうと言ってピカチュウの頭を撫でて、すぐにテントの中へ入り寝るために電気を消した。

.....

——物凄い騒音で目が覚めた俺たちはすぐにテントから外へ出る。すると見えてきたのはシトロロンがいつものように機械を発明して、実験しようとしたが失敗し爆発したという状況だった。服を着替え、テントを片づけてから、その機械の残骸を森の中でゴミにならぬように拾い上げて集める俺たちだったが、シトロロンが周りを見て何かに気づき焦ったように叫んだ。

「ハ、ハリマロンがいません!!」

「確かにいないな…いやもしかしたら爆発に驚いてどこかへ行つた可能性もあるか…？」

「きつと近くにいるはずよね…ハリマロン！」

「おーいハリマロン出ておいでよ！」

『デネデネ!』

『ピイカア!』

周りを探したが見つからず、テントを張っていた場所を中心に周りを探すことにした。でも草木をかき分けても、ハリマロンが入れそうな穴を覗き込んでも見つからな

い。かなり探したが見つからず、これは遠くにいる可能性が高いと分かってしまい、シトロンが落ち込んだらうにうめき声をあげた。

「ああ…僕のせいでしょうか…ハリマロンに無理やりバトルとかさせてしまったから…！」

「そうだったらあの時最初つからシトロンについてくることなんてなかっただろ？というかハリマロンの入っていたボールもシトロンが持っているんだし大丈夫だって」

『ピカピカ！』

「えっと…確かサトシが前に説明したことだっけ？トレーナーが嫌になったら自分のボールを壊して逃げるポケモンがいるってこと」

「ツタージャって言うんだよねー」

『デネー！』

「ああそうだけ。でもツタージャはそのトレーナーのことを認めればボールを壊そうとしない…だからハリマロンもただ道に迷っただけでちゃんとどこかにいるさ」

「…そう、ですね」

シトロンはハリマロンがいつも入っているボールを見て、考えるような…落ち込んでいるような表情になって俺たちの言葉に頷いた。もしも嫌ならばボールを叩き壊して

逃げればいいのだ。でもハリマロンはただ姿を見せないと言うだけなのだから、おそらくどこか迷っているのだろうと考える。それにハリマロンがシトロンを嫌うことなどありえないのだから大丈夫だと俺とピカチュウは自信を持って笑みを浮かべた。

.....

その後、俺たちが別れてハリマロンを探していたのだけれど、シトロンが妙に深刻そうな表情で戻ってきて、あのままでいいと諦めたようだった。その表情と声に俺たちはお互い顔を見てすぐに反論する。ハリマロンがシトロンから離れると直接言ったなら理解できるが、その様子だとまだシトロンには納得しきれない部分があつて、ただハリマロンに何かがあつたと分かつたからだ。

何があつたのか話を詳しく聞こうとすると大きな黒い煙と爆発音が聞こえ：そしてハリマロンの悲鳴が聞こえてきた。シトロンがすぐにハリマロンの声がした方へ走って行き、俺たちもその後を追う。

———そして見えてきたのはある家で老人たちがバトルしている様子だった。

1人はシトロンのハリマロンでバトルをしていて、もう1人はマフオクシーを出して勝

負していたのだ。マフオクシーはほのおタイプだと分かり、このままだとくさタイプであるハリマロンは不利になるだろうと感じた。でもシトロンは顔を俯け、何か悩んでいるように止めに入ろうとしない。

「何で止めようとしなんだシトロン！」

「ぼ、僕は…ハリマロンに嫌われてしまった僕じゃ…」

「そんなこと言ってる場合なのお兄ちゃん!!」

「シトロン！嫌われたからって諦めるの!?自分がそんなに悩んで…悔しそうに拳を握って止めに行きたいって思ってるのに勝手に嫌われたからって何もしないつもりなの!?好きならちゃんと行動して…今自分が一番やるべきことをしなさい!!」

「…セレナ…ですが僕は…」

「そんなこと言ってるいいのか?そろそろやばいみたいだぜ?」

「え…ツ!」

セレナが力強く説得しようとして力説する。でもシトロンはその言葉にまだ戸惑っているのか行動しようとしなない。ユリーカもそんなシトロンに焦り…俺はただその光景を見つめていた。シトロンがハリマロンの幸せのために手放すと言うのなら俺はそ

の顔を殴ろうかと思っただけで、でもハリマロンをマフオクシーから助けようと動こうとしたけれど迷っている様子を見て、このままでは時間の無駄だと言うことと、仕方がないと考えたため息をついてシトロンの一步を押そうと口を開く。

俺がシトロンに向かって言った言葉にマフオクシーとハリマロンの光景を見たシトロンが走りだし、ハリマロンをかえんほうしやから救う。突然現れたシトロンに驚く老人たちだったが、俺たちも出てきて説明した。すると納得したらしいハリマロンを戦わせていた老人はごめんさいねと謝っていて……シトロンとハリマロンは大丈夫だと言う。

——そしてその後、マフオクシーを出していた老人がわしの勝ちでいいな？と言っているのを見て、何か考えたのかシトロンに向かって叫ぶハリマロンにバトルがしたいんだと分かって、謝ってきた老人の代わりにバトルすることになった。

まあ結果的にはバトルしたことによって素早さを取り戻し、身体も軽くなつたみたいだから良かったんじゃないかと思う。シトロンがジムリーダーとしてちよつとだけ問題のあるハリマロンをこの後どう育てていくのか少しだけ興味を持ったものだ。

第百八十五話～妹はハナダシテイに着く～

「やっと…着いたあ!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「久々に来たが変わってないみたいだな!」

こんにちは妹のヒナです。ハナダシテイにようやくたどり着きました。おつきみやまで操っていたバンギラスたちが回復するのを待つて…ご飯を食べてから出発したのです。バンギラスたちについてはおつきみやまで受けた恩を返したいからおつきみやまに残りピイたちの面倒を見るとミュウツの通訳で知りました。とにかく密漁団などには気をつけてと言ってお別れをし…そしてハナダシテイにやって来たのです。

ハナダシティは以前来た時とは何も変わりなく、いつも通り平和だと感じました。ここからのジム戦に緊張しつつも、頑張ろうとヒトカゲ達と一緒に気合いを入れる。

そんな時にミュウツーがサイコキネシスで宙に浮いてどこかへ行こうとしていた。

『…では私はしばらく人がいない場所で待っていますね』

「え、ミュウツーどこに行くの？」

『ええ、私はこれでも人に造られたポケモン…人間たちに見られるわけにはいきません。あなたたちは例外ですが、他の人間に見られると騒がれる恐れがあります。ですから私は外で待っていますよ』

「外で…ハナダジムのジム戦が終わったら一緒に旅に同行してくれる？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

『ええ、またこの町を出た時に一緒に行きます。ですので安心してジム戦に挑んでくださいね』

「そっか…分かった。ありがとうねミュウツー！私たち絶対に負けないから！」

『カゲ！』

『ピチュ！』

「じゃあこれでお別れになるかもしれないのか…ヒナのことよろしく頼むなミュウツー！」

『…いえ、感謝されることなど一つもありませんよ』

ミュウツーは笑みを浮かべて私たちを見ていた。ミュウツーが人間たちに見られて騒がれるつもりはないと私たちといったん別れることになったのだけど、遠くから様子を見ているから大丈夫だということ、人間が見当たらない場所にきたらすぐに合流すると言ってくれたため私たちは礼を言つて手を振り、ミュウツーと別れた。

最初に会ったときは人間たちに対して嫌悪感が凄まじかったと言うのに、今はあまり気にしていないようで良かったと思えた。マサラタウンにいるはずであろうミュウツーに会った時はいろんな意味で驚くかなと少しだけ考える。自分が生まれたことを知るマサラタウンのミュウツーは先ほど別れたミュウツーに会ったら驚くか…それとも悲しむかのどちらかかもしれないと感じてしまった。

…その時に、人間のことで嫌悪感を持つてお互いに協力して人間たちと争わずにいてくれたらいいと私はただひたすら願った。

.....

——その後、タケシさんに連れられてポケモンセンターまでやってきた私たちは、ヒトカゲとピチューをボールに戻して回復してもらうために待つ。タケシさんはここで研修を受けるらしく、すぐに白衣に着替えてジョーイさんを手伝っていた。

「ジョーイさん!!不肖このタケシ、ようやくあなたの前にまい戻ってきつつ!?…シビレビレエエ!!!」

『……ケツ!!』

「ははは…えつとよろしくお願いします」

「は、はい…ヒトカゲとピチューのモンスターボールですね。お預かりします」

「…グツ…あ、まっってくださいジョーイさん!」

『ケヒヒヒ…!』

「さすがタケシさん復活早いなあ…」

タケシさんの暴走とグレッグルによつて止まった行動に私たちは苦笑し、ヒトカゲ達の入っているボールを回復するためにジョーイさんに渡す。タケシさんはすぐに復活してジョーイさんの後を追つて走り出し、グレッグルもその後を不気味な笑い声を上げながら追つて行つた。その様子は兄からシンオウ地方で話を聞いた時のような光景に見えて、思わず苦笑してしまつたけれど…でもタケシさんとグレッグルはお互いのことをよく知つている良い相棒同士なんだろうなと思えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「この道をまっすぐ行けばハナダジムだよ…つて言つても確かヒナちゃんは何度か来たことがあるよね？」

「はい。大丈夫です！…あの、タケシさん今までありがとうございました！」

『カゲ！』

『ピチュ！』

「いや、ヒナちゃん…まだお礼を言うのは早い。…ジム戦が終わつたらもう一度ポケモンセンターに来てくれないかな？」

「え？はいわかりました！」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「……………頑張れよヒナちゃん。カスミは手強いからな」

ヒトカゲとピチューを回復させ、元気いっぱいになったので私たちはジム戦するため、ポケモンセンターから外に出る。タケシさんも一緒に外に出てある道を指差して教えてくれた。私はまたタケシさんにちゃんとジムバッチを貰ってもう一度会うことを決意して歩き出す。タケシさんには迷惑をかけたと凄く思う……だからこそ、この勝負は負けれないのだ。ヒトカゲやピチューも同じようなことを思っているらしく、気合十分だ。

だからこそ、私たちを見送るタケシさんの小さな呟き声は、私たちに届くことはなかった。

……………

「よし行くよヒトカゲにピチュー!」

『カゲ！』

『ピチュ！』

ハナダジムを見つけ、カスミさんと対戦するために建物の中へ入っていった。

でも中に入っても人がいないかのように静寂で…もしかして留守なのかと私たちは焦る。このままだとタケシさんに良い報告ができないと考え、どうしようかとヒトカゲやピチューを見た時だった。

「あら？ヒナちゃんじゃない！どうしてここに…」

「あ、カスミさん！良かったあ…!!」

『カゲエ…!』

『ピツチュウ…!』

「どうしたのよ一体…」

「えつと…お願いしますジム戦させてください!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「え…ちよつと待って!…ヒナちゃん。どういふことなのか説明してくれるかしら?」

「う…実は——」

カスミさんが部屋から出てきて私たちがいたことに驚いていたらしい。そして私たちはまた顔を見合わせてジム戦をしてくれとカスミさんに頼む。カスミさんは私たちが突然頭を下げたことに驚き、事情を知りたいと険しい表情を浮かべながらも言ってきた。

おそらくここではぐらかしてしまつたらまたニビジムで起きた時のように受けられなくなる可能性もあったため、仕方がないと考えて話した。ジムバッチを3つ集めるために旅をしているということ、ある子供たちと勝負すると約束していることを——。

カスミさんは頭を抱えて、微妙そうな表情を浮かべていた。

「ああ…【あいつ】が電話してきたのはそういう…」

「あの、どうかしたんですか？あいつって…？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

「いやなんでもないわ…ジム戦ね…良いわよヒナちゃん！受けてあげる！」

「本当ですか！ありがとうございます!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「ただし！トレーナーになった時にまた私と勝負することが条件よ！ニビジムでも同じように約束したなら守れるでしょ？」

「もちろんです!」

『カゲエエ!』

『ピツチュウ!』

カスミさんは強気な目で私たちに笑みを浮かべて言い、勝負を受けてくれると言ってくれた。その言葉に私たちは安心して、もう一度頭を下げてありがとうございますと礼を言う。そしてカスミさんがついて来てと言って、いつもハナダジムの水中シヨールとなっている場所まで案内してくれた。プールまでやってきたカスミさんは、あるスイッチを押す。そのスイッチが押されたと思ったらプールのような水中に足場がところどころできていた。でも水が揺れるごとにその足場も揺れているため不安定になっているのだろう。それでも足場があることは私たちにとって嬉しいと思えた。カスミさんはスイッチを押したことによって水のフィールドであるバトル場となったプールの、

奥の方へ歩いていき私の方を振り向き、指差して大きな声で言う。

「さあヒナちゃん！私と勝負したいなら来なさい！全力でバトルしましょう!!」

「はい!!」

『カゲ!』

『ピツチュウ!』

私たちは前へ歩いていき、カスミさんとお互いに向き合い、気合を入れてから口を開いた。それはジム戦開始の合図でもあり、ハナダジムのジムリーダーであるカスミさんと勝負することにやる気を出すための行動でもあった。

「私たちは絶対に勝ちます…:お願いします!」

『カゲ!』

『ピツチュウ!』

第百八十六話く妹是水場の怖さを知るく

「待ちなさい！」

「な!? サクラ姉さん!!?」

「あ、サクラさん」

『カゲ?』

『ピチュ?』

こんにちはは妹のヒナです。これからジム戦をしようとしている時、カスミさんがボールを今にも投げようとしていた時に：カスミさんの姉であるサクラさんが飛び出してきました。一体いつから見ていたんだらうと疑問に思います。

サクラさんは私たちを見て何故か自信満々な表情で口を開いて言う。

「私が審判をするわ：ジム戦をすると言うなら審判が必要でしょ?」

「：サクラ姉さん。今日は随分とやる気が出るのね?」

「あら、可愛いヒナちゃんがジム戦をするのよ? 気合いが出るつてものでしょうか?」

「それをいつもジム戦に向けてくれればなあ…」

「ほらそんなこと言っていないで、始めるわよ！ヒナちゃんがどう話しかければいいのか迷ってるんだから！」

「うえ!?…あ、いや…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

「ごめんねヒナちゃん！ほらサクラ姉さん、審判やるならいつもの言つて！」

「はいはい！」

姉妹のちよつとした言い合いを見ていて、私たちはどうすればいいのか戸惑い、いつバトルが始まるのだろうかと思っていた。でもそれに気づいたサクラさんがバトルを始めようと言ってくれたためにすぐに周りの雰囲気かジム戦での独特な感じになった。

気合いを入れて試合の合図を待つ私達に…サクラさんが一度小さな咳をした後、すぐに両手を上げて口を開く。

「それでは、ジムリーダーカスミと挑戦者ヒナちゃんの2対2のバトルを始める…試合開始！」

「行くわよマイステディ！」

『サニー!』

「よし…行くよヒトカゲ!」

『カゲ!』

みずタイプ専門のジムだからこそ、ヒトカゲにとつてかなり大変なバトルになると言うことは分かっていた。それでも私はほのおタイプであるヒトカゲで最初に行こうと思つていたので。ヒトカゲならやってくれるだろうという信頼もあつたし…この後どうなるのかまだ分からないためにみずタイプの弱点でもあるでんきタイプのピチューは切り札として後で戦つてもらおうと考えていた。それはヒトカゲとピチューも分かっていることだし、ヒトカゲが必ずピチューに余計な苦勞をかけないようにバトルで勝つと気合いを入れていたからこそ、私は心臓が爆発してしまうのではないかと思えるほどの緊張があつても負けてしまうとと言う不安はなかつた。ヒトカゲとピチューが勝とうとしているのに私が不安になつてどうすると考えていたからでもある。

そして最初にカスミさんが出したのはサニーゴだつた。カスミさんのサニーゴは何度もバトルを見たことがあつたし、確かバブルこうせんとミラーコートを気をつけられないかなと考える。…いや、もしかしたら他の技を私たちが知らない間に覚えている可能性も高い、とにかく油断はできないのだ。先程気をつけなければいけないミラーコー

トについてはヒトカゲのスピードなら避けられるだろうし、バブルこうせんは弱点だからという理由から……とにかくサニーゴはじこさいせいもあるのだから本当に油断ができないだろう。

「サニーゴ、とげキャノン！」

『サニ！』

「ヒトカゲ、一度ジャンプしてからひのこ！」

『カゲカゲエ！』

サニーゴのとげキャノンが不安定な足場に乗っているヒトカゲに向かって放たれた。ヒトカゲはそのとげキャノンをちやんと見てから避け、そして空中でひのこを放つ。でもカスミさんは自信満々な表情でヒトカゲを指差して叫んだ。

「そのひのこ全部跳ね返しなさい！サニーゴ、ミラーコート！」

『サニゴォ！』

「もう一度高くジャンプしてから避けて……そのまま接近してからひっかく!!」

『カゲ！』

『サニ…!?』

「クツッ!…サニーゴ、近づいてきたならそのまま顔面にバブルこうせんしちゃいなさい！」

『サニ…サニイ!』

『カゲッ!』

「ヒトカゲ、頑張つて！」

『…カゲエエエ!!!』

ヒトカゲが空中にいるために避けられないとカスミさんは考えたのだろう。でもヒトカゲはサニーゴによつて2倍の威力になったミラーコートを空中で身体を捻つて回転させて避けることに成功しそのまま足場を何度かジャンプしてサニーゴに近づいてひっかくをする。ひっかくについてはタケシさんからはほのおタイプの外にもできるようなになっていた方がいいだろうと教わったひとつである。そして時間がないというのにヒトカゲにすぐに覚えられるだろうとひっかくを教えてくれたのだ。

その後、ひっかくに成功し、ダメージを与えることができたんだけど、近くにいたためにバブルこうせんが直撃する。サニーゴとは違ってかなり大きなダメージを負ったヒトカゲは倒れることなく私の声を聞いて立ち上がった。くれた。

「…ヒトカゲ、もう一度接近できる？」

『カゲ…カゲカゲ！』

「よし…なら接近して！」

『カゲ！』

「何やってるのよ？ 同じようなことやってもまた余計なダメージを与えるだけじゃない」

『サニ？』

「同じ負傷は負いませんよ！ ヒトカゲ、接近したら…そのままひのこひつかく！」

『カゲカゲ！』

「えっ!? ほのおのパンチ!!?」

『サニゴォ!!?』

「連続してひのこひつかくよ！」

『カゲカゲ！』

「…サニゴォ!…もう一度バブルこうせんよ！」

「避けてヒトカゲ！」

『サニ！』

『カゲエー！』

ヒトカゲが接近したことにまた同じことの繰り返しだとカスミさんがため息をつく、でもその油断によって隙ができたと言っても構わないだろう。サニーゴに近づいたヒトカゲは私の指示通りにひのことひっかくを使う。ひのこによって炎が放たれ、それに向かつてひっかくをする。ほのおがひっかくによって重なり、火を伴ったひっかくとなった：つまりヒトカゲの攻撃した技は「ほのおのひっかく」となったのだ。

その光景を見たカスミさんはほのおのパンチと誤解してしまったらしい。まあ手に炎が燃え盛っている状況はそう判断してもおかしくないだろう。でもこれによってひのこのダメージとひっかくのダメージが相手に蓄積されたらどうだろうと感じた。まあほのおとノーマルはサニーゴにはあまり効かないだろうけど、驚愕してしまいヒトカゲから離れることができない間に何度も連続でその技を使っているためにダメージはかなり蓄積されたと思う。

そしてまたバブルこうせんが放たれようとしたためにヒトカゲに向かつて離れろと指示する。そのおかげですぐに後ろの方の足場へ戻ったため、何とか攻撃を避けてたと感じた。

「クツ…仕方ないわね…サニーゴ、じこさいせい！」

『サニゴオ!』

「させない! ヒトカゲもう一度接近してひのこひっかく連続攻撃!」

『カゲカゲエ!』

『サ、サニイイイイ!!??』

『サニゴ!!?』

このままだと不利になると思ったのかもしれない。カスミさんがサニゴを見て指しを出すのを私はすぐにもう一度攻撃をしてみようとおうと口に出して言う。

じこさいせいをしようとしたサニゴに急接近し、何度もほのおのパンチに似ているひのこことひっかくで攻撃していった。そしてそのダメージに、もしかしたら急所に当たった部分があったのかもしれない。サニゴが大きな鳴き声を上げて後ろの方へ吹っ飛び、プールのふちにぶつかり、水しぶき上がる。そして浮かび上がった時は目を回していて：戦闘不能になったのだと分かった。

サクラさんがその様子を見てすぐに両手を上げて声を出す。

「サニゴ戦闘不能、よって勝者はヒトカゲよ!」

「やったねヒトカゲ!」

『カゲカゲ!』

「…戻ってサニーゴ…ありがとうゆつくり休んでね…さすがサトシの妹ね、ヒナちゃん
！」

「はい！」

『カゲ！』

「さて…次行くわよ…ギヤラドス！」

『ギヤオオオオオオオオオオ
！！！！』

「ギヤラドス対ヒトカゲ…試合開始！」

大きな身体をしたギヤラドスがプールに思いつきり入ってきたことによつて波が起
き、足場が余計に不安定になっていく。ヒトカゲが足場にしがみついて何とか体勢を整
えようとするが、そんな隙は逃さないのがカスミさんらしかった。

「ギヤラドス、ハイドロポンプ！！」

『ギヤオオオオオオオオオオ
！！！！』

「ジャンプして避けてヒトカゲ！」

『カゲツ…カゲエ！？』

「ヒトカゲ!？」

ジャンプしようとしたヒトカゲだったが、波が来たことよって足場がゆらゆらと揺れ、思ったような行動ができず、ハイドロポンプが直撃してしまう。プールの場外へ吹っ飛ばされたヒトカゲはそのまま壁にぶつかり、床に倒れてしまった。

「…ヒトカゲ戦闘不能。よって勝者ギヤラドス」

「…ありがとうヒトカゲ、本当にありがとう！」

『カゲカゲ…』

『ピチュ…ピイツチュ!!』

「うん。頑張ろうねピチュー！」

ヒトカゲを水に濡れると危ないと判断して持つてきていたボールに戻し、ゆっくりお休みと言つてカスミさんの方を見る。ギヤラドスとカスミさんはやる気が出ているように、早くかかつて来いと言う闘志が見えているようだった。

ピチューが私の方を見て大きな声で頑張ると鳴いてくれたため、私は頷いて前を見た。

「では、ギャラドス対ピチユウの試合開始！」

「頑張るわよピチユウ！」

『ピッチュ！』

第百八十七話く妹はピチユ一の才能を見るく

ヒトカゲが一撃で倒れてしまうほどの威力と強さを持つギャラドスの攻撃にヒナたちは戦意を失うどころかやる気に満ちていた。

普通だったら一撃で倒れてしまったことによる衝撃で戦闘意欲がなくなり、最悪な可能性だとギブアップするという事態もあり得たはずだったのだ。でもヒナたちはそれよりもヒトカゲが頑張ってくれたことを知っているからこそ、約束を必ず守ってこのジム戦に勝ちバッチを貰おうと奮闘していた。：つまり、この戦いは負けられないと思っているのだ。ヒトカゲが頑張ってくれた分絶対に勝とうと、ただひたすらそれだけを考えてピチユ一と一緒にやる気になってギャラドスを睨みつける。

そして審判であるサクラによって試合は開始され、ギャラドスが鋭い威嚇をして怖が

らせてきた。ピチューは一瞬だけその威嚇を見て萎縮してしまっただが、すぐにやる気を取り戻し、こちらにも負けじと睨みつける。その様子を見たカスミは今までのギャラドスと戦っている時の挑戦者のことを思い出して…彼等との違いにさすがサトシの妹だと感心してバトルをするために口を開いた。

「ギャラドス、もう一度ハイドロポンプで倒しちやいなさい！」

『ギャオオオオオオ!!』

「ピチュー尻尾を使ってジャンプして回避！」

『ピッチュウ!』

ピチューが立っている場所はゆらゆらと揺れている不安定な足場だ。そのため身体の大きなギャラドスが動くとすぐに大きく揺れてしまったため、先程そのせいで思ったように回避ができずヒトカゲが倒れてしまった原因になってしまった。不安定な足場は時に動くことが困難になる妨害となってしまう。

だからヒナはピチューに向かって尻尾で足場に向かって叩きつけるようにジャンプしてと指示をしたのだ。普通にジャンプするのならば足に力を入れて不安定になって

いる足場から大きく飛ばなければいけないが、足場のことを気にせず尻尾をうまく使ったことでゆらゆらと揺れる足場から大きくジャンプすることができた。

それだけじゃない。ピチューは無意識で尻尾に電気を込めていたために大きくキラキラと光り輝きながらジャンプしたのだ。そのキラキラとした輝きは水滴と重なって煌びやかに光る。まるでハルカのアゲハントがやるアピール技のようだと：ピチューが尻尾に込めた電気は本当だったら必要はないはずだが、アピール技などがあつたらすぐによろうとするピチューだからこそやってしまった行動だろうとヒナは思う。

カスミとサクラはジャンプして電球の光と水場の水滴とピチューの電気が綺麗に光り輝く光景に、まるでピチューが星空の近くで踊っているようだと感じてしまった。サクラがその光景に綺麗だわあと思わず呟いてしまったほどだ。そのため空中にいる間にピチューが引き起こした光景を見てくれたため、足場に着地することができた。ピチューが再びギャラドスを見て警戒するため、ここはバトルなのだとかスミが気を引き締めて迎え撃つ。

「ピチュー、そのまま10まんボルト！」

『ピイツチュー！』

「ギャラドス、かえんほうしやで防ぎなさい！」

『ギャアアアア!!!』

ピチューの10まんボルトとギャラドスのかえんほうしやが衝突して爆発した。その爆発は暴風のような状態になってしまったためにピチューが少しだけ飛ばされ、空中で回転しようとしてもがいて近くにあった足場に着地しようとしたというのに再び水面がゆらゆらと激しく揺れたために足場が不安定になり体勢が崩れてプールの水に落下した。でもピチューは泳げるためにすぐに足場に向かって泳ごうとする。それを見たカスミとヒナがお互い口を開いて言う。

「ギャラドス、今のうちに倒すわよ!あばれる!!」

『ギャオオオオオオ!!』

「水なら電気が伝わる!ピチュー、そのまま10まんボルト!」

『ピチュウウウウ!』

『ギャオオオ!!?』

『ピイツチュウ!!?』

ギャラドスが暴れたことによってピチューがギャラドスの尾にぶつかり、ピチューの10まんボルトが水を伝ってギャラドスに当たった。つまりは両者相打ちの状態なのだ。そしてギャラドスが大きく暴れてしまったことでプールの水が大きく波打ち、ピ

チューは流され、溺れそうになる。それを見たヒナは大きく拳を握りしめ、何かを思いついたと言うような表情で叫んだ。

「ピチュー!?!…そうだ、ピチューなみのり!」

『ピチュ…ピチュピツチュウウウ!!!』

「そんな!?!…まだよ!ギャラドスかえんほうしゃ!」

「させない!ピチューなみのりしたまま10まんボルト!!」

『ギャオオオオオ!!!?』

『ピイツチュウウウウ!!!』

「ギャラドス!!」

ピチューが必死に足場まで溺れかけながらも泳いでいるのを見て、ヒナが周りを確認する。ギャラドスが暴れたことよって波が大きくなっていることに気づき、これならマサラタウンで練習したなみのりができるだろうと考えてヒナが叫んだのだ。その叫び声に反応したピチューはうまく波を発生させた場所から泳いで、大きな波にタイミンを合わせて泳いでからなみのりを発動させた。

ピチューがなみのりを使ったことに驚いたカスミたちは驚愕の声を上げる。だが、カスミはまたすぐに反撃するためにかえんほうしやの指示を出す。ピチューの電撃を伴うなみのりに、水に浸かっていたギャラドスは電撃によって痺れ、かえんほうしやを放つことができなくなった。そしてなみのりだけだとギャラドスは倒れないと考えたピチューはそのまま10まんボルトをほうでんのように放つ。電気によってキラキラと光る大きな波はギャラドスを飲み込んだ。

ピチューはそのまますぐに足場へ戻り、水中に潜っているであろうギャラドスを待つ。でもなかなか出てこないギャラドスにどうしたのかと待っていたら目を回した状態で浮かび上がってきて：勝利したのだと確信した。

「ギャラドス戦闘不能！ピチューの勝利！よって勝者はヒナちゃん！」

「やった？…勝った!!勝ったよピチュー！」

『ピチューピツチュ！』

ピチューが足場からジャンプしてヒナの元へ向かい、思いつきり抱きつく。勢いのあたる衝撃にヒナはピチューを抱きしめたまま一度身体ごと回転してしまったが、笑顔でやったね！と喜びあっていた。カスミはギャラドスをボールに戻し、お疲れさまと言っ

て労わる。そして喜んでいるヒナ達の近くまで行き、話しかけた。

「ヒナちゃん…これ、約束のブルーバッチよ」

「ありがとうございますカスミさん！」

『ピッチュ！』

「良かったわねヒナちゃん」

「はい！」

「次にバトルするときは負けないから覚悟しときなさいよ？」

「う…分かっています！でも次も負けませんから！」

『ピッチュウ！』

ブルーバッチを見つめて、ヒナとピッチュウは気分が急上昇する。ようやく手に入れたジムバッチの2個目に、あともうちよつとでバトルできると考えていたからだ。次にジム戦するのは何処になるのだろうかという気持ちもある。でも絶対に3個目のジムバッチもバトルで勝利してみせると意気込んだ。

「…あ、そうだ…ブルーバッチ、ゲットだぜ！」

『ピッチュピッチュ！』

兄が良くしていたようにバッチを持って笑顔で決め台詞を言う。その声にピチューが反応してジャンプして鳴き声を上げた。今は休んでいるはずのヒトカゲのボールがゆらゆらと揺れていたからおそらく嬉しいのだろうと感じて、ヒナはまた笑顔になった。

第百八十八話く兄は忍者と出会うく

こんにちは兄のサトシです。まだシヨウヨウシテイにたどり着かず、修行をするために一度休憩している途中です。みんなは休憩している中、俺たちはケロマツと一緒に特訓をしようとピカチュウにバトル相手になってもらい疑似バトルをしています。

ピカチュウは俺と長年一緒にいるだけあって自分で技を選択し、自分にできるバトルをしてくる。ある意味、俺とケロマツにとっての最強のバトル相手でもあった。

「ケロマツ、もう一度あわ！」

『ケロケロ！』

『ピツカツチュ！』

「サトシ…」

「セレナ、大丈夫？ 何だか顔が赤いよ？」

『デネデネ？』

「あ、その…気にしないで？」

「う、うん。分かった…？」

『デネ？』

ケロマツのあわがピカチュウに大量に降り注ぐ形で攻撃したというのにピカチュウはでんこうせっかで避けていく。それを見たケロマツはすぐにケロムースでピカチュウの走っていく先に障害となるように投げていく。だがピカチュウはそれも軽々と避けてしまった。さすがにスピードはあのホウエン地方の修行の時に鍛えただけあって速い。ケロマツを見て俺は口を開いて言う。

「ケロマツ…みずのはどうからのあわだ！」

『ケロ…ケロケロ！』

『ピツカ…!?!』

ケロマツがみずのはどうを放ち、その後ろからあわで攻撃する。つまりみずのはどうにあわをプラスしてかなり大きな攻撃となつてピカチュウに直撃しようとしたのだ。

でもさすがピカチュウというか…慌てていたというのに、すぐにまたでんこうせつかで避けていったのだ。でもこの重ねた攻撃技はピカチュウには効かないとしても他のポケモンには有効だと分かったから良しとする。

ケロマツは悔しそうにピカチュウを見ていたけれど、まあ最初の旅に出た時からずっと一緒だったピカチュウとカロス地方で出会ったケロマツじゃあスピードも何もかも違うのは仕方ないと思う。とにかく修行あるのみだから頑張っていこうと俺たちは考えた。

…その時だった。

「ふふふ…お主が【サトシ】でござるか!!」

「え、なに!?姿が見えないのに声が聞こえるよ!」

『デネ!』

「い、一体何処から話しているのでしょうか…!?」

「え、何なの…サトシに何か用ってこと!?!」

「はあ…ケロマツ、見破れるか?」

『ケロオ…!』

ピカチュウがすぐに悪党かもしれないと警戒し、シトロンの方へ走って行き、守るように周りを見る。その様子を見てシトロンたちは大丈夫だと判断し、敵を探すことにした。俺は面倒だと感じ、ため息をつきながらもケロマツにどこにいるか分かるか？と言う。するとケロマツは周りを慎重に見てケロムースを何の変哲もない木に飛ばした。

「フツ…さすがでござるな！」

「わあ…忍者だ!!」

『デネー!』

「時代錯誤もいいところだなおい…」

『ピイカ…』

『ケロケロ…』

木から現れたのは絶対に今の時代見ることはないだろうと考えている忍者だった。しかもござるという語尾がついているという…。ユリーカとデデンネが目を輝かせてその忍者を見るが、俺たちはため息をついてつい独り言を言ってしまった。その声が聞こえたのか、忍者がすぐに顔を赤らめて叫ぶ。

「う、うるさいでござるよ！忍法木の葉隠れの術!!」

「え、消えた…!」

「うわあ凄いやましい本物の忍者みたい!」

『デネデネ!』

「どこに行ったの…というか、何の用なのよ一体…?」

「…仕方ねえな…ケロマツ」

『ケロ…!』

ケロマツに照れ隠しをして慌てて消えてしまった忍者を見つけてもらうために指示をする。ガサガサと煩い場所にいるかもしれないとケロマツがケロムースを飛ばすが、姿の見えないままケロムース返しと叫んでいるのが聞こえてきた。

こういう姿の見えないバトルをするのもたまには面白いだろうとは思うが…何の目的があつて俺たちに話しかけてきたのか分からない今、もしものことを考えてすぐにケロマツにみずのはどうを指示する。先程隠れているであろうと感じた場所に向かって放つたら、ケロマツと似たような姿のポケモンが飛び出してきた。

凶鑑で確認するとゲコガシラというケロマツの進化形らしく…忍者の手持ちのポケモンなのだろうと分かった。そして忍者がまたゲコガシラの近くに姿を現して、俺たちの近くに降り立つ。

「お主…サトシであろう？カロス地方でかなり有名だと聞いたでござるよー」
『ゲロー！』

「ちよつと待ちなさい！カロス地方以外でもサトシは有名なのよ！それに物凄くかっこいいしすつごく素敵で魅力で皆から認められていて気絶させて縛って誰にも見つからない秘密の場所に隠して私だけのサトシにしておきたいぐらい嫌になるほどファンがいて凄いトレーナーなんだからね！！」

「セレナ落ち着いて！」

『デネ…！』

「ここは黙っていた方が賢明ですよセレナ…！」

『ピイカツチュ…』

「うう…！」

「ぬ…そうであつたか…では全地方で有名なサトシよ！拙者と勝負してもらおう！」

『ゲコオ!』

「……………ああいや全地方はないと思う…けどまあバトルなら受けて立つけどな」

『…ケロ』

セレナの言った言葉は聞いていないと首を振りながらも…忍者…いや、サンペイという少年忍者は俺のことを知ってどんな強さなのか知りたくなったらしい。拙者のゲコガシラと勝負しろと言ってきたことに俺は苦笑しながらも引き受ける。その間にもいまだに後ろの方ではセレナが騒いでいるようでシトロンとユリーカ…そしてデデンネとピカチュウによって止められていた。ケロマツは一度だけ後ろを見て肩をすくめている。サンペイとゲコガシラは気になっていないようで、この場所は狭いでござるな…向こうでバトルした方が良いでござろう!と張り切っているようだった。

まあいいかと俺は木々が立っていない小さな広場まで行き、サンペイ達と向き合う。ケロマツが進化形であるゲコガシラと勝負したいのかやる気を出して俺に向かって言ってきたため俺は頷いた。だがサンペイとゲコガシラは不満そうだ。

「そのケロマツでは力不足では?…話で聞いたところによると進化しているもつと強い

ポケモンがいるのでござろう？ならその弱そうなケロマツより他のポケモンを選んだ方が良いと思うでござるよ？」

『ゲコ』

「…その言葉、後で前言撤回させてやるよ」

『ケロオ!!』

恐らくサンペイは話で聞いたことによつて俺が見た目も実力も十分強いポケモンがいるのだろうと考えていたのだろう。でもそんなことはない。ケロマツもサンペイが言っている言葉を否定できるぐらい十分強いからだ。それに俺たちに楽しいバトルをしたいと気を利かせるようにサンペイの言った言葉はある意味俺たちの逆鱗に触れたようなものだった。

だから、仕方がないのだ。

.....

「えつと…ではこれより、ゲコガシラ対ケロマツの試合を始めさせていただきます…試合開始！」

「拙者のゲコガシラの実力…解くと味わうがいいでござるよ！」

『ゲコゲコ！』

「ハツ…瞬殺してやるよ。行くぞケロマツ」

『ケロオ！』

「あのぐらい、私も強くななくちやよね…隣に立つために…！」

「セレナ？」

『デネ？』

「ううん何でもない。…ほら応援しよう！」

「うん！…あ、でももう終わっちゃってるみたいだね」

『デネエ…』

「本当だ…さすがサトシね！」

「ええー…ゲコガシラ戦闘不能。よって勝者ケロマツとサトシ！」

「な、何故でござるか…試合開始と同時にいったい何を…!!」

『ゲ、ゲコオ…』

「お前さ…挑発すんのは良いけど、もうちよつと言葉選ばうぜ？」

『ケロケロ…』

「クツ…」

『ゲロ…』

試合開始と同時に物凄いスピードで連続でみずのはどうとあわでゲコガシラの目を眩ました後に物凄い力の入ったはたくで試合終了となった。ちなみにその力の入ったはたくは顔面を地面にめり込ませてしまうほどの威力があつて、その強い力のせいで戦闘不能になつてしまったのだらうと考える。

まあつまり、俺の宣言通り瞬殺となつたのだ。そしてその状況にサンペイは倒れていゝるゲコガシラに近づいて、悔しそうにしていた。シトロンがオレンのみを持ってきてゲコガシラに食べさせ、俺たちはその様子をじつと見つめている。まあ何か文句を言われるか…それとも暴言を叫ぶのか…どっちにしてもケロマツを傷つけるような言葉だつたらすぐにいろんな意味で話し合いでもしなくちやなと思う。

でもサンペイは元気になつたゲコガシラに大丈夫かと聞いて、そして頷きあつていた。その後、俺を見て…いきなりサンペイもゲコガシラも土下座し始めたのだ。

「すまなかつたでござるサトシ殿！拙者…見た目に騙されていたでござるよ…！」

『ゲコゲコ……!』

「え、いや……とりあえず謝ってるなら分かったから土下座止める……!」

『ケロ……』

「そうはいかないでござるサトシ殿!拙者、サトシ殿を侮辱してしまった……これは切腹以外の謝罪などなしに等しいでござるよ……!」

『ゲコオ……!』

「おいやめろそれ以上やったらピカチュウの10まんボルト食らわせるからな」

『ピイカ……』

『ケロ……』

「それで良いでござる!サトシ殿。拙者をもつと強くなりたい……拙者には師匠がいるでござるが……サトシ殿には拙者のトレーナーとしての師となつてほしいでござるよ!拙者をもつと強くなりたい!!……いやそれよりも、ピカチュウの10まんボルトはまだでござるか……!何ならサトシ殿の直接の攻撃でも……!」

『ゲコオ!』

「あらゆる意味で断る!」

『ピイカ!』

『ケロオ!』

「サトシに迷惑かけるのは止めなさい！」

「む！サトシ殿に迷惑などかけていけないでござるよ！」

『ゲコオ！』

「サトシが困つてると言うことはつまり迷惑かけてるっていう意味でしょ…！それにサトシが困ってるんだから土下座も駄目よ！あと師になるっていう話もね！サトシは私たちと旅をしてるんだから…！」

「すべて却下でござるか…ならば、バトルで勝負をつけるといのはどうでござろうか
!？」

『ゲコゲコ！』

「…良いわよ。それもサトシに相応しくなるため…良妻となるため…そのバトル受けて立つわ！」

「…あ、分かった。これって修羅場って言うんだよねお兄ちゃん！」

『デネ？』

「いやこれはそういう意味じゃ…ってユリーカ！どこでそんな言葉知ったの!!？」

「…ピカチュウにケロマツ。こいつら放置して修行の続行でもするか」

『ピイカ…』

『ケロオ…』

——何とも微妙な空気の中、ケロマツがその後かげぶんしんという技を習得できたことがこの日喜ばしい内容だと思えた。

第百八十九話～妹は出発する～

「お待たせしました！ヒトカゲとピチュー、元気になりましたよ！」

「ありがとうございますジョーイさん！」

「良かったわねヒナちゃん」

「はい！」

こんにちはは妹のヒナです。ハナダジムを挑戦し、無事に勝利した後…私たちはポケモンセンターにいます。ハナダジムに挑戦する前にタケシさんからもう一度こつちにきてほしいと言う話と、ヒトカゲ達の回復のために来たのです。

私はボールからヒトカゲとピチューを出して、お互いに抱きしめあう。それは勝利し

たことへの喜びと、頑張ったねという労りの込めた抱擁だと思っ
ているからだ。そして抱きしめあう光景にカスミさんが微笑まし
そうに見つめていた。サクラさんは何か用事があるよう
でどこかへ行ってしまったために今いるのはカスミさんと私達
だけだ。ジョーイさんは他のポケモンたちを元気にするた
めに診療室へ行っている。もしかしたらこの近くにミユツ
ツもいるかもしれないけど、姿が見えないために分
からない。

…それにしてもタケシさんどこにいったんだろう。

「悪い待たせたー！」

「遅いわよタケシー！」

「あ、いや大丈夫ですよー！」

『カゲカゲ！』

『ピチュ！』

タケシさんがポケモンセンターの奥からこちらに向か
って走ってきたため、ポケモンたちを治療していたの
だろうと思った。カスミさんがタケシさんに向か
って不満を言ったのを苦笑しながら大丈夫だと私
たちは言う。それを聞いたタケシさんは本当に

申し訳ないと言う表情で苦笑をしながらも大きな紙袋を私に渡してきた。

「えつと…これは？」

『カゲ？』

『ピツチュウ？』

「俺が作った特製の弁当だ。日持ちがするものばかり入れておいたから何日かは食べられるよ…くれぐれも健康バーやきのみだけで食事しないように！」

「タケシらしいわね…」

「う…わかりました！ありがとうございます！」

『カゲ…カゲカゲ!!』

『ピツチュウ！』

タケシさんの持ってきた紙袋には大きな弁当が入っているようだった。その話を聞いたカスミさんがタケシのやりそうなことだと笑みを浮かべながら、私の手に持っていた紙袋をリュックの中へ入れてくれた。リュックの中はとても重くなったけれど、それでも身体と心は軽いついていた。

…それにタケシさんやカスミさんに迷惑をかけてしまったと言う罪悪感はあるけれ

ど、それでもこの優しさを無駄にしないように次のジム戦も頑張ろうと決意したのだ。ヒトカゲやピチューも同じように感じているらしい：タケシさんやカスミさんに向かって大きな声を出して頭を下げた。

…でも、その瞬間にポケモンセンターの扉が開き、サクラさんがやって来た。

「間に合ったみたいねえ！ヒナちゃん、これあげるわ」

「本…ですか？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

「サクラ姉さんこれって何？」

「サ、サクラさん!!まさかあなたと会えるとはツツ!!!シビレビレエエ!!!」

『ケヒヒヒヒツ!』

「お疲れーグレッグル」

『ケツ!』

タケシさんがサクラさんにいつも通りアタックしようとしてカスミさんが動こうとしたが、先にグレッグルがどくづきをしたためにグレッグルに向かってお疲れと言う。グレッグルはカスミさんの言葉に素っ気なく返事したが、そのままタケシさんを連れて

邪魔にならないところに引っぱって行く。私たちはその様子を苦笑しながら見つめていた。見つめていただけなのはこの状況で何か言ってしまったら巻き込まれるかもしれないと思っただからだ。

でも何も心配なくサクラさんがタケシさんに起きた出来事がなかったかのように笑みを浮かべて私に話しかけてきた。

「ふふ、これはね。ジム戦クリアガイドなのよオ！どのジムでどんなタイプになっているのか…戦略についても書かれているから使ってね！」

「あ、ありがとうございます!!」

『カゲー!』

『ピチュー!』

本は少しだけ古びていたけれど、それでも私たちのために頑張って本を持ってきてくれたことに凄く感謝した。本のページをめくって何が書かれているのかを見る。クリアガイドと言ってもどのポケモンを出せばいいのか…どう指示をすれば勝てるのかは書いていない。ただそのジムでのポケモンのタイプは何なのかについて書かれているだけみたいだった。それでも今の私にとってはありがたいとサクラさんに礼を言い、頭

を下げた。

カスミさんが私の手に持っている本を見て、何かに気づいたらしく、目を吊り上げて言う。

「ちよつと待つて…ヒナちゃんその本貸してくれる？」

「え、あ、はい…」

『カゲ？』

『ピチュウ？』

「これって…やっぱり!!ハナダジムがサクラ姉さん達だった頃じゃないの!しかも赤ペ
ンで派手に印つけてる!!」

「だってえ…私たちもうジムリーダーになる気はないし…ヒナちゃんに知ってもら
ういい機会だと思つたのよお」

「もつと純粹に渡しなさいよ!!」

「ははは…」

『カゲエ…』

『ピチュウ…』

ハナダジムのカスミさん達は相変わらずだと思い、苦笑してしまった。

.....

「じゃあまた会おう！弁当ちゃんと食べるんだぞ！」

「はい。分かってます！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピチュ！』

「またねヒナちゃん！勝負負けるんじゃないわよ！」

「クリアガイドちゃんと読んでねえ！」

「サクラ姉さんはまた……」

「ハハハ……ありがとうございます！」

『……カゲ！』

『……ピツチュ！』

カスミさんとサクラさん、そして復活したタケシさんに見送られながらハナダシテイ

を出発した。一晩泊まってもいいのよ?とサクラさんから誘われたが、一刻も早くジム戦をしたいと思っていたのでその誘いを断ることにした。とにかく頑張っていかなければと思う。

そして勢いよく出発した私たち。木々が多い場所まで来て周りを見る。ハナダシテイで別れたミュウツーが来るかなと思っただが見当たらず、私たちはもう少しだけ探そうと声を出した。

「ミュウツー!どこにいるの?…人はもういないよー!」

『カゲカゲ!』

『ピッチュウ!』

『…:そう大きな声出さないください』

「あ、ミュウツー!」

『カゲ!』

『ピッチュウ!』

ミュウツーが空にいたらしく、空中から私たちに向かって降りてきてくれたため、私たちは笑顔でミュウツーに近づいた。弁当の入っているリュックが少しだけ重いと感じるが、これはタケシさんのお手製弁当だから後でミュウツーたちと一緒に食べようと

いう考えが浮かび上がってきた。近づいたら、ミュウツーは別れた時とは違って物凄く疲れたような表情をしていて……何があったのか気になった。

「…どうしたのミュウツー？」

『カゲエ？』

『ピッチュウ？』

『…いえ、あるポケモン達ともめただけですので気にしないでください』

「ポケモン達…？」

『カゲカゲ？』

『ピッチュウ？』

『それよりも、ジム戦に行くのでしよう？早くいかないと日が暮れますよ』

ミュウツーはこれ以上その話をするのは嫌らしい。ジム戦の話になったため、私たちはそうだったと気がつき、まだ日暮れにはなっていないが、野宿する可能性を考えて早く行こうと決心した。サクラさんから貰ったクリアガイドをパラパラとめくり、悩みながらも歩き続ける。

『…それは?』

「ジムリーダーの情報が載ってるの。でもどうしようかな…次は草タイプジムのエリカさんにしたいって思ってるの…でもヒトカゲは有利になるけどピチュウは微妙になるんだよね…」

『カゲカゲ』

『ピッチュウ…』

まだまだ行先は決まらず、どうしようかと悩む。悩んでいるせいで歩み続けていた足は止まり、立ち止まったままクリアガイドをじっと見つめて考えていた。

ハナダジムみたいにヒトカゲは不利だけどピチュウは有利だというあのやり方でいいこうかと考えてはいるけれど、それでいいのか…もつとトレーナーとして勝利する方法はないのかと悩んでいるのだ。…というより他のジムはまだどこに行つていいのかどううかは決まらない。私たちとバトルしてくれるのかどうかさえ分からないのだから…。でも一番有力なのはエリカさんのジムだし…と悩む。私と一緒にヒトカゲやピチュウも首を傾けて悩み、ミュウツーがため息をついて言ってくれた。

『…それについては後で考えればいいでしょう。まだジム戦が受けられるかどうかかわからないのですから』

「あ…そうだったね…タケシさんとカスミさんだったからジム戦受けられたけど…次はどうなんだろう…」

『カゲエ…』

『ピツチュ…』

『とにかくここから一番近いジムに行きますよ…奴らが近づいて来そうですからね』

「奴ら？…もしかしてマサラタウンから追手が…！よし行くよ皆！」

『カ、カゲカゲ！』

『ピチュピツチュ!!』

ミュウツーが後ろを気にしていたため、このままだと連れ戻される可能性を感じた私はすぐに歩み始めた。そしてヒトカゲとピチュも一緒に歩き始め、ミュウツーはサイコネシスで浮いているからか歩くというより宙に浮いてついて来ているという状態だった。

とにかくこれから最後のジム戦…どうなるのかわからないけれど頑張らなければと思う。

第百九十話く兄はいろいろとぶつ壊すく

こんにちは兄のサトシです。カビゴン騒動を終えて、俺たちはシヨウヨウシテイを指して進んでいます。ですがこのままだとまた野宿になってしまう恐れもあるため、近くにあるポケモンセンターへ向けて歩いている途中になるのです。

『ピカピー！ピカピカ？』

「どうしたピカチュウ？…ん？あれって……」

「ああ、あれは電波の観測所ですよ」

「電波の観測所？」

「はい。宇宙から飛来する無数の電波をキャッチし、高性能な機器によって全自動で瞬時に分析を行っているという…素晴らしい施設です！」

「ああなるほど…」

『ピイカ…』

遠くの方に見えてきた建物をピカチュウが発見して、あれは何だと問いかけてきた。それに答えたのはシトロロンで、機械に対することには詳しいのかどのようなことをするのかわかりやすく教えてくれた。ユリーカは背が小さいからか背伸びをしてその観測所を見ようとしている。そしてそんなユリーカの頭にはデデンネが乗っていて、シトロンの言葉に首を傾げていた。

つまり、デオキシスなどの物体が来た場合分析してポケモンだと瞬時に見分ける機会ということであるのだろうと納得したのだ。まあポケモンじゃなくても宇宙から飛来してきたらすぐにわかるようになってるみたいんだけど、宇宙と聞くとデオキシスを思い出してしまうのだから仕方ない。もしもデオキシスがこの観測所にやって来た時はすぐに大騒ぎになるのだろうなとマサラタウンにいるであろうあいつの顔を思い出しながらもシトロロンの説明に頷いた。

「…あんたがサトシかい？」

「まあそうですけど…誰ですか？」

『ピカピカ？』

突然現れたマントを着ている人に俺とピカチュウは少しだけ警戒しながらも問いに答えた。警戒しているのは俺たちに何か危害を加える可能性を考えたからだ。まだカロス地方で悪さをする奴：いや、一応コフーライの時に会ったけれど、見た目からして悪党という感じがしない奴に出会ったことはないため、セレナたちは何も警戒せずにした。：まあマントを着て顔を隠す時点でおかしいとは思いますが、セレナたちは普通の人だと思っっているようだった。

セレナは俺が警戒したことには反応してどうしたんだろうと首を傾け、シトロンとユリーカはそのマントの人の後ろにいるポケモンに興味があるらしかった。

セレナがポケモン図鑑を開いてそのポケモン：カラマネロの説明を聞く。

「ふん：噂に聞いていた通り、強そうなピカチュウだね。そのピカチュウ：このマダムXが貰おうか！」

『マロオ！』

「マダムX？以前のロケット団みたいな奴だな：俺がピカチュウを渡すわけないだろ！」

『ピツカッチュ!!』

「そうですよ！第一、交換をするじゃなく貰うとは強奪するという解釈にもなりますから十分不適切な言い方になります!!」

「シトロンの、そういうことじゃないみたいよ…本当に強奪しようとしてるみたい…!」
「悪い奴つてことね!」

『デネデネ!』

「なら…実力行使で行こうかい?」

『マロオオ!』

「ツ…あの光を見るな!!…ピカチュウ!!」

『ピイカ…!』

カラマネロの身体にある模様のような部分が光りだし…まるであやしいひかりのようを感じた。これは危ないと俺はピカチュウに目と耳を閉じるように指示する。指示を聞いたピカチュウはすぐに俺の言った通り両手で耳を塞ぎ、目を閉じた。

俺も光を見ないようにして光によって連れ去られる可能性を考え、ピカチュウを抱きしめて輝きが消えるのを待った。ようやく輝きが消えたと思ったら、マントの人…つまりマダムXが笑みを浮かべているのが見えた。カラマネロも先ほどの位置から動いておらず、何をしたいのか俺たちは疑問に感じる。だがそれはすぐに解決された。

「…サトシ、言うとおりにしなさい」

「ピカチュウを渡しなさい」

「すべてはマダムX様の言うとおりに」

『デネデネ』

「いやいろいろとツツコミどころがあるけどどうしたんだよお前等…」

『ピイカツチュ!?!』

「ふふふ…彼らはもう私の言うことしか聞けない操り人形さ！さあ彼らの命が惜しかったらピカチュウを渡してもらおう！」

『マロマロオ！』

セレナたちが突然俺たちを見てピカチュウを差し出すように言ってくる。その声がまるで扇風機に当たっている最中に声を出し、通常とは違った感じで震えているような声となって聞こえてきたのだ。しかもいつもとは違って真顔で言ってくるものだからかなりシユールに感じてしまった。デデンネもセレナたちと同じようないつもとは違

う声になっていて、普通だったら笑ってしまうだろうなと思ってしまったが、マダムXの言った内容を聞いてその明るい感情は消えた。

つまり、セレナたちを人質にピカチュウを渡せと言っているのだろう。ピカチュウを渡さないのなら、セレナたちを傷つけてもいいのかと問いかけるその内容は、まるで以前の【あの光景】を思い出すきっかけになってしまった。マダムXの言葉が…この光景がある種のデジャブを感じてしまったのだ。

それは、もう二度と見たくないと思えた首輪をつけた妹の変わり果てた姿と酷似していた…。

「クツ…アツハハハハハ!!!」

『……………』

「む…何がおかしい!!？」

『マ、マロオ…!!？』

「ハッ！…ふぎけんなよてめえら…！」

『……………ピイカ!!』

俺が突然笑い出したことにマダムXとカラマネロは困惑していた。でもそれ以上に、俺は…俺たちは怒りに満ちていた。あの時のような光景を作り出したこいつらに、人質だからと自分たちの方が有利そうに言う悪党どもに、苛立ちが大きくなる。

俺はボールを空に放ち、ケロマツとヤヤコマを出し、カラマネロと向き合う。ボールからその光景を見ていたのか…それとも俺たちの怒りを感じ取ったのかケロマツとヤヤコマもマダムXとカラマネロを睨みつけてすぐに攻撃できるようにしていた。

そしていきなり戦闘態勢になった俺たちにマダムXとカラマネロは動揺していた。

「なッ!? 人質が惜しくはないのか!!」

『マロマロ!!』

「んなわけあるか!! もう二度と傷つけるつもりはねえんだよこっちはよお!!!」

『ピカピツカア!!』

『ケロケロオオ!!』

『ヤッコオオ!!』

ピカチュウの電撃とケロマツのみずのはどう、そしてヤヤコマのかまいたちがカラマネロに直撃した。マダムXよりも人質として操っているカラマネロの方を優先したからだ。そしてふらつきながらもこちらを睨んできたカラマネロに俺が走っていき、その勢いで吹っ飛ばすように殴りつける。殴られたカラマネロはそのまま吹っ飛び、後ろの方までいってしまった。

「あれ…サトシ?」

「ケロマツたちがボールから出ている?...一体何が...」

「サトシの真ん前物凄く煙が舞ってるけど大丈夫!?!」

『デネ!?!』

「...ああ、元に戻ったみたいだな」

『ピイカ』

『ケロ』

『ヤツコオ』

カラマネロを吹っ飛ばした衝撃のおかげか、セレナたちが我に返ったかのように周りを見ていることが分かった。声も震えておらず通常に戻っていて...これで人質となることはないだろうとマダムXを睨みつけ、ジュンサーさんの元へ連れて行くこととしたのだが、何だか様子がおかしい...

「ぐっ……っは……?」

「え、ちよつと待つてください…あなたはジュンサーさん!？」

「どうしてジュンサーさんがここに!？」

ふらついたマダムXが木にぶつかり、マントがとれたことでその顔が明らかになった。シトロロンたちがマダムXの顔を見て驚愕している。ジュンサーということが分かり、俺たちは警戒しながらも話を聞くことにした。警戒しているのはジュンサーさんだからということで油断したくはないからだ。もしも本当に悪党だった場合、ジュンサーだかということも油断させてまた何か仕掛けてくる可能性もあった。…でも彼女の言っていることは本当のように感じ、そして先程のセレナたちに使ったカラマネロの技からジュンサーさんも操られていたんだと分かって、警戒心を解いた。

「…そういえばサトシ…カラマネロは!？」

「そういえば見当たりませんが一体どこに…」

「いや何か凄くムカついたから吹っ飛ばしたんだけどやりすぎたか…」

『ピカピカ…』

『ケロオ…』

『ヤッコオ…』

『マロオ!!マロマロ!!マロオオ!!!』

「あ、あそこにいるのカラマネロだよ！何か凄くふらついてるみたいだけど…」

『デネエ…』

「な、何を言っているのかしら…」

『マロマロ！マロオ!!マロマツロオオオオ!!!』

カラマネロは傷つきふらついた状態で俺たちに向かって何かを言おうとしているようだった。でもその内容が分からず、こんな時にニヤースやルカリオ達がいてくれたらと思つてしまった。しかも言い終えて満足したのかカラマネロが物凄い勢いでサイコキネシスで空へと逃げていく。

「あ、逃げた!？」

「待てやゴルア!!!」

『ピカピツカア!』

『ケロケロオ!!』

『ヤツコオオ!!』

「サトシ! 深追いは危険です! 戻ってください!!」

「そうよサトシ! …みんな無事だったんだし…それにカラマネロはもうどつかに行っちゃったんだからこれ以上追うのは危険よ…サトシが傷つくのは見たくないの!!」

「サトシ達戻ってきて!!」

『デネ!』

「そうよ君! 戻ってきなさい!!」

「…チツ」

『…ピイカ』

『…ケロ』

『…ヤツコ』

カラマネロに向かって走る俺たちだったけれど、シトロンたちが戻って来いと言ってきたため…物凄く不本意だけれど、でもまあ攻撃はあの時にしたし…また何かあれば

ぶっ潰せばいいかと考える。とにかく皆が無事ならそれでいいかと俺たちは無理やり納得させてセレナたちのいる方へ歩いて行った。

そしてジュンサーさんが何かを思い出したかのような仕草をしてから言う。

「たぶんカラマネロはあの観測所の方へ向かったはず…私が仲間を呼んで捕まえに行くから、君たちはもう危険な目に遭わないように」

「はい、わかりました」

「わかりました！」

『デネ…！』

「……サトシ？」

「……………」

『ピイカ…』

『ケロ…』

『ヤコ…』

ジュンサーがそのままカラマネロが行ったであろう電波の観測所へ向かっていき、俺

も行こうとしたのだが、シトロンとユリーカに止められ、危険だから行くなと涙目で説得されてしまった。シトロンとユリーカは俺たちが危険な目に遭ってほしくないと考えて必死に止めているのだろう。セレナは最初は止めていたが、今はじつと俺を見て、行くのか行かないのか俺自身の行動によって決めようとしていた。つまり、俺が行くのならセレナもついていくと言うことだろう。そしてそうなるシトロンとユリーカも必然的についてくることになる。俺だけが行くのならば大丈夫だけれど、このままだと危険性が高いだろうと判断した。シトロンたちを置いて走って行くのは可能だが、ジュンサーが先にあの電波の観測所にいると言ってしまったために、後から追いかけてくる可能性が高いと思っっているからだ。それならば仲間が危険な目に遭うぐらいならば諦めようと考えた。

そのためカラマネロを捕まえる手伝いはできなかつたけれど：俺はカラマネロに嫌な予感を感じ、イツシュ地方での出来事に少しだけ似ていると考えた。だからこそ、あの時危険性を考えず、追っついていけばよかつたのだ。

その後、電波の観測所で大きな爆発事故が起きたと聞き、ジュンサーさん達は無事だと言うのも話で聞いたが：あの時無理やりにも追っついていけば良かったと後悔した。

第九十一話～妹は行き倒れを発見する～

こんには妹のヒナです。ハナダジムから一番近いヤマブキシテイに行こうとしている途中です。ヤマブキシテイのナツメさんは今までなら一番行きたくないジムとして選ばれていたようですが、兄と戦った後どうやら変わったみたいですので大丈夫かなと思つてます。クリアガイドの本にはその時の悲惨さが書かれていてちよつと怖いんですけどね。まあ駄目だった場合何とか頑張つて逃げます。そしてヤマブキシテイのジムが駄目ならもしかしたら勝てるかもしれないというタマムキシテイに行こうと思つてます。

——— そんなことを考えて歩いている最中に、目の前に行き倒れで倒れている人とポケモンが見えて驚いた。

「だ、大丈夫ですか!？」

『カゲ!？』

『ピツチュ!？』

『ポケモンの方は…怪我はしていないようですね。どうかしたんですか?』

ミュウツーは人間の方はともかく、ポケモンの方を気にしているようだった。やっぱりまだ人は嫌いなのかなとちよつとだけ苦笑しながら、私はその目を瞑って呻き声を上げている人間に向かって声を出す。でも聞こえてきたのはうめき声と…お腹が盛大になる音だけだった…。

『ライツチュウウ……』

『…なるほど、どうやらお腹が空いているみたいですね。人間の方も目覚めてしまうようですよ…：…なら私はしばらく離れていることにしましょう』

「へ?!どこかへ行つちやうのミュウツー!？」

『カゲ!？』

『ピツチュ!？』

『当たり前です。ポケモンはともかく、人間の前に姿を現すつもりはないのですから…』

ですが勘違いしないでいただきたい。私はただこの場から離れるだけで、あなたたちの旅から離れるつもりはありませんよ』

「そっか…分かった。ごめんねミュウツー…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

『…いえ、分かっていただけたならそれで良いです。それに奴等と話をつけるいいチャンスですし……』

「へ？何か言った？」

『カゲ？』

『ピチュ？』

『いえ何も…では私は行きますね』

「うん分かった…ありがとうねミュウツー！」

『カゲカゲ！』

『ピチュ！』

ミュウツーは行き倒れになっているポケモン…ライチュウから話を聞いたらしく、お腹が空いていると分かり、私たちはすぐに食べ物を渡そうとリュックを開くために動

く。だがミュウツーが離れると言ったため私たちは驚き、どうして行っちゃうのか問いかけた。するとミュウツーはそろそろ起き上がるであろう人間に姿を見られて騒がれるつもりはないと言い、また私たちから姿を見せないだけだと言ってくれた。

その言葉に迷惑をかけているなど罪悪感を感じながらも礼を言つて、どこかへ行くミュウツーを手を振つて見送つた。

そして起き上がってきた人間とライチュウが私たちを見て言う。

「oh...I'm hungry.」

『ライツチュウウウ……』

「あ、そうだった！今すぐお弁当出しますから死なないでください!!」

『カゲエエ!』

『ピチュウ!』

.....

「Thank youリトルガール!!」

『ライライ!!』

「ははは…まあお腹がいっぱいになったのなら良かったです」

『カゲカゲ…』

『……ピチュウウ』

「No!!まだ腹は減ってるぜ!!」

『ライツチュウ!』

「ええまだ食べれるんですか!？」

『カゲ!?!』

『ピチュウ!?!』

行き倒れになった人間とライチュウはタケシさんお手製の弁当をすべて平らげてしまった。お弁当といつても、人間用をその行き倒れになった人が食べ、ピチュウが食べるはずだったポケモンフーズをライチュウがすべて食べたということである。

日持ちの良い…大量に作られた弁当だったと言うのにまさかすべて食べるとは思わず私たちは引き攣った笑みを浮かべてしまった。ピチュウはライチュウにすべて食べられたタケシさんお手製のポケモンフーズが空になった箱を見てちよつとだけ嫌そうな表情を浮かべ、涙目になって私に抱きついていてる。それをライチュウが近づき、ピチュウの頭を撫でて悪かったなと謝っており、少しだけ和んだ。

「俺はマチス！リトルガールが助けてくれなかったらそのままポケモンの餌になっていたかもしれないな！」

『ライライ…』

「マチ…マチスさん!?!」

『カゲ…?』

『ピチュ?』

「What?」

『ライ?』

「あ、いやあの…クチバジムのマチスさんですか?」

「Oh! That's right!!俺がクチバジムのマチスだ!」

行き倒れになっていたのはクチバジムのジムリーダーのマチスさんだった。確かに見たことある顔だったし、身体も通常の大人より何倍もあったと感じた。それにライチュウがいたことにもデジャブがあったからなるほどと納得してしまった。…というより、私カントー地方からの原作の記憶も薄れてきてるよね…兄の電話内容がなければ分からなかったかもしれないと思った。そしてヒトカゲとピチューは私が言った言葉

に驚き、何度もライチユウとマチスさんを見ている。ライチユウはその通りだと胸を叩いてヒトカゲとピチユウに言っているようでまたヒトカゲ達は驚愕していた。

でも偶然だとしてもいいチャンスだと思えた。ジムリーダーが私たちの目の前で行き倒れになり、助けたと言う状況になっっているのなら、ジム戦をしてもらうことができずとも、もしかしたらと考えたからだ。ある意味恩をバトルで売ってもらおうような行為だけれど…それでもジムバツチの3つ目を手に入れるために仕方がないと決意する。

私は真剣な表情でマチスさんを見る。マチスさんは私の水筒の水を飲んでいて、どうかしたか？と笑みを浮かべて言う。

「あの…マチスさん…私はヒナ。ある勝負をしていて、ジムバツチを3つ集める旅をしてマサラタウンからここまで来ました。だからジム戦受けさせてください!!」

「ジム戦？ No…俺はリトルガールからのバトルは受けないぞ」

『ライライ』

「何で…ですか!？」

『カゲカゲ!』

『ピチユウピチユウ!』

「もしもそれが本当だとしたら…その幼さで旅に出た度胸は認めてやる。でもリトル

ガールには俺のジムは無謀だ。他のジムを受けろ」

『ライライ』

「それは…見た目だけで弱いと決めつけていると言うことですか？それとも弁当の恩を返さないと…」

『カゲ!!』

『ピチュウ!!』

「No!!そんなわけないだろ！リトルガールには感謝しているさ。でも、そんなまだまだ進化も何もしていないbaby相手じゃ勝ち目ねえよ」

『ライライ』

「……………」

『カゲカゲ!!』

『ピツチュウウ!!』

つまり、マクスさんは私たちに親切心で言っているのだろうと思った。でもそれは余計に弱いから勝負は止めとけと言っているような内容だというのを感じてしまった。でもそれを聞いたヒトカゲとピチュウが負けなと言うこと、強いんだと鳴き声を上げる。それはライチュウが肩をすくめたことによつてただの負け犬の遠吠えのように

なってしまった。だからこそ、私たちは悔しいと言う感情と、マチスさん達がこのまま頼み込んだとしても勝負を受けてくれないと言うことが分かって顔を俯かせた。ヒトカゲとピチュウはいまだにライチュウを睨みつけているけれど、それは勝負ができないと言う諦めと、トレーナーになった時に勝負するからその時は覚悟しろよという決心のようにも感じてしまった。だからこそ、仕方がないと私たちはマチスさんと別れてから目標であるヤマブキシテイに行こうと決意する。

だが、マチスさんが何かに気づいたような表情をして私に問いかけてきた。

「そういえばリトルガール…マサラタウンから来たっていったな？」

「え、はい…マサラタウン出身ですから」

「Oh…なら【サトシ】という少年は知っているか？」

「ああ…【サトシ】は私の兄です」

『…カゲカゲ』

『…ピツチュ』

「ほう…リトルガールのBrother…面白い」

『ライライ…！』

恐らくマチスさんは兄と戦ったことを覚えているんだろうと思った。いったい何をやらかしたんだろうと言う考えと：兄という言葉聞いて興味を持ったという表情になつたマチスさんに、もしかしたらと期待する。兄はカント―地方を旅に出る時から：ずつとやらかしくつていたのは分かっているからだ。もしもマチスさんが兄について知っていて：そしてその強さに興味をもっているのだとしたら：【サトシ】の妹である私もバトルでできるのではないかと思つたのだ。年齢で判断するよりも：トレーナーじゃないからと考えるよりも、兄の非常識で圧倒的な強さを見てきたのなら、私のバトルを受けてくれるかもしれないと思つた。私は兄と違って一般のトレーナーと変わらない人間だからマチスさんに失望されるかもしれない。でも今はバトルできるときっかけがあれば何でもよかった。たとえ失望されたとしても：バトルを受けてくれれば、マチスさんに勝てればそれでいいと思えたのだ。それにマチスさんも兄のことを覚えていて、私に興味を持ったような表情でじつと見つめている。

そしてマチスさんは私の帽子越しの頭を撫でて力強く言つた。

「OK!!リトルガールの勝負受けて立とう！サトシの妹であるリトルガールのバトルに興味を持ったからな！」

『ライツチュウ!!』

「本当ですか!?!ありがとうございます!!」

『カゲ!カゲカゲ!!』

『ピチュピチュ!』

私たちは頭を下げてマチスさんの言葉を喜ぶ。ヒトカゲとピチューについてはバトルできるから絶対にライチュウに勝つてやると気合いを入れているようだ。なんにせよこれは全て兄のおかげだと考え、複雑な気持ちになりながらも、私たちはクチバシテイへ向かうことになった。

第百九十二話く妹は電気の威力を見るく

こんにちは妹のヒナです。マチスさんがヤマブキシティのポケモンセンターでクチバジムに電話をして待っている間にご飯を食べることになりました。お金持っていたのに何であそこで行き倒れみたいになっていたんだらうと呆れていたらマチスさんが食べ物持つてなくて町に戻るのも困難でそうなったと笑いながら説明してくれました。まあつまり準備不足だったようです。今度旅に出る時はそうならないように気をつけようと決心しました。栄養バーたくさん持つてきていて本当に良かった…。

そして、私たちは現在ごはんを食べているのだが、まるでカビゴンが食べるような量をマチスさんとライチュウが食べていて、私たちはそれを見ているだけでお腹がいっぱいになってしまった。でも食べないとクチバジムのジム戦で力がでないかもしれないと私たちは頑張つて自分たちの料理を食べた。いつも食べている量だというのに、大盛

りにして食べたような気になってしまったぐらいマチスさんたちの食べっぷりは凄かったと言っておく。

「リトルガール、そろそろ準備しておけよ…迎えが来たらすぐにジム戦だからな」

『ライライ!』

「…はい。分かっています!」

『カゲカゲ!』

『ピツチュ!!』

私たちはマチスさんから離れて話し合いを始めた。時間がないと言うのは分かっているけれど、修行はできなくても作戦ぐらいは立てられると思っただけからだ。そして話し合いはマチスさん達とどう戦っていくかの戦略。兄から前に聞いた話だとマチスさんのライチュウはすぐに進化したためスピード重視でないから勝負するなら速さで決まるかもしれないと思っただけ。速さならヒトカゲもピチュも通常より上の方だから大丈夫だろう。先程マチスさんからの話だと勝負は2対2で行うらしい。私がヒトカゲとピチュで戦うからマチスさんも2体で戦うと言うことだ。でもその2体のうち1体はおそらくライチュウだろう。だからこそまず先にライチュウに勝つことを考えて話し合った。

.....

迎えが来たのはしばらくした後だった。ジムで戦いを教えていると言うジムトレーナーが車で迎えに来て、マチスさんが私たちに時間だと言って一緒に行くことになった。そして車に乗ってから待つこと数十分で着き、すぐにクチバジムの中へ入って勝負するためにバトル場へと向かう。

「リトルガール…覚悟はできたか？」

『ライ?』

「もちろんです!」

『カゲカゲ!』

『ピツチュウ!』

「ok!なら楽しませてもらうぜ!サトシの妹であるリトルガールのバトルを!!」

『ライツチュウ!!』

「では、ジムリーダーマチス対挑戦者ヒナの試合を始める…試合開始!」

「行くよピチュウ!」

『ピッチュー！』

「ライチュウ、楽しんで来い！」

『ライライ！』

試合開始と同時に出したポケモンはピチューとライチュウ：つまり未進化と進化形との戦いだ。ピチューはライチュウを見て睨みつけ、絶対に勝つてやると電気をビリビリと放電させながら威嚇していた。対してライチュウはどんなバトルが楽しめるのかと期待しているようにピチューを見て、好戦的な目で笑みを浮かべた。

そんなピチューとライチュウを見た私とマチスさんはお互い笑みを浮かべ、口を開く。

「ピチュー、１０まんボルト!!」

『ピッチューウ!!』

「ライチュウ、こつちも１０まんボルトだ」

『ライライツチューウ!!』

ピチューとライチュウの１０まんボルトが炸裂する。電撃についてはライチュウの方が上のようにピチューが頑張つて大きな電撃で攻撃しているというのにライチュウ

の電撃を守るような状態になっている。このままではいけないだろうと私は口を開いて叫んだ。

「ピチュウ、大きく右にジャンプしてから走って！」

『ピチュウ！ピツチュウウ!!』

「ライチュウ、構えろ」

『ライライ』

ライチュウはただ目を瞑り、ピチュウがやってくるのを待っているようだった。待っているのならばむやみに突撃し、近距離戦にする必要はないだろうとピチュウに向かつて10まんボルトをもう一度やつてもらおう。だがライチュウはその攻撃が予測できたのか2歩後ろに下がって避けた。そしてピチュウに向かつて大きく近づいて……。

「サトシにバトルでの話を聞いていたかもしれないが、今の俺たちはスピード戦でもやっていけるんだぜ……ライチュウ、メガトンパンチ！」

『ライライ!』

「ツ……ピチュウ避けて！」

『ピチュウ……ピツチュウ……!?!』

ライチュウが一気にこちらまでやって来たのはどうやらこうそくいどうを使ったからだったみたいだ。話で聞いていたバトルとは違ったスピード戦を仕掛けてきたことに私たちは驚き、そしてマクスさんは私たちに向かって今までの戦い方じゃないと笑って言いながら、攻撃してきた。

ピチュウに向かって避けてと指示をしたのだが、ピチュウが避けようとした瞬間それが分かっていているかのように避けた方向へ攻撃してくる。そしてそのままピチュウが吹っ飛び、壁に激突してしまった。だが、フラフラになりながらもピチュウはライチュウを睨みつけて負けないと叫んでいた。

「o k ! その心意気は良い。だがもう終いだ…ライチュウ、もう一度メガトンパンチ！」
『ライツチュウ！』

「避けてピチュウ！！」

『ピチュウ…ピイツチュウウウウ!!!』

「What!？」

『ライ?!』

フラフラになっているピチュウはそのまま力が出せないようだった。避ける力も残っておらず、ただライチュウを睨みつけていて…このままだとライチュウのメガトン

パンチで戦闘不能になってしまおうと思い、避けてと叫ぶ。そんな私と満身創痍なピチューに、ライチユウとマチスさんはただ笑っていたまま、ピチューに攻撃を当ててきた…。

だが、ピチューはまだ戦う気力が残っていた。叫んだ私の声に反応して、このままじゃいけないと思ったのだろう。ピチューは大きく叫んでライチユウを睨みつけて――そしてメガトンパンチを尻尾で受け止めたのだ。

「…あれは、アイアンテール…!!」

『ピチューピチュー!!』

「このバトルの中でアイアンテールを習得したと言うことか…ハハハ!! 流星はサトシの Sister!!」

『ライライ!!』

尻尾が光り輝き、まるで兄のピカチュウのアイアンテールのような状態になったことに私は驚いた。でもピチューはやつとできた!と大喜びしているようで、笑みを浮かべてライチユウのメガトンパンチを跳ね返す。ライチユウは2歩後ろに引き、ピチューを見ながらも面白いとマチスさんと一緒に好戦的に笑っていた。

でもピチューの体力は限界だ。アイアンテールができたことに喜んでいるが息が乱れ、疲れているのがわかる。このままだと負けてしまうだろうと言う気持ちが出てきてしまい……でもその感情を押し込めてピチューに向かって言う。

「ピチュー……この一撃をヒトカゲに託すことになるかもしれない……もしかしたら、あなたを大きく傷つけることになるかもしれない……それでもやってくれる？」

『ピチュー……ピイツチュウウウウ!!!』

「……ありがとうピチュー……」

『ピチューピチュー!』

「絆か……ライチュウ、こつちも俺たちの絆の強さを見せてやろう……」

『ライツチュウ!』

私はピチューにこの次の攻撃で負けるかもしれないということ、そして傷つく可能性があるということを使う。もしもそれにピチューが動揺し、嫌だと言うのなら接近戦ではなく10まんボルトで戦おうと思った。でもピチューは私に向かって頷いて片手をライチュウに向けて、そして好戦的に笑ったのだ。その笑いと叫び声に私はピチューが大丈夫だと言うことを悟り、ありがとうと笑みを浮かべた。

ピチューと私の言葉にマチスさんは笑みを浮かべてライチュウに向かって言う。ライチュウはマチスさんを見て頷き、小さく笑いながらもピチューを見つめていた。

そしてそれぞれが睨み合い、見つめ合った後：マチスさんと私はそれぞれ口を開いて叫んだ――。

「ライチュウ、メガトンパンチ！」

『ライライツチュウ!!』

「ピチュー、アイアンテール!!」

『ピイツチュウウ!!』

ライチュウのメガトンパンチとピチューのアイアンテールが衝突する。その力は大きく、周りに突風が巻き起こるほどだった。そしてその後、2体が離れていき、しばらくした後ゆらりと身体が動いて地面に向かって倒れたのは：ピチューの方だった。

「ピチュー戦闘不能。ライチュウの勝ち！」

『ピイツチュウ……』

「…ありがとうピチュー。本当にありがとう！」

『ピチューピチュー…!』

『カゲ!カゲカゲ!』

『ピチュー…!』

ピチューの元へ近づき抱き上げて先程私が指示を出していた場所まで戻る。そしてピチューに礼を言っただけでボールへ戻そうかどうか考える。でもピチューはボールを見た瞬間ここに居たいと言うこと、後ろで見ていると首を振り嫌そうな顔をしながら叫んだため、私は分かったと領き、ゆっくりと私の後ろの方に座らせた。座っているピチューにリュックからオレンのみを出して食べさせ、観戦してもらおう。そんなピチューにヒトカゲが近づいて、ピチューに向かって手を出してハイタッチをした。それは、ヒトカゲからのありがとうという気持ちであり…次は頑張つて勝つという気合いでもあったのだろう。

そして私たちは向き合う。マチスさんとライチュウを見て…絶対に勝たなければと気合を入れた。

「行くよ…ヒトカゲ」

『カゲ！』

第百九十三話く妹たちは勝敗を決したく

バトル場には緊張感が漂っていた。すべてを叩き壊してしまいそうなライチュウの雰囲気と、電撃がバトル場に流れていたのだから。それらに萎縮されず、ヒトカゲはただひたすら勝ちたいという気持ちでライチュウを睨みつけていた。アイアンテールを土壇場で使えるようになったピチュウの分まで戦うという強い思いでいたからだ。ヒナと一緒に勝負に勝つと心から誓ったからこそ、そしてピチュウの勝負を無駄にしないためにも：ヒトカゲは卵から生まれて間もない頃の泣くことしかできなかつた弱さを捨て、ライチュウを睨み付け泣かず震えることなく向かい合った。

マチスとライチュウはただひたすらこの目の前にいるヒナとヒトカゲが気に入っていた。まだまだ幼くてトレーナー未満だと言うのに勝負に諦めることなく、レベル差や

進化の差にも食らいついて絶対に勝ってやるという覚悟を見せる彼女たちに、さすがサトシの妹だと考えていたのだ。

マチスたちが思い出すのはサトシとの勝負。サトシはマチスのライチュウよりもとても小さなピカチュウを連れて勝負に挑んできた。今のヒナのような表情をして、ジム戦をお願います！と言ってきたのだ。その時のマチスとライチュウは連勝していて油断しきっていた。まだライチュウに進化していないという見た目で判断し、そして子供だからと笑ったことに：勝負の後にはものすごく後悔したものだ。マチスたちは考える。

サトシとピカチュウの圧倒的なコンビネーションとその力の実力の差が、バトルで瞬殺されるという事態になってしまったのだ。その時、なぜ負けたのか何度も何度も考えていた。後悔し、ジムリーダーを辞めてしまおうかと考えた時もあった。

だが、負けたということのおかげでマチスとライチュウは自身に欠けていたものを見つけることができたのだ。ただ勝つことが強さのすべてじゃない：本当に強いのはトレーナーとポケモンとの絆の強さなのだ。と知ることができた。

だからこそ、サトシの妹であるヒナにその力を見せてやりたいと：いつかまた、サトシとバトルできることを考えてそう心に誓っていた。

「okリトルガール？準備はいいか？」

『ライライ？』

「はい、大丈夫です!!」

『カゲカゲ!』

「…では、ライチュウ対ヒトカゲの試合を開始する…試合開始!」

「ヒトカゲ、回転して猛火の炎!」

『カゲエエ!!』

「oh! Wonderful!!」

『ライ…!?』

「ライチュウ、10まんボルトで吹っ飛ばせ」

『ライライツチュウウ!!』

試合開始と同時にヒトカゲとヒナの攻撃が始まる。それは通常のポケモンの技とは違って独自に開発されたと思えるものだった。ジャンプしてから回転し、炎をまき散らすソレは、まるでほのおのうずのようだ。マチスは感じていたのだ。…いや、あるいはうずしおのように…それかとても大きな炎の竜巻のように凄まじいものだろう。

燃え盛る炎が竜巻のようにライチュウに襲ってくるのを見てマチスは口笛を吹いて

絶賛しながらもライチュウに10まんボルトの技で吹っ飛ばすように指示する。ライチュウはその指示を聞いて10まんボルトで吹っ飛ばしていった。その時竜巻型の炎が10まんボルトに当たって爆発し、キラキラと炎の粉がバトル場の周りに散っている。ヒナの後ろでオレンのみを食べ、フラフラになりながらも頑張れと一生懸命声を出していたピチュウはその光景を見て目を輝かせた。自分もこのような技を使ってみたいと、そう考えてしまったのだ。

一方ヒナとヒトカゲは回転して放った技が効かないと言うことに少しだけ焦りながらも、攻撃をするために動く。

「ヒトカゲ、走りながら連続ひのこ！」

『カゲカゲ！』

「そう来るか！ならこっちは構えて、そして全て躲せ!!」

『ラーイー！』

走りながらひのこを放つ。だがそれらすべてをジャンプし、そして尻尾で叩きつける姿にレベル差と実力の差が分かってしまいこのままでは駄目だと感じたヒナがヒトカゲを見て「領いた」。その領きを見たヒトカゲも一緒に領いて、そして行動に移す。それはクチバジムに行く前に話していた作戦であり、リスクを伴うであろう戦いになるかも

しれない行動だった。

ヒトカゲがライチュウに向かって接近してきたため、マチスが笑みを浮かべて口を開く。

「それじゃあ意味がねえ。ライチュウ、メガトンキック…何ツ?」

『ラ、ライ!?!』

「よし今よヒトカゲ! 猛火の炎!!」

『カゲエエエ!!』

接近してきたからこそ、ライチュウとマチスはそのまま迎え撃つつもりでいたのだろう。だがヒトカゲはそのまま攻撃しようとしてきたライチュウを避けて、後ろへと回り込んできた。そのスピードの速さとヒトカゲが技を放たないということにマチスとライチュウは驚く。

バトルに勝つという闘争心が強く感じ取れたからこそ、接近戦をしてくるのだろうと…すぐに攻めに来るのだらうと思いついていたのだ。でもヒトカゲはその考えよりも予想外な動きをしてきたことよってライチュウとマチスの動きは一瞬止まる。

隙ができたと判断したヒナが大きく声を出して叫び、指示を出した。その声を聞いたヒトカゲがライチュウの後ろからかえんほうしゃには劣るが凄まじい炎をライチュウ

に向けて放ったのだ。直撃を受けたライチュウは痛そうな声を上げて地面に倒れ込む。だがすぐに起き上がり、ヒトカゲを見た。でも直撃を受けた背中が痛むのかふらついていて…そして時折身体に炎のような燃える痛みの声がライチュウから聞こえてきた。

「shit!!やけどか!!?」

『ライ…ライ…』

「よし状態異常!次で決めるわよヒトカゲ!」

『カゲカゲ!!』

ライチュウは背中を庇うように動き、ヒトカゲがすぐに攻撃できるように動こうとする。ヒナとマチスもすぐに指示が飛ばせるように相手を見て……そしてお互い口を開いた。

「ライチュウ10まんボルト!!」

『ライ…ライツチュウウウウ!!!』

「ヒトカゲ!猛火の炎!!」

『カゲエエエエ!!!』

凄まじい電撃と炎がバトル場に炸裂し、衝突する。技同士の衝突によって爆発し、大きな黒い煙があたりに包み込まれた。爆発によって突風まで巻き起こったバトル場に……勝敗はどうなったのか、そしてヒトカゲとライチュウは無事なのかとヒナとマチスは考えながら、じつと黒煙の中心を見つめる。やがてそれらが収まり、バトル場の光景がはつきりと見えるようになった。

……そして見えてきたのは2体が目を回し倒れている姿だった。その光景に口を閉ざし、拳を握りしめるヒナとピチューを見つめたマチスが声を出す。

「……審判！」

「あ、はい……ライチュウとヒトカゲ共に戦闘不能。挑戦者のポケモンが2体倒れたことにより、ジムリーダーマチスの勝利！」

ヒナは帽子を深くかぶり、後ろにいるピチューを優しく抱きしめてからヒトカゲの元へ向かう。ヒトカゲはしばらくの間目を回していたが、ヒナに抱きしめられたことによつて目を覚まし、勝負はまだ終わってないとはかりに立ち上がろうとする。でもそれを制したのはヒナだった。

『カゲ…カゲカゲ!!』

「もういいの…もういいのよヒトカゲ!…ありがとう」

『……カゲカ』

『ピイツチュ…』

「ヒトカゲもピチュユーも…本当に良くやってくれたわ。勝負を最後まで諦めなかった…私の指示がおいつかなかったし、ちゃんと努力が足りなかっただけ…だから、ごめんね」

『カゲ!カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!!』

「違うって言うてるの?…ありがとうヒトカゲにピチュユー…でも、負けちゃった」

『カゲ…』

『ピチュ…』

ヒトカゲにオレンのみを食べさせたヒナは、そのままピチュユーと一緒に抱きしめてあげがとうと言う。その声に反応したヒトカゲとピチュユーはヒナの話を聞いていた。自分のせいだとヒナが自身を責めるような言葉を言うと、すぐに違うと言って首を横に振る。それを見たヒナはまた抱きしめてあげがとうと言う。

でも勝負に負けたことに…そしてジムバッチを貰えないことに悔しいと言う気持ちはヒナたちにあつた。帽子を深くかぶり、抱きしめられてるヒトカゲやピチューにか、ヒナの泣きそうな表情は見えず…今は泣いては駄目だと自信に強くそう言いかける。ヒナも泣くのを我慢しているというのに、ヒトカゲやピチューが先に泣いたら駄目だと思っているからだつた。でもそんなヒナたちに話しかけるのは、ライチュウを回復させて笑みを浮かべたマチスだつた。

「no…リトルガールもポケモンたちもよく頑張つたと思つて」

『…ライライ』

「…マチスさん…でも私たちは勝負に負けて…バッチをゲットするといふことができませんでした…」

『カゲ…』

『ピチュ…』

「ハッ！リトルガールは勝負には負けたが、バッチを渡さないとは言つてないだろ？」

『ライツチュ！』

「……………え？」

『カゲ？』

『ピチュユ?』

ヒナ達は茫然としてマチスたちを見上げる。マチスはただ笑みを浮かべて、クチバジム認定のオレンジバッチをヒナたちに見せた。ライチュウ達もマチスの行動に笑みを浮かべ、ヒナたちを見つめる。

「ほら、オレンジバッチだ」

「…貰えないです」

『カゲ!』

『ピチュユ!』

「What? 怒ってるのか?」

『ライ?』

「当たり前です…私たちは勝負に負けて…それでバッチを貰える資格なんてありません

よ…!!」

『カゲ…!』

『ピチュユ…!』

勝負に負けたことは、バッチを貰えないということなのだ。ヒナたちは考えていた。むしろバッチを渡そうとするマチスの考えに怒りを覚えるほど、先程の勝負が無駄になっってしまうのではないかと感情的になりながらもそう考えていたのだ。ジム戦に挑ん

だからには勝負でバッチを受け取るのが普通だろう。でもマチスはそうじゃないと首を横に振って…そして力強く笑う。

「ジムリーダーは勝負に勝ったらバッチを渡すのが普通だが…相手を認めた場合も同じだ…つまりリトルガールを認めたってことさ」

『ライ』

「いえ…それでも私は…」

「okじゃあこうしよう。リトルガールがトレーナーになれる年齢になって…旅に出た時にまたバトルをしよう。その時までの再戦の証として持っていてくれ」

『ライツチュー！』

「……………」

『……カゲ！』

『…ピチュー！』

「…ヒトカゲ、ピチュー…分かった」

ヒナはマチスを見つめ、考えていた。勝負をしたということだけでヒトカゲ達を認め、またバトルをしようという意味でバッチを渡すと言うことに…それでいいのか悩んでい

たからだ。でもそれはヒトカゲとピチューが力強い声を出して頷いたことよって考えは変わる。バツチを受け取ると言うより、預かるといった方が良いかもしれない。勝負に勝ったとは言えないけれど、マチスからトレーナーとして認められたまたバトルするから受け取れと言う言葉に…ヒナは頷いたのだ。ヒトカゲとピチューが次は絶対に負けないという覚悟を決めたことを見て、自分もその時に絶対に勝たなければと考えたのだ。だからこそ受け取った。

勝負に勝ったとは言えないけれど、次は絶対に負けないという覚悟として、預かっていることにしたのだ。

「…ありがとうございます！ マチスさん、ライチュウ！」

『カゲカゲ!!』

『ピツチュ!!』

「いや、こつちこそ…サトシとの勝負を思い出す戦法を見せてくれて…Thank you」

『ライツチュ!!』

ヒナとマチスは握手をして…そしてヒトカゲとピチューはライチュウと握手をして、次のバトルの約束をした。今度は絶対に負けないと言う覚悟をヒナたちが…そしてマチスたちは次も負ける気はないと言う好戦的な笑みを浮かべて考えていた。

第百九十四話く兄はバトルシャトーを知るく

こんにちは兄のサトシです。ポケモンセンターに一晩泊まった俺たちは現在セレナとユリーカからある建物で行われている話を聞いている最中です。

どうやらセレナがユリーカと一緒にジョーイさんに話を聞いて、それで調べていたみたいだ。何やら絶対に楽しんでもらえるだろうと自信満々に、その建物について話し始めた。

「…バトルシャトー？」

『ピイカ？』

「初めて聞きましたね…」

「バトルができるって有名なの。サトシが絶対に好きになれるところよ!!近くにあるか

「ら行ってみましょう！」

「へえ面白そうだな…」

『ピカツチュ！』

「でしょ？」

「バトル…？つというと普通にトレーナーとバトルできるといことですか？」

「ううん違うよ！バトルして勝ったら何かもらえるってジョーイさんが言ってた！」

『デネデネ！』

「何かについては教えてくれなかったんだけどね…」

「まあとにかく行ってみればわかる…？！？」

『ピツ!?!』

「それなら爵位だよウ！」

バトルシャトーという話を聞くと、イツシユ地方にあったポケモンバトルクラブを思い出す。でもこのカロス地方では何かを貰えるということから、大会のようなものなのかもしれないと考えた。

とにかく行ってみればわかるかと立ち上がろうとした時、後ろに誰かがいると感じて

すぐに警戒する。カラマネロの件から何かあつては困るからとピカチュウと俺がとつさに振り返つたら、後ろにいたのは2人のトレーナーだった。顔が似ているから兄弟かもしれないと考える。

まあおそらく俺たちの話を聞いてバトルシャトーについて教えてくれるらしい。それを見て悪い奴らじゃないと判断した俺とピカチュウはお互いの顔を見てから頷きあつた。兄弟の肩に乗っているヤヤコマと…進化形のヒノヤコマを見て凶鑑で調べ、挨拶をする。そして兄弟がバトルシャトーを詳しく説明するのは面倒だからとりあえず見学しに来いということであつた。俺たちは一緒に行くことになつた。…ちよつと口調がうざいと思つたのはまあ仕方ないよな。

.....

歩いている途中、兄弟が何でバトルシャトーに行くのかを教えてくださいました。弟のテスラの方はバトルシャトーで爵位を貰うために挑戦したいということらしく、兄の方は弟を応援するために…そしてバトルシャトーでのデビュー戦を見るために一緒に来たと言ふ。普通に喋ることもできるが、たまにラッパのような変な口調になつて話すのを聞いて俺たちは苦笑してしまつた。

だが見えてきたバトルシャトーにセレナやユリーカが綺麗だと言つて目を輝かせ、俺とピカチュウ、そしてシトロンはバトルシャトーの近くに見えているバトル場を見つけてあそこで挑戦するのかと考えた。水に浮かぶバトル場は、イツシユ地方のポケモンバトルクラブとは違って大きくて眺めが良い。それに屋外でやると言うことから自然に発生した雨でバトルするのも…天候を変えてバトルするのも面白くなりそうだと考えた。

そして出入り口の近くに書かれた文字は、爵位で強さを示せというある意味トレナーとして挑戦し甲斐のあるところなのだと感じた。イツシユ地方のポケモンバトルクラブでは様々なトレナーとバトルすることは可能だったが、こういった強さを決定付けていき、より高い爵位を目指すということはなかった。だからこそ面白いと感じ、笑みを浮かべた。

「中に入ろうよう！」

「俺のバトルを見ていけよう！」

「…おう…そうだな」

『…ピイカツチュ』

ラップ気味の口調で話す彼らに背を押され、バトルシャトーの扉を開ける。そして中

に見えてきたのはかなり高級感あふれる屋敷の内部だった。鎧や絵が人に見えやすいように置かれ、立派な花が高そうな花瓶によって飾られていた。それらはまるで美術館のような光景だと俺たちは思えた。そしてそんな光景を遮るのはバトルシャトーの案内人と思わしき女性がお辞儀をしてからこちらに向かつて声をかけたからだった。

「バロン、ニコラ様…バトルシャトーにおかえりなさいませ」

「…バロンって…もしかして爵位のことか？」

『ピイカ？』

「ああそうだけ。だがまずはちよつと待っていてくれ」

普通の口調になったニコラは、弟を連れて女性に近づき、真剣な表情で話しかけた。俺たちは邪魔したらいけないだろうと数歩後ろに下がり、ニコラたちの話を聞いて待つ。

「今日は弟を連れてきました。デビュー戦をお願いします」

「テスラです…よろしくお願いします！」

「これはこれは…ニコラ様、弟様のデビュー誠におめでとうございます」

「どうも！」

「おやおや…あなたは…」

ニコラがテスラを紹介し、挑戦させてくれと頼みこむ。それを聞いた女性が頷いて案内しようとしたが、その時に扉の奥から紳士のような老人がやってきたために立ち止まる。老人はまずニコラたちを見て挑戦することに祝福し、頑張れと言う意味で声をかけている。それにテスラが頭を下げてありがとうございますと声を出して礼を言う。

そして今度は、老人が俺たちを見て微笑み口を開いた。

「あなたは…サトシ様ですね。お噂はかねがね伺っております」

「はあ…えつと誰でしょう…？」

『ピイカツチュ？』

「サトシお前有名なのか!？」

「いや有名つて言うより…勝手に周りに知られてるだけだぜ」

『ピカピカ…』

「でもたたくさんの人が知っているぐらい凄いのよサトシつて！」

「そうなのか…彼はイツコンさんこの当主なんだ」

「初めまして…あなたのような素晴らしいお客様を迎えるとは大変に嬉しく思っております」

ます。どうでしょう？サトシ様もバトルシャトーに挑戦していかれてはいかがですか？」

「本当ですか？俺も挑戦していききたいと思っていましたし…やります！」

『ピツカツチュウ!!』

老人はイツコンさんという人で、このバトルシャトーを創り上げた当主だとニコラから教えてくれた。ニコラとテスラは俺を見てイツコンさんから聞いた言葉で有名なのかと反応していたが、俺とピカチュウはそれに微妙な表情を浮かべて答えた。でもセレナがまるで自分のことのように嬉しそうな表情で話したためにニコラたちはそうなのかと納得して、イツコンさんのことを話してくれた。そしてイツコンさんは俺に向かってバトルシャトーに挑戦してはどうかと誘ってくれたため、その言葉をありがたく受け入れようと考え、笑みを浮かべて頷いた。

イツコンさんがサロンという対戦相手を選んでいく場所へ案内してもらっている途中で話を聞くことができた。バトルシャトーは爵位を貰い、バトルしていつて勝つことが多くなればなるほど爵位を高くすることができるということ、そして自分と同じ爵位の人間しかバトルができないということだった。

俺としてはこのままジム戦をするために旅を続けていききたいからこのバトルシャ

トーで爵位を上げるとなると時間がかかりそうだなということと…旅を終えて、またカロス地方に来た時にこのバトルシャトーに来ようという楽しみが増えた意味での考えがあった。

そしてやって来たサロンでは様々なトレーナー達が寛いでいた。扉を開けて来た俺たちに好戦的な瞳で見る彼らに、トレーナーとして戦うのが楽しみであり、面白そうだと笑みを浮かべる。だがピカチュウは何かを発見したのか俺に向かって話しかけた。

『ピカピ！ピカツチュ!!』

「どうしたピカチュウ…って何だあの人…」

「か、壁に人がよじ登ってる…?!」

「ああ、彼はザクロさんだよ。いつも登っているんだ」

「凄く強いんだよね…!」

「へ、へえ…」

『ピイカ…』

登っているんだと説明されてもよく分からないと言いたい。まあ強いけれど変わっ

た人なんだと認識して、俺たちは視線を逸らした。そしてニコラが前へ進み出て声を出すのを見る。それはバロンとして対戦してくれる人はいないかという誘いであつて、バトルシャトーとしての対戦の仕方なんだと感じた。

そしてニコラに向けて白い手袋を投げる一人の男性が近づき、対戦を受けようと言つてきた。その言葉にニコラは頷き、勝負をするということになつた。すると窓が開け放たれ、バトル場へニコラと男性が行くことになつた。観戦できるようにテラスがあつて、他のバトルシャトーで爵位を持つトレイナー達がバトルを見ようと歩く。俺たちも面白そうだと考えてテラスへ行き、そのバトルを観戦することになつた。

バトルをする前にニコラたちはそれぞれバロンの象徴でもある白色のマントを着てやるらしい。爵位はナイト……つまり騎士という意味も含まれているからこそ、マントはその象徴でもあるのだろうと考えた。礼節や格調を重んじるべしというイツコンさんの話を聞きながら、バトル場を見つめる。通常のジム戦やバトルとは違ってバトルの始め方にもやり方があるのだとピカチュウと一緒にじつと見つめる。その間にもユリールが格好いいと目を輝かせ、テスラたちと一緒にバトルを応援する。

そしてバトルが始まり……ヒノヤコマとヨノワールの戦いは一気に激しくなつていく。ヨノワールのかみなりパンチに直撃したと言うのにヒノヤコマがそれを耐えてニトロ口チャージで攻撃する。それによつて土煙が舞い、ヨノワールの姿が見えなくなつた。

——と同時に、俺の背を叩く誰かが声を出して呼ぶ。

「やっほー！久しぶりねサトシ君！」

「あれ…ビオラさん!？」

『ピカ!?!』

「まさかここで会うだなんて思ってもみなかったわ！でもサトシ君あんなに強いんだから当然か！」

「あ、あの…どうしてここにいるんでしょうか？」

「私も爵位を持っているからよ。こう見えても私、ダッチエスの称号を持っているんだから！」

「ダッチエス？」

『…デネ?』

「二番目に強い爵位…デュークの女性用の呼び方よ！」

「あ、女性と男性で爵位の呼び方って違うんですね！」

「なるほど…確かにビオラさんって強いですよね」

『ピカピカ』

「ありがとうサトシ君。でもサトシ君ならすぐに最上位の爵位まで取れそうよね」

「いやそれはどうでしょう？バトルは最後までどうなるのかわかりませんから」

『ピツカツチュ』

「確かにそうね…でもサトシ君なら必ずできるって私は信じているわ！」

「…ありがとうございます」

『ピツカツチュ』

ピオラさんからいろいろと話を聞いている最中でバトルはもう終了していたらしく、審判の声がバトル場に響いたためにバトルを見るために振り返る。そして見えてきたのはヨノワールが倒れ、ヒノヤコマが勝利している光景だった。ニコラが勝利したために爵位を上げることができたため、マントの色が白から青へ変わった。

そして大きな拍手で祝福され…ザクロさんがよじ登っていた窓から落ちた。

「ああまたなの…」

「サトシ、彼ってさっきの人よね？」

「ああ…ピオラさん。またってというのは？」

「彼はポケモン同士の勝負を見た後、つい手を離して拍手しちゃうのよ…それで落ちるって分かっているのに」

「いやいや…つい拍手しちゃうんですよね…素晴らしいバトルとポケモンに愛を！」

「ザクロ君ねえ…そう思ってるなら降りてから拍手すれば？」

「壁が僕を離してくれないんですよ……この壁はいけない。滑らかで艶やかで僕を誘うんですー！」

「何か変な人……」

『デネ……』

「こらユリーカ！声が大きいいよ！」

「でもまあ同意だな……」

『ピイカ……』

「面白いとは思うけどね」

ビオラさんがザクロロさんについて話をしてくれた。壁を登らずにはいられないと言うこと、そしてかなり強いと言うことを……ビオラさんはジムリーダーだから、ジムリーダーと同等かそれ以上の力を持つているということになる。それを聞いて勝負したいと思ったけれど、称号はデュークで、上から二番目に強いと分かり、バトルシャトーで称号を上上げていかなければ対戦できないと知って少しだけ残念に思えた。

でも、次に爵位を手に入れるために挑戦する俺とテスラの勝負となったため、気持ちがそちらへ向く。まだまだ爵位を貰っていないのだから、ここから始めなければいけない。そのためにもいい勝負をしようと思ひ、階段を下りてテスラと向かい合う。

「よろしくなテスラ…良きバトルを」

「うん。よろしくサトシ…良きバトルを」

それぞれバトルシヤトーで行われるバトルの仕方に従ってボールを持ち、笑みを浮かべて言う。テスラも同じように…少しだけ緊張していたけれど笑ってバトルを楽しもうとしていた。

第百九十五話～兄はバトルシャトーに挑む～

バトル場では挑戦者同士の戦いが始まるうとしていた。バトルシャトーにて初のバトルを行うと言うことから審判によって拍手が起こり、始まりを待つ観戦者で賑わう。セレナたちも一緒に拍手をしてバトルが始まるのを待っている。

それらを見ていたビオラは椅子に座り、微笑みながら挑戦者の一人であるサトシを見ていた。

そしてそんなビオラに気づいたザクロは飲み物を持ってきて、ビオラが座っている近くの椅子に座り、話しかけた。

「…それで君は、サトシ君とバトルしているんですよね？」

「ええ、ガッツのあるトレーナーよ…ポケモンたちも凄まじく強くて…まるで今までと

は違った戦い方を見せてくれたわ！」

「今までとは違った？」

「このバトルを見ていれば分かると思うわよ。それにザクロ君を絶対に熱くしてくれるトレーナーでもあるんだから」

そう言ったビオラによってサトシへ興味を持つザクロはバトル場を見つめた。何が起きるんだろうという意味での興味と、ビオラの説明による期待という感情が起きる。

期待外れにはならないでくれという不安な感情もあつたけれど、サトシを見ている時から、何か面白いことが起きるといふ予感はしていた。その予感が当たるのかどうかはこの試合によって決まるとザクロは感じていた。

「良きバトルを」

「良きバトルを！」

サトシ達がボールを手にバトルシャトーでの流儀である挨拶をする。そしてトレーナーが指示をする場所へ向かい、サトシはボールを戻してからピカチュウに話しかけた。

ザクロは遠くの方でシトロンたちが話していた声を聞き、サトシの手に持っていた

ボールはピカチュウが最初に入っていたボールであり、使わないと分かっているもちやんと持ってきていた一つの相棒の証でもあったということが分かった。そしてテスラは持っているボールからヤヤコマを出して勝負を始める。

でんきタイプに対してヤヤコマを出す根性をサトシは気に入り、ピカチュウと一緒に笑みを浮かべてテスラたちを見ていた。テスラたちも好戦的な表情をして、絶対に勝負と意気込んでいる。

「では、バトル開始です!!」

「ピカチュウ、受け身体勢」

『ピッカツチュ!!』

「…?…よく分からないけど、フェザーダンス!」

『ヤツコツコオ!!』

フェザーダンスがピカチュウに当たろうとしていたが、すぐに反応してそれをすべて躲していく。まるで常時でんこうせつかのようなスピードに観戦者は感心し、ザク口は小さく息をのむ。そしてセレナたちはいつも通りサトシのことを応援していた。テス

ラはスピードが速いということが分かるとまずこうそくいどうでスピードを上げながら攻撃を指示する。

「ヤヤコマ、はがねのつばさ！」

『ヤッコオ!!』

「ピカチュウ、受け止めろ！」

『ピツカア!!』

「な、何ッ!？」

『ヤッコオ!?!』

はがねのつばさごとヤヤコマを受け止めたことよって小さな突風が起きる。しかしそれでもピカチュウはダメージを負っていないかのようには笑っていて、そしてヤヤコマを上へ投げた。上に投げられたヤヤコマは身体を回転させながらも、何とか体勢を整えて飛び上がる。それを見たテスラはすぐに対応をし始める。

「ヤヤコマ! こうそくいどうでスピードを上げるんだ！」

『ヤ、ヤコ…!』

「ピカチュウ、10まんボルト！」

『ピツカツチュウウウウウウ!!!』

『ヤッコオオオ!!?』

そしてテスラの指示を聞いてヤヤコマはすぐにこうそくいどうを始めた。スピードをピカチュウと同じぐらいにするためだ。

でもそれらをサトシとピカチュウはただ笑って攻撃へ移る。もう十分戦いを楽しんでと言うことと、これでもう終わりだと確信していたからだ。そんな笑みに気づかないテスラとヤヤコマはピカチュウの放つ攻撃から逃げようとする。だが10まんポルトがまるで追尾しているかのように動き、そしてこうそくいどうによってスピードが上がったヤヤコマを捕えたのだった。激しい電撃を受けたヤヤコマはその一撃で倒れてしまう。

急な展開に周りは静寂になり、すぐに拍手が巻き起こった。ビオラと座って観戦していたザクロはサトシの強さを見て思わず立ち上がり、好戦的な瞳で見つめていた。爵位さえ同じであったなら即座にバトルしたいと思えるほどの強さをサトシが見せてくれたからだ。

もちろんビオラはそんなザクロを見て、そしてサトシを見てただ微笑んでいただけだった。これからザクロがサトシとどう戦うのか見れないけれど、でも熱い戦いにはな

るはずだとビオラ自身、サトシと戦った時のことを思い出しながら考えていた。

審判がすぐに反応してサトシに勝利を宣言する。そしてまた拍手が起きていたが、サトシとテスラはそれぞれ自分たちのポケモンを労ってから、サトシは女性から貰い受けた白いマントを着て、そしてテスラはヤヤコマを自分の帽子の上に乗せてから拍手をし、おめでとうと祝福した。サトシはただ笑みを浮かべてありがとうとテスラたちに向かつて言う。

「サトシ…格好良いわ!!」

「セレナ顔赤いよ?大丈夫?」

『デネ?』

「うん大丈夫…むしろ仕方ないって諦めてるから…!!」

「ああ…ユリーカ、セレナは放っておきましょう。いつものあれですから」

「ああ、あれね…うんわかった」

『デネデネ』

その後、ビオラさんはサトシが爵位を貰ったことを祝福し、写真撮影を始めた。セレナがサトシの隣をキープして、シトロンとユリーカがその左右に並ぶ。

一枚を撮ってからもう一枚と…このまますべてが終わるはずだった——。

「ビオラ、君に勝負を挑みます」

「ええ、何時誘ってくれるのかと…待っていたわ！」

「ありや…ビオラさんとのバトルか…」

『ピイカ…』

「ザクロさんだつたよね…本当に強いのかしら…？」

「でも、ビオラさんが強いと言っていましたし…これからのバトルを見れば分かるはずですよ」

「楽しみだねデデンネ！」

『デネデネ！』

ダッチェスであるビオラと、デュークであるザクロが対戦することになったため、サトシ達は観戦席へもう一度移動し、その戦いを見学することにする。サトシはジムリーダーであるビオラとの戦いを外から見れると言うことで勉強になるだろうとケロマツとヤヤコマをボールから出してしつかりと見ておけよ？と言う。その言葉を聞いたケロマツとヤヤコマは一度サトシに向かって声を出してからじつとそのバトルを眺めていた。

バトルはかなり激しくなっていくのを観戦者たちは感じていた。ビオラはいつも通

り地面を凍らせて戦い、ザクロは鍛え上げられたがんせきふうじによってビオラのアメタマの速さを止めようとする。がんせきふうじが空から降ってくるような光景を見て今までは違った戦い方にサトシは小さく笑みを浮かべ、好戦的な瞳でじつとその様子を見つめる。もちろん肩に乗っているピカチュウ、近くで見つめているケロマツやヤヤコマもサトシと似たような目で試合を観戦する。

サトシはマサラタウンに帰った時に修行できるよう、この光景を忘れないようにとイワークのがんせきふうじの一つ一つをすべて見ていたのだ。周りにいた観戦者たちはビオラのアメタマによる凍らされたバトルフィールドの使い方やイワークのコントロールされたがんせきふうじに息をのんで見ている。こんなバトルは始めて見たとあるトレーナーが思わず呟いてしまうほど、戦いは激化していった。

そしてようやく終了した試合は、ザクロががんせきふうじでアメタマの速さを止めてからラスターカノンの攻撃でダウンしたというある意味予想外な結果だった。ビオラは肩をすくめて完敗だと言い、礼を言ってから握手をしていた。

そしてザクロはこの一勝によってグランデュークへ昇格することができた。技が鍛え上げられているということやれたバトルの仕方にサトシはただひたすら技を鍛え上げることへの可能性を感じていた。

.....

「…ザクロさん」

『ピイカ』

「やあ…えつと…サトシ君だったね。君の戦いは本当に素晴らしかったよ。あとテスラ君。君もこれから頑張ってくれ」

「はい！」

「ありがとうございますザクロさん！」

ザクロがバトルシャトーから帰ろうとしているのを見て、サトシ達がすぐに彼を止める。ザクロはサトシ達の声に反応して振り返り、笑みを浮かべて話し始めていた。

サトシはそんなザクロにただ笑みを浮かべて、小さく口を開いて言う。

「ザクロさんってもしかしてジムリーダーですか？」

『ピツカ？』

「おや、よく分かりましたね。確かに、僕はシヨウヨウシテイのジムリーダーを務めていますよ」

「え…ええええええ!!？」

「ほ、本当にジムリーダーなんですか!」

「お兄ちゃんやビオラさんと同じジムリーダー…!!」

『デネ!』

「あら、言つてなかったかしら?」

「言つてませんよビオラさん!!」

「というかだからあんなに強かつたんですね!」

「凄い凄い!」

『デネ!』

サトシの言葉にザクロはただ頷き、そして周りで話を聞いていた皆が驚愕したような表情を浮かべていた。同時に何故サトシはザクロがジムリーダーだと分かつたんだろうと疑問にも思っていた。ビオラに勝つたというだけでジムリーダーだと普通は考えないからだ。だからこそセレナたちは自然とサトシを見て、ザクロは好戦的な笑みを浮かべる。

「何故僕がジムリーダーだと分かりましたか?」

「簡単ですよ。バトルのやり方や鍛え上げられた技…それにトレーナーとしてただ勝つというよりも楽しんで勝つというバトルをしている感じがしましたから…ザクロさん

の戦い方は、まるでジムリーダーとして「挑戦者」とバトルしているのではないかと思っ
たんです」

「なるほど…面白いですね。そしてあなたは素晴らしく強い…！シヨウヨウシテイのジ
ムには来ますか？」

「もちろん来ますよ！」

『ピイカッチュ！』

「そうですか。ではサトシ君が挑戦しに来るのを楽しみに待っています」

そう言つてザクロは笑みを浮かべながらもバトルシャトーから出て行つた。その様
子をサトシはただ戦う時によくしてしまう笑みを浮かべ、目はギラギラと輝いていた。
もちろんピカチュウも同じように瞳を輝かせてザクロを睨むように見つめていた。

彼らの会話にシトロんたちは入り込むことはできなかつたけれど、とてもすごい光景
なのだと言うことは伝わってきたようだった。シトロんはいつか来るであろうサトシ
とのバトルを想像し、その時のバトルが楽しみになつてきていた。

——そして、サトシ達の会話を聞きながら、サトシだけを見つめているセレ
ナはいつも通りの行動だったと言えるだろう。

第百九十六話く兄はセレナに巻き込まれるく

こんには兄のサトシです。バトルシャトーで次のジム戦がザクロさんだということを知り、より楽しみになってきました。あれほどまでにも技を鍛え上げているザクロさんと戦うのだから、こちらも負けていられないと考えています。ザクロさんどう戦つていこうか考えながらも、シヨウヨウシテイへ向かい：現在はセレナたちと休憩している途中です。

ポケモンセンターで見たい番組があるとユリーカとセレナが言ってきたため、俺たちはテレビがある場所まで移動し、それを見る。テレビではポケビジョンというカロス地方で有名な動画作品のランキングが発表されていて、シトロンから話を聞くとトレー

ナーが自分で作るポケモンのプロモーションビデオらしい。

カロス地方で初めて見たそのポケビジョンに、俺とピカチュウはなるほど納得する。そしてテレビはそろそろ終わりに近づいていて、ランキングが一位のエルという少女とフォッコが映し出されていた。エルとフォッコが映し出されたことにユリーカ達がやっぱり！と声を出して見ている、シトロロンが彼女のことを説明してくれた。エルがポケビジョンのランキング上位の常連で、アイドルポケモンユニットとしてデビューをしたということを一。

そして動画の画面でエルとフォッコがウインクしたことによって近くにいたハリマロンがタケシやポツチャマ、ミジユマルのような表情をしていて興奮している。そしてそれを不機嫌そうに見るのがセレナのフォッコで：ユリーカ達も可愛いと絶賛していた。でもすぐにセレナのフォッコが不機嫌なのが分かって可愛いよとフォローする。セレナのフォッコは少しだけ機嫌を良くしたようだった。

「可愛い！流石エルさんね！」

『デネデネ！』

「ランキング上位だった人ですからね。人気なのは当然です」

『リイマア!!』

「…サ、サトシはエルさんのこと気になる？…可愛いとか」

「んーどっちかって言うとフォッコがどんな技を出してアピールするのが気になるな」

「そっか…良かった…」

「…こつちはまだまだ進展しなさそうですね」

「セレナ頑張れ！」

『デネデネ！』

『ピツカチュ…』

『フォコ！』

「…サトシ」

「……………」

色々とは微妙な空気になったが、その後すぐに話題を変えてポケビジョンで行う機材があるという話を聞き、俺たちは皆でポケビジョンをやることになった。俺は修行をした方が良いという考えもあったのだが、それよりもどんな風にカロス地方で人気だという

ポケビジョンを作っていくのが気になるので手伝うことにした。

修行は朝やったというのもあるし、ポケビジョンから新しい戦い方を作り上げること
もできるかもしれないと俺とピカチュウはそう考え納得したからだ。

でもポケビジョンを作りたいと言うセレナはただのプロモーション動画を作ろうと
は考えていなかった。ただ一人のトレーナーとポケモンが映った紹介よりも、ポケビ
ジョンでやりたいことがあると俺たちに向かつて言う。

「ねえ皆で撮ろうよ！ 私たちの、カロス地方での旅のことやポケモン達を！」

「え!? 僕も映るんですか!？」

「面白そう！ お兄ちゃんも出ようよ！ 私もデデンネも映るよね!？」

『デネ!?!』

「もちろんよ！」

「わーいやったあ！」

『デネデネ!』

「…と言つても、どんな動画を作るつもりなんだ？」

『ピイカ?』

「え?…うーんそうねえ…」

セレナたちはポケビジョンでどう撮影しているのか悩み始めた。ポケビジョンは普通はトレーナーとその手持ちのポケモンたちの紹介動画だ。そのため普通だったらまだトレーナーじゃないユリイカやデデンネはポケビジョンに出ることはできない。でも仲間の紹介動画だから大丈夫だとセレナは言った。

その問題が解決したとしても、まだまだやるべき問題はある。撮影する時間は短いのが普通らしく、長い時間を使った紹介はできないということや、紹介と言ってもどう紹介するのか短い動画の中で自分たちで考える必要があると言うこと。だからこそやることは限られてくるのだ。

でもセレナは少し考えた後、決めたようだった。

「じゃあ、バトルしない？バトルって言ってもハウエン地方のポケモンコンテストみたいなアピールする技を使ったプロモーション動画を作るの！」

「ハウエン地方の…ポケモンコンテスト？」

『デネ？』

「確か…こちらで言うポケモンパフォーマーのようなものでしょうか？」

「ええポケモンパフォーマーと似ている感じなのよ！前にテレビで見たことがあってね。一度でもいいから技を使ったパフォーマンズをやってみたいって思ってたの！」

「ポケモンパフォーマー…?」

『ピカ…?』

「あ、そっか。サトシは知らないのよね。ポケモンパフォーマーって言うのはね——」

セレナから聞いた話は、ホウエン地方やシンオウ地方で見たポケモンコンテストとは違ったことをするらしい。でも共通して言えることはポケモンをどうアピールしていくかということと、ポケモンを魅力的に見せてどう目立たせていくかということだった。ポケモンパフォーマンスはその自由度が広がった大会なのだろう…ポフレや衣装、道具を使って行ったり、技を使って人と一緒にその絆の強さを見せたり…ハルカやヒカリが聞いたら喜びそうな大会だと思えた。

そんなポケモンコンテストやパフォーマンス大会で行うポケモンのアピール技をセレナはポケビジョンでしたいと言う。シトロンやユリーカも面白そうだと言って賛成しており、機材をすぐに借りて広い場所で動画を撮影することになった。

とりあえずどうバトルしながらアピールするのかシトロンやユリーカが考えていたため、俺はピカチュウと一緒にトネリコタウンでハルカと争った時のアピール技を見せ

ることにした。

「いいか見てろよユリーカ、デデンネ……ピカチュウ！」

『ピカピッカ！』

「うわあ！綺麗！電気の鼠火花みたい！」

『デネデネ！』

「あ、じゃあハリマロンのつるのムチで花火を自在に動かせないかしら？」

「や、やってみます。ハリマロン！」

『マアロ！』

シトロンとユリーカのポケモンたちの撮影は終わった。シトロンとユリーカがバトルしているように見せかけて、デデンネがピカチュウに教えてもらった鼠火花を地面に放ち、ハリマロンによって輪となっている部分をつるで引っぱって投げける。投げられた先にはホルビーが穴から出ていて、まるで輪投げのように綺麗に収まるという形で終わっていた。ちよつとだけ笑いを誘えるけれど、ポケモンたちの技の掛け合いとトレーナーの指示によってできた技に仕上がったのだ。

そして次は俺たちの番——。

「いくぞセレナー……ピカチュウ、10まんボルト!!」

『ピイカアツチュウウウ!!』

「フオツコ、10まんボルトに向かってかえんほうしゃ!」

『フオツコオオ!』

俺はピカチュウに10まんボルトを空へ放つように指示をする。その放たれた電撃をセレナは最近覚えたと言うかえんほうしゃで爆発させた。爆発によって大きな爆風と炎がその技の強さを見せて、…そして次のアピールへ進む。

「ピカチュウ、エレキボールからのかみなり!」

『ピカピツカア!』

「フオツコ!めざめるパワーからのかえんほうしゃよ!」

『フオコオ!』

「よし最後だ…ケロマツ!みずのはどう!ヤヤコマかましたち!」

『ケロ!』

『ヤツコオオ!』

爆風に向かってエレキボールを放ち、黒煙などを吹っ飛ばす…そしてかみなりによって電気が周りに飛び散り、先程放ったエレキボールが綺麗に粉々になっていく。その小

さな光となった電気のような輝きに向かってフォッコも同じようにめざめるパワーを上空に放ち、かえんほうしやで破裂させた。

周りが小さな黄色い光に包まれ、そして中心で赤く燃え広がる太陽のようになる。そしてケロマツとヤヤコマの技によってピカチュウとフォッコの技をさらに大きくし、輝かせていく。そうしたことによって月と太陽のような対比を技によって作り出せ、周りに星空のような風景を作り上げていく。

：こうして、無事に撮影ができたことにセレナたちは喜んでいた。

そして動画は編集をしてから無事にポケビジョンに投稿された。セレナたちは満足そうにしていたから良かったと思う。とりあえずまたハルカやヒカリに連絡できた時でもポケモンパフォーマンスについて話してみようと思う。

———だがこの動画が後々大きな騒ぎの火種になるといふのを、俺たちはまだ知らない。

第百九十七話～妹たちはマサラタウンへ帰る～

こんにちは妹のヒナです。3つのバッチを手に入れることができたためこれからマサラタウンに帰ってバトルしに行きます。

今までのバトルで学んできたこと、そしてタケシさん達が私たちに親切にしてくれた分をすべてバトルで勝つために頑張っていきたいと思った。とにかく私たちのやるべきことは勝つことだろう…なるべく早く帰っていかねければとクチバジムを出て、マチスさん達と別れた私たちは急がなければと考えながらも町を出て歩いている。

そんな時に上空から大きな音が聞こえてきたため私たちは空を見上げた。

「…あれ？ミュウツー？」

『カゲ？』

『ピチュユ?』

『ああやつと終わったのですね…バツチは?』

「ちゃんと貰ったよ!…まあ負けちゃったけど、でもまた再戦するって約束したからね!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

『それは良かった。おめでとうございます…とにかく急ぎますよ…!』

「え、急いでどこに…うわっ!」

『カゲ!』

『ピチュ!』

ミュウツーが上空を見つめながら私たちにバツチは手にしてきたのかどうか言ってきたため、私はバツクの中に入っているバツチ入れを取り出してから見せる。それを見たミュウツーは満足そうに微笑み、良かったと祝福された。

それを見た私は少しだけ笑みを浮かべながらもバツチをバツクの中に戻す。だが戻した後いきなりミュウツーが私たちをサイコキネシスで浮かせてそのまま空へ飛びあがった。何が何だか分からない私たちは驚いた声を出した。

ミュウツーはただ後ろを気にしながら猛スピードで私たちをサイコキネシスで宙に浮かせたまま何処かへ行く。

『待て貴様…!!』

「つてあれミュウと争つてたミュウツーだ!!!何でいるの!？」

『カゲ!?!』

『ピチュ!!』

『しつこいですねあなた…私はあなたと争うつもりは微塵もないのですよ!』

『そういうのならヒナたちを置いていけ!俺がマサラタウンに連れて行く!』

『お断りします。私が彼女たちについていくと約束したのですから。あなたはさっさとマサラタウンで待っていないさい!』

『だから!ヒナたちはもうマサラタウンに帰るんだらう!!待つぐらいなら俺が連れて帰ると何度もそう言っているだらうが!!』

『それを私はお断りしますと言っているんです!!』

「あれ?何か険悪…」

『カゲ…』

『ピチュ…』

いつもマサラタウンで話をしたりしていたミュウツーが私たちと一緒に旅をすると決めたミュウツーと争っている。争っている内容が私たちがマサラタウンに連れて帰ると言う内容で：ちよつとだけ苦笑してしまった。

どうかミュウツーたちの後ろで呆れた表情をしているミュウやセレビーがついて来ている：呆れて見ているぐらいなら止めてほしいと思った。その後ろでラティアスを止めているラティオスがいて：ルギアやダークライもいて：あと妙に楽しそうな表情を浮かべているもう1体のミュウもいて：これを人間が見たら大騒ぎするなど他人事のように考えてしまった。

でも今私たちはイツシユ地方で出会ったミュウツーのサイコネシスで宙に浮いている状態だ。しかも猛スピードで飛んでいるという状況：それなのにもう一体のミュウツーと喧嘩をしていて：もしも私たちに発動しているサイコネシスが途中でなくなり、落ちてしまったらどうしようと心配になる。

だから私は後ろから追ってきているマサラタウンにいるはずのミュウツーに向かって叫ぶ。

「ミュウツー！何でここにいるの!?マサラタウンにいてって手紙に書いていたよね？もう口きかないよ！」

『ツ…それは…』

『ふふ…良い気味ですね！私たちを追わずさっさとマサラタウンで待っていて下さい！』

『グツ…貴様…!!』

『…ミュウ』

『レビイ…』

「おーいミュウにセレビイ…呆れてるぐらいなら喧嘩止めてよ…それにルギア達もさ…」

『カゲエ…』

『ピチユウ…』

『すまないが私たちは何度も彼らの喧嘩を止めようとしたんだ優れたる操り人の妹よ…』

『フオオオオ…ああ、何度も眠らせた』

『…まあ、それで悪化したような気もするがな』

『フオオオ…?』

『ミュミュミュ!!』

『キューン!!キューン!』

『クウーン…』

「ラティアスとミュウが何だか楽しそうだし…とにかくこの喧嘩どうにか止めてよ…」

『カゲエ!』

『ピチュウ!』

私が口をきかないよと言うとマサラタウンにいるはずのミュウツーが口を閉ざして視線を逸らす。それを見た私たちについて来ているミュウツーは嘲笑いながら挑発するように言う。その言葉にキレたミュウツーがもう一体のミュウツーを睨みつけていて…。喧嘩が白熱しそうな勢いにどうしようかと思つて肩をすくめているミュウ達に助けを求める。でもルギア達は諦めきつていると言うよりも疲れているような表情を浮かべて、何度も止めたと言うことと、それでも喧嘩が止まらないと言うことを伝えてきた。あと私たちの方を見て妙にラティアスが嬉しそうに笑みを浮かべ、そして後ろにいるミュウはただ面白そうに笑っていた。何というか…とりあえずこのままでは駄目

だろうと思ひ、どうするべきかを必死に考える。

そんな私たちの表情を見て、呆れていた方のミュウが仕方ないとばかりにマサラタウンに居るはずのミュウツウをサイコキネシスで押しとどめた。

『貴様ツ！一体何をする!?!』

『ミュウミュウ!』

『何!?!このままでいるよりマサラタウンに帰つて待つていた方がいいだ!?!そんなこと
でき——』

『——ミューウ!』

「…テレポートして行つちやつた?」

『カゲ』

『ピチュ…』

『おそらくあのミュウの仕業でしょう…ですがこれでゆつくりとマサラタウンへ帰れま
す』

「あ、ごめんミュウツウ…できればサイコキネシスのままマサラタウンに行つてもらつ
てもいいかな?これ以上皆を心配させたくないから…」

『……………仕方ないですね』

『…では私たちも帰るか』

「あ、一緒に帰るとかは駄目だよ？ルギア達は目立つからね」

『カゲ』

『ピチュ』

『だが、姿を消せば何とか…』

『キューン!!』

「だめ！私たちはただマサラタウンに帰るだけだし、そんな大勢で帰らなくても大丈夫だよ？あとでまたすぐに会えるんだからさ」

『カゲカゲ』

『ピチュピチュ』

『ツ…そう…か……仕方がない…非常に残念だが私たちはあのミュウツーのようにテレポートで先に帰っておこう…』

『フオオオオ…マサラタウンで待っているぞ』

『キューン……』

『クウーン!』

『レッツビー!』

『ミュウ!』

「うん! マサラタウンでまた会おうね!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

ミュウは暴れそうになっているマサラタウンにいるはずのミュウツを強制的にマサラタウンまでテレポートしていったみたいだった。

これを見た私たちの近くにいるミュウツはため息をついてサイコネシスを解き、地面に着地する。そしてルギア達も人間たちがいないのを確認してからこちらに向かつて降下して来た。その影響で周りにいた普通のポケモンたちが恐れて逃げ出してきたけれど、まあ仕方がないと思う。

でも、このままだとゆっくりと歩いて帰ることになるだろう。私としては先ほどのサイコネシスで帰ることができれば、この先帰ることによって経過するであろう時間を短縮することができると考えた。だからこそわがままを言ってしまっけれど、ミュウツにサイコネシスでマサラタウンへ帰ってもらおうよう頼んだのだ。ミュウツは少しだけ残念そうな表情をしたかと思うと小さく頷いて了承し、私たちをもう一度サイコネシスで宙へ浮かせ、空へ飛んでいく。

それを見たルギア達は私達と一緒に帰ろうとしたけれど、それだと余計に目立ってしまい、万が一の可能性やすぐにマサラタウンに会えるということから先に帰って待っていてくれと言った。するとルギア達はものすごくシヨックを受けたような表情を浮かべて：でも仕方がないと諦めたようですぐに楽しそうなミュウによつてテレポートで帰っていった。

「：ミュウツー、我儘を聞いてくれてありがとう！」

『カゲカゲ！』

『ピチュピッチュ！』

『いえ、これぐらいお安い御用ですよ』

・・・・・・・・・・・・・・・・

そしてその後、ミュウツーのおかげで普通だったらここまで来るのにかなり時間がかるであろうマサラタウンの近くの森へ着地し、帰ってくる事ができたのだった。

このまま歩けばすぐにマサラタウンに着くことができる。ミュウツーが近くの森に

着地したのは人間たちに見つかる可能性があるということや、危険を回避するためである。そんな危険性から森に着地したのだろうと納得しながらも、私たちはミュウツーを見て微笑む。

「やつと帰れた…ここまでついて来てくれたミュウツーには本当に感謝してる!! ありがとうー!」

『カゲカゲ!!』

『ピチュ!!』

『…礼を言うのならまずは人間達とのバトルで勝ちなさい』

「わかった…絶対に勝つからね!!」

『カゲエ!』

『ピツチュウ!』

『ああ…それと私はしばらくあの同族と話し合いでもしています。ですからここで一時のお別れになります…次に会うときは勝利の言葉だと信じてますよ…ヒナにヒトカゲにピチュー』

「うん! ありがとうミュウツー!!」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

ミュウツーが言った【話し合い】という言葉が少しだけ物騒に聞こえながらも…私の名前をちゃんとやってくれたミュウツーに笑みを浮かべた。

最初の頃とは違い、人間のことを少しだけ信じようとしてくれるミュウツーに向かって…次に会ったときは絶対に三人組に勝ったという言葉じゃないといけないと思いつつ…ながらも気合いをいれる。そしてミュウツーはそのまま空へ飛んでいき…私たちはミュウツーの姿が見えなくなるまで手を振って見送っていた。

.....

「…ヒナツ!!」

「あ、ママ!!」

『カゲ!』

『ピチュ!』

「っ!」

『カゲ!?!』

『ピチュ!?』

「心配したのよ!…本当にもう…次に家出する時は一言ぐらい言いなさい!…」

「…分かった。ごめんなさい」

『…カゲ』

『…ピチュ』

「ママとの約束よ?」

「うん…!」

『カゲカゲ!』

『ピチュ!』

「よし良い子ね…じゃあ早く帰りましょうか!ママ美味しいご馳走作るわ!」

「…あ、待って!…やるべきことがあるからまだ帰れない!…」

『カゲ!』

『ピチュ!』

森から出て、マサラタウンへ帰って来た私たちは、家の近くを通りがかった時に母と再会した。母はどうやら掃除をしていた途中らしく、手に箒を持っていて私たちを茫然と見つめていた。

母は目に涙を浮かべていて：私に向かつていきなり平手打ちをしてきた。でもそんなに痛くないピンタで：泣きそうになっている母に、本当に心配させてしまったということ、次は絶対にこんな無謀なことにはしないと心から誓う。

母は私たちが家出をしたという認識をしていて：まあ間違いではないかと思いつながらも、約束をした。今度旅をするときは、私たちがトレーナーになった時だと言うことを考えながらも…。

そして母は涙を拭い、私たちに笑みを浮かべて帰ろうと言う。でも私はヒトカゲ達を見て：そして次に母に視線を移した。ヒトカゲ達は私が見た時に頷いてやる気に満ちていた。——このままあの勝負をやろうと決めているのだ。

だからこそ：やるべきことがあると言うことを母に話す。母は心配そうな表情をしてから：私たちに向かつて口を開いた。

「：そう、ならママも一緒に行くわ。ヒナちゃんがやりたいことを、ママも見たいって思うの」

「ママ…わかった」

『カゲ…』

『ピチュ…』

母と一緒に私たちについてくることになった。母は私があの人組と勝負をすることや条件については知らない…だから何をするのも分からないのだ。そのことに少しだけ不安を感じた。この条件や勝負を見て、母はどう思うのだろうか？でも母はもう私たちから離れないとばかりに強い眼差しで言うため、これは断れないと感じてしまったのだ。母は何も言わず、私のやることを止めようとせず、一緒に行動しようとしている。

だからこそ、私たちは離れようとはしない母たちに心配かけたことに対して罪悪感を感じ、このまま三人組と会ってどうなるのか余計に不安に思い…勝負に負けていられないと思った。

——そして私たちは歩きだし、まずオーキド研究所の近くにある道を通る。

いつもあの人組はその場所で遊んでいることが多いから必ずいると思ったのだ。そしてやっと見つけた。あの人組を…。

「ヒナ…」

「よおヒナ…あの条件はできたのか？」

「勝負を受けに来たって感じだね…なら僕たちはポケモンを取りに一度帰るよ…そして

「ここじゃなくもつと大きい広場で戦おうか」

「ええいいわよ…絶対に私たちが勝つんだから!!」

『カゲ!』

『ピチュ!』

「え、ちよつと待つて。ヒナちゃん、一体何をしたの?条件つて…勝負つて一体何?」

「ママ…ごめん。それはまた後で言うよ」

『カゲ…』

『ピチュ…』

「…そう。…じゃあ広い場所で戦いたいのならオーキド研究所でバトルしなさい。それならママも何も口出しはしないわ」

「ママがそういうなら…それでいい?」

「ふん…俺たちは別に何処だつていいぜ?ママさんに守られてるお前に負けるわけないしな!!」

「そうそう!俺たちは無敵だぜ!」

「オーキド研究所ね…じゃあそこに集合しよう…言つておくけど僕たちは負けるつもりはないよ」

三人組が面白いという表情を浮かべていて、強いポケモンを取りに家に戻ると言う。そして何処か広い場所で合流しようということになり、私たちはそれに頷いた。そして広い場所はどこにしようかと決めようとした時に後ろにいた母が質問をしてきたのだ。

三人組との話が私たちの家出と関わっているのだと直感した母が、どうということなのか聞いてくる。それをまだ言うつもりはなく……というよりも、まず先に言ってしまったら母に怒られることは必須だろうし、勝負にならなくなってしまう。だから後で言うと言つて誤魔化した。とにかくまず先に勝負に集中しようと思つたからだ。そして母はそれを見て仕方ないという表情を浮かべ、オーキド研究所の広場でバトルしなさいと言つてきた。

……それはつまり、私達や三人組を逃がす気はないと言うこととオーキド博士たちの前で公平なバトルをしろということだ。普通そんなことを言われたら私たちは嫌そうな表情を浮かべて断つた方が良いだろう。なんせ私は旅をするためにほとんど無断でマサラタウンから外に出て、三人組はその無茶を言つたのだから。

でも三人組は悪いことを言つたつもりも、無茶を言つたということも感じていないのか……オーキド研究所に入れるということに興奮したような表情で少しだけ偉そうに言う。その言葉に苦笑しながらも私たちは頷いたのだった。

第百九十八話　妹は合流する

「おおヒナ！無事じゃったか!!」

「ヒナちゃん！一体どこに行つてたんだい!? タケシから無事だつて話は聞いていたけど詳しいことは聞けなかつたし…本当に心配したんだよ!!」

「ご、ごめんなさい…」

『カゲ…』

『ピチュユ…』

「一体何をしていたんだ!? まるで旅をしていたみたいなの恰好で…!」

「えっと…なんて言つたらいいのか…」

『カゲカゲ…』

『ピチュピチュ…』

「あのオーキド博士、頼みたいことがあるんですが…」

「何じゃ？」

「こんにちはは妹のヒナです。三人組がポケモンを取りに向かっている間、私たちは先にオーキド研究所へ行きました。オーキド研究所に行つたとたんオーキド博士やケンジさんから凄い勢いで声をかけられ、それに圧倒されながらも心配かけたことに対して謝る。」

「そしてタケシさんからあまり詳しいことは聞けなかったのか、私たちが無事かどうか…何をしていたのか質問され、どう答えようか迷ってしまった。詳しいことはまだ話せないというケンジさんは何か考えるように表情を変え…そして仕方がないため息をついてオーキド博士を見る。」

「その時に母がオーキド博士に向かって広場で私たちがバトルするから使ってもいいだろうかということ話を話した。何があつたのか聞きたそうなオーキド博士だったが、母や私たちの様子を見て詳しい話を聞かずに頷いてくれた。そしてケンジさんもオーキ

ド博士と同じように何も言わずにいてくれた。

広場となる場所はオーキド研究所に少しだけ近い場所で、ケンジさんが審判をしてくれると言ってくれた。後でちゃんと説明するようになると言われていろいろと怒られるだろうなどヒトカゲ達と顔を見合わせて苦笑してしまったけれど…。

そして広場にやってきたらフシギダネ達に会った。フシギダネ達は先に話し合いをすると言って帰っていったミュウツーから話を聞いたのか分からないけれど、全員が一齐にオーキド研究所の近くまで：私たちの近くまで走ってきていて驚いた。フシギダネを筆頭に皆が凄まじい表情でこちらに向かって叫ぶ。

『ダネ!!ダネフシ!!』

『ベーイ!!』

「う…ごめん皆…」

『カゲカゲ…』

『ピチュ…』

「あのね…もしかしたら知ってるかもしれないけど…私たちの勝負の邪魔をしないでほ

しいの…いいかな？」

『カゲ…!』

『ピチュ!』

『……ダネ、ダネダネ』

『ツツ——!!!』

皆がため息をついて無事なことに安心し、心配したと怒っているようだった。やつぱり帰り道で会ったミュウツウから事情を聞いたのだろう。

そのため、あの三人組が来た時に敵として見る可能性が出てきたと感じた。フシギダネ達が私たちの周りを見て残念そうな表情を浮かべ、主にジュカイン達がそれぞれ舌打ちらしきことをしていたからだ。三人組を見つけたら抹殺してしまうといえる表情と行動に苦笑し、勝負の邪魔をしないでほしいとフシギダネ達に頼む。ヒトカゲ達も皆に向かつて頼み、それを見たフシギダネ達はしばらく沈黙していたが仕方がないともう一度ため息をつく。私たちは良かったと笑みを浮かべ、これから来るであろう三人組に絶対に勝つとやる気を出す。

…ちなみに、ケンジさんはこの光景を見て後にカスミさん達に向かつて、フシギダネ達がまるで狩りたいと思っていた獲物を逃してしまったせいで殺気立つ野獣になっていたようだったと話していたらしい。…そんなに怖かった光景なのかな？

.....

「ここがオーキド研究所かあ!!」

「おいヒビキ喜んでんじゃねえ! ヒナにバトルで勝つんだからな!!」

「コウ、落ち着いて。指示は: 僕たちでそれぞれ出していこうか」

「待ってたわよ!」

『カゲ!』

『ピチュ!』

三人組が来た時の反応が私たちの予想していた通りだった。まずオーキド博士とケンジさんは三人組と私たちに何があったのだろうかと真剣に考えていて、母は私たちがバトルに勝つように: 慌ててオーキド研究所に来てしまったために持つてきてしまった箒を握りしめる。

そしてフシギダネ達はどうと: まずフシギダネのつるが地面に向かって叩きつけられ、一斉に襲いかかろうとしていたヨルノズク以外のポケモンたちを止める。皆がフ

シギダネを見て残念そうな表情を浮かべて諦め：ヨルノズクはというと木の上でただじっと三人組を見つめていた。そしてそんな危ない状況だった三人組はただ私たちを見て笑っていた。

今どんな状況なのか知らないというのは幸せなことなんだと苦笑しながらも、私は前へ歩く。

「それで？バトルは？先攻後攻どっちにするのよ？」

『カゲ！』

『ピチュ！』

「その前に条件の方の確認だ！」

「ちゃんと取ってきたんだらうな!!」

「ほら早く見せなよ」

「条件とは何じゃ…？ママさんは知っておるのか？」

「…：…いいえ」

「もしかしてヒナちゃん達が家出した理由なのかな…？」

三人組が私たちに向かって言う。その表情は無理だろという嘲笑っているような感じがして少しだけ気分が晴れた。無理だろと思っている彼らに向かって見せる〔これ〕はヒトカゲ達と頑張った証拠なのだ。マチスさんとの勝負は駄目だったけれども…それでも頑張った証なのだ。それを見て、彼らの認識は改まるだろうと思う。

——私はリュックからバッチ入れを取り出し、その三人組に堂々とバッチを見せた。するとまず反応したのがオーキド博士たちで、その次に三人組だった。

「約束通り…3つのバッチを集めてきた！これで良いでしょ!？」

『カゲカゲ!』

『ピチュピチュ!』

「なツ!? バッチじゃと…! まだ幼いというのに…!!」

「ああ…さすが私の娘ね…ヒナ」

「だからタケシが大丈夫だと言ってたのか!!? その年でバッチを3つ…さすがサトシの妹…!」

『ダネダネ…』

『ツ———』

「…チツ…仕方ねえな。バトルやってやるよ！」

「勝負して本当にそのバッチを取って来たのか確認してやるよ！」

「そうだね…君が本当にバッチを取って来たのか…ただ奪ってきたという可能性もあるし…バトルで決着をつけようか」

「奪ってきてないしちゃんと私たちが貰ったバッチなんだから…バトルで絶対に勝つ…！」

『カゲ！』

『ピチュユ！』

オーキド博士たちはそれぞれ感心したり驚いたり…そして納得していたりしていた。フシギダネ達はただ満足そうに笑みを浮かべていて…マチスさんとの勝負で負けてしまったことが余計に悔やまれた。ちゃんと勝つことができれば今この時点でもっと自信を持って私たちのバッチだと言えただろう…不戦勝のような状況になってしまったことに、今度は必ずマチスさんに勝つともう一度決心し、このバトルにも勝つと強く覚悟を決める。

そして三人組はあまりバッチの重要性を分かっているようだった。いや、私を持つ

ているということからまだその事実が伝わっていないのだろう。

まるで、マサラタウンに伝説がいると他の地方の人間に教えたとしても嘘だと言って信じてもらえないのと同じように……三人組は私たちがバッチを取ったと言うことを信じられていない。でも条件は条件なのだからバトルはしようということになった。

三人組のその表情に、私たちは彼らに信じてもらうためにバトルで勝つのだとやる気が出てくる。

「いいか！まずお前が先にヒトカゲかピチューかを選ぶんだ！バッチを取ったって言うんならできるだろう！」

「そうだけ、俺たちはお前が先に選んだポケモンを見て決める……だから早くしろ！」
「ここで怖気づくことないよね？バッチ手に入れてきたんだからさ？」

「つ君たち！ソレはいくらなんでも……！」

『ツツ———！！』

「大丈夫だよケンジさん、皆……ピチュー行ける？」

『ピチュー！』

三人組が言った言葉は私たちにとって不利になるといえる言葉だった。

彼らは私が出すポケモンを知っている。ヒトカゲかピチューかのどちらかなのだから最初に戦うポケモンに不利なポケモンを彼らが選ばばいいのだ。そして私は彼らが出すポケモンを知らない：ある意味不公平で、ある意味不利なバトルになるだろう。だからこそそれを悟ったケンジさんやフシギダネ達がそのバトルは無効だと叫んだのだ。母やオーキド博士もこの言葉を聞いて厳しい表情になった。

でも私たちはそれでも絶対に勝つと考えていた：何があつたとしても：たとえ不利なバトルになろうとも：絶対に勝つと旅をするときに決意していたのだから。だからこそケンジさん達には私たちの勝負を見ているだけにしてほしい。不利なバトルになつたとしても絶対に勝つと：そう決めているのだから。

私はヒトカゲとピチューを見て、頷く。するとヒトカゲとピチューも同じように頷いてくれた。そしてピチューが前に出てきたためバトルを先にしたいのだろうと分かった。だからこそピチューを先にバトルに出す。ヒトカゲは後ろの方で私たちの応援をしていた。

「行くわよピチューー！絶対に勝つ！」

『ピッチュ！』

「ピチューか…なら…」

「そうだね。僕たちのポケモンは決まったも同然だ」

「行くぞ！」

第百九十九話く妹たちは前へ進むく

「行くぞ！ゴローニヤ！！」

『ゴロオオオオオオ！！！！』

「ゴローニヤ：ピチューにとつては苦手な岩タイプ：ね」

『ピチュピチュ！』

「俺たちは無敵だぜ？お前を絶対に叩き潰してその生意気な顔に泥塗ってやる！」

「それはそれでサトシさんに怒られるよ：まあいいか。君のプライドを潰せるなら俺たちが勝つ！！」

「君たちっ——」

「ケンジさん！始めてくださいお願いします！」

『ピチュー！』

「…はあ。じゃあ始めるよ！これよりピチュー対ゴローニヤのバトルを始める…試合開始！」

ケンジさんがまた三人組に文句を言いそうになったため、私たちがそれを止めようと言葉を遮って声を出す。

するとケンジさんは私たちを見て、これは止められそうにないため息をついて仕方がないと思ったのだろう。両手を上げて審判による始まりの言葉を言う。

そして始まったと同時に私たちは動いた。

「ピチュー行くよ！ゴローニヤに向かって走って！」

『ピツチュ！』

「はッ！ただ走るだけで意味ねえだろ！」

「ゴローニヤ…えつと攻撃は？」

「僕が指示を出すよ！…ゴローニヤ、ピチューに向かってじしんだ！」

『ゴロ…ゴロオオオオオオ!!』

「ピチュー尻尾を使って大きくジャンプ！」

『ピイツチュウ!』

「ほう、うまく回避したのお…」

「ええ、でも逃げるだけじゃ意味がありませんわ」

『ブイ…』

『ジュルツ…』

「まだまだ！連続してじしんだ！これならピチューが落ちたとしても攻撃が当たるだろ!!」

『ゴロオオオオオ!!』

「ピチュー、地面に向かって10まんボルト!!」

『ピイツチュウウウウ!!!』

「何ツ?!」

「へえやるね…」

「くそヒナのくせに！」

『ゴロオオ!』

ゴローニヤはどうかやらあの三人組の指示をちゃんと聞いているみたいだ。おそらく言い訳をして勝負をするからバトルで指示を聞いてほしいと何か親に対して頼んだか、それともゴローニヤ達に向かってちやんと説明してバトルをしようと言ったのかは分からない。まあ私たちに悪口のような言葉を言った瞬間に少し複雑そうな表情で三人組を見たからゴローニヤは何か思うことがあるらしいけれど：でもバトルで手は抜かないという真剣な表情で三人組の指示通りに動く。

それを見て、ピチューが大きくジャンプしたことによってゴローニヤのじしんを回避する。でもその後にもまた連続でじしんを指示してきたため、私はピチューに10まんボルトを地面に向かって放つように指示する。凄まじい勢いの10まんボルトが地面に放たれたことによつて爆風が生まれ、ピチューがさらに宙に浮き、ゴローニヤの上空へ飛んでいく。それに笑みを浮かべた私に、三人組が感心したり悔しくなったり驚いたりとしていた。

オーキド博士たちは私たちのバトルを見て、ただひたすら観戦し、兄のバトルのように見ていただけだ。ただし心配そうに：バトルの勝敗が予想つかないともいうように…。

ピチューが笑っているのを見て、次の指示が予想できたのだろうと感じた。だからこそ、私はピチューの期待している指示を出すために声を出して叫ぶ。

「ピチュー、アイアンテールよ!!」

『ピツチュウ!!』

『ゴロオオオオオオ!!!?』

「ゴローニャ!?何だあの技…!?!」

「あれはアイアンテール…まさか覚えてるだなんて…!」

「卑怯だぞヒナ!ゴローニャに効果抜群の技覚えさせんなよ!!」

「何言ってるの!これはピチューが頑張ってくれた努力の証!ピチューの力よ!!」

『ピイツチュ!!』

「アイアンテール!?まさかマサラタウンから帰ってくる間に覚えたのか!?!」

「ヒナ…頑張ってるのね」

「さすがじゃのう…!」

ピチューがゴローニヤにアイアンテールを直撃させた。落下した勢いで発動させたアイアンテールの威力は強く、ゴローニヤがふらつき、今にも倒れそうになっていた。それを見た私は好機だとピチューを見る。

ピチューは私の言いたいことが分かっているらしく、頷いて勢いよく走り出してくれた。その間にも三人組はアイアンテールという技を始めて見たことによる驚きと、感心…そしてかなり無茶苦茶な文句を言っていた。でも私はその言葉に笑みを浮かべて叫ぶ、これはピチューが頑張ってくれた成果なのだということと、勝つための力となった証なのだということを…。

そして私は大きな声でふらついているゴローニヤを指差しながら叫んだ。

「ピチュー！もう一度アイアンテール!!」

『ピイツチュウウウ!!』

「まずい！いったん下がれ!!」

「…いや、これは無理だ」

「何弱気になってるんだよシュウジ！ゴローニヤなら…ゴローニヤ!」

『ゴ、ゴロオオオオオ…』

「ゴローニヤ戦闘不能…ピチューの勝ち！」

ゴローニヤに走って近づいていたピチューが私の指示を聞いて素早く動く、それを見た三人組のうち二人は回避しろと叫ぶが、いつも眼鏡をかけている少年だけはこの勝負を諦めていた。ピチューがすでに近くにいるということ、ゴローニヤがすでにフラフラになっているためにもう負けてしまうと考えたのだ。そして結果はその通りになった。

ピチューがゴローニヤの頭にアイアンテールをしたためにふらつきながら地面に倒れていく。そしてそれを見たケンジさんが私たちを見て満足したような表情を浮かべながらも片手を上げて審判として声を上げた。

ピチューが私に向かって走り出し、思いつきり抱きついてくる。抱きついてきたピチューを私は思いつきり抱きしめ返して、頭を撫でてあげがとうと礼を言う。そしてピチューは笑みを浮かべて私から離れ、後ろにいたヒトカゲに近づき、ハイタッチをしながら笑い合っていた。

「やったねピチュー！」

『ピイツチュ！』

『カゲ！』

「グツ…おいどうするんだよ…次のポケモンは…!？」

「まさかゴローニヤが…」

「いや、大丈夫だよ。ねえヒナ、次はどうせヒトカゲで来るんだろう？ 2対2なんだから次はピチューじゃなくてヒトカゲで戦え」

「良いこと言った！ ヒナ、次はピチューじゃなくてヒトカゲで戦え！ どうせピチューは何か卑怯な技でも使って勝ったんだろ？」

「君たちね…いい加減にしないか！ ヒナちゃんはやんと正々堂々と戦っているっていうのに…！」

「そうじゃなケンジ…バトルとは正々堂々戦うものじゃよ。だがピチューを貶し、バトルに有利に動くこうとするその意志は見ていられんな」

「……………」

「なんだよ…やつぱりヒナ、博士たちに鼻負されてるからそうやって俺たちの言葉をきかないつもりかよ!!」

「……オーキド博士がそういうのなら僕たちは何も言いませんよ。ですがヒナがピチューで挑むと言うのなら僕たちはこのバトルに負けても勝ってもヒナに対する意識は変えませんかからね」

「……ヒナ」

「だから君たちは……!」

「良いんですよケンジさん、オーキド博士……私たちは次のバトルはもう決めてますから……ね、ピチューにヒトカゲ?」

『ピイツチュ!』

『カゲカゲ!』

三人組はおそらく次のバトルでヒトカゲに有利なポケモンでいくつもりだったのだろう。だからこそピチューが勝ってしまったことに焦り、私たちに向かって挑発するよるうに言う。その言葉にピチューとヒトカゲは怒り、睨みつける。そしてケンジさんやオーキド博士もこの言葉は聞いていられないとばかりに私たちを庇って言うてくれた。フシギダネ達は何も言わずただ黙って睨んでいるだけだった。それが余計に怖いけれど……私たちの約束を守ってくれているようでとても嬉しく感じた……。

私達を庇うオーキド博士達がいるという状況に三人組は余計に私に対する印象を悪くしてしまったようだった。最初からオーキド博士に鼻肩されると感じている三人組だからこそ、今のこの状況が嫌なのだろう……。

私はヒトカゲ達を見てから、怒ろうとしてくれているケンジさんの言葉を遮るように声を出す。そしてヒトカゲの頭を撫でて、頷いた。ヒトカゲは頷いて、ピチューを見てから笑みを浮かべ前に進む。

それを見た三人組は予定通りにヒトカゲが出てきたことに喜び、また先程のオーキド博士やケンジさんの反応を見て微妙そうにしていた。もしかしたら自分たちがやっていいることはオーキド博士たちにとって喜ばしくない状況なのだ気づいたかもしれないとふと思った。

——でもこのバトルですべてが決まるのだ。だからこそ私たちは全力で挑む。

「……よし、行くぞニヨロボン!!」

『ニヨロボオオオオオ!!』

「ニヨロボンね…まあ予想通りかな…大丈夫ヒトカゲ?」

『カゲカゲ!』

「むしろやる気に満ちてるみたいね…よし勝つよ!」

『カゲエエ!!』

「……では、ヒトカゲ対ニヨロボンのバトルを始める…試合開始!」

ニヨロボンが出てきたことにオーキド博士たちは難しそうな表情をしていて：フシギダネ達は私たちに向かって応援しながら観戦している。そして私たちはやる気に満ちていた。

彼らがヒトカゲに対して有利なポケモンを出すと言うのは予想できたことだし、ピチューだったらおそらく倒せたかもしれないけれど、このバトルはどうなるのか分からない。でもそれでも兄がよく言っていた：バトルは最後まで分からないのだから、諦めるつもりはない。最後まで全力を出して戦うまでだ。

「ヒトカゲ、ひのこ!!」

『カゲ!』

「無駄無駄!ニヨロボン、ハイドロポンプ!!」

『ニヨロオオオオオオ!!』

「避けて!」

『カゲ!』

ひのこを大きく跳ね除けるハイドロポンプが勢いよく放たれる。その勢いは強く、レベルが高いということが分かる。だからこそヒトカゲが避けるしかないぐらいの威力

に私はどう勝てばいいのかを必死に考える。勝つと決めたのだから、弱気になるつもりはない、勝つために考えてヒトカゲに指示をしようと口を開く。

「ヒトカゲ、大きくえんまく！」

『カゲエエ!!』

「なっ卑怯だぞヒナ！」

「すげえ…周りが見えなくなった…！」

「感心してんじやねえよヒビキ!!」

「コウ、落ち着いて。これもヒトカゲの技だよ…ニヨロボン、水でえんまくを消すんだ
！」

『ニヨロ…ニヨロオオ!!』

「今よヒトカゲ！顔面に向かって猛火の炎!!」

『カゲエエエ!!』

『ニヨロオオ!!』

「ニヨロボン…!？」

「近くにいる今がチャンスだよ。ニヨロボン、ハイドロポンプ！」

『ニヨロオオオオオ!!!』

『カゲ…!!?』

「ヒトカゲ!…大丈夫? いける?」

『カ…ゲエ…カゲカゲ!!』

ニヨロボンの顔に向かつて大きな炎を直撃することができた。そのおかげでニヨロボンが両手で顔を覆い苦しそうにする。でもすぐに立ち上がって近くにいたヒトカゲにハイドロポンプを放つ。近くにいたために避けることができなかつたヒトカゲは直撃を受け、地面に激突した。私の声を聞いて、ふらつきながらも立ち上がりまだまだやれると叫ぶ。その声を聞いて、私はニヨロボンを見た。ニヨロボンは先ほどのヒトカゲの攻撃に苦しそうだったと言うのに、今はもう大丈夫そうだ。それはレベルが違いすぎるせいか…それとも強いからか…おそらく両方だろう。

だからこそ、ヒトカゲの体力を考えて、なるべく直撃を受けないようにしなければと考える。

「頑張つてヒトカゲ!」

『カゲ!』

「ハッ! 無駄だろ! その弱いヒトカゲで何ができるっていうんだよ! どうせピチューの時もまぐれで勝つたに決まってる!」

「そう…なのかな?」

「そうなんだよ！ヒビキお前ヒナに味方する気かよ!？」

「い、いや違うって!」

「…ニヨロボン、マッドシヨット」

『ニヨロオオ!!』

「ヒトカゲ！ひのこで直撃を避けて！右にジャンプ!」

『カゲ…!』

マッドシヨットがヒトカゲに向かって放たれたため私はひのこで威力を弱めてから回避するように言う。一瞬ふらついたヒトカゲだったがすぐに私の言うとおりに動く。そのためにマッドシヨットは避けられたけれど、避けるだけじゃ勝つことはできない…。

「…ヒトカゲ、もう一度猛火の炎!」

『カゲエエエ!!』

「ハッだから無駄だつて言ってるんだろ！ニヨロボン、ハイドロポンプ!」

『ニヨロオオオオ!!』

「ヒトカゲ左に避けて…ヒトカゲ!!?」

『カゲエ…カゲエエ!!?』

ヒトカゲのひのこでこうげきしようとしたのだが、ニヨロボンのハイドロポンプによつて打ち消され、避けようとしたがヒトカゲの身体がふらついたために避けきれず直撃を受けた。そのせいでほとんど満身創痕になっていて…もう戦うことができないと分かつてしまった。

「ハハハ！ほらやつぱり！お前のヒトカゲ弱いじゃねえか！」

「ニヨロボンが強いからね。君のヒトカゲじゃ話にもならないよ」

「そんなことない！ヒトカゲは…ヒトカゲは弱くないんだから！！」

『ピチュ！』

『カ…ゲ…カゲ…カゲエエエ!!!』

「…ヒトカゲ…そうよ、諦められない…私たちは絶対に勝つて決めて旅をしたんだから…だから絶対に諦める気はない!!! 私たちは強くなるって決めたんだから!!!」

『ピチュピチュウウ!!!』

「だから…頑張ろうヒトカゲ!!!」

『ピチュウウ!!!』

『カゲエエエエエエエエエエエツツ!!!!!!』

一度地面に倒れたヒトカゲに、私は目を見開いて駆け寄り、抱きしめる。ピチューも一緒に近づいてきて、ヒトカゲの様子を見る。ヒトカゲはしぶ濡れで……ほのおタイプだからこそ一番やばい状態になっていた。このままじゃいけないと……バトルを諦めようとしてしまった。

それを見た三人組のうち二人があざ笑うように言う。その言葉に唇を噛んで悔しいと思う。本当だったらここで勝負を続行し、諦めるつもりはないけれど……ヒトカゲをこれ以上傷つけたいとは思ってははいない……だからこそ、もう駄目だと……そう感じてしまったのだ。

でもヒトカゲが目を開き、自力で立ち上がった。そして抱きしめていた私やピチューの手を離し、ニョロボン達の方へ歩く。ニョロボン達に向かって睨み付け、咆哮を上げる叫び声が……諦めたらだめだという声だと感じた……そう伝わったのだ。

このままバトルを終わらせたなら駄目だと……ヒトカゲが言ったと分かった。だからこそ、私とピチューは涙を拭い、ヒトカゲに向かって頑張ろうと叫ぶ。負けるつもりはないからこそ、倒れようとしないうヒトカゲを見て……私たちも倒れない。ヒトカゲが大きな声で叫ぶ、その声に合わせて、私達も叫んだ。

叫んだ瞬間、【何か】が目の前で大きく光り輝く――。

「これは…!？」

「なんじゃと…!!？」

「ヒトカゲ…?」

『ピチュ?』

『ガウウウウウアアアア』

!!!!!!!

まるで兄のリザードンのように、大きな炎を吐きこちらに顔を向けて笑みを浮かべている…金色に輝くりザードが私たちの目の前で立っていた。私は小さく泣きながらも…笑みを浮かべてヒトカゲから進化したリザードを見た。ピチュなんて進化したことに喜んで踊っているぐらいだ。

進化したリザードは私に向かって炎を吐いてから鋭くなった爪を見せ、何かを伝えようとする…相棒だからこそ何が言いたいのか分かった私は頷いた。リザードは私が頷

いたのを見て笑みを浮かべ、ニョロボン達を見る。三人組はリザードに進化したことに焦っているようだった。

「なツ…何でだよ！何で進化なんか…!?」

「うわ…俺進化見たの初めてだ!!」

「おい感動してる場合か!!」

「ツ…進化したとしても体力はないはず…ニョロボン、ハイドロポンプだ!」

『ニョロ…ニョロオオオオオオ!!』

「いくよりザード!かえんほうしゃ!!!」

『ガアアアアア!!!』

「なつかえんほうしゃ!?!」

「そんな…まさか進化したから覚えたって言うのか!?!」

『ニョロオオオ!!』

「そのまま近づいて、きりさく!!」

『ガアアアアアツツ!!!』

「ニヨロボン!!?」

『ニヨ…ロオ…:…』

「やった…? やった! 勝ったよりザード!!」

『ピチュピチュウ!!』

『ガウウ!』

進化したことによって放たれるかえんほうしゃはヒトカゲだった頃に放つ猛火の炎と比べて威力が格段に違っていた。ハイドロポンプとぶつかり合い、蒸発する光景こそ、そのリザードの炎の威力を知ることができた。そしてその次にきりさくを使う。これらはリザードが直前になって教えてくれたことであり、進化してもその仕草だけでちやんと分かる自信があった。顔面に向かって鋭い爪で切られたニヨロボンはその威力にふらついて…そのまま立っていられないとばかりに地面に倒れた。

それを見た私たちは一瞬だけ茫然としてから…リザードに向かって走る。リザードはふらついていたが、私に抱きつかれたときは笑みを浮かべていて…ピチューが頭に乗ってきてハイタツチをした。ヒトカゲと変わらないその様子に…良かったと…勝てたともう一度、泣いてしまった。

「くそ…畜生！何だよ…何で…ヒナのくせに！」

「強いんじゃない…サトシさんの妹だから強いのかな…俺たちは、やっぱり間違っていたのかな…」

「ビビキ…お前どつちの味方なんだよ…！」

「いや、コウちゃん…でも俺たち負けたんだぜ？だから…」

「ふん…たまたま進化したからこんな結果になっただけさ」

「君たち…まだそんなこと言ってるのか!？」

「これケンジ…じゃが、いろいろと説教は必要じゃな」

「……オーキド博士、ケンジ君…ここは私に任せて」

ニヨロポンをボールに戻した三人組は悔しそうにしながらも私たちを睨みつけていた。そして三人組のうち二人は反省などせず、たまたまだと言ったり、偶然の勝利だと言句を言う。その言葉にケンジさんとオーキド博士が険しい表情をしていたけれど、母が二人を止めて箒を持ったまま近づく。その表情は優しく…寒気がした。

私とピチューは思わずリザードにしがみつき、リザードは私たちを守るように抱きし

めてくれた。

「あなたたち…すこしお話でもしましょうか？」

「「ヒイ！」」

両手に箒を持っていたはずの母が笑みを浮かべて言った瞬間。箒が3つに分解された。…つまり、手に持っていた部分がその強い握力に負けてしまい、3つになって折れてしまったのだ。それを見た三人は固まり、悲鳴を上げる。

何処かデジャブを感じた私たちは母の所行を見て、声を出して叫んでしまった。

「え、ママ…お兄ちゃんと同類だったのおおおお!!!?」

『ピチュ?!』

『ガウウ…!』

その後、三人は私たちに向かって泣きながら土下座して謝ってきた。もちろん母の所行だったりするけれど、私たちはその様子を遠い目で見つめていたりする。ついでに言っておくと兄のポケモンたちは良いぞもつとやれ!とばかりに盛り上がった。

まあ、結局最後はカオスになってしまったけれど……それでもバトルに勝って良かったと嬉しく思えた。

第二百話 Another Story サトシ

ここは、カントー地方とジョウト地方の中間に位置するシロガネ山。昔は保護地区としてポケモンたちが守られていた場所だったが、最近密漁団などが数多く見られるようになり、それに激怒したある青年がその保護地区を丸ごと管理するようになった。それは一般的に見れば有り得ない暴挙であったが、そのおかげでシロガネ山にいるポケモン達は人間に襲われることがなくなり、青年のポケモンたちによってより逞しく成長していく光景が見られるようになったのだった。

そして現在——そのシロガネ山では、ある意味日常のように行われている修行をしていた。大きな騒音が青年の周りにいるポケモン達から聞こえてくる。それはトレーナーなら音だけで分かるであろう技と技のぶつかり合いだった。青年はポケモン

たちが独自に行っているバトルを見て時々指示を出し：そして青年の肩に乗っているピカチュウに電撃でバトルをしているポケモン達に向けて放つように言うことがあった。電撃はバトルを中断させるためでも、妨害するためでもない。予想外な攻撃に焦ることなく躲すか相殺するかと自ら考えてもらい、バトルで油断なく戦うための修行でもあった。

青年のポケモンたちがやっていることにシロガネ山に棲んでいるポケモンたちが興味深く見つめていたが、危ないから近づくなと青年のバンギラスが優しく止めに入った。

そしてそんな騒がしい青年とポケモンの近くに一体の大きなポケモンが空から降りてきた。それを青年：いや、サトシは笑みを浮かべて言う。

『ピジヨピジョット!!』

「ああ、あいつら来てんのか」

『ピイカ…』

サトシはポケモンたちに：フシギダネ達にそれぞれ修行を終わらせて休むように

言ってから空から降りてきたポケモン…ピジョットに乗って飛んでいく。飛んで行った先にいたのは、3人の青年たちだった。

「やあサトシ。元氣そうで良かったよ…」

「……………ふん」

「サトシ先輩!!お久しぶりです!!」

「久しぶり…というかお前等3人が揃って来るだなんて珍しいな…?」

『ピイカツチュ』

3人…いや、シゲルとシンジとシューティーはそれぞれサトシを見て笑みを浮かべて声をかけていた。…笑みを浮かべていたのはシゲルとシューティーだけだったが、シンジは雰囲気から見ると笑みを浮かべているといつてもいいぐらいには上機嫌だった。

いつもと変わらない皆に笑みを浮かべ、どうして3人揃ってここに来たんだとピカチュウと一緒に首を傾けて問いかけた。

それにはシゲルが肩をすくめて口を開く。

「偶然だよ偶然。でなければシューティー君はともかく…どこぞのフロンティアブレーンと会う気なんてさらさらないよ」

「それはこっちの台詞だ。ただの研究者に会うつもりなど俺はない」

「ただの研究者？言ってくれるね…そろそろバトルで決着でもつけるかい？」

「ふん…望むところだ…」

「お前等と一緒にになるとすぐそれだな…」

『ピイカ…』

『ピジョット…』

シゲルとシンジがお互い睨み合つてモンスターボールを取り出しバトルしそうな雰囲気サトシとピカチュウ、ピジョットが呆れている。シューティーはというとその様子にどうすればいいのか見て慌てている。

でもサトシやピカチュウ、ピジョットが呆れていても、シューティーが喧嘩を止めようと動いてもシゲルとシンジの言い争いは過熱する。

「ずっと思っていたことだけれど…君は僕たちや挑戦者に対して素っ気なさすぎるんだ。少しは愛想よくしないとこの先どうなるか分からないよ？」

「お前が心配するようなことじゃないだろう。俺は俺のやりたいようにやるだけだ。それにお前の場合愛想が良すぎて本音かどうか分からなくしているだろう？やり過ぎも良くないと俺は思うが…」

「……………本当に君といると腹が立ってしょうがないな！」

「……言いたくはないが、同感だな」

「ちよつ…落ち着いてください。サトシ先輩に会うために来たんですから何もそこで争わなくても…!」

「黙れイツシユチャンピオン!!」

「いい加減にしないと僕だって怒りますよ…!!」

「……おいお前らそろそろ落ち着け」

サトシは怒鳴り合いにまで発展してきそうな勢いのシゲル達を止めるために近づいてから声をかけた。シゲル達は一度シューティーに大きな声で怒鳴ったことで高ぶっていた感情を落ち着けることができたのかバトルができないことに残念そうな表情を浮かべながらも手に持っていたボールをしまう。シューティーはというと怒鳴られたことに少しだけ嫌そうな表情を浮かべてボールを出そうとしてきたが、サトシが喧嘩を止めようと動いたのを見てすぐに考えを改めてジャローダの入っているボールをしまう。

そしてサトシはシゲル達が何故ここにやって来たのか話を聞いた。サトシがいるこ

のシロガネ山は通常入ることができない辺境の山だ。たとえサトシと親しいシゲル達であろうとこちらに来る場合は様々な手続きをしてからでないといけないのだ。それは、ポケモンたちを守るために必要な手続きとなつているために面倒だとしても仕方がないことだろう。それに研究者やブレン：チャンピオンであろうともその手続きを省略することはできない。まあサトシは例外として認められてはいるが。

「ああ…僕はシロガネ山にいるサトシが知らないかもしれないと想定して来たんだ」

「何かあったのか？」

「そうだね…ヒナちゃんがリーグに出場する」

「っ！…そうか。ようやくか…！」

『ピイカツチュ!!』

『ピジヨ…!!』

シゲルが言う言葉にサトシ達は笑みを浮かべて聞いていた。サトシの妹であるヒナはようやく10歳になったためにトレーナーになり、カントー地方を旅するようになった。た。

「サトシ」の妹だからこそ、変なトラブルに巻き込まれていないかと心配になったサトシ

だったが、シゲルの報告を聞いて元気に旅しているんだと安堵していた。今の状況ではリーグを見に行くことはできないけれど、いつか会えることができればバトルをしたいとサトシはそう考える。

そしてそんな機嫌が良いサトシにシンジとシューティーが話しかける。

「サトシに聞きたいことがあつてきた。ヒードランがいるはずの洞窟からポケモンの大きな悲鳴と技の騒音が聞こえてきたと報告があつたんだが…元凶の可能性がある白黒コンビがその騒動に関与してないみたいでな…何か知っているか？…あとバトルしろ」

「ああヒードランならエンテイ達に喧嘩売ってボコボコにされたつて聞いたけどそれじゃねえの？…あとバトルは受けて立つぜ」

「サ、サトシ先輩！ぼ…僕もバトルしにやってきました！…挑戦よろしくお願いします！！」

「そうか、バトルしに来たのか…分かった。シューティーがどのくらい強くなったのか見せてくれよう？」

「はい！」

「ああ、なら僕も久々にサトシとバトルがしたいな。いいかい？」

「おう。バトルなら喜んで受ける！」

『ピイカ!』

『ピジョオ!』

シンジはシンオウ地方で起きたヒードランの騒動の真実を知らないかという疑問とバトルしたいという欲求をサトシに向かって言う。サトシは以前ヒードランが調子に乗ってエンテイ達に喧嘩を売り、ボコボコに返り討ちにあつたことをシンジに話してからバトルを受けてたつと笑顔で答えた。

そしてシンジとバトルをしそうなサトシ達の雰囲気はシューティーが慌てた様子で話しかけた。シューティーは挑戦者としてバトルをするためにこちらに来たのだ。そしてそのシューティーにサトシは優しい笑みを浮かべてバトルをしようと言う。そんな彼らの様子を見たシゲルがたまらずバトルをやりたいと言ってきたため、サトシもそれに喜んで笑みを浮かべて頷いた。

だが、シンジがシゲルを見て挑発的に声をかける。

「ふん…できるのか?ただの研究者となつたお前に高度なバトルが?」

「……上等だ。まずは君から倒してやろう…サトシ、確かバトルフィールドは複数あつ

たよね？そこでやろうかシンジ君？」

「ふん。勝つのは俺だ……！」

「あー…盛り上がってるなあっちは…」

『ピイカツチュ…』

『ピジヨピジヨオ…』

「あ、あの…サトシ先輩…」

「ああそうだなシューティー…あっちでバトルしようか」

「はい！」

シゲルとシンジが複数あるバトルフィールドのうち一つを使って試合を始めていた。その試合は高度な技や激しい衝突音が周りに響くほど豪快に指示を出し、行っていたのだった。その指示とポケモンたちの技の衝撃度により、シゲルとシンジの怒りが凄まじいことを知ってサトシ達は呆れる。そんな彼にシューティーが恐る恐る近づいて話しかけた。サトシは笑みを浮かべてシューティーがしたいと言っていたバトルをしようと頷き、空いている方のバトルフィールドへ向かう。

そしてそれぞれが笑みを浮かべて向き合い…挑戦者と【ポケモンマスター】との試合が始まった――。

第二百一話　兄は釣りで勝負をする

こんにちは兄のサトシです。俺たちはコウジンタウンの水族館へ来ています。

セレナが水族館に様々な地方のポケモンがいると言って、シトロンたちが興味を示し、一緒に行こうと誘ったために行くことになった。

そうして来た水族館はかなり広いと感じぐらい様々な水槽やいろんなイベントが行われていた。どうやらこの水族館には様々な地方の水ポケモンたちが集められていて、それぞれが水槽に入れられ人々と交流する場となっているようだった。通常ポケモンたちを人間に見せるだけの水族館というのはポケモンの保護に厳しい団体などに何か文句を言われると思うのだが、この水族館ではそのようなことはないらしい。

…というより、水ポケモンたちが積極的に人間たちと交流しているのを見て大丈夫かと安心した。本当に嫌だつたり逃げたいと思っていたり…何かあれば必ず大きな騒ぎ

が起きるのだから…でもこの水族館では水ポケモンたちの楽しそうな様子からそれは起きないだろうと俺たちはそう考え、楽しんでいく。

水ポケモンはやはりセレナが言っていた通り様々な地方のポケモンたちが集められているらしく、新米トレーナーが最初に貰うポケモンの水タイプもそろっていた。ゼニガメは小さい身体から大きな身体までのポケモンたちがいて、それぞれが優雅に泳ぎながらたまにこちらを見ている人間たちに手を振ってアピールしている。ミズゴロウ達は沼地のような場所で心地よく眠っていて、ポッチャマ達は揃って散歩をして…そしてミジュマル達は水中シヨウのようなことをしているようだった。

すべてのポケモンたちが、人間と交流できて楽しいという表情を浮かべていると感じていたのだ。

「本当にいろんな地方のポケモンたちが集められているんだな…」

『ピイカ…』

「うん！サトシは見たことあるポケモン達ばかりかもしれないけれど…。サトシはつまらない…？」

「いや、つまらなくない。ゼニガメ達も見れたし…懐かしいって感じたぜ」

『ピイカツチュ』

「そっか…良かった…!」

「何でセレナがそんなに喜ぶんだよ…?」

「ふふ…サトシが楽しいと、私も楽しいのよ!」

「…ああそう」

『ピイカツチュ…』

シトロンやユリーカが興奮して楽しそうに笑みを浮かべながらも水槽の中を覗いているのをセレナが遠目で見ながら俺に近づいて不安そうな表情で話しかけてきたために口を開いて言う。

不安そうな表情なのは水族館に行こうと誘ったのがセレナだったから、皆が楽しんでほしいと感じていたのではないかと思っただけだ。でもそれは勘違いで、ただ俺が楽しんでほしいというその言葉に苦笑しながらも前へ進む。

俺が前に進んだためにシトロンたちが慌てて近づいて一緒に水族館の中を楽しみながら歩いていく。

…そしてそんな様子を肩に乗っているピカチュウはただ微妙そうな表情で苦笑していたりする。でも俺にとってはセレナの好意を受け取ることではできないし、もうどうしようもないことだから放置した方が良くと考えているのだ。だから俺は苦笑している

ピカチュウの頭を撫でて何も言うなど行動で示した。

.....

——その後、水族館に大きな黄金色のコイキングが飾られていて、何故それが飾られているのかを知ることができた。金色のコイキングは水族館の館長から聞いた話だとこの海にいるということ、そのポケモンを釣ろうとしていることを話してくれた。そして館長の近くにいたポケモンは見たことがなく、館長の相棒であるというウデッポウについても知る事ができた。ウデッポウはどうやら人と交流するのが好きではなくて……バトルが好きで静かなタイプ……まあつまり、俺のブイゼルのような性格なのだと思えたのだった。

「本当にいるんですね黄金のコイキングが……!!」

「凄く凄く！見てみたい!!」

『デネ!!』

「昔の人も見たようじゃし、目撃例もある……黄金色のコイキングは必ずいると分かっているから……じゃからワシも黄金のコイキングを釣り上げて、水族館で人々に見ても

らおうと思っっているのじゃよ」

『ウウ』

「まあ、色違いのポケモンはいるだろうから黄金のコイキングもいそうだよな…」

『ピイカ…』

「そういえばサトシって色違いのポケモン持つてるんだよね？」

「ああ、ヨルノズクな。あいつ結構頭いいんだぜ」

『ピイカツチュ！』

「マサラタウンにいるサトシのポケモン達…早く見てみたいですね！」

「でもその前に黄金色のコイキングだよ！」

『デネデネ！』

「ああそうだな…あの、俺たちも一緒に釣り手伝いますよ？」

『ピイカツチュ！』

「おお手伝ってくれるのか！」

———というところで、俺たちは館長から釣竿を貰い、一緒に黄金のコイキングを釣り上げることになった。といっても色違いのポケモンはそう簡単に見ることはで

きないため、本当に遭遇するのなら根気と運が必要になるのではないかと思う。まあ黄金色のコイキングがこの海に絶対にいるのならいつかは見れるだろうと考え、釣りを始めた。

「う……えつと……これってどうやるの？」

「セレナは釣りは初めてですか？」

「うん。ほとんどサイホンレースしかしてなかったから釣りは初めてで……」

「ならサトシが教えないとね！」

『デネ！』

「……俺？」

『……ピイカツチュウ』

「ピカチュウ、そんな目で見るな」

『ピイカ……』

「あの……サトシ……よかったら教えてくれないかな？ 本当によかったらいいからね……？」

「……おう」

セレナが少しだけ期待するように：でも不安そうな表情で俺に向かって話しかけてきたために仕方がないと諦め釣りの仕方を教える。と言ってもただ釣竿のルアーを思いつきり海に向かって飛ばすだけなんだけどな。

：もしもここでデントがいたら興奮しながら教えようとするのではないかとふと考えてしまった。そしてカスミも同じように：まあ少しだけ馬鹿にしたような表情を浮かべつつ、積極的に詳しく教えようとするだろうと思う。釣りに関して興奮する仲間がここに居なくて良かったと思いついながらも、セレナに教えていった。その時のセレナの表情を俺は直接見ようとは思っていないし見る気はない。

ただシトロンとユリーカ、ピカチュウとデデンネが温かい目でこちらを見ていたのは苛立った。

.....

「釣れないですね…」

「他のポケモンは釣れるけどなかなか黄金のコイキングは釣れないな…」

『ピイカ…』

夕方になつてきても黄金色のコイキングを釣り上げることができず、俺たちは残念そうな表情を浮かべていた。昼ごろはコイキングやサニーゴ、ラブカスなどを釣り上げることができて楽しかったのだけれど、時間が経つにつれそういったテンションは下がり、黄金色のコイキングを釣り上げるのは無理ではないかと皆が考えてしまっていた。

途中でユリーカとデデンネがウデツポウに突撃し、攻撃されそうになったハプニングがあつて余計に時間が流れ、ついに夕方になつてしまったのだつた。夜にはポケモンゼンターに行かなければならないため俺たちはこれ以上釣りをすることはできない。だからこそ残念そうに…そして手伝うことができなかったということで館長に釣竿を返そうとする。

——でも館長はただ微笑んでいただけだつた。

「その釣竿は貰つていい」

「え、良いんですか!？」

「ああ、君たちに使つてほしいんじゃ」

「でもこんなに立派な釣竿は…」

『ピイカ…』

「いいんじゃないよ。黄金のコイキングを釣り上げることができなかつたとしても、釣りを
する楽しみを知ってほしいからのう」

「…ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

『デネデネ！』

館長は俺たちにこの釣竿をあげるつもりで渡したようだった。だからこそ館長にありがとうと礼を言つて、俺たちはその場から離れようとした…でもその瞬間ユリーカが大きな声で海を見て叫んだために俺たちも、館長もその方向を見る。

そしてそこにいたのは黄金色のコイキングで…夕日に当たつて綺麗に跳ねていた姿だった。

その姿を見た館長は余計にやる気を出したようで、俺たちに向かつて次に来るときは必ず黄金のコイキングを見せようと宣言していた。だから俺たちは笑みを浮かべ、その日が来るのを楽しみにしていようと約束をした。

第二百二話く妹は兄たちと電話するく

「ひ、久しぶり…お兄ちゃん…」

「よおヒナ。何で俺が怒っているのか…分かっているよなあ?」

「スイマセンでしたアア!!!」

「……………はあ」

こんにちは妹のヒナです。マサラタウンで説教を受けて、その後聞いた話によると…次に兄から連絡が来た時に私と話をするように言っただけです。まあつまり、兄からの説教ですよ…。

マサラタウンでの出来事から、オーキド博士たちに怒られ、母に怒られ…そしてフシギダネたちや伝説たちにこっぴどく叱られました。まあでもそれは私たちが望んで

やった行動の代償だと思えば仕方ないと諦められます。それに反抗もできないぐらい怒られるようなことをしたのは事実ですから反省しなければと思いつべてを受け入れました。

怒られたのに一番怖かったのは母の笑顔か：それともフシギダネ達との説教か：まあどつちも怖かったです。気温は温かいというのに母やフシギダネ達といた時は温度が下がり、まるでブリザードかふぶきで荒れているような気がしましたから：真冬の寒さを味わったような感じがしたと感じました。

：それにミュウツーから伝言で兄の説教もあるぞと言われて逃げようかと思つたぐらいだ。

でも、フシギダネたちや伝説たちの説教は今回一緒に同行してくれたミュウツーが慰め、カスミさんからの電話もあつたらしく、あまり叱るなど言ってくれたからすぐに済んだ。まるでお姉ちゃんみたいな感じがしたからミュウツーのお姉ちゃんとも呼ぼうかなとその時私ではなく隣にいるミュウツーを睨むマサラタウンのミュウツーを見ながら思つた。マサラタウンにいるミュウツーは：ミュウツーのままでもいいかと思つたり…。

まあそんなこんなで、今現在兄の説教を受けている状況である。私の後ろで隠れながらも様子を窺うピチューとリザードを兄がちらりと見て、それからため息をついていつ

もの優しい笑みを浮かべた。兄が笑みを浮かべたと思ったたらピカチュウが肩に乗って私たちを見る。おそらく先程見えなかったピカチュウは足元にいたのではないかと思つた。説教するなら兄だけで十分だと聞いていたのだろう。でもって笑みを浮かべたことにもう兄は怒つておらず大丈夫かと思つたらしい。

「…聞いたよ全部。だからこそお前が家出したのにも納得した。それに勝つたんだろ？ 本当に良かったな。それにリザード、お前は勝負で進化したんだなおめでどう…！」

『ピィカツチュ！』

「お兄ちゃんにピカチュウ…ありがとう！」

『ガウウ！』

『ピツチュ！』

「それにしても…ヒナのリザードは進化しても素直だな…良かったな俺のリザードンの時みたくならなくて」

『ピィカ…』

「ははは…まあ素直にならなくても私はあきらめないけどね！」

『ガウ…ガウウ!!』

『ピツチュピチュ！』

兄はリザードンがヒトカゲからリザードへと進化したときのことを思い出しているのだろう。兄のリザードンはヒトカゲから進化してリザードになった時に一時期グレた。でも兄は素直にならなくても諦めずに直接話し合いをしてよく喧嘩をするようになったけれど、命令を聞かなくなったということはない。その後いろいろとあつたみたいだけれど、でもリザードが素直にならなくなってはバトル好きになり、そしていろんな経験をしてからあの強いリザードンになったのだらうと思った。

でも私のリザードはヒトカゲから進化してもいつもと変わらずいや、ちよつといういろと：うんまあ私たちに対して物凄く過保護になったけれど、でも優しいのはいつも通りだ。ピチューも身体が大きくなり、金色で派手になったりザードと何も衝突することなく、今までと同じようによく一緒に技の練習をしている。つまりはいつも通りの変わらない日々を過ごしているのだ。

リザードが優しく素直なままでいることに兄は安心し、ピカチュウは良かったとため息をついているのを見て私たちは苦笑してしまった。たとえ私のリザードが素直にならなくても：グレてしまったとしても私とピチューは諦めず、兄のリザードンのような関係を作り上げていきたいと思っている。喧嘩をしたとしても、絶対にずつと一緒にいるし諦めるつもりはない。だからどんなリザードになつたとしても、私たちの仲が変わることはないと言った。その私の言葉にリザードは笑みを浮かべて頷き、ピチュー

は自信満々で何度も頷いていた。その様子を見た兄とピカチュウは良かったなど優しくリザードに言い、笑みを浮かべていた。

…もしかしたら電話ではなく直接会ったのなら…私たちの頭を撫でるかもしれないと思うほど、兄は優しい表情を浮かべていた。

「ああそうだ…お前に紹介したい仲間がいるんだ…ちよつと待つてくれ」

『ピカ!』

「うん…え? 紹介つてユリーカつていう子?」

『ガウ?』

『ピチュ?』

「いやユリーカ達」

『ピツカ!』

そう言つて兄とピカチュウは電話している所から離れていく。見えないけれどしばらく待つていると何か大きな声が電話の向こうから聞こえてくる。そしてその大きな声が届くに喜んでいような歓声となつて聞こえてきた。

帰つてきた兄とピカチュウは後ろに喜んでいような三人の仲間を連れて戻つてきた。

「セレナ、シトロン、ユリーカ：紹介するよ。ヒナとりザードとピチューだ」

「うわあ初めまして！私ユリーカ！それでこっちはデデンネ！よろしくねヒナちゃん！それなりにザードにピチューー！」

『デネデネ！』

「初めまして。僕はシトロンと言います。サトシからヒナちゃん達の話をとくさん聞きましたよ。ぜひ仲良くしてください！」

「あ、うん…よろしくお願いします！」

『ガウウ！』

『ピチュー！』

金髪の兄妹らしき人たちから微笑まれながら私たちによりくと言う。その言葉に兄は一体私たちの何を話していったのか気になりながらも、笑みを浮かべてこちらこそよろしくと伝えた。

そしてその後、後ろにいたのは10人中10人が美少女と認識して彼女を見るために振り返るだろうと確信できるほどの可愛らしい女の子が頬を赤く染めながらこちらをしつかりと見て言う。

「こ、こんにちは…私はセレナ！いつかサトシの嫁になるから、私のことは義姉として仲

良くしてねー！」

「え、うん……………えッ!!？」

『ガウウ!!?』

『ピチュ!!?』

「あー悪い…セレナ」

「…ごめんなさいサトシ。でもこれだけは譲れない…絶対にサトシのことは諦めたくな
いから…」

「それは旅が終わってから決めるって言っただろ？ヒナが混乱するから止めろ」

「…分かった。じゃあヒナちゃん、旅が終わってから義姉としてよろしくね？」

「それ全然解決してませんよ…サトシもいい加減諦めてください」

「そうだよ？セレナ絶対に諦めようとしてないんだから」

『デネ…』

『ピイカ…』

「うるせえそんな目で俺を見るな！」

「お兄ちゃんに恋愛フラグが立っている…ってこと…?」

『ガウウ?』

『レチユ?』

美少女：セレナさんは兄のことが大好きで、いつか兄に嫁ぐからそれ以降も仲良くしてねと言ってきたのだと分かった。そんないきなり私達に嫁になるからよろしくというセレナさんの大胆な行動が、すべて兄のためにやっているのだと分かったためにある意味尊敬する。兄が大好きなことを表情や行動に出し、かなり積極的に兄に近づこうとするセレナさんの様子に兄は困惑していると見えた。

まあ兄は前世女だったということもあるし：そういう恋愛系でのフラグは今までの旅でも全て叩き潰してきたから：こういういったセレナさんとの様子は初めて見たとそう私は感じ、驚愕してしまった。何よりも兄がセレナさんが自分を好いているという事実を知っているのに何もしていないということ、セレナさんを邪険に扱っていないということに驚いたのだ。

兄は敵を見なし、邪魔者だと感じたらすぐにそういう存在をこちらに近づかせないように徹底的に排除する。もちろんそういうのは嘲笑や敵意、そして恋愛を含む感情があつた場合のみすぐさま行動し徹底的に潰してしまおうと考える兄が：まさかセレナさんのように大好きだと分かっているというのにそのまま仲間として近くにいさせていること自体が凄いと思えた。

そして現在電話先で争っている兄達を見ながらも：兄がセレナさんに向けて言う声

が、今まで敵だと認識して来た相手に対して発する冷たい声とは感じず、むしろシトロンさん達と同じように接しているということが分かって私は少しだけ複雑な心境になった。今はまだセレナさんに対して表向きは冷たいのだけれど、内心ではかなり許しているということや仲間として認めているということからセレナさんにもチャンスはあるかもしれないと思えたのだ。

つまり、これはセレナさんの行動次第によつては兄も恋をするのを諦めるかもしれないということ、セレナさんを受け入れるかもしれないということだった。妹の私としては複雑であり…一生独身として過ごすよりは兄のことが大好きなセレナさんと一緒にいた方が良くかもしれないと思えてしまう…。

「…まあ、これはお兄ちゃん達の問題だろうし…とりあえずベイリーフ達には言わないようにしないとね…」

『……ガウウ』

『……ピチュ』

兄とセレナさんの恋は、進展する可能性もあるかもしれないと考え、私たちのことを忘れて争っている様子に電話を切ろうかどうか悩んだ。

第二百三話く兄はシヨウヨウシティに着くく

こんにちは兄のサトシです。シヨウヨウシティに着く間にアマルス達にあったり、海底に行きドラミドロ達と出会ったりしました。カロス地方でしか見れないポケモンたちに俺とピカチュウは来て良かったと思え、またカロスリーグで絶対に優勝しようと思いに誓いました。

…まあそんなことがあつて、ようやく着いたのはシヨウヨウシティ。でもジム戦をする前にやるべきことがあるため俺はセレナたちに説明する。セレナたちは首を傾けて何だろうと疑問に思っているらしい。そんなセレナたちに話していくと、納得してくれたように頷いてくれた。

「——じゃあ、これからサトシはシヨウヨウシティで約束してた子と会うってこと

？」

「ああ、カラマネロのこともあったし…あいつの言ってること分からなかっただろ？だから念には念を入れておきたいって思ってたな」

『ピイカツチュ』

「カラマネロですか…確かにあのポケモンは最後に何を言っているのかが分からないままでしたね…では、これから会う人というのはポケモンの言葉が分かるのでしょうか？」

「ポケモンの言葉がわかるの!? 凄いねデデンネ!!」

『デネデネ!』

「ああいや…ポケモンの言葉…というか気持ちに分かる人間は確かにいるけど…これから会うのはちょっととした買い物を手伝ってもらった一緒に旅してた前の仲間なんだ」

『ピカピカ』

俺はカラマネロの一件から、ポケモンの言葉が分かる奴がいた方が良く感じていた。マサラタウンに電話した時に妹がバトルに勝利し、ヒトカゲがリザードになったことを喜び、そして説教をしたついでにルカリオがいるかどうか…帰ってきてるのかどう

かの話を聞いた。でもルカリオはときわたりでやって来たアーンさんと共に旅に出
てしまつたらしく、ここにはいないしまだ帰つてきていないと答えてくれた。もしもい
たならばカロス地方に来て旅に同行してもらおうかと思つたけれど、まあ仕方がないだ
ろう。それにルカリオがマサラタウンにいたとしても、妹から離れないと言つて断りそ
うだと予想していたから想定内だ。

だからこそ俺はちよつとだけ面倒な手段に出た。

「サトシ！久しぶりかも!!」

「久しぶりだなハルカ！元氣そうで良かったぜ！」

『ピカピッカ!』

「なつ……お、女の子ツツ!?しかも仲が良い!!」

「サトシが旅していた前の仲間ですね……ってセレナ!?落ち着いてください!」

「これが……修羅場……!!」

『デネ……!』

「ユリーカも変な言葉を覚ええないの!!」

ハルカがこちらに向かつて笑みを浮かべながら走ってから俺とハイタッチをした。久しぶりに会った挨拶でもあり、そのハイタッチという行動に俺はヒカ리를思い出し懐かしいと感じた。

でも再会を喜び合っている間に後ろの方ではセレナが真顔でハルカをじつと見つめ、ユリーカとシトロン、デデンネは何か話し合っている。セレナのことを考え、厄介なことにならないようにと思いつつも後ろを振り返り、ハルカに向かつて話し始めた。

「ハルカ、こっちは俺の仲間のセレナ、シトロン、ユリーカだ」

『ピッカ』

「初めまして！私、ハルカ！サトシと前にホウエン地方とカントー地方を旅していたの！」

「よ、よろしくお願いします…あの、あなたはサトシの…何ですか？」

「サトシの後輩かも！」

「かもって…」

「ハルカの口癖なんだ気にすんな」

『ピイカツチュ』

「そつか…じゃあただの後輩なのね？」

「ええそうよ！サトシはトレーナーとしてのポケモンと旅をすること、戦い方を教えてくれた先輩で、私はその後輩かも!!」

「恋愛に関しては何？」

「おいセレナ」

「…？…ないよ？サトシとはただの先輩後輩…だよ？」

「…そつか…良かった…！」

「良かったねセレナ！」

『デネデネ！』

「先輩と後輩…そういうえば旅をしている間に仲間がいたというのは聞きましたから…なるほど、ホウエン地方とカントー地方での旅仲間ということですか…なんにせよ、良かったですネセレナ」

「うん良かった…もし違っていたら私サトシのこと縄で縛りつけて監禁して外に逃がさないように鎖付きの首輪をつけて毎日毎日私のものだって印をつけてサト

シを苦しめたり傷ついたりすることはしたくないから印といっても手足を折ったり怪我をしないようにしてああでもしも私から逃げようとしたらそれは我慢ならぬから私の名前をお腹や背中や手足やとにかくありとあらゆる場所に切り刻んで溢れ出た血をすべて飲んで刻んだ部分をすべて焼いて二度と消えない痕を残して逃げ出さないように何度も何度も何度も何度も私の名前を呼んで私がどのぐらい好きか心や身体にすべて教えて私以外を見れないようにして外に出ようと思えないように抱きしめて抱きしめてもらってずっと離さないで私以外の名前を呼ばないようにしてとにかく全部全部全部全部ぜんぶ私のものにして一生傍にいてもらおうかと思ってた！」

「……えっと途中から何を言ってるのか分からなかったけど、つまりサトシのことが好きなのね？」

「うんそうなの！だからハルカちゃんがサトシのこと恋愛的な意味で好きじゃなくて良かった！だってハルカちゃん可愛いんだもん！」

「可愛くないよ？セレナちゃんの方が可愛いよ！……でも、そっかサトシが好きなんだ！頑張つてねセレナちゃん。私応援するからね！あ、私のことはハルカでいいわ!!」

「私もセレナでいいよ。よろしくねハルカ！」

「愛されてるねサトシ！お兄ちゃんもこれぐらいの好きなお姉さんを見つけないと駄目だよー！」

『デネデネ！』

「い、いやこれはそういう問題ではないような…つて余計なお世話だよリーカ！」

「うわあこれは…ああいやなんでもない…」

『ピカピカ？』

「サトシ…」

「悪い俺あまり関わりたくない…」

『ピカ…』

「そう…ですね。ですがセレナのサトシに対する気持ちは本気ですから頑張ってください

い」

「…おいそれセレナとくつついてくれつて意味だろ！」

「僕にはその解決方法しか考えられませんよ！それにセレナの気持ちは分かってくださ

い!!」

「俺の気持ちも分かれよシトロン!!」

「え!?!いやサトシだつてセレナのこと…」

「…いやありえないから…絶対…」

『ピイカッチュ……』

「サトシ……」

「その目で見るな」

シトロンとユリーカはセレナの味方であり、そういった好意についてもよく分かっている。だからこそハルカが誰なのか、俺とどういう関係なのか気になったのだろう。そして後輩だといった言葉に対して良かったと言っているけれど、俺にとつてはそれは微妙だ。恋なんて絶対にするつもりはないし、俺の傍にいてもらおうだなんて考えていないのだから。でもこれは少し引く。良かったと安堵したためにセレナの俺に対する感情が爆発したような形で一気に話していったのだから。思わずヤンデレかと叫びたいぐらい具体的な事を一気に話していたのにはさすがの俺でも引いた。二歩ぐらいは引いた。

シトロンもセレナが言った言葉を理解してしまったのか、無意識のうちに一步後ろに下がって青ざめた表情でセレナを見つめていた。でもまあセレナだからしょうがないかと諦めているらしい。それは俺と旅をしていくうちに学んだ非常識への対応のせいだろう。あとそんな目で見ないでほしい。俺は絶対にセレナと恋をするつもりなんてないし、あまりそういうことには関わりたくないと思っているからだ。

でも実際に傷つけようとしないうことと、言葉だけならばまあ許容範囲だと考え

ている。セレナがもしも先ほど暴走して叫んだことを実行しようとしたり、俺たちを傷つけるような行為をする場合は敵と見なして攻撃しようと思つてゐる……まあそれを実行するには少しばかりその時の俺たちの状況と俺自身の感情によるだろうが……。

でもセレナのように少しぶつ飛んでゐるのは旅でよく見ていることだし、今までの仲間だつて俺よりも暴走したりぶつ飛んだことをしたりしていた。だからセレナのこれもそんな行動と似てゐると判断したのだ。まだ旅仲間として見れるだろうと……旅仲間としてそう認識してしまつたからこそその甘い判断かもしれないけれど、それでもセレナを見捨てようとする気持ちは今はもう一切残つてはいなかつた。

まあこれからこの発言がエスカレートする可能性を考えて早く対処法を考えないといけないなとは思つたが……。今までの俺の対処法は敵を見なせば物理か言葉で攻撃し、二度とこちらに近づかないようにさせる。カロス地方に来るまではそうだったけれど、セレナは俺たちと一緒に旅をしている仲間であり、俺にとつてシトロンたちと同じで守らなければいけない仲間として認識してゐるのだからそういう攻撃的な行動はできない。だからこそどうすればいいのか迷ひ、今まで放つておいたけれど、さすがにこのままではいけないかと考える。

「……………まあ、何とかなる……か……？」

『カ……カ……』

「ピカチュウ、とりあえず何かあったら頼むな。俺も頑張るから」
『…ピイカツチュ』

まあ俺たちが話し合ったり考えていた間に、セレナとユリーカとハルカはかなり仲良くなっているんな話をしているの言うまでもない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ、そうだ！はいこれ！約束していたライブキャスター！ニヤースにも渡しておいたわー！」

「ありがたいなハルカ…これ、その代金」

『ピイカツチュ！』

「どういたしまして！」

「ライブキャスターですか？」

「それ何!？」

「ライブキャスター…確かイツシユ地方で使われてる腕時計型のテレビ電話…だっけ?」

「おう。これならカラムネ口に会った時にすぐにニヤースに連絡すれば何を言ってるのか分かるから安心できる」

「ニヤースって…確か前に話で聞いた喋るニヤースですか？」

「そうよ！今はカントー地方にいるんだけど、いろんな機械を作ったり、落とし穴を掘ったりしていたのよ！」

「ほう…それはなかなか興味深いですね」

「お兄ちゃん機械のことになると楽しそう…」

『アネアネ…』

ハルカに持ってきてもらったのは、イツシュ地方で購入したというライブキャスターだ。このライブキャスターはカロス地方からカントー地方の長距離でもつなげられる最新式でありハルカに頼んで買ってもらったものである。ライブキャスターは2台買ってきてもらい、1台はニヤースに…そして残りのもう1台は俺に持ってきてもらったのだ。ライブキャスターを買った時の代金は全て俺が払い、ハルカにありがとうと礼を言う。イツシュ地方とカロス地方へ行った時の旅費も払うと言ったのだが、ハルカは楽しそうにイツシュ地方でライブキャスターを買うついでに行きたいと思っていたポケモンミュージカルを見てきたから払わなくていいと話してくれた。…この後払う払わないで少しだけ一悶着を起こしたが、ハルカは…旅費なんていらぬし仲間の頼み事

は喜んで引き受けたいって思ってたんだから大丈夫よ！と言つてつっぱねたために俺は苦笑して諦める。でもってハルカが何か俺に頼みごとをしてきたときは何があつても引き受けようと決心しながらももう一度礼を言った。

そしてライブキヤスターについて話を聞き、ニヤースが喋れるということにシトロンたちが興味深そうな表情でハルカから話を聞く。その様子を見ながらも俺はライブキヤスターを腕につけて使えるかどうかチェックする。ライブキヤスターは青と赤の色が使われているらしく、モンスターボールの模様もついていた。それを見たピカチュウが良かったねと笑みを浮かべて俺の頬を撫でたため、俺もピカチュウの頭を撫でる。とにかく、これでまたカラマネロが来た時は話を聞けるし無問題だろう…おそらく。話を聞けば何か分かるかもしれないと思つたが、全力でぶっ潰していけばいいだけの話だし…会話については二の次だからまあ何とかなる。

…あと、ハルカがこのまま帰るより、ポケモンパフォーマーを見てから帰ろうかなと言つていたので一時的に旅仲間として加わり、俺たちと一緒に行くことになった。

セレナたちと気が合っていたために笑みを浮かべて…しばらくの間仲間としてよろしくな俺たちはもう一度ハイタッチをして笑い合っていた。

第二百四話　く兄はジム戦に挑むく

「シヨウヨウシテイのジム戦かあ！」

「何だかハルカ、気合十分ね？」

「ハルカもジム戦をするのでしょうか？」

「ハルカって確かポケモンコーディネーターだよ。コーディネーターってジム戦もするの？」

『デネ？』

「うんジム戦はしないよ！ただ久しぶりにサトシのジム戦を見れるから楽しみかも！」

「そういえばそうだな……」

『ピツカ！』

こんにちは兄のサトシです。ハルカに会った後すぐにシヨウヨウシティのジムに挑もうと皆でジムを目指しています。

ジムは山の上にあり、シトロンが山を登るのが辛そうで時々止まって休憩し、皆で一緒に山を登る。その間にもハルカが早くジム戦見たいなとわくわくしたような表情で笑みを浮かべていたために俺は苦笑した。ハルカのバトル好きもここまで来るとコーデイネーターからトレーナーになってもいいかもしれないと思えるほどだ。

そして途中で休憩をする間にハルカがたくさんお菓子を食べたりセレナが作ったマカロンを食べたりしているためにセレナたちはハルカのことを優れたベテランポケモンコーデイネーターから、食べるのが好きで無邪気な少女という印象に改めてしまったらしい。まあ食べるのは本当に好きだから仕方ないかと俺とピカチュウは苦笑し、こんな光景も久々に見るなどホウエン地方での旅を思い出して懐かしくなった。

そしてやって来たシヨウヨウシティのジムに俺たちは入っていく。中に入って見えてきたのはロツククライミング用に使われていそうな大きな岩だった。セレナたちはその様子に凄いと感嘆の息を漏らし、ハルカはカロス地方のジムを始めて見てホウエン地方とはまた違った感じかも！と叫んでいた。

岩を登っている人物が見えてきて、ザクロさんだと分かり声をかける。するとザクロさんは笑みを浮かべてこちらを見て、頷いてくれた。

「ザクロさん！ジム戦挑戦しに来ました!!よろしくお願いします!」
『ピイカツチュ!』

「もちろんですとも!…さあ、登ってきてください!」

「え、登る…?!」

「この岩を登るの!?!」

『デネデネ!?!』

「はいその通りです!この岩の上にバトルフィールドがあるのですから!」

「ええ!?!」

岩の上にバトルフィールドがあると言う言葉に俺とピカチュウは笑みを浮かべた。ザクロさんはエレベーターもちゃんと用意してあつて、壁を登りたくなくてもちやんとバトルは受けると言ってくれた。でもそれはザクロさんにとつてやつてほしくないことだろうと思う。壁を登ることが好きなザクロさんにとつて、この壁を登り、バトルを受けてもらうと言うことが一番いい選択なのだと考えた。

セレナたちも一緒になって登ろうかと言ってくれたが、俺はそれを首を横に振つて拒否し、何かあつたら危ないからとセレナたちにはエスカレーターで来てもらうことにした。

「サ、サトシ…リュックは持つよ!本当に大丈夫なの!?!」

「サトシ、無茶はしないでくださいよ！」

「うわあ凄い凄い！頑張れサトシ!!」

『デネデネ!!』

「このままで大丈夫だぜセレナ！リュックも持つてこのまま岩を上る！」

『ピイカツチュ!!』

「何か楽しそうかも…私も登る!!」

「ちよつハルカ!?!」

「ハルカも登るんですか!?!」

「頑張れサトシにハルカ!!」

『デネ!!』

大きな声が聞こえてきて、下の方を見る。すると下ではハルカが一緒に登ってきていて、こちらに向かって笑みを浮かべて楽しそうにしていた。そのさらに下ではユリーカが楽しそうだと登ろうとしていて、シトロンによって止められている光景が見えてきた。セレナはただひたすら上を見ていて、俺が下を見るとすぐに目が合う。俺が登らずに下を見ていたためにハルカがどんどん上に登り、こちらに近づいてから話しかけてきた。

「ほらサトシ？早くしないと追い越しちゃうかも！」

「おっとそうはいかないぜ？けど間違つて落ちたりすんなよハルカ！」

『ピカ！』

「当たり前かも！私は絶対に落ちないからね！」

ハルカの追い越そうと言う挑発的な言葉に、俺は笑みを浮かべて岩を登っていく。ハルカの言葉が早くジム戦を見たいという感情からそう言ったのだと分かったからだ。だからこそ、俺は下ではなく上を見てから登り始めた。上ではザクロさんがバトルフィールドまで登りきり、こちらを見て待っていた。その表情は真剣であり……とても楽しそうだと感じた。

そんなザクロさんとバトルをするのだと意気込み、上まで目指して進む。そして下にいたはずのセレナたちはいつの間にかエレベーターに行っていたようだった。

俺とピカチュウ、そしてハルカが岩を登りきる頃にはセレナたちがこちらを見て心配そうな表情で、でも岩を登ったことで怪我がないと言うことに安堵していたようだった。

そして、ようやくバトルが始まる——。

.....

「これより！ジムリーダーザクロ対チャレンジャーマサラタウンのサトシによるジム戦を行います！」

「バトルシャトーで見せていただいたあの熱いバトル……ここではどんな戦いを見せてくれるのか楽しみです。……いけイワーク!!」

『イワアアアアアア!!』

「望むところですよ……ケロマツ、君に決めた!!」

『ケロオ!!』

審判の声が聞こえ、ザクロさんがイワークを出したことに笑みを浮かべてケロマツを出した。ザクロさんは2体で挑むのに対し、挑戦者は3体のポケモンを使ってもいいとなっているらしいけれど、俺としては公平に戦いたいと思っていた。だからこそ、ケロマツで挑む。

ボールから出されたケロマツはやる気十分でイワークを睨みつけて闘志を燃やしていた。ケロマツで来たことに水タイプだからとザクロさんは判断したらしい。俺とし

てはケロマツを出したのはそのスピードと力の使い方があるということ。そしていつも冷静に考えて咄嗟の予想外な攻撃にも対応できるケロマツでバトルに勝利しようと思っているのだ。もちろんピカチュウで行ってもいいけれど、それだとカロス地方で一緒に旅をする仲間たちが育たないだろうと考えて今回はセレナたちのいる観戦席へ行ってもらった。

ハルカは俺の後ろにいたのだが、審判とザクロさんたちの様子を見てすぐにセレナたちの方へ行き、バトルを見て応援してくれていた。もちろんセレナたちも俺たちを見て応援する。

「では…試合開始！」

「ケロマツ、楽しんでいくぞ！みずのはどう！」

『ケロケロ！』

「クス…サトシ君らしいですね…ラスターカノン」

『イワアアアア!!』

「あわで回避！」

『ケロオ！』

「ほう、あわで回避するとは…イワーク、ロックカット」

『イワアアア!!』

「うわあサトシの…ケロマツだっけ？ 凄いかも！ 素早いし…もしかして進化したら私のバシヤーマミみたいに素早くなるのかしら…」

「バシヤーマミってハルカの手持ち？」

『デネデネ?』

「ええ！ 後で見せてあげるわ！ 私の相棒なの！」

「それは楽しみです…！…っとそれよりも応援しないとですよ！」

「……サトシ、頑張れ！」

みずのはどうを避けたイワークがラスタカノンを放つ。その攻撃がケロマツに当たりそうになったため、余計なダメージを負わない方が良くと考え俺はケロマツにイワークの放つラスタカノンに向かってあわを指示する。放たれたあわがラスタカノンに当たり、目の前で爆発し、大きな煙と風が起きる。それを見たハルカ達が凄いと大騒ぎをしていて、ハルカは自分のポケモンたちとの成長を考え、ケロマツの進化した

ときの戦力を予想している。そしてその呟き声を聞いたユリーカとシトロンがハルカが育てたバシヤーマについて興味を持つて話しかけている。そしてセレナはただひたすら祈るかのように俺のバトルを見て、頑張れと声を出して応援していた。

「今のイワークはサトシ君のケロマツよりも素早さは上ですよ！ さあイワーク回り込んでください！」

『イワアアア！』

「そうはいくかよ！ ケロマツ、かげぶんしん&みずのはどうー！」

『ケロオオオ!!』

「何!?!」

『イワア!?!』

「当たりましたね！ 岩タイプは水タイプが弱点…この攻撃のダメージは大きいはずですよ！」

「頑張れサトシ！」

『デネデネ!』

「さすがサトシね…私もバシヤーマ達ともっと頑張らないと…！」

「サトシ…！」

イワークの素早さはロックカットをしたことによつて確かにケロマツよりも速くなつていた。素早さというのはポケモンバトルにおいてとても重要だと考えている。素早ければポケモンたちの攻撃も当たりやすくなるし回避もできる。だからこそロックカットを覚えているイワークとこのまま長期戦をする気はなかつた。

ケロマツが俺の指示を聞いてかげぶんしんをしてイワークの動きを鈍らせる。そして走つたままみずのはどうを放つたことにより、イワークはケロマツの技に直撃し悲鳴を上げる。そしてザクロさんはその技に驚愕していたが、同時に笑つて楽しそうにしていた。もちろん観戦席にいるハルカ達もだ。

「さすがです…イワーク、がんせきふうじ!」

『イワアアアア!』

「きたかがんせきふうじ…! ケロマツ、今のうちに近づけ!」

『ケロ!』

「そう来ましたか! ならイワーク! ケロマツに向かってアイアンテール!」

『イワアアアア!』

「ケロマツ、みずのはどう!」

『ケロオ!』

『イワアアアアアア?!?!?!』

「イワーク!？」

イワークがみずのはどうに当たったことにより少しだけふらついていたが、すぐに体勢を立て直してがんせきふうじをしてくる。その言葉を聞いた俺はまずケロマツにすぐさまかげぶんしんをした状態のままイワークに近づくと指示をした。がんせきふうじの技はイワーク自身が放つ技なのだから、イワークに近づいて自身の攻撃が当たるであらう場所まで行けばいいのだと考えていたからだ。

それにかげぶんしんをしていることによつてイワークのコントロールが絶妙ながんせきふうじが影のケロマツたちに当たつていく。でもケロマツはそれを予測して新たにかげぶんしんを発動し、影を一体も減らさなのままイワークに近づいた。イワークに近づいてきたケロマツを見たザクロさんはアイアンテールですべてを攻撃するように指示する。影が消えていくのを見た俺はイワークを早く倒した方が良いと判断し、みずのはどうを指示した。

ケロマツはその指示を聞いて領き、近距離までイワークに近づいてから最大限まで大きくしたみずのはどうを放つ。近すぎて避けることができなかつたみずのはどうに、イワークは何もできずに倒れてしまった。

「イ、イワーク戦闘不能！ケロマツの勝ち！」

「お疲れ様ですイワーク。サトシ君の戦いは…ピオラの言った通り予想外が付きものですね」

『イワアアア…』

「まずは一勝！ありがとうなケロマツ！」

『ケロケロ！』

「さすがサトシね！」

「うん！サトシ凄い！」

『デネデネ！』

「バトルの状況を判断して、ケロマツも攻撃を予測し、サトシの指示と合わせたコンビネーション…さすがですね！」

「うん…本当に、サトシは凄い…！」

イワークをボールへ戻したザクロさんが俺たちに向かって笑みを浮かべていた。俺とピカチュウ、ケロマツは一緒にハイタッチをして、次のバトルにも勝つぞと意気込む。セレナ達はそれぞれバトルの結果を見て興奮し、頑張れと大きな声で応援していた。

——そしてこの後、ザクロさんが次に出したチゴラスとの戦いも、無双したケロマ

ツによつて勝つのは言うまでもない。

第二百五話～妹は相棒に困惑する～

こんにちはは妹のヒナです。現在マサラタウンでのんびりと過ごしています。タケシさんの家で貰った帽子は大事に使っていますよ。今も帽子をかぶってオーキド博士の研究所にある森で散歩をしているぐらいですし…いつか旅に出た時にも帽子を使えるならかぶろうかと思ってます。私たちの旅で使った思い出の帽子ですからね。

まあ、そんなことよりも…。

『ガウウ…!』

「だ、大丈夫だよりザード?これぐらい私でもできるからね?」

『ガウ!ガウウ!!』

『ピイツチュ…』

現在私たちはきのみを集めるために木に登ったり、近くにいた草ポケモンたちときのみを集めようとしている。集めたきのみを母がお菓子にして作ってくれるからだ。もちろん協力してくれた草ポケモン達にもあげるし、兄のポケモン達や伝説達にも食べてもらおうと思っている。

そして、そのお菓子は母が作るだけじゃなくもちろん私も作るのを手伝おうと考えているのだ。今回旅に出て、料理の大切さを知ったからこそ、私も作れるようにならなくてはと決意した。あの栄養バーのみの旅をするのはものすごくきついと感じていたからだ。兄の旅では仲間が料理をできる人がいたからこそ必要とはしなかった。イツシュ地方でもルカリオがついて来てくれたし、途中でデントがいてくれたからこそ気にはしなかった。でも今回旅をして分かった…料理は作れた方が良い絶対…。だから母に学ぼうと思って、ルカリオが当時習い始めた時のようにまずはお菓子から作ろうと考えているのだ。でもきのみを集めるために私が木に登ろうとするとリザードが止めてきて、自分がやると言ってきているのだ。

———まあつまり、リザードが過保護すぎてどうすればいいんだという状況になつてます。

「リザード、私は大丈夫だよ？木から落ちることもないし、怪我だつてしないのに…」

『ガウウ…!』

『ピチュピチュ?』

『ガウウ』

『ピイツチュ…!』

「ピチュユーまで私を止めるの?というかりザード、何を言つてピチュユーを味方につけたのよ…」

『ガウウ』

『ピチュ!』

兄と電話で話していた時のことを思い出す。あの時、リザードは本当に良い子だと思つていた。グレルこともないし、私に懐いているからだ。でもそれ以上に過保護すぎるのである。…兄のリザードのようにグレルことはないリザードではあるけれど、このままでいいとは思つてはいない。

カロス地方での電話やカロス地方を旅する前に聞いた話では、たまに進化しすぎたポ

ケモンがトレーナーに懐かず指示を聞くのをやめてしまうというのを兄から聞いた。兄は様々な地方で旅をしているために、その話はまさに経験談でもあり、周りの人間から見た時の話でもあったのだ。兄だけじゃなく兄の仲間だった人たちもその指示を聞かないという体験をしたことがあり、兄のリザードンを知っている私としては少しだけ不安でもあった。

でもリザードンはヒトカゲから進化してからもいつもと変わらず私の傍を離れず、ピチューと同じように懐いていると感じている。私やピチューが笑えばリザードも同じように笑ってくれるのは、ヒトカゲだった頃と同じだ。懐いているというのはとても嬉しいことだけれど、一方で過保護すぎるといふ状況にどうすればいいのか悩む。

リザードが過保護なのは私やピチューが怪我をする可能性があった場合にのみ行動する。木に登ってきのみを採ろうとしたらリザードが腕を掴んで止め、自分が行くと言って聞かないのだ。

リザードがピチューに対して過保護なのは主に修行をしすぎたり疲れている場合のみストップをかけたたりするということ。そしてピチューがオニスズメに襲われそうになった時もリザードが助けてくれる。でもピチューの場合は過保護でも大丈夫だろうと思う。ピチューはリザードにとって頼れる仲間であり、仲のいい姉弟のように見えるのだから。でも私の場合はそれでいいとは言えないのだから……過保護すぎるこの

関係がちゃんとした相棒関係といえるのかと私は考える。

兄はよくポケモンと人間との関係が常に上も下もないんだと教えてくれた。そしてポケモンたちと一緒にやれることは積極的に行動し、同じ目線で動けと言ってくる。そんな兄の言うことは全て正しいのだろうと私は感じていた。だからこそ、リザードが過保護になったことに対して、私のことを大切にするのは凄く嬉しいけれど、それで同じ目線で一緒に行動できるのかと言われれば駄目だろうと思っていた。

しかもリザードはよくピチュウを味方につけて私を怪我させないように動くため、守られる状態が常に起きていたのだ。私はそんなことはしてほしくないというリザードとピチュウに言うのだが、その声をリザードたちは聞こうとはしない。

そして近くにいた兄の手持ちではないフシギダネ達が苦笑していて：でも私やリザードたちの言い合いを止めようとは思ってもいないようだった。

でも今回は絶対に止めてもらおうと決心し、リザードに向かって私は諭すように言う。

「リザード…私は皆と一緒に行動して、そして動いていきたいって思ってるの。だから木登りだって私はできるし、守ろうとしなくてもいいんだよ?」

『……ガウウ!』

『ピイツチュ…』

「それは嫌だつて言いたいの？ピチュューも微妙そうな顔で…でも修行してるのはリザードだけじゃない、私だつてやりたいからやつてるんだよ？リザードが進化して強くなつても同じ」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

「リザードたちと一緒に行動していききたい、ずっと助け合つて生きていきたいって思つてるから…だから止めないで…ね？」

『……………』

『ピチュウ…』

ピチュューが俯いて考えているリザードを見て、そして私を見て必死に考えている。リザードは生まれた時からずっと私と一緒に行動を共にしてきた。だからこそ進化して強くなったことで私たちを守るのではないかと判断し…：様々な障害から私やピチュューを守ろうとしてくれていたのだらう。兄のフシギダネ達のように、ミュウツーたちのように…敵となる存在や怪我をするかもしれない可能性から避けようとしている。

でもそれは兄たちのポケモンや伝説達だからこそやつてもいいんであつて、私はリザードやピチュューと対等な関係になりたいと思つているんだ。一緒に同じ目線で戦い、

共闘していくような関係になりたいとそう思っている。

そう言うとりザードは納得したいけれど嫌だといいたいような：葛藤しているような表情を浮かべていた。リザードに進化したからこそその表情は少し凛々しくなり、金色に派手なその身体とは少しだけ似合わず……でも生まれた頃のヒトカゲの面影を残しているような表情を見たような感じがした。

私はリザードに抱きつき、近くにいたピチューの頭を撫でる。リザードはその私の行動に驚いていたようだったが、抵抗することなく抱きつかれたままであった。

私はリザードに向かって優しい声で言う。

「リザード、私を守ろうとしてくれてありがとう……でもリザードにはフシギダネ達やミュウツー達のように守らなくていいんだよ？何かあったら協力して戦おう、一緒になつて頑張ろう……相棒なんだから、私を守ろうとせずに立ち向かおうよ。私たちと一緒に、成長していこう」

『……………ガウウ』

『ピイツチュ……』

「ピチューもよ。ピチューだつて私のこと守ろうとして無茶ばかりするんだから……でも私たちは家族で、仲間なんだからピチューも甘えてきていいの。ピチューもヒトカゲも

…私はあなたたちが怪我をすると凄く悲しい。だから守ろうとしないで、皆で一緒に頑張ろう！」

『……ガウウ！』

『……ピチュ！』

リザードとピチュは私の言葉を聞いて納得したようだった。その表情は嬉しそう
で、私に向かって抱きつこうとする。リザードは抱きついたままだったから私の背中に
手を伸ばしてきつく抱きしめかえし、ピチュが私とリザードに向かってジャンプして
抱きつく。ピチュが抱きついたので私とリザードが手を伸ばして支え、一緒になって
笑みを浮かべて笑い合った。私の言葉を聞いてくれて良かったと思えた。

『……ダネ？』

『…ナツゾオ？』

『リーファイ？』

「あ、ごめんね皆。きのみ集め再開しようね？」

『ガウウ！』

『ピチュ！』

『ダネダネ！』

『ナゾナツゾオ！』

『リーフェアア！』

私の近くにいた初心者用の…兄のではないフシギダネ達とナゾノクサ達が近くで見守り、もう話し終わったかどうか恐る恐る聞いてくる。そのため私たちはフシギダネ達やナゾノクサ達を見てから笑みを浮かべてきのみ集めを再開した。

まあ木登りは結局リザードがやることになってしまったんだけども…それでも修行の時や散歩している時などによく見られた過保護にはならなくなり、一緒になって支え合い頑張るようになったから良かったと思える一日だった。

第二百六話　妹はある人間達を見る

【今日のすんごいポケットニュース！本日はカントー地方であるバトル大会に優勝したアーロンさんに来ていただきました！】

【どうもこんにちは、アーロンです】

「ブツファツ!!？」

『ガウウ!!』

『ピチュ!!』

「どうしたのヒナ？何だか凄い声出してたわよー？」

『バリー?』

「だ、大丈夫だよママ…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

こんにちは妹のヒナです。テレビを見ていたら物凄く見たことがある人物が映っていて驚愕しました。しかもその人物：アーンさんの後ろの方にはルカリオがいて：何をやっているんだと思ってしまった。ルカリオは何だか慌てたような表情でアーンさんを見ている。おそらくテレビに爽やかな笑みで映っているアーンさんのことが心配で仕方がないのだろう。でも今アーンさんに向かって喋って止めようとしてしまうと大変なことになるかと分かっていいるからこそ止められないのだと私たちは分かかって思わず遠い目をしてしまった。

何だろう…何か兄がテレビに映った時みたいでデジャブ…。

【それでは、ルカリオ一体で挑戦し、優勝したその強さの秘訣について教えてもらってもいいですか?】

「そうですね。強さの秘訣とはつまり、相手をどうぶつ潰すのか考えていかなければなりません。それが自分自身で倒していくにはどうすればいいのかを予測していきます」
「…えッ!? ……な、なるほど…!!」

「アーロンさんの言ってることが物凄く不穏…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

テレビの向こう側の空気が微妙そうだ。それは少し分かる気がする。相手をどうぶつ潰すのか考えるって普通はもつと遠まわしに相手に勝っていくにはどうすればいいのかと言うはずなのだから。でもアーロンさんは本当に素直に潰すと表現した。しかも自分自身で倒すと言うよく分からないことを言って…爽やかに笑みを浮かべて言うギャップが凄まじいと思ってしまった。

だからこそスタッフたちはアーロンさんの言葉にどう反応すればいいのか悩み、大げさに首を縦に振って無理やり納得していた。そしてテレビを見ている私たちは微妙そうな表情で苦笑していた。

「ああ、あと修行もちやんと必要ですよ。例えばルカリオと——」

「あ、いえ！具体的にを見せてもらわなくても大丈夫ですよ!!!」

「そうですか？なら…」

「あれって絶対にお兄ちゃんが前にテレビに出てきた時の結果から学んだ影響だよね
…」

『ガウウ？』

『ピチュ？』

「後で見せてあげるよ…ママ、その時の映像ちゃんと録画してたから…」

『ガウウウ！』

『ピイツチュ！』

修行という言葉聞いて、カントー地方のテレビ局は嫌な予感があったのだろう。すぐにアーロンさんが行動に移す前に声を遮り大丈夫だと叫ぶ。だからアーロンさんは首を傾けて少しだけ残念そうな表情で答え、行動には移さなかった。その時にスタツフが密かにため息をついていたのを私は見た。

そしてルカリオもアーロンさんを止めた方が良いのかあのままで大丈夫なのかあたふたしながら考えている。その点は兄がテレビに出た時とは違うなど考える。ピカ

チュウも兄と一緒に暴走しやらかしていたからこそ、修行をどんなふうにするか具体的な見せることになったとしたらルカリオはちゃんと手加減するだろうから……。あ、でもアロンさんの命令だから素直に手加減なしでやる可能性も残っているかなとふと考えてスタッフの行動で良かったのだと思えた。

「…そ、そういうえばアロンさんは一体何処に住んでいられるのでしょうか？」

「マサラタウンに住んでいます」

「マ、マサラタウンですか…」

「マサラタウンって聞いて引き攣った顔してる…うわあこれでマサラタウンの住人が全員スーパーマサラ人だって思われたかも…」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「そ…それでは、旅の目的は？」

「旅の目的はもう達成したので帰ろうかなと思つていますよ」

「あ、そうなんですか！ではどのようなことをしたのでしょうか…？」

【あそこにいる彼に全力で話し合いをしただけです】

【あれ話し合いじゃないから！全力でボッコボコに殴られただけだから!!!】

【ほらティナ：今収録中なんだから騒がないで落ち着きなさいよ】

【ポチャポチャ】

【ミイイ…】

【いやあれアロンが何も無いって顔で話し合いとか言うからでしょ!?というか何で俺だけ文句言われなくちゃいけないの!!?】

「あれ…知り合いつてギラティナだったんだ!?…あ、でもルカリオが前に言ってたよ
うな…というか一緒に旅してるんだ…」

『ガウウ』

『ピチュ…?』

ルカリオがイツシュ地方で旅していた時にギラティナのことについて反応していたのを思い出した。そしてテレビでアロンさんが映像に映っていない方を指差して話し合いをしたと言う。その言葉に映像の外から聞いたことのある叫び声が聞こえてきたのでカメラがすぐにそちらに向く。そして見えてきたのは前に会ったことがある人

間になったギラティナとヒカリさんとポツチャマとシエイミだった。ギラティナがアーロンさんに向かつて叫んでいて：それを止められたことに不服そうであり、まだアーロンさんに物申したいという感じだったが、ヒカリさんとポツチャマに落ち着けと慰められていて、シエイミは呆れた表情でいた。

そしてカメラがまた移動し、アーロンさんを移すが、アーロンさんはギラティナの方を見て笑みを浮かべていた。：ただし目は笑っていないので怒った時の兄の表情に似ていると私たちは思ってしまった。

：もしかしたら番組が終わった瞬間にギラティナはまたポツコボコにされるのではないかと思えるほどアーロンさんがギラティナに向ける視線は冷ややかだ。あんな表情がアーロンさんでもできるとは思ってもみなかった。そして兄に似た表情にもかかわらず兄と同類なのではないかと思ってしまった：いや、いろいろと発言が微妙な時点でもう兄と同類だろうと考えてしまう。

そして映像に映るルカリオは頭を抱えてため息をつき、この状況を諦めたらしい。何というか：お疲れさまと言いたくなるルカリオの表情は、兄が暴走していて止めようとしていた頃と似ている。もしかしたらアーロンさんの暴走も止めようとして：いつかはその行動自体を諦めてしまうのかなと思ってしまった。まあアーロンさん達がマサラタウンに帰って来た時に分かることだろう。

そしてスタッフはそろそろ終わらせた方が良いと思つたのだろう…アーロンさんに向かつてマイクを差し出す。

【そ…それでは、アーロンさん…何か言いたいことがあればどうぞ！】

【そうですね…サトシ君という人は知っていますか？】

【ええもちろんですよ！歩く人外魔境と恐れられていますからね…それで、彼に何か言いたいことでもあるのでしょうか？】

【はい。サトシ君には感謝しなければいけないことがありますから、マサラタウンに帰つて来た時に礼を言わなければいけないということ、是非やってほしい修行があると言うことを伝えられたらと思つています】

【なるほど…ですが今はサトシさんは確かカロス地方を旅していると騒がれていますからその再会はまだ叶いそうにありませんね…】

【ええそうですね…ですがその時がとても楽しみです】

【なるほど…ありがとうございました!!】

「…ねえリザードにピチュウ…アーロンさんがやってほしい修行つて何だと思う？」

『ガウウ…?』

『ピチュウ…?』

「うん分らないよね…でも物凄く嫌な予感がするんだけど…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

もしかしたら…もしかしたらアーンさんは兄に波動の使い方を教えてしまうという考えが浮かび上がってしまった。そのままでも強いと思われる兄が波動を使いこなしてしまったとしたら一体どうなるんだろうと私は遠い目をしながらもテレビを見ている。…といつてもテレビに映し出されていた番組はもう終わってしまい、次のニュースが流れているだけなのだが…。

アーンさんがマサラタウンに住んでいると言う言葉に私たちはここにいてくれるという意味で嬉しく思えたけれど、それでも兄と出会うという意味では微妙な心境になる。兄がカロス地方から帰って来た時にアーンさんと会い、そしてどんな修行をするのだろうか…。

出来れば私は、兄とアーンさん達が帰って来た時に、その修行を見ないためにもオーキド研究所に近づかないようにしておこうかなと思ってしまった。もちろん私だけじゃなく、リザードやピチュも同意見で、カロス地方から帰ってくる時の兄を素直に喜べるのかについても心配になってしまったのだった。

第二百七話～兄は恋の対立を見る～

こんにちは兄のサトシです。先程シヨウヨウジム戦に挑み、見事バッチを貰うことができました。そしてそのすぐ後、セレナがポケモンのお菓子であるポフレを前日に作っただという事で皆に配ると言ってきました。そのためハルカ達も喜んでセレナに近づいていきます。

「なんか美味しそうかも!!」

「あ、食べちゃ駄目よ!これはポケモンのお菓子なんだから!」

「そうなんだ…なんか残念かも…」

「でもマカロンも一緒に作ったからお茶にしましょう!」

「本当!セレナのマカロン美味しいから好きよ!」

「わーいマカロンだ！」

『デネデネ！』

「ではホルビー達も出した方が良いでしょう」

「じゃあ俺もケロマツたちを出すか」

「あ、私も！」

ポフレは全員に配つても余りがあるほどたくさんあるようだからシトロンがボールを取り出しながら言う。俺やハルカもその言葉を聞いて笑みを浮かべながらケロマツ達やバシヤーマ達を出した。そしてシトロンたちはハルカが取り出したバシヤーマ達に笑顔で近寄り、挨拶をしている。

「うわあバシヤーマたちだ！凄く強そう……！」

『デネ！』

「レベルが凄まじく上ですね……これならバッチを取得するのも困難ではないかと……」

「見るだけでもポケモンたちの毛並みが良いって分かるわ……パフォーマーだけじゃなく、コーディネーターも同じようにポケモンたちのコンディションを整えたりするのね……？」

「ええそうよ！パフォーマーは知らないけど、コーディネーターとして当たり前のことかも！」

「…久しぶりだなバシャーモ達」

『ピイカツチュ！』

『バツシヤアモ！』

『ハアアアア！』

『ネエエ！』

『バアナアア!!』

『ガメエエ！』

『シイア！』

ハルカのポケモンはホウエン地方やカントー地方で見た手持ちたちが並んでいた。でも見当たらないポケモンもいて…どうやらゴンベはトウカジムに預けられているらしい。ハルカから話を聞いたらそうだと行ってくれた。

バシャーモ達は俺たちに近づいてピカチュウと同じように笑みを浮かべて久しぶりだと挨拶をしている。そして俺の近くにいたケロマツとヤヤコマは強そうな相手だと感じとり、無意識に戦いたいという表情を浮かべていた。でもケロマツとヤヤコマはまだ育成途中だし、今のままハルカと戦ったとしても勝てるかどうかは分からない。戦法によつては勝てるかもしれないが、どちらにしろ今はポフレを食べるという目的でボールから出したのだから戦うのは駄目だという意味でケロマツとヤヤコマの頭を撫

でた。ケロマツとヤヤコマは俺の言いたいことが分かったのかすぐに残念そうに顔を俯かせ…でも戦う機会があれば戦うぞという意欲を燃やしていた。まあバトルが好きということに関しては俺は何も言うつもりはない。バシャーモ達もハルカの指示で戦つてもいいというのなら戦うだろうし、あつちも好戦的な目で見つめ返していたから放つておいても問題はないだろう。

…そして皆にポフレやマカロンを配り、さあ食べようと言うときにそれは起こつた。

『マ、マアロ…!!?』

「え!?ポフレが勝手に宙に浮いてる!？」

「何だあのポケモン…ペロリーム…?」

『ピイカ…?』

『ペエロオ…』

「ペロリームがそのポフレ、まあまあだつて言ってるわ」

「むっ…まあまあつて何よ…あなたは誰？」

「私はミルフィ。ペロリームは私のパートナーよ」

『ペロオオ』

ペロリームというポケモンはどうやら甘い匂いに敏感なポケモンだと図鑑を見て分かった。そしてミルフイという少女は何やらお菓子を作っていて、セレナの作ったポフレよりもこっちの方が美味しいわよと言って配りだした。一応言っておくとセレナのポフレはすべて俺たちがミルフイと話をしている間に食べていたので、もう残ってはいない。食べ終わっている状態にセレナは安堵してはいるが、ミルフイの挑発ともとれる言葉に怒り、無表情で配っている様子を見ていた。

ピカチュウたちは貰ったポフレを見てどうすればいいのか悩んでいる。でもハリマロンがポフレを貰った瞬間食べてとても美味しそうだと叫ぶ様子を見てからセレナの表情をちらりと窺う：セレナはミルフイの言葉で怒っているために無表情だったが、ハリマロンの大げさな様子から我慢できずに貰ったものだし仕方がないかと食べ始めた。そしてセレナのポフレを食べた時とは違って明らかに物凄く美味しいと反応しているピカチュウたちの様子にセレナは微妙そうな表情を浮かべていた。

——そしてミルフイは自信満々な表情でセレナを挑発する。

「ポケモンにあつた美味しいポフレを作る：それが基本よ」

「それぐらい私だってできるわ！」

「ええそうね。できて当然よ」

「ちよつと！何よその言い方!!」

「はあ？あなたがまだまだポフレを分かっていないようだから言っただけでしょ？」

「おい落ち着けてお前等」

『ピイカ』

「セレナのマカロン美味しいよ？」

『デネ？』

「いやユリーカ、そういう問題じゃないよ……ほら落ち着いてくださいセレナ！」

「というより、美味しいお菓子を作れる時点で凄いと思えるかも……」

『バシヤア……』

「ああそういえばハルカはあまり料理できないよな……」

『ピイカツチュ……』

セレナたちが争っている中、俺たちは止めようと仲裁をするが次第に口論は悪化していく。そんな中でハルカは少し羨ましそうな表情でセレナたちを見てお菓子が作れると言うことが凄いと言った。その言葉に俺はハウエン地方での旅を思い出す。

確かに俺たちは揃って料理ができない。…俺なんてキッチン禁止令が出されたほどだ。

ハルカも一時はタケシに教わろうと必死に努力していた時もあったが、いまだに完璧

にできずにいて、ポケモンセンターで大きなお弁当を特別（料金付き）に作ってもらったりしながら一人旅をしていた。だからこそシトロンやセレナが料理を作れると言うことにハルカは良いなあと呟いてしまうほど羨ましいのだろう。まあ俺もできないし…得手不得手はそれぞれあるのだから仕方がないと諦めよう。

そう考えている間に、セレナと口論しているはずのミルフィが俺に近づいて話しかけてきた。

「あなた、サトシよね？ いろんな地方であなたが有名なこと全部聞いたわ」

「はあ…まあバトルで勝ったりしてるからな。でもそんなに有名じゃないって…」

『ピカピカ』

「ちよつとサトシに近づかないでよ！」

「あら、あなたには関係ないことでしょ？ それとも何？ セレナとサトシって付き合ってるの？」

「いや違うけど」

『ピイカツチュ……』

「付き合つては…いないけど…でも将来的には付き合うんだからね！」

「あら、そんなのあなたの勝手じゃない？ ねえサトシ、私と付き合いますしょうよ？ あなたのバトルを見て興味を持ったわ。すべての戦歴も調べたの…サトシが凄いつてこと全

部知って私はあなたの傍にいたいって思えたのよ。だから私と付き合って」

「いや結構です」

『ピカピ……』

『ケロオ……』

『ヤツコ……』

「お前等そんな目で見んな」

『ピイカア……』

『ケロケロ……』

『ヤツコオ……』

「そ……んなこと……絶対に許さないんだからああ!!!」

「あなたがサトシに我儘言える立場なのかしら？ 将来的に付き合うだなんていう妄想もそこまでにしなさい」

「そつちこそサトシに付き合うだなんて断言しないでほしいわ！ もしもサトシとあなたが付き合ったら……私、何をするのか分からないわよ」

「ふん……あら、それって脅してるわけ？」

「脅しじゃないわよ!!」

セレナの目が一瞬暗くなり、前にいろいろと恐ろしいことを言った時のような表情をしたのだけれど、直視していなかった。ミルフィはセレナの異変に気づいていない。だからこそ助かったのかも知れない……。というよりもミルフィはセレナを挑発するために俺と付き合えとかよく分からないことを言い出したのだろう。もしも喧嘩するような雰囲気じゃなければミルフィは普通にポフレを渡して別れたかもしれない……。とにかくミルフィは俺の事よりもどうやってセレナを怒らせ、挑発するかを考えているようだったから……。俺を巻き込むなど叫びたくなくなり、ため息についてセレナたちには気づかれないうちにシトロンたちの方へ向かう。

「……俺、ポケモンセンターに帰ってもいいか？」

『ピイカ……』

『ケロオ……』

『ヤッコオ……』

「いや……。この喧嘩の元凶はサトシなんですから止めなければいけませんよ……」

『リイマ……』

『ホツビイ』

「サトシ急にモテてる！ 凄いわ！」

『バツシヤア！』

「そういう感想いらねえからハルカ：それにこれ明らかに俺モテてないからな」
「…え、そう？」

「あ、ねえこれで勝負つけたらどうかかな？」

『デネデネ？』

ユリーカとデデンネがある張り紙を見ながら叫ぶ。その声を聞いた俺たちはユリーカとデデンネが見ている張り紙の方を振り向く。そしてその張り紙にはポフレコンテストという文字があり、おそらくユリーカは最初に喧嘩をし始めたのがポフレのことであり、俺のことはとにかくポフレはセレナとミルフィのどっちが美味しいのかコンテストで決めればいいと言ってきたのだろうと分かった。そしてミルフィはその張り紙を見てからセレナの方を見て、挑発的に言う。

「私はコンテストに出るためにこの町に来たのよ」

「じゃあ勝負ね！」

「おっとその前に、コンテストで勝ったら俺と付き合うとかそういう話はすんじゃねえぞー！」

「あらかん残念…：私ならすぐに勝てる自信があつたのに…」

「そういうこと言ってるのと油断して私が優勝するんだからね！というか絶対に勝ってみ

せるんだから…!!」

セレナたちはポフレコンテストに出場し、勝負することを決めたらしい。でもただ勝つだけじゃなく俺について何か言いそうな気がしたために先手を打った。するとミルフィは残念そうな表情で俺を見て勝てる自信があるような…セレナに挑発するようなことを言う。俺を巻き込むなと思い、キレそうになったがここで騒いだらミルフィが何か行つてきそうな気がしたために止めておく。

セレナはその言葉を聞いて苛立ちながらもミルフィに挑発し始めた。最終的には睨み合う状況になり、シトロンとユリーカは止めようと動き、ハルカは俺に近づいて肩を叩いて慰めてきた。

「サトシ、そろそろ諦めた方がいいかも」

「誰が諦めるかよ…俺は最後まで諦めるつもりはねえぞ」

『ピイカチュ…』

『ケロオ…』

『ヤツコオ…』

「だからお前等、そういう目で見るとって！」

「……でも、サトシ。何だかセレナのこと受け入れかけてるみたいなのがするけど…
気のせい…かも？」

『バツシヤア…？』

「気のせいだ絶対！というかありえねえよ!!」

『ピカピ…』

『ケロケロ…』

『ヤツコオ…』

——結局、ポフレコンテストはセレナとミルフィのどちらも優勝することなく引き分けとなった。

第二百八話～兄はチャンピオンと激突する～

こんにちは兄のサトシです。ある張り紙にチャンピオンがエキシビジョンマッチとして戦うという面白い広告が出されていて、俺たちはそのバトルを見てみたいと思いました。でもチャンピオンについては知らないためにハルカと一緒に首を傾げる。

「チャンピオン…カルネ？」

『ピイカ？』

「カロス地方のチャンピオンって女性なのね…」

「え、サトシにハルカ…知らないの？」

『デネ？』

「まあカロス地方に来たことないのなら知らないのも無理ないわね…カルネさんはこのカロス地方では物凄く有名だけど、他の地方には行くことはほとんどない人だから…」

「でも素晴らしい人なんですよカルネさんという方は!!」

「へえ…」

『ピイカ…』

「でもポスターを見ると…確かに素敵かも…!」

セレナたちが説明してくれたのはカロス地方のチャンピオンであるカルネさんという人のことで…カルネさんはこの地方でも強く、そして女優としても有名とのことらしい。いろんな人々から尊敬されているということ。ポスターなどもたくさんあり、カロス地方で大ヒットになっているという映画が張り出されていたのも見た。

そしてその映画のポスターを見てハルカが両手を握りしめて目を輝かせ、ポケモンコンテストに何か活かせるバトルが見れるかもしれないと楽しみにしているようだった。俺もチャンピオンと出来ればバトルしていきたいなと思っではいるが、まあチャンピオンというだけで無理がある可能性もあつて諦めもある…とりあえずエキシビジョンマッチだけでも見れるだけ良いかと思考を変えた。

「…とにかく、そのバトル見に行こうぜ?」

『ピイカツチュ！』

「そうね！カルネさんに会えるかもしれないし！どんなバトルするのか楽しみかも!!」

「もしも会えたらお兄ちゃんのお嫁さんになってもらう様に頼んでみる！」

『デネデネ！』

「それ絶対に無理だよユリーカ！」

「じゃあ行つて見ましよう！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

俺たちはそのバトルを見に行くために大会の会場へ向かう。そしてカルネさんがいるという控室を探して歩いていると何やら大きな人ごみがあった。人ごみは扉の前で誰かに話しを聞きたいという感じで騒いでおり、ある女性が頑張つて扉を開けさせないようにしていた。そしてカルネさんに会うことはできないとその女性が叫んでいる。

これは残念だと感じたが、会うことはできないのならとりあえず会場内の席だけでもとりにいこうかと思つた時だった。

「おーいサトシ君達……こつちだよこつち！」

「あ、プラターヌ博士！」

『ピイカ！』

「え、何で博士がここに…？」

「……えっと、誰？」

プラターヌ博士が俺たちに向かって手招きをしてからこつそりと部屋の中に入れてくれた。

その部屋はカルネさんがいる部屋と繋がっており、メガシンカについて関わっていると言うことも博士から教えてもらった。もしかしたらカルネさんの手持ちにいるというサーナイトのメガシンカが見れるかもしれないと俺たちは楽しみになる。バシヤーモのメガシンカは前に何度かミアレシティで見ることができたが、バトルで戦う姿は見ることがない。だからこそカルネさんがバトルするときにはメガシンカでどんな戦い方をするのか、強さは一体どのくらい上がっているのだろうかとテンションが上がった。だが、俺たちが目を輝かせ盛り上がっている間に、ハルカが小さく手を上げて声を出す。

「ね、ねえサトシ！この人って誰？あとメガシンカって何？」

「ああごめんよ…君は一体…？」

「ハルカ、彼はカロス地方のプラターヌ博士なんだ」

「そうなんですか！こんなにちは、私はハルカって言います！」

「そうか、よろしくねハルカちゃん！」

「それで、メガシンカっていうのは…？」

「ああ、メガシンカは——」

ハルカにメガシンカについてプラターヌ博士が教えていった。そしてバシヤーマがメガシンカするということについても話していく。自分の相棒でもあるバシヤーマがメガシンカをするという事実にハルカは驚き、自分もメガシンカしてコンテスト等に出場してみたい、バトルしてみたいと言うぐらいその事実を知って喜んでいた。ポケモンの新しい謎があるということに俺と同じようにハルカも興味をもっているのだ。プラターヌ博士はそんなハルカに俺たちが前に話していたことをすべて説明する。それに目を輝かせて話を聞きながら、コンテストでどんな感じになるだろうと想像するぐらいとても盛り上がった。いた。

そしてその間、俺たちはカルネさんがいるという扉を見つめていた。

「あそこにカルネさんがいる…」

『ピイカツチュ…』

「会ってみたいけど…メイク中だから邪魔になっちゃうわよね…」

「でも早く会ってお兄ちゃんのお嫁さんになってもらいたい！」

『デネー！』

「だから無理だつて！」

「博士、お待たせ……あら？お客さんかしら？」

ハルカ達の話が終わった頃に、カルネさんが扉を開けて出てきた。ポスターそのままの格好にセレナたちは目を輝かせ、俺とハルカはメガシンカやバトルが見れるかもしれないと好戦的な目で見つめている。だが、そんな俺たちにカルネさんはただ微笑み、挨拶をしてきたので俺たちも挨拶をする。

博士がメガシンカの鍵となるキーストーンを研究させてくれと話しているが、それは無理だとカルネさんが言い、これはサーナイトとの絆なのだ優しい笑みを浮かべてネックレスのようになっていいる部分を触る。

カルネさんが触ったネックレスがキーストーンになっているのだと俺たちは分かり、

話を聞く。

するとプラターヌ博士がキーストーンやメガストーンについて簡単に説明してくれた。キーストーンはトレーナーが持つものだということが、メガストーンはポケモンたちが持つものだということが…そしてその二つが揃った時によくやくメガシンカができるのだと言う。メガシンカができるようになれたらと思う俺たちにとつてそれはとても興味深い話であり、キーストーンとメガストーンを何とかこのカロス地方の旅で手に入られるかなと考え込んだ。

——そしてその後、先程扉の前で叫んでいた女性がカルネさんに時間だと知らせに伝え、俺たちはバトルを観戦するために移動することになったのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

エキシビジョンマッチが始まり、カルネさんともう一人のトレーナーのバトルが始まった。

バトルでカルネさんがボールから出したサーナイトを見て…今はメガシンカすることはないようだが、ちゃんとペンダントをつけていて…これがサーナイトの持つメガス

トーン…サーナイトナイトだと分かった。

「あれがメガストーン…メガシンカの秘密か…！」

『ピイカ…！』

「綺麗かも…!!」

「うわすごい…まるでお互いの考えが読めてるみたいに動いてる…！」

「カルネさんとサーナイトの意思が通じ合っているようですね…これが絆…」

「凄いねデデンネ…チャンピオンってこんなに強いんだよ！」

『デネデネ！』

この後、一気に倒すことができたカルネさん達であったが、サーナイトがメガシンカするところを見ることはできず、プラターヌ博士がもう一度頼んでみようと決心していたようだった。だからこそ、俺はピカチュウを見て、ピカチュウも俺を見て頷く。俺たちはカルネさんにメガシンカを見たいからこそ、バトルを申し込もうと決意した。

.....

「まさかもう出発してたなんてなあ…」

『ピカチュ…』

「メガシンカ…見て見たかったかも…」

「ほら、サトシもハルカも落ち込まないで早く行きましょう！ケーキ食べれないわよ！」

「セレナ！なんかすっごい行列だよ！」

『デネ！』

「…出遅れましたね」

「そうはいかないわ！サトシ達は席をとっておいて！」

「あ、待ってセレナ。私も行くわ！」

結局、先程の控室まで戻っていくとカルネさんはもういないと言うことがわかり、俺たちは残念だと感じた。でもセレナが励ますかのようにこの町で美味しいと評判のケーキ屋に行こうということになった。プラターヌ博士はやることがあるから後で向かうと言っていたため、俺たちが先にそのケーキ屋へ向かう。

ケーキと聞いてハルカが目を輝かせていたが、歩いている途中で先程の戦いを思い出し、俺と同じようにまた落ち込んでいた。

そしてセレナたちが励ましながらもようやくやく着いたケーキ屋では行列ができていて、これではケーキが買えるかどうかさえ分からないと感じてしまった。でもセレナは諦めずに特攻し、ハルカも一緒について行った。それを見た俺たちは苦笑しながらも人数分の席をとり、セレナたちが帰ってくるのを待っていることになった。

「結局…これしか取れなかったわ…」

「一個のケーキしかないか…ならセレナたちが食べた方が良くもしいないな」

「え、サトシは!？」

「全員で分けると本当に小さくなるだろう? ならなるべく人数は減らした方が良くだろうし…それにケーキなら苦労してとってきたセレナたちが食べた方が良くもしい。もちろんシトロンやユリーカも頑張つて席とったんだから食べないとな」

「サトシ…そういうのはちよつと空気読めてないって言えるかも」

「は…?」

「ハルカの言う通りよ! サトシも一緒に食べるの! というか、そういう遠慮はいらないから! 皆で分けて食べましょう!!」

「そうだよ! サトシも仲間なんだから一緒に食べないと!」

『デネデネ!』

「大丈夫ですよサトシ、僕の発明でちゃんと均等に分けられます！」

「……お前等」

『ピイカツチュ…』

結局一緒に食べるようになってしまったんだけれども…その途中でカルネさんに会い、俺たちが食べようとしていたガトーショコラが食べれないことにシヨックを受けていた。だから俺たちが分けようかと話をする。そしてほとんど一口サイズになったガトーショコラに、俺はあまりケーキを食べないし平気なんだけどなと苦笑しながらも、皆の優しさと仲間だから遠慮するなという言葉に少しだけ恥ずかしくなったが、同時に嬉しいという気持ちもあった。

そして皆で均等に分けられて俺の分となったガトーショコラはもう一度半分に分けてからピカチュウに半分渡し、俺もその半分を食べる。ピカチュウは電気を少しだけビリビリとさせながらも美味しいと喜んでおり、皆も食べれて良かったと笑みを浮かべている。そして口にしたガトーショコラの味は濃厚で、皆と食べれて良かったと思えたぐら이었다。

「美味しかったわ…本当にありがとうね。何かお礼をできたらいいんだけど…」

「あ、じゃあカルネさんキープ！うちのお兄ちゃんをシルブプレ!!」

『デネデネ!』

「シル…ブ…プレ…?」

「こらユリーカ!やめろって言ってるだろ!すいません冗談です!」

「冗談じゃないもん!」

『デネデネ…』

「……あの、ポケモンバトルってできませんか?」

「あら、君は…」

「サトシです。俺、ポケモンマスターになるために旅をしていて…カルネさんとバトルしたいんです」

「あ、私もバトルしたいです!…私はハルカって言います!」

「そう…いいわよ。バトルでガトーシヨコラのお礼になるかどうか分からないけど、あなたたちとのバトル…特別に喜んで受けるわ」

その後、礼をしたいと言うカルネさんに、俺はバトルができるならしてもらいたいと頼み込む。カルネさんは現在唯一の休息时间となっていて、俺たちの我儘を聞いて時間をとらせるのは迷惑となるかもしれないと思っていた。もちろんハルカもその考えは

持っていたけれど、メガシンカできるバトルというのはどういふものなのか自分で確かめてみたいと考えたのだろう。だからこそ迷惑と分かっていても俺の後ろからカルネさんを見て頼み込む。

でもカルネさんは俺たちの話を聞いて、そして笑みを浮かべて頷いてくれた。

.....

「僕は記録を撮ろう……すまないけどシトロロン君、審判をお願いできるかい？」

「はいもちろんですプラターヌ博士！」

現在俺たちがいるのは町はずれにある森の奥。バトルをするために歩いていたらプラターヌ博士と再会し、俺たちのバトルを見ようと言ってカメラを取り出していた。まず先に俺がバトルをすることになったが……メガシンカを見せるかどうかはその強さを示さないとできないとカルネさんが言ってきた。だからこそ俺とピカチュウは全力を出して戦おうと決心する。

「それでは、ピカチュウ対サーナイトのバトルを始める！……試合開始!!」

「サーナイトは実力を確かめるために動かないはず……ピカチュウ、ボルテッカー」

『ピカチュウ!』

「……………」

『サアナ』

「え!? サトシのピカチュウの技が躲された…! あのサーナイト凄いかも…!」

「頑張つてサトシ!!」

「どっちも頑張れ!!」

『デネデネ!』

「ピカチュウのボルテッカーと素早さに対応しているとは…さすがカルネさんですね…」

「でもサトシ君のピカチュウも強いね…ボルテッカーの威力が高い…!」

ボルテッカーをテレポートで躲され、ピカチュウがまたサーナイトを追つてボルテッカーを発動させたまま近づいていくがすべて躲されていく。だがサーナイトが躲していった場所はピカチュウのボルテッカーをもろに受けたため地面が抉れたり焦げているりと様々だ。

その様子にセレナたちは驚き、当てれば勝てるかもしれないと言い、頑張れと応援す

る。そしてカルネさんは俺たちを見て楽しそうに笑みを浮かべていた。

「ピカチュウ、広範囲10まんボルトだ…セレナたちには当てないようにしろよ!」

『ピイカツチュ!!』

「っ…凄いい…サーナイト!」

『サアナ…!』

ピカチュウが10まんボルトをほうでんのように放つ。テレポートで避けられると言うのなら避けられない範囲での攻撃が効くと考えたからだ。でもそれをやった場合セレナたちに攻撃が当たる可能性を考えてピカチュウに注意する。ピカチュウはそれが分かってしていると自信満々な笑みを浮かべて頷き、自在に操る10まんボルトで確実にサーナイトに当てようとした。

カルネさんはその技の強さが分かったのか、次第に俺たちがしていたような好戦的な瞳をしながらも輝かせていた。そしてサーナイトに向かって指示を出すために言う。サーナイトはシャドーボールを発動させ、向かってきた10まんボルトをぶつける。その余波によって突風が起こり、サーナイトは10まんボルトの直撃を受けていないようだったが、それでも少しだけダメージを受けてしまったようだった。それでもちゃんと立ち上がり、こちらを見つめているということにさすがチャンピオンのポケモンだと感

じる。確かシロナさんのガブリアスもそんな感じだったなと考え、楽しくなってきた感情を抑えきれず笑みをこぼした。

「サトシ君、君は強いわ。噂で聞いていたけどこれほどとは思わなかった…だから見せてあげる！私とサーナイトとの絆の強さを…サーナイト、メガシンカ！」

『サアナアアアア!!!』

「あれが…メガシンカ…！」

『ピイカ…！』

サーナイトの形状が変わり、まるで進化したときのように光り輝く。いくつか進化と違うと思えたのは、カルネさんの持つキーストーンとサーナイトの持つメガストーンが鎖のように繋がっていき、そこから光り始めたからだと分かったからだ。

そして輝きが消えていき、見えてきたのはメガシンカしたサーナイトの姿…メガサーナイトだった。メガサーナイトは先程とは違ってとても強いという感じが伝わってきて、よりバトルが楽しめそうだと感じる。だからこそ、その強さを味わおうと、このバトルに絶対勝とうとピカチュウに指示を出そうとした。

「ピカチュウ！エレキボール！」

『ピツカア!!』

「サーナイト、シャドーボール!!」

『サアナアアア!!』

エレキボールとシャドーボールが衝突する。でもシャドーボールの威力の方が強いのかエレキボールを吹き飛ばし、ピカチュウに向かっていく。ピカチュウはすぐに躲けていたけれども、エレキボールを吹き飛ばした技の威力とその強さに笑みを浮かべて俺を見る。もちろん俺もピカチュウと同じような表情を浮かべながらも勝ちたいという欲求が強まった。

「メガサーナイトに勝ちたい…そう思ってるだろピカチュウ?」

『ピッカ!』

「俺も同じだよ相棒!!だから全力で勝ちにいこうぜ!!!」

『ピッカツチュウ!!!』

「ふふ…サトシ君とピカチュウの心も通じ合っているのね…ならこちらも勝つ気で行くわ!」

『サアナアアア!!』

——このままバトルが過熱し、俺とカルネさんのバトルの決着がつかせようとする

が考えた…その時だった。

「カルネさん！もう時間ですよ！早くしないと撮影に間に合いません!!」

「え、もうなの？」

『サナア？』

「はいそうです！スケジュールはみつしり詰まってるんですよ！」

「そう…残念だけど…サトシ君…それにハルカちゃんも、バトルはまた機会があったらやりましょう」

『サアナ』

「…わかりました」

『ピイカ』

「うう…残念ですけどまた今度絶対にバトルしましょうねカルネさん！」

『サアアアア!』

「あれ…サーナイトが元に戻った!?!」

『デネデネ!?!』

「メガシンカが通常の進化と違うのはこうしてもとに戻るところだからね！」

「へえ…そうなんですか！」

メガシンカが見れたことがとても嬉しかったけれど、もう時間がないと言うこととバトルはまた今度やってくれという言葉に俺とハルカは落ち込んだ。ハルカなんてカルネさんと今後バトルができるかどうか分からないからだ。

「あの…カルネさん。俺はカロスリーグに出場して…絶対に優勝します。だからその時にバトル受けてください！」

『ピイカツチュ！』

「ふふ…サトシ君が言うとお当に実現しそうね。その時を楽しみに待っているわ！…ハルカちゃん、ポケモンコーディネーターって聞いたけれど、またカロス地方に会ってバトルができたらしみましょう」

「っ！はい！！絶対にバトルします！その時はよろしくお願いします！！」

「良かったなハルカ」

『ピイカツチュ』

「うん！すつごく嬉しいかも！メガシンカ…私も絶対に使いこなしてみせるわ！」

ハルカは一時的とはいえサーナイトがメガシンカしたことに感動し、ハルカのポケモンたちがメガシンカできるようにしてみたいと決心したようだった。もちろんその気

持ちは俺たちも変わらず、そんなやる気に満ちた俺たちにカルネさんは優しい笑みを浮かべて、頑張つてと応援する。

チャンピオンに出会って、いろんなことがあった俺たちだったけれど、メガシンカのことについても知ることができて良かったと思える一日だった。

第二百九話く妹は話をするく

『ガウウ！』

『ピイツチュ！』

「大丈夫よりザードにピチュー…それで、話って何？」

「……………」

こんにちは妹のヒナです。オーキド研究所の森で遊ぼうかとリザードたちと家を出て、歩いている途中である少年に再会しました。

その少年は…あの勝負を受けた3人組のうちの1人であり、バトルをした時に後ろの方で騒いでいた帽子をかぶったヒビキという名の少年であると分かった。そしてヒビキがいるということにリザードたちが警戒して私を後ろに下がらせて何の用かと威嚇

してきています。

私はそんなリザードたちに対して落ち着いてもらうために大丈夫だと微笑みながらも言い、リザードとピチューの頭を撫でてからヒビキの方を見る。リザードとピチューは私が頭を撫でたことで少しは落ち着いたのか、睨みつけているのは変わらないがそれでもすぐに攻撃してくるような態度にはなっていないために安心してヒビキと話をす

る。
ヒビキは私たちに向かって近づいてから、話があるから待ってくれと言っていたというのにやたらと周りを警戒していて…でもすぐに私たち以外は誰もいないと分かる。少し安堵してから話しかけてきた。

「おばさん…お前の母親は？」

「ママのこと？家にいると思うけど…呼んできた方が良い？」

「いい！やめろ絶対に呼ぶなよ!!」

「いや…ああうんわかった…それで私たちに何の用？」

『……………』

『……………』

「……………その…」

リザードとピチユーが何か文句を言ったり傷つけるような言葉を言う場合は攻撃してやるとばかりに炎や電気を出して威嚇する。まあでもヒビキが近づいたりしたぐらいじゃあ攻撃をすることはないだろうとリザードたちの表情を見て分かっているために、それを見て苦笑しながらも、私はヒビキに話しかけた。

ヒビキは私の母に会うのが怖いらしく、いないと分かるかと物凄く分かりやすく良かったという表情を浮かべていた。おそらく周りを警戒していたのも母がいるかもしれないという恐怖からなのだろうと思った。そのヒビキの表情から、あの時の母の行動がよほどトラウマになったんだと考え、私は少しだけ複雑な心境になってしまふ。まあでもあの時にいろいろと悪いことをしたのはヒビキ達を含めた私達だ。みんなに迷惑をかけたからこそ、必要な説教を受けたと考えればいい。それぐらい私たちは悪いことをしたのだから…。

まあヒビキ達は母を見るなり逃げ出すぐらいにはトラウマになったようだが…私にそれに関して何か慰めたり同情したりはしない。母もそうだけれど、兄の方の怒りももつと凄まじいのだから…ある意味母しかいなくて良かったと言った方が良くも無い。

まあそれよりも、ヒビキは何を言いたいのかと話を聞くためにじっと待つ。ヒビキは

少しだけ躊躇いながらも、ゆっくりと口を開いて言う。

「お前の、あの時の…バトル…：…すげえって思った」

「…そう」

「俺は何も指示してなかったし、見てるだけで終わったけど、お前がサトシさんの妹だったようにやく実感した」

「それって貶してる？それとも褒めてる？」

「…ほ、褒めてるに決まってるんだろ！バツカじゃねえの!!」

「そ、そう…」

何だろうか…ヒビキが照れたように、少しだけこちらからそっぽを向いて少しだけ罵倒を交えながらも話す言い方に私は苦笑した。リザードたちもこのヒビキの言葉には少しだけ微妙な表情を浮かべていたが、貶しているとは思えないために何も行動せず私とヒビキの間に立ちながら話を黙って聞く。私はその様子を見ながらも、ヒビキの話が終わるのを待った。

ヒビキは私のことを認めたということ、兄と同じ家族だから強かったと言いたいらしい。何というか…その言葉を聞いて私は思わず貶しているのかと思ってしまった。兄はスーパーマサラ人であり、様々な地方から人外か!?と疑われてしまうほどの人間だ。

だからこそ私がそんな兄と似ているのだと言うようなヒビキの言葉に否定したいと思っってしまった。でもそれは空気を読んではないと言うことになるし、余計に話を脱線させてしまう恐れもあるだろうから我慢しておこう。

そしてヒビキは少しだけ落ち着いたのか、私のことを正面から見て、真剣な表情で話し始めた。

「…それと言っておかないといけないことがある」

「何？」

「…俺は…俺の夢はサトシさんを超えることだ!!サトシさんはポケモンマスターになるのも時間の問題って言われてる凄いトレーナーで、俺にとつての…いや、俺たちにとつての憧れなんだ!…だからこそ、妹であるお前のことを心底羨ましいと思えた。サトシさんに直接ポケモンのことを聞けるお前が…旅に連れて行ってもらえるお前が憎いつて思えたんだ…だからずっとお前がいなければって思ってた…苛めてた。コウちゃんも、シユウジも同じ気持ちだったんだ…サトシさんの「妹」のお前に、嫉妬してた」

「……………うん」

「…でも今は違う、お前とあの時戦って…いや、俺は何もしていないけど…あの時お前の戦いを見て…サトシさんに一番近い存在がお前なんだって分かったんだ…だからお前に勝つ！トレーナーになって、ジム戦をして…そしてお前に勝ってやる！」

私に向かつて指差して宣言する言葉は、夢のために頑張って立ち向かうシゲルさんのように見えた。シゲルさんは幼い頃から暴走しまくっていた兄と一緒にいたためにちやんとしたトレーナーとして成長し、兄に勝つために真剣に勝負していた。その時の面差しや瞳と…ヒビキが私を見る表情は全く一緒だったのだ。

私と真剣に戦って勝ちたいと言うことも、兄を超えるという夢もすべてちやんと自分の道で決めてきたことだとそう理解した。

そして同時に、トレーナーとして旅立てる年齢になった頃にヒビキと私は戦いながら…競争しながらポケモンリーグを目指すのだろうとヒビキの瞳を見てそんな未来になるかもしれないとそう予測してしまった。

リザードとピチューも私と同じような考えがあったらしく、ヒビキのことを私たちを貶す嫌な奴からこれから戦うであろうトレーナーとして印象を変えたらしかった。少しでもジム戦をしていた時のようなやる気に満ちた目でヒビキを見て、そして私を見て微笑む。そんなリザードたちに私も笑みを浮かべてから、ヒビキの方を見ていった。

「…つまり、ヒビキのことをライバルとして見ていいのね？」

「おう!!ライバルとして…お前に勝ってやるから覚悟しろよ!!」

「ふふ…ええ分かった!」

爽やかに笑う私たちは、あの時とは違って穏やかに見えていたはずだ。苛めつ子と苛められつ子という関係から、お互いを競い高め合うライバルへと…。

これからの未来でヒビキとどのように戦っていくのかさえ分からないし…私自身の夢はヒビキとは違ってまだ何も決まっていない。

…けれど、それでもトレーナーとして旅立つ日が来るのは確かだろうし…その時が少しだけ楽しみになったと感じていた。

——その後、ヒビキは言い終えたからと後ろを振り向き走り出すかと思えたのだが、少しだけ私の方を振り向き、じっと見てから小さな声で言う。その声は私たちに聞き取れるかどうか分からない音量だった。

「……………あと…今まで苛めてたこと…全部悪かった」

「ううん。謝らないで。あなたたちのやったことは【あの時】に全部謝ってもらったんだから…だからもう謝罪はいらないよ。でも、これからはライバルなんだから…後ろを向かないで前を見て歩こう！…よろしくねヒビキ！」

「…おう分かった…もう謝らない。…でもってこれからもライバルとしてよろしくな！ヒナー！」

『ガウウウ！』

『ピイツチュ！』

リザードとピチューが走り出していったヒビキを見てから笑いながら叫ぶ。その声は最初に再会した頃とは違って、私と同じようにこれからもよろしくの意味で叫んでいたようだった。もちろんその声も走っているヒビキに聞こえているはずで、これからどうなるのだろうかとまだ見ぬ夢を思い、空を見上げた。

第二百十話く妹はある事件を知るく

「へ？細胞が盗まれた？」

『ガウウ？』

『ピチュユ？』

「ああ少し違うよヒナちゃん。マサラタウンに住んでいる皆の様々な記録が何者かによつて奪われたらしいんだ。でもすぐにジユンサーさんが気づいて犯人を追つてい
るって話だよ」

「そうなんですか…」

『ガウ…』

『ピチュユ…』

「最近ポケモンたちが暴れたりすることがあるらしいからのう……物騒になってきてるよ
うじゃから気をつけるんじやよ？」

「はい！分かってます！」

『ガウウ！』

『ピッチュ！』

こんには妹のヒナです。オーキド博士の研究所に行くとか何やら最近マサラタウンで起きた奇妙な事件について話していました。何なのか詳しく話を聞くとマサラタウンの様々な情報が盗まれたという。……それもマサラタウンで生まれたすべての住人の誕生から今までの記録を奪われたということらしい。と言っても情報はバックデータがあるみたいだから奪われたとしても問題はなく、その情報が何処にいつてしまったのかについて問題になってるようだった。もしも悪用されたらということ、情報が悪党たちに売買されていたとしたら大変なことになる。だからこそジュンサーさん達が頑張つて犯人を追い、そして皆に警戒してくれと呼びかけているらしい。

あと、最近この近くでポケモンたちが暴れることが増えてきたらしく、トキワの森でポケモンたちと遊ばなくなつたとヒビキが不満そうに言っていたのを聞いた。まあトキワの森はピジョットがいるので何かあればすぐに対処してくれるから問題はない。

ケンジさんからの話だと暴れているのと情報が盗まれたのは同じ時期に起きたらしい。だからもしかしたらその情報を盗んだ犯人と繋がっているかもしれないとジユンサーさん達はそう考えたみたいだった。まあまだ真実は分からないし犯人が捕まるまで分からないだろうけれども。でも私たちもその考えには少しだけ領けるような気がする。同時期にこんな騒動が起きるのはめったにないことだろうからだ。

そしてつい先日、ヒビキがトキワの森に行けなくなつたからとポケモンが食べるお菓子を私たちにくれて、これをオーキド研究所のサトシさんのポケモンたちに渡してきてくれ！と頼まれてしまった。まあそれは良いんだけど、ヒビキが渡してきたポロツクは様々なきのみを使っているのがすぐに分かり、しかもまた私にそのお菓子を渡した瞬間走り出して、リザードたちの分もあるから！と叫びながら行ってしまったのには苦笑した。

今度お礼しなければと思う一方で、早くヒビキがトキワの森でポケモンたちと遊べるようになればいいと思う。オーキド研究所で遊ぼうかと誘つた時もあつただけれども、兄のポケモンたちはまだ怒っているだろうからと私たちの誘いを断つたために、一緒に行くことはできない。でも兄のポケモンたちはヒビキから貰つたお菓子を持つてきた私たちから話を聞いてちゃんと認識を改めてくれたし、嫌そうな表情も浮かべてなかつた。でもその事実もちゃんと説明したと言うのに、ヒビキはそれでも自分のことが

許せず、オーキド研究所はまだ行けない：嫌だと言っていたので、私たちは諦めた。だからこそヒビキ達が悲しまないように、早く事件が終息すればいいと考えていたのだ。それにとにかく私たちは今までの事件に遭遇したこともあるし、皆が心配しないように気をつけていこうと思った。もちろんヒビキも同じような考えでいるらしい。

———だからこそ警戒し、いつも以上に気をつけて歩いていたつもりだった。

.....

「まあ無理だったけど……」

『ガアアアアア!!!』

『ピイツチュウウ!!!』

『バゴオオオオオオオツツ!!!!!!』

「あれって?…?…前に見た物だ…!」

『ガウウ……』

『ピイツチュ……!』

目の前にいるのはバクオングというポケモンであり、このカントー地方では珍しいポケモンだった。なんでここにいるんだろうという疑問と、どう対処していこうかという考えが思い浮かぶ。リザードとピチューも警戒し、こちらに襲いかかろうとしているバクオングに向かって威嚇していた。

でもバクオングがこちらを見た時に耳に取り付けてあったベルトのようなものを見て、おつきみやまで見たものと同じだと確信し、操られているのではないかと考えた。

だから周りを見て、とりあえず見える範囲には誰もいないと判断してからバクオングの対処をする。

「リザード、かえんほうしゃ!ピチュー、あのベルトに向かってアイアンテール!」

『ガアアアアアアア!!!!』

『ピイツチュウウ!!!!』

リザードのかえんほうしゃによってバクオングがひるみ、その隙にピチューが近づい

てアイアンテールを発動させる。ピチュウのアイアンテールは最近修行した結果ほとんど電気を帯びたアイアンテールとなっているため、攻撃力が強く、一撃でベルトを粉砕することができたのだった。

「よし…これで大丈夫なはず…ツツ!!」

『ガウウウウウ!!』

『ピイツチュ!!』

『バゴオオオオオ!!』

ベルトを壊したからもう大丈夫だと思った。おつきみやまでもそうだったし、操られていた原因でもあるベルトを壊してしまえばすぐに元に戻るだろうと思ったのだ。だからこそ警戒しながらだけ近づき、大丈夫かどうか見る。

するといきなり起き上がったバクオングに私たちは驚く。バクオングの目は通常とは違って正気とは言えず、まだ操られているのだと分かった。でも周りを見ても何か異常は見当たらず、ベルトのせいだで暴れていたのではないかと考えて対処してしまえばいいと思った。ベルトを壊せば…すぐに終わるだろうと、そう考えたのだ。

だからこそいまだに暴れようとするバクオングに驚き、私達に向かって攻撃をするため避けようと動いた――。

『止めろ!!!』

『止めなさい!!!』

『バゴオオオオオオオツツ?!?!?!?』

「……あれ? ミユウツーたち……何でここにいるの?」

『ガウウ……』

『ピイツチュ……』

ミユウツーたちが空からバクオングに向かってやってきてとび蹴りのような攻撃をしてバクオングを吹っ飛ばしていた。しかも何やらミユウツーたちはそれぞれ睨み合っている……そういえばマサラタウンに帰ってくる途中でも争っていたし、喧嘩をするほど仲が良いという感じがして思わず苦笑してしまった。

バクオングはミユウツーたちの技とは違った攻撃を受けて気絶し、もう攻撃するべき

敵はいなくなつたはずなのだが、ミュウツ―たちは険悪そうな雰囲気を漂わせ、このままでは喧嘩してしまうと考え、私たちはお互い顔を見合わせてからすぐにミュウツ―たちの間に入る。

「ミュウツ―たち何やつてるの？それにバクオングもう気絶してるし喧嘩はしちや駄目だよ!!!」

『ガウウウ!!』

『ピチュピチュ!!』

『…いえ、私は喧嘩などしてはいませんよ。ただ排除するべき汚物が目の前にいるだけです』

『それはこちらの台詞だ。貴様を同族などと呼びたくもないぐらいだ』

『呼ばなくて結構。あなたのような脳筋と一緒にされたくはありませんから』

『貴様…!』

「ほらミュウツ―落ち着いて！ミュウツ―姉さんも挑発しちや駄目だからね！」

『ガウウ!』

『ピチュウ!』

イツシユ地方から来た…ミュウツー姉が冷めた口調でミュウツーに向かつて嘲笑しながら言う。その言葉にミュウツーは青筋を浮かばせながらも言い合う。このままでと本当に物理での喧嘩になってしまい、私たちは焦る。ここで大騒ぎになってしまえば、何かあつたのかと人に見られてしまう可能性が高いと考えて慌てて止めようと叫んだ。ここはいつものオーキド研究所へ向かう途中にある道なのだ。オーキド研究所の迷いの森ではないし、人が来ないとは限らない。だからこそここで騒ぎを起こしてしまつたらいけないと思つた。ミュウツーは通常のポケモンとは違うのだから、見つかつては駄目だと喧嘩の仲裁をする。

私達が叫ぶとミュウツーたちが急に口を閉ざしてこちらを見てくる。そしてミュウツー姉が少し優しそうな笑みを浮かべて言う。

『……ミュウツー姉さんとは私のことでしょうか?』

「え? うん。何だかベイリーフ達みたいに優しくて頼れるお姉ちゃんって感じがしたからそう呼んだんだけれど…駄目だったかな?」

『ガウウ?』

『ピチュ？』

『いえ…そのようなことは…むしろ喜ぶべきことだと考えていますよ』

「そつか…良かった！」

『ガウウ！』

『ピイツチュ！』

『ふん…ヒナたち、俺には何かないのか？』

「いやミュウツ―はミュウツ―だけど…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

『クツ…日頃の呼び方のせいか…それとも出会う時期が遅ければ俺もそう呼ばれる可能性があったのか…!』

『ありえませんがあなたのような方がミュウツ―姉さんと呼ばれるだなんて…フフ』

『いいだろう…貴様とは決着をつけたいと思っていた所だ…来い!!』

『ええ望むところですよ。ただの「ミュウツ―」さん？』

『貴様…!!』

「ああもう…好きにしてよ…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

ミュウツー姉がミュウツーを嘲笑しながら挑発し、その言葉にミュウツーがキレる。

そしてミュウツーたちが空へ飛んでいき、迷いの森へ向かっていく。おそらく思う存分バトルできる場所まで移動してから戦うつもりなのだろう。結局喧嘩を止めることはできなかったけれど、人に見つかることはなかったしまあいかと無理やり納得した。それに世界レベルで大変なことになればフシギダネがキレて止めてくれるだろうし……。

「そういえば…バクオングどうしようかな……」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

「おいヒナツツアアア!!? 何だよこのポケモン!!?」

「あ、ヒビキ…ちよつと暴れてたポケモンがいてね」

『ガウ』

『ピチュ』

「暴れてた…?!まさかそれをお前が倒したってことかよ!!くそ…俺も早くトレーナーとして修行しないとヒナよりも強くなねえじゃねえか…!!」

「いやそういうことじゃなくて…というか私が倒したわけじゃないから!」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

「え…そうなのか?…うーん…まあいいや。…なら、バクオングはジュンサーさんかジョーイさんにでも話してくるか?…このままだと可哀想だよな?」

「そうだね…私はバクオングを見てるからジュンサーさんと呼びに行ってもらってもいいかな?」

『ガウウ!』

『ピチュ!』

「おう任せとけ!」

第二百十一話く兄はコルニ達と出会うく

「見つけた！99人目の相手!!」

「はい……?」

『ピイカ……?』

「えつと……何でしょうか?」

「何ってそんなのポケモンバトルに決まってるでしょ!」

こんにちはは兄のサトシです。次のジムがあるシヤラシテイを目指している途中であるトレーナーに話しかけられました。

最初は何か悪い奴かと警戒したけれど、無邪気そうな笑顔と、トレーナー特有のバトルしようと言う声に大丈夫だと判断して警戒を解き話を聞く。少女は俺たちに向かっ

て自信満々に腰に手を当てて胸を張ってからポケモンバトルをしたいと言う。でもバトルをする前に名前を言った方が良く考えたのか、トレーナーである少女は胸に手を当てて自己紹介をし始める。

「私はコルニ！でもって私のパートナーは…」

『グルル…！』

「ルカリオか…」

『ピイカツチュ…』

「うわ懐かしいかも…」

「ルカリオ…？」

「へえ！ルカリオって言うんだカツコいい!!」

『デネデネ！』

「ルカリオとバトルをしたいと言うことですか…！」

「そうだよ！今日の私達物凄く絶好調なんだ！だからバトルしよう!!」

『バウウ!!』

「…まあ…シヤラジムに挑戦する前のトレーニングになるかもしれないし…バトルなら受けて立つぜ」

『ピイカ!』

「ツ!シヤラジムね…そうなんだ…じゃあバトルはえつと…」

「ああ、俺はサトシ。それで相棒のピカチュウ」

『ピイカ!』

コルニがシヤラジムに挑戦すると言う話を聞いて意味深に笑みを浮かべてこちらを見たため何かあるなど考える。ついでに言うところコルニの腕についている透明な石のような部分も気になる…まあバトルすればすぐにわかるかと思いい、それでも俺たちがまだ名前を名乗ってないのに気づき、こちらも自己紹介をした。セレナたちも名乗っていないことに気がつき、すぐに俺と同じように自己紹介を始める。

そしてコルニはシトロンたちを見てシヤラジムに全員挑戦するのか話を聞いた。でもシトロンたちはシヤラジムに挑戦しないということと、ただ俺と旅してるトレーナーだということの説明した。

まあシトロンはミアレジムのジムリーダーだけど、今は関係ないかと考えながらもコルニを見てから一歩近づき、バトルをしようと笑みを浮かべる。

「じゃあサトシ！バトルしましょう——」

「——ちよおおおと待ったあああ!!!」

「えっ？何!!？」

「え、え…どうしたのハルカ？」

『デネ?』

「な、何かありましたか…？」

「どうしたんだよハルカ」

『ピイカ…?』

「サトシ！コルニとのバトル私が最初に受けてもいい？」

「ハルカがバトルするの!!!」

「ええ！だってカルネさんとバトルできなかつたし…それにコルニ！あなたのそれってもしかしてキーストーンでしょ？」

「あれ？知ってたんだ！」

『バウウウ?!』

「えええええ!!!」

キーストーンの部分を俺たちに見せてから笑みを浮かべているコルニ達に、俺とピカチユウ：そしてハルカは好戦的に瞳を輝かせた。

そしてセレナたちはそんなコルニのキーストーンを見てようやくカルネさんと同じものだと気づき驚愕して、メガシンカするののかという質問や、メガシンカするなら見てみたい！と叫んでいた。でもその言葉にコルニとルカリオは首を横に振ってから残念そうな表情を浮かべる。

「ごめんね。ルカリオはまだメガストーンを持っていないからメガシンカはできないんだ」

『グルル…』

「あ、そうなんだ…」

「ちよつと残念…」

『デネデネ…』

「あ、ですがルカリオがメガシンカすると言うのは確実なんですわね！」

「うんそうなんだよ!!私の祖先が…ってその前に、バトルは？」

『パウウ?』

「ああそうだった……どうするハルカ？ お前メガシンカするポケモンと戦いたいって言うてたけどコルニとバトルするか？」

『ピイカ？』

「うん！ バトルしたいかも!!」

「え、かも？……でもルカリオまだメガシンカできないよ？ それでもいいの？」

『グルル？』

「俺は後でバトルしてもいいけど……とりあえずハルカの「かも」は気にしないでくれ」

「うん気にしないで……メガシンカができなくてもバトルはしたい！ 最近全然バトルしてないし、コンテストの勘も鈍っちゃいそうだから！」

「コンテスト？……は、よく分からないけど、とにかくバトルだね！ オツケー頑張るよルカリオ！」

『バウウ！』

——というわけで、まず先にハルカがルカリオとバトルをすることになった。

とりあえずバトルできる広い場所まで移動しようということになり、俺たちはそちらへ向かう。

そしてシトロロンが審判をするといつてバトル場となった場所の近くに立つ。その様

子をコルニとハルカ、そしてシトロンを除く俺たちは離れた場所で観戦することになった。

「…ねえサトシ。ハルカつてコーディネーターだよ？普通にトレーナーとのバトルもするの？」

『デネデネ？』

「コーディネーターにとつて必要なバトルするぞ。…というよりもコーディネーターはどうやってポケモンを魅力的に見てもらおうのかが重要だから、バトルしたりポケモンゲットしたり…トレーナーとすることと変わらないな」

『ピイカツチュ』

「そうなんだ。ねえ…ハルカは勝つと思う？」

「まああいつ結構好戦的だし、バトル好きで攻撃重視なバトルスタイルだから大丈夫だとは思うが…どうなるのかはまだ分からないな」

『ピイカ…』

「サトシがよく言ってるあれだよ！【バトルは最後までどうなるのかわからない】!!」

『デネデネ！』

「おうその通りだ！」

『ピツカッチュ！』

離れた場所で話している間に試合は開始され、ハルカはアゲハントでルカリオに挑むらしい。バシャーモの方が有利な気もしたが、まあどんなタイプでも有利不利に関わらずバトルを楽しむのが俺のやり方であり、ハルカもそれを学び、俺と似たやり方を好むようになったのだから気にしない方が良くかと納得した。

「では、ルカリオ対アゲハントの試合を開始します…試合開始!!」

「ハルカ! かかってらっしゃい!!」

『バウウ!』

「ええ! そっちがその気なら…アゲハント、ぎんいろのかぜ!」

『ハアアア!!』

「ルカリオ! 避けてブロック!」

『バウウ!』

「うわあ綺麗!」

『デネエ!』

「うん！アゲハントのぎんいろのかぜ…なんて素敵なの…！」

「技の威力が上がってるな。そういえばマサラタウンで修行してるって聞いたからそのせいかな…？」

『ピカピ？…ピイカツチュ！』

「…そうだな。ハルカも頑張ってるよな」

『ピツカア！』

アゲハントのぎんいろのかぜはいつも通りコンテストで鍛えられた綺麗な攻撃技として放たれた。その攻撃はまるで銀色のカーテンが出現し、周りに綺麗な光となって辺りに散らしていくようだ。散らされた光の粉はアゲハントの周りで綺麗に輝いていたようにも見える。

その姿に皆はこれがコンテストの戦い方だと納得し、アゲハントのぎんいろのかぜが綺麗だと感嘆の息を漏らし、目を輝かせている。もちろんこの攻撃を見ていたシトロンのコルニ達も同じだ。

だが、アゲハントの威力のあるぎんいろのかぜがルカリオに当たろうとしたのだが、すぐにそれは躲されてしまった。しかもかなり素早い。

素早いということの恐ろしさはポケモンバトルにおいてハルカはよく知っていたた

めに少しだけ嫌そうな表情を浮かべ…でもすぐに指示をするために口を開く。

「アゲハント、つばめがえし！」

『ハアアアア!!!』

「躲して！つるぎのまい!!」

『バウウウ!!』

「つるぎのまい…?」

「攻撃力を2段階上げる技だ…これは長期戦になるとハルカの方が不利になるな……」

『ピィカ…』

「っハルカ！頑張つてえ!!」

『デネデネ!』

「ハルカ！最後まで諦めないで頑張つて!!」

素早さと攻撃力がアゲハントよりも上になったであろうルカリオに、このままでは負けてしまう可能性を考えてユリーカ達が大声でハルカを応援する。もちろんハルカもこのままではいられないと笑みを浮かべて叫んだ。

「アゲハント！サイコキネシス!!」

『ハアアア!!』

「オツケー行くよ！ルカリオ、もう一度躲してからボーンラッシュ!!」

『バウウ!!!』

『ハアアアアツツ!!?』

「アゲハント…!?!」

「もう一度攻撃よ!」

「くつアゲハント！つばめがえしで防御!!」

『ハアアアアア!!!』

「うんうんハルカは強いね…でもそれだけだと私のルカリオは負けないよ!!」

『バウウウ!!』

「なっ!?!」

『ハアアアアツツ!!?』

「でたあグロウパンチ!!!」

『バウウウ!!!』

「…あれって」

『…ピイカ』

「ああアゲハントが…！」

「ううう…アゲハント…！」

『デネ…！』

アゲハントも十分素早いんだけど、その上を行くルカリオによって攻撃が躲せず、にボンラツシユの直撃を受けた。そして2撃目のボンラツシユを躲そうと動くためにハルカがつばめがえしで防御しようと指示を出す。もちろんそのつばめがえしのおかげでボンラツシユを防御することはできた。でもコルニは自信満々に笑みを浮かべて叫び、その声に反応してルカリオが動いた。

指示も出さずに動いたその姿にハルカとアゲハントが驚愕し、ボンラツシユの直撃を受けてしまった。しかもその後、また指示なしでグロウパンチを放ち…ポロポロになったアゲハントは倒れてしまう。その姿を見て少しだけコルニとルカリオのバトルスタイルが気になった。

カルネさんも途中まで指示を出さずにサーナイトと一緒にバトルしたという記憶はあるけれども、それでもカルネさんはちゃんとサーナイトを見て頷いたり手を振り上げ

たりといった動作をしていた。つまりは、口に出さないだけで指示はちゃんとしていたのだ。それはまさに目と目で会話をしていると言えるだろう。

でもルカリオはコルニの言葉を聞いて指示を聞かずに攻撃へ移った…。それはおそらくコルニとルカリオにしかできない独自のバトルスタイルなのではないかとそう考えたのだ。そしてその突然の急襲にハルカは対応しきれず、負けてしまったのだろうと感じた。

とりあえずハルカがこの後バトルに負けてしまったことから学んで、マサラタウンに戻って修行をやり直して動揺しても防御できるように徹底的にやるかもしれないと予想して俺とピカチュウは苦笑してしまった。

「アゲハント戦闘不能…よって勝者コルニとルカリオ！」

「アゲハント!!!」

『ハアアア…』

「大丈夫アゲハント…ううん。ありがとう！」

『ハアアアア…』

「私たちの勝ちだね？はいこれオボンのみ！」

『バウウ!』

「う、うん…ありがとうコルニ」

『ハアアア…』

「じゃあ次はサトシ! 100人目の相手は君で決まりだよ!!」

『バウウ!!』

「…そうだな。じゃあやるか!」

『ピイカツチュ!』

——先程の戦いで気になる点があったけれど、まあ今は気にせずバトルに集中しようと考えた。

第二百十二話く兄はバトルするく

「いくよサトシ！」

『バウウ！』

「ああ、望むところだ！」

『ピイカ！』

サトシ達は現在シヤラシテイへ向かう途中、コルニという少女と出会いバトルをすることになった。

先程ハルカとバトルをしたというのにまだまだコルニもルカリオも余裕そうだ。その余裕たっぷりの表情にサトシとピカチュウはお互い顔を見合わせてから頷いた。先程の戦いからどのような行動をルカリオがするのか大体分かったからだ。

そしてそんなサトシ達とコルニ達を見たシトロロンが、両手を上げて叫ぶ。

「では、ルカリオ対ピカチュウの戦いを始めます…試合開始!!」

「ルカリオさっさと終わらせるよ! つるぎのまい!!」

『バウウウ!!!』

「ピカチュウ、そのまま充電体勢な」

『ピイカツチュ!』

「あれ? ピカチュウ攻撃しないのかな?」

『デネデネ』

「うん…多分警戒してるのかもしれない…さっきアゲハントが受けたボーンラッシュって技はピカチュウにとって効果抜群のじめん技…このまま攻撃を受けたら危ないわ…!」

「でも、サトシとピカチュウなら大丈夫そうかも」

「…ハルカ? どうしてそう思うの?」

「私は今までサトシと一緒に旅をしてきて…それでトレーナーとしてのすべてを学んできたの。だからこそサトシが負けることはないって信じているの!」

「信じている…うんそうね。私もサトシのこと信じるわ！」

「あ、私も信じる！」

『デネデネ！』

バチバチと赤いほっぺから電気を放電させながらもルカリオに攻撃しないピカチュウと、そう指示しないサトシにセレナたちは心配そうな表情で頑張れと応援していた。でもハルカだけは焦った様子はなく、この勝負で絶対に負けることはないだろうという考えをもちながらもサトシ達のバトルを見ていた。その様子にセレナは驚き、ハルカから話を聞く。

だが、ハルカがサトシのことを信じると言う強い口調と言葉に心を揺らし…ハルカと同じようにサトシのことを心から負けないと信じようとしていた。いや、信じているのだ。もちろん彼女たちを見たユリーカも、サトシは負けないから大丈夫だと叫び、デデンネと一緒に頑張って応援を続ける。

「…大丈夫…サトシは…大丈夫…！」

——そんな中、セレナは真剣に考えていた。サトシはハルカにとってホウエン地

方でトレーナーになったすぐに一緒にいる先輩であり、サトシが行ったバトルでは必ず負けることがなかったという光景をずっと見てきたことから大丈夫だろうと言う絶対的な信頼感があつた。

そしてセレナたちとハルカとのサトシと一緒に旅してきた時間の差からそのような変化があつたのだらうとセレナはそう考え、その時間の差と信頼関係が悔しいと感じてしまっていた。サトシの隣に立つには、強い信頼を持っているハルカの方が相応しく、そしてバトルをするのもサトシに似ていてまるでお似合いだと思つてしまつたのだ。

でもハルカにサトシへの恋愛感情がないという事実があり、絶対にそうならないと分かつていたとしても…安心していたとしてもやはり嫉妬はしてしまう。その絶大な信頼感と負けることがないと言う言葉に…。

その黒いもやもやとした感情こそサトシを愛しているという証しでもあり、自分にとってはサトシとずっと一緒に居たいと言う行動力としての強い力でもあつたけれど、純粋なハルカに対してそれを抱くのはどうかと考えてしまう。

それに、カントー地方から今まで一緒に旅してきた仲間には、恋愛感情がないとは言いつてもいい。つまりセレナは、今までサトシに会えなかつた時間に悔しいと感じ、セレナ自身と同じように恋愛感情がある以前の旅仲間が来たらどうしようかと焦っているのだ。だからこそ、少しずつサトシに相応しくならなければと覚悟を強めていくセレナ

は拳を握り、サトシを見つめた。

そしてそんなセレナに強い視線を向けられているサトシはというと、コルニとのバトルをピカチュウと一緒に楽しんでいた。

「いくよルカリオ！ボーンラツシュ!!」

『バウウウ!!』

「躲せピカチュウ！」

『ピツカア!』

「速い…でもこつちも負けてられないよ!!攻撃攻撃!!」

『バウウウ!!!』

「ピカチュウ、【全部】躲してからアイアンテール」

『ピツカツチュウ!!!』

ルカリオがボーンラツシュというコルニの指示以外でも動き、グロウパンチなどを放ってくる。だからこそサトシはそれらを見てすべて躲せと指示したのだ。でんこう

せつか並みのピカチュウの素早さに翻弄されながらも攻撃しようとしてくるルカリオをすべて避けて、そしてピカチュウのアイアンテールをルカリオの頭上に向かって放つ。

ルカリオはピカチュウの攻撃を防ごうとしたが間に合わず、直撃を受けたルカリオはそのまま地面に沈み、倒れてしまったのだった。それはある意味一撃必殺。

「ルカリオ戦闘不能…ピカチュウの勝ち！」

「ルカリオ…！」

『パウウ……』

「ピカチュウお疲れ、よく頑張ったな」

『ピツカ！』

「うわーんこれじゃあもう一度100人連勝しなくちゃだよお!!」

『パウウ…』

「100連勝?…あーつと…何か悪いな?俺が連勝止めたみたいで…」

『ピイカツチュ…』

「……うん大丈夫だよ……サトシじゃなくて私たちが弱かっただけだからね……」
『バウウ!』

「そんなことないかも!だってあなた物凄く強いんだから!」

「うん!サトシはものすごく強くて負けることはないんだから、気にしなくてもいいよ!」

「そうだよ!サトシは特別強いだけで……コルニは弱くないよ!サトシ以外と戦ってたら勝ってたよ絶対!」

『デネデネ!』

「そうですね。サトシの場合リーグ優勝者常連ですからコルニが弱いと言うわけではありませんよ」

「へ……リーグ優勝者常連?!?だからあんなに強いのか?!?」

『バウウウ!!!』

「まあそうだけど……でもコルニも結構強かったし、100人目の挑戦なら俺とのバトルを無効にして他のトレーナーと相手したらどうだ?」

『ピカピカ?』

「そうですね……もしもよければ僕たちが相手になりますよ?」

「あ、私はまだまだ新米だけど……それでもよかったですらバトルしましょう!」

「うう…その気持ち凄く嬉しい…でもそれじゃあ私たちのやってきたことが…どうしよう……」

『バウウ…』

「…あれ？というか何で100連勝しようと思ってるの？」

『デネデネ』

「あ、実はね———」

コルニがサトシ達に向かって話したことはキーストーンの対となるルカリオナイトを見つけると言うこと、そしてその修行のために100連勝を目指して頑張っていたということ…シヤラシテイのジムリーダーということを教えてくれた。

ルカリオナイトについてはコルニのご先祖が最初にルカリオをメガシンカさせたとのことで…様々な情報にサトシ達は驚き、そして余計に100連勝については大丈夫だと話した。

サトシについてコルニは知らなかったらしく、カントー地方からこのカロス地方までを旅してきたことや旅してきてゲットしたバッチャやリーグ優勝についてをすべて話したために驚き、そして笑みを浮かべて納得しながらも口を開いた。

「じゃあサトシと一緒に旅してもいいかな？サトシと戦って勝ってみせれば100連勝した…とはいえないけど、でも強くなったとは言えるよね！だから私たちと一緒にセキタイタウンまで行ってほしいの！」

『バウウ!!』

「おう！俺たちはそれでも構わないぜ！コルニがいないとシヤラジムでバトルできないだろうし…メガシンカについてもっと知りたいって思ってるからな！」

『ピッカ!』

「じゃあ次の向かうべき場所はセキタイタウンね…私が案内するわ！よろしくねコルニ!!」

「コルニ！サトシとのバトルだけじゃなくて私とももう一度バトルに挑戦してほしいかも…これからよろしくね！」

「やったあメガシンカのことと知ることができねデデンネ！一緒に頑張ろうねコルニ！」

『デネデネ!』

「では、セキタイタウンへ向けて…出発しますか！」

「おう！」

『ピツカツチュ!!』

サトシ達はそれぞれバトルするために邪魔だったため降ろしていたリュックを背負い、歩き始めた。向かう目的地の場所をシヤラシティからセキタイタウンへと変えて…。

———だが、誰かのお腹が鳴る音が聞こえ、皆が立ち止まった。そしてお腹が鳴ったであろうコルニとルカリオ…そしてハルカに視線を移す。彼女たちは頬を赤くしてそして言い訳をするように口を開いて言った。

「ポケモン勝負ってお腹が空くから仕方ないかも…」

「そうだよね！だってだって、私達お昼まだ食べてないしポケモン勝負し終えたばかりなんでもん！」

『バウウウ!!』

「ああそういえばもうお昼だったな…」

『ピイカ…』

「じゃあここでランチにしましょうか！」

「賛成！」

『デネデネ！』

「では僕が料理を作りますからテーブルの設置はよろしくお願いしますね！」

「はい！」

「うんうん分かった！シトロンの料理楽しみ！」

『バウウ！』

こうして、サトシ達の旅にコルニとルカリオという新たな旅仲間を加えて、お昼を食べるための準備に向かったのだった。

第二百十三話　妹はラティアス達と話す

『キューン!』

「ラティアス…そんなに抱きついてたら遊べないよ?」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

『キューンキューン!!』

　こんにちはは妹のヒナです。現在オーキド研究所の迷いの森にてラティアス達と遊んでいる最中です。いつもはボールで遊んだり鬼ごっこなどをして遊んでいたりするのですが、ラティアスが私に抱きついて離れようとせずにいるため思わず苦笑してしま

ました。

どうかしたのか話しかけてもラティアスは何も言わずにただ私のことを抱きしめ続けていただけ。その状態は長く続き、話してくれと言ったとしてもきつと離さないだろうと思えるほどの悲しそうな表情を浮かべていた。その状況にリザードとピチュューは苦笑しながらもラティアスを止めようとはせず、むしろこちらに近づいてラティアスと同じように抱きしめてくる。おそらくラティアスが落ち着いてくれることを…いつものように明るい表情になってくれることを願って行動しているのだろうと思えた。

私はそんなラティアス達に離してもらわない方が良くかと思えながらも、口を開いた。

「ラティアス…私たちはもうどこにも行かないよ。トレーナーになるまでは…ここにいろよ?」

『ガウウ!』

『ピチュ!』

『キューン…』

ラティアスは凄く悲しそうな表情を浮かべて私に抱きついている。その様子から私

たちはあのジム戦の後……マサラタウンに帰ろうとした時に会ったラティアスがかなり喜んで、笑顔で私に抱きつこうとしていたのを思い出した。まあその時はミュウツーたちが争っていたし、ラティアスはラティオスに止められていたという記憶があったから今こうしていることでしょうか。思い出したと言った方が良さかもしれない。

最近いろんなことがありすぎてラティアスと一緒にいることができなかった。マサラタウンに帰ってきた後も、ラティアスはラティオスに連れられて自分の棲む町へ一時帰らなければいけないということからほとんど私たちと会うことはできなかった。

だからこそこうやって会うことができたと思っただけ抱きしめられ、離れようとはしないのだろう。…それは、私達は何も言わずに突然マサラタウンから飛び出してしまったからだろうかと考えている。そしてあの後十分私たちと一緒にいることができなかったから、今こうやってその時の悲しさを埋めているのだと感じた。

フシギダネ達だってあの後またどこかへ家出していくのではないのかと警戒され、オーキド研究所では兄のポケモン達のうち誰かが傍にいて、そして他の所へ遊びに行く時はミュウツーたちが後ろから監視するかのようにはこちらを見ていたのだ。まあそれはしばらくの間続き、私達がもうマサラタウンから外に出ないだろうと確信したら終わったのだが、それでもやはりラティアス達の心にはあの時の悲しみが残っているのではないかと思えた。

だから、私は笑顔で大丈夫だとラティアスが安心できるように言う。リザードたちも私の言葉に力強く頷いていったのだが、ラティアスはそれでも離れない。

その姿から、「トレーナーになるまで」はここにいるという言葉は言わない方が良かったかもしれないとラティアスの反応を見て後悔したが、時間は戻ることはない。トレーナーになった瞬間から、ラティアス達と離れて旅をするということをや遠まわしに言ってしまったから……そうだと分かってしまったのだろうからこそ、こんなにも悲しそうな表情を浮かべているのだと……そう感じてしまった。

「私たちはラティアスが望むのなら傍にいて離れないし、ラティアスがまた私たちと一緒に居たいって望むのなら【あの時】のように来てほしいって思うの……」

『ガウウ!』

『ピチュ!』

『……キューン』

ラティアスは少し考えるような仕草をしてからこちらを見て力強く頷いてくれた。ラティアスが私たちに会えないのを寂しいと感じてしまったのなら【あの時】……ジム戦の後マサラタウンから帰る途中で再会した時のように、会いに来ればいい。傍にいたい

と思うのなら、あの後しばらくの間監視しているかのように離れることがなかったミュウツーたちや兄のポケモンたちのように傍にいてくれればいい。

ラティアスが寂しくないよ……私たちの傍にいらなくても大丈夫だと思えるまで私たちは拒絶したりはしないとそう決心した。

ラティアスはその言葉が嬉しいと感じ、絶対に離れないとばかりに私達を抱きしめる力を強める。先程までは手加減していたのだろうと抱きしめる強さからそう感じてしまった。でも苦しいとは感じない……ラティアスの方が苦しかったのだろうから。私達がラティアス達に迷惑をかけたという事実を償わなければとそう考え……いや、そうでないとしてもラティアスが……ラティアス達が悲しいと感じていたのなら私たちはすぐに助けていこうと心からそう考えているのだ。

このままラティアスが私たちのことを抱きしめ続けるのは良いけれど、それでももつと最適なことがあったと考えるしまった。気温が温かくてラティアスの体温によつて眠くなってきたために、ラティアスたちに向かって口を開く。

「ラティアス……このままお昼寝しちゃおっか？」

『キューン？』

『ガウウ……？』

『ピチュ…?』

「今日は良い天気だし、お昼寝に最適だと思うんだ！だから皆で一緒になって寝ちやおうよ」

『ガウウウ!!!』

『ピイツチュ!!!』

『……キューン!!!』

抱きしめられたまま、横になって眠れるように体勢を変える私たちは心地よい日差しの中、微睡んでいきやがて思考を止め眠っていった。

.....

「ふああ…ツ…ちよつ…何で目の前にいるのミュウツ…」

『ふん…あいつと間違えないのか…』

「あいつ?…ああ、ミュウツ姉さんのこと?」

『…………チツ』

「ほら舌打ちしない…というより、なんかすごいことになってるね」

『…………ああそうだな』

眠りから覚めて、目を開けるとそこにはミュウツウの顔が見えてしまった。思わず叫び声をあげそうになったが両手で口を塞いですぐに声を出さないようにする。周りにラティアス達が眠っているとすぐに思い出したからだ。ラティアスは私に抱きついていた力が緩まり、ラティアス達に抱き枕にされている状態から抜け出して起き上がるこ
とができた。

そして見えてきたのはラティアスとリザード、そしてピチューが眠っている姿…だけではなかった。私の周りにいる兄のポケモンたちと伝説達、そして見知らぬ野生かオキド研究所のポケモン達が眠っているという姿。しかも私を囲むように皆が丸くなって眠っているのだ。あ、でもダークライとセレビイたちがいないからもしかしたらマサラタウンに来ていなかっただのかなと考える。そして私は周りを見てその光景に驚き、皆も眠ったのかなと首を傾けた。

私と同じように目が覚めているミュウツウだけは不機嫌そうな表情で私からそっぽを向いている。ミュウツウ姉と間違えなかつたというのに何で不機嫌になるんだろう

かと疑問に思ったけれど、それを口に出してしまつたら皆を目覚めさせるような音量で叫ぶか、もつと不機嫌になるのではないかと考えて行動するのをやめる。

『キュウウン…』

『ガウ…ウ…』

『パイ…チュウウ…』

「ふふ…おやすみ皆…私ももう一回寝るよ。ミュウツ―は寝ないの?」

『…ヒナは俺と一緒に寝てもいいのか?』

「うん。皆で寝た方が楽しいよ?」

『…そうか、なら俺も寝よう』

「分かった…おやすみミュウツ―」

『…ああ、おやすみヒナ』

皆が眠っているのを見てるとまた眠気がくる。まだまだ日差しも温かいしもう一度眠りにつこうと思った。そしてフカフカな草が生えている地面に横たわり眠ろうとする。すると近くにいたラティアスとリザード、そしてピチューが私にまた抱きつこうとする。それを見て微笑み、皆が起きない音量でミュウツ―に向かつて一緒に寝よう

言った。ミュウツーは私の言葉を聞いて機嫌が良くなったのか私たちの近くにきて眠るために座り、そして横になった。それを見た私はもう一度笑みを浮かべてから目を閉じる。

。できることなら、皆が良い夢を見れるようにと……ただそれだけを願いながらも――

第二百十四話～妹は暴走するのを見る～

「あ、あっち見ろよ!!もしかしたらあるかもしれないぜ!!」

「ちよつとヒビキ!!そんなに走ったら危ないよ!!」

『ガウウ!』

『ピチュ!』

「良いだろ久々にトキワの森に来たんだからさ!!」

「こんにちはは妹のヒナです。最近暴れているポケモンが見かけないとのことからマサラタウンでの警戒が解かれ、トキワの森に遊びに行っても大丈夫だと言われました。：まあ結局情報を盗った犯人は捕まっていないらしいので不安な部分はまだあるんです

けどね……。でもトキワの森に言っても平気だと言われたため、私たちが歩いてきた時に偶然出会ったヒビキからトキワの森に遊びに行こうと誘われ、いろいろと酷いことになってます。

久々にトキワの森にいるポケモン達に会って、それでテンションが上がりヒビキがポケモンたちの群れがいる場所に突撃する形で走って行ってしまふ。でもコラツタ達は急に来た人間のヒビキに驚き、逃げ出そうとしてくるため私はすぐに彼を止めなければと急ぐ。ポケモンたちの群れに突撃してそれで攻撃されたらどうするつもりだと言いたいからだ。

ヒビキは……ではない三人組であるヒビキ達はポケモンたちのことやバッチのこと、トレーナーとして大切なことをすべて教わった。もちろん私たちも教わり、ポケモンたちと関わるにはどうすればいいのか兄のポケモンたちと一緒にいるうちに分かってきたのだ。

ヒビキはそれを教わったおかげでトキワの森と一緒に遊ぶポケモンがいたと言えるわけだけれど……まああの後私たちと争いいろいろと酷いことになったからもう会えるわけないと悲しい顔で言っていた。

もちろんトキワの森にいるポケモン達は兄のピジョットを通じてそれを知ってしまっているから【最初】は露骨に避けられ、遊べないと知ってしまったけれど、今は違

う。ヒビキだけじゃない…あの三人組はちゃんとその時のことを後悔し、自分たちがやれることを積極的にやって償おうとしているのだ。もちろん私もその一人であるけれど…。

でも、ここまでポケモン達と一緒に遊んだりできないのは確かに悲しいと思う。私もリザードたちや兄のポケモン達…そして伝説たちと一緒にいられず、遊べないとしたら嫌になるからだ。だからヒビキがテンションを上げて叫んだり見つけるべき目的の品物よりも先にポケモンたちに向かって走って行ったりするのには仕方がないと思えた。おそらく触れ合いたいのだろう…でもやり過ぎは以前と変わらないことになるから注意する。

「ポケモン達と遊びたいならちゃん目線を合わせてから頼み込む！ヒビキがやったのは攻撃だと思われる可能性だってあるんだから落ち着きなさい!!」

『ガウウ!!』

『ピイツチュ!』

「う…悪い。俺本当に久しぶりにポケモンと会えたから…すつげえテンションあがつて…」

「まあ気持ちにはわかるけど…でもそれじゃあいつもと変わらないよ?」

『ガウ…』

『ピチュ…』

「ああ……だよな…これじゃあいけないんだ。変わらなくちゃな…!」

「まあ、のんびりと変わっていけばいいと思うよ。とりあえず、もう暴走はしない!」

『ガウウ!』

『ピチュ!』

「おう。あいつらと決めた約束は守らないとな!!」

【あいつらとの約束】とは何なのか…私たちはそれを聞いてはいないけれど、おそらくもうポケモンに対して貶したり傷つけたりはしないということについての話なのかもしれないと思った。

そして先程の暴走してしまった行動も私の言葉で止めて、ちゃんと反省したのだ。

…以前のヒビキだったら私の言葉を嫌そうに聞き、文句を言ってきたはずだった。でももうちゃんと三人組でいた頃とは違って自身の行動や言動を変えようと頑張っているのだ。まるで、イツシユ地方にいた時に会ったあのシューティーのように…最初と最後に言動や性格、そして行動が全く違うシューティーのように、何もかもをポケモンたちのために変わっていかうと決心していたのだ。

だから私はそんなヒビキを見て少しだけ微笑み、口を開く。

「それで…？ニドラン達には会わないの？」

『ガウウ…？』

『ピチュウ…？』

「ああ、会わない。俺たちはそう決めてるから…ニドラン達と一緒にいてほしいって思えるぐらい強くなって…それでももう大丈夫だって思った時に会うんだ！」

「まあ、ヒビキがそう決めてるなら私は何も言わないよ…」

『ガウウウ』

『ピイツチュ』

「おう。ありがとうなヒナ！」

ヒビキは一緒に遊んでいたニドラン達と会うつもりはないと決心していた。

正直に言えばニドラン達はもうヒビキ達を避けようとはしていない。私たちに謝ったというのもあるけれど、ちゃんと反省して後悔し、もう二度とこんな問題を起こさないようにしているのを知っているからだ。でもニドラン達には会わずにしようと三人は決心しているらしいからこそ、ニドラン達もそのことを知り、いつかまた会える日を

願って寂しそうにしながらも避けているのだった。

そして今回、私達がトキワの森に来たのには理由があったりする。

「やっぱなかなか見つからないな…」

「きのみとかはオーキド研究所の方がたくさん実ってるからね…でもヒビキはそつちには行くつもりないんでしょ？」

『ガウウ』

『ピチュ』

「当たり前だろ！というか俺たちは前からオーキド研究所には行けなかったし…それにちゃんと自分自身で見つけたって思ってるんだ…モモンのみをな！」

「…そうね」

『ガウウウ！』

『ピイツチュ！』

ヒビキはモモンのみを探しに私たちと一緒にトキワの森を歩いている。遊ぶと言うよりはただ探し物を探すと言った方が良いけれど、でも散歩も結構楽しいからあまり気にしてない。

ヒビキが言うには、モモンのみはポケモンのお菓子用として作ろうと探しているらしい。モモンのみは解毒作用もあって風邪を引いた時などに使われたり、オレンのみと一緒にいれて栄養のあるご飯にしたりもできる。それ以外ではお菓子として人気があるのだ。そのまま食べても甘くておいしいし、お菓子としてちゃんと有効的に使い易いからこそ探している。そして見つけたモモンのみは私から経由して私の母へ渡され、お菓子となつて私たちの元へ……いや、ヒビキの元へ返ってくるのだ。

まあでもヒビキは母が作るお菓子を食べようとはしない。いや食べたいとは言つていたけれど、ヒビキは反省した分償おうと……モモンのみで作ったお菓子をポケモンたちに食べてもらいたいと思つているからこそ探していると言つた方が良くもしい。

私達もヒビキと同じ考えだし、兄のポケモンたちに渡したいという気持ちがあるからこそヒビキと協力して探しているのだ。

「……ん？なああつちつて探したか？」

「ううん探してないけど……でもあつちつてオニスズメやオニドリルが生息してるから行かない方がよいよ」

『ガウウウ』

『ピイツチュ…』

「ああそつか…じゃあ他のとこ探さないとな！」

「うん。でもこんなに広いんだから…絶対に見つかるよ！」

『ガウウウ！』

『ピツチュ！』

トキワの森はピジョット達のテリトリーとオニドリル達のテリトリーがある。それ以外ではコラツタ達などの人懐こい普通のポケモンたちが棲んでいるため、探していかなければならないのはピジョット達が棲む場所とコラツタ達がいる場所だろう。今はコラツタ達がいる場所に来ている。でもやはりきのみは見つからず、ピジョット達の場所に行こうかと話し合う。

「…本当にありがとうなヒナ」

「…え…いきなりどうしたの？」

『ガウウウ？』

『ピチュ？』

「いや、何かお前にいろいろと迷惑かけてることに気づいてさ…」

「今更過ぎるよ。それに私たちはポケモンたちのためにやれることをやってるだけなんだから…ヒビキも同じようにポケモンたちのためにモモンのみを探してる。だから迷惑なんてかけてないよ?」

「…おう。でもまあなんとというか…ありがとう」

「はいはい。どういたしまして!」

『ガウ!』

『ピチュ!』

「…よし、じゃあモモンのみ探しさつきと終わらせるか!」

「ってちよつと待ちなさいそつちはオニスズメのいるところだから!!!?」

『ガウウウウ!!!?』

『ピツチュウ!!!?』

「おつと悪い悪い!!」

「ほら気をつけなさい!!」

『ガウウ!!』

『ピツチュウ!!』

——結局、その後どこに行っても見つからず、兄のピジヨットと会って森の奥にあるきのみがある場所まで案内してくれた。ちなみに兄のピジヨットだと聞いてヒビキが興奮し、そして少しだけ以前私と戦った時のことで罪悪感から居心地を悪そうにしていた。でもピジヨットはオーキド研究所に良く来るし、ヒビキの態度の変化についても知っているから大丈夫だ。

だからピジヨットが優しくヒビキに接したことに彼は驚き、笑顔でありがとうと礼を言う。

そして、あんなに頑張つて探していたのにピジヨットに教えてもらったらあつけなくきのみが見つかったことに対して笑いあつたのは仕方ないことだと思う。

第二百十五話く兄はコルニに教えるく

こんにちは兄のサトシです。現在コルニとバトルをしている最中です。

バトルについては連勝中に俺に負けてしまったから勝つためにやろうと言うのが主であり…そしてもっともつと強くなるためにバトルをしていこうということのようだった。まあコルニはバトルをたくさんして強くなるという考えを持っているらしいからこそ、100連勝という修行方法も考えたようだったし、ちゃんと強くなつてると実感しているようだったから大丈夫だろうと考えていた。

「ルカリオ！攻めて攻めて…攻めまくるよ!!」

『バウウ!』

「攻めるだけじゃ意味ないぜ！」

『ケロオ！』

コルニはルカリオで勝負に挑み、俺はケロマツでバトルをする。ケロマツはコルニとのバトルにやる気が十分あるようで、コルニのルカリオも同じような表情を浮かべていた。ルカリオが勝つためにと猛攻するためにケロマツが修行で身につけた素早さを見せながら躲していく。その様子を見たルカリオが悔しそうに睨みながらまた攻撃してくる。

俺たちはそれぞれ好戦的に見つめてから口を開いて指示をする。

「ルカリオ！はどうだん!!」

『バウウ!!』

「ケロマツ、こっちはみずのはどう!!」

『ケロケロオ!!』

ルカリオのはどうだんとケロマツのみずのはどうが衝突して爆発する。そしてその爆発を利用して考えたのかルカリオが突然突進し、ケロマツに近づいてボンラッ

シユを発動させた。ケロマツは急接近してきたルカリオに驚いているが、スピードは速いためすぐにその攻撃を躲して距離をとる。

コルニは惜しいと叫んでおり、ルカリオは先ほどと同じように悔しそうな表情でこちらを見つめ……いや、睨みつけていた。でもこのままバトルをしてもいいけれどやはり今のルカリオの行動が気になる……そのため俺はバトルを続行する前に聞きたいことがあったから一度中断してから、コルニに向かって話しかける。

「なあコルニ！さっきのポーンラツシユってお前が指示したのか？」

「え？指示してないよ！ルカリオがやりたいって思ったことだからね！」

『バウウ！』

「ふーん……そうか」

『ケロ？』

「どうかしたのサトシ？…何か悪い所でもあった？」

『バウウ？』

「いや別に何でもない。そういう指示は始めて見たから驚いただけだよ」

『ケロケロ！』

「そっか！私とルカリオはずっと小さいころから一緒にいたから、あまり気にしてな

かったけど他のトレーナーはそういうのいないだね！」
『バウウー！』

ルカリオはコルニの指示以外にも攻撃をする。それは最初に出会った時に見たハルカとの戦いでも出てきたことだ。もちろん俺とピカチュウで戦った時も同じようにルカリオが独断で攻撃をするのを見た。これはコルニとルカリオの独特なバトルスタイルなのだ……そう思えたのだ。

……でもまあそれはいろんな考えを持つトレーナーがいるからこそあり得るのかと納得した。様々なトレーナーが行うバトルスタイルに良い悪いは基本的にないたため、コルニのやっていることもバトルで戦うトレーナーの意表を突く戦法かとそう思えたのだ。

それに、俺のピカチュウたちも大体は指示を聞いて攻撃してくれるが、俺がいない場合はどうやってバトルするのかちやんと考えてやっていることが多い。ケロマツと俺がピカチュウに挑んだり、マサラタウンでの疑似試合をしてもらったりと一般的な修行方法とはかけ離れているからだ。

だからこそ、コルニとルカリオのバトルには珍しいという気持ちはあれど、これはやらない方が良いんじゃないかとは思えない光景だった。少し気になるところはあるけれど……それはまあコルニとルカリオの独特なバトルスタイルなのだと考えて無理やり

納得させる。

……それに小さいころから一緒なのだからバトルにも慣れているからこそルカリオも自由に動くだろうと予想しつつも、試合を再開する。

「ルカリオ！グロウパンチ！」

『バウウウ！』

「ケロマツ、あわ&みずのはどう」

『ケロケロ！』

「え!?!嘘っ!?!」

『バウウ…!?!』

ルカリオがケロマツに向かってグロウパンチを仕掛けてくるため、俺はケロマツに冷静にあわとみずのはどうの合体技を指示した。あわが先に飛ばされ、避けた先にみずのはどうで攻撃してくるといいう技。これは前にピカチュウで試合したときに生み出した技だ。

ケロマツの見たことがない技を使ったことに驚いたコルニとルカリオはとつさに避

けることができずに固まり、そのまま攻撃を受けてしまう。でもすぐに立ち上がり、もう一度やろうと言うルカリオのやる気とコルニの言葉に俺たちは笑みを浮かべて頷こうとした…。

「ほら！バトルはこれぐらいにして…ご飯にしますよ！」

「ルカリオとケロマツの試合凄かったよ！でもそろそろお昼だからね！」

『デネデネ！』

『ピイカツチュ！』

「やったーお昼だあ！お腹空いたかも！」

「マカロンもちゃんと作ったから食べてね！」

「……あちやー…じゃあサトシ、ご飯食べたらもう一戦しましょう！」

『バウウ』

「ああ、望むところだ！」

『ケロケロ!!』

.....

昼はいつも通りシトロンが作ってくれた昼食と、セレナが作ったマカロンを食べる。ピカチュウたちはそれぞれ俺たちより少しだけ遠くでご飯を食べる。

デザート付きのご飯というのはカントー地方からイツシユ地方を旅してきてあまりなかったことだ。まあたまに気が向いて作ったというイツシユ地方と一緒に旅したルカリオのケーキを食べたり、クツキーを食べたりしたことはあったけれど…あれは妹たちやアイリスが食べたいと言ったから作ったような気がすると思いついた。

コルニのルカリオを見ているとあのイツシユ地方と一緒に旅してきたルカリオを懐かしいと感じてしまうからこうして思い出してしまったんだろうと考えた。

まあ今ルカリオはアーロンさんと旅してきているらしいし、いつかはマサラタウンに帰ってくるだろうから…その時にルカリオがメガシンカをするということや、コルニについて話してみようかなと思った。

———そんなことを懐かしみながら考えていると、コルニが俺に向かって話しかけてきた。

「…：そーういえばサトシってあの技とか自分で作り上げたの？」

「あの技？」

「ケロマツのあわとみずのはどうの合わせ技！」

「ああ、あれはケロマツが先に編み出した技なんだ。まあケロマツ自身がやりやすいように俺たちと一緒に話しあってから改良したからあんな合わせ技になっただけだよ……」

「そういえばサトシってピカチュウやヤヤコマにもそういった合体技を覚えさせていましたよね？ カントー地方を旅している時に学んだんですか？ それともほかの地方で——」

「ユリーカも聞きたい！ 前に見せてくれたピカチュウの技もデデンネが覚えられるなら覚えてほしいって思うもん！」

「——ユリーカ!!」

「ああそっか！ サトシって私と出会った時から技と技を合わせて使うことが多かったから通常のトレーナーはやらないのよね……」

「そうなの？ じゃあ他のトレーナーはそういう特殊な攻撃方法はやらないのね……」

「ええ、普通ならありませんよ……サトシだからこそできたことなのかもしれませんね」

「いやそんなに凄い技でもねえから」

昼前にバトルした時のあのケロマツの合体技がコルニにとつてとても珍しく感じら

れたらしい。

そのことにシトロンやユリーカが同意するかのようには頷いていて、ハルカはホウエン地方を旅していた時に見たことを思い出して言う。そしてセレナはというと、新米トレーナーとして旅を始めてからすぐに俺たちと一緒にいるせいか合体技などを見たとしてもそんなに珍しいとは思っていないようだった。

でもあの技は皆がちゃんと考えればできることだと思う。……というよりも、ルカリオが独自に動いて攻撃してきたように……俺たちも俺たちで攻撃技を考えてバトルするということやり方を編み出してきただけなのだ。

常識をぶっ壊すことだということが必要になると俺はそう感じている。……旅を始めてからポケモントレーナーとして、基本的な事よりも予想外なことを考えた方が良く俺はそう思っただけ行動してきたのだ。

ハルカも俺を見て学び、そういう合体技を作り上げていった。そのおかげでホウエン地方の舞姫と表では呼ばれているが、戦闘狂としても恐れられながら呼ばれていたりするらしい。……まあ俺も似たような通り名を持っているから仕方ないと諦めているが。

だから特に珍しいことじゃないということコルニ達に説明する。

コルニ達は興味深そうに話を聞いて、なるほどと頷いてくれた。そして自分たちでそういう技を作れるのか試していきたいと話していたが……まあ何とかなるだろうと無

理やり納得し、俺たちはそれぞれできる合体技を教えようと意気込んだ。

第二百十六話く兄たちはセキタイタウンに着くく

「とうとう着いた…セキタイタウン！」

『バウウ！』

こんにちはは兄のサトシです。俺たちはセキタイタウンに行く間にコルニやハルカと何度かバトルをしたり、セレナやシトロン、ユリーカに合体技について話を聞かれました。

コルニについては100連勝の件もあり、俺に負けたくないと言うことでハルカよりも倍以上戦っていて、そして何度も俺とのバトルで負けてしまっている。でも何度も

戦っていたからか：かなりルカリオが強くなってきていると感じている。ルカリオ自身も強くなりたいと思っっているのだろうと俺たちはそう考えて望むままにバトルを続けていった。

でもそのおかげでコルニが指示した技の後すぐに自分の技を出すようになってきているため、バトルスタイルが通常のトレーナーとは違った戦い方になってきている。今までだったらある程度はコルニの指示しか聞かずに、たまに必要なら放つぐらいだったのだが、俺とのバトルで勝ちたいと言う意欲が増していったのか攻撃できるならルカリオ自身が考えて行動するようになった。

だからこそ、ある意味トレーナーと野生の両方で戦わなければいけない感覚だ。まあ、負けるつもりはないため俺自身が連勝しているような状況なんだけれども。

「へえ……ここがセキタイタウンか！」

『ピイカツチュー！』

「ようやくだよルカリオ！サトシとのバトルでは負けっぱなしだけど……それでも強くなってるって私もルカリオも感じてる！分かってる！メガシンカもきつとできるはず！……ここまで来たんだから、絶対にメガシンカできるよルカリオ！それでもだめならサ

トシに勝てるまでバトルしよう！」

『バウウウ！』

「ちよつとコルニ！どこへ行くつもり!？」

「コルニ！メガストーンの居場所分かるの!!？」

「待つて私たちも一緒に行くよ！」

『デネデネ！』

「ちよつと！…待つてください!!」

コルニとルカリオが先に走り出していったため、俺たちもコルニたちの後を追うために走り出す。

シトロンは走るのが遅いからたまに後ろを向いてちゃんとついて来ているか確認しながらになるけれども…それでもコルニとルカリオはセキタイタウンの町の中心まで走って行った。メガシンカがようやく手に入ると興奮して…前しか見つめずその瞳は輝いて見えた。

コルニのその表情は、ようやくメガシンカできるんだという期待と、俺に勝てなかったという不安。でも、ルカリオはメガシンカを絶対に見せると意気込んでいるから後はコルニの気持ち次第なのではないかと…その時は考えていた。

.....

「メガストーンの情報はないか…」

『ピイカ…』

「こんなに探しても情報はないっておかしいかも…」

「メガストーンについて聞いても知らないって町中の人に言われたのはちょっと変よね
…」

「町中を探しましたからね…もうここにはないと考えた方が良くかもしれません」

「石はたくさんあるのに…」

『デネデネ…』

「町中がない…うんうん！これも修行だよルカリオ！お爺ちゃんが言ってたルカリオナイトを探すのも修行の1つだよ！」

『バウウ！』

「コルニとルカリオはポジティブだな…」

『ピッカツチュ…』

「これもメガシンカできる者しかないポジティブさ…かも？」

「ハルカ…それちよつと違うような気がする…」

「まあですが、悲観しているよりは良い気がします…とにかくもう一度探してみましよう」

「あ、じゃあ私、あのストーンショップに行ってくる！」

『デネデネ！』

セキタイタウンに着いた俺たちが見たのは、様々な石を売買している店が並んでいる光景だ。進化の石も売っているらしく、ピカチュウがかみなりの石に近づかないようにしていた。そしてコルニとルカリオはすぐさまルカリオナイトを探そうとしていた。セキタイタウンに行けば分かると聞いていたらしく、具体的には何処にあるのかは知らないらしい。だからこそ町中を探す勢いでルカリオナイトを聞きに行く。

コルニ達を手伝うために俺たちも一緒に探し回るが、店の人や通行人…様々な人間たちにメガストーンやルカリオナイトについて聞いていく。でも町中に聞いていったというのに全然メガストーンの情報が得られない。

むしろそれは何なのか逆に聞かれてしまうぐらいだ。これはおかしいと…もしかし

てセキタイタウンではないかもしれないと俺たちが疑問に思っていた時だった。

「そこのお嬢さん達！セキタイタウンへようこそ！」

「…はい？」

『ピイカ？』

ある老人がこちらに近づいて話しかけてきたので少し警戒する。だがマキタという老人はカメラを持って立っていて、写真館で働いているらしく、一枚の写真はどうかと言ってきた。俺たちはお互いに顔を見合わせてからいいかもしれないと頷いた。

せつかく皆で旅していることだし、ハルカもパフォーマンス大会が見終わったらすぐにホウエン地方へ帰ると言っていたため、このメンバーでの旅はほとんどないといつてもいいかもしれない。だからこそ記念写真として思い出になると俺たちは一緒に撮ることにした。

コルニも祖父にセキタイタウンに来たという証拠として見せられると言い、絶対に撮ろうと笑顔で俺たちに言っていた。

写真を撮った後、現像するためにマキタさんの後ろにいた若い人が写真館まで走って行った。そしてカメラを確認しているマキタさんに向かってメガストーンやルカリオ

ナイトの話を書く。するとマキタさんはメガストーンやルカリオナイトについては首を傾けて知らないと言ってきたが、特別な石がある洞窟の噂を聞いたことがあると言ってくれた。それは進化の石がたくさんある洞窟の奥に隠されているもう一つの洞窟に眠っているという。でもその洞窟は資格のないものが行くと恐ろしいことが待っていると言われているらしい。まあ何かが襲ってきたとしても俺たちは止まるつもりもないし、コルニ達だってそれを聞いて行くのをやめるとは考えていない。逆に、そのマキタさんからの話を聞いて恐れるどころか絶対にルカリオナイトだとコルニとルカリオが喜び、走って行こうとしたため俺たちは止める。まずは写真を貰ってからだと皆がそう思っているからだ。焦るなと言うとコルニとルカリオは少しだけ落ち込み、でもわくわくと期待しているような表情で写真が来るのを待つ。

——そしてプリントされて俺たちに渡された写真を見て苦笑してしまった。

「あいつ…」

『ピカピ?』

「いや、なんでもないよピカチュウ…」

『ピイカツチュ?』

皆が喜び、宝物にしたり早く祖父に見せたいと言ったりして盛り上がっている中、俺は写真をしまいセレナを見た。写真に写っていたのは俺に近づき、シトロンとは微妙に隙間を作って俺との距離を縮ませている写真。

偶然かと思っただけけれども、いまだに写真をじつと眺めているセレナを見るとその行動は明らかに故意だと分かった。セレナは頬を赤らめて機嫌良さそうに鼻歌を歌ってその写真を見ていたのだ。

その表情を見てまた俺は苦笑し、その意図を知ったためにため息をつく。まあ何も指摘しなければ大丈夫かと考えて、早く行こうというコルニ達に近づきいまだ俺たちに気づかずずっと写真を見ているセレナにハルカが話しかけて行動を開始した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「見つけた！……ここがその洞窟ね！」

『バウウ！』

「結構あつけなく見つけたな…」

『ピイカツチュ』

「普通に入り口があつたつて感じよね…本当にここなのかな？」

「でも、その奥に行つても何もなかったし…ここしかありえないかも？」

「とにかく行つてみましょう！そうすれば分かるはずです！」

「よし行こう行こう!!」

『デネデネ!』

山を登り、道を歩く。途中、進化の石の採掘場らしき場所を発見し、シトロロンやハルカが面白そうだと言いなながら興味津々だとはつきり分かるぐらい笑みを浮かべてその光景を見つめていた。

確かに進化の石がどうやって採掘されていくのか興味があるけれど、コルニ達の探しているのはルカリオナイトなのだからそういうのは後にしようと話した。そしてルカリオナイトは進化の石がとれる洞窟のさらに奥だと言っていたため、俺たちはもつと奥を目指して進む。すると分かれ道のような場所が見つかり、右は山へと続く道で…左が洞窟の奥へと続く道だと分かった。一応念のために右から歩いていき、何もないと分かつて引き返してからこちらに来た。

「コルニ達は絶対にこの先にルカリオナイトがあるはずだと叫んでいて、俺たちは笑みを浮かべながらも先に歩いていくコルニ達を追って進んでいった。」

———そうして見つけた洞窟の奥には、何やら輝いている石が置いており、それがルカリオナイトなのだ。コルニが叫んだ。その瞬間、大きな炎がこちらに向かって襲いかかる。そのためとつきに俺とコルニが指示を出してその炎を防いだ。

「っピカチュウー0まんボルト！」

『ピツカア！』

「ルカリオ！はどうだん!!」

『バウウ！』

『バツシャアアアアア!!!』

「バシャーモ！こんなところで見られるなんて嬉しいかも！」

「え…で、でもハルカ…このバシャーモなんだか怒ってるみたいよ？」

「もしかしてこのバシャーモが資格がなければ恐ろしい目に遭うと噂されている元凶でしようか？」

「すごい強そうだねデデンネ！」

『デネ！』

「…それで？これからどうするコルニ？」

『ピツカ？』

「決まってるでしょ！私たちの強くなった力をバシャーモに見てもらおう！そして倒す！」

『バウウウ！』

「うう…戦ってみたいけど…仕方ないかも」

コルニ達は笑顔でバシャーモと向き合い、俺たちはその様子を見て後ろに一步下がった。これはコルニ達の試練のようなものであり、俺たちが手を出してはいけないと分かっていたからだ。…まあ、ハルカは自分のバシャーモとこちらに襲いかかってきたバシャーモで戦ってみたいと思っていたらしいが、それはある意味コルニの邪魔をしていると分かっているらしく、残念そうな表情で見つめていた。

——そしてバシャーモとルカリオのバトルが始まったのだけれども、俺たちと何
度もバトルしてある意味修行のようなことをしているコルニ達の方が圧倒的に強かつ
たために勝負はすぐに終わってしまったみたいだった。…まあ仕方ないよな。

第二百十七話　妹は学校へ行く?

「へ?学校?」

『ガウウ?』

『ピチュ?』

「そうよ。学校と自宅…ヒナちゃんはどっちを選ぶのか決めてほしいの」

　　こんにちは妹のヒナです。母からなにやら話があると云われ、今日は外に出ず家にいますが…学校とはどういうことなんだろうと思った。

　　そういうば学校つてこの世界にあるんだっけ…ああいや、一応あつたのを思い出したけれど、でもそれでも兄達が学校に通つていない時点であまり勉強などはないと思つていた。イツシユ地方で幼稚園を見たことはあつたけれど、私や兄は幼稚園に通つたことはないし…カント―地方ではないのかなと首を傾けていたこともある。

一応母から一般的な算数や文字の読み方書き方：あとこの世界での常識である基本的なことについては教わっていたけれど、私ができると分かったらすぐに母は勉強を終わらせていた。：というかその勉強を始めた時点でまだ兄が旅した直後だったからかなり早い段階で習っていたのだと思ひ出す。でもそのおかげでこの世界の文字が読めるようになったし、書けるようになったのだからある意味良かったと思うべきだ。でも、どうやら学ぶことはそれ以外にもあるらしい……。

学校と自宅を選べと母が言っていたけれど、どういふことなんだろうと疑問に思つた。

そのため、私は母に首を傾けながらも聞いてみた。

「学校つてもしかして：勉強するの？」

「ええそうよ。サトシも同じように選んでから決めたわ」

「そつか：お兄ちゃんはどっちを選んだの？というより勉強ちゃんとしてたの？」

「ええしてたわよ。サトシの場合は自宅学習だったわね：一年でやるべきことは全部終わらせてたの」

「一年？…えつと、一般的にはどのくらい時間がかかるの？」

「そうね。短くて1年、長くても15歳までかしら？平均では10歳までにはちゃんと

終わらせてるわ」

「……………おうふ」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

「どうかしたのヒナ?」

「…いやあの…もつと詳しく教えてもらってもいい?」

「ええいいわよ。まず勉強するのはね——」

話を詳しく聞いて見るとかなり凄いいことを知れた。つまり、前世の知識から言うと、小学生から高校生までの勉強をすべて学ぶためにまず最初に学校か自宅学習のどちらかで教わるということだ。

学校ではちゃんと先生がついて話をしていき、一般的には10歳になる年齢まで教えていく。10歳になったらカント―地方の教育機関から出されたテストを受けてもらい、それに合格したら勉強から卒業できる。

自宅学習の子たちは家に届いた教科書などを使って自分で勉強していき、もう大丈夫だと分かれば、勉強を終わらせた時点で教育機関から渡されるテストを受けられる。もちろんそれは自分で申請しなければいけないのだが、そのテストは学校も自宅学習も同

じ内容である。ただ学校と自宅学習で違うのは勉強ができるのか不安で皆で一緒にやりたいという子か、兄のように勉強に自信があり、早々に終わらせられることができる優れた子たちがいるということか…まあ不安かどうかによると思う。あと10歳という年齢に縛られることなくすぐにテストを受けられるかどうかだろう…。

しかもその勉強はかなり大変らしく、勉強が嫌いな子や頭が悪い子は知識以外を伸ばしていき、ポケモンと関わる仕事を就いて行くようにする…まあぶっちゃけて言うとなイリスさんのように学校よりも自然やポケモンたちと一緒に生きていくことが好きの子たちがそうなる。そして勉強ができる子は学んでいき、そこから自分の進みたい夢へと歩いてもらう。例えば、ポケモンマスターになりたいと言った兄やポケモンドクターになりたいと言ったタケシさんのようにだ。

とりあえず勉強ができる子の方がやるべき仕事はたくさんあると言った方が良くもしれない。そしてこの学習によってさまざまな仕事を知ることができ、早々に自分の夢を追いかけて旅に出る子がたくさんいる。そんな子たちのためにオーキド博士たちが初心者用のポケモンたちを渡すのだと言う。

ちなみにそれらは様々な地方で定められた教育機関なるものがあるらしく、5歳を過ぎた子全員に通知が行き、6歳から学校か自宅学習かのどちらかを選ぶ。私の場合は5歳の時点でイツシユ地方を旅していたためにそういうことはあまり知らず、母から聞い

てようやく知ったと言えるだろう。

そんな話を母から聞いていて少し頭がパンクしそうになったが、とにかく学校か自宅学習かどちらかを選ばないといけないのは分かった。私は兄のように優れているわけじゃないから、学校にしようかと迷ってしまった。前世の記憶があるとはいえ、勉強をしていなかったこの6年間のブランクやぼんやりと霞んでしまった前世の記憶で小学校から高校までの勉強を一気に4年で終わらせるのは…まあ予習復習基礎をちゃんとやればできそうな気がするけれど、でもやるならちゃんと先生と学んでいきたいなと思っただ。

でもそれにはある疑問を解決させなければならぬと考えてにこやかに笑う母に向かって口を開いた。

「…学校ってリザードたちも連れていける?」

『ガウウ?』

『ピチュ?』

「…いいえ、学校ではほとんど寮生活になるからリザードちゃん達は連れていけないのよ」

「…そう…なんだ…」

『ガウウウ…』

『ピチュウ…』

「ええ…ヒナちゃんは学校と自宅学習のどっちにするの？」

『…ガウウ？』

『ピチュ…？』

「もちろん自学学習で！」

『ガウウウ！』

『ピチュウ！』

「ふふふ…そうね。そう答えが来ると思ってママもう申請しちゃったわ！」

『バリー！』

「早ツ!!」

『ガウ!?!』

『ピチュ!?!』

学校ではリザードたちを連れていけない…その母の言葉に迷わず自宅学習にしよう
と考える。そう思つて選択を迫つた母に向かつて即答するようにはつきりと叫んで
いた。

リザードやピチュー達は学校で会えないと分かると、私が言う前は不安そうだった

が、その後答えた言葉に喜んでいた。

だからそれで良かったんだと思う…というか、リザードとピチューと別れるだなんてありえないことだ。迷っている時間さえも…学校を選ぼうかと母から話を聞く前の時間がいらぬほど、迷わなかった。もちろんリザードとピチューが一緒に来てくれると言うのなら私は迷わずに学校を選んだ事だろう。

…いや待った。もしもここで学校を選んでしまった場合伝説たちが暴走してこちらに出来る可能性があつたのをふと思ひ出した。伝説たちが学校に来て、私の前で遊ぼうと言つたり抱きついたり、喧嘩しながらも騒がしい状況のまま生徒たちに目撃されて私たちに近づいてきた場合を想像してこれで良かったんだと心から安堵した。

そしてそんな私に気づかない母は自宅と答えた言葉に満足そうに笑みを浮かべており、もう教育機関に申請したと言つてダンボールにぎつしり詰まっている教科書をバリエードに部屋に運んでもらつてから見せてくれた。

「うわ…何か見たことあるようなないようなものがたくさんある…」

「あらあら…もしかしたらサトシの教科書を見たからかもしれないわね」

「そ、そうかも…」

『ガウウ?』

『ピチュピチュ?!?!…ピチュ…ピイツチュウウ……』

「ピチュー大丈夫？文字で酔っちゃった？」

「あらあら大変ね！バリちゃん、キーのみもって来て頂戴！」

『バリバリイ!!』

『ピイツチュ…!』

『ガウウ…』

ダンボールの中を開けてみると教科書がたくさん入っていて、その中から適当に一つの本を取り出す。数学と書かれている教科書を見たことあるような数式がずらりと並んでいて…この世界の教育はだいぶ凄まじいなと引き攣った笑みを浮かべてしまった。しかもこれを約4年で終わらせるスパルタっぷりも引くレベルだ…まあ10歳までというの是一般レベルなのだから大丈夫かと考えつつページをめくる。

そしてその本の数式を見たリザードが『何これ?』と首を傾けており、ピチューは数字を見てちゃんと悩んで考え、そして目を回していた。その様子を見た私がピチューを支え、母が大変だと近くにいたバリヤードを呼ぶ、そしてバリヤードはキーのみをピチューに食べさせ、ピチューはお礼を言った。

「うう…これはしばらく遊ばなさそう…」

『ガウウ!?!』

『ピチュ!?!』

「いやこれ全部終わらせないと駄目だよ…だからごめんねリザードにピチュー」

『ガウ…』

『ピチュ…』

「あ、そうだわヒナちゃん。サトシから伝言があつてね？」

「へ? お兄ちゃんから伝言?」

「ええ。ほら前に電話きた時があつたじゃない? その時に勉強の話になったのよ。それでヒナちゃんが自宅学習を選んだ時に伝言で…【期限は半年。できれば半年以下。それ以外はマサラタウンに帰ったらスパルタで教えてやる。目指せ新記録!】って言ったわよ」

「それある意味死刑宣告!!!」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

『バリバリ!』

兄の伝言に私は悲鳴を上げてしまった。期限は半年ということだから、おそらくカロス地方から帰ってくる間に終わらせておけと言うことなのだろう…。…というか半年

でカロス地方の旅を終わらせる気なのか兄は……。

もしも兄の伝言通り半年以内に終わらせることができなかつた場合は兄が寒氣のする笑顔でいろいろと教えていくのだろうか……それもスパルタで……。それは絶対に嫌だと断言したい。だからこそ半年以内に終わらせなければと決心した。

ある意味、この決心は三人組と勝負する時と似ている覚悟だと後々思えたけれど、今の私にとっては兄の言葉のせいで焦って教科書を開き、勉強する以外に考えることはなかつた。

それと勉強している間に母が懐かしそうに兄が自宅学習を選んでいた時の話をしてくれたけれど、兄は教科書を一度だけ読んでから後は勉強はしていなかつたらしい。一年経つても何もしないということからオーキド博士と母が強制的にテストを行わせた結果、合格となつたから一年で終わらせたという事実になつてしまつたみたいだつた。私もそれぐらいのレベルにならないといけないのかなと不安になるべきか、それとも普通の人間なんだと安心するべきか迷つてしまい、引き攣つた笑みを浮かべてしまつたのだつた。

第二百十八話～リザードたちは応援する～

ヒナが必死に教科書を開き、勉強をしているということにリザードたちは人間も大変なのだと考えていた。

ヒナの邪魔をしない方が良いと考えたりザードたちはヒナの母やバリエードにオーキド研究所に行くと言え。その言葉が伝わったらしく、ちゃんと気をつけて帰るのよ？と言ってくれた。

外に出たりザードとピチューは人に見つからないようにこっそりと移動する。前にリザードが色違いだからという理由でマサラタウンの外から来た人間に狙われたことがあるからだ。その時はちゃんとヒナの指示のもと動いていたために対処することができたが、今日はその肝心のヒナがいない。

だからこそ、何か事件を起こして勉強しているヒナを悲しませては駄目だと考え、警

戒しながらも移動する。その移動方法はまるで忍者のように周りの景色に溶け込みながら進み、警戒していたおかげで問題が起きずに済んでいた。

これはリザードがまだヒトカゲだった頃にヒナと共に修行した結果身についた技術であり、ピチューもヒナやリザードに学んでいったためにできるようになったこともある。

そのおかげでスピードは一般的なリザードやピチューよりも圧倒的に上になったのだが、肝心のリザードやピチューはそのことに気づいていない。

『ピツチュウ！』

『ガウウ…』

『ピチュ？』

『ガウウ！』

『…ピチュ！』

リザードがオーキド研究所が見えたことによつて先に行こうとするピチューにため息をつきながらも止める。

ピチューは何で止められたのだろうかと首を傾けていたが、リザードが騒いだり一直

線にオーキド研究所まで走って行けば人に見つかるだろうということや、まだまだオーキド研究所まで遠いということを話すとちゃんとして理解して頷いた。それを見たりザードは苦笑しながらもピチューと一緒に歩いて行った。

ヒナがない今は、リザードがピチューの姉貴分であり、良く騒ぐ弟分を守る必要があると考えているからだ。だからこそピチューが騒いだりどこかへ行こうとしたらすぐに止め、優しく頭を撫でる。

それはヒナ達から見れば姉弟のようにも感じられる微笑ましい光景だったことだと言えらるだろう。

.....

『ダネ…!?!』

『ガウウ!』

『ピイツチュ!』

『ダネダネ…ダネフシ?』

『ガウウ…?』

『ピチュ…?』

『ダネエ』

『ガウ!』

『ピツチュ!』

オーキド研究所に行くと、真つ先に会うことができたのはヒナの兄であるサトシの手持ちのフシギダネだった。フシギダネは驚いたような表情でリザードたちを見て、それからヒナはどうしたんだと話しかける。

リザードたちはヒナが勉強していることや、邪魔したらいけないということを話し、こつちに遊びに来たということを伝えた。するとフシギダネは苦笑しながらも、迷いの森でミュウ達のへんしんバトルをやつてるから見に行つたらどうだ?と伝えた。リザードとピチュューはへんしんバトルとは何か聞いたような表情を浮かべていたが、フシギダネの見に行けばわかるという言葉に頷き、すぐに迷いの森に向かつて走り出した。

———そして見えてきたのはミュウ達がそれぞれミュウツーになって本物のミュウツーをからかっている場面だった。ミュウツー姉さんと呼び親しむもう一体は遠くの方で見つめており、若干呆れた表情をしている。そしてミュウツー姉がリザード

たちに気づき、近づいてきた。

『ガウウ…?』

『ピチュ…?』

『ああこれはバトルではありませんよ…ただの馬鹿共の集いです』

『ガウウ…』

『ピイツチュ…』

ミュウツー姉がリザードたちの質問に対し、ミュウ達ともう一体のミュウツーを冷ややかな目で見てからため息をつけて答えた。そしてミュウツーが詳しく話してくれたのは、先程まではそれぞれのミュウ達がサトシのポケモンたちにとつての弱点でもあるポケモンに変身して、バトルしていくという修行が続いていたということだった。

でももう一体のミュウツーが自分もやってみたいとのことから、ミュウツーの弱点となるポケモンにミュウ達に変身するのかと思いきや…いきなりミュウツーになつて笑いながら挑発し始めたのだ。その挑発に残念ながらミュウツーはのつてしまい、あのよ

うなバトルになったとのことらしい。

ちなみにミュウツーたちが挑発したり変身バトルをし始めたことよって、もうこの修行ができないのだと早々に知ったサトシのポケモンたちはミュウ達から離れ、それぞれ疑似バトルをし始めていた。それはつまり、ミュウツーたちを止めようとはしないという意志であり、いつかフシギダネが止めに来るだろうと考えての行動だったようだ。

『貴様ら…!』

『ミュウツフフフフ!!!』

『…ミュウツフフフフ!!!』

『俺の声で変な笑い方をするな!!!変顔するな!!』

『馬鹿共が…リザードたちはここには危険ですから離れた方が良いでしょう』

『ガウウ…ガウ』

『ピイツチュ…』

『ええ、何かあつては危険ですから…とりあえず悪化するようであれば止めます…息の根を』

『ガウウ!?!』

『ピチュ!?!』

『ほら、行きなさい。怪我をしてはヒナに心配されますよ』

『ガウウウ……』

『ピイツチュ……』

ミュウツー姉がミュウ達のバトルを見てから発する凄まじい冷気を背負っているような雰囲気になりザードたちは無意識に一步後ろに下がる。だが、ミュウツーはリザードたちを見てからすぐにその冷たい雰囲気を消し、家族に接しているかのような優しい笑みを浮かべながらも離れた方が良いと言う。

息の根を止めるといったその言葉にはリザードたちは驚いたが、このままここにいても何もいいことはないだろうと考えたりザードが困惑したままのピチュを連れて離れていった。

ちなみにミュウツー姉はリザードたちが見えなくなるまで小さく微笑み、見送っていたのだった。

.....

…そしてやって来たのは花畑。ここが何もなかった以前からベイリーフがヒナと一緒に植えていったところだ。そこは様々な地方で咲いていたはずの花々が植えられており、いろんな色で咲いてとても綺麗だった。

でもリザードやピチューはその花畑に入ろうとはしない。ヒナがいる時でないという気にはなれないし、花を傷つけたとしたらベイリーフが怒り、ヒナに説教されるからだ。一度それを味わってからはもう二度と花畑を荒らすような行方も、遊びながら入ろうともしなかった。リザードは尻尾に炎が灯してあるからこそ、ピチューは面白そうであればすぐに夢中になり花を気にせず遊ぼうとする性格だからこそその行動だった。

そして花畑を通り、奥に向かえばきのみがたくさん実っている森へ到着する。そこはカビゴン達大食いのポケモン用に作られた場所であり、フシギダネやベイリーフやジュカイン、ドダイトスが主に作り上げた場所であるのだ。そして後から仲間としてマサラタウンにやって来たツタージャもきのみがたくさん実るように丁寧に世話をしていた。そのきのみは大食いのポケモンでなくても食べられるため、リザードたちはオレンのみやモモンのみ、そしてキーのみを持てるだけ採ってから笑顔で顔を見合わせる。

『ガウウウー！』

『ピツチュウー！』

手に持ったきのみは全て家に持って帰ろう…そう外に出る時から決めていたリザードたちはすぐに帰ろうと歩き出す。途中でダークライやセレベイ、そしてヘラクロス達に会ったのだが、遊ぼうと誘われてもきのみを見せてやればその理由がすぐに分かってくれたのか頑張れと声援を送られながらも見送ってくれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして帰ってきた自分たちの家。ヒナの家でもあったが、リザードたちにとってはヒナの家が自分たちの家だとそう認識していたのだ。そしてバリヤードが開けてくれた玄関を通り、ヒナに近づくと、ヒナはまだ勉強していて、数学と書かれている本を読んで難しそうな表情を浮かべていた。

「うう…これは全部覚えていた方が良かったから…あとは詰め込みでやるしかないか…」

『ガウウ』
『ピイツチュ！』

「あれ？リザードにピチュュー…これってきののみ？どこかへ行ってたの？」

『ガウウ！』

『ピイツチュ！』

リザードたちは自分たちが持っているきののみをヒナに差し出した。それは勉強で頑張っているヒナに食べてほしいと思っていたからこそその行動であり、頑張れという意味での応援でもあった。

それを分かったヒナはきののみを受け取ってから笑みを浮かべてリザードたちを見る。

「ありがとうリザードにピチュュー…！…そうだ、勉強もちよつと休憩して…このきののみを使って何かお菓子でも作ろうか！」

『ガウウ！』

『ピチュ！』

リザードたちは喜び、ヒナも笑みを浮かべて抱きしめる。抱きしめあったりザードた

ちとヒナは笑顔でキッチンにいらるであろう母に向かつて走り、きのみを見せて話しかけたのだった。

それは一般的なトレーナーから見れば通常とは違っているような光景であり、ある意味ポケモンと人間の絆が見せた微笑ましい光景でもあった。

第二百十九話く兄はメガシンカの根底を知るく

「そこまでだ！」

「へ…お爺ちゃん!？」

『バウウ!!』

「はっ? どういうことだ…?」

『ピイカ?』

「え、コルニのお爺ちゃん…?」

「もしかしてあのバシャーモってコルニのお爺ちゃんの手持ちなのかも?」

「なるほど…ならばこの試練というのはコルニの御爺さんの手によって作られたもの…
ということでしょうか？」

「なんにせよ、これでルカリオがメガシンカできるねデネネ！」

『デネデネ！』

「こんにちは兄のサトシです。コルニがルカリオと一緒にバシャーモと戦い、ようやく勝てることができました。」

「まあようやく勝てるといっても少しだけあつけない勝利だとは思いましたが…。」

「バシャーモの攻撃を素早く避けたルカリオが何とか攻撃をしようとして…でもバシャーモに避けられたり当たらなかつたりでこのままでは長期戦になると考えたのか、早く終わらせようとコルニが俺の教えた合体技をルカリオに指示した。」

「そのおかげでバシャーモは合体技に驚き、ルカリオの攻撃に当たってしまふ。これで勝負は決まったと思つたその時にコルニの祖父がやってきて、ボールにバシャーモを戻してから笑顔でこちらに近づいてきたのだった。」

「これは最後の試練だ。ワシのバシャーモを倒し、自分たちの手でつかむ力を…よくやったなコルニ、ルカリオもよく頑張つた…さあお前のルカリオナイトを掴みとつて来

い!!」

「うん!」

『バウウウ!!』

ルカリオナイトをゲットしたコルニが、笑顔で喜び合っていた。これでようやくメガシンカできるのだと…すべての苦勞が報われた瞬間だったと…その時の俺たちはそう考えて喜び合っていたのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

——その後、俺たちはまた町に戻り、コルニの祖父から話を聞く。

コルニの祖父はどうやらマキタさんと共謀していたらしく、俺たちが写真を撮って準備していたときに話したことは全てそちらへ誘導するための計画だったらしい。話を聞いていて少しだけ苦笑しながらも、ちゃんとコルニの祖父はコルニ達がルカリオナイトを取れるように…そしてバシャーモに勝てば渡すつもりだったらしい。

俺たちとのバトルで唯一勝てないことが不安だったコルニは、その話を聞いて少しだ

け安堵し、ルカリオと共に笑い合った。そして俺たちは笑顔でコルニとルカリオを祝福したのだった。

そしてコルニの祖父から今取ってきたルカリオナイトでメガシンカさせろということとを話され、コルニとルカリオは真剣そうな表情で動き出す。ルカリオナイトをルカリオに渡してコルニが離れ、メガシンカをするために力を合わせる。この光景はカルネさんとサーナイトが放ったメガシンカと同じ光りであり、光り輝くそれはまさに絆の証なのだと思えた。

「ルカリオの…メガシンカ…!!」

『ガルウウウウ!!!』

「メガシンカしたルカリオ…あいつにも見せてやりてえな」

『ピイカ』

「凄い凄い！ルカリオがメガシンカした!!」

「これがルカリオのメガシンカ…凄いかも!!」

「強そうだしカッコいい!!」

『デネデネ!』

「ルカリオのメガシンカ…本当に素晴らしいです!!」

メガシンカしたメガルカリオは、ある意味強さの波動が流れていると感じた。メガルカリオが動けば突風が吹き、何もかもを吹き飛ばすような強い力を感じる…そしてそんなこいつと戦いたいと全身でそう感じた。ピカチュウも同じ気持ちらしく俺を見て力強く頷く。

だからこそ、コルニに向かって俺は話しかけた。

「なあコルニ。俺と戦わないか？」

『ピイカ?』

「え…サトシと?…うんいいよ!ぜひ戦おう!!このメガシンカでようやくサトシに勝てるかもしれないって自信があるからね!!」

『バウウウ!!!』

コルニとルカリオは好戦的な笑みを浮かべて俺たちを見つめ、そしてこの場で移動せずにバトルをすることになった。

今立っている場所は平地だからこそそのままバトルフィールドのようにして戦うことができると考え、すぐにバトルを始めたのだ。いつも審判をしてくれているセレナたちはちゃんと観戦したいらしくこのまま見ていると言ったため、審判はいない状況で：シトロンはルカリオの波動がどのくらい強くなっているのかを発明した機械で試していくために調べる。

「ルカリオ！ボーンラッシュ!!」

『パウウウ!!』

「来るぞピカチュウ。アイアンテールで防げ！」

『ピッカア！』

『パウ!?!』

ボーンラッシュを発動させたルカリオだったが、どうやら力が安定していないらしくすぐにアイアンテールによって技を防がれ、躲かれてしまった。

だがその力は強いようだ。ピカチュウが笑顔で俺に向かつて頷いていることから分かる。コルニは力が安定しなくて苛立つルカリオに安心するように励まし、信じているという。その言葉に頷いたルカリオはすぐにコルニの指示を聞いて動き始める。

「ピカチュウ、受け身体勢！」

『ピツカー！』

「ルカリオ、はどうだん&グロウパンチ!!」

『バウウウ…バウウウウウ!!!』

『ピカ…!?』

「ピカチュウ、ボルテッカー」

『ピツカー！』

はどうだんとグロウパンチの合わせ技は俺が教えた技であり、バシヤーマを倒した時の技でもあった。先に放ったはどうだんを後から発動させたグロウパンチと混ぜて物理的に殴る技だが、メガシンカしたためにそれを使った時の勢いは強く、地面に大穴が開きそうなほどの威力で放たれた。しかもメガシンカしたためか一瞬でピカチュウの傍に接近したと思えてしまうほど素早いため、これは俺のジユカイン並みの速さかもしれない…その強さに笑みを浮かべた。でもピカチュウも素早いためにルカリオの攻撃を躲す。だがルカリオの技が強すぎるためか放たれた技が地面に衝突した結果爆風が起きてしまったためにピカチュウは驚き、危うく飛ばされそうになったがすぐに尻尾

を地面に叩きつけて回避し、ルカリオを見る。

ルカリオはそのままコルニの指示ではないボーンラッシュを放とうとしたためにピカチュウが俺を見て指示を待つ。そのため俺はボルテッカーを指示し、身体に電気を纏ったまま、ボーンラッシュを回避してから背中に向かって攻撃した。

『バウウウ?!?』

「慌てないでルカリオ！大丈夫だよサトシなんだから…ルカリオ？」

『バウウ…バウオオオオオオオツツ!!!』

「…ピカチュウ、ジユカイン並みの速さでも見切れるか？」

『ピツカ』

「なら警戒して…攻撃が来たら10まんボルトで回避。何かあつたらすぐに指示する」

『ピイカツチュ』

「ルカリオの様子が…！」

「何だか様子がおかしい…まるで力が暴走してる感じかも…！」

「機械が爆発した!!?!?…これはものすごい力がルカリオに流れてると分かります！」

「そんな…どうなっちゃうの？」

『ブネブネ』

ルカリオの目の色が変わったのを見てコルニ達がどうしたんだと表情を変える。

俺はこれが異常事態なのかそれとも力が暴走したために少し待てば収まることなのかを見極めるため、ピカチュウに受け身体勢で様子を見てもらう。コルニが何度も待つてと指示してもそれを聞かず、動こうとするルカリオは標的であるピカチュウしか見れていないようだった。でも俺のピカチュウは何度も強敵を相手に戦ってきたのだから、メガルカリオだとしても負けるつもりはないし、倒されるつもりはない。それに今無理やり止めたとしたら何かルカリオの身に異変が起きてしまうのではないかという恐れもあつたために、このままメガシンカについて詳しいコルニの祖父が動くまでは現状を維持しようと思った。

ルカリオが空に向かって咆哮し、こちらをじろりと睨む。その目は今まで一緒に旅してきたルカリオとは違って、理性そのものがなくなつた獣のように思えた。

『パウウオオオオオオオオオオオ!!!』

「ルカリオ……しっかりしてよルカリオ!!!」

「来るぞピカチュウ」

『ピツカア！』

「凄いい…サトシとピカチュウ…冷静にルカリオとバトルしてる…かつこいい…！」

「さすがサトシ…そういう所は学ばないと駄目かも…」

「ですがルカリオ一体どうしたんでしょ…何であんなに苦しそうに…！」

「早く止めないと…!!」

『デネデネ！』

「いや駄目かも。止められるならサトシが止めているもの…これは何かあるわ」

「…サトシ」

「ルカリオ！話を聞いて…私の指示を聞いて!!」

『バウオオオオオオツツ!!!』

「ピカチュウ、放電体勢…そのままアイアンテールで防御！」

『ピイカツチュ！』

セレナたちがこちらを見て何かを言っているようだったが、聞こえないし今は集中しているために聞けない。

ルカリオの素早い動きはまるで俺のジユカイン並みの速さであり、パワーはイツシュ

地方を旅してきたルカリオ並みかと思える。そういえばイツシユ地方を旅したあのルカリオは本気で倒そうとして俺たちに向かってバトルしたのはあまりなかったなとふと思いついた。手加減ができるぐらひは強く、そして本気で相手にしたらメガルカリオぐらひにはなるのかと少し現実逃避しながらも、ピカチュウに向かって指示をしようとした…。

——だが、メガルカリオとピカチュウの間にルカリオが登場し、バトルを無理やり中断させたために呆気なく終わりを迎える。

「そこまでだ…コルニにルカリオ…サトシ君。すまないがバトルは中断させてくれても良いか？」

『バウウ』

「いえ…俺とピカチュウは大丈夫ですよ」

『ピイカ』

「お爺ちゃん…ルカリオは一体どうなっちゃったの…！」

『バウウオオオオオオオオツツ!!』

「それはちゃんと説明しよう…お前たちの新たな修行についてもな」

『バウウ』

この後、コルニの祖父のルカリオによって猛攻撃されたためか：それとも力を使い果たしたせいかわかからない。メガシンカを強制解除されたルカリオは倒れた。倒れたルカリオを治すためにポケモンセンターにやって来たのだが、そこで待つている間にいろんな話を聞いた。コルニとルカリオはメガシンカを使いこなせるようになるためにムスト山にあるトレーナーに会いに行き、修行をするということ、このままだとメガシンカは何時まで経つても使うことはできないと言うことを。だからこそ、コルニとルカリオはムスト山へ向かうために旅立つことを決める。もちろんそれは俺たちも一緒に行く。

俺はルカリオが自身で勝手に攻撃するのを見て、それもある意味新しいバトルスタイルかと考え、受け入れていたということもあった。それにバトルにおいてポケモンと人間が一致団結して指示を聞いて攻撃するのが基本だというのに、それを俺自身が忘れていたからこそ、コルニの祖父から聞いた話がとても身に染みて理解したのだ。

そしてこれからルカリオ達がどうなるのかを見ていきたいと思い、今までも一緒に旅をしてきたからこそ、また仲間として行こうと誘った。

もちろんコルニとルカリオはその言葉に笑顔で頷き、メガシンカを使いこなして俺を倒すと意気込んでいるようだった。とにかくやるべきことはいっぱいあるだろうし：ハルカにも手伝ってもらわないといけないなと思った。

第二百二十話くセレナたちは話し合うく

ここはある森の中、サトシ達が現在休憩場所としているここではバトルがよく行われていた。サトシとコルニがバトルをしたり、ハルカとコルニがバトルをしたりする。もちろんコルニのメガルカリオが暴走した場合はピカチュウによって強制的に止められ、ルカリオのメガシンカを解除させる。

そして消耗したルカリオの体力をオボンのみやオレンのみで回復させてから、すぐにそのとき悪かったことをちゃんと話し合ってサトシ達と一緒に次は気をつけなければと決意するのだ。もちろんその話し合いにはハルカも一緒にになって意見を言い合うことが多い。ハルカもメガシンカというのをはじめて見て自分でもそれを使えるようになりたいという新たな目標と、コルニとルカリオがちゃんとメガシンカができるように

なるという心からの応援のために行動していた。サトシはもちろんハルカと同じよう
に行動し、コルニのことをまるで後輩のように扱っていたりする。

そうして修行やバトルが終わった後、シトロンによる料理を食べて…そして眠りにつ
く。これがサトシ達とコルニの日常だった。

男子はシトロンが用意した一つのテントへ…そして女子はユリーカ用のテントへ
入って寝る。もちろんルカリオはその時はボールに入ってもらって寝ているため、女子
のテントはそこまで窮屈ではない。

寝転んだコルニは眠そうにあくびを小さくして…そしてセレナを見て小さな疑問を
言う。

「セレナって…サトシに恋してるの?」

「ふえ!?!何いきなり!?!」

コルニからの言葉にセレナは頬を染めて顔を赤くし、慌てふためきなからどうしてそ
んなことを聞くのか逆に質問した。するとコルニはその様子に面白そうな…楽しそう
な表情で恋してるということが本当なのだということを知り、どうして好きになったの

か疑問に思った。もちろんそれはハルカも同じであり、ユリーカは過去の話を知っているために何だか面白そうだとデデンネと一緒に話に入り込む。

：ただ唯一標的にされたセレナだけがその恋話に動揺し、なんていえばいいのか困惑しつつも考えていた。それは、セレナがサトシに恋をしたというのはサトシをよく知る者としては本当に驚くことなのだから…。

サトシの性格は本当にいろんな意味で常識から外れていて、良い意味では強くて頼もしいけれど、悪い意味ではサトシに対して本気で一生傍にいたいと言う子や恋をしたいという子が現れないのではないかと思えるぐらいぶっ飛んだ性格だった。サトシが有名になってからはある意味ファンなどが増えているのをセレナたちは知っているし、カロス地方を旅したということでサトシに会おうとするトレーナーもいると話で聞いた。

付き合ってみたいという女の子も中にはいるようだったが、それはまだサトシに実際に会ってないからこそ言えるのではとコルニは思っていた。

サトシのことを深く知れば…より近くにいればそのような恋心はあつという間に消えてしまうだろうというぐらいいろいろと通常とは違うところを知っているからだろう。サトシ自身が強すぎるために人々が尊敬し、常識とは違った行動をよくしているがためにずっと傍にいたいという人間…しかも恋をする人間なんていないといつてもいいかもしれない。恋をして付き合つてと思つていたとしても、長続きができるのか

と言われればそれは否と答えるだろう…それほどまでもサトシは普通とは異なっていたのだ。ポケモンのことを第一に考え、ポケモンと同じように行動し…そしてバトルでは好戦的な面を見せるサトシに、誰もがセレナのような強い気持ちを持てるとはいえないだろう。サトシ自身も恋をしたい等とは考えていない部分があるからこそ言えることだ。付き合ってくれと言われればサトシは通常よりも数倍冷たい表情でもう二度とそう思えないような行動をするだろうということも…この数日一緒に旅をしてコルニは理解した。それほどまでにサトシは異性との恋を避けている。

…それに仲間としてはとても頼れる先輩後輩関係を築いているハルカや新たに加わったコルニもサトシのことを尊敬してはいるが…恋をしようとは思っていない。もう一人の兄として見ているユリーカも同じだ。

でもセレナはそんな皆からは例外であり、サトシのことを愛していると何度も口に出して言うぐらい行動で示し、冷たくされたとしてもめげずに真っ向からぶつかっていった。だからこそ疑問に思ったのだ。なぜサトシに恋をしたのだろうか…。

セレナは両手で頬を触り、赤くなつた顔を隠すようにする。その様子はセレナが美少女だからこそ絵になるとコルニ達はそう感じており、そしてそれほどにも好きなのだと理解して笑みを浮かべたのだった。

「私はサトシが好き……うん……大好きで愛してて、サトシじゃないと駄目なの！」

「ちよ……直球ね。でも凄い！私はルカリオとずっと一緒にバトル一筋だからそういうのはまだ分からないなあ」

「うんうん……私もシユウに対してそういう感情があつたような気がしたけど……今はまだ分からないかも……」

「ハルカ、シユウって誰？」

『「デネデネ？」』

「コンテストのライバルよ！手強いんだから！」

ハルカは今までコンテストで戦ってきたシユウとのことを思い出し、好きなのかどうなのかよく分からないと言っていた。まだバトルをしていたいということと、コンテストにたくさん出場したいという気持ちが強いからだろうと自身でそう納得しており、いつかはこの気持ちの正体が分かるだろうとあまり深く考えていなかった。

でもセレナは違うのだ……サトシに対する感情も、この溢れ出る衝動もすべて理解し、行動しているのだから。

コルニはテントに寝転びながら、疑問に思ったことをセレナに向かって質問した。

「ねえ、セレナがサトシのことを好きなのは何で？どこが好きになったの？」

「へっ？どこが好きって……」

「あ、私も聞きたいかも！サトシのことを好きになったのってどうしてなの!？」

「聞かせて聞かせて!!」

『デネデネ!』

「うう……サトシを好きになった理由……ね」

オクタンかと思えるほど顔を赤くしているセレナが可愛いと皆がそう思い、そしてからかうような口調で楽しそうに質問する。どうしてサトシのことを好きになったのか、何処が好きなのかを…。

セレナは目を閉じて一瞬黙りこみ……そして目を開けてから優しい表情で話し始める。

「私はサトシに助けられた……命を救われたのは知ってるでしょう?」

「あ、うん!全部その話は聞いたよ!」

「私やコルニは……サトシとの出会いをセレナたちがあの後話してくれたから知ってるけれど……でも約束をしたから好きになったわけじゃないでしょ?何でなの?」

「それはね……私はサトシのことを、あの後からいつの間にか好きになってたの」

「いつの間にか?」

「そう、気がついたらサトシに恋してた……あの未来を見通すような鋭い瞳も、時々予想外な事態になると驚いたり楽しそうにする反応や表情が好き。皆にとつて常識から外れていて……ぶっ飛んでる性格って思われてるけど、ポケモンたちのために非常識になつて

頑張ってる姿が好き。私には冷たく接してくるような態度なのに時々優しくしてくれたり…バトルでは全力で戦おうとするその姿勢や、皆を守ろうとする行動全部が好き。…つまりね、サトシの全部が好きなの。サトシのすべてが…心も身体も性格も態度も全部全部…サトシ以外は考えられないぐらい大好きで、彼以外を愛せないって分かるんだ」

「なん…か…とどころどころ貶してるような表現もあつたような気がするかも？」

「うーん…確かにサトシってみんなから見ると常識から外れてる部分もあるよね。でもセレナはそこも好きなんだ？」

「うん！もう二度と…一生ずつと傍にいて離したくないぐらい…愛してるの」

「…そ、そっか」

「愛してるんだね！大好きなんだね！そんなお姉さんがお兄ちゃんをすべて受け入れてくれたらなあ…」

『デネデネ…』

「タケシもよくアタックして撃沈してたかも…でもサトシはそういう好意にはあまり関わろうとしなかったから応援するよ！」

「うん！ありがと！！」

セレナが語る言葉は、サトシに対してすべてを受け入れているという様にコルニ達は

感じた。貶してやるようだと思えた言葉は常識外だという所だろう…普通の女の子だったら非常識だと知った時点で諦めるというのに、セレナはそれでも諦めきれないという。

そして二度と離したくないと言う彼女の目にはサトシに対する思いで溢れており、コルニはあまりそういう恋愛には関わりたくないなど寒気がしていた。でもハルカとユリーカはそうなんだと納得し目を輝かせており、セレナは美少女に相応しい可愛らしい笑みで頷いていた。

（サトシって本当に凄いのね…こんな「思い」も受け入れてるだなんて…）

コルニだけはまだサトシ達と仲間になって日が浅いために気づいたセレナの気持ちに…皆には気づかれないようため息をついた。サトシのバトルはとても強く、そしてよく戦い目立っているために近くにいたセレナの異様な思いにはなかなか気づくことができなかった。セレナの思いは「強すぎる思い」であった。思いは想いであり、重いでもある。

つまりは強すぎる愛情ということだ。セレナのそれは執着心や依存にも似ていると考え、その感情が甘酸っぱい恋愛とは少しだけ違うようだとコルニにはそう直感で感じ

てしまったのだ。

まるで幼い頃に体験した経験のせいでサトシに助けられたために彼以外を愛せないと刷り込まれたような…洗脳に近い何かがセレナの感情を結び付けているのではないかと考える。たまごから生まれたポケモンが最初に見たものを親だとたまに思い込むように、命を助けられたからセレナの心が変化しサトシの傍に一生居たいと思ってしまうのだろうか。サトシはそう思う。

でもそれは結局、サトシを愛しているからこそその行動であり、いわばサトシの非常識な行動がセレナの非常識な気持ちに影響を及ぼしてしまったのだろうか。サトシは考えた。ハルカ達はサトシ達とずっと一緒にいるからこそ気づけない…気づくことのできない常識とは違う感情だと、そうサトシは認識したのだ。

でもそれはサトシたちの問題であり、恋愛に深くかかわっては痛い目に遭うと祖父から学んだサトシは何も行動を起こすつもりはなかった。むやみに何かを言ってしまうたら、セレナの感情がサトシに牙をむくような…そんな無意識の危機感に似た本能が動いたからかもしれない。

ただ、この異様な思いに気づいたからとセレナに対しての恐怖心はない…サトシへの尊敬する心とバトルに勝ちたいという思いが強くなったというだけである。セレナの

行動についてはむやみに手を出してはいけないと言う…そんな気持ちも強く残しながらも…。

「あ、そうだ」

「どうしたのゴルニ？」

「ハルカに聞きたいことがあつて！サトシ達とハウエン地方を旅してたつて聞いたけど何か面白いことはなかった？」

「あ、私も聞きたい！どんなポケモンがいたの!？」

『デネデネ!!』

「うーん…そうねえ……」

———
夜はまだまだ、長いようである。

第二百二十一話　妹は恋愛マスターに会う

「ふー…ちよつと休憩！」

『ガウ…ガウウ！』

『ピイツチュ！』

「あ、お菓子持ってきてくれたの!? ありがとうリザードにピチュー!!」

『ガウウ！』

『ピツチュ！』

　こんにちはは妹のヒナです。ずっと勉強をしていたのですが頭が痛くなってきたために止めて、休憩をしようと思ったらずっと見守っていたりザードとピチューがお疲れと

言ってお菓子や飲み物を持ってきてくれました。

リザードたちが優しく育ててくれてとても嬉しいと感激しながらも一緒に食べる。そしてしばらくすると様子を見に来てくれた母が笑顔で私たちに向かつて言った。

「ヒナちゃん、今シゲル君がオーキド研究所に帰ってきてるみたいよ。ずっと勉強してるのは偉いけどたまには外に出て、シゲル君に挨拶しに行くのはどうかしら？」

「え!?シゲルさん帰ってきてるの?!分かった行ってくる!リザードにピチューも行こう!」

『ガウウ!』

『ピイツチュ!』

シゲルさんはマサラタウンにはあまり帰ってこないのですが、本当に久しぶりに会えるのではないかと少しだけ楽しみになった。

それに兄のことで話しておきたいこともあったし：シゲルさんならば兄について相談したとしても口が堅いだろうから絶対に喋らないだろう：まあ喋ったとしても兄がキレルだけだから平気だろうと思う：うん：きつと大丈夫なはず。

まあ問題が起きたその時に考えていこうと思いつながら家飛び出し、走り出した。

.....

「こんにちは！シゲルさんいますか!？」

『ガウウウ!』

『ピッチュウ!』

「あ、ヒナちゃん！こんにちは。シゲルなら博士と一緒に森にいるよ」

「ありがとうございますケンジさん！行こうリザードにピチュウ!!」

『ガウウ!』

『ピチュウ!』

オーキド研究所に來るとケンジさんが笑顔で迎えてくれて：今シゲルさんはオーキド博士と一緒に森に行っていると話してくれたために私たちも後を追うために走る。

おそらく迷いの森の方には行っていないと思うから、いつもオーキド博士が歩いてい
る方へ向けて私たちは走り出した——。

そして見つけたのはシゲルさんとオーキド博士が一緒に歩いていて、何かを話している光景だ。でももしかしたらわざわざこんな森の中で話すのだから…誰かに聞いてほしくない内容かもしれないと私たちはとっさに草むらに隠れて様子を窺う。

すぐに草むらに入ってもシゲルさんやオーキド博士は私たちに気づかない。もちろんそれは今まで修行した成果でもあり、かくれんぼなどで頑張ったからこそシゲルさん達に気づかれることはないと安堵した。

「大丈夫…そうかな…？」

『ガウウ…？』

『ピチュ…？』

シゲルさんとオーキド博士の表情が楽しそうにしているように見えるから、今まで病気や怪我なく過ごしてきたのか、研究はうまくいっているかについての会話なのかなと思ひ、私達が近づいても大丈夫だろうと判断しようかどうか迷って相棒に聞こうとリザードの方を見た時だった…。

『ミュウ？』

『レビイ?』

「ツツつて!!…なんでミュウとセレビイがここにいるの…!」

『ガウウ…!!』

『ピチュウ…!!』

『ミュウウウ!』

『レッビイ!』

『フオオオオ…楽しそうだから来た』

「ダークライもいるし…シゲルさん達に見つかったら大変なことになるよ!」

『ガウウウ!!』

『ピッチュ!!』

リザードたちの近くで私たちを見ているミュウとセレビイに気づき、とつさに大声を出してしまいそうになったが両手で口を塞ぎ、すぐに小声で何でここにいるのか問いかける。

でもミュウとセレビイは楽しそうに…そしてその近くの木の影から姿を現したダークライがちゃんと説明してくれた。私たちはこのままではシゲルさん達に見つかるとは思えないという焦りと、何でミュウ達はこんな見つけやすい場所にいる危

機感を持っていないんだろうという呆れの感情が巻き起こった。

とにかく早くいつもの迷いの森の方へ行つてと言うが、ミュウやセレビィはともかく、ダークライは微妙に嫌そうだ。

「…何かあつたの？」

『ガウウ？』

『ピチュ？』

『……ミュウツーたちとサトシのポケモンたちによる乱闘が発生しているんだ…』

『ミュミュウ!!』

『レッビィ!!』

「ああ…なるほど…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

ダークライの言っている言葉にすぐ納得してしまった。そして同時にまたかという意味で私たちは苦笑してしまふ。

…つまり、ミュウツーたちが先に喧嘩をして、その次に兄のポケモンたちを巻き込むような乱闘へ突入したということだろう…ダークライの表情からその悲惨さは凄まじ

いらしく…これだとフシギダネがその乱闘を見つけてからソーラービームを放つまではまだまだ時間がかかるかもしれないと思ってしまった。

「あれ？ヒナちゃん？どうしてここに…」

「なんじゃヒナ…誰かと話しているようじゃったが…なにかあったのか？」

「うえ?! い、いやなんでもないです!!…久しぶりですねシゲルさん」

『…ガウウ』

『…ピチュ』

「…?…ああ久しぶりだねヒナちゃん」

ダークライたちと話し合っているうちに声の音量が大きくなっていらしく、シゲルさんたちがこちらに近づいていることに気づかなかった…。

シゲルさん達が私たちに気づいて話しかけ、私たちは勢いよく立ち上がってぎこちない声色で話す。そしてちらりとダークライたちのいるところを見たが、もうそこにはミウウ達の姿が何処にもいなくて…おそらくどこかへ行っただと…ああいや、木の影がゆらゆらと不自然に揺れているからおそらくはまだそこにいるのだろう…そしてミュウとセレビイはもしかしたら姿を消して隠れているのかもしれない。

でもシゲルさんやオーキド博士は気づいていないようだったから本当に良かったと

安堵した。とりあえずこういう危機感は本当に二度と起きないでほしいと願う：けれど無理だと考えて少しだけ落ち込んだ。

そうしている間にもシゲルさんとオーキド博士がここで立ち話はなんだからと言って研究所へ戻ることになった。私たちも一緒に行き、ダーククライたちに小さく手を振ってから行く。歩いている間に先程話していた場所をこつそりと振り向くとミユウ達が姿を現してこちらに向かって笑顔で手を振っているのが見えて：まあ気づかれないようにしているならマシかと納得して笑みを浮かべた。

.....

オーキド研究所に着いた私たちはまず最初にシゲルさんだけで話したいと言う。それにオーキド博士たちがお互い顔を見合わせてからしようがないと苦笑し、客間へ案内してくれた。そこでケンジさんが出してくれたお茶を飲みながら笑顔でシゲルさんが話しかける。

「でも本当に大きくなったねヒナちゃん…リザードたちもちゃんと育成されてて安心したよ」

「ありがとうございます！…あ、そうだ。あの…お兄ちゃんについて話をしたいと思っただんですけど…今大丈夫ですか？」

『ガウウウ…？』

『ピチュ…？』

「なんだい？僕にできることなら何でも聞いてくれ」

「実は——」

私が話した内容は兄とセレナさんに関する内容だった。幼い頃から兄と一緒にいてくれたシゲルさんだからこそ話せる内容でもあり、これからどうすればいいのだろうという私のちよつとした悩みの相談だった。

それは、電話で話した時にセレナさんが兄のことを好きだと私たちが知った時の話であり…何か起きた場合に相談しようと思っただけで、でもこのまま放っておいていいのかという疑問とセレナさんと兄のこれからの関係について不安に思い、少しでも私に何かできることがあるばいと思いつつもシゲルさんに話しかけたのだった。

つまり、兄がセレナさんを泣かせないのか…傷つけることがないのかが主な相談でも

ある。カロス地方に行ってしまった兄が暴走してしまった場合に確実に止める人もしくはポケモンがいらないからこそ、セレナさんに恋愛でのトラウマを作ってしまうのではないかと次第にそう考え、大丈夫なのかと不安に思ったからだ。電話で話した時はまだ大丈夫かなと安心していただけ、兄のことを考えていくと次第に不安が増していく。それに過去兄がやらかした話もあったからこそ、私たちは余計に不安になる。

——それは幼い頃、兄の暴走は恋愛でも効力を発揮し、野生のポケモンに襲われそうになったという女の子を助けたことがあったそう。だが、その時に女の子が惚れて付き合ってくれと言われ迫られ：ある意味ストーリーカーに近いレベルまで執着されたことがあった。その時は女の子が兄と付き合ってもらえないのは周りのせいだと何故か変な解釈をしたらしく、母達に迷惑をかけてしまい、兄がブチギレて暴走した。つまりその後兄が物凄い同情したくなるレベルで女の子を泣かせてしまうような事態になったたということなのだ。その時の兄の鋭い毒の入った言葉で何で俺を好きになったのかやそんなのただの気まぐれにすぎないやその他諸々：まあいろいろと兄がやらかしたのを知ってしまったからだった。いろいろについては割愛する：その方が気持ちとしては楽になるからだ。

とにかく、セレナさんが大丈夫なのかどうなのか：それだけが私の心配だったのだが、シゲルさんは驚いたような表情をした後優しい口調で私たちに向かって話してくれ

た。

「そうか…サトシのことを好きな子が一緒に旅をしている…なら見守った方が良いんじゃないかな？」

「え…見守る…ですか…？」

『ガウウ…？』

『ピチュ…？』

「うんそうだよ…見守った方が良い。第一、サトシに好意を持った時点でその子に対する態度は容赦がなくなるのをヒナちゃんも知っているだろう？なのにサトシはその…セレナさんという人には仲間として接している。それはつまり、ほとんど答えが決まっているようなものだよ」

「…もしかしたらお兄ちゃんやんはセレナさんと付き合うかもしれないと」

『ガウウ』

『ピチュ』

「まあまだ可能性の話だけだね…でも大丈夫だよ。サトシは暴走する時はするけれど…それでも仲間だと認めれば容赦なく排除しようとはしないからね…」

「…でももしかしたらっていう可能性もありますよね。途中でお兄ちゃんがセレナさん

を敵認定してしまった場合は…」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「その時は、サトシには非がないってことになるね。サトシは身内や仲間に対しては甘いし…敵だと思われたのならそれはサトシを傷つけるような行動をした時だ」

『……………』

『……………』

『……………』

シゲルさんの言っている言葉には納得した。兄が仲間だと認めている時点で大丈夫だということも…セレナさんが自ら兄を傷つけるようなことをしなければ敵認定されて排除されるということも…。

まだまだ不安はなくなつたわけではないため、私たちは微妙そうな表情を浮かべている。その表情を見たシゲルさんが苦笑して私たちの頭をそれぞれ撫でてくれた。

「大丈夫だよヒナちゃん。サトシのことが本当に好きなら絶対に何も起きない」

「……………そうですね。分かりました…ありがとうございます」

『ガウウウ…』

『ピチュユ…』

シゲルさんが撫でてくれたことによって少しだけ不安が消え、これからどうなるのかカロス地方での兄たちの行動が気になった。今度電話してきたら今どうなっているのか詳しく旅の話でも聞いてみようかなと思う。

第二百二十二話～妹は犬猿の仲を知る～

「……………サトシはいないのか？」

「あ、はい…いないですけど…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

「…そうか……………チツ」

「えつと…ここにも何もありませんし…オーキド研究所にでもいきますか？ シンジ
さん」

『ガウウ？』

『ピチュ？』

「…ああ、行かせてもらおう」

こんにちはは妹のヒナです。母が買物に出かけていて、バリヤードが掃除で忙しくしていたため、家のチャイムが鳴った時に私たちが出たらそこにいたのは兄のライバルのシンジさんでした。

シンジさんは兄がいらないということを知って凄く不機嫌になってしまい：私達じゃなかったら確実に泣いていたであろうと言えらるぐらい物凄く怖い表情で舌打ちをして苛立っていた。まあ兄が本気で怒っている時よりはマシなだけども…。

ここにも何も無いし、とりあえずのんびりできる場所に行こうと思い、兄のポケモンがいるであろうオーキド研究所へ向かうかどうか質問をした。シンジさんはその言葉に頷き、少しだけ機嫌を直してくれたから良かったと私たちは顔を見合わせてから安堵しつつも、バリヤードに留守番を頼んで向かって行った。

.....

「やあ、君がサトシの【後輩】ライバルのシンジ君か…話は聞いてるよ？」

「ああ、お前がサトシの【元】ライバルのシゲルか。聞いていた通りのようだな」

「ええ…いきなり不穏な展開…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

オーキド研究所にやって来た私たちを迎えてくれたのはシゲルさんだった。私たちに向かって笑顔で歓迎し、そしてシンジさんを見た瞬間笑みが消えて無表情になった。その豹変に私たちは驚き、そして理解してしまった。

おそらくはシゲルさんとシンジさんは兄からお互いの話を聞いていたのだろう…それかリーグ戦でのバトルを見たかどちらかだ。兄のライバル同士だから仲良くするかなど私たちはそう思ったのに、シゲルさんが無表情でシンジさんを見た瞬間、シンジさんも苛立ったように大きく舌打ちをする。そしてシゲルさんが少し寒気のある笑みを浮かべながら握手を求め、シンジさんが嫌そうな表情でそれに答えた。でも言葉だけ

尖っているように物凄く毒舌で、まるでお前がサトシのライバルとかふざけんよ……！
と言っていると感じてしまった。

しかもオーキド研究所の玄関でこの状況になってしまったため、部屋の奥にいるケンジさんとオーキド博士が苦笑しながら見守っていた。ケンジさんが微妙そうな表情を浮かべながらも私たちに向かつてこつちに来てと言ったためにシゲルさんとシンジさんを一度見て移動するかどうか悩む。でもフシギダネもいたらしく、ため息をつきながらつるで私たちを持ち上げて部屋の奥まで連れてきてくれた。

「ありがとうフシギダネ……それとこんにちは。あの、あれそのまま放っておいていいんですか？」

『ガウウ……』

『ピチュ……』

「こんにちはヒナちゃん。いやあれはちよつとね……ははは……」

「こんにちは。サトシが暴れてる頃よりマシじゃよ。バトルするならば外でやるじゃろうし……大丈夫じゃ」

『ダネフシ』

「お兄ちゃんが暴れてる頃よりマシ……うんまあマシかもしれないけど……」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

『…ダネダネ』

オーキド博士は兄が暴れていた頃のことを思い出して、そしてシゲルさん達の状況を見て大丈夫だと判断したらしい。ケンジさんも同じようにまあ口喧嘩ならまだ大丈夫だろうと考えて放置しているようだ。そしてもう一度私たちが玄関先を見るとシゲルさんとシンジさんの喧嘩は猛吹雪のように冷たく、そして毒があるかのように恐ろしい雰囲気漂わせながらも毒舌を言い合っていた。

フシギダネはため息をついて、伝説たちを止めるよりマシかと思っただけ、2人を放置しようと決めてそのまま私達をつるで引っぱって一緒に森まで行こうと言ってくれた。

オーキド博士達はフシギダネの行動を止めず、気をつけてと行って笑顔で見送ってくれたりする。

…ついでに言うのと玄関先で靴を脱ぐことができずに土足で部屋に入るのは駄目だからということでもフシギダネにつるで持ち上げられたまま話をしていたために、シゲルさんたちがいるため玄関から出ることはできないと判断して本当ならやりたくはなかつ

たが…森に行くためにそのまま窓から出ることになった。

…まあ玄関先で喧嘩しているため玄関から外に出れないし…もしも巻き込まれたら嫌なため仕方がないと諦めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

『貴様というやつは…!!』

『ふふふ…あなたのような脳筋が私を攻撃できるわけないでしょう?』

「こつちもこつちで喧嘩してるし…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

『ダネダネ…ダネフツシイイイ!!』

迷いの森の奥へ行くと何やら大きな騒音が聞こえ、すぐにそちらへ向かう。するとミュウツーとミュウツー姉が喧嘩をしていて、まるでシゲルさんとシンジさんのような状況だと思つて苦笑した。

「しかもこちらは口喧嘩も含めて攻撃したり手加減なしでぶつかったりしているために被害が尋常じゃない。まあ兄のポケモンであるジユカイン達が見て、ミュウツーたちの攻撃技が避けられないであろうオーキド研究所のポケモン達や周りの木々を守ろうとしていたため被害になったのは主に地面なのだが…。」

そしてやって来た私達はその喧嘩を見て呆れ、フシギダネがいつものソーラービームを放つてミュウツーたちの喧嘩を治めていたりする。…ものすごくストレスになっているであろうフシギダネには後で何かお菓子を作って渡そうかなと思っっているけれど、まあこれが日常になっているせいで慣れているのか、それともソーラービームを派手に放ったからかスツキリしたように見え、ミュウツーたちに向かってこれ以上やるならば潰すぞ?と兄が言うかのような笑みを浮かべて脅していたりするから…大丈夫かなと判断した。

でもお菓子は作って渡そう。いつもありがとうねまとめ役。

『ニャアアアア!!?にやにするニャ!! 離すニャ!!!』

『ペーイ!!』

「ニャースの声と、ベイリーフの声…?」

『ガウウ…?』

『ピチュ…?』

『キューン?』

迷いの森の奥からニャースとベイリーフが喧嘩しているかのような声が聞こえてきたために、私たちはそちらへ向かう。近くにいたラティアスも私たちと一緒に来てくれた。おそらくラティアスは私たちを遊びたいのか、それとも守ろうとしてくれているのだらうかと考えながらも、隣りに来てすり寄ってくれたラティアスの手を握り、歩いていってその光景を見た。

見えてきた光景は、ベイリーフがニャースの身につけているものを奪おうとしているという状況。一体何をしているんだらうと私たちは首を傾けた。

ニャースの腕には黄色とオレンジのブレスレットのようなものをつけているのが見えて…ロケット団の支給品かなと思っただけで、ベイリーフの様子からソレは違うのだと判断した。しかもベイリーフだけじゃなく、他にも騒ぎを聞いてどんどん兄のポケモンたちがやってくるし、ベイリーフの言葉が分かったのかニャースにのしかかったり攻撃して来たりするワニノコ達がいったりする…。

「このままではヤバいだろうと私たちはニヤースを助けに向かった。

「ほら皆苛めちや駄目だよ!!ニヤース…大丈夫?」

『ガウウ…?』

『ピチュ…?』

『キューン?』

『だ、大丈夫ニヤ…』

『ベ…』

『ワニワニ…』

『ヘラクロ…』

『ズツバア…』

『ハイハイ…』

ふらふらとしているニヤースだったが、私達が助けに来たことで少し安心したらしくため息をついてブレスレットのようなものを確認した。そしてそれを近くで見たらブレスレットではなくライブキヤスターだったと私たちは分かった。

何故ニヤースがそれをつけているのか疑問に思ったが、ちゃんと動くのか確認してから安心し、これでジャリボーイがキレることもにやいニヤと呟いていたため、なんとな

くこの原因が分かってしまった。つまり、ニヤースのこのライブキャスターは兄が渡したもののだろう…どんな理由があるのかは知らないけれど、まあ兄だから何かカロス地方でニヤースに頼るようなことがあったのか。それとも本当に好意であげた…いや、ロケット団にはいろいろと嫌な思い出があると云っていたから兄とニヤースに関してそれはあり得ないかな。

とにかく何で持っているのかを聞こうと口を開いた。

「ねえニヤース…それってライブキャスターだよね？どうして持ってるの？」

『ガウウ？』

『ピチュ？』

『キュウウ』

『ジャリボーイに渡されたのニヤ。よくは知らにやいけどポケモンの言葉が分からにやいといけにやいらしいのニヤ』

「…そつか…じゃあやっぱりカロス地方で何かあったのかな？」

『ガウウ……？』

『ピイツチュ…？』

『ベーイリ！』

『だからこれは渡せないのニヤ!!文句にやらジャリボーイに言うニヤ!!』

「ほらベイリーフ落ち着いて…ワニノコ達も…またお兄ちゃんから電話があつたら必ず呼びに行くからね?」

『ベイ…』

『ワニ…』

『ヘラクロ…』

『ズツバア…』

『ヘイヘイ…』

私の言葉に仕方がないと諦めたらしく、これで問題は解決されたと思った。まあ兄に
関してはカロス地方でまた暴れているのかなという思いがあるし、兄だからこそ何とか
なるだろうという信頼感もある。とにかくせつかくここまで来たんだからと思い、笑顔
で皆に向かって口を開いた。

「よし、じゃあ皆で遊ぼう!喧嘩するよりも遊んだ方が良いよ?」

『ガウウウ!』

『ピツチュウ!』

『キューン!』

『ニヤーは止めておくのニヤ…ツ分かった遊ぶから離すのニヤ!!』
『ベ—イ!!!』

「ははは…ほらベイリーフ。無理強い駄目だよ。ニヤースも遊びたくなかったら無理しないでいいからね？」

『ベ—イ…』

『ニヤ…ふん。仕方ないニヤ！おみゃーらと遊んでやるのニヤ!!』

『ズツバア!』

『へらくろ!』

『ハイハイヘ—イ!!』

「じゃあみんなと一緒にかくれんぼでも——」

——ドオオオオオオオツツ
!!!!

『ニヤ!?!何ニヤ…ソーラービームかニヤ!?!』

「これで二発目…ミユウツ—たちまた喧嘩し始めてフシギダネに怒られたのかな…」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

『キューン』

『ベイベイ…』

『ハラクロオ…』

『ズツバアア』

『ヘーイ！ヘイヘイヘーイ!!!』

「ハイガニは楽しそうだね…じゃあかくれんぼでもしよつか？フシギダネに見つからないようにね！」

『ツツ———!!!』

この後、私達が遊んでいる間にどうやらフシギダネがぶちギレること数回…そしてシゲルさん達による玄関先での乱闘からのポケモンバトルが起きて大騒動になったということがあったらしい。

まあ、怪我人が出なければそれでいいかと思っておくことにした。喧嘩をして周りに被害が出そうになり、フシギダネに怒られたミュウツーたちはともかく…。

——
とりあえず平和が一番です。

第二百二十三話～兄はコルニと戦う～

「こんにちは兄のサトシです。現在コルニとルカリオの矯正するためのバトルが始まりました。」

「サトシ、ハルカ…今日もよろしくお願いします!」

『バウウ!!』

「ああ、よろしく」

『ピイカツチュ!』

「うん! 今日頑張ろうねコルニ!」

『バツシャアモ!!』

バトルが始まり、まずはメガシンカせずに戦うことにしてバトルの癖を直していくというこゝろで行動を開始した。

癖については以前コルニの祖父からの話を聞き、コルニとルカリオ特有のバトルスタイル：いや、動きを見てからそれ自体が駄目なのだと俺はそう考えていたからこそ直した方が良いと思ったのだ。

つまり、コルニ達は普通に戦っても強いけれど、独自に動いてしまうという癖があったせいで絆によって結ばれるメガシンカがうまく作用せずになっていたのだとコルニの祖父から話を聞いてそう考え、そしてその動きが原因なのではないかと思ったということだ。

だからこそ、ムスト山へ向かっている俺たちが今やるべきことはただひたすらバトルをすることだ。癖を直すといっても幼少期のコルニとルカリオがリオルだった頃からこのバトルスタイルのような状態になってしまっていたらいため、幼い頃から刻まれた動きというのはなかなか直しづらいだろうと思う。

でもムスト山に行けばメガシンカが使いこなせるといつていたので俺たちがやるべきことはとにかくバトルをしてトレナーの指示とポケモンの行動を徹底させることだ。癖についてはポケモンであるルカリオの動きに問題があり、それを許容したトレナーのコルニが悪いことだからそこを徹底的に直すためにまず基本的なポケモンバトルをしていけば少しは良くなるはずだと俺たちはそう思って行動している。

まあバトルといってもいろんなバトル方法があるが、今はいつもと変わらないシング

ルバトルをしてみようかなと考え行動した。今必要なのは基本的なポケモンバトルなのだから。

ハルカはただ単純にバトルを見て何かコンテストに活かせるかもしれないとそう考えており近くにおいて観戦している。もちろんそのためだけじゃなく俺がハルカに頼んで、俺たちのバトルを見ていて何か変わったところがないか、コルニ達がまた癖を出してしまった時にすぐに注意するように言っている。ハルカもそれには喜んで頷き、バシャーモをボールから出して何かあれば言うようにと指示していた。

…とりあえず、まず最初にメガシンカなしでのバトルをしてから…そして次にメガシンカありでのバトルをするようにしてみようかなと考え、実行する。そのバトルで悪い所を見ていき治しつつも、何かメガシンカに対して有効なバトル方法がないかいろいろと考えてみようと思っていた。

「ピカチュウ、10まんボルト」

『ピツカア!』

「ルカリオ、ボーンラッシュ!!」

『パウウウ!!』

10まんボルトを躲したルカリオがこちらに向かつて勢いよくボーンラツシュをす
るために走ってくる。そして近づいてボーンラツシュで攻撃しようとしてくるが、すぐ
にピカチュウがそれを後ろに向かつて走って避けて俺を見て指示を待つ。

「ピカチュウ！ 躲してからでんこうせつかで近づけ!!」

『ピツカア!!』

「させないよールカリオも移動してもう一度ボーンラツシュ!!」

『バウウウ!!!』

俺が口を開いてでんこうせつかを指示したためにコルニもそれに反応してルカリオ
に向かつて叫ぶ。ピカチュウが向かってきたためにルカリオがボーンラツシュででん
こうせつかの勢いのまま反動をつけて殴ろうとしてきた。だが、それも軽々とピカチュ
ウがでんこうせつかで避けたためにルカリオが「動いた」。

——それは、ルカリオがでんこうせつかで避けられてから勝手にピカチュウに向
かつて近づきグロウパンチを放とうとして走る行動だった。グロウパンチがきた突然
の行動だったがピカチュウは驚かずにそれを避けることができた。

だが、このままでは駄目だとハルカが間に入って言う。

「はいそこまで！ルカリオ、ちゃんとコルニとバトルしなきゃだめよ」

『バツシヤア!!』

「ごめんハルカ…私が注意してなかったから」

『……バウウ』

「ほら反省したなら改善方法考えてから次行くぞ。いつまでもさっきのミスを引きずるとまた何度も繰り返し返してトラウマになるからな」

「うん…そうだね」

『バウウ…』

「うーん…でもコルニとルカリオは強いし、絆も強いから余計にバトルではぎこちなく動いてるかも？」

「あ、やっぱりそう見える？ルカリオとちゃんと指示してバトルするって言うのが何だかよく分からなくて…私たちはずっと小さなころから一緒にいたから…」

『バウウ…』

コルニ達は幼い頃からずっと一緒にいた。それこそ修行や遊び…ある意味、妹達によ

うな関係ができているのだろうと思う。幼い頃からずっと一緒にいたからこそ、あのよ
うな自由奔放なバトルスタイルができており、通常ならば強くてとてもいいバトルがで
きるかもしれないと俺は考えていたが、絆が必要なメガシンカにはそういったフリーダ
ムなバトルはできない。つまり、幼い頃から一緒にいた強い絆だからこそ余計にバトル
ができなくなっているのだ。コルニとルカリオは何度も何度もバトルスタイルを直そ
うとしているけれど、幼い頃から次第に形成されていったやり方を変えるのは難しいか
らこそ落ち込んでいる。でも大丈夫だと言って俺はコルニ達を慰めた。

今までずっとやってきたバトルスタイルを変えるということが少しやりにくいとい
うのは俺も分かるからだ。

例えば俺が旅をしたシンオウ地方でのドダイトスのスピード戦法から重力のパワー
タイプ戦法へ変えていった時は、進化をして急激に変わってしまった身体をうまくバト
ルに活かすようにするためだった。そして進化をした後、身体が大きく変わったために
俺が考えて重力重視なバトルの指示をしたが…それを聞いて今までとは違ったやり方
に少しだけやりにくそうにしていたのを見ていたし何度も改善して努力してきたのだ。

ドダイトスとのバトルでそれを知ることができたからこそ、ルカリオ達の表情や心境
もすべて分かる。今までやってきたバトルスタイルを変えるということは…バトルの
戦法を変えるのと同じぐらい困難なやり方ということなのだから。

でも、このまま諦める必要はないというのも分かる。それは、ゆっくりと時間をかけて練習したことによってドダイトスのバトルスタイルがスピード戦法から変わり、ようやく使いこなせるようになったパワータイプ戦法となったのだから…努力すれば確実にできるということになるだろう。

…でもまあ、俺たちのやり方を意識して、コルニやルカリオもいつかはそうなるだろうと信じてバトルをし続けているが…このままではいけないか…。

「よし、鬼ごっこでもやるか」

『ピツカア!』

「あ!もしかして前にやった修行ね!!」

「へ!?修行…?」

『バウウ…?』

ハルカは以前俺たちと旅していた時にやった修行のことを覚えているからこそ笑顔で反応したのだろう。でもコルニとルカリオは一体どんな修行なのか期待しながらも疑問を浮かべて首を傾けていた。

鬼ごっこは子供たちが遊ぶようなおにごっこだけれど、今回の修行はある意味バトルも含めた鬼ごっこことなる。ポケモンと人間が一緒になって逃げたり戦ったり、ゲリラ戦

法をして襲撃したり……まあいろんな意味で戦いとなって捕まえるという【遊び】であり修行方法になるのだ。

そしてこれを似せて修行方法として作ったのが妹達が修行した「かくれんぼ」であり、鬼ごっこはそれよりも攻撃的な修行方法となっている。まあ鬼ごっこで一番違うルールが、捕まえるにはポケモンを倒すということが前提条件であり、逆に逃げる方は鬼のポケモンたちをすべて倒すという方法になっているということだろう。

——でも今回は逃げることを最条件として鬼のポケモンをすべて倒さなくてもいいというルールでいこうと思う。

これは、コルニとルカリオのメガシンカを使いこなすための修行なのだから強くなる必要はないということと、この修行によってポケモンと人間の絆を一気に深めていき、癖を治そうというちよっとした強引なやり方なのだから。……まあ駄目だったとしても他のやり方を考えていけばいいか。

そしてコルニ達の絆を深めていくためにとりあえず俺たち全員が鬼となって、逃げるのがコルニとルカリオにした。鬼ごっこで俺とハルカだけだと少ないと感じ、ほとんど仲間たち全員で捕まえに行こうと考えてセレナたちも参加してもらうことにした。セレナたちは最初バトルをしている時、俺たちから離れた場所で見守っており、鬼ごっこをすると聞いたら何やら面白そうな表情を浮かべ、そして興味深そうに鬼ごっこ以外に

もかくれんぼのやり方を聞いていたりした。

ユリーカとデデンネは時間を見てもらい、荷物などを監視してもらおうことにする。あと俺たちが鬼ごっこをしている間に悪党がユリーカ達を狙っては大変だと考え、ピカチュウもその場においてもらった。ユリーカとデデンネは心底不機嫌そうな表情を浮かべており、鬼ごっこをやりたいと言っていたが、これはコルニ達の修行だということ、いつかはまたやろうと言ったために機嫌が直ったようだった。

「はいじゃあいくよー！今からコルニとルカリオが逃げて、その後5分後にサトシ達が追いかけるからね！終了の合図はデデンネとピカチュウのかみなりだよ！」

『デネデネ!!』

『ピツカツチュ!!』

「よし行くよルカリオ!!絶対に逃げ切ろうね!!」

『バウウ!!』

「それじゃあ——始め!!!」

『デネ!』

『ピツカア!』

ユリーカ達による始まりの合図とともにコルニとルカリオは走り出して行った。そして周りにある木々によつて隠れるかのように走り、すぐに姿が見えなくなる。

幸いここは鬼ごっこに最適な森の中であり、今回の修行では鬼ごっこの範圍を森の中と決めている。それにもしも道に迷った場合は空に向かって技を放つように言つてあるため大丈夫だろう。

だからこそ走り出したコルニとルカリオに、俺たちは笑みを浮かべながらも鬼が捕まえるに行く【その時】を待った。

第二百二十四話～兄は鬼ごっこをする～

「ケロマツは集中して待機、ヤヤコマは空から監視していてくれ」

『ケロ!』

『ヤツコオ!!』

「…よし、やるぞ」

「サトシかつこいいい…はう!!」

「うわ…セレナ大丈夫!?!」

「セレナ…気絶しちゃ駄目ですよ……」

「…とりあえずセレナ…早く起きろ」

「うう…サトシがそういうなら起きる!!」

「起きるの早いかも!？」

「ほらこつち来い。コルニとルカリオのメガシンカ計画について話すから…」

こんにちはは兄のサトシです。俺たちは今からコルニとルカリオの絆を深めていき、癖を直すという強硬策として鬼ごっこをしていこうかなと思っています。

ヤヤコマとケロマツにはコルニ達が近くに來ていないかを監視してもらい、もしも來た場合はすぐに俺が特攻して捕まえるというふりをして逃げてもらう。コルニ達には聞かれたくない内容だからこそ離れてもらうのだ。

そして通常の修行目的で行う鬼ごっことは違うため、俺はセレナたちにある作戦を話していく。話していった内容にセレナたちは納得し頷いていった。

これでメガシンカが少しでもできるようになるとそう信じつつも、やるべきことをやるために俺たちはそれぞれ離れてからコルニ達を追いかけに行く——。

.....

「はあ…はあ…大丈夫ルカリオ？」

『バウウ』

「良かった…でもここまですれば追いつけないよね？」

『バウウウウ!!』

コルニ達はサトシ達と鬼ごっこをするために逃げていた。

コルニは人間なため、ポケモンであるルカリオよりも体力が少ない。そのためコルニの体力がなくなり休んでいる時はルカリオがちゃんと周りを見て確認しつつも、コルニのことを心配し…コルニはというとルカリオが大丈夫かどうか心配しつつも自分の体力が限界になってしまったことに少しだけ苛立っていた。

でも今いる場所は大きな木の上だ。逃げるということは木々を使っても大丈夫だとコルニ達が判断したからこそ登ったのであり、皆に早々見つからないようにするという意味では良い手段だと考えていた。途中で木に登る際、コルニが足を滑らせて危うく地面に激突しそうになったが、すぐにルカリオが助けに行き…そのままルカリオの力を借りて登ることができた。

「サトシ達は…来てないか…」

『バウウ…ツ!!?』

「見つけましたよ!!」

『リイマ!』

『ホツビイ!』

「嘘っ!?それありなの!!?」

『バウウウ!!?』

「ふふふ化学には不可能なんてありませんよ!!」

『リイマリイマ!!』

『ホツビ!!』

コルニ達は登った木で警戒しつつも休憩をしていた。その下で急にシトロンたちの喜んでいような叫び声が聞こえたために驚く。そしてコルニ達は警戒しながらも木の下を見るとシトロンたちが見つけたと笑顔でこちらを見ていた。その近くには大きなルカリオに似せた機械があつて…それはおそらくシトロンが作り上げたものだろうということが分かってしまった。そしてその機械のせいで見つかってしまったという

ことも。

ドヤ顔でシトロンが説明したその機械はどうやらルカリオの波動を探知し、探し当てるといふものらしく、珍しく成功した機械だとコルニ達は感心していた。でもそうしている間にシトロンがハリマロンを使って木に登ろうとしているため、感心するだけだとすぐに捕まってしまうと考えて周りを見てからどうするのかお互い顔を見合わせてから頷く。

「行くよルカリオ…突撃開始！」

『バウウウ!!』

「ホルビー、マッドショット!!」

『ホッバイ!!』

「ルカリオ避けて!そのまま右の木にジャンプ!!」

『バウウ!!』

「え、うわツ!!? コルニ危ない!!!」

『リイマ!!?』

『ホッバイ!!?』

「大丈夫よシトロン!そして絶対に捕まらないんだから!!」

『バウウウ!!』

コルニがルカリオに捕まったまま、木の大きな枝に向かってジャンプする。着地に成功しなければ大怪我するだろうというコルニ達の行動に対して危ないとシトロンが叫ぶ。だがコルニ達はお互い平然としながら無事に着地し、強気な口調で大丈夫だとシトロンたちに向かって言う言葉と共にまた木々にジャンプしながら逃げていった。その大胆な動きと危険を伴っても平気だという行動を見てシトロンは茫然と逃げていく姿を見て追いかけることをしなかった。

——シトロン達はただコルニ達の行動が少し驚いたように……でも作戦通りだという表情で笑みを浮かべて立っていただけだった。

「ふう……ここまでくればもう安心安全間違いなしだね！」

『バウウ………っ!』

「それはどうかしら！」

『フオコ!!』

木々からジャンプした後、コルニ達は小さな川がある場所へ来ていた。そこは森の中にある小さな川辺のような場所であり、少し休憩するにはいいところだと考えてコルニはルカリオに向かって地面に降りてくれと指示をした。そして小さく伸びをしてから誰もきていないと考えて叫ぶ。でもそれは違うと言うかのようにセレナとフォッコが姿を見せたためにコルニ達はすぐに体勢を整える。

セレナたちが姿を現したことにコルニとルカリオが警戒し、すぐに逃げていこうとした。でも後ろを振り向いて逃げようとするハルカとバシャーモが逃げ道を塞いでいたために逃げるのが容易にできなくなってしまった。

「ここから先は通さないわよ！」

『バツシヤア!!』

「おとなしく捕まりなさい!!」

『フォッコ!!』

「そうはいかない! ルカリオ、私の指示を聞いて動いて: フォッコに向かってはどうかだん! 次にバシャーモに向かってグロウパンチ!」

『バウウ!』

「バシャーモ、グロウパンチを受け止めて!」

『バシヤア!』

「フオツコ、めざめるパワーで防御しつつ回避!」

『フオコ!』

「今のうちに逃げるよ!」

『バウウ!』

「あ、逃げた!？」

『バシヤ!』

「追いかけてよう!!」

『フオコオ!』

「ルカリオ、もう一度はどうだん!!」

『バウウ!!』

「うわ危ない!!」

『フオコオ!!?』

「くっ!?!バシヤアモ、かえんほうしゃ!!」

『バツシヤア!!!』

コルニは鬼ごっこということとで鬼のポケモンを倒すという条件は含まれていなかった

たため、捕まるわけにはいかないと戦闘になる前にフォッコとバシャーモに攻撃を指示して、隙をみて逃げていく。

コルニとルカリオの様子を見てこのままバトルするのかもしれないと思っていたハルカとセレナだったが、あっさり走って逃げていく様子を見て驚いてしまい、一瞬そのまま動けずにいた。でもすぐに我に返って走り出し、追いかけてやうとするがコルニが後ろを見ながらはどうだんを指示したせいでルカリオの放たれた攻撃に対して防御することに夢中になっていたためにコルニ達を見逃した。

——セレナとハルカはそれぞれ逃がしてしまったコルニとルカリオに悔しうだったが、笑みを浮かべてユリーカの元へ行くために歩き出していた。

「ここまでくれば……っでもう安心できないねルカリオ」

『バウウ……』

「でも、ありがとう。私の指示をちゃんと聞いて……私のことを守ってくれて。さすが私の相棒だねルカリオ!!」

『バウ……バウウ!!』

コルニは鬼ごっこが始まった時からの出来事を思い出し笑みを浮かべてルカリオに

向かつて言う。ルカリオは少しだけ照れていたけれど、自身の腕にあるメガストーンを無意識のうちに撫でて、先程の戦いを思い出していた。鬼ごっこだからこそ逃げるのが目的のこの戦いでは、自分が倒れてはいけないということ、トルニを守りながら戦わなければいけないということから通常のバトルとは違って余裕がなかった。

だからこそいつも勝手に技を放つたり攻撃したりする「勝ちたい」と思えるバトルができず、トルニの指示を聞くことで精一杯だったのだ。でもそのおかげでトルニが喜び、そして笑顔でありがとうと礼を言われることにルカリオは嬉しかった。トレーナーの指示をちゃんと聞いてバトルするその行動に、勝ちたいという意志よりも先にトルニを喜ばせたいという気持ちの方が強いとルカリオは感じていたのだ。

そしてルカリオ達が先程の逃走での出来事を思い出し、笑顔で話していたら足音が聞こえ、誰かが来ると分かりすぐに警戒態勢に移った。

「よお…その様子だと少しは鬼ごっこしたかいがあつたかもしれないな」

『ケロオ』

『ヤッコオ』

「サトシ…もしかして最後に逃げなくちゃいけない鬼になるのはサトシってことになる

のかな？鬼ごっこの終了時間もそろそろだろうし…」

『バウウ…』

「まあそうなるな…でも、コルニ…この鬼ごっこはポケモンに一撃を入れられるかどうかで終了させようぜ。つまり通常のバトルと同じってことだ」

『ケロケロ！』

『ヤッコオ!!』

「そう…良いわよ！…ルカリオ！絶対に一撃入れて勝とうね!!」

『バウウウ!!』

サトシ達は今までのバトルとは違い、ルカリオがコルニを見てちゃんと指示を聞こうとする姿勢になっている様子を見て笑みを浮かべて満足そうだった。

でもまだ鬼ごっこは終了したわけじゃない。でもこのままコルニ達がサトシから逃げられるかと言われたら否と答えるだろうと思えるぐらいサトシ達は強いとコルニ達は知っている。だからサトシはこの場ではルールを変えることにしたのだ。逃げるバトルから勝つバトルへ…ケロマツとヤヤコマの一撃がルカリオに当たるかどうかというルールで最後にしようと言ったのだ。それは、コルニとルカリオがちゃんと指示を聞いて動くかどうかの様子を見ることが鬼ごっこの結果が出たかの最終確認のため。

。コルニとルカリオは笑顔で頷き、そして口を開いて指示を出そうとした――

・・・・・・・・・・・・・・・・

「さん……にい……いち……終了！つとデデンネにピカチュウ、お願い！」

『デネデネエ!!!』

『ピツカツチュウ!!!』

デデンネとピカチュウが揃って空に向かって電撃を放つ。今ここにいるのはユリーカとシトロロン、そしてハルカとセレナだ。彼女たちは最初に休憩していたこの場所でサトシとコルニ達が帰ってくるのを待ち、時間になるまで休憩していた。そして電撃を放つてから少しするとサトシ達が帰ってきたのでユリーカとデデンネ、ピカチュウが迎えに走る。

「お疲れ皆！結果はどうだった!？」

『デネ!？』

『ピカピカ?』

「私たちの負けだよ…これで何十連敗かなルカリオ…」

『バウウ…』

「でも、良い感じにバトルできてたと思うけどな」

『ケロケロ』

『ヤッコオ』

「本当!？やったよルカリオ！よしこのままメガシンカちゃんとできるように頑張ろうね

!!」

『バウウ!!』

「ほら、そこで立ち止まって話してないでこっちに来ててください！お菓子と紅茶を用意してますから！」

『リイマア!』

『ホツビイ!』

「それにマカロンもあるわよ！」

『フオココオ!』

「うん凄く美味しい！早くしないと全部食べちゃうよ!!」

『バツシヤアモ!!』

『ゴンゴン!!』

「つてゴンベ何時の間に…」

「あ、待って！私たちも食べる!!!」

『バウウ!!!』

「私も私も！」

『デネデネ!』

「はあ…まったく仕方ねえな」

『ケロオ…』

『ヤツコオ…』

『ピイカ…』

ユリーカ達はコルニとサトシの鬼ごつこの勝敗を聞く。すると…鬼ごつこの結果はサトシ達の勝利が決まり、コルニとルカリオは少しだけ落ち込んでいた。そんなコルニ達にユリーカ達は慰めていく。

でも今までとは違つてとても良いバトルができたと言つたとサトシ達は感じていたのだ。

まだまだやるべきことは多いけれど…それでもこれからもつと頑張つていけば大丈夫

夫だとサトシはそう考え：笑みを浮かべながらもお菓子を食べようとしている皆のもとへピカチユウたちと一緒に歩いて行った。

第二百二十五話　妹はシンジと話す

「えつと…これは…?」

「ふん、これも分からないのか…これは——」

　　こんにちは妹のヒナです。シンジさんが私の家に泊まりに来ました。あの後いろいろとシゲルさんとバトルをして壮絶な戦いの後引き分けになってしまい両者苛立ちながら舌打ちして別れていきましたよ。とりあえず兄に報告してまたバトルするならどうにかしてもらおうかなと思ってます。

　　——それで翌日、シゲルさんやシンジさんが来て勉強をあまりしていなかったため、暗記などをしないとイケないなと思い行動した。

すると家に泊まったシンジさんがこちらに来て勉強をするのかと聞かれ、泊めさせてくれた恩として勉強を教えにくれることになりました。いわゆる家庭教師みたいになつて教えてくれるんだけど：何だかちよつとだけ辛辣かな？まあミュウツーと最初に出会つた時と同じ感じかなと思えばあまり気にはしない。ちゃんと教えてくれるし、ツンデレみたいなものだと思えば結構面白いと感じるし：。

リザードたちはオーキド研究所に行つて修行をしてくると言つていた。そして母とバリヤードはオーキド研究所に行き、作つたお菓子を差し入れに行くらしい：だから今、家にいるのは私とシンジさんだけだ。

そして私は問題を解きながらもシンジさんのことを考える。あの時何でシゲルさんと喧嘩をしていたんだろうということと、どうしてここに来たんだろうということだ。昨日泊まった時には母がシンオウ地方で何をしていたのかという話と世間話等をして盛り上がったから聞くことができなかつた。それに母からの容赦ない質問攻撃にシンジさんが困つたような雰囲気を漂わせていて、これを兄に見せたらどう思うんだろうと少し笑いそうになつた。まあ、笑つたと気づかれた時点でシンジさんの不機嫌さが急上昇し、いろいろと辛辣さが増してしまうのではないかという直感もあつたから頑張つて耐えたけれども。

だからこそ、今問題を解いて少しだけ休憩している時点で何か話ができるのではない

かと考えて口を開いた。

「あの…シンジさんはどうしてこのマサラタウンに来たんですか？」

「…気まぐれでここに来た」

「そ、そうですか…」

気まぐれでここに来たという言葉に苦笑しそうになった。慌てて手で口を覆い隠そうとするがシンジさんに見られてしまったようだ。でもシンジさんは少しだけ表情が怖くなっただけで本気で怒ったような感じはしなかった。でもこれ以上は話をするこ
とができないだろうと考え、私は問題を解こうと本を見る…。

——けれどその瞬間、シンジさんの声が聞こえてしまったために視線を上げて勉強を中断しつつも話を聞く。

「…気まぐれで、サトシの故郷に来て見たかっただけだ」

「お兄ちゃんの…故郷に…？」

「ああ、あのサトシのように人外を生み出すというマサラタウンがどんな場所なのか気になって来た」

「いや人外なのはお兄ちゃんだけであつて私達とはあまり関係ないですよ!!…あ、でもママもある意味スーパーマサラ人……」

「ふん…やはりな。それにあのオーキド博士もサトシと同じだと思えた。俺のドダイトスの全力で放つた技に直撃しても笑顔で笑い、無傷でいるぐらいだからな」

「…すいませんやつぱりマサラタウンはちよつとおかしいです」

シンジさんの言葉に耐え切れなくなつて両手で顔を覆つた。シンジさんが少しだけ上機嫌になつたのが私には辛い。おそらくオーキド博士については昨日のシゲルさんとのバトルで戦つた時の出来事について話しているのだろう。ドダイトスの技が避けられてたまたま直線状にオーキド博士がいて…その技に当たつたから大怪我をしていふと思つたら無傷でいたということなのだろうきつと…。

でもマサラタウンがすべてスーパーマサラ人なわけないし…まあ一部だけがおかしいのであつてすべてが人外なわけじゃないと…うんそう言いたいかな。

シンジさんは私の言葉に満足そうな表情をしていた。でも笑みは浮かべておらず見た目は少し怒つてるような表情だ。…キレたらオコリザルによく似た表情になるのかなと言えらるぐらい、初対面から見ると怖そうな印象をもたれそうだった。

でも私は兄から話を聞いているし、前世のことも…まあ今となつては完全に忘れてしまつたけれど、それでもシンジさんのことはそこまで怖いとは感じなかった。だからこ

そ近所に住んでいるお兄さんのような感覚で会話をする。

もう勉強するための気持ちは薄れてしまったけれど、この際だからもう一つ聞きかかった話を聞こうと思いい口を開いた。

「あの、シゲルさんの事——」

「チツ……」

「いやあの…何でそんなに敵視してるんですか？昨日会った時が初対面でした…よね…？」

「…俺は知らん。サトシから聞け」

「ぶっちゃけ今お兄ちゃんから話を聞くことはできないです…勉強のこともあるし…だからシンジさんが駄目ならシゲルさんから話を聞こうかなと…」

「……お前はつくづくサトシの妹だな」

「それ褒めてます？それとも貶してます？」

「両方だ」

シゲルさんの名前を出した途端嫌そうな表情を浮かべ、すぐに舌打ちをした。

まあそれは不機嫌なシンジさんよりもキレた時の兄の方が怖いから私は苦笑して委

縮せずどうしてなのかちゃんと口に出して聞いた。でもシンジさんは私からそっぽを向いて苛立ったような雰囲気を漂わせている。

——そんな中でただ不思議なのは、近くに置いておいたシンジさんのポケモンが入っているボールたちがシゲルさんの名前を出した途端ゆらゆらと揺れていたことだろう。おそらく昨日会った時よりも前に何かあったのではないかと私は考えてしばらくシンジさんの顔を見つめてじつと待つ。

…まあ本当に聞かれたくない話なら聞くつもりはないし、シゲルさんから話を聞いても同じだった場合は諦めるつもりだ。でもそれでもやっぱり興味はあった。シゲルさんとシンジさんは兄のライバルという関係で繋がっており、私は兄のライバルという共通点からすぐに仲良くなれるのではないかと予想していたのだ。でもそれは違っており、いきなり険悪な雰囲気それぞれ会いたくなかったという表情を浮かべて辛辣な言葉…つまり毒舌で口喧嘩を始めていった。

兄とライバル関係だからこそ、その険悪な雰囲気には興味を持ったのだ。それに兄から話を聞くと今ではできない。…兄に勉強しろと言われていることもあるし、電話してシンジさんとシゲルさんのことについて聞いたら寒気のある笑みを浮かべて勉強はどうした？と聞かれるに違いない。兄がカロス地方からマサラタウンに帰ってくるのがこんなにも怖いだなんて思ってもみなかった。それにアーロンさんの件もあるし

…。だからこそ、今は目の前にいるシンジさんから話を聞くしかないのだ。

頑張つてシンジさんをじつと見つめてみると、シンジさんがため息をついてこちらを見た。その表情にシンジさんは私が諦めていないということが分かったのか：それともシゲルさんから話を聞かれるかもしれないということが分かったのか話をし始めてくれた。

「…サトシが前に話してくれたんだ」

「お兄ちゃんか？えつとそれってシゲルさんのことですか？」

「ああそうだ。俺に向かつてあの優男：：シゲルのことを一番のライバルだって言つてな。話している時のサトシが本当に楽しそうな笑みだったから試したまでだ」

「あー……………」

なんとなく分かってしまった。おそらくシンジさんはシゲルさんが兄の【一番】のライバルということが気に食わないのだろう：：シンジさんにとって兄とはよっぽど影響のある存在だったに違いないはずだから…。このマサラタウンに来て、兄に会えるかもしれないという期待を込めてきたらいなくて：：オーキド研究所に行きシゲルさんに真っ先にあつてしまったからその話を思い出して苛つき、試したのだろう：：その強さ

を。

——出来れば私としてはシンジさんにオーキド研究所に行った時すぐにゴウカザルと会ってほしいと思っていたのだが、それはシゲルさんとのバトルによって長い時間をかけた後、その願いは叶った。まあその時はミュウツウの乱闘などの件もあり、皆が皆ボロボロでシンジさんとゴウカザルの感動の再会にはならなかったけれども…：それでもちゃんとゴウカザルがシンジさんに向かって笑顔で話ができ、良かったと思う。また会おうとシンジさんが言っていたから、一応仲は良くなったのかなと皆で微笑みながらも…。

でもそれよりも、シンジさんからの話だけだとシゲルさんが不機嫌になってしまったのには説明がつかない…。シゲルさんは兄から何を言われて不機嫌になってしまったのだろうか…：まあ予想はできてるのでここはあまり考えないようにしようと思った。

そしてその後、シンジさんから不機嫌になったためにかなりスパルタな勉強をされることになってしまったんだけど…：それは仕方がないと思って諦めておく。

第二百二十六話く妹は増えた状況に困惑するく

「あーようやく見つけたぞシンジ!!」

「まったく…煩い奴が来た」

「煩くねえよ!!なんだってんだよ!!!」

「十分煩いよ。君の知り合いかい？」

「……ふん」

「何このカオス…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

こんにちは妹のヒナです。シンジさんがマサラタウンの私の家にいる時に、オーキド研究所からシゲルさんがもう一度バトルの再戦を申し込みに来ました。

まあ当然シンジさんはそのバトルを受けようとして、私達もトレーナーになるならばバトルを見て学べる部分がたくさんあるだろうと言われ、シンジさんに強制的にオーキド研究所へ連れてこられました。

：まあ私としてもバトルで学べる部分があるということとはちゃんと分かっているし見たいと思つてもいる。でもこの前の初対面時のあれはちよつと普通とは考えられなかつたし巻き込まれる可能性があつたために見ることはできなかつた。でも前とは違つてシゲルさん達の間になんか少しだけ雰囲気は和らいでいるように見えた。もしかしたらシゲルさんとシンジさんはバトルしたから少しはお互いを認め合つたのだろうかとか：いやでもやつぱりシンジさんとの勉強していた時の会話からそれは無理かと考えて私たちは顔を見合わせて苦笑する。そしてはぐれないようにシンジさん達の後ろを歩いていった。

オーキド研究所の広い場所でバトルしようということ、研究所内に入らずそのまま行こうと話していたら、こちらに向かつて走ってくるジュンさんに会いました。

大きな声で叫んでいるジュンさんはシンジさんと同じように兄のライバルになる。でも何でここにいるんだろうと思つていたら、シンジさんが舌打ちをして嫌そうな表情

で睨んでいた。それに気づいてさらに大きな声で反応するジュンさんに、シゲルさんが微妙そうな表情で素直に声の大きさについて感想を言い、そして誰なのかシンジさんから話を聞こうとしている。

でもシンジさんから話を聞く前に、ジュンさんがシンジさんたちを含めて私たちに向かって指を指しながら叫んだ。

「サトシは何処だ！シンジお前バトルがしたいって言って先に行っただろ！罰金だぞ罰金!!」

「煩い喧しい静かにしろ！」

「な、なんだってんだよー!!!」

「耳が痛くなる…大丈夫かいヒナちゃん達？」

「は、はい…大丈夫です…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

「それで！サトシは！何処だ!!?」

「サトシならカロス地方にいるよ。あと君の声もうちよつと音量下げてくださいかないかな？近所迷惑になる」

「何だお前…!!」

「僕はシゲル。サトシの幼馴染であって、『一番』のライバルさ」

「……チツ」

「おや？何か不満でもあるのかいシンジ君？」

「先程の言葉は訂正を加えた方が良さぞ。サトシの『元』ライバル」

「……………」

「何だあいつら？仲良くないのか？」

「あのジュンさん…こんには。初めまして」

『ガウウ』

『ピチュ』

「何だお前!? ってか色違いのリザード!! 始めて見たな!」

「私はサトシの妹のヒナです…それでこっちは仲間のリザードとピチュー」

『ガウウ!』

『ピツチュ!』

「そっか! よろしくな!!」

「はい」

「じゃあヒナに聞くけど! サトシは何処にいるんだ!?!」

「カロス地方だ!!」

「お、おう…!?!」

「…はあ」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

どうやらジュンさんはマサラタウンへ行ってしまったシンジさんの後を追ってきたらしい。しかも兄とバトルしたいという理由で突撃してみたようだ。

…でも今兄はカロス地方に行っているということを、シゲルさんがちゃんとジュンさんに向かって答えてくれた。

でもその後自己紹介をしている時にシンジさんが舌打ちをして不満そうな表情を浮かべているのをシゲルさんがからかうかのような口調で言う。そしてシンジさんが勝ち誇ったような表情に変えてシゲルさんに向かって挑発的な言葉で言ってしまったからお互い寒気がするような眼差しで睨み合ってしまった。これだと初対面時に会った時のあれと同じだと私たちはため息をつく。

そして状況が分かっていないのかジュンさんが微妙そうな表情で首を傾けており、私たちは自己紹介をしなければと挨拶しに近づいた。それでもやはり大げさに声を出し

て話したり反応したりするそれは正直もう少し小さな声で話してもいいのではないかと考えてしまうぐらいだ。耳は痛くないけれど、シンジさんが舌打ちしたりシゲルさんが正直に頼いと言ったのもよく分かってしまったと思った。

そしてシゲルさんの言葉を聞いていなかったのか兄が何処にいるのか私たちに話しかけてきたが、ブリザードのような状態になっているシンジさんとシゲルさんが仲良く叫んだためにジュンさんが驚き、彼らから一歩だけ退いてテンションが下がったようだった。

そして私たちはそんな様子にため息をつき、オーキド研究所に向かおうと声をかけたのだった。

.....

「何!?! シンジと……えつとシゲルだっけ? お前等バトルするのか!!」

「頼い喧しい黙れ」

「なんだよ! なんだってんだよー!!」

「はは…うんそうだね。そろそろ決着をつけたいと思ってんだ」

「じゃあ俺も一緒にバトルする!!サトシのライバルなら俺も戦う権利があるだろ!!」

「そんなものあるか!!」

「権利って何だろう…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

ジュンさんは少しだけ話からずれていることを言いながらもバトルがしたいと言って叫んでいた。でもシンジさんやシゲルさんと全員で戦いたいと言っているために、トリプルバトルのようになるのかと私たちは考える。でもこの場合トリプルバトルは何か違うような気がしたため、言い方を変えるなら三つ巴バトルになるのかな?と首を傾けた。

シゲルさんとシンジさんはジュンさんと戦うよりも先にシングルバトルでお互いの勝敗を決めたいと思っているようだった。おそらく初対面時にやったであろう激しいバトルの決着をつけたいためにそう考えているらしい。ジュンさんのバトルしたいという希望に耳を貸さず、後でやると言われてしまったためジュンさんは微妙そうな表情だ。

でも、ジユンさんがこちらを見て何かを思いついたような表情をしたために状況は一変する。

「じゃあヒナを入れて2対2のダブルバトルしようぜ!!それなら文句ないだろう!!」

「え!?!ちよつと待っててください!私はやりませんよバトル!!」

『ガウウ…!』

『ピイツチュ…!』

「え、リザードもピチュもなんかやる気出してる…!?!」

『ガウウウ!!』

『ピチュ!!』

「だからやらないって!シンジさん達のバトルを見るだけに来たんだから…」

「ヒナちゃんの言うとおりだ…というよりも、僕たちは先にこの仏頂面のシンジ君と戦いたいと思っていた所だし、ヒナちゃん達を巻き込んでしまつては後でサトシに怒られてしまうよ」

「そうか…別に俺はどっちでもいいがな」

「何だいシンジ君?ヒナちゃんを巻き込んでもいいと思つているのかな?」

「そうじゃない。ただ将来トレーナーになるならば今のうちに訓練しておくのも良いだ

ろうと思っただけだ」

「……………ああ、何だか君に納得させられたみたいでいやなんだけど、それもいいかもしれないね」

「実際に納得してるんだろう。ふん、これだから【元】トレーナーは…」

「サトシにバトルスタイルを強制的に変えられた【後輩】トレーナーに言われる筋合いはないね」

「……………」

「何だよ!!結局バトルするのかわしないのか!!?」

「いやだからしませんってば…」

『ガウウ?』

『ピチュ?』

「あのねりザードにピチュ…いまここで本格的なバトルしちやったらお兄ちゃん達に何言われるのか分からないよ?バトルやつたんならとか言われていろいろとスパルタ訓練されるかもだし…」

『ガウ…!?!』

『ピチュ…!?!』

「サトシにスパルタ訓練か!?!それも面白そうだな!!」

「ジュンさん……」

『ガウウ……』

『ピチュ……』

何だか微妙な展開になってきてしまったけれど、結局その後、私たちは頑固としてバトルをするのを断り、シゲルさん対シンジさん対ジュンさんの三つ巴バトルをすることになり……地面が抉れそうな激しいバトルによってフシギダネがキレそうになったり兄のポケモンたちがいいぞもつとやれとばかりに盛り上がった観戦してこんな攻撃方法もありだなと話し合っていたりするけど……まあ私はリザードとピチューが巻き込まれなければ何も問題はなかなと思っただ。

でもその後、兄から電話があったためにシゲルさんが話をして、私達も一緒にバトルをしなければいけない状況になるだなんてこと……

——今の私たちは何も知らない。

第二百二十七話く兄はムスト山へ着くく

こんにちは兄のサトシです。今回ようやくムスト山に来ることができました。ムスト山に到着するまでかなり時間はかかりましたがようやくついてコルニ達はご機嫌そうです。

屋敷にようやく到着し、コルニとルカリオが意気揚々と扉を叩いて声を出して建物の中にいるであろう人に向かって叫ぶ。

しばらくすると扉が開き、そこで待っていたのは…クチートだった。ハルカとセレナがそれぞれ凶鑑を開き、クチートについての説明を見ている。ユリーカもその凶鑑を見てクチートのことを知り、笑みを浮かべて挨拶をしていた。

だが、クチートはずかん通りの姿をしているわけではなかったようだ。凶鑑を見ていたセレナたちがクチートがつけている髪飾りのような部分を見つけた。その髪飾りとなっている部分にルカリオがつけているのと同じような形をした小さなメガストーンがあり、おそらくこのクチートもメガシンカをするのだろうと俺たちは興味を持つ。そして人はいいのかクチートに聞くと、首を横に振っていないといった。そのためこれからどうしようか考えていたら、後ろから花を運んだお婆さんがやつて来たため俺たちは近づく。もちろんクチートも笑顔になりながらもお婆さんに近づき、足に抱きついていた。

「あらあら…元気そうなお嬢さんたちね」

『クチイト!』

「あ、こんにちは!もしかしてあなたが…」

『バウウ…』

「ええそうよ。メガルカリオの件でここへやつて来たんでしよう?…留守番ありがとうクチート、そして皆さんこんにちは。メープルですわ」

『クチイト!!』

「メープルさん…あの、もう知っているみたいですが言わせてください!私達メガシン

力を使いこなせるようになるためここへ来たんです!!メガシンカを使えるようになるため:よろしくお願いします!!」

『パウウウ!!』

「ええもちろん、分かっていますよ。まずはあなた方の実力:見せてもらいましょうか」

『クチイト!!』

「はい!お願いします!!」

『パウウ!!』

メープルというお婆さんはクチイトのトレーナーであり、メガシンカを使うことができる人らしい。俺たちはそれぞれ自己紹介してから、コルニとルカリオが前に一歩前へ歩き、話しかけるのをじっと見守る。だがメープルさんはコルニたちの問題について話はまだ聞いていないらしく、先にどのような状況なのか見てみようと言うことになった。

俺たちはムスト山へ着く前に前に鬼ごっこやかくれんぼ等をして修行という名の疑似バトルを試みたり、バトルでメガシンカを試みたりをくりかえした。何度かやった結果メガシンカをして、コルニの指示を聞いていられる時間は伸びたように感じたが、まだまだそれでも完全にメガシンカを使えるというわけではなかった。

だからこそメープルさんにこれからメガシンカを使いこなすための訓練をしてもら

おうということになったのだ。

「ねえサトシ…このバトルどうなると思う…?」

「あ…まあ今までのバトルからするとルカリオがコルニの指示を聞かなくなる可能性は高いだろうけどな…でもバトルは最後まで分からないのが基本だからどうなるのかは俺にもよく分からない」

『ピイカツチュ…』

「そっか…」

「あ、もしかしたらいきなりメガシンカを使いこなす可能性もあるかも…?」

「いえ、それでもまだよく分かりませんよ…メガシンカを使いこなしたとしても勝てるか否かは…」

「コルニ！ルカリオ！頑張って!!」

『デネデネ!!』

コルニとルカリオ…そしてメープルさんとクチートはそれぞれメガシンカしてバトルをすることになった。俺たちはコルニよりも少しだけ離れた場所で観戦する。

そしてメガストーンによってメガシンカしたクチートを始めて見た俺たちは感動し、

強そうだとそれぞれ感想を言いつつもコルニ達を応援し始めた。でもこのバトルを見ると：俺はルカリオが少しだけ焦っているように感じた。ムスト山に着くまで修行をしていた頃とは違って：小さな異変にも見えた。でもコルニもルカリオと同じような感情を込め、クチートとメープルさんに対して見ていると分かった。つまりコルニもルカリオも同じ感情をメープルさん達に向けていたのだ。

ルカリオに対しては少しだけわかる。それは、メガクチートとなつてメガシンカし、使いこなししていることへの嫉妬か：それともバトルに勝ちたいという今までと同じ好戦的な意味での心境か：まあ修行という名のバトルをよくしているからこそルカリオの性格もなんとなく分かってきたためにそう感じていた。だからつい独り言を呟いてしまったのだ。

「…ルカリオって本当にバトル好きだな」

『ピカピ？』

「へ？どうしたのサトシ？」

「いや、今までバトルとかしてきて思ったんだけど…ルカリオの表情とか戦い方とか…バトルに勝ちたいっていう思いが勝手に身体を動かしているようにも感じたんだよな。それにコルニもルカリオと同じで好戦的だしバトルに勝ちたいっていう意欲もある。

つまりトレーナーとポケモンの気持ちが一緒のように思えたんだ」

「……え？でもそれってトレーナーとポケモンだったら基本的な事だよね!!」

『デネデネ?』

「あ、サトシの言ってること少し分かるかも! コルニとルカリオってバトルしてて負けそうになると凄く悔しそうにしてるし: それに勝つために頑張って努力してるって感じるもの! それに今まで戦ってきたトレーナーやコーディネーターとのバトルは全部勝ちたいって言う目標があつてやってきていたけど……コルニ達は何か違うって感じがするかも……」

「違う……?」

「……セレナ、トレーナーが勝ちたいって思うからポケモンたちもその気持ちに伝えてバトルで勝とうとするのが基本的……まあつまり、ほとんどのバトルで見られるんだ。でもコルニ達はちよつと違う: 俺やハルカのようにトレーナーもポケモンも一緒になつて勝ちたいって望んで行動しているように思えた」

『ピイカツチュ』

「なるほど……確かにそうですね。トレーナーとポケモンは本来バトルで勝とうとするのが普通です。ですがポケモン自身が勝とうとして動くというよりもトレーナーの指示を聞いて動くというのがほとんどですし、好戦的でないポケモンもトレーナーの指示に

応えて勝とうという行動をします。ですがサトシやハルカのようにトレーナーもポケモンも好戦的でバトルで勝とうと真つ向から勝負に挑んでくるというケースは稀ですよ…それこそ人間とポケモンの考えが一致し、お互いが信頼し、懐いていないとできないことなんです」

「えつと…つまり、ルカリオはコルニのことを信頼しているし、好戦的で勝ちたいって思ってるからこそバトルで勝手に攻撃したしているってこと？」

「まあ他にもいろいろと理由はあるだろうけどな…」

『ピッカ』

「そうですね…サトシやハルカのポケモンたちはちゃんと指示を聞きますし、勝手に攻撃はしません。トレーナーとポケモンの気持ちが一致していますから…今行っているバトルを見ての感想でしかありませんが…ルカリオ自身の勝ちたいという気持ちの方がコルニの気持ちよりも強いというように感じられます。だからあのような行動をしたのではないかと…」

「確信は持てないし全部予想でしかないけど…ルカリオの方が勝ちたい気持ちが強いっていう可能性は高いよな…」

『ピイカツチュ…』

「じゃあコルニとルカリオの気持ちは噛み合っていないってこと？」

「ううん…たぶんコルニもルカリオも勝ちたいって気持ちと同じかも…でもそれでもお互いの思考が全部一緒とは限らないよ」

「な、何だかよく分からなくなってきたよ」

『デネデネ…』

俺たちはコルニ達のメガシンカバトルを見ながらも話しあう。その話はルカリオに對してのことだった。おそらくルカリオはコルニと同じでバトルに勝ちたいと望んでいるのだろう…。そしてコルニの考えと同じように、バトルに勝つために何をすればいいのか指示を聞きながらも、自身でこうやればいいと勝手に敵となったポケモンに攻撃してしまっただろうと思う。つまりは、ルカリオが勝手に攻撃する根源となっているのは「バトルに勝ちたい」という感情だ。コルニと一緒に育って、同じようにバトルを学んで…そして修行してきたからこそコルニと似たように考えてしまったのではないかと思う。コルニがバトルで勝ちたいと望むからこそルカリオが望む…というわけじゃない、コルニがバトルで勝ちたいと望んでいるようにルカリオもバトルで勝ちたいのだろう。でもそれはトレーナーとポケモンが一緒になって戦うということじゃなく、トレーナーとポケモンのそれぞれの意志をもって戦っているということになったのだ。そしてそんなバトルで勝ちたいという一致しているはずの考えが何処かずれてしまつて、メガシンカで絆が不一致となつてしまひ…暴れてしまつた原因になつたのでは

ないかと思う。

だからこそ鬼ごっこやかくれんぼでバトルは一人でするものじゃないと言うことを教え、コルニ達の考えを改めさせ、メガシンカをできるようになるかなと思っただけれども…まあ無理だった。修行によつてルカリオはコルニの指示をちゃんと聞いてバトルをするという考えを持つてはくれたが…それでもまだまだ問題はあつた。そして現在メープルさんとの戦いもメガシンカしたルカリオが暴れ、バトルは強制終了となつたのだった。

「メガシンカをするための絆…か」

『ピカピ?』

「なあピカチュウ…お前がもしメガシンカするとして、俺たちはちゃんとメガシンカを
使いこなすことができると思うか…?」

『…ピイカツチュ!!』

「…そうか、ありがとう」

第二百二十八話　兄は花を見る

「花を生ける…かあ」

『バウウ』

「何だか拍子抜けって感じがするかも…」

『バツシヤア…』

「まあまあそんなこと言わずにやろうぜ。多分メープルさんも何か考えがあつてこれやつてもらおうとしてるんだろうし…」

『ピツカツチュ』

「私は楽しいよ！フォッコと一緒に花を生けるのって！」

『フォッコ！』

「とにかくやれと言われたらやるまでですわ！僕はこの修行が終わるまでにこの【生け花くん1号】を完成させてみせます！」

『リイマ！』

「…え、もうそれ一号って言わないよねお兄ちゃん？」

『デネデネ？』

「いいや！完成してこそ一号なんだよユリーカ!!」

『マアロ!!』

こんには兄のサトシです。ムスト山でメープルさんからメガシンカするための修行が始まるかと思いきやいきなり生け花をしてくれと言われて皆が戸惑っています。しかも今日で5日目になる。…メープルさんは満足そうな表情を浮かべているだけで何も言わずにいるし、コルニとルカリオは早くメガシンカを使いこなさなきゃと言う焦りから不満そうだ。

花は最初はメープルさんが持つてきてくれたのでその花々を使って生けたのだけけれど、次からは自分で花を採ってから生けるようにと言われた。

メープルさんがコルニヤルカリオに向かって山をじっくり見た方が良いとさりげなくアドバイスをしていたからこれも修行だと分かるけれど、俺やピカチュウはどちらかというとバトルして勝つことを積極的に行っているためこういうバトルとは無縁なこ

とはあまり好まない…もちろんハルカやコルニもだ。

まあシトロンが花を生ける機械を作ろうと新たな目的を考えたり、セレナとフォッコが山で見つけた花を生け花にしたり押し花にして楽しんだりと飽きずにやっているからまあ不満はないのだけでも…。

このまま永遠に続くわけじゃないとは思いますが…とりあえずしばらくの間は様子見ようかなと思った。

「…でもまあ、何とかなるか」

『ピイカ?』

「ほら、コルニとルカリオの花って最初はそれぞれ生けた花しかなかったけど、今は違うだろ?」

『…ピツカツチュ!』

「花の違いは、心の違いって言えるかもしれないから…」

『ピカピカ…』

ピカチュウと俺はいつも昼間に花を生ける部屋に…今は誰もいない部屋にいた。そこは微かに花の香りが漂っており、くさタイプのポケモンが好みそうな場所だと感じ

た。現在、他のみんなは食事の準備や明日の花は何にしようかと考えるためにそれぞれ他の部屋へ行っている。そんな中、俺とピカチュウは今日生けた花を見に部屋に行き、今までの違いを考えていた。

今までのコルニとルカリオの花はそれぞれが別のを生けていたのが特徴だった。メープルさんは何も言わなかったけれど、これはポケモンとトレーナーの心の象徴なのではないかと思えたのだ。セレナも同じように感じていたのか、花を生けながらもポケモンとトレーナーの個性が見れるようだと俺に向かつて言っていたからよく分かる。幸いセレナの話はコルニ達には聞こえておらず、まだ何で生け花なのか分かっていないのかもしれない。でも生け花がトレーナーとポケモンの心を表していると言うのなら、今日生けた花瓶にあるこの一輪の大きな花はコルニとルカリオの心の変化であり、良い兆候なのではないかと思えたのだ。

もちろんメープルさんは何も言わずに明日もよろしくねと言っていたため、コルニとルカリオは残念そうにしていたけれども……。

「あ、サトシ」

「ようハルカ…あれ？コルニとルカリオは？」

『ピイカ？』

「確かメープルさんと呼ばれて何か話していたのは見たよ？でもあれでちゃんとメガシンカ使いこなせるようになるのかな…」

「セレナから話聞いたのか…まあコルニにはコルニのやり方…俺たちには俺たちのやり方があるんだろうな」

『ピカピカ』

「修行の仕方ってこと？なんだかあまり考えるのは疲れるかも…」

「はは…でもまあメープルさんと呼ばれたんならそろそろ終わるだろ。花を生けるのも…ルカリオが暴走するのも」

『ピッカツチュ！』

「そうなるというわね…」

俺とピカチュウは寝室となつている部屋へ行く。そこにいたのはハルカだけで…先程はコルニとルカリオもいたのにどうしていないんだろうと首を傾けたら教えてくれた。ちなみにセレナやシトロン、ユリーカ達はキッチンに行っているためにここにはいない。

ハルカはセレナから花の修行方法についての予想を聞いたのかいまだに半信半疑だけれども、でもメガシンカを使いこなせたらいいとコルニ達のことを考えていたよう

だった。

まあ、メープルさんに呼ばれて話をしているようだし、先程の部屋にあったコルニ達の生け花を見ていれば何とかなるのではないかと予想する……とにかくこのまま何も言わずに見ていようと俺たちは思った。

.....

「サトシ……私たちと勝負してくれないかしら」

『バウウ!!』

「勝負? 良いのかやつても……?」

『ピイカツチュ?』

「ええ! メープルさんからも良いって言うってもらったし……なによりも、サトシとバトルして私たちはメガシンカできるんだと証明したいの!!」

『バウウ!!!』

「……分かった。とりあえずここじゃあバトルできないから広場に行こうか」

『ピカピカ!!』

翌日、メープルさんから話をしたコルニとルカリオは真剣な表情で俺たちに向かつて勝負してくれと言う。その言葉に俺たちはお互いに顔を見合わせて驚いた。でもなるほどと納得した。メープルさんがバトルしてもいいと話していたということは、そろそろ大丈夫だと考えて言ったということだ。

それに俺とのバトルでメガシンカを使いこなせるようになりたいのだろう。バトルで何度も負けてしまった俺たちに勝つために…ちゃんと成長しているんだとその証明をして見せるために。

だから俺たちはその言葉に頷いた。そして傍で驚いているシトロロンたちに広場に行くと言ってから行動し、皆が慌てて外に出て観戦している中でソレは始まった。

「行くよルカリオ…メガシンカ!!」

『バウウオオオオオオオオ!!』

「ああ。やつぱりメガシンカは凄いな…ピカチュウ、きみにきめた!」

『ピツカア!』

メガシンカをしたことによつて波動を感じる。今までのメガシンカと同じように力強い波動だと感じるけれど、何処か勝ちたいとそう願う波動に変わったかもしれないなと俺はそう思えた。ピカチュウも同じようでもルカリオから流れた波動を受けながらも

笑みを浮かべて前へ出る。

そして俺とコルニはそれぞれ攻撃を指示するために口を開いた。

「ルカリオ、ボーンラッシュ!!」

『バウウウ!!!』

「ピカチュウ、アイアンテールで受け止めろ!!」

『ピツカア!!』

メガルカリオの使うボーンラッシュは二刀流のように持っているためピカチュウはアイアンテールで躲しつつも、もう一撃を受け流す。その軽い動きにルカリオが悔しうにしていたけれど、今までだったらすぐにコルニの指示とは関係なく勝つために攻撃動作へ勝手に移っていたというのに今はちゃんとコルニの指示を待っていた。その成長が嬉しいと感じる。

「ルカリオ、今度ははどうだん!!」

『バウウ!!!』

「ピカチュウ、10まんボルト!!」

『ピツカアチュウウウ!!』

はどうだんを止めるためにピカチュウが10まんボルトを放って爆発させる。その爆発にルカリオはコルニを見て領き、コルニもルカリオを見て領く。その様子は以前会ったカルネさんとサーナイトのように心を通わせていると感じる：俺とピカチュウもお互いに顔を見てから好戦的に笑みを浮かべた。ようやく、コルニとルカリオの心が一つになり、ちゃんとメガシンカを使いこなせていると：そう確信したからだ。

「心は一つ：景色は二つ：大丈夫だよルカリオ。私たちは今までの修行を無駄にはしない！サトシに勝つために私たちはやるべきことをやる!!」

『バウウオオオオオオオツツ!!』

「はは：お互い認め合ってちゃんと【パートナー】になったんだな：なら俺たちもやるべきことは一つだ！行くぞピカチュウ!!」

『ピツカアアアア!!』

「ルカリオ、グロウパンチ!!」

『バウウオオオオ!!』

「ピカチュウ、ボルテッカー!!」

『ピツカアアア!!!』

ルカリオのグロウパンチとピカチュウのボルテッカーが衝突し、爆発する。その威力は爆風によって吹き飛ばされるのではないかと思えるほどの衝撃であり：そしてそれぞれの技の威力があるようにも感じた。土煙が宙に舞い、黒煙によってバトルがどうなったのかは見えない：。

ようやく見えたと思ったら、ピカチュウがルカリオの前に立ち、メガシンカが解けて倒れているルカリオの姿が見えた。

「ルカリオツ!!負けちゃった：でもメガシンカ使いこなせたよルカリオ!ありがとう!!」

『バウウウ：!!』

「ピカチュウ、お疲れ様」

『ピツカ!』

「ありがとうサトシ：負けちゃったけど、それでもようやくルカリオとやるべきことが見つかったって分かったよ!」

『バウウウー!』

「いや、俺は…というよりも俺たちはただメガシンカがどうなるのか見たくてやったま
でだからな…:気にすんなよ…:そしておめでどう」

『ピツカツチュ!!』

———この後、メープルさんが花を生けることも…修行も終わったと話をし
て、コルニはシャラシテイのジムへ帰ると言っていた。

俺たちと一緒に行くのもいいんじゃないかとセレナたちが話していたけれど、それだ
と俺に勝てるかどうか分からない今、このまま一緒に旅をするのはできないとコルニ達
が叫んでいた。それはつまり、ようやくできるようになったメガシンカを使ったバトル
スタイルを確立させるためにも、俺たちの近くにいない方が良いと言うこと…:俺にその
バトルスタイルを見せない方が良いということだろう。

俺としてもそれは賛成だし、バトルに勝ちたいというコルニやルカリオのその考えは
より強く…:そしてより大きくなったんだと分かって笑みを浮かべた。

これからシャラジムに挑戦するのが楽しみだと考えながらも、コルニ達と別れてから

歩き出した…。

第二百二十九話く妹はルギアに隠れるく

『優れたる操り人の妹よ…本当に良いのか？』

「うん良いの。あ、でもルギアが嫌なら私達他の所に行くよ？」

『ガウウ？』

『ピチュ？』

『いや、構わない』

こんにちはは妹のヒナです。現在マサラタウンに兄のライバルが集まってきていて騒がしい状況になっています。

ジュンさんがシンジさんと同じく私の家に泊まることになって、のんびりと家で遊ん

でいる最中に騒がれたり、シンジさんに勉強を教わっている途中で突撃されてキレたシンジさんによってジュンさんが怒鳴られたりしていたのでこのままだと勉強にならないだろうと考えて家を出てオーキド研究所の迷いの森の奥深くへやってきました。

迷いの森を歩いていたらちようど近くにルギアがいたので寝転んでもらって、ルギアのお腹となる部分に背を向けてから座り、教科書を開く。ここで勉強するためだ。

まあルギアはこのままお昼寝をしようと思っていたみたいだったから兄のポケモン達や伝説たちが滅多に来なさそうなどても静かな場所にいた。そして私はそんなルギアに対して、もしも他のポケモン達が来た場合……つまり、兄のポケモン達や伝説たちが来た場合はルギアに隠れていようかと考えて話した。今日は誰にも邪魔されずに勉強しようかと思っているからだ。ルギアやリザードたちも私の言葉を聞いて頷き、勉強の邪魔をしないように配慮してくれた。

リザードとピチューは、私が勉強するから遊べないと言ったのに、一緒に居たいと言ってついて来てくれたのだ。そして教科書を開いた私の邪魔にならないように静かに周りの景色を見ながらルギアと寝そべっていた。その光景を見ると私まで眠くなってしまおうと感じ、首を横に振って眠気を吹き飛ばしてから勉強に移った。

ドオオオオオオオオツツ!!!

『む…優れたる操り人の妹よ…隠れた方が良い』

「え、もう？というかこの騒音つてミュウツーカーかな…」

『……ガウウウ』

『……ピイツチュウウ』

「あ、ごめんね起こしちゃった…でもちよつとこつち来てくれるかな？」

『…ガウウ』

『…ピチュ』

目を閉じていたルギアが騒音に気づき、私に向かって忠告してくれる。その言葉を聞いてすぐに周りを見てから騒音の位置を確認した。青色の閃光が空に向かって伸びていく様子はミュウツーカーたちが喧嘩している時に良く見られる光景だった。私たちからそう離れていない場所で戦っているらしく、もしかしたらこつちに近づいてくるかも知れないとルギアの言うとおりに隠れることにした。

そうしてルギアと話している間に、ようやく眠りそうになつていたりザードとピチューが目を擦りながらも不機嫌そうな様子で起き上がり、何があつたんだと話しかけてくる。その表情に私は苦笑しながらも、教科書を持つてからルギアの翼の裏側へとも

ぐり、リザードたちを誘導した。

ルギアの身体はひんやりとしていて少しだけ海の中にいるようで触っていて冷たいと感じながらも、こつそりと翼の外側の光景がどうなっているのかを見る。

私達が隠れた瞬間ミュウツーたちが争いながらやって来ていたようだった。ミュウツー達が喧嘩している様子を見て楽しそうにミュウ達がくるくとサイコキネシスで回りながらもミュウツーたちの後を追って行く。ミュウツーたちが来た瞬間ルギアがさりげなく私たちの姿を見えないように隠し、目を瞑って眠ったふりをしていた。そのおかげかすぐにミュウツーたちが喧嘩しながら…攻撃を放ち合いながらも離れていったため、私は翼の外側へ出た。

「あの状況ならフシギダネがすぐに怒りだして説教するのも時間の問題かな…」

『ふむ…まさに自業自得ということだろうな…それよりもリザードとピチューはこのままでも良いか?』

「あ、寝ちゃってる…ごめんねルギア。すつごく心地よさそうに寝てるし、このままにいてもいいかな?」

『ああ。私は全然構わない。むしろ優れたる操り人の妹にも来てほしいぐらいだが』

「いやそう言うのは勉強が終わった後でね?」

『…分かった。楽しみにしている』

「…うん。私も楽しみ」

翼の内側ではリザードとピチューがお互いに寄り添い合いながら眠っていた。リザードの尻尾の炎はルギアの身体に当たらないように気をつけているらしく、そして見つかからないように死角になっている所にあった。外からもギリギリ元気な炎を灯している金色の尻尾が見えて思わず笑ってしまいがちながらも…もう一度教科書を開いて確認する。応用などもなんとかできるようなったし、後は本番で失敗しなければ大丈夫かなと思いつつも、本に書かれた問題を一枚の白紙に書き込みながら解答していく。そんな作業をしていた時だった――。

—————
ドオオオオオオオツ!!!

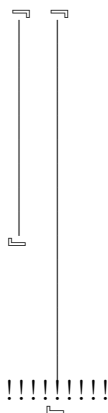
『今度は薄緑色の閃光…フシギダネか』

「今日も頑張ってるね我らのまとめ役…」

『ああそうだな…さすが優れたる操り人のポケモンだ』

大きな騒音が聞こえ、ふと顔を上げてまた伝説たちが来るかもしれないと身構える。でも空へと向かっていく薄緑色の大きな閃光が見えてきて：フシギダネがソーラービームを放つたのだと分かった。ルギアは見慣れた様子でため息をつき、犠牲者はミユウツーカーか：と呟いた。私たちが行動する必要もないいつもの光景のためにまたルギアが目を閉じ、私は教科書をもう一度開く。先程書いた解答が合っているのかを調べないといけないと思いつつも、本に視線を戻した。

そして全部間違いはないと確認し、これなら大丈夫かと少し安堵していた時だった……。



『む……あれは……?』

「……え? どうしたの?」

『……隠れた方が良くかもしれないな優れたる操り人の妹よ』

「あ、また来たんだ……じゃあまたお願いねルギア」

『ああ、お安い御用だ』

ルギアが顔を上げて何かに気づいたらしく、じつと森の奥の方を見ていた。森の奥は迷いの森だからこそ同じような景色が続き、現在私たちがいる場所以外には太陽の光なんて存在していない。だから私から見ると…ルギアがじつと見ている視線の方向には薄暗い木々と暗闇しか映らないのだ。

でもルギアが何かを発見し、ため息をついて隠れた方が良いと言ったために理由が分かった。おそらく兄のポケモンか伝説たちがいるということだろう…まあフシギダネやヨルノズク、ダークライに見つかったとしても何も問題はない。

むしろ騒ぎに巻き込まれなくて良かったと微笑まれるぐらいだ。でも他のポケモンたちに見つかればひとたび遊ぼうだの修行しようだの言ってくるに違いない。ゆつくりと勉強していたいからこそルギアに隠れていなければならぬのだが…これで翼に隠れるのは二回目だからルギアの安眠の邪魔になっっているなど感じ、申し訳ないと感じた。

でもルギアは私のその考えが伝わってしまったのか、私に向かって大丈夫だと言って微笑んでくれた。その言葉に笑みを浮かべてお礼を言いながらも、リザードたちが眠っている場所から離れたところに潜り込む。

そしてやって来たのは兄のポケモンたちとデオキシスだった。

『ツツ———!!』

『ジュルアア!!!』

『ミツジュウ!!!』

『ウツキヤアア!!!』

『マアグウウ!!!』

(あれって何やってるんだろ?…もしかして喧嘩?)

デオキシスに向かって総攻撃をしているのは兄のポケモンのジュカインとミジュマル、ゴウカザルとマグマラシだった。見事に地方がバラバラなメンバーになっているのだが、一体何があつたのだろうか…というよりもミジュマルのホタチがデオキシスにとられてるのはどうしてなんだらうかと疑問に感じてしまった。

でもここで外に出してしまうといろんな意味で巻き込まれる。ついでに教科書も犠牲になる可能性が高いだろう。…だからここでは好奇心を抑えてルギアの翼に引っ付き

ながらも様子を見守った。

そしてようやく騒動はデオキスが宙に浮いて逃げていってしまい、ジユカイン達が後を追ったためにまた周りが静かになってくれた。

「これで問題はないかな…」

『ああ、そうみたいだな…だが、外に出て勉強とやらはしないのか優れたる操り人の妹よ…?』

「うん。もういい感じに終わってるし、眠くなってきたからこのまま眠っちゃおうかなって…いいかな?」

『無論だ』

ルギアが優しい笑顔で私に向かって頷き、寝ようと言って目を閉じた。だから私も教科書をルギアの傍に置き、翼に包まれながらも眠ろうとする。ルギアの翼に隠れたために冷たいと感じていた体温は、いつの間にか温かいと感じるようになり、心地よい温度のなか私たちはお昼寝を楽しんだ――。

第二百三十話く妹は乱入されてしまうく

こんには妹のヒナです。勉強もそろそろ良い感じになってきたと感ぜられ、ちよつと遊ぶ余裕が出てきました。

このままだったら試験の方も平気かなと思ひながらも…：そういえばヒビキ達は大丈夫かなとふと考へた。ヒビキ達は学校で学ぶことを選択し、マサラタウンから外にある学校に行ったという話を聞いたけれど、本人に聞いていないために本当かどうかは知らない…。まあでも彼等ならきつとうまくいくだろうと思つていた頃に、いつもの電話が来た。

「よおヒナ、久しぶり。勉強はうまくいつてるか？」

『ピイカツチュ』

「開口一番にそれなのお兄ちゃん…うんなんとか大丈夫だよ」

『ガウウ』

『ピチュ』

オーキド研究所にいつもの兄からの電話が来たために、私たちは少しだけ嫌な予感がしながらも電話を代わる。

でも兄はいつも通りの表情で話していたし、何も問題はないようだったから大丈夫かと…嫌な予感…勉強に対する無茶ぶりをされるといふ予想はおそらくないのだろうとそう思った。

兄は少しだけ優しい表情でカロス地方にあつたことを話す。私たちはそれを聞いて首を傾けた。

「……メガシンカ？つて確かカロス地方に来た時にすぐ教えてくれた新しいポケモンの進化の方法…だよね？」

『ガウウ？』

『ピイツチュ？』

「ああそうだけ。…メガルカリオになる方法や、キーストーンのこと…いろいろとヒナに話したいことがたくさんあるんだ」

『ピッカア!』

「そっか、でも興味もあるし聞きたいって思ってるけど…でもそれはお兄ちゃんがマサラタウンに帰ってきてから詳しい話を聞くことにするよ。まだまだメガシンカについて分からないことが多そうだもん」

『ガウウ…』

『ピツチュウ!』

「おう!メガシンカもそうだけど…ポケモンにはまだまだ秘密が溢れているからな!」

『ピイカツチュウ!』

「メガシンカ…リザードやピチューもできるようになるかな?」

『ガウウ?』

『ピチュウ?』

「…悪いやつぱりヒナには聞いてほしいから話す。手短にな」

『ピイカツチュ』

「あ…うん。お兄ちゃんのその表情見たら拒否できないの分かるからいいよ…」

『ガウウー！』

『ピチュー！』

兄はカロス地方に来てから最初に電話した時のようにとても目を輝かせて楽しそうにメガシンカをするルカリオに会ったと話していた。

ルカリオと言うとアールンさんと旅に出た方のルカリオを想像してしまう。

でも兄の話だとコルニという人の手持ちであるルカリオは普通に話せないし料理もできない。でもレベルや攻撃力が強くて、最近ようやくメガシンカを使いこなせたという言葉に驚いた。あまり詳しい話を聞くつもりはなかったが、誰かに話したいらしく兄からメガシンカのメカニズムについての予想を聞く。

兄が言うには、メガシンカはただ絆を深めるためじゃないと言うことを話してくれた。トレーナーとポケモンの心が1つになっていなければ、メガシンカを使いこなすことができないのだと言うことを…それはつまり、メガシンカは普通に絆を通わせるのではなく、心を一つにするということだ。トレーナーの気持ちとポケモンの気持ちを1つにする。そうしなければ例え絆が強くてメガシンカができたとしても暴走する可能性があるということを経験した。

私にとってそれは…通常の進化をして、トレーナーといつも通りに接するかそれとも拒絶するかとの二択に似ていると感じた。進化とは全く違う新しい進化なのだけれども

…ポケモンが進化することによって起きる変化は似ているようだ。そしてメガシンカはやはりとても困難な方法なのだろうと考えて苦笑する。

そんな困難な方法だとしても兄は絶対に使いこなせそうだということを私たちは確信しているからだ。

そして、兄が話し終わったと思ったら何かを思い出したかのように叫ぶ。

「あ、そうだ…：おーいハルカ！こっち来いよ！」

『ピツカア！』

「え…ハルカさんそっちに来てるの!!？」

『ガウウウ!!』

『ピツチュウ!!』

ハルカさんはマサラタウンによく来るとイッシュユ地方から帰って来た時に兄のポケモン達や伝説たちが私たちに向かって話してくれた。

ハルカさんがマサラタウンによく来るのはマナフィに会いたいという気持ちが強いのということと、兄の修行場と化した迷いの森のトレーニングフィールドが気に入ったか

らだと言う。

でも私が帰って来た時に擦れ違いでコンテストが始まるから一度ホウエン地方に旅立つと言って帰って行ったはず…。だからホウエン地方で普通にコンテストに出場しているかと思っていたらまさか兄と旅をしていたなんて思いもしなかった。

そして兄に呼ばれたハルカさんは電話先にいる私に向かって手を振りながら笑みを浮かべて口を開く。

「ヒナちゃん！久しぶりかも!!」

「はい。お久しぶりです！…：…というか何でハルカさんカロス地方にいるんですか？ホウエン地方のコンテストは…？」

『ガウウウ？』

『ピツチュウ？』

「ホウエン地方のコンテストが終わって、そのままサラタウンに行こうと思った時にサトシから連絡があったの！それにカロス地方のポケモンパフォーマンスコンテストも気になるから一緒に旅しているのよ!!」

「…まあ一時的な旅仲間になるかもな」

『ピツカツチュ』

「そ、そうだったんですか…」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

ハルカさんは何で兄に連絡があつて、カロス地方に行くことになったのかを私たちは分からないし知らない。けれどそこまで詳しく聞くつもりはなかったために私はそのことについて話をするのを止めてただ苦笑して頷いただけだった。もちろんリザードやピチューも一緒だったらしく、ハルカさんの方を見て私と同じような表情を浮かべていた。

「そう言えばそつちは今どうだ？なんかポケモンが暴れてるって聞いたけど…」

『ピツカア？』

「ううん大丈夫だよ！もうポケモンが暴れてるっていう目撃はないみたいだし…警戒態勢は解かれてるから平気！」

『ガウウ！』

『ピチュウ！』

「そっか。でももしかしたら何かあるかもしれないから気をつけるのよヒナちゃん。ミュウツーたちが怒っちゃうかもだからね！」

「そうそう。お前は事件に巻き込まれやすいんだから気をつけろよ」

『ピツカア』

「いや、ハルカさんの気持ちはありがたいし、実際にそうならないように気をつけますけど…お兄ちゃんのそれは聞き捨てならない！私そんなに事件に巻き込まれてないよ！」

『ガウ…ガウウ…』

『ピチュウ……』

「ちよつ…リザードとピチュウもそんな顔しないで！私が本当に事件に巻き込まれやすいって思われるから！」

「いや実際に巻き込まれてるだろ」

「巻き込まれてるかも」

『ガウウウ…』

『ピチュウ…』

『ピイカツチュ…』

「断定しないでよ…ああもう分かったから！」

兄達が言ってる言葉はまだ理解したくないけれども、でもそれでも心配しているということは分かったからとりあえず領いておいた。それを見た兄たちも…リザードたちも良かったとホツとしており、まだ大丈夫なのかと心配をしていた。そしてそのまま話

は終わり、電話を切ろうとした……その時だった。

「ああサトシ!!!こんなとこにいたのか!!!」

「…え? ジュン? 何でお前マサラタウンにいるんだよ!？」

『ピツカア?』

「嫌い勝負しろ!!!」

「ちよつと君の方が嫌いかも…」

「おーいシンジ!! サトシが電話にいるぞ!!」

「はあ? シンジもいるのか? おいヒナということだ説明しろ」

『ピイカツチュ…』

「いや私もさっぱりわからないんだけどとりあえずお兄ちゃんとバトルしたくてこつちに来てるのは分かる…あとシゲルさんも」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

「おい待てシゲルもか!!!」

『ピツカア!!!?』

兄と話をしている間にジュンさんがシンジさんを呼ぶ大きな声のせいでシゲルさんもこちらに来てしまった。

そういえばケンジさんが最初に兄からの電話に出た時シゲルさんはオーキド博士とある研究について話し合っていたから気づいていなかったような気が：ああでも今気づいたからもう関係ないことかと私たちは遠い目をしてそのカオスを見る。シンジさんがシゲルさんを睨み：そして兄を睨んで話しかけた。

「おいサトシ：いまどこにいる」

「カロス地方だけど？というかこっちに来るつもりかおい来んな」

『ピイカ…』

「なにいつてんだよ！来るに決まってるだろ！！マサラタウンにいてもお前いないしバトルしたいのにできないんだからな！！罰金だぞ罰金！！」

「だから煩いよ君：そうだサトシ、ヒナちゃんから話を聞いたけどメガシンカのこともつと詳しく教えてくれるかい？」

「メガシンカ：何だそれは？」

「君に答えるつもりはないよシンジ君？」

「……………」

「メガシンカって何だ?!?なあサトシ教えてくれるか?!?」

「お前等うるせえ!!?とりあえずシンジとジュンはこつちに来るなシンオウ地方に帰れ!!
あとシゲル、メガシンカについてはマサラタウンに帰ってきたら話すから今は聞くな!!
まだ俺にも分からないことが多いからな!!」

「ふざけるな。サトシとバトルするためにこちらに来たと言うのにこのままシンオウ地方に帰れるか」

「シンジと同じ気持ちだぜ俺は!!それにサトシに負けたまま帰れねえよ!!カロス地方…俺も行く!!」

「珍しい研究になれるかと思っただけどね…マサラタウンに帰ってきてから話を聞くのは少し待ち遠しいから僕も行くのかな?」

「だから来るなって言ってるだろ!カロス地方に来たら叩き潰すぞお前等!!!」

「…カオス」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「何か懐かしい光景ね…ハウエン地方での旅の事思い出しちゃったかも」
『ピカピ…』

この後結局兄がキレてカロス地方にきたら徹底的にボコるぞと脅したためによや
く事態は解決したような…余計に悪化したようなそんな気がした。

でもまだまだ騒がしい兄たちに私たちは微妙な表情を浮かべたまま電話している所
からこっさり離れていった。

第二百三十一話　兄は暴走する

こんにちは兄のサトシです。ポケモンセンターに久々に泊まり、妹の様子はどうか電話したらいろんな意味で騒がしくなったために強制的に終了させました。

とりあえずシゲル達がカロス地方に来たらぶっ飛ばす。そういえばカスミもカロス地方に行ってみたいという話をしていたのを電話していた時に思いでした。まあカスミはともかく、シンジ達に向かってカロス地方に来る前にやるべきことやれと言いたい。そしてジュンにはシンジの影響でバトルフロンティアに挑戦するようになったのだから俺と会う前ためにカロス地方に来るなど言いたい。

…まあ来たとしても台風のようにすぐに帰っていきそうだと想像し、バトルすることになったら叩き潰すと決心しながらも、俺たちはシャラシティを目指して出発した。

そして森の中に入り、ここから次のポケモンセンターまでは遠いらしく、もしかしたら野宿になるかもしれないなど思いつながら歩き続けた。すると見かけたのは小さなポケモンたちがきのみをたくさん集めているという光景。

ミネズミとオタチ、パチリスが笑顔できのみを集め、木の幹のほうへ隠しているという光景に俺たちは温かい目で見つめていた。

ミネズミたちはそれぞれ同じ種族ではないというのに笑顔で協力してきのみを集め、仲良くしている。その事実には、マサラタウンのオーキド研究所のような光景だと感じ、この森はポケモンたちにとって他の種族と一緒にいても大丈夫なくらい平和なのだろうと思えた。

他の種族と仲良しということは通常はあまり見られない光景だ。戦いが多い場所ではポケモンたちは同じ種族で集まり、テリトリーを形成していく。強いものも弱いものも集まり、ここは自分の縄張りだという証しになっていくのだ。そして違うポケモンたちとは決して交流せず、生きるために必要に応じて他の種族と関わるといったろう。まあ、その必要に応じて行う行動が生命の危機に生じた場合にのみの場合が多いため、森が全焼したり水が干からびてしまったりということが起きない限りは安全だ。

だからこそ、この森のポケモンたちの仲が良い光景はある意味安全であり平和であるという証拠なのだ。そう俺は考えていた。

——まあすぐにその考えは撤回されてしまうのだけれども。

『リングアアアアアア
!!!!!!』

「うるせえよ図体ばかりでつかい阿呆が……」

『ピイカツチュ!!』

「ちよつと！それ持っていていこうとしないでよ！それはミネズミ達のなんだからね!!」

『デネデネ!!』

「ほらユリーカちゃんにデデンネ……ここはサトシに任せて離れましょう……その方が安全かも」

「でもハルカ……!」

『デネデネ……』

『リングアアアア』

「うるせえつつつてんだろうが!!!!」

『ピツカア!!!!』

『リングアア!!?』

「サトシ!? 無茶すぎですよ…!!」

「きやあサトシ格好良い!!!…はうう…」

「ちよつセレナ!!?」

「セレナが気絶したあ!!?」

『デネデネ!!?』

「うんうん一撃で吹っ飛ばす威力ある跳び蹴り&電撃…さすがサトシとピカチュウかも」

『リング…リングアアアアアア!!!!?』

『…ルチャ』

「…ん? 何だあいつ?」

『ピイカ?』

きのみを置き、攻撃態勢になったリングマに俺は拳を鳴らしながらも近づく。

ユリーカも一緒になって近づこうとしてきたがハルカに止められてそのままシトロ

ンたちのいる方まで下げられていた。まあ俺としてはその方が良い。こういう騒ぎを止めることに対して、俺とピカチュウの行動によって仲間を巻き込むかもしれないからこそ安全を確保するということと、敵に対しての手加減を一切したくないために近くにおいてしまったら巻き込んでしまうのが現実になるからだ。でもそれはハルカのおかげで何とか大丈夫だと判断し、行動する。

鋭い爪で襲いかかってきたリングマに俺は助走をつけて飛び上がり、蹴り上げる。ピカチュウも電撃を放ったため、ある意味電撃と跳び蹴りの両方を食らってしまったリングマはそのまま後ろの方に吹っ飛ぶ。それを見たセレナが叫びながら気絶していろいろと後ろの方で騒がしくなったみたいだが俺は気にしないし気にするつもりもない。それにリングマを吹っ飛ばしたためにきのみは無事だったし、この間にさっさと逃げろと木の上で怯えている小さなミネズミたちに言う。するとミネズミ達はお互いに顔を見合わせてから木を下りてすぐにきのみをすべて持つ。そしてきのみを持ったミネズミ達が一度こちらを見て頭を下げてから走って行った。それに満足しながらも吹っ飛んで気絶したリングマの様子を見る。

リングマは俺とピカチュウのダメージでそのまま気絶していたみたいだったが、吹っ飛ばされた衝撃でリングマの近くにあった木がゆっくりと倒れ、気絶したリングマの腹に直撃する。そのダメージで起き上がったリングマは俺たちに怒ったような表情を浮

かべてまた攻撃しようとしてくる。そのためもう一度気絶してもらおうと思いい拳を握りしめ、ピカチュウもほっぺからバチバチと電撃を放ちながら待った。

だがそのリングマに攻撃をしたのは見たことのないポケモンで：俺たちに向かつて手を上げて、リングマは自分で戦うから手を出すなど言っているように感じた。そのために俺とピカチュウはシトロンたちがいる方まで後ろに下がってから図鑑を取り出してみる。図鑑にはそのポケモンの名前がルチャブルと書かれていて、顔が図鑑と違っていた。思っていたがそれは葉っぱで作ったマスクだと言うことがすぐにわかり、ポーズをとったりリングマの技を一度受けたりと何だか個性的なポケモンだなと思った。でも最後の一撃が決まらず、リングマが逃げたことには苦笑してしまったが…。

その後、この森を管理しているという人に会って、ルチャブルのことを聞き、面白そうだなと俺は思った。ルチャブルはバトルが好きなのだろう：リングマの技を一度受けて相手の攻撃力をみたり、最後の最後で大技を決める際にポーズをとり格好良く見せる。その姿はまるで森のヒーローのように感じられた。：まあ最後は失敗していたけれども。

でも、そんなバトルが大好きで皆を守ろうとするルチャブルを、俺はもつと強くしてみたいと思えたのは仕方ないことだろう。

.....

『ルチャ……?』

「よお……さつきはバトル代わってくれてありがとうな。なあルチャブル、俺ともつと強くないか?」

『ピツカ!』

『チャブウ……?』

「…サトシは何をする気でしようか?」

「サトシのことだから…ルチャブルの技を極めるんじゃないかな?…でもそんな所も素敵!」

「そつか!じゃあ修行だね!」

『デネデネ!!』

「ははは…つとハルカ、何をしてるんですか?」

「さつきルチャブルが投げた葉っぱの覆面!コンテストで演出に使えないかなって思っ
て!!」

「ああ、確かにあれは格好良かったですね！」

「サトシも格好いいよ！」

「いやそう言うことじゃありませんよセレナ……」

ルチャブルは滝であの最後の特技ができるようになるために練習をしていた。だから俺がその練習相手になると言い、特技以外にも何か新しい技を極めてもらおうと思つた。最後の特技もそうだけれども、一撃一撃を力強くこめていけばとても良くなる……そう考えてルチャブルに言ったからだ。もちろんルチャブルも賛成してくれたらしく、俺に向かって頷いて修行を始めた。滝から落ちていくスピードが遅いと感じた。スピードが遅いから先程のリングマに逃げられてしまったのだろうと思つたために、ピカチュウ達と同じぐらいのスピードを極めてもらおうと、まずヤヤコマをボールから出して飛ぶ際のスピードをどう活かせるのかについて学び、実践してもらった。

ヤヤコマが滝から地面に向かって滑降する様子をルチャブルに見てもらい、先程ルチャブルが飛んだ時はどうだったのかについての確に指摘し、そのスピードが足りない問題部分を解決していった。

そうしていくうちにルチャブル自身が回転しながらのほうが速くなりやすいということに気づいたのか、回転しながら滝から滑降し落ちていく。その様子を見て俺はその

回転も何かに活かせないかと考えた。相手が地面に倒れている際の特技として使用するらしいけれども、特技を放とうとしている間に敵がダメージから復活し抵抗する可能性を考えてカウンタースールドに似たやり方をルチャブルと共に考えようとした……その時だった。

『リングアアアア!!!』

『ロオブウウウ!!!』

『…ガリキイイイイツツ!!!』

『……ルチャ』

「ルチャブル…戦うつもりか？」

『ピイカ?』

『チャブウ!』

「…そうか。ならさつきやった修行のこと、忘れるなよ?」

『ピイカツチュ!』

『ルツチャア!』

以前の森のチャンピオンだったというカイリキーが森で嫌われているというリング

マとローブシンに連れられてきていた。何故連れられているんだろうという疑問と奴らの悪そうな表情に、少しだけ嫌な予感がした。でもルチャブルは好戦的な笑みを浮かべて戦うと言っており…俺は頷いてルチャブルの戦いを見守った。

「…大丈夫かなルチャブル」

『デネデネ』

「大丈夫よ…サトシが修行をつけたんだからきつと…」

「ええそうよ！サトシの修行で強くなったんだから絶対に大丈夫かも！」

「…そうですね。あの特技もほぼ完成と言えるでしょうし…」

「……………」

『……………ピイカ』

『リツキイイイイ!!!』

『チャブウウウウ!!!……………ルチャツ!!!?』

『リキツ!?!』

『リングアアア!!!』

『ローブウウウ!!!』

カイリキーとルチャブルの戦いはちゃんと真つ向から戦い、そして相手の技をわざと受けてその強さを確かめている。まるでリングマの時のルチャブルと同じように、カイリキーも戦いに信念があるのだろうと感じた。まあそれを邪魔するのはリングマとローブシンであり、ルチャブルにいつも負けているからこそ卑怯な手に出たのだろう。そしてそんなリングマとローブシンの突然の攻撃にカイリキーがルチャブルと同じく驚き戸惑っている様子からカイリキーはリングマ達に騙されて連れてこられたんだと……そう理解した。

———そんな卑怯な手を使う奴らを俺とピカチュウは許さないわけで……そしてヤコマも俺たちと同じ気持ちなわけで……だからこれは仕方ないことだろうと思う。

「おいゴラてめえらは勝負の邪魔してんじゃねえぞ!!!」

『ピイカツチュウウウ!!!』

『ヤツコオオオオ!!!』

『リングアアアアア?アアア!!!』

『ローブウウウ!!!』

『ル……チャ……?』

『リツキイ……?』

「きやああサトシ格好良いiiiiiii!!ああもう!大好き!!」

「セレナちよつと落ち着いてください!!」

「サトシたち悪いポケモンはやっつけて!!」

『デネデネ!』

「なるほどサトシのあの攻撃…バシャーモに回し蹴り覚えさせるのもいいかも?」

リングマとローブシンに向かつて一斉に攻撃をする俺たちにルチャブルとカイリキーは茫然としている。だからこそ俺はそんなルチャブルたちに振り向き、親指を立てて大丈夫だと言う。リングマとローブシンは何とかするからバトルは中断しなくてもいいぞと…そういう気持ちを含めて。まあそんなことやってる間にもリングマとローブシンはピカチュウとヤヤコマ…そして勝手にボールから出てきたケロマツにボッコボコにされて悲鳴を上げてしまっているんだけれども…俺やることないみたいだな?そしてその光景を見たルチャブルとカイリキーは俺の言いたいことが分かったのか少しだけ微妙そうな表情になって…でもすぐに笑みを浮かべて向かい合って戦った。

…:…まあその後、ルチャブルが俺を気に入り、カイリキーにチャンピオンに戻ってく

れと伝えてから俺の仲間になりたいと言ってきたのは仕方ないことだと思いたい。

第二百三十二話～兄はスカイバトルをする～

こんにちは兄のサトシです。現在シヤラジムに向かう途中、森を抜けて大きな岩がたくさんある地帯へとやってきました。

日差しはあまり強くなく、冷たい風が流れる。周りには岩ばかりで何も無い場所だけでも、ホウエン地方のように温度が物凄く暑いわけじゃないため、風が心地よくて歩きやすいと感じる。でも周りは崖が多くあるために落ちたら危ないと俺たちは注意して歩いていった。…まあ落ちたとしても下は水しかないため、地面に激突して大怪我を負うということはないだろうが…それでも危ないと思うので気をつけて進む。

…そうして俺たちは崖ばかりあつてある意味絶景なカロス地方の有名スポットへやってくる事ができた。

セレナとハルカが周りを見てから笑顔で叫ぶ。

「カロスキャニオン……！絶景ね！」

「うん！初めて見た光景かも！今日が晴れて良かった！」

「そうだな……でも危ないから足元には注意して歩けよ」

『ピイカツチュ！』

「はーい！！」

『デネデネ！！』

「じゃあここでお昼にしませんか？そろそろ時間ですし、絶景を見ながら食事をするのもたまにはいいかもしれませんよ？」

「賛成！私お腹が空いちやったかも！」

「ハルカってよくお腹空かせてるね！」

『デネデネ！』

「えへへ……ちよつと恥ずかしいかも？」

「そこは疑問で返しちや駄目でしょハルカ？」

「はいはい……ほら準備するぞ」

落ちないように崖から離れた場所にテーブルを設置し、食事の準備をしていく。シト

ロンがリュックに入れておいた食材を使って調理し始め、俺たちはそれぞれボールからポケモンを出してからケロマツ達にも準備を手伝ってもらった。

『チャブウ!』

『ケロ…ケロケロオオ!!』

『ルツチャアア!!』

『ヤツコオ…』

『ピイカツチュウ…』

「こらケロマツにルチャブル! 喧嘩すんな!!」

『ルチャ…』

『ケロオ…』

「うーん…ルチャブルとケロマツって相性悪いのかしら?」

「前にバトル練習した時からこうだったわよね…バトルで何か気に食わないことがあったから仲が悪くなったかも?」

ルチャブルとケロマツが言い合いを始めてしまった。今はまだ口喧嘩で済んでいるが、このままではエスカレートして技ありでの喧嘩になると考えて止めに入る。ヤヤコ

マとピカチュウはため息をつきながら呆れた表情でその喧嘩を眺めており、またか…と
いうような目でルチャブルとケロマツを見ていた。

ルチャブルとケロマツの仲が悪くなったのはルチャブルが俺たちの仲間になった後
…練習試合と称して模擬ダブルバトルをした時だ。模擬ダブルバトルというのは、手
ちの二体に自ら行動し、攻撃と防御を選んでもらいながらも二体に俺が指示を出して
バトルしてもらおうという方法だ。これは、ルチャブルが仲間となったため4体揃った
ことでできる修行方法にもなり、ダブルバトルのトレーニングになると考えて実行し
た。

模擬ダブルバトルでやったのはピカチュウとケロマツ対ヤヤコマとルチャブルだっ
たり、ピカチュウとルチャブル対ケロマツとヤヤコマだったりする。でもって仲が悪く
なった問題のバトルはケロマツとルチャブルが一緒になった時だった。ルチャブルは
最初っからバトルで相手の技を受けてから戦うというやり方を好んでおり、まあそれ
については俺は何も言わなかった。それがルチャブルの戦いの流儀だと言うのなら、俺は
それに合ったバトルスタイルを考えるまでなのだから…。でもケロマツはそれが気に
いらぬらしい。

ルチャブルがヤヤコマに攻撃されているのを見てため息をついて呆れ、ヤヤコマの隙
ができた瞬間にケロマツ自身がヤヤコマを攻撃してしまったことよってルチャブル

が邪魔をするなどケロマツに文句を言い、そしてケロマツは嫌そうな表情でそっぽを向き……。とにかく、ケロマツとルチャブルのバトルの仕方は全然合っていないために衝突し喧嘩の原因となってしまうのだろう。この仲の悪さはダブルバトルやトリプルバトルで問題になる可能性が高いため、早々に何とかしなければと思うが：まあ今の所放っておくことにする。ピカチュウとヤヤコマも喧嘩をするほど仲が良いと言うのを知ってはいるし、仲が悪くても旅を続けていくことで次第に良くなってきたのを今までの旅の中から学んでいるからだ。

まあ今回のような些細な喧嘩は周りに被害が起きる可能性もあつたためにするに仲裁させてもらったが、ルチャブルとケロマツはそれでも苛立ったようにお互いを睨み合ひ、それぞれの役割へ戻っていった。：ちなみにそれを見ていた周りのポケモンたちはピカチュウとヤヤコマ含めて呆れた表情でいたりする。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ、ねえあれ何?！」

『デネデネ!!?』

「うわあ！空を飛びながらバトルしてる!!凄いかも!!」

「あれは…スカイバトルっていうものらしいわ。ここでは有名なバトル方法みたいね…」

「スカイバトル…トレーナーもポケモンも空を飛びながらバトルをするんですね…!」
「…へえ。面白そうだな」

『ピイカ!』

食事を終えた後、すぐにまた歩き始める。いくら絶景と言えども同じ風景をずっと見ているのも少し飽きてしまうため、皆が次に向かうポケモンセンターまでの道のりを少し歩行を早めながらも頑張つて歩いて行つた。途中でシトロロンが疲れて休憩したり、ハルカがお腹空いたと言うことでお菓子タイムになったりと途中途中で休憩をはさんでいたが…そんな時にスカイバトルが始まったのだ。

ファイアローというポケモンと戦っているエアームドとのバトルは圧巻だった。空を飛びながら戦うと言うことは落ちないように気をつけながら行うのと一緒だった。風を受けて急上昇し、バランスを整えてから戦うのはとても神経を使うことだろうし、何よりもバトルで使った技による突風などの影響を受けないようにしなければならぬ。…バトルを見ていてそういう印象を受けたが、それでもトレーナー達は楽しそうにバトルをしていて…俺もやってみたいと思つてしまった。

スカイバトルを見ていたら近くを通りがかった人にスカイバトルの方法や、その練習場に案内してもらった。そこではスカイトレーナーとなるための服があり、俺たちはそれに着替えてから空を飛べるようになるための練習をする。

セレナとハルカがすぐにうまくいって…俺は風を受けて少しだけ落ちそうになりながらも何とか習得していくことができた。シトロンはこういう動作が苦手なのか何度も落ちたりしていたために俺たちはシトロンがうまくなるまで続けていく。

「そうだ…スカイバトルをするならポケモンを出した方が良いよな？…よし、ヤヤコマにルチャブル出てこい！」

『ヤッコオ！』

『ルチャア！』

「あ、それいいかも!!出てきてアゲハント！」

『ハアアアアア!!!』

ポケモンを出しているのか先に話を聞いてから大丈夫だと言われたためにボールから出す。

ルチャブルはもともと空が飛べないポケモンだけれども、飛行タイプと空を飛べるポケモンだったら片方の条件でも大丈夫らしく、ポケモンを出した。シトロンとセレナは

空を飛べるような飛行タイプのポケモンが手持ちにいないためにそのまま空を飛ぶことだけを楽しんでいた…そんな時だった。

「ねえ君!!私とスカイバトルしてみない!!」

「…はい?」

『ヤコオ?』

『チャブウ?』

そしてそんな時に先程スカイバトルをしていて、この練習場のインストラクターをやっているというトレナーがこちらに突撃してきた。話を聞くと先程戦ったエアームドとのバトルがあまり手ごたえがなくて楽しめなかったと言う。そのため他のトレナーを探してこちらに来て…そして俺のヤコマとルチャブルと共に練習している姿を見て戦いたいと思ったらしい。

アゲハントと一緒に空を飛んでいたハルカについてはファイアローが炎と飛行タイプということでアゲハントの弱点ともろにかぶっていたために手ごたえあるバトルが期待できないと思ったのだろう…。それにハルカも魅力的なバトルならやりたいと思っではいるが、通常のバトルだったらあまり積極的にやろうとはしない。ちよつと残念そうにしているからまあスカイバトルを体験してみたいという気持ちはあったかも

しれないが：それでもポケモントレーナーよりポケモンコーディネーターとして旅をしているのだからバトルを優先で行動することはあまりない。ハルカにとつてポケモンバトルとは強ければ強いほどやりたいという気持ちは高まるけれど：それでもコンテストと関われるバトルじゃなければ、強いポケモンとのバトルじゃなければ、相手がバトルしようと言うまではバトルはしないのだ。

ハルカ自身にとつて相手のポケモンが魅力的であり、そしてより強くより惹きつけられなければ自ら行動してバトルはしない。たまにコルニとルカリオの時のように戦いたいという気持ちで初対面にもかかわらずバトルを申し込んだことがあるけれど、それはハルカの気分次第で動く。主にコンテストで優勝するため、相手の出してきた技を見て応用し絶対に負けようとはしない気持ちで挑むことが多いのだ。そして相手の出てきた技を自分なりにアレンジして改造強化し、次の戦法として活かすやり方をするために、自らバトルがしたいという気持ちが強くなければ行動しない。

まあだからこそ強い相手に出会った場合はバトルしてもらえように積極的に行動し、バトルとなつたら容赦なく相手のポケモンを倒そうと指示を出すのだが：。そして強い相手と戦いたい、コンテストで優勝するためにもより強くなりたいという気持ちで動いているせいで舞姫よりも戦闘狂として名を上げてしまったのは仕方ないことだろうと思う。

とにかく、そういうハルカだからこそ、今回のスカイバトルは俺がやることになった。でもまあ、ヤヤコマが自身の進化形でもあるファイアローと戦いたいと言って挑発したり、ファイアローはルチャブルと戦いたいと言って弱い奴は帰れというような態度をヤヤコマに対してとったり：そんなことがあつて、喧嘩を売られたと判断した俺たちは全力を出してスカイバトルに挑んだ。もちろんルチャブルが先に勝利し、そしてその後ヤヤコマと戦ってくれて勝つたりするが…。

しかもその結果ヤヤコマがファイアローの挑発にキレたためにいきなり進化してヒノヤコマになって勝つことができたのはとても嬉しい誤算だと思つた。

第二百三十三話～妹は強制される～

「行くぞヒナ」

「へ？何処へですか…？」

『ガウウ？』

『ピチュウ？』

「オーキド研究所だ」

「良いから行こうぜ！！バトルするんだからさ！！」

「嫌い喧しい静かにしろ」

「なんだってんだよ！！そんなに大声出してないだろ！！」

「チツ…無自覚か……」

「へ……………ええ!!? バトルって何!!?」

『ガウウ!!?』

『ピチュウ!!?』

「こんにちはは妹のヒナです。いつも通りの平和な朝を迎えて、シンジさんも機嫌よく起きてから朝ごはんを食べました。いつものしかめっ面とは違ってちよつとだけ雰囲気 が軽い…というより楽しそうな感じがするから、何か良いことでもあったのかなと思っ た。」

「まあ見た目だけだと笑顔になっておらずいつもの無表情なんだけれども…それでも 機嫌が良いと言うことだけは雰囲気を見て分かった。どうして楽しそうなんだろうと思 いながらご飯を食べていたら…朝食の後、疑問はすぐに解決した。」

「昨日、オーキド研究所に泊まっていたはずのジュンさんがこちらに来て私たちを外へ 連れて行こうとした時に分かったのだ。」

「しかもその時シンジさんも一緒になって行くぞと言いつつ、何処へ向かうのか聞くとオー キド研究所へ向かい、そこでバトルをすと言ってきた。」

だからこそシンジさんが朝の時にあんなにも楽しそうにしていたんだと理解し、強制的にオーキド研究所に連れて行かれた私たちはため息をついて現実逃避をした。

.....

オーキド研究所に行き、ケンジさんとオーキド博士に挨拶をした私たちは奥の部屋でくつろいでいるシゲルさんに会いに行く。

：そういえばシゲルさんは今休みをもらってこつちに来ているらしいけど…いつまで休みなんだろうと少しだけ疑問に思えた。ついでに言うとしんじさんやジュンさんもいつまでマサラタウンにいるんだろう…まあそれ聞くと兄が帰ってくるまではいる！と言いつまな気がしたために質問はしない方が自分のためにも良いだろうと考えて何も言うつもりはない…。

シゲルさんは爽やかそうな笑顔で私たちを見て口を開いて言う。

「やあヒナちゃん達…ついでにシンジ君もよく来たね。ジュン君はおかえり」

「ふん…」

「こ、こんにちは…ああもしかしてバトルって前に聞いたダブルバトルのあれですか…？」

『ガウウウ…？』

『ピチュウ…!?!』

「ありやまだ言つてなかった!?!悪いなヒナ！これからダブルバトルをやるから！」

「耳が痛い…まったくお前はそういう所は変わらないな…」

「な、なんだってんだよー！それ以上文句言うなら罰金だぞ罰金!!」

「こつちの方こそその大声に対しての罰金を払ってほしいものだよ…ヒナちゃん、もうサトシにも了承を貰ってるから安心してバトルしても平気だよ」

「え!?!どういうこと…ですか？」

『ガウウ？』

『ピチュ？』

「実はね——」

シゲルさんが話してくれた内容は、兄に対する電話の騒動の後に起きた話だった。兄から電話が来たあの日、シンジさん達が電話に集まってるいろいろと騒いでいたために巻き込まれないように私たちはこっそり彼らから離れていったのだが…でもそれはある

意味やっつてはいけない内容だったのだと話を聞いていてそう理解し、後悔した。

シゲルさんの話だと私たちが離れていったしばらく後、ジュンさんがバトルをしてもいいかと兄に頼み込んだらしい。もちろん兄は笑顔で親指を立てて存分に鍛えてくれと言っていたみたいだった。まあバトルに夢中になったりやり過ぎになつたりするならフシギダネ達に止めてもらおうからなと忠告していたらしく、嫌ならばやめようかとシゲルさんに問いかけられた。

「サトシは何も言っていなかったけれど、ヒナちゃん達がやりたくないと言うなら僕たちは止めるよ。サトシが直接何も言わなくても…そういう内容は含めていただろうし、だからこそヒナちゃんやんがバトルをしてくれるならしたいと答えて、嫌なら嫌だと正直に言っつてほしい」

「なあヒナやるよな?!俺たちと一緒にやらないと罰金だぞ!!!」

「おい脅すな!!…ヒナ、やりたくなければ素直に言え」

「えつと……」

『ガウウ……!』

『ピチュ……!』

本当だったらダブルバトルをやりたくないと言おうだろ…。

それにわざわざ兄に頼んでからそういう選択肢を与えるのはやめてほしいということも言いたくなる。

最初にダブルバトルをやろうとジュンさんが言った時も私はやりたくないと言った。だからこそ諦めていたと思ったのに兄に話すほどやりたいのかという疑問も浮かんだ。そして同時にこれは断れない雰囲気だと言うことも分かった。リザードやピチューはやる気に満ちていて絶対に勝つぞと気合を入れており、シゲルさん達は少しだけ不安そうに…でもバトルは絶対に受けてほしいと言う表情で私を見つめている。

リザードたちがやりたいと思うなら…やってもいいかと思った。それにバトルの勉強にもなるだろうし…私が嫌なのはシゲルさん達のバトルで夢中になりすぎてそれに巻き込まれることだ。シゲルさんとシンジさん…そしてジュンさんのバトルは苛烈で、周りを気にせず夢中になりすぎて一緒にバトルをしていたリザードとピチューが傷つく可能性があることが気がかりだった。でもそれは兄の忠告によって大丈夫だと言ってくれたし…まあ何とかなるかなと思つて頷いた。フシギダネ達が見守るのならリザードもピチューも余計な怪我を負わずに済むだろうし…。

だからこそ、このバトルは絶対に断ることはできないとそう考えて頷いた。頷いた私

にシゲルさんが優しい笑顔で私にありがとうと礼を言っており、シンジさんが頭を撫で
…そしてジュンさんが満面の笑みで大声で叫んでいる。ぶつちやけジュンさんの大声
がドゴーム…いやバクオングぐらいはあるんじゃないかと思いつつも…その騒音に
キレたシゲルさんとシンジさんを見ながらも遠い目をして苦笑した。

.....

「…ちよつと待ってツ…フシギダネ…は分かるけど何でお兄ちゃんのポケモンが集合し
てるの!!?」

『ガウウ…』

『ピチュウ…?』

オーキド研究所は広大なため、バトル場にできそうな広い場所に行くために研究所か
ら外へと向かう。

でも外に出たらいきなり見えてきたたくさんさんのポケモン達…兄の手持ちであるフシ
ギダネ達に驚いてしまい叫んでしまった。フシギダネについては兄がバトルに夢中にな
ったり何かあったりした時に止めてもらう要員としているのだと思っただけのため納

得できる。だが何故オーキド研究所にいるポケモンたち全員が来ているのだろうか…あ
あいや、シゲルさんの話だとフシギダネ達と言っていたのだからフシギダネ以外にもい
るんじゃないのかということとは少し考えてはいたが、まさかオーキド研究所にいる兄の
手持ち全員とは思わなかった。

私の驚き声にシゲルさんが苦笑しながらも口を開いて言う。

「フシギダネにバトルの協力をしてもらおうかと思っただけで頼んだらいつの間にかこうなっ
ていたんだ」

「すげーよな！こいつらサトシの手持ちなんだから!!本当に強そうだ!!」

「……ゴウカザル。昨日も会ったが元気そうだな」

『ウツキヤア!』

「あーなるほど…つまりフシギダネから皆に伝わって…それでバトルを観戦する感じで
集まったということかな…」

『ガウウ?』

『ピチュウ?』

『ダネダネ…ダネフシ』

「微妙な表情で頷いてるってことはまあだいたい合ってるってことだよな?」

『ガウウ…』

『ピツチュ…』

『ダネエ…』

とりあえず兄のポケモンたちが集まったというのは仕方ないかなと思っておく。

兄のライバルであるシゲルさん達のバトルはある意味勉強になるし、新しい修行方法も考えられるかもしれないと思って観戦しに来るジユカイン達もいるぐらいなのだから…。

でもちよつとだけ微妙なのは応援旗のようなものがフシギダネとヨルノズク、そしてジユカインとブイゼル以外のポケモンたちにつけられていることだ。…おそらくハハコモリが作ったのだろう…：葉っぱで作ったそれはとてもすごい出来栄えになっていて、シゲルさんが興味深そうにマグマラシの着ている葉っぱの服を観察していた。ワニノコの手には葉っぱで作った応援用のボンボンがあるぐらいだし…修行に役立つかもしれないという思いでバトルを見に来たわけじゃないと言うことが分かって私たちは恥ずかしくなってしまった。

そんな私に気がついたのか、フシギダネが頑張れと応援してつるで肩を叩いてくれた

のが余計に恥ずかしい…でも、それぐらい皆が応援しているのだから私たちも頑張つてバトルで勝ちに行かなければと思つた。

…まあ、兄とよくバトルして、ライバル認定されているシゲルさん達を相手に勝てるかどうかはまた別問題なんだけれども。

第二百三十四話～妹はダブルバトルをする～

「よろしくお願ひしますねシンジさん！」

『ガウウ！』

『ピイツチュ！』

「…ああ」

「ジュンくん。暴走や足手まとい等はしないようにね？」

「何言つてんだよ！足手まといになるわけないだろ！」

「分かったから音量は抑えて…」

ここは、マサラタウンにあるオーキド研究所の広場となっている場所。そこにヒナたちはダブルバトルをするために集まっていた。ダブルバトルを見守るのはフシギダネ達。そして姿は見えないけれどもヒナたちのバトルを観戦するためにやって来た伝説たちがいたりする。

そして応援するためにベイリーフ達はハハコモリが作った旗や半被、ボンボンなどをそれぞれが持つて応援する。それらは葉っぱで作られたものだが、ハハコモリが丁寧に作り上げたために頑丈にできていて…まるで布のように綺麗に仕上がっていた。ちなみにそれを見たシゲルはハハコモリの作り上げた上品な代物に興味を持ち、ハハコモリの知識としてできたのか…それともサトシに教わってできるようになったのかが気になっていったようだった。まあシンジに挑発されてすぐに意識をバトルへ戻し、シンジとヒナに向かい合う形で立っているのだけでも。

そして試合の始まりの合図はフシギダネがつるで振り上げた瞬間に始まる。シンジたちはそれぞれボールを手に持ち…そしてヒナはリザードとピチューを隣に待機してもらい始まりの合図を待った。

『ダネ…ダネフツシイ!!!』

「ニドクイン！」

『クウオオオオオオ!!!』

「絶対に勝つぞエンペルト!!」

『エンペエアアア!!!』

「エレキブル…バトルスタンバイ」

『レッキイイイイ!!!』

「行くよピチュュー！」

『ピイツチュ!!!』

シゲルがニドクインを出し、ジュンがエンペルトを出すのと同時に…シンジがエレキブルを出して、ヒナは横にいたピチュューに向かって言い、前に出てもらった。その後リザードは自分の出番はないと分かったのかヒナの後ろに立って応援しながらも観戦する。

そしてそれぞれがボールから出した瞬間、突然大きな閃光と雷撃がぶつかり合う。

「ちよっいきなりはかいこうせんとかみなり!!?」

『ピチュウ!!』

「よっしや燃えてきた！行くぞエンペルト!!ハイドロポンプ!!」

『エンペアアアツツ!!』

「っピチューー10まんボルトしながら回転!!」

『ピチューウ!!』

シゲルとシンジがお互いに睨み合いそれぞれニドクインがはいこうせんを放ち、エレキブルがかみなりを放ったために大きな爆発と衝撃がバトルフィールドに流れる。

始まった瞬間の大技にヒナとピチューは驚いていたが、バトルに燃えてきたと叫ぶジユンがハイドロポンプを放ったのを見やすく10まんボルトで受け流しながら躲す。そのピチューの姿はある意味サトシやヒカリがよくやっていたカウンターシールドに似ていて、ジユンは少しそのことを思い出して懐かしんでいた。

そしてはいこうせんとかみなりの激突が止み、シンジ達はお互いに睨み合う。その様子を見て少し苦笑したヒナだったがこのままだとバトルで不利になるかもと考えてすぐに対策をする。

「ピチューーエレキブルに10まんボルト!」

『ピチュー?...ピイツチューウ!!!』

「ふん…ヒナ、手助けなどいらん」

「いやいや駄目ですよ…これはダブルバトルなんですから。一緒に戦うんなら必要なことは全てやりますから」

「…：…チツ。本当にサトシの妹だなお前は」

「それは…とりあえず褒め言葉として受け取っておきますね」

『ピチュー！』

『レッキツィイ!!』

「へえ…エレキブルにでんきエンジンですばやさを上げた…か…少々厄介になりそうだね」

『クウオオオオオオ！』

「そんなの関係ねえよ！サトシもやっていたようにバトルで最後まで諦めずに勝つ!!」

『エンペエアアア!!』

ピチューの電気を浴びたエレキブルはダメージなど通らずに平然とした様子で立っていた。でもピチューに電気をくれてありがとうよと言おうような表情でピチューに向かつて笑みを浮かべていた。その様子にピチューは強気な目で頷き、そしてニドクイン

達に向かい合う。

一方シンジはというと自らの力でシゲルと決着をつけたいのか無表情なのは変わらないけれども、少し不機嫌な様子でヒナに言う。でもヒナはこれがダブルバトルだからこそ成り立つ協力関係なのだと考え、やれる対策はやっておいた方が良くシンジに向かつて言った。その言葉にシンジは何も言わずただ小さくため息をついただけだった。その様子はしばらくマサラタウンで…ヒナの家に泊まって一緒にいるからこそ分かる仕事であり、文句は言わずに納得してくれたという意味でもあったためにヒナは苦笑する。

サトシのポケモンであるシンオウ地方のポケモンたちはその光景が懐かしいと感じて目を細めていたり、特性を使ったバトル方法もありかとサトシの他のポケモンたちが話し合っていたりする。

ちなみに伝説たちはその様子にヒナがトレーナーとして成長しているんだと感動しつつもまるで親のようにその姿を見守っていた。

そしてシゲルとジュンはエレキブルに向かってやったピチューの行動に驚きつつも納得していた。ダブルバトルというのは一人で戦うわけじゃなく、お互いに助け合いながらも勝ちにいくバトルになる。だからこそヒナがそれをちゃんと分かっているの指示だということにも納得し…ちゃんと成長しているのだと感動していた。

先程シゲルとシンジがそれぞれお互いしか目に見えておらずに戦っていたこともあの意味シングルバトルになりかねない戦い方だったと思い出し、少しだけ先程の行動を恥じながらも…ダブルバトルをしようと思意識を変える。

「ニドクイン、メガトンパンチ！」

『クウオオオオオオツ!!!』

「エンペルト！ニドクインの補助に動け！」

『エンペエアアア!!』

「エレキブル、ピチューの前に出てからまもる」

『レッキイイイ!!!』

「ピチューそのまま動かないで…広範囲10まんボルト!!」

『ピイツチュウウウ!!!』

「ニドクイン下がれ!!!…ある意味ほうでんの威力だね」

『クウオオオオオオ!!』

「エンペルト！ハイドロポンプで地面に向かって撃て！」

『エンペエアアア!!』

ニドクインとエンペルトがエレキブルのまもるによって攻撃を防がれ、そして後ろにいたピチュウのほうでんのような広範囲の10まんボルトに巻き込まれそうになる。ピチュウの前にいたエレキブルはでんきエンジンのためにでんきタイプの技が効かないための攻撃方法だ。もちろんニドクインもエレキブルと同様に電気技は効かないのだが、それでもまもるで防がれてしまったエレキブルに何かされては駄目だと考えて咄嗟に下がった。

そしてエンペルトは電気技が弱点なためにジュンが慌ててハイドロポンプで瞬間的にピチュウ達から避けようとする。エンペルトはそのまま大きく地面にジャンプして何とか躲すことができたが、危なかったと冷や汗を出した。

…ちなみに外野にいたサトシのポケモンたちは流れ弾ならぬ流れ技が観戦場所にもきていたが、それぞれ余裕で躲したり技で防いでいたりする。

そしてこのままでは長期戦になると考えたのか、シンジがシゲル達に向かって挑発する。

「ふん…何だ？それだけで終わりか？」

『……………レッキイ』

「あ、嫌な予感…」

『ピチュウ…』

「…：ほう、言ったね？後輩ライバルのくせに…」

『クウオオオオオオ…』

「なんだよなんだってんだよー！！シンジ！これで終わらなわけないだろ！！」

『エンペエアアアアアアア…』

「ニドクイン、はかいこうせん！」

『…：クウウオオオオオオオオ…』

「エンペルト！こっちはかいこうせんだ！！！」

『エンペエアアアアア…』

「…：エレキブル、かみなりで防御」

『レッキイ』

「うわっ!?ちよっピチュウ下がって!!」

『ピ、ピチュウ!!』

シンジの挑発にのつたのはシゲルとジュン…そしてエンペルトだ。それ以外のヒナ

とポケモンたちは苦笑しながらもバトルの行方を見守る。シンジの挑発にのったシゲルとジユンはそのまま大技でエレキブルを倒そうとしていて、エレキブルはかみなりで防御したりまもるで防御したり…そしてシンジの指示によって攻撃したりとバトルは激化していった。もちろんそれについていけなくなつたヒナは慌てた様子でピチューに躲してもらいながらも、これは攻撃していいのかと迷う。

——でもそれはサトシのポケモンたちの行動によつて変わった。

『ダネ…ダネフシ』

『ジユツ！』

「うわっ！…ありがとうジユカイン」

『ピチューウ…』

『ガウウ…』

『ジユルツ』

ヒナ達に攻撃されては駄目だと考えてフシギダネが苦笑しながらも近くにいたジユカインに合図する。それを見たジユカインはピチューを含めたヒナとりザードを抱き上げて先程の観戦していた場所まで戻つた。そしてその様子に気づかないシンジ達は

激しいバトルを繰り広げている。呆れたような表情を浮かべたフシギダネ達に嫌な予感がしたヒナたちは抱き上げられているジユカインの腕に抱きついて離れないようにした。もちろんジユカインも離れるつもりはなく、ただヒナたちに攻撃がいかないように気をつけて見ている。

『ダネフツシイイイ!!!』

「っ何だ？」

『クウウオオオオオオ…』

「何だよ今の音!!!?」

『エンペエアアア!!!?』

「……チツしまった」

『レッキイ…』

バトルを中断させてしまうほどの大きなソーラービームが空に放たれる。その草タイプでなかなかできなさそうな極太ソーラービームの衝撃に我に返ったシンジたちは周りの状況を見て察し、やりすぎたと反省していた。

でもヒナたちはというとまだまだそんな激しいバトルについて行けないことに己の

弱さを自覚し…もつと強くならなければと考えていたりする。

もちろんこの後、ダブルバトルは再開しなかったが…シングルバトルでの試合が始まり、それぞれが観戦して盛り上がっていたりする。

第二百三十五話～兄は再会した～

こんにちは兄のサトシです。シヤラシティを屈指して旅をしているんですが、これから向かう洞窟にとっても面白いものがあるとセレナとハルカ：そしてユリーカが上機嫌で歩いていて、何があるのか話を聞いても教えてもらえず、とにかく行けばわかると言っていました。

よく分からないし教えてくれないため、俺とシトロンはお互いに顔を見合わせて苦笑しながらもついて行く。おそらくセレナたちの言うことは俺たちを危ない目に遭わせるようなものはないだろう。そう思ったから、俺は特に警戒せず大丈夫だろうと考えて少しだけ楽しみにしながらも歩く。

——そしてようやく着いた洞窟は鏡が多くある珍しい場所だった。

「へえ…凄いなここ…！」

『ピイカツチュ!!』

「ここはうつしみの洞窟って言ってね！水晶が鏡みたいにできてるからそう名付けられたのー！」

「確かに周り全部が鏡でできてるみたい！まるで鏡の洞窟かもー！」

「ハルカの言うとおりだよ！鏡みたいで綺麗！」

『デネデネー！』

「…ここは自然にできた水晶で重なった洞窟なんでしょうね…こんなところがあるなんて不思議です！」

鏡だらけのその洞窟に俺たちは面白いと笑みを浮かべながらも歩いて行つた。このうつしみの洞窟を抜ければシャラシテイに近づくのだから早く着けばいいと願いつつも歩き続ける。

——そんな時だった。鏡の奥で何か動いたのは。

「…あれ？」

『ピイカ？』

「どうかしたのサトシ？」

「何かあったの？」

俺を写していた鏡が何か動いたようなそんな気がして…もしかして何かゴーストタイプのポケモンがいるのではないかと思つて鏡となつている水晶を叩く。ポケモンがいるとしたら俺たちが反応した時点で動くだろうし、もしかしたら驚かしに来る可能性もあったからだ。

でもピカチュウが周りにポケモンがいるか見たが特に何もないと分かつて、大丈夫だと言つているため…俺も周りを見渡したが何も変わったことはないようだ…おそろしく気のせいだと考えて水晶に触りながらもセレナたちに振り向いて言う。

「いや何か鏡が動いたような気がツツ!!!？」

『ピイカア!!?』

「ちよつツサトシ!!!」

「サトシが鏡に飲み込まれてる!!?」

『デネデネ!!?』

「サトシ行かないで!!」

「サトシ!!」

鏡となった水晶の触っていた部分から俺を飲み込むようにいきなり動いた。その様子に驚いたセレナたちが慌てて俺の手を掴み、引っぱろうとする。ピカチュウも同じように鏡の部分に飲み込まれそうになって…でもいくら引っぱっても戻る様子はなく、そのまま俺たちは鏡に飲み込まれてしまった。

そして地面に衝突するような衝撃を受けて何があつたのか警戒しながら周りを見た。周りにはセレナたちが地面に倒れていて、少し痛そうに足を擦って、大丈夫かと心配しつつ、攻撃されないようにピカチュウと一緒に警戒する。でも俺たちに向かって攻撃するという警戒するものは特になく…いや、衝撃的な光景がそこには広がっていた。

「…デジャブかこれは」

『ピイカ…』

「何だ何だ!!?また俺がいる!!?」

「へっ?私がいるって...どうということなの!!?」

「うわあ見てデデンネ!私もいるよ!デデンネも!!」

『デデデネ!!』

「これは一体...どういうことでしょうか?」

俺たちの目の前にいたのは、ハルカ以外の俺たち自身...。前にイツシユ地方で見た似たような光景に引き攣り...:どうということかと思いつながら立ち上がったから彼らに近づいた。

俺...:じゃなくてサトシたちは驚きながらも凄いと思っているようで、俺が近づいても警戒などは特にせず、ただ笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「あーつと...:もしかしてイツシユ地方で以前会ったことある【サトシ】か?」

『ピイカツチュ?』

「やっぱり!妹がいる方の俺か!!久しぶりだな!!」

「へ？妹？…どうということなの？」

「サトシに妹がいる方のサトシ…？何か頭がこんがりそう…」

『デネデネ…』

「あの…詳しく説明してもらってもいいでしょうか？」

「おう…あ、でもその前にこっちのセレナたちにも話した方がいいか」

『ピッカツチュ』

「そうだな！おいそっちの世界のセレナたち！大丈夫か！」

『ピカピカア！』

「痛っ…あれ？私…じゃない私たちがいる!!!」

「わあ私がいるよ！これってどういうことなのかな!!!」

『デネデネ!!』

「ま、まさか鏡に飲み込まれたから…鏡の世界に迷い込んだんでしようか？」

「…というか、私がない時点で何かおかしいかも？」

ハルカは首を傾けてこちらを見ており、そしてセレナたちはお互いの自分自身を見て

驚いていた。まあ俺もイツシユ地方での出来事は驚いていたし、今回が二度目だからこそ驚くことはなかったのだからと苦笑した。そして向こうの…原作世界のセレナたちはサトシにハルカが誰なのか聞いていて説明している。

それからしばらく経つた後セレナが我に返ってこちらに近づき、俺とサトシを見比べていて…原作世界のセレナが困惑していた。その光景に俺はため息をつく。

「うーんつと……こつちが私のサトシね!!」

「おい抱きつくな」

『ピイカ…』

「そんな目で見るなピカチュウ」

「ふふふ！やっぱりそうだ！大好きよサトシ！」

「あーはいはい…」

「な!!? な、なんっ!?! えっ!?!」

「そつちのセレナと俺って仲が良いんだなあ！」

『ピイカツチュ！』

「いやそういう問題じゃないような気がします…というかあちらのサトシとセレナは

付き合ってるんでしょっか…？」

「っ、つつきつき…付き合ってるツツ!!!？」

「……セレナ、顔真っ赤だけど大丈夫？」

『デネデネ？』

「えっと…もしかしてあっちのセレナは積極的に行動してないかも？」

「え、いや…その前にこの状況を説明してほしいんですが…」

「お兄ちゃんもセレナみたいに積極的にならないと駄目だよ！」

『デネデネ！』

「だからそっちじゃないよユリーカ!!」

俺とサトシを見比べ終わり、何かが分かったかのように納得したセレナがこちらを見て笑顔で抱きついてくる。

その様子に原作世界のセレナが顔を真っ赤にして物凄い反応をしていた。…もしかしてあっちのサトシもセレナに好かれてるのかと思える。反応に俺はまたため息をついてしまった。

でも俺がため息をしても俺の世界のセレナは上機嫌で抱きついたまま離れない。無

理矢理引き離そうとしてもまた抱きついてくるため仕方がないと諦めた。

……まあ事情を話す頃には何とか離れてるかと思われながらも……これからどうすればいいのか考えていた。

……………

「へえ！なるほど……イツシユ地方ですか……！」

「時間の宝玉という神秘的なもの……少し興味ありますね！」

「あ、あああの……あなたはサトシのこと……」

「もちろん大好きで愛してるわ！……そっちの世界のセレナは違うの？」

「い、いやそ……そんなこと……」

「顔が真っ赤よ……可愛いかも！」

「かもって……うう……」

「ハルカのかもは気にしないで。そっか！じゃあ積極的に行かないと駄目よ！」

「だからそれは……」

「デデンネと一緒なんだねそっちの世界の私は！」

『デネデネ！』

「うん！何だか双子になった気分だねユリーカ！」

『デデデネ！』

「……ヒナがよくいう言葉で言えば…カオス」

『ピイカツチュ…』

「はは！なんだか懐かしいな!! そういうえばそっち世界でのヒナは元気にしてるか？」

『ピイカ？』

「ああ元気にしてるぜ。ヒトカゲがリザードに進化したんだ」

『ピツカア！』

「おお！それは良かったな！今度会ったらおめでどうって伝えてくれ!!!」

『ピカピカ！』

「ああ…分かった」

『ピカツチュウ！』

イツシュ地方であったことを説明し、そして原作世界でのサトシがこの水晶が鏡と

なっていて、様々な世界への扉を開く作用があるらしいと聞いた。そしてサトシが行った世界は「泣き虫サトシ」がいるという世界で…その話を聞いた瞬間ハルカ達は微妙そうな表情で俺のことは見ていた。その周りの反応がよく分かると納得してしまう…。

俺の姿で泣いているのはちよつと見たくないと思うからこそ話を聞いた瞬間、引き攣った笑みを浮かべてしまった。

…ちなみにセレナは会ってみたいようなそんな感じで興味をもっていたけれど、まあ俺は気にしない。

「……とりあえず早く元の世界に戻らないといけないよな」

『ピイカツチュ…』

久々に再会した嬉しさはあるけれど、もう二度と元の世界に戻れないとなってはいけないだろうと考えて呟いた。

もちろん日が暮れたとしても伝説たちに頼めば元の世界に戻してもらえるような気はしているけれども…それでも可能性は可能性なのでさっさと帰るに限る。

そう思い、俺たちは行動し始めたのだった。

第二百三十六話　兄は懐かしむ

「鏡の前で元の世界に戻りたいと念じる…か…」

『ピイカ…』

「うーん…駄目！何度やっても同じかも…」

「ハルカ！諦めずにやってみましょう！そうすればすぐに元の世界に戻れるわ！」

「えー…もうちよつとここにおいてユリーカとお話したい…！」

『デネデネ!!』

「こらユリーカ！…それは駄目だよ！」

「まだ時間はあるんだからあわてなくても大丈夫だぜ！な、ピカチュウ」

『ピイカツチュ！』

「そうよ。もしかしたらユリーカの言うようにここに居たいっていう気持ちがあるから戻れないかもしれないし…」

「私もユリーカももつとお話ししたい!!」

『デデデネ!!』

「ユリーカ!…はあ…とりあえず外に一度出てみませんか? 一度意識を改めればもしかしたら帰れるかもしれませんし…」

「…そうだな」

『ピツカア』

こんには兄のサトシです。現在うつしみの洞窟にて鏡のような水晶に向かつて何度も元に戻りたいと試していますが大きくいきません。もしかしたら向こうの世界のセレナたちが言うようにこの世界に居たいと言う気持ちがあるから帰れないのではと考えた。確かにすぐに帰るのは名残惜しいし、もうちょっと話していたいと言う気持ちはあるから仕方ないだろう…だからこそ一度外に出てからいろいろとやりたいことをやって…そして帰ろうということになった。

向こうの…原作世界のサトシが言うには、一度「泣き虫サトシ」に出会った後、別世界から元の世界に帰った後うつしみの洞窟から外に出て、ポケモンセンターへ向かった

みただった。でもその後シトロンがうつしみの洞窟にて失敗させてしまった機械の残骸を持つてくるのを忘れてきてしまったとのことでまた洞窟へ引き返し、そしてあの鏡の前で回収している時に話していたそうだ。別世界でのサトシ達がいるということをして話しているうちにまた会いたいと思ってしまうたらしく：ちようど近くにいた俺たちが巻き込まれた可能性があると：そうサトシ達が説明してくれた。

俺は、ただサトシ達が「会いたい」と願うだけで別世界へ行けるようになるのは何かポケモンの力が作用しているのかと疑問に思う。イツシユ地方でのディアルガのあの時間の宝玉の作用もある意味事故だった。そしてもう二度と起きないだろうと思っていたのだ。：まあもしかしたらいつかは会うかもしれないとはちよつとだけ思っていたけれど、こんなに早く再会できるとは思わず、予想外だった。けれど、イツシユ地方での事故は：まあ仕方ないとして、このうつしみの洞窟でそう簡単に別世界へ行けていいのかと思う。

でもサトシ達と言うにはこれはめつたに起きることじゃないらしい。つまりはそのめつたに起きることじゃない事故を二度も起こしたというわけだこの目の前にいる【サトシ】は…。

ある意味凄いなと思うが：とりあえず戻ればそれでいいかと考えて俺たちは歩いて行った。

.....

「うわーい外だあ!!」

『デネデネ!』

「ここから行けばすぐにポケモンセンターなんだよ!」

『デデデネ!』

「本当!?!早く行こう!」

『デネ!』

「いえ、うつしみの洞窟から離れすぎない方が良くと思うよユリーカ達」

「そうですね。こっちのシトロンの言うとおり、元の世界に戻れなくなるかもしれないんだから駄目だよ!」

「む...」

「ぶー...つまんない!」

『デネ...!』

『デネデネ!...』

「よしそつちの俺…じゃないサトシ！バトルやろうぜ！バトル！」

『ピカチュウ！』

「おう？…まあ良いけど…」

『ピイカ』

「あ、待ってバトルなら私がやりたいかも！」

「ハルカ？…よしやろうぜ!!」

『ピツカア！』

——外に出た瞬間いろんな意味でカオスになったと俺は感じてしまった。

第三者から見れば双子が大発生しているかのようなサトシ達の様子はとても楽しそうに見えるか…それともいろいろと騒いでいるかのように見えるかだろうと思う。まあそれでも悪い雰囲気になるよりはマシだと考えて俺はピカチュウを抱きしめてから一緒に近くの木にもたれかかって座り込んだ。遠くの方ではハルカとサトシがバトルをしていて、セレナたちがそれぞれ服についてやフォッコのブラッシングについてやたまに俺たちについて話し合い…そしてシトロンとユリーカ達はポケモンセンターに行こうとして止められている。

ある意味懐かしくなるような見たことある光景に、俺とピカチュウは笑みを浮かべて

眺めていた。

「……平和だな。ピカチュウ」

『ピイカツチュ』

——まあ、そう呟いた瞬間にこの雰囲気はぶつ壊されてしまったのだけ
ども……。

バシャーモ対ピカチュウの戦闘に乱入する形で檻のような機械が放たれ、ピカチュウとバシャーモが捕えられてしまう。その様子を見たサトシとハルカがそれぞれの自分の相棒の名前を呼び……そして何が起きたのかを叫んだ。

「ピカチュウ！」

「バシャーモ!!……ちよつと誰なの!!? 一体何!!?»

「なんだかんだと聞かれたら！」

「答えてあげるが世の情け！」

「世界の破壊を防ぐため！」

「世界の平和を守るため！」

「愛と真実の悪を貫く！」

「ラブリーチャーミーな仇や——」

「——サトシ、あれって一体誰？」

「あー……懐かしき悪役？」

『ピイカ？』

「悪役……ですか？……ということとは悪い奴なんですわ……！」

「ちよつと！ピカチュウとバシャーモ返しなさいよ！！」

『デネデネ！！』

「おい俺たちの台詞の邪魔するんじゃない！！」

「そうよそうよ！！……というか何であんた達分裂してんの！！？なんか見たことある光景ね！！」

『ニャ!?!にやんでジャリボーイ達が増えてるのニャ!?!?!もしかしてニャー達まだ帰ってきてにやいのニャ!?!』

「そんなわけないだろう俺たちは無事に帰ってきてるぞ！…たぶん」

「不安になるようなこと言うんじゃないわよコジロウ！」

「ああ、あいつら無事に帰れたんだな…そんなことよりもピカチュウを返せロケット団
！！」

「そうよ！ピカチュウとバシャーモを返しなさい！！」

「もう！またあなたたちなのロケット団！！」

『デデデネ！！』

「いい加減にしてくださいよ！！」

「へん！いい加減に何をするってんだ！」

「私たちはロケット団！」

『ポケモンを奪うのは当然だニヤ！！』

久々に見てしまった悪の姿をしたロケット団に俺とハルカは懐かしい表情を浮かべて遠い目をしていた。それぐらい今のロケット団は違いすぎる…。そしてカロス地方で遭遇したことのないセレナたちはロケット団が誰なのか分からずに…彼らの口上の

途中で言葉を遮る形で俺に問いかけてきた。それを見て苦笑しながらもちやんと説明し、悪い奴らだと知って目の前にいるロケット団を敵と認識したらしい。

そして原作世界のセレナ達はまた来たのかと叫んでいて…サトシはというとロケット団がこちらの世界にいることに何故か安堵しているらしい。

どうやらロケット団は「泣き虫サトシ」がいる世界に迷い込んでいたらしいのだ。そこからちゃんと元の世界に戻れたことにサトシは安堵していたようだったが、檻にいたピカチュウを見て意識を改めた。ピカチュウは電撃を放ち、バシャーモが炎を放っているというのに檻は壊れず…このままでは連れ去られてしまうと考えてサトシ達はロケット団を睨みながら叫んでいる。

そしてロケット団はそのまま気球に乗って逃げていこうとする。その姿を見た俺とピカチュウはそれぞれ顔を見合わせてから領き、立ち上がったから行動を開始する。

「…ピカチュウ、エレキボール!!」

『ピイカツチュウウ!!!』

「な、何っ?!?!」

「何よそれ!!!」

『攻撃を最大まで吸収する檻が壊れたニヤ!!?』

電気を最大限まで吸収したエレキボールをピカチュウとバシャーモを解放するために檻に向かつて放つ。放たれたソレは檻を見事に壊し、ちゃんとピカチュウとバシャーモを逃がすことに成功した。そしてその衝撃で気球が壊れ、こちらに落ちてくるのを見てから近づき、俺は拳を鳴らしながら笑みを浮かべてロケット団を見た。

ロケット団は俺を見て冷や汗をかいて震えているのを確認したが…まあそれでもピカチュウとバシャーモを連れ去ろうとしたことに対する借りは返さないとな…?

「覚悟しろよロケット団」

『ピイカツチュ…』

「な、なによ…まだこつちにはバケツチャ達がいるんだから!!」

『チャツチャツチャ!!』

『ソオーナンス!!』

「そうだぜ!俺たちはまだ負けてない!!」

『マーイツカア!』

『ジャリボーイのピカチュウをよこすのニヤ!!』

「うるせえよロケット団…さあ、話し合いでも始めようか？」

『ピイカツチュウ?』

「『ヒイ…!!!』」

『『ツツ…!!!』』

———まあ結局その後…ちゃんとうつしみの洞窟で鏡に祈る形ではなくパルキアに脅…じゃなく頼み込んで元の世界に戻れたから良かったとする。

でもまたあのサトシ達に会えるようなそんな予感がするのは…気のせいじゃないよな？

第二百三十七話～妹達は遊ぶ～

こんにちは妹のヒナです。突然ですが今私たちは兄のポケモンたちと野生のポケモン達：そして伝説達と一緒に遊んでいます。鬼ごっこ似たような遊びですが：ドロケイ？ケイドロ？：まあそういう遊びをしています。ちなみに私達は警察の方です。

事の発端はワニノコ達と一緒に遊ぼうと言ったからだ。大人数で遊ぶなら前に修行でやったかくれんぼを久しぶりにやるのはどうかと話していたが、それだと私たちがまた隠れる側になるだろうし：たまにはみんなも遊べて追いかけてたり追いかけられたりできる遊びにしようと考えてワニノコ達に向かって言った。

そしてその遊びを考えている間に来たのか：集まってきたのはワニノコ達だけじゃなく、何だか面白そうだしまとめ役としての息抜きにもなるかもしれないとのこと。

シギダネが来て…そして修行になるかとジユカイン達が集まり、伝説たちも集まる。ついでにとばかりにオーキド研究所に生息している野生のポケモンやオーキド研究所のポケモン達たちが面白そうだと集まった…ぶっちゃけここにいる野生や研究所のポケモンたちも随分と度胸が据わってきたなと少しだけ苦笑してしまったのは仕方ないことだと思いたい。まあとにかくたくさんポケモンたちが集まったんならと遊ぶことになったのだ。

『……ガウウ！』

「……あ……そっちに行ったよピチュー……！」

『ピイ……チュウ……！』

『ニドオオオツツ!!』

『ポツポーウツ!!』

リザードが周りを警戒し、私達に向かって合図をする。リザードが隠れていたポケモンたちを見つけてすぐに追いかけて行ったのを私が木の上から見ている、そしてピチューに向かって10まんポルトを指示したのだ。ポケモンたちとの遊びについても

ただ楽しいだけじゃなく修行も兼ねているので技を使っても構わないことになってい
る。でもまあ伝説達やフシギダネ達は野生のポケモンや研究所のポケモンに対してレ
ベルが高く一撃で倒せるぐらいには強いために攻撃的な技などは使わないようにとい
う意味である程度のルールがあるのだが……。それについては私たちには当てはまら
ないので考えなくておく。

ピチュウの10まんボルトに驚いた野生のニドランとポッポが驚いて立ち止まる。
そしてその瞬間を狙ってリザードが後ろからニドランとポッポをタツチしたのだ。警
察であるリザードの接触到気づいたニドランとポッポは落ち込みつつも警察側の陣地
に行く。

：ちなみに警察側の陣地で見張っているのは我らのまとめ役であるフシギダネなた
めいろんな意味で解放するのは無理と言えるだろう。だからこそみんなは必死に逃げ
ているのだ。

でも野生のポケモンや研究所のポケモンは逃げたり追いかけてたりするのが楽しいら
しく、勝とうか負けようかということは深く考えていないらしい。：まあ兄のポケモン
たちは負けず嫌いだし、伝説たちはチートなため激しい争いのようになってしまうので
仕方ないと諦めてはいるし勝ち負けを決めるのは自分たちじゃないと考えているよう
だった。

それにもしも兄のポケモン達や伝説たちが遊びだというのに技を出しまくってエスカレートしたり悪化したりしたら天下のフシギダネの制裁が待っているためにそこまで暴れないだろうと安心：はしてないけど、まあ大丈夫かなと思っている。皆熱くなりすぎるとフシギダネの制裁のことも忘れて暴れるからどっちかというと不安だ。

：それに遊びを始めてからずっと森の中で鳴り響いている轟音や地響きも兄のポケモンか伝説のポケモンが捕まえようとして：そして逃げようとして技を出しあい衝突しているのだろうか？と分かった。

とりあえずフシギダネがその轟音に苛立つて見張り役を中断して止めようとはしないことを祈ろう…。

『ポツポウ!!』

『ミュウ…!!』

「あ、リザードにピチュー！そつちにミュウが行ったよ！テレポートされる可能性もあるから気をつけて!!」

『ガウウ!!』

『ピイツチュ!!』

『ミュウ…?』

トキワの森にいる目つきの鋭いポツポが木の上にいる私に向かって何かを叫びながら飛んでやって来たためにそちらを向く。ポツポが示したのはピンク色の身体をした……この森では目立つミュウがご機嫌そうに宙に浮きながらやってきている姿だった。そのため私は地面にいるピチューとリザードに向かって叫んだ。その声に気づいたミュウはご機嫌そうにふわふわと浮いたまま踊っているかのようになりザードとピチューに笑顔を見せる。その表情はまるで捕まえてごらん？と言っているかのようだと思えた。

リザードは森で炎を放つことができないために物理技のきりさく等しかできない。そのためリザードはえんまくを放ち、ミュウの視界を真っ暗にする。ミュウはそのえんまくに驚いたような……わあ真っ暗だ！とでも言うかのような楽しそうな声を出していた。そしてそのえんまくにピチューが電気を放ちながらつつこみ、ミュウにタッチしようとする。でもえんまくがなくなつたときに見えたのはミュウがピチューから離れた場所で笑っている様子だった。その様子を木の上から私とポツポはお互いに顔を見合わせて、私達が動くしかなないと分かった。

「……ポツポ、一瞬でもいいからミュウに隙を作ってもらえる？」

『ポツポー!!!』

「うんありがとう……よしミュウが逃げる前にやろうか!」

『ポツポーウ!』

ミュウに隙を作れるのかどうかポツポに直接問いかける形で聞いて見たら、ポツポは大丈夫だと胸を張って自信満々に答えてくれた。その声に笑顔で頷き、私たちはこっそりと移動を開始した。

木の下ではミュウが宙に飛びながら逃げずにただ遊んでいるかのようになりザードとピチューを相手にしていたのでまだ本気で逃げるわけではないだろうと分かった。本気で逃げられたら捕まえるのは困難だと分かっている……そのため、もしかしたらミュウにはばれているかもしれないが……そうではありませんようにと心から願いながらも木から降りていき、ミュウの死角となる場所からポツポに合図を送った。

『ポツポーウ!!!』

『ミュウ?!』

「よし今よりザードにピチュー! 覚えてないけどそのままたいあたり!!」

『ガウウウ!!』

『ピチュウウ!!』

『ミユウウ!!』

ポツポがミユウの後ろから特攻する形でやって来たためにミユウが驚いたような表情を浮かべて後ろを振り返る。それを見て今がチャンスだと私は叫びながらミユウに向かつて走り出した。

もちろんリザードやピチューも……たいあたりという技は覚えていないけれども、私と同じように突撃してきたのだった。それを見ていたミユウはテレポートをせずにはだ笑っていて、私達が抱きついた瞬間に捕まっちゃったね!!という感じで楽しそうに叫んでいたように聞こえてしまった。とりあえず伝説が一体捕まったことに私たちは喜び、一緒に陣地へ行こうとミユウが誘うために行くことになった。

.....

「うわあ何これ……」

『ガウウ……』

『ピチュウ……』

『ポツポウ……』

『ミュウ!』

『ダネダネ!!』

警察側の陣地では死屍累累のような状況がフシギダネの周りに広がっていて私たちは遠い目をしてそれを見ていた。フシギダネの周りには何やら大きな技がぶつかったような焼け跡や凍った後……そしてはかいこうせんでも放たれたかのような抉られた地面に倒れまくっているポケモン達と凄まじい光景になっていたのだ。

そしてそのフシギダネの周りで倒れているのは兄の……ブイゼル以外の水タイプ達やデオキシス達だ。もしかして泥棒組を解放させようと特攻してやられたのかなと思う。……ちなみに先程私たちに捕まった野生のポケモンや研究所のポケモン……そしてフシギダネに特攻せず無事に済んだポケモンたちはこの酷い状況に慣れた様子で私たちが来たことに笑顔で……もしも人間だとしたら手を振ってこつちに来ていとも言うかのような仕草をする。そんなポケモンたちにミュウがまず近づき、そして私たちはまず先にフシギダネに近づいた。

フシギダネは苛ついたかのような表情で…青筋を浮かべていたのだけれども、私達が来たことに少しだけ機嫌が直ったのかただつるでお疲れ様というかののように肩を叩いてくれた。そのために私たちもフシギダネにお疲れさまと言いながらつるを掴んだりフシギダネに抱きついたりする。そして警察役のベイリーフ達が頑張っているのか私たちがフシギダネと話したりしている間にも泥棒側のポケモンたちが陣地へとやってきていた。

これだとすぐに終わるのかなと…そう思った瞬間だった。

ドオオオオオオオオオオオオオツツ
!!!!

「あれは…はかいこうせん? あ、でもはどうだんにも似ているような…」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

『ポツポー…』

『……ダネダネ…ダネフツシツ!!』

「あ、フシギダネツ?」

『ガウウ!!?』

『ピチュウ!!?』

『ポッポウ!!?』

『ダネ!!』

攻撃性の高い大技等はこの遊びでは使うなどそうルールとして決めていたというのに森の中心で大きな白と黄色の閃光が放たれた。その様子にもしかして伝説か兄のポケモンがバトルみたいに攻撃し合ってしまったのかなと考えて苦笑した。でもフシギダネはそうじゃなかったようだ。兄が本気でキレたかのように無表情で走り出したことに私たちは驚く、でもフシギダネは一度こちらを見て後は頼む!!というように叫んでから…先程の閃光のあつた場所へ向かって言ったために遠い目をしてしまった。そしてすぐに分かった…この遊びはもうすぐ強制終了されてしまうのだと。

「とりあえずさっきの攻撃放ったポケモンに同情しとく…」

『ガウウ…』

『ピチユウ…』

『ポツポーウ…』

第二百三十八話　妹はジヨウトへ飛ぶ

「…あの、マサラタウンに帰りたいですけど」

『ガウウ』

『ピツチュ』

「駄目だよ。ようやくシンジ君やジュン君がシンオウ地方へ帰ったし、せつかくなんだから少しぐらい僕と勉強でもしようか。いつもはシンジ君と勉強しているんだろう？僕もヒナちゃんに教えたいことがたくさんあるからさ」

「いや勉強ってマサラタウンでもできますよね!!? 何で私達ジヨウト地方に連れてかれるんでしようか!!?」

『ガウウ!!』

『ピチュウ!!』

「…ははは!」

「え、笑って誤魔化した…!？」

『ガウウ…!?!』

『ピチュ…!?!』

「こんにちはは妹のヒナです。現在私たちはジョウト地方のアサギシティからワカバタウンのウツギポケモン研究所へ向かっている途中です。

シンジさんとジュンさんはシンオウ地方のバトルフロンティアに呼ばれているとのことでマサラタウンにいつまでもいることができないと言って帰っていくことになりました。私たちはマサラタウンで遊んでもらったり勉強で教えてもらったりした分のお礼をしようと考え、きのみで作ったお菓子をシンジさん達に渡し、マサラタウンから見送った。…ちなみにその時シンオウ地方で仲間になった兄のポケモンたちが私たちと一緒に少し泣きそうな表情で見送ったのは仕方ないことだと思う。

——そしてその翌日、シゲルさんはジョウト地方に用があるとのことでした。シンジさん

達と同じようにマサラタウンを出発することになった。その時にシゲルさんから私たちも港まで来てくれないかと言われ：首を傾けて疑問に思いつつもそれに了承し、シンジさん達に渡した同じようなお菓子を持って見送ろうと港まで行く。

でもその後船のチケットを私達の方まで買っていたらしいシゲルさんから言い訳ができないように爽やかな笑みを浮かべられたままあれよあれよといつの間にかアサギシテイに向かう船に乗せられてしまったのだった。

：船に乗せられる瞬間までそのことに気づかずにはいた私自身が馬鹿だと物凄く後悔した。港に行ったのはシゲルさんと：そして私達しかいなかったのだからマサラタウンへ戻る方法なんてなかったんだと今更気づいたことにも余計に後悔が高まる。：おそらく母やオーキド博士、そしてケンジさんにはもうシゲルさんから話をしているのだろうと考えて少しため息をついた。

：とりあえずマサラタウンに帰って来た時、ラテイアス達になんて言ったらいいんだろうと必死に考えるけれども思い浮かばない。：まあシゲルさんがそんな顔せずにつつかくジョウト地方に来たんだから楽しみなよと言っていたために私はため息をついてそれに頷いた。：ちなみにリザードとピチューは周りを見て楽しそうにしている。私がジョウト地方を楽しむかと決めた瞬間からリザードたちも楽しもうと決めたらしい。

「……そういえばシゲルさんってシンオウ地方の研究所に移ったんですよね？何でジョウト地方の研究所に行くんですか？」

『ガウウ？』

『ピチュウ？』

「ああ……そういえば言っでなかったね……ジョウト地方で新しく発見されたポケモンのたまごが見つかったそうなんだ。調べ終わったポケモンの生息分布から発見されたたまごらしいんだけど……どうやら模様が見たことのない部類だったそうなんだ」

「……あ、じゃあ新種かもしれないってことですか？」

『ガウウ？』

『ピチュ？』

「そうなるかもしれないけど……でももしかしたら生息分布が変わった可能性も出てきてね。あとそれ以外にもいろいろと……僕がやるべきことはその土地の調査なんだよ」

「そうですか……あ、じゃあ私たちもそのたまごが見れるかもしれないってことでしょうか？」

『ガウウウ!!』

『ピッチュウ!!?』

「はは…そうなるかもしれないね」

どうやらシゲルさんから聞いた話だとポケモンのたまごがもうとつくに調べ尽くした土地から見つかっただらしい。しかもそのたまごは見たことのない模様をしていて…もしかしたら新種か、それともその土地のポケモンの生態が変わったかもしれないとのことだった。

だからこそシゲルさんはわざわざジョウト地方までやって来たと話をしてくれた…でも、私がそれに来てもいいのかなと疑問に思うし…迷惑になるんじゃないかなとたまごを見たい反面で不安になった。でもその私の感情がすぐに分かったのかシゲルさんが私のかぶっている帽子の上から頭を撫でるようにポンツと手のひらを乗せて笑顔で大丈夫だよと言ってくれた。その言葉に笑みを浮かべて安心しつつも…早くたまごを見たいなと思いつながら歩いていった。

.....

「ちよっ…何でいるのよ!!」

『ガウウ…!!』

『ピチュウ…!!』

「いやそれこっちの台詞だから!!」

ジョウト地方の研究所ではシゲルさんがウツギ博士を含めた研究員の人たちと話し合いをするらしく、たまごも今は見れないためにただ待っているのは退屈だろうからと連れてこられたある建物で見つけたのはマサラタウンで遊んだり戦ったりしていたはずのライバル…いや、帽子をかぶったヒビキがこちらを見て茫然としていたために私は微妙な表情で指差して叫んでしまった。その声に反応してヒビキも叫んでいるが…本当に何故ジョウト地方にいるのだろうか…。

「マサラタウンで会えないって思ってたけどまさかジョウト地方にいるだなんて…」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「あれ？言ってなかったか？俺ここの学校で寮生活をしてるんだ。マサラタウンの学校

も良いけどこの方がポケモンの育成についてより詳しく知れるし…それにたまごについて博士がよく教えてくれるから楽しいんだぜ！」

「そつか…まあヒビキが楽しいなら良いけど…でもトレーナーになる頃にはちゃんとマサラタウンに帰ってるんでしょね？」

「当たり前だろ！俺は生粋のマサラ人なんだからな!!トレーナーになったらオーキド博士からポケモンを貰うって決めてるし…それにお前と最初にバトルがしたいって思ってるんだぜ!!」

「そう思ってるんならちゃんと勉強してマサラタウンに帰ってくること!!ヒビキって勉強とかうまくいってるの?なんかそのノート真っ白なんだけど…」

「う、うるせえ見るな!!」

『ガウウ…』

『ピツチュウ…』

ヒビキはどうやらこのジョウト地方の学校に行きたいと自ら行動してこちらに来ていたようだった。確かにマサラタウンやカントー地方の学校はバトルというよりもポケモンのタイプについてやトレーナーとしてのポケモンの接し方についての勉強が主

らしい。それ以外では自宅学習の子たちと同じように勉強をする。

そのためポケモンの育て方についてより詳しく知りたいという子はポケモン育成やたまごについて主に勉強するこのジョウト地方の学校が良いのだろう……。でも三人組としていつも一緒にいたはずのコウやシユウジはいないためにもしかしたらヒビキだけでこのジョウト地方の学校へ行ったのかと思った。：まあヒビキには夢があるし：積極的に行動しているんだと考えて納得した。

ちなみに私は学校を選ぶことはせず自力で勉強することを選んだためにジョウト地方やカントー地方の学校でのポケモンを学ぶと言う勉強はあまり教わってない。教わったとしても教科書に載っている基本的な事ばかりだ。：でも学校よりも自力で学習すると選んだ子供たちはポケモンと学びたいと考えたり、接したいと思うことができる。そしてそんな子供たちの将来のために必要ならちゃんと学校へ行って自由に参加できるセミナーを受けることができるようなのでポケモンに対して接することに不安な子供はいないみたいだ。

私はオーキド研究所で兄のポケモンたちと触れているし、野生のポケモンや研究所のポケモンともよく遊んでいるためにまあ大丈夫かなと思っっている。それに必要だと思ったらちゃんとそのセミナーに行こうと思ってるし：とにかく今は大丈夫だろう。

でも今心配なのはヒビキがちゃんとトレーナーになれるかどうかだ。ヒビキが持っていたノートを借りて中身を見るとほとんどポケモンの絵や白紙が多く。ちゃんと授業を受けているのかが心配になった……。でもヒビキは顔を真っ赤にさせて私に持つていたノートを素早く取り返して叫ぶ。その姿に苦笑しながらも謝りつつ、一緒に勉強しようかと誘った。シゲルさん達の話も長くなりそうだしこれぐらいはいいかなと思つたからだ。……ちなみにその時リザードとピチューはやれやれとでも言うかのように肩をすくめてため息をついていたりする。

第二百三十九話～妹は再会?する～

「あ、そうだ勉強よりも見せたいものがあるんだ!!だからちよつと来てくれ!!」

「え、いや何処に!!」

『ガウウ!!?』

『ピチュウ!!?』

「行つて見れば分かる!!」

「こんにちはは妹のヒナです。現在ジヨウト地方の学校にやってきています。

シゲルさん達は研究所でたまごについていまだに話し合っているらしく、かなり時間

がかかるのかなと思えた。

そんな時にヒビキからノートを自分の持っていたバックに入れてから私の手を掴んで走り出す。リザードとピチューが走り出した私たちに驚いてすぐに一緒に追いかけてきたのだけれども：一体何処に連れて行くんだろうと考えながらも転ばないように走り続けた。

————として見えてきたのはある部屋に敷き詰められた真っ白な毛布：ではなくメリープが大量発生している光景だった。

羽毛がたくさんあつてもふもふで学校の生徒たちもメリープ達に戯れている。私たちは笑顔でメリープ達を見た。

「メリープ！しかもふわふわもふもふ!!」

『ガウウ!』

『ピイツチュ!!』

「へへー……だろ？ここのメリープ野生よりもおつきく育てようとして今頑張つてるところなんだぜ！」

「うん凄い！イツシユ地方で見たメリープよりもふもふだよ!!」

『ガウウウ!!』

『ピチュピチュ!』

『メエエエ!』

メリープの身体を覆う綿毛が前に見たメリープよりも大きくてしかもふわふわな感触に私たちは驚く。まるでマシユマロのように柔らかくてとてもふわふわだ。このまま寝てしまっても良いぐらいの感触が気持ちよくて：メリープはそんな私たちの反応にどうだ凄いだろう?とでも言うかのように笑顔で触らせてくれた。

ヒビキは自分の事のように喜びながら部屋の遠くの方にいるメリープを大量に呼んで私たちに向かって突進させていた。突進されるだけでも通常だったら痛いと言うのに、メリープは前髪ができてきているかのように顔の方もふわふわ過ぎて全然痛くない。むしろもっと来てほしいと思ってしまった。リザードとピチューはメリープの群れに自ら突撃しており、そのふわふわな部分を堪能していた。

「ねえどうやってメリープをふわふわもふもふにしたの?」

「お? 何だ知りたいのか?」

「うん知りたい」

「…へへ！ヒナがそこまで知りたいうんなら仕方ねーから教えてやるよ!!」

「はいはいこの哀れなマサラ人に教えてくださいいな」

「それはな——」

「——メリープの食事にマトマのみを入れて他のきのみとブレンドしたただけだ」

「……………ん？誰？」

ここの学校のメリープは特殊らしいからどうやって育てたのか気になり、話を聞いてみることにした。ヒビキに質問すると、なにやら楽しそうに私に向かって笑顔で教えてやるよ！と言うため、私は少し苦笑しながらも聞こうとする。でも、その言葉にヒビキが笑顔で頷いてからメリープの育成方法について説明しようとしたのだが、ある少年の声でそれは遮られてしまった。

声が出た方向を見ると私のリザードとピチューをよく観察している赤毛の少年がいて……こちらに向かって近づいてきた。

———というか私たちに向かって近づいている赤毛の少年が以前見たことあるような気がしたんだけど…気のせいかな？

そう私が考えている間に、ヒビキが少しつまらなそうな表情で口を開く。

「何だよシルバー。せつかくヒナに教えるチャンスだったのに邪魔すんなよ」

「お前の場合感覚で説明するから分かりやすく言ったままだ。それよりも…ヒナと言ったな。このピチューと色違いのリザードを育てたのはお前か？」

「え、うん…そうだけど…？」

「そうか…なら言っておく、素早さの能力が通常よりも上だと見たが攻撃力をもっと上げた方が良くないか？大体観察して分かったが特攻が上がりすぎているような気がする…あとお前にかなり懐いているように見えるがピチューは進化させるつもりはないのか？まあサトシさんのようにピカチュウを進化させないという例があるからピチューもそうだとは思いますが…それでもピチューのためにちゃんとした育成方法を考えた方が良くだろう。素早くてもピチューの能力だと一般的には弱いと分類されるから…あと———」

「——はいそこでストップ!!ヒナが混乱してるから止めろ!!!」

「え、なに…何なの？ 私たち貶されたの？」

『ガウウ…？』

『ピチュ…？』

「いや違う!!こいつこんなんだけど結構いい奴なんだ!!」

「誰が良い奴だこの帽子野郎が」

「誰が帽子野郎だこのツンデレ赤毛野郎が!!」

「おうふ…」

『ガウウ…』

『ピチュ…』

シルバーと言う少年は初対面だというのにリザードとピチュウのことについて一気に話し始めてしまったことに私たちは驚いて反応できなくなっていました。しかもシンジさんのように少し目つきが悪いのか…それとも話に夢中になっているのか話していくごとにだんだん目が鋭く…そして怖くなってきたと感じてしまい一歩後ろへ下がるがシルバーはそれよりも二歩前へ私に向かって進んでしまったために距離を詰

められる。

リザードとピチューに興味をもってくれてるのは良いけどいつまで話しているんだろうと困惑した。

…そしてそんな私たちにヒビキが気づいてすぐに大声でシルバーから離してくれた。リザードとピチューの育成方法が間違つてると言うような感じで話す言葉や弱いという言葉に少しかだけ眩されているのかと困惑しながらも首を傾けてシルバーに向かつて聞いてみた。でもシルバーが反応するよりも先にヒビキが違うと言つて首を横に振つた。そしてシルバーがそんなヒビキのフォローに嫌そうな表情で睨みながら悪口とは思えない言葉で文句を言い。その言葉にヒビキも言う。

何だか仲が良いんだか悪いんだか分からないヒビキ達の様子に私たちは戸惑いながらも話しかけた。

「えつと…シルバーだっけ?よろしくね…私はヒナ」

『ガウウ』

『ピチュ』

「ふん…シルバーだ。見たところこの学校の生徒じゃないが…転入者か?」

「いや違うぜ!ヒナはカントー地方からこつちに用事があつて来たんだ!」

「…って何でヒビキが私のこと説明するのよ」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「いいだろ少しぐらい」

「ん…カントー地方…ヒナ？…ああもしかしてサトシさんの言っていた妹とはお前の事か？」

「あれ？お兄ちゃんを知ってる…というか会ったことがあるの？」

「前に一度だけ会ったことがある…だが、あのサトシさんの妹と言うならば余計にリザードとピチュウの育てかたを考えると…確かに一目で見ればわかるぐらいリザードとピチュウの一般的な能力値は高いが…それでも育成が間違つてトレーナーになった時に妹（笑）と言われたらどうするつもりだ!!」

「いや…え？」

「リザードとピチュウの食事にはちゃんと時のみをブレンドして入れてるか!?!ちゃんとバトルの技を特訓してるか!?!サトシさんの妹というからにはそれぐらいはしているんだろうな!!」

「…えつとまあ一応やってるけど」

「ならば『ポケモン全育成応用編』という本は読んだか!?!基礎だけだとサトシさんの妹だ

と皆に認められないぞ!!」

「いや認めるって…」

「特攻を上げるだけじゃなくそれ以外もちゃんとやれ!あと技の威力も上げろ!!やるべきことをやってこそサトシさんの妹といえるだろうが!!」

「……うんごめんヒビキ。ちよつとシルバーの言ってることよく分かんない」

「悪い。でもこいつツンデレだから気にすんな…ヒナの事心配して言ってるんだよ」

「誰がツンデレだ誰が!!」

「そこを聞き取るなよ!」

とりあえずシルバーが心配して私たちのことを言っているのは分かった。おそらく兄が有名になりすぎているからこそ、家族である私がいつか一般的なトレーナーとして旅に出るといふことに心配なのだろう…。兄と血の通った家族だからと比較されやすいために、兄が優秀であればあるほど一般的なマサラ人である私のことを残念だと思われる。まあ今まではそうではなかったけれども、ヒビキとの戦いで少しだけ分かった気がした。これから数年後にトレーナーになった頃…そして兄の夢が叶った時…私はおそらくポケモンマスターの妹として期待されてしまうだろう。そしてその時に才能がない私は皆にどう見られ…そしてどう言われるのかをシルバーは初対面だと言うのに

すぐに分かってしまったようだった。

リザードとピチューを兄のポケモンたちのようにもつと強く……そしてあのポケモンマスターの妹だと胸を張って言えるようになれとそういう感じで心配しているのだ。まあ少し言い方はマサラタウンで短い間だけ一緒にいたシンジさん＋○○タイムの時のデントのようだと思ってしまう。

まあでも、初めて私のリザードとピチューを見たというのに能力値等を言い当てたことが凄いと思えるし、シルバーはちゃんと私たちを見てリザードの色違いだのサトシの妹だのという意味で騒がず……そして心配しながらも私たちのことを考えて話してくれたみたいだから嬉しいと思えた。

———ちなみにリザードとピチューはシルバーが暴走し始めた頃、早々に離脱してメリープのもふもふを堪能していた……ちよつとうらやましいと思えたけど仕方ないか。

第二百四十話く妹はシルバーに困惑したく

「…そういえばヒナお前誰かを待ってるって言ってたけど…何か用があつてこつちに来たんだろ？何かあつたのか？」

「よく分からないうちにジヨウト地方に連れてこられたから知らない」

『…ガウウ』

『ピチュウウ？』

『ガウウ』

『ピツチュ』

「ふん…詳しい話は知らないがジヨウト地方に来るのならちゃんど目的を知ってから行動した方がいい」

「うんそれ私も思った。…けどいつの間にかここにいたんだよね…ジョウト地方に入ってから理由を聞いたけど……」

「何があつた!?!」

こんにちはは妹のヒナです。学校のメリープ部屋でもふもふのメリープ達と戯れながらも私たちは話し合ってます。

リザードとピチューは私たちの話を聞いていて…もしかしたら邪魔になるかもしれないと考えたらしく話をしている間に私たちから少しだけ離れて、近くにいる一回り大きなメリープに近づいて抱きつこうとしている。

それを眺めながらも私はここに来た時のことを思い出してヒビキ達に説明した。説明していた時は苦笑しただけだったのだが…いつの間にか真顔になり遠い目で話していたみたいだ。ヒビキは驚いたように私に何があつたのか聞こうとして来ていて、シルバーは行動する前に確認ぐらいちゃんとしておけと心配そうな雰囲気漂わせながらも注意された。…うんシルバーの言うことは私も凄く領ける。

———というかシゲルさん何で私を連れてきたんだろう…私がジョウト地方にわざわざ行く必要でもあるのかと少し考えたけどやはり分からない。ヒビキ達に会わせる

ために連れてきたのだとしたらちゃんと言うだろうし……そう思っているとシルバーが何か思い出したかのように話しかけてきた。

「……もしかして新種のポケモンのたまごを見に来たのか？」

「あ、それシゲルさん言ってた。でも見に来るだけで何でわざわざ私も連れてくるのかな……」

「えっ!? 何だよそれ!! シゲルさんに連れてこられたのかよ羨ましいな畜生! というかたまご俺も見たいしシゲルさんに会いたい!! シルバーもサトシさんのライバルのシゲルさんに会いに行きたいだろ!! あんなにカントー地方でのサトシさんのバトル経歴調べてたんだからさ!!!」

「……ふん、勘違いするな……たまごに興味があるだけだ」

「ははは……」

どうやらヒビキとシルバーはシゲルさんに会いに行きたいようだった。あと新種かもしれないというポケモンのたまごも見たいと言ってテンションが上がっているらしい。

…とりあえず落ち着いてと言いたい。まあ私が話しちゃったからこんなにも興奮しているということは分かっているんだけど…それでも他の生徒たちも羨ましそうにこつちを見ているし、私達に向かつて話しかけようかタイミングを計っている子もいる。そして色違いであるリザードを見て近づこうとしている子も…。だからこそ少しだけ落ち着いてほしいかなと思えた。

まあ、リザードについては色違いだからという理由で生徒が近づくの気づいて警戒するために大丈夫だと安心しているため問題はない。それに何かあれば私自身すぐに行動しようと思っているし…。

とりあえず一番問題なのはたまごやシゲルさんに会いに行きたいという考えを持つ生徒たちだ。私としてはシゲルさんに邪魔にならない程度に見に行く予定だったし、そんなに大勢で研究所を訪れてたまごを見るとシゲルさんたちに迷惑だと考えているためにできればそのまま話しかけないでほしいと願う。…まあシルバーが周りを見て近づいてきた子たちを威嚇しているように鋭い目で睨むためにその不安は大丈夫かなと思えた。睨まれた子は怖がって近づいていないのだから…。

でもその様子を見るとシルバーはこの学校で馴染めているのかなと心配になる。ヒビキが楽しそうにシルバーに話しかけている様子から少しだけ大丈夫だとは思いますが、先程の出来事でヒビキ以外にもちゃんと交流はできているのだろうかと思ってしまう

のだ。

ああ……でもまあなんとなく……シルバーなら大丈夫かなという、ついさつき初めて会ったというのに第一印象のせいで何だか確証もない信頼感があった。一人でいたとしてもあまり興味なさそうに過ごしそうな気もするし……これはこれで駄目だとは思うけど。それでもいろいろと駄目だった場合はヒビキがなんとかするだろうという考えもあるし、大丈夫か。

.....

——その後、このままメリープ部屋にいてもふもふしている意味もないとシルバーが立ち上がってから私たちに向かつて早くいくぞと言ってきたために私たちは顔を見合わせてから立ち上がってすぐに追いかける。もちろんメリープと戯れていたリザードたちも呼んでから行動した。リザードたちは驚きながらも走って私たちを追いかけてから、私の後ろを歩く。

「ねえどこに行くつもりなの？」

『ガウウ?』

『ピチュウ?』

「決まってるだろう。ポケモン研究所だ」

「はあ!?!お前…:学校を無断で抜け出すつもりかよ!!」

「え、いやシゲルさんが…:たぶんしばらく時間がかかると思うけど…:それでも呼びに来るみたいだから大丈夫だよ?…:」

「何時になるのか分からないならこちらから行けばいい。それに話し合ってる間に見れば迷惑にはならないだろう」

「だから何でそうなるの!!?」

『ガウウ!!?』

『ピチュウ!!?』

「悪いこいつ考えたらすぐ行動するやつだったわ」

「それ物凄く悪い予感しかないよ…:」

「おう俺もだ…:」

『ガウウ…:』

『ピツチュ…:』

シルバーがそのまま外に出ようとして歩いていくために私たちは微妙に大丈夫なのかと心配しながらも歩いていく。

一度、ヒビキに向かってシルバーを止められるか聞いたのだけれども、無理だと即答されたために私達は苦笑してしまった。おそらく学校でも何かシルバーがやらかしたことがあるみたいだとヒビキの反応から察したからだ。

ポケモンについて大事にしている所もあるみたいだし、傷つけるといふような行動はしてないと今までの言動から感じられたけれど…それでももう少し人のことを考えてから行動してほしいと思ってしまう。まあ一度考えたらすぐに行動する一直線な部分はトレーナーによくある行動原理だし…仕方ないかと諦めた。でも研究所に着く間に何とかしなければ……。

——多分、シルバーは自由に毎日を過ごしているのだろう…皆を巻き込みながらだけでも…。

.....

「うわあやばい着いちやつたよ…」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「引き返そうぜ今すぐに！」

「何を言ってるんだ馬鹿かお前は」

「シルバーのほうが馬鹿だろ!!」

「はあ…」

『ガウ…』

『ピツチュ…』

シルバーを止めようとしていたというのに…すぐに着いてしまった研究所の入り口で私たちは立ち止まっていた。

来てしまったからには今すぐ戻るか研究所にいろいろと事情を話して入った方が良
いとは思うけれども…シゲルさんに怒られる未来しか見えないために私が先に行動し
て研究所の扉を開けることはできない。もちろん引き返すという選択肢もあるにはあ

るが…それはシルバーのせいで無理だった。シルバーって本当に頑固だ。

そしてヒビキもおそらく私と同じだろうと思えた。…それにヒビキの場合は無茶をやったために母にトラウマになるレベルで怒られた例があるためにこういう行動は自分から先にやりたいとは思えないらしい。…というかもしかしてこの学校に行く理由の一つとしてマサラタウンで会うかもしれない母から離れるためにジョウト地方にやってきてしまったのかと考えてしまったけれど…まあ有り得ないだろうとすぐに思考を目の前の扉に移す。

…私たちがどうすればいいのか迷っているのを見てシルバーが待ちわびたという感じですぐに扉に近づいて開けようと…いや、ノックをしようとする。

それを見た私たちはシルバーを止めようと動いた。

…ちなみに、急に行動したシルバーにリザードとピチューが呆れながら見ていたりする。

「ちよっ！待ったシルバー！」

「おい待て!!もしかしたらシゲルさんや研究員の人たちが忙しく話し合ってるかもしれないだろ!!!ノックは駄目だノックは!!」

「何を言ってるんだ馬鹿が。勝手に扉を開けるのは無礼になるしそもそも鍵がついていて開けられるわけがない。それにこの研究所の扉はチャイムがない構造だ。だからノックをする必要があるだろう馬鹿が」

「馬鹿を二度言う理由も分かるし礼儀とかも分かるけど！そもそも私達待ってればシゲルさんが来る予定だったんだからね！！だから来る必要はなかったんだよ！！」

「そうだヒナの言うとおりだ！！だから戻ろう今すぐに！！」

「ここまで来たのなら戻るのも手間だ。行くぞ」

「わああああ待って待ってえ!!!リザードとピチューも止めて!!」

『ガ、ガウウ!!』

『ピイツチュウ!!!』

「ほらしルバー止めろ!!」

「……何やってるんだいヒナちゃん…それに君たちも」

「うわ見つかっちゃった!!すいませんごめんなさいシゲルさん!!」

『ガウウ!!!?』

『ピイツチュウ!!!?』

「ほらシルバー土下座するぞ土下座!!ヒナのおばさんから教わった土下座見せてやるからお前もやれ!!!」

「こんにちはシゲルさん。今お時間よろしいでしょうか?」

「…………え…ああ大丈夫だよ」

「無視かい!!!」

「あーもう!」

『…………ガウウ』

『…………ピイツチュ』

何処までもフリーダムなシルバーに私たちは翻弄されつつも、ツツコミを入れた。その様子にシゲルさんが苦笑しながら扉を開けて私たちに中に入るように言う。騒いできましたことで研究所のみんなに物凄く迷惑をかけてしまったし邪魔になっただろうと居心地悪くなりながらも研究所内へ入って行った。

第二百四十一話 く妹たちはたまごを見るく

「これがシゲルさんの言ってたたまご……リザードが生まれた時とは違う色だ！それにズルックが生まれた時のたまごとも違うね！」

『ガウウ？……ガウウ!!』

『ピチュウ!!』

「2つもたまごがあるの始めて見た!! すごい全然違う色だぜ!!」

「水色と赤色ということはおそらく生まれてくるポケモンはみずタイプかほのおタイプになる可能性が高い……か？ いやだが白色と黒色もある。模様のようになっているみたいだ……もしかしたらポケモンの模様からたまごの色が決まっているのかもしれないのか？」

「おや、シルバー君は将来研究職にでもなるのかい？随分的確な判断だね」

「ありがとうございますウツギ博士…ですが俺はトレーナーになると決めていますので…」

「そうか残念だな…でも興味があつたら是非とも研究員になってくれ。歓迎するよ！」

「はい。ありがとうございます！」

「シルバーつて本当にポケモンのことに興味があるんだね…」

『ガウウ』

『ピチュピチュ』

「いやあれでもまだマシな方だぜ？前なんて学校の授業でメリープと同様に育てられているワニノコたちの違いについて事細かに説明してしかも本に載ってる話を暗記して全部言いやがったから先生にドン引きされてた」

「え、それ凄いの…？」

「お前あいつの熱弁見ただろ？…冷静に今ぐらいのテンションでそれを言うと思ったら大間違いだ」

「あ…なるほど」

『ガウウ…』

『ピチュウ？』

こんにちには妹のヒナです。現在研究所の中にある2つのたまごを見ているのですが、シルバーが少し研究員のような言葉で呟いて：それをウツギ博士が聞いて興味深そうに話しかけ、そして会話している様子には私はシルバーがポケモンが物凄く好きなのだと分かつて微笑ましく思えた。

でもヒビキは疲れたような表情を浮かべながらも、学校の授業でシルバーが暴走した時の出来事を話し：まだこれでも序の口だと言う。

そのヒビキの様子はマサラタウンで少しだけ暴走していた頃とは違って苦労人のように思え：ああ、シルバーをフォローするのに頑張りすぎて性格が少し変わってしまったのかなと同情した。でもまあ人をフォローすることは周りを良く見て行動すると言う意味でもあるため、以前トキワの森で突撃したりオニスズメたちがいる区域に入って行こうとしたりはもうしないだろうと思えた。おそらくやらないはずだと：そう思っておきたい。

———とりあえずシルバーについてはこのまま兄のように自由人となつて行動してほしくはないために何とかしなければと思うけれども：でも今の状況でシルバーの行動をすぐに変えるようなことはできないだろう。

それに私はずっとジョウト地方にいるわけじゃなく、この後マサラタウンに帰るため

にシルバーの暴走を止めることに対して協力はできない。だからこそそのストッパーの役目を担うであろうヒビキに心の底から頑張れと応援しておこうと思った。

そんなことを考えている間にも、シルバーはまた何か考えながらもウツギ博士に話しかけていた。

「…ああそうだ。この2つのポケモンのたまごは一体どんな種族なのか分かりますか？」

「おいシルバー…邪魔になるからもう帰った方が…」

「何を言ってるんだヒビキ。せっかく研究所にお邪魔しているのだから聞けることは聞いた方が良いだろう？ 馬鹿かお前は」

「誰が馬鹿だ!!？」

「シルバーは少し遠慮つてもものを知った方が良いかもしれない…」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「はは…そうだね。このポケモンはまだ何が孵るのかよく分からないんだ。でもたまごは温かいしちゃんと生まれてこようとする意志を持っているから大丈夫だと判断したんだよ。まあつまりたまごが孵るまでのお楽しみかな？」

「生まれてくる意志…?」

「えつと…確かたまごの頃からでもポケモンは外を見ることができて…それで生まれたくないという感情があればたまごのまま冷たい状態になってしまうということですよね…」

『ガウウ…』

『ピチュウウ?』

「そうだよヒナちゃん。ポケモンはこの状態でもちゃんと外を知ることができると研究していて分かったことだ。…まあそれは本当にたまごの殻の外が見えているのか…それとも音を聞いて判断しているのかはまだ謎に包まれているんだけどね。でも一つだけ分かっていることは…たまごの状態の時、何かトラウマができてたまごの中にいるポケモンが心を閉ざしてしまった場合、冷たくなり生まれなくなる可能性がある…最悪、そのポケモンの命が危ぶまれるということなんだ」

「そんなことがあるのか…!!」

「…ですが、このたまごはそうはならない…ヒナやシゲルさんが言うように、生まれたくない感情がないからこそこそうやって温かいままなんですよね」

「そうだね」

たまごの種類について聞いて見たら、ウツギ博士やシゲルさんは微妙そうな表情を浮かべて首を横に振って分からないと答えた。

でもいつかは生まれてくるだろうという確信があるからこそ、このまま待つていようという考えでいるみたいだった。

たまごが生まれてこないというのは…兄がたまごを孵して一時期育てていたヨーギラスの出来事を思い出す。…あの時は兄も思い悩んでいたし、ポケモンになつてしまえばいいと少しぶつとんだ方向へいこうとしていたときもあつたぐらいだ。とにかく、ヨーギラスについては当時一緒にいた兄たちのおかげで心を開き、ちゃんと母の元へ帰ることができた。

でも心を開かず孵ろうとしないたまごは兄たちのようにうまくいくかはわからない。ポケモンニュースでよくたまごが孵らずに必死に生きてくれと願った人たちの話がよく出てきているが…ちゃんと孵ったのかどうかと聞かれると答えは否としか言えない。…何もかもポケモンたちのためにと心から頑張っている人がいるのに、奇跡が起ころずに涙している人々がたくさんいるのだ。

だからこそ私は、あの時リザードがちゃんとたまごから生きたいと願つてくれてよかったと…孵つてくれて良かったと心からそう思い、無意識のうちに抱きしめていた。

『ガウウ?』

『ピチュウ?』

「…うん。何でもないよ」

「おら行くぞシルバー!!ここにいたら邪魔だつて言ってるだろ!!!」

「いやまだ聞きたいことが——」

「そんなのウツギ博士が暇な時に聞けばいいだろうが!!!」

「え?ウツギ博士に暇なときってあるの?」

「言うなヒナ!…それ言ったらシルバーがまたごちやごちや言うから!」

「あ、ごめん…」

「せっかくこの研究所に来てくれたんだから無理に帰らなくてもいいよ?生息場所についてはまだよく分かっていないしね」

「それが問題なんですよ博士…」

「大丈夫だよシゲルくん。この子たちがいた場所はそう遠く離れていない森だ。それにはいるけれど、それでも全員暇じゃないんだ…だからヒナちゃん達にはたまごを見守っててくれないかな?そろそろ孵りそうだし…私も見守っていたいんだけれど」

「それは駄目ですよウツギ博士。ちゃんとやるべきことを終わらせてからでない」と

「そうだね…ヒナちゃん達。頼んでもいいかな？」

「もちろん喜んで引き受けます」

「あ、俺も俺も！たまごからどんなポケモンが孵るのか見てみたいから見る！…じゃねえ見ます!!」

「私も見守ってます。何かあれば連絡しますので！」

『ガウウ!』

『ピイツチュ!』

「そうか！じゃあよろしく頼むよ！」

———というわけで、私たちは現在研究所のたまごがある部屋で見守っている。…といっても、ただ見守っているだけだと暇になるので、2つのたまごの模様を調べながらもシルバーが持ってきていたバックから「ポケモンのたまご」という本を取り出して見ようということになった。もちろん私たちも興味があつてシルバーと一緒にそのポケモンのたまごの本を見た。

たまごの本はいろんな種類の写真が載せられていた。でもこの本に書かれているの

は一般的に良く見かけるポケモンのたまごのようだ。おそらく貴重なたまごや滅多に見れないポケモンのたまごは載っていないのだろう。

本に載っていたのは、主にカントー地方とジョウト地方の御三家のたまごやポツポとコラツタ：他にも歩いていけば見かけるようなポケモンのたまごが写真付きで説明書きが書かれていた。そのポケモンたちの模様は変わっていて：身体の模様と同じ色がたまごに表れていたり、それぞれのタイプの色によってたまごもその一色に染まっていたりとすべてが違うのだ。

そしてリザードとピチューはそれぞれ自分の種族と同じたまごを見つけて笑いながら私たちに教えていて：少し楽しいと思えた。

——— そんな時だった。

「ん？あれ…なあ動いたぞ今!!」

「へっ!!? 本当!!」

『ガウウ!!』

『ピチュウ!!』

「そろそろ孵るかもしれないということか…いやまだただの前兆かもしれないな」

「どっちでもいいだろ！たまごが元気ならそれで！」

「まあそう…だね。無事に生まれてくれればいい…かな？」

『ガウウ…！』

『ピツチュウ！』

「ふん…」

ぐらぐらと揺れているたまごを見つめて…私たちはただ真剣に見ていた。このたまごから孵るのがどんなポケモンであろうと元気であればいいと…。

第二百四十二話く妹はたまご騒動に巻き込まれるく

「あれやばいよ絶対!!はやくシゲルさんに連絡しないと…!!」

『ガアアアアアウ!!!』

『ピイツチュウウウ!!!』

「いやそれよりも追いかけるのが良いって!!あれじゃあたまごが危ない!!」

「おいもたもたするぐらいなら先に行くぞ…!」

「ちよつと待って…ああもう!!」

こんにちは妹のヒナです。突然ですが研究所を襲撃した黒服の覆面集団の黒服たち

にたまごを奪われてしまい現在追いかけている途中です。まあそれでももう黒服集団の姿は見えなくなつてしまつているのですが…。

一体何があつたのか…それは私たちもよく分からない。たまごが元気にゆらゆらと揺れていて、そろそろたまごからポケモンが生まれてくるかもと笑顔で見つめていたらいきなり大きな地響きが研究所内で起き、そして研究員の悲鳴が聞こえてきたのだった。その大きな音に私たちはすぐたまごを守りながらも扉の近くに向かつて警戒した。扉の向こうには何かがいるらしいけれど、今開けたら絶対に部屋に入つてくるだろうと考へて開けずにリザードとピチューにすぐに攻撃ができるように指示した。音から判断して…どうやら扉の向こうには人間たちが襲撃したようだった。たまごを守るために私たちは攻撃体勢を整える。

———そして私たちのいる部屋に扉を破壊してやつて来た集団に向かつてリザードがかえんほうしゃを放ち、ピチューが10まんボルトで追撃する。でもそれらは黒服集団が出したユンゲラーによつて躲され、私たちはサイコネシスで宙へ浮かされ、もがいている間にたまごを持っていかれてしまった。彼らが逃げる際にサイコネシスの効果がなくなり、地面に落とされたからこそ、今奴らを追うことができたのだ。

でもこのまま私たちが追つていてもちゃんと黒服集団に追いつくのかどうかさえ分らない。それにこのまま走つていて方向は大丈夫なのかさえも分らない。

：しかも研究所を襲撃されたために先程追う際に建物内にいた研究員たちを見たが彼らはほとんどが怪我をして動けないか気絶しているという状況だった。もちろん怪我をしている研究員はなんとかジュンサーさんに連絡をとろうとして電話をしていたのだが：あの散乱した研究所の中では森に行ってしまったシゲルさんたちにすぐ連絡することはできないだろう。連絡できたとしても、すべてが手遅れになってしまう可能性が高い。

：たまごを助けるためにも急いで覆面集団の黒服たちを追った方が良いのは分かる。けれどそれで私たちがたまごを助けることができるかどうかは分からない。というよりも彼らはポケモンを使つて攻撃してくるだろうし、私たちはリザードとピチューでどうにかしなければならぬと：その時は考えていた。だからこそ心配だったのだ：ヒビキとシルバーはポケモンを持つていないし、攻撃でさえまともにできない。怪我をしてみましたらどうするつもりかと：でもこのままでは黒服集団に逃げられてしまい、たまごが危ないと：いろんな意味で不安だった：。

シルバーが舌打ちをしてポケットから笛を取り出してから吹くまでは。

「うわっシルバーが笛吹いたらポツポがやって来たんだけどどうしてなの!!?」

『ガウウ!!』

『ピチュウ!!』

「奴らに逃げられてしまつては本末転倒だからな。ポツポたちに協力して奴らを見つけてきてもらおう」

「いや待つて! その笛は何なの!!?」

『ガウウ…!!?』

『ピチュウ?』

「父上から頂いた普通の笛だ。ポツポたちと仲良くなったのもこの笛のおかげだったりするが…」

「それ絶対ただの笛じゃないよね!!? というか父上つて何者!!?」

『ガウウ!!』

『ピチュウ…?』

「ああそうだ。こいつもある意味チートだった…」

ヒビキがため息をついてシルバーを見る。

シルバーはただマイペースに…笛に呼ばれて集まつてきたポツポたちに覆面黒服で

たまごを持ち出した奴らを追ってほしいと言った。その言葉を聞いたポツポたちは分かかったと頷いて空を飛びながら私たちから離れる。おそらく覆面集団を見つけないで行ってくれたのだろう。というか野生だというのにちゃんとシルバーの頼みを聞いているから、人に懐いているのは分かるが。シルバーの行った方法がまるでポケモンレンジャーのキャプチャーの力によつて野生のポケモンなのに指示を聞き、ちゃんと指示を聞くかようだった。だからシルバーが。いや、笛諸々がとてもすごいと思えた。

普通の野生だつたらそんなこと有り得ないと言うのに……。まあヒビキが仕方ないというかのようにため息をついた時点で諦めた方が良いのだろう。兄が暴走するかにように、シルバーもやらかすときはやらかすのだと認識して。とりあえず走り続けた。

.....

ポツポたちがようやく見つけた覆面集団はどうやらアジトのような建物にいるらしい。これならシゲルさんに連絡してすぐになんとかしてもらえるかもしれないと思つただけれども。ヒビキとシルバーがそのアジトから逃げられては困るとばかりに先を行こうとした。

止めようとはしたのだがヒビキ達は止まらず、リザードとピチューもたまごをちゃんと取り返しに行く気満々で：ポツポたちは役目を果たしたとばかりにどこかへ行ってしまったというのにこのままでは突撃したとしてもすぐに倒される可能性の方が高く、行つては駄目だと考えた。たまごのことは心配だけど：それでも黒服集団に勝てるかどうかは分からない。そしてヒビキ達が無傷で済むかどうか分からない：。だから止めたかったのだが：何を言つても聞かず、彼らは前に進もうとしていた。

ヒビキ達が何をしても止まらないからこそ、私は仕方がないと諦めて：シゲルさんたちの目印になるのか分からないけれども、ピチューに頼んで10まんボルトで空へ向かつて放つてもらおう。これはフシギダネがよくするソーラービームの応用だ。

マサラタウンに帰ってきていて、しばらくオーキド研究所にいたシゲルさんならこの空へ放たれる10まんボルトの意味が分かるだろうと思う。それにこの森ならもしかしたら野生のピチューもいるかもしれないという可能性がある：森の中なのに、ほのおタイプのかえんほうしゃを空に放つて覆面集団が見てしまい疑問を持たれるよりは大丈夫かと思つたためにピチューの10まんボルトを指示したのだった。

ヒビキとシルバーはそんな私たちを気にせず、どうやって中に入ろうかと迷っているらしいが：本当にこのままで平気なのかなと不安になってきた。

アジトを見ると黒服集団の2人が扉の前で立って見張っている。それを見てヒビキ

がバットののような大きな木の棒を手に持ち、シルバーは拳ぐらいの大きな石を手に持つて見張っている彼らを睨む。私はため息をついてからリザードとピチューを見た。リザードとピチューはヒビキ達と同じくやる気十分のようだ。

…そして、ヒビキは戦闘準備万端という感じで頷き、口を開いた。

「…よしやるぞ」

「ああ…」

「ああもう…リザード、ピチュー…指示出すから協力してね」

『ガウウ…!』

『ピチュー…!』

「っ!?!何だお前等…!!?」

「部屋にいたガキ共か!?!大人しくしてもらおうぜツ!」

「そうはいくかアアア!!!」

「ふんツ!!!」

「ぐはあ!」

「なっ卑怯だぞポケモン使わないで殴ってくるだなんて…!!」

「じゃあ期待にお応えして…ピチュー軽くアイアンテール！」

『ピイツチュ！』

『ガウウ…！』

『(ゴ)ふああ!!』

見張っていた2人に向かって私たちは走り出す。彼らは研究所を襲撃していたために私たちの姿も見ていたらしく、すぐに攻撃しようとボールを取り出してきた。

でもそれを見てヒビキが木の棒で殴ったりシルバーが石を顔面に向かって投げてボールを投げないようにしたりと行動してくれたおかげでバトルにならずに済んだ。そのおかげで黒服集団の1人はヒビキとシルバーに攻撃されたせいで昏倒し、地面に倒れてしまう。それを見てもう1人が非難するかのように叫んだのだが、ポケモンを使うという言葉聞いてピチューとリザードがやる気を出したために攻撃を指示した。

ピチューに死なないように軽くアイアンテールをしてもらったのだが、何を思ったかリザードも一緒になってアイアンテールもどきをしたためにその攻撃した覆面を少し焦がしながらも昏倒させることに成功したのだった。…本当に大丈夫なのか。

——その後すぐに扉を開けようと奮闘するが、なかなか開かない。鍵がかかっているのかとヒビキが悔しそうに言い、私がリザードのかえんほうしゃで燃やそうかと考

えるのだが、シルバーが消しゴムのような小さなものを取り出しその扉に設置したことであっけなく開いた……というより吹っ飛んだ。

「ええええええええ!!?!」

『ガウウ!!』

『ピチュウ!!』

「ちよっおいこれ爆弾かよ!!!」

「いや違う。簡易お助けマシーンだ。どのような事態が起きてもこの機械一つで助けることができる。崖から落ちても海でおぼれていてもこれ一つあれば簡単だ。ちなみにこれも父上が開発した」

「すげえな父上!!」

「いや本当に何者なのシルバーの父上って…!!」

『ガウウ…!!』

『ピチュウ…!!』

爆発したことによって扉は吹っ飛び、中に入ることができた。でもこの衝撃と物凄い音で奴らに気づかれたのではないかという不安もあるために…早くたまごを見つけないければと行動を開始する。

でもその間にも、シルバーの父上というのはどういう人なんだろうと私たちは疑問に思ったのだった。ヒビキは苦笑していたためにもしかしたらシルバーのことをよく知っているのかもしれないと考え、この騒動が終わったら後でちゃんと聞いてみようということも考えた。…まあその前にたまごを救出しないとね。

第二百四十三話く妹達は突撃するく

「なんだてめえらはっ!!」

「一体どつから侵入してきた!!」

「もしかして上の騒動はお前たちの仕業か!!」

「うわあ早々に見つかつちやつたよ…」

『ガウウ!!!』

『ピイツチュ!!!』

「へへまあこうなることは予想してたからあんまし不安なんかねえけどな!!」

「全員倒せばいいだけの話だろう」

「うんまあ分かってるんだけどね…とりあえずたまごが無事なことだけ考えて行動する

「よ」

「おうーよし行こうぜヒナ、シルバー!!」

ヒナ達はアジトに侵入し、たまごを救うために行動を開始していた。なぜ彼らがたまごを盗もうとしたのか、研究所を襲撃したのかは分からない。でもそれでも研究所で見守っていたたまごが奪われてしまい危険な目に遭うことをヒナたちは許せなかった。だがそれだけではない：ヒナにとつて危険な目に遭うのが嫌なのはヒビキ達も含まれていたのだ。なんとかシゲルたちに連絡ができたらと何度かそう言っただけだが、聞き入れてもらえずヒナがシゲルに連絡をしようとすればするほど彼らは先に行ってしまうこのままヒビキ達を先に行かせては危険だろうと考えて：ここはおとなしく一緒にいることにした。でもヒナは念のためにピチューで10まんボルトを空に向けて放ったために少しはシゲルに伝わったと考えて行動している。シゲルに伝わっていない、でも、もうこのまま先に進むしかないのだ。

すべてはたまごのために：そしてたまごを奪った彼らが許せないために行った行動だ。

扉から侵入して地下へと続く階段を降り、通路を歩いていた。すると前から覆面をか

ぶっている男たちが走ってきてそしてヒナたちを見つけてから叫んでいた。おそらく扉を壊すために行ったシルバーの爆弾の音のせいでこちらへ来たのだろう。ヒナたちはすぐに攻撃態勢になってから走り出す。

「おらあ!!」

「くつガキだからって油断してると思ったら大間違いだぞー！」

「ピチューアイアンテール！」

『ピイツチュー!』

「よしとどめええ!!!」

「ぐはあ!!」

ヒビキが最初に木の棒を持ったまま特攻し、先程扉で見張っていた彼らを倒した時のように殴ろうとする。でもそれはすぐに躲かれてしまい、ヒビキに向かってボールを放ち中にいたポケモンで攻撃してこようとしたためにヒナはボールが放たれる前にピチューに向かってアイアンテールでボールを遠くの方へと叩き落とし、その隙にとヒビキが奴の頭を殴る。そのせいで覆面集団の一人が気絶し、ヒビキ達はハイタッチしてから警戒を怠らずにこちらに向かってポケモンを放った奴を狙う。

「…ヒナ、リザードの技構成を教えろ。あと指示を聞いてもらう方がいいか？」

「かえんほうしゃ、きりさく、えんまく、ひのこ、ひっかく!!それはリザードに聞いて！
私は大丈夫！」

「了解した…リザード、手伝ってくれるか？」

『ガウウウ!!!』

「ハッ！何言ってるんだよガキが！このままお前らも売りさばいてやろうか!!!？」

「それは父上が許さないだろうな…リザード、えんまくを頼む」

『ガウウウツ!!!』

「ぶっは！何だ目の前が真っ暗——」

「父上から貰い受けた強盗撃退対策…リザード、あれに火を放ってくれ」

『ガアア!!』

「ぶふおあ…!!!」

「ふん…所詮はこの程度か…後で父上に報告しなければ…」

『ガウウ…』

シルバーはポケットから出した小さな機械を選びながらもリザードの技を知り、指示

をちやんと聞くヒナに向かって問いかけた。ヒナはシルバーが言ったことに答えながらもポケモンで攻撃してくる黒服覆面集団の1人と対峙していた。ピチューの10まんボルトで痺れさせたところにアイアンテールで脳天に向かって放つ。その威力でポケモンがようやく倒れてくれた。そしてとどめとばかりにポケモンに指示していた人間に向かってヒビキが殴ろうとしたのは言うまでもないだろう…。

シルバーは技構成と指示を聞いてくれるかどうかを聞いた後、リザードに問いかける形でいいかと聞く。リザードはもちろんシルバーが自分を必要と言うのなら喜んで手を貸すと叫んだ。その声を聞いてシルバーは周りに気づかれない程度に笑みを浮かべながらもある水色の青くてボールよりも小さなものを覆面集団に向かって投げた。それに向かってリザードに火を放ってもらう。すると機械は炎を感知して勝手に防火装置のように周りが白いドームのようなものができる。そしてその機械のせいで近くにいた覆面集団はドームの外側に押しつぶされて気絶してしまった。そんなよく分からない装置を見てリザードが微妙そうな表情を浮かべながらもシルバーを見る。シルバーはというと満足そうに頷いて機械を見ていたのだった。

「ヒビキ…あいつらにもう一回隙作れる?」

「お安い御用だぜ!!」

「よしピチュー、一緒に行くよ！」

『ピイツチュウ!!』

「ああ？ガキの分際で何勝手に動いて——」

「うおらああああ!!!」

「ぐふあつ!!」

「なっ隊員A!!おいガキ共ふざけ——」

「ピチュー！一緒に雷パンチ!!」

『ピイツチュウ!!』

「うるぶふあツツ!!!」

「おー人間なのにポケモンと一緒に攻撃できるのか！すげえ!!」

「あ、えつと…ヒビキも特訓すればできるかもだよ？」

『ピチュウ!!』

「よっしやあ俺トレーナーになってポケモン貰ったらやる！」

「あーうん…頑張つて…」

『ピイツチュウ!!!』

ヒビキとヒナたちは残りの覆面集団たちを倒すために行動していた。ヒビキに危険

かもしれないけれど一度隙を作ってもらったために特攻してもらったのだ。だが隙を作ろうとするよりも早くヒビキが一人を殴って気絶させてしまった。そのおかげで覆面集団が気絶した彼を見て動揺し、ヒビキを睨む。でもヒビキはすぐにヒナよりも後ろに逃げていき、攻撃してきたヒビキを追うために覆面集団がボールを持ってヒビキ達を追う。

だがそれはピチューと一緒に攻撃してきたヒナたちに向かって阻止されてしまった。電撃が周りを包み込み、彼らをしびれさせ気絶させることに成功する。それを見たヒビキが興奮したようにヒナたちに向かって叫び、ヒナが引き攣った笑みを浮かべながらもできるよと答えたおかげでやってみるとやる気を出したようだった。

——そしてヒナたちは前へと進む。

.....

「あつた……たまげだー！」

『ピチュウー!』

『ガウウ!!』

「…つてどれが研究所にいたたまごなんだ？」

「ふん…覚えていないのか？ 研究所で保護されたたまごの色は赤色と水色…そして模様もそれぞれ異なっていた。つまりはあれだ」

「シルバー凄…!」

『ピツチュウ…!』

『ガウウ…!』

「おっと…そうはさせるかよ!!!」

「そうだぜ。頭領の言うとおりで。このたまごは俺たちがもともと盗んだもの…研究所に保護されたのは偶然落としてしまったものだったんだからな!」

「カイリユー! はかいこうせん!!」

「っ! リザードかえんほうしゃ! ピチュー10まんボルト!!」

『ガウウウ!!!』

『ピイツチュウウウ!!!』

「ほう…あれを防ぐか…欲しいな【それ】」

「誰がやるかよりザードたちはヒナのなんだからな!!」

「待てヒビキ…カイリユー以外にもこの部屋には何かいるようだ…」

「へえ分かったのか…ゲンガー、ナイトヘッド!」

「ピチュー、カウンターシヨックもどき!」

『ピイツチュウ!!』

「おいどうするんだよ…このままじゃヒナにばっかり負担がかかるぞ!!」

「少し待て…いまたまごを父上から頂いた簡易転送装置でウツギ研究所へ送る」

「出たよ父上シリーズ…!!」

ヒナ達の前から扉が開き、たまごを持っていかれるのを阻止しようと体の大きな覆面集団のボスと幹部クラスの2人がやってくる。ヒナたちはやって来た彼らを見てすぐに警戒態勢を整え、奴らが攻撃してきたらすぐに躲せるようにする。だが彼らはそれを見て鼻で笑ってから言った。たまごの事情を教えてくれたのだ。たまごはもともと彼らの物であり、あの森で偶然落としてしまったということ…そしてこのたまごたちは

ちやんと何処からか盗んできたものだということを。そして彼らはボールからポケモンを出して攻撃しようとしてくるためにリザードの炎とピチユウの電撃でそれを防いだ。

それを見た頭領らしき人が笑みを浮かべてほしいなと叫び、そしてそれを拒否するかのようにヒビキが怒鳴る。木の棒を握りしめてそのまま特攻していきそうになったところをシルバーが止め、何かがいると直感して言う。その言葉に幹部のような人がゲンガーを影から突撃させ、ピチユウのサトシから教わったと言うカウンターシヨックも動きを行って防いだ。それを見ているヒビキは焦ったようにこのままじゃいけないと叫んでいたが、シルバーがたまごたちをまず優先的に守るために父上から頂いたという簡易的な転送装置でウツギ研究所へと送っていた。

次々にたまごを送り、そしてようやくあの研究所で保護していたたまごを送る番だと気づいた時に、ポケモンバトルしていた頭領たちがシルバーたちの行動を見た。

「何やってんだガキ共!!!」

『ゲンガアアア!!!』

「駄目だ!!」

「つつ!!」

「なっあれ…たまごが…!!」

「待て…こつちもだ…!」

「う、生まれた…だどっ!!」

「っピチューゲンガーに向かつて10まんボルト!」

『ピイツチュウ!!』

『ゲンガアアアツ!!!』

「なっゲンガー!!!」

『ピツチュ!』

「ぐふあっ!!!」

赤色のたまごを守っていたヒビキと、水色のたまごをとっさに庇ったシルバーから光が漏れた。その輝きはたまごからのもので…赤色と水色のたまごからポケモンが生まれていったのだった。生まれてきたポケモンはそれぞれヒビキとシルバーを見てきよとんとした表情を浮かべており、生まれた様子を見たゲンガーと幹部が驚いたような声を上げて立ち止まる。それを見たヒナがすぐにピチューでゲンガーを倒しに向かい、ト

レーナーもついでにとばかりにピチューがアイアンテールで攻撃して気絶させたのだった。

「このポケモンは…」

「ゾロアだ…そしてこっちはチルツトだろうな…おそらくあのたまごはそれぞれの身体の色や模様をあらわしていたんだろう…」

「そっか…でもなんにせよ生まれてきたんだから良かった!!」

『グルルウ?』

『チルウ?』

そして赤色から生まれたポケモン…ゾロアと水色から生まれたポケモン…チルツトを見てヒビキとシルバーがそれぞれポケモンが生まれた瞬間を見たことに歓喜してようやく生まれたのかとそれぞれそのポケモンたちの頭を撫でた。撫でられたゾロアとチルツトが笑みを浮かべてすり寄り…まるで親のように甘えている姿を見てヒナたちは微笑ましい表情でそれを見ていたのだった。

——だが、そんな微笑ましい光景を邪魔する者が1人。

「ふざけてんじゃねえぞガキ共がああ!!!」

「…ふざけてるのはそつちの方じゃないかい？」

「あ、シゲルさん！」

『ガウウ!』

『ピチュウ!』

「やあ遅くなつてしまつて申し訳ないよヒナちゃんたち…さて、ここからは僕に任せて下がつていなさい」

「はい…!」

『ガウウ…!』

『ピチュウ!』

「さてと…じゃあやろうか？」

「つつ…!!!」

その後、頭領の悲痛が込められた叫び声が響いたのは、自業自得であり当然のことだと言えるだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「うーん……じゃあこのゾロアとチルツトは君たちに任せよう。どうやら君たちのことを親だと思っているみたいだからね。でも君たちはまだトレーナーじゃないからポケモンの育成の仕方は先生にしっかりと聞くように！」

「本当ですか!!! やったなゾロア!!!」

『グルウ!!』

「チルツト……これからよろしくな」

『チルウ!!』

「良かったねヒビキにシルバー！」

『ガウウ!』

『ピチュウ!』

あの後、シゲルがあのアジトへやってくることができたのはピチュウの空へと放った電撃のおかげだと帰り道にヒナたちに話した。

捕まえた覆面集団は連絡しておいたジュンサーに捕えられ、捕まえられていたポケモンたちは全て保護されるらしい。シゲルがヒナたちに向かって話した内容は、どうやらあの覆面集団はポケモンバイヤーのようなことをしていた奴らしいということ、たまごを奪った後にアジトへ戻る途中で落とされたのだろうということ、話を話してくれた。ヒナたちはその話を聞いてポケモンを売買するやつらのことに怒り、捕まって良かったと笑みを浮かべていたのだった。

そして全ての騒動が終わり、少し崩壊している研究所へと戻ったヒナたちはそれぞれウツギ博士から話をして、そしてゾロアとチルツトの話へと移った。

ゾロアとチルツトは最初に見てしまったヒビキとシルバーを親だと認識してしまつたらしく、彼らから離れると泣き叫んでしまう…。

このままでは彼らからゾロア達を離れたら弱って死んでしまうと考えたウツギ博士がトレーナーにはなれないけれど、ポケモンを持っていて構わないと言う。その言葉を

聞いたヒビキとシルバーは自分のポケモンとなったゾロアとチルットに挨拶をして、そしてヒナたちは微笑みながらも祝福したのだった。

そして：ようやく事態が收拾したためにヒナたちはマサラタウンへ戻ることになった。それをヒビキ達が見送りに来て：そして強気な笑みでヒビキがヒナを見て、無表情ながらも闘志を燃やすシルバーが口を開く。

「マサラタウンでトレーナーになる頃にはこちらに行くつもりだ。カントー地方から旅するというのが父上との約束だからな：だからヒナ、それまでにリザードとピチュウの育成はちゃんとしておけ!!!」

『チルウ?』

「う、うん：分かってるよ」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「ほらシルバー！もういいだろ!!ヒナ、今度会ったときはもしかしたらトレーナーになった後かもしれない…。だから先に言っておくゼライバル！次会ったときはバトルしかけて俺たちが勝つ!!」

『グルウ!』

「ふふ…私たちだつて負けないんだからね！」

『ガウウ！』

『ピチュウ！』

船が出発するためにヒナたちはそれに乗り込む。そしてヒビキ達が見えなくなるまでヒナたちは手を振つてお別れを言い、ヒビキ達も同じように別れを言う。

マサラタウンへと帰るヒナたちは、一時の別れを惜しみながらも…次があつた時が楽しみだと笑みを浮かべて顔を見合わせていたのだった。

第二百四十四話く兄とポケモンサマーキャンプく

こんにちは兄のサトシです。俺たちは今、プラターヌ博士に呼ばれてポケモンサマーキャンプに参加することになり、一度シヤラジムに行くという目的を保留してそのキャンプ場へ向かっている途中です。

——森の奥にある、大きな建物。そして様々なトレーナー達が泊まることのできる小さな小屋もある。近くには海もあって、ボートや浜辺も見えてきた。最初に大きな建物で待つという連絡だったために俺たちはその場所へ向かう。そして建物で立って俺たちに手を振っていたのは連絡してくれたプラターヌ博士だ。

「やあ君たち久しぶり！」

「プラターヌ博士…お久しぶりです」

『ピイカツチュー！』

「久しぶりかも！カルネさんの時以来ですね！」

「ポケモンサマーキャンプのお誘いありがとうございます！」

「ここすつごくいいところだね！」

『デネデネ！』

「こらユリーカ！…あの、今日からよろしくお願いします！」

「うんうん元気そうだね！良かったよ！…ああそうだ…ハルカちゃんに伝えてくれて伝言を頼まれてるんだった」

「…へ？私にですか？」

「僕から見れば残念なお知らせなんだけどね…オダマキ博士から連絡で、一度ホウエン地方へ戻ってきてほしいとのことなんだ。何やら緊急の連絡らしいよ」

「え、緊急？」

『ピイカ？』

「うう…何があったのか分からないけど…でも今ホウエン地方には帰りたくないかも…サトシ達との旅をもっとしたいのに…」

「大丈夫よハルカ！ホウエン地方での用事が終わったらまたすぐここに戻ってくればいいんだから！」

「そうだよ！ハルカのコンテストの話もつと聞きたいし！終わったらすぐに戻ってきて！」

『デネデネ！』

「ハルカ：オダマキ博士が緊急で呼び出すのには何かわけがあるかもしれません：とにかく、またこのカロス地方へ来れば旅ができますから：大丈夫ですよ！」

「とりあえずお前のカロス地方での目的はポケモンパフォーマンスの大会を見ることだろうか？ならまだまだ時間はかかりそうだし：一度戻ってから大会に合わせてきても大丈夫だって。待ってるからさっさとこっちに戻って来いよ」

『ピイカツチュ！』

「うん：そうね：一度ホウエン地方に戻るけど：でもまたすぐに帰ってくるからね!!」

「決まったみたいだね。車なら出せるから：すぐに飛行艇まで送るよ」

「はい。ありがとうございますプラターヌ博士！」

プラターヌ博士の言葉に頷いたハルカは少しだけまだここに居たいという未練があるような表情をしていたけれども、それでも俺たちの戻って来いという言葉やオダマキ博士がハルカを必要としているなら早く行った方が良いという言葉で決心したようだった。まあセレナたちもハルカと一度別れることに少しだけ寂しいと思えたみたい

だったが、それでもまた会えるのだと考えて意識をポケモンサマーキャンプへ移す。ハルカもこのサマーキャンプに参加したいということを書いていたから：ちよつと残念だとは思うけれども：でも今は仕方ないことなのだから：俺たちでできることをやって楽しもう。

・・・・・・・・・・・・・・・・

プラターヌ博士が、メガシンカについて聞いてきたため、俺たちはコルニの持つメガルカリオについて話した。

するとプラターヌ博士は目を輝かせて僕も会ってみたいなあと呼んできたため、もしかしたらコルニのいるシャラジムまで乗り込んでメガシンカについて研究をしてもいいかと依頼するかもしれないと考えてしまい苦笑した。先程までプラターヌ博士はメガシンカしたルカリオのことを聞いてまるで子供のよう喜んでいたので。

ポケモンと人間の絆が離れていたらたとえばメガシンカしたとしても力が暴走し、言うことを聞かないという話をする、食いつくように俺たちに近づいてから手に持っていたボイスレコーダーのようなものをぶるぶると震えさせ、感激しているようだった。ま

あメガシンカを研究しているプラターヌ博士なら当然の反応かと考えた。

俺たちにとつてもメガシンカは感動できるものだったし、いろんなことを知れてとても楽しかったというのも会ったのだから…。とにかくプラターヌ博士も同じ気持ちなのだろう…。

そして話し終わった後、プラターヌ博士はそのままポケモンセンターらしき場所まで走って行き、礼を叫びながらも研究所でやるべきことを言わなければと言っていた。俺たちはそのプラターヌ博士の行動に苦笑しながらも、とりあえず指定された自分たちの泊まるキャンプ小屋まで行こうと言うことになった。俺たちはチームケロマツとしてキャンプに参加するため、小屋にはケロマツの描かれた絵が飾られていた。その絵にもユリーカやセレナが可愛いと笑みを浮かべて見ている。

「あれ?…サトシー!あれってバトルでしょうか?」

「…ん?」

『ピイカ?』

シトロンが窓を開けてその景色を堪能していたら何かが見えてきたらしく、俺に声をかけてきた。そのためシトロンの見ていた窓からその指差す場所を見つめる。窓から

見えてきたのは明らかにバトルしている様子で：面白そうだからと俺たちも行くことになった。

「あれって何のポケモンかな？」

「大きくて力強そうなポケモンに小さくて可愛いポケモン！」

『デネデネ！』

セレナが図鑑を出してみたのはイツシユ地方で見たローブシンとカントー地方の御三家のゼニガメだった。

バトルで戦っているゼニガメは俺の仲間のゼニガメよりも小さくて身軽そうで：何やらステップを刻みながらもローブシンと対峙しているようだった。トレーナーも一緒に踊っていて：ゼニガメはとても楽しそうにローブシンとバトルしている。それにしてもダンスのように踊る姿はまるで独自のペースでバトルをしているようであり：躲すタイミングなどもちゃんと見ていて、トレーナーと一体になってとても楽しそうだ。

そして躲しきった後、ゼニガメのロケットずつきでローブシンを倒すことに成功し、俺たちは笑みを浮かべてゼニガメを見た。ユリーカとセレナは小さくて可愛いゼニガ

メに笑顔で凄いと言っており、シトロンはあのスピードと身軽な戦法にとても興味を持ったような表情を浮かべていて…そして俺たちはバトルがしてみたいとピカチュウと一緒に顔を見合わせてから頷き、彼に近づいた。

「なあバトルやつてもらってもいいか？」

『ピイカ？』

「オーライ！やるやる…：僕はハクダンシティのテイエルノ！それでこっちは相棒のゼニガメ！チーム名もゼニガメなんだ。そっちは…？」

『ゼエニ？』

「俺たちはチームケロマツなんだ。それで俺はサトシで相棒のピカチュウ」

『ピイカツチュウ！』

「私はセレナ」

「私、ユリーカ！それでこっちが私の未来のパートナーのデデンネ！」

『デネデネ！』

「僕はシトロんです」

「……ん？君たちってもしかして…!!」

「はい？」

『ピイカ?』

ティエルノがそのまま何かを思い出したかのように浜辺に向かって走り出し、誰かを連れてこちらに戻ってくる。その誰かはおそらくティエルノの親しい友人であり：近づいてきたと思つたら、俺たちのことを知っているように輝かしい笑顔で口を開いて言う。

「ほら、あのポケビジョンの！だよね？」

「本当だ!!初めまして！あなたたちの映ったポケビジョンを見たわ!!あれランキングで1位になってたのよ!!」

「へ…あれが?」

『ピイカツチュ?』

「そういえば私達…あのポケビジョン撮った後どうなったのか全然調べてなかったわ」
「ランキングで1位になったの!!?凄いいい私たち有名人だね!!もしかしたらお兄ちゃん
の恋人が見つかるかも!」

『デネデネ!!』

「こらユリーカ!だからそれ止めろって言ってるだろ!!」

「……あら？調べてなかったの？ならポケモンセンターへ行きましょう！そこにちゃんと記録されてるから!!…あ、私はサナ！よろしくね!!」

.....

——サナが連れてきたポケモンセンターにある通信施設の整っている場所へやって来た。そこには電話やポケモン交換のための通信施設があるのだが、それ以外にも自身の撮ったポケビジョンがどうなっているのか調べる事ができて…そして他の人が投稿したポケビジョンを見ることが出来るのだと教えてくれた…。

そしてサナが画面を操作して俺たちの投稿したポケビジョンを検索し、見せてくれた。

それに映し出されていたのは俺たちの作ったポケビジョンであり…物凄い数の再生数が表示されていて、近くには1位と言う輝かしい星のマークも刻まれていた。

「うわあ…何だこれ…」

『ピイカツチュ…』

「凄い…こんなにいるんな人に見られていたってことなのよね…それに1位のマークもあるだなんて…!」

「良かったねお兄ちゃん!」

『デネデネ!!』

「良かったって…ユリーカ!!!」

「ねえねえあなたたちのポケモンに会わせて!あの時の動画本当に感動したんだから!!」

「僕も見てみたいな!いいかいサトシ達?」

「おう良いぜ…出てこい皆!!」

「分かった!出てきてフォッコ!」

「では僕もですね…皆、ちゃんと挨拶してください!」

動画に映っていたポケモンに会いたいとサナとティエルノが言っていたため、俺たち

はボールからポケモンたちを出す。俺は新しくルチャブルをゲットしたんだけど、まあ仲間外れになるよりはみんなと一緒にボールから出した方が良くと思いい出したのだった。

ルチャブルとケロマツはお互い睨み合いながらもそっぽを向いている。相変わらずの相性だと俺とピカチュウ…そしてヒノヤコマが苦笑していたが、それでもサナとティエルノは感激して気づかないようだった。

「うわぁ可愛い強そう皆最高!! そうだ…フシギダネ、あなたも出てきて!!」

『…ダネダネ』

「サナのポケモンか…またカントーの御三家」

『ピイカツチュ』

「うわぁ可愛い!!」

『デネデネ!!』

「フシギダネっていうのね…とつても可愛いわ!!」

フシギダネの映っているポケビジョンを見せてくれるということ、俺たちは画面を再び見た。

でもピカチュウたちはフシギダネに挨拶をするために近づいていて：ティエルノのゼニガメも同じように片手を上げて挨拶していた。俺たちがポケビジョンの映像を見終わつた後、見えてきたのはフシギダネが先程のケロマツとルチャブルのようにそっぽを向いて嫌そうな表情。それを見たハリマロンがちよつかいを出してフシギダネにツルで叩かれている状況だった。

その姿を見てサナが慌ててハリマロンに謝っているけれど：なんとなく分かるような気がした。とりあえず俺のフシギダネとは違って人見知りか激しくて無愛想らしいその個性豊かな姿に少しだけマサラタウンにいる仲間たちのことを考え懐かしく思えた。

『カゲカゲエ!!!』

「：ん？ヒトカゲ？」

『ピイカツチュ?』

「へえ：このポケモンはヒトカゲっていうのね!!」

「ヒトカゲもカント―地方の御三家なの？」

「そうですね：ヒトカゲも一応カント―地方でもらえる初心者用のポケモンですが：何

故カロス地方で…?」

「それはね…あ、待つてようやく来た!!」

「遅いぞトロバっち!!」

「はあ…はあ…間に合いました…?」

トロバというトレーナーがやってきて、どうやらティエルノ達の友人であり、先程乱入してきたヒトカゲのトレーナーだと分かった。ヒトカゲは随分と好戦的であり、ピカチュウたちに喧嘩を売る気満々らしく炎を吐いて威嚇していた。その様子が俺のりザードンのヒトカゲ時代と…妹のりザードのヒトカゲ時代とは全然性格が違うなど思えた。俺たちのヒトカゲはバトルはしたいと思っっているけれども、喧嘩を売るぐらい好戦的ではないからだ…まあ俺のりザードンは進化したせいで強いポケモンと戦いたいという戦闘狂になってしまったのだが…それでもヒトカゲだった頃は素直で今のフシギダネのようにポケモンたちの仲を仲裁したりまとめたりフオロー役をよくやってくれている。

——まあ今いるヒトカゲはそんなりザードンのようにとても好戦的だけでも…でも、ピカチュウたちは戦おうとは思わず、子供の戯れのように遊んでいるだけだか

ら大丈夫かと思えた。ルチャブルも炎を吐かせても何も動じていないみたいだし…平気だろう。

でもトロバはそうはいかないらしい。慌てた様子で頭を下げてから言う。

「わああごめんなさいごめんなさい!!!皆さんのポケモンたちに本当に申し訳ないです!!!」

「ほら謝るなよ。ピカチュウたちも気にしてないんだからさ」

「そうよ。私のフォッコもヒトカゲの喧嘩を買うようなことはしてないから大丈夫!」

「デデンネもそうだよね!」

『デネデネ!』

「そうですよ。それにポケモンが好戦的なのはある意味個性ですからそんなに謝らなくても…」

「でも…本当にすみません!!!」

「ほらトロバ!サトシ達の顔見て!あの時のポケビジョンの!!!」

「あ、ああ!!あなたたちはあの時の!!!」

「……ずいぶんと有名になったもんだなおい」

『ピイカツチユ…』

その後、カントー地方の御三家でもあるポケモンはプラターヌ博士から貰ったということや、このポケモンサマーキャンプでそれぞれの夢に向かって旅に出てから一度会う約束をして…そしてチームゼニガメとして行動することにしたらしいということをお話してくれた。

そして話し合った後、ポケモンサマーキャンプをやるために集合してくれと呼ばれたため、開会式をすることになった。プラターヌ博士の言葉で始まり、そしてポケモンサマーキャンプのルールについて教えてくれた。

最初のイベントでもあるポケモンバトル大会が始まったのだが…このバトル大会についてはポケモンサマーキャンプで必要となる得点はないらしく、自由に参加してほしいとのこと…。

俺はもちろん、セレナたちもやる気十分で…ポケモンサマーキャンプの始まりが告げられたのだった。

第二百四十五話く兄達はサマーキャンプを楽しむく

こんにちは兄のサトシです。昨日一日バトルをしてサマーキャンプを楽しみました。

初日とのことから最初のバトル大会では得点なしで楽しんでくれと言われ、ティエルノと一緒にバトルをやったり、ダブルバトルで盛り上がりたり：疑似トーナメント式トリプルバトル大会を開いて挑戦したりと：行われたすべてのバトルに参加してきました。

とりあえず俺のこと知ってる奴がいたりバトルの方法を教えてくださいと言ってきたため、俺に向かってバトルをしてくれというトレーナーが多いのは仕方がないだろうと思った。：でも知ってる奴らには騒ぐなどあらかじめ言っておいたために、予想よりも騒動にならなくて良かったと思う。

——そして今日、まだ日も出ていない早朝なのだけれども、これから釣りをやって大きいポケモンを釣りあげた人の3名までが得点を貰えることになるらしい。とにかく大きいポケモンを釣り上げようということで、俺たちはあの水族館の館長から貰った釣竿を使って釣りを行うことになった。でもチームゼニガメがこちらに来て自信満々に俺たちに向かって笑みを浮かべていることになんだろうと思ひ話しかけた。

「どうかしたのかティエルノ？何か自信満々な感じだけど」

『ピイカ？』

「オーライ…心配なんてないよ！こう見えても僕たちにはトロバっちという最終兵器がいるからね！」

「トロバ…って釣りがうまいの？」

『デネデネ？』

「そうなの！トロバって結構釣りに詳しくてね！大物を釣り上げるのも結構簡単なんだから！」

「へえ…凄いのね！」

「それは強敵ですね…」

「いや…僕はただいろんなポケモンと関わりたいたいだけだからね…夢のために行動してるだけだよ……」

「それでも凄いことじゃないか！もっと胸張って良いゼトロバー！」

『ピイカ！』

「そう…です…ね！では、大物を頑張って釣り上げますので期待しててくださいー！」

そう言ってチームゼニガメはそれぞれ釣り上げるための海辺へ向かい、釣りを始めた。もちろん俺たちも出遅れないように海辺へ行き、釣りをし始める。

…でも俺はバトルやポケモン育成とかは好きなのだけでも…釣りでポケモンを釣り上げるのはあまり向いていないと思ってる。こういう時はカスミかデントがいれば大物を釣り上げることもわけないだろうけれど…まあ釣りには多少の運も関わっているのだからあまり気にせずこの大会を楽しもうと決心した。

「よし、まだ日は出てないし眠いかもしれないけれど…それでも得点を貰うために頑張って行こうぜお前等！」

『ピイカツチュウ！』

「うん！サトシのためなら私もう死んでもいい!!!」

「死んじゃ駄目だよセレナ！でもユリーカも頑張る!!」

『アネアネー！』

「…そうですね、同じチームケロマツとして…頑張っていきましょうか！」

まあ結果としてはトロバの釣り上げたホエルオーが1位になったのだけでも…それでもちゃんと釣りを楽しむことができたし、ホエルオーを釣り上げたことによつていきなり襲いかかってくるまで、俺たちで何とか対処するという騒動になったり…その騒動でホエルオーをトロバが仲間として加えたりと嬉しいこともあったりしたけれど、でも楽しい朝を迎えられたと俺たちは感じていた。

.....

——そして朝食の後、プラターヌ博士からポケビジョンによる大会を開くと宣言された。この大会で1位から3位までのチームに得点を加えるのだと言う。こういうのはセレナが考えてポケビジョンをやるのが向いていると考え…とりあえず時間は夕食までとのことから何を考えるのか考えるために一度自分たちの小屋へと戻り、話し合

いを始めることになったのだった。

「ジャジャーン！こんなポケビジョンがやってみたかったの！」

「何々…魔法使いピカチュウと仲間たち？」

『ピイカ？』

「魔法使いつて確かおとぎ話に出てくる不思議な人だよね！まるでポケモンが人間になったみたいなの！」

『デネデネ!!』

「物語に沿ってやるってことか？」

「うん…でも、ピカチュウたちの演技だけじゃない…皆の技を魅せて、そしてポケモンたちのいつもの姿…ううん、個性的なところも撮っていきたくって思ってるの！」

「なるほど…ポケモンたちが演技するだけじゃなく、それぞれの個性を潰さずに最大限の魅力を見せていけばいいんですね…ですが僕たちは何をすればいいんでしょうか？」

「それについては後で説明するわ…まずはね、物語についてなんだけど…デデンネがある日泣きそうになって、それを見た魔法使いのピカチュウがデデンネを慰めようとしていろんな技を出して元気にさせて…そして最後は大きな花火で派手にしたいって思ってるの！様々な魔法の部分は、ピカチュウが魔法にみせかけた皆の技を使ってるよ

うに見せるのはどうかな？」

「へえ…なかなか面白そうだな…な、ピカチュウ」

『ピイカツチュウ！』

「皆…つまりは僕たちのポケモンの出番ということですね！」

「デデンネもだね！」

『デネデネ！』

「うん！もちろん皆もそれぞれ出番はあるわよ！それにポケモンの動きに合わせて声を入れていったら面白そうじゃない？」

「面白そう！！早くやりたい！！」

『デネデネ！』

「そのためにはまず下準備からですね…僕はカメラを借りてきますのでセレナたちもよろしくお願いします！」

【魔法使いピカチュウと仲間たち】という題名を見せたセレナが楽しそうにポケビジョンでやることを大体説明し、俺たちはその準備をするために取り掛かった。何だかポケビジョンというよりはポケ劇団と言った方が良いような気もするが…まあ楽しければそれでいいだろうと考えてからマイクと小道具を取りに向かう。

ちなみにセレナたちはそれぞれフレを作りながらも：サナたちとポケモンパフォーマーの話をしながらも楽しそうに準備をしていたということだけは言うておこう。

そしてやって来たのは森の中。魔法使いピカチュウというのがメインらしく、より神秘的な雰囲気を出すためにこの近くにはない所で撮影したいとセレナやユリーカが言うてきたために行動を開始した。…でも歩いていても良い場所は見つからず、とりあえず広い場所でやった方が良いのではないかと考えたのだが、セレナたちは違うようだ。

「…とりあえず休憩しないか？シトロンがきつそうだし…」

「ぜえ…はあ…ぼ、僕のことには気にしないでください…!!」

「いやお兄ちゃん凄く辛そうだから…!」

『デネデネ…』

「ええそうね…まだ時間はあることだし…少し休憩してから移動しましょう」

シトロンがサマーキャンプから配布された水筒を開けて水を飲み、一息つく。ピカ

チュウも近くにあったという木の实を持つてきて半分食べ…そしてデデンネに半分渡す。そんな様子を俺とユリーカが微笑ましく見ていたのだが、セレナはどうやらちゃんとうまくいくのかだけを心配して…周りを見ていい場所が見つかるようにと焦っているようだった。

「セレナ…焦ったら余計に良い場所は見つからないぞ」

「…うん…そうよね…ごめんなさいサトシ…」

セレナは少し落ち着いたように苦笑しながらも休憩するのだが、それでもやはり焦りの色は消えない。これ以上何かを言ったとしても意味はないし悪化する可能性も考えて口を閉ざす。とりあえず何かあればその時に行動すればいいかと俺は考えてピカチュウの頭を撫でた。

——その後シトロンが回復し、礼を言われながらも歩き出す。そしてやはり歩いていてもずっと木々の景色は変わらず、海辺で撮った方が良いのではないかとユリーカがセレナに言った時にそれは見えてきた。

「…あ、ねえあれ見て！花畑よ!!」

「え…わあ綺麗!!」

『デネデネ!!』

「でも遠くからですからどのくらいの規模の花畑なのか分かりづらいですね…」

「ちよつと待つてて、すぐに行つて確かめてくる!!」

「あ、おい待てセレナ!!」

「えつつ

!!!」

それは一瞬だった。セレナの走つた先が崖で…このままではまた落ちてしまうと…ある種のデジヤブを感じながらも俺は走り、セレナを助けようと動く。でもセレナが走る前に俺自身が数秒先を走つていれば間に合つたはず…なのにセレナはすでに落ちそうになっていて、あの時の光景が思い浮かんだ。だがその感覚は一瞬の出来事だった…落ちそうになり俺に向かって伸ばす手を掴み、近くにあつた木で支えながらも引っぱり上げようと動く。

崖から落ちそうになっているセレナの手を掴んでから引っぱり上げるのだが、ポフレや衣装道具が丸ごと入っている荷物をセレナが離さないように片手でしつかりと握っている。だから…そのバックを片手で掴んで、そしてもう一方の手を俺が掴んだ状態な

ため、姿勢が安定しないのだ。

無理に引つ張り上げれば岩肌がむき出しになっていいる崖の方にセレナが激突してしまふ。バックを無理やり地面に放り投げることも可能かもしれないが：それだとポフレがつぶれて駄目になる可能性があつた。：そしてバックを放り投げる動作さえ激突の危険性もあつたのだ。

幸い足元に放り投げていた俺の持つはずの荷物を崖から落ちないようにちゃんと安全な場所に引っぱつているピカチュウがいたためにセレナの方に意識を向けることができたのだが。：：：そしてようやく俺たちの様子に気づいたシトロンとユリーカが一緒になつてセレナを助けようと動いた。

セレナはいきなり崖から落ちそうになつていいることに驚き、上を見上げて少しだけ泣きそうな表情でこちらを見ていた。

「大丈夫だ。絶対に助けるから」

「サトシ……！」

「このままじゃセレナが危ないよ……！」

「合図したら一気に引き上げますよ！せーのお!!」

「つつ!!」

シトロンの合図でようやく引っぱり上げること成功したのだが、セレナが崖の上で座ったままゆつくりと深呼吸をして、先程まで握っていた手を強く握り込んでから反省したような声で言う。

「ごめんなさい…あと、ありがとう」

「……仲間を助けるのは当たり前だろ？」

『…ピカピ』

「そうですよ。サトシはともかく…とにかく花畑へは遠回りで行きましょう！」

「そうだよセレナ！サトシはともかくね！セレナが怪我しなくて良かった！それに早くポケビジョン撮ろうよ！」

『デネデネ！』

「おい」

『…ピイカツチュ』

「………うん!!」

その後、花畑へ行き、ポケビジョンを撮ることになった。それぞれボールから手持ちのポケモンを出して衣装を着てもらう。ピカチュウには魔法使いの衣装、ケロマツには忍者でルチャブルには剣士のような衣装、そしてヒノヤコマには強そうな兵士が着ているような衣装を…。

ハリマロンには商人が着ているような衣装でホルビーには踊りができそうなひらひらとした衣装を着ている。そしてデデンネとフォッコは可愛らしいリボンと帽子で着飾っていた。そして…ようやく撮影が始まった。

——まずデデンネが泣きそうな表情で落ち込んでいる様子が映し出され、魔法使いピカチュウが魔法でデデンネを元気にさせるといふものだ。

ピカチュウの動きに合わせて俺が声を出し、ピカチュウが手を振ると同時にカメラには映っていないケロマツが画面外でみずのはどうを放つ。カメラから見ればそのみずのはどうはピカチュウが手を振ったことで突然大きな雫が発生したかのように見えた。そしてピカチュウが尻尾を振ればハリマロンが飛び出しつるで宙に浮いているのだがそれをカメラには映らないようにしてピカチュウにまるで魔法で浮かされているように移す。そしてハリマロンの慌てている様子に合わせてシトロロンが何だこれ!?!と少し笑えるような声色で言うように叫んでいる。

ピカチュウが一回転すればヒノヤコマとフォッコの炎が華麗に宙に舞う。ピカチュ

ウが耳を動かせば太陽に照らされてフォッコの影が踊っているかのよう動く…その動きに合わせてセレナが声を出していた。

そしてピカチュウが両手を上げればホルビーが踊りだす。そして踊っているホルビーが泣きそうなデデンネにやってきて一緒に踊りだす。まるでその場所が舞踏会のように見えてきた時点でデデンネが笑顔になっていく。その様子に合わせてユリーカが明るい声で台詞を言った。

…そしてピカチュウが大きくジャンプすると同時にケロマツ達カメラに映る形で大きく飛び出し、最後にピカチュウの10まんボルトとケロマツ達の技を合わせてまるで花火のように盛大に空に打ち上げた。同時にたくさんのポフレが空から落ちてきて…ピカチュウがそれを取ってデデンネに渡し、皆が笑顔で食べるというのを写す。最後に皆でカメラの前に並んで、一礼をしてから終わらせた。

もちろんこのポケビジョンはちゃんと1位になれたし…チームゼニガメに追いつくことができたと思える一日だった。

ハルカは歩き、出会いながらも進む

「うーん…ハウエン地方…久々かも！」

ハルカはオダマキ博士に呼び出されたためにハウエン地方へやって来ていた。オダマキ博士の話によるとある貴重なポケモンのたまごをハウエン地方からカロス地方に運んでほしいとのこと。他の人間でもできるその手伝いは…どうやらハルカのようにポケモンのことを大事に思っていて…なおかつ強くて頼もしいトレーナーにしかできないとのことだった。ハルカはその話を聞いて疑問に思い質問したがオダマキ博士は微妙そうな表情で、詳しい事情は研究所で話すと言われたために…ハルカは詳しいことは何も知らずハウエン地方にやって来ていた。

サトシ達とサマーキャンプが始まる前に別れることになったので、少しだけ残念だと思っ
てはいるが、それでも久々の故郷に…楽しいと感じながらも歩いていた。

ドオオオオオオツツ!!

「……大丈夫よ、みんな」

ハルカがいる場所からそう離れていない所で大きな爆発音と地響きが鳴り響く。

木々が揺れ、ひこうタイプのポケモンたちが音の発信源を恐れるかのように飛んで
行ってしまった。その音は、ハルカがよく聞いていた通常のポケモンバトルとは違
うとすぐに分かって…でもいまだに激しく鳴り響く轟音を聞いて、ハルカとモン
スターボールにいるバシャーモ達はまるでこの場所がマサラタウンのオーキド研
究所にいるようだと感じていた。

その音でバシャーモ達のボールがゆらゆらと揺れ、ハルカは落ち着くように
ボールを触りながらも言う。

おそらくバシャーモ達は強者がいるかもしれないその音の発信源に興味をもつたの

だろう。もちろんハルカもバシャーモ達と同じように強いポケモンがいるかもしれないと興味をもって音が鳴り響く場所へ向かって行ったのだった。

.....

「あれ…ダイゴさん!!?」

「おや、ハルカちゃんじゃないか！久しぶりだね」

先程まで鳴り響いていた音はもう止んでいる。それでも何かあるのではないかとハルカが急いで向かった先にいたのはダイゴ含めた数人の人間達…そしてハリマロンだった。ホウエン地方では見ないと思っていたカロス地方のポケモンであるハリマロンを見てハルカは驚く。でもそれ以上にダイゴがいる状況にも驚いていた。

ダイゴの近くにいた赤い髪の間人が訝しげな目でハルカを見て…そしてダイゴに向かって問いかける。

「ダイゴさん……このお嬢さんは？」

「ああ失礼。彼女はハルカといって、ポケモンコーディネーターの1人ですよ。そしてサトシ君にトレーナーとしてポケモンバトルを教えられたからかとても強い」

「ほう……あの有名なトレーナーに……」

「強い……ということは彼女もメガシンカを!？」

「いいや違うよアラン君。……ああそうだ、メガシンカについては知ってるかいハルカちゃん？」

「はい!メガシンカについてプラターヌ博士に教えてもらいました!それに私もサトシもいつかはメガシンカしたいって思っていますので是非ともバトルを……!」

「プラターヌ博士に……!」

「バトルについては、ハルカちゃんもメガシンカをするようになってからかな。君やサトシ君とのメガシンカバトルはとても楽しみだと思ってるからね」

「メガシンカ私もしてみたいって思ってたの!ハルカちゃんだっけ?私はマノン!つでこつちがハリサ!よろしくっうひゃああ!!!」

『リイマ!』

「え!?!大丈夫!?!」

「だ、大丈夫……!」

『マアロ……』

「マノン……またか……」

「うう……」

ダイゴと話していた赤い髪……いや、フラダリはダイゴから話を聞いて興味を持ったかのようにハルカを見ていた。そして強いという言葉にアランが反応してメガシンカができるならばバトルしてもらおうと考えていたようだったが、ハルカが首を横に振って……そしてそれを見たダイゴが違うと否定する。もちろんここで話に出てきたメガシンカについてハルカに説明する必要があるかもしれないと考えていたようだったが……それはプラターヌ博士に教えられたと聞いたためにフラダリ達は納得する。ダイゴもカロス地方のポケモン研究をしているプラターヌ博士だと分かってそうかと笑みを浮かべながらも頷いていた。

ハルカはというと、ダイゴ達が持っているキーストーンを見てメガシンカできるのだと分かって目をキラキラと輝かせながらメガシンカバトルをしていたのか聞いた。そしてその質問に頷いたため……先程の轟音はダイゴ達のバトルによって起きたのかと理解する。だが、メガシンカについてもっと話を聞いていたいと思ったのだが……フラダリがもう時間がないとのことで急遽別れることになったのだった。

「どこに行くんですか？」

「済まないが…かなり貴重な発見になっているからハルカ君には教えられない」

「ごめんねハルカちゃん…また会ったらバトルでもしよう」

「っ！はい!!その時は是非メガシンカしたポケモンとバトルさせてください!!」

「はは…もちろんだよ。じゃあまたねハルカちゃん」

真剣な表情でどこかへ行くこうとするダイゴ達を見て、邪魔をしてはいけないと考えたハルカは少し残念だったがまた会えると聞いてメガシンカしたダイゴのポケモンとのバトルを楽しみにしながらも別れた。ハルカのことを興味深そうに見ていたフラダリやアラン…そしてマノンもどこかへ向かって歩いて行ったのだった。

「うーん…バトルできないのは残念だったけど…ダイゴさんがメガシンカできるって分かったのはとても良かったかも？」

——ハルカの呟き声に反応して、バシャーモ達の入っているボールがゆらゆらと揺れた。

.....

ハルカはダイゴ達と別れてからも研究所に向かっていた。時々野生のポケモンたちと戯れたり、近くでやってきたポケモンバトルを見物しながらも……歩いて行つたのだ。今は寄り道をする時間がないのだけれど、それでも久々に帰ってきた故郷に、ハルカは懐かしいと感じながらも無意識のうちにゆつくりと歩いていた。

そして見つけたのは、ハルカが前に出会つたことのある姿……。

「あの人って……えっと、確かイツシユ地方であつたNさん？」

「っ……君は確かサトシ君を助けに来た子か」

「はい！私はハルカつていいます！あの……Nさんは何でここに……それに他の人たちは……？」

「ヘレナとバーベナはここよりも遠いところにいるよ……」

「そうなんですか……あの、Nさんは何でここに……？」

「……………最近、いろんな地方である噂が流れているのを君は知っているかい？」
「噂？」

「ああ、噂と言っても…小さな騒動から大きな騒動を引き起こしている人物がいるとの話だけどね…僕は、トモダチたちの話を聞いてここへやって来たんだよ」

Nが話した内容はハルカが知らない内容だった。騒動と言ってもポケモンハンターのように行動する奴らから…あるポケモンを盗んだという人間の話…そしてポケモンが人間を拒絶して攻撃したという話だった。それらはポケモンと人間が共存する限り引き起こしてしまう出来事であり…どこかで聞くような話ばかりだった。ハルカ達が聞けばすぐにその悪さをしている人間達を懲らしめてやりたいと思えるような話を…でもそれらの噂では全て共通しているのだとNは話す。

Nが手を上げれば…木の枝にいたスバメがやって来て挨拶をする。それを見たNは笑みを浮かべ…そしてハルカを見てから口を開く。

「もうここは何もないみたいだ…僕は行くよ」

「はい…あの、私に何かできることってありますか？」

「そうだね…トモダチを…ポケモンを大事にしてくれたらそれで本望だよ。でもサトシ

君の知り合いである君なら当然できることだろう？…ああそうだ、サトシ君にはこのことは言わないでくれ」

「え、でもサトシなら…」

「サトシ君ならいつか分かるはずだよ…ポケモンたちが共通して何かに怯えているという事実を知れば…それをどんな手を使ってでも止めようとすることもね…でも僕はサトシ君には知ってほしくないんだよ…彼なら迅速に止めてみせるだろうけれど…それは彼らを巻き込むということになる。僕は彼らを巻き込みたいとは思わないんだ。あんなにもポケモンを大切に思っているサトシ君には…」

「……大丈夫ですよNさん！サトシは巻き込んででも全然問題ないですし…迷惑だなんて思いません！…ましてやポケモンたちが困っていることを聞けばすぐに助けてくれるはずですよ！サトシは強いんですから!!もちろん私も手伝います!!」

「…そうだね。サトシ君も…君も強い。でも僕は、いつまでたってもサトシ君に頼っている意味がないんだ。僕にできること、やるべきことはするよ。ポケモンたちが傷ついて困っているならすぐに助ける。…そしてサトシ君の手が本当に必要ならば協力を申し込む…だから今は話さないでくれないか。彼の旅を邪魔したくないからね」

「……分かりました。そこまで言うなら話しません!」

「ありがとう。じゃあ僕はもう行くよ…」

「…あの！Nさんはこれから何処へ行くつもりですか!？」

「——カロス地方だ」

「っ!!」

Nはその後何も言わずに立ち去ってしまった。ハルカは話を聞いて少しだけ驚いたり眉をひそめてポケモンたちが傷ついていることに怒ったりしていたが…Nの表情を見て何も言わなかった。

Nは怒っていたのだ。サトシのようなポケモンを大事にする人間がいることを知っているけれど…それでも止まないポケモン売買や不穏な噂に…ポケモンたちが傷つくことに怒りを覚えていた。ハルカの所持しているボールから感じ取ったバシャーモ達の心を聞いて少しだけ機嫌が直ったようだったけれど…それでもいまだに怒りはあった。それは、プラズマ団との戦いで感じた感情に近いかもしれない…Nはそう思っていたのだ…。

Nが立ち去った後、ハルカはずっと考えていた。これから何が起きるのか…ちゃんと

事件は解決するのかを…。

「大丈夫よね…サトシがいるんだもん…絶対に、大丈夫」

カタカタと…ボールはハルカの声に同調するかのようには、揺れた。

第二百四十六話く兄はスタンプラリーに挑むく

こんには兄のサトシです。夕食を食べた後、プラターヌ博士が明日の大会について説明してくれました。

それはポケエンターリングという名のチーム対抗戦であり、ある意味スタンプラリーのような遊びだと俺はそう思った。プラターヌ博士の説明では、コース上に作られ、設置されているスタンプを集めてゴールを目指すというものらしい。現在の1位は俺たちチームケロマツとティエルノ達のチームゼニガメである。1位を目指すためにも頑張ろうと言う子たちもいて、そしてセレナ達やティエルノ達も1位になって殿堂入りを目指しているこうと張り切って行こうとやる気を出しているようだ。そのためいつもなら少しポケモンを出してバトルしたり話をしたりという自由時間があるのだが、ほとんどのチームが明日のために早く休もうと結論を出したらしくすぐに小屋に戻って眠りについた。

「明日は頑張りましょうね！」

「殿堂入り目指して1位独占だね！」

『デネデネ！』

「それに怪我もしないように気をつけていこうね」

「だな…まあお前等ならたぶん平気だと思っただけ…」

『ピイカツチュウ』

もちろん俺たちも何かあつては困るということですがすぐに眠ることになったのだった。

.....

—— 次の日、俺たちは全員朝食を食べてから最初の場所へ集まっていた。そこはゴールをする位置であり、スタートの場所となつてゐる所だ。

スタンプをただ集めるといっただけなのかは分からないけれど、まあ頑張つて進めば何とかなると俺たちはやる気を出してスタートの合図が来るのを待った。そして、プラターヌ博士が旗を持つてスタート手前の台に進み、大きく振り上げてから大きな声でスタートと叫ぶ。その声に合わせて俺たちは走り出したのだった。

先にポケモンを出してから進むこのチーム戦は、バトルは含まれていないけれど、それでもポケモンと協力してやる何かがあるのではないかと昨日の説明を聞きながら、そう予想していたのだが、その考えは当たっていたようだった。

大きな崖が見えている場所まで走り、第一のチェックポイントまでやって来た。でも地図で書かれた場所だというのに何もなく、スタンプらしきものもない。探している間にティエルノ達もやってきてしまい、このままでは探すだけで後ろのチームに追いつかれてしまうと考え、皆で探す。でもすぐに崖の上から大きな声が聞こえてきて、そこにはプラターヌ博士と一緒にいた女性が立っていた。手を振ってここにスタンプがあると言うその声に、この崖を登らなくてはいけないのかと俺たちは考えた。

「なるほどな……ここでポケモンと協力して崖まで登るってことになるのか……」
『ピイカツチュ』

「オーライ！それなら僕とゼニガメの出番だね！レッツダンス！」

『ゼニゼニ!!』

「うわっ先行っちゃうよ!!私が……!」

『デネデネ！』

「こらユリーカ！危ないだろ!!」

「でもこのままじゃ……!」

「俺が行く。ピカチュウはそのまま待機な…頼むぞケロマツ」

『ケロケロ!』

「サトシ…気をつけてね!」

ティエルノとゼニガメが先に行つてしまったため、焦ったユリーカが崖をよじ登ろうとするためシトロンが止める。でもティエルノがどんどん先に行つてしまうためにこのまま見てるわけにもいかないかと俺は帽子をかぶり直してからケロマツをボールから出して崖をよじ登る。

でも崖を登っている間にステップを踏みながら崖をジャンプして登っていたゼニガメの足元が崩れ、崖から落ちそうになり…ティエルノが助けようとして一緒になつて落ちてきてしまった。

幸い俺たちは後ろの方にいたためにケロマツにケロムースを出すように指示をだして助けることができた。…まあ少し問題はあつたものの何とか無事にスタンプを貰うことができて良かったと思えた。

そしてティエルノがスタンプを貰っている間に俺たちは先へと進む。

次の第二チェックポイントでは橋を渡ってスタンプを押すというものだ。でも橋は少し揺れていて今にも落ちそうに見える。それを行くことになったのは俺たちのチームはセレナ、ティエルノのチームはサナだった。チーム対抗だからこそ同じ人が連続して代表でやるのは禁止らしく、シトロンがやろうかと言っていたのだが、サナがやると言う言葉にセレナが対抗したらしく、自ら代表としてやると言っていた。∴その顔は青くなっていたのだけれども。

「よ、よし∴行くわよ」

『フオコウ!』

「負けないわよ!」

『ダネダネ!』

サナがフシギダネのつるに捕まり、安定した歩きでゆらゆら揺れる橋を渡るのだが、セレナはフオッコの尻尾を掴んで何とか落ちないように慎重に進んでいた。そのため大胆に進んでいくサナたちが優勢だった。サナの動きを見ていたシトロンが苦笑しながらも言う。

「サナのようにハリマロンで進めば良かったですかね…」

『ホツビイ…』

「でもお兄ちゃんもハリマロンもちゃんと橋渡れるかどうか分からないよ？もしかしたら怖がって進めなかったかも！」

『デネデネ！』

「こらユリーカ！」

「はは…まあセレナが頑張って進んでるんだし…あいつを信じて待ってみようぜ。それに追いつかれたとしても追い越せばいいんだからな」

『ピイカツチュ』

「オーライ！随分と強気な発言だね！まあ僕たちも追い越されたらすぐに追いついてみせるけど」

『ゼニゼニ！』

「なににせよ、今の僕たちが優勢ですから…ほら、そろそろサナが帰ってきますよ！」

『カゲカゲ！』

サナが橋を揺らしながらも帰ってきて、セレナが少し青い顔で何とか橋を渡り…スタ

ンプをゲットしてからフォッコに捕まって戻ることができた。セレナが橋を渡ったことで少しふらついていたけれど、それでも何とか気力で回復させることができたらしく、俺たちは走り始めた。

次の第三エックポイントは迷路のような建物の一番上にスタンプがあるらしく、シトロンがホルビーを連れて：そしてトロバがヒトカゲを連れて中へ入って行った。何度か外を見て今どこにいるのかを確認するシトロンとトロバ達が見えるのだが、建物の中のため今どうなっているのかは見れない。俺たちは待つことしかできず、とりあえずシトロンが外の状況を確認した時にもうちよつと上だとか：左だとか言えればいいかと大きな声で叫んだ。それを見たティエルノ達もトロバを助けようと声を出す。

そしてようやくシトロンが一番上まで到達し：スタンプを押すことができた。でもまた戻ってくるのに少し時間がかかり、トロバがスタンプを押す頃によりやく戻つてくることに成功したのだった。俺たちは先へ進み、走って行く。

他にもつるを使ってスタンプをゲットするようなものがあつたり、激流な川を渡つてスタンプを押したりと結構きつそうなものがたくさんあつた。まあそれでもつるから落ちたら危険だと下にはマットが敷かれていたり、激流の川から落ちてもすぐに助けら

れるように警備隊がいたり安全策はあるようだった。それを第一チェックポイントの崖の方でもあれば良かったのにと苦笑しながらも俺たちはスタンプを押しつつ前へと進む。

.....

「…霧…か」

『ピイカツチュ…』

「これは危険ですね…ユリーカ、離れたら危ないからちやんと傍にいるんだよ？」

『ホツビイ』

「うん分かっている…!」

『デネデネ』

「森の中から地図を見ても分からないし…どうするサトシ？」

『フオコ?』

「…とにかく前へ進もう…何かあったら困るから皆離れるなよ」

霧の中ではぐれたらすぐに合流できるかは分からない。そのため俺たちは前へ進みながらも慎重に歩いて行つた。

途中でピカチュウが何かに気づき、耳を動かしながらこちらに向かつて声を出す。

『ピカピ！ピイカツチュ！』

「何だ？どうかしたのかピカチュウ？」

『ピイカア！』

「…あれ？ユリーカは…ユリーカ!!？」

「ユリーカがいない…もしかしてピカチュウはそれが言いたくて叫んだの？」

『ピイカツチュ！』

「…どこにいるのか分かるかピカチュウ？」

『ピツカア！』

ピカチュウが俺の言葉を聞いて前に進む。はぐれないように慎重に進みながらもピカチュウの後を追ひ、そしてようやくユリーカの姿を見ることができた。ユリーカは何かを見たかのように俺たちを探そうとせず、ただ歩いていこうとしてたため、シトロン

がユリーカの肩を掴んで止める。

「ユリーカ!! 離れたら危ないって言っただろ!!」

『ホツビイ……!』

「あ、お兄ちゃん……! あのね、何か見たことない凄く綺麗なポケモンがいたんだよ!!!」

『デネデネ!』

「……ユリーカ? 綺麗なポケモンを見たのは分かったけど……私たちとはぐれたらじつとしてなきや駄目よ? 動いたら余計に見つけることができなくなるんだから」

『フオコオ!』

「そうだけ。森の中はポケモンがたくさんいるんだ。ユリーカとデネネを攻撃してくるかもしれないし……だからこそ綺麗なポケモンを見つけてもじつとしてなきやダメだろ?」

『ピイカツチュ!』

「……でも私悪くないもん」

『デネ!』

「悪いとか悪くないとかそういう問題じゃないんだよユリーカ!……僕たちはユリーカが危険な目に遭うんじゃないかと心配して探していたんだから……だから怪我なくて良

かった！」

『ホッビ！』

「…お兄ちゃん…ごめんなさい」

『デネ…』

「反省したんならもう大丈夫だ。さあゴールに向かって歩いていこうぜ！」

『ピイカツチュ！』

「あ…で、でもまたはぐれたら危険だから手を繋いでいきましょうよ！」

『フオコツ！』

「なるほど！それはいい考えですね！」

『ホッビイ！』

「じゃあセレナはサトシと私の手を繋ごう！ほらお兄ちゃんも！」

『デネデネ！』

「…まあいいか」

『…ピイカツチュウ』

霧の中を進みながら手をつなぎ前へ歩いていく俺たちは、途中でテイエルノ達と合流した。とりあえず1位を目指して前へ進もうと言うけれどもここでは危険と判断し、走り出すのは止めて一緒に進もうと協力することになった。地図はもう役に立たず、後ろ

に戻ったとしても先程と同じ場所を歩けるのかさえ困難だと思えた。

だからこそ俺たちは前に向かって歩く。…するとユリーカが何かを見つけたよう
でシトロロンと繋いでいた手を離して指差しながら叫んだ。

「あ、ねえあれ見て!! さっき見たポケモンだよ!!」

『デネデネ!』

「新種のポケモンか…? 霧の中だから図鑑には登録されねえか…」

『ピイカツチュ…』

「すごい…まるでメブキジカみたいなポケモンですね!」

『ホツビイ!』

「メブキジカって角の生えたポケモンのこと? でも綺麗!…角が虹色に光ってて周りに
花が咲いてる…!」

『フオコオ…!』

「ポケモントレーナーをやっててこんなにも神秘的なポケモンを見たのは初めてです
!」

『カゲカ!』

「オーライ…あのポケモンをゲットしたいけど、ここで離れたら問題だから無理だね…」

『ゼニゼニ…』

「それでもあんなに綺麗なポケモンがいるって分かって私は感激だよ！」

『ダネダネ！』

『——ッ！』

「…行っちゃまったか…さあ前へ進もうぜ皆」

『ピツカア!!』

霧の中から見えてきたのは虹色に光る角の生えたポケモンらしき姿。でも霧のせいではつきりとは見えず、俺たちはそのポケモンを見てみたいという欲求が出た。…でもあのポケモンを追いかけて行こうとすればますます迷うだろうし、はぐれてしまう危険性もあった。だからこそ俺たちはただ立ち止まり、その姿をじつと見つめていた。トロバが写真を撮ろうとしたのだが、その動きを察したのかそのポケモンが声を出してからゆっくりと消えていった。

幻のようなその姿に俺たちはしばらくじつとしていたが、このまま立ち止まってもしょうがないと考えてゴールを目指して進む。

そしてようやく見えてきたゴール…俺たちチームケロマツとチームゼニガメは協力して進んだからということと同着となつて一緒に1位になったのだった。

第二百四十七話く兄は決着し、前へ進むく

こんにちは兄のサトシです。いよいよポケモンサマーキャンプは最終日を迎え、このサマーキャンプで最後にやるのはどうやらチーム対抗トリプルバトルというプログラムらしい。

バトルはトーナメント形式で行われ、3位までのチームに得点が加えられる。そしてそこから最終的に殿堂入りのチームが決まるということだった。でももうこの大会で1位になったとしても絶対に殿堂入りできないチームがいるというのに、プラターヌ博士の話の聞いて、バトルをすることを楽しそうにしながらも盛り上がっている。…まあ

トレーナーとして楽しみや生きがい…いや、旅の目的であろうバトルだからこそ嬉しいのだろう。

プラターヌ博士も笑顔で、早くバトルがしたいとでもいうかのような表情を見せてくれるトレーナー達の様子を嬉しそうに見ていた。

そしてトーナメント形式の大会は午後から開かれると言うことで俺たちは自分たちの部屋に行き、それぞれどうやるのかを話し合いすることにした。

「トリプルバトルと言ってもチームの人数によって変わるみたいですからね…もしかしたら3対4のバトルというのものもあるかもしれません…」

「ソレはそれで面白そうだよな…まあ全部勝てばいいんだから…な、ピカチュウ?」

『ピツカア!』

「ぶー…ユリーカもバトル出たい!!」

『デネデネ!!』

「駄目だよユリーカ。まだトレーナーの年齢になってないんだから…」

「ユリーカはトレーナーの年齢になって旅をした時の楽しみにとつとけ。もしかしたら俺の妹と一緒にチーム戦やることになるかもしれないぜ?」

『ピイカツチュ?』

「ヒナちゃんとチーム!!それはそれで楽しそうかも!!」

『デデデネ!!』

「かもつて…ユリーカの口癖ハルカに似てきたのかな…」

「まあキャンプが始まる前までは一緒にいたからな…」

『ピイカ…』

「ジャジャーン!マカロンとポフレ完成したよ!…つてあれ?どうかしたの皆?」

「いやなんでもない」

『ピイカツチュ…』

「そう…?」

小屋についていたキッチンでお菓子を作っていたセレナがマカロンとポフレを持ってやって来た。でも俺たちの様子や笑顔なユリーカの表情を見て首を傾げて何かあったのかと聞いたために苦笑しながら誤魔化す。そしてトリプルバトルでの作戦を立てようかとなった時にティエルノ達がやってきた。どうやら、今回の大会でのバトルについて説明してくれるらしい。セレナの作ったポフレやマカロンを俺たちが食べながらも…作戦を立てるのは後にしてトーナメント戦で何があるのかを聞くことにした。

「今日のトーナメント戦でのバトルはトリプルバトルしかやりませんが…このサマーキャンプで7対7のバトルが行われることもあるんですよ！」

「7対7か…！」

『ピイカツチュウ！』

「凄く凄く！7人とバトルするだなんて面白そう!!」

『デネデネ！』

「7人でバトルするってことは7体のポケモンを全部見て行動しなくちゃいけないのよね…少し混乱しそう…」

「大丈夫よセレナ！今回やるのは3対3のトリプルバトルなんだから！」

「このサマーキャンプでのトリプルバトルには何か特殊なルールなどがありますか？」

「いいえありませんよ！ルールについては通常のトリプルバトルと同じですからね！」

「オーライ！通常のトリプルバトルで負ける気はないから殿堂入りは僕たちが貰うよ！」

「それはこっちの台詞だぜティエルノ！」

『ピイカツチュウ！』

どうやらティエルノ達はトリプルバトルに負ける気はないと俺たちに向かって言うために来たらしい。現在殿堂入りを争う俺達チームケロマツとティエルノ達チームゼニガメだから仕方がないだろう。

でもこれ以上は作戦の邪魔になると分かったのかすぐに関の小屋に戻り、話し合いをするようだった。セレナに向かってポフレとマカロンごちそうさまと笑顔で礼を言ってから立ち去ったティエルノ達に、俺たちは負けられないと考えて作戦を決めようと話し合いを始めたのだった…。

・・・・・・・・・・・・・・・・

現在の時間は午後。トーナメント戦のトリプルバトルが始まった。だがトリプルバトルで必要なのはコンビネーションと仲間たちとのフォロー…そして勝つために行動することだろう。セレナとシトロロンも俺との様々な模擬バトルで慣れているからか相手が放った急な攻撃にも驚かずに反応して防衛しながらも攻撃へと移ることができた。

——そして合体技などを使用して…いよいよ決勝まで進出することができた。

決勝戦ではチームゼニガメであるティエルノ達とのバトルだ。このバトルで勝った

方が殿堂入りとなるため、俺たちもティエルノ達も負ける気はない。

「それじゃあチームケロマツ対チームゼニガメ：試合開始!!」

「オーライ!ゼニガメ、みずでっぼう!」

『ゼニゼニ!』

「ヒトカゲ、ゼニガメのみずでっぼうに向かってかえんほうしゃ!!」

『カゲカゲ!』

「フオツコ!防御して!かえんほうしゃ!」

『フオコオ!』

「ケロマツ、フオロー頼むぞ。みずのはどう!」

『ケロケロオ!』

みずでっぼうとかえんほうしゃがうまく合わさり合体技となつて襲いかかる。それを防御するために俺とセレナで同じ威力の技を放ち、ゼニガメ達の技に向かってぶつけた。技同士がぶつかりあつたことによつて大きな突風と黒煙が舞うが、それに気にせずハリマロンが走り出す。

「ハリマロン！そのままゼニガメにつるのムチ！」

『リイマ!!』

「ゼニガメ、こうそくスピンドで躲せ！」

『ゼニイ!!』

「リズム戦法か…ケロマツ、みずのはどうではたく！」

『ケエロオ!!』

「速い…フシギダネ！はっぱカッターで防御して！」

『ダネエ!!』

ハリマロンのつるのムチをくさタイプ弱点となるゼニガメに向かって攻撃してきたのだが、ゼニガメがリズムを刻みながら…踊りながらハリマロンの攻撃を避ける。そのためとりあえず全体攻撃をするべきだと考えてケロマツに向かってみずのはどうを放った後、はたくでみずのはどうのスピードを上げさせる。その速さに驚いたサナだったが、すぐにフシギダネにはっぱカッターを指示して防いだ。そして早めに終わらせようと思っているのか、サナが笑顔でフシギダネに向かって叫ぶ。

「フシギダネすぐに終わらせよ！ソーラービーム準備！」

『ダネフツシイ!!』

「テイエルノ、サナの攻撃の間にフォローしましょう！」

「ああそうだな！ゼニガメ、フォッコに向かってアクアテール！」

『ゼエニ！』

「フォッコ、めざめるパワーで防御！」

『フォッコ！』

「ケロマツ、アクアテールに向かってあわ！」

『ケロオ！』

フォッコのめざめるパワーだけではゼニガメのアクアテールを防御しきることができないと判断してケロマツに向かってフォッコのフォローをしてもらう。大量のあわによってアクアテールが分散され、攻撃を防ぐことに成功した。そしてフォッコがその分散された水に当たらないように気をつけながらも前を見る。当然ケロマツもすぐに攻撃態勢を整えながらも俺を見て頷いてきた。

その間にトロバがヒトカゲの弱点となるハリマロンを見て好機だと考えたのか、ハリマロンを指差して口を開いた。

「ヒトカゲ、ハリマロンに向かってはじけるほのお！」

『カゲエ！』

「ハリマロン！ジャンプして避けてください！」

『リイマ！』

「今よ！ソーラービーム!!」

『ダネエ!!!』

「ケロマツ、ハリマロンの前に出てからいあいぎり！」

『ケロオ!!!』

「え!?嘘!!!?」

『ダネ!?』

「凄い！そんなことができるだなんて始めて見ました!!」

『カゲエ!』

「オーライ…さすがサトシだ！」

『ゼニイ!』

「フオツコ！今のうちにフシギダネに向かってかえんほうしや！」

『フオコオ!』

『ダネエエエ!!!?』

「あ!?フシギダネ!!!」

ジャンプして躲そうとしたハリマロンを狙って：そして後ろにいるケロマツ達にも攻撃できるように大きなソーラービームとなつて襲いかかつてきた。その技にハリマロンが当たらないよう：いいいぎりという新しく覚えた技で攻撃を防ぐ。

：それは、他の人から見ればソーラービームとなつて襲いかかった攻撃をケロマツがいいいぎりですつに分散し、そのまま叩き斬つたように見えただろう。でもケロマツだけじゃなくハリマロンがつるのムチでケロマツを支えたからこそ、強い威力でケロマツ達が斬る前に吹き飛ばされずに済んだ。ハリマロンがいたからこそ攻撃を防ぐことができたのだ。これは協力してお互いにフオローし合いながらも戦うということだからこそできた防御方法だ。ケロマツはまだまだ修行途中で、マサラタウンにいるポケモン達よりも強いとは言えない。でもまだ成長途中だからこそ柔軟性があり、攻撃に幅があるのだ。

そしてサナ達がケロマツの攻撃に見惚れていたせいで、フオツコのかえんほうしやを防御するのに遅れ、フシギダネはフオツコの攻撃を受けて倒れてしまう。その後、俺たちも攻撃するために口を開いた。

「ケロマツ！ みずのはどう！」

『ケロオ!』

「おつとさせないよ!ゼニガメ、アクアテール!」

『ゼニィ!!』

「ハリマロン、ゼニガメのアクアテールに向かってミサイルばり!」

『マアロ!』

『カゲツ!?カゲエエ!!』

「ヒトカゲ!!!…ありがとうヒトカゲ。頑張りましたね」

「オーライ…残りは僕ってことか…でも最後まで負ける気はないよ!」

『ゼニィ!!』

ケロマツのみずのはどうを防御しようと思ったのかティエルノがこちらに向かって攻撃をする。でもそれをハリマロンが放ったミサイルバリによってゼニガメの技が当たらず、そのままみずのはどうは直線状にいたヒトカゲに当たった。ゼニガメを攻撃するのではないかと予想していたトロバが驚き、そして倒れてしまったヒトカゲにありがとうと礼を言つてボールに戻した。

残りはティエルノのゼニガメだが、リズム戦法を警戒しながらも攻撃するために俺たちは顔を見合わせてから頷いて口を開いた。

「フオツコ！めざめるパワー！」

『フオココオ！』

「ハリマロン、つるのムチ!!」

『リイマ！』

「避けるんだゼニガメ！こうそくスピン！」

『ゼニゼニイ!!』

「ケロマツ！ゼニガメに向かって思いつきりはたく!!」

『ケロオ!!』

『ゼニ…!?!』

「ああ！ゼニガメ!!!」

「そこまで!!試合終了！マーベラスな殿堂入りが決定したのはチームケロマツだ!!」

フオツコのめざめるパワーとハリマロンのつるのムチを躲したゼニガメに向かって頭上からケロマツのはたくが放たれた。直撃したゼニガメはそのまま砂に顔面からぶつかり、目を回して倒れてしまう。その姿を見て少しだけ落ち込んだティエルノだったが、ゼニガメをボールに戻してから俺に近づき、握手を求めて手を伸ばす。俺は笑みを浮かべてティエルノの握手に応じた。セレナ達やサナ達も俺とティエルノのように握

手しながら笑顔で言う。

「…強いねサトシは…でも今度会ったら絶対に負けないよ！」

「それはこつちの台詞だぜ？…楽しいバトルだったよ」

『ケロケロオ！』

「負けちゃったあ！セレナ本当に強いね！」

「ううん…私はサトシ達に守られて戦っただけだよ。それにフォッコの努力もあつたし…強いんじゃないかって皆が凄かっただけなの」

『フォコ…フォココオ!!』

「それは違うよセレナ！セレナも私のフシギダネに向かつて隙を見て攻撃して来たじゃない！その指示も凄かったし…セレナは強いよ！」

『フォココオ！』

「サナ…フォッコ…ありがとう！」

「君のハリマロンのフォローは凄いです！攻撃の威力も強くて…ですが今度は負けませんよー！」

「トロバのヒトカゲも技の威力が凄いですよ！今度も僕たちは負けませんからね！」

『リイマ！』

「うんうん……これぞ青春ってやつだね！これにてポケモンサマーキャンプのチーム対抗バトルは終了としよう！」

周りの観客による歓声が聞こえ、そしてプラターヌ博士の拍手によつて……ポケモンサマーキャンプは終わりを迎えたのだった。

第二百四十八話く妹達はシゲルに聞くく

「あのシゲルさん…ここ何処ですか!？」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「…はっはっは！」

「また笑って誤魔化してる!!」

『ガウウウ!!』

『ピチュウ!!』

「こんにちはは妹のヒナです。ようやくマサラタウンに帰れると思ったらなにやら山に

登らされています…。

理由はどうしてかはわからないけれど、シゲルさんに連れられてマサラタウンに帰る途中：いきなりマサラタウンに行く道とは違う方向へ歩きだし：そしていつの間にか山に登っているという状況になってしまっていたのだ。ここが何処の山なのかは私たちは知らない。マサラタウンから遠いのか：それとも近くにある山なのかさえ分からない。登ったことのない山を登り続けている私たちはずっとシゲルさんから目を離さずにいた。

シゲルさんは何で私たちを連れてこつちに来たんだろうと疑問に思いながらも歩く。リザードとピチューは私と同じようにシゲルさんの行動を疑問に思っているらしい。私を見てから前に歩くシゲルさんを指差して理由をもう一度聞いてみるか：どうするかと小さく鳴き声を上げて問いかけてきた。でも私たちに何も話す気のないシゲルさんからもう一度質問をしても無駄だと考えてリザードとピチューに向かって苦笑しながら首を横に振った。私が首を横に振ったことでリザードとピチューも諦めてくれたらしい。微妙そうな表情を浮かべ、前を歩くシゲルさんに視線を向けながらも、ただひたすら山を登り続けた。

———そもそも私たちがジョウト地方に来た理由さえまだよく分からないのだ。

ジョウト地方についてから、ヒビキやシルバーに会って：そしてたまごを守ろうとした騒動が起きたせいで私たちがジョウト地方に来た意味について聞けなかった。

もしかしたらヒビキに会わせるためにジョウト地方に連れてきたのか：いやヒビキとならトレーナーになった時にまた会えるし、シルバーだってカントー地方を旅すると言っていたのだから今ジョウト地方で会わなくても必ず会えたはずだ。：だからこそなんで私たちを連れてきたのだろうかと疑問ばかりが思い浮かぶ。

：まあそれについて聞くタイミングがなかったということと、現在の状況についてもシゲルさんが頑なに教えてくれず、聞けないままなのだから少し諦める必要があるかもしれないけれど：でもこうしてマサラタウンから離れた山に向かって歩いているという意味については本当に聞きたいと思っている。帰れると思ったら遠回りをしているのだから：何時になったらマサラタウンに帰れるのかについて聞きたい。そしてこの山を登っている理由についても知りたい。

それは何故か：そろそろマサラタウンに帰らなければいけないと感じているからだ。私たちは何も知らなかったからこそ、伝説たちになにも言わずにジョウト地方へ行ってしまった。そのため伝説たちや兄のポケモンたちがキレていそうな気がするし：まあ悲しむという可能性もあるけれど：でも早く帰らないといけないと不安になっていて、今シゲルさんから離れて勝手に帰るといふことは絶対にできない。

だから私たちは歩き続けるしかないのだ。

.....

「…着いた。ここだよ」

「へ…ここ？」

『ガウウ？』

『ピチュ？』

——シゲルさんが笑みを浮かべながら私たちに向かって言う。つまり、ようやく目的の場所にたどり着いたようだった。シゲルさんが指差した方向に見えてきたのはある一軒の建物で…木造で少し古そうな家にシゲルさんが入って行ったため私たちも一緒に入る。

そして入った先に見えたのは大量のポケモンのたまごが部屋中に置いてあった光景

だ。温かそうな布やクツションで敷かれたその部屋でたまごがたくさん置いてあるその場所に私たちは驚く。

たまごが大量にあるその異常な光景に……ここは育て屋なのかと一瞬間に思ったが……人や町なんてないこの山奥に育て屋を営む意味はあるのだろうかと考えて否定する。

「……こんなにたくさんたまごが置いてあるって……いったいどういうことですか？」

『ガウウ?』

『ピツチュウ!!』

『ガウウ!!』

「こらピチュウー!たまごに抱きつこうとしないの!!たまごが危ないでしょう!!」

『ガウウ!』

『ピチュ……ピチュウ……』

「ははは。大丈夫だよピチュウ、でも暴れないようにね。……このたまごたちはトレーナーによって捨てられ、ポケモンから盗まれてきたんだよ」

「っ……それって……!」

『ガウウ……』

『ピチュウ……』

「ああ、そうだね。ここにいるすべてのたまごたちは…人間の身勝手な行動のせいで親から離れ離れになったり、捨てられたりしたんだ…」

——つまり、このたまごたちは人間の勝手な都合によつて親から離れてどこかに捨てられてきたということなのだろう。数えきれないほどたくさんあるこのポケモンのたまごが人の都合や自分勝手な事情によつて物同然に捨ててしまふだなんてそんなことが許されるはずがない。シゲルさんもそう思っているらしく、その捨ててきた人間相手に対しての怒りが表情に表れていた。でも声色やたまごを撫でる手は優しく、このたまごたちに生きていてほしいとそう願っているかのようにも見えた。リザードも同じように近くにあつたたまごを優しく抱きしめて撫で、ピチューも先ほどの危なっかしい行動がなくなりゆつくりとたまごを撫でてちゃんと生まれてこいと言っているかのように笑顔で鳴いていた。

「…そのトレーナー達は反省していませんか…勝手に捨てて…勝手に…」

「いや、たまごたちが置かれた…いや、捨てられた場所で見つけた頃にはもう原因であるトレーナーがたまごの傍にいないということが多く。たまにたまごを捨てようとしたトレーナーを見つけて嚴重に処罰を与えることがあるけれど…それでも奴らは反省し

ないんだ。まるでポケモンたちを使い捨て同然のように扱って…」

「……………お兄ちゃんは…それを知っていますか？」

「ああ、知ってる。サトシはそれを知ってて、旅に出ているんだ」

「え…？」

「ヒナちゃん。サトシの夢は何なのか…知っているよね？」

「…ポケモンマスター…ですよね」

「ああそうだ。ポケモンマスターだ。サトシは旅に出るからそのことを全部教えてくれたよ。ポケモンを物同然に扱うトレーナー達が多いということを…ちゃんと絆を作っているトレーナーが少数なのだという…。だから、サトシにとってポケモンマスターがすべてのトレーナーの意識を変えるきっかけをつくれると考えているんだ…」

「お兄ちゃんが…………」

シゲルさんの話を聞いていて…自分自身の軽率な考えを恥じた。

私にとつて兄は人とは思えないほど強くて…ポケモンのことを大切に考えている人だと思っている。

…でも、ポケモンマスターになることについては…私は今まで兄が原作と同じようにして夢を追っているのだと思っていたのだ。今となつてはあまり思い出せない原作だ

けれども…それでも「サトシ」がポケモンマスターを目指して旅をしているということについては覚えている。

だから兄も同じように旅に出たのだと…【原作のため】に行動して…これは夢とは違うのだとそう思っていた。でもシゲルさんの言葉でその考えは間違っていたのだと分かった。

兄はポケモンを軽々しく捨てるトレーナー達に怒り、すべてのトレーナーの頂点…ポケモンマスターとなつてすべてを変えようとしているのだろう…それはまさしく兄の【夢】でありポケモンを大切にしているからこそ願った行動なのだと分かった。アデクさんとの話では、兄は何も語らなかつた。ポケモンマスターになつた後…その時に考えると言つて誤魔化していた。私はその時…兄が何かまたやらかすのではないかと…いつものように暴走するのではないかと考えてしまったのだ。兄のことを知つたつもりでいたけれど…まだまだ何も知らなかつたのだ。

兄はちゃんと自分自身で考えて行動している。ちゃんと夢に向かって歩いていくと気づき、以前兄がやらかすと思つてしまった自分を怒りたいと思つた。兄は自分自身のためにではなく、ポケモンのために夢に向かって歩いていくのだということを…。

(私にとつて…夢つてなんだろう…)

私はまだまだトレーナーになるための年齢に達していない。それでも兄はこの頃からポケモンマスターになろうと決めていたのだ。もしかしたら兄は最初の頃は原作が関係しているからと行動していたのかもしれない。でも途中で兄は変わっていったのだろう。：かりそめの夢から本物の夢へと。：本気でポケモンマスターを目指そうと旅を通じて。：次第に目標として決めていたのだろう。

私はまだまだそこまで本気で考えられない。ポケモンが大事だというのは分かるし、リザードやピチューと。：フシギダネたちや伝説達とずっと一緒に居たいと言う気持ちだつてあるのだから。

それでも兄のように、すべてのポケモン達のこれからを考えて。：トレーナー全ての意識を変えようだなんてこと。：私にはできないだろう。

ちゃんとした夢でさえ何も無いそんな私に。：何かできることはないのだろうか。：それだけを考えて、たまごたちを見つめていた。

第二百四十九話く妹は夢を思うく

「ヒナちゃんをジョウト地方やここに連れてきたのは…トレーナーにもいろんな人たちがいるということを知ってほしかったからなんだ。ポケモンを物同然に捨てる奴らもいるということをね…」

「…イツシユ地方に連れて行ってくれた時も…ポケモンに対してとても酷いことをするトレーナーを見ました。でも、それは少人数だっと思ってた。お兄ちゃんが何度もそんな人たちと会って…それで戦ってたから気づかなかった。…シゲルさんが連れてきてくれなかつたらお兄ちゃんのことともトレーナーの現状についてもちゃんと知ることができなかつたかもしれないですし…気づくことができなかつたかもしれません…ありがとうございます」

『ガウウー！』

『ピチュウ!』

「礼を言うようなことはしてないよ。ただヒナちゃんたちには知ってほしかっただけなんだ。ヒナちゃんがトレーナーになって旅をすれば分かってしまう事実をね…」

ヒナ達はたまごが多く置かれている場所で話していた。

そこはある山奥にあるポケモンのための大きな建物だった。捨てられたポケモンたちやたまごたちがそのまま野生に戻るための補助をするという場所：現在はシゲルの案内によってたまごの広場へとやってきていたのだが、他の部屋ではいろんな人たちがポケモンたちを助けるために動いていた。だが、今ここにいるのはシゲルとヒナ：そしてリザードたちとたまごたちだけだ。

シゲルがヒナたちを連れてきたのは理由があった。ヒナたちにちゃんと今のトレーナーの現状を教えてやりたいと思っていたのだ。兄であるサトシはまだヒナに何も言わなくてもいいといったその真実を…。ポケモントレーナーは全てがポケモンを大事にしているわけではないということ…。

「ヒナちゃん。トレーナーとポケモンはどっちが有利になると思う?」

「…えっと…それは、対等ですよね？」

『ガウウ!』

『ピチュウ!』

「ヒナちゃん達ならそう言うと思っていたよ…でも違うんだ。周りはそのとは言わない」

シゲルは今のポケモントレーナーの現状についてヒナたちに教えた。ヒナたちは真剣にシゲルが話す内容を聞く。

トレーナーとポケモンはボールに捕まった瞬間から絆が生まれると一般的にはそう言われている。ポケモンがボールに入れられ、捕まった瞬間からそのトレーナーと信頼関係を結んでいくきっかけとなる。そしてトレーナーはその捕まえたポケモンと多く関わる必要がある、そこからより強固な絆となって結ばれていくのがトレーナーとポケモンの常識と言えるであろう。

——でもそんな一般的な方法を、トレーナーは勘違いをしてしまう時があるのだ。ボールに入れられ、捕まった瞬間から自分の「もの」だという認識をして…使い勝手の良いポケモン…いや、物だと勘違いしてしまう。

ポケモンはトレーナーと同じ生き物だというのに、勘違いして行動するトレーナー達は捕まえたポケモンを指示を聞くだけの道具として扱い、より強い【もの】を求めて利用だけしてからすぐに捨ててしまうという行動を何の感情もなくやってしまう。そんなトレーナーをサトシは嫌っていた。…もちろんシゲルもだ。

サトシはポケモントレーナーとなつて旅に出た。そこで関わってきた人間の中にはポケモンを道具として扱う奴らがいることを知り、そんな奴等に対して怒りを覚え、苛立っていた。このままの現状ではいけないということもサトシは分かっていたのだから…。でも一般的なトレーナーがいろんな地方にいるトレーナーにその勘違いした部分を一気に払拭させるのは難しい。サトシなら時間をかけて行えばできるかもしれないが…それでもやれることは少ない…それに時間がかかればかかるほどポケモンの被害が増えていく。

だからこそサトシは、ポケモンマスターとなつてトレーナー達の意識を変えてやろうと夢を持ったのだ。ポケモントレーナーとなればその権力の強さから意識改革を行うことも夢ではないと…そう信じて今もなお行動している。

シゲルはサトシからその事実を聞いて、まず最初にヒナに言わなくてもいいのかと問いかけたことがあったが、サトシは首を横に振って何も言わなかった。ヒナにはまだ旅に出る年齢ではないのだから言う必要はないと…まだ何も言わなくていいとそうシゲ

ルに答えていた。でもシゲルはそれでいいのかと疑問に思ったのだ。サトシは幼少期にかなり問題があつて人と関わろうとしない幼児だったが、今では妹が生まれ：ヒナのことをちゃんと可愛がつている。可愛がつている妹だからこそ、トレーナーとポケモンの問題について妹には話すつもりはなかったのだろう。そしてそれはイツシユ地方の旅でも発揮され、ヒナにトレーナーとポケモンの意識について知るようなことはなかった。イツシユ地方の旅で何かあれば行動し：その結果ヒナにとつて疑問に思える部分を全部、兄の暴走のせいだという考えに塗り替えてしまったのだ。トレーナーが悪いことをしていたのならサトシがその行動を叩き潰し、そして意識を変えていく：それをヒナは何度も見ていた。Nとの関わりもあつたが：それでもまだ、ポケモンを酷く扱うトレーナーが少人数だと思ひ込んでいたのだ。ヒナが現状を知らないように：いや、分からぬように：サトシが全部動いたからこそその結果だった。

イツシユ地方を旅させなければいいのではないかとシゲルは聞いたことがあつたが：サトシはイツシユ地方の旅をさせてヒナ自身の力になってくれればいいと思つてもいた：つまり、サトシがヒナのことを考え行動した結果がああなのイツシユ地方の旅なのだ。

シゲルはサトシがヒナに現状を教えない理由を分かっていた。：関わらせてしまえば、ヒナは何か自分にもできることはないかと探すはずだからだ。マサラタウンを家出

した時、リザードとピチュウを蔑み…そしてジム戦に挑むきっかけとなった出来事から…その行動力はサトシと同等なのだとか分かっていているから…。

でも、それでもヒナに何も言わないということがシゲルにはできなかつた。ポケモンとの絆を大切にしているヒナだからこそ、サトシのように妹同然に見ているシゲルだからこそ、すべてのトレーナーが優しいのだという誤解を与えたくなかつたのだ。いろんな地方で旅をしていて分かるかもしれない問題を…色違いのリザードを持つヒナだからこそ、今知ってしまえばある程度は回避できるかもしれないとそう望んでのことだつた。

ヒナから見れば、イツシユ地方を旅した時に何度も目にしていたし分かっているはずのことだつた…。ヒナはポケブを捨てたあのスワマとの一件もあつて、すべてのトレーナーは優しいなどとは思つてはいない。それでもシゲルから話を聞かなければトレーナーとポケモンの現状を…サトシの夢を知ることができなかつただろう…。

ヒナ達はシゲルから話を聞いて領いた。

「あの…シゲルさん…このたまごたちはどうなるんですか？」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「この子たちは生まれた後、ある程度成長するまでは育てるよ。その後自然に戻るよ
うにするんだ」

「たまごたちは…幸せになれるでしょうか…?」

『ガウウ…』

『ピチュウ…』

「…大丈夫だよヒナちゃん。必ず幸せになれるようにする。そう考えて作られた施設な
んだから」

「たまごたちが幸せになれる。いや幸せになる…そう言ってもらえて良かったです…
！」

『ガウウ!』

『ピチュウ!』

ヒナ達が良かったと優しい笑みでたまごたちを撫でながら言う。

たまごは撫でられたからなのか…それとも優しい人がいると感じたのか、時々ゆらゆ
らと揺れていた。それを見てピチュウが嬉しそうになってたまごに抱きつき、リザード

に乱暴に抱きついたら駄目だと叱られ、ヒナにたまごも嬉しいのが分かるんだねと言われていた。ピチューはリザードの言う言葉に頷き、慎重にたまごを抱きしめ、ヒナに向かつて笑みを浮かべる。そんなピチューの様子にリザードとヒナが互いに顔を見合わせて苦笑しながらも、ピチューの抱きしめているたまごを撫でた。

シゲルはそんなヒナたちの様子に微笑んだ。ヒナたちはトレーナーになる前に出会い、一緒にいることを望んだとても珍しい関係なのだから…。

リザードがたまごだった頃に生まれ…そしてピチューはイツシユ地方を旅していた頃に出会い、一緒に来ることを望んだ。ボールで捕まえるという通常とは違った彼女たちの関係を…シゲルは全てのトレーナーのあるべき目標として見ていた。サトシとピカチュウたちの関係もある意味珍しいと言えるだろうが…サトシ達の関係はバトル好きな性格と似た者同士が集まるという言葉で納得できる部分があったために微妙だろうと感じてはいた。…まあそれでも捨てられたポケモンたちや弱いと蔑まれたポケモンたちもサトシの手持ちにいるということや、そんなポケモンたちが強くなりたいと望むままに力を貸したことでサトシのことを知る人間にとってトレーナー達の目標となつてはいるのだが…。

シゲルは研究に没頭していて…サトシに協力できないことも多々あるけれど、それでもトレーナーの考えがヒナたちのようになればいいと…そう望んでいたのだ。

「シゲルさん。たまごたち以外にも…ポケモンに会えますか？ 私たちは、すべてを見て
いきたくって思うんです…トレーナーの問題も…ポケモンたちの気持ちもすべて」

『ガウウ！』

『ピチュウウ！』

「ああ…そうだね。一緒に見に行こうか」

ヒナ達はこの建物に集められたポケモンたちのすべてを知りたいと望んでいた。捨てられたポケモンや人間に傷ついたポケモンのことをすべて…だからこそシゲルは頷き、笑みを浮かべてヒナの望む通りにしようと思ったのだ。

（ああ、サトシには後で怒られるだろうけど…それでもいいか）

シゲルはこの建物での真実をヒナ達に教えるということサトシに言っていない。そのことを考えて…少しだけ目を細めてサトシに怒られるであろうと予測した。

でも、サトシに言ってしまうえばヒナには絶対に何も言うなと忠告するかもしれないか

らこそ、シゲルは何も言わずに行動したのだ。

自分にはできないことをやってしまう兄妹のことを信じて…。

第二百五十話～兄はシャラシティに着く～

こんにちは兄のサトシです。

コルニと約束していたシャラシティにようやくたどり着き、俺たちはまずポケモンセンターで一泊しつつもポケモンたちを回復してもらった。ポケモンたちはポケモンセンターのジョーイさんのおかげで元気良くなったみたいだったが、シャラジムに挑戦することで張り切っているらしく、今まで以上にやる気に満ち溢れていた。

もちろんコルニやルカリオと戦ったことのないルチャブルも、これから戦う相手が強敵だと俺たちの話で分かったらしく、バトルが楽しみだという表情を浮かべていた。

そんなケロマツ達をまずボールに戻してから、俺たちはシャラジムに向かって歩いて

いく。だがすぐにシヤラジムに挑めるかと思っていたのだが、それは違うようだった。

「…さて、これからどうするか」

『ピカッチュ』

「シヤラシテイから行くシヤラジムには道がなく…一定の時間帯でしか行けないというのは予想外でした…」

「また一日待つのかあー」

『デネデネ！』

「サトシ…これからどうするの？わ、私に何かできることあつたら手伝うよ？」

「…ああ、ありがとうなセレナ。でも気持ちだけ受け取っておく…俺たちのやるべきことはまずポケモンたちの技の強化をすることだからな」

『ピカッチュ』

「そんなサトシもかつこいい…でも、何かやれることあつたら遠慮しないで言つてね！」

「お、おう…分かった」

『ピカッチュ…』

「そんな目で見えるなピカチュウ」

『ピイカ…』

シャラシティのポケモンセンター近くに広場があるらしく、そこでバトルなども可能だとジョーイさんから聞いたため俺たちはまず技の強化をやらうと考えて行動することにした。

いまだにケロマツとルチャブルの仲が悪いけれど…それはなんとなく喧嘩するほど仲が良いという感じに収まってきているようだと感じていた。：例えば2対2の模擬ダブルバトルをした時、わざとケロマツとルチャブルを一緒にして戦ってもらったことがあった。ケロマツとルチャブルの仲は、最初は喧嘩しっぱなしでバトルにならなかったぐらい大変だった。その仲の酷さに俺もキレたことがあったが…それでもバトルしていくうちにケロマツとルチャブルの互いの距離感が分かって来たのか時々協力してバトルをするようになってきてくれた。

…まあそれでもたまに喧嘩するしダブルバトルとは言えない状況になっている時もあるのだが…これから気をつけて何度も挑戦していけばケロマツもルチャブルもちやんとお互いを認めてバトルも協力するようになるだろうと俺は考える。

とにかくお互いバトルで勝ちたいという思いはあるみたいだけでも、ダブルバトルでそれぞれが動いて…勝負に勝とうとして協力するのではなく争うかのように俺の指

示を聞きお互いを巻き込みながら技を放つのはどう見てもやってはいけないことだろうと思う。そしてそんなケロマツとルチャブルに対して、修行相手となったピカチュウやヒノヤコマも呆れた様子で見えていたぐらいだ。

——まあその問題についてはケロマツやルチャブルと一度話し合って決めようとして決心する。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「サトシ！久しぶりね！」

『バウウ！』

「コルニじやねえか！久しぶりだな！」

『ピイカツチュ！』

「コルニもルカリオも元気そうね！」

「ルカリオは一段と強くなっているみたいですね…これは強敵ですよ！」

「本当に強そうだねデデンネ！」

『デネデネ！』

「…あれ？ハルカはどうしたの？」

『バウウ？』

「ああ、ハルカならハウエン地方のオダマキ博士に呼び出されて一時的に帰ってるぜ」

『ピツカ』

「そうなの…久しぶりに会えるかと思つたのに残念…」

『バウウ…』

「でもまた必ず会えるわよ！ハルカもルカリオのメガシンカもつとよく見たいって何度も言つてたぐらいいんだから！」

「そっか…じゃあまた会えたときにハルカとバトルするよ！トレーナーじゃなくなつてもハルカに負けたこと何度もあつたし、ジムリーダーとしてもつと強くなりたいからね！」

『バウウウ!!』

コルニはハルカがいないことに対して残念だと言つて落ち込んでいた。それは久々に会えるかと思いきや会えなかつたことへの残念な気持ちと、バトルで再戦できないという意味での落ち込みだつたようだ。でもそれはまたハルカがカロス地方で旅をしよ

うと思った時があれば必ず会えるだろうし：ハルカ自身もメガシンカを習得しようと思っっているのだから必ずコルニ達のもとへ行くだろう。

それにコルニは最初のバトルではハルカに負けることがなかったのだが、それでもハルカがポケモンたちと反省会をして何度も技の改善をしてより強力な技を使ったバトルをするようになった。ハルカはいつも通り行動していたのだ。より強く：より勝つていくために…。

そしてその頃からコルニとルカリオは負けるようになり、コルニたちは俺だけじゃなくハルカに対しても負けたくない：勝ちたいという気持ちを持つていたようだった。

コルニは俺たちのことを迎えに来てくれたみたいだったが、シヤラジムへの道が開かれるまでの間にあるメガシンカについての話をしてくれた。

「継承者？」

『ピイカ？』

「うん。私たちの先祖は代々優秀な魔獣使い：ポケモントレーナーと出会った場合その者に対してキーストーンを渡す役目を持つていたんだ」

『バウウ…』

「魔獣使い…とは今で言うポケモントレーナーの事でしょうか？」

「うんその通りだよ！」

『バウウ！』

「キーストーンかあ…じゃあ今コルニはその継承者じゃないの？」

「私たちはまだまだ新米メガシンカ使いだからね…お爺ちゃんが許してくれないんだ」

『バウウ…』

「えつと…サトシやハルカに渡すつてこともできないの？」

『デネデネ？』

「そうなのよ！お爺ちゃんが今の継承者なんだけど、サトシやハルカに渡すのはまだ早いかどうか言つて…それにできれば私が継承者の時に渡したいなつて思つてるんだけど…駄目かな？」

『バウウ？』

「…いや駄目じゃねえよ全然。むしろキーストーンがもらえるつてこと自体に驚いたぐらいだ。それに俺も…きつとハルカもコルニの手からキーストーンを貰いたいつて考えてるから時間がかかつてても平気だよ」

『ピイカツチュウ！』

「そつか良かったわ！…他の人からキーストーン貰わないようにねサトシ！継承者になつたらすぐにサトシに渡しに行くから！もちろんハルカにも！」

『バウウ!』

「サトシが、メガシンカを使えるようになる……」

「…セレナ? どうしたの?」

『デネデネ?』

「ううん何でもない!」

コルニから聞いた話はコルニの先祖の役目の事…継承者としてキーストーンを渡す役割を持つということだった。キーストーンと対となるメガストーンは渡す役目を持つていないようなので、それは自分自身で見つけろとのことらしい。

…俺にとってこの話は急すぎて実感が湧かなかった。それでもコルニの言葉を聞いているうちにじわじわと理解していく…。俺たちはまだメガシンカのためのキーストーンを貰うことはできないだろうし…コルニが本当に俺たちにキーストーンを渡してくれるのかどうかさえ分からない。それでも…メガシンカをするための一歩を進んだような気がして、本当に良かったと思えた。でもまだこれは口約束にすぎないため、嬉しいとは思っているものあまり盛大に喜べないということも感じていた。プラターヌ博士からメガシンカのことを聞いて…キーストーンが手に入ること自体が貴重

なのだということを分かっているからこそ、あまり期待せず待つていようと考えていたのだ。まあそれでもコルニの気持ちは嬉しいし、キーストーンを貰えるならばすぐにメガストーンを探し出して修行してみたいという考えもあるのだが…。

——その後、コルニがこの継承者については他の人には他言しないでほしいと言つて俺たちと約束をしたため、シゲル達に話せなくなつたと少し残念に思う。まあシゲル達なら、本気で見つけようと考えている時は必ず行動する…つまり、自分たちでカロス地方を旅してキーストーンとメガストーンを貰えるように努力するはずだと分かっているためあまり残念だとは思つてはいない。

妹に対して…いつかはカントー地方からいろんな地方を旅するだろうと予想しているためカロス地方でも俺たちのように出会つて…そしてメガシンカができるようになる…とそう考えている。とにかく、コルニ達が迷惑になるようなことはするつもりはないため、俺たちは他言しないと言う約束を必ず守ると誓つた。

…そして話し合っているうちに時間は進み、ようやくシャラジムへの道が開かれた。海で塞がれていた所がある時間だけ通り道となつて現れるらしい。コルニとルカリオに連れられて…俺たちはシャラジムへ入つて行つた。だがもう夜になるとのことでジム戦は明日行うことに決まつたようだ。ジム戦を早くしたいのだけれど…コルニの祖

父であるコンコンブルさんが慌てず焦らずゆっくりとしてからバトルに挑めと言われ
たために、俺たちはこのシヤラジムで一泊することになった。

第二百五十一話～兄はシヤラジムに挑む～

「…ん？秘伝書？」

『ピイカツチュ？』

「そうなの！…お爺ちゃんたらシヤラジムに関する秘伝書を持っているみたいなんだけど渡してくれないのよ…」

『バウウ…』

「ふん。まだまだお前は甘い！」

「こんにちはは兄のサトシです。シヤラジムにようやくたどり着いたのですが日が暮れて、今日はバトルはせずに、シヤラジムに泊まることになりました。」

夕食の後、のんびりと温かいモーモーミルクでも飲みながら話していた時にコルニからこのシヤラジムのジムリーダーに受け継がれるという秘伝書の話をしてくれた。俺たちの近くで座りながらも話を聞いていたコルニの祖父のコンコンブルさんが少し鼻で笑いながらコルニとルカリオに向かって甘いと言った。

ジムリーダーについては旅をしてきているんな人に会って関わってきたけれど、こういう代々ジムリーダーとなるところもあれば、新しく始まるジムもある：ジムリーダーにもいろいろあるんだなと思いつながら、俺はシトロンを見た。シトロンは微妙そうな表情で俺を見てから肩をすくめていて、おそらくコルニ達の話聞いて大変そうだと思っているのだろう：少しだけ苦笑していた。

コルニ達は秘伝書を貰えないことに対して少し悔しそうだったが、それでもいつかは貰うのだと諦めてはいない。もちろん継承者についてもだ。

その様子にコンコンブルさんは何か悪巧みでも思いついたかのような表情になって：コルニ達に向かって言う。

「ウオツホン！：コルニよ、お前がそこまで言うのなら秘伝書を渡しても構わない」

「本当！お爺ちゃん!!」

『バウウ!!』

「ただし！ここにいる挑戦者、サトシとの勝負で勝つのが条件だ！！トレーナーに負けているようでは渡せるものも渡せんからな！」

「分かった…絶対に負けないんだから！！」

『バウウツ！！』

「勝手に決めやがった…」

『ピイカツチュ…』

「ま、まあコルニなら立派なジムリーダーになれるでしょうし…サトシに負けたとしても大丈夫な気がするような…」

「セレナ、それは言っではいけませんよ…いえ、勝負と言うのは最後まで分かりませんか？らどうなることやら…」

「コルニもルカリオも燃えてるね！」

『デネデネ！』

コンコンブルさんの言葉にコルニとルカリオは笑顔を浮かべて余計にやる気を出したようだった。

まあやる気を出すのは良いとは思ってはいるのだが、こういうジム戦での真剣勝負で勝ち負けに対する条件を付けられるのは何だか微妙な気がした…。今まで旅をしてきた時に俺もピカツチュウもこういう相手が条件を決めて負けられない勝負をしたという

のは何回も行った経験があるから良いのだけれども……それでも少しだけ微妙な気持ちになって苦笑してしまった。

……まあ、全力で勝負することになるのは確実だろうから文句はないけどな。

.....

そして翌日、シヤラジムにて始まったのは俺とコルニとのバトル。

3対3のポケモンバトルらしく、とりあえずかくとうタイプ専門のこのシヤラジムではひこうタイプが有効と考えてケロマツには残念ながら見学してもらったことになった。セレナたちが観戦している場所にもらい、バトルを見て学べるところがあれば学んでもらう。とにかく俺たちは全力で勝つことを決めて、ボールを握りしめた。

「オッホン……それでは、ジムリーダーコルニ対挑戦者サトシによるポケモンバトルを始め……試合開始!!」

「燃えろ!コジョー!」

『ジョツフウ!!』

「ルチャブル、きみに決めた!」

『チャブウ!!』

コルニがコジョフーをボールから出し、俺もルチャブルをボールから出した。

コルニはルカリオ以外のポケモンを持つていることはジムリーダーだと聞いていた時からなんとなくわかつてはいたが、今日の前で見るとやはりわくわくしてしまう。どんな技を出すのだろうか：一体どういう動きをしていくのだろうかと：。ちなみにルチャブルが出た時点で観戦席にいたケロマツが少しだけ不機嫌になっていて、ルチャブルはそんなケロマツをちらりと見て笑っていたりする。まあそんな仲の悪い二体だけれども、バトルすることについては真剣に取り組むから大丈夫だろうと俺とピカチュウは微笑んだ。

「行くよコジョフー!：：私たちがシャラジムに戻ってきてから修行した成果を今サトシ達に見せるのよ!!」

『コツフウ!!』

「ルチャブル、お前にとって初のジム戦になるけどいつものように頑張っていこうぜ!」
『チャブウウ!!』

「先手必勝よコジョファー！はっけい!!」

『ジョフウ!!』

『ルチャ…!!』

「え、嘘…躲さずにわざと受けた!？」

『ジョフウ!?!』

「それがルチャブルの信念だからな…ルチャブル、とびひざげり!」

『チャブウ!』

『ジョツフウウ…!!』

「コジョファー!?!?」

コジョファーのはっけいの指示を聞いて、俺はルチャブルを見る。

ルチャブルはただ俺を見てから何も言わずに頷いていたために何がしたいのかすぐに分かり、ルチャブルの好きなようにさせた。ルチャブルは最初コジョファーの技を受けて、少しダメージを食らったものの、それでも良い技だと笑顔で言いながら両手を広げてまだ戦えるというような仕草をする。

そんなルチャブルと何も指示を出さなかった俺に対してコルニとコジョファーが驚いていた。まあそれは仕方ないことだろう…コルニと一緒にいた頃はルチャブルをゲツトする前だったし、俺の基本的なバトルスタイルは主にスピード&攻撃なのだから。俺

たちと少しだけ一緒にいてバトルをし…俺のバトルスタイルを知っていることや、ルチャブルの信念や好んで行う独特のバトルスタイルなどがあるということを知らないのだから驚くのは当然だ。…でもそのせいで動揺したのか、ルチャブルのからてチョップをもろに受けてしまいコジョフーはダメージを受けて少しだけ身体をふらつかせる。コルニは冷や汗をかきながらも俺たちを見て好戦的な笑みを浮かべていた。

「さすがサトシね…本当に強い…でも私たちは絶対に負けない!!」

『ジョッフウ!!』

「そうだけコルニ！最初から諦めてちや面白くねえからな！」

『ルツチャア!』

「コジョフー、スピードスター！その後とびひざげり！」

『ジョフウウウ!』

「ケロマツのあわ&みずのはどうを真似たのか…!ルチャブル、回転しながらからてチョップで迎え撃て！」

『ルチャアア!!』

コジョフーの動きはまるでケロマツがあわで周りを見えなくしつつも後から放った

技の威力を高めるように見えた。

スピードスターでルチャブルから姿を見えなくさせつつも、まるでスピードスターに守られながらとびひざげりを放とうと動いているように見えたのだ。俺はルチャブルに向かってジャンプしてから回転してもらいからてチョップで接近したコジョフーを叩き落とす。落とされたコジョフーを見てコルニは早く指示を出さなければと慌てていたが、コジョフーは立ち上がるだけで精一杯のようだ……だからこそあの一撃を食らわせる。

「……ルチャブル、フライングプレス！」

『ルツチャアアア!!』

「コジョフー！避けて!!」

『コジョ………ジョッフウウウツツ?!?!?』

「コジョフー!!!」

「……コジョフー戦闘不能、ルチャブルの勝ち！」

「よしやったなルチャブル！」

『チャブウ！』

「やったわ！これで一勝ね！」

「ですがコルニはあのメガルカリオがいますし…まだ分かりませんよ…！」

「サトシ頑張れ！えっと、コルニも頑張れ！」

『デネデネ！』

「ユリーカ…まったく…」

「ユリーカの気持ちも分かるわ。コルニも私たちと一緒に旅してきた仲間だもの……で

も…サトシ頑張れ！」

『…ケロ！』

ゴジョフーを迎え撃ったルチャブルはまだ空中にいる。そのため空中のまま回転してもらいつつもフライングプレスの体制を整え…そしてルチャブルにとつての大技となつている改良したフライングプレスを放つた。

一勝したことでルチャブルは次に必要になつた時まで待機してもらおうと決め、俺は懐からボールを出す。でもボールから戻される前に、ルチャブルはケロマツを見て拳を

作り、自信満々な表情で勝ってやったぞと言っているかのような仕草をした。その仕草にケロマツは呆れつつもよく頑張ったなと言うかのようにケロマツ自身も拳を作つてルチャブルに向かって突き出す。それを見た俺たちは笑みを浮かべつつも次の試合をするために行動した。

「行くわよ、ゴーリキー！」

『リツキイイイ!!』

「ありがとうなルチャブル…次はヒノヤコマ、きみに決めた！」

『ヤツマアア!!』

「ではゴーリキー対ヒノヤコマ…試合開始！」

「次はこつちからだ。ヒノヤコマ、かまいたち!!」

『ヤツマアア!!』

「ゴーリキー、さっきのお返しよ！ジャンプした後にかわり!!」

『リツキイイイ!!』

『ヤマツ!?!』

「落ち着けヒノヤコマ…ずいぶんとスピードが速いゴーリキーだなコルニ！」

「ええ当たり前よ！私たちはこのシャラジムのジムリーダー！バトルに勝つため強くな

るのが当たり前なんだから！」

『リツキイイ!!』

ヒノヤコマがかまいたちで攻撃しようと思ふのだが、ゴーリキーが走ってかまいたちを躲しながらもヒノヤコマに急接近し、そしてジャンプして先程ルチャブルがゴジョフを叩き落としたようにヒノヤコマをかわりで攻撃し、地面に向かって落とす。その攻撃でヒノヤコマは少しだけ慌てていたが、俺の言葉で落ち着きを取り戻したのか俺を見て頷いてくれた。：俺はただヒノヤコマを信じて戦おう。コルニもゴーリキーを信じて戦おうとしているのだから、当然だ。

「ゴーリキー！きあいだまー！」

『リツキイイ!!』

「ヒノヤコマ、きあいだまをはがねのつばきで受け流せ！」

『ヤツマアア!!』

『リツキイイ!!?』

「ゴーリキー!!…さすがねサトシ、ゴーリキーのきあいだまを斬って躲すだなんて…！」

『リッキイ……!』

ゴーリキーが放ったきあいだまをはがねのつばさで……まるでジユカインのリーフブレードのように斬って躲したことにコルニ達は驚いているらしい。観戦席にいるシトロンたちはただ納得し、勉強になるという表情で見つめていた。コンコンブルさんは何も言わずに俺たちのバトルを見て、ただ無表情で見守っている。

「ゴーリキー、ローキック!」

『リッキイイ!!』

「ヒノヤコマ、ニトロチャージ!!」

『ヤツマアアア!!!』

『リッキイイ……!!?』

『ゴーリキー……!!』

「……ゴーリキー戦闘不能、ヒノヤコマの勝ち!」

「ありがとうなヒノヤコマ」

『ヤツマア!』

「ゴリキーが戦闘不能になり、ヒノヤコマは満足そうに俺の差し出した腕の上に乗って笑顔で頷いていた。ひとまずやるべきことは終えたというような表情だ。そして次の試合で最後になる…。コルニはゴリキーをボールに戻してから、真剣な表情で俺たちを見て、笑みを浮かべながら言う。

「サトシにはいろんな意味で勉強になったことがたくさんあった…まだまだ力の差も感じるし、正直叶わない部分もたくさんある…でも！それでも私たちは負けるつもりはない！！いくよルカリオ！！」

『バウウウウ！！』

「ありがとうなヒノヤコマ…コルニの言いたいことは分かった。でも俺だって負ける気はさらさらない！行くぞピカチュウ、きみに決めた！！」

『ピツカアア！！』

「いくよルカリオ…メガシンカ！！」

『バウウウオオオオオツツ！！！！』

「ああ、強くなったなルカリオ…ピカチュウ、負けられないな！」

『ピイカツチュウ！』

ルカリオはとても強くなった。メガシンカをして、最初に会った頃とは比べ物になら

ないほど波動も…そして見るだけで分かる強者としての絆の強さが見えた。ピカチュウは満足そうに笑みを浮かべて…そして好戦的な目でルカリオを見る。俺もピカチュウと同じようにルカリオと…そしてコルニを見た。

「ルカリオ対ピカチュウ…試合開始！」

「いくよルカリオ！最大級はどうだん!!」

『バウウウウオオオオ!!』

「こつちも行くぞ！エレキボール!!」

『ピッカア!!!』

ルカリオの限界まで大きくしたはどうだんとピカチュウの放ったエレキボールが衝突し、爆発する。その力はとて強く、強風と衝撃…そして黒煙をもたらすほどだった。それでも俺たちは止まらない。最初の一撃はまだ挨拶のようなものだから…コルニ達も俺達も笑顔でお互いを見た。

「ピカチュウ、放電体勢！」

『ピイカツチュウ!』

「気をつけてルカリオ！つるぎのまいをしながら最速でボーンラッシュ!!」

『バウウウ!!』

「避けるピカチュウ、そのまま10まんボルト!」

『ピツカアア!!』

「こつちも避けてから一度下がる!」

『バウウウ!!』

「はは…さすがはコルニだな!」

『ピイカツチュウ!』

「でしよう? 私達だって負けるつもりはないのよ! いつもサトシとのバトルで…何かしら学んでいるんだから!」

『バウウウ!!』

走りながらつるぎのまいをしてきたルカリオを見て、バトルスタイルが少し変わったなど思いながらもピカチュウに放電体勢によってルカリオの姿が見えなくても躲すことはできた。そしてピカチュウに向かってポーンラツシユを放とうとして近くに來たルカリオに向かって10まんボルトを放つ…でもそれはルカリオが躲してコルニの近くまで下がったために不発に終わった。

その予想以上の速さと強さにピカチュウは楽しそうに尻尾を振る。その動きを見て同じ気持ちなんだと俺は思わず笑ってしまった。でもコルニ達は俺の気持ちがあつていいのか、ただ笑みを浮かべてピカチュウと俺を睨みつけていた。

「ルカリオ、きんぞくおん！」

『パウウウ!!』

「おっとそうはいくか!…ピカチュウ、ルカリオに向かってボルテッカー！」

『ピイカツチュウ!!』

「ルカリオ!きんぞくおん解除して避けて!グロウパンチ&はどうだん!!」

『パウウウオオオ!!』

「ピカチュウ、ボルテッカーのままアイアンテール!!」

『ピツカツチュウウ!!』

きんぞくおんのままだといけないと判断して、ボルテッカーで直接つっこみながらもルカリオを攻撃することにする。コルニはそのままきんぞくおんをもともせずにあつてくるピカチュウを見てルカリオにグロウパンチ&はどうだんを指示した。そのため俺はボルテッカー状態のままアイアンテールを指示して…ルカリオとピカチュウの技同士が直撃する。

先程以上の爆風のなか：ようやく見えてきたのはメガシンカが解除されたルカリオの姿だった。

「…ルカリオ戦闘不能、ピカチュウの勝ち！よって勝者、サトシ！」

「やったなピカチュウ！」

『ピイカツチュウ！』

「ありがとうルカリオ：頑張ったね」

『バウウ…』

「コルニ…良いバトルだったぞ」

「お爺ちゃん…それは違うよ。サトシ達が凄かっただけ…私たちも、もっともつと強くならなくちゃ…！」

『バウウ…!!』

「そうか…だがその前に、早くサトシに渡してやれ」

「うん分かってる…サトシ！」

『バウウ…』

「コルニ…」

「はいこれ。シヤラジムの勝利の証：ファイトバッチだよ……おめでとうサトシ！」
『バウウ!!』

「ああ、ありがとうコルニにルカリオ……!」

『ピイカッチユウ!』

コルニの手によつて貰つたファイトバッチをバッチケースに入れ、俺たちは先ほどのバトルを思い返す……まだまだメガシンカによつて楽しめるバトルができることに、俺たちはこれからが楽しみに思えた。

——だがこの後、時間の経過によつて道ができるまで待つことになり、コンコンブルさんからコルニに向かつて秘伝書を渡していろいろと微妙な状況になってしまったのは仕方がないだろう。

でも、それでもコルニとのバトルはとても楽しめたと俺たちは感じたのだった。

第二百五十二話～兄は来訪者に苛つく～

こんにちは兄のサトシです。コルニとのジム戦を終えてからいろいろと事件は起きましたがまだまだ元気です。

そして今日着いた町でポケモンパフォーマーコンテストが行われると話を聞いてすぐに行くことになった。前にハルカがちょうどこの町にやって来ると連絡もあつたことだし、コンテストがどんな感じになるのか楽しみにしながらハルカとの約束の場所へ向かっていたのだが…。

「…ハルカはともかく、何でお前がいるんだよカスミ!!!」

「あらいいじゃない。私が来ても別に迷惑になるわけじゃないんだから」

「よくねえよ馬鹿か!!」

「誰が馬鹿よお子ちやまの癖に!!!」

「お子ちやまじやねえよ阿呆!!」

「阿呆も馬鹿も言った方が阿呆で馬鹿なのよこの馬鹿!!!」

「んなわけあるか!!チツ、ポケモンバトル!!」

「…ええ、そうね…久しぶりにやりましょうか?」

「……………」

「うわあ久しぶりに見たかも…前に電話で話していた時は普通だったのになあ…」

「えっと、再会できてうれしいのですが…ハルカ、彼女は一体誰でしょうか?」

「ああ、彼女はカスミよ!サトシが最初に旅していた頃の仲間だったの。よく喧嘩して

るけど…それでも仲はいいかも?」

「……………」

「まさに喧嘩するほど仲が良いだね!ケロマツとルチャブルみたい!」

『デネデネ!!』

「へ!?!ルチャブルって何?!!」

「ルチャブルはね!サトシの新しい仲間なの!!」

『デネデネ！』

「へえそうなんだ！早く会ってみたいかも!!」

「それは良いんですけど…セレナ、無言でサトシ達を見るのをやめてください…!」

「……………」

セレナがこちらをじつと見て…いや、主にカスミを見ている。

まあそれはハルカとカロス地方で出会った時のような意味で見ているのだと気づいたためそのまま無視してポケモンバトルでもしようかとカスミに向かって言った。カスミはセレナたちに気づいておらず、ボールを取り出しながらも俺の言葉に了承した。相変わらず喧嘩っ早いなどカスミと旅していた頃を懐かしく感じながらも、俺も同じようにボールを取りだす。

「行くわよマイステディ!」

『サニ!』

「サニゴな…行くぞルチャブル!きみに決めた!」

『チャブウ!』

「久々のサトシとのバトルだけど…あんたちよつと大人しくなった?いつもの暴走っぶ

りがなくなつてゐるわよ!!」

『サニイ!』

「うるせえよ!俺だつて暴走ばつかなわけねえだろ!!…それにお前だつて初つ端から暴走すんなよハナダジムはどうしたんだ!」

『ルチャア…?』

「ハナダジムなら姉さんたちが久々にバトルしたいとかでしばらくの間変わつてゐるのよ!それにしても本当に慣れないわね…あんたの暴走ばつか見てたから、私から見ると大人しめのサトシつてらしくないわよ!!」

『サニサニ!』

「うっせえ!…じゃあ、本気で行くか!」

『チャブウ…!』

カント―地方の最初の旅で出会つたカスミは少し子供っぽくて我儘で…そして甘えたがりの女の子だった。

うまくいかないことには簡単に腹を立てて、三人の姉に対してコンプレックスが強かつたのだが…俺がいろいろと関わつたせいが強気で勝負…そして楽しいことには首を突つ込み、いわゆる姉御肌の少女に変わつていたみたいだった。

まあ妹を紹介したときは普通だったし、妹の方も特に驚くような表情を見せず、「原作」に一番近いのだと思っていたのだが…それにしてもトラブルメーカーな部分が多い。

まあ誤解して突っ走る行動は…少しだけなくなっただけだからマシかと考えて、ボールからルチャブルを出してバトルを始めた。

「ルチャブル、からてチョップ！」

『ルチャアア!!』

「サニーゴ回転して躲して！そのままバブルこうせん！」

『サアニイ!!』

「させるか！ルチャブル飛び上がってサニーゴの上空へ飛べ！とびひざげり!!」

『チャブウウ!!』

『サニツ!!?』

俺を煽った発言をしまくったカスミはどうやら思いつきりバトルを楽しみたいようだった。

そういえばジム戦ではトレーナーのことを考慮して手加減をしてバトルをしなけれ

ばいけないということを思い出す。ジムリーダーが本気で相手してしまったら挑戦者の未来を潰す恐れがあるからだ。だから、カスミも同じように手加減していたのだろう。そしておそらくジムリーダーとして手加減しまくってるからこそフラストレーションが溜まっているのだろうと分かった。

つまり、カスミは思いつきりバトルするために俺に向かって本気を出せと言ったのだ。久しぶりに俺と出会ったことでジムリーダーとしてではなくトレーナーとしてバトルを思いつきり楽しめると考えて俺に向かって挑発して言ったのだろう。……。

ピカチュウがため息をついてハルカ達の近くへ行つたため、おそらくバトルでの技に当たらないように観戦しつつも守れるように行動したみたいだ。……さすがは相棒よく分かっているじゃねえか。

ハルカもいるからとりあえずセレナ達を巻き込む心配はないと考えて楽しむことにした。……紹介は後でも大丈夫だよな？

からてチョップを避けたサニーゴはすぐにバブルこうせんを放つ。バブルこうせんはケロマツのみずのはどうぐらいの大きさがあつて破壊力は木を抉る程度なのでそれを躲してもらいつつ上空からとびひざげりを放った。

———いつものルチャブルだったら相手の攻撃にわざと受けてから行動をするの

だがおそろく気づいたのだろう…相手のポケモンの強さを…。通常のポケモンとは違う一撃の重さを…。一撃に当たってしまったら負ける可能性が高いと思ったのかもしれない。だからこそ俺の指示をちゃんと聞いて動いていた。

「サニーゴ！即席じこさいせいよ！」

『サニゴオ！』

「長期戦にはさせるか！ルチャブル巻き込み型フライングプレス!!」

『チャブウウ!!』

「あらこつちだつて長期戦にする気はないわよ!!サニーゴ、包囲網ミラーコート&バブルこうせん!!」

『サニゴオオ!!』

「うわあ凄いな！強そう！」

『デネデネ!!』

「カスミも張り切つてバトルしてるわね…なんだか羨ましいかも…」

「いやハルカ…一緒に旅してた頃に散々サトシ達とバトルしてましたよね？あとセレナ！今サトシ達に近づいては駄目ですよ!!」

「……サトシ」

『ピイカツチュウ…』

.....

——その後、何度か大技を繰り返してぶつかりあった結果、俺が勝ったようだった。サニーゴのレベルだとルチャブルは負ける可能性もあったのだが、そこは気合いと技の調整…そして負けないという根性でなんとかなった。

カスミは負けてしまって悔しそうだったが、それでも少しは欲求不満が解消できたらしく笑みを浮かべていて、ポケモンをボールに戻してからセレナたちへ近づいた。

「あああああの…こんにちは初めまして！私セレナって言います！サトシとは一体どんな関係ですか!!！」

「あら初めまして！私はカスミよ！サトシとはただの旅仲間な関係…かしら？」
「本当に!?!恋愛とかは含んでいません!?!」

「恋愛!?!サトシと!?!有り得ないわよ私はサトシよりもっと包容力があって女の子のこと分かってる人が好みなんだから…!！」

「おい」

『ピイカ…』

「本当!? 恋愛感情もない!? …良かったあ」

「セレナちゃんってサトシの事好きなの? なら応援するわ! あのお子ちゃまにもついに春が来たって感じね!」

「本当ですかカスミさん!? ありがとうございます!!」

「呼び捨てで構わないわセレナちゃん! それに敬語もいらない!」

「分かった! こっちも呼び捨てで構わないからね、カスミ!」

「はあ…今回はセレナは暴走してませんね…」

「…まあそれでも物凄く楽しそうだな…カスミもセレナも」

「良いじゃない。その方がサトシとセレナの仲ももつと急接近する…かも?」

「だからそういうのいらねえんだよ!!」

『ピカピ…』

「サトシ…」

「ピカチュウもシトロロンもその表情止めろ!!」

「わーい私カスミさんと話してくるね!」

『デネデネ!!』

セレナはカスミに向かって一気に近づいて話していたが：：どうやら問題は無いと分かって安堵していたみたいだった。そしてシトロンたちはいつものように反応して：：ちよつと面倒だと考えてため息をついた。カスミがこっちに来たということは一日で帰ることはないだろうと分かっているからだ。

「そっか、ええお前何でここに来たんだ？」

『ピカ？』

「前に電話で話したでしょ？ポケモンパフォーマーを見たいって！それでハルカと偶然会ってカロスス地方に行くみたいだったから同行したのよ！」

「お前……」

『ピカピカ……』

「とりあえず、これからよろしく！」

「ハア……分かった。でも何かあればすぐに帰れよ？」

『ピイカツチュ！』

「分かってるわよ！」

.....

その後、カロス地方で出会ったサナと再会し、俺たちのほかに初めて会ったであろうハルカとカスミを紹介してからポケモンパフォーマーコンテストを見に行く。

どうやらこのコンテストではカロスクイーンのエルが出るらしく見に行こうということになった。席はサナがチケットを予約し、カスミたちもそのチケットをゲットしていたらしく…大会では自由席なためコンテストを皆で見ることができた。カスミたちはどうやってこの大会のチケットを予約したのだろうかと疑問に思ったが…まあカスミならできると考えておくことにする。

そして始まったコンテスト…いや、トライポカロンは様々なポケモンがパフォーマンスをする。そして最初はエルとテールナーのパフォーマンスからだ。

「素敵かも！あの演技…それにあの技！エルさんとバトルしてみたい！」

「ハルカは何時もそれね！でも分かるわ！本当に綺麗…！」

「ああそうだな…テールナーの炎が会場に光り輝いてまるで星空みたいだ！」

『ピイカツチュウ！』

「エルさん…お兄ちゃんのお嫁さんになってくれないかな…！」

『ダネダネ!』

「ちよつユリーカそれは止めろって言ってるだろ!」

「エルさんのパフォーマンス…!」

「本当に綺麗よねセレナ! エルさんのテールナーも…エルさんも!!」

『ダネダネ!』

テールナーのだいもんじで綺麗に終わらせたそれはまさしく炎のイリユージュョンのようだった。みんなもこのパフォーマンスには感動し…そしてハルカはコーディネーターとしてのやる気をもせたようだった。

できればエルさんとバトルして勝つてみたいと…同じほのおタイプのバシャーモを相棒としているからこそその反応だろう。

そして次に始まったトライポカトンではポケモンパフォーマーがポケモンを魅せて優勝を争うイベントらしい。その様子を見てサナが時々説明し、ハルカとセレナがそれを真剣に見ていた。ハルカのこととは分かるが…セレナは何だか楽しそうに…そしてとても真剣に見えてどうしたのだろうかと首を傾けて疑問に思うが…まあ大丈夫かとコンテストを見る。

——だがコンテストは途中で中断された。ヤンチャムというポケモンがパフォー

マーの邪魔をしたからだ。

コンテストが中断されたことに皆が残念そうだったが…それでもエルさんのパフォーマンスが見れたことで満足はしていた。サナはこれから大会に向けて練習するため別れることになったのだが…それでもエルさんのパフォーマンスから何かが閃いたように、楽しそうに笑みを浮かべて俺たちと別れ、旅を再開していった。

『リイマア!』

「あれ…ハリマロン、それってもしかしてエルさんのテールナーの真似?」

『デネデネ?』

「シトロンのハリマロンって随分と個性的ね」

「お前のコダックと同じ感じかもな」

『ピイカッチユウ…』

「ああ、言えてるわ…」

「コダックって?」

「確かみずタイプのパokemonですよ?」

「ええ、そうよ。詳しいのねシトロン」

「いえ…サトシにいろいろと教わっていますから」

「ねえねえ！カスミのコダックってどんな感じのポケモンなの？」

『デネデネ？』

「愛すべき馬鹿よ」

「あ、愛すべき…馬鹿？」

「ああ確かにそう言えるかも？」

「えつと…どういう意味でしょうか？」

「…まあ、いつか会えるからその時にな」

『ピイカツチュ…』

「ええそうね。サトシの言うとおり…後で会わせてあげるからね？」

「はーい！」

『デネデネ！』

「その時が楽しみね…！」

『り、リイマ…!?!』

「ハリマロン!?!大丈夫かい？」

『マアロ…』

『ヤンチャア!!』

ハリマロンが木の棒を持つてエルさんとテールナーの真似をしていたのだが、どこから飛んできた木の棒に頭を直撃して痛そうにしていた。ハリマロンに向かつて飛んできた木の棒の方向を見ると会場に乱入してきたヤンチャムがいて…そしてハリマロンを挑発して追いかけてつこを始めてしまった。

「またか…」

『ピイカツチュウ…』

.....

「皆分かれて探そう！その方が効率が良い！俺たちはこつちを探す！」

『ピイカツチュウ！』

「分かりました…では僕とユリーカはこつちを！」

「皆気をつけてね！」

『デネデネ！』

「じゃあ私はこっち。ハルカはあのショッピングモールを探してきて！セレナはあっちをお願い！またここに集合しましょう！」

「分かった！」

「ええ、ハリマロン見つけたら連絡するわ！」

現在、サトシ達はヤンチャムを追いかけて行ったハリマロンを探している途中だ。ハリマロンが町の中でどこかへ走って行ってしまい、分かれ道の多い町の中でサトシ達はそれぞれ探すことになった。

ヤンチャムの挑発にのったことに対してハリマロンの行動を予想しておくべきだったとシトロロンが後悔していたが、それはサトシ達によってフォローされたり励まされたりですぐに反省を止め、ハリマロンと合流できた時に説教すればいいと言われて気合いを出したようだ。

一方でセレナは分かれ道の多い路地裏へ進んでいった。ハリマロンがいないことに対しての心配をしながらも……走りながらも探し続ける。

「ハリマロン！何処にいるの!?!」

「っ!？」

「あ、ごめんなさい!」

「……いいや、大丈夫」

「本当にすいません!……ハリマロン!何処!？」

人につつかってしまったこともあつたけれど……それでもセレナは探し続けた。自分のポケモンじゃなくてもハリマロンは大事な仲間のポケモンなのだからと……。サトシのことで関わらなければセレナは普通の女の子だからこそ、シトロンの気持ちを考えて必死に探していたのだ。

必死だったからこそ、ぶつかってしまった相手の顔を直接見ることができずにすぐに謝り走って行つた……。

そしてその後……町にはいないと分かり、森にまで走って行つたサトシたちはまた手分けして探す。

そしてセレナはというとヤンチャムとすぐに再会してシトロンの眼鏡とハルカのパンダナを返してもらおうとしたり、ヤンチャムがその眼鏡やパンダナで着飾って楽しん

でいたりそんなヤンチャムを見てポケモンパフォーマーのことを思い出し、自由にポケモンと一緒に楽しんでパフォーマンズをするエルのようになりたいと夢を持ったことと…ヤンチャムを手持ちに加えたいと思ったのは言うまでもない。

——ちなみにその後、ヤンチャムが派手に行動していたせいでハルカのバンドナが破れ…新しいバンドナに付け替えて、気分転換にとリボンのような形にしたのも仕方ないことだと言えるだろう…。

第二百五十三話～兄は【ジムリーダー】を紹介する～

こんにちは兄のサトシです。せっかくだからハルカの新しいバンダナに良く似合う服に着替えてもらおうとセレナたちが言ったことよって、トライポカロンが開かれた町にもう一度戻ってきました。来た道を引き返したためすでに夕暮れとなり、服屋などのお店が開いておらず、ポケモンセンターに一泊する羽目になってしまったが仕方ないだろう。それにポケモンセンターでカスミのポケモンたちを見せてもらったり、セレナの手持ちとなったヤンチャムに俺たちの仲間を紹介したりと十分必要な時間を過ごせたのだから不満などはない。まあ、バトルできなかつたことについて俺の手持ちであるピカチュウたちは不満そうだったが、その気持ちに気づいた俺はすぐにカスミやハルカ

：そしてシトロンとバトルをする。何戦も修行と言う名のバトルをしたことによってその不満は解消したようだった。

その後、セレナも新しい仲間のヤンチャムと一緒になってバトルしたいと言ってきたため、かつてのアイリスのキバゴのように少々手加減をしながらも戦ったりした。

——そして翌日、服屋に行き、セレナ達がハルカを着せ替え人形のように様々な服を試着してはまた変え…：そしてまた試着するを繰り返した。女性陣が服屋に入り浸っているため、待ちぼうけとなった俺とシトロンで近くのバトルフィールドに行き、ダブルバトルをして時間つぶしをする。

バトルを何戦か終えた後、ハルカ達とようやく合流することができた。新しい服に着替え終わった結果、ハルカの服装にあまり違いはないと思ったが、よく見れば短パンとタンクトップに変わっていた。リボンの色も緑から赤に変わって、まるで最初に出会った時のようだと思つた。まあそれを言うとかスミを筆頭とした女性陣に何かしら文句を言われる可能性があつたため口に出して言うつもりはないが…。

「とりあえず、そろそろ行くこうぜ？ 次のジム戦に向けて」

『ピイカツチュ！』

「ええそうねサトシ！私はトライポカロンに向けて！」

「トライポカロン…私もバシヤーマと一緒に出てみたいかも！」

「私もカロス地方に来た記念に大会出場してみようかしら…？」

「セレナ達が出場するトライポカロン！みんなライバルになるってことだね！」

『デネデネ！』

「…それでは、行きましょうか！」

町を出るために歩き出した俺たちは、周りの景色を見ながらも進み続ける。トライポカロンが終わった町はまるで祭りが終わったかのように少しだけ静かで…そしていつも通りの日常のように人々やポケモンたちが往来していた。旅人がいて、ポケモンバトルをしていて…誰もが楽しそうだと思えた。

「…また来ような、ピカチュウ」

『ピイカツチュ』

旅で歩いた町にずっといることはできないけれど、またいつか来れたらいいとそう願う。俺の言葉を聞いたピカチュウは笑顔で頷き、そして俺の手持ちであるケロマツ達も

ボールの中でカタカタと揺れて肯定していた。

そして森の中を歩きながらも、次の町へ目指していく。

「次の町は…ヒヨクジムがある町よね？」

「ああ。こっから近いか？」

『ピイカ？』

「ちよつと微妙かなあ…あ、でもヒヨクジムの前に大きな町が1つあるわ！」

「どれどれ…でんきタイプが多く住まう町？」

「でんきタイプ…っ！その町なら知ってます！」

「お兄ちゃんが一度住んでたところだ!!」

『デネデネ…？』

「へえそうなのか…なら次の町の案内は頼むぜシトロン」

『ピイカツチュ！』

「はい！おまかせください！」

シトロンが自信満々で言う言葉に俺たちは微笑みながらも頷いた。そして次に行く

目的地を決めて歩いているのだが…カスミが微妙そうな表情でいた。そんなカスミに気づいたセレナが何かあったのかと声をかける。

「カスミ?どうかしたの?」

「ええちよつと…私は水タイプ専門だから、でんきタイプが多く住む町はどんな感じなのかなって思っただけよ」

「水タイプ専門…ですか?もしかしてポケモンブリーダーか何かをやつて…」

「いや、カスミはカントー地方のハナダシティのジムリーダーなんだ」

「ジムリーダー!!?」

「お兄ちゃんと同じジムリーダーなの!」

『デネデネ!』

「あら?言つてなかったかしら?」

「言つてないですよ!!…あの、お聞きしたいことが…!」

シトロンがカスミに詰め寄り、どんなジムで、ジムリーダーとしてどんな戦い方をするのかを熱心に聞こうとしていた。それはシトロン自身が成長したいという考えで動いているのだろう…。カスミは熱くなってきているシトロンに苦笑しながらも話し始

めていた。もちろん次の町へ向かいながらも。

そして俺とハルカはセレナとユリーカからカスミについて質問されていたりする。

「カスミがシトロロンと同じジムリーダーだったなんて…」

「驚きだよね！」

『デネデネ！』

「…というか、サトシの周りにはジムリーダーと関わりある仲間が多くいるかも？」

「多くって…タケシにデントぐらいだろ？あとお前はジムリーダーの娘って自覚を少しぐらいはもつとけ」

『ピイカツチュ』

「むうそれは分かっているけど…でもポケモンコーディネーターとしての自覚だけで十分かも！大丈夫よサトシ！私はちゃんと考えて行動してるもの…それにジムリーダーならマサトが目指すって言うってたし！」

「へえそりゃあ楽しみだな…マサトがジムリーダーになったら行ってみるか」

『ピイカ！』

「ええ！マサトもきつと大喜びよ！」

ハルカは旅をしている時からジムリーダーの娘と言われるのが少し嫌なのだ気づいていた。コンプレックスか何かを感じているのだろうか…そう思っている。

でもそれでも最近のハルカの行動はまるでどつかにいたるバトル狂のようになってきているため、ジムリーダーの娘として少しは抑えろという意味で言った。ジムリーダーは相手のことを考え、力量を見ることが挑戦者を見定めるからだ。それは、バトルをして相手を負かすために叩き潰すということが仕事ではないということと同じ意味になる。

…だがハルカは俺から学び、そして圧倒的に強くなったというのに興味があればバトルをして勝つ。もちろん叩き潰すとまではいかなないし、強者に興味があるからこそ最悪の事態は防いでいるが、そろそろ自分の力を理解した方が良く俺は思えたのだ。

圧倒的な強さによって相手のプライドを叩き折り、そしてトレーナーとして再起不能にすることが可能なほど、ハルカは強くなったのだから…。だからこそ、ジムリーダーの娘として、自身の力量を見定めろと言う意味で言った。もちろん俺自身も自分の力を理解して、行動していかなければならないとは思っているが…。

ハルカは俺の言葉を正しく理解したのだろう。だからこそ嫌そうな顔をしても言ったのだ。バトルしたいという気持ちはコーディネーターとしての行動であり、考えて行動しているという言葉を信じる。

俺とハルカが旅仲間について話し合っていると、セレナとユリーカがこちらに近づいて少しだけ驚いたような表情で言った。

「ハルカもシトロンと同じでジムリーダー…の関係なの!？」

「私と同じ感じだね!ジムリーダーの娘とジムリーダーの妹!!」

『デネデネ!』

「ええそうよ!私のパパはジムリーダーなの。でも…私、最初はバトルが苦手でジムに挑んだりするつもりはなかったし、トレーナーとして旅にでるつもりもなかった。…ジムリーダーの父親がいるからって鼻肩されたくはなかったの。それに、ジムリーダーの娘ならバトルぐらいできるだろうって周りに思われたくもなかった…でも今は違うわ!ちゃんとポケモンコーディネーターとして活躍していきたくって思ってるつもり!バトルも好きになったし、ジムに挑戦しろって言われたとしても喜んで行えるぐらいには成長したかも!」

「それはコーディネーターとしてどうなんだ…」

『ピイカ…』

「そうなんだ…ジムリーダーの家族もいろいろと事情があるのね…」

「私はまだトレーナーじゃないけど、でもサトシ達みたいに立派なポケモントレーナー

になる！もちろんデデンネと一緒に！！」

『デネデネ！！』

ハルカは最初は何もできずにいた新米トレーナーだった。でも今は軽く戦闘狂になつてきているぐらい強く…そして逞しく成長した。ジムリーダーの家族として鼻負されることなく、ハルカ自身を見てもらえるようになった。そのことをハルカは誇らしく思っているのだろう。もちろんカスミも同じようにハナダジムのジムリーダーとして頑張っている。

シトロンはまだまだ成長途中であり、自信がないときがあるけれど、でもいつかはカスミやハルカのように強く逞しく育つだろうと思つた。

まあそれでも、ハルカ達のように「やりすぎ」にはならないように注意していこうとは思っているけれども…。

.....

「ああ?!?忘れてた!!」

「っ…何だよカスミ！いきなり大声で叫ぶな！」

『ピイカツチュウ!』

ようやく着いた町で、シトロンの案内のもと歩き出そうとしていた俺達を突然引き留めるような声で叫んだカスミの声に出鼻をくじかれる。ようやくたどり着いた町を見ていこうと思ったのに…カスミに一体何があったのだろうかとセレナたちも困惑している。

カスミは一言だけ謝り、すぐにポケモンセンターの通信施設に行きたいと言ってきた。

「サトシ達のいる場所をオーキド博士に聞いたのよ。そしたら町まで行けるチケットや地図を貰って…だからそのお礼と無事に合流できたことを伝えなくちゃならないと思っただのよ！」

「お前…」

『ピイカ…』

「なら早く連絡しましょう！」

「ヒナちゃんもいるかしら…」

「え!? ヒナちゃんに会えるかもしれないの!?!」

『デネデネ!!?!』

「ユリーカ、ヒナちゃんがいつもオーキド研究所にいたとは限らないよ…」

「でもオーキド研究所に連絡すればもしかしたらもしかするかも！」

俺たちはポケモンセンターに行き、いつも通り通信を始めて画面前で待つ。

「オーキド博士…?」

『ピイカツチュ?』

「なんだか忙しそう…かも?」

「どうかしたのかしら…」

「っ
———
」

いつも通り、ポケモン達や博士たちが元気かどうかの話をするために…現状の報告とカスミの用事を済ませるために。

「え…？」

でも、それは間違いだったのかもしれない。

「……………ヒナが行方不明!？」

—————
全ては後の祭りだった。

第二百五十四話く妹は…く

気がつけば、ヒナはそこにいた。

だが気を抜いていたわけではない。シゲルと一緒にいるからと周りの注意をすることを忘れなかったわけではない。

ヒナは色違いのリザードを相棒として過ごしている時点で何かしらの問題が起きることが多くあったために警戒を怠ることを止めなかった。

修行していくことでヒナたちは強くなった。色違いを欲する人間の薄暗い欲望にすぐ気づくことができた。

だがあの時、シゲルが誰かに呼び出され、ヒナたちは待っていた。

そして周りにたくさん眠っている卵たちとリザード達と一緒にいた。すぐに帰ってくると思われて待っていたら、ふと遠くの方で黄金色の何かがいた。

黄金色の何かが光り輝き——そしていつの間にか、ここにいた。

「っ……リザード……ピチュ……ウ」

ヒナは傷ついていた。いつの間にかいたこの場所で、後にやって来たヒナに良く似た少女のせいだ…。

.....

———これは、ヒナ達がまだシゲルが外に出てからしばらく経った時の事。

『ガウウ…？』

『ピチュウ…?』

「ん? どうしたのリザードにピチュウ?」

リザードとピチュウがたまごたちを撫でたり温めたりするのを止めてある場所を見つめていた。その様子を見たヒナも一緒になって見つめる。

そこにいたのは一体のユンゲラーだった。

「ユンゲラー?…もしかしてこの建物にいるポケモン…かな?」

『ガウウ?』

『ピチュウ…ピツチュウ!』

『ガウウ!』

「ピチュウ、走ったら駄目だよ!」

『ピチュウ…ピイツチュウ…』

『ガウウ』

建物にいるポケモンと言うことはもしかしたら保護されたポケモンかもしれないとヒナたちは考えた。だがピチューが走ってからユンゲラーに突撃しようとしたのをリザードが引き留める。そしてヒナがピチューにいきなり走ったら駄目だと言うことを注意し、ユンゲラーがいるであろう場所を見た。

だが、そこには何もいない…いや、目の前にユンゲラーが立っていた。

『ユウウウン——』

目の前が光りだし、何か動くような違和感が起きる。とつきに近くにいたりザードとピチューを抱きしめようとしたのだが、気づくのが遅すぎた。

——気がつけば、ヒナは誰もいない部屋にいた。

「ヒナは…?」

周りを見ても何も無い。いや、唯一あるとすれば小さな明かりぐらいだろう。それ以外だと窓も、家具も…ポケモンたちもない部屋…ヒナにとって見覚えのない部屋に一人立っていた。

あのたまごがたくさんあった部屋から一瞬でこの灰色の壁紙に覆われた部屋に来たことを考え、ユンゲラーのあの光りはレポートか何かの技だろうとヒナは判断する。

「っ…リザード、ピチュー!？」

あの時に一緒にいたはずのリザードとピチューがいないことにヒナは慌てる。部屋から出られそうな扉から脱出しようと必死に叩き、あるいは身体ごとぶつかってみたが一向に開く気配はない。

このままではいけないと、ヒナは何度も何度も扉を叩いた。

叩いて叩いて、そしてようやく開いた…と思つたら扉の先にある少女が立っていた。

少女の姿は艶やかそうな黒髪を腰まで伸ばし、そして真っ白なワンピースを着ていた。顔立ちがまるで10歳まで成長したヒナ自身のようだ。ヒナと関わりのある人間がここにいたならばそう感じてしまうだろうと思えるぐらい似ていた。まるで姉妹のような姿をしたヒナと少女は向き合う。

少女が扉を開いて部屋の中に入ってきたために、ヒナは警戒し後ろに一步下がる。そして少女はにつこりと笑みを浮かべて口を開いた。

「初めましてと言うべきかしら？」

「っあなたは誰!?!…リザードとピチューは何処!?!」

「初対面なのに失礼ね…まあ仕方がないか」

少女は笑みを消し、無表情になりながら言う。その豹変にヒナは驚き、また一步後ろへ下がった。だが一步下がることによって少女も前へ進み——距離が縮まってしまう。

拳一つ分の距離で話し合うその光景は異様だと言えるだろう。ヒナは逃げようと動くが、それを少女が阻むため行動に移せない。少女の後ろに開いている扉があつて、そこから逃げられるというのに、少女のせいで逃げられないでいた。

せめてヒナの身長がもう少し大きければ……せめてヒナの年齢が少女と同じだったならば、何かが変わっていたかもしれない。だからこそ、現状を変えることは難しかった。

「さあ、楽しみましょう？ オリジナル……いいえ、ニセモノ」

「オリジナル……ニセモノ……」

「あなたには関係のないことよ」

ヒナが無意識に口に出して言った疑問を遮るかのように少女がヒナの頬を強く叩く。叩かれた衝撃によってヒナは倒れ、赤く染まった頬を手で押さえる。

その姿を見た少女は機嫌が良くなったのか…ヒナによく似た見た目と表情が、また笑顔に変わる。

「私…私ね、あなたでいっぱい遊びたいって思ってたの！人間ってどこまでやったら壊れないのか、あなたで試したいって生まれた時からずっとずっとずっとずっとそう考えてた！たとえば…ポケモンの技って人間にどこまで通用すると思う？」

「何をっ…」

「全部終わったら、リザードたちに会わせてあげるわ」

そこから先は、ヒナは何も覚えていない。ただただリザードとピチュウのことを考えていたということだけだ。ヒナは覚えてはいないが、あの部屋から逃げてリザードたちを見つげ出そうとしたこともあった。だが、それは全て少女によつてその意識を叩き潰された。薄暗かった灰色の部屋が赤く赤く染まっていくな。行動を切り捨てられた、反抗や抵抗の意識を潰された。

——そして時間だけが過ぎていった。

突然起きたこの日々に、ヒナはリザードたちのことを思つて生きていた。立てなくなつたとしても、動けなくなつたとしても必死に生きる希望を捨てなかつた。

「はいこれで終了！」

「あ…」

——気がつけば、少女は笑顔でヒナに向かって言う。

まるで昔からの親友のように接する少女に恐怖と負の感情を抱きながらもヒナは必死に腕に力を入れて動こうとした。これでようやくリザードたちに会えるのだと…終わったのだとそう信じていた。そう信じることしかできなくなっていた。

でもヒナが懸命に立ち上がろうとするのを見て不機嫌になった少女がすぐに蹴り上げる。その衝撃で宙に浮きあがったヒナはすぐに地面に叩きつけられた。

「もう焦らないで少しは待ってくれてもいいでしょう！リザード達なら扉の向こうにいるんだから。ほら、会わせてあげるわ」

「っ……」

少女はここに来てから乱雑に切り刻まれたヒナの髪の毛を強く握り、顔を上げさせる。そして近くにいたポケモンに扉を開かせた。

「リザー……ド……ピ……チュ……」

ヒナは目を見開いてその姿を見る。ようやく会えた家族の姿だと言うのに……その姿は変わり果て、「あの」首輪をつけたリザードとピチューが静かに立っている光景だった。

予想はできたはずだった。髪の毛を強く掴む少女が普通に会わせてくれるだなんてないだろうと冷静に考えたらできるはずだった。だが少女はヒナのその思考をすべて叩き潰していた。少女はただ、ヒナに向かって言ったりザードたちに会わせるという言葉葉を信じて懸命に生きようとする哀れなヒナを嘲笑っていただけなのだ。

「リザー…ド…」

ヒナの目の前が、赤く染まった。

「燃え尽きて終わらせる…赤く染まるニセモノにはピッタリでしょう？」

第二百五十五話く傷つくモノと傷ついたモノく

目を覚ませば、そこに広がるのは一面の黄色。

「つつい、!？」

『ピイツチュウ!!』

『落ち着きなさい、ピチュー。ヒナが痛がつていますよ』

『ピツチュ…』

「痛た…えつと、ピチューにミュウツー…姉さん？」

『いいえ、他にもいますよ』

『レッビィ!!』

『マアナ!!』

『キュウウウ!!』

『ロメツ!』

ヒナが目を覚ますと、そこは清潔そうな白い部屋だった。フカフカのベットで眠っていたようで、ヒナが目覚めた瞬間に強く抱きついて来たピチューに驚く。ミュウツーがヒナを強く抱きしめたピチューに言い、そして微笑んでいた。その表情は人間のよう泣くのを堪えているようにも見える。そしてヒナはようやく現状を知った。ミュウツーたちが「あそこ」から助けしてくれたのだと…また、助けられてしまったのだと知ったのだ。

そしてヒナがピチューとミュウツーのことを呼ぶと、ミュウツーが横に一步移動しヒナに後ろにいるポケモン達を見せた。

そこにいたのは、ヒナが無事だと分かり、安堵したことによって涙を浮かべるポケモン達の姿があった。ヒナが目覚めたことよって近づこうとするのだが、ミュウツーがサイコキネシスでその動きを止めたことよってヒナが抱きつぶされずに済んだ。ミュウツーの後ろにいたのはセレビィ達にメロエッタにラティアスにマナフィ…そしてー。

「ルカリオ…？」

泣きそうになっている周りとは違って、表情を険しくさせたルカリオがそこにいた。

『……』

「ルカリオ…」

ルカリオが近づいたことによって、ピチューがヒナの頭からお腹に移動して抱きつく。離れることはせず、ずっと泣きだしているピチューの頭を撫でながら、ルカリオを見つめた。

そして、ルカリオはヒナの頭を優しく撫でた。その行動に一瞬怯えた様子をみせたヒナを見て、少し苦しそうな表情を浮かべながらも…。

『心配したんだぞ、ヒナ…無事で良かった』

「ご、ごめんなさい」

『謝ることじゃない』

「うん…ありがとう、ルカリオ」

ヒナは何故ここにいるのか、そして何故怪我をしているのかをちゃんと覚えていた。忘れていれば、ヒナの胸に広がる痛みはなくなるはずだと、叶わない願いを感じながら

そしてヒナは目覚めてから感じていた違和感をルカリオたちに向かって口に出して言う。

「ね、ねえ……リザードは？リザードは何処なの？」

いつも一緒だったリザードがいないことと、あの赤い炎の記憶を思い出して不安になる。

そして、ピチューがヒナの言葉によつて悲痛の声をあげ、周りにいるポケモン達は何も言わないことに嫌な感情が込み上げてきた。

「リザードは、リザードは何処？ねえピチュー、何処にいるのか分かる？」

『……………』

「は、ははは……ねえ、冗談でしょ？リザードは、ちゃんというよね？隠れてこの近くに、いるんだよね？」

『ヒナ…』

「ルカリオ、リザードは何処？」

『っ…』

『ヒナ、それは…』

誰か、リザードはここにいと驚かすためにわざと隠れているのだと答えてほしい
と思い、わざと笑う。ヒナの瞳が傷ついた色に染まっても、苦しそうに笑っていて
も、この部屋にいるポケモン達は、何も喋らない。

「大丈夫、ちゃんと生きているよ」

だが、部屋に入ってきた人間は別だった。悲しい表情を浮かべ、ヒナを見つめる少女……ヒカリとポツチャマとシエイミ、真剣な表情を浮かべている青年……アールンが、部屋に入ってきたのだ。

アールンは言う。リザードは生きています。

その言葉にヒナは涙を浮かべた。

「リザード……良かった」

『ピッチユウ……』

「君のリザード……いや、リザードンは酷く混乱しているんだ、今はテイナとミュウが側にいるよ」

「つなら、早く側にいかないと……!」

「無茶よ! ヒナちゃんの身体は——」

「私の家族なの! 早く会って大丈夫だよって言わないと!!」

『ピチュ……』

ピチュウが悲しそうにヒナを見つめる。そしてヒカリとポツチャマが顔を見合わせ

てどう言おうか迷っているような仕草をする。その行動もヒナにとって不安にさせる要因となった。

そして、アーロンの言葉で一つだけ気になることがあったが…ヒナはそのことに気づかない。

「リザード…リザードっ」

『ピチュウ…ピイツチュウ!』

「ピチュウもリザードに会いたいよね?リザードに、大丈夫だよって言わないと…安心させないといけないんだから…」

『ピチュウ!!!』

ピチュウが違うと首を横に振る。それにヒナは気づかない。ただただ、長い間ずっと一緒にいたりザードに会いたいと言う言葉しか心になかったからだ。弟のように可愛がっているピチュウの言葉も、心を傷つけられた今のヒナには届かない。

だからこそ、周りの様子にも、雰囲気にも気づかない。ヒナは気づこうとしない。

『ヒナ…話を聞け！あの子は——』

「いや、ルカリオ…会わせてあげよう」

『アーロン様!?!』

「そんなつでも今のリザードンに会わせたら…!」

『ポチャア!!』

『ミイイ…ヒナに何かあつたらサトシが心配するでしゅよ…!』

『ロメツタツ!!』

『キュウウウウ!!!』

『人間よ。ヒナにこれ以上心を壊せと言うのですか…!あのリザードンに会わせてしまつたらそれは…!』

「このままここに居るよりもずっといいだろう。それに、何もせず会わないままだとヒナちゃんやリザードンのためにならない。ただ無意味に傷つくだけだ…ヒナちゃん、リザードンに会わせてあげよう。ついてきなさい」

『アーロン様…』

「大丈夫だルカリオ。私はもう、間違えない」

「…はい」

『ピチュ…!』

ヒナはアーロン達の言葉を他人事のように聞いていた。それは、つい最近まで心が壊れそうになるぐらい痛い目に遭ったせいか、ただリザードに会いたいと言う気持ちが強いせいか…それ以外のせいかもしれない。アーロンは周りにこのままではいけないと諭し、そしてヒナの様子を見て真剣に言った。

周りもこのままではいけないと思っただろう。ヒカリが涙を浮かべ口を手で押さえて嗚咽を漏らさないようにするぐらいには、ヒナの様子は酷い。いつものような優しい笑みも、楽しそうにポケモンたちと一緒にいる様子が想像できないほどやつれていたのだ。ヒナの見た目もその雰囲気を助長させているのかもしれない。腰ぐらいまであつた艶やかな長い髪は肩まで乱雑に切り刻まれてしまっている。瞳には生気がなく、ただリザードに会いたいという言葉しか言わなかった。

だからこそ、アーンはリザードに…いや、リザードンに合わせるために行動を開始した。

.....

『アーン!? 何でヒナちゃんを連れてきたんだよ!!!?』

『ミュウウ!!!』

「これが彼女たちにとつての最善だ」

『会って傷つくことが最善か!? ふぎけん!』

『ミュウ!!』

「何もせず心だけが死んでいくよりずっといいだろう…それにこのまま会わないより今

「ここで会った方が良い」

『…サトシ君になんて説明したらいいんだ…』

『…ミユウ』

「それは私がやろう。ティナはオーキド博士に頼まれたことをやってくれ」

『…っ…はあ…もうどうなっても知らないからね！…ほらこつち』

『ミユウ』

ヒナは気がつけばこの世のものとは思えない空間に来ていた。アロンがヒナとピチューを連れてギラティナの反転世界へやって来たのだ。もちろんヒナの足元には不安そうな様子のピチューがいる。ミュウツーたちもヒナたちの傍にしようとしたが、アロンが大丈夫だと言って連れてこなかった。だから今ここにいるのはミュウとギラティナとアロン…そしてヒナとピチューだった。

ギラティナがため息をつきながらも前へと進む。ヒナとピチューも一緒にギラティナについて行く。

そしてやって来たのはある大きな大樹が光り輝く、洞窟の中。まるでギラティナの近

くで浮いているミュウが棲むはじまりの樹のようだ。周りは緑色に光り輝く透明な水晶で覆われ、洞窟の中心で、大樹を茫然と見つめている黒い生き物がいた。

「リザード…っ！」

『ピチュ…』

ヒナの声に反応して、黒い生き物：いや、リザードンが後ろを向く。ピチュはその姿を見て苦しそうに俯いた。その姿を見てミュウがピチュを静かに抱きしめる。そんなピチュ達に気づかないヒナがリザードンに向かって微笑み、近づこうとした。

『グオオオオオツ!!!』

「っ！リザード…ド？」

リザードだった頃よりも強力な炎を吐き出し、威嚇する。その姿にヒナは驚く。ようやく会えたと思ったのに、リザードの表情が泣きそうに歪んでいると言うのに、何故拒絶するのだろうか。ヒナは疑問に思う。だからこそ一步一步近づく。それに気づいた

リザードンは黒い翼を広げて飛び上がり、ヒナから離れていく。

「なんで？大丈夫だよ。もう何も無いの…！」

『グオオオオオオオオオオツツ！！！！』

来るなどばかりに炎を吐く。そのリザードンの行動と表情が一致せず、ヒナは困惑した。ただ離れないでほしいとばかりに、ヒトカゲだった頃からよく抱きしめるようにヒナが両腕を上げて近づいても、リザードンはそれを受け入れない。空を大きく飛び上がり、ヒナから離れていく。

ヒナは目を大きく見開き、どうして…何で…と呟いた。手を伸ばし、もう届く距離にいないリザードンの元へ走る。

『グオオツ!!』

「逃げないで…行かないでツリザードン
!!!!!!」

『グオオオオオオオオツツ!!!』

飛びあがり離れていくリザードンを見て、ヒナはただ子供のように両膝を地面についで泣いていた。

第二百五十六話　兄は冷静に見えてそうじゃない

オーキド研究所からの電話は、サトシやピカチュウ：そしてセレナ達の表情を変えるのに十分な内容を伝えていた。そしてその電話の内容によってサトシとピカチュウはキレた時によく見せる無表情となり、それを見たセレナが出会った頃のサトシの懐かしい表情みたいだと頬を赤く染めている。

もちろん今はふざけている場合ではないため、セレナがいつものようにサトシ大好き！などと言った言葉を大きな声で叫んだりしてはいないが…。

「カントー地方へ行くぞ」

『ピイカッチュ』

「ええ、それが妥当ね…ヒナちゃんの身に何かあったとしか思えないわ」

「カスミの言うとおりかも…このままにしておけない！」

「私も、ヒナちゃんを助けたい…それに義妹が行方不明になった原因をちゃんと燃やさないといけないし…！」

「だよねだよね！困ってるなら助けないと！」

『デネデネ！』

「そうですね…それでは行きましょうか！」

言っている内容は時折物騒だが…それでもみんなの気持ちは一致していた。もちろん、セレナの義妹発言には誰もツツコミなんていれないぐらい真剣に考えているぐらいには…。

「あ、ねえ待って！…行くってどこに？」

『デネ？』

ユリーカが何かを思い出したかのような声を出してサトシ達を立ち止まらせる。ユリーカの言葉は正論であり、これからカント―地方へ向かうサトシ達が何処へ向かわなければいけないのか分からないということだ。だからこそシトロンたちは微妙そうな表情でユリーカを見て俯き、このまま行っても意味はないと思ったようだった。

——サトシとピカチュウを除いては。

「大丈夫だ。俺たちにはちゃんと協力者がいる…なあ、いるんだろう？ ミュウ」
『ピカチュウ！』

「え、ミュウって…ちよつと待ってまさか…!？」

「ミュウって何？ ポケモンなの!？」

『デネデネ？』

「ミュウ？ 聞いたことないわね…」

「伝説のポケモンですよ…それもポケモンたちの始祖に値すると呼ばれている生き物です！」

「ああなるほど、よく分かったかも」

『ミューウ…』

ミューウが来たことによつてセレナたちはそれぞれ反応を示す。カスミは顔を引き攣らせ、シトロンは驚愕して眼鏡をずり落とす。そしてセレナはずかんと開いてエラー表記になったことに対して首を傾げ、ユリーカとデデンネは笑顔で現れたミューウに近づいて行つた。そんなカオスな雰囲気の中…ハルカだけが、納得しているような表情を浮かべていたのだった。

突然サトシ達の前に現れたミューウは元気がなさそうだ。だがサトシにとつてそれは当たり前だろうと思えた。ミューウにとつてもヒナたちは我が子のように接してきた大切な仲間であり家族なのだから。ヒナたちが行方不明になったということは、ミューウ達の強い加護から掠め取つて行つたのと同じ意味になる。伝説たちのプライドをズタズ

夕に折られたのと同時に、ヒナたちがどうなったのか心配しているからこそ元気がないのだと…そうサトシとピカチュウは思えたのだった。

「何があつたのか聞くつもりはない…が、俺の言いたいこと…分かるよな？」

『ピイカ』

『ミュ…ミュウ!!』

ヒナが行方不明になつたということは、ヒナ達自身が伝説たちに見守られている状況ではただ連れ去るという行為は困難だろう。

だからこそ、何故ミュウ達の守りからヒナたちが連れ去ることができたのかサトシは分からない。それに、伝説たちがヒナたちを可愛がり、大切に思っているのは心底分かっているからこそ責めるつもりはない。

いま大切なのは、ヒナたちを探し、助け出すと言うことだろうとサトシは言葉にせずともそう言った。

ミュウはやる気を出し、テレポートをしてミュウツーたちにサトシが動くということなどを知らせるために動く。

サトシとピカチュウもやるべきことを果たそうと歩き出すが――。

「ちよつ!?!ちよつと待つてくださいいよサトシ!何故あの伝説のミュウがいたのかを教えてください!」

「ねえねえサトシはあのミュウと知り合いなの?私も友達になれるかな?ミュウってマサラタウンにいるの?」

『アネアネ!!?!』

「あんた伝説ホイホイだからちよつとは納得いくけど…でもミュウがあんたの近くにいて何でわかったのよ?それにヒナちゃん達のことも知ってたみたいだし。どうしてなのか教えなさい!」

「…質問ならハルカに聞いてくれ。俺はポケモンセンターに行く」

『ピイカツチュ』

「あ、待つてサトシ！私も一緒に行く！」

サトシが質問に答えずに不機嫌なまま歩き出したことによつてシトロンとユリーカは戸惑い、カスミはため息をついて仕方ないかと諦める。そんなシトロンたちに対してハルカは苦笑しつつもマサラタウンの現状を説明していった。ポケモンセンターへと歩かず、その場で話を聞いているハルカを一瞬だけ見たセレナはすぐに思考をサトシへと移した。後でまた合流しようとするサトシが言ってきたために、ハルカ達と別れる形で行くことになったのだが、セレナは嫌な予感がしていた。

（大丈夫……だいじょうぶ。サトシがいるんだから）

その予感が当たらないでほしいとセレナは願った。あの幼い頃のキャンプ地で怖い目に遭った頃のように……サトシが、皆が怪我しなければいいとそう願いながらも……。

——不機嫌な表情で歩くサトシの後ろをついて行くのは、心配そうにサトシを見つめるセレナただ一人だけであった。

.....

「ねえサトシ…誰に連絡するの？」

「幼馴染」

『ピイカ…』

サトシ達がやって来たのはポケモンセンターの通信施設となっている場所。つまり、電話が置いてある場所までやって来たのだ。椅子に腰かけ電話をかけようとしているサトシの姿にセレナは誰に連絡するのか気になり質問した。その声にサトシはただ一言感情のこもっていない声で答える。

セレナは幼馴染と言う言葉にキャンプ場にてサトシと別れた後に見かけた幼い少年を思い出した。あの時の幼い少年はサトシは何処かと動揺し泣きながら大人たちに詰め寄っていたが…もしかしたらその時に見かけた子かもしれないとセレナは考える。

そしてようやく電話がつながり、画面に見えてきたのは少々疲れた表情をしている少年——シゲルだった。

「やあサトシ…その様子だと今の状況が分かっているみたいだね」

「まあな。…最後にヒナに会ったのはシゲルだったんだろ？何があつたのか詳しく教えろ」

『ピイカツチュ！』

「ああ…ヒナちゃんがいた部屋の監視カメラを調べたらウンゲラーが突然現れて、大きな光によってヒナちゃん達が消える様子が見られたんだ。おそらくテレポートで連れ去られたのだろう」

「………居場所の特定は？」

「だいたいなら特定できてるよ。…おおよそだけど、テレポート出来る範囲から考えるところ——地方のある場所が示されたんだ…でもまだ細かい位置まで分かっているかい」

「…いや、助かる。その資料をこっちに送ってくれないか？」

「分かった…サトシ、ヒナちゃん達を連れ去ったのはもしかしたらかつてのロケット団

のように悪い奴らかもしれない…油断はしないでくれ。それと、何かあれば僕を呼んでくれよ…サトシ、本当にすまなかった」

「謝るな。シゲルはヒナのためを思つて行動したんだろ？まあ今度会ったときは覚悟しておくとはいっておくけどな」

「ははっ…ありがとう、サトシ」

疲れた表情を少しだけ微笑みに変えたシゲルとの通信を終わらせたサトシはすぐはこちらに送信されてきた資料となるデータを紙に写し、立ち上がった。近くで見守つていたセレナは険しい表情でサトシの後をついて行く。

——そしてポケモンセンターを出て歩いた先にはハルカの話を実剣に聞いているシトロンの姿が見える。

シトロンたちはどうやらマサラタウンに伝説たちがいること、その理由について知つたようだ。サトシがやって来たと同時に微妙そうな表情を浮かべていたり、目を輝かせていたり、呆れた様子でため息をついたりとそれぞれが反応していた。それはそうだろう…伝説が人の前に現れるというだけでも珍しいというのにその伝説がマサラタウンに集合しているのだから…しかもヒナたちを守り、我が子のように接していたり…サト

シのポケモンであるフシギダネ達と交流したりと凄まじく平和に暮らしているということさえ想像がつかないのだろう。

だからこそ、シトロンたちに近づいたマサラタウンを変えてしまった元凶であるサトシを見て微妙な雰囲気となってしまったのだった。

彼らの雰囲気があったサトシはすぐに口を開いて牽制した。

「言いたいことはあるかもしれないねえが……それは後で聞く。大体の場所も分かったことだし、カントー地方に行くぞ」

『ピイカッチュ!』

カントー地方に行くと言う言葉でシトロンたちはすぐに表情を変えて真剣な様子でサトシを見た。セレナはサトシの隣に来て一緒に話を聞く。

そのまま行くかと思ったが、サトシは手に持っていた紙を一度見てから考えるような仕草をして……そしてユリーカを見た。

「…とりあえず、ユリーカとカスミはここで待っていてくれ」

『…ピイカツチュ』

「ええっ!? 何でなんで!! 私も行きたい!!」

『デネデネ!!』

「いえ、サトシの言うとおりですね。ユリーカはまだトレーナーじゃないんだから、危険な目に遭うかもしれない場所に連れていけないよ」

「でも…でも!!」

『デネ…!!』

「ユリーカちゃん。私と一緒に待ってようね。サトシは強いし大丈夫。それに無理に行ってユリーカちゃんが傷ついたら皆が後悔するから…だからここで待っていきましょうー!」

「ユリーカ、カスミさんと一緒に待っていてくれるかい?」

「……………うん」

『…デネ』

ユリーカは不機嫌そうな表情を浮かべてしまったが、それでもサトシは自ら決めた意志を覆そうとはしない。ユリーカはヒナと同じ年齢であり、まだトレーナーになってい

ない幼い少女と言っても過言ではない。ヒナのように連れ去られては危険だと考えているからこそサトシはここでカスミと一緒に待っているように言った。本当ならシトロンたちも一緒に待っていてほしいのだが、サトシが何かを言う前にトレーナーだから自分の身は守れるということや助けに行きたいという言葉伝えてきたため、カントー地方に連れて行くことを決心した。

ようやく、ヒナを助けに行けるとサトシは帽子を深くかぶり直す。

「さて…じゃあレックウザで移動するか、ミュウに連続レポートしてもらうか、それともギラティナの反転世界から一気にカントー地方に行くか…どれにしようか？」

『ピイカツチュ?』

「……………え？」

う。サトシの言った言葉に、数名を除いて絶句していたのは仕方ないことだと言えるだろう。

第二百五十七話く兄達はカント―地方へ戻るく

ここはカロス地方のとある森の奥深く。ユリーカとカスミと一時的ではあるが別れ、サトシとピカチュウについて行けばそこには光と闇があつた。

――それは、人間が見てはならない領域。

サトシだからこそ……いや、サトシと共にいるからこそ許された光景がそこにはあつ

た。

「…よろしく頼むぜ、クレセリアにダークライ」

『ピツカア!』

『クウウウウウウツ!!』

『フウウウ…ああ、任せておけ』

「シャベツタアアアアアアアツ!!」

「え? 喋るポケモンって普通じゃないの? 私ずっと普通だと思ってたかも…」

「でもニヤースも人間の言葉を喋るってサトシに聞いたわ。もしかしたらそう珍しくないのかしら?」

「いやいやそんなわけないですからね!!!」

「…さっさと行くぞ」

『ピイカッチュ…』

伝説が目の前にいることやポケモンが喋ったことに対してシトロロン以外はもはや慣れてしまったのだろう。そしてダークライやクレセリア自身もシトロロンの反応を見てああこれが通常の反応だ…というような表情をしている。だがそんな戯言にキレているサトシとピカチュウが聞くわけもなく。電撃でビリビリと放っているピカチュウと、凄まじい冷気を発しているサトシに圧倒されてすぐに行動を開始した。…当然ここでもセレナが頬を赤く染めていたりするが騒いだりはしなかった。

「ねえサトシ…このままカント―地方へ行くの？」

「ああ…」

これ以上の言葉をサトシは言わなかった。それは連れ去られてしまったヒナのことを心配する気持ちと、早く行きたいという苛立ちが込められていたからだろう。クレセリアとダークライもそんなサトシの感情を読み取ったのか真剣な表情のまま何も言わ

ない。

サトシがクレセリアの背に乗ったため、セレナたちもそれぞれポケモンの背に乗った。そしてダークライとクレセリアは空へ飛び上がり、サトシ達を乗せてカントー地方へ飛んでいく――。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「サトシ…!？」

「サトシ…来ると思っておったぞ」

「すいませんオーキド博士…先に仲間たちを紹介しなければいけないんですけど…」

「それよりもやるべきことがあるんじゃないでしょうか？また時間がある時で十分じゃ」

「ありがとうございます博士」

「…森の中に行くんだろうサトシ。皆そこに集まってるはずだよ」

「分かった。ありがとうケンジ」

サトシ達は数時間もの間カントー地方へ向けて飛んでいた。途中でシトロンの力力が持たないだろうとクレセリアとダークライが気をつけて飛んでいたためシロンの力力は尽きることなく、早く到着することができた。そしてカントー地方のオーキド研究所に降り立ったサトシ達を見たケンジとオーキド博士はダークライやクレセリアを見て驚いていたが、サトシだからと納得し、ヒナを探しに来たのだと察する。サトシと一緒にやって来たシトロンの力力をちゃんど紹介しなければならぬとサトシは思ったが、そんな時間はないだろうとオーキド博士たちが微笑み、森に急げと言ってきたためサトシは走る。もちろんピカチュウやダークライ、そしてクレセリアもサトシの後に続いた。

シトロンの力力はオーキド博士たちに一度礼を言ってからすぐにサトシの力力を追いかけた。

——森の中は静寂に包まれていた。ただ異様なのはポケモンの力力がしないことでもなく、森の中だけ自然の風などが感じられないことではなく…鋭い冷気のような殺気があたりに包まれていたことだけだ。

ポケモンの姿が見えず、ただただ森の奥へ進むたびにその殺気が大きく感じられる……。

シトロンは少しだけその殺気を身体に感じて怯えてしまったが、いつもサトシの傍にいたためか：それともこの数時間の間に慣れてしまったのかすぐ頬を両手で叩いて気持ちを切り替える。心の奥底ではこの冷たい殺気を怖がってはいたが、サトシ達の足を引く張るつもりはないと考えて前へ進んでいったのだった。

そして見えてきたのは大勢のポケモンたちが集まる光景……。その中に人間の姿も何人か見えていた。

「この状況で会うことになるとは思ってもみなかったよ……サトシ君」

「ええ……俺もそう思ってますよ、アーロンさん」

「サトシ……」

「悪いなヒカリ。旅している途中で呼び出しちまって……」

「そんなことないよ！ヒナちゃんが大変なことになってるんだから……ミュウがいきなり来た時は驚いたけどね……」

『ポツチャア!!』

『ピイカツチュウ…』

「…誰なの？サトシの知り合い？」

「うん。あそこにいる女の子はヒカリって言って私たちと同じようにサトシと一緒に旅したことがある仲間なの。それであの青い帽子をかぶった人がアーンさんで…過去にいた人間…かも？」

「かもって…どういうことでしょうか？」

『人間には見えないと言いたいのか？』

「うーんそういうわけじゃないかも。過去にいた人だから…でも今は違うのよね。それに私もアーンさんとの場で会うのは初めてだから…あと久しぶりね、ルカリオ」

『ああ、久しぶりだな』

「ポ、ポケモンがまた喋ってる…いいえ、サトシに関わるポケモンを常識であてはめてはいけない…！」

「…シトロン？何だか顔色が悪いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫です!!」

シトロンにとってサトシの周りにはいるポケモン達のほとんどが人生で一度見れるか

どうかすら分らないぐらい貴重だと分かっていた。サトシの手持ちたちのレベルが高すぎるという点でも驚くべきのだが…それ以外にも滅多に見ることができない伝説たちが当たり前のようにそこにいる時点で気絶してしまうぐらいの衝撃をシトロンの与えていた。普通だったら伝説たちがたくさんいるオーキド研究所に始めてきたセレナもここでシトロンの同じように反応するべきなのだが…彼女にとってはサトシが世界の中心であり、サトシが当たり前だと思ふことはセレナにとっても当たり前なのだと考えていたために驚愕することはない。

まあ、こんな状況でなければベイリーフがサトシに恋しているセレナを見て目の敵にし、攻撃しようとしてマグマラシたちに止められるのは時間の問題だと思うが――

「あいつは…?」

「ああティナなら反転世界からミュウと共に探してくれているよ。私たちも全員で探すと言ったのだが…ティナが邪魔だから外に行って待つてると怒ってしまったね…」

「ティナは反転世界を荒らされるの嫌みたいだから…」

『ポチャア…』

「…そうか分かった」
『ピイカ』

アーン達との話を終えたサトシは、フシギダネ達の方を振り向く。その行動にポケモンたち全員が表情を引き締めてサトシの次の言葉を待つ。

「じゃあ、編成でも始めるか」

『ピイカツチュ！』

『ツツ!!!』

サトシの言葉によって全員がヒナを救出しに行きたいと叫ぶ。もちろんサトシの手持ちだけでなく伝説たちもだ。騒ぎにまで発展しそうなポケモンたちの声にシトロンは、それはそれほど連れ去られたヒナたちのことが心配なのだとして理解した。

だがサトシは首を横に振って全員は連れていけないと言う。その言葉を聞いてポケモンたちはさらに騒いだ。

「全員でヒナを助けに行きたいのは俺も分かる。でもな、今周りで起きている事件については知ってるか？ヒナのことともそうだが…今はオーキド研究所を留守にするわけにはいかない」

『ピイカツチュ…』

『俺は行くぞ。ヒナが連れ去られたからにはその元凶を叩き潰してやらねば気が済まない…!!』

「ああ、分かっているが…ただ感情のまま怒るだけでヒナを助けられるとは思うなよミュウツー。全員で行ってヒナを助けられなかったらどうする？リザードやピチューはどうなる？…やるべきことは常に最善だ」

『クツ…!!』

「ああ、話に聞いていた通り…面白い子だね」

『アーロン様…』

「…そういえば前にテイナがサトシの事、大きな組織の司令官になれそうだって呟いて

たの聞いたことがあるわ」

『ポチャア…』

「サトシ…格好良い…!」

「だ、駄目ですよセレナ…今騒いでしまったら皆に怒られます…!!」

「大丈夫よシトロロン。セレナもここで騒ごうとは思ってない…かも?」

「かもじゃダメですよハルカ!」

話し合いはギリテイナたちがやって来るまで続き、サトシの指揮によって突撃するのはミュウツーとイツシユ地方にいたミュウツー、ミュウ、ダークライ…そしてホウエン地方の手持ちたちになった。ホウエン地方の手持ちが突撃部隊に選ばれたのはヒナたちを奪還するためにスピード重視にしていたからこそだとサトシは言う。大きな身体をしたポケモンは敵に早く見つかってしまいヒナたちを人質にとられる可能性から除外していったためだ。サトシ達と一緒に行けないポケモンたちは皆不満そうだったが…ヒナたちを救出し終えたら全員で突撃して瞬殺するぞというサトシの言葉でやる気を出したようだった。

カロス地方のポケモンたちはまだまだ修行する必要があるのと今回の戦いで危険かもしれないということでオーキド研究所で待っていてほしいとサトシは言う。ケロマ

ツ達はその言葉を聞いて一緒に行くと呼んだが…それでもサトシは首を横に振って待っていてくれと言った。他にもオーキド研究所で待つポケモンたちがいるからこそ、サトシが考えて決断した言葉だからこそケロマツ達はサトシの言うことを聞いた。でも…それは自らの力がまだまだ未熟だと分かっていたからこそ、オーキド研究所でできることはすべて行おうと決心したのだった。

「フシギダネ…俺達がいけない間は頼んだぞ」

『ピイカツチュ』

『ダネフツシ!!』

そうして話を終えたサトシ達が振り向いた先にいたのは――。

『あ、終わったみたいだね』

『ミューウ』

「……………誰だお前」

太陽に照らされてキラキラと光る金色の髪を胸まで伸ばしている女性とミューウが真面目そうな表情で待っていた姿だった。

第二百五十八話く兄とセレナは似ているく

サトシ達のことを待っていた女性は10人中10人が見て美しいと言えるぐらいとても美人であった。パツチリとした赤い瞳とほんのりと赤く彩られた口元…そして形の良い大きな胸が女性の着ている黒いコートからはつきりと分かった。綺麗な足が短パンからのぞき出ているためコートを着込んでいてもとても涼しそうだ。そして、何より艶やかな金色の髪が太陽に照らされてキラキラと輝く姿が良く似合うと誰もが思うぐらいとても美しい姿…。

———
久し振りに会ったはずのギラティナが、変わってしまったていた

ことにサトシは驚いた。

「お前って…女だったっけ？」

『ピイカ…』

『…いろいろと理由があるだけだから気にしないでサトシ君。それに俺はちゃんと男だから！』

通常だったらここでいろいろと話し始めるだろうがサトシは今ヒナたちのことを優先的に考えているためギラティナの性別が変わったとしてもあまり気にせず行動に移した。ギラティナもいろいろと言われずに済んで良かったと思っているのか安堵のため息をついてから道案内をし始める。シトロンたちもその後が続く…が――。

「……………サトシの…知り合い？」

「セレナ、落ち着いてください。えっと…あの人は一体誰でしょうか…？」

「ギラティナといって…いや、ただの仲間だよ気にしないでくれ」

『俺たちから見れば仲間であり、周りからは伝説と呼ばれている存在だ。…だがまあ普通の人間と変わらない対応で大丈夫だろう』

「そうね。ただの変人…いえ、変ポケ？だから気にしないで」

『ポチャア』

「伝説っ…そんな対応でいいんですか!？」

「気にしなくていい…かも？」

「ハルカまで!?!…ここには僕の味方はいないんでしょうか」

『シトロンと言ったな…あまり気にしていると胃に穴が開くぞ。サトシと関わると言うことはそれ相応の覚悟が必要だと言うことだけは覚えておけ』

「ルカリオ…わかりました」

「おや、シトロン君とルカリオは仲良くなったみたいだね」

『アーロン様…』

ただし、ギラティナを良く知らないシトロンが何も反応するわけなく、突然現れた金髪の美女に疑問を抱く。もちろん綺麗な見た目をしているからこそ頬を赤く染めていたのだが…。そしてサトシの知り合いだと分かったセレナもちよつとだけ不穏な雰囲気漂わせながらも誰なのか聞いた。するとアーロン達が苦笑しながらもその質問に

答える。ギラティナは裏世界を管理する神のような存在なのだが：まあずっと一緒にいたアーロン達から見れば少しだけお馬鹿でからかい甲斐のある仲間だと認識しているのだろう。もちろん仲間だからこそ信頼はしているのだが：ギラティナの性格は残念なため大雑把に説明されてしまったのだった。その言葉でセレナはサトシのことが好きではないのかと考えて意識と視線をサトシに移し、シトロンはその言葉に大きく反応しそれでいいのかと叫ぶがハルカが以前マサラタウンで伝説であるレックウザたちをボッコボコにしている場面を見ていたため、敬ったりせず普通に普通に対応すればいいかと首を傾けて呟いた。シトロンはため息をついて弱音を吐くが、イツシユ地方で一緒にいたルカリオがアドバイスをしていたり、アーロンがその様子を見て微笑んだりとなかなか力オスであった。

もちろんその間にもギラティナの道案内によって反転世界の出入り口が開かれ、中へ入っていくことがあったが：。その常識から外れた出入り口にシトロンが驚愕するが、ルカリオのアドバイスもあってこのままじゃいけないと首を横に振り覚悟を決めた。

.....

反転世界からヒナたちがいるであろう建物への出入り口へ来たサトシ達が感じたのは冷たい冷気だった。まるでキュレムが傍にいるかのような鋭い冷気と誰もいない無人の部屋にサトシ達はいた。どうやら鏡を通してこちらに来たらしく、狭い部屋に全員が抜け出るのは少々時間がかかった。

だがサトシが迅速に対応し、ホウエン地方の手持ちたちを手早くボールに戻してから皆を部屋の中に入れる。そしてギリティナはすぐに反転世界への出入り口を閉めた。ピカチュウが先頭に立ち、部屋の扉を開ける。部屋の外は廊下があり、左側の廊下の奥から大きな音が聞こえてきたためサトシはすぐに行動を開始する。：ちなみに広い廊下に出たためボールの中にいたホウエン地方の手持ちたちはすぐに外に出てサトシとピカチュウの後を追っている。

「ヒナっ…!」

『ピツカ…!』

『ジュツ』

『ズツバアア!!』

『ハイハイハイッ!!』

『コオオオオオツ!!!』
『オニゴオオオオツ!!!』

「サトシ！いきなり行動しては危険ですよ!!」

『ああいや、早く行動した方がヒナちゃん達のために良いだろうからこれで正解だと思
うよ…』

『ミュウウ!!!』

『おいギラティナ、お前一体何を見たんだ!?!』

「おそらく…君がその表情で言うということはまず最悪な状況なのは確かなんだろう
?」

『アーロンの言うとおり、本当だったらもつと早く行った方が良かったんだけど…』

『ですが、私達にはサトシ達を待つと言う約束がありましたからね…とりあえず目指す
べきは憎き人間への復讐です』

『…いや、人間すべてが悪いわけじゃないからね!?!』

『フオオオオ…ギラティナ、あまり突っ掛からない方が良い。もはや話しかけても無駄
だと思っぞ』

「ああそうだろうね。ほら、あつちのミュウツーなんて凄まじい形相だ」

『コロスツブスコロスツブス——』

「うわあ殺人でも犯しそうな怖い表情…前に怒った時のティナそっくりじゃない?」

『ポチャポチャ!』

『俺あんな顔したことないから!』

「普通に談笑しながら真面目そうな表情で走っているという光景に僕はツツコミを入れるべきでしょうか…」

『ミュウウ』

『諦めて先に進むべきだろうな』

そしてアーンロン達は音のした方へ、サトシ達の後を追って走って行ったのだった。もちろん話はしているのだが…意識はヒナたちの救出にしか向いておらず、走りながらの会話に後ろから必死について来ているシトロンは微妙そうだ。

そろそろ胃が開きそうなシトロンに、ミュウとルカリオは肩を叩いて慰めたのだった…。

.....

———
そうしてようやく来たのは大きな扉の前、サトシ達が飛び蹴りのような形で開けて見えてきたのは凄惨な光景だった。

「ヒナ……？」

「なあんだ……もう来ちゃったの」

赤く燃え上がるその中心にいた傷ついた少女の姿。髪の毛は乱雑に切り刻まれ、所々に切り裂かれたような深い切り傷、肩から見えるかみつかれたような跡、そして一部分が紫色に染まった肌……。部屋に滲み出ている赤い血のような跡。

…いつもの元気で可愛い少女の姿が変わり果てていることに対して、サトシ達の理性を引きちぎるには十分な光景がそこにはあったのだった。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハツ!!
殺す」

サトシが真つ直ぐ見たそこにいたのは、歪んだ表情で笑う一人の少女。サトシ達と同じぐらいの年齢であろう少女がそこにいた。

サトシが突然笑い出したことにシトロンやヒカリ、ポツチャマがビクリと震え、恐怖で後ろに一歩下がる。その分キレたポケモンたちが前に出ていき、サトシを先頭とした殺る気十分の集団が出来上がったのだった。

ハルカもちろんその中に含まれていたが……それよりも倒れているヒナに駆け寄り、アーロンと共に緊急処置を施していく。ミュウもヒナに近づいていやしのはどうで治していこうとするが、酷い怪我のせいではなかなか治らない。その事実ミュウは泣き、アールンとハルカも険しい表情を浮かべていた。

セレナは自分のやるべきことを考え、倒れているヒナが再び人質とならないよう近づいてからフォッコとヤンチャムをボールから出して警戒する。……まあアールンがいる時点でその警戒は無意味なのだが……それでもセレナにとって今の自分にできることを精一杯行おうとしていたのだった。

ヒナの顔によく似た少女は笑みを浮かべながらサトシ達を見ていた。まるでサトシ達が来るのを知っていたかのように……まるで、すべてを見通しているかのように。

「覚悟はいいか？」

『ピイカツチュウ……!』

『ツツ————!!』

「覚悟ってなあに?……ああ、もしかしてこの子に対する覚悟だったりするのかしら?」

「……………」

『ピイカツ!!?』

『ジュルア……!』

『ズツバア!!』

『コオオオオオ!!』

『ハイガツ…!』

『オニゴオオオツ!!』

『リザードにピチュー…!』

『もはやこの人間に生きる意味などないッ…!!』

『フオオオオオ…倒さねばならないということだろうな…!』

ヒナに似た少女が笑みを浮かべながらも横に一步移動する。その少女の真後ろにいたのは、ヒナの仲間であるはずのリザードとピチューの姿。首には、イツシユ地方で見たとのことのある首輪がしてあるのが確認できた。あの首輪は、ポケモンや人間を操つてきたものであり…リザードとピチューが操られてしまったという事実にもサトシ達は怒る。

だが、少女はそれだけでは終わらない。パチンと指を鳴らして何故かその首輪を外す。瞳に生気が映ったリザードとピチューに、サトシ達はリザードたちが離れた瞬間を狙って少女を攻撃しようと考えてる。

「リザードツ?!」

『リザードが…進化した!?!』

「いや待ってくれ…様子がおかしい…まさかっ?!」

リザードが真つ先に見たのは、傷ついたヒナの姿。自らが燃やし、止めを刺そうとした相棒の姿だった。ピチューは正気に戻ったのと同時にすぐに床に倒れて気絶し、ミユウの手によってヒナの近くへテレポートされる。

そして唯一起きていたリザードは…己がした所行に慟哭を上げた。相棒であり大切な家族を傷つけてしまったという事実、炎を燃やす。

その悲しい叫び声が、怒りが身体を光らせ…黒く染まったりザードンへ進化させてしまったのだった。

「ありや、クロから聞いた話だここで進化させるつもりなかったんだけどなー」

『グオオオオオオオオツツ
!!!!!!』

「リザードンっ…待て！止まれ！」

『ピイカア!!』

『待て、リザードンが正気ではない！このままだと…』

『クツ…仕方がありません…ここは気絶させてでも…!』

『いややめろ！あのリザードンも怪我をしている！無理をさせてしまつては危険だ!』

『じゃあどうしろと言うのですかルカリオ!!』

『ああもう何もたまたしてのあいつは…!!』

「ティナ…このままだと危険よ！」

『ポチャア!』

『分かつてるよ!!でももう少しなんだ!』

リザードンは周り全てが敵だと思っているのだろう。ある意味混乱状態になってい

るリザードンから放たれた炎は全てを燃やすように威力が高く、サトシ達の手持ちなら簡単に避けたり防いだりすることは簡単だが…ヒナの相棒であり、妹分であるリザードンを無理やり止めるすべが思いつかない。無傷のまま眠らせればいいのだが、ダークライがいる時点でそれは不可能と言っても良いだろう。もちろん近くで眠っているヒナやピチューにも危ない。

ダークライがすぐにその事実を知ってここから離れようとするが、この混乱の中では難しい。だからこそ、サトシが最低限の怪我で済むようにリザードンに向かって行動した時だった…。

『ミーの順番でしゅね!!』

『ロメツタツ!〜♪〜♪!』

『遅いよシェイミー!』

『むっこれでも頑張ってきたんでしゅよ! ミーに感謝するでしゅ!』

『分かってるよありがとう!!』

扉から飛び出してきたのは二体のポケモン。シェイミーとメロエツタだ。どうやらギラティナが事前にシェイミーにお願していたらしく、シェイミーがイツシュ地方でメロエツタを探したのだろう。部屋に入ってきた瞬間すぐに事の重大さを知ったメロエツタが歌を歌ってリザードンの正気を戻そうとする。歌を聞いているうちに暴走状態でなくなり、次第に落ち着いてきてリザードンは床へ倒れ込んだ。それを見たジユカイン達ホウエンの手持ちたちがすぐさま助けに入るのをサトシは横目で確認しつつも、少女へ一歩近づく。

「あーあー…もう終わっちゃった? おもちやが壊れていくのを見るのは楽しいのに…」
「っ…お前」

「でも楽しかったよ！流石は【お兄ちゃん】だね！これはお礼！」

「ツ————コロス」

「私の…私のサトシに何するのツ
!!!!!!???

何の警戒もなく軽やかに近づいた少女がサトシに向かって行く。攻撃するかと思つたサトシが避けようとしたが、その行動が読めていたらしい少女が素早く動き、サトシの頬を掴んで、深く深く口づけをする。

キスされるとは思ってもみななかったサトシが一瞬動きを止めたが、すぐに少女に殴りかかろうと腕を振りかぶった。

だが少女は楽しそうに笑ってそれを避けた。

…ちなみに、その光景を見たセレナが絶句し、周りも恐怖のあまり一步下がった。

アーロンはヒナのために近くににいるが…アーロンやセレナ以外の全員がサトシに近づくと勇気がなかった。むしろ離れた。サトシの相棒であるピカチュウもだ。

そんな隙をつかれてしまったのだろう。少女がユンゲラーをボールから取り出してテレポートし、逃がしてしまったのも…サトシが怖いからという理由以外他にない。ミュウが恐る恐るテレポートしてユンゲラーを探しても…もうどこかに行ったのを見つけることができなかった。

「あ、あの…サトシ?」

『ポツチャア?』

『ピカピ……?』

「あ、大丈夫じゃないかも……」

「……………コロス」

「だ、大丈夫ですかセレナ?」

「……………アハハハハ! 大丈夫だよシトロン! ただ殺したい相手ができただけだからねー」

「ヒイ……!」

「……………それよりも早くヒナたちを病院へ運び込むぞ」

「は、はいッ!」

『ツツ!!!』

「ああそれが妥当だろうね」

『何でアーンロンはこんな雰囲気でも普通の対応してられるわけ?』

「おかしいのかいティナ?」

『…いや、別に』

周りが異様な雰囲気の中、ヒナたちは人も治療できる大きな病院…いや、ポケモンセンターへ運ばれていったのだった。

第二百五十九話く進むにはまだ早いく

ヒナとピチューはポケモンセンターの治療室に運ばれ、サトシ達はここにおいても何も意味はないと考えて再びオーキド研究所へ戻って行った。というよりも、戻らなければいけない状況だった。ミュウツー達伝説が目覚めないヒナたちを心配して一般人もいる中で姿を現そうとしたり、オーキド研究所にいるポケモンたちがもう待てないとばかりに外へ出ようとしたり……まあ、オーキド研究所にいたポケモンたちは全てフシギダネのソーラービームによつて無理やり黙らせたりしたのだが……。あと、サトシもこのままここでヒナたちの怪我が治るまで見守ることはできないと分かっていた。このままここにいても事態は解決しない。あの黒髪白服の少女を捕まえなければ何も終わらないと分かっているからこそ、ヒナの元を離れて行った。

——とにかく、オーキド研究所に戻ってきた一向は、ある意味異様な集団となっていたのだ。

そしてそんな彼らを出迎えたオーキド博士とケンジは驚いていた。なんせ無表情なサトシの真後ろには人生で滅多に会うことがないだろうとされている伝説たちが並んでいるのだから。しかも全員怒ったような表情でこちらへ来ているのだから驚くのも無理はないだろう。普通なのはハルカであり、怯えているのはシトロングらしいものだ。…でも、オーキド博士やケンジはサトシだからという理由で納得したようだ。ただ気絶しそうなケンジはその怒気に圧倒されているようだった。フシギダネは待つてましたとばかりにサトシの元へ駆け寄り、つるを出して戦闘ならいつでもできるぞとアピールする。

「サ、サトシ……？」

「ほう、これはまた珍しい光景じやのう」

「……フシギダネ」

『ダネ?』

「皆に伝えてくれ、まだ時間はかかるけれど、時が来たら大暴れするぞってな」

『ピイカツチュ……!』

『…ダネフシ!!』

『待て、俺たちも向かおう……!』

「暴れるなよ。その殺気は全部あいつに向けろ」

『ピイカツチュ』

『分かっている……!』

今こちらにいるのはオーキド博士やケンジはもちろん、人間だとサトシとセレナとハルカとシトロン…そしてポケモンだとピカチュウである。それ以外のポケモンや伝説たちは何があったのかを話すために、フシギダネと共にオーキド研究所にある迷いの森に直行していた。

そして、サトシと共にいたヒカリとアロン、ガラティナ…そしてシェイミ達はいな

い。

「伝説がいるのはサトシだから納得できるけど…何かあったの？」

「ケンジさん…でしたっけ？ちよつといろいろと僕にも説明できない事情がありました
…」

「フフフフフ——あの女コロシテヤル」

「…それで、あのサトシと同じように恐ろしい表情を浮かべてる女の子はどうしたの？」

「こつちもこつちでいろいろと…僕、ツツコミを入れるのに疲れました」

「何があつたんだい!？」

シトロンは遠い目であの時の惨状を思い出していた。幼いヒナとピチューが倒れ、進化したリザードンが我を忘れて襲いかかってくる光景を——サトシがキレた瞬間のあの冷気をシトロンは忘れていない。

何もできなかった事実にも心に突き刺さってはいるのだが、それ以上にあの恐ろしい光景は一生忘れられないと分かっていった。だからこそ、ケンジに質問をされてもシトロンは答えられない。あの衝撃をどう伝えればいいのか分からないからだ。そんなシトロンの様子に相当怖いことが起きたのだろうとケンジは直感で分かり、冷や汗をかく。そしてそんな様子を見ていたオーキド博士は真面目な表情でハルカに近づいてから話しかけてきた。

「ハルカ、一体何があつたんじゃ」

「実は——」

ハルカが話した内容に、オーキド博士や密かに聞いていたケンジの表情が険しくなる。サトシの妹であるヒナが重傷を負っていたこと、ピチューの負傷……そしてリザードンの暴走。ハルカは淡々と事実をすべて話した。…サトシが少女にキスをされていたことに関してはハルカは無意識ながらも話してはならないと本能で感じ、オーキド博士

やケンジにいうことはなかったため、周りの空気はサトシやセレナが恐ろしい雰囲気を漂わせていること以外はない。

「そうか…そのようなことが…サトシとヒナのママさんになんて説明したらいいかのう…」

「だからこんなに怒っているのか…でも分かるよその気持ち…酷過ぎる…」

ハルカが話した内容にオーキド博士は何か考えるかのように表情を変え、ケンジは素直にヒナたちが怪我をしたという事実を聞いて憤る。シトロンはその時に会った状況を思い出してまた顔を青ざめ、ハルカは苦笑していた。

ハルカはもちろんヒナたちのことを考えて怒ってはいる。でもそれ以上にハルカにとってサトシは絶対なのだ。サトシを怒らせ、さらにはいろんな意味で行動を起こし……つまり、サトシを知る者にとって踏んではならない地雷をことごとく踏みまくったあの少女が生きていられるのだろうかと別の意味で心配していたのだ。まあ、サトシが行動する時はハルカも行動する時であり、ヒナたちを傷つけた分のお礼はするつもりではある。バシャーモと一緒に燃やすぐらいしてやろうかと思える程度には……。もちろんそれはケンジも同じだ。

とにかく、今この場にいる皆が怒るのは無理のないことだ。だがまだまだ常識人であるシトロンはその空気に困惑し、顔を青ざめているのは仕方ないと言えるだろう。このままサトシが行動するまでここにいるのかと思っていた。

——ここでオーキド研究所にある鏡が揺れ動かなければ…。

『ブフォツちよつアーロン押さないでよ！これ意外と痛いから!!』

「ああソレは悪かったね。でもテイナなら慣れているだろう？」

『そうだね慣れちゃったね主にアーロンのせいだ…!!』

「か、鏡から人間が現れたあああ!!?」

「これは興味深い……!」

鏡が黒く揺れ動き、そして光り輝く。その異常な変化にいち早く気づいたサトシが鏡の方へ振り向いた。その行動に気づいたオーキド博士たちもサトシと同じように鏡を見る。鏡が揺れ動いた後、現れたのはギラティナとアーロンだった。

ただしギラティナが後ろにいたアーロンに蹴りだされる形で来たため、サトシ達から見れば鏡から突然現れた金髪の女性が地面に向かって勢いよく倒れるように見える。そして後ろから青い服を着た青年の足が見え、落ち着いて見れば蹴られたんだなど納得できる光景が広がっていた。もちろんこれは、ヒカリから見ればいつもの光景であり、ため息をつく要因でもあつたりする。

だがサトシはそんな漫才のような会話に付き合っているつもりはない。早くあの黒髪の少女を捕まえてやりたいと心から願うからこそ、サトシはギラティナに向かって近づき、話しかけた。

「それで? どうだった?」

『あー……ボチボチ?…つてピカチュウの電撃止めて!サトシ君のポケモンある意味伝説以上だから!——とにかく、今来たのはカロス地方に異変が起きているからだよ』

「カロス地方…ですか!？」

シトロンは思わず叫んでしまった。カロス地方にはシトロンの妹であるユリーカがいるからである。まさか妹の身に何かあったのではないかとギラティナに近づいてから話を聞いた。ギラティナは複雑そうな表情で頷き、口を開く。

『今ユリーカちゃんとカスミちゃんに襲いかかっている連中がいる。どうにもヒナちゃん達を攫った奴等と関係があるみたいなんだ…』

「ユリーカ…僕、カロス地方へ向かいます!!」

「待てシトロン」

「止めないでくださいサトシ!!」

「そういう意味じゃない。止めはしない…けど落ち着け。ユリーカにはカスミがついてるから大丈夫だ」

「どうしてそう言えるんですか…!？」

いまだに怒っているサトシが笑う様子をシトロンは混乱する頭の中見ていた。もしもユリーカに何かが起きたという事を聞かず、落ち着いていたのならシトロンは目の前で笑うサトシに安易に近づいたりしなかつただろう。現にいま、ハルカとケンジは直感で近づいてはならないと分かり後ろに一步下がっている。…ハルカは無意識のうちにだが。他にもギラティナが微妙そうな表情を浮かべ、アロンは微笑みながらもその様子を見守っていた。オーキド博士は鏡の謎が気になりじつくりと観察したいような表情を浮かべていた。

セレナは先程まで呪詛のように殺気を込めた独り言を呟いていたのだが、サトシが笑った瞬間黙り、頬を赤らめたのは言うまでもない。

そしてそんなサトシの笑みを目の前で見たシトロンは一瞬で落ち着き、顔を青ざめ気絶しそうになった。

「カスミもある意味、俺と同じだから」

第二百六十話く秘めたる者には鋭き牙をく

——嫌な予感がした。何か起きるのではないかという、嫌な予感が……。でもその本能に従わず、この場所へ行ってしまったのがそもそもの間違いだったのだらう。

「どいつもこいつも…サトシと旅するといつもこうよね…」

カスミはその日の行動を後悔していた。

「これってまさしく絶体絶命…なの？」

『デネデネ？』

「そんなわけないわよ。むしろ私がいるんだからそうはさせないわ」

カスミたちが来た場所はカロス地方のとあるビル。

そこで水ポケモン専門のショーを行うということのカスミたちは知り、待っている間ヒナたちのことで心配になり不安になってしまいうぐらいなら少しでも気を紛わそうと考えてカスミはユリーカをポケモンショーに連れていくことにしたのだ。

でもその行動自体がそもそもその間違いだったようだ。気がつけばカスミとユリーカはビルの中で黒服の男たちと…その男たちが出した大きくて強そうなポケモンたちに

囲まれていた。もしかしたらこのショー自体が罠だったのかもしれない。何故そのような罠が仕掛けられているのかも、どうして襲われてしまったのかもカスミたちにはわからない。

ただ言えることは、水ポケモンはカスミの大好きなタイプであるし、ポケモンのショーならばユリーカも好きだということ。だからこそ、そのショーの話を聞いて行きたいと思うのは確実ともいえた。そしてビルにいる人間もすべて奴らの仲間なのだろうとカスミは分かった。まず出入り口に入った時点で視線がこちらに集中してきたのだ。その視線の鋭さを感じ取ったカスミは嫌な予感が的中しているのではと考える。そういつた観察力は全てサトシと行動していて身についた力であった。

そして、何かがおかしいとサニーゴをボールから出すのと同時にボスゴドラのはかいこうせんに襲われたのだった。そこから始まった光景はユリーカやデデンネにとつてまさに迅雷風烈と言えるだろう。

ユリーカが周りの状況を理解することができたのは、相手の奇襲によって襲いかかったはかいこうせんとサニーゴのバブルこうせんで相殺し、大きな衝撃音を感じ取った後だった。

第三者から見ればユリーカの言うとおりの圧倒的に不利な状況だと思はずだ。ユ

リーカやデデンネ自身も絶体絶命だと不安になっていた。

だがカスミはそんな不安などない。むしろ集団で襲いかかってきた奴らを見て鼻で笑っていた。最初の奇襲でさえ成功しなかったのだからその強さは計り知れている。だが黒服を着た男たちは奇襲が成功しなくても慌てることはない。むしろ包囲網を徐々に迫らせて来ようとしているぐらいだ。

それを見てカスミはため息をついた。

「…もしかしてアンタ達ってヒナちゃん達を連れ去った仲間？目的は何なのよ」

『サニー！』

「…何も言わないね」

『デネデネ』

「沈黙は肯定…ともいえるわよ。とりあえずアンタ達は私達を襲おうとしている。そしてヒナちゃん達を連れ去った仲間でもあるってことよね」

『サアニ…！』

何も言わない黒服たちはこれ以上カスミの話を聞こうとしないのか、一斉にポケモン達に向かって指示を出した。

「逃げないと……でも逃げれないよ！」

『デネデネ！』

「……………」

その一斉攻撃にカスミは眉をしかめる。囲んできたポケモンたちが大技を撃とうとしているのか少々時間がかかっているのだが、その間の気味の悪い威圧感に恐怖を覚えたユリーカがカスミの裾を握りしめ顔を青ざめる。もちろんバックの中にいたデデンネもユリーカと表情は同じだ。

「私さあ……そういうの——　大っ嫌いなよね」

カスミの眩き声の後放たれた数々の大技。はかいこうせんはもちろん、ギガインパクトやかみなり、だいまんじやぜったいれいどなど、一撃当たれば死んでしまうというような技を彼らは使用したのだ。その卑怯ともいえる手段と、大人数でまだトレーナーではない幼い少女と一人のトレーナーを狙った行動がカスミは許せなかった。許せないからこそ、怒ったのだ。

サトシのように、笑いながらも——。

爆風と轟音があたりに響き渡る。この中心に居たのがカスミたちではなく一般人だったなら、間違はなく死んでいただろう。それほどまでに強い攻撃の数々が襲いか

かつてきていた。

だが、黒煙が晴れ…見えてきたのは——カスミたちの無傷な姿と、一匹の黄色いポケモンがカスミの目の前で首を傾けている姿だった。

「コダック…?」

『「デネ?」』

サニーゴをボールに戻し、コダックに変わっていた状況にユリーカ達は茫然としながらも呟く。

——ユリーカとデデンネはカスミのコダックのことを知っていた。一度紹介されて会ったことがあるが、その時に見たコダックの印象はハリマロンのようなトラブルメーカーであるということ。バトルではあまり頼りがいがないそうだなと…そう密かに思っていたのだ。でも今カスミとユリーカ達を守るかのように立つコダックの姿はいつものようなおとぼけな感じはしない。首を傾けてはいるが、それは力を使っているからだとユリーカとデデンネはすぐに理解した。目の前にいるコダックはピカチュウのようだと…そう感じたのだ。

「コダツク。手加減なんていらぬわ。全部ゼーんぶ…やっちゃいなさい！」
『…コパア!!』

「っ」

コダツクの一鳴きによって周りが変化していく。カスミとユリーカとデデンネ以外の空中が歪む。そして無重力状態のように何もかもが浮き始める。人間もポケモンも、その部屋にあった家具などもすべてが浮き上がり、うまく動かすことができなくなつた。窓ガラスがガタガタと揺れ、次第にヒビが入り始める。部屋がぐらぐらと揺れ動く。これが全部コダツクの力なのかと、ユリーカは圧倒された。

そして、まるで宇宙に来ているかのような光景にユリーカとデデンネの目が輝く。

カスミは笑いながらコダツクに向かって言う。

「…コダツク、サイコキネシス」

『ゴパア!!』

——その瞬間、張りつめていた空気が爆発した。中心にいたカスミやユリーカ、そしてデデンネとコダツクの周りで実際に爆発のような衝撃波が起きたのだ。その衝撃に巻き込まれたポケモンたちは一撃で倒れ込み、トレーナー達も壁に叩きつけられ、呻き声を上げる。むしろよく壁ごと吹っ飛ばされていかなかったものだと見えるだろう。そのぐらいとても強い力のこもった攻撃だった。ユリーカとデデンネは通常とは違うコダツクの強いサイコキネシスに目を白黒させていた。

「……………すごい」

『……………デ、デネ』

ほとんど感情のこもっていない声でユリーカとデネは思わず眩いてしまった。

「フン！バトルに卑怯な手を使ったんだから、これぐらいは許されるでしょ！」

『コツペア…？』

——力を使った後のコダックはいつも通り首を傾けて、頼りなさそうな表情でカスミを見ていたのだった。

.....

「ねえカスミ！この後どうするの？」

『デネデネ？』

「そうね……とりあえずサトシに連絡ぐらいいは入れた方が良くもしいわ」

「あ！あとジュンサーさんにも!!」

『デネデネ!』

戦闘不能になったため、コダックをボールに戻したカスミは、倒れた黒服の奴らを縛っていく。そして縛り終えた後、カスミたちはこの状況をサトシに伝えた方が良くか

と話し合っていた。

「っ」

「あ！逃げた！！」

『アネ！！』

「待ちなさい！！！」

だが、その隙を狙われたのか、いつの間にか縄を解いた一人の男が逃げていくのを見つめる。扉に向かって走ってるため、外へ逃げようとしているのだろう。

もしものことを考えて捕まえないければとカスミがボールを握りしめた時だった。

「随分と面白いことしてるじゃねえか」

『ピイカツチュ』

『ギユ…ギユルルル…』

「アンタどっから出てくんのよ!？」

「わあ!見たことないポケモンだ!」

『デネエ!!!』

扉前の地面の空間が切り裂かれたせいで逃げるができなくなった黒服の男と、そいつを追いかけていたカスミたちが見たのは切り裂かれた空間からやって来たポケモ

ンとサトシの姿。ポケモンは身体が大きいせいか裂けた空間から見えるのは頭の部分だけだ。その頭に乗るのがサトシであり、腕を組んで仁王立ちでいる姿には威圧感が込められていた。そしてサトシの肩にはいつも通りピカチュウが乗っている。電撃をビリビリと放っているせいか、頭だけ出ているポケモン——パルキアが怯えてしまっていた。

その常軌を逸した姿にカスミはまたかため息をつき、ユリーカとデデンネは目を輝かせてそのポケモンを見る。そして逃げようとしていた黒服の男は扉から逃げる事ができないと理解して後ずさった。でもそれを許さないのがサトシである。

パルキアの頭から地面へ降り立ったサトシは無表情のまま男の目の前に立つ。

「あの女の居所話してもらおうまで——逃がさねえぞ？」
『ピイカツチュ！』

「…どつちが被害者なんだか。はあ、全く仕方ないわね」

「わーい！見たことないポケモンさん!!あなたは何でそんなに怯えているの?」

『デネデネ?』

『ギユルルウ…』

———
ある意味、混沌とした状況が出来上がった瞬間でもあった。

第二百六十一話く終わらない、終わらせないく

「サトシ！良かった無事だった！」

「サトシなら怪我すること絶対にならないと思うかも？」

「ユリーカ！無事かい!？」

「あ、お兄ちゃんだ！このポケモンさんってどんなお名前なのか分かる？」

『デネデネ！』

「え、ええつと…というより、何なんですかこの状況は…」

セレナたちがサトシと同じようにバルキアの空間からやって来て、見た光景はまさにカオスだった。バルキアは怯えながらもやることはしたとばかりに空間に引っこんでいったためユリーカが行っちゃった!と叫んだり、シトロンが動いたら駄目だよと諭したりいろいろとカオスではあるのだが…それを超えるようなことをサトシは行っていた。

まず、縛り付けられている黒服たちがピカチュウの電撃を目の前で浴びるかもしれないぐらい迫られ、そしてサトシがその黒服のうちの一人の胸ぐらを掴み、無表情で持ち上げている。もちろんサトシは見た目まだまだ子供なため持ち上げると言っても上半身までなのだが…。

このままならばサトシ達の脅しにも似た尋問にすぐ屈服し、黒服たちがあの少女の居所を吐くのには時間はかからないだろうと思っていた――。

だが、サトシが表情を変えたことによってシトロンたちはすぐその考えを捨てる。

「これは…」

「どうしたのよサトシ?」

胸ぐらを掴んでいた黒服を乱雑にだが離し、黒服男たち全員のある一点を調べ始めた。その表情や雰囲気は今まで感じてきていた鋭い冷気がなくなり、何かを理解したような諦めを含んでいる。

そしてサトシがため息をついてピカチュウに向かって口を開く。

「……ピカチュウ、【あれ】に向かってアイアンテール」

『ピ?…ピイカツチュ!』

「何…? どういうこと?」

「ああー!! あれってもしかしてイツシユ地方で見た首輪…かも!？」

「首輪……？」

「あの黒服たちがつけているチョーカーのことでしょうか？」

「ハルカ！あれって一体何なの？」

『デネデネ？』

「あれは……うん。実際に見た方が早いかも。でも一応言っておくと彼らもある意味被害者になるわ」

「被害者……ってことはもしかして……」

「うん。カスミの考えていることで合っているかも」

サトシが見つけたのはイツシユ地方のある戦いで見たチョーカー……いや、【首輪】だった。黒服に隠されていて見えなかったため気づかなかったが、胸ぐらを掴んだことで露わになったそれに、現状の敵をようやく理解することができた。

だからこそ、サトシは目の前にいた敵を被害者と認定したのだ。イツシユ地方で見た……あの生き物を操る首輪をした彼等だからこそ。

「っ……ハ、ハハハは………ヒイ?!」

「落ち着け。ここに敵はいない」
『ピイカ』

「…一応言っておくけど、首輪してる時の記憶って残ってるものなの？」

「うーん…どうなんだろう。ポケモンは記憶あつたみたいだけど、人間はなかった…
かも？」

「記憶あつたなら怯えるのも無理ないわね…」

「正氣に戻った…ああ、そういうことですか…なんて酷いことを…！」

「どういふことなのお兄ちゃん？」

『デネ？』

「…ユリーカは知らなくてもいいことだよ」

「ぶー！子ども扱いしないでよ！」

『デネデネ！』

首輪を外され、我に返つた黒服たちが真つ先に見たのは目の前にいたサトシ。サトシを見て敵なのだと判断し怯える様子にサトシは落ち着いてくれと怒気を隠しながらも言う。

だが、黒服たちの表情は変わらない。むしろ怯えの中に戸惑いだけがあるような感じだ。サトシを良く知る者ならば怒らせてはいけない強者だとすぐに分かるが、初対面から見れば見た目は何処にでもいるただの子供だ。そんな子供に怯える要素が何処にあるのだろうか？サトシは思えた。…まあ、あの女ならば話は違うかという考えも思い浮かんだが、それでも敵意は見せていないのだから、怯える要素は何処にもないだろうと考える。

一方カスミたちはサトシを見て怯えてしまっているのは記憶があれば仕方ないことだと考えて納得していた。冷静にして落ち着かせた方が良くかとサトシを彼らから離そうかどうか迷ったが、今のサトシに近づいていい状況なのだろうか？と悩む。ここにいるセレナならばそれをものともせずサトシに近づくだろうか？今の彼女はサトシに見惚れてしまっているため意味がない。

黒服たちは困惑し、怯えながらも言う。

「何言つて…お、お前が俺達を…そうだ、俺のポケモンは何処へやったんだ!!」

「………何言ってるんだ?」

『ピイカ?』

「とぼけるな! お前が俺たちをここに連れてきただろうが!!」

彼らの言っている内容が理解できないとサトシは考えた。もしかしたらかつての口ケツト団のあの三人組のようにサトシの変装をした人間が連れてきて首輪をつけたのだろうかという考えが思い浮かぶ。あの首輪を作った張本人が敵だとしたらそれはあり得るかもしれないと思えたのだ。

だが、その思考は一つのスピーカーから聞こえてきた声によって消え去った。

《ハローハロー元気にしてますか? 笑える余興をありがとう人間ども。暇つぶし程度にこのビル用意したのに一瞬で計画を無意味にしたのには笑っちゃったぜ! まあこれぐ

らいなら想定内なんだけどな！もはやこのビルはゴミ同然だしいらなかなーって思うんだけどそれでいいよなあ。いらぬ玩具はゴミ箱につてやつ？ゴミを片づけるのも俺がやらなきゃだし？

というわけで、さようなら》

「ツツ逃げろ!!」

スピーカーから聞こえてきた感情の籠っていない声が聞こえなくなった途端。嫌な予感がしたサトシが叫ぶのと同時にビル全体が大きく揺らぎ崩壊する――

――そして次の瞬間、部屋のいたるところから爆発音が響き渡った。

第二百六十二話～ようやく始まる～

ビルが倒壊するという大騒ぎの中、サトシは連れてきていたピジヨットに乗って崩れゆくビルから飛んで離れていくことができた。もちろんサトシ以外にもセレナ達人間がいたが、それは一緒に来ていたミュウが技の1つであるへんしんによつてサトシのピジヨットと同じ姿になり背に乗せて空を飛ぶことで回避できた。そして操られていた人間たちやポケモン達は同じくサトシが連れてきたヨルノズクの力強いねんりきによつて地上へと降ろされる。

ビルに集まってくる野次馬な人々の視線をもともせず、サトシ達はピジヨットに乗り飛んでいくことができたのだった。

——サトシがまず先にしたことは、プラズマ団が復活しているかどうかという情報を調べるということだ。あの操られていた人間たちが首につけていた機械はイツシユ地方でヒナやレシラムが実際につけられている場面を見たものだからこそ、プラズマ団が関与しているのではないかと考えたのだ。そして、その機械を使って伝説を操ろうとしたプラズマ団の残党がいるかどうかを探してもらうためにここまでやって来たのだった。サトシ達がやって来たのは、世界の裏側に位置する反転世界。つまり、ギラティナが管理する世界だった。

プラズマ団の残党がいなくても、調べるうちに何かしらの手掛かりはつかめるかもしれないと思つたからこそ、ミユウに頼んで反転世界まで連れてきてもらった。すべではあの操られた機械を使った連中を探すため。そしてヒナ達を傷つけたあの少女を見つげるためだった。カントー地方からカロス地方までの距離は遠いため、何処にアジトがあるのか分からない。もしかしたら別の地方にも同じように拠点があるのかもしれない。そう考えたサトシはすぐに見つけられる方法を考えた。

広い世界から一つの手がかりを探すため：奴らを叩き潰すため。

——だからこそ、世界の裏側を管理するギラティナに殴り込みに行き、調べてもらうことにしたのだ。あの黒服の男たちがつけていた操る機械をギラティナに見せて、それに似たものを作っている奴らはいないかどうかを確かめるために。

もちろん、ミュウの道案内によって突然来たサトシ達にギラティナは驚く。

『ちよつミュウ?!サトシ君達連れてどうしたの!?!』

『ミュウ!!』

「良いから黙ってプラズマ団探せ」

『ピイカ』

『理不尽すぎじゃない?!いや探すけど!!というかプラズマ団壊滅したんじゃ…』

「何か文句でもあんのか?」

『ピイカツチュウ?』

『イエナイデス』

「うわーい！ここすつごく楽しいねデデンネ！」

『デネデネ！』

「こらユリーカ危ないだろ!!」

「ちえ…はあーい…」

『デネ…』

「というか、ギラティナがなんか大変そうかも」

「その逆じゃない？あのサトシの無茶ぶり聞いてちゃんと探してるんだから…」

「俺様なサトシも格好良い…!」

「こっちはこっちでいつも通りね…いや、戻ったと言えるのかしら…」

「ああ、もしかしてさっきのセレナの…」

「そういうこと。サトシが怒った時そっくりだったからびっくりしたわ」

サトシ達の異様な雰囲気には圧倒されたのか、冷や汗をかきながらもギラティナはすぐ

さま行動にとりかかると。そんなサトシ達を見るカスミとシトロンはちよつとだけギラティナに同情しつつも苦笑していた。そしてセレナがサトシを見て頬を赤く染め、幸せそうに笑う様子を見て、先程呪詛のように呟いていたあの状態から元に戻ったのだと安堵する。

———セレナたちが会話している間にもギラティナはちゃんとサトシの知りたい場所を探すことに成功していた。普通ならば世界中を見てすぐに奴らのアジトの場所を知ることにはできないだろう。これは、裏側の世界をすべて管理しているギラティナならば容易いことだからこそできたこと。世界からたつた一匹のシエイミを見つけた時のように、ギラティナはすぐにある場所を見つけたことができたのだ。

だが、その建物も罠かもしれないとギラティナは言った。もつと時間をかければ分かることが多いけれど、それでもぎつと調べれば、わざと目立つように作られている操るための機械や大量に用意されたポケモン達のこと、が分かったのだ。そんないかにも怪しげな、ギラティナにとって嫌な予感がする建物の中でも、サトシ達は構わず行こうとする。

「再起不能にしてやる」

『ピイカ』

「ああ…またカオスになるんですね…」

「とりあえず燃やさないと気が済まないかも！」

「燃やすだけじゃない…潰してやるわ」

「ユリーカも一緒に行く！」

『デネデネ！』

「駄目だよユリーカ！危ないんだからお留守番！」

「嫌！私だってできることぐらいあるんだから！ここまで来たらくつついてでもついて行くからね！」

『デデデネ!!!』

「ユリーカ!!」

「ああもう…諦めなさいシトロン。ユリーカは本気みたいなんだから。それにあのビルで襲われたように待っているだけでも危険があるかもしれないし、私たちが近くで守れば大丈夫なはずよ。あとサトシ達の暴走を止めるためにもこのままここに止まっても意味ないし…」

「カスミ…仕方ないな。でも僕たちから離れて行動しちゃ駄目だよ絶対！何かあったらすぐ戻るからね!!」

「わかった！」

『デネー！』

「念のために私のサニーゴと一緒に行動してもらおうわ。だから早く行きましょう。先に行っちゃったあのカオス共の面倒を見るためにも」

『サニー！』

ユリーカは先ほどと同じように留守番をして待っていることができないと叫ぶ。それは、大切な仲間たちが行くところへ自分も行けないという事実が嫌だったからこそ：何か手伝いになれるようなことがあればいいのだと考えて兄であるシトロンに頼み込んだのだ。シトロンはもちろんその頼みを断ったが、ユリーカは頑なであり：カスミが間に入って先程のビルのようにまた襲われたら危ないということやこのままここにいっても意味がないという話を話した。その言葉にシトロンは仕方なく頷き、絶対にユリーカを守ろうと覚悟を決める。もちろんカスミもそのまま連れて行こうとせず、ポールからサニーゴを出して一緒にいてもらうことにした。

『アハハ…行つてらつしゃーい』

そんな光景を見て苦笑しながらも、手を振つて見送るガラティナがいたが、サトシ達は気にせず歩き続けた。

.....

サトシ達が行つて来たのは、カント―地方のとある建物。森の奥深くにある研究所のような建物の一室に彼らはいた。部屋の中は暗く、書物が多く置いてある場所らしい。扉を開けて部屋から出ると、そこは真っ白い廊下が続いていた。長い長い廊下の足元近くにライトがあり、その光りによつて真っ暗やみな空間が照らされている。それでもまだ廊下の先がどのような状態になっているのかが見えずにいた。

まるで嵐の前の静けさのような重苦しい空気と静寂な建物内にシトロンが冷や汗をかく。

「ミュウ、あいつらを呼んできてくれ。多分ここで正解だろうから」

『ピツカ』

『ミューウ!』

サトシは一緒について来ていたミュウに向かってオーキド研究所に待機してもらっている仲間たちを呼ぶことに決めた。そしてその声を聞いたミュウは真剣な表情で頷き、テレポートをして移動していったのだった。

「なんかお化け屋敷みたい!」

『デネ!』

『サニ!』

「こら、変なこと言うんじゃないよユリーカ!」

「でもユリーカの言うとおりかも…誰もいなさそうなのに音が聞こえない？」
「音…？」

「こう…機械が擦れているような…何かが動いてるような…？」

「ちよつと待つてください…それってっ!!」

「起動音か…」

『ピイカツチュ？』

「えっちよつ危ない!!!」

「待つて壁が?!サトシ!!!!」

「何これ凄い!忍者屋敷みたい!!」

『デネデネ!?!』

『サ、サニゴオ!!』

「うわあつありがとうサニゴツ!!」

『サニ!』

「っおいお前等平気か？」

『ピイカア!?!』

「サトシは大丈夫?!」

「俺は平気だ…くそ、カスミ! ハルカ! シترون達を頼んだぞ!」

「そつちこそ暴走するんじゃないわよ!!!」

「わかった!…でもセレナは平気なの!?!」

「はっ? 一緒じゃないのか!?!」

『ピイカア!?!』

「私は大丈夫よ!」

「おいセレナ、そこで待ってる! 危ないと分かったら逃げろよ!」

『ピイカツチュ!』

「サトシが言うなら喜んで!!…って言いたいけど、あの女がいるならできない。絶対に、

許せないから!」

「…なら、危険な行動はするな。死ぬな…あと殺そうとするのも駄目だからな!」

「ええ! 私、ちゃんとサトシの隣に帰ってくるからね!」

サトシ達は長い廊下の先を歩く。薄暗い廊下を歩いていたらハルカが何かの音に気づいて立ち止まった。そして動き出したのは床や壁といった建物自体だった。床や壁

が動きだし、サトシ達の間に壁が新たに作られる。床が動いたことよって広い部屋ができ、上から迫ってきた壁によって三つの道ができたのだ。その三つの道にサトシ、セレナ、シトロンとカスミとユリーカとハルカが別れた。上から迫った壁に押しつぶされそうになったシトロンをサニーゴが助け出したり、セレナが無理矢理にでもサトシの元へ行こうとして逆に孤立してしまったりと騒動があつたが、何とか壁越しに怪我がないかどうか話を聞いて動き出す。サトシはピカチュウに頼んで壁をアイアンテールで破壊してもらおうかと考えたが、建物内に響き渡る不気味な起動音のせいで余計なことをすれば逆に危ないと考えた。ヒナたちを狙った手口やあのビルを破壊したやり方から、相手は正当な方法を使つてこないだろうと分かっていたからだ。そしてタイミングよく動き出した壁を見て奴らが何処かで見ているのではないかという考えもあつた。隠しカメラのような機械は薄暗いせいで見つけることができないが、誰かが見ているのは確かだろうと考え、ミュウにレポートでセレナたちと無理やり合流すると言う手段も使えないだろうと分かった。…まあ、ミュウは仲間たちを呼びに行つているため今はサトシ達の傍にはいないが。

サトシは自分と同じように一人でいるセレナのことが心配になつたが、このままでもしようがないと考へて覚悟を決める。

さつさと終わらせて帰るといふ覚悟を――。

そして周りはそれぞれ、行動を開始した。シトロンたちは無事サトシ達と合流するた
めに…そしてサトシは主にアクロマを探すために。セレナは、ヒナたちを傷つけ…そし
てサトシにキスをした少女を探すために歩き始めたのだった。

第二百六十三話　兄は……

「ああ、ようやく来た」

「その声……あのビルで最後に喋っていたのはお前か」

『ピカピ……?』

「ビルっていうと……ああ！あのビル！あの時は面白かったな。ちよつと物足りなかったけど楽しめはしたぜ」

「……そうかよ」

『ピイカツチュ……』

薄暗い廊下を進んだ先でサトシとピカチュウが見た光景は、明るく照らされたバトルフィールド。そしてその奥に立っているのはサトシと同じ格好をした白髪の少年。

白髪でなければ姿も形もサトシと全く同じな少年が立っていたのだった。

その見た目にサトシは一瞬だけ驚いていたがすぐに無表情に戻り、ピカチュウも表情を引き締める。その様子を見て少年はとても楽しそうだ。まるで、暇つぶしにちょうどいいものが来たとても言うように…。

「アクロマは何処だ」

『ピイカ』

「…あいつの居所が知りたい？なら俺とバトルしようぜ。お前が勝ったら教えてやってもいい」

「ポケモンバトルなら受けて立つ」

『ピイカツチュ!!』

アクロマの名前を出した途端、少年の表情が一瞬サトシと同じ無表情に変わる。すぐに元の笑顔に戻ったが、サトシが怒った時のような表情をした少年にピカチュウはまた驚いた。今は笑顔と無表情で表情が全然違うが、まるで双子のように存在する彼らに内心で困惑していた。そしてピカチュウは以前起きた悲劇を思い出したのだ。あの時、自分自身と同じ存在が作り出されたあの島での出来事を……あのミュウツーと最初に出会った時のことを――。

「ピカチュウ、今は考え事してる暇ないぞ」

『ピ……ピイカツチュウ!』

「何だ。そのピカチュウでバトルする気か?」

「いや、その前にバトルしたいって主張してる奴がいるからな……ブイゼル、キミに決めた!」

『ブイイ!!』

ピカチュウが考え事をしているのを見抜いたサトシが今は集中しろと言ったためにすぐに思考を目の前の少年に移す。そして少年はそんなサトシ達の様子を見てバトルはピカチュウでやるのかと聞いてきた。だがサトシは首を横に振って違うと否定する。

この建物に入る前から一緒に来ていた仲間の中でボールから出ようと激しく揺れていたブイゼルをバトルに出そうと思ったのだ。もちろんブイゼル以外にもボールはグラグラと揺れているが、小型でスピード戦に向いているブイゼルで行こうと決めていた。そして、ブイゼルと同じく小型でスピードが速いピカチュウには何かあった時のために待機してもらおうと決める。

「へえ…ブイゼル……か」

自分の唇を舐めた少年は目を細めて呟き声を上げる。その声を聞いていたサトシとブイゼルは何かあってもすぐ動けるように集中し始めた。ピカチュウももちろん周りの様子を窺いながらもバトルを見つめる。

「行け、ドンカラス」

『カアアアアッ!』

ボールから出したのは以前見たことのあったドンカラス。だがそのドンカラスの体格や羽の艶などがすべて「きちんと育てられている」とサトシは感じた。もちろんピカチュウやブイゼルも同じだ。白髪だが全く同じ見た目をした少年に、サトシ達はドンカラスを育てたのがこの少年なのではないかと考える。ドンカラスの様子は少年に懐いているようにも見えるし、強制的に操られている風には見えない。だからこそ、サトシは少しだけ少年に興味をもって話しかけた。

「お前名前は？」

『ピカピ…ピカチュウ？』

『ブイイ』

「あ、そういえば言っただけじゃなかったな。俺はクロ！その名の通り、普段は真っ黒な服を着てるんだぜ！」

『カアア！』

「じゃあなんで俺と同じ服着てんだよ…」

『ピイカ…』

『ブイ！』

「なんせお前はオリジナルだからな。コピーはコピーらしく、お前と同じ服を着て会いたかったんだ。まあ、シロはそうは思っていないみたいだけど…」

「シロ?…つてやっぱりお前…俺のコピーか」

『ピカピ…』

『ブイ…』

「文句ならアクロマに言えよ。俺は知らねえからな」

『カアアア!!』

「ああはいはい。バトルな…ほら、やろうぜオリジナル!!」

上機嫌でバトルをする時のサトシのように、少年…いや、クロは笑いながら言う。クロの見た目から察していたピカチュウは以前のミュウツーと会った時のコピーたちのようにあのクロもそうなのかと納得する。そしてブイゼルはサトシと同じコピーだと言うのならバトルも強いだろうという別の欲求が出ており、サトシは無表情で頷いた。

全部全部、アクロマがやらかした仕業なのだと言うことを――。

【シロ】という言葉に少しだけ嫌な予感がするが、今は目の前のことに集中するべきだと考えて早くバトルがしたいと叫ぶドンカラスを見つめた。そして始まったポケモンバ

トルは、いつもと変わらない通常のバトルだとサトシは感じていた。いつも通りなのが不気味なほど、普通のトレーナーと一緒に感じていた。

「ブイゼル、アクアジェットからのれいとうパンチ！」

『ブイイイ!!』

「おっとそうはいかない。ドンカラス、つじぎりしながら避ける」

『カアアア!!』

アクアジェットで一瞬でドンカラスの目の前に移動したブイゼルが、ドンカラスの顔面に向かってれいとうパンチを行おうとする。だがそれはつじぎりによって突風が吹きながらも避けられる。もちろんつじぎりを避けることには成功したブイゼルだったが、ソレと同じくれいとうパンチを避けられたことを悔しがった。

そんな通常と変わらないバトルだったと言うのに、クロが突然不機嫌そうな表情をしたことよって空気が変わった。

「面白くない。つまらない…なあドンカラス、そうは思わないか?」

『カアアアアア!』

「何言ってるんだお前…」

『ブイイイ!!』

「せつかくオリジナルとバトルしてるんだぜ?ならちよつとぐらい趣向変えても良いだろ?だから、オーベム、サイコキネシス」

『ウイイ』

『ブイ!?』

「っお前!」

「対等なバトルだつて誰が決めた?誰がこのまま普通にバトルしていいつて決めたんだけ?だから俺はやりたいようにやらせてもらうぜ。ドンカラス、ほろびのうた」

『ガアアアアアアアアアアツ——
♪——』

『ブツブイイ!!!』

『ピイイカア!!!』

「ふざけてんじやねえぞゴルア!!ピカチュウ、10まんボルトでオーベム達を止めろ!」
『ピ…イカツチュウ!!』

面白くなさそうな表情をしていたクロがいきなりオーベムをボールから出したこと
によつて状況は一変する。オーベムがブイゼルとサトシをサイコキネシスで止め、その
間にドンカラスがほろびのうたを歌い始めたのだ。その不協和音に近くにいたブイゼ
ルやピカチュウが苦しそうに表情を歪める。オーベムも同じようにほろびのうたの影
響を受けているはずなのだが、何も感じていないかのように表情は涼しげだ。いや、あ
るいは「そうなる」ように育てられたのかもしれない。

ここでオーベムがサトシのことをサイコキネシスで止めていなかったならサトシ自

身がドンカラスを止めに行っていたことだろう。だがサイコキネシスが発動している今、サトシ自身何かをすることはできない。

だからこそ、唯一オーベムの技を受けていないピカチュウに攻撃を指示したのだが、それを予測していたのかクロは歪んだ笑みを浮かべながらも口を開く。

「ピカチュウ、こつちも１０まんボルト」

『ピツカツチュ！』

『ピカツ?!』

「色違いの…ピカチュウだと…つブイゼル、このまま電撃に耐えきれるか?」

『ブイ…!!』

「ならピカチュウ!部屋全体に１０まんボルト!!」

『ピイカツチュウウウウウツツ
!!!!!!』

「肉を切つて骨を断つ戦法か。やるじゃん、オリジナル」

『ピイカツチュウ！』

『ウイイ』

クロの後ろから飛び出してきたピカチュウによってサトシのピカチュウの攻撃が防がれる。クロのピカチュウはサトシのピカチュウと違って色が濃く、色違いだと分かる。だが今は驚いている暇はないと考えてサイコネシスを受けているブイゼルに向かつて弱点となる電撃に耐えきれるか質問する。ブイゼルは強気な笑みを浮かべて当然だと叫んだため、ピカチュウに向かつて部屋全体に10まんボルトを仕掛けてもらった。放電状態となったピカチュウを止めることができず、オーベムがサイコネシスを解いてとっさに避け、そして歌い続けていたドンカラスは電撃に直撃して戦闘不能となったのだった。それを見たクロは特に何の感情もなくドンカラスをボールの中へ戻す。

そしてピカチュウの放った電撃はもちろん動くことのできなかつたブイゼルにも直

撃し、大ダメージを負っていたのだが…そんなものともしないとでもいうかのように震える足を無理やり立たせてからクロたちを睨みつける。

「ブイゼル、戻ってくれ」

『ブイ…ブイイ!』

「その状態で無理に戦うな。…でも、サンキューな」

『ブイ……ブイイ!』

『ピツカア!』

通常のバトルとは違った行動をしたクロに油断はできないとサトシは考えて無理やりバトルを続行させようとするブイゼルを止め、ボールに戻した。ブイゼルはボールに戻る時もまだ不満そうな顔をしていたが、それでもサトシの言いたいことを理解し、納得してくれたようだった。ピカチュウは前を見てクロたちのことを警戒し、ブイゼルはそんなピカチュウに向かって負けるなど叫ぶ。その声を聞いたピカチュウは当然だと言うように叫んだ。

「じゃあバトル続行しようぜ」

『ウイイ』

『ピイカツチュ！』

「てめえのそれはもうバトルとは言わねえよ。だから、頭に直接常識を叩き込んでやる」
『ピツカア!!』

このままバトルに似た乱闘を行うとサトシ達は考えていたのだ――

下に起きなければ。

地響きにも似た揺れと轟音がサトシ達のちようど真

第二百六十四話〈決めたのは自分のため〉

サトシ達がバトルをしている頃、セレナ自身もあるバトルフィールドへやって来ていた。だが、バトルフィールドといっても、そこには誰もいない、薄暗い大きな部屋のようにも見えたのだった。

「誰もいないわね……」

セレナは周りをしつかりと確認してから独り言を呟き、すぐにバトルフィールドの奥に繋がる道へ行こうとしていた。すべてはサトシを…あの女を探すために。

だが行こうとしていた道の先から誰かがこちらへ近づくと足音が響く。セレナはその足音を聞いて立ち止まった。そしてフォッコをボールから出して警戒態勢を整える。

立ち止まって見えてきたのは、サトシやセレナにとつて因縁があり…探し続けていたあの白い少女だった。

「久しぶり……かな？いきなりだけど死んで！」

『ドオオオラアア！』

「くっ！フォッコ、かえんほうしゃ!!」

『フォッコ!!』

白い少女はセレナに姿を見せるなりいきなり歪んだ笑みを浮かべてから隣にいたペ

ンドラーにどくどくの技を仕掛けさせてきた。セレナやフォッコを殺そうとする凶悪な攻撃を見てセレナ達は反射的にそれを避け、白い少女を鋭く睨みながらもフォッコに向かつて攻撃を指示した。でもそれを軽やかに避けたペンドラーと、ペンドラーに乗った少女にセレナは思わず舌打ちをする。その派手な舌打ちに少女が肩をすくめていたが、セレナは気にせず睨み続けていた。

——敵意を隠さないのは……目の前にいるのがサトシ達の仇であり、セレナにとつての許せない敵であつたからだ。

殺して潰して……二度とサトシの目の前に現れないようにしたいほどの憎き少女が目の前にいるのだから、敵意を隠す必要なんてない。そうセレナは考え、感情のまま行動をしている。

その事実白い少女は楽しそうに笑う。

「あなたのこと、覚えてる。クロが唯一興味を持ったんだもの。あと、【お兄ちゃん】も

ね」

「何をいつてるのか分からないし、分かりたくもないわ…とにかく叩き潰してやりたいのよ！フオツコ、かえんほうしゃ!!」

『フオコツ!!』

「フフ…せっかちな人。ペンドラー!どくづき!!」

『ドオラアアアアツ!!』

「躲してから、めざめるパワー!」

『フオツコオオツ!!』

セレナの強い負の感情と、少女の歪んだ感情がぶつかりあう。フオツコとペンドラーもその気持ちを感じ取ったのか、気迫漂う雰囲気をお互い出しあい、攻撃へと転化する。だが同じ威力なのか…それともわざと手加減しているのだろうか…毒と炎の攻撃がぶつかり合うだけでどちらかが不利な状況にはなっていない。

不自然なほど、ちゃんとしたバトルが成立していたのだ。

——だが、少女は何を思ったのか、いきなり楽しそうに微笑んできた。それはまるで、サトシがバトルを楽しんでいるかのように、サトシと同じような笑みを浮かべたのだ。いつもなら愛しいと感じてしまう表情を見て、セレナは一瞬動きを止める。その隙を逃さず、少女は仕掛けてきた。

「[キリキザン]！アイアンヘッド!!」

『ツツ!!』

「痛ツ!!」

『フォコツ!!?』

後ろからやってきたキリキザンがセレナに強烈な頭突きにも似た攻撃を食らわせる。隙ができていたセレナにそれを避けるすべはなく、キリキザンの素早い攻撃によって壁へと叩きつけられた。それを見たフォッコがすぐにセレナのもとへ近づき、怪我がないかどうかを調べる。

セレナはキリキザンの攻撃をもろに受けた腹を押さえ、痛みに耐えながらも少女を睨み付けていた。フォッコも同じように少女と敵であるポケモンたちを睨みつける。

それを見て、少女はさらに笑いながら口を開いた。

「ペンドラー、フォッコを吹き飛ばしなさい。そしてどくづき」

『ドオラアアア!!』

『フォッコ!?…ツ!』

「フォッコ!?!」

「——おっと、行かせない。キリキザン、【捕まえなさい】」

『ツツ!!』

「くっ!…離しなさいよ!!」

吹き飛ばされ、セレナのように壁へと叩きつけられたフォッコを見て、痛む身体を無理やり動かしてフォッコのもとへ向かおうとする。だが、それを見た少女がキリキザン

に指示を出したせいで髪を無理やり掴まれ、行動を抑えられた。抵抗しようとする鋭い刃で押さえつけられ、首に傷をつけられる。無理やり動けば重傷を負わせるのだというような行動に、セレナは動けずにいた。

少女はセレナの怒鳴り声に首を傾けて、歪んだ笑みを浮かべた。

「何で？なんで離さないといけないの？なんであなたもそんなこと言うの？…あ、そっか！クロが言ってたもんね。あのニセモノが私の玩具のように、「お兄ちゃん」の玩具になるんだって！」

「…何を、言ってるの？」

「あなたは、「お兄ちゃん」を愛してるけど、「お兄ちゃん」はあなたを愛していないわ。【お兄ちゃん】が…サトシが興味を持つてるのも、ただの仲間だからでしょう？愛してるのに愛されないなんて、可哀想」

「っ……………」

サトシに似た笑みを浮かべながら、少女は言う。その言葉はセレナを挑発しているように見えるが、すべて事実だったのだ。サトシがセレナを愛していないのも、仲間として行動をしていると言うことも…。笑みが同じだからこそ、その言葉が酷く突き刺さる。

「全部ぜんぶあなたの独りよがりだったんでしょう？好きだからそばにいたいのも、あなたの我が儘。【お兄ちゃん】はそんなこと望んでないのに——」

「——知ってるわ」

少女の言葉を遮るかのように、セレナが感情を抑えた声を出す。まるで、胸の内に隠していた強い衝動を押しさえつけるかのような声色で言うその言葉に、少女が歪んだ笑みを浮かべた。

「へえ…：なら、あなたは分かかってやってたんだ。【お兄ちゃん】に迷惑なことも、無理やり——」

「——だからなに？愛してるなんて感情…サトシに伝えるにはこうするしかないじゃない。サトシはもう、私の手に届かない位置にいるんだから…私がサトシの隣に立てるまでに、誰もそばにさせないためには…こうするしか…」

「それっていつになるの？」

「っ…」

セレナは言葉を詰まらせた。少女の言うように、どのくらい時間をかければいいのか分からないからこそ、不安があつたからこそ、今のセレナの行動があるのだと、少女がそう指摘したからだ。サトシが嫌がる好意を口に出して言うのも、やきもちを妬いてサトシの行動を制限しようとしていたのも全部全部自分がサトシと同じ位置に立てるまでの対策だった。サトシがセレナ以外の女性を見ないように…自分以外の生き物と恋をさせないようにするための方法だったのだ。

少女はその言葉を聞いて面白そうに言った。

「フフ…結局は自分のためにやってるんじゃない！あなたの気持ちか【お兄ちゃん】に迷惑をかけてるのよ。自分のために行動し、気持ちを押しつけているんだわ!!」

「迷惑…ね…」

セレナは笑う。少女のように、歪んだ笑みを浮かべながらも、笑う。その表情は他人から見ればすぐに消えてしまいそうな儂い印象をもたせるだろう。セレナ自身が誰も見ても美人だと言えるからこそ、その印象は強い。だが、サトシ達から見れば強い気持ちを押さえつけ、暴走した時のように歪な笑みを浮かべていると見えただろう。

笑いながらも、徐々にキリキザンの拘束に抵抗する力を強めるセレナを見てキリキザンが首元に刃を突きつけようとした。そんなキリキザンの行動にセレナは動じない。

セレナは髪の毛を掴まれている部分に向かって自分から手に取り、無理やりキリキザンの刃となつている部分で切り取ったのだ。切り取ったことによつて拘束がなくなり、すぐにキリキザンや少女から離れる。

そんなセレナの行動に、フォッコを押さえつけたペンドラーと、セレナを拘束していたはずのキリキザンが驚愕する。もちろんフォッコもだ。

——だが、少女は動揺しなかった。

「ありがとう…あなたのおかげで少し目が覚めたわ……。迷惑になるのなら…感情を押しつけているのなら…私はサトシのために動く。愛しているからこそサトシの隣に立ってみせる。隣に立つためなんだってするわ！サトシを守る盾に、サトシの矛になってみせる！いつかじゃない、今すぐにでも！」

「…その答えが、切り刻まれた髪の毛ってことかしら」

乱雑に切り取られた髪の毛は、まるで最後にあつたヒナのように、肩まで短くなつていた。唯一ヒナと違うのは、その瞳の強さだろう。暗く深く沈んでしまつたヒナの瞳と違い、セレナは前へ進もうとする力強さと、その意志の強さがあつた。

少女はその違いを感じとり、大声で笑つた。

「そう…そう！あなたを気に入つたわ！ニセモノとは違って、壊しがいのあるイキモノ！

…私はシロ！何色にも染まれるのよ！」

「…シロ…ね。覚えたわ、その名前を——あなたを殺すまで、忘れないでいてあげる」

お互いに睨み合い、セレナはヤンチャムのボールを手にとつて戦おうとする。

すべてが終わるのが、どちらかが壊れるまで……そんな雰囲気の中か

——
やってきました。

「あら、あなたがヒナちゃんを苛めた子？」

第二百六十五話くその伝説は受け継がれたく

サトシ達は現状を見守っていた。見守るしか方法がなかったのだ。

今回の騒動を起こした二人のクローンを正座させ、説教しているこの状況を見ているだけで困惑しか浮かばないサトシとは違って、シトロンたちは遠い目をして現実逃避していた。セレナはサトシと同じように困惑し、現状の把握をしようとしているだけだが、後からやって来た伝説のポケモン達や兄のポケモン達も、そしてシトロンたちも現実逃避するとともに納得していた。

サトシが最恐なのは遺伝のせいだったのだということを一。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

これは、サトシ達がバトルをしていた時間まで遡る。

突然の地響きと轟音が足元の真下に響いたと思つたら、サトシ達のだ真ん中に大きな穴ができ、そこからやって来たのは伝説たちとポケモンたちだった。

それを見たサトシはマサラタウンで待つていたポケモンたちが来たのだとそう思つていた。援軍が来たのだと……だがその予想は違つていた——。

サトシ達が見た事実は誰もが目を疑う光景と言えるだろう。

大穴から出てきた人間とポケモンたちに、サトシ達は実際に驚き一瞬行動を停止してしまふぐらいには……。

「…かあ…さん？」

『ピイカツチユウ？』

「あらあら…楽しそうなことをしてるわねえサトシ」

『ギヤアオオオオオオオオオオツッ』

サトシの母であるハナコとホウホウが出てきたことによつて事態は余計に混乱していった。

サトシの母の近くにはシトロンたちもいた。だがシトロンの表情は一緒にやつて来たミュウツ―たちと同じように青ざめ、恐怖で震えている。カスミはため息をつき、ユリーカとハルカは凄いと云つて騒いでいる。

そしてハナコはサトシにとつて忘れられない少女を優しく抱きしめていた。その少

女の表情は安堵と恐怖、そして期待がせめぎ合っているように見える。そんな少女を睨みつけているのが何故か髪の毛が異様に短くなっているセレナであり、その状況によってサトシ達の思考は停止したのだった。

そんな彼らの事情など知るわけもなく、ハナコは一步一步サトシ達へ近づく。

もちろん少女…いや、シロを抱きしめたまま。

「あなたがこの子の言っていたクロ?…じゃあ、一緒にお説教しなくちゃよね。」

———
そこで正座しなさい

サトシが激怒した時と同じように、冷たい笑みを浮かべたまま言う言葉にクロは一瞬でその表情を恐怖へと変える。

クローンとはいえ、やはり母には逆らえないのだろうかとサトシは遠い目をしながらもそう考え、そして母が抱きしめていたシロをも正座させて説教を始めたことよって2人に軽く同情してしまった。：ほんの軽く。

「なんでこうなった。といひかなんでホウオウがいるんだ…」

『ピイカア…』

ホウオウを近くで見たのはほとんどないサトシにとって無意識ながらも凶鑑を開いてその項目を見つつ、独り言を呟く。その声を聞いたカスマが微妙な表情でサトシに近づいて答えてくれた。

「…サトシのママさん、昔旅に出ていた頃に偶然ホウオウと出会って仲良くなったって聞いたわよ。ミュウにも会ったことあるみたい…」

「マジか…」

『ピイカツチュ…』

『フウウウウ…サトシのポケモン並みの遺伝はここにあったというわけか…』

『我らと同じ力を持ちそうな優れたる操り人の母もやはり同類だったか…』

『サトシの人外らしさは遺伝か…ヒナが似なくて良かったな』

『ミュウウウ』

『——ツ』

「上等だお前等あとで覚えてろ」

『ピカピ…』

伝説ホイホイな部分が遺伝だったということ、目の前で行われているサトシ並みのカオスに伝説達やサトシのポケモンたちはそれぞれ納得していた。

マサラタウンにいた伝説やサトシのポケモンたちは、サトシ達の元へ向かう途中でハナコとハウオウに出会った。最初見た時はただハウオウが珍しくこちらに近づいているなど思った程度だったそうだ。だが近づいてみると見覚えのある人間がどこかで見たとことのある表情をして伝説やサトシのポケモンたちに向かって「もしかしてサトシの

元へ行くの？なら私も一緒に行くわ」と言ったことよってこのカオスが出来上がった。いった。

カスミたちも同じように、ただ歩いていたら勢いのある炎が突然壁を壊してやって来たとサトシに説明する。セレナの時はシロと戦闘中だったため中断されたことに對してセレナは嫌そうだったが、サトシの母だと分かってすぐにその感情を消し、状況を見守ることにしたのだった。

もちろんサトシに：いや、サトシの家族に何かあればすぐ手を出せるよう警戒しながらも。

そして人の言葉でサトシを人外だとはのめかす言葉をつい喋ってしまったダークライとミュウツーとルギアは後でサトシによつて物理込みの話し合いが行われるのが確定したのと同時に、サトシ自身もこの光景につい納得してしまったのだった。

幼い頃は反抗期で何度も母を泣かせてしまったことがあったけれど、それでも地雷は踏まないように気をつけていたことがあったということを感じ出していたことに：。

目の前で起きている説教は手や足を使わない平和的なものに見えるかもしれない：。

だが、ハナコの背後に般若ばりの威圧感を漂わせ、なにか抵抗すれば潰すと聞いたぐらいの殺気をにじませていなければの話だが…。

「私の話…ちゃんと聞いてる？」

「……聞いてる」

「聞いてるよ【ママ】！」

「なら良いわ……」

そんなハナコの説教を不満げに聞くのがクロであり、どこか満足げに笑いながら聞くのがシロであった。

.....

「これは面白くない事態だ。ですが興味はありますね」

「全員一斉攻撃!!」

『ツツ!!!』

「ちよつサトシやり過ぎよ!!」

「これは凄まじいかも…」

カツンツカツンツと足音を響かせながらやって来た元凶であろうその姿を見たサトシは標的を見定めてポケモンたちに向かって指示を出す。サトシと長く一緒にいたポケモンは伝説含めその言葉を聞き、一斉に攻撃をしたのだった。その激しい攻撃の嵐にカスミがサトシに向かって怒鳴り、ハルカは茫然と眩く。

だがハナコは笑みを浮かべてその様子を見守り、クロとシロは目の前にいるハナコを見て、そして斜め後ろにいるであろう生みの親がどうなったのか気にしていた。

ポケモンたちの攻撃によって死んでしまったのではないかと思われた元凶——

——アクロマはジバコイルたちのまもるによってどうにか生きていた。サトシのポケモン達や伝説たちの攻撃に耐え切れずすべてのジバコイルが倒れてしまったが…それでもアクロマは生きていた。

「サトシ君！この世の最高傑作!!また会えて嬉しいですよ!!!」

「俺は最高傑作じゃねえよこの変態が！」

『ピツカア!』

『ツツ——!!』

「あら、うちのサトシを物扱いする気なら私は黙っちゃいけないわよ？」

『ギャオオオオオオオオ!!!』

アクロマを見たのはサトシとハナコ…そしてホウオウを除いた伝説以外のポケモン達。まさに最強親子が揃ってアクロマを敵認定した瞬間でもあったのだ。

だがアクロマは苦笑して頭を下げる。

「謝りますよサトシ君。私の作り上げた作品はまだまだ完成とは言えない……」
「作品？この子たちはちゃんと生きているのに何を言っているの？」

「っ【ママ】……」

「シロ、落ち着け」

ハナコの言った生きているという言葉にシロが何かを言おうとして、そしてクロがそれを止めた。その様子を見たアクロマは笑顔でサトシ達に向かつて言う。

「いいえ、作品だ。人間の感性を持った……私の作品たちですよ」

「本当に、お前って俺たちを怒らせるのが得意だよな……でもって、胸糞悪いこといってんじゃねえぞゴルア!!!」

「胸糞悪い……どこがですか？彼らはただのクローンであってサトシ君が怒るようなこと

は何一つありません」

『おい貴様今何といった…？』

アクロマの言った言葉にミュウツーも表情を変え、敵として認定し殺気立つ。そしてこいつは生かしておけないとばかりに殺気立つていくサトシやサトシのポケモン達…そしてハナコやハウオウやミュウツーにこれ以上ここにいても危険だと考えたのか、笑った。

「今ここで実験をしても構わないですが…まだその時ではないでしょう。ここはいつた
ん退かせてもらいますよ。それにこちらメンテナンがありますので——

——ロトム、あやしいひかり」

『ロオトトトツツ！』

「っ待て！」

アクロマの背後にいたロトムの攻撃によってポケモンたちがこんらんし、サトシ達は鋭い光のせいでアクロマに攻撃を仕掛けることができなくなつた。サトシは光が消えた瞬間を見てとつさに駆け出しアクロマに蹴りを入れようとしたのだが、それをシロのユンゲラーによつて強制テレポートされてしまい後を追うことができなくなつた。

「あの野郎……」

「彼……アクロマっていったかしら？フフ……今度会つたらいろいろと説教しなくちやいけないわねエ……」

「母さん、その時は俺も一緒に……殺るから」

「その時が楽しみね。シロとクロの説教もまだ終わつてないんだし……やることはいっぱいあるわ」

「ああ……分かつてる」

「最恐親子の標的になったアクロマってやつに同情してやろうかしら…」

『ツツ』

「…だ、大丈夫ですかみなさん！」

「キーのみを探さないといけないかも…！」

「大丈夫！私キーのみなら持つてるから！」

「ほら落ち着きなさいあんたたち！キーのみ以外にはっと…あとなんでもなおしよね…
ここにゐるわ！」

嵐のように過ぎ去っていった元凶であるアクロマに狙いを定めたサトシとハナコを見て、カスミが遠い目をして同情したり、ポケモン達のこんらんを解くための騒動が鎮圧されたりするのに時間がかかった。

元凶を叩き潰すことはできていないが…アクロマが行動するのに時間がかかると分かったサトシ達にとって一時の平穏が与えられたといえる最後だった。

不安はあるが、叩き潰すことができればそれでいいとサトシ達はそう考えていた。次は逃がさないようにしっかりと逃げ道を塞がなければと考えながらも……。

最終章くそして、覚醒へく

第二百六十六話く妹にとつてのプロローグく

暗く深く闇へ飲み込まれてしまったヒナの心に、ルカリオやヒカリは悲しんだ。それは、長年連れ添った相棒に拒絶され、離れて行ってしまったことが原因で起きたこと。

リザードンのことを気にしていたギラティナとミュウはこのまま反転世界でヒナと一緒にいるのはお互いのためにならないだろうと考えて「ある場所」にリザードンを預けた。ピチューはヒナのこと心配だったようだが、結局はすべてを拒絶し、攻撃してくる以前とは別人のように変わったリザードンと一緒にいることに決めたらしく、彼女のそばを離れない。

もちろん、リザードンとヒナが会うことがなければ起こらなかった事態を引き起こしたアーロンに、ギラティナが怒るのは無理はないといえるだろう。だが、アーロンは、それでも大丈夫だと言っていた。

『アーロンの大丈夫はヒカリちゃんの大丈夫と同じくらい信用ないからね！ヒナちゃんもリザードンもアーロンが会わせたいせいで心を閉ざしたんだ!!』

「だが、それはお互いの〔声〕を聞いた結果だろう。傷ついた心を知るにはお互いをちゃんと見なければならぬ。その結果ただだよティナ」

『…何が言いたいわけ?』

反転世界を歩くアーロンは迷いなくヒナのいる場所へ向かう。それを嫌そうな表情を浮かべたティナがアーロンの後ろを歩いていた。

数百年前とはいえど、一時は仲間として旅をしたことがある二人だからこそ…アーロンの性格がよくわかるギラティナだからこそこれからの未来が想像ついた。

ある意味、ヒナの兄であるサトシが喜ぶか激怒するかかの反応を示すであろう事態を予

想したのだ。

だが、ギラティナが止める前にアローンはヒナ達がいる部屋に突撃し、動揺するルカリオ達を無視しつつもヒナに向かって話しかけていた。

「ヒナちゃん…いや、ヒナ。君は弱いね」

「っアローンさん!?!」

『アローン様!?! いったい何を…!』

『ミュミュウ!!』

『アアアアもう知らない…!』

「ヒナ、いつまで閉じ籠っているつもりだ。君がそうして嘆き悲しんで…それでリザードンは、ピチューは元気になると思っているのかい?」

「…私は」

瞳に暗闇が映るヒナはアローンの話を聞いていた。聞いていて、でもいつものように元気な反応はないことに、ヒカリたちが見守る。このままでいいとはヒカリ達も思っていないし、ヒナやりザードンのためにならないことも分かっているからだ。もちろん、ヒナとリザードンと同じくらい傍にいたピチューにとってもよくないこと。それをアローンが行動し、もとに戻そうとしているのだと思っていたのだ。

——このときは。

「ヒナ、私と…いや、私たちと一緒に旅をしようか。君に挫折しない鋼の強さを教えてあげよう」

アーロンの言葉に、その優しい声に：ヒナの瞳が大きく揺れる。それは、まだ弱いけれど、意思のこもった色だとアーロンは思った。

「……リザードンやピチューとまた一緒にいられる？」

「もちろんだよ」

アーロンの優しさに満ちた魅惑の選択に、ヒナは頷いた。リザードンやピチューと一緒にいられるのならなんでもやると、まるで悪魔の囁きのようなアーロンの言葉を聞いてしまったのだった。それを見て、前へ進むうとしているとルカリオたちが感動している中――

『アーロンを監視しないと……』

ギラティナは珍しく真顔になって小さく呟いたのだった。

第二百六十七話　旅は波乱万丈である

ヒナにとってアーロン達の旅で何かが変わると信じてはいた。リザードンが離れて行ったことに対するショックが大きくて感情が動かなくなってきたのはいたのだが、それでもアーロンの言った言葉と、これからの旅で何かが変わると思っていたのだ。

だが、ヒナは何も知らない。アーロン達がどんな旅をしてきたのか…その旅の大きな変容のことを一切何も。

『アーロンがいる時点でこうなることぐらい予想はついていたけどさあ！これ酷くない!?』

『貴様等も暴走していたからこうなったんだだろうが！』

『ミイイ…ミイは何もしてないでしゅよ!!』

『ポチャポチャ!!』

『俺ばっかり悪者扱いするなつて！ヒナちゃんとアーロンを一緒にしちやまずいつていうのにー！というか、ヒナちゃんの怪我…！』

『落ち着きなさい!!とにかく、アーロンさんとヒナちゃんを探すわよ!!』

『波動で探そう…こつちだ!』

『アーロンに会ったら一発殴る!』

『ティナ…実際に前にやってアーロンさんに振り返り討ちにあつてなかつた?』

『ポチャア?』

『ああもう!今度は振り返り討ちにあわないようにするよ!』

『ミイ…それ死亡フラグでしゅ』

『話していないで早く来い!!』

旅は波乱万丈。兄であるサトシの旅と同じように、ヒナの旅もかなり平和とは程遠いと言えるかもしれなかった。

.....

それが起きたのは、しばらく前まで遡る。

ヒナの怪我がまだ完治していないこともあり、しばらくはヒナの体力にあわせて旅をしようということになった。

歩けないほどではないが、ヒナは身体中にある火傷で負った傷がまだ治っておらず、身体に巻かれた包帯が目立つ。特に右目のあたりが重傷だったため、ほとんど視界は左で見るしかない。

その怪我の酷さもリザードンやヒナの心に傷を負わせた原因であるため、早く治ればかりにルカリオやシェイミは毎日技を使って癒し続けていた。

そんなある日の、とある森の中で起きたこと。

『ポツチャアアツ!!』

『ミイイ!これはミーのでしゅよ!ポツチャマの分はないでしゅ!!』

『喧嘩はするな。お菓子ならまだたくさんあるだろう』

『ポチャポチャ!!!』

『ふふん!これはミーのでしゅからね!』

「…ねえティナ。だいたい想像つくけど、何て言ってるの?」

『シェイミに取られたのがムカつく！だつてさ。あ、ヒナちゃん。いつものことだから気にしないでこつち来てお菓子食べなよ！今のヒナちゃんは体力つけなくちやいけな
いんだからさ』

「…うん」

『ほら、これなんて美味しツブファ!!!』

「テイナ、その笑顔気持ち悪い」

『だからって何も殴らなくてもいいだろアーロン!!』

「おや、昔から私はこうだったろう？テイナがちゃんと素直になれば殴らないさ」

『理不尽すぎるから!!』

「…ヒナちゃん、気にしないで」

『そうだぞヒナ。いつものことだ』

「…うん」

ポツチャマとシェイミ、そしてギラテイナとアーロンが乱闘にも似た喧嘩を始めた

いうのに、ヒカリとルカリオはまたかというかのように小さくため息をついてヒナにお菓子を渡して気にするなと笑顔で言う。

一応言っておくとこれはヒナがアーロン達の旅についてきてほぼ毎日起きている喧嘩だった。だがそれはポツチャマとシェイミの場合であり、今回はギラティナとアーロンも混ざつての喧嘩となっていたのだった。

リザードンが離れて行く前のヒナならば逆に気にして、盛大にツツコミをいれているかもしれないが、今のヒナはただ渡されたお菓子を見つめて感情の入っていない一言しか呟かない。

周りが乱闘で凄まじい轟音を響かせるなか、今にも消えてしまいそうなヒナの小さな呟き声が聞き取ることができたのは、ある意味奇跡かもしれない。そんな元氣のないヒナに心を痛めたヒカリとルカリオはいまだに終わらない喧嘩を見てもう一度ため息をついたのだった。

「ほらポツチャマ！シェイミ！喧嘩は止めなさい！」

『アーロン様！ギラティナで遊ぶのは程々にしてください！』

『ヒカリ！これは喧嘩に入らないでしゅよ！ポツチャマの一方的ないじめでしゅ!!』

『ポチャポチャアア!!』

『ちよつとルカリオ！今聞きたくない単語が聞こえたんだけど！』
「だいたい合っているよティナ」

この会話にキレたのは、二匹のポケモン。：いや、一匹はポケモンの姿をしてはいないため「二匹」と言っているのかわからないけれど、それでも彼らはポケモンでありキレていたことに変わりない。ポケモンだからこそ、対象である一匹と一人に狙いを定めた。

『ポツチャアア!!』

『アーロンお前さ…俺だって伝説なんだからアーロンに攻撃ぐらいできるからね!!』

『止めろ！ヒナに当たるだろうが!!』

ハイドロポンプとはどうだんを見て、その軌道の近くにヒナがいると気づいたルカリオがキレて両手ではどうだんを作り出し、両方の攻撃を相殺するために放った。そのお陰でより大きな地響きと爆発が起き、木々で休んでいたポツポツたちがその余波を感じて恐れて飛び立つ。

そしてルカリオが攻撃をしてきた二匹に説教をしようと歩き出した――

その時だった。

『リングアアアアッ!!!!!!』
『バンギャアアアアッ!!!!!!』

「え、リングマにバンギラス!? 何でこんな森のなかにいるのよ!」

『ポ、ポチャ…!』

『ミイイ…完全にキレているでしゅよ!!』

「いや、これは…」

『クツ! 貴様らもヒナを攻撃するつもりか!』

『…いや、こんな状況で言うことじゃないけど俺ヒナちゃんに怪我を負わせる気なかつたからね!』

『ポチャポツチャ!!』

「今いつてる場合じゃないでしょ!」

『いやだからこんな状況で言うことじゃないって言った…うわ危なッ!!』

『ギャアアアアアアアアアツツ!!!』

『グアアアアアアアアアアアツツ!!!』

呑気に会話をしていることに余計怒ったのか、リングマとバンギラスは両方ともはかいかうせんを放とうとしてくる。

通常ならばここでアーロンが止めようと自ら動くのだが、何故か動かす…しかも空からオニスズメやオンドリルの群れが来たことよって場は混乱する。

逃げたり攻撃したりを繰り返していくうちに、気がつけばギラティナ達はアーロンとヒナがはぐれた状況になっていたのだった。

——それが冒頭で起きたこと。そしてルカリオの波動で探そうとするのだが、オンドリルとオニスズメがまた襲ってくるため、なかなか二人のもとへたどり着くことが出来ずにいた。

「ヒナちゃん…!」

『ポツチャマアア!!!』

『そこを退け貴様らア!!!』

『ミイイ!!!』

『ああもう……こうしているうちにヒナちゃんに何かあつたらお前ら許さないからね!!』

旅は波乱万丈……

そんな彼らの旅についてきたヒナの心はまだ、動かない。

第二百六十八話　揺れ動く

ヒナにとって、たまごの頃からずっと一緒にいたりザードンが傍にいるのは当たり前のことだった。

当たり前前の存在が急に消えた時に感じたのは、喪失感と孤独感。

ピチューが今この場にはいないこともヒナの心にある喪失感を強めていた。

だが、ピチューは悪くないということも分かっていた。ピチューがリザードンの傍にいたいと願ったのは、そのままリザードンを放っておいたらどこかへ飛んで消えてしまうのではないかという雰囲気があったから。今までのような優しさが消え、すべてを憎むような感情を表したりリザードンが元に戻ってほしいとそう願ったから。

だからピチューはリザードンの傍に居ることを決心した。そのことに対してヒナは何も恨んでいないし、納得だっと思っている。

でも……そのことが分かっているとしても、ヒナの感情は追いつかない。ピチューよりも傍にいて、共に成長し合い強くなって言ったはずの相棒がいない事実がヒナの心を傷つける。

『つ』
—
『』

ふと、リンググマが自身を狙っていることに気づいていた。

攻撃をしようとしていることに、気づいていた。

(…だから、何?)

今にもリンググマに攻撃されることに対しての恐怖心は起こらない。むしろ、ここから逃げたり反撃したりしても意味のないことが分かっているからこそ、何もしない。己の弱さを嘲笑うしかない。

それを見たリングマが攻撃するために腕を振りかぶろうとしても、ヒナは何も反応しない。だからこそ、リングマを止めたアローンの行動にも、ヒナを見てため息をつくのにも気がつかなかった。

——でも、頭を撫でられる感触だけは伝わった。

「ヒナ、君は…いや、君たちは似ているね。その思いが行く先が全部」

頭を撫でられる感触から、ヒナは上を見上げた。見上げてみれば、そこにいたのは苦笑しているアローンの姿。何故アロンは苦笑して頭を撫でているんだろうかとヒナは思った。何故、そんなにも悲しそうな瞳でこちらを見ているのだろうかと感じた。

ちなみにその後ろにはアロンに怯え震えているリングマの姿があったが、ヒナからは奇跡的に見えない位置にいたのだった。

アーンはヒナの意識がこちらを向いたのを確認し、口を開いて言う。

「何でリザードンがヒナから離れて行ったのか分かるかい？」

「離れ…た…のは…私…が…弱い」

——私自身が弱いから、リザードンを傷つけてしまった。

ヒナが思い出すのは真つ赤に燃えていった光景。その光景の中で見えたのは、深く傷ついた己の相棒の姿。

私が弱いからリザードンとピチューを巻き込んだ。私をもっと周りを見ていれば、フーデインの技から逃げる事ができた。私に抵抗できる力があれば、リザードンとピチューは操られなかった。私が弱くなければ…兄のように強ければ相棒たちを傷つけることもなかった——。

弱いからこそ起きた悲劇。

ヒナにとって、リザードンの炎で傷つけられた事に対しては何も感じてはいない。ただ悲しいのはリザードンが離れて行ったことだけだった。何で離れて行ったのかさえ分からず、あの最後に見たりザードンの後ろ姿を見て、まるで捨てられてしまったような衝撃を感じたのだった。

全ては私が何もできなかったから。

そんなヒナの言葉を、アーンは小さく首を横に振る。

「ヒナは、自分が弱いからリザードンが離れたと考えている？」

「……………うん」

「トレーナーとして相応しくないから、捨てられてしまったと思ってる？」

「……………うん」

「リザードンは君に対してどう思っているのか、ヒナは分かるかい？」

「…分からない」

リザードンがいない今。ヒナにとって相棒が考えていることも、その感情さえ分からなかった。ただ分かるのは自身の弱さと、リザードンが傷ついたと言うこと。そしてその弱さから見捨てられてしまったのだと言うこと。

（私は…………）

———アーロンと旅をしようと思った時。ヒナは、アーロンに向かってリザードンとまた一緒に居られるのか問いかけた。でも、ヒナは一緒にいられなくても構わないという考えもあつたのだ。

心残りなのは自身の弱さで傷ついたりザードンに謝れなかったこと。私が弱かったからリザードンを傷つけてしまったと謝りたいとそう願ったこと。この旅でリザードンに謝ることができたのなら、それでリザードンの傷が治るのなら一緒にいられなくて

も大丈夫だとそう考えていた。

もちろんヒナの心は全然平気ではないのだが、リザードンがヒナ自身から離れたいと願うのならその通りにしてやりたいと…そう願ってはいたのだ。

でもアーロンは違っていた。

「リザードンはヒナと同じ考えで行動しているよ」

「おなじ…かんがえ…？」

「ヒナが弱いと思っているように、リザードンも己の弱さを悔いているんだ。自身にもっと力があれば、もっともっと強さがあれば——

——そうすれば、ヒナを守ることができたのに」

ヒナの瞳が揺れ動く。その反応を見てアーロンは笑った。

アーロンの言った言葉は、ヒナの考えと全く一緒だったのだ。捨てられてしまったと言う部分は自分の弱さが原因なため。それよりも強く、兄のように最強であればリザードンやピチュウのことを守れたのにとヒナは心からそう後悔していた。

「君たちは本当に似ているね。似たもの姉妹と言ってもいいぐらい、お互いを思っていてきている。もちろんピチュウも同じように考えているよ。自分に力があればヒナを守れたのに、リザードンを守れたのにつて…でも、だからこそ今リザードンの傍にいてやれるべきことを探しているんだ」

「やれるべきこと…」

「ピチュウは君のことを信じているんだよ。ヒナがちやんと元気になって、リザードンやピチュウの元へ戻って来るってことを…ね」

「戻る…」

ヒナはピチューと別れた時の最後を思い出した。あの時のピチューの瞳は、何かを信じて待っている意志がこもっていたのだと言うことを…。

「…でも、私は……怪我を治してもリザードン達に会えない…」

身体の怪我を治したとしても、それは以前と全く一緒なだけなのだ。ヒナは分かっていた。以前と同じ弱いままだとまた傷ついてしまう。リザードンやピチューを傷つけてしまう。

「弱いままだと……私は何もできない」

傷ついた家族がいるのは嫌だ。

家族が悲しむのは嫌だ。

「リザードン達を守れるように…お兄ちゃんのように、強くなりたい」

弱いから…何もできないのは、もう嫌だ。

「なら、手を貸そう——強くなる覚悟はできているんだろう？」

アーロンはただ笑ってヒナに向かって手を伸ばした。

まるで——その手を掴んだら、これからのヒナ自身の未来が変わるかのようだと感じた——。

それでもヒナは迷わず、アーロンが伸ばした手を掴もうとした…その時だった。

『みいいいいいつううううけたあああああ』

『アーロン様アアアアアアアアア』

「ヒナちゃん無事!!!」

『ポチャアアアアアアアアア』

『ミイイイイさつさと!!!』

『!!!!!!』

!!!!!!!!!!!!

大声と共にやって来たのはオニスズメとオニドリル…そしてバンギラスに追われているギラティナ達の姿。だが後ろから追いかけてくるポケモンを気にしているのはシエイミだけであり、それ以外はヒナたちの姿を見てようやく見つけたと叫んでいた。

突然の大騒ぎに、ヒナとアローンは一瞬茫然として、そしてすぐに顔を見合わせた。

「さて、逃げるとしようか」

「…はう」

アーロンがヒナを抱えて走り出したのを見てギラティナたちもその後を追う。もちろんその後ろにたくさんのポケモンたちを連れながらも

ヒナは小さく、笑ったのだった。

第二百六十九話　手袋の行方

「ヒナ、君にはある修業をしてもらおうと思う」

「修業？」

森の中で昼食を食べていた時に、まるで当たり前のように言ったアーロンの言葉にヒナがきよんとした表情を見せる。最近ようやく元氣になってきたヒナの姿に安堵していたギラティナ達であつたが、修業という言葉で顔色を変えたのは仕方ないことだろう。

『ちよつと待った！ヒナちゃんはまだ怪我が治ってないんだから無茶させたら駄目だろ！！』

『アーロン様！ギラティナの言う通り…ヒナはまだ万全の身体ではありません！！』

「そうよ！いくらなんでもまだ早すぎるわ！」

『ポチャポチャ!!』

『ミイイ…もうちよつと待った方がいいでしゅ!』

皆がヒナの修業に反対し、まだやるには早すぎるとアーロンに向かつて言う姿にヒナとアーロンは苦笑していた。

ヒナにとっては今の身体でもある程度の修業ならできると言う自覚があるし、皆が過保護すぎるということに対しての苦笑だったが、アーロンは違った。

「ああすまない…言葉が足りなかったね。修業というのは、宝探しをする————つ
まり、手袋を探すという簡単なことだ」

「手袋…ですか？」

『待った!…アーロン……もしかして手袋を探す範囲って…』

「この森の中だよ」

『範囲広ツ!!』

『それは簡単とは言えないのでは…!』

「というか、いつの間に手袋なんて隠してたの…!？」

『ポチャアア!』

『ミイ…アーロンにとって簡単でもヒナにとっては簡単じゃないでしゅよ!』

「おや、できないのかい？」

「ううん…やります。一人でやってみせます!」

皆が止めるなか、ヒナは決心した様子でアーロンに向かって頷いていたのだった。

そんなヒナの決心を無下にはできないということで、ギラティナ達は不満げながらも修業をすることに対して何も言わずにいた。そんな彼らを見て、アーロンは言う。

「ヒナ、この修業で【私たち】の手を借りて手袋をさがすことはできない…それがルールだ」

「分かりました。…私一人で頑張って見つけます!」

ヒナはアーロンの言われた言葉を聞いて力強く頷いた。

最初の修業なのだから一人で頑張って手袋を見つけないと駄目だと決心をして…ま

るで、この修業を成功させないと強くなるのかのように――。

アーロンは何故かヒナを見て苦笑をしながらも、手袋の特徴を言った。

「…手袋は青色で、手の甲の部分には透明な宝石が埋め込まれている。それを探しだすんだ」

「はいー」

ヒナは昼食を食べたあとすぐに動き出した。森の中を歩き、草木をかき分けて探していく。途中で森に住む野生のポケモン達が生かす興味を持ち、何をしているのだろうか？探し物かな？でも身体怪我してるみたいだよ？とヒナの周りに来ていても、ヒナはマサラタウンでよくポケモン達に囲まれていたからこそいつものことだと気にせず手袋を探していく。

そんなヒナのことをアーロン達は後ろ――遠くの方から見守っていた。

.....

「凄い……！野生のポケモンがあんなに……！！」

『ポチャ……！』

『……何が凄いのか？』

『ヒナはマサラタウンでいつもポケモンに囲まれていたぞ』

『ミイイ？』

ヒカリは驚いていた。ヒナが当たり前のように行動するその周りにポケモン達が集まっている光景に……。

——ヒカリ達と一緒にいたときには決して見られないであろう様子に驚愕したのだ。

ポツチャマは初心者用のポケモンであり、旅にででからずとヒカリと一緒にだったからこそ同じように驚いていた。

ギラティナはポケモンが人間に近づくことに対して疑問を持たず、ヒカリが何故驚いているのか分からない。もちろん、ルカリオやシェイミも同じだ。

アーロンはヒカリに向かって頷いて、真剣な表情で言った。

「ヒカリが驚くのも無理はない…野生のポケモンが人間に警戒心なく近づくことはまれなんだよ…特に、ヒナのような光景なんて絶対に起こらないことだ…それこそ、音楽か何かの力を使わないとできないことだろうね」

『でも、現にヒナちゃんは……』

「彼女のあれは、一種の才能だ。野生や手持ちなんて関係なくヒナに近づく…まあ、怒りや憎しみの強いポケモンに対しては「まだ」その才能を活かせてないみたいだけれど……」

「待つて！…それじゃあ、ヒナちゃんは——」

「ヒカリが考えている通りだよ。ヒナがその才能を發揮すればポケモンは皆、彼女に従うだろう…ヒナが困っていれば、ポケモン達は彼女を助けようとするだろう。ヒナが助けてほしいと泣けば、ポケモン達は行動する——」

——それこそ、戦争でその力を使われたら怖いことになっていただろう」

背筋が凍り、冷や汗が出る。

話を聞いていたアーロン以外の皆が沈黙するほどの衝撃を……その可能性を話したのだ。

もしも、ヒナがその才能を使って悪さをしていたら——

もしも、今の時代が戦争で盛んだったなら――

さまざまな可能性がヒカリの頭で浮かんでは消える。

手持ちなら安心という可能性はない。人間がゲットした手持ちよりも野生の方がはるかに数は多いのだから…。それに、ヒナがもしも自分の手持ちポケモン達の気持ちを変え、モンスターボールを壊してでもヒナの側にいたいというぐらいの力を発揮したならば、どうなるのだろうか？と嫌な想像をした。

でも、今はヒナはちやんと前へ向いてリザードン達と共に生きようとしているのだからその嫌な予感を消し去った。

だからこそ、ヒカリは言い訳をするかのように呟いたのだ。アローンがその呟き声を聞いて否定しなければ、笑えたはずの言葉を…。

「だ、大丈夫だいじょーぶ！…サトシもポケモンに懐かれてゲットしたことがたくさん

あつたし…アルセウスはサトシに懐いているみたいだし…！」

「確かにそうだけれど、でもヒナのようににはならないだろうか？彼も才能はあるけれど、ヒナのように恐るべきほどの力ではない…だからこそ、もしもこの時代で戦争をしていて、なおかつ彼女の才能を最大限まで発揮したならば…」

すべてのポケモンが彼女の言葉を聞き、付き従うだろうね」

『…アーロン様』

『ミイ…ヒナが悪いことするのは…見たくないでしゅ…』

ルカリオは昔を思い出していた。戦争で鎧を着けたポケモン達がぶつかり合い、血を流したあの頃の出来事を――。

それが、ヒナの手によって再現されてしまったらと、ルカリオは悪魔のような想像をして、思わず首を横に振った。

そしてシエイミも同じように嫌そうな顔をして小さく呟く。ヒナに懐いているシエイミも同じように考えているのだ。ヒナが悪さをしてしまったらどうなるのかを…。

ギラティナは乾いた笑いを浮かべながらも言う。

『今はアーロンがいた頃の時代じゃないし、ヒナちゃんも悪いことには力を使わないから大丈夫でしょ！それにその才能にまだ気づいてないみたいだし…』

「そうだね。ヒナの才能についてはまた後で考えよう…今は別の問題が先決だ」

アーロンが再びヒナの方を見ると、彼女は怪我の痛みからか座り込み、野生のポケモン達に心配そうに見ていた。

.....

——
見つからない。

手袋が、見つからない。

「早く見つけて、強くならないと……！」

『ツツ——！！』

怪我の痛みで転んだヒナに、野生のポケモンが駆け寄り、大丈夫かと鳴き声をあげる。その声を聞いたヒナは大丈夫と言ってから野生のポケモン達に離れてほしいと言う。

でもポケモン達は心配しているからか、離れない。

こちらから離れようと、立ち上がろうとするヒナにあるポケモンがさらに近づいてきた。近づいてきたポケモンはマリルであり、マリルの手には美味しそうに熟されたきのみがあつた。

『リルツ！』

「…いない」

『リルリルツツ!!』

「私は大丈夫だから、いないよ」

『ツツ———!!』

「つ…私はやるべきことがあるから…離れて！」

マリルが手に持つきのみを拒否し、再び立ち上がろうとするヒナにポケモン達は立ってはいけないとヒナにしがみついた。

まるで、ヒナの邪魔をするかのようなポケモン達の行動にヒナは困惑し、焦る。

このままではいけない

このままでは強くなれない

頭に浮かぶのはリザードンとピチューの姿。

だからこそ、野生のポケモン達から離れようと痛む身体を我慢して叫び行動した――

「ヒナ、そこまでだ」

そんな彼女に対して、アールオンが真剣な声色で言う。

アールオンがヒナに近づいてもポケモン達は逃げない。むしろ、ヒナを守ろうかという動きを見せ、アールオンに対して威嚇する。

でもアールオンはそれを見ても焦らず、ポケモン達が攻撃してこない距離で立ち止まったあと、涼しげな表情でヒナに向かっていった。

「ヒナ…どうして彼らは君にしがみついているかわかるかい？」

「…分かりません」

「じゃあ、マリルがきのみを渡そうとしたのは？」

「それは…私に食べてほしいから」

『リルツ！』

ヒナが言った言葉にマリルは力強く頷いた。そしてまたきのみを渡そうとヒナに近づく。

その姿を見てヒナは困惑していた。何で私に食べさせようとするのだろうか……。『オボンのみ……ポケモンにとっては体力回復に役立つのみだね……きつとマリルは、ヒナに元気になってほしいから渡そうとしているんじゃないかな』

「……そうなの？」

『リルツリルツ!!!』

「……ありがとう」

ヒナはマリルから受け取ったきのみを食べた。ポケモンのようにすぐに体力を回復するわけじゃないけれど、それでも元気になれたと感じる。マリルや他のポケモン達はその様子を見て喜んだ。

アーロンはその行動を見て微笑み、そしてヒナに言った。

「ヒナ、君は一人で探すと言ったけれど…それは絶対に不可能だと思うよ」

「っ…それは、やってみないと分からない——」

「——そのやってみた結果が今の君だろう…なんで、ポケモン達はヒナにしがみついているか、分かるか？」

「…私を心配しているから」

「半分正解で、半分不正解だ…ヒナ、この世界は人間が一人で生きていくことは難しいんだよ」

「人間が…一人で……」

アーロンは言う。人間とポケモンが共存している世界で、一人で生きていくのは難しいということ。ポケモンと人間が共に助け合い家族のように一緒にいるのが当たり前だからこそ、今のヒナがやっていることは無謀に等しい行為だと言ったのだ。

「でも、アロンさんは手助けを借りたら駄目だって…」

「それは、君が一人でやろうとしていたからだよ。ヒナ、強くなるのは一人だけだけれど…戦うのは一人じゃないんだ」

「…っ」

ヒナは思い出す。かつて旅をした時に一緒に戦った頃のことを…

ジム戦に挑んだのが一人じゃなかったあのときのことを――。

「私…また、間違いそうになった…」

「大丈夫だよ、ヒナ。道を間違えそうになったなら私たちが正しい道へ導こう。君が進むべき道へ、示してみせよう」

アーロンは優しく微笑み、そしてまた口を開いた。

「それに、私は「私たちの手は借りてはいけない」と言ったけど、野生のポケモンの力を借りては駄目だとは言ってはいらないよ」

「そっか…分かりました…ありがとうございます…ぎいますアーロンさん!!」

アーロンに向かってヒナは力強く頷き、そして周りにいるポケモン達に向かって声をかけた。

「ある手袋を探してるんだけど…力を貸してくれる?」

『ツツ———!!!』

———その後、野生のポケモン達と一緒にヒナは手袋を探し、無事に見つけ出すことができたのだった。

第二百七十話く消えることない輝きく

アーロンは森の中でしばらく留まることに決め、ヒナの養生と修行を同時並行で行うことにしたようだった。

幸い森の中には果物やきのみがたくさんあり、そしてルカリオはそれらを使って調理することができるといえる。調味料などの消耗品は全て森に入る前の町で買い揃えたため、長い間この森の中にも困らないし、修行を長く行うことも可能だった。

通常ならば森の中にいるポケモンたちはそこへ侵入してきた人間を警戒し、襲いかかることがある。だがそれはヒナがいるせいかな…それともアーロンが笑顔でリングマ達を撃退したせいかな…いや、両方かもしれないがポケモンたちが襲って来るといふ状況にはならず、むしろきのみや果物の居場所をヒナに教えたり、一緒に遊んだりとすること

が多い。

襲いかかってくるにいたリングマ達も警戒心をとき、今となっては彼らが通りがかったもあまり気にしなくなった。：まあ、アーロンを目にしたら身体が震えて逃げ出すと言う光景は良く目にしていたのだが。それでもこの森は安全だということが分かったのだ。

—— だからこそアーロンは笑顔でヒナに向かって言ったのだった。

「さて、修行の開始だよ。ヒナ」

「はい」

『ちよおおおつと待ったア！まだヒナちゃん怪我治ってないから無茶させたら駄目だつて言ってるだツゴフオツ!!』

「うるさいよティナ」

『ア、アーロン様…無茶だけは…』

「大丈夫だルカリオ。今回は波動を使った修行をするだけだからね」

「……波動？」

波動を使った修行とは何なのだろうかヒナは首を傾げた。

波動についてはルカリオがよくマサラタウンの迷いの森でフシギダネの代わりに喧嘩を仲裁する時に使っているのを見ていたし、アーロンからサトシに教えてみたいと言うような言動を聞いたことがある。まさかその波動を教わるのではないかと……もつとより強くなれるのではないかと期待したヒナにアーロンが渡したのは見たことのある青色の手袋だった。

「これって……前に探した手袋？」

「これは波導を増幅させる力を持つ手袋……いや、グローブなんだ。まだそれを使う修行は行わないけれど、今のうちに身につけて慣れさせておくと良い」

「……わかりました」

『……なんかすつごく嫌な予感がするのは気のせいかな？』

「気のせいなんかじゃないわティナ……私もサトシがやらかした感じの嫌な予感がするも

の

『ポチャア…』

『…アーロン様はヒナを強くしようとしているだけだ』

『とかなんとかいって、ルカリオも気が気じゃないでしょ？』

『……否定はしないが…』

『ミイ…でも、ヒナが波動を使えるようになったらルカリオの兄弟弟子になるんでしゅね』

『ツ！…そ、それはそれでいいかもしれないが…いや、だが……』

「…保護者の立場と兄弟弟子になれる立場で心が揺れてるわね」

『ポチャポチャ…』

『まあ、ルカリオって純粹だからね…あのアーロンの弟子を名乗ってるぐらいなんだからさ』

ヒナとアーロンがグローブについて話をしてる間に、外野であるギラティナたちが苦笑しながらもその様子を見て雑談していた。このまま修行を行っていいものか、それとも強くなるというヒナの気持ちを考えて喜んでいいものか…いまだに悩んでいたのだ。

ルカリオにとってはヒナが波動をアーロンから習うことによって兄弟弟子…いや、兄弟弟子のような関係になれるとシェイミに指摘されたことよって気持ちが大きく揺らいではいるが…それでもアーロンが何をやるのか少々不安に思っていた。

———
すべての不安は「アーロンだから」という言葉で納得できる。

アーロンはサトシのように派手に行くことはあまりやらない。たまに派手に動くときがあるがそれは少年の時にギラティナと一緒に旅をしていた頃の影響だろうとギラティナ自身が分かっていたし知っていたのだ。ヒカリ達は知らないことだが、アーロンは「動くのなら静かに、そして徹底的に」敵を潰すことを好む。リングマの時もそうだった。ヒナが気づかないほど静かに…そして確実にフルボッコにし、戦闘不能にすることができるとだ。

それはつまり、サトシが派手に動くのなら、アーロンは静かに動くことが彼ら自身のバトルスタイルになっていないかとギラティナが考えていたことがあるぐらい二人の行動は少しだけ違っていた。…ほんの少しだけ。

———
まあ、アーロンがサトシぐらゐの年齢の頃に一緒に旅していたギラティナにとって、その頃のアーロンがサトシのように派手に動くというバトルスタイル

がとても好きだった時期があるのを知っているから…もしかしたらサトシも年齢を重ねるうちに第二のアーロンになるのではないかと危惧しているのだが…。

そんなことを考えている間にも、アーロンはヒナと一緒に修行を開始するようだった。

「これから行う修行は、ちよつとした精神統一だよ」

「精神統一…ですか？」

「そう。例えば敵がかげぶんしんを行って分散されたときに…例えば、敵がこうそくいどうをして目に見えない速さで迫つて来た時に…そんな時に波動を使つて敵を潰すことができるようになる修行方法だ」

『アーロン様！…それはつまり、アレを行うのですか…？』

「アレ…つて何？」

『ポチャア？』

『……………聞かない方が身のためだ』

『ナニソレ逆にすごく気になるんだけど…』

『ミイ…ルカリオが怖がることをヒナにもやらせる気でしゆか…!』

ルカリオが冷や汗をかいて真つ青な表情でアーロンに向かって言う言葉にヒカリが反応した。ルカリオの表情を見てヒカリ達の嫌な予感が強くなる。

恐る恐るルカリオに何があつたのか聞いたのだが、ルカリオは顔をさらに青白くさせて物凄い勢いで首を横に振り、聞くなと忠告する。その声と表情にギラティナたちは逆に好奇心が湧いたが…知らない方が幸せなこともあるという言葉によつて聞くのを止めた。

だが、そんなルカリオが青白くなるようなことを、怪我をしているヒナにやらせる気かとルカリオを除いてアーロンを睨んだ一同だったが、アーロンは涼しげな表情で笑つた。

「大丈夫だよ。今回やるのはルカリオの時の修行よりも簡単だ。ただそこに座つて目を閉じていればいいだけだからね」

「…へ？それが…修行ですか？」

「そうだ。———ただし、たまに〔これ〕が頭に向かって振り下ろされる。だからヒナはそれを避けるのが今回の目的の修行だよ」

『何時の間に作ったんだよそのでかいハリセン!!?』

アーロンは微笑みながらもお笑いのツツコミ用に使いそうなハリセンを取り出して見せた。そのハリセンを何時作ったのかとギラティナの大きな声が森の中に響くが、当の本人はそれを無視してヒナにやってみようかと言う。

「じゃあ、修行開始だよ」

「はい」

アーロンが言った修行方法。

—— 簡単に言えばヒナが目を閉じて座り、そこで精神統一をする。その間に不定期で大きなハリセンが頭に振り下ろされるため、感覚を鋭くし気配を察知して避けるのが目標だと言うことらしい。つまりは座禅と似たようなものだろう。

しかもアーロンはハリセンをヒナの頭に振り下ろすのは怪我に響かない程度の強さでやると宣言したため、ギラティナたちは安堵してその様子を見ていたのだった。

.....

目を閉じて呼吸を落ち着かせる。

深呼吸をして、暗闇の中でその感覚を感じ取る。

後ろには…誰もいない…？

「遅い」

「あうッ！」

怪我に響かないように加減はしていても、容赦なく振り下ろされたハリセンにヒナは頭を押さえてうめき声を上げる。

毎日毎日行うこの精神統一によつて感覚が鋭くなつてきているかもしれないという予感があったが、アーロンが振り下ろすハリセンを避けるのは未だに困難だと感じていた。

でも、それでもヒナはやり続けた。一日に何回も行う精神統一と不定期でくるハリセンの襲撃。

怪我を治していく最中に行うこの精神統一の修行はとても厳しいとヒナは感じていた。ただ座つて目を閉じているだけの見た目が地味で楽そうな修行だと思つたのだが、実際にやってみればつらく厳しいと感じた。

初日はハリセンによるダメージで頭痛がしたぐらいだ。怪我に響くだらうとギラティナたちが誤解して叫んだことがあったが実際にはそんなこともなく、ただギラティ

ナがアーロンにぶん殴られただけで終わったオチがあったこともあったりする。もちろん怪我がないようにルカリオとシェイミが何度も力を使って真つ先に頭の方から優先的に怪我を治してくれるのだが：やっぱハリセンが振り下ろされた痛みは精神的な悔しさもあつたからかもしれないとヒナは感じていた。

頭痛がするほどの修行を行つてはいたが：それでもアーロンは怪我を考慮して必要以上の修行は行わなかった。最初は一日に一時間だけ：でも少しずつ時間を増やしていくようになった。まず座つて目を閉じて精神統一をするという作業———これには少しだけ戸惑う部分があつた。

目を閉じてじつとしているといろんな音が聞こえてくる。ポケモンの鳴き声や風の音：木々が揺らめいている小さな音。そして、ハリセンが振り下ろされる音。日々周りで起こっている音に加え、ギラティナたちの会話などの雑音も交じってしまつては、ハリセンが振り下ろされる一瞬の音を掴むことが難しく、いつも躲すことができずにいた。

それでも、怪我が少しずつ治っていくにつれ、分かったことがあつた。

(ちよつとだけ…ううん、やっぱり感じる…)

ヒナは毎日行かう精神統一の中で微かに輝きが見えた気がしたのだ。輝きと言うよりもそれは小さな光のような感覚。例えば、ヒナの周りで起こる風が吹くと分かる瞬間がある。その瞬間が輝きとなって小さく見える。ヒカリ達が何処にいるのか音を聞かなくても分かる。青い輝きのような…そんな光景が…目を閉じていると言うのに、何か分かる…ような、気がする。

今までは音を頼りにハリセンを避けようとしていたけれど、何か違って見えるような…そんな気がする。

周りがかくつきりと…はつきりと見えそうな…そんな輝きが――

「考え事は禁物だよ」

「いッ!」

アーロンによってハリセンが頭上に落とされ、ヒナはいつものように頭を押さえて涙目でうめき声をあげた。

でも、今までとは違った感覚の変化にヒナは頭を押さえていた両手を下ろし、その手を見つめた。両手にはアーロンから貰った手袋……いや、グローブが身につけられている。そのグローブの手の甲にある宝石が青く輝いたような気がした。

今までとは違ったヒナの様子に、アーロンは小さく笑って口を開いて言う。

「少しは慣れてきたみたいだね……じゃあ、もうちよつと続けようか」

「……はー」

ヒナは力強く頷いて、またちゃんと座り込んで目を閉じて精神統一を始める。そんなヒナの両手のグローブからは、青く輝く光が見えたと……アーロンは感じていた。

——そして、ヒナがアーロンの振り下ろしたハリセンを避けられるようになった

のは、
怪我が完治した時であつたのだつた。

第二百七十一話く夢に向かつて進むのはく

ヒナの怪我が治ったといつても、肩の方には火傷の跡がうつすらと残る。それを治すには強い癒しの力があるポケモンに行つてもらいたいものだが、ルカリオやシェイミは怪我を治すことはできてもその火傷の跡を治すことはできない。

でもヒナは大丈夫だと笑つた。この火傷は自分が弱かつた時の証拠であり、忘れてはならない証でもあるのだからと――。

それを聞いてルカリオやシェイミが号泣したのは仕方ないことだろうとヒカリは思つた。

.....

「着いたア!! ヤマブキシテイ!!」

『ポツチャア!!』

『ヤマブキコンテスト…午後から開催みただけど受け付けは大丈夫なの?』

「大丈夫だいじょーぶ! さつき済ませてきましたから!!」

『ポチャ!』

「コンテスト…私、初めて見る…」

『…ん? どうしたヒナ。浮かない顔をしているが…』

「ううん…ここに、リザードンとピチューもいたらいいなって…そう思っちゃって…」

『…そう…か…』

「だ、大丈夫よヒナちゃん! 今度は一緒に見に来ればいいんだからね!」

『ポツチャア!』

『ミイ…今のうちにリザードンとピチューに自慢できるようにたつぷり見ておけばいいんでしゅよ!』

『いやシエイミ…それはそれでどうなの…』

「はは…とにかく、先に進もうか。私たちが立ち止まっていると周りの人たちが迷惑になるよ」

「えっ!? わわッ!! ごめんなさい!!!」

『ポチャアアア!』

町中のご真ん中で訝しげに——いや、興味津々といったような感情を含む視線をたくさんの人たちがこちらへ向いたため、ヒカリは慌てて謝りながらも道の端へ移動する。その行動にヒナたちもついていき、道の端へ行ってから歩み始めた。

周りに見られていたのは人の言葉を喋るルカリオやシエイミがいたからなのだが、もはや当たり前のように一緒にいるからこそ気づかない。ついでにアーロンやギラティナの服もかなり派手でヤマブキシテイで見ることのないものだからという理由もあつたりする。

でも、その視線から逃げるかのように移動を開始したため、いくらかは和らいだが、し

ばらくは注目的になるかもしれないとアーロンは苦笑しつつも、ヒカリ達の後ろを
ついて歩く。

「さて！ヒナちゃんの怪我が治ったお祝いにシヨツピングでもしよつか！」

『ポチャア！』

「え、でも…ヒカリさんコンテストの練習があるんじゃない？」

「それなら大丈夫！だからほら、行こう！ヒナちゃん!!」

『ポチャア！』

『ヒカリちゃん！あんまり走っちゃヒナちゃんが転んじゃうよ！』

『待てヒカリ！そっちはシヨツピングモールなんてないぞ！こつちだ！』

『いつの間に調べたんでしゅか!?!』

「こつちか…チヨコレートもありそうだな」

『あーあーすっかりチヨコ中毒になっツツグハツ!!』

「言いたいことはそれだけかい？」

『ギラティナも少しは学習したらどうなんだ…』

『い、言わないでよそれだけは……』

雑談を交えながらも歩いていった一行が入ったのはヤマブキシティでコンテストの大会が開かれるために一時的に開催されているお祭りのようなショッピングモール。

建物もコンテストにあわせて作られたのか、お店が屋台のような感じで開かれており、ヒカリ達はその雰囲気を楽しんでいく。

「……一緒に来たかったな」

ただ一人。ヒナだけは浮かない顔をするときがあつたが、ヒカリ達に気を使わせては駄目だと考えてすぐに買い物に集中する。

お店にはコンテストで使われていそうな衣装がならんでいたり、進化の石が売られていたり：はたまた様々なアクセサリーがミニゲームの商品として売られているものもあつた。

もちろん食品を取り扱うお店もあつて、クレープ屋やアイス屋：はたまたレストランのお店等もある。

ヒカリ達はヒナをつれていろんなお店に入り、楽しんでいった。リザードンやピ

チユーの人形を見て悲しい気持ち溢れそうになるときもあつたが、ヒナはヒカリ達についていき、いろんなことをした。

ヒナがヒカリ達と遊んだというよりは、リザードン達にいろんな話ができるように必死に思い出を作っているようだ。ルカリオは感じていたが、口には出さない。

きらびやかなショッピングモールにヒナが眩しげな表情で見つめるなか…ヒカリがまず先に「それ」に気づいた。

「…つてあれ？ギラティナはどこにいったのよ？」

『ポチャア？』

『ミイ…あの馬鹿ならあつちで盛り上がってるでしゅよ』

『あいつ…』

「…なんだか楽しそうだね？」

「ヒナ、あれは真似してはいけない例だよ。私はティナを連れ戻しに行くから、先に行っていてくれ。もうすぐコンテストの時間だろう？」

「え!?うわっやばい…早くいかなきゃ!!」

『ポチャポチャ!!』

ギラティナがレストラン風のお店でいろんな女性に囲まれて楽しげに食事しながら話をしている。その姿はまるで初対面で会った時の懐かしい雰囲気があるなどヒナは思った。

ヒナがアーン達と旅を初めてから、ギラティナはずっとヒナのことを心配していた。アーンが行う行動に危険はないかルカリオ並に何度も聞いて、まるで兄や兄のポケモン：はたまたヒナを大切に思っている伝説達のように過保護だとギラティナの印象を良い方向に変えていたのだ。でも、今の様子は女性が大好きなタケシ以上に浮かれているように見え、駄目な印象しか抱かなくなってしまう。

そのギャップにヒナは苦笑し、ヒカリ達はまたかと頭を抱えた。アーンは冷たい視線でギラティナを見据え、ヒカリに今の時間を言っただけじゃなかったはずだ。姿に思わずギラティナに同情したのはヒナだけじゃなかったはずだ。

.....

【さあさあ始まりましたヤマブキシティコンテスト大会イ!!】

司会の声に観客達が雄叫びをあげる。建物が揺れるかもと思わせるぐらいの音量に驚いたヒナは思わず耳を塞いでから正面にあるステージを見た。ルカリオがヒナの様子を見て苦笑し、耳を塞いでいたヒナの両手を掴んで大丈夫だと言う。その言葉に頷いたヒナはすぐにコンテストに夢中になった。

——— ついでにいうとギラティナとアローンはコンテストが始まってもし現れることはなく、ヒナが大丈夫なのかとさりげなく聞いたたら、隣に座るルカリオとヒナの膝に乗るシェイミから大丈夫との言葉を受け取ったため、今現在もそのまま放置している。

ヒナはコンテストが始まる前まではギラティナの事を心配していたが、始まってからはコンテストに夢中になっていった。

一人一人のコーディネーターがポケモンを出して魅力を競う大会を見て、ヒナの心に突き刺さるような熱い衝撃を与えた。鼓動が聞こえるかのような、熱い感覚。コンテストのせいかと思っただけで、なにかが違うとヒナの本能が叫ぶような、力強い感覚。

ポケモンが技を出せば、会場が盛り上がる。ポケモンの声と、技とが——会場に響き渡る。

先ほど見たショッピングモールとは比べられないほどの、目映い輝き。星空のように、会場の周りがキラキラと輝く。ポケモン達の技の数々。

【続きましては、シンオウ地方出身のヒカリ選手だアア!!】

ヒカリがマグマラシを出して、炎の技を繰り返す。熱く燃えるそれは、まるでヒナにとつてのりザードンの炎に少しだけ似ていて…思わず拳を握りしめた。

でも、そう思ったのは一瞬だった。炎が竜のように動き、まるで意思をもっているように感じさせる。そしてその動きは、マグマラシに注目を集めるかのようにぐるぐると周り、星のようにキラキラと消えていった。

マグマラシが放った見たことのないコンテストの技と、その魅力に会場内で一番の歓声が湧く。その声を聞きながらも、ヒナはヒカリをじっと見つめていた。

まるでヒカリ自身が太陽のようだと感じるかのように、眩しげに…。

「…ねえ、ルカリオ」

『どうした?』

「ピチューも、やっぱりコンテストに出たいのかな…?」

『…さあな。直接聞いてみたらどうだ？』

「うん、そうするよ…」

.....

ゴーストタイプのポケモンが活動し出すであろう深夜の時間帯。

ポケモンセンターの一室で、ヒナは寝ることができないでいた。ヒナはちゃんとその理由を分かっていたのだ。

(私には…夢がない)

ヒナにとって、ヒカリのようにトップコーデイネーターになるといふ夢も、兄のサトシのようにポケモンマスターになるといふ夢がない。以前シゲルから話をしたときに

夢について考えたことがあったが、そのときはいつか見つかるかもという曖昧な答えしかなかった。なにかできないかなという、曖昧な答えしか…。

だが、今の心境だとそれは無理かもしれないという焦りがあったのだ。何もできない自分が嫌になる。

ヒカリのような眩しい夢をもつものを…あの大会を見てしまつては、もう無理だった。

(ヒビキにも、ちゃんと夢がある…なのに、私には何もない)

マサラタウンで衝突したあとにヒビキは夢があると語った。ジョウト地方でシルバーに会った時、彼は夢について何も語らなかつたが、何か目標のようなものをもっていると感じた。

強さを求めているのは、リザードン達を守りたいから…でもその先は？

私の叶えたい夢はなに？

(駄目…眠れないし気分悪い…風にでも当たろうかな)

ヒナは重たい身体を起こして立ち上がり、眠っているヒカリを起こさないように静かに部屋からでて…そしてポケモンセンターから抜け出した。

風に当たりたいというのはちよつとした言い訳にすぎないとヒナは分かっていた。このままではいけないことも分かっていたのだ。

(私…強くないといけないのに…)

ヒナは自身の弱さを恥じた。夢がないということの不安と、リザードン達に会いたいという寂しさが溢れでてしまい、こんなにも感情が揺れてしまっているのだとこぼれ落ちる涙を拭い、頬を強く叩く。

——後ろから、気配がした。

「っ誰？」

『ツツ！ゴオオウ!!?』

「え?…ゴース?」

後ろに何がいると感じとり、すぐに後ろを振り返ったら、まさに今から驚かしますという感じでゴースが固まっていた。

その姿を見て、一瞬呆然とするヒナだったが、その奇妙な表情で固まるゴースに笑ってしまった。ゴースは笑ったヒナを見てすぐに我に返り、同じく笑う。

『ゴオオオスツ!』

「え、何?私に来てほしいの?」

『ゴオオオ!!』

ゴースがヒナにこちらに來いと笑いながら示したため、悪気はないゴースであり、おそらくさっきのも笑わせようとしてやったことなのだと分かってヒナは素直にゴース

のあとをついていく。

——— ついていった先はヒナが来たことない森のなか。ヤマブキシテイから出てしまったけれど、後でまた戻れば大丈夫かと考えてヒナは先に進むゴースのあとを歩く。

そしてたどり着いた先は広い草原だった。

「凄い……！」

草原にはたくさんさんのポケモン達がいた。ポケモン達はそれぞれ笑いあい、そして躍りあう。

まるで、マサラタウンでヨルノズクに会うために来た時の光景のようだと思った。

みずタイプのポケモン達がそれぞれ水を噴水のように放ち、ひこうタイプがその水を浴びてキラキラと光りながら飛んでいる。くさタイプのポケモンが、それぞれ躍りながら中心に向かって目映い光を集めていく。ゴーストタイプのポケモン達が笑い、むしポケモンが音を奏でるかのように鳴き声をあげていく。

それを見たヒナはコンテストを見た時のように凄いと思った。そして同時に、ポケモン達が幸せそうに笑いながら楽しんでいるなとも思ったのだ。コンテストで見たポケモン達は、ヒカリのマグマラシ以外は皆緊張しているように見えたから…今の光景はとても自然で美しいと心から感じとった。

『ゴオオオス!!』

「え!?あそこに行つていいの!?…でも邪魔になるんじゃない…」

『ゴオオオス!!』

「うう…分かった」

ゴースによって連れてこられたポケモン達がたくさんいる広場。ここにいるのは野生のポケモンだけだから、人間の自分がいるのは場違いだと思ったのに彼らは歓迎してくれた。楽しそうにこっちへおいでと誘つてくれて…気づけばヒナはポケモン達の中心にいて、笑っていたのだった。

.....

楽しく笑いあった後、ヒナはポケモン達と別れてポケモンセンターへ戻ってきた。

深夜の時間帯だから誰もいないと思つたら、何故かポケモンセンターの入り口にヒカリとポツチャマがいてヒナは驚く。

「…こんな時間まで外にいたら危ないでしょう！ベットにいないから心配したのよ！」

『ポチャポチャ!!』

「ご、ごめんなさい…」

ヒカリとポツチャマは怒っていたが、それはヒナが心配だからこそその怒りだということを理解した。だからこそヒナは迷惑をかけたと後悔したのだ。…でもヒカリは優しい笑みを浮かべてヒナの頭を撫でる。ポツチャマもヒカリと同じような表情を浮かべていた。

「…ヒナちゃん。一人で背負い込んだら駄目よ」

『ポチャ!』

「ヒカリさん…ポツチャマ…」

その言葉は、前にアロンに言われた一人では何もできないという声を思い出すような感じに似ていた。優しく頭を撫でる感触に、ヒナはゴースに会う前まで考えていたことを話す。

「ヒカリさんは、私くらいの年齢ではもう夢を持っていましたか？」

「え、夢？」

『ポチャア？』

「はい。トップコーディネーターとしての夢です」

夢を持つのが当たり前のように、皆がどんどん先へ進む。それに置いていかれたような感覚があったヒナはヒカリに質問したのだ。もうこの頃には夢を持っていたのかを……。

ヒカリはその質問を聞いて小さく微笑み、答えた。

「そうね……わたしはママがコーディネーターだったからってという影響もあったし……いつの間にか夢がトップコーディネーターになってたなあ」

『……ポチャポチャ』

「そう…ですか…」

「焦らなくていいのよ」

『ポチャア!』

「え?」

ヒナがヒカリの答えを聞いて顔をうつむかせたのを見て、ヒカリは言った。それが当然かのように、言ったのだ。

「だいじょーぶ! 夢なんて、いつ見つかるのか分からないものよ。私はそれを見つけるのが早かっただけ…ヒナちゃんもいつか見つけられるわよ。叶えたい夢つてものをね!!」

『ポツチャア!!』

ヒカリの言葉は、ヒナを慰めるために言ったのかもしれない。本当にそうだと信じて、言ったのかもしれない。

それでも、ヒナにとっては救いだった。

「…私、ポケモン達が幸せになれるような…そんな夢を見つけてみたい…リザードン達と一緒に」

「そっか…じゃあその夢を探してみよう！」

『ポチャア！』

「…はい！」

———
まだ分からないヒナの夢は、少しだけ形になる。

第二百七十二話く心を鋼に、身体を燃やせく

「ハア…ハア…」

酸素を吸おうと深く深呼吸をして周りを確認する。周囲を見渡せば、人々やポケモンたちが何故そんなに走っていたのだろうかというような視線がこちらに向くのがわかる。呼吸を整えて何でもないと言おうような態度をとって見せる。

目立ちたいわけではない…でも逃げなければいけないのだから仕方がないのだ…。

『キツスウウー！』

「来たッ……！」

空を飛行するカントー地方では珍しいポケモンが頭上から襲いかかってきた。それを避け、すぐにまた走って行く。

心臓が激しく鼓動し、一步一步踏み出すごとに汗が滴り落ちる。

逃げなければいけない――。

「私は諦めないんだから……!!」

.....

それが始まったのは、彼の一言からだった。

「これから…鬼ごっこでも始めようか」

「…え？」

ヤマブキシテイのポケモンセンター内：朝食を食べている最中に言われた言葉にアロン以外の皆が茫然とする。だが、いつもの事かとヒナ以外の皆が頭を抱え、ギラテイナがアロンに何を馬鹿なことを言ってるんだと叫んでは物理的に撃沈していたのだが、それもいつもの慣れのために皆が平然と流した。しかし、周りにいる無関係のトレーナー達がメガトンパンチ並みの威力で金髪の青年が地面に叩き潰された光景を見て少々ざわついてはいたのだが…。

いつもの慣れで周りの反応に気づかない一行は、いつものように朝食を食べつつこれから行う鬼ごっこについてのアロンの説明を聞くことになった。その後、どこぞの雑誌にて「例のトレーナー並みの威力をもつ青年現る!？」という記事がギラテイナが叩き潰された時の写真と共に掲載されるのだが…今の彼らは気づかない。

ただ、いつものようにポケモンセンターで出された朝食を食べ、そして鬼ごっこについて詳しく聞いていった。

アーロンが説明するルールは…簡単に言えば――。

1つ、鬼はヒナ以外の全員になるということ。

1つ、ヒナにタッチしたらヒナが負け。時間切れまで逃げ続けられたらヒナの勝ちとなる。

1つ、朝食を食べた一時間後にスタートし、日が暮れるまでがタイムリミット。

1つ、ヒナを捕まえるのは何を行っても構わない…ただし致命傷や怪我につながる行動はNG。

これらのルールを守って鬼ごっこは行われるとアーロンは話してくれた。その言葉を聞いてヒナはまるでマサラタウンでやったかくれんぼに似た感じかなと懐かしくな

る。あの時はヒトカゲと一緒に必死になって隠れていたり逃げ回っていたなど遠い目をしつつも、ヒナはアーロンの言ったルールを守り、朝食を食べた後指定された時間までの間に隠れることに決めた。

ポケモンセンターから離れる前の一瞬、ふと後ろを見るとアーロンが何やら笑顔でヒカリ達に向かって話をしている光景があり…これはマサラタウンで修行した時以上に過酷になるのではないかと少しだけ嫌な予感がしているヒナであった。

———
そしてその予感は現実となったのだ。

朝食を食べて一時間が経った頃…ヒナはある建物の傍で隠れていた。捕まったらいけないのだからと周りを見渡し、アーロン達が来ていないかを確かめる。周りには前日のコンテスト大会に来ていた無関係な通行人が多くいて、鬼となっているアーロン達が発見しにくいと感じた。だからこそ、ちよつとした路地裏に隠れ、誰かが来ないかどうか見張ってはいたのだが…。

『はいみいつけた!!』

「うわっ！それ反則だよギラティナ!!」

『何をやっても構わないんだから反転世界から来ても構わないに決まってるでしょ！』

路地裏にあるガラス窓からギラティナが姿を現したことにヒナは驚愕し、走り出す。一直線だとヒナ自身の歩幅ではギラティナに負けてしまうからと考えてあえて道ではない道を通り抜ける。壁と壁の小さな隙間：塀の上などを走り、そして先程通った人で溢れている道で立ち止まった。

路地裏からいきなり小さな少女が現れたことに通行人は驚いていたが、ヒナはそんな通行人に気づく余裕はない。今現在ギラティナがヒナを追ってこちらに來ているという気配はないが：それでもギラティナは反転世界を行き来できる【ポケモン】だと今更ながら実感し冷や汗をかいた。

それに、この鬼ごっこでギラティナが反転世界からこちらに向かつて捕まえに來たということは、ガラスや鏡がある場所は通れなくなるということヒナは理解する。だが、このヤマブキシテイでガラスや鏡が使われていない場所はほとんどないと言っても等しいかもしれない。その使われていない場所にヒカリ達が待機していたとしたら、あ

る意味ヒナにとって詰んだような状況になってしまったといってもいいだろう。

つまりそれは、逃げ続けなければいけないという過酷な鬼ごっこになるのだとヒナは考えたのだ。

(体力勝負ってことかな…大丈夫…私はマサラタウンで鍛えられてるんだから…)

マサラタウンの迷いの森で何度もフシギダネ達と修行をし、ミュウツー達と一緒に遊んだり追いかけられたりしているわけではないのだとヒナはやる気を出して先程とは違った道を歩き始めた。

——だが、歩き始めた先にいたのは通行人に紛れてやって来るミミロルとパチリス。アーン達と旅をしているヒナだからこそ、そのポケモン達がヒカリの手持ちポケモンだとすぐに分かったのだ。そしてこちらに向かつて近づいているということにも気づく。

通行人の人々はカントー地方では珍しいミミロルとパチリスに興味津々であったが、

その凄まじい形相と立ち止まっている幼女に向かって追いかけて行くありえない光景を見て下手に関わってはいけなさと逆にミミロル達の邪魔をしないように道を開けているぐらいだ。

ヒナはミミロルとパチリスがいることに驚き、叫び声を上げる。

『ミミイイイ！』

『パッチイイイ！』

「ヒカリさんのポケモンも鬼になるのツ?!」

パチリスが大きくジャンプしたのを見て、このまま立ち止まっていけないとヒナは立ち止まっている場所よりも後ろに一歩大きく飛び退く。飛びのいたことよってパチリスから逃げることに成功し、体勢を整えて逃げる隙を見つけようとする。

だがその間にも、先程の幼女にあるまじきジャンプ力とパチリスの行動に通行人と言う名の野次馬が発生した。まわりがざわつき、逃げ道が塞がれていく中で…ミミロルがれいとうビームをヒナの近くの地面に向かって放ち、滑りやすくして余計に逃げにくく

させる。

『ミミロオ!』

『パツチイ!』

「何でそんなにやる気十分なのか分からないけど…でも負けられない!」

兄譲りの逆境に負けない根性と気迫でヒナは叫び声を上げた。その声にミミロルとパチリスはこつちも負けていられないと鳴き声を上げる。

まるでポケモン同士のバトルのような光景だと感じた通行人が野次馬となつて立ち止まり、ヒナたちの行く末を見物する。その野次馬が増えたために、ヒナの周りが賑やかになる。賑やかになると言うことはつまり、鬼たちに見つかりやすいということであつて――。

「いたあああ!!ミミロル、パチリス!逃がしちや駄目よ!」

『ポツチャアア!!』

「うわっヒカリさん達も来たあ!!?」

ヒカリとポツチャマが来たと分かり、このままでは負けてしまうと分かったヒナはすぐになれるとうビームで凍っていない地面に向かってジャンプし、塀や近くの家にある窓を使って屋根へよじ登り、逃げていく。その瞬発力とジャンプ力はヒナが幼い頃にフシギダネ達に鍛えられた成果でもあるのだが、それを知らない通行人からはもはや人間じみていないと驚愕させる結果となったのだった。ヒカリ達はサトシにますます似てきたわね!?!と叫ぶぐらいで済んだのだが…それでも逃げられた結果は変わらず、ヒナが走って行った方向へちやんとした道を通って行くことになったのだった。

.....

「ハア…ハア…」

走っては逃げ、隠れては見つかり…また走つてを繰り返しているヒナは体力を消耗し少しづつ休む時間が増えていった。誰もいないと安全を確認するために周囲を見渡す行いのせいでマグマラシに見つかりそうになったのだから、なるべく隠れていた方が良く考えてしまったのだ。そんな甘さがいけなかったのかもしれない。

「これで終了かい？」

「ツツ！」

—————
体力を消耗し、疲れてしまったからこそ…人が近づいても気

づかない。

座り込んで呼吸を整えていたヒナの後ろからアローンの声が聞こえた。その声を聞いてほぼ脊髄反射の勢いで後ろへジャンプして警戒し、逃げる体勢を整えるヒナにアローンはただ微笑むだけでなにもしない。

でも、少しだけ眉をひそめて不機嫌そうな表情になっていた。ヒナは感じていた。

「…これは何のための鬼ごっこか、ヒナは分かっているか？」

「なんの…ため…？」

「君は、怪我を治す今まで一体何をやってきた？何をしてきたんだ？」

「っ！」

ヒナはようやくアーロンがやろうとしているこの鬼ごっここの目的を知ることができた。アーロンが行おうとしているのは、ヒナの波動の力を上げるための修行…。精神統一をしてハリセンを避けていた時の実践のような修行だと分かったのだ。

だが、ヒナは何も分からずただ波動を使わずに視界を使って周囲を確認し、音で判断することしかしていなかった。その行動に、アーロンは失望してしまったのだとヒナは思ったのだ。

波動の師匠となっているアーロンを失望させてしまった行動をってしまった自分に

後悔し、顔を俯かせる。だが、アーロンの表情は変わらない。

「…あの…私…」

「ヒナ、これで鬼ごっこは終了かな？」

「いいえ！まだやれます!!」

「そうか…なら、今度は間違えたら駄目だよ」

「っ…はい！」

ヒナの叫び声にアーロンはようやく表情を変えて笑い。先程の間違いを許してくれたのだとヒナは分かってすぐに力強い声で答えた。そして大きな声で礼を言ってアーロンから逃げるように走って行く。

——アーロンはヒナを追うことはなく、逃げていくヒナの後ろ姿を見送るだけであった。

.....

(精神統一…精神…統一…)

走ったことで呼吸が乱れるが、何度も深呼吸をしてゆつくりと息を整えそして目を閉じていつものように青い輝きを探す。

通行人が多くいる町での精神統一は初めてなので青い輝きがとても眩しく感じて初めは思わず目を開けてしまっていた。だが、すぐに落ち着いて目を閉じて精神統一をやり、青い輝きを見つめ続ける。大きな輝きが次第に人の輪郭が見える…ポケモンの輪郭が分かる…

———
何かが、来る。

「つルカリオね…逃げよう！」

『逃がさんぞヒナ!!』

目を開けて、違和感があつた方向を見るとそこにいたのはこちらに向かつてやつて来るルカリオだつた。アーロンの弟子でもあり、マサラタウンでより鍛えられてしまつたルカリオだとすぐに捕まってしまう可能性が高いためヒナはすぐに走つて逃げていく。塀や屋根を登つてもルカリオが追つてくるため、このままではいけないと冷や汗をかいた。鼓動が激しく高鳴る。息が乱れる。

——ふと、ヒナは何かを感じ取つた。逃げ続ける先に何かがあるような…そんな心配が…波動を感じた。

『ポチャア!』

「やっぱりいたあ!？」

『くっ…挟み撃ち作戦失敗かつ!』

『ポチャポチャ!!!』

目を閉じていなくても何かがあると感じとり、あえて前に続く道ではなく他の曲がつている道へ行こうとしたのだが、先程行こうとしていた道からやる気満々なポツチャマが現れたために——さつき道へ曲がらずに走っていたらポツチャマと正面衝突していたなとヒナは背筋をぞつとさせながらも心から安堵する。それでもまだ逃げることに変わりない。

ポツチャマの件で、目を閉じなくても波動が使えると分かったヒナは逃げながらも感覚を鋭くさせようと精神統一を図る。

何度も精神統一と眩き、波動を使おうとするのだが、何故か周りにある感覚が…違和感が激しく感じてうまく使えない。

息が乱れているせいかと判断して、何度も感覚を鋭くさせようと声を出して眩く。

「ハア…ハア…せいしんっ…精神統一うううッ!!?」

『おりやあ！ヒナちゃんつかまーえた!!』

「うわ…負けちゃった…というか、反転世界ずるい！」

『はは…狡くないよヒナちゃん。ほらそんな可愛いほっぺを膨らませないで…というか、怪我なくて本当に良かった』

急に真横のガラス窓からギラティナが現れ、ヒナに抱きつく形で捕まえる。走っていたヒナに抱きついたことによつてスピードが落ちて転びそうになるがそれをギラティナがヒナを抱きしめて守ってくれたことによつて怪我はしなかった。そのことにギラティナは安堵し、ため息をつく。

ギラティナに捕まったことによつて鬼ごっこはヒナの負けと決定してしまつたのだが――。

『おい貴様…いつまでヒナを抱きしめているつもりだ…』

『ポチャアア!!!』

『え、いや…これ不可抗力じゃない？俺が抱きしめなかったらヒナちゃん怪我してたし…というかルカリオ何そのはどうだんの構え!!』

「ギラティナだから仕方ないんじゃないの？」

『ヒナちゃん辛辣!!』

『いい加減に…さっさとヒナから離れろこの変態がツ!!』

『ポツチャアア!!!』

「うわっ!」

『ちよっヒナちゃんに怪我させる気っ!!?』

何故か怒ったルカリオとポツチャマに攻撃されそうになったギラティナはヒナが怪我をしたら危ないと考えてすぐに走って逃げていく。

その姿はまるで先程の鬼ごっこの続きのように感じられたが——ルカリオ達から殺気じみた雰囲気を漂わせているために文字通りの【鬼】ごっことなりそうだとヒナはギラティナに抱えられながらも感じていたのだった。

(せっかくだし…このまま精神統一してアーロンさんの居場所でも探ろうかな…)

ゆらゆらと揺れるギラティナの腕の中にもヒナは危機感などが全く感じない。ギラティナがヒナに怪我をさせないように配慮していることも、ルカリオやポッチャマがヒナに怪我をさせようとはしないこともちゃんと分かっているからこそその安心感だった。ただ考えるのは何時になったらこの鬼ごっこは終わるのかという考え。

——だが、波動でアーロンの位置を探ればヒカリ達と一緒にすぐ近くにいることが分かり…ああこれは予想よりもすぐに終了しそうだなど分かってため息をついたのだった。

第二百七十三話く予期せぬ力は微笑んだく

『ア、アーロン様…本気ですか…ッ!』

「ルカリオと戦う…んですか?」

「ああそうだよ」

ヤマブキシテイからクチバシテイへ行く途中の森の中。ポケモンや人間たちがあまりいない森の奥深くで休憩していた時にふと思いついたかのようにアーロンが言った内容を聞いて、ルカリオが目玉を飛び出すのではないのかというほど驚き、ヒナは小さくアーロンの言った言葉を繰り返していた。そしてその話を聞いたギラティナたちはまたかというように頭を抱え、ヒナに怪我をする内容だったら殴られてでも止めなければ

ばと決意する。

だが、そんな彼らの心配は杞憂となり、アロンが言った内容は、とても簡単かつ怪我をしないような内容であったのだ。

ルカリオが使う武器は精神統一の時に使っていたハリセンのみ。ヒナはその身一つでルカリオに膝をつかせるのが目標となる。

「…つまり、模擬バトルのようなもの…ですよね？」

「そうだね。ただしポケモンの技を使わないバトルになるのだけれど…やるかい？」
「やります」

『ツ…ヒナと…戦う…だと…！』

「ルカリオはちよつとやりにくそうね」

『ポチャア』

『そりゃあそうでしょ…ハリセンしか使えないとしてもルカリオにとってはヒナちゃんに攻撃すること自体やりたくないだろうし…』

『ルカリオの修行にもなりそうだしゆね』

『ポチャポチャ』

「ええそうね。主に精神面での修行になりそう…」

ルカリオがこれほどの苦痛はないというような渋い表情を浮かべて微笑み合っているヒナとアーロンを見つめているのをギラティナたちは他人事のように雑談していた。もちろん模擬バトルと言うことは怪我をする可能性は高いと考えてはいたのだが、ルカリオ自身がヒナと戦うという言葉とその反応に同情するだけで終わった。アーロンがヒナと戦うというのなら全力でギラティナは止め、ヒカリも少しはギラティナに協力したかもしれないが…ヒナを妹や娘のように溺愛するルカリオ自身が戦うというのならまあ大丈夫かという感情の方が強く、ハリセンという致命傷にならない武器ならばなおさら平気だろうと安心していたのだ。もちろん当の本人であるルカリオはどうやってヒナと戦えばいいんだとはじまりの樹でアーロンと決別した時のように悩みまくっていたのだが…。

「ルカリオ、波動は我にあり。——つまり？」

『…波動の思うがままに従います』

アーロンの一言によって、ルカリオはヒナと戦う決意を決め、ハリセンを手にとる。それはまさしく、いろんな戦いを経験した歴代の戦士のような雰囲気を漂わせていたのだった。

.....

「えー、バトル形式ということで…審判は私ことヒカリが行います！ルカリオの攻撃技、およびヒナちゃんの武器使用は禁止となります！それじゃあ…バトル開始!!」

『行くぞッ!』

「速ッッ!!?」

『チッ…やはりサトシに似たか…ッ』

「え…舌打ちするほどのことかな？」

「甘いよルカリオ…君の妹弟子はそんなに弱くない」

『ええそうですねアーロン様…ですが私にも兄弟子としての意地があります!』

「よし来い！受けて立つんだからね！」

ハリセンで戦うということに対してルカリオは了承したが、バトルを長引かせるつもりはなく、速攻で終わらせようとまるでんこうせつか並みの速さでヒナに近づき…その頭上にハリセンを振り下ろす。だが目前にルカリオがいることに気づいたヒナはすぐさま身体を捻って後ろに下がり、地面に転がりながらも受け身をとってそのハリセンから避けることに成功させた。

その反射能力はある意味人間ではなくポケモンのように感じ、ルカリオは思わずヒナが小さなサトシのように見えてしまい舌打ちをした。

ルカリオにとってヒナは本当に可愛がっている妹のような存在なのだ。そのヒナがあの一見た目人間中身強暴ポケモン」のような兄のサトシに似てきたことに内心で嘆き悲しむ。いつか周りの人間たちに「見た目可愛い少女だけど中身がポケモン」なんだと言われたらどうしようかとバトルの最中だというのに一瞬だけ思い悩んでしまったぐらいだ。でもその思考はアロンから言われた妹弟子という言葉で消し去ってしまった。アロンが言った「妹弟子」という意味を、ヒナを人外の一步手前だと決めつけずに妹弟子なのだから強くなってきたからなのだと考えれば少しは救われる気がしたのだ。まあそれはある意味幻想にすぎないのだが…それでもルカリオは妹弟子であるヒナが強くなってきたことに対して嘆き悲しむのではなく、自慢できるような心でない

ればと兄弟子としてそう覚悟した。

いや、それでもサトシのような常識外にはなあってほしくはないと心の底から願ってはいるのだが：師匠であるアロンがいる時点でそれは無理かと少しだけ諦めていた一番弟子のルカリオであった。

——その間にもバトルは激化する。

『目を閉じていては何もできなくなるぞヒナ!!』

「そんなことないツ…よっ!!」

『ツ————本当に、お前は強くなったな…!』

通常のバトルのようにルカリオはスピードを最速のままヒナの周りを走り回り、かげぶんしんのように動く。その動きに翻弄されまいとヒナが目を閉じて精神統一を図ろうとするが、ヒナの身につけているグローブが青く光るのを見てルカリオが動き、一瞬の隙を見つけてハリセンを振り下ろそうとする。

だがヒナも負けておらず、ハリセンを振り下ろそうとしたルカリオがこちらに近づい

たのを一瞬で目を開けて見る。その後、しゃがみこんでからカポエラーのような体勢をとり、両手に思いつきり力を入れて飛び上がったからルカリオの顔面に蹴りを入れようとした。

もちろん、いろんな戦いを経験してきたルカリオがカポエラーのような体勢で無理やり飛び上がらないといけないほどの小さな幼女の攻撃が当たるわけもなく…かといって可愛いヒナが無理して怪我をさせるつもりもないためすぐさま後退し体勢を整えていった。

無意識ながらもルカリオは笑っていた。模擬バトルでの戦いを通して感じるヒナ自身の強さと、その信念を受け取っているのだから。

ヒナ自身も笑っていた。ルカリオと戦うことよってポケモンのように経験値が溜まるような…もつともつと強くなるようなそんな予感がしていたのだから…だから笑っていたのだ。

そんなポケモンと人間の戦いを邪魔しようとしてくる【奴等】の妨害を…外野が行っているとも知らずに。

『ポチャポチャア!!』

「ここらこら…今は彼女たちに近づいては駄目だよ」

『というか、むしろヒナちゃんを守ろうとして近づいてない？やっぱりこのバトル無謀なんじゃツツグフオツ！』

「私は無駄なことは好かないんだ」

『ツ…だつたら俺にいちいち殴りかかって来るのも無駄な事だろ!!』

「それは無駄じゃないと思ってるよ。ティナを殴るのは私の宿命だ」

『そんな宿命いらないツツ!!』

『つまらないこと言ってるのであいつら止めるでしゅよ!』

『ポツチャマアア!!!』

———
ツツ!!!
』

森の中にいた野生のポケモンたちが、ヒナとルカリオの模擬バトルを見て…あれがバトルではなく一方的に攻撃されると勘違いしたらしい。ヒナの才能の弊害か…ルカリオを敵に認定してバトルを止めようと飛び出してくるのだ。それを止めるのはもちろん審判であるヒカリ以外の仲間たち。言葉で説得しようとしてもポケモンたちは

嘘をつけ！あの女の子が可哀想だろ！このままじゃ怪我をしちゃうよ！と叫ぶだけで話を聞こうとしない。だからこそ無理やり止めているのだが：アーロンがいつものようにポケモンを怯えさせ、やらかしてしまふほどの行動をとっていいないせいで止まることがない。アーロンにとってヒナを守ろうとしているポケモンたちは対して悪いわけではないと分かっているし、手加減をしても簡単に止められるポケモン達だと分かっているからこそギラティナに殴りかかったり会話をしたりという余裕があったりする。

その間にもバトルは苛烈していく。

.....

(届かない…あと一歩なのに…とどかないっ！)

『どうしたヒナ！その調子だと俺に近づくこともできないぞ！』

「分かっているよルカリオ!!」

笑みがだんだんなくなっていく。焦りが余裕を消し去っていく。

戦いの中で変わっていく感覚があるのには気づいていた。鋭くなっていく波動に気づいていた。

目を閉じなくても青い輝きが見える。

目を閉じなくても波動が伝わる。

それでも、私は波動を使えない…！

（波動を違うものに…攻撃として使えないと意味がない！でもそのやり方をアーンさ
んから教わってない…いや、違う…自分でやらないと!!!）

ヒナにとっての波動はただ感覚を鋭くさせて人が何処にいるのかを探すためにしか
使用してこなかった。もちろんそのための修行しかアーンはしてこなかったのだが

…それを恨んではお門違いだろうということも気づいていた。

【わざと】攻撃してこないルカリオは、先程の接近攻撃に警戒して近づいてこないだけだろうと気づいていた。でもそれでも一瞬の隙が生まれてしまつては必ずこちらに近づいてくる。その一瞬がある意味ヒナにとつてもチャンスとなるが、それはハリセンが頭に叩きつけられてしまう諸刃の剣と同じだということにも気づいていた。

このままではいけない

もつと他の方法を考えないと…

ヒナは必死に考える。鬼ごつこの時のように、精神統一をしていた時のように…何度も何度も考える。思考が、波動の力を鋭くさせる。でもそれは、散策能力が強くなつただけにすぎないと思つてしまう。

(いや、もつと違う方法に…もつともつと波動を強く鋭くしないとっ！)

ヒナは唐突に思った。波動が鋭くなるのが素早いルカリオを探そうとするからこそならば…その思考を一気に変えよう。探そうとするのを止めて、波動に集中しよう…そう考えたのだ。

何故そう考えたのかは分からない。激しいバトルによって体力を消耗させたせいだ。思考が鈍ったか、ヒナの無意識の本能がそうさせたからか。どちらにせよ、このままではヒナ自身が負けてしまうと分かってはいたのだ。

『考えている暇があるのか!!』

「ツツ!!」

ハリセンが振り下ろされるのが、分かった。見なくても分かった。波動が身体に循環するのがわかる。まるで心臓から流れる血液のように、身体中を駆け巡る。

——心臓の鼓動が、聞こえる。

『何っ…!?』

.....

ルカリオがヒナから後退したのがわかる。

ヒナの攻撃を本気で危険を察知し避けようとしたからだというのが分かるが…その周りの惨状が酷くなったと感じた。

審判役を務めているヒカリが茫然とするのが目に見えた。周りにいるポケモン達やポッチャマ達が驚いているのも見えた。

ルカリオが、バトルの最中で隙ができているというのに顔を手で覆い隠し、悲しんでいるのが目に見えた。

——ヒナが、己の両手を見て驚いているのが分かった。

『ナニアレっ…あんなのあり?』

「ふむ…さすがヒナだ。最初のバトルだというのにあれならすぐに身につきそうだね…だが、あれだけで満足はできないよ…もっともっと…そうだね、はどうだんぐらいは放つようになってもらわないと」

『お前ヒナちゃんを第二のルカリオにしたいわけッ!?』

当然、ギラティナも嘆き悲しみ…そしてアローンは満足そうに微笑んでいた。

第二百七十四話く悲しみ傷ついた彼女たちく

「ここに、あのリザードンがいるんだ…」

『ポチャア…』

『ミイ…なんだか熱い所でしゅね…』

『まあね。サトシ君のリザードンもいるような場所だし…でもそのおかげでリザードンが暴れたり攻撃したりしても平気だろうし…精神面でのケアぐらいはしてくれてると思うんだけど…』

『貴様あのサトシのリザードンが細かいケアをすと思うてるのか？』

『むしろサトシのリザードンだったらもっと熱くなれよ！っていいそうだしゅね』

『…うん。ミュウ達と相談して決めたことだけど今更ながら不安になってきた…どうしようヒカリちゃん』

「もう…大丈夫でしょ！ヒナちゃんのリザードンはそんなに弱くないわ！…よね？」

『ポ…ポチャア…』

『う、うんそうだよね大丈夫だいじょ…つつゴフオオツ!!』

「無駄な話をしていないで、早く中に入ろうか…あアルカリオ、それは放置して構わないよ」

『は、はい…』

『ツツそれ扱いするな!!!』

「ははっ…でも、ようやく会える…!」

ヒナ達がやって来たのは、ジョウト地方のキキョウシティ辺境に位置する場所――

――サトシのリザードンも修行しているリザフィックバレーというリザードン達が集まる谷だ。強さを求めたリザードン達が、より強くなるために集まっている所でもあり、わざわざ改造したマサラタウンのトレーニングフィールドより訓練に最適な場所でもある。

ギラティナたちがヒナのリザードンをそちらに預けたのは、マサラタウンだとヒナの思い出が強く残っているせいで小さなきっかけでシロに連れ去られた時のことを思い出して余計に傷つくの恐れ、かといってヒナの思い出がない土地でもあり、サトシのポケモンや伝説のポケモンがいない場所に置いていくとリザードンの身に何かあつては不安だと考えて：リザフィックバレーに預けることに決めたのだ。ヒナと共に過ごした思い出の場所でもなく、サトシのポケモンがちゃんと傍にいられるような環境のリザフィックバレーなら大丈夫だろうとギラティナたちが結論付けて決めたことだった。

つまり、サトシのリザードンは最強を誇り、その強さは伝説をも凌ぐ程度だと分かっていること。そしてその当時ヒナのリザードンは情緒不安定であり、すべての生き物に対して攻撃的な精神になっていたからこそ、誰かが常に傍にいて：なおかつヒナのリザードンが暴れたらすぐに取り押さえられるような場所にいた方が良いという思いでギラティナたちは預けたのだった。

だが、強さを求めるには最適な環境だが、精神面での回復ができてくるような環境ではないとのことに今更ながら気づいたギラティナは、ヒナのリザードンが今よりももっと周りを憎むようになっていないのかで不安になっていた。そんな不安が周りにも伝わる。でも、周りがそんな状態だとヒナ自身の不安にもつながるだろうとアーロンが考えていつものようにギラティナを殴って阻止したことによってその暗い雰囲気が消え、

そして彼女たちは門の前に立ってその時を待ったのだ。

——大きな門が開かれる。

ようやく、リザードンに会える…！

.....

門の中に入ると、そこにはたくさんのリザードン達がこちらを見て歓迎していた。体格がとても巨大で：なおかつ屈強そうなりザードン達が雄叫びを上げて空に向かって炎を放つ。それを見て歓迎しているようだトルカリオが眩き、暑すぎる周りの環境にシエイミとポツチャマが汗をかいて嫌そうにしていた。歓迎しているのはリザードンだけじゃなくリザファイックバレーに住み、管理している人間のジークもだった。

ジークは微笑みながらヒナたちに近づいて口を開いて言う。

「あなたがサトシ君の…妹ね？」

「はい。初めまして。ヒナといいます」

「よろしく。私はジーク。ああそうだ、今あなたのリザードンは建物の奥にいるから連れてくるわね…サトシ君の妹なら、こっちのリザードンとは久々に再会するんじゃないかしら？」

『グオオオオオツツ!!!』

「うわあ…久しぶりだねリザードン!!」

『グオオオオオオ!!!』

オレンジ色で屈強な強さを持つていそうな雰囲気を漂わせているリザードンが笑顔でこちらに近づいてヒナに向かって挨拶をした。もちろんヒナの後ろにいるアロン達にも挨拶をして…そしてヒナと再会を喜び合う。リザードンがヒナを片手で抱き上

げて大きくなったなど言うかのように笑みを浮かべ、それに対してヒナがリザードンの首元に抱きついて久しぶりだねと大きな声で笑った。

だが、サトシのリザードンにキラティナが不安げな表情で近づいたことによつてヒナはリザードンから降ろされ、再会した興奮は冷める。

『ねえちよつと…大丈夫なの【彼女】は?』

『グオオオオ!』

『え、それはそれでどうなの…というか、君も本当にサトシ君そつくりだよね!!?』

『グオオオオ…!』

『いや褒めてないし!というか炎をこっちに向かって吐かないでよ!!』

『何を言ってるのかしら…ルカリオ分かる?』

『ポチャ?』

『…サトシのようなことを言っているだけだ。俺には知らん』

『なんか物凄く不安になって来た…』

『ポチャア…』

『ミイ…ピカチュウがリザードンのことを脳筋馬鹿っていうのも納得できた気がしたでしゅ…』

「大丈夫だよ。…リザードンなら、絶対に大丈夫」

「ああそうだね。君が育てたりザードンなら…鋼の心を身につけていそうだ」

『いやソレもソレでどうなんでしゅか…』

ヒナのリザードンのことを心配するギラティナたちが話をする一方で、ジークは谷の奥から真っ黒な身体のリザードンを連れて歩いてきた。その黒いリザードンこそヒナが一緒にいて育ったりザードンであって…ヒナは自分の相棒だと分かったのだ。ジークは感動の再会になるだろうと考えてアロン達の傍へ行き、ヒナと黒いリザードンを見守った。誰もが…いや、一部は心配していたのだが、それでも感動の再会になるだろうと考えていたのだ。

だが、リザードンは目を鋭くしてヒナを睨み、大きな咆哮を上げる。

それを見たヒナは心配しこちらを止めようとする周りを無視して黒いリザードンに近づき、微笑んで口を開いて言う。

「リザードン……ごめんね、私は君を守れなかった……でも、大丈夫だよ。私は強くなったから……だから帰ろう?」

『……グオオオオオオオツツツ!!!』

大きな炎が、ヒナの目前に迫る。

リザードンがかえんほうしゃを放ったのだと分かったヒナがすぐにルカリオと特訓して身につけていた反応を見せ、真横に向かって転がり炎を避ける。

何故炎を放つのか、ヒナには分かった。たまごの頃からずつとずつと一緒だったリザードンだからこそ、何故こちらに向かって睨みつけて攻撃してきたのが、言葉にしなくてもちやんと分かった。

「そっか…ただ言うだけじゃ分からないよね…」
『グオオオオオツツ!!』

——強くなったのなら、その力を見せる！

そう言うかのように叫ぶリザードンはまるで兄であるサトシのリザードンのようだとヒナは思った。そして、ただ落ち込んでいるだけじゃなくちゃんと言のりリザードンのように強く逞しく育っているのだと分かった。リザフィックバレーに居たせいとか、兄のリザードンに似てちよつとだけ…いや、とてつもなく攻撃的になってはいたけれど、それでもリザードンはヒナと同じくシロの一件から立ち直り、強くなるうとしていたのだと分かってヒナは笑った。

その場の雰囲気を感じ取ったのか、いろんなリザードンがヒナと黒いリザードンの周りを見つめる。ギラティナとルカリオが喧嘩が始まると考え止めようと動くのだが、アローンの手によって物理的に止められ仲良く地面に沈んでいる。ヒカリはそんな彼らを気にせず、緊張した面持ちでヒナたちを見守り、そしてジークとサトシのリザードンは笑っていたのだった。

炎が、強く燃え盛る。

青色の閃光が、響き渡る。

.....

「へえ……さすがはサトシの妹だ。あんなにも小さいというのにあの威力は凄いな」

「……うわあ……まるでギンガ団の残党ぶっ潰してた時のサトシみたい……」

『ポチャア……』

『グオオオオオオ！』

『おい待て貴様。そんな誇らしげに言うことか!!?』

『ポツチャ!!』

『ミイ! 普通は泣くような場面でしゅよ!』

「…え、なんて言ったのサトシのリザードン?」

『ヒナちゃんが強くなったことに対して喜んでるだけだよ…まあこれは喜んでいいのかわからない状況なんだけどね…』

ギラティナたちが遠い目をして若干現実逃避しているのは仕方ないと思える光景がヒナたちの周りで起きていた。黒いリザードンがかえんほうしゃを放ったのを見てヒナは身につけているブローブを青く光らせながらもポケモンのような反射能力でそれを避け、そしてリザードンに近づいて殴りかかろうとしたのだ。それを見て黒いリザードンは翼を広げて飛び上がり、ヒナの攻撃を避けた。

避けられたヒナの拳は地面に直撃する。力強く殴られた地面が青く光ったかと思えば【爆発】したかのような反応を示したのをみて周りが驚きの声を上げる。青い光が地面に包まれ、そしてその地面がヒナに殴られた拳から一気に地割れのように陥没していったのだ。その威力は、カビゴンのメガトンパンチ並みの威力を持つているのではないかと観戦しているジークが感心したかのような声を上げ、そしてヒカリ達が遠い目をして修行していた日々を思い出して嘆き悲しむ。ああ、とうとうヒナもサトシのような

人外になってしまったんだなと…。

地面が陥没した馬鹿力のようなヒナの攻撃力に黒いリザードンは目を見開いて驚き、そして笑う。

もちろん、ヒナもリザードンの力強い炎を見て笑っていた。

『グオオオオオオオツツ!!!』

「はっあああああッツツ!!!」

黒いリザードンの尻尾が光り輝き——ドラゴンテールが放たれる。それは、サトシのリザードンから教わった技の1つであり、ヒナに強さを示す証でもあった。ヒナと同じように、リザードンも強くなった。

リザードンも同じように、離れていてもヒナと一緒に強くなったのだ。

ドラゴンテールを顔面すれすれで避けたヒナは掌底をリザードンの腹に向かって叩きつけようとする。だがヒナの攻撃力の高さを地面が陥没したことによって知った彼

女は避けた。もちろん反射で攻撃するのを忘れず、きりさくを選択してヒナに向かつて斬りかかったのだが：ヒナはいとも簡単に避けていく。

リザードンの闘争心が、戦うというポケモンとしての本能がこのまま勝ちたいと叫びを上げる。もちろんそんなリザードンの相棒であるヒナも、同じように勝ちたいと望んだ——望んでいるからこそ、一人と一体は叫んだのだ。

『グツオオオオオオオオオオオオツツツツ
!!!!!!』

「絶ええ対つに、負けないツツツ!!」

お互いが、勝つてみせると叫び合う。それは、叫び声が共鳴し合いリザファイックバレーのリザードンの形をした岩をびりびりと響かせるほどの威力を持っていた。

ヒナの周りにリザードンがほのおのうずを巻き起こす。中心にいるヒナが周りに起きたほのおのうずに巻き込まれる前に波動を使って大きく飛び上がった。ほのおのうずはいくつかが巻き込まれて大きな炎の竜巻となり、そして消えていく。その攻撃力にサトシのリザードンが誇らしげな鳴き声を上げ、その言葉が分かるルカリオ達が微妙そ

うな表情で彼を見た。

——飛び上がったヒナを追いかけるかのように、リザードンも黒い翼を広げて飛び上がる。そして空中にいるヒナに抵抗されないよう抱きつき、ちきゆうなげを放とうと回転し始めた。ヒナは翼がなく、飛びまわることもリザードンの攻撃を避けることもできない。でも接近しているリザードンに攻撃することは可能だ。抵抗できないように抱きつかれた腕にかみつき、その痛みでゆるんだ拘束を抜けてリザードンに攻撃しようとする。ヒナの攻撃を妨害しようとリザードンも抵抗し、結局はちきゆうなげがちやんと発動することなく二人とも地面に叩きつけられ砂煙が舞った。

その威力にヒカリが思わず両手を口元で覆い、アーロンが止めるのを分かっているはずのルカリオ達が飛び出て行こうとしたぐらいだ。…もちろん先程と同じようにギラティナたちは仲良く地面に沈んでいたのだが。

『ツツツ!!!グオオオツツ!!!』

「ツフウウウー…ハアアアアアツツ!!!」

——それでも、ヒナたちの攻撃は止まない。

砂埃の中からヒナと黒いリザードンが飛び出して接近し、攻撃を開始する。かえんほうしやと波動がそれぞれに当たりそうになる。地面に叩きつけられたことで多少は怪我をしているはずのヒナとリザードンはお互いだけを見て、叫びあうのだ。怪我をしても気にせず、周りがこちらを見て心配そうな声を上げても何も聞こうとせず——
——負けたくないと、勝ちたいと望んで咆哮し合うその姿はまさに獣のようだと皆が感じていた。

だが、炎が揺らめき、青い輝きが飛び交うのを、アーンは渋い表情で見つめていたのだった。

.....

「彼女は…なんていうか、凄まじいな。まるでポケモンのようだ」

「サトシの妹ですから…って言わないと現実が見れなくなってきた…」

『ポチャア…』

『あー…これ絶対フシギダネ達がなんか文句言うでしょ…』

『それだけならまだマシだろうな…何も知らないトレーナー達がヒナを見て何をいうのか…俺は現実を見たくない』

『しつかりするでしゅよ。アーロンの弟子』

「……いや、ヒナはちゃんと人間だよ」

【え?】

アーロンが言った一言に、その場にいたりザードン以外の皆が絶句する。あのリザードンの燃え盛る炎を躲す身体能力と地面を陥没させたほどの馬鹿力を見て何を言うんだと言いたいように、一瞬皆が開いた口がふさがらない状態に陥った。

だがアーロンと昔からの仲であったギラティナが先に我に返り、叫ぶ。

『おまつ…お前何言ってるの!!?あの光景見た全員がヒナちゃんの事ポケモンか何かだつて疑うレベルには強くなってるっていうのにつ!』

「あれは、波動の能力を最大限使用してできることだ」

『グオオオオ?』

『…っ…いい、いや…波動は通常ヒナのような攻撃性を持った力を使うことができないはずだが…まさかっアーン様!!?』

「言いたいことが分かったようだねルカリオ…波動は人やポケモンにとっての命のエネルギーと同等なんだ」

アーンが言った言葉を簡単に説明するのなら、ヒナの波動は身体を血液のように循環してアドレナリンのような力を出し、異常な身体能力を生み出したり馬鹿力を生み出したりすることができるようになったということ。

あの馬鹿力は身体から流れる波動で攻撃しているからにすぎず、その力のコントロールはヒナが身につけているグローブがあつて初めてできることだと言ったのだ。波動が消耗すると命の危険性が伴うのではないかとルカリオは焦りの色を浮かべるが、アーン

ロンは大丈夫だと言った。ヒナにもこのことは説明してあるし、波動を使用しすぎたデメリットについても理解しているということ。

「ヒナはちゃんと人間だよ。…もちろん私も——そしてサトシ君もね」

サトシについては、予測に過ぎないが…その波動の力を無意識の本能によって使用しているからこそ人外的な力を生み出しているにすぎず、結局は皆同じ人間なのだ。アロンは言ったのだ。

「人間が、ポケモンに敵うはずはないのに…強さを願った人間たちは技術を生んだ。戦争を…呼び込んだ」

『アロン…』

「私たちのこの波動も、その一部にすぎないだけだよ…人間がポケモンと並び立つために波動を利用した…」

『…ですが、それでもアロン様は強い』

「ルカリオ…?」

『人間だからなんです?俺たちはその力に一度でも勝ったことはない…だからこそ、波動使いのアーロンの一番弟子として誇りに思っています——これからも、ずっと!』

『そうだよアーロン。俺達にとってはアーロンも、サトシ君も最強なんだ』

「そうね…それに、リザードンはサトシが最強じゃないとやってられないみたいな表情をしてるし」

『ポチャ!』

『グオオオオオツ!!』

『ミイ…結局は人外で落ち着くんでしゅね…』

「何だかよく分からないが…とにかく凄いと言うことだけは伝わったよ」

ジークはアーロンの言葉を深く理解していないが、それでも彼らの絆はちゃんと理解した。

アーロンが言った言葉をよく分かっていたのは、当時よく行われていた【戦争】を知るギラティナとアーロンのみであり、そのために波動を利用したのだと懺悔のような口

調で話すアーロンを咎めるかのようには、それは違うのだとルカリオが叫んだのだ。その言葉にギリテイナは頷き、ヒカリはサトシ達が人間だと言う言葉に納得できないような声を出してからサトシのリザードンを見て苦笑し、ポツチャマも同じような反応を見せる。サトシのリザードンは、サトシが最強じゃないと言われて少々不機嫌だったが、それでも現実サトシは人外じみているから波動を使うだの使わないだのどっちだっていいだろ！と言うような反応を見せる。

そして周りの反応を見て、シエイミは小さくため息をつき、ヒナたちの戦いを見つめていたのだった。

もちろんその間にも、彼らから言われた言葉を理解したアーロンは小さく微笑んだりするが…。

.....

——戦いは、ある意味終わりに近づいていた。

それでも、彼女たちの声は止むことはない。その激しく燃え盛る炎も、青い波動の力も止むことはない。

『グオオオオツツ!!!』

「負けないツツ負けたくないツ!!!」

その瞬間が、訪れた――。

リザードンがドラゴンテールを使ってヒナの腹に向かって攻撃し、ヒナが波動でリザードンの腹に向かって攻撃する。両者の攻撃はお互いを吹っ飛ばし、壁へと激突するほどの強さを持っていた。土煙が舞い、壁の一部が衝撃によって崩壊する。周りにいたリザードン達が、ヒカリ達が緊張の面持ちで見守っていた。

土煙が舞う双方の壁から現れたヒナと黒いリザードンはふらつかせながらも歩みを止めず、お互いが近づいていく。また攻撃し合うのかと一瞬の静寂が起きた瞬間……だった。

『グオオオオ……』

「ハア……ハア……」

ヒナとリザードンが同じ瞬間、同じように倒れた。手と手が触れ合うような距離で倒れ、空を見上げて乱れる息を整えていく。戦いができるほどの力を彼女たちはもうもっていないかった。すべてを出しあい、消耗し合ったのだ。そして倒れて初めて分かったこと。ヒナたちが見た空はとても青く……そして涼しげだと思えたのだ。

まるで、マサラタウンにいた頃のようにだ——何も言わなくてもヒナたちはそう思っていた。

「ねえ、リザードン……」

『……グオオ』

「……うん。仲直り……しよう？一緒にまた、遊ぼうね」

『グオオオオ』

リザードンの拳と、ヒナの拳がぶつかり——そして笑い合った。

小さい幼女と色違いのヒトカゲと一緒にいて、幸せだったあの頃のように……

彼女たちは、楽しそうな声を上げて——空を見上げて笑ったのだ。

第二百七十五話く旅立ちとお別れく

「久しぶりだね…ヒナちゃん」

「…はい。お久しぶりです…シゲルさん」

『……………グオオ』

「もう！急に現れるからびつくりしたわ！」

『ポチャア!!』

「ああもしかして…彼が【そう】かい？」

『はい、アーロン様』

『ははは…と言うことはあれかな?』

『あれでしゆね』

『あれだろうな』

「…何よあれって?」

『ポチャア?』

『聞かない方が幸せな事だ』

リザフィックバレーに突如現れたのは少しだけ微笑んでいる知的そうな青年――

――シゲルだった。

シゲルが現れたことに対してヒカリ達は驚いているが、アーロンは何処か納得したような表情を浮かべており、ルカリオやギラティナ、そしてシェイミは苦笑して遠い目をしている。何があったのかよく知らないヒカリとポツチャマは彼らの表情を見て首を小さく傾けていたが、聞かない方が良いというルカリオの忠告に従ってそれ以上の追及はしなかった。

その一方でヒナとリザードン、シゲルは苦笑しつつも挨拶をしていた。シゲルにとってはヒナたちが連れ去られた原因を作った失敗という過去があり、そしてヒナたちに

とってはシゲルがあこの事件によつて罪悪感を抱いているのではないかと不安になつて
いる。

「……………」

「……………」

「……………」

『……………グオオオオオツツ!!』

「うわっ!？」

「危ない……!」

『グオオ……!!』

そんな微妙な空気を変えたのが、ヒナの兄であるサトシの手持ちのリザードンだつた。だがリザードンは兄が怒つた時のように少々過激にかえんほうしやをシゲルを中心にぶつ放していたが、それを避けようとするシゲルや、シゲルを守ろうとするヒナ：そしてそんなヒナを守ろうとするヒナのリザードンによつて避けることができた。サトシのリザードンはヒナが余裕で避けられるようにと手加減をしていたのだろう。リ

ザードンはそんな辛気臭い顔をするなどばかりに炎を小さく吐いて、大きな声で一喝した。

『グオオオオオオオッ!!!』

「……ああ、やっぱり君はサトシのポケモンなんだね……ヒナちゃん、あの時はすまなかった」

「そんなことないです！あれは、誰も予想できなかったことですし……それに、シゲルさんは何も悪くない……だから、謝らないでください！それに、私は……私たちはもう大丈夫ですから」

『グオオオオオオオツ!!』

「ヒナちゃんに炎が当たったら危ないのに……」

『ポチャア』

「いや、彼はちゃんと手加減しているよ。あのリザードンならば避けられないぐらいの炎を吐くことは容易だろうからね」

『サトシのリザードンならこっちにも炎を当ててきそうだしゅ』

『ああ、やりかねないな…あのリザードンなら』

『サトシ君と同じようにバトルジャンキーだからね…まあだからこそ大丈夫と言えば大丈夫かな?』

「それって全然大丈夫じゃない…」

『ポチャポチャ!』

ヒカリ達はシゲル達の様子を見て、サトシのリザードンが炎を吐いたことに対して驚愕し、ヒナに当たったかどうかと話していた。そんなサトシのリザードンはサトシに似ている点が多くあり、ヒナを傷つけようと行動しないから大丈夫だろうとアールが話したり、ヒカリがバトル大好きで好戦的な性格をしているリザードンに遠い目をしていたり…そんな会話が繰り返り広げられていた。

「とにかく、ヒナたちの怪我を治そうか。話はそれからでも遅くはないだろう…ルカリオ」

『分かりましたアールン様!』

『ミイ…ミイも手伝うでしゅよ!』

.....

シゲルがどうして来たのかという話を、ルカリオ達によって喧嘩でつけた怪我を癒してもらいながらも聞く。するとシゲルはリザードンと再会したと話を聞いたからこちらまでやって来たと言う。やって来たのは、ヒナたちにとっての弟であるピチューの居場所を教えるためであった。

「え!?!ピチューの居場所を知ってるんですか!!」

『グオオ……!』

「ああ、ピチューは僕が送り届けたからね。今いるのはフスベシティにある【りゅうのあな】だよ」

「遠ッ!」

『グオオ!』

シゲルが言った場所は、現在ヒナたちがいるジョウト地方のやや北上に位置する場所。キキョウシティの近くにあるリザフィックバレーからは地図で見たら近くにあると錯覚するが、現実には山や川といった自然が多く存在し、ヒナたちの壁となつて立ちだかる。つまり、遠回りをしていかないといけない場所にあるのだ。それをヒナは知っていた。ジョウト地方やカントー地方でアローンと波動の修行をしながら旅を続けていたからこそ、地図だけで近いと判断するのはいけないと理解しているからだ。

だからこそ、ヒナの反応にシゲルは苦笑して、頬をかく。

「フスベシティには今僕の父がいるんだ」

「父？……って、シゲルさんのお父さん!？」

「そう。僕のお父様……父はピチューの進化系統には異様なほど詳しくてね。ヒナちゃん
のピチューも強くなりたいと望んでいたし……預けたんだ」

「強く……?」

『……………』

「そうだよヒナちゃんにリザードン。ピチューも君たちのように強くなりたいと望んでいるんだ」

「そつか…ふふつ…ピチューも同じ気持ちなんだね…」

『グオオ』

強くなりたいと言う言葉にヒナは目を見開いて…そして少々泣きそうな顔でリザードンを見て笑った。ヒナの表情を見てリザードンは力強く頷いて微笑む。すべてはヒナの力となるために、もうあんな悲惨なことを起こさないように行動した結果なのだから…リザードンはややその方向が違つてはいたが、それでもヒナを守ろうとする意志は変わつてはいない。

だが、ヒカリは納得できていないと言う表情でシゲルに向かつて言う。

「ねえ！あなたのお父さんがピチューの進化系統に詳しいってことは分かったけど…それで強くなるのと何か関係があるの？強くなりたいのなら、このリザフィックバレーのような特訓ができる場所かそれこそサトシに預けた方がいいんじゃない？」

「———僕の父はこう見えてカントー地方のチャンピオンだったんだ…まあ、今は辞退しているから【元】という言葉がつくんですけどね」

「元チャンピオン!？」

『ポチャアア!!!?』

「へ：!? シゲルさんのお父さんってチャンピオンだったんですか!!？」

「そうだよ：もつと詳しく言うのなら、君のお父さんも元チャンピオンだ」

「え：ええええ!!？」

『グオオ：：?』

『グオオオオオオオ：!!』

『ちよつと待つて：：そんな話聞いたことない：：』

「あれ？ サトシから何か父に関して聞いたことがあるのかい？」

『ああいやそういうことじゃなくて：：うん、気にしなくていいよ』

ヒナは困惑していた。父には生まれてから出会ったことがなく、兄であるサトシは数回しか会っていない現状での話だったからだ。旅人として外にでているという話を母のハナコから聞いたことがあったが：：ただそれだけ。カントー地方のチャンピオンになつていたという事実を聞いたことはない。だからこそ、ヒナはいきなり出てきた父の話に困惑し、そして驚愕していたのだ。

そんな様子にヒナのリザードンは首を傾けてカントー地方のチャンピオンについて

サトシのリザードンに話を聞き、その言葉にサトシのリザードンは少々好戦的な色を隠さない目で答えた。好戦的な色の中には、マスターであるサトシの父親が元チャンピオンと言うことは、強いと言うことであり…そして戦ってみたいという感情を込み上げていた。

一方でギラティナもいろいろと困惑していた。シゲルやヒナとサトシの父について語られたのだから…困惑すると同時に、驚いていたのだ。だが、彼の心境を詳しく知る人物は「もう」ここにはいない。

そんな彼らの反応を見て、シゲルはアロン達を見てから小さく頷いた。その行動にヒナとヒナのリザードンは首を傾けていたが、シゲルは気にせず話を続ける。

「ヒナちゃんにはすまないけど、この場所へ行ってもらいたいんだ」

そしてシゲルが懐から取り出したチケットをヒナに渡した。

「これは、アサギシテイまで行ける船の直行便。すぐ近くにある港の船から行けるチケットだ」

「アサギシテイ…」

「港に着いたらすぐに迎えが来るはずだから待っていてくれ。…すまない、僕にできることはこれぐらいしかないんだ」

「え……？」

『グオオ……？』

「研究員としてやるべきことがあって……これからそこへすぐに向かわなければならぬ……本当ならヒナちゃん達を送り届けなければならぬだけだ、すまない」

「そうですか……分かりました。ありがとうございます」

『グオオ！』

「え……でも私たちもついていけば何とか……」

『ポチャ！』

「いや、これ以上の旅路はヒナとリザードンだけで行った方がよい。あまり一緒にいるのも、守られるという感覚で波動を鈍らせてしまうからね……それに、何か起きても問題を解決する力は身につけさせたいもりだよ」

『ええそうですね……妹分として見るのなら、ヒナは誇らしく育った。それにリザードンもだ』

『グオオオオ!!』

『いろいろと不安すぎるけど……まあそれ言ったらサトシ君に怒られるから気にしない方がいいか……』

『ミイイ：ミーはそろそろ花運びに行かなきゃならないでしゅから帰るでしゅよ!』
『え、ちよつ：あのカオスを俺一人で止めろと!』

「それについては問題ないよティナ。私が行こう：ルカリオ、ついて来てくれるかい？」
『はい。喜んでお供します!』

「：私はホウエン地方でコンテストがあるからそっちに行くけど?」

『ポチャア!』

『ええ!?じゃあヒカリちゃんともお別れってこと!?!』

「あのねティナ、こっちもいろいろと準備があるのよ!：：：ごめんねヒナちゃん。アサギまでなら送れると思うんだけど：：：頑張つてね!大丈夫よ!ヒナちゃんならできるわ!」

『ポチャア!』

「はい!ありがとうございますヒカリさん!」

『グオオ!』

「ええ!どういたしまして!：：：またマサラタウンに寄るから、その時は一緒に遊びましょうね」

『ポツチャ!』

「はい!その時はコンテスト技について教えてください!ピチューが喜びます!」

『グオオウ!!』

「ふふ…分かったわ! 楽しみにしてる!!」

『ポチャア!』

シゲルは申し訳なさそうな表情でヒナたちを見て言った内容は、研究員としての仕事を多く抱えているという話だった。シゲルはまだまだ研究員としては下の方に位置する。ある研究でリーダーとして抜擢されたとしても、ある程度の実績を持っていたとしても、まだまだ勉強することはたくさんあるのだ。だからこそ、ヒナたちを置いて旅に出るのがとても不安だった。

そんな声に反論して、ヒカリがシゲルに向かって言うが…その言葉をアローン達によつて止められ、結局は一人で行くということになった。

.....

アサギシテイへ目指す船に乗り、ヒナはりザードンの入ったボールを見て微笑む。

「ピチューに会ったら…まずは抱きしめないとね」

リザードンのボールが小さく揺れて、ヒナが言った言葉を肯定するように応えてくれた。小さく揺れるボールにヒナはまた笑って、そして出発した船からだ見えなくなつた方向にいた、ずっと一緒にいてくれたアーロン達の姿をみるかのように、じつと立っていた。

「私の夢…か…やりたいこと、見つけないとね…」

アサギシティに行き、そしてフスベシティに迎えが来るといふ人に会い、シゲルの父に会う。長旅のようでそうでないこれからのことを考えて、ヒナは小さく笑った。

これからの旅で問題が起きないようにしなければと考えて、アーロン達がいるであろう方向をじつと眺めて――。

だから、気づかなかったかもしれない。

「この船は我らロケット団が占拠した！ポケモンを持つ者はそのボールをこちらへ寄こせ！そうすれば身の安全は保障してやろう!!」——抵抗する人間およびポケモン

ンは殺すぞ!!」

「…え？」

ヒナもある意味、サトシと同じくトラブルメーカー体質なのだということに。

第二百七十六話～船にて急ぐは問題ばかり～

ヒナは焦っていた。それは、ボールで激しく揺れるリザードンの主張のせいか、それともヒナが隠れた机から通り過ぎる強暴なポケモンを従えた悪党たちがいるせいか……いや、両方かもしれない。

「……どうしよう」

ヒナは焦っていた。だが、焦って行動してしまっただけではいけないとアーロンから教わっ

ているからこそ乱れる息を整え、深呼吸を何度もして落ち着いてから現状を確認していたのだった。

もちろん、波動を使いながらもまだにボールから出せと激しく揺れて主張するりザードンのボールをぎゅつと握りしめて落ち着かせながらだが…。

「大丈夫よりザードン、今はまだボールの中にいて…」

（波動を使って見えたのはたくさんのポケモンと、人が激しく蠢く光…それと、人が泣いているような声）

ヒナが現在いる場所は船でヒナ自身が使っている客室の中。甲板からすぐに船の中に入り、占拠したと叫ぶ人やポケモンから隠れて一時的に安全になるであろう場所を指した結果だった。だが、ずっとここにおいても意味はないだろうとヒナは考える。外で聞こえていた悲鳴が近くで聞こえてくる。扉が壊され、部屋を荒らされる音が響く。その音にりザードンが反応してまたボールを揺らす、ヒナはもう一度大丈夫だよと笑ってりザードンのボールを撫でたことから揺れはおさまった。

(そろそろここも危ない…出ないと)

このまま扉から出るとあのロケット団と名乗る悪党達に見つかる可能性が高いと考え、ヒナはすぐに部屋にある窓を開けて波動で確認し、脱出した。

外から出て聞こえてくるのは、様々な声と音。悲鳴のような声に、嘲笑うような声。破壊音やポケモンの叫び声。

——怖いと感じた。

あの時のように、痛みや苦しみはないのだけれど、それでも自然と身体が震える。冷や汗が出て、目眩がする。でも、リザードンに知られたらすぐにボールから飛び出して守ろうとしてくるだろうと考えて両頬を強く叩いて無理矢理気合いをいれた。

だが、それでもヒナの様子がおかしいと感じ取ったりリザードンがボールを揺らして主張するため、ヒナは苦笑した。

「ごめんねリザードン…でも、ロケット団が人質をとってるなら、このまま暴れることは

できないから……」

ヒナはリザードンを出せないでいた。それは、ロケット団が人質を使つて脅してくるという可能性があるからだ。人質がいなければ暴れてしまつてもいい。それぐらいの強さはヒナもリザードンも手に入れた。だが、船に乗る客や船員が人質としていることによつてロケット団を捕まえようと暴れた結果、負傷者が出てしまつては意味がないとも考えていたのだ。なるべく、最善を目指していこうと考えていた。

それをボールの中から聞いていたリザードンは少しだけ不満そうにボールを小さく揺らしてから静かになる。リザードンも人質がいる場合を考えて、この黒くて大きい身体だとロケット団にすぐ見つかつてしまつて隠れている努力が水の泡になると分かつたからだ。た。

(とりあえず、ロケット団の目的を聞かないと……かな。アーンさんが教えてくれた、現状把握の確認を急がないと)

ヒナは隠れながら行動を開始した。ロケット団が何故船を占拠したのか、何故悪党のようなことをしているのかを理解しなければならぬからだ。そして人質を解放でき

るのかどうか、ロケット団がどのくらいいるのか人数確認もしなければならぬ。

アーロンが教えてくれた————知らなければ問題は解決しないという通りに従って、波動で見た大きい輝きのある場所へ急いだのだった。

.....

「我々が望むのは、ただ唯一の悪を貫くロケット団の再生と新結成!!正義などいらぬ!」

「サカキ様が新ロケット団の頂点に君臨し、再びの悪を目指すこと!!」

「我らはロケット団!!」

「悪を貫くロケット団だ!!!」

(つまり、お兄ちゃんの意味に従わなかったロケット団の残党ってことね…)

フロアにて聞こえてくるロケット団達の叫び声にヒナはため息をついた。この事が兄であるサトシに伝われば、いろいろと問題が起きるのは目に見えて分かることだからだ。

今現在ヒナがいる場所はフロアの隣に位置する部屋の中。壁に耳を寄せて、ロケット団の声を聞いていたのだ。ヒナはまだ、波動を完全には使いこなせていないため、密集する空間で知り合いのいない人やポケモンの敵と味方の判断がつきにくい。アーロンやルカリオならできるところを、ヒナはまだできないでいる。

それでもフロアから聞こえてくる泣き声と悲鳴に、ロケット団と名乗る悪党と、船にいた客である人質がいるとわかった。

(フロア全体に『ねむりごな』か『うたう』を発動させたらいいんだけど…無理よね)

今いるのは攻撃特化のリザードンだけ。リザードンはねむりごなもうたうも使えないことからヒナはできない考えを捨ててちゃんとできることを考えようとした。

人質が無傷で解放され、かつロケット団を捕らえる方法を――。

(船を操縦してる部屋に行ってみようかな…何かあるかもしれない…)

このままここにいても意味はないと考え、ヒナは移動を開始する。

すぐに解放しなければいけない人質達のことを考えて、やれることを探そうと、部屋から出て船にある操縦室を探しに向かった。

通信が使えるならば、兄に連絡をとろうと考えて…。

——そして、フロアから離れて歩いた廊下の先で見つけたのは船の案内図。

「何がなんだか…操縦室書かれてないし…！」

案内図といっても、客室についての案内図でありその他については書かれていない。それをじっと見て、集中していたせいだろうか…。

「他にも隠れた奴等がないか探せ！」

「ハッ！」

「っ!？」

廊下の曲がり角から聞こえてくる足音と声。不幸にも案内図がある場所は部屋があ

るが全て鍵がかけられており開けることができない。そして扉を壊して隠れたとしてもその音で見つかる可能性の方が高く、足音が近くなっていることで隠れる時間がないこともわかった。

ガタガタと激しく揺れるリザードンのボールを手に持ち、ヒナは構えた。暴れることを覚悟した。

（姿が見えたら、リザードンと一緒にフロアにいるロケット団に見つからないように攻撃しよう……!）

「待て!そこを動くな!そしてあいつらに接触するな!」

「えっ!?!」

「いいから動くな!!」

構えて、動き出そうとした瞬間、声が聞こえてきた。その声は聞いたことのある人の声だとヒナはわかったが、それでも何もするなと言われてはいそうですかと領けない。ロケット団が騒ぎだしたら攻撃しようと考えて構えた体勢のまま待つが、やって来たロケット団は「ヒナに気づかず」そのまま通りすぎていった。

「…何で？」

「へへっ！驚いたかヒナ！」

ロケット団が通りすぎた後ろ姿を見てヒナは呆然とした。何故隠れてもいないヒナを見つけることが出来なかったのだらうと…。

だが、その答えは、まるで霧が晴れるかのように姿を現す人物によって出された。

「…久しぶりね、ヒビキ」

「おう！久しぶり！」

『グアアウ!!』

「ってゾロアーク？進化したの!？」

「まあな！シルバーと特訓して進化した！今や頼れる相棒だぜ？」

「そっか、さっきのロケット団達に向かってゾロアークがイリユージュンして幻影を見せてくれたのね…ありがとう」

『グアアア!』

「それよりもっ！ヒナは何でこの船に乗ってんだよ！」

「フスベシテイに用があつて乗つてるの…ヒビキは？」

「俺はアサギシテイでポケモンショーがあるから見に行くんだ。シルバーがチケットを手に入れたからな！」

「…え、待つて。シルバーもここにいるの？」

「ん？…あいつ何処に行った!？」

ヒビキが廊下から飛び出してすぐ近くにある甲板に出る。ゾロアークがマスターであるヒビキを追うために、何故かヒナの手を握つてから走り出したため、ヒナも一緒になつて甲板に出た。ゾロアークがイリュージョンで誤魔化しているからか、ヒビキが騒いでも誰も気づかない。

ヒナはため息をついて、いまだに辺りを見ているヒビキに話しかけた。

「シルバーとさつきまで一緒にいたつてことよね？甲板にいたの？」

「いや違う！甲板から見えるあそこにいた——」

ドオオオオンツツ!!

ヒビキが指差した方向から見えた大きな閃光と爆発。そして、船を揺らす威力のある破壊音が聞こえてくる。悲鳴とポケモンの声の不協和音となってヒナ達の耳に届いたことから、その衝撃の凄まじさが伝わり、現状が最悪なことを理解する。理解はするが、「それ」が違ってほしいともヒナ達は考えていたのだ。

ヒナとヒビキはお互い顔を見合わせて、数秒間立ち止まっていた。冷や汗を流して、ゆっくりと首を動かし二人は黒煙が立ち上る場所を見つめる。

「緊急！誰かが反撃したぞ！殺せ!!」

「反撃者は赤髪の少年だそうだ！殺してポケモンを奪え！」

そして聞こえてきたロケット団の声に、ヒナ達は走り出した。

「シルバアアアア!!!」

「もう！シルバーのバカア!!」

それはまさに、人質を無傷で解放できるのかどうかという考えが水の泡になった瞬間だった。

第二百七十七話～激怒したのはだあれ?～

シルバーは憎んでいた。悪いのは奴らなのだ、ただそれだけを信じて、怒っていたのだ。

「父上に対する暴言…か。いや、俺に対する挑発か…潰す」

ロケット団と名乗るのは、シルバーにとって正義のような存在だとそう誇っていた。たとえそれが、シルバー自身小さい頃にロケット団が悪として栄えていたとしても、今は違う。皆が笑って、そしてちゃんとお互いを支え合って生きているのだから…。人が

ポケモンを利用するのではない、人とポケモンが共存して生きていける世界を作ろうとしている。そんなロケット団を、シルバーはとも誇りに思っていた。悪いことをしていたロケット団が嫌いと言うわけじゃないが、それをやればいろんな人々が悲しむとシルバーは知っていた。ポケモンたちが傷つくのを、シルバーは知っていたのだ。

だからこそ、シルバーは全てを変えてくれたサトシに憧れるのと同時に、感謝していたのだ。父を変え、ロケット団を変え、そして悪を別の方向へ塗り替えてくれた存在。

——それをすべて奴らは否定した。それが許せなかった。

「チルタリス、すべて叩き潰すぞ」

『チルウ!』

チルタリスは、親のような存在のシルバーが怒っている感情を感じ取っていた。激怒にも似たものを「奴ら」に向けているのも分かった。だから叩き潰す。

シルバーがもういいと笑うまで、チルタリスも同じように怒る。

「なッ!? 何だお前!?!」

「ガキがまだいやがったか……!」

シルバーが見た先にいたのは、サカキが作ったロケット団が使っていた衣装に酷似しているものを着る奴らの存在。こちらに向かつてポケモンで攻撃しようとして来ているが、シルバーが来なければさらに酷くなっていたであろう悲惨な光景を目にして、さらに怒りが込み上げてきた。

ポケモン達が傷つき、泣いている。ポケモンを庇おうとしている人々が、傷つき倒れている。

奴らが人やポケモンを傷つけようとしていたのなら、こちらも容赦はしない。

「りゅうのはどう」

『チルウウウウウツツ!!』

ロケット団の名を踏みにじった所行を後悔させてやる。

.....

ドオオオオツツ!!!

最初の爆発から、その後何度も続く船の揺れと破壊音にヒナたちは焦っていた。

「な、なあヒナ……この船傾いてないか？」

「言わないで……」

「もしかして……シルバーがこれやったんじゃ……というか今もやってるんじゃ——」

「——お願い言わないで！シルバーがやったなんて話聞きたくないの！」

「おまえ聞いているだろ！早く止めないとあいつ犯罪者になるぞ！船沈没させた容疑で——」

『グアアアウ』

ヒナ達が焦る理由は、今現在も続いている揺れと激しい轟音に船が耐えられるかどうかという問題だった。何故シルバーがこんなにもキレているのか分からない……とは言えない。ヒビキもヒナも、ロケット団と名乗る連中がポケモンや人間たちを襲うこ

の光景に怒りがあつたのだから、何かきつかけがあれば暴れていたのかもしいないのだ。ただ、ヒナはアーロンの言つた通りに周りの状況を確認して、そしてポケモンや人間が集められているということに気づいた。人質になる可能性に気づいたのだ。だからこそ、無傷でどうにか人質たちを解放できればいいと思つてはいたのだがそれは全て破壊音と大きな閃光によつてできなくなつた。

でも、シルバーが暴れているのなら、それはもう無関係だろう。とにかく一刻も早くロケット団を名乗る奴らを止めなければならぬとヒナたちは走る。まあその前に船を沈める勢いで暴れまくるシルバーを止めなければならぬだろうと考えて今はシルバーの元へ走っているのだが…。

「おい！あのガキをどうにかして止めろ！こつちには人質がいるんだ！」

「誰か博士を連れて行け！こちらの研究を手伝うための必要なもんだ！」

「っ！」

「つておいどうしたヒナ！いきなり立ち止まって!？」

『グアア?』

「…ヒビキ、今の聞いた?」

「何が？」

ヒビキとゾロアークが仲良く首を傾けると同時に、ロケット団の嫌な怒鳴り声が聞こえてくる。

その声に、ヒナたちは嫌そうな顔をした。ゾロアークは鋭い爪を研いで奴らを斬つてやろうかという殺気立った目をして声のする方向を睨む。

「早く人質を使え！たぐさんいるんだから壁がわりにはなるだろうが!!」

「さっさとポケモンを回収しとけ！売るためのいい商売道具だ!!」

「早くフロアに戻るぞ！」

「…聞こえた」

『グアアウ!』

「フロアにいこう！このままだと皆が危ない！」

「いやわかっているけどその前にシルバーはどうするんだよ!?あのままでいいのかわか!!」

「いいの！あいつなら絶対に生き残るでしょうし…それに今はこっちの方が大事！私たちでやるべきことをしておきましょう！」

「…だああ畜生!!シルバーが船を沈めても知らねえからな!!!」

「不吉なこと言わないでよ馬鹿ヒビキ!!」

『グアアウ…』

ヒナ達は方向を変えてフロアに向かって走って行く。

やるべきことを、やるために――。

.....

「ヒツ…怖いよ…お父さん!」

「大丈夫だ…大丈夫だからな」

暗闇内で聞こえてくる大きな衝撃と破壊音にフロアの隅に集まっている人々とポケモンたちは怯えていた。だが、その不安を消し去ろうと大人たちが子供たちを守るかのように奴らの壁となっている。大人たちのポケモンも、大人しくしてはいるが、何かあ

ればすぐに守れるようにしようとしていたのだ。だがソレはフロアにやって来た一人の男の声によってかき消される。

「お待たせして申し訳ない…博士？」

「クツ…なにが目的だ！」

博士と呼ばれた中年の男は、立ち上がって叫んだ。その叫び声に、ポケモンたちが攻撃できる隙があればすぐに攻撃してやろうと構える。それを見てロケット団の男は嘲笑う。

「フツこのポケモンがどうなってもいいのか？」

『キュウウウ!!』

「ミニリュウ?!?!」

ミニリュウを掴む男に、博士は一步前へ歩く。だがそれを見てロケット団の男はミニリュウを小さな檻に閉じ込め、両手を上げて言う。

「このミニリュウは博士が研究している大切な素材でしょう？これがどうなってもいいとっ。」

「ミニリュウを物扱いするな!!!」

博士の叫び声をロケット団の男は鼻で笑った。まるで、物を物扱いしない博士を嘲笑うかのように…。そして博士の近くで攻撃できるのならばしよう構えていたポケモンたちは捕えられてしまったミニリュウを見て歯痒い感情を起こしていた。攻撃してどうにかしてやりたいという気持ちがあるのに、ミニリュウがいることによつてそれができない。

男は全て分かっているかのように、笑いながら言う。

「さて。博士…来てもらいますよ?それが嫌だと言うのなら…ナットレイ、やつてしまいなさい」

『ナットオオオオツツ!!』

「クツ…!!」

ナットレイがこちらに向かって鋭い棘を飛ばそうとしてくる。博士は避けられなかった。それを避けてしまったら後ろにいる子供たちや小さなポケモン達が傷ついてしまうと分かっているから。そして近くにいる大人たちも避けることはできないでいた。博士と同じ感情で、避けてしまったら子供たちもポケモンたちも傷つくと分かっているからこそ…ポケモンたちは、抵抗したらミニリュウが傷つくと分かっていたから、

止められなかった。

だが、その瞬間だった。大きな漆黒の風が棘を吹き飛ばしていったのだ。

ロケット団の男たちはその風を見てポケモンの技だと気づき、叫んだ。

「誰だ！今こちらに向かって抵抗したのは!!?」

その怒声に反応するのは、幼い少年の声。そしてその声のする方向を見れば、トレーナーの適正年齢にはまだ達していないであろう幼い2人の少年少女たちが立っていた。

「誰だって?…フツ！ただのマサラ人だ！」

「馬鹿！素性ばらしてどうするのよ!!」

「名前は言つてねえんだから良いだろ！——つてことで、後は頼んだぜ？」

「ええ、任せときなさい」

少年…いや、ヒビキが扉前から消えた———と思つた瞬間だった。

ヒナが放つたボールから出てきたポケモンが、大きな炎をロケット団が従えているナットレイに向かって放つたのだ。ナットレイが一撃で倒れたことに、ロケット団の男

は愕然とする。そしてようやく見えたのが、黒い身体をした、立派なりザードンの姿だった。

「リザードン…色違いだど!?」

「色違いのリザードンか!これは高く売れるぞ!捕まえろ!!」

「…高く売れる?捕まえろ?…リザードンは私の相棒よ!!色違いだ何だと言って私の相棒を貶さないで!!!」

『グオオオオオオオオオオツツ
!!!!!!』

リザードンがヒナの声に応えるようにロケット団たちに向かって大きく咆哮する。その凄まじい声は空気を震わせ、ポケモンたちをひるませ…そして怯えさせることに成功していた。リザードンはそんな怯えたポケモンたちを見て鼻で笑った。まるで、こんなで私に敵うと思ってるわけ?とでも言うかのように…。

「何を怯えている!相手は一体だ!!捕えてしまえ!!」

「リザードン、かえんほうしゃ」

『グオオオオオオ!!!』

だが、ロケット団は諦めきれていない。

強くて色違いのリザードンは希少価値が高く、ポケモンバイヤーの視点で見れば大金持ちの連中がこぞって買いに来ると知っていたからだ。ポケモンたちを叱咤させ、無理やり攻撃させようとしていた。だが、何体も集まったの集中攻撃もリザードンの放つかえんほうしやには敵わない。すべての攻撃が無効化される。

———それほどもまでに、強いポケモンだとロケット団を名乗る連中は気づいた。

「クツ：…ならば人質を使え！最悪ミニリュウを壁にしてもいい！さっさとリザードンを捕まえろ!!」

「ここには人質がたくさんいるんだ！そいつらを使え!!」

「どこに人質がいるって?」

ロケット団が叫んだ声に反応したのは、先程ヒナと一緒にいたヒビキの声。

人質がいたはずの方向を見てようやく気付いたのは、人々の腕の縄が解かれ、後ろの

壁が壊されて逃げていく人質たちの姿。檻が壊され、ミニリュウが博士と共に逃げていく姿。

「クソガキが…何しやがった!!」

「落ち着け…あの少年の隣にゾロアークがいる…おそらくイリユージョンでもしてこちらの目をごまかしたんだろう…これも希少価値が高い」

「希少価値?ゾロアーク、お前って結構珍しいの?」

『グアアウ?』

「いや普通怒るところでしょ…」

『グオオ…』

ロケット団の連中が言った言葉にヒビキは首を傾けて隣にいるゾロアークに聞いた。だがゾロアークはヒビキと同じように首を傾けてどうなんだろう?とでも言うかのように鳴き声をあげる。彼らの様子を見てヒナとりザードンは頭を抱えてため息をついて呆れていた。

「まあいいわ…これで人質もいなくなったし…これで終わらせるわロケット団!!観

念しなさい!!」

『グオオオオ!!』

「捕まえてジュンサーさんのところに連れてってやるからな!」

『グアアア!!』

「クツ…だがまだだ! まだ…:…ツ!？」

——大きな閃光と、破壊音がフロアに襲いかかった。

ヒナ達にとっては幸か不幸か…ロケット団の近くにあった壁がフロアの向こうにいたポケモンによつて破壊され、崩れていく。その壁があつた場所からやって来たのは、目が血走つた——ヒナたちと同じ年齢の赤い髪の少年。

「ここにもいたか…:…貴様等! ロケット団を名乗る愚図共は皆滅却してやる!!」

シルバーは親の仇でも言うかのように、ロケット団と名乗る男たちを見て怒鳴つた。その声と表情に、ヒナたちは慌ててシルバーに向かつて叫んだ。

「ちよつシルバーがなんかおかしくなってる!？」

「待て待てシルバー!! お前これ以上暴れたら船が沈没するぞ!!」

船は傾き始め、そろそろ暴れると沈んでしまうと分かった。でもヒナ達ならば手加減して戦えたのだが…激昂状態で戦闘狂バイサーカとなつているシルバーだとすぐに船を沈没させてしまうと分かつていたから焦つて止めようとした。だがその声は今のシルバーには届かない。

「知るか! チルタリス、はかいこうせん!!」

『チルウウウウウ!!!』

「ふざけんなあああああ!!!」

「シルバーの馬鹿あああああ!!!」

大きな閃光がロケット団に向かって放たれるのと同時に、ヒナはリザードンに……ヒビキはゾロアークに助けられながらもカオスとなったフロアから脱出することに成功したのだった。

第二百七十八話くすべては奴のせいです!く

シルバーのチルタリスによるはかいこうせんによって船が沈没し、あわや大惨事かと思われたヒナ達であったが…偶然にも船の緊急信号を察知したポケモンレンジャー含めた警察たちによって無事に救われた。

だが――。

「…いっとくけど、全部シルバーのせいだからね!」
「違う、ロケット団と名乗った詐欺集団のせいだ!」

「どっちもどっちだろ!!」

「もう……ここは一体何処なの!?!」

船から脱出することに成功したヒナ達であったが、その後来たポケモンレンジャーたちに顔を青ざめた。あの場にいたロケット団と名乗る男たちははかいこうせんによってどこかへ吹っ飛んだのか、それとも逃げて行ったのか……いつの間にかいなくなっていて、残ったのは人質たちを救助したヒナ達だけ。ちなみに人質たちは船にあった救命ボートにのって助かっていた。

だからこそ、ヒナたちはこの状況がやばいと理解していた。

人質となっていた人間たちはこの騒動を起こしたのがあの悪党たちだと分かっている。だがヒナたちが救出し、シルバーが暴れた事実も知っているのだ。このままポケモンレンジャーたちの元へ行けば暴れたことを知られ、いろいろと面倒なことになると少々混乱した状況の中で考えた。焦ったヒナは冷静を失ってそう考えてしまったのだ。

ヒナにとっては、ピチューと会うために一人で行くことを決心した船出での騒動であり……アロン達が大丈夫だと信用してそのまま送り出してくれた先でのトラブル。アロン達は悪党を追い払ったことに対しての事実を褒めることはないだろう……むし

ろ心配し、派手に船を沈没させたシルバーを止められなかった件に関してのアーロンの説教の方があり得るとヒナは考えていた。だが説教よりも怖いのはシルバーが捕まるかもしれないという状況。

今ポケモンレンジャーたちが船に来ればわかるだろう：船にいるのはリザードン達を出しているヒナたちの姿だけであり、あの悪党たちはいない光景。そして明らかにチルトリスが暴れたであろう痕跡。このままではいけないとヒナはヒビキ達を連れてリザードンに乗って空を飛び船から脱出していた。ゾロアークはとつきにイリユージュンでバチユルになってヒビキの腕にくつつき、重さをごまかして：そしてチルトリスはそんなリザードンの横に飛んで後を追いかけていた。

ヒビキはただシルバーが捕まるのを恐れて苛立ち、リザードンの背中に乗ってからすぐにシルバーの頭を殴っていた。殴られたシルバーは反撃してヒビキの横つ面に平手をぶちかましていたが、リザードンの背中で暴れていたためこのままではリザードンが傷つくと判断したヒナの拳によって二人仲良く殴られて気絶させられていたのだった。

.....

どこかの陸地の森の中にヒナたちはいた。

リザードンは三人を背中に乗せて飛んだため少し疲れた様子でいた。チルタリスとヒナは飛び疲れたリザードンを心配していた。だから森の中で降りてリザードンを休ませながらもここが何処なのか町を探すことになったのだった。

ゾロアークとチルタリスも森の中に入ってから起こされたヒビキ達によってポールの中に戻され、ヒナもリザードンにお疲れさまと行ってからポールに戻っていた。

「ああもう……とっさに逃げちゃったけどあれ逃げない方が良かったよね……あいつらが船占拠してそれを止めようとしたんだから……ちゃんと説明すればなんとかなったはずじゃ……」

「船沈没させたのはシルバーだってあの時捕まってた兄ちゃん達に言われたらどうするんだよ!？」

「それは船の耐久力が弱かったせいだろう」

「そんなわけあるか!!」

シルバーが船のせいだと言うその言葉にヒビキとヒナが怒鳴る。船の耐久力が弱い

とシルバーは言うが、ポケモンバトルに対応できる船ではなかったのだからはいこうせんなどの大技に耐えられるわけではないとヒビキは叫び、シルバーはそれを鼻で笑った。どんな問題が起きてても良いようにするのが普通だろうと幼い頃サトシと話をしてきたシルバーはそう考え、単なる船側の設計ミスだと思い込んでいたのだった。もちろんそんなシルバーの心境を船を作った人々が知ればそんなことわかるわけではないと喚くだろう。はいこうせんやらりゅうのはどうやらポケモンの大技を船の内部で連続でぶつ放すような行動をするだなんて予想はできないのだから。

一方ヒナは、シルバーが暴れたことによつてヒナ自身焦つてちゃんと考えずに森の中まで連れてきてしまったが、ポケモンレンジャーたちに説明すれば何とかなつたはずじゃないかと森の中を歩きながらも冷静さを取り戻した頭で考え後悔していたのだった。なにかしらの面倒事は起きるかもしれないが、それでも説明すればアサギシテイまで送つてくれたかもしれない…そうヒナは考え頭を抱えていた。だが、やつてしまったことはしようがないとこれからのことを考える。

そんななか、シルバーはヒナを見て首を小さく傾け口を開いて言う。

「ヒナ…髪切つたのか?」

「すつごく今更つ!?!」

「おお！俺も気になってたんだ！まああいつらがいたから言える状況じゃなかったんだけどさ」

「失恋したのか？」

「なんだヒナ？お前誰か好きな奴いたのか？」

「失恋じゃないし……まあ、いろいろあったの」

ヒナは肩まで切られている髪の毛を一束手に取ってため息をついてヒビキ達に言った。詳しく説明しないヒナの言葉に首を傾けていたが、それ以上は聞く気がない二人はヒナと同じように歩くことに専念したのだった。

だが、歩いていても森から抜けることができず、気がつけば日が傾き……夜になってしまった。さすがに夜の中でポケモンを出さずにいるのは危ないと考えたりザードンがボールをガタガタ揺らして外に出て、ヒビキ達もゾロアークやチルタリスを出して歩き始めた。

「腹減ったあ……ちよつと休憩しようぜ」

「そうだな、ここで日が昇るのを待った方が良く。このまま森の中を歩いていても体力を消耗するだけだからな……」

「まあ確かにそうね……」

森の中は野生のポケモンたちがこちらをじつと見ているような視線が多い。ほぼ半日歩き回っていたヒナにとってそれは警戒するべき対象であった。ヒビキとシルバーはその視線に気づいていないが、それでも野生が多くいる森の中は危険だと十分わかっていたようだった。

リザードンの炎によつて森の中が明るく照らされ、その周りでヒナたちが夜を過ごすための準備を始める。近くに落ちていた小枝を拾つてリザードンに火を吹いてもらいたき火にしたり、チルタリスが空を飛んできのみを集め、シルバーたちの元へ届けたりしたのであった。たき火の周りで座り、きのみを食べながらヒビキは周りで起きている現象に引き攣りながらも声をかけた。

「なあヒナ…お前小さい頃からそうだったけど……なんか悪化してねえ?」

『グアアウ?』

「え?そう?」

『グオオ……!』

「さすがにおかしいだろ…その野生のポケモン達の懐き具合は」

『チルウ』

きのみを食べながらこの後どうするのか話し合っていたヒナたちに近づいてきたのは、ずつと視線を感じていた野生のポケモン達であった。攻撃してくるかヒナは警戒したが、野生のポケモンたちはヒナに近づいてその周りをうろちよろするだけだったため警戒するのを止めた。ただの純粹な好奇心でこちらに来たのかと考えたヒナだったが、リザードンはそうは考えておらずヒナの周りで悪戯しそうなゴースやゴーストたちに威嚇して追い払っていたり、明らかにヒナしか懐いていないというのに全然気づかない様子にヒビキとシルバーは顔を見合わせてため息をつく。

だがそれでもポケモンが大好きな三人は、ヒナの周りをうろちよろする野生ポケモンたちを歓迎した。ジョウト地方の野生のポケモンにヒビキは少しだけキラキラと目を輝かせ、シルバーはポケモン達を観察して…そしてヒナは膝の上に乗ったホーホーを撫でて楽しんでいた。

ちなみにそんな彼らの手持ちであるリザードン達はというと…リザードンはヒナに悪戯しようとしたポケモンを追い払ったり膝の上に乗ったホーホーに殺気のこもった視線で見たり、そんなリザードンをチルタリスがため息をついて落ち着かせたり、ゾロアークが面白そうに見ていたりとしていた。

そんな状況の中で、ヒナは思い出したかのようにヒビキに声をかけた。

「そういえば…ヒビキのゾロアークってイリユージョンできるけど…何にでも変身できるの?」

「ヒナ、ゾロアークのイリユージョンは変身ではなくただの幻影だ。メタモンのように飛行タイプの姿に変わったとしても飛べないし、その技を使うことはできない。つまりただの見せかけだがその分なんにでもなれる」

「シルバーお前が答えんなよ!!…でもシルバーの言うとおりなんにでもなれるからな!ゾロアーク!!」

『グアアアウ!!』

ゾロアークが一回転をして身体を変化させ、近くにいたヒナのリザードンになる。黒い身体の色違いのままの相棒に似せた姿にヒナが感激し、野生のポケモンたちは目を丸く見開いて驚いていた。だがリザードンは自分の姿を似せたゾロアークに苛立ち睨む。だがそんな視線を見てゾロアークは笑ってもう一度一回転をして次はシルバーに似せた。

「人間にもなれるんだ!」

「喋ることはできねえけどな!それでも人にはなれるぜ!」

「俺の姿で悪戯したこともあったな…チルタリス」

『チルウ!』

「うお!?!ちよっこつちに向かつて攻撃してくんなシルバー!あの時は悪かったから!」

「チルタリス」

『チルルウ!』

「はかいこうせんは止めろオオオ!!」

「うわあ…:…ん?あれ?ゾロアーク、どうしたの?」

『…!』

「なに?」

ゾロアークはヒビキ達の騒動の中もう一度イリユージョンをして、今度は己のマスターでもあるヒビキの姿になっていた。そしてにつこりと笑った表情でヒナに近づき、両腕を広げて抱きしめようとして――。

『グオオオオオオ!!!』

『っ!…:グアアウ!』

『グオオオオオオ!!!』

「ちよつ、リザードン落ち着いて!ほらゾロアーク怪我してるからね!」

『グアア』

『……グオオ!』

「喧嘩は止めなさい!」

「何だ?!どうかしたのか!」

「あのゾロアークのことだ。リザードンの怒りを買うような悪戯をしたんだろ?」

『チルウ』

「あー……」

抱きしめようとしたヒビキに似せたゾロアークをリザードンが尻尾でぶつ叩いたことにより吹っ飛ぶ。その威力の強さによってゾロアークはイリユージョンを解き、腹を押さえてリザードンに向かって叫んだ。その騒動を見てヒナは膝に乗っていたホーホーを地面に降ろしてから炎を放とうとしているリザードンを抱きしめて落ち着かせた。ヒナに抑えられたリザードンはゾロアークを見て鋭く睨むが、当のゾロアークは反省した様子を見せずに笑って今度はヒナの姿になって舌を出して挑発していた。その姿を見て喧嘩は買うわよこの野郎!とばかりにゾロアークに近づこうとしたが、ヒナの手によって抑えられたのだった。

一方ヒビキとシルバー、そしてチルタリスはその喧嘩の発端となった状況を見ていなかったことからいきなり始まった騒動にヒビキが驚き、シルバーとチルタリスは学校で毎日のように見てきたゾロアークの悪戯好きの性格から予想してため息をついたのだった。

——そしてそんな騒がしそうな光景を見るのは、一体の小さなポケモン。

『……………レズー！』

ヒナを見て楽しそうに笑ったポケモンは、どこかへ飛び去って行ったのだった。

第二百七十九話く気づかない魅力く

ようやくヒナたちが眠りについたのは月がヒナたちの頭の上にある木々の隙間から見えた時間帯だった。

暗い暗い森の中で警戒するのは忘れず、でも周りにいる野生のポケモン達やリザードン達に守られたヒナはヒビキ達と同じように深い眠りについてしまう。

幸いにもその夜何も問題は起こらず、襲撃してくるポケモンもない状況で——
朝が来たのだった。

「……なんでこうなった」

朝、一番最初に目覚めて見た光景にヒナは思わず眩く。

まず最初に見えたのは、真つ黒な身体に覆われている光景。目の前が黒いと感じたのは、リザードンに抱きしめられているからだとすぐに気づいた。起き上がってみれば、オタチやポップなどがこちらに寄せ集まって寝ているのが見える。だが野生のポケモンたちがヒナに届く前にリザードンによって邪魔され、リザードンの周りに集まるような形で眠っていた。

そしてそんな野生のポケモンたちに埋もれているのはヒビキであり、眠っているナゾノクサやニョロモ達の下でうめき声を上げていた。そんな彼の近くにはゾロアークが丸まって眠っていて、野生ポケモン達がその特徴あるふさふさの髪に入って心地良さそうにしている。

そして野生ポケモンたちに潰されないようにシルバーはチルタリスのフカフカな羽の上で眠り、その周りでオオタチ達が集まって熟睡していた。

つまり、ヒナたちの周りには夜にはいかなかったはずの野生ポケモンたちも集まって眠っていたのだ。そして何故か夜行性であるはずのホーホーやヨルノズクまでもが近くで転がっていて、ヒナはどうやって彼らを起こそうか悩んでしまったのだった。

——結局、その後起きたリザードンの大きな咆哮によって野生ポケモンたちが慌てて目覚めて蜘蛛の子を散らすように逃げていき、ヒビキ達も起きてきのみを食べながらもアサギシティを目指すため歩き始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

朝になっても薄暗い森の中、リザードン達をボールに戻してから歩き始めたヒナ達だが、どこかの町に到着するよう考え真っ直ぐ前へ向かって歩いているというのにぐるぐると出口が見えずまるで迷路のような空間にヒナたちは苦労していた。

「くっそお……このままだと俺達森の中で野生化しそうだぜ……!!」

「馬鹿なこと言うぐらいなら足を動かせ」

「動かしてるよ!ちくしょうここは何処なんだーっ!!」

「ほら気弱にならずに頑張りましょう」

「気弱になんかなってねえ!!」

「ただの馬鹿なだけだろう」

「馬鹿でもねえし！」

「あはは…」

ヒビキがため息をついて首元にある汗を手で拭い、そんな彼を見てシルバーが鼻で笑う。2人が喧嘩している様子を見てヒナがため息をついて苦笑し、そして集中し始めた。

(せめて人間がいるところを探さないといけないのに…ポケモンが多すぎて分からない…)

探索するための波動を使って周りを見ていたのだが、そこから見えるのは辺り一面の青い輝きだけ。ポケモンが数多くいるこの森の中では人間だけを探ることができない。鍛え上げられたアローンやルカリオの波動ならばすぐに見つけることができる場所でも、波動を鍛え上げたばかりのヒナにとって探索のための波動を使いこなすにはまだまだ難しいことであつた。

「どうしたヒナ？何か難しい顔してるけど？」

「え!? あ、いや…なんでもない」

「おー…そうか?」

ヒビキに言われ、ヒナは集中を解いてすぐに誤魔化して言った。作り笑いのようなヒナの表情と声にヒビキは首を傾けたがそれ以上は聞かず、シルバーはヒナに向かつて訝しげな眼を向けたが何も言わなかった。ヒナはヒビキ達に必要以上のことは言うつもりはなかった。あの事件についても、波動についても…必要であれば言うつもりだが、今この状況では言わなくてもいいと思っている。波動の師匠でもあるアーロンは言うなどとは教えられていなかったが、それでもヒナは言うつもりはなかった。

だが、このまま波動もまともに使えず、森をさまようのはいけないと考えた――
―その時だった。

「祠か?」

「…ん?」

「古いなツ!」

森の中に建てられている小さな祠。だがそれはとても神秘的に思える光景だった。

薄暗い森の中、ヒナたちの周りと同じように木々に囲まれている苔むした祠があるだけだと言うのに、そのまわりには野生のポケモンたちはいない。先程まで感じていた視線さえもない。その祠の周りだけが、別世界のように思えたのだ。

「森の中に祠…ウバメの森か」

「何だよそれ？」

「ウバメの森は地名だ馬鹿。ジョウト地方で森の中に祠があるのはウバメの森だと学校で教わっただろうこの馬鹿」

「馬鹿言いきだろアホシルバー！」

「ウバメの森の祠…なんか見たことあるような…？」

ヒナは祠をじっと見つめていた。後ろでヒビキとシルバーが騒がしくしていてもそれを気にせず、じっと祠を見て、近づいていったのだ。

一歩前へ進んだ瞬間に周りが眩しく光り輝いた。

——波動のような青い光ではなく、純粋で暖かな真っ白な輝きがヒナ達を包み込む。

「うわッ何だ!？」

「クツ…ポケモンか…いや、敵か!!？」

「ちよつと待つてシルバー…これは…」

『レツビィ!』

シルバーが突如祠の周りが光り輝いたことに警戒して懐からチルタリスが入っているモンスターボールを取り出して投げようとする。だがその手をヒナが掴んで止め、祠を見上げた。

真つ白な光を、ヒナは何度か見たことがあったからだ。ボールの中から見ていたりザードンも、その輝きが懐かしいと感じて無理やり外に出ようとはしなかった。ヒナとリザードンは、この輝きの正体がマサラタウンにいた頃よく目にしていたポケモン——セレビィのときわたりに似たものだど知っていたからだ。

その証拠に輝きが消え、元の薄暗い祠に戻った時にヒナたちの目の前にセレビィが現れた。宙に浮いてくるくと踊っているかのよう回転し、周りがある木々に花を咲かせているセレビィはとても楽しそうにヒナに抱きついた。その様子でヒナはこの目の前にいるセレビィがマサラタウンでいつも遊んでくれたセレビィなのだど理解する。

そしてヒナも笑ってセレビィを抱きしめ、頭を撫でた。その撫でられた手にすり寄り、嬉しそうにセレビィは鳴き声を上げる。

「やつぱり…久しぶり、セレビィ」

『レビィ!』

「セレビィ…だと!？」

「へえ!そいつセレビィって言うのか!」

「あ…やば…」

『ビィ?』

ヒナはこの状況がとてもヤバいことだと理解していた。ヒビキは知らないみたいだが…シルバーはちゃんと知っていたようだ。セレビィというポケモンが伝説と呼ばれているとても珍しいポケモンだということを…一生に一度見れるかどうかすら分からないぐらいの貴重なポケモンだということを……。

「おい、ちゃんと説明しろ。……言っておくが、嘘はつくなよ？」

「…ハイ」

『レビイ?』

シルバーは目を見開いて数秒間ヒナとセレビイを見ていたが、すぐに我に返ってヒナを睨むように見つめ、口を開いて言う。その声はとても低く、まるで人を脅せるぐらい凄んでいたとヒナとヒビキは思った。そしてヒナは表情を青ざめて小さく声を出してシルバーの言葉に頷いた。

そんな状況を作り出した元凶であるセレビイはというと、ヒナに抱きつきながらも何が起こったのかよく分からないと言う風に可愛らしく首を傾けてヒビキとシルバーを見ていたのだった。

.....

「伝説のポケモンであるセレビイがマサラタウンにいる…だと!」

「う…うん…で、でも今はどうなのかわからないけどね…たぶんいるんじゃないかな…」

「マジか! セレビイって伝説なんだっ!」

「驚くところ違うっ!」

『ビイ?』

ヒナはセレビイに関して「だけ」嘘を言わずに話した。

マサラタウンに遊びに来ていたということ、オーキド研究所の森の中でよく見かけていたことを。それを聞いたシルバーは驚いて叫んでいたが、ヒナは目線を泳がせながらいまだに抱きついているセレビイの頭を撫でる。その様子を見たシルバーはヒナが何か隠していると勘づいたが、それを聞いても誤魔化されるだけだろうと考えて思考をセレビイへ移し、観察し始めたのだった。

そしてヒビキはというと、シルバーが言った伝説という言葉に対して驚き、ヒナがそ

れを聞いてツツコミを入れた。だが、ヒナの兄であるサトシもある意味伝説とは知らずに関わることも数多くあったようだったからまあいいかとため息をついていたりする。

そしてシルバーはセレビィを見てひとりごとのように呟き始めた。

「セレビィはときわたりポケモンだと父上から聞いたが…なるほど、さっきの輝きはと
きわたりによるものだと予想すれば理解できる。突如現れ、そして滅多に姿を現さない
ポケモンだが…ヒナだからこそできたことか?…いや、マサラタウンにいるのが、サト
シさんがセレビィを救ったと言うのならサトシさんのおかげか?それよりもセレ
ビィの個体差というものはあるのか?俺のチルタリスは平均よりも体格が大きいから
ポケモンには個体差があると言うのは理解できるが——」

「——うるせえシルバー!考え事すんなら声に出して言うな!」

「殴るな!」

「殴るに決まってるだろこのバカシルバー!」

「馬鹿は貴様だろうが!」

『ゼ…レ…ビィ…?』

「ああ気にしなくていいからねセレビィ…あれいつものことだから…まあこれ以上喧嘩
しててもしょうがないし…ほらさっさとやめなさい!!」

「ブフオツ!!」

シルバーの声にヒビキが怒鳴ってその頭を殴り、それに反応してシルバーが怒り再び殴りかかる。その様子を見てヒナはため息をついてセレビィから離れ、拳を握っていまだに怒鳴り合っている二人の頭を殴って地面に撃沈させたのだった。その姿はまさにサトシのようであるとセレビィは感じていたが、波動を使いこなしているだけだと考え込んでいるヒナは気づかない。

——そしてようやく、落ち着きを取り戻した頃。

「でもよー伝説って言っても普通のポケモンなんだな？俺、けっこうでかくて強いポケモン想像してたぜ？」

「まあヒビキの想像するポケモンもいるにはいると思うよ…たぶんおそらく…うん」
「フンツ…釈然としない答えだなヒナ」

「あはは…」

『ビィ…レッツビィ!!』

「…そういえば何でセレビィがここに現れたんだ？」

「ヒナに懐いているから来たんだろうな…」

「ああ納得」

「それどういう意味よ？」

『ビィ?』

セレビィはヒナの頭の上に乗り、楽しそうに首を傾けていた。その姿を見てヒビキとシルバーはポケモンに懐かれている夜の様子から伝説もそうなのだろうと考えて納得した。だが、2人はセレビィはヒナに親しい人間であるヒビキとシルバーにも若干心を開いているということを知らない。普通ならばヒナがいたとしても姿を現さないのがマサラタウンでの暗黙の了解であった伝説がヒビキ達にも姿を現したことに対しての意味を、彼女たちはよく理解していなかった。

シルバーは思いついたようにヒナに声をかけた。

「そうだ…セレビィに町まで案内してもらったらどうだ？」

「おおそれいい考え！セレビィ、やってもらえるか!？」

『レビィ?』

「私達、アサギシティまで行きたいんだ…セレビィ、近くの町まででもいいから案内してくれるかな？」

『ビィ…レビィ!』

「何だ？」

「この先に行きたいようだな」

「もしかして町に案内してくれてるのかな？」

ヒビキ達が言った言葉聞いてセレビィは考え込む。このまま近くの町まで案内してもいいが、ヒナが言ったアサギシティという町まで行ったほうが喜ぶと考えていたのだ。

考え込んだセレビィは、何かを思いついたかのようにヒナの頭から降りて宙に浮き、一回転をしてヒナの手を引っぱって行きたい方向へ進む。

ヒナの手を引っぱりながら進んだ先に見えてきたのは、とても古く苔むしている大きな大樹がある光景。近くには大きな泉があり、ヒナはまるでその光景がオーキド研究所の迷いの森のようだと感じていた。だが迷いの森の方がとても小さくて今いる場所よ

りも迫力なんてない。もしかしたら迷いの森にある大樹や泉はポケモン達の手によって似せられたものではないかと……疑似バトルフィールドを作り出したことを思い出したヒナは遠い目をして考えてしまった。

セレビイはヒナたちが驚いているのを見て楽しそうに笑い、くるくると回ってから大樹に向かって大きな声を上げて光り輝き始めた。光り輝いているのはときわたりをしているように真つ白ではなく薄い緑色で輝く。そしてセレビイの声に反応して大樹を中心に木々も光り始めた。

共鳴しているかのように光り輝くその光景に、ヒビキは驚きの声を上げて笑顔で見て、シルバーはめつたに見ることのできないものだとして忘れて忘れないように瞬きをせざるに見つめる。

そしてヒナはただその光景を見つめているだけだった。

ようやく光が収まり、木々の共鳴も終わったかと思ったら……【何か】がヒナたちの前を横切って立ち止まった。

『レビイ!』

『クオオオオ』

『グウウウ』

『クウオオオオン』

「あああああやつちやつた……!」

「何だこのポケモン見たことねえやつばっかだ!!」

「エンテイ、スイクン……そしてライコウ……ジョウト地方でセレビィと同じく見るのも珍しいとされるポケモンが……ヒナ」

「あとで説明します……」

「嘘はつくなよ?」

「……ハイ」

ヒビキは見たことのないポケモンに大きく叫んで喜びながらエンテイに向かって飛び掛かっていき、エンテイに避けられたせいで地面に衝突する。そしてシルバーはそんなポケモンたちに驚きの声を上げて目を見開き、そしてすぐにヒナの方を睨みつけて低い声で言う。その声にヒナは冷や汗を流しながらシルバーから目を逸らして小さく答えた。

『……ベィ?』

エンテイ達を呼び出した元凶であるセレビイは、何も知らずにヒナ達を見て小さく首を傾け、鳴き声を上げたのだった。

第二百八十話～そして事態は急変する～

セレビイの呼び出したエンテイ達が背に乗れと言うように鳴き声を上げてゆつくりと座り込む仕草をとつたため、ヒナたちは背中に乗る。ヒビキは恐る恐る…シルバーは感激で目を潤ませながらもゆつくりとその背に乗った。

そして立ち上がったエンテイ達はセレビイが一声鳴いてから頷き、ヒナたちがちゃんと掴まったのを見て走り出した。

木々が軽く風に流されて通り過ぎるのが見える。周りの光景がすべて遠くに感じるかのように通り過ぎる。素早く走っていると言うのにあたってくる風が心地よく感じる。

それはまさに、トレーナーにとって貴重な体験でもあった。

…たとえばヒナたちがまだトレーナーではないとしても。

「うおおおお!! すつげええええ!!」

「やかましいぞヒビキ!!…だがまあ悪くないな!」

「この調子なら…すぐに町につくはず…!!」

『クオオオオ!』

『グウウオオ!』

『クオオオオン!』

走り出した先がアサギシティだと言うことも知らずに、ヒナたちはウバメの森を抜けて近くの町へ行くのだと誤解したままエンティ達に掴まっていた。

その声を聞いたエンティ達は、驚くだろうなと悪戯を達成したかのような笑みを浮かべて、ただ町を目指して前へと進む――。

そしてようやく見えてきたのは、海が広がりポケモンショーを開催するための準備を行うアサギシティの町。

エンティ達は他の人間たちに見つからないようにアサギシティが見える近くで立ち止まってヒナ達を降ろした。ヒナたちは目の前に広がるアサギシティを見て目を輝かせて笑う。

「アサギシティだ！」

「あれ？ウバメの森からアサギシティって遠いよな？何で…？」

「近くの町じゃなく…アサギシティまで送ってくれたみたいね…ありがとうエンティ、スイクン、ライコウ！」

「そっか！サンキューなエンティ達！」

「…礼は言っておく」

『クオオオオオっ！』

『グオオオオオっ！』

『クオオオオオんっ！』

エンテイ達はヒナ達からの礼を聞いて満足したかのような表情を浮かべ、軽く咆哮をしてから走り去って行った。その姿は一瞬で見えなくなつたが、ヒナとヒビキは腕を振つてさよならと叫び、シルバーは何も行動せずただエンテイ達が走って行った方向を見つめていただけであつた。

伝説だとしてもポケモンは心優しく、そして困っている所を助けてくれた…そう、ヒビキ達は学びエンテイ達に感謝していたのだ。

そして、しばらくしてからアサギシティに行くため歩き出すヒナ達。
歩いているヒナにシルバーが話しかけた――。

「…ほお、エンテイ達もマサラタウンにいるか…ヒナ、その様子だと他にもいるんだろ？」

「そ、そうかなあ？」

「伝説といつてもただ珍しいだけのポケモンだろ？マサラタウンにいるんならもつと探せばよかつたぜ…！」

「ヒビキ、探しても見つかる可能性はないぞ。腐つても伝説は伝説だからな…ヒナ」

「いめんやん」

ヒナはシルバーに詳しく説明しろと若干凄まじながら言われたため、冷や汗を流して目線をそらしながらもエンテイ達もセレビイと同じようにマサラタウンに遊びに来ていることがあると答えた。

その言葉にシルバーはため息をついて呆れたような表情でヒナを見て、ヒビキはそんな珍しいのがいたのかと呟く。シルバーはまだマサラタウンに何かいるだろうとヒナを訝しげな目でじつと睨むが、ヒナは少し下手な口笛をしつつシルバーから隠れるようにヒビキの背中に隠れ、謝った。

ヒビキはヒナの気弱な表情を始めてみて戸惑いつつも早くアサギシティに行こうぜ！と叫んで走って言ったのだった。

.....

【さあさあやって参りましたポケモンショー!!!】

アサギシテイの中央で開催されたポケモンショー。幸いにもヒナ達はポケモンショーに遅れることなく：予定よりも早い時間に着き、ついでだからヒナも見に行こうぜ！とヒビキに誘われて行くことになった。

ポケモンショーは五日間行われ、ヒビキ達が見に行く予定だったのは三日目に行うバトルショーを見ようとしていたのだった。だがヒナ達が着いたのは二日目に行われる予定のコンテストショー。何回でも見れるチケットをシルバーが持っているおかげで、ヒナ達は喜んでショーを見に行く。

アサギシテイの中央で行われているポケモンショーは物凄い歓声とポケモンたちの雄叫びによつて幕を開けた。舞台の中心にいる一人の司会役がマイクを使つて皆を盛り上げていく。

【さて！最初の登場はアアア?!今注目のアイドル！ルチアだああ!!!】

「おいでチルル！皆をキラキラ輝かせよう！つて感じだね!!」

『チルッ!』

舞台から煙が舞い上がり、そこから大きくジャンプして登場した水色の可愛らしい衣装を身につけた少女がやってきた。少女はまだトレーナーになったばかりのような若い年齢をしているとヒナは感じたが、それ以上にチルルと呼ばれたチルツトが少女に懐き：楽しそうに飛び回りながら周りをポケモンの技でキラキラと輝かせているのが見えてヒナたちも歓声を上げる。

「チルル！しんぴのまもりからのチャームボイスよ！」
『ルウ！』

チルツトがクルツと一回転をして身体を光り輝かせ、その状態のまま大きな声を上げて観客の真上から星空のように光が散っていった。チルツトはまるで星空の中を泳いでいるかのようにキラキラと光りながらルチアの周りを飛んで、そして大きく羽を広げる。

「フィニッシュ！」
『チルウ！』

ルチアがお辞儀するのと同時にチルットもその頭に乗って小さくお辞儀をした。その可愛らしい仕草と先程の素晴らしいショーに観客たちは盛大な拍手で盛り上りを見せる。もちろんそれをじつと見ていたヒナ達も笑って拍手を贈ったのだった。

【新人アイドル、ルチアの演技でしたあ！それでは次の——】

ショーはチケットを持っていない人がせめて音だけでもと聞くぐらいの盛り上りを見せ、ヒナ達もそのショーを見て楽しんでいった。

.....

「いや面白かったな！バトルだけじゃなくあんな演技もできるんだからポケモンって奥が深いよな！」

「あ、ヒビキもしかして興味もった？ならハウエン地方のポケモンコンテストも見て見たらどうかかな？」

「ふむ…俺も少し興味があるな…あのポケモンショーの技…バトルで応用できそうな何かがある気がする」

「シルバーはポケモンバトル一直線か…」

「おれもポケモンバトルに決まってるぜ！ショーは面白かったけどな！」

「あ！もしかしてポケモンショー見に来てくれた子たちね！」

ポケモンショーを見終わったヒナたちは誰もいなくなった舞台上の上に座って今日あった出来事を話し始めていた。舞台はこの五日間使われるため取り壊しはまだ行わず、そして誰もいない。そう思い舞台で身振り手振りでそれぞれポケモンショーでこんなのが楽しかったと話していると、ヒナたちの後ろから可愛らしい声が聞こえてきた。

後ろを振り返ってみると、そこにいたのはポケモンショーの序盤で出てきたルチアという少女。

「えつと…ルチアさんですよね？」

「覚えててくれたの!?うれしい！」

「チルツト使いのルチアさん…俺たちに何か用ですか？」

「いいえ！私はただあなたたちに興味があつて来ただけなんだ」

「興味い？」

「ええ！君たちのお名前は？」

「えつと——」

ヒナ達はルチアが来たことに驚きつつも話し始めた。ルチアは舞台にいた時と同じように輝くような笑顔で笑う。舞台上で見たあの派手な水色の衣装はさすがに身につけておらず、可愛らしい青色のワンピースのような服を着ていた。

ルチアがヒナたちに興味を示したという言葉にヒビキが首を傾けて声を出して驚き、そしてそんなヒビキを見て微笑みながらも名前を聞く。その言葉にヒナたちは三人で顔を見合わせた後、自己紹介をした。

「ヒナちゃんにヒビキ君、そしてシルバー君か！よろしくね！私はルチアよ!!」

「よ、よろしくお願ひします…」

「ふふ…ねえ、あなたたちには輝くような夢はあるの？」

「夢…ですか？」

「ええ！情熱に燃えてキラキラと輝くような夢！つて感じだね！」

「はあ…」

「夢ならあります！俺、世界一のポケモンマスターになってサトシさんを倒したいんだ！」

「おお！あの無敗で最強のトレーナーだね！頑張れヒビキ君！」

「…俺は、世界中にいる全てのポケモンを育ててみたい」

「それは大変そうだけど、でも壁が多いほど燃えるよね！応援してるぞシルバー君！」

「……………えっと」

「ヒナちゃんはなにか夢はあるかな？」

「まだ、ない…です」

ヒナは少し恥ずかしいと言うように顔を俯き、ルチアから視線を逸らす。ヒビキ達はヒナが夢を持っていないことに関しては何も言わなかった。何も言うことはなかった。

ヒナの表情を見たルチアは優しい笑みを浮かべてヒナの頭を撫でる。突然頭を撫でられたことにヒナは驚き、ゆっくりと顔を見上げてルチアを見た。

「大丈夫よヒナちゃん。まだ夢が見つからなくてもいつか追いかけていって思うほどの情熱的な夢が見つかるはずだわ。私だってヒナちゃんぐらいの時は何も見つからなかったもの」

「ルチアさんも…?」

「ええそうよ。…でも、悩んでいてもいつか必ず見つかるの! 私も、周りを見て…おじさまのおかげでコンテストの魅力に気づくことができたの。ヒナちゃんも焦らないでゆつくりと探してみて!」

「ゆつくりと…ですか?」

「ええ! そうすれば情熱でキラキラ輝く夢が見つかる! って感じかな!」

「でもルチアさん、まだ新人アイドルなんだろう?」

「チルツトであそこまでの技を鍛えたのは尊敬しますが…」

「まだまだこれからよ! 私もトップを目指していかなきゃって感じだもの!」

「あはは…」

ヒナはルチアの言われた言葉を聞いて考え込んだ。夢はきつと見つかるそう信じて旅をしているけれど、ルチアにそんな彼女の焦りを感じ取ったのかもしれないと思っただからだ。ルチアはヒビキ達から応援と言えるかよく分からない言葉をかけられて舞台の中心でくると回ってから決めポーズのようなことをし、叫んでいた。

そんな彼女を見て、ヒナはそつと懐からモンスターボールを取り出して、リザードンの入っているボールを見つめる。リザードンはヒナが何も言わなくても言いたいことが分かるとうも言うかのようにゆらゆらとボールを揺らしていた。その揺れは、一番最

初に船に乗った時と同じような感じがして：リザードンは何時でもヒナについていくとでも言いたいかのようだとヒナは思った。

「あ！ヒナちゃんいい笑顔！その気持ちを忘れちゃ駄目だよ！」

だからこそ、ヒナは笑顔で笑ったのだ。

「はい！ありがとうございますルチアさん！」

「ルチアさん！チルツトをあそこまで鍛え上げたのには何か特別なことをしたんですか！！?それともコンテストでいうポロックか何かを——」

「——シルバーが暴走するぞヒナ止めろ！」

「ヒビキも止めなさいよ！あ、ごめんなさいルチアさん！シルバーについてはいつものことなんで気にしないで……」

「ふふふっ！あなたたち本当に素敵ね！」

ルチアの輝くような可愛らしい笑顔にヒナたちは一瞬騒動が収まり、そしてルチアと

同じように笑った。それは、舞台の上だからか…それともルチアによって引き出されたのか…楽しいというような感情をおさえず、4人はキラキラと輝かしい笑顔で笑い合っていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その後、ルチアと別れたヒナたちはポケモンセンターへやって来ていたのだった。

ポケモンセンターに来た理由は、シルバーが父上に電話をするため…ヒナはフスベシテイまで送ってくれる人を待ったためジョーイさんに話しに言ったのだ。ヒビキはシルバーが電話を終わらせてヒナが戻ってくる間、ソファに座り込み考えていた。ソファから見えてきた景色にはいろんなトレーナーが出入りをしていて、ジムバッジを手に入れようとして負けたもの、ポケモンを勇気づけているもの…そして、ポケモンセンターの大きな窓から見えるバトルフィールドでバトルをする者がいた。

「終わったぞ…おいどうしたヒビキ」

「いや、ちよつと考え事」

「フン…馬鹿の癖に考え事するとはな…」

「シルバーの中の俺ってどんだけ馬鹿なんだよ!？」

「ごめん待った?…ってなに喧嘩してるの!!？」

「喧嘩してねえ!売られただけだ」

「馬鹿に馬鹿と言っただけだ」

「馬鹿じゃねえよ!」

「ほら喧嘩しない!!」

ヒナの一喝によってヒビキとシルバーは騒ぐのをやめ、再び静かになる。まるでヒナたちだけが海のように静かで、周りはポケモン達やバトルやらで騒がしい。それはまさにヒナたちの空間だけ周りとは違っているように思えた。

そんななか、シルバーが口を開く。

「父上から連絡があった…悪いが俺は学校に戻る」

「え?明日のバトルショーは見に行かないの?」

「ああ」

学校に戻ると言ったシルバーの言葉にヒナは驚いて声を上げた。だがシルバーは感情のこもっていない声で一言言う。それを聞いてヒビキがソファから立ち上がってか

ら口を開いた。

「俺も学校に戻る」

「ヒビキも？」

「何だ？一人になるのが不安か？」

「そんなんじゃないやねえし！……ただ、もつと強くないと駄目だっと思ってただけだ」

「そっか……じゃあ、お別れだね」

ヒナは寂しそうにヒビキとシルバーを見て呟いた。ジョウト地方にいるヒビキ達に会える確率はとても低く、また会えるとしたら数年後のトレイナーになった時だと思っている。だからこそ、ヒナはようやく会えた幼馴染とトラブルメーカーのような悪友に向かつて寂しげな笑みを浮かべたのだ。一緒に居られたのは短い時間だったけれど、濃い時間でもあったと思いついしながらも……。

そんなヒナに向かって、ヒビキは声をかけた。

「俺は強くなる！強くなってサトシさんに勝てるぐらい最強になる！——だから、また会おうぜ！……今度会う時はマサラタウンで！」

「馬鹿が。また船の時のように偶然出会う可能性もあるだろうが馬鹿が」

「馬鹿を何度も言うなアホシルバー！」

「あはは……うん。でも今度会ったときは……その時はマサラタウンの方がいいな。皆でトレーナーになったら一緒にバトルしようね！」

「おう!!」

「…フン」

三人はそれぞれ拳をあわせて、笑顔でまた会う約束をした。今度会う時はマサラタウンで、そこで会うのなら強くなつてからだといびきは考えていたからだ。その言葉に寂しさを我慢してヒナは笑う。また会えるのなら大丈夫だと考えて笑つたのだ。

シルバーはいつものようにフツと笑つてヒビキに小さく喧嘩を売りながらも別れを言った。

「……またね」

「おう、またな！」

「じゃあな」

——寂しさを押し込めて、三人はそれぞれの道を進み始めた。

第二百八十一話　意志よりも、覚悟を

彼女を見て、身体が震えていく。ボールが揺れるのがまるで自分が震えているせいだとも言えるぐらい、恐怖で怯える。

ヒナは彼女には会いたくなかった。会うとしてももつと先の未来……記憶が古ぼけて笑い話として口に出せるぐらい傷が癒えてからの方が良いとそう考えていたのだ。それはもちろんリザードンも一緒だった。

ボールから無理矢理飛び出してヒナを守るかのように抱きしめ、黒い翼を広げるリザードンが睨む先にいたのは、この旅が始まったといってもいい元凶。ヒナのトラウマであり、怯えの対象。

「ふう…ずいぶんな嫌われようね？まあ、私もあんたのこと大嫌いだから関係ないわ」

彼女——シロは、真っ白な服を着てこちらを見て笑っていた。

.....

「あ……あ……」

『グオオ……』

ヒナの身体から冷や汗が流れる。心臓が激しく動き、目の瞳孔が開くかと思えるぐらい瞬きを忘れ、ただシロを見て震えている。思考が停止し、リザードンに抱きしめられている状態にも気づかない。

——シロの目の色が以前とは違って真っ直ぐこちらを向いていることにも、気づかない。

波動を使おうという意志もなく、反撃しようとする考えもないヒナの頭には目の前にいる少女に対しての恐怖心しかない。だからこそ、リザードンはこのままではいけないと翼を広げて飛び去ろうとした。ここにいてもヒナを傷つけるだけで何も意味がないと考えているから。進化したおかげで強くなった大きくて黒い翼を広げた瞬間、シロは笑って言う。

「ポツポたち…【リザードンを止めなさい】」
『ポツポーウ!!』

『…ツグオオ!』

シロの近くに集まっていたポツポ達が集団で飛び去ろうとしていたりザードンを攻撃し、翼を傷つけようとしてきたためリザードンは苛立ちのままに炎を吐く。その炎に焼かれて気絶するポツポもいたが、ポツポたちはそれでも攻撃を止めない。

ヒナは何も気づかない。現状を見ようとはしない。ヒナの思考は固まり、何も考えることなどできてはいないのだから。

だが、声を聞くことだけはできた。リザードンが苛立っているということも、ポツポたちの悲鳴や鋭い鳴き声なども理解できた。だが、それだけだ。

シロはリザードンにまともに指示が出せないでいるヒナの脆さに舌打ちをして口を開いた。

「あなたには何も分からないのね……こんなのが私のオリジナルだなんて本当に信じられないわ」

「う……あ……」

「ポツポ、【襲いなさい】」

『ポツポーツ!!』

『ガウウウウ!!!』

「見なさいオリジナル。私はあなたのコピーよ。あなたができるはずの能力を、私はも

う使えてるわ!!」

「そ…なの…知らない…」

「知らないじゃなく見ていないだけでしよう! 私はあなた自身よ! 理解しなさいこの力を—」

「ち…から…なんてない…」

『グオオオオオ!!』

「煩いわよりザードン! 思い出しなさいオリジナル! あなたはポケモン達に好かれている。好かれすぎている。それは力の象徴。ポケモンを操れる能力の兆しのはずよ。私ができるのにオリジナルのあなたができないはずはないわ!!」

「や…あ…そんな…」

「分からないと言うのなら、教えてあげるわ」

シロは怒りと苛立ちを込めた声でヒナに向かって怒鳴り声を上げる。シロが言いたいことは己の事だった。シロの身にあの後何が起きたのかをヒナは知らない。知るはずもない。だがシロはヒナに向かって言うのだ。以前ニセモノと呼んで蔑んでいた頃とは違って、ちゃんとオリジナルだと認めて叫ぶ。

自分ができることなのだから、オリジナルあなたにもできるはずだと心の底から叫んでいる。

その声は恐怖で怯えるヒナには届かない。そしてそんなヒナを以前傷つけたシロを憎むリザードンにも届かない。謝って済むような関係ではない分、彼女たちの確執は強い。ヒナたちにとってはシロは自らを傷つけた存在。だがシロにとっては自分を生み出すきっかけとなった憎むべき存在「だった」1人。

考えに違いがある分、シロが言いたいことを読み取れないヒナたちは何も理解しない。理解しようとしな

「コイル、【でんきショック】」

『ビビッ！』

シロの近くには様々なポケモンたちがいた。そのポケモンたちは野生のようだったが、シロの言葉を聞いてまるでその通りにしなければならぬのだと言う風に従い、でんきショックを放つ。

それを見たヒナは攻撃が来ると本能で感じとり、耳を塞いで目を閉じて叫んだ。

「やめ……て……リザードンを……傷つけないでっ!!」

『グオオ……!』

『ビイツ…ッ!!』

コイルたちはヒナの声を聞いてふらふらと動き回り、一斉に気絶した。その様子を見たりザードンは驚く。まるでヒナの声を聞いて攻撃を無理やりやめたかのように動いたと思えたからだ。コイルたちが何のきっかけもなく一斉に気絶したその姿は異様とも言える。だがそんなコイルたちをシロは近くにいたミルタンクに起こしてもらっていた。まるで予想がついたかのように…。

そしてコイルたちが気絶した様子を理解せず、何も見ようとしないうちにヒナに失望したかのようにため息をついた。

「矛盾する【声】を聞いてコイルたちが気絶した。あなたのせいなのにあなたはまだこちらを見ようとしなのね…いいわ、なら私も本気であなたに分からせてあげる」

『グオオッ!』

カモネギたちがシロの指差した方向へ——リザードン達の方へ向かって攻撃しようとして飛んでくる。それを見たりザードンは上等！とでも言うように叫んで炎を吐こうと構えた瞬間、だった。

大きな光がヒナ達を守るかのように降り注いだのは。

.....

カモネギたちは降り注いできたそれに当たらないように攻撃を止めて旋回し、シロの元へ降り立っていた。攻撃してきた「それ」は本気でこちらを傷つけようという気はないようで、躲せるぐらいの手加減はしていたようだった。

シロは厄介な相手が来たとはばかりに舌打ちをしてから、小さく微笑を浮かべて口を開く。

「まさか、あなたもここに来るだなんて……」

「大事な妹を守るのが兄の役目なんでね」

『ピツカア!』

ヒナ達を守るかのように前へ出てきたのは兄であるサトシとピカチュウ。数で言えば野生のポケモンたちが多くいるシロの方が勝つてはいたが、実力で言えば彼らの方が上であった。リザードンに指示をすることができないでいるヒナならば勝てるかもしれないが、サトシが来てしまつては実力が大幅に変わる。

そんなシロの心境を知らないサトシは、シロを睨みながらも言う。

「…アクロマの野郎はどうした?」

「いないわ。彼ならある研究に没頭していてね…クロもそれに巻き込まれているの。だから、私はここに一人で来た」

サトシの狙いはどうやらアクロマであったみたいだ。盛大に喧嘩を売られたような存在であるアクロマがいないことに少々苛立っていたようだが、それでもシロを睨む目は変わらない。

そんな緊張感が包み込む彼女たちに近づいてきた一つの黄色い生き物と人間が1人。

「なんか凄まじいことになってんな…あの姉ちゃんヒナにそっくりなんだが…三人目の子供がいるとか聞いてないぞ」

『ピチュウ!!』

「ピ…チュウ?」

『グオオ!』

『ピチュ…ピチュウ!!』

「ピチュー…ピチューだ…!」

『グオオオ…!』

やって来たのはシゲルがそのまま少し老けて中年のおじさんになったかのような男と、ヒナに涙目で駆け寄るピチューの姿。

ピチューが叫んだことにヒナは思考を動かし、声のする方を見る。そして見たのは長い間いなかった弟分であり仲間の姿で：ヒナも同じく涙を浮かべながら駆け寄ってきたピチューをギュツと強く抱きしめる。

そして抱きしめあっているヒナとピチューを大きく包むかのようにリザードンが彼女たちを抱き上げた。お互いが再会を喜び合い、そして泣きあって笑っていた。

「これ以上ここにいても意味ないみたいね…」

そんな、彼女たちの空気を壊す一声がヒナたちの耳に届く。ヒナたちの前にはサトシとピカチュウの姿があった。サトシ達は攻撃されたらすぐ動けるように構えていた。そして近くには何かあったらすぐに守れるようにとシゲルの父の姿もいた。だからなのか、ヒナは先程以上の恐怖を起こすことなく、シロをまっすぐ見ることができた。

そして見えてきたのは、寂しげにこちらを見て苦笑する：ヒナ自身がそのまま成長したかのような存在。

「あなたは恵まれてるわ…その意味をちゃんと理解しなさい」

そうシロが言った後、近くにいたコイルたちが一斉にフラツシユをして視界を奪った。それは、逃げようとしていたシロを捕まえようと動きそうになったサトシ達の行動を防ぐための指示。野生のポケモンがシロの言葉を聞いてそれに応えた姿でもあった。

——眩しい光が消えた後に見えたのは何も無い光景。

シロがいなくなったという現実。

「何しに来やがったんだあいつ…」

ヒナの耳に聞こえてきたのは、兄であるサトシがする舌打ちと苛立ちを込めた眩き声だけであった。

エピローグくマサラ人は帰っていったく

「ピチュー…会えて嬉しい」

『ピチューウー!』

『ガウウ!』

ヒナはシロが言った言葉を完璧に理解してはいなかった。

それでも、シロが悲しんでいたことも、何かを伝えようとしていたことにも気づくことができた。

何が言いたくてわざわざここへ来たのかは分からないし、考えようとするとも身体が震えて恐怖が込み上げてくるのを感じるが…。

だから、今は何も考えず、目の前に広がる喜びだけを感じていたいと思えた。

ようやく会えたピチューは以前と同じように泣いていた。それでもヒナとリザード

ンは、ピチューを一目見て遅しくなっただとも思えたのだ。ピチューがどんな修行をしたのかも、何をしてきたのかもヒナは知らない。ピチュー自身もヒナやリザードンが何をしてきたのかも分からない。それでも、今はこのまま抱きしめあつてちゃんと現実であるということを感じていたいと思つていたので。

『ミュウウウウ!!!』

「ミュウ?…ミュウも来たんだ…」

『ピチューウウ!』

『グオオ』

『ミュウ!!』

そんな彼女たちに近づくのは、同じく涙を浮かべてやつて来た伝説の存在であるミュウの姿。

ミュウはヒナたちに近づいて抱きついていた。ヒナたちの幼いころを知り、ずっと見守つてきているからこそ泣いていた。ミュウがヒナにヒトカゲのたまごを渡す以前のこともちろん知つていたからこそ喜んでいた。

親のように見守ってきたからこそ、庇護すべき存在だと思っていたヒナ達がちやんと遅しくなって、お互い再会し喜んでいることに耐えられなくなって出てきたのだ。

『おいミュウ！マサラタウンで迎えようと言っただろうが！』

『優れたる操り人の妹が成長し、恐怖で怯えていた存在に対し最後にようやく向き合えることができたのだ…そして再会し喜び合う姿…飛び出してしまいうのも無理はない

……グズツ……』

『クウウーン？』

『キュウウウウン？』

『泣いてなどいない…泣いてなど…ツ！』

『レビィィ！』

『ツツ——』

『くそつ…こんなところで…ヒナっブツフオツ！』

『落ち着きなさい。彼女たちが喜び合っているというのに…水を差す気ですか？』

『上等だ貴様。喧嘩なら買うぞ!!』

『フオオオオオオ…落ち着け』

『ガオオオオオオ!!!』

『ダークホールは止めろ!!…ああ?他の奴らはどうしたかって?あれだろう…大きすぎて人間に見つかるから止められたんだ』

『クウオオオ』

『でかすぎるのも難儀ですよね…あのギラティナのように人間の姿になれたらいいんですか…』

『無理だろうな…そんなことができるのは大昔から存在するミュウかギラティナぐらいだ…』

『クウウウウン?』

『ディアルガとパルキアたちは?』

『アルセウスはともかく……サトシがいる傍で人間にはなれんよ。むしろ恐怖で気絶する』

『ビィ…』

「ふふ…すつごくく久し振りで…なんだかマサラタウンみたい」

『ピチュウ!』

『グオオオ!』

『ミュウ!』

話が脱線しつつも姿を見せてヒナたちの少々近くで見守っているのはマサラタウンでよく来てくれるポケモン達だ。その姿を見てヒナがようやく笑みを浮かべて笑った。笑うその姿にピチュー達が安堵しつつも笑い、そしてミュウ達がますます近づいてもっと笑えと言ってくる。

少し騒々しいその光景も、マサラタウンで見してきたものと似ていて、幼い頃を思い出すようでも胸が苦しくなった。

「はいはいはい!!ほらここにいと他の人間にも見つかるぞ!解散するならさっさとしろ!」

幸せそうな彼女たちに大きく手を叩いてこちらに注目しろとばかりに叫ぶのがシゲルの父。ヒナ達は目を見開いて驚く。何故伝説のポケモンたちがいても驚愕しないのだろうか?何故平然としているのだろうか?疑問に思ったからだ。だがそんな彼女たちの心境を感じ取り、苦笑したシゲルの父が答える。

「サトシもそうだが…ヒナ、お前は本当にあの両親にそっくりだ。破天荒な部分に俺もよく巻き込まれていたよ。だからこんな些細なことなら驚けない!」

「そう…ですか…」

『グオオ…』

『ピチュウ…』

『おい待て貴様。ヒナはそんなに破天荒じゃないぞ！』

『フオオオ…現実をよく見ろミュウツ』

『…少しはサトシに似ているとは思いますが…それでも納得がいきませんね。その人間、ちよつと話し合いでもしましょうか？』

『ミュウウウ！』

『レビィー！』

『クウウウウ!!!』

「おい待て！落ち着け!!」

「ハハハ…」

『グオオ…』

『ピチュウ…』

何があつたのか詳しく聞けないシゲルの父の姿にヒナたちは引き攣つた笑みを浮かべる。

だが、シゲルの父の声に反論したのが伝説達であり、攻撃してきそうな雰囲気を感じ取ったシゲルの父は即座にモンスターボールからピジヨットを出して反撃できるように体勢を整える。ボールから出されたピジヨットはまたかとも言うかのようにため息をついてシゲルの父を見つめていた。

「……………何も、できなかつたなあ…」

『ピチュウ』

『……………グオオ』

ヒナはそんな騒々しい彼らを見ながらも考えていた。思い出すと苦しくなるが、それでも悔しいという感情はあつた。強くなつたと思つたのに、まだまだ弱い部分があつたとよく理解したからだ。

「私…皆に負けないくらい、強くなりたい」

『ピツチュウ!!』

『グオオオ!!』

両手を見て、ヒナは決心するかのようによく言う。もつともつと強くなれるのなら強くなりたいと…そう覚悟を決める。いつか、シロを見ても笑えるように…いつか、シロと向

き合えるように。

そう考えながら、ヒナは未だに騒々しいミュウツーたちに抱きついて叫んだ。

「帰ろう…マサラタウンへ！」

.....

「もう、守らなくても大丈夫…か」

『ピツカア』

サトシは騒々しいヒナたちの周りを見て寂しげに呟いた。そんな声に同意するかの

ように、ピカチュウも耳を垂れ下げて小さく鳴き声を上げる。

わざわざジョウト地方へやって来たのは、妹を守るためであった。カロス地方での旅を中断して、妹の身が危なくないようにやるべきことはやろうと行動をするために動いた。ポケモンセンターで迎えに行ったらもういない現状に気づいてすぐシトロンたちとその場で待つてもらおうよう何も考えず頼んだぐらいには焦って飛び出して：守ろうとしていたのだ。

だが、今のヒナを見れば大丈夫だと伝わる。このまま一緒にマサラタウンへ帰らなくても大丈夫だろうと理解する。

カロス地方の旅に戻ってもヒナたちは遅く成長するだろうと：そう感じていた。

リザードンやピチューがヒナを守ろうとするように、ヒナもリザードン達を守ろうと成長すると考えて：妹が離れていく寂しさに小さく笑ったのだ。

「サトシ」

「：離せ」

「嫌」

そんな彼に近づくのは、ポケモンセンターで待っているはずの旅の仲間の1人であるセレナ。

セレナは真面目な顔でサトシに近づいて…そしてサトシに抱きついてきた。決して離さないとでもいう強い意志を持つセレナの行動にサトシは疲れたかのような声で反論した。

セレナはサトシの後ろを追いかけていたのだ。待っていてくれというサトシの声を無視して、走ってきていた。

だからこそ、セレナは離れない。

「ぜんぶ、全部見たよ…サトシが守ろうとしていたことも…何もかも…」

「…無駄足だったけどな」

「そんなことない。サトシがいなかったら、ヒナちゃんは見ようとしなかった…だから大丈夫」

「止めろ」

セレナは笑って、そしてサトシに向かって近づいた。

こちらに向かつて顔を近づけていくセレナにサトシは思わず彼女の口を手で抑えた。サトシは少々困惑していた。セレナがサトシにキスをしようとしたのが初めてだったからだ。

だが、セレナはサトシが拒絶しても傷ついたような表情にはならない。口元を抑えられたサトシの手を握って、口から離して言うのだ。

「止めない。私は、サトシのそばにいたいから……このままじゃいけないって分かったから」

セレナは泣きそうな顔で笑う。サトシの傍にいられるのなら何でもしてみせるという覚悟を込めて笑う。

そんなセレナに、サトシは苦笑した。セレナの考えが変わっても、意志が違う方向に向いてもこちらを見る目の色は変わらないことに気づいたからだ。

だが、すぐにサトシの表情は変わり、好戦的な目に変わった。その色はまるでバトルをする前のサトシと同じだとセレナは感じ取って笑う。

「いつかサトシのことを奪ってみせる。何年経つてでも、あなたの心ごと私が守れるく

「らい強くなってそばにいるわ！」

「やれるもんならやってみる」

「ええ、やってみせるわ！…だから、今は一緒に帰りましょう…？」

「帰るって…ポケモンセンターに戻るだけだろ…ほら、行くぞセレナ」

「うん！」

『ピイカツチュウ…』

サトシ達の態度は最初に会った頃と変わらないというのに、以前とは違い仲良く一緒に帰る二人の後ろ姿を見て…ピカチュウは肩をすくめて呆れていたのだった。

あとがき

まず最初に一言謝ります。

中途半端な終わり方で本当に申し訳ない!!

本当はまだ先の部分で兄とセレナの行く末やらカロス地方でのカオスな旅やら、シトロン^①の成長やら……まあいろいろと考えていたんですよ。あと次の章と題してマサラタウンでの妹とポケモンたちの話とかほのぼの話とかその他も考えてました。ですがそれだといつまでたつても終わらず、このまま本編で未来編かけるんじゃないかと思えるレベルにまで達してしまったのですぐ「やめよう」と思い最終章にしちゃいました。

ごちやごちや書くよりはバツサリやめた方がいいと思ったので。

妹メインの話になっていたので本編で回収されていない伏線やら謎な部分やらは主にギラティナ外伝編か未来編で回収します。あと、映画の話や書きたいと思つた話は別の番外編で短編集として書けたらいいなと思つてます。本編での投稿はもうしません。

そんな本編での話ですが。

まだまだヒナも中途半端に強くなっているだけです。

サトシはそんな妹が成長する姿を見て寂しいですが、やっぱり兄は兄としていろいろとフラグを吹っ飛ばしながら先へ進みます。セレナとはどうなったかについてはまだ分かりません。仲良くなったように見せかけて離れる可能性もあるかもしれないです。しうそかももしれない…。

最初はフラグ折りながらぶっ飛んだ勢いで進む兄と平和に暮らしたいほのぼのの妹の話を書こうとしていました。ポケモンとの日常がかけたらいいなと思つていたので：でもそれだと毎回同じになりますし、ちよつとつまらないかなと思つたりしたらあんなつちやいましたごめんなさい。

書ききれなかつた描写については別の作品で書きます。

それでは、こんな駄文でしたが……ここまで読んでくださりありがとうございます！
最終話時点での妹設定。

ヒナ

最終章がメインでスタートした主人公の1人。主に波動を使って攻撃し、探索し……そして身体能力向上に成功した人外確定な妹。だがまだ無自覚。スーパーマサラ人じゃないと思いたいが、最終話にして強くなりたくないと決心し、これからどうなるのかは分からない。でも兄のようにぶっ飛んだことはしないしできないと思っている。まさに無自覚。疑似ロケット団の件もシルバーが引き起こしたに違いないと思っっているぐらい無自覚。

アローンから貰った波動グローブはアローン自身とヒカリの手によって改良し、リストバンドのようになってる。

相棒はりザードンで仲間はピチュー。りザードンは過保護だが強くなりたいと言う言葉にちゃんと頷いて向き合うことができるぐらいには成長した。ピチューについてはいつかのお話で。

まだ夢は決まってはいるが、それでも前へ踏み出す一歩を決めてマサラタウンへ帰って行った。